

# 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(5)

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・  
中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵  
文化財発掘調査報告書 8分冊中の第5分冊

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第36集 —

本 文 編

1991

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 上野国分僧寺・ 尼寺中間地域(5)

前橋市元総社町小見地区，群馬郡群馬町大字東国分村前・薬師道南・  
中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する遺跡の埋蔵  
文化財発掘調査報告書 8分冊中の第5分冊

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第36集 —

本 文 編

1991

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





B54H 34-12



B54H 34-12



B54H 34-12



B遺構外 509-2



B79H 106-1



B79H 106-1



B79H 106-1



B79H 106-1



B遺構外 501-6



B 5 溝 10-7



B168H

315-8



B83H

114-1



B83H

114-1



B168H

315-8



A187H

415-6



A187H

415-6



B55H

37-4



B144H

275-13



B遺構外

514-12



B遺構外

514-12



B遺構外

514-12



B遺構外

514-12



B120H

209-12



B120H

209-12

## 序

関越自動車道新潟線は、太平洋側の首都東京と日本海側の新潟市を結ぶ高速自動車道として、昭和60年10月1日に開通いたしました。本道路の開通に際しては、数多くの埋蔵文化財が、道路建設工事に先立って調査されました。本県でも58箇所の埋蔵文化財包蔵地が発掘調査され、記録保存されています。

本報告による上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡は、群馬郡群馬町東国分、前橋市元総社町に所在する埋蔵文化財包蔵地であり、昭和55年4月から昭和59年3月にかけて、当事業団が調査しました。

ご承知のように本遺跡は、上野国分寺の僧寺・尼寺跡、上野国府跡、山王廃寺跡に隣接する遺跡として早くから識者の注目をあびていました。発掘調査によって奈良時代・平安時代の国分寺僧寺・尼寺中間地域の歴史が明らかにされ、数々の貴重な資料が得られました。これら資料は、昭和59年4月から8年計画で報告書作成のための整理作業が行われており、「上野国分僧寺・尼寺中間地域」として既に4分冊の調査報告書が刊行されています。

今回、遺跡のA区、B区についての住居跡188軒等と対象にした整理が完了し、5分冊目の報告書を作成することができました。皇朝十二銭、仏像ないし仏具法具の飾金具僧寺・尼寺の中心軸の方位にほぼ方位が一致している溝等貴重な資料が報告されていますので、本県の歴史を解明するための資料として、活用していただければ幸甚であります。

平成2年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎





## 例 言

1. 本書は関越自動車道(新潟線)建設工事に伴い、記録保存のため事前調査された前橋市元総社町字小見・群馬郡群馬町大字東国分小字村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)・高井道東地区に所在する“上野国分僧寺・国分尼寺中間地域”(小見・村前・薬師道南・中道南・上野道南(植野道南)高井道東地区)の埋蔵文化財発掘調査報告書8冊の内の第5冊である。
2. 委 託 者 日本道路公団東京第二建設局  
群馬県教育委員会
3. 発掘調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調 査 期 間 昭和55年4月～昭和59年3月31日
5. 調 査 担 当 者 佐藤明人・石井克己・石北直樹・徳江秀夫・木津博明・桜岡正信・麻生敏隆・関根慎二  
※調査担当年度については、上野国分僧寺・尼寺中間地域報告書第1冊を参照。
6. 調 査 嘱 託 員 黒沢はるみ・間庭 稔
7. 事 務 担 当 者 邊見長雄・松本浩一・田口紀雄・神保侑史・住谷 進・岩丸大作・真下高幸・國定 均・笠原秀樹・小林昌嗣・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏
8. 整理事業は、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が昭和59年4月～平成4年3月までの8ヵ年にわたり実施するもので、本報告書は、平成1年11月～平成2年10月までの1年間に整理実施した報告書である。また、本報告書には、B・A区古墳時代(後期)～奈良・平安時代の検出された遺構・遺物を掲載した。
9. 整理担当者 木津博明・桜岡正信・友廣哲也
10. 整理補助員 黒沢はるみ・鈴木幹子(嘱託員)  
安藤三枝子・今井サチ子・川原嘉久治・金井さち子・金子ミツ子・狩野君江・狩野フミ子・斎藤浩美・篠原富子・嶋崎しづ子・下境マサ江・須田育美・関口貴子・高橋順子・高橋優子・高柳哲子・田村栄子・武永いち・戸神晴美・中野秀子・中野和子・南雲素子・生巢由美子・萩原鈴代・渡辺フサ枝(50音順)を中心に以下の方々の協力を得た。長沼久美子(嘱託員)・佐藤美代子・高梨房江・尾田正子・千代谷和子・八峠美津子・吉田恵子・吉田笑子・野島のぶ江・並木綾子・今井もと子・今井あや子・松井美智子・角田みづほ
11. 遺物保存処理 関 邦一  
北爪健二(嘱託員)・小材浩一
12. 写 真 撮 影 遺構 発掘調査担当者  
遺物 佐藤元彦・木津博明  
一部の遺物についてはシン航空写真株式会社による。
13. 現場コンサルタント 並木英行(三洋測量株式会社)
14. 出土遺物の化学分析・鑑定について以下の方々に依頼した。(敬称略)  
獣骨鑑定 大江正直(前 群馬県家畜登録協会常任理事)  
石材鑑定 飯島静雄(群馬地質研究会)

15. 発掘調査及び本書を作製するにあたっては、群馬県教育委員会・前橋市教育委員会・群馬町教育委員会・同町都市計画課及び以下の方々の御指導・御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)  
上原真人(国立奈良文化財研究所)・須田 勉(文化庁)・大川 清(國土舘大学)・大塚初重(明治大学)・新井房夫(群馬大学)・池上 悟(立正大学)・斉藤孝正(名古屋大学)・吉岡康暢・平川 南(国立歴史民俗博物館)・矢部良明(東京国立博物館)・林辺 均(奈良県教育委員会)・前園実知男(奈良県立橿原考古学研究所)・本沢慎輔(岩手県平泉町教育委員会)・大金宣亮(栃木県教育委員会)・橋本澄朗(栃木県博物館)・田熊清彦・田代 隆(財団法人栃木県文化振興事業団)・柿沼賢治(財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団)・梁木 誠(宇都宮市教育委員会)・阿久津 久(茨城県立歴史館)・瀬谷昌良(茨城県協和町教育委員会)・堤 隆(御代田町教育委員会)・安田 稔(福島県文化センター)・井口 嵩(君津郡袖ヶ浦町郷土博物館)・光江 章(財団法人君津郡市文化財センター)・高橋一夫(埼玉県教育委員会)・井上尚明(埼玉県立歴史博物館)・有吉重蔵(東京都国分寺市教育委員会)・遠藤政孝・田崎通雄(尾鷲市教育委員会)・種定淳助・岡崎正雄(兵庫県教育委員会)・松尾宣方(鎌倉市教育委員会)・斉木秀雄・原 廣志・小林康幸(鎌倉市文化財研究所)・井澤洋一(福岡県教育委員会)・増田 修(桐生市教育委員会)・前原 豊(前橋市教育委員会)・大塚昌彦(渋川市教育委員会)・羽鳥政彦(富士見村教育委員会)・宮崎重雄(大間々高校教諭)・石井栄一(世田谷区教育委員会)・永島正春(国立歴史民族博物館)・玉口時雄(東洋大学アジア・アフリカ研究所)・早乙女雅博(東京国立博物館)
16. 発掘調査及び整理事業に関する業務委託は以下のとおりである。  
遺構実測、遺構・遺物トレース 株式会社測研  
井戸跡の調査 株式会社原沢ポーリング(調査所見は同社有賀正明による)
17. 調査に至る経緯については、上野国分僧寺・国分尼寺中間地域報告書第1冊に詳述されているので、同報告書を参照願いたい。
18. 本書の執筆は以下のとおりで、文責は別記した。  
木津博明・桜岡正信
19. 発掘調査においては群馬町、吉岡村、新東村、榛名町、渋川市、赤城村、前橋市、高崎市の多くの方々ならびに、ふるさとを知る会の方々の御協力を頂いた。また、群馬町立中央中学校、南中学校の社会科学クラブの生徒諸君の参加を得た。
20. 本遺跡の図面・写真・遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

## 凡 例

1. 本書中に掲載した地形図は、国土地理院、1：25,000、群馬町・前橋市都市計画図、1：2,500を縮小し使用した。

2. 本書中の方位記号の方向は真北を指す。

3. 本書中の遺構実測図の縮尺は以下のとおりである。

竪穴住居跡 1：60 掘立柱建物跡 1：60 埋設土器遺構 1：20 土坑 1：60

井戸跡 1：60 溝 1：80 遺構分布図 1：500を基準としたが、全てがこの限りではない。

4. 遺構挿図中の等高線・断面基準線は海拔で表示し、断面基準線標高値はL＝で示した。

5. 土層断面図中のI～VII……は、基準層序のI～VII層……に準じ、覆土の層序は1～nとした。

6. 本書中にある火山灰は以下のとおり略記した。

浅間山噴出B軽石層→B軽石・BT・B 浅間山噴出C軽石層→C軽石・CP・C



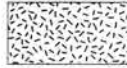
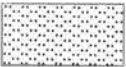
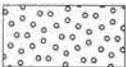



榛名山二ツ岳噴出火山灰層 →FA、FP

7. 遺構挿図中に使用した遺物の記号は以下のとおりである。






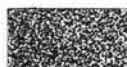




●土師器・須恵器・土師質土器      ○灰釉陶器・緑釉陶器・白磁      ▲石器      △金属製品  
 ■瓦      ★鞆の羽口      □炭化物

8. 挿図中に使用したスクリーンは以下のとおりである。

### 遺構実測図

	焼土・焼土層		灰・灰層		粘土
	B軽石		C軽石		FA
	礫層		掘り方		

### 遺物実測図

	灰釉陶器		緑釉陶器		摩滅部分
	黒色処理・炭化物		赤色塗彩		墨痕
	羽口の珪酸分		羽口の酸化部分		羽口の還元部分
	羽口の中性部分				

9. 遺構実測図中の遺物番号は出土遺物実測図の番号と一致し、挿図番号－遺物番号の順で記載した。

10. 遺物実測に当たっては、当事業団拡大整理委員会歴史部会で編集した「仕様書－遺物編」に準拠したが、全てがこの限りではない。

11. 本書中の遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土器・土製品 1 : 3 (大形 1 : 6、瓦 1 : 5) 石器・石製品 1 : 3 (白玉 1 : 2)

金属製品 1 : 3 (古銭 1 : 1)

上記以外の縮尺のものについては、個別に明記した。

12. 遺物観察表中の「度目」「度・量目」は、度は長さを、量は重量を示す。また、( ) は完成品以外の推定値・復原値を表わし、量目では残存量を計測した。金属製品については、錆等の除去後の数値である。

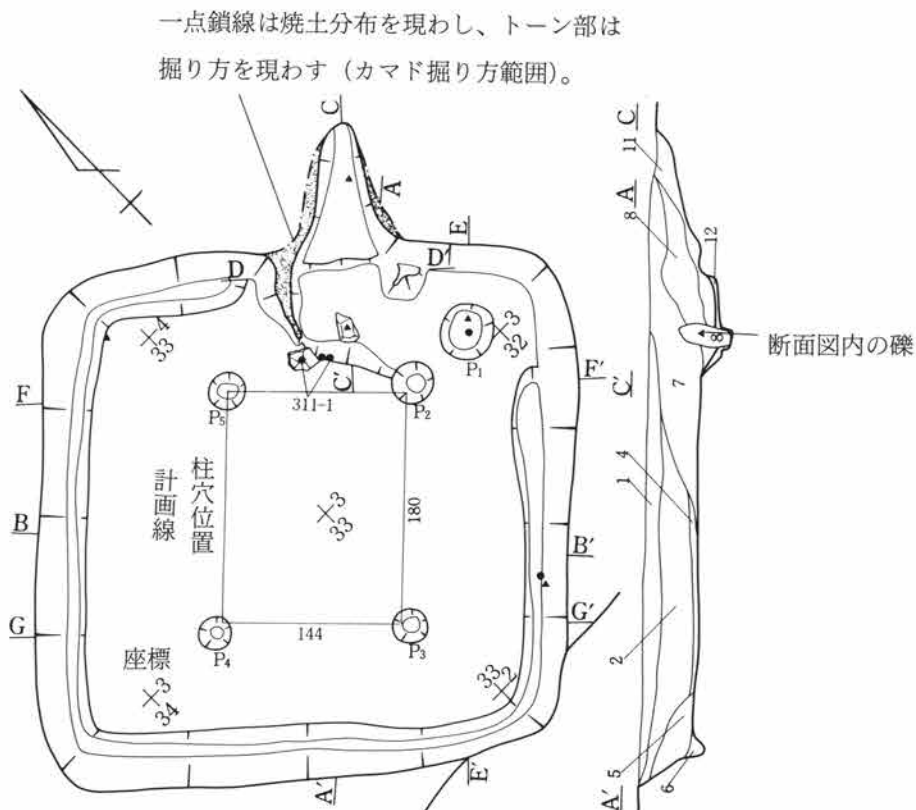
13. 遺物観察表中の「色調」は、「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色表監修、1976年9月発行を使用し記載したが、細部では観察者の個人差がみられる部分もある。

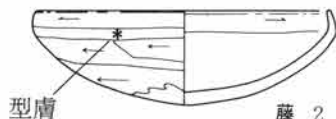
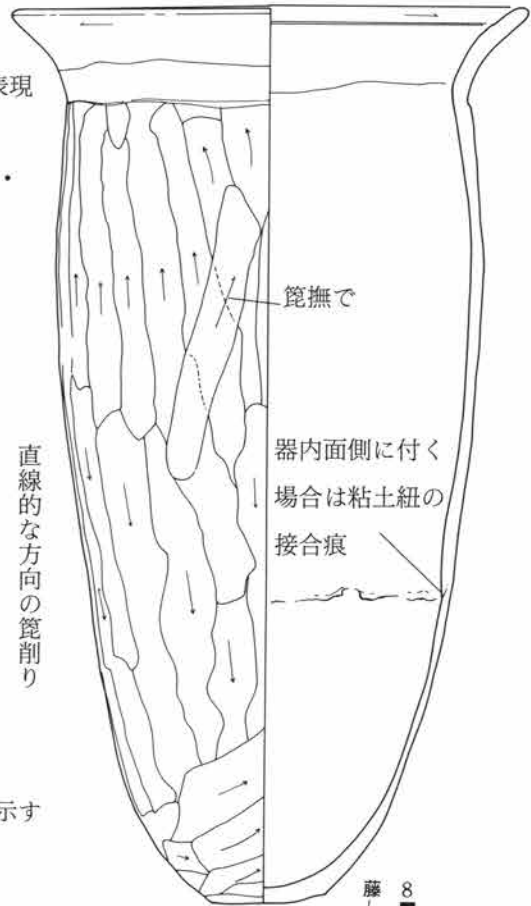
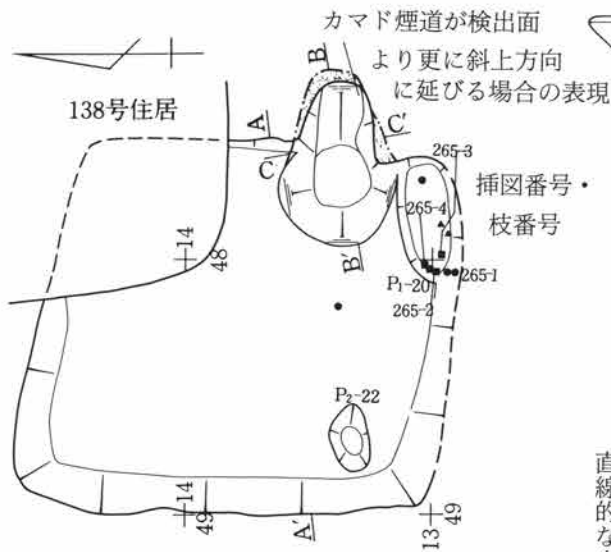
14. 遺物計測位置は、上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)図表編参照。

15. 土器の種別については、原則として轆轤使用・還元焰焼成のものを須恵器、轆轤不使用・酸化焰焼成のものを土師器として扱ったが、中間的なものについては判断をさけたものがある。

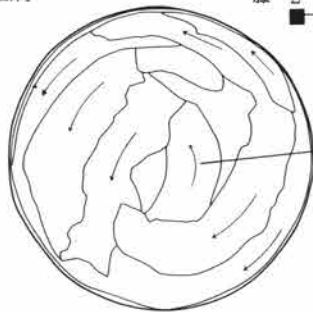
16. 土器の器種については、原則として高台を付すものを埴、付さないものを坏、口径に比較して器高の著しく低いものを皿とし、その他、甕、壺等使用したが、文献にあたって使用したものではなく、また、特に概念規定を明らかにした上で使用したわけではなく、あくまでも整理上便宜的に使用した。

17. 本遺跡出土遺物の注記は、「KK17」を冠し区名・遺構名称を記入した。初めのKは「関越自動車道」のKanetuのKで、次のKはKousokudouのKで、17は群馬県内で南から17番目の遺跡であることを示す。



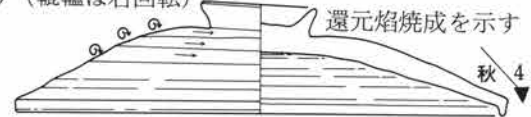


藤 2 ■酸化焙焼成を示す

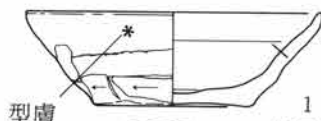


曲線的な方向の篋削り

回転篋削り (轆轤は右回転)

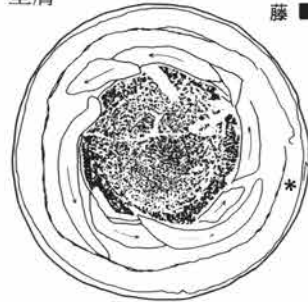


藤 8 ■藤岡古窯跡群の製品であることを示す。



藤 1 ■

磨きが不明瞭な場合の方向を示す。東毛 5 ■東毛は東毛地域の製品であることを示す。

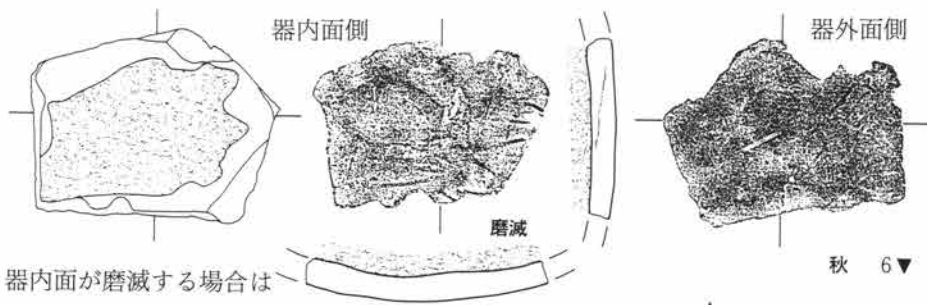


酸化部分

中性部分

還元部分

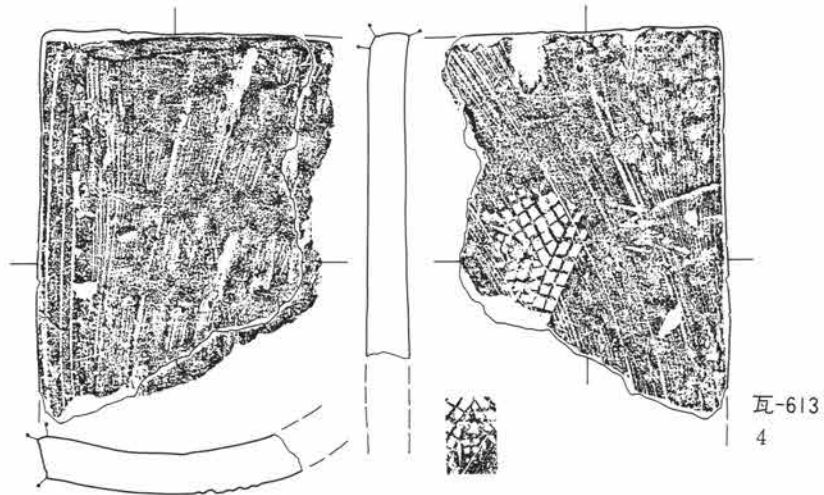
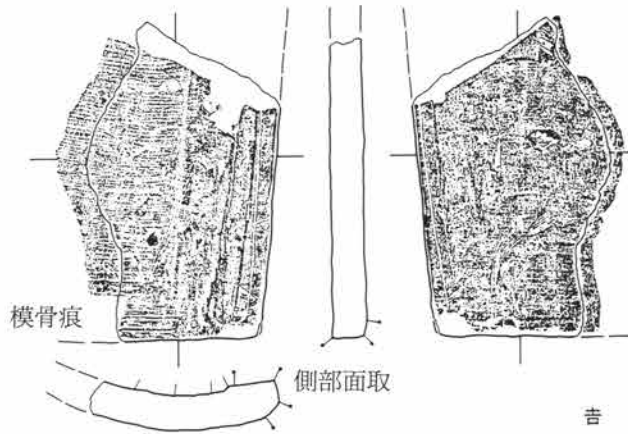
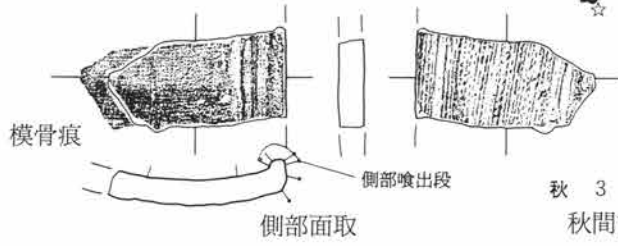
スラブ及び珪酸分を示す。



器内面が磨滅する場合は  
左側に器内面側がくる。

器内面の磨滅をあらわす。

☆は調査以前の欠損  
★は調査以後の欠損



1~10が $\frac{1}{3}$       11~14が $\frac{1}{2}$   
1~10      10cm 11~14 25cm

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
対照目次	

第1章 調 査 経 過	
第1節 調 査 経 過 …………… (木津博明・桜岡正信) ……	1
第2章 遺 跡 位 置	
第1節 遺 跡 位 置 ……………	2
第3章 グリッドと基本層序	
第1節 基本杭とグリッド …………… (桜岡正信) ……	3
第2節 基 本 層 序 …………… (木津博明) ……	4
第4章 検出された遺構・遺物	
第1節 B・A区で検出された遺構・遺物について …… (木津博明) ……	7
第2節 検出された遺構・遺物……………	7
第3節 検出された住居跡について ……………	18
第5章 追 補	
第6章 ま と め	
第1節 住 居 跡 ……………	535
第1項 A・B区で検出された住居跡と出土遺物 ……………	535
第2項 土師器甕の成形技法について ……………	579
第2節 溝 状 遺 構 ……………	583
第1項 溝状遺構と土地区画 ……………	583

## 対 照 目 次

名 称	本 文 編					観 察 表	写 真 図 版	
	総 頁	遺 構 表	所 見	遺 構 挿 図 (番 号)	遺 物 挿 図 (番 号)	遺 物	遺 構	遺 物
調 査 経 過	1	—	1	1				
遺 跡 位 置	2	—	2	2				
基 本 杭 と グリ ッ ド	3	—	3	3				
基 本 層 序	4	—	4	4				
検 出 さ れ た 遺 構 ・ 遺 物	7	—		—	—	—	—	—
溝 状 遺 構	8~12	—		6・付図2	—	—	—	—
B 区 第 5 号 溝 状 遺 構	12~15・476	—		6・付図2	8~11・537	16~18	7	66~68
A 区 第 2 号 溝 状 遺 構	16・17	—		6・付図2	12・13	18~19	6	68
A 区 第 3 号 溝 状 遺 構	16	—		6・付図2	12	18	7	68
A 区 第 4 号 溝 状 遺 構	17	—		6・付図2	13	19	—	68
A 区 第 5 号 溝 状 遺 構	17	—		6・付図2	13	19	6	68
A 区 第 6 号 溝 状 遺 構	15・16	—		6・付図2	11・12	17・18	7	68・69
B 区 第 49 号 住 居 跡	21~23	21	21	15	15~17	19・20	9	69・70
B 区 第 50 号 住 居 跡	23・24	24	23	18	18	20	9	70
B 区 第 51 号 住 居 跡	25・26・28・32・33・476 478~480・489	25	25	21	19・20・22・26・27 537・539~541・550	20~22	9・10	70・71・243・244 247
B 区 第 52 号 住 居 跡	25・26・28~33・478	—	25	21	19・20・22~27・539	20~22	9・10	70~74・244
B 区 第 53 号 住 居 跡	34~37	34	34	28	28~31	22・23	10	74・75・247
B 区 第 54 号 住 居 跡	37~42	37	37・39	32	33~36	24・25	10・11	75・76・247・249
B 区 第 55 号 住 居 跡	42・43	42	42	37	37・38	25・26	—	77
B 区 第 56 号 住 居 跡	43~48	44	44	40	39~44	26・27	11	77~79・244・245
B 区 第 57 号 住 居 跡	48~50・489	48	48	46	45~47・550	27~29	12	79・80・249
B 区 第 58 号 住 居 跡	51~54	51	51	48	49~52	29・30	12	80・81
B 区 第 59 号 住 居 跡	55~61	55	55	53・54	54~59	30~32	12・13	81~84・249
B 区 第 60 号 住 居 跡	61・62	61	61・62	61	60・61	32	12・13・14	84
B 区 第 61 号 住 居 跡	63~66・489	63	63	62	62~65・550	32・33	14	84・85・249
B 区 第 62 号 住 居 跡	66・67	67	66	66	—	—	14	—
B 区 第 64 号 住 居 跡	67・68	68	67	67	—	—	14・15	—
B 区 第 65 号 住 居 跡	69・70	69	69	68	68・69	33・34	15	86
B 区 第 67 号 住 居 跡	70	70	70	70	70	34	12	86
B 区 第 68 号 住 居 跡	67・68	68	67	67	—	—	15	—
B 区 第 73 号 住 居 跡	70~75・489	71	70	71	72~75・550	34・35	15	86~88
B 区 第 74 号 住 居 跡	75・76	76	76	77	76・77	35	15・16	88
B 区 第 75 号 住 居 跡	77・78	77	77	78	78・79	35・36	16	88・89
B 区 第 76 号 住 居 跡	78~83	78	79	81	80~85	36・37	16	89~92
B 区 第 77 号 住 居 跡	83~88・489	84	83・84	86	86~90・550	37・38	16・17	92~95
B 区 第 78 号 住 居 跡	88~92・97~101・476 489~491	88	88・89	91	91~94・97~103 537・550~552	38~42	17	95~100・243 249
B 区 第 79 号 住 居 跡	102~104・491	102	102	104	104~106・552	42	17	100・103・249
B 区 第 80 号 住 居 跡	104~106	104	105	107	107・108	43	17・18	103・104
B 区 第 81 号 住 居 跡	106~108	106	107	109	109・110	43・44	18	104
B 区 第 82 号 住 居 跡	108~110	108	108	112	111~113	44・45	18・19	104・105
B 区 第 83 号 住 居 跡	111~113	111	111	114	114~116	45・46	19	105・106・249
B 区 第 85 号 住 居 跡	113~116・491	114	113	117	117~119・552	46・47	19・20	106・107・249
B 区 第 86 号 住 居 跡	116~118・491・492	117	116・117	120	120・121・552・553	47・48	20	108
B 区 第 87 号 住 居 跡	93・94・118~122・492	118	118	124	95・96・553 122~126	48~51	20・21	101・102 108~110
B 区 第 88 号 住 居 跡	122・123	123	122・123	127	127	51	20・21	110
B 区 第 89 号 住 居 跡	124~126・493	124	124	128	128~130・554	51・52	21	110・111
B 区 第 90 号 住 居 跡	126~128・493	126	126・127	131	131・132・554	52	21・22	111・112
B 区 第 91 号 住 居 跡	128~132	128	128・129	133	134~137	52・53	22	112~114
B 区 第 92 号 住 居 跡	132~137・493・494	132	132	139	138~143・554・555	53・54	22	114~116・249
B 区 第 93 号 住 居 跡	137~139・494	137	137	145	144~146・555	54・55	22・23	116・117
B 区 第 94 号 住 居 跡	139・140・494	139	139	148	147・148・555	55・56	23	117



名 称	本 文 編					観察表	写 真 図 版	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺 物 挿 図 (番 号)	遺 物	遺 構	遺 物
B区第95号住居跡	140・141・494	141	141	150	150・151・555	56	21	117
B区第96号住居跡	141～143・494・495	141	141	152	152・153・555・556	56	23	117・118
B区第97号住居跡	143・144	144	143	154	—	—	—	—
B区第98号住居跡	144～146・495	144	144	155	155～157・556	57・58	23・24	118～120
B区第99号住居跡	147～149・495	147	147	158	158～160・556	58・59	24	120・121
B区第100号住居跡	149～153・496	149	149	161	161～164・557	59	24・31	121・122
B区第101号住居跡	155～157	155	155	168	169	61	25	123・124
B区第102号住居跡	155～160	156	155・156	168	169～172	61・62	25	124～126
B区第103号住居跡	161	161	161	173	173	62・63	25・26	126
B区第104号住居跡	162・496	162	162	174	174・557	63	25・26	126
B区第105号住居跡	163～165	163	163	175	175～177	63・64	26	126・127
B区第106号住居跡	165・166・496	166	165	178	178・179・557	64	26	127
B区第107号住居跡	166・167・496・497	166	166	181	180・181・557・558	64	26・27	128
B区第108号住居跡	123	123	123	127	—	—	20	—
B区第109号住居跡	139・140	139	140	148	149	56	—	117
B区第110号住居跡	167・168・497	167	167	183	182・183・558	65	27	128・129
B区第111号住居跡	168・169・476・497 498	169	169	184	185・537・558・559	65	27	129
B区第112号住居跡	169・170	169	170	186	186	65・66	27	129・130
B区第113号住居跡	170～172	171	170・171	187	187・188	66	27	130
B区第114号住居跡	171～173・498	171	171	187	189・190・559	66・67	27	130・131
B区第115号住居跡	173・174・498	173	173	191	191・192・559	67・68	27・28	131・250
B区第116号住居跡	174～177・498	175	174	194	193～196・559	68	26・28	131～133
B区第117号住居跡	178	178	178	197	197	69	28・43	133
B区第118号住居跡	179～186	179	179	198・199	198～205	69～71	28・29	133～136・250
B区第119号住居跡	186～188・476	186	186	206	206・207・537	71	29	136・137
B区第120号住居跡	189～192・476	189	189	208	209～211・537	71・72	29・30	137・138
B区第121号住居跡	195～197	195	195	217	218・219	73・74	30	139・250
B区第122号住居跡	192～195	192	192・193	212	213～215	72・73	30	138・139
B区第123号住居跡	195	195	195	216	216	73	30	139
B区第124号住居跡	195～199	195	196	217	220～222	74・75	30	140・141
B区第125号住居跡	200～204	200	200	223	223～227	75～78	31	141～143
B区第126号住居跡	204～208	205	205	229	228・230～232	78・79	31	143～145
B区第127号住居跡	149・150・153～155	149	149・150	161	165～167	60・61	31・32	122・123
B区第128号住居跡	208～211	209	208	234	233～236	79	32	145・146
B区第129号住居跡	189・211・212	189	189	208	237・238	79・80	29・33	146・147
B区第130号住居跡	212～215	212	212	240	239～242	80・81	33	147・148
B区第131号住居跡	216～218	216	216	243	244・245	82	32・33	148・149
B区第132号住居跡	219・220	219	219	246	246・247	82・83	33	149・150
B区第133号住居跡	220～222	220	220	249	248～250	83	34	150
B区第134号住居跡	222・223	222	223	252	251	83	34	150
B区第135号住居跡	224～226・480	224	224	253	253～255・541	83・84	35	150・151
B区第136号住居跡	226～230	226	227	256	256～259	84・85	32・35	151～153
B区第137号住居跡	230～232	230	231	261	260～262	85	35	153
B区第138号住居跡	232	232	232	263	263	85	36	154
B区第139号住居跡	233・234	233	233	264	264・265	85・86	36	154
B区第140号住居跡	235	235	235	266	—	—	36	—
B区第141号住居跡	236・237	236	236	268	268・269・271	86・87	36・37	154・155
B区第142号住居跡	237～239	237	237・238	270	271	87	37・38	155
B区第143号住居跡	237～240	237	238	270	272・273	87・88	37・38	155
B区第144号住居跡	240～242	240	240	275	274～276	88・89	38・39	155・156
B区第145号住居跡	242～245	243	242・243	277	277～279	89・90	39	156～158・250
B区第146号住居跡	246～249	246	246	280	280～283	90・91	39	158・159
B区第147号住居跡	249	249	249	284	284	91	32・40	159
B区第148号住居跡	249・250	249	249・250	285	—	—	35・40	—
B区第149号住居跡	205	205	205	229	—	—	31・40	—
B区第150号住居跡	250～253	250	251	287	286～289	91～93	40	159～161
B区第151号住居跡	237・238	237	238	270	—	—	37	—

名 称	本 文 編					観察表	写 真 図 版	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺 物 挿 図 (番 号)	遺 物	遺 構	遺 物
B 区第152号住居跡	253・254	253	253	290	290	93	41	161
B 区第153号住居跡	235・236	235	235	266	266・267	86	40	154・250
B 区第158号住居跡	254～256	254	255	291	292・293	93	41	161
B 区第160号住居跡	256～259	257	256	294	294～296	94・95	41	162・163
B 区第161号住居跡	259～261	260	260	298	297～299	95	41・42	163
B 区第161 B号住居跡	261	261	261	300	—	—	42	—
B 区第162号住居跡	262・263	262	262	301	301・302	95・96	42・43	164
B 区第162 B号住居跡	264・265	264	264	303	303・304	96・97	43	164・165
B 区第163号住居跡	265～267	265	265	305	306・307	97	28・43・44	165
B 区第164号住居跡	267～270	267	268	308	308～310	97・98	44	166
B 区第165号住居跡	268	268	268	308	—	—	—	—
B 区第166号住居跡	270・271	270	271	312	311・312	98・99	44	166
B 区第167号住居跡	272・273	272	272	313	313・314	99	44	167
B 区第168号住居跡	273～276	273	273・274	315	315～317	99・100	45	167・168
B 区第169号住居跡	276・277	276	277	319	318	100・101	45	168
B 区第170号住居跡	277・278	277	277	320	320	101	45・46	168
B 区第171号住居跡	278・279	279	278	322	321・322	101	46	169
B 区第172号住居跡	279・280	280	279・280	323	—	—	46	—
B 区第173号住居跡	280	280	280	323	324	101・102	46	169
B 区第174号住居跡	280～282	281	280	325	325・326	102	46・47	169
B 区第175号住居跡	282～284	282	282	327	328・329	102・103	47	169・170
B 区第180号住居跡	254～256	254	255	291	292・293	94	41	161・162
B 区第181号住居跡	285	285	285	330	330	103	47	170
B 区第182号住居跡	149・150	149	150	161	—	—	31	—
B 区第183号住居跡	285・286	285	285	331	331	103	47	170・171
B 区第184号住居跡	286～290	287	286	332	332～335	103～105	—	171・172
B 区第185号住居跡	287・291	287	287	332	336	105	—	172・173
A 区第21号住居跡	292～295	292	292	337	337～340	105・106	48	173・174
A 区第22号住居跡	295～297	295	295	342	341～343	106・107	48	175
A 区第23号住居跡	297・298	298	298	345	344	107	48	175
A 区第24号住居跡	298～300	—	298	346	347	107・108	—	176
A 区第26号住居跡	300・301	300	300・301	348・349	349	108	49	176
A 区第118号住居跡	302・303	302	302	350	351	108	49	176
A 区 第 119 号 址	303・304	303	303	352	353	108	49	176
A 区第155号住居跡	304・305	304	304	354	355	108・109	49・50	176・177
A 区第156号住居跡	306～309	306	306・307	356	356～359	109	50	177・178
A 区第157号住居跡	309～311	309	309	361	360～362	109・110	50	178
A 区第158号住居跡	311～313	311	311	364	363～365	110・111	51	178・179
A 区第159号住居跡	314・315	314	314	366	366・367	111	51	179
A 区第160号住居跡	315・316	315	315	368	369	111	51・52	179・180
A 区第161号住居跡	316～318	316	317	370・371	371	111・112	52	180
A 区第162号住居跡	319～321	319	319	372	373・374	112	52	180・181
A 区第163号住居跡	319	319	319	372	—	—	52	—
A 区第164号住居跡	321～323	321	321・322	375	375・376	113	52・53	181・182
A 区第165号住居跡	324～327	324	324	377	377～380	113・114	53・54	182・183
A 区第166号住居跡	327～330	328	327	381	381～383	114・115	53・54	184・185
A 区第174号住居跡	330～333	330	331	385	384～387	115・116	54・55	185・186
A 区第175号住居跡	333～335	333	334	389	388～390	116	55	186
A 区第176号住居跡	335・336	335	335	391	391・392	117	55	186・187
A 区第177号住居跡	337・338	337	337	393	393・394	117	56	187・188
A 区第178号住居跡	339・340	339	339	395	395・396	118	56	188・250
A 区第179号住居跡	340～347	340	340・341	397	398～403	118～121	56・57	188～191
A 区第180号住居跡	348・349	348	348	404	404・405	121	57	191
A 区第181号住居跡	349・350	349	349	406	406	121	57	191・192
A 区第182号住居跡	350～353	352	350	407	408・409	122	58	192
A 区第186号住居跡	353～355	353	353・354	410	411・412	122・123	58	192・193
A 区第187号住居跡	355～366	355	355・356	413・414	414～423	123・124	58・59	193～197・250
A 区第188号住居跡	367～369	367	367	425	426・427	125	59	197・198

名 称	本 文 編					観察表	写 真 図 版	
	総 頁	遺構表	所 見	遺構挿図 (番号)	遺物挿図 (番号)	遺物	遺 構	遺 物
A区第189号住居跡	369~371	369	369・370	428	428・429	125	59・60	198・199
A区第190号住居跡	371・372	371	371・372	430	430	126	60	199
A区第191号住居跡	372~374	373	373	432	431~433	126	60	199
A区第192号住居跡	374~378	374	374・375	434	434~437	126・127	61	199~201
A区第193号住居跡	379	379	379	438	438	127	61	201
A区第194号住居跡	380・381	380	380	439	439・440	128	61	201
A区第195号住居跡	381~383	381	381	442	441~443	128・129	61	202
A区第196号住居跡	384・385	384	384	444	445	129	62	202・203
A区第197号住居跡	386	386	386	446	446	129	62	203
A区第198号住居跡	387	387	387	447	—	—	62	—
A区第199号住居跡	387~391	387	387・388	448・449	449~451	130・131	62・63	203・204
A区第200号住居跡	355・356・367	355	356・357	413	424	124・125	58	197
A区第201号住居跡	391・392	391	391・392	452	453	131	63	204
A区第202号住居跡	392~397	392	392	454	455~458	131~133	63・64	204~207
A区第204号住居跡	398	398	398	459	459	134	64・65	207
A区第207号住居跡	398~402	398	398・400	460・461	461~463	134・135	65	207・208
A区第208号住居跡	402~404	402	402・403	464	465	135	65	208・209
A区第4号掘立柱建物	405	—	405	466	466	—	8・53	—
B区第4号井戸跡	406~425	—	406・413	467	468~486	135~141	47	209~217
B 区 土 坑	426~430・432・484 486・488	—	426	487~490	487~490・493・545 547・549	142	—	218・245・248
A 区 土 坑	426・430~433	—	426	490~493	491~494	142・143	—	218・219
B 区 遺 構 外	426・434~455	—	426	—	495~516・547	144~162	—	219~232・248
A 区 遺 構 外	426・456~464	—	426	—	517~525	162~167	—	222・233~235
B 区 遺 構 外 瓦	426・465~466	—	426	—	526~527	167~	—	236~238
B・A区遺構外瓦	467~475	—	—	—	528~536	~174	—	237~243
追 補	476~488	—	—	—	537~549	—	—	245~248
追 補 B 区	489~498	—	—	—	550~559	—	—	—
瓦 当 瓦 類	499~513	—	—	—	560~574	—	—	—
文 字 瓦 類	514~530	—	—	—	575~591	—	—	—
追 補 2	531~535	—	—	—	592~596	—	—	—



# 第1章 調査経過

## 第1節 調査経過

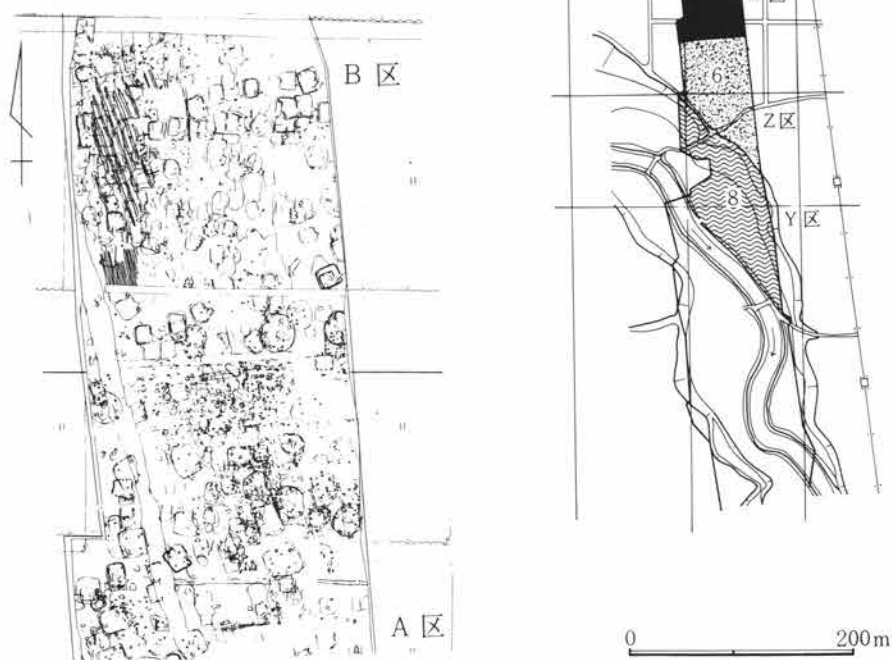
今次の第5分冊は例言で述べたとおりB区（農道以南）・A区（A区1号溝状遺構以北）内から検出された古墳時代後期～平安時代の住居跡187軒の調査報告である。これらの住居跡の他に第1分冊に所収した縄文時代・古墳時代（前期）・室町時代以降の諸遺構・遺物が当該報告区から検出されている。この両者は、報告書としては既刊・本刊となっているが、発掘調査自体は同一である。だが、これらの諸遺構・遺物は、層位的に上・中・下の関係にあり、当然のことながら室町時代以降の遺構の調査より着手した。

調査経過は、室町時代以降（中世面）の調査は、昭和56年12月より調査を着手し途中全体の進行状況との係わりから中断し、昭和57年7月より1ヶ月間を要し中世面を終了させた。

古墳時代後期～平安時代の調査は、昭和58年2月から1ヶ月間を要し、南側調査区B区農道以南の側道部の調査を実施した。この間にZ区まで含め1ヶ月間に100軒以上の住居跡等の調査を終了させ、この間に下位の古墳時代前期及び縄文時代の遺構確認から調査実施も含まれている。昭和58年4月より同部の本線敷部の調査を着手し、翌年2月に終了している。

第1図の右図には調査報告区の概念位置を左図には調査経過の概念図を掲載した。左図には上位面・下位面の遺構も含まれている。

尚、上位面・下位面の遺構・遺物に就いては、上野国分僧寺・尼寺中間地域（1）関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集を参照していただきたい。



第1図 調査経過概念図

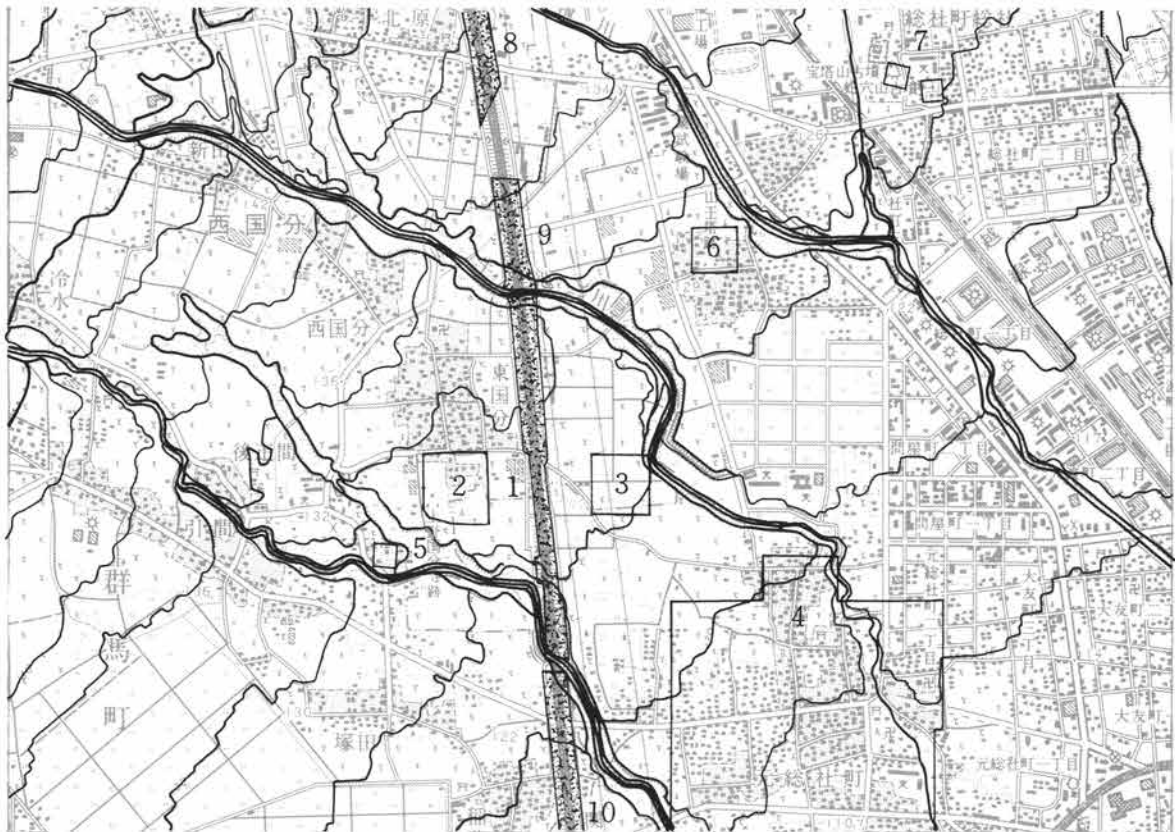
## 第2章 周辺遺跡

### 第1節 周辺遺跡

当「上野国分僧寺・尼寺中間地域」の名称は県教育委員会・日本道路公団・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者の事業名称であり、調査担当者としては軽々に「遺跡」としての名称とは考えていない。則、前橋市・群馬郡群馬町の一市一町に跨がる一大遺跡であり、縄文時代から現代に至る複合遺跡である。この遺跡の性格に対して奈良・平安時代の上野国の二大モニュメントに挟まれた地域であるが所以にの国分寺を冠する名称としては不本当であり、正しくは字名乃至大字名をもって遺跡名称とする可きと考える。蓋し、調査に至迄の経過には、この名称が有する重要な地域での遺跡保存の運動が行われたことも考慮される。

当該地は、行政区分上前橋市元総社町字小見・群馬郡群馬町大字東国分(字地名は 名称が該当)に位置する。このことから前橋市分は小見遺跡・群馬町分は東国分遺跡(群)と呼称される可きものである。

当遺跡の周辺遺跡に就いては、既刊の「上野国分僧寺・尼寺中間地域」(1)~(4)の同章目を参照していただきたい。尚、第3分冊には、特に詳述したのを参照していただければ幸である。



1. 上野国分僧寺・尼寺中間地域 2. 国分僧寺 3. 国分尼寺 4. 上野国府  
5. 妙見寺(七星山息災寺) 6. 放光寺(山王廃寺) 7. 総社古墳群 8. 北原遺跡  
9. 国分境遺跡 10. 鳥羽遺跡

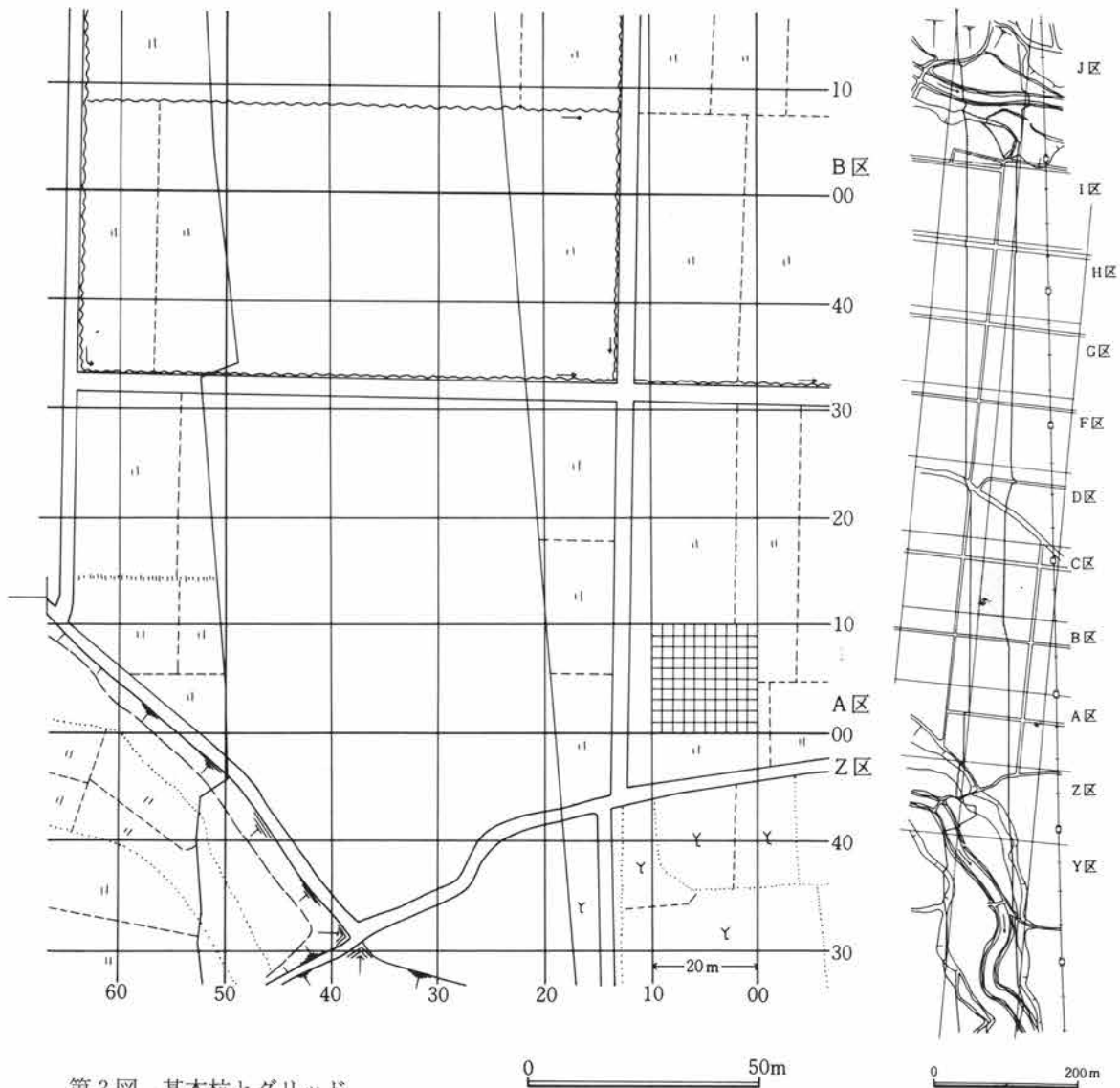
第2図 遺跡位置図

## 第3章 グリッドと基本層序

### 第1節 基本杭とグリッド

調査区のグリッド設定は、史跡上野国分寺跡の保存整備事業との関連も考慮して、国家座標を使用した。基準としたのは、調査区南の染谷川左岸に位置するIX系X=43400、Y=-72100である。この位置を00として南北100m、東西200mを大グリッドとして南からY（河川敷）・Z・A～J（Eを除く）の11区を設定した。また、大グリッド内は、南東コーナー部を基準として北方向に0～50（50=次大グリッドにおける0）、西方向に0～100の数字を与えた2m×2mの小グリッドに区分した。杭の設定は、調査の便宜上10mごとに行ない、必要に応じて増設した。

小グリッド名称は、大グリッド同様南東コーナー杭名称をもって呼称することとし、（X軸上の数字）—大グリッド名—（Y軸上の数字）として表記した。



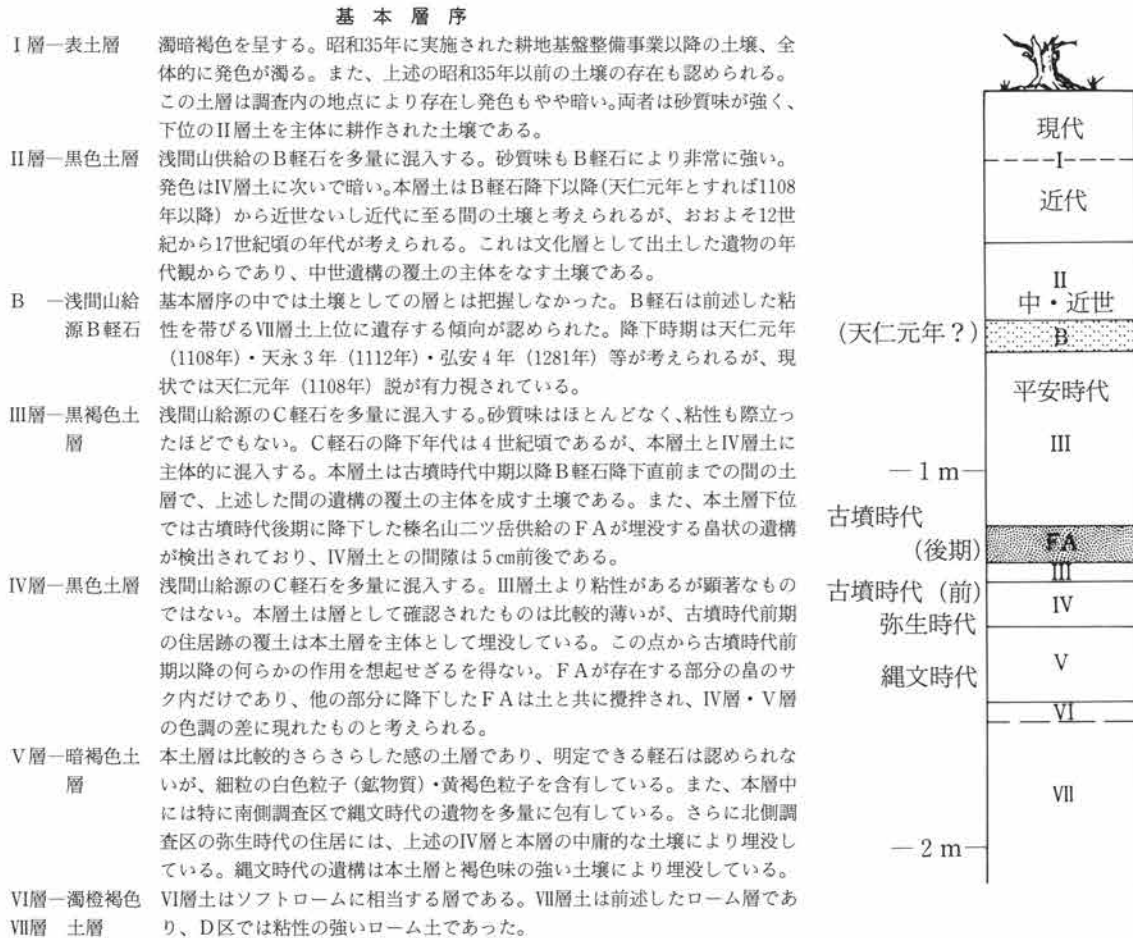
第3図 基本杭とグリッド

## 第2節 基本層序

当遺跡は榛名山東麓・浅間山東方に位置し、両山の火山活動の痕跡は土層中において顕著に認められた。基本層序は上述の火山活動時に噴出された「火山灰・軽石」を含有するもので、その種類の含有等により分層できる。基本層序は第3図に示したとおりであるが、各調査区の地点により層厚等差異が認められるが、おおそ図示した状況であり、図はD区での状況を模式図化したものである。

上層は7層に分層できる。地山はローム土層であり、同層下位は火山系のシルト層でその粒子・色調によって分層できるが、ここではローム土層を地山と呼称し、ローム土層下位の土層については井戸跡の断面図を参照されたい。ローム土層は堆積時の状況により2分される。これは黄褐色を呈する部分と濁橙褐色を呈する部分である。前者は比較的乾燥状態での堆積で、後者は水性ないし水の流路部であった可能性が指摘されている。さらに前者は砂質味を帯びる部分等も認められ、後者は粘性に富んでいる。これらの状況は、両者が調査区内を横断する様に認められる点で、地形の傾斜方向に沿うと考えられる。また、この両者のあり方は上位の層にも影響を及ぼしており、前者の上位層のIV・Vは粗粒質土であるのに対し、後者の上位層のIV・V層は比較的微粒質で粘性に富んでいる。

このローム土層の堆積した段階では地山の起伏が著しく、上位層はこの起伏を埋める様な状態で堆積しており、おおそ平坦になったのは奈良時代に至っての頃と考えられる。また、調査区の部分によってはV層土の層厚の変化が著しいが、倒木痕の調査によりV層土は調査区全体に均一的に堆積していたことが判明した。



第4図 基本層序

註1 新井房夫先生の御教示による。





第5図 検出遺構全体図



## 第4章 検出された遺構・遺物

### 第1節 B・A区で検出された遺構・遺物について

今次の第5分冊に於いて報告を行なう遺構・遺物は、例言及び第1章で記したとおり、前刊第4分冊南側調査区より以南のB区及びA区北半部である。この調査区で検出された縄文時代・古墳時代（前期）・室町時代以降の遺構・遺物は既刊第1分冊中に図化掲載した。

縄文時代の遺構は、住居跡・土坑等を主体とする集落で南限は調査区内台地上全面に亘る範囲である。検出住居跡乃至住居跡に疑せる遺構は47軒、土坑約200基である。

古墳時代（前期）所謂“古式土師器”を伴出する住居跡は15軒であった。然しこれら15軒の住居跡は総体的に、後世の住居等の攪乱により遺存状態は不良であり、且、出土遺物も量的には多いと言えるものでは無かった。

室町時代以降の遺構は、B・C区で検出された仮称「小見廃寺」を中心にした地域で、その南側に当たっている。大規模な遺構としてA1溝（道路跡）が検出され、この他に井戸跡・掘立柱建物跡・土坑・土坑墓等が検出されている。これらの詳細に就いては第1分冊を参照していただきたい。

今次報告は、上述の第1分冊で報告除外になった古墳時代（後期）～平安時代迄の諸遺構である。これらを第1分冊から除外した理由として、上述3時代と当該報告時代には大きな断絶があり、1つの遺跡内を分別して報告しても対外的に弊害が生じないであろうという判断のもとに実施した。又、当該報告区以南に就いては次年度に第6・8分冊として報告される予定にある。

本書中に掲載した遺構は、溝状遺構6条・住居跡178軒・土坑49基である。これらの諸遺構は、国分二寺南辺築垣各々側から東・西への延長線より以南で、同延長線より南側に凡そ108m＝一町分を想定した部分に当たっている。則、第6分冊に当る報告区との分別は、一応、国分二寺に係わる地割り＝条里（推定）を想定してのものである。

検出遺構の中で、上述の地割に係わる可能性が大と考えられるものにA20・B5溝の二条の溝がある。この溝状遺構の東西走行方位は、国分僧寺で明らかになっている寺域の中軸方位に僅差でほぼ付号する。この方位の同一性は、両者間の係を示唆するものと判断される（この点に就いてはまとめて記述する。）。

一方、住居跡は、6世紀前半～平安時代迄の時期のものが検出されているが、特に7世紀以前の住居跡は次刊の第6分冊で報告される部分で多く、当該報告区は量的に少ない。主体を成すのが8世紀～10世紀代の住居跡である。これらの中で特筆出来る住居跡として小鍛冶遺構を伴なう住居跡で、前刊B区1・40号住と今次の報告部で78・145・184号住の三基があり合計5軒が比較的限定された範囲の中から検出されている。又、前刊書で遅れとなった単体の屋外炉の存在もある。それを含めた地域は約2000㎡以内の極限定された地区に集中している。そして、これらの小鍛冶を時期的に見れば、8世紀末から10世紀後年代までの長期間に亘っており、小単位の小鍛冶が継続して営なまれていたことが判断される。この小鍛冶を伴なう住居跡の外に特筆される2軒の住居跡がある。この住居跡はB83住・A187住で前者が饒益神宝（初鑄貞観元年）（859）、後者が承和昌宝（初鑄承和2年）（835）が出土している。B83住はカマド右袖寄りの床面直上で出土し、A187住は住居の掘り方底面の直上から出土している。この両者は、県下での初出例である。この両者の初鑄年代は、共伴した土器類・瓦類に対して、その年代観（上限）を与える好例と言い得るものである。

## 第4章 検出された遺構・遺物

この特筆される住居跡は、通有に対すればあくまでも特殊例としての存在であり、通有例から何如に多くの情報を得るかがこれらの検出遺跡に対する報告になると考える。

### 第2節 検出された遺構・遺物

#### 溝状遺構

##### B区第5号溝状遺構（第6～10図・付図2）

B区第5号溝状遺構（以下B5溝と略記し、他の溝状遺構も○区○溝と同様に略記する。）は、B区の最南端に位置し、南側で近接しA6・3溝が位置している。

遺構の新旧関係は、A1溝（14～16・17～18世紀）が周辺の古代所産の遺構を切って構築がある。当溝もA1溝に切られており、調査区東端側でB区46・47号址（14世紀後半の竪穴状遺構）に切られている。又、古代の遺構では、B区146号住居跡（以下住居も溝状遺構と同様に略記する）が所産時期の判断から当溝を切ると考えられる（平面精査では未確認）。

検出長52.2mを測り、西・東端は調査区外に延びる。走行方位は北-86度-南（-4度）を指す。幅員は検出部で一定ではなく約1.2m～1.7m程である。溝底は水平でⅦ層土を使用し平坦である。覆土はⅢ層土を基本としており、水成堆積は認められなかった。土層断面A-A'・B-B'中1層土にBTの含有を記入したが、調査時点では、確実にBTとは確認出来ず、ややさらさらした土層であった。出土遺物は土器類と瓦類が有り、礫の出土が大半を再めている。出土層位は、2～4層土中に集中していた。この遺物から、廃棄時期が8世紀後半代と考えられる。このことから当溝の存続は国分寺を考慮すれば8世紀中頃の所産であることが推察される。

当溝の走行方位約4度は、溝底北側下端面をもって測角したが、南側下端面では若干差違がある。この-4度の数値は国分僧寺の主軸の偏差角と同値である。然し、推定国分僧寺南辺築地屏の延長線から67m程南側に位置している。

又、前刊第4分冊中で掲載した溝状遺構で、時期が近いC10溝との距離は156m程になる。この156mの数値1.5町に近い。これらの点から、当溝は、国分寺の造営に伴う地割による構築時の占地があったと思われるが、国分寺の推定域は未発掘調査により確定されたものではない。この点で基本的な疑問が残る。

##### A区第6・3号溝状遺構（第6・11・12図・付図2）

両溝は前述のB5溝の南側1.3m程に近接して位置し、A6・3溝は、平行し検出長も約19m程である。走行方位はA3溝が北-83度-南であるが、A6溝は、平面形状が歪んでおり確実な側角が然かぬが、概、北-84度である。この両者の走行方位は1度の違いがあるが、前述B5溝とは約3度異なっている。

幅員は、A6溝が0.5～0.8m、A3溝は0.5～1.0m程である。深度は0.2m程で両溝共B5溝より浅い。覆土は調査時の所見では水成堆積が認められない通有の状態であった。出土遺物は両溝共に破片で土器類・瓦類・礫があった。これらの遺物は、C区の住居段階V乃至VI段階の様相であることから、両溝の廃棄は、9世紀中頃から9世紀後半頃であったと考えられる。そして、両溝の性格は、B6溝・A2溝に挟まれているものの、遺存が不良なる点から言及し難い。

##### A区第2号溝状遺構（第6・11図・付図2）

当溝は、全体的に遺存が不良である。位置的にはB5溝の南11.3mにあたる。走行方位はB5溝とほぼ同位で北-86度-南（-4度）である。この走行方位が同位であることから、両者の併存が推定される。幅員

は0.7~1.4程であるが、遺存状態が不良な為旧状はB5溝に匹敵した可能性がある。これを考慮すれば、当溝とB5溝の間隔は狭ばまり、1町の10分の1の数値に近似する結果となる。出土遺物は土器類が主体であり、土器の年代観は、B5溝同様であり8世紀中頃から後半である。この点からはB5溝と併存した可能性が大きい。

この両者の偏差角3度70分は、国分二寺の南辺築垣に平行するものであり、この状態と平行して走行する溝状遺構は道としての機能が考えられ、両者間の空間には当該期の住居跡が未出であることからすれば、この両溝は、その両者が一体となって道の側溝として存在したことが指摘される。

#### A区第5号溝状遺構（第6・11図・付図2）

当溝はA1溝の東西走部の北側8m程に位置し、B5溝南端側約43m・A2溝南端側から約30m南に位置する。この為遺存も悪い、更に調査時期が厳寒の冬期であった為覆土が凍結していた。これにより覆土の詳細な観察が不能であったが水成堆積ではない通有の堆積であったことは確認されている。遺構の新旧関係では、中央部でA164・166住に切られており、当溝が切る遺構は皆無である。検出長18.4mを測る。検出部はA1溝以東であり、西側は確認の下げ過ぎにより失なわれたものと思われる。幅員は1.4mを最大としているが、旧状はこれより広がったことは確実である。走行方位は北-90度-南であるが、遺存不良であることから若干の偏差があると思われる。出土遺物は少量の土師器と瓦類の出土があった。時期は確定し得る状態ではないが、9世紀代には埋没があったと考えられる。

当溝の性格は、B5溝・A2溝等同様に思われるものの、具体的証左に乏しい為不明と言わざるを得ないが、周辺住居の状況から、地割乃至住居構築に対し何らかの規制力があることは明らかである。

#### A区第4号溝状遺構（第6図・付図2）

当溝はA1溝の東西する部分で、A1溝に接して検出された。覆土には浅間山供源のBTの混土層（II層土）が充満しており、中世所産と判断された。唯し、A1溝との新旧関係は明らかではない。

検出長9.8mを測る。走行方位は北-83度-南（-7度）で、A1溝の走行方位北-81度-南に対してほぼ平行する状態である。幅員は細く、最大幅で0.3m程である。

当溝の性格は、A1溝に付随するものと考えられるが、詳細は言及し難い。所産時期は、A1溝との関係から14世紀後半以降と考えられる。

#### 古代の道路跡に就いて

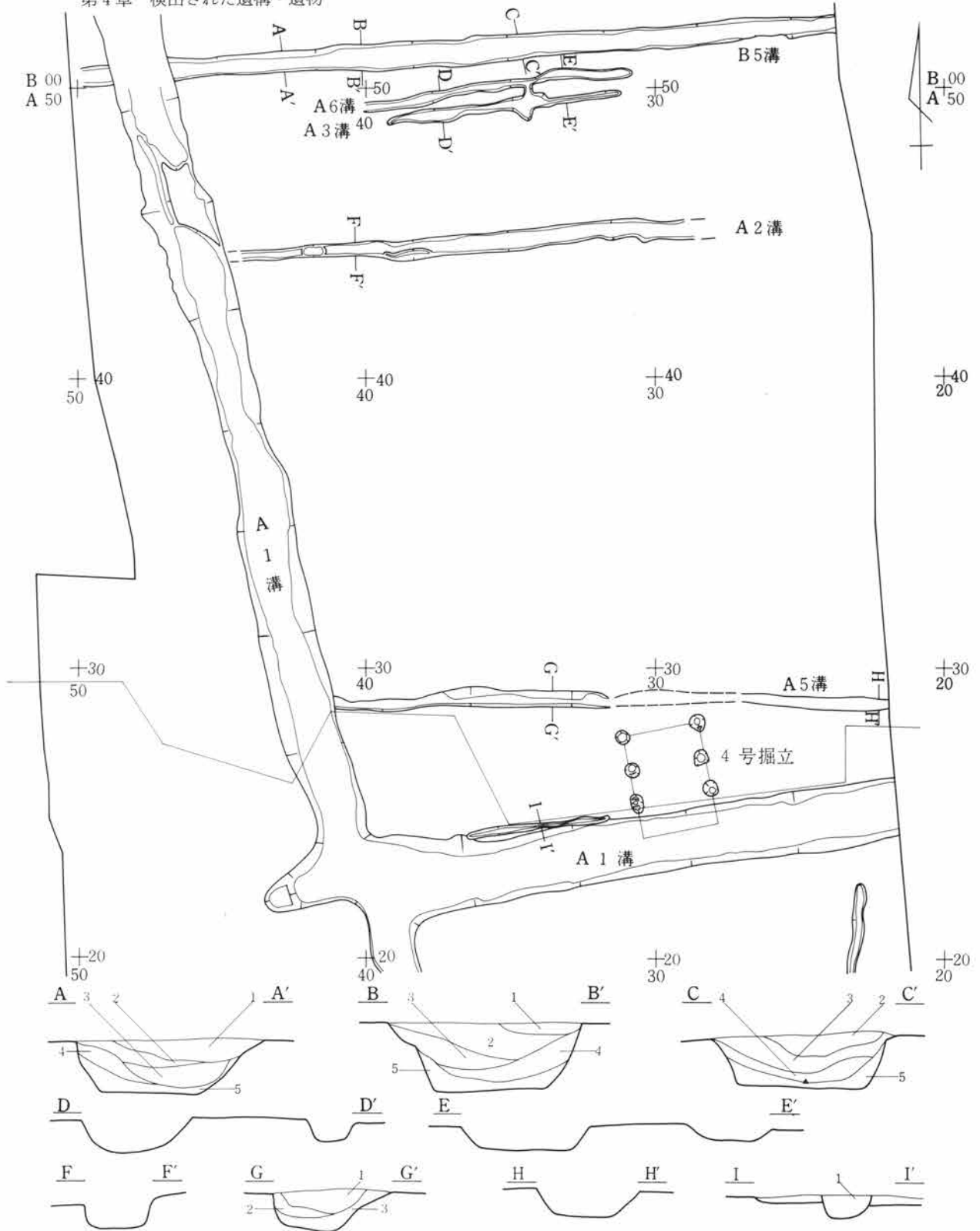
道路跡と考えられる遺構は溝状遺構の平行走行するものが最も該然性が高い。この道路跡と考えられる遺構は、今次のB5・A2溝に挟まれる一条を含め合計4条が想定されている。又、この外では、住居群が群在する間隙も道の存在が考慮される。この住居群の大きな間隙は、調査区内で3ヶ所が確認出来る。この3ヶ所は、孰れも僧寺の南辺・東大門・北辺の延長上に当たっている。この古代の道路以外では、中世~現代に至る坂1条を含める8条が検出されている。

#### 住居跡

今次の報告に該当する住居は172軒である。これらの住居は、概ね6世紀から11世紀に構築そして廃棄があった住居跡である。

既刊第3分冊及び第4分冊中では、D・C・B区の住居跡の形状特性を考慮し、新旧関係・出土遺物から住居形状の変遷的観点から序列を設定した。この序列は、D区では第I段階から第V段階までを考えた。そして、C・B区では、各住居の所見の中で、各々の住居跡がD区のどの住居段階に対比されるかを記述し、D区の住居段階がC・B区でも概ね妥当性があることが確認されたが、一部の住居跡は、D区に対比し得な

第4章 検出された遺構・遺物



層序 (B 5 溝) L=127.00m

1. 粒状BT含有・細粒状C軽石多量。
2. 細粒状C軽石多量・粒状VII層土微量。
3. 細粒状C軽石多量・粒状VII層土微量塊状VII層土少量。
4. 細粒状C軽石微量・粒状VII層土少量。
5. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土多量・塊状VII層土混入。

層序 (A 4 溝) L=126.30m

1. 粒状BT通有。

層序 (A 5 溝) L=126.30m

1. 細粒状C軽石混入。
2. 細粒状C軽石含有。
3. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土多量。

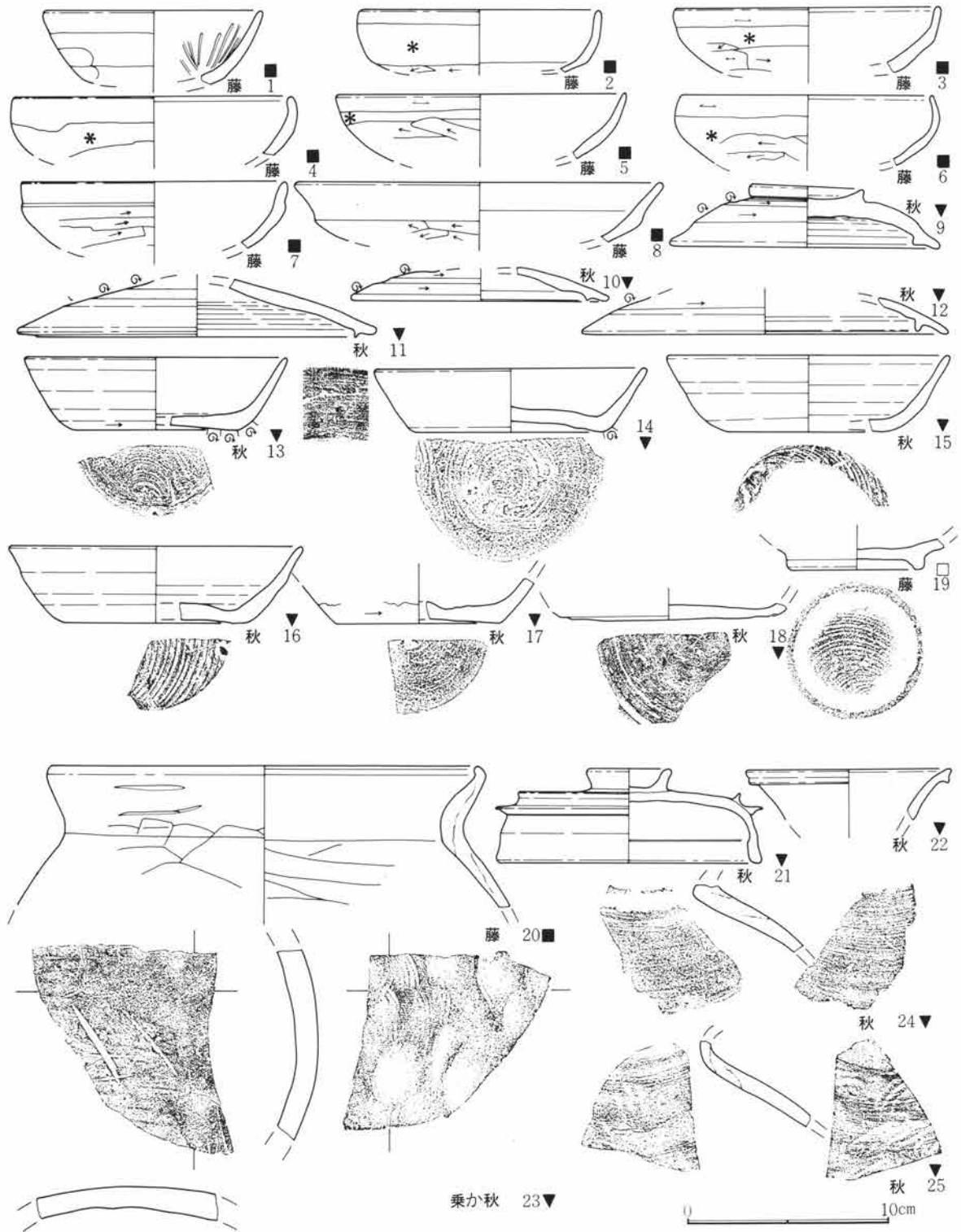
第6図 溝状遺構配置図及び溝状遺構断面図 (1:50)



第7図 溝状遺構配置推定図

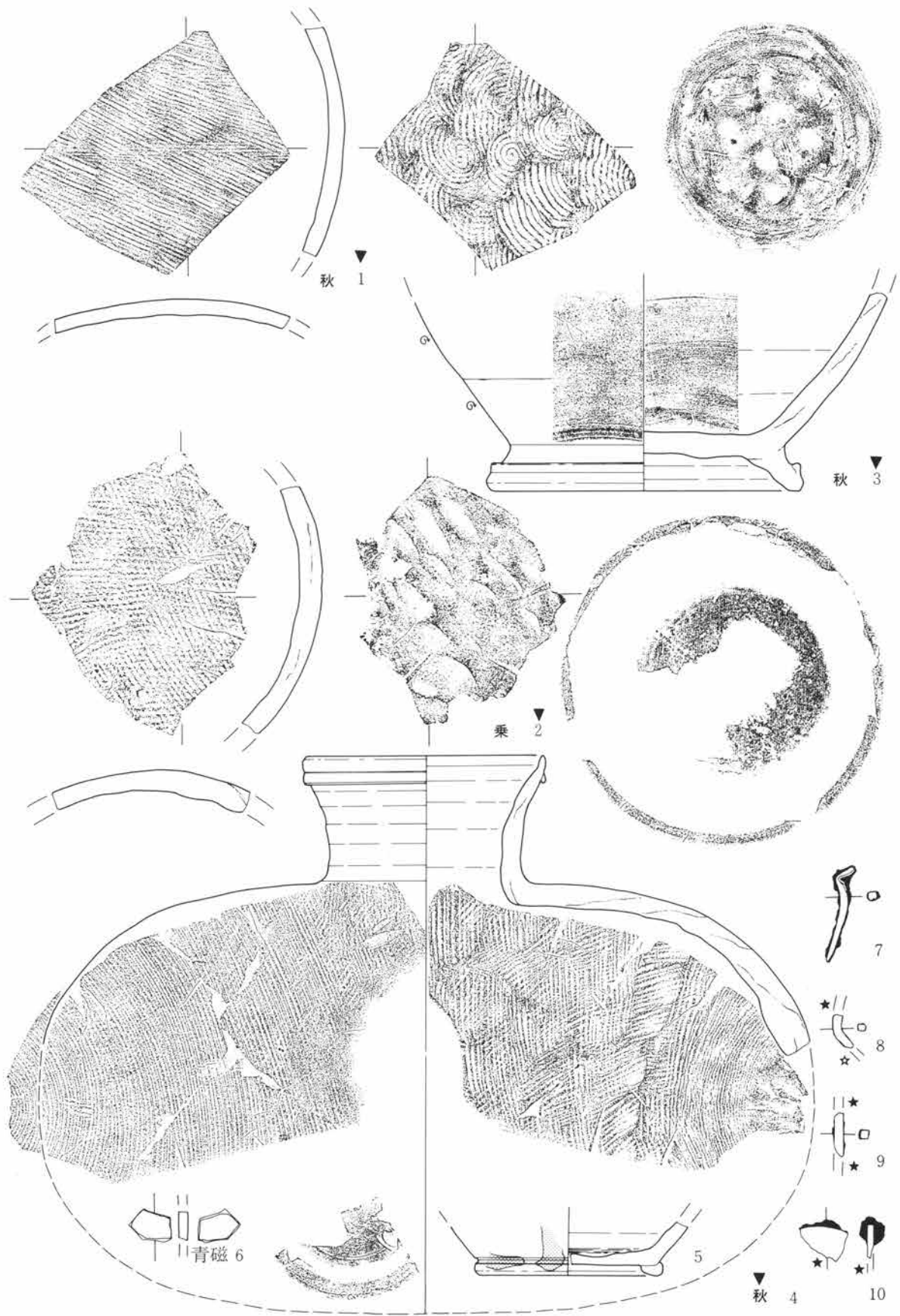
第4章 検出された遺構・遺物

い形状特性が認められた。この為、改めてC・B区の住居形状の段階を設定した。このC・B区の住居形状段階は、対象となった住居跡がC区の住居跡であったことにより、「C区の住居形状」とし、第I段階から第X段階までの設定を行ない、D区の第I～V段階の住居跡がC区の第VI～X段階に対比されることを考察した。



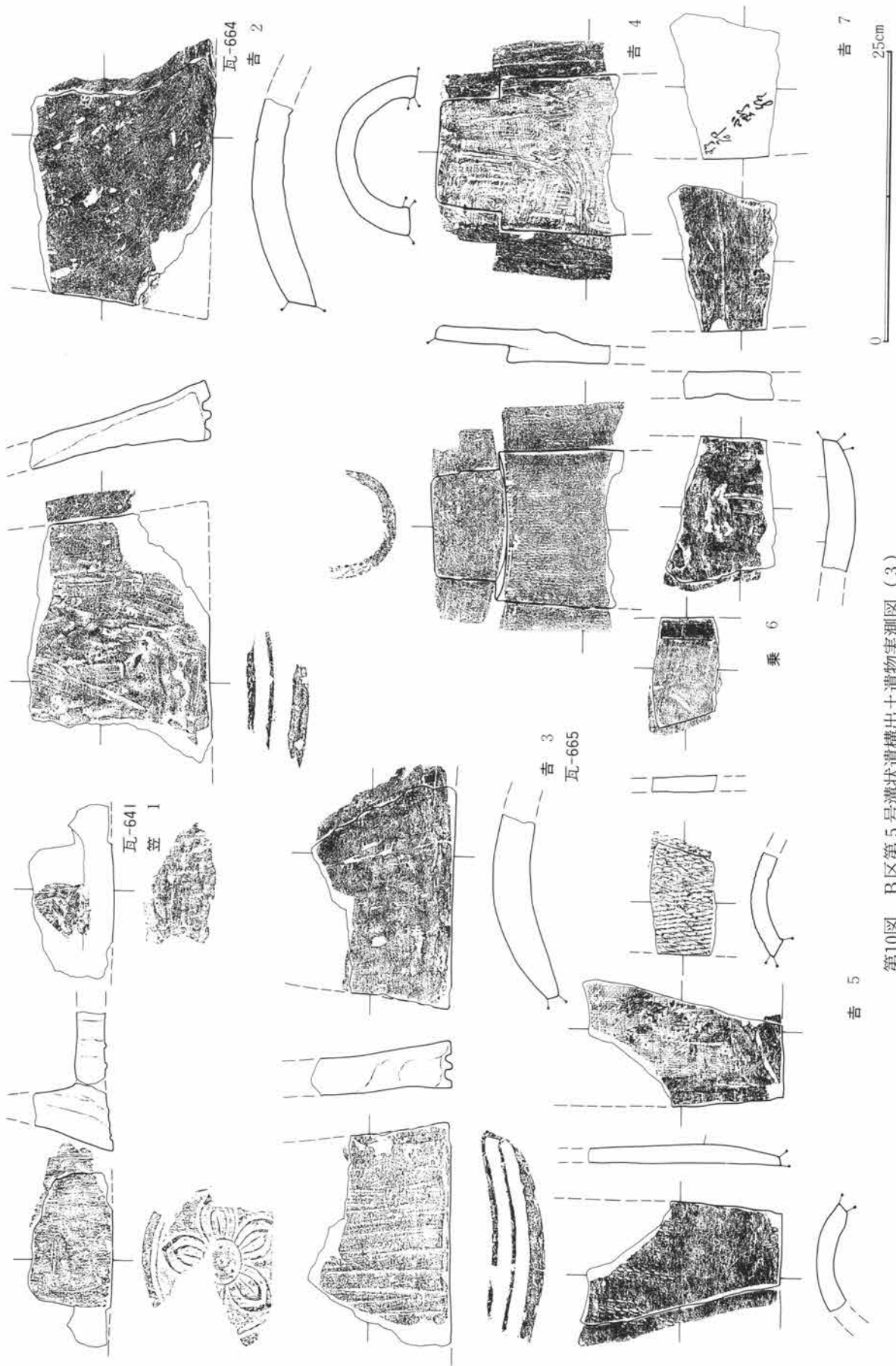
第8図 B区第5号溝状遺構出土遺物実測図(1)



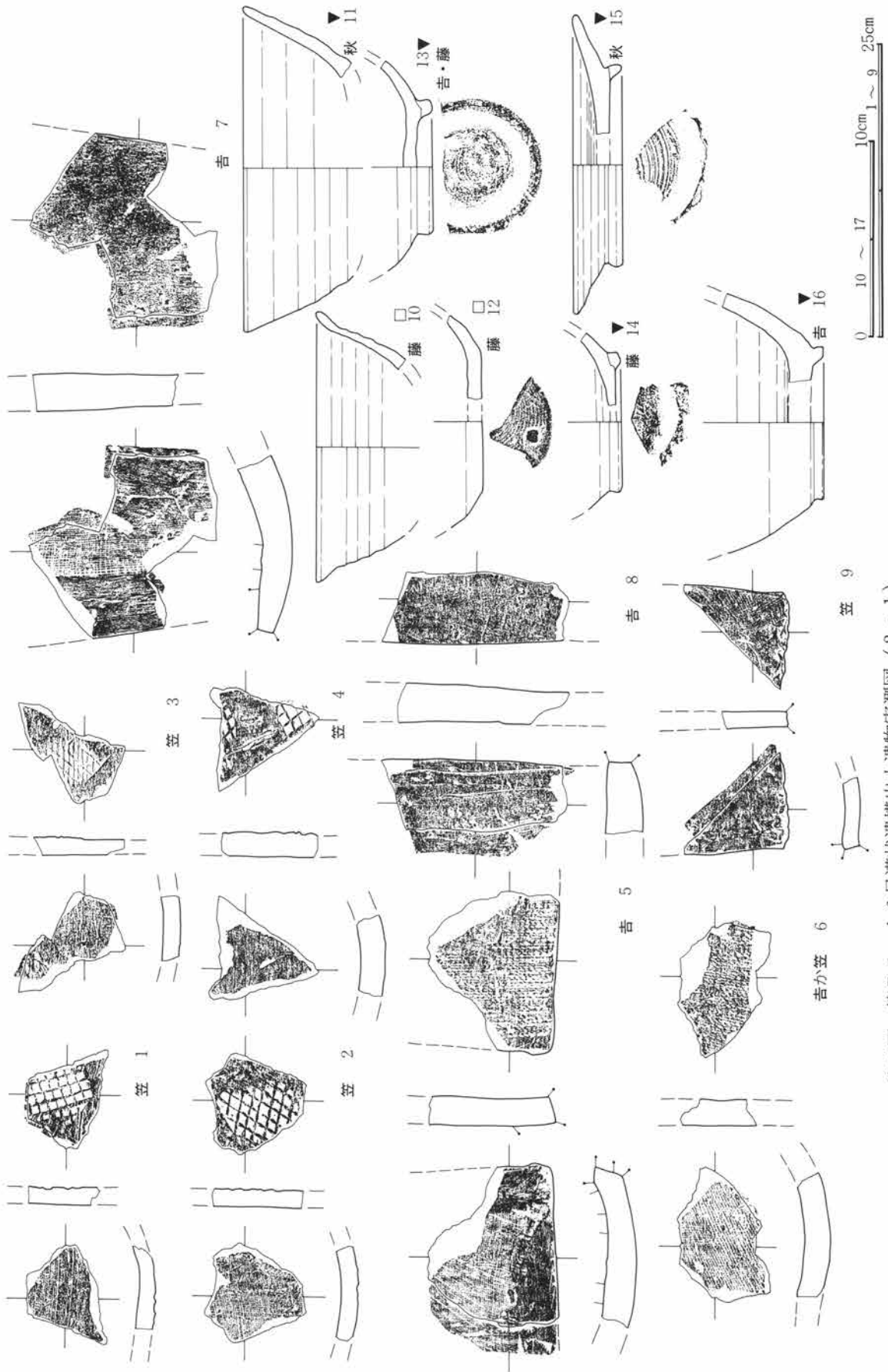


第9図 B区第5号溝状遺構出土遺物実測図(2)

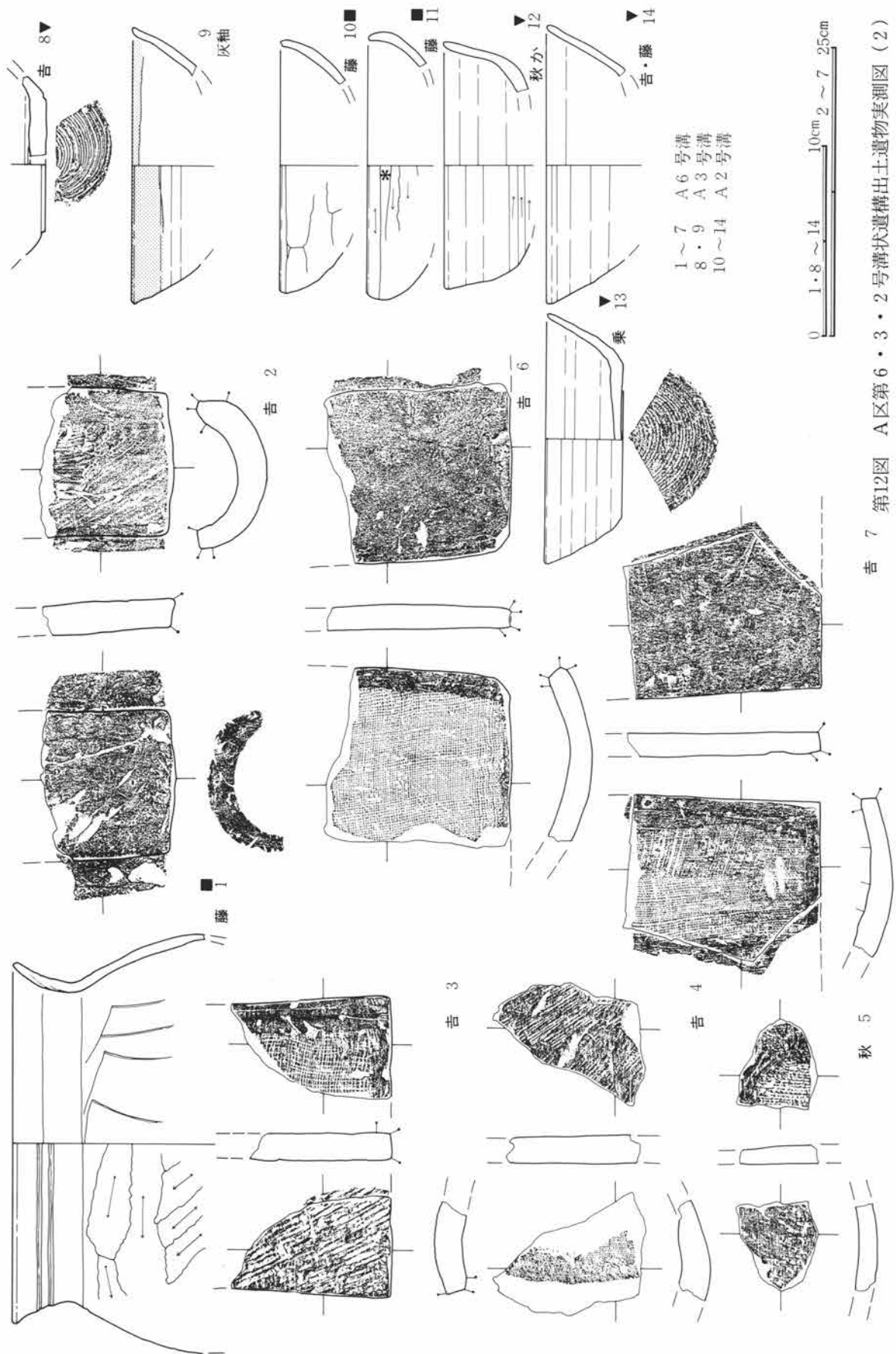
0 10cm



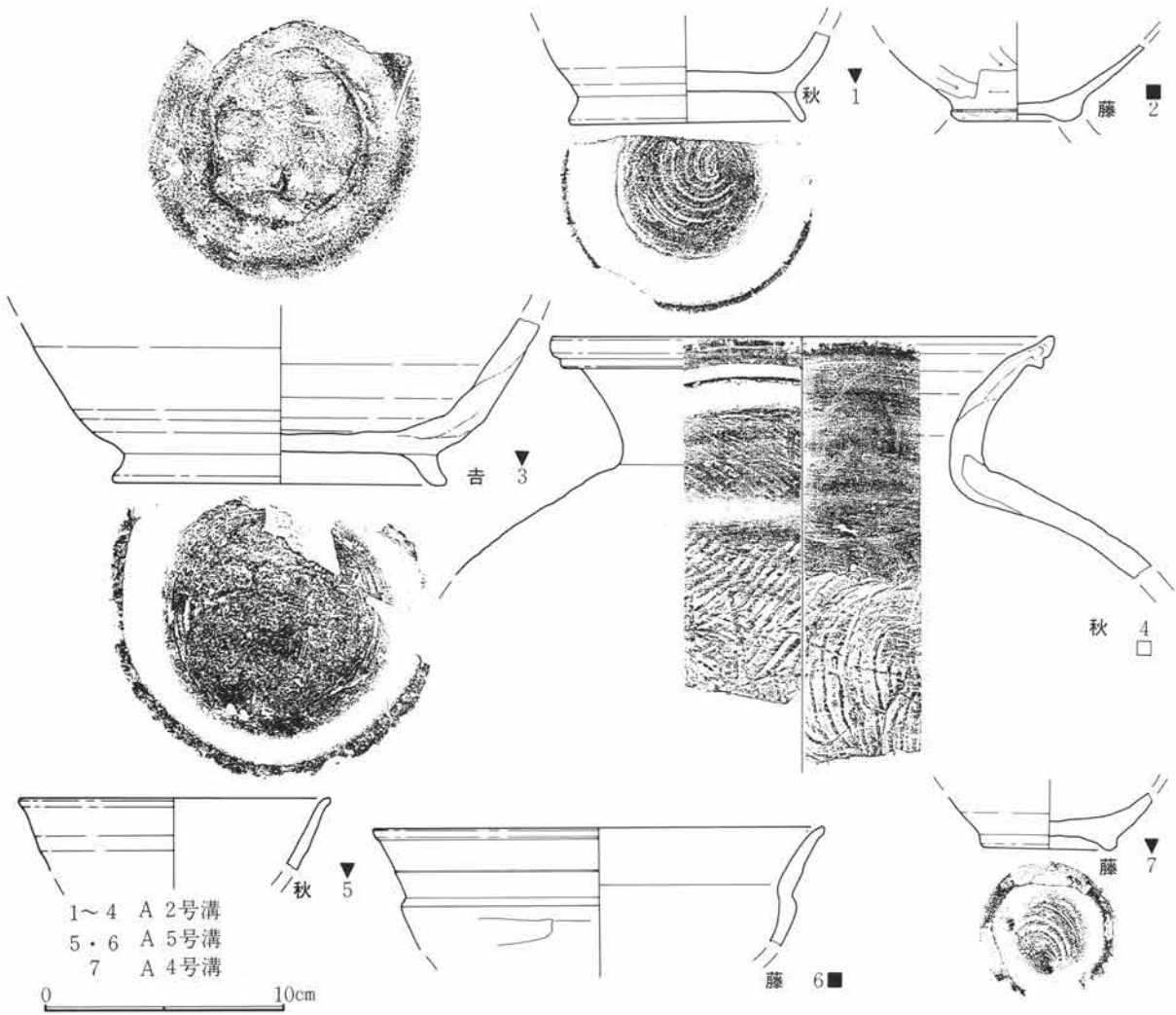
第10図 B区第5号溝状遺構出土遺物実測図(3)



第II図 第B5・A6号溝状遺構出土遺物実測図(2・1)



吉 7 第12図 A区第6・3・2号溝状遺構出土遺物実測図(2)



第13図 A区第2・5・4号溝状遺構出土遺物実測図(3)

一方、出土遺物も各住居形状段階毎に一括性の認められる遺物(土器類)を抽出し、各住居段階毎に図示した。これにより、数器種の特徴的な遺物の上限がある程度は明らかに出来たと考えた。

今次の報告中で住居跡所見項目に記述する各住居形状段階・遺物様相はC区の状況に鑑みたものである。

### 第3節 検出された住居跡について

今次の報告対象となる住居跡は188軒ある。この188軒の内訳はA区46軒・B区142軒である。これらの住居跡は、前刊第4分冊B区の南側から約108m分である。この108mを一つの区切りとしたのは、東・西に位置する国分僧寺・尼寺との関係で、両寺の南縁の東西延長部を、一つの大きな地割りを想定したことによる。この国分二寺の地域は1辺2町とする216m規模と考えられることからであり、前刊第4分冊では、二寺の南縁東西延長部分までとしたにより、上述のとおりこの延長線より108mを今回の一つの区切りとした。

だが、前述の溝状遺構でも概述したが、A6・B5溝状遺構が、国分二寺の中軸に直交する状態で配され、この108mの区切りとは異なり、単純にA区とB区の区界周辺にこの両溝状遺構が検出されている。この両溝状遺構の支行方向からも、この両溝が国分二寺の地割りと密接な関係を有していたことが考えられる。

一方、南東方向には国府が近接しており、この国府との係わりも当然のことながらあったと考えられる。この国府の中軸は現在真北を指すと考えられており、この方向性にほぼ一致するのがA5溝である。このA5溝は、調査区内では、上述の国分二寺南縁の東西延長から約108mが計測される。然、国府と国分二寺の中軸線には約4度（3度50分）の偏差があり、A5溝東西延長と南縁との間隔は計測地点により異なることは必然である。つまり、調査区内で計測される108mは偶然的な数値とも考えられる。だが一方では、国分二寺の占地が何如にして行なれたが3明である現在、両者の地割り位置関係と配置関係を探る具体的遺構としては唯一の存在であることは事実でもあり、この108mの数値は強ち軽視することの出来ない存在と考える。

上述した様に、今次の報告区は、国分二寺と国府の両者に係ることが想起され、A6溝以内と以北では、元来別な性格の地域でありそこに構築された住居も、8世紀中頃以降あまり国分寺の創建以降性格が異なる集団の住居であったこととも類推される。

そして、このことを裏付けるかの如く、D区では9世紀中頃の住居跡が検出出来なかったことと、C区では8世紀中頃から9世紀前半迄の間はD区同様に住居跡が検出出来なかったことが、何らかのことを示唆していると考えられる。

今次報告区では、6世紀後半から11世紀前半に至る間連線と住居跡が検出されている。又、C区と対比すれば、8世紀前半代の住居の検出も多く、7世紀後半から9世紀前半まで大型住居の構築が近接して継続されたこと等C区では認められなかった実態も看取されている。

これらの様に、今次の調査報告区は、国府・国分二寺の両者との係わりが想定される地区である。又、次刊第6分冊は、更に以南の部分が報告される予定である。この調査区は、A・Z区であり、国府にはより至近な位置関係にある。この点で、今次の報告区よりより具体的な国府との係わりが明らかになると考えている。

尚、今次の整理事業を進める中で、A区第24号住居跡とA区203・206号住居跡の半面図等が見当らなかつた。然、昭和59年4月の整理着手時点では、全体図作製の為に使用していることから、他区の図面と共に混入していると考えられる。この3軒の住居跡に就いては第8分冊中で掲載したい。又、遺物に就いては、今次の報文中に念まれている。



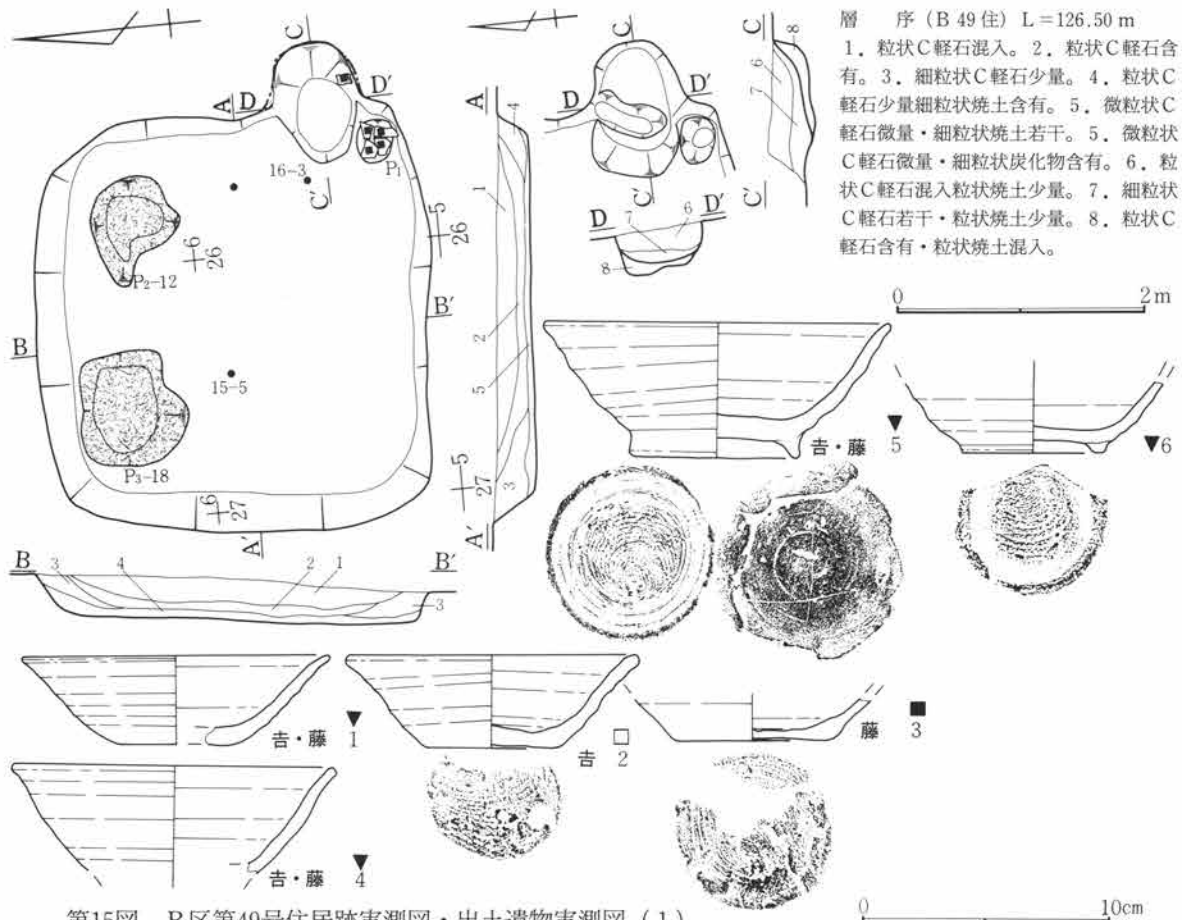
第14図 検出住居跡全体図





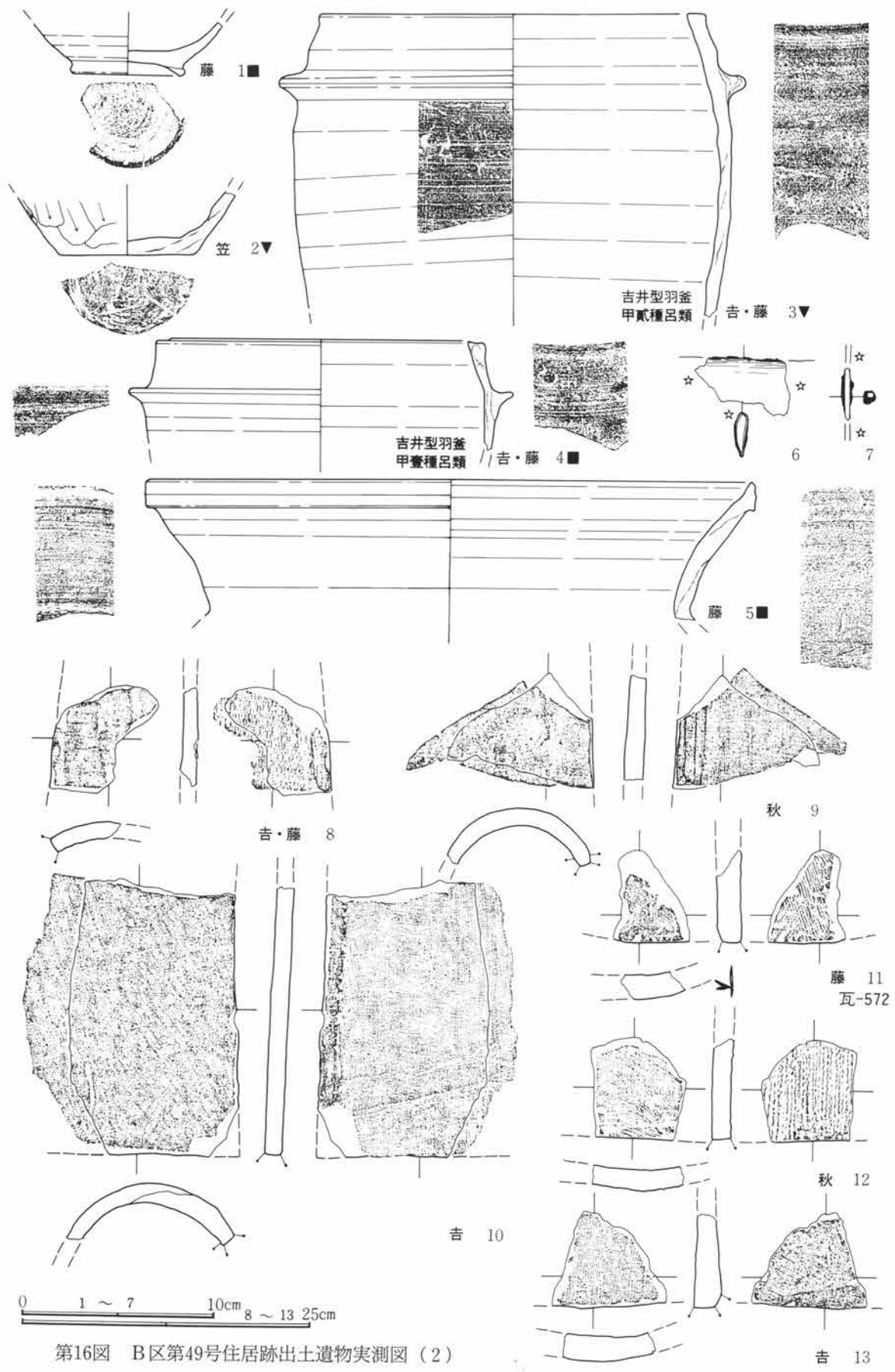
遺構名称	B区第49号住居跡		位置	25~27-B-5・6グリッド内。		残存深度	約33cm
平面形態	矩形。	規模	3.30m×3.18m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-96度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	平坦。部分的に造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・30×35cm・深度-5cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	P <sub>2</sub> ・P <sub>3</sub> の土坑状の掘り方が検出されている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から25cm。				主軸方位	北-0度-南
改築	不明		形状	舌状を呈し、煙道は細く長いと考えられる。			
規模	全長 97cm・屋外長 48cm・屋内長 49cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 65cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。右壁の一部は瓦により補強されている。						
			袖	未検出。最終使用時には存在しなかった可能性大。			
煙道	未検出。斜位に立ち上がったと考えられる。		掘り方	奥壁部をほぼ垂直に立ち上げている。			
遺物出土状態	全体に少ない。傍竈坑内で瓦4点が検出されている。						

所見 当住居は南東隅部に小規模な傍竈坑を具備し、カマドはこの傍竈坑に近接している。カマドの袖は認められなかった。又、構築基準辺は西壁に求めたが、南壁の可能性も考慮される。この南壁の場合、その指向方位はほぼ東となる。住居の形状はC区の第VII段階に対比され、出土遺物はD区の口段階に対比される。この両者の点から、当住居は10世紀前半頃の廃棄と考えられる。

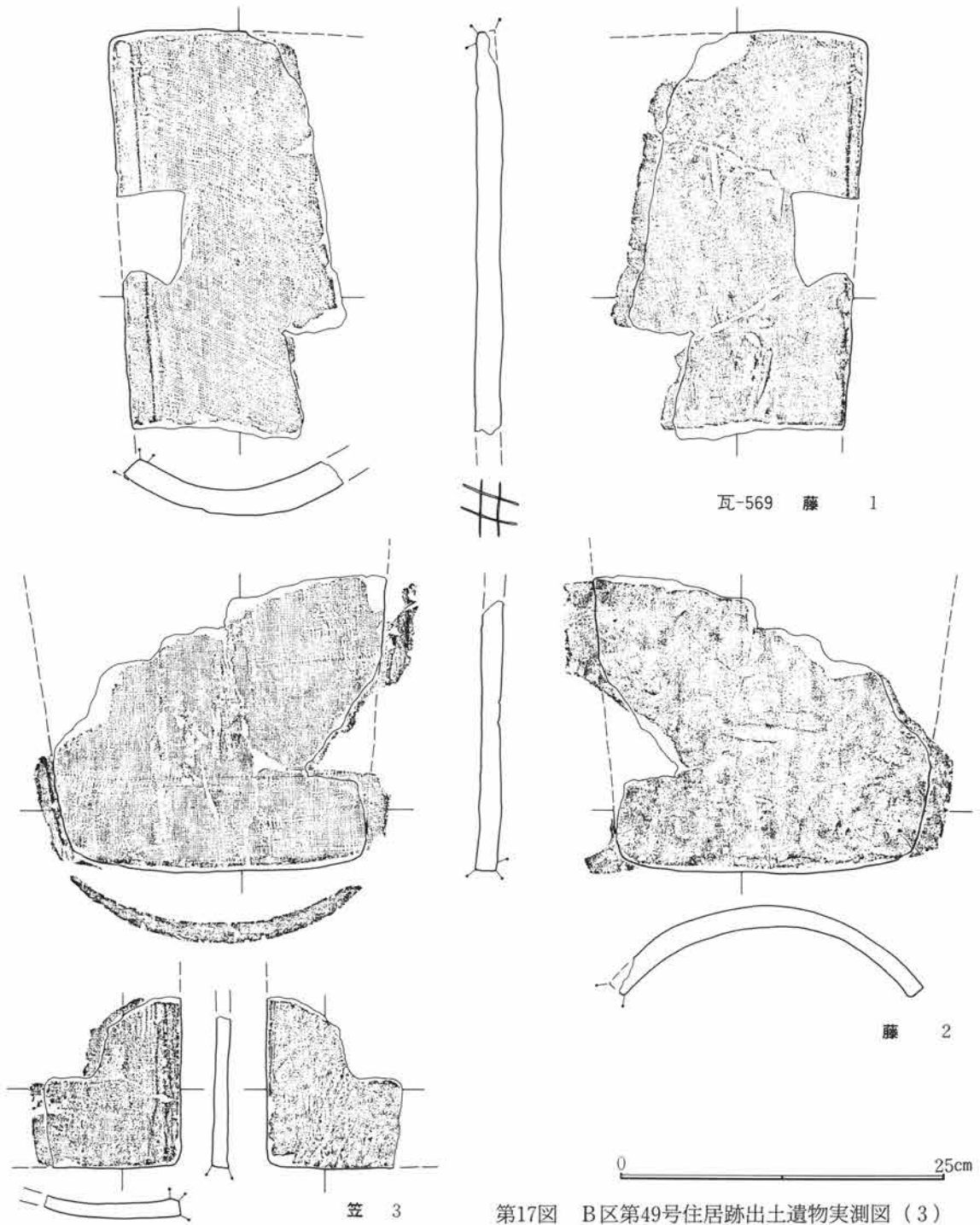


第15図 B区第49号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第16図 B区第49号住居跡出土遺物実測図(2)

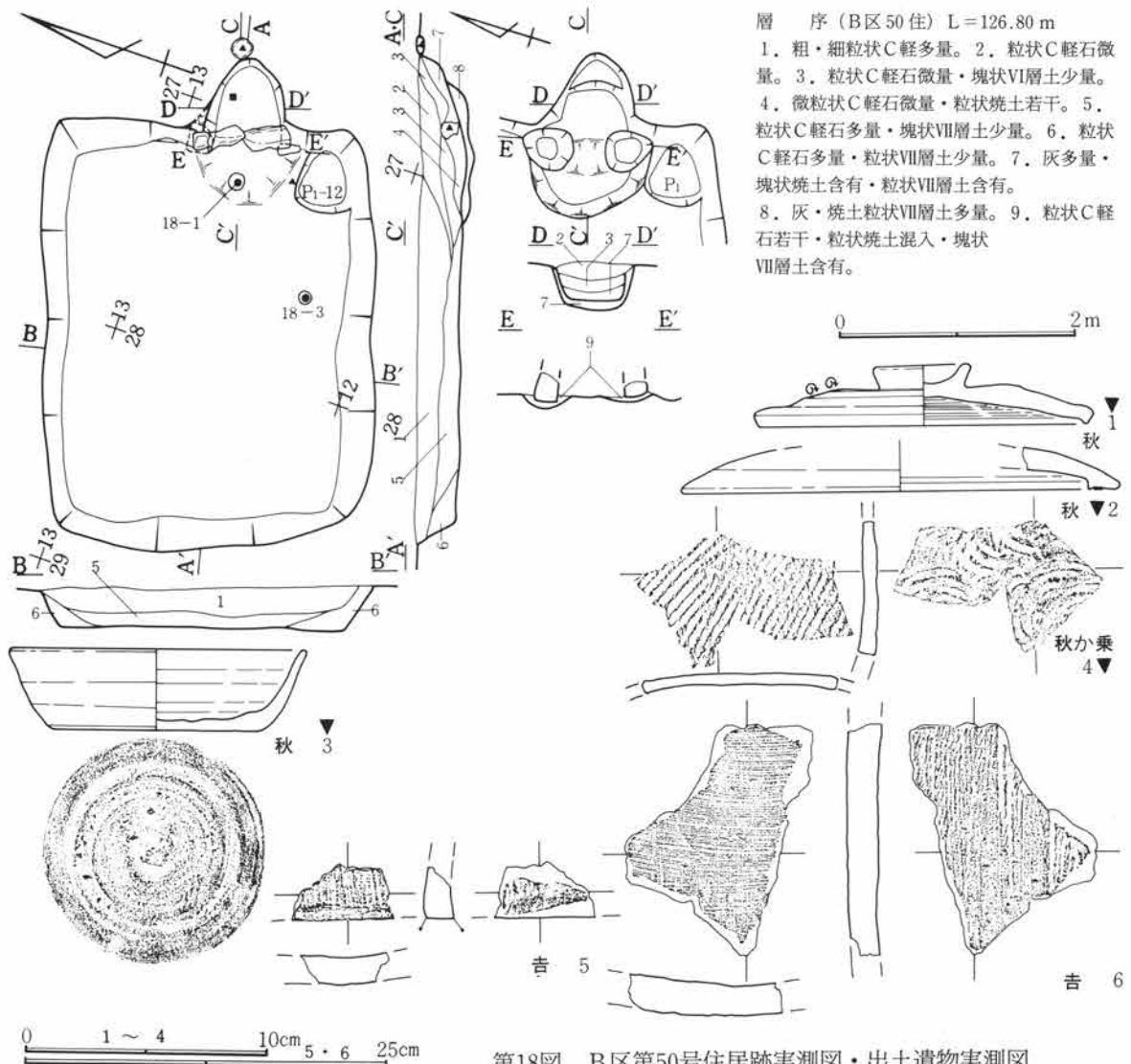


第17図 B区第49号住居跡出土遺物実測図(3)

所見 (B50住) 当住居跡は縦長形状を呈する住居跡で南東隅部に傍竈坑を具備している。カマドは、両袖に地山砂岩質土の切り出し材を据え、更にその上部に同質の切り出し材を架けていたものと考えられる。燃焼部には補強材等が認められないが、幅広の構造になっている。掘り方は、両袖材の据え方が浅い窪み状で検出されている。出土遺物は全体的に少なく、土器類には、底部回転宛起こしの須恵器坏と、器高が低く環状のやや高い摘を有する須恵器坏蓋が完形で床面直上から出土している。この両者は、C区で対比しても該当する土器段階が設定されていない。一方、住居形状では、C区第VI段階に対されるとも思われるが、カマド構造にやや疑問がある。この点から、当住居はC区の空白期に該当すると考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	B区第50号住居跡		位置	11~13-B-26~28グリッド内。		残存深度	約36cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.6m×2.83m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-71度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・56×50cm・深度-12cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から66cm。				主軸方位	北-86度-南
改築	不明。掘り方内で焼土粒子を検出。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長120cm・屋外長 58cm・屋内長 52cm・袖部幅 90cm・燃烧部幅 64cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	地山砂岩質土を截り出した心材を用いる。					
煙道	未検出。		掘り方	袖材の据え方が検出されている。			
遺物出土状態	カマド焚口部・南壁中央下の床面直上で須恵器2点が検出されている。						

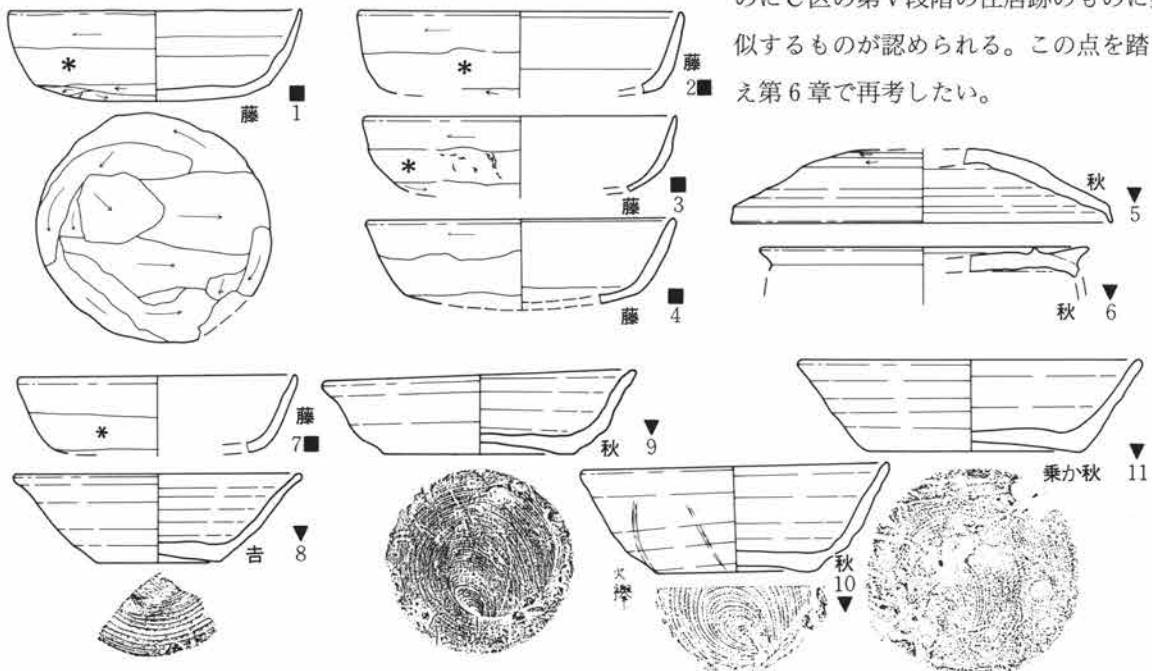


遺構名称	B区第51号住居跡		位置	15~18-B-28~31グリッド内。		残存深度	約62cm
平面形態	横長方形。	規模	6.0m×4.35m	構築基準辺	東壁？	主軸方位	北-92度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	造床はカマド周辺で顕著で、西・北壁下で認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・不整形形状。115×85cm・深度-36cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	カマド前面に不整形形状の掘り込みが顕著である。P <sub>4</sub> ・P <sub>5</sub> は浅い土坑状の掘り込みである。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から220cm。移設している。			主軸方位	北-93度-南	
改築	無。南東隅部寄りのカマドは改築がある。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長165cm・屋外長 63cm・屋内長102cm・袖部幅 96cm・燃烧部幅 60cm・煙道部幅 29cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	調査の不手際により不分明である。					
煙道	大半を失っている。			掘り方	焚口部側の掘り込みがやや深い。		
遺物出土状態	南東隅部周辺で床面直上乃至床面直上層での出土が多い。						

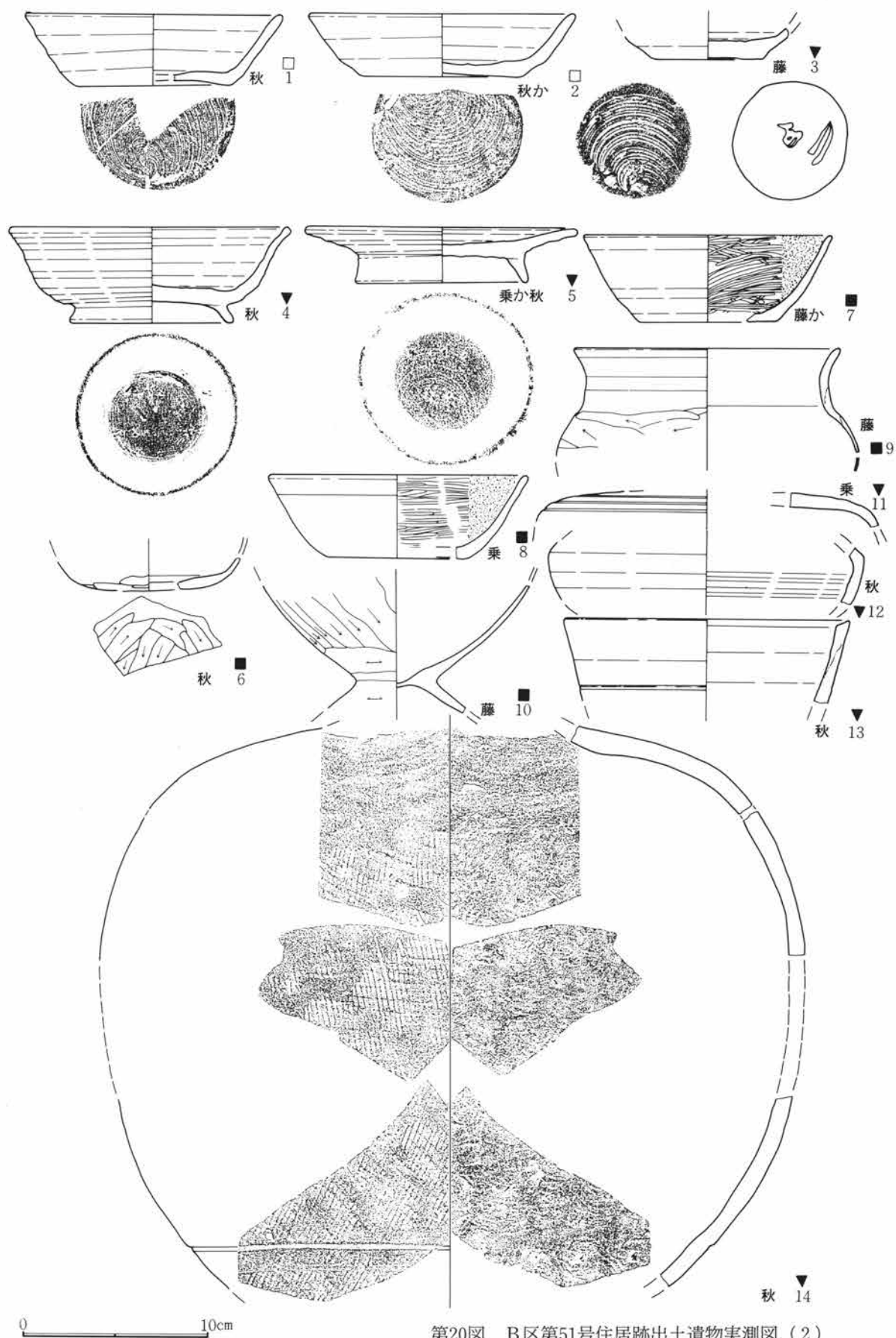
所見 当住居跡は調査時に2軒が重複するものと想定して調査着手した。しかし、調査途中で土層断面を詳細に観察した結果、両者の切り合い関係は認められなかった。この為、調査時点で1軒の住居と考えたが、一応平面精査時の所見（恐らく覆土上面の覆土差をもって二軒の切り合いと考えたものと思われる）を考慮し、調査時点ではB52住の名称は抹消しなかった。

住居跡は、南東隅部に傍竈坑を具備する。住居の規模は大きくみなしの面積で20.7㎡を占有する。カマドは、ニヶ所で接する状態で検出され、右カマドより左カマドが新しく右から左へ移築されたものと判断される。この両者のカマドは東壁のほぼ中央に構築され、右カマドは中央より若干南東隅部に寄った位置に構築されている。この形状はC区・D区の住居形状に認められるものではない。又、出土遺物の様相は一部のもの

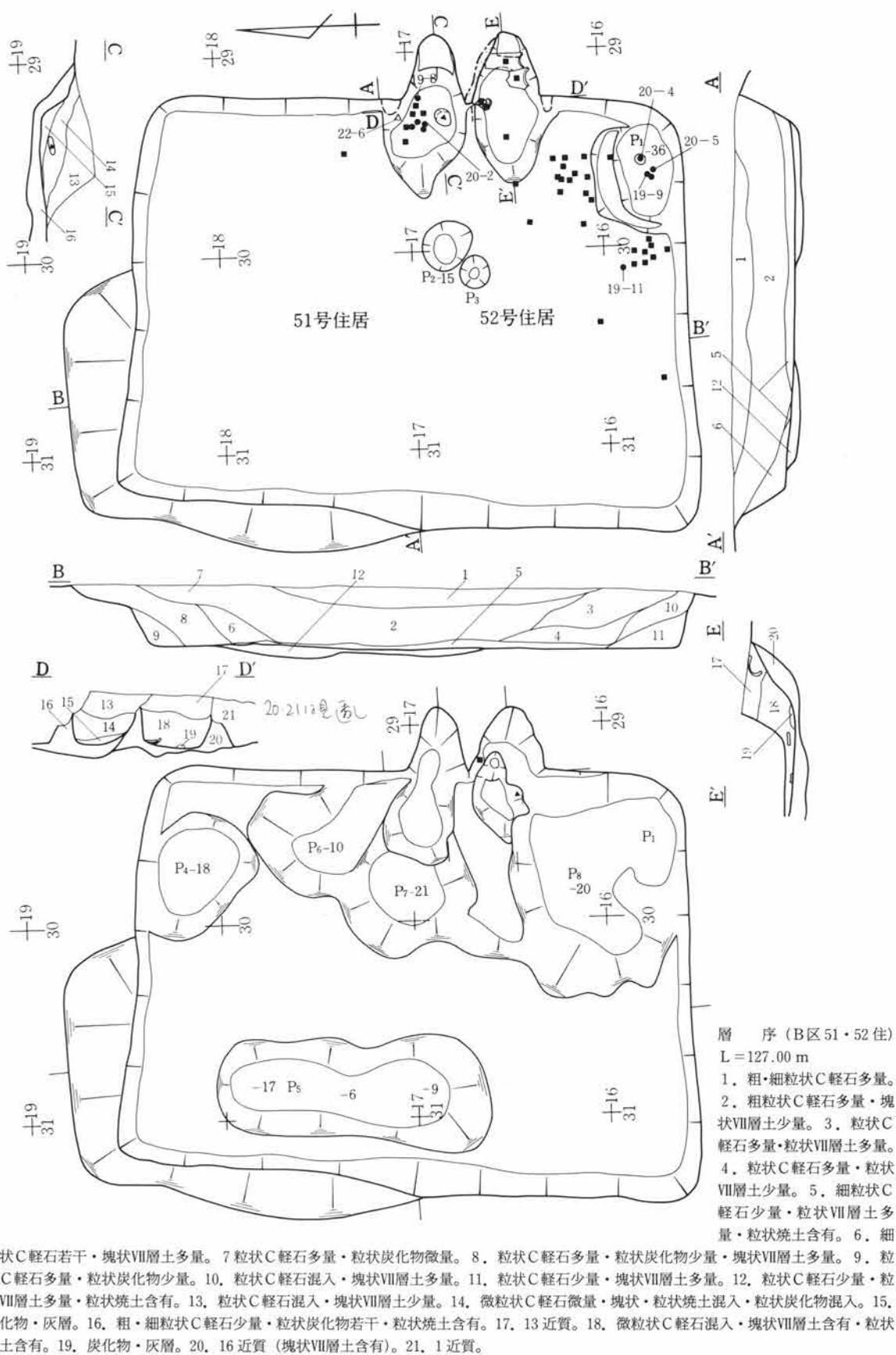
にC区の第V段階の住居跡のものに類似するものが認められる。この点を踏まえ第6章で再考したい。



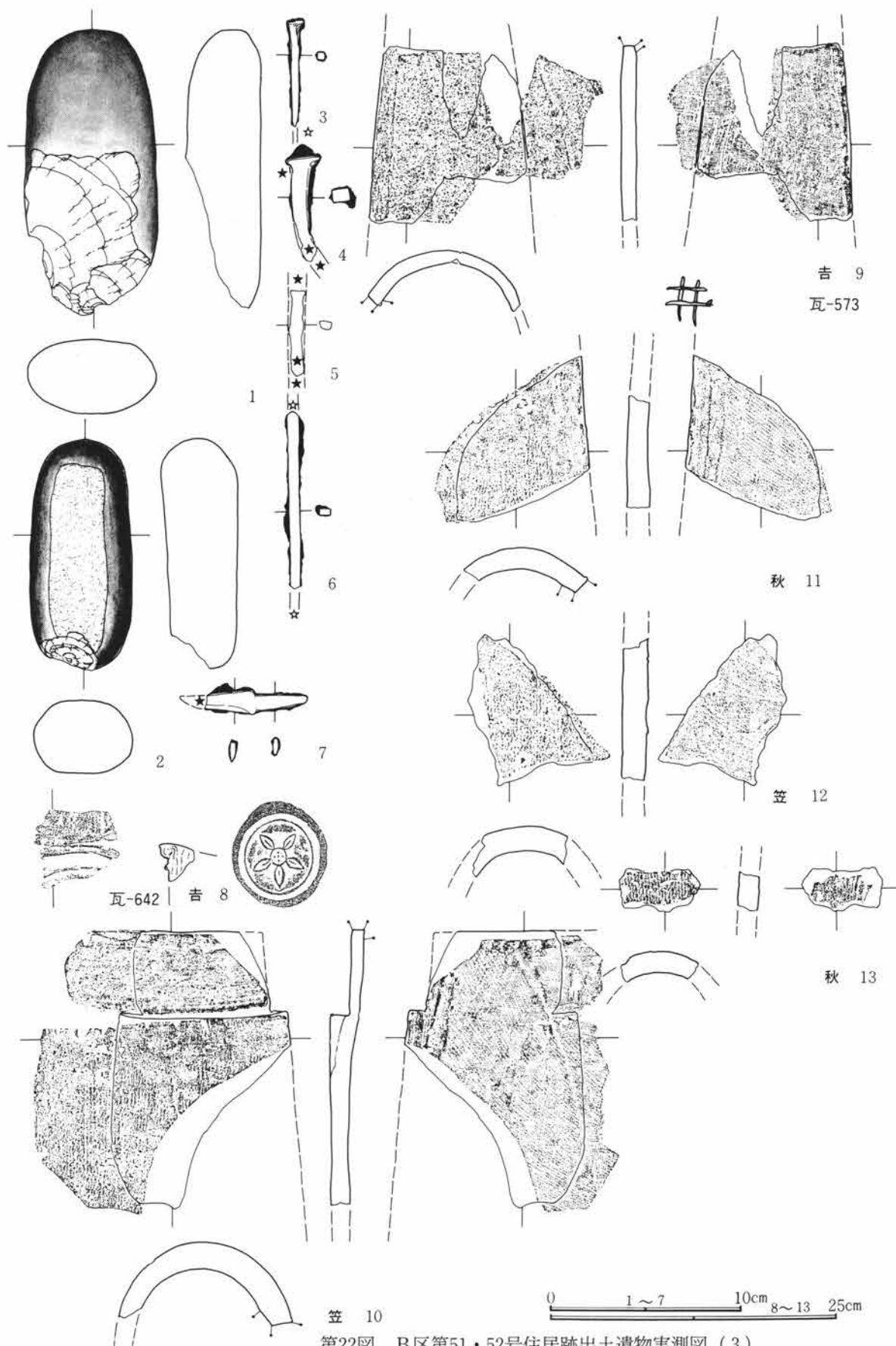
第19図 B区第51・52号住居跡出土遺物実測図（1）



第20図 B区第51号住居跡出土遺物実測図(2)

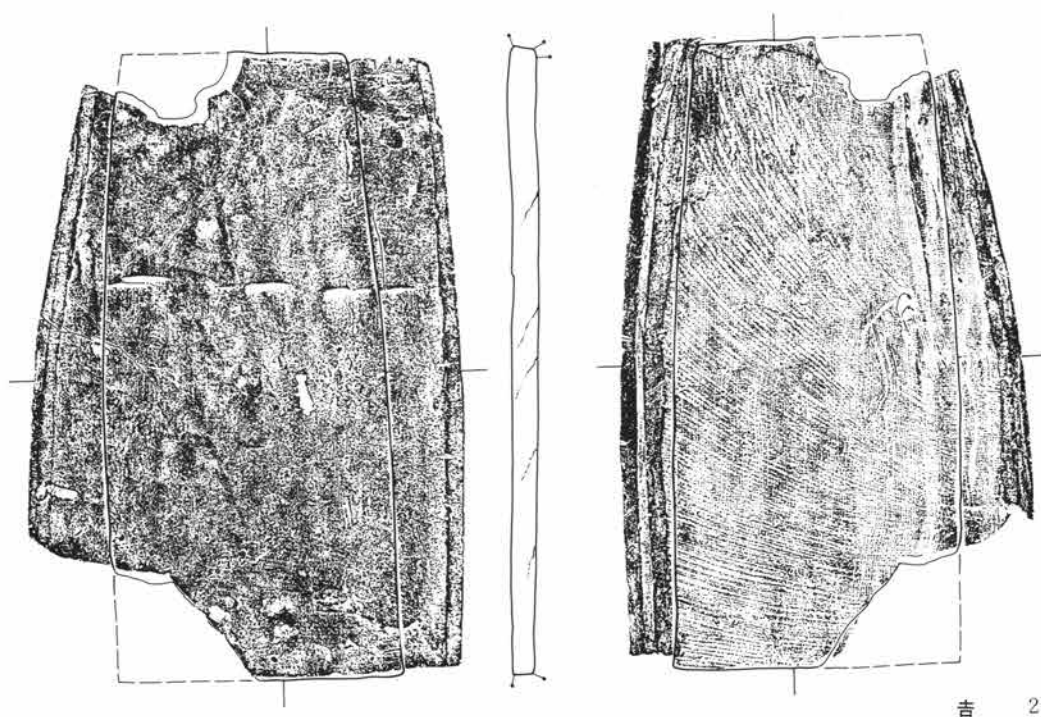
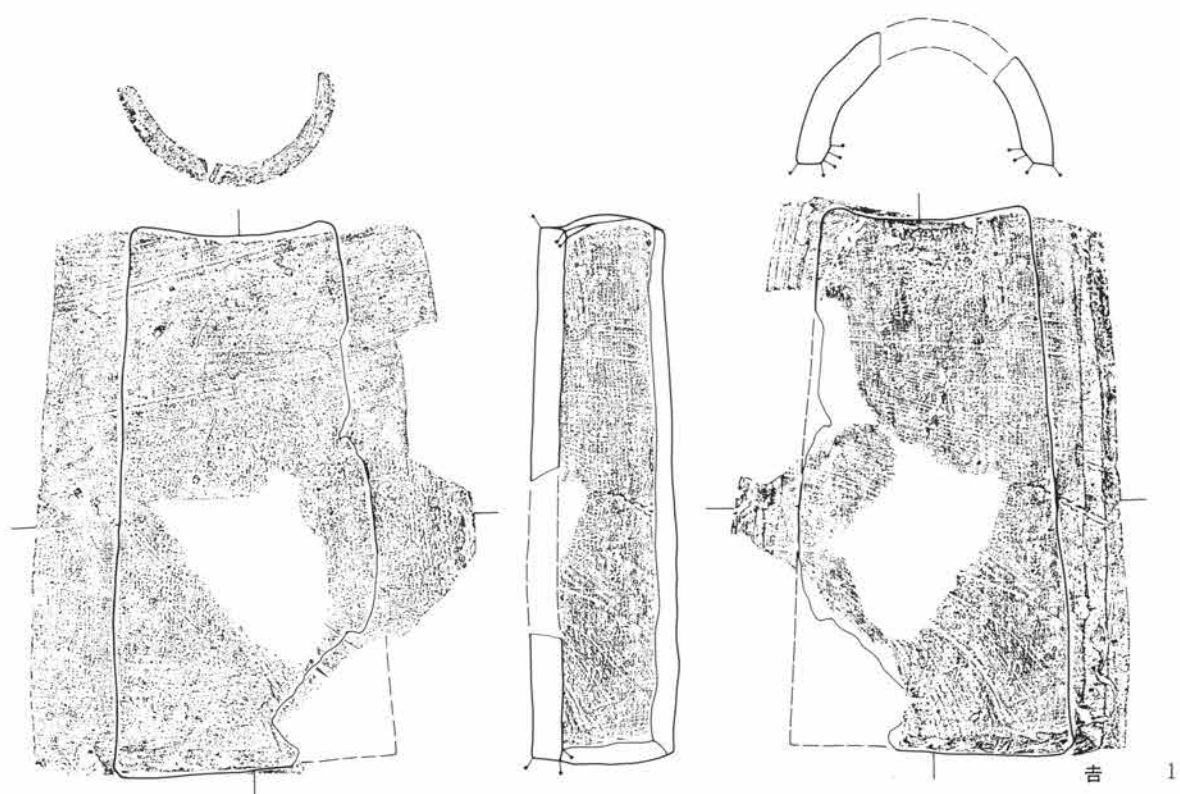


第21図 B区第51・52号住居跡実測図



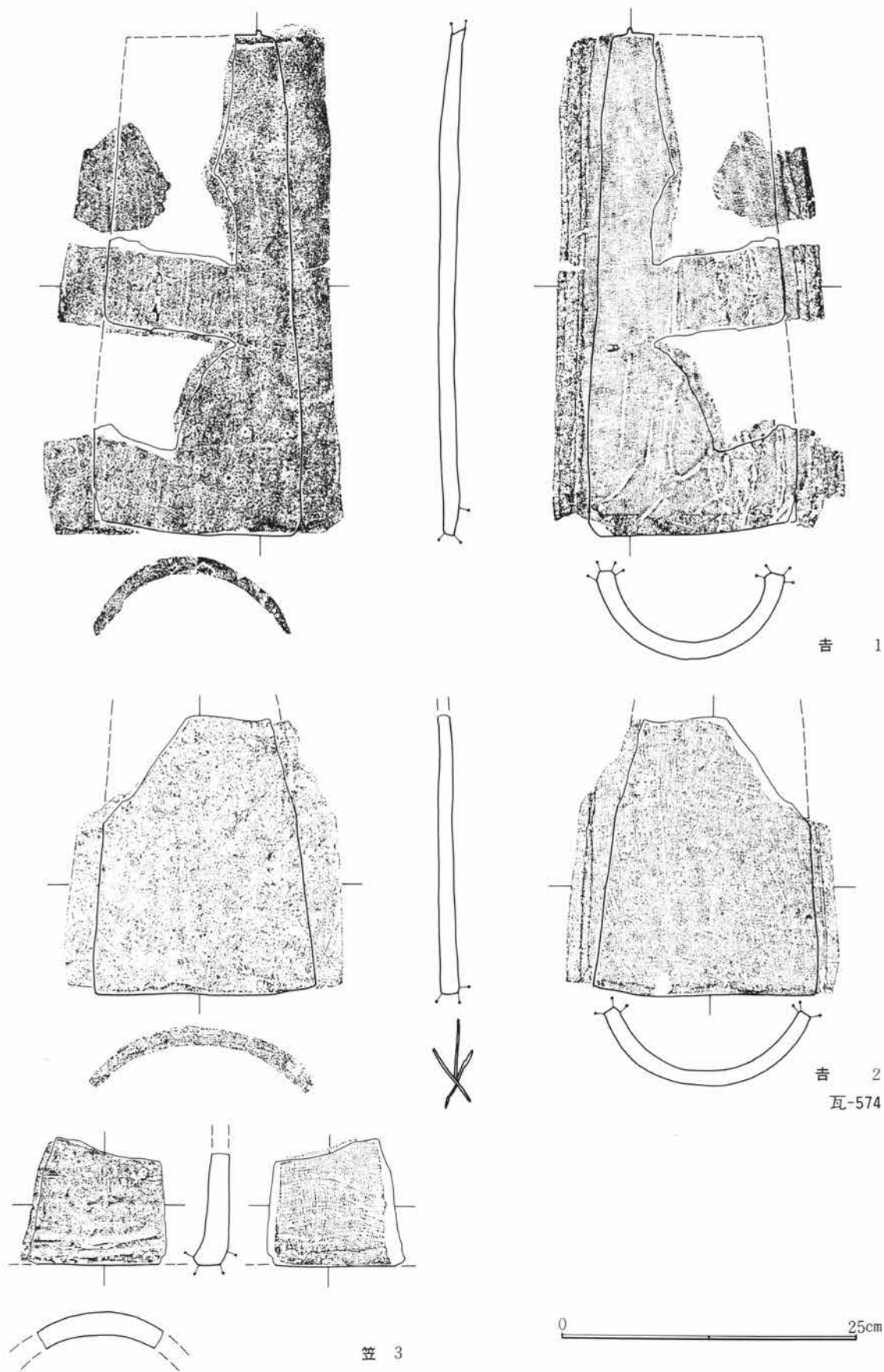
第22図 B区第51・52号住居跡出土遺物実測図(3)





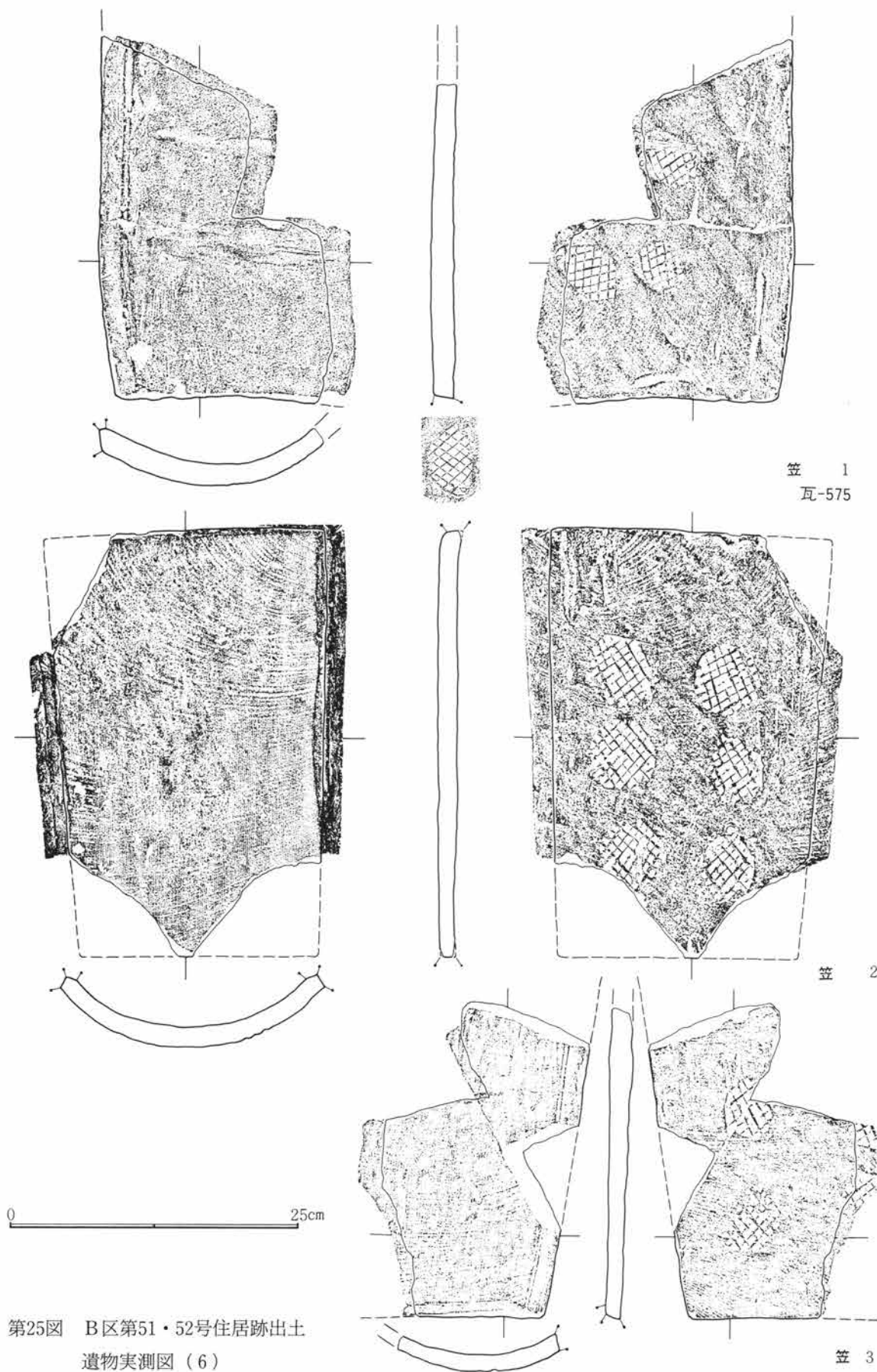
0 25cm

第23図 B区第51・52号住居跡出土遺物実測図(4)



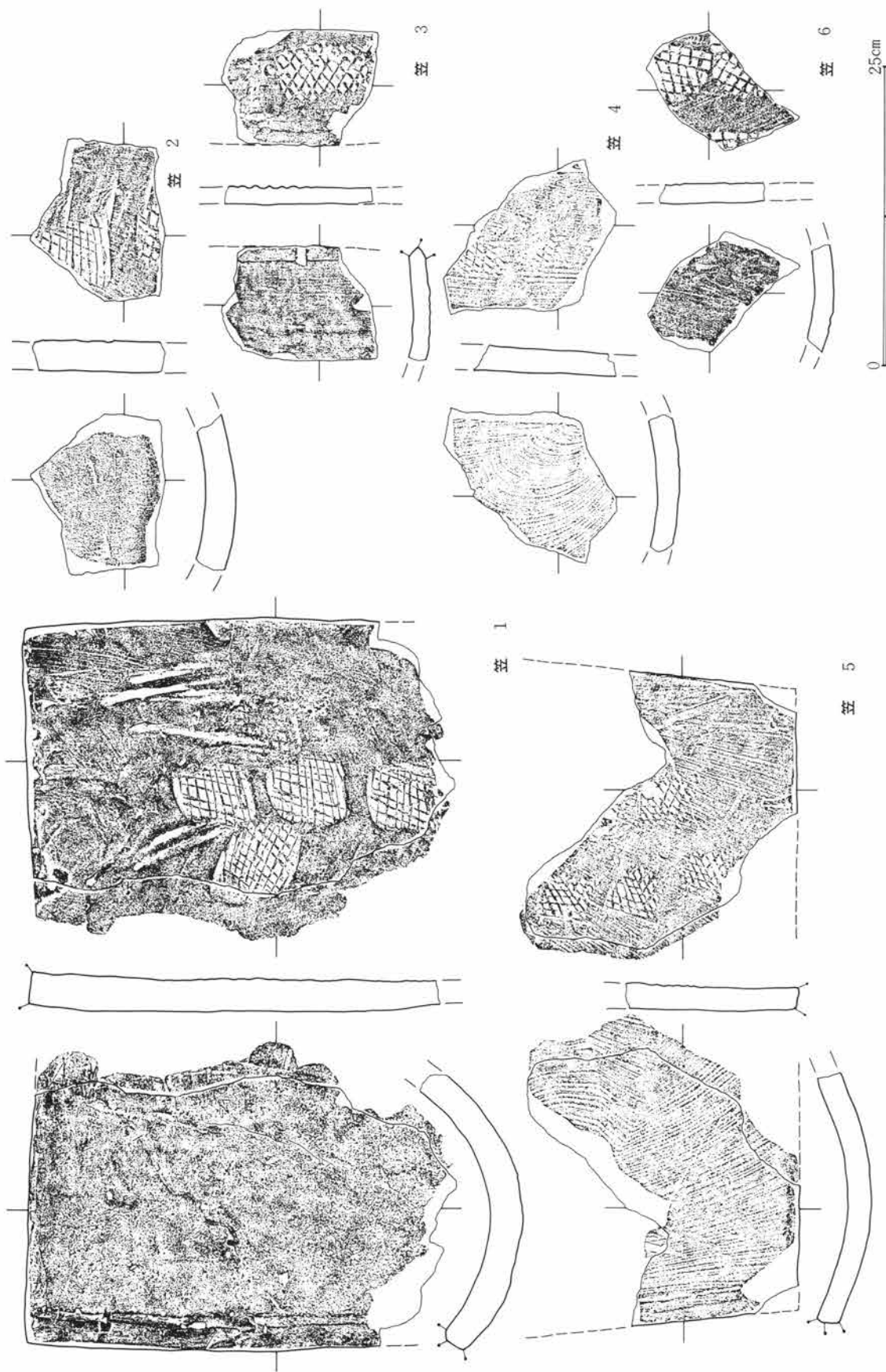
笠 3

第24図 B区第51・52号住居跡出土遺物実測図(5)

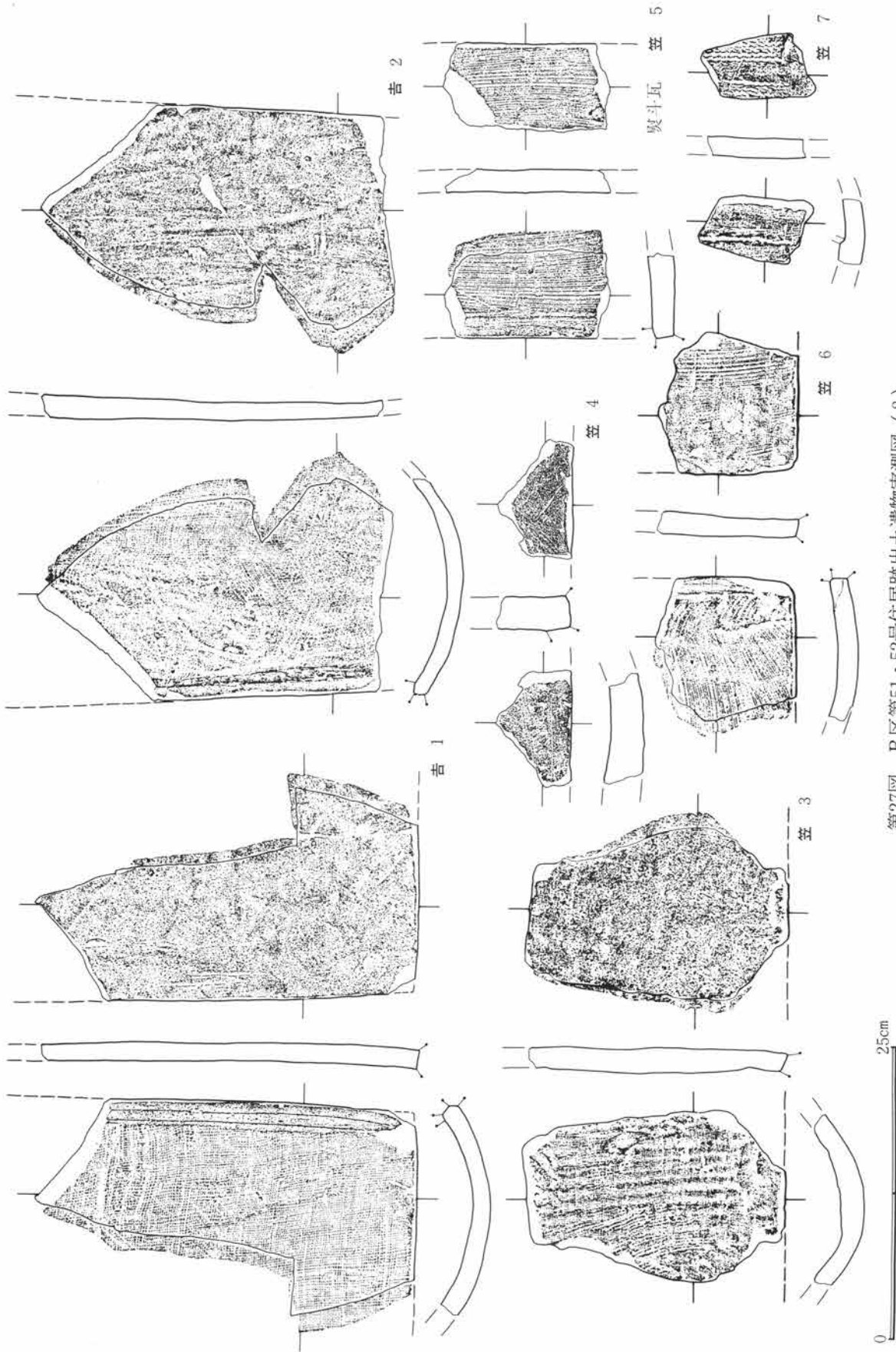


第25図 B区第51・52号住居跡出土  
遺物実測図(6)

笠 3



第26図 B区第51・52号住居跡出土遺物美測図(7)

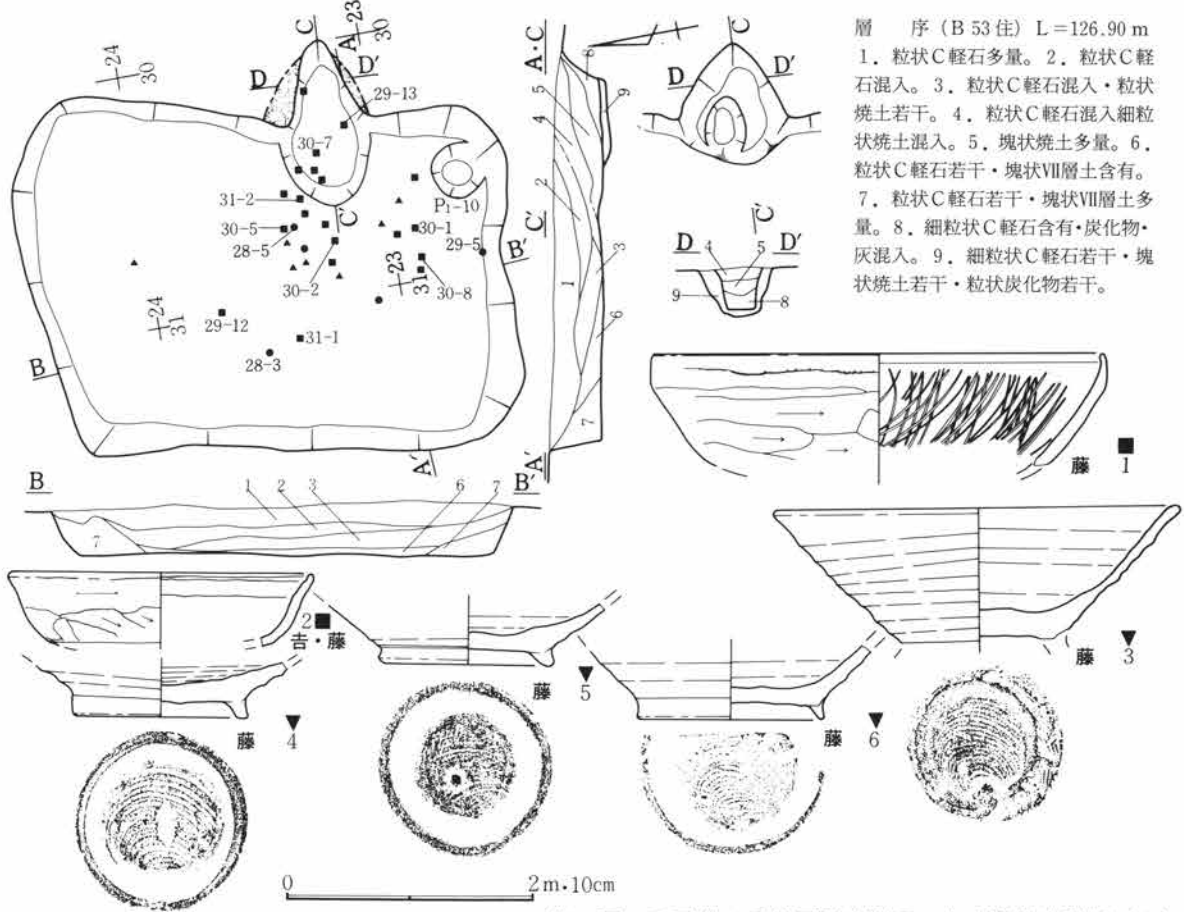


第27図 B区第51・52号住居跡出土遺物実測図(8)

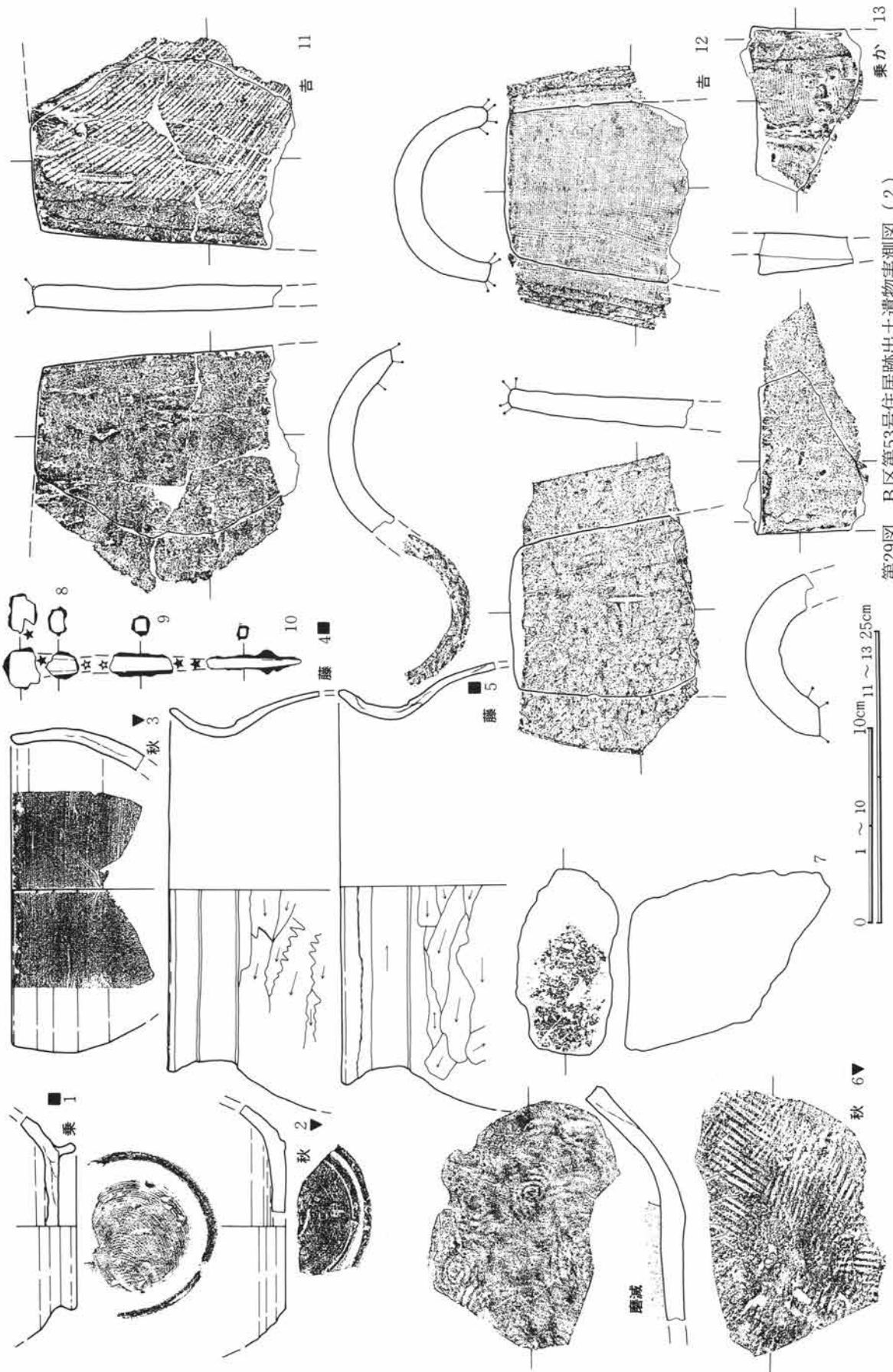
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	B区第53号住居跡		位置	22~24-B-30・31グリッド内。		残存深度	約36cm
平面形態	横長方形。	規模	2.84m×4.23m	構築基準辺	西壁？	主軸方位	北-112度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦である。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形・径42・深度-10cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。カマドのみに認められている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から110cm。				主軸方位	北-96度-南
改築	有。掘り方内で焼土・炭化物が検出。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長130cm・屋外長 65cm・屋内長 65cm・袖部幅 90cm・燃烧部幅 50cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖のみが瘤状に認められた。右袖は未検出。					
煙道	立ち上がり部が残存している。		掘り方	全体に三角形を呈している。			
遺物出土状態							

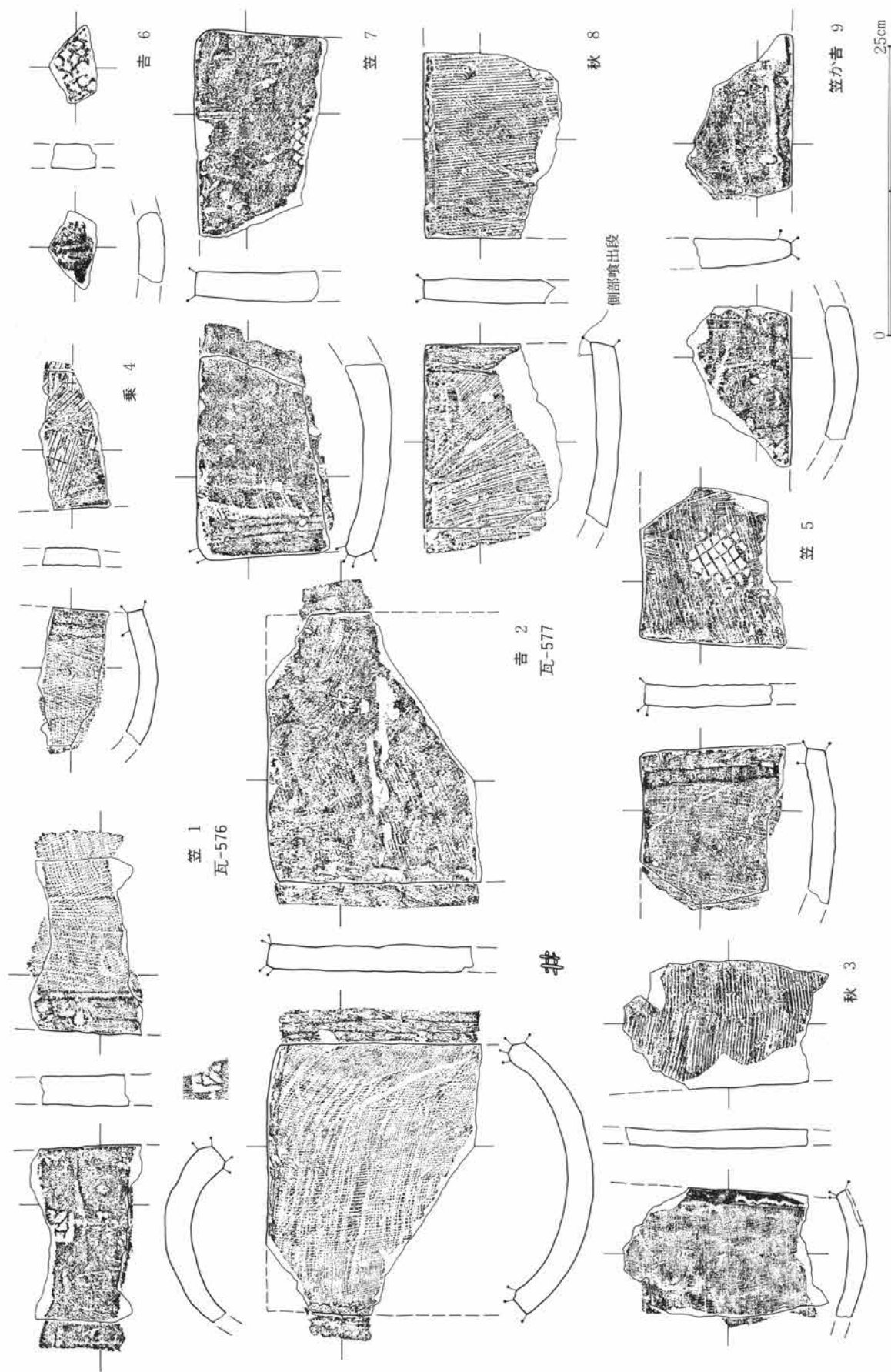
所見 当住居はB58住を切り構築している。住居跡は、南東隅部に傍竈坑を具備する。カマドは燃烧部がやや狭く東壁中よりやや南東隅部寄りの部分に付設している。南・西壁はほぼ直交する状態であるが北・東壁は歪んだ状態である。住居形状は、C区第VII段階に対比され、土器はD区口段階に対比される。この点から当住居跡は10世紀前半頃の廃棄と考えられる。



第28図 B区第53号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

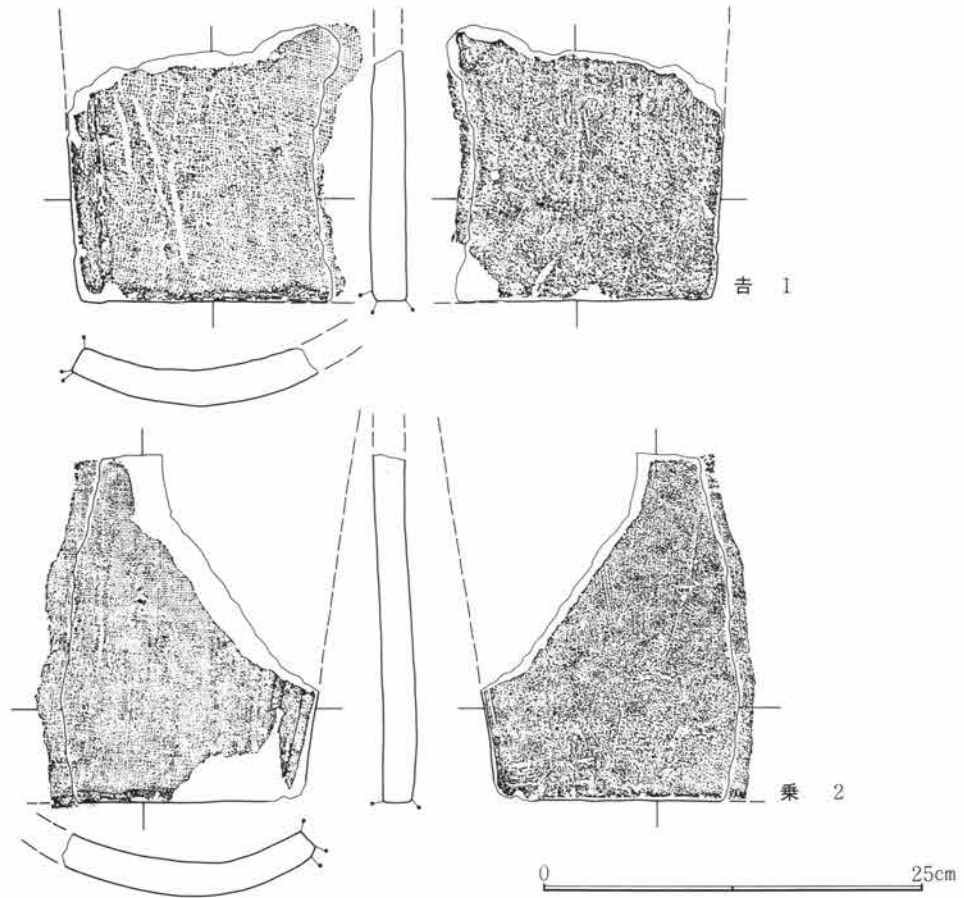


第29図 B区第53号住居跡出土遺物実測図(2)



第30図 B区第53号住居跡出土遺物実測図(3)

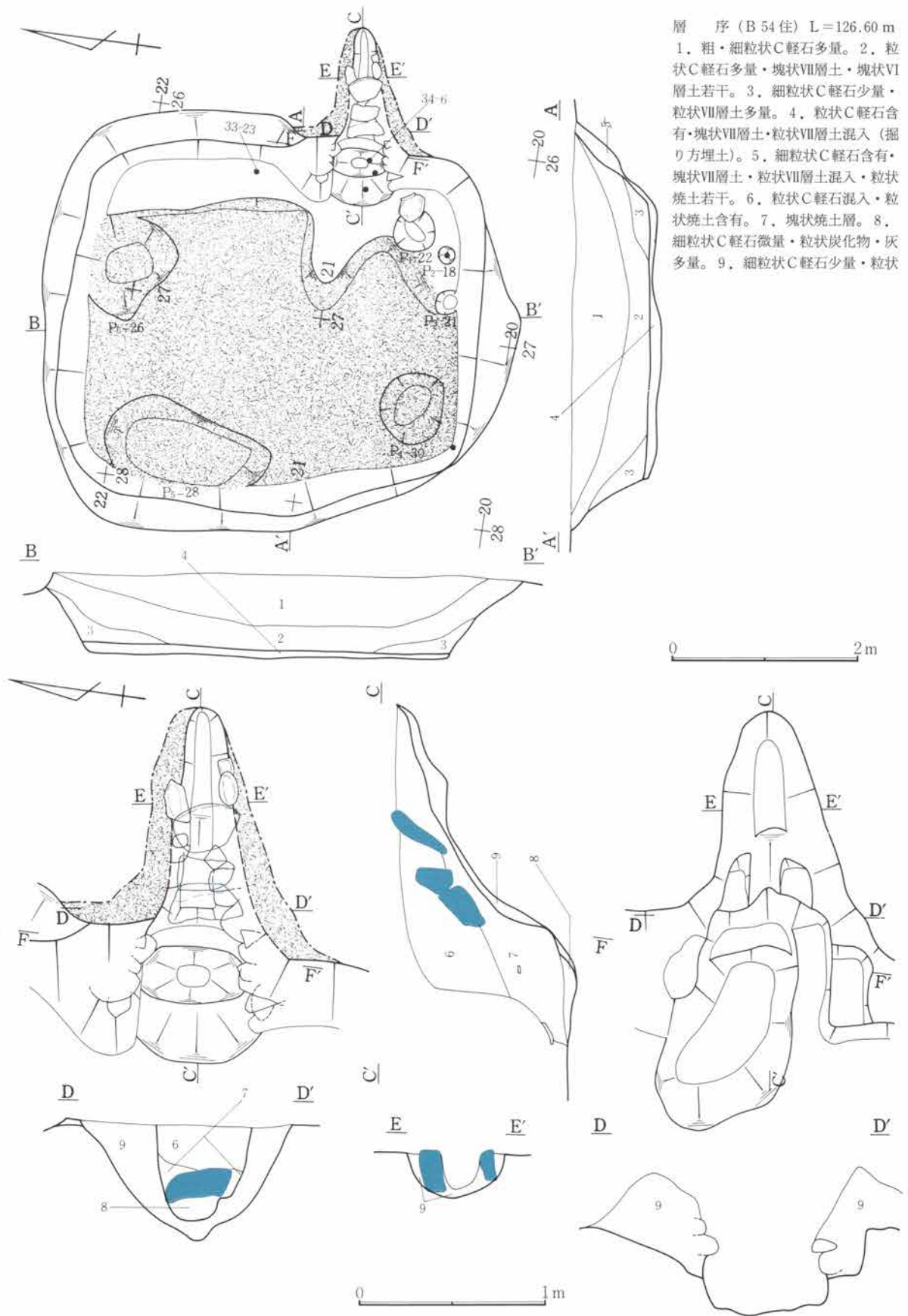




第31図 B区第53号住居跡出土遺物実測図(4)

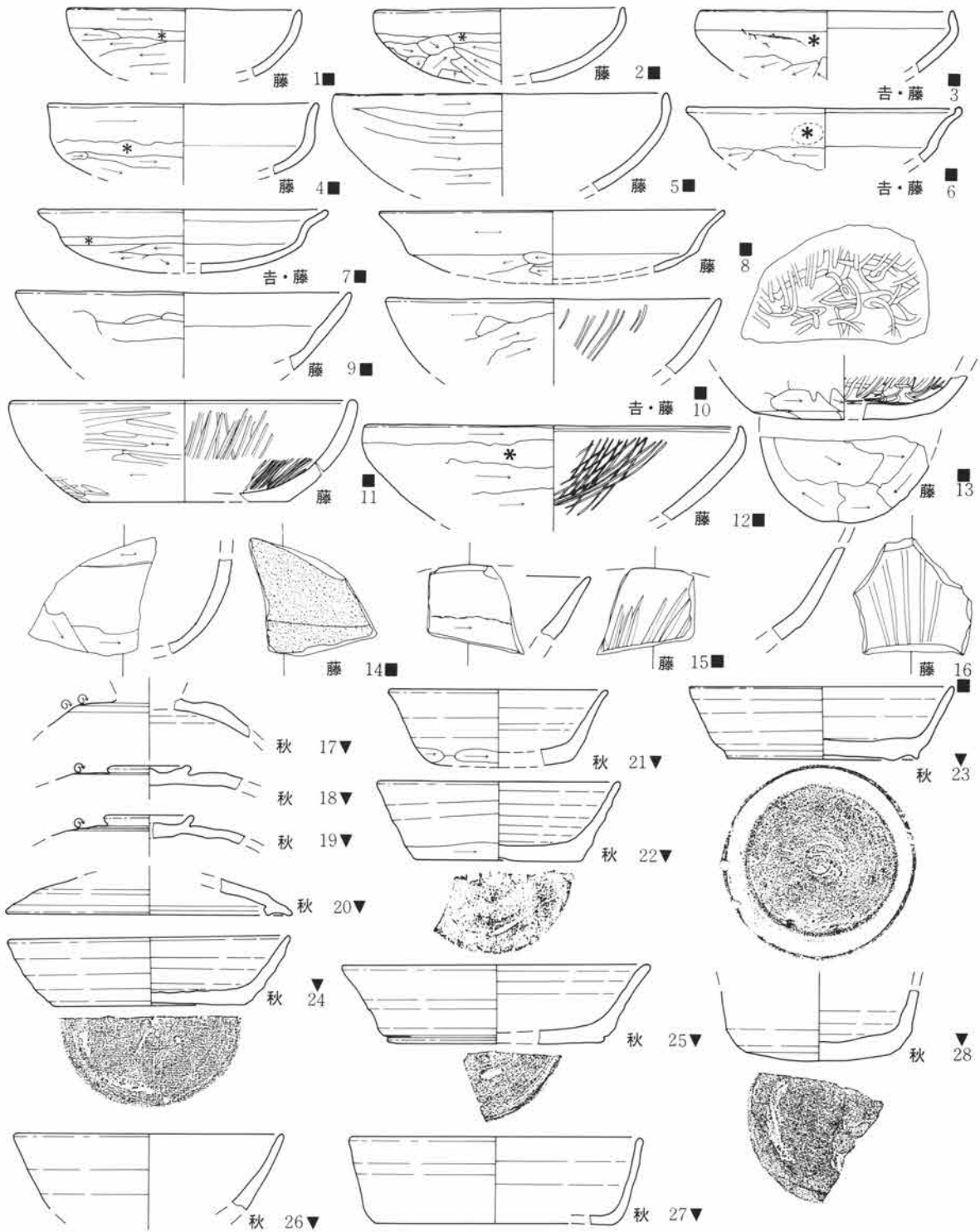
遺構名称	B区第54号住居跡		位置	20~22-B-25~28グリッド内。		残存深度	約80cm
平面形態	矩形。	規模	4.6m×5.8m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-82度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	全体的に造床する。平坦で北壁下で地山土を使用。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> (P <sub>4</sub> ?) 不整内形状。径54cm・深度-22cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北壁下以外で顕著で平坦である。P <sub>4</sub> は掘り方に併なうか不明。P <sub>5</sub> ・P <sub>6</sub> は土坑状の掘り込み。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。			主軸方位	北-82度-南	
改築	不明			形状	細長い舌状を呈する。		
規模	全長187cm・屋外長125cm・屋内長62cm・袖部幅166cm・燃烧部幅53cm・煙道部幅22cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	地山土の削り出しに礫を積む。		
煙道	立ち上がり部は、礫を天井材に用いる。			掘り方	袖・燃烧部奥壁部に礫の据え方を検出。		
遺物出土状態	全体に遺物量が少ない。床面直上出土の遺物も若干量であった。						

所見 当住居跡は調査東端に位置し、カマドの煙道先端は調査区設定線に接している。住居は東壁・南壁が直交しているものの西壁には歪みが認められる。住居の掘り方は、東壁寄りに生活床面を掘り残こしており、他の部分は浅(平坦に掘り込まれており、更にP<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>の土坑状の掘り込みも認められた。これらの内、P<sub>4</sub>は南西隅部直下で検出され、傍竈坑(P<sub>1</sub>)は規模に小さい観があり、通有に長甕を付設する例も(P<sub>39</sub>へ)



第32図 B区第54号住居跡実測図

第3節 検出された住居跡について

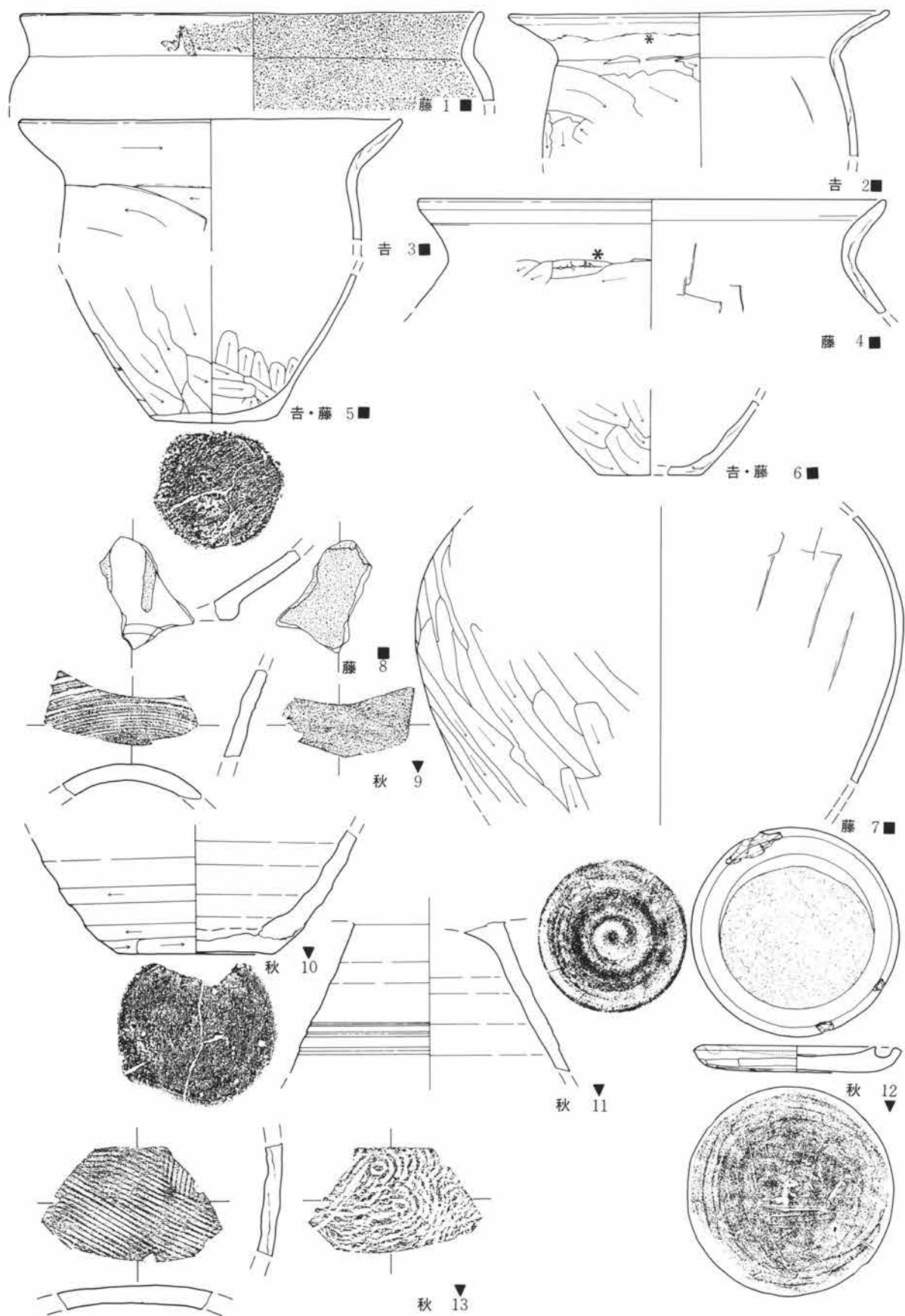


第33図 B区第54号住居跡出土遺物実測図(1)

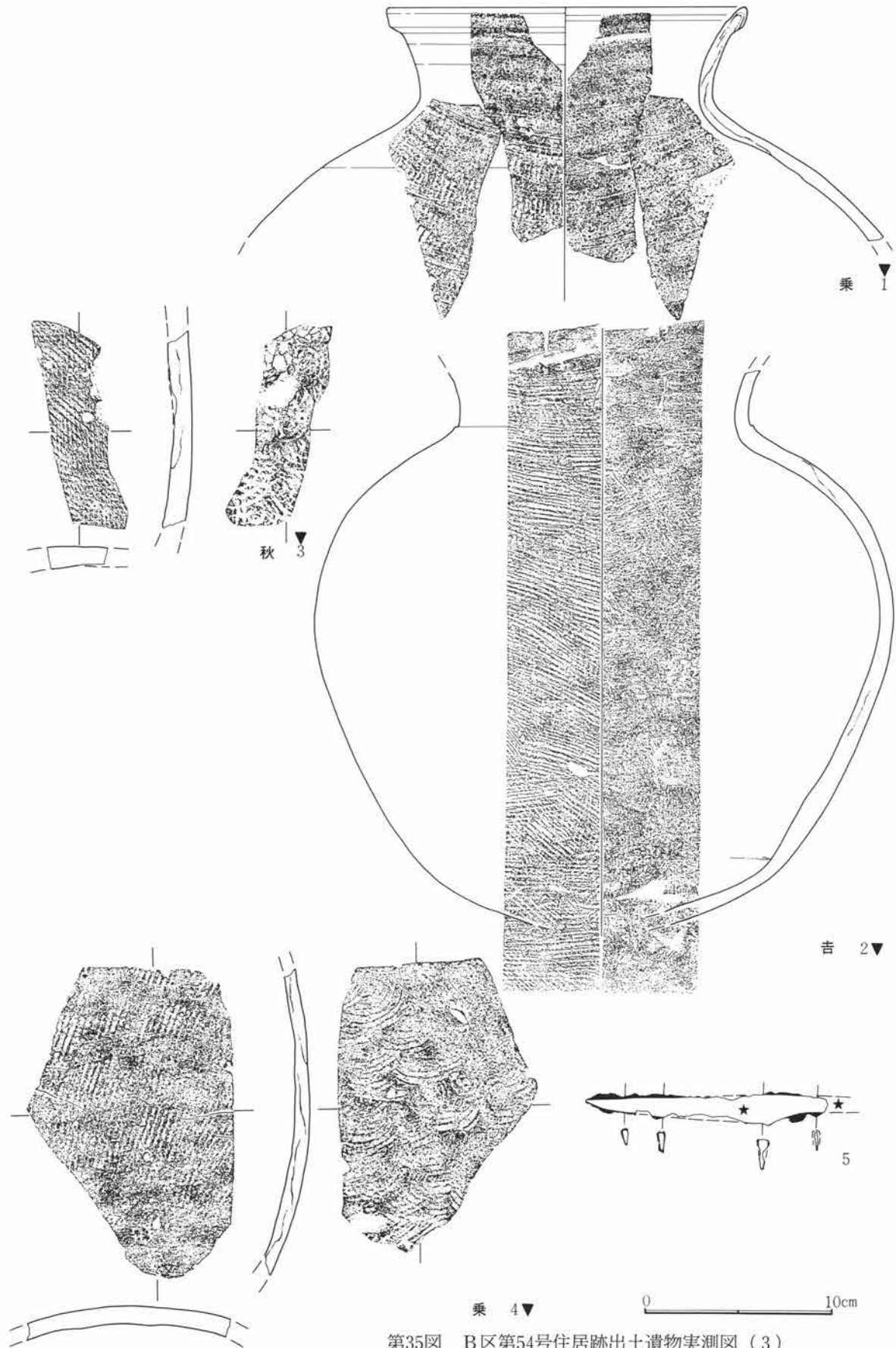
0 10cm

ある。このP4の性格付に就いては本住居跡と同時期の住居との対比が必要である。この為、この点に就いては第6章で詳述したい。カマドは、東壁中より南東隅部側に寄った位置に付設されている。構造は、燃烧部から煙道部にかけての両側壁は、河原円礫を小口積にしている。掘り方では両袖が地山Ⅶ層土を削出し、その上面に礫の据え方を施しておりこの据え方は煙道立ち上がり部でも認められる。住居の全体形状は、C区第Ⅲ段階に対比されると思われ、遺物も同様である。対照する住居が少ない為第6章で記述したい。

第4章 検出された遺構・遺物

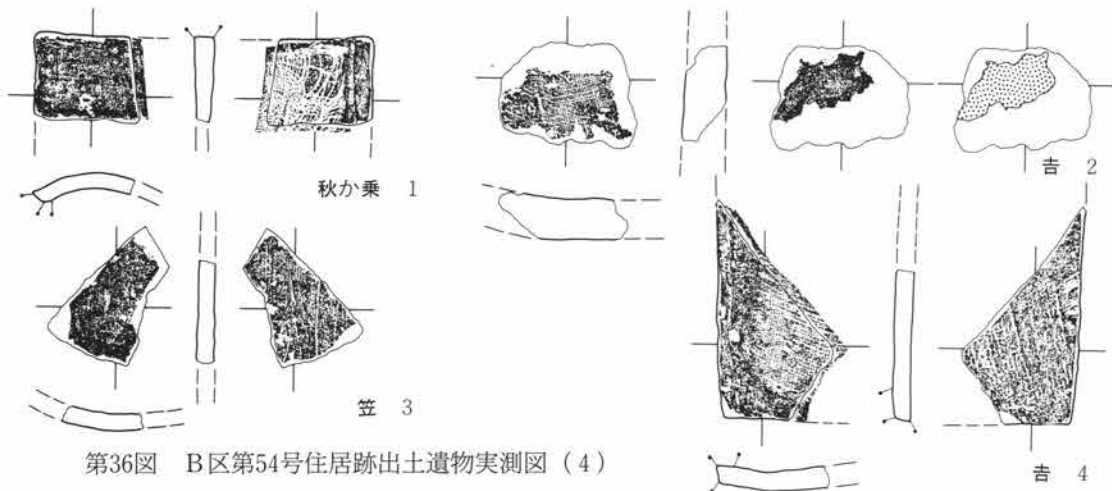


第34図 B区第54号住居跡出土遺物実測図(2)



第35図 B区第54号住居跡出土遺物実測図(3)

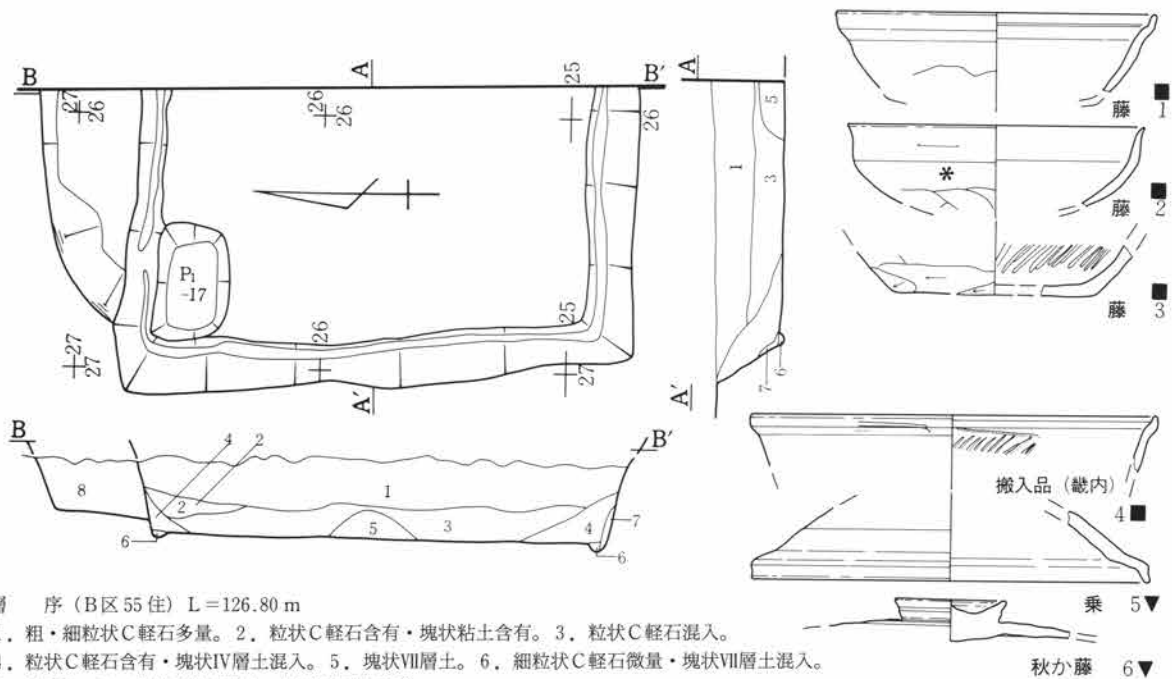
第4章 検出された遺構・遺物



第36図 B区第54号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	B区第55号住居跡		位置	25・26-B-25~27グリッド内。		残存深度	約60cm
平面形態	不詳。	規模	2.4+αm×4.23m	構築基準辺	南壁?	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し造床は認められなかった。			
壁溝	全周か。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・長方形。93×60cm・深度-17cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	未検出。						
遺物出土状態	覆土内から少量の土器類の出土が認められたが瓦は出土しなかった。						

所見 当住居は、調査東端より更に東側に延び、検出部は西半分程と考えられる。そして、カマド等の施設に不明な為詳細に就いては言及しかねる。検出部の住居跡の構造は、壁下に壁溝検出され、北西隅部に比較的整った長方形の土坑状の掘り込み(P1)が検出されている。しかし、深度17cmと浅い為貯蔵穴等の施設であるかは判断しかねる。出土遺物では、畿内産土師器(第37図-4)が出土している。

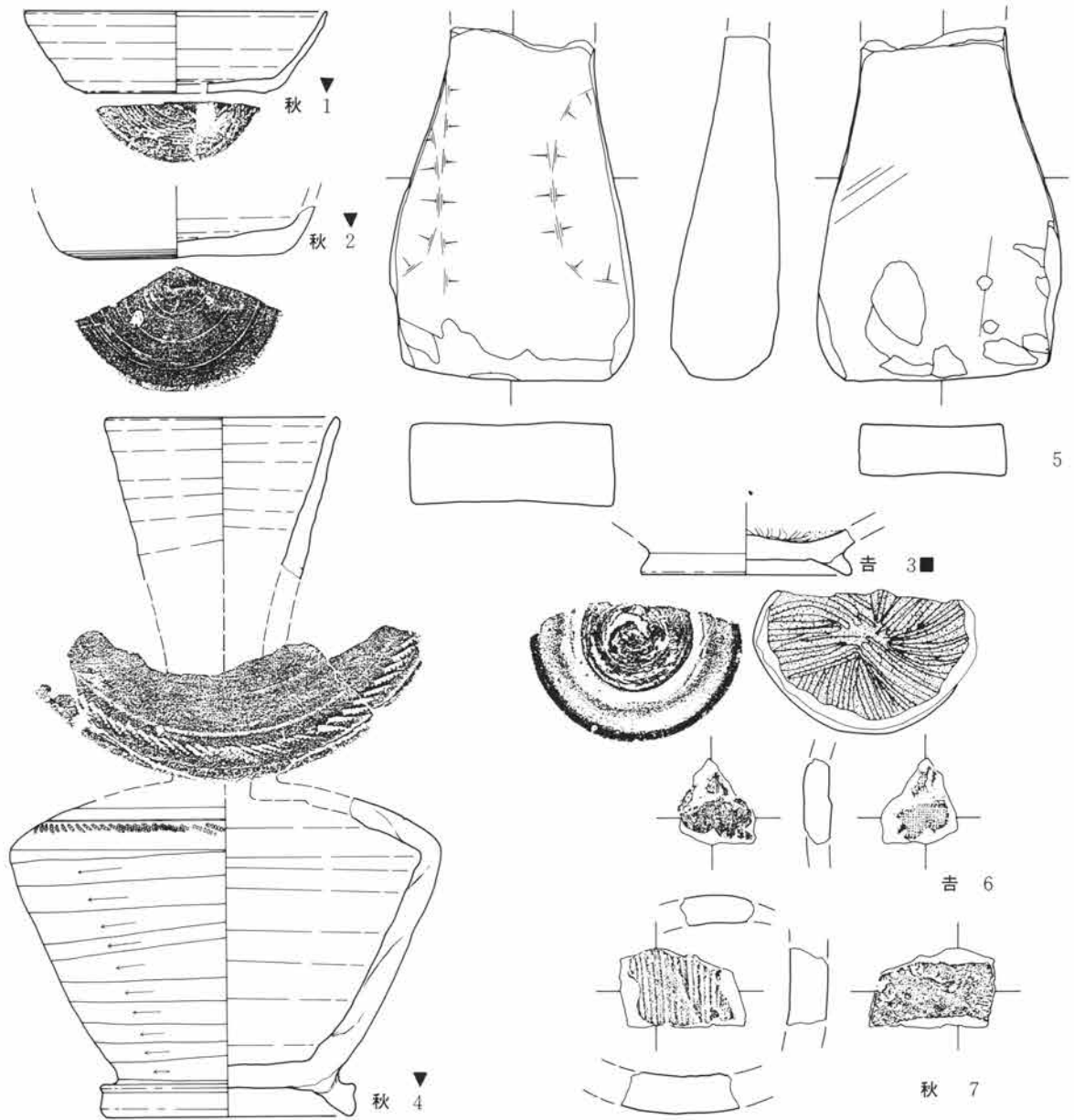


層序 (B区55住) L=126.80 m

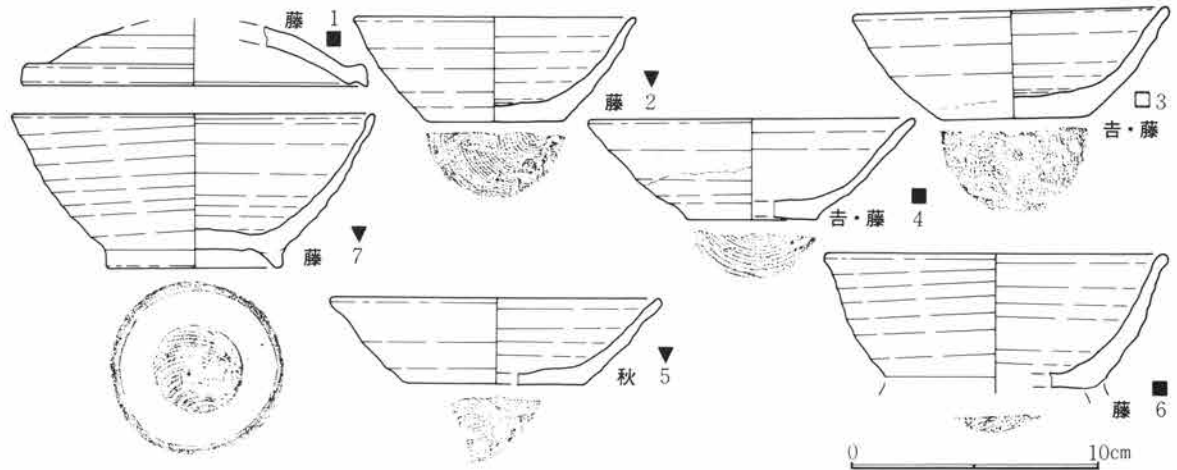
1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石含有・塊状粘土含有。3. 粒状C軽石混入。
4. 粒状C軽石含有・塊状Ⅳ層土混入。5. 塊状Ⅶ層土。6. 細粒状C軽石微量・塊状Ⅶ層土混入。
7. 6近質。8. 粒状C軽石混入・塊状Ⅶ層土若干。

第37図 B区第55号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

0 2m・10cm

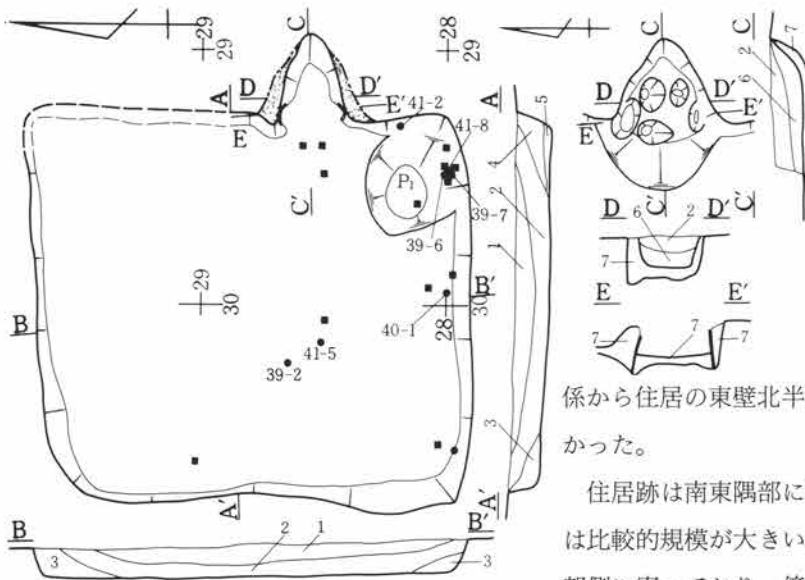


第38図 B区第55号住居跡出土遺物実測図(2)



第39図 B区第56号住居跡出土遺物実測図(1)

遺構名称	B区第56号住居跡		位置	27~29-B-28~30グリッド内。		残存深度	約23cm
平面形態	矩形。	規模	3.1m×3.6m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-92度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。造床は認められない。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・不整形。70×77cm・深度-14cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm。			主軸方位	北-88度-南	
改築	有。瓦の据え方と思われるピットを検出。		形状	舌状。			
規模	全長 80cm・屋外長 66cm・屋内長 14cm・袖部幅100cm・燃烧部幅 54cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦により補強されている。						
煙道寄り	幅員が減少する。		袖	左袖は瘤状であるが、右袖は殆どない。			
煙道	未検出。		掘り方	全体に三角形状を呈する。			
遺物出土状態	傍竈坑内での出土が多い（覆土内）。他は床面直上の出土が多く鏡瓦2点がある。						



層 序 (B 56 住) L=126.50 m  
 1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石混入。3. 粒状C軽石混入・塊状IV層土含有。4. 3近質。5. 粒状C軽石含有・塊状VII層土含有。6. 細粒状C軽石含有・粒状焼土含有・粒状炭化物混入。7. 細粒状C軽石微量・粒状焼土含有・粒状炭化物微量。

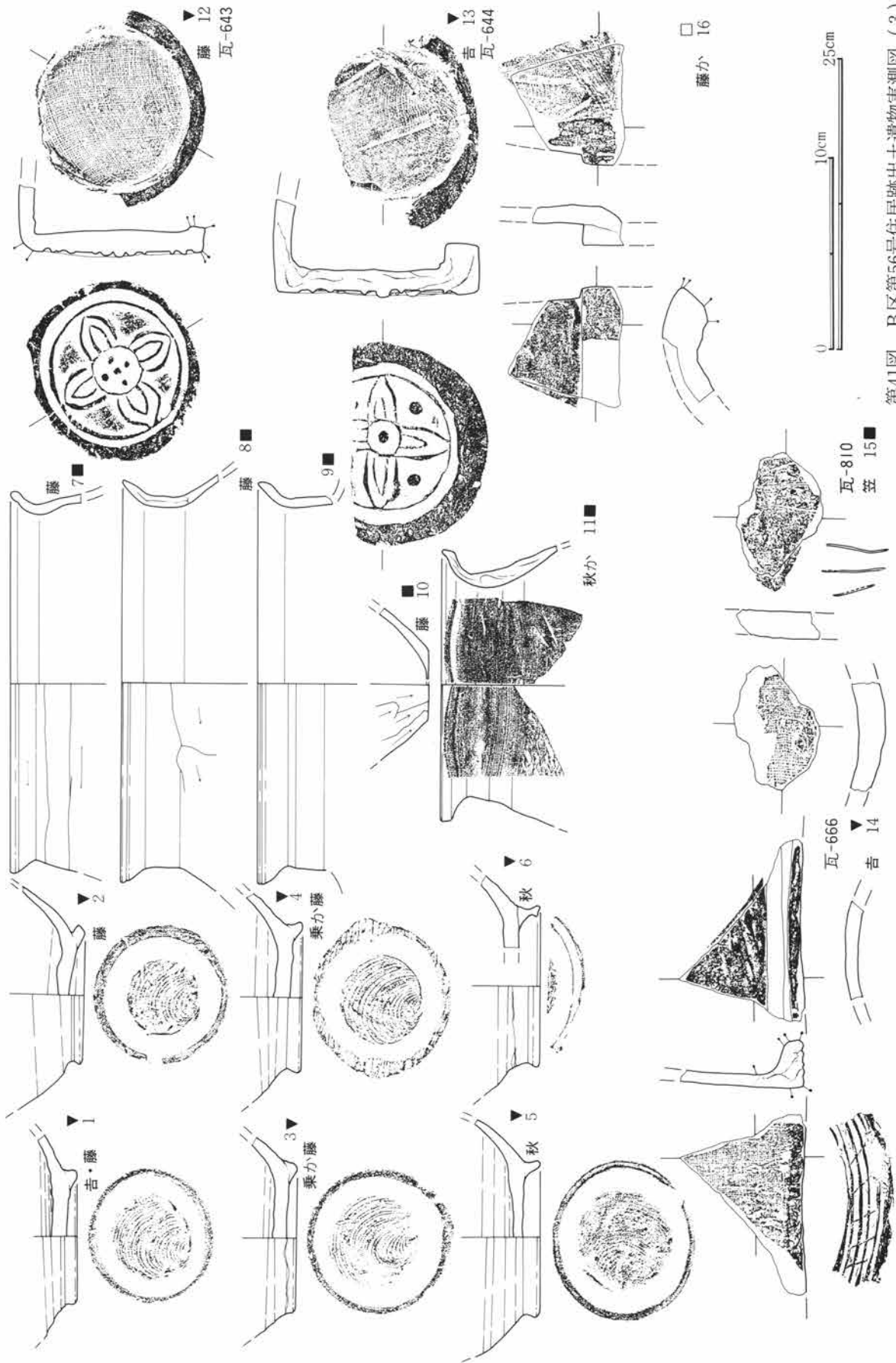
所見 当住居跡はB67住を切り構築している。この切り合い関係から住居の東壁北半分と北東隅部の壁の検出が出来なかった。

住居跡は南東隅部に傍竈坑を備えている。この傍竈坑は比較的規模が大きい。カマドは、東壁中央より南東隅部側に寄っており、傍竈坑の規模がやや大きい為両者はほぼ接した状態となっている。カマドの構造は、燃烧部幅がやや狭まった状態である。両袖内面側には男瓦を1本ずつ用い補強材として用いている。(第42図-1が左袖側、同図-2が右袖側である)。これらの点から住居形状はC区の第VI段階に対比され、出土遺物では、D区のロ段階に主体がある。これらの点から当住居跡は、9世紀後半頃の廃棄と考えられる。

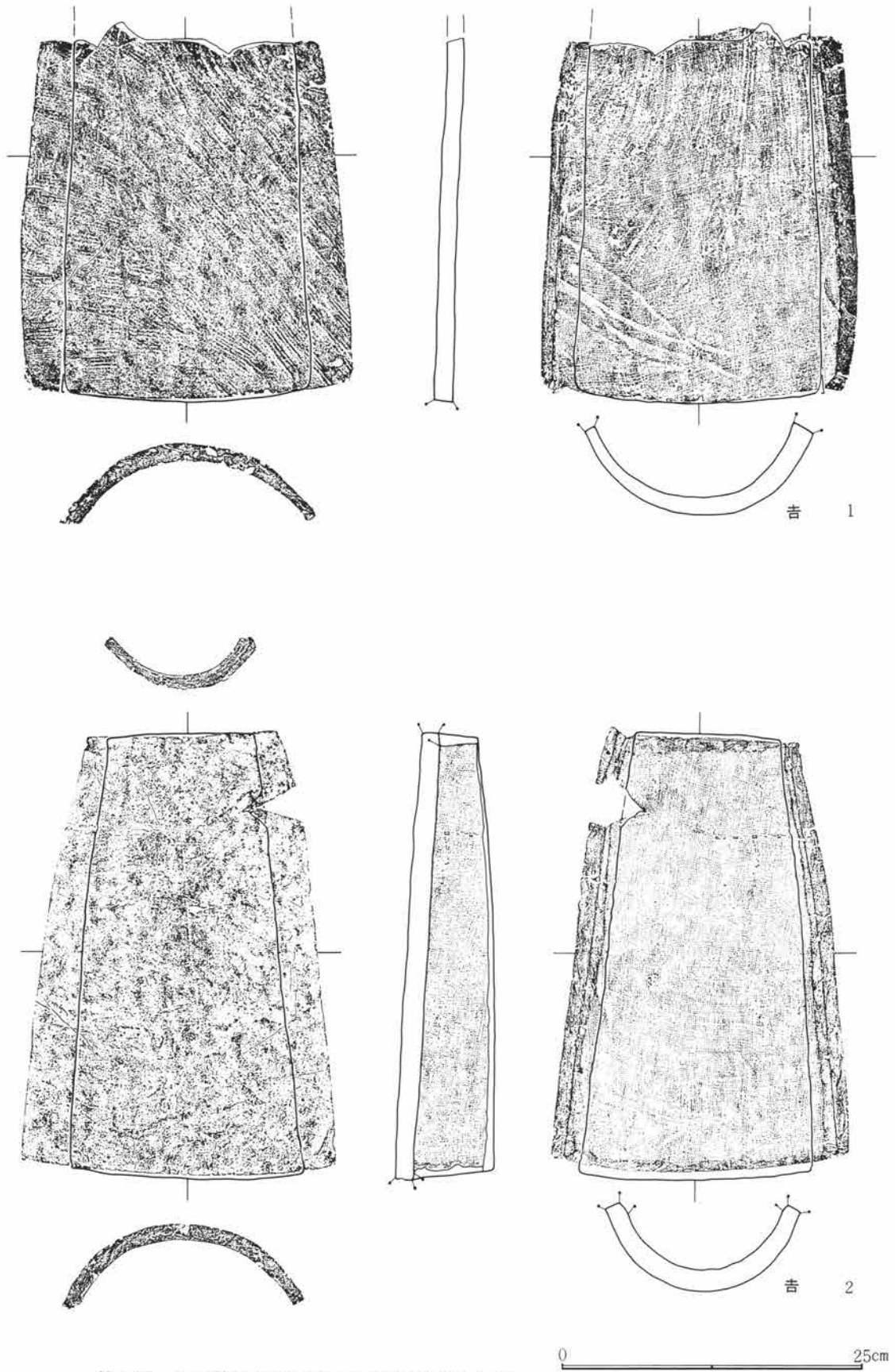


第40図 B区第56号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)

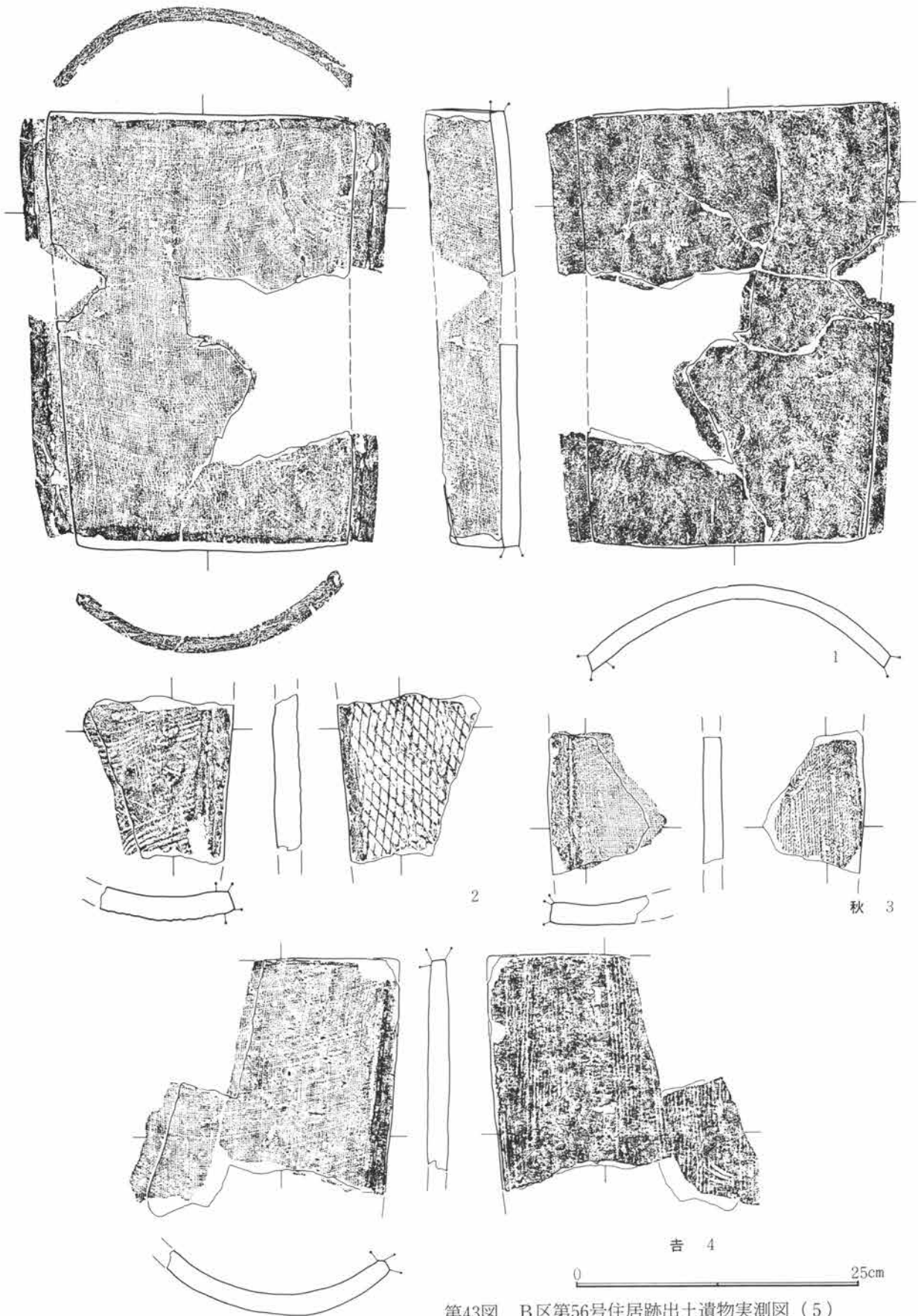




第41図 B区第56号住居跡出土遺物実測図(3)

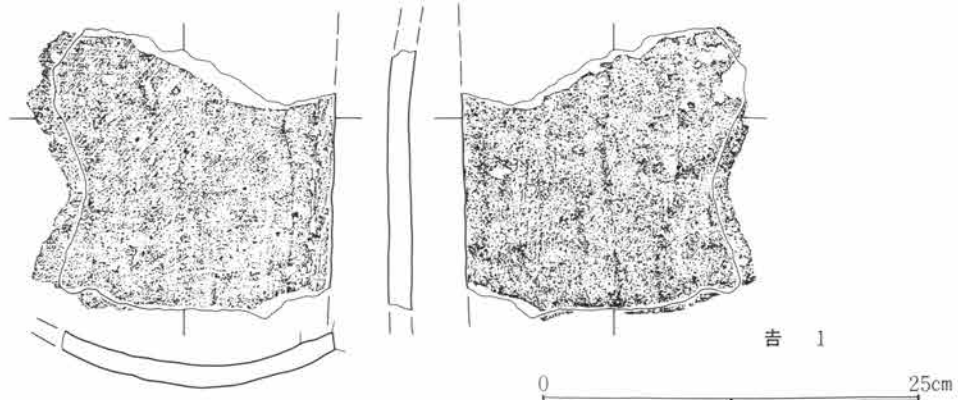


第42図 B区第56号住居跡出土遺物実測図(4)



第43図 B区第56号住居跡出土遺物実測図(5)

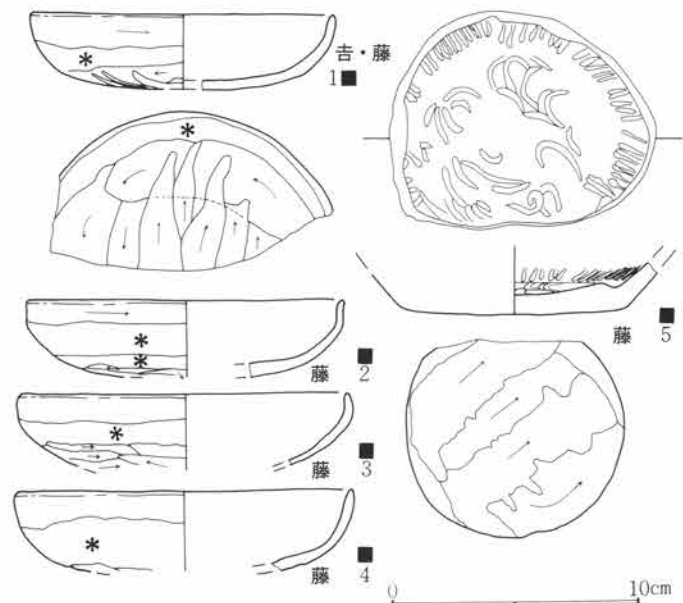
第4章 検出された遺構・遺物



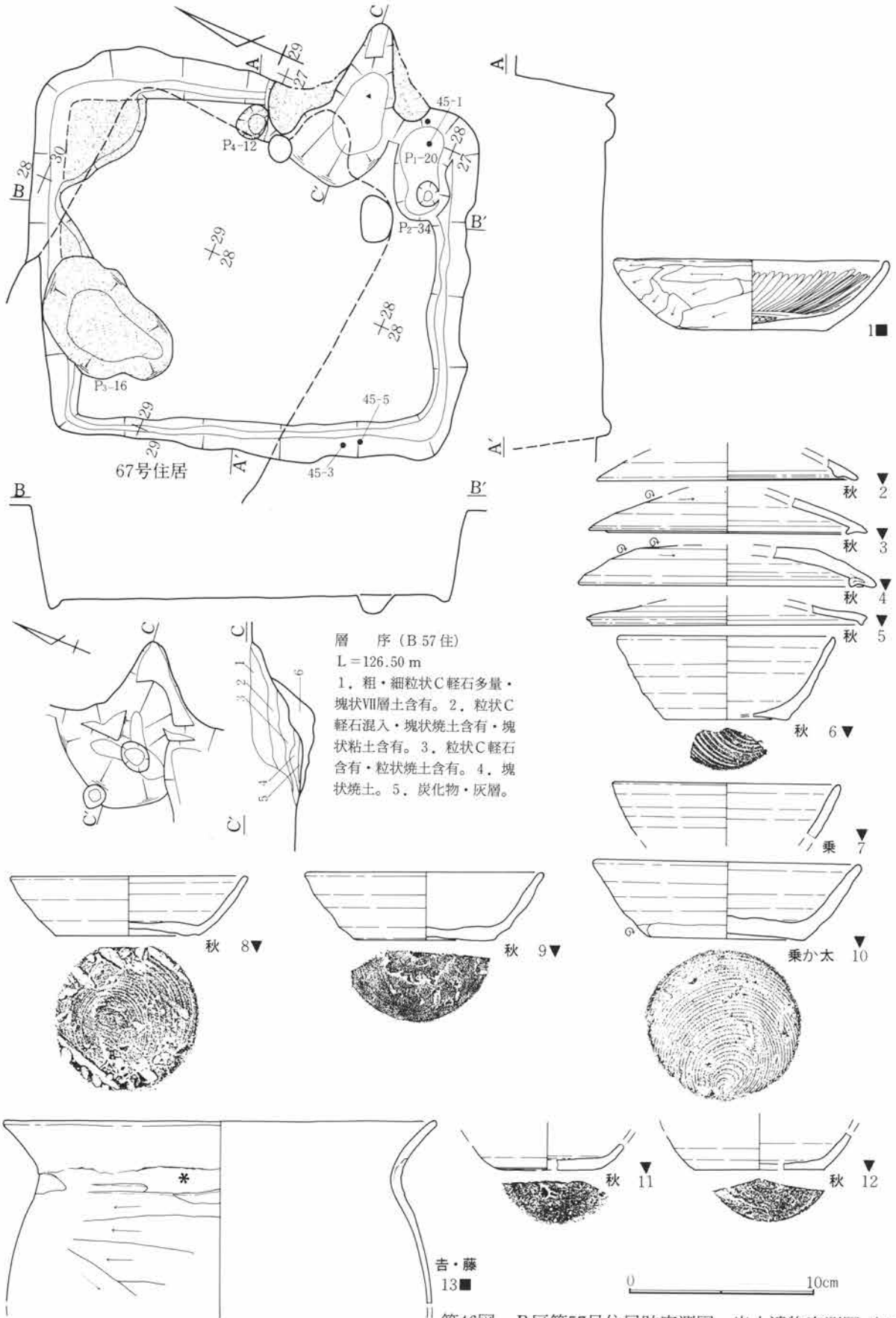
第44図 B区第56号住居跡出土遺物実測図(6)

遺構名称	B区第57号住居跡		位置	26~30-B-26~29グリッド内。		残存深度	約95cm
平面形態	横長方形。	規模	4.14m×4.8m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-68度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。造床は無い。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・長円形状。120×58cm・深度-20cm			
柱穴	住居床面及び住居周辺を精査したが未確認に終わる。						
掘り方	P <sub>3</sub> が土坑状であるが、B67住の掘り方の可能性もある。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から52cm。			主軸方位	北-71度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。		形状	舌状を呈する。袖は大きく堅固。			
規模	全長180cm・屋外長 86cm・屋内長 94cm・袖部幅183cm・燃烧部幅 55cm・煙道部幅 27cm。						
焚口・燃烧部	B67住のカマドと重複する。焚口は広く、扇状を呈したと考えられ、燃烧部は右袖長の部分位と思われる。						
	袖	左袖はB67住の破壊を被っている。					
煙道	仰角150度程で立ち上がる。		掘り方	左右両袖部分にテラスを設けている。			
遺物出土状態	B67住の破壊により出土量は非常に少なく、床直出土の遺物は皆無であった。						

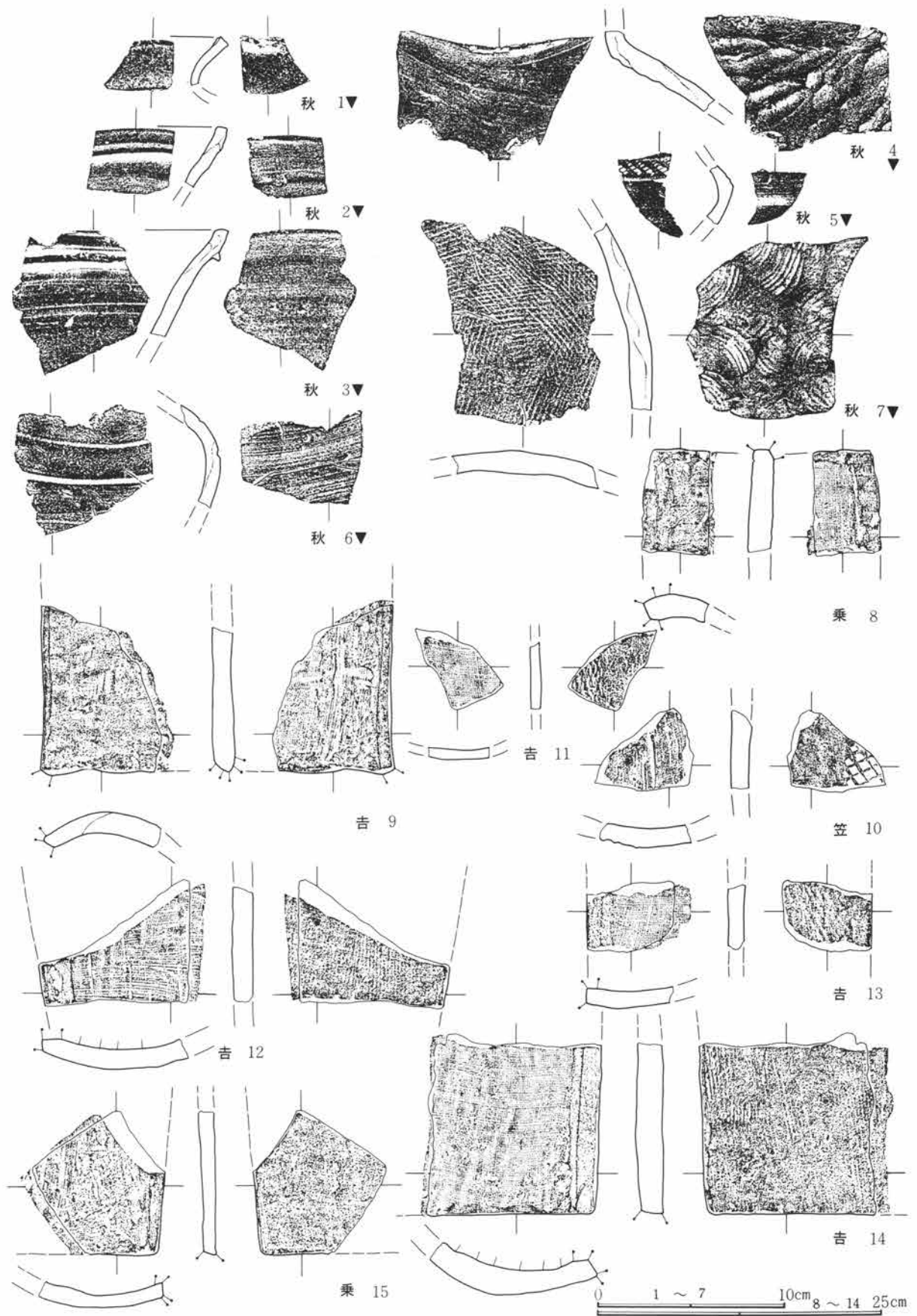
所見 当住居跡はB67住に切られている。構造は、壁下に全周する壁溝と南西隅部に傍竈坑を具備し、東壁傍竈坑に接する位置に付設している。カマドは、袖が大きく燃烧空間も広い。又、傍竈坑内から、P2のピットが検出されている。このピットは、同時期頃と思われる住居跡にも検出例がある。住居の指向方向は、東-22度でありC区第II段階の住居跡の指向方向に該当する。然し、出土遺物ではC区第III段階以降のものに対比されるもの(C区の空白期)とC第III段階に伴う二者がある。この点は、上位のB67住の遺物が混在している可能性があり詳細は第6章で記述したい。



第45図 B区第57号住居跡出土遺物実測図(1)

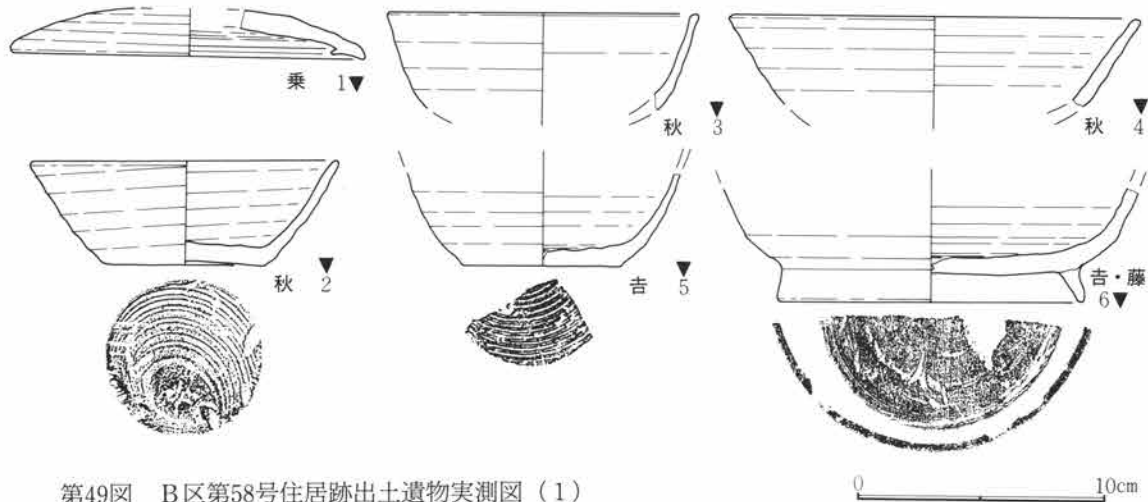
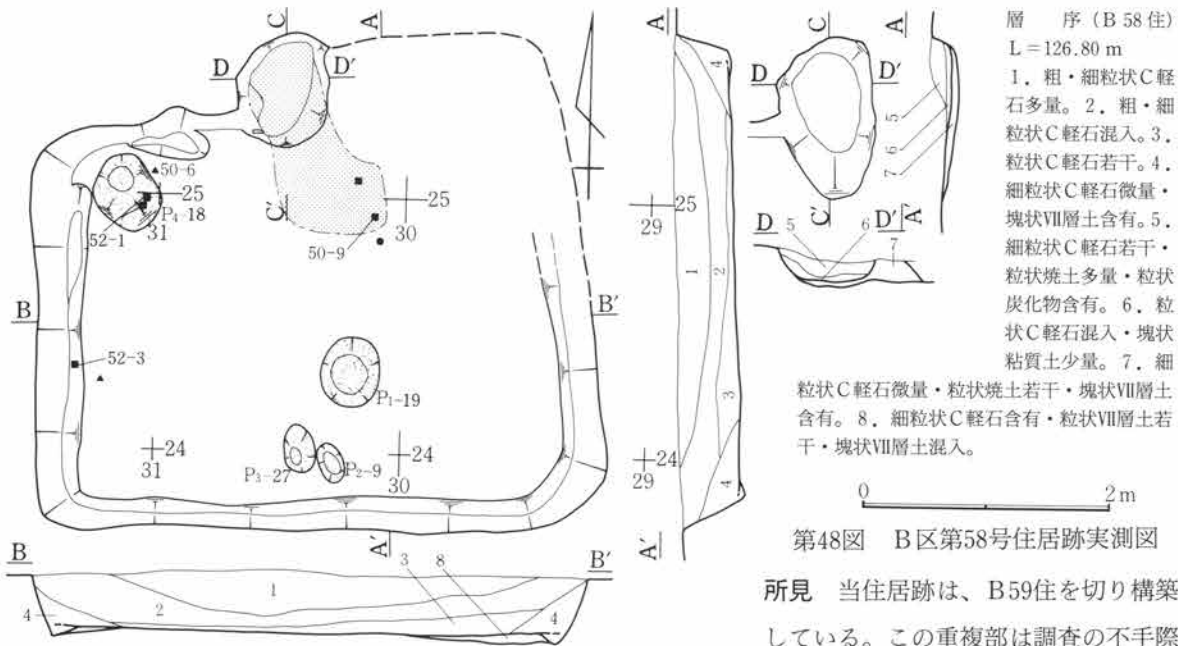


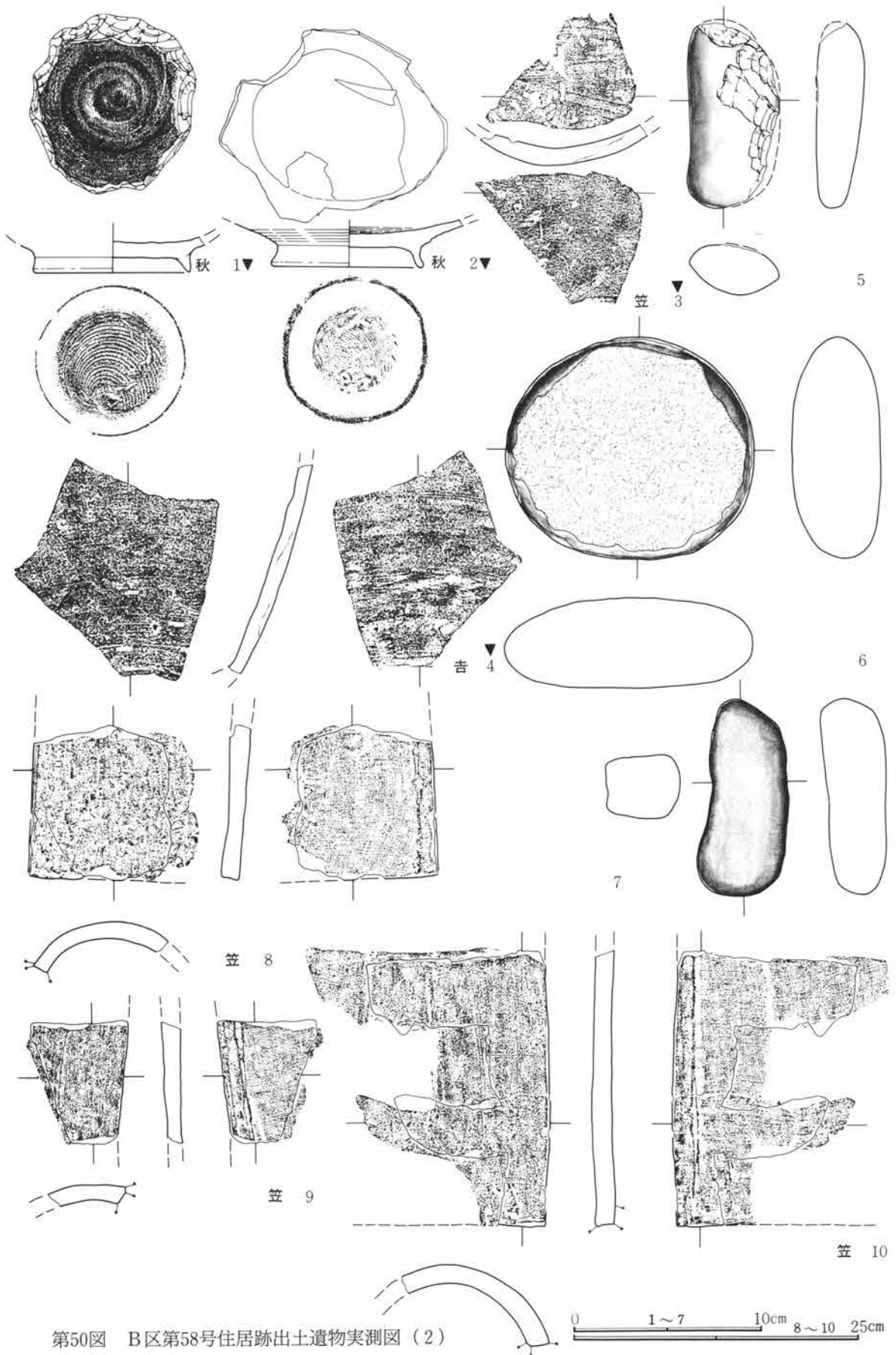
第46図 B区第57号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



第47図 B区第57号住居跡出土遺物実測図(3)

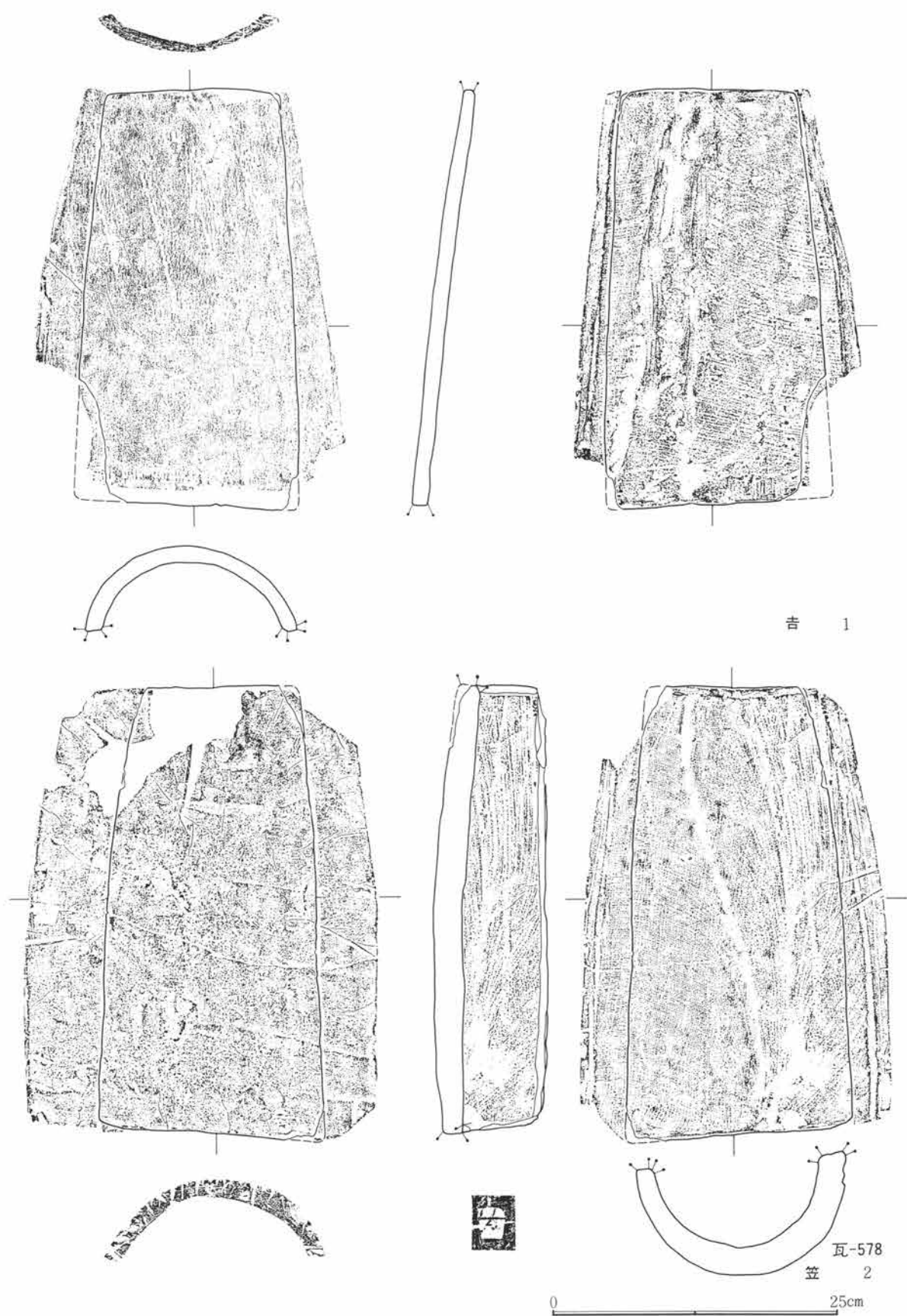
遺構名称	B区第58号住居跡	位置	23~25-B-29~31グリッド内。	残存深度	約51cm
平面形態	横長方形基調	規模	3.83m× 4.6m	構築基準辺	南壁
				主軸方位	北-1度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。	床面	地山VII層土を多く使用し平坦。一部に造床。		
壁溝	全周か。幅員14~19cm。	傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>4</sub> か。楕円形。58×50cm・深度-18cm		
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。				
掘り方	壁溝周辺が認められるのみである。				
遺物出土状態	全体に遺物量が少ない。第49図-2がカマド前面の床面直上で出土。				



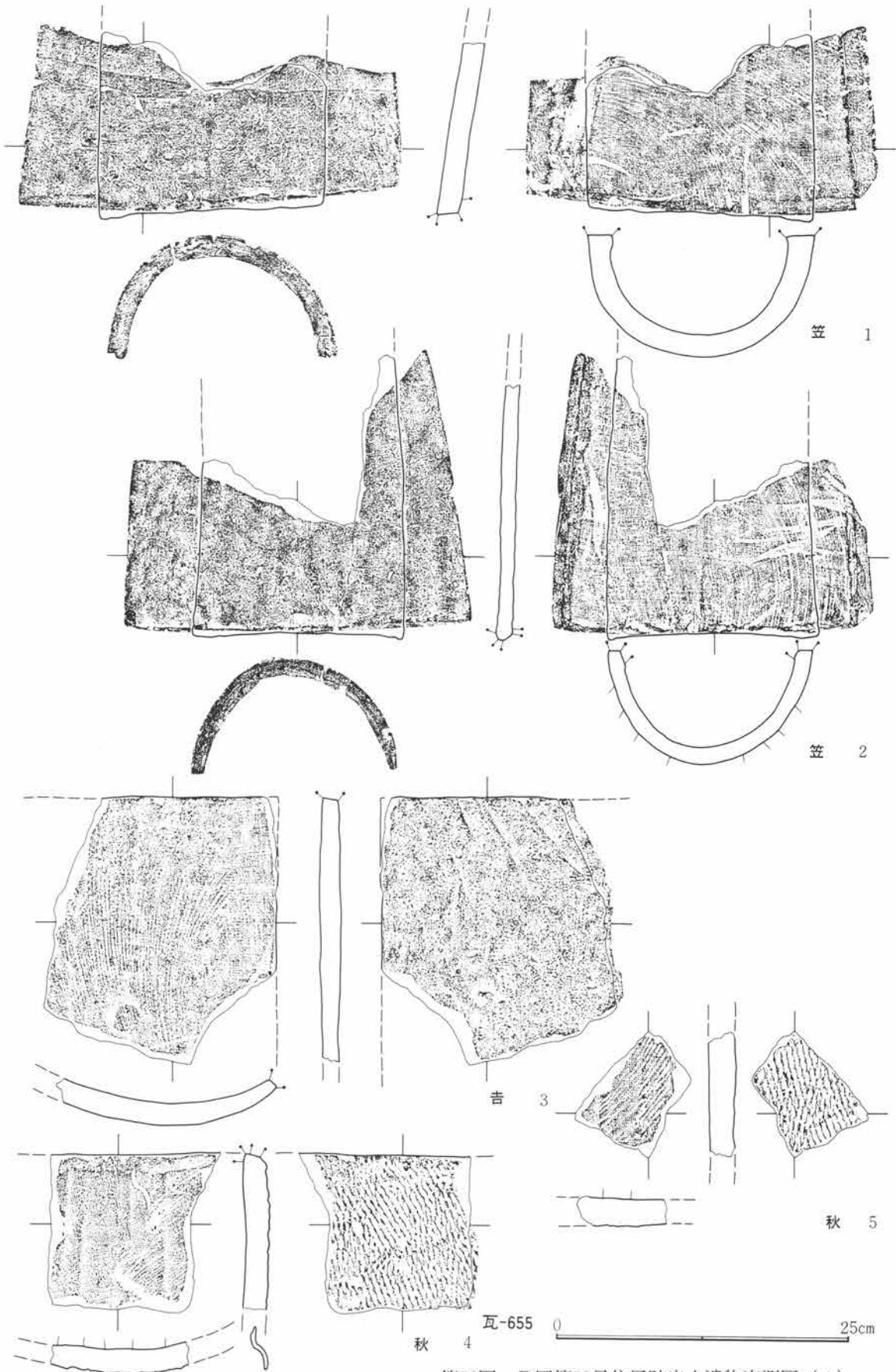


第50図 B区第58号住居跡出土遺物実測図(2)





第51図 B区第58号住居跡出土遺物実測図(3)

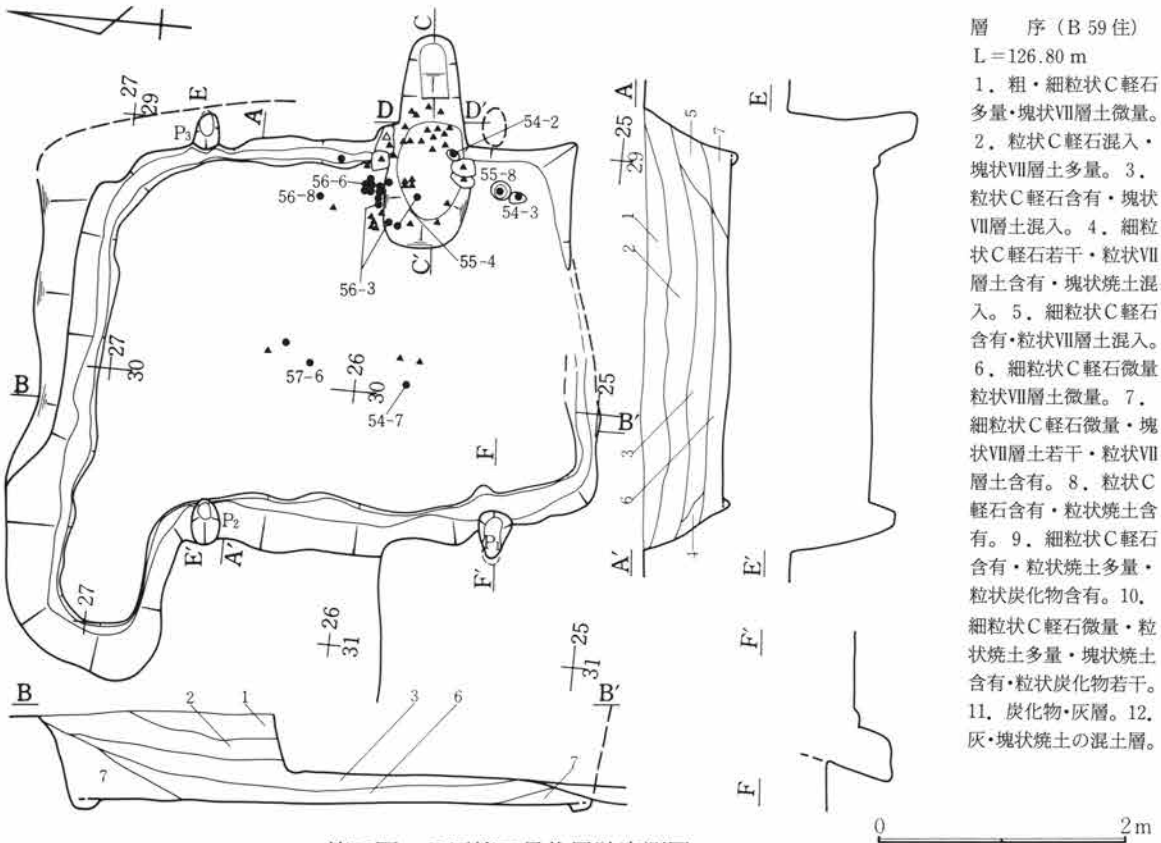


第52図 B区第58号住居跡出土遺物実測図(4)

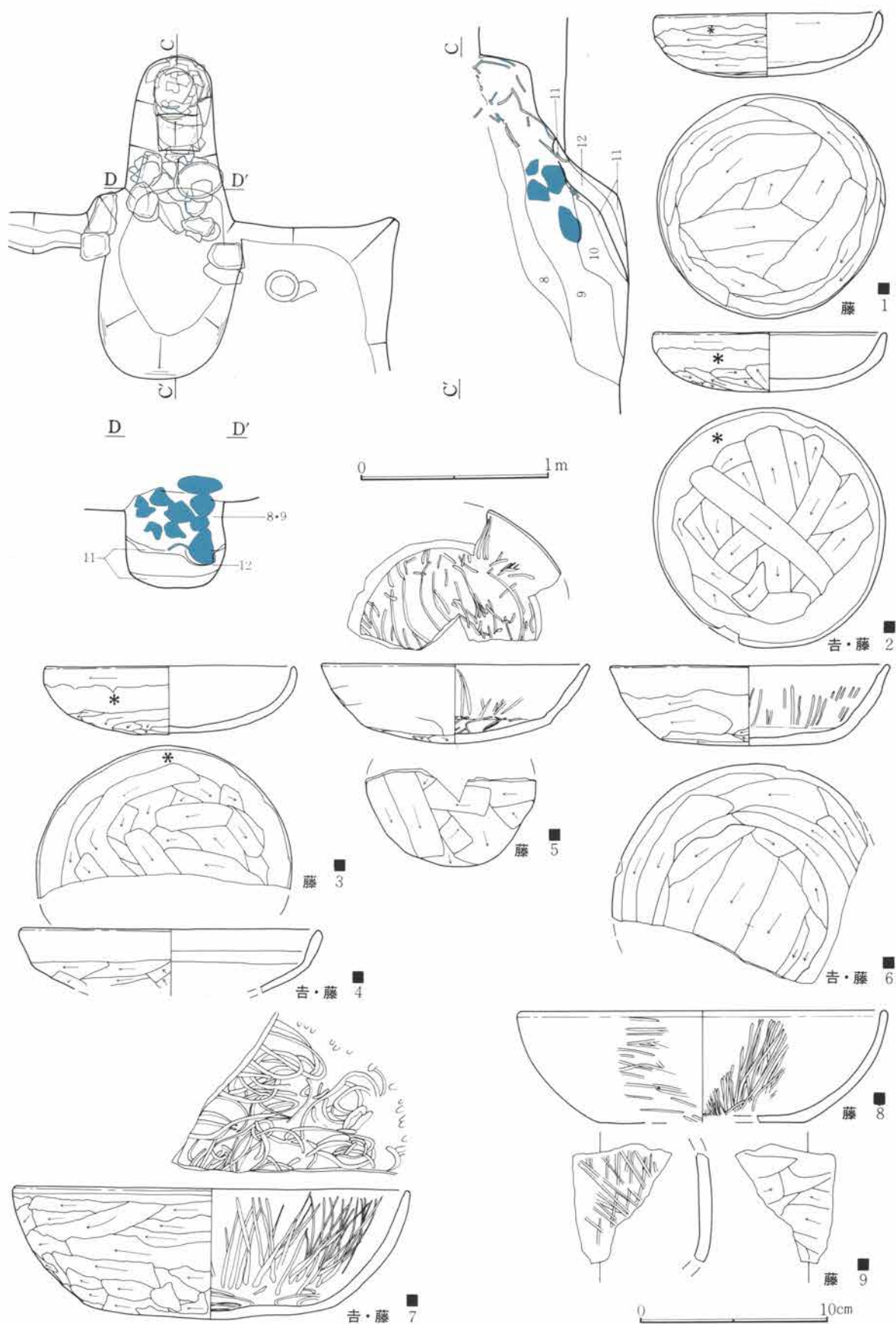
第3節 検出された住居跡について

遺構名称	B区第59号住居跡		位置	24~27-B-28~31グリッド内。		残存深度	約67cm
平面形態	横長方形基調	規模	3.52m× 4.8m	構築基準辺	東壁	主軸方位	北-84度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	VII層土を使用し平坦で造床は認められない。			
壁溝	全周か。幅員13~20cm		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	P <sub>1</sub> ~P <sub>3</sub> を検出。この3本が主柱穴と考えられ、カマド右側にも想定されが未検出。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から83cm。			主軸方位	北-88度-南	
改築	不明。			形状	主体機能部を箱状にする。		
規模	全長167cm・屋外長 84cm・屋内長 83cm・袖部幅 82cm・燃烧部幅 50cm・煙道部幅 35cm位か。						
焚口・燃烧部	砂岩質の袖材が残存する部分全体が燃烧部と考えられる。焚口部は、屋内寄りに想定され、浅く窪んだ状態である。						
	袖	地山砂岩質土を削り出した材料で構築する。					
煙道	土師器甕を多用する。		掘り方	左袖材を据える部分と煙道部だけである。			
遺物出土状態	カマド部では、補強材の崩壊物が多く、少量が床面直上で住居中央部で出土している。						

所見 当住居跡はB58住に南部の一部を破壊されている。又、南東隅部では倒木跡を切り重複している為、想定されるP4の存否は確認出来なかった。住居跡は北西隅部に屋外側に突出する長形状を呈する張り出しを具備している。カマドは東壁中央より若干南東隅部寄りに付設している。このカマドの煙道部は、土師器甕を9個体分を用いている。この如くの類例は、調査区内での他例は無く唯一の存在である。壁溝は南東隅部が不明である。又、壁では柱穴P1~P3が検出され、屋内で柱穴がない為恐らく主柱穴と考えられる。

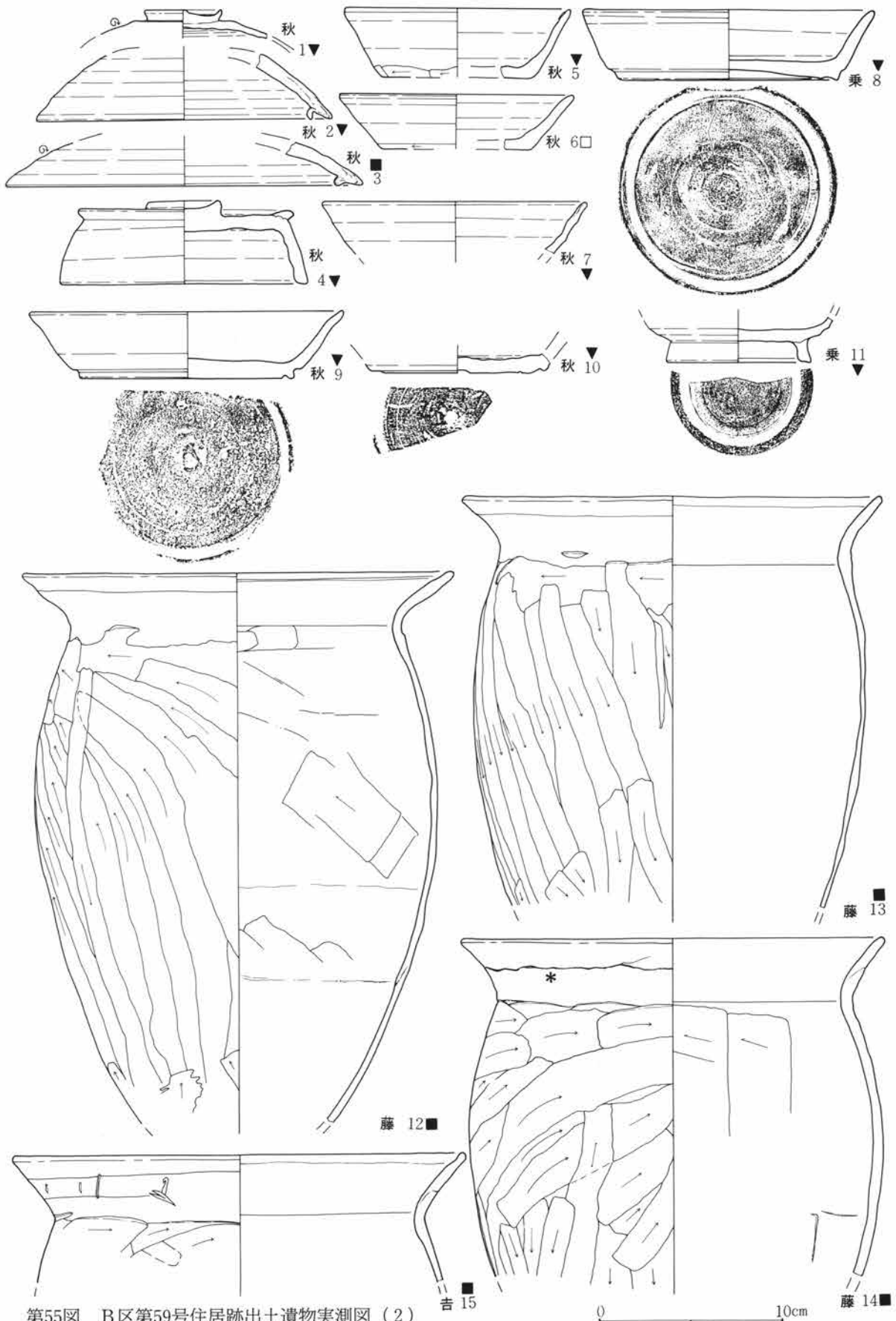


第53図 B区第59号住居跡実測図

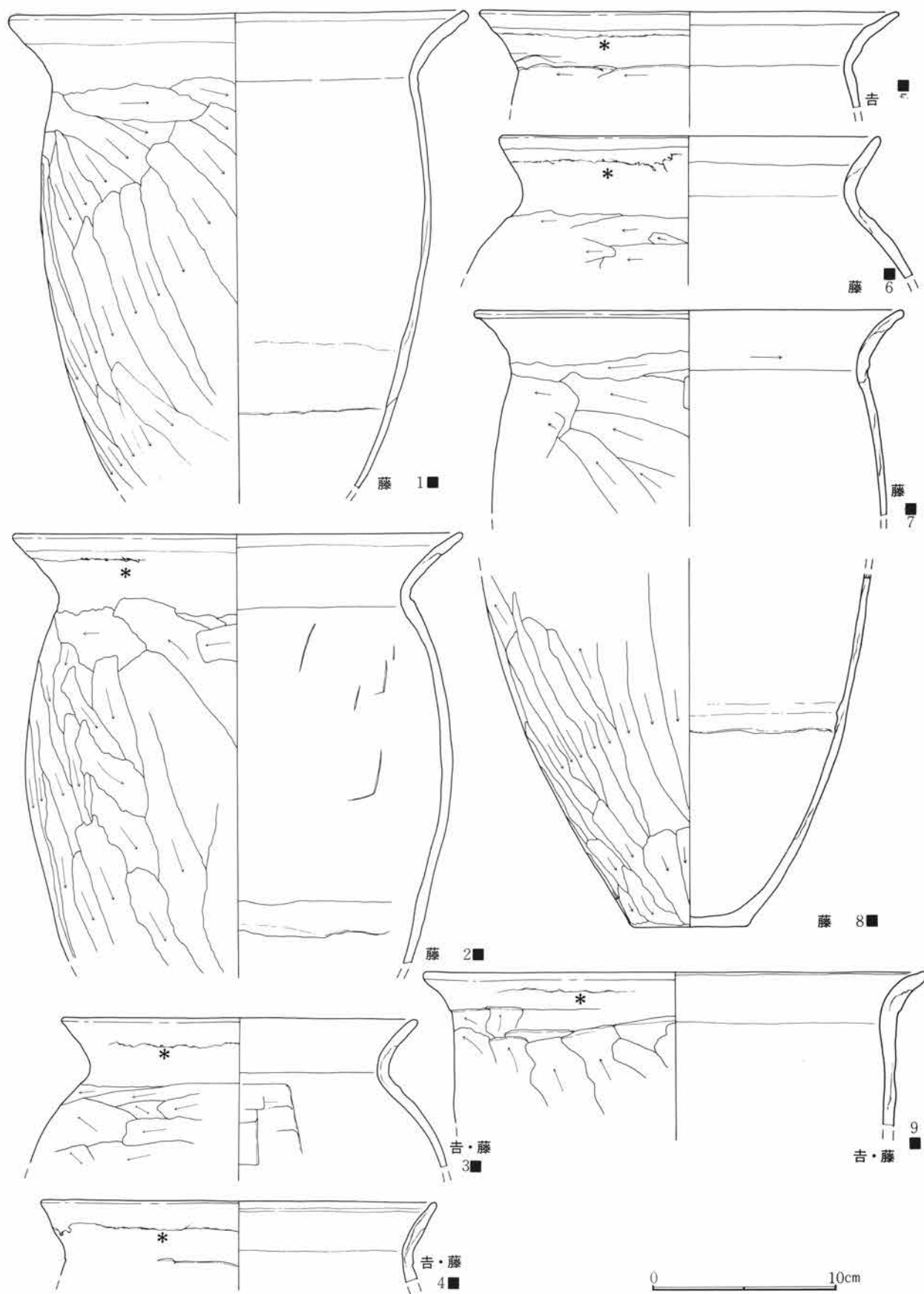


第54図 B区第59号住居跡出土遺物実測図(1)

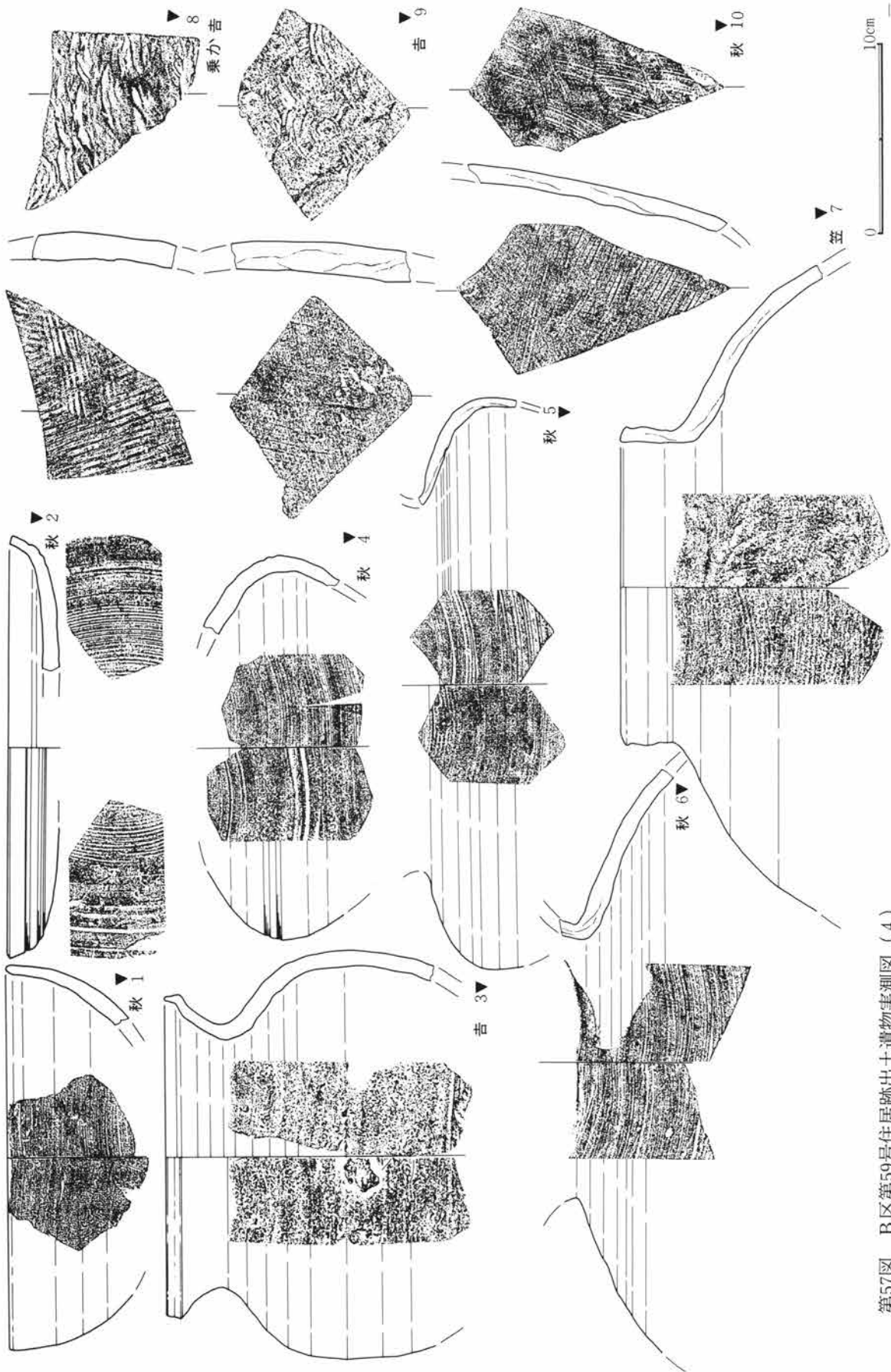
第3節 検出された住居跡について



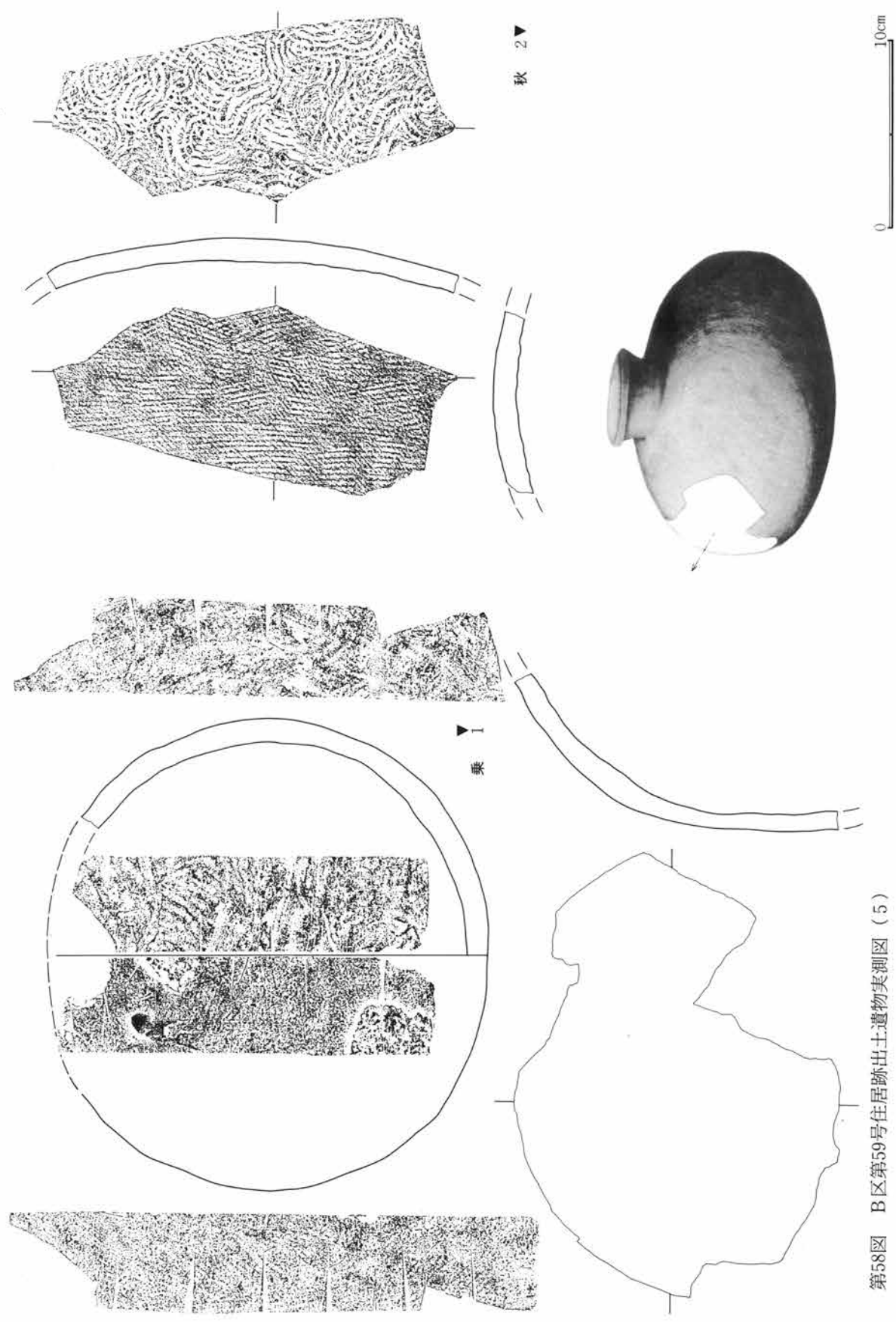
第55図 B区第59号住居跡出土遺物実測図(2)



第56図 B区第59号住居跡出土遺物実測図(3)

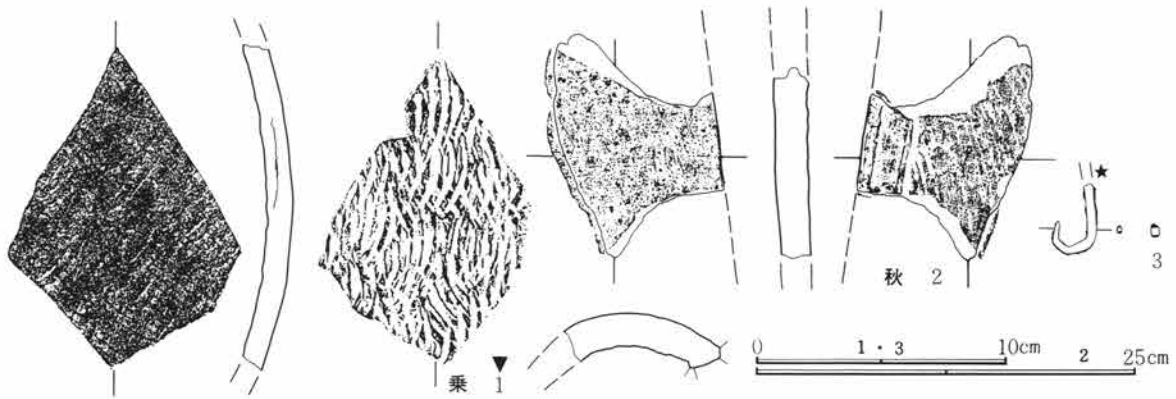


第57図 B区第59号住居跡出土遺物実測図(4)



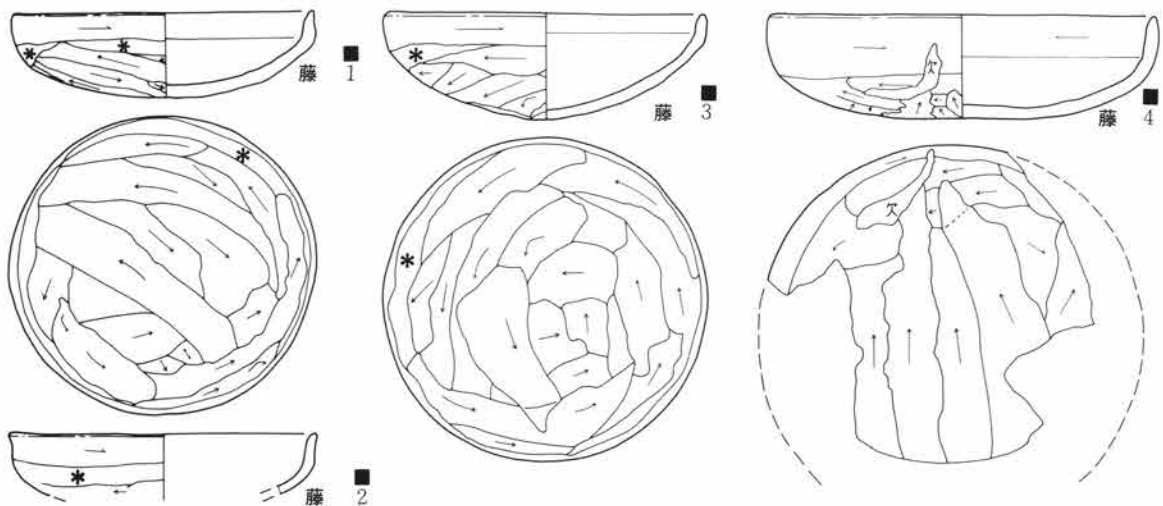
第58図 B区第59号住居跡出土遺物実測図(5)





第59図 B区第59号住居跡出土遺物実測図(6)

遺構名称	B区第60号住居跡		位置	26~28-B-27~29グリッド内。		残存深度	約42cm
平面形態	横長方形。	規模	3.6m×4.3m	構築基準辺	不分明。	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。北東部分が造床。南東部は倒本跡を切る。			
壁溝	全周か。幅16~22cm		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北東隅部周辺が顕著であるが、他の部分では認められなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から96cm。			主軸方位	北-93度-南	
改築	有。掘り方より焼土を検出している。		形状	舌状。			
規模	全長154cm・屋外長 84cm・屋内長 70cm・袖部幅132cm・燃烧部幅 60cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃烧部	焚口は扇状を呈すると考えられる。燃烧部は広く奥行が長い。燃烧部右壁に密着する状態で礫が出土している。						
	袖	右袖は地山砂岩質土削り出し材を用いている。					
煙道	細く一部が検出されているだけである。		掘り方	全体的に大きく三角形形状に近い。			
遺物出土状態	床面直上で完形個体(第60図-3・第61図-3)が出土している。						

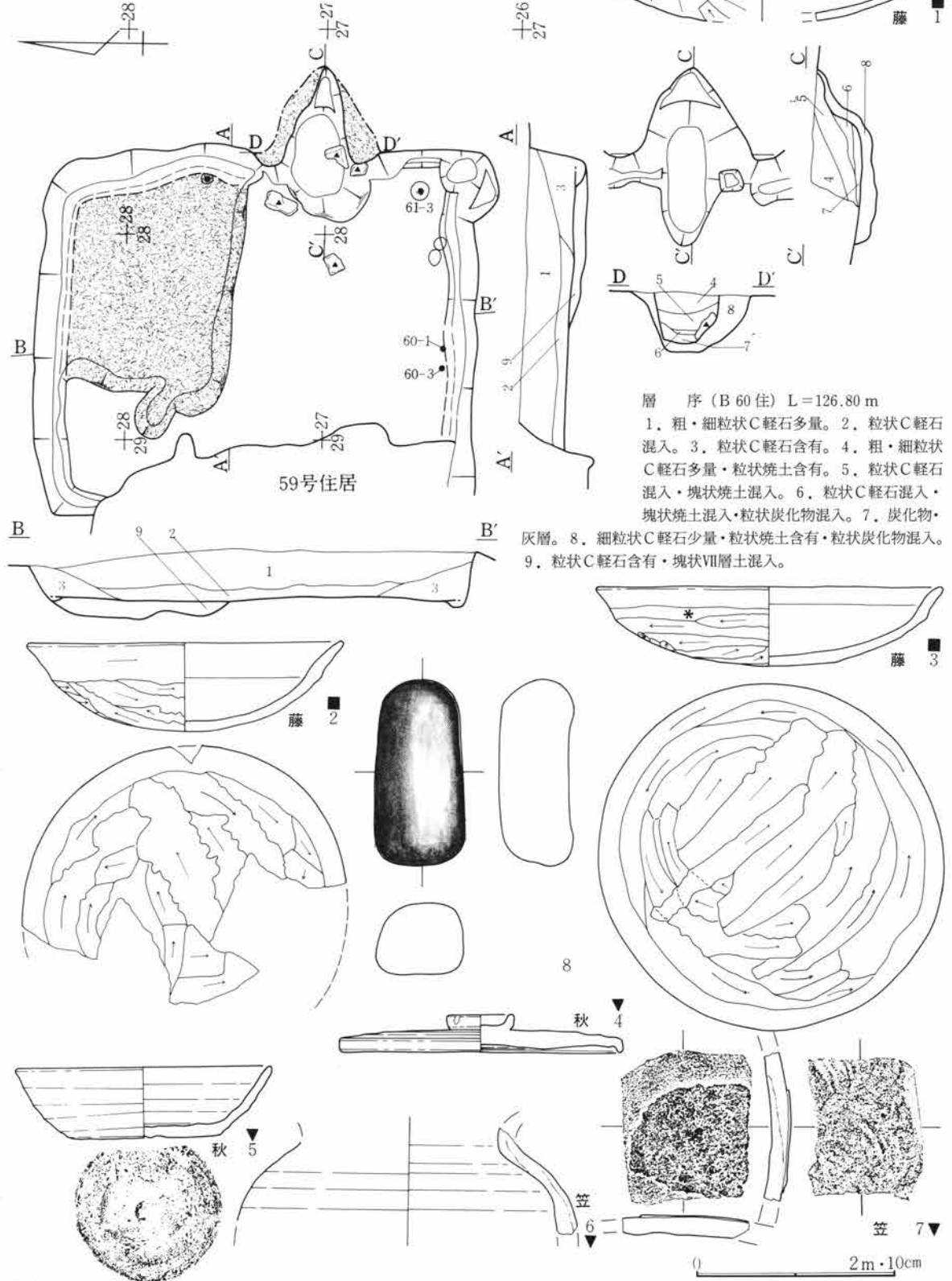


第60図 B区第60号住居跡出土遺物実測図(1)

所見 当住居跡はB59住に切られ西壁を失っている。又、北西隅部周辺でB57住と、カマド煙道先端がB55住と接する状態にあるが、恐らく、B57住は当住居跡に切られていると考えられる。B55住との新旧関係

第4章 検出された遺構・遺物

は不明である。住居跡は、東壁中央より若干南東隅部寄りに備え、傍竈坑は南東隅部に壁溝を切る状態で検出されている。壁溝は全周する。カマドは、幅の広両袖を具備し燃烧空間も幅が広い。右袖には地山砂質の切り出し材を据え方に据え芯材としている。住居形状はC区第III段階に対比され、出土遺物も同様である。

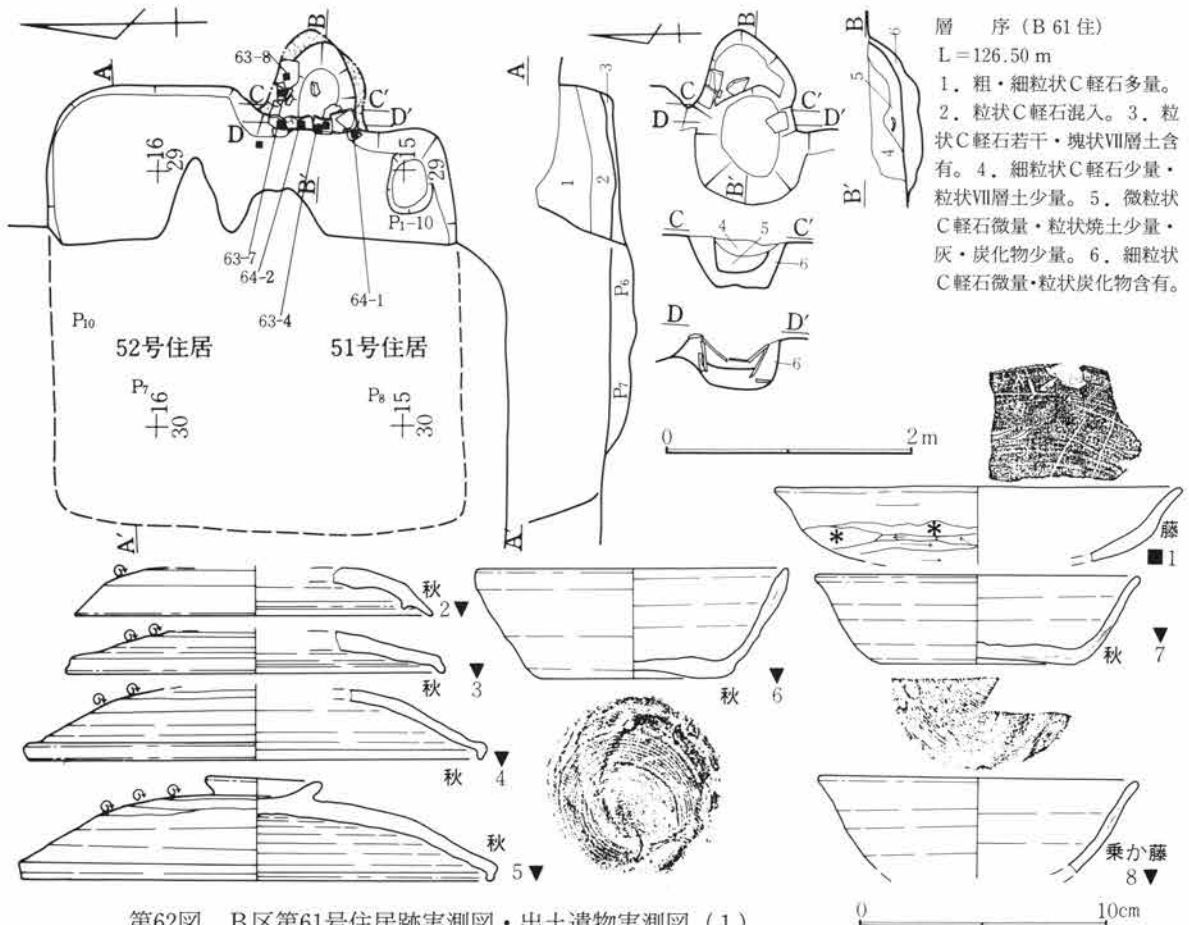


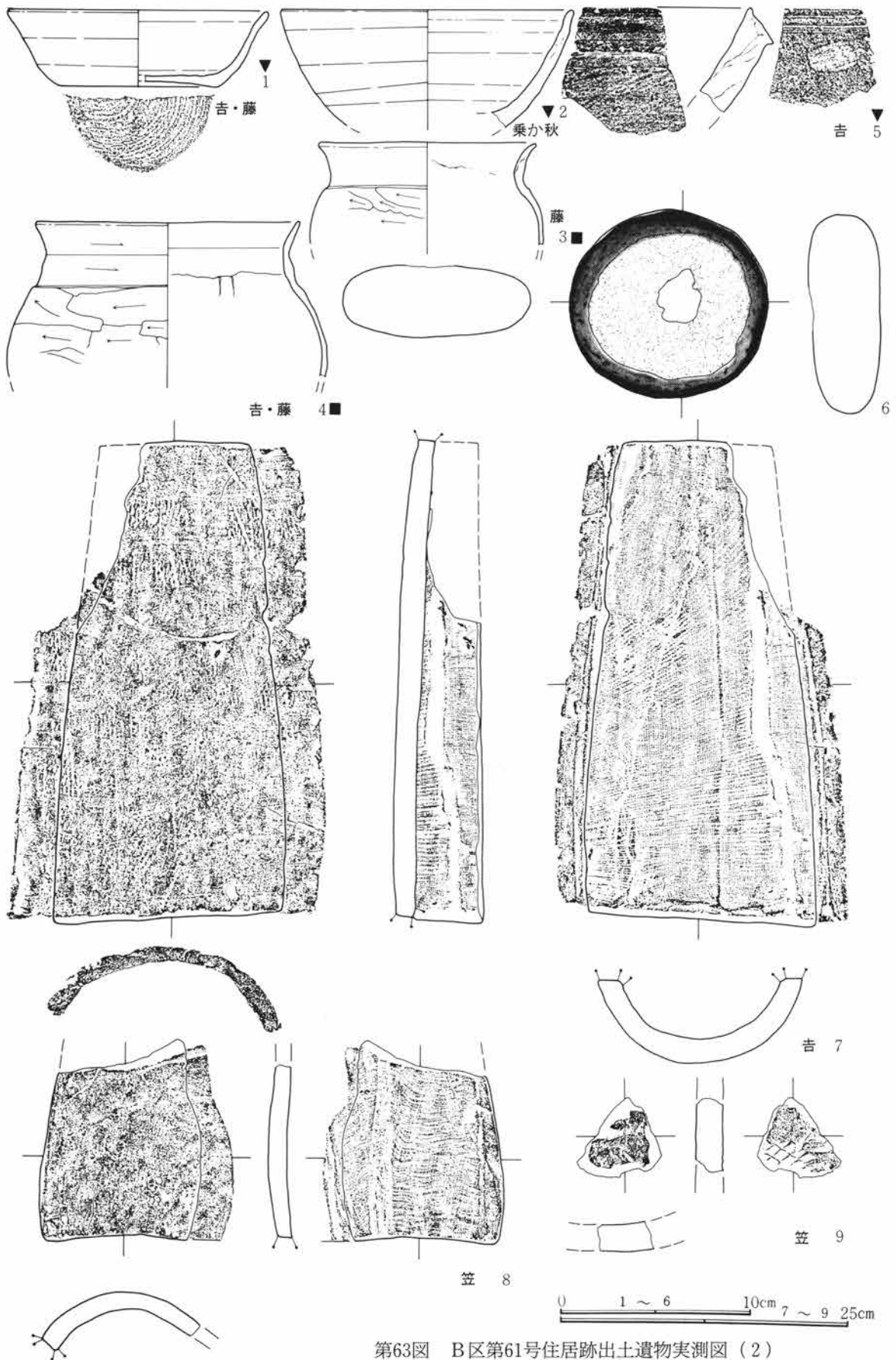
第61図 B区第60号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)

第3節 検出された住居跡について

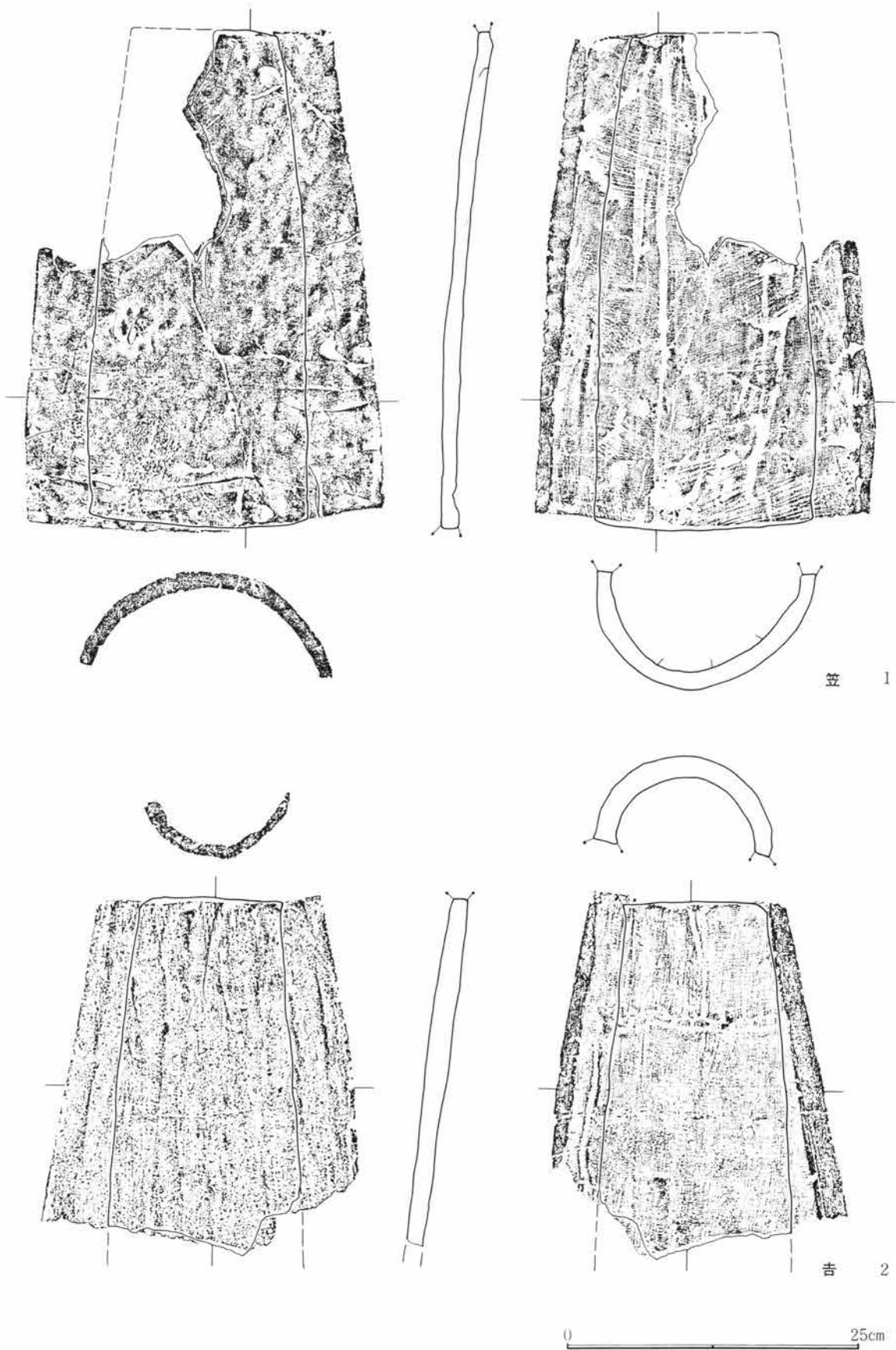
遺構名称	B区第61号住居跡		位置	14~16-B-28・29グリッド内。		残存深度	約60cm
平面形態	不詳	規模	$1.2^{+}\alpha$ m × 3.2m (3.5)	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-90度-南位か。
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	不分明な点が多いが、造床を考えられる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・50×37cm・深度-10cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	住居自体が部分的な検出である点から不分明な点が多い。B51・51住のP <sub>8</sub> ・P <sub>7</sub> ・P <sub>10</sub> も含むか。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から55cm。				主軸方位	北-92度-南
改築	不分明。			形状	舌状。		
規模	全長 72cm・屋外長 53cm・屋内長 19cm・袖部幅124cm・燃烧部幅 52cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦により補強されている。						
支脚が検出されている。			袖	瓦により補強されている。			
煙道	未検出。		掘り方	焚口部が円形土坑状の掘り込になっている。			
遺物出土状態	カマド内での瓦の補強材が多く、土器は覆土内から若干量の出土であった。						

所見 当住居跡はB51住に切られ西側半分程が失われている。又、B62住の南西隅部周辺と重複破壊している。カマドは、東壁中央部より南東隅部に寄り構築し、袖は芯材を用いている。左袖は、東壁の北半分が南半分より東側への掘り込みが大きい、この為袖は大きい。南東隅部直には小規模の傍竈坑を備えている。住居形状はC区の第V乃至VI段階に対比されるが、出土遺物はIV段階以前の様相が認められる。

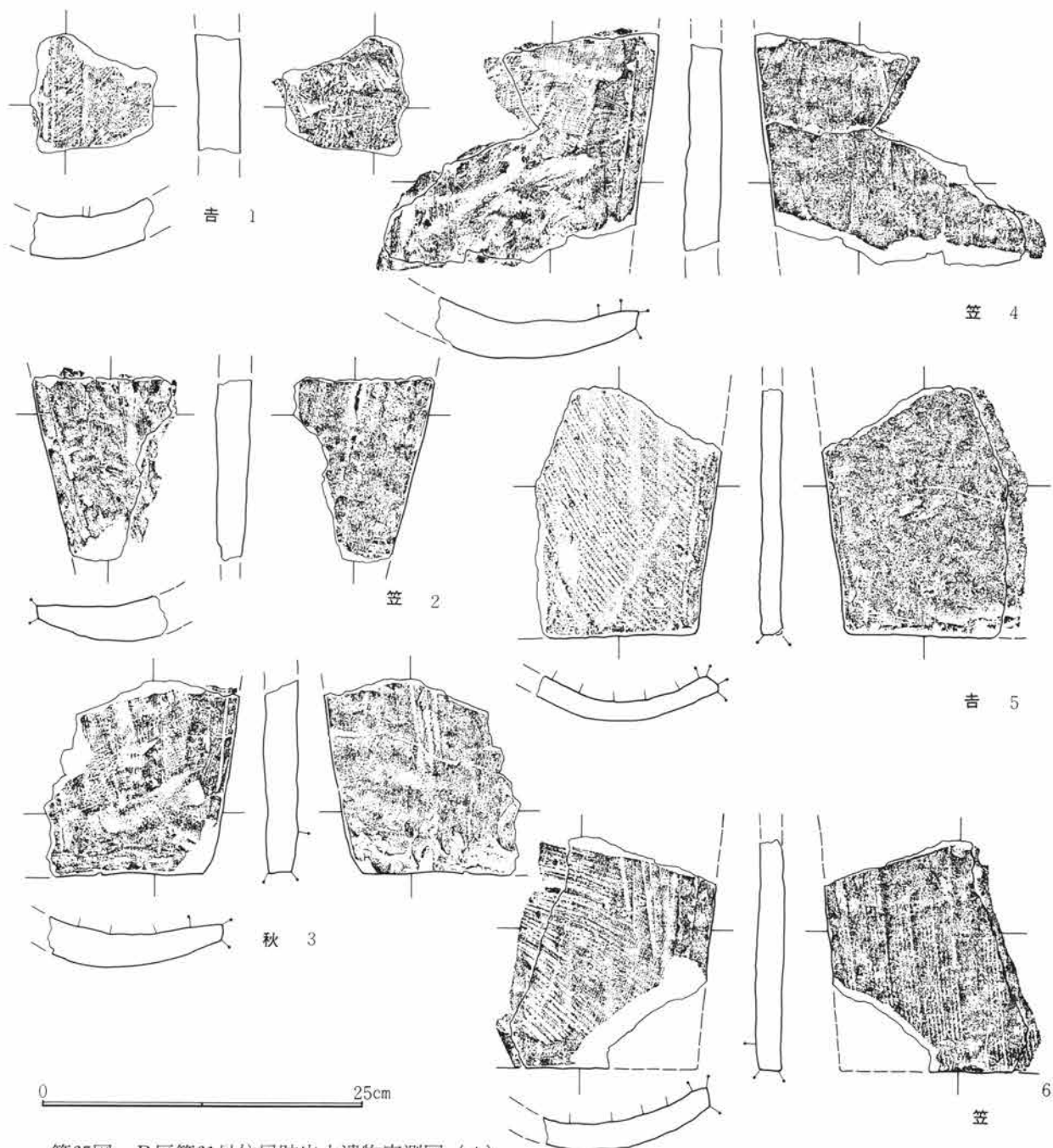




第63図 B区第61号住居跡出土遺物実測図(2)



第64図 B区第61号住居跡出土遺物実測図(3)

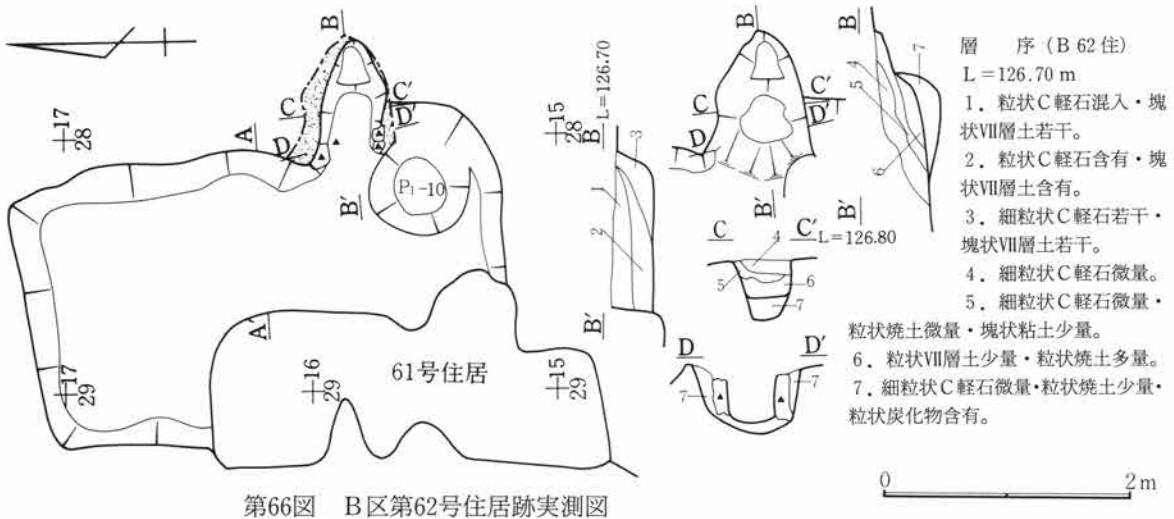


第65図 B区第61号住居跡出土遺物実測図(4)

**所見** 当住居跡は南西隅部周辺でB61住に切られ同部は失なわれている。カマドは、東壁中央部より南東隅部に偏在した位置に付設している。カマド全体の形状は舌状を呈し、燃烧部は全長に対して幅は狭く、燃烧部底面よりやや立ち上がった奥壁部の中位程に煙道を付設している。袖は左右共に地山砂質土層の截り出し材を用い補強材としている。又、左袖は掘り方段階で地山土を削り出し屋内側に突出した状態に成形されている。傍竈坑は南東隅部直下に備えるが、住居規模に比較し大形で円形土坑状を呈している。住居の平面形状は、梯形状に近いが、南壁と西壁はほぼ直交する状態に構築があったことが遺存状態より推定され、更に南壁の指向方位とカマドの指向方位が同位であることから構築基準辺は南乃至西壁にあったことが類推される。一方、東壁と北壁も直交する状態が認められるが、東壁に具備するカマド自体と東壁の二者には、同位の指向方位が認められなかった点から前述の点を推定した。住居形状はC区の空白期と考えられる。

第3節 検出された住居跡について

遺構名称	B区第62号住居跡		位置	15～17—B—27～29グリッド内。			残存深度	約34cm
平面形態	横長方形。	規模	2.34m×3.97m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-90度-南位か。	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・径80cm・深度-10cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	部分的に小単位のもの認められた。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から88cm。				主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内で焼土を検出。			形状	舌状。			
規模	全長100cm・屋外長 63cm・屋内長 37cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 50cm・煙道部幅 25cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
			袖	礫により補強されている。				
煙道	短かく立ち上がる。			掘り方	燃烧部が土坑状に掘り込まれている。			
遺物出土状態	全体に非常に少なかった。							



所見 本B64・68号住居跡は完全に重複するかの如くに検出されたが、詳細に検討を加えると拡張による改築であることが想定される。

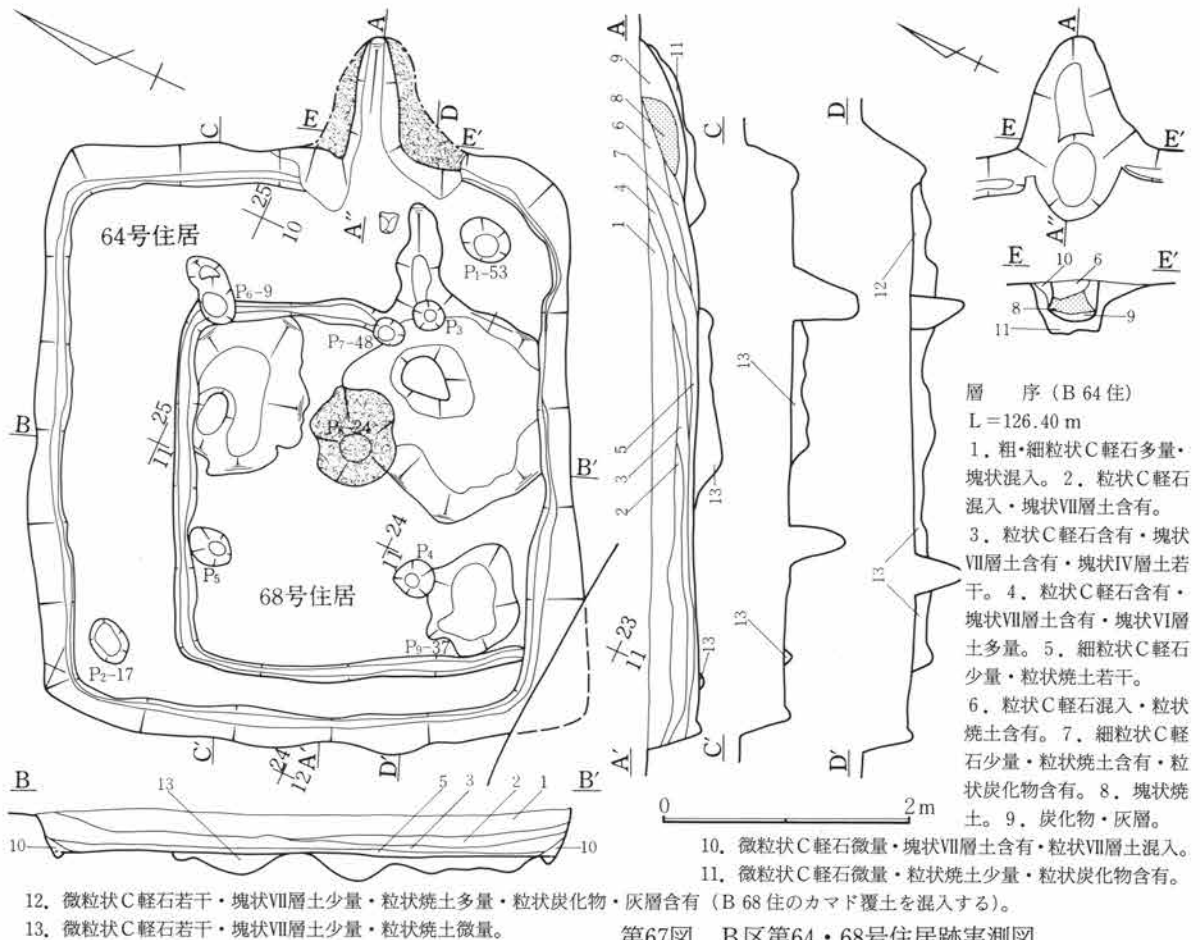
(64住) 住居跡は、東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを具備する。カマドは、両袖共に幅が広く堅固な状態である。煙道は焚口先端乃至燃烧部程より緩やかに立ち上がっており煙道長は長い。主柱穴と考えられるものはP<sub>3</sub>～P<sub>6</sub>の4本とP<sub>7</sub>がP<sub>6</sub>の補助材的なものと考えられる。P<sub>1</sub>は傍竈坑である。P<sub>2</sub>は深度が17cmで浅い為不分明点があるが、位置的に上屋の支柱材の据え方とも考えられる。壁溝は幅が狭いものの全周する。

(68住) 住居跡は、上述の64住の構築に伴ない床面より上位は破壊されている。残存面は床面より下位の状態である。カマドは東壁中央より南東隅部に寄った位置で掘り方のみが残存する。壁溝は南壁下以外が残存する。北・南隅部周辺の掘り込みは当住居構築時の掘り方と考えられる。

上述の両者の共通点として先ず指向方位が同一である点が挙げられる。又、この点ではP<sub>4</sub>周辺を中心にし対称的に認められる点。そして、南壁は共有する点である。この大きな2点により冒頭で述べたとおりの結論に達した。住居跡は出土遺物が殆ど無いため分明時期は言及しかねるが、C区第II段階頃と考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物

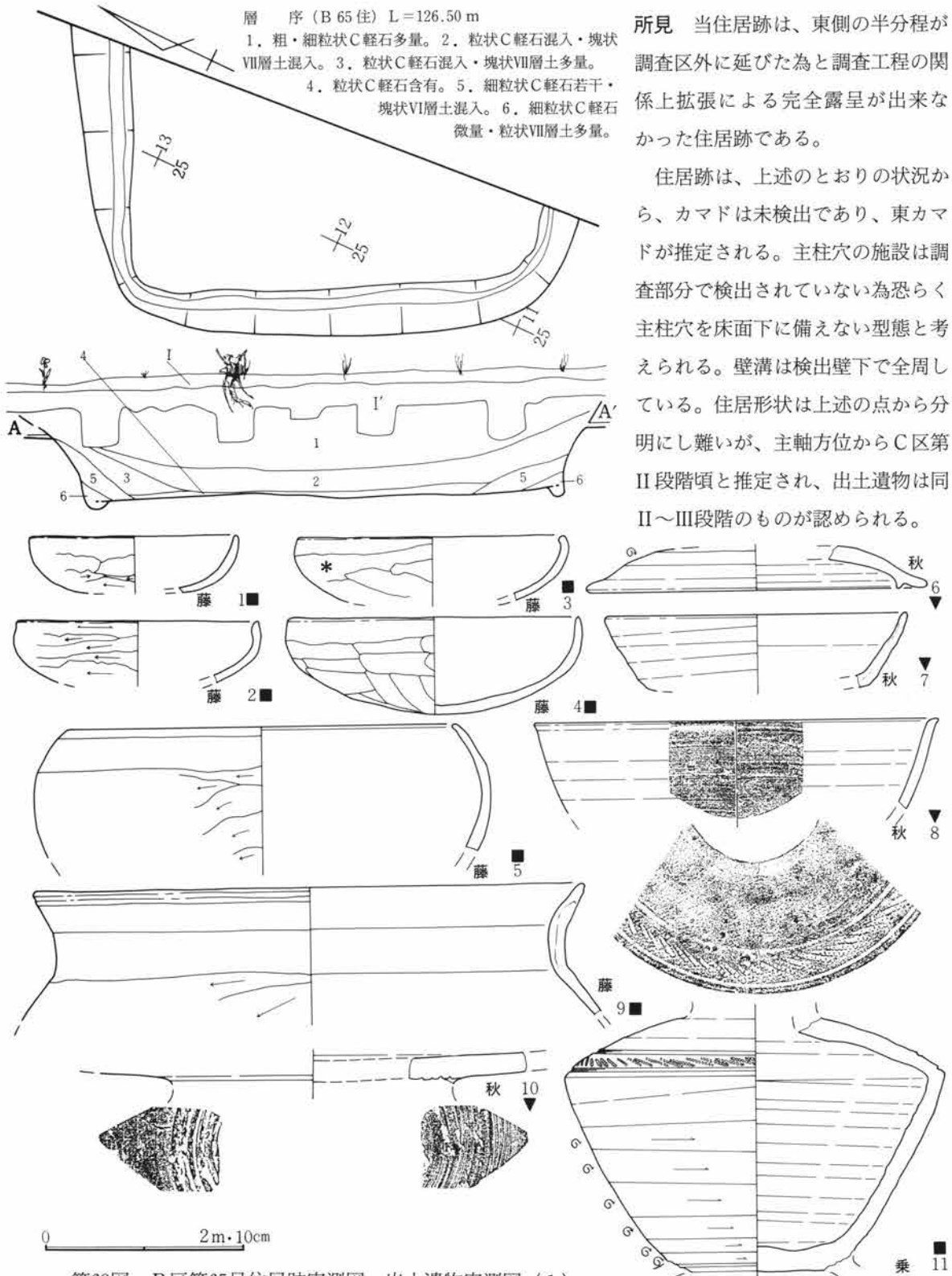
遺構名称	B区第64号住居跡		位置	23~25-B-9~12グリッド内。		残存深度	約35cm
平面形態	矩形。	規模	4.8m×4.32m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-65度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。			
壁溝	全周。幅員22~10cm		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> か。楕円形。40×33cm・深度-53cm			
柱穴	支柱穴はP <sub>3</sub> ~P <sub>7</sub> 。P <sub>7</sub> はP <sub>3</sub> の補助柱穴か。P <sub>2</sub> は使途不明。						
掘り方	B68住との重複部分で認められるが、本跡に伴うかは不明。寧ろ、B68住に伴うと考えられる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から82cm。				主軸方位	北-70度-南
改築	不明。		形状	細い舌状。			
規模	全長138cm・屋外長 92cm・屋内長 46cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 40cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃烧部	左右両袖間の若干の部分が広く、この部分に焚口が想定されるが、器設部を考慮すれば殆ど両者が重複すると考えられる。						
	袖	堅固で大きい。補強材は認められなかった。					
煙道	仰角30~40度で細く立ち上がる。		掘り方	舌状を呈する。			
遺物出土状態	全体に少なく、覆土内での出土が主体で被片が大半である。						
遺構名称	B区第68号住居跡		位置	23~25-B-9~11グリッド内。		残存深度	約0cm
平面形態	正方形。	規模	3.1m×3.16m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-65度-南
壁	詳細不詳。		床面	64住の構築に伴ない失なっている。B64号住の破壊により			
詳細不詳。			傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			



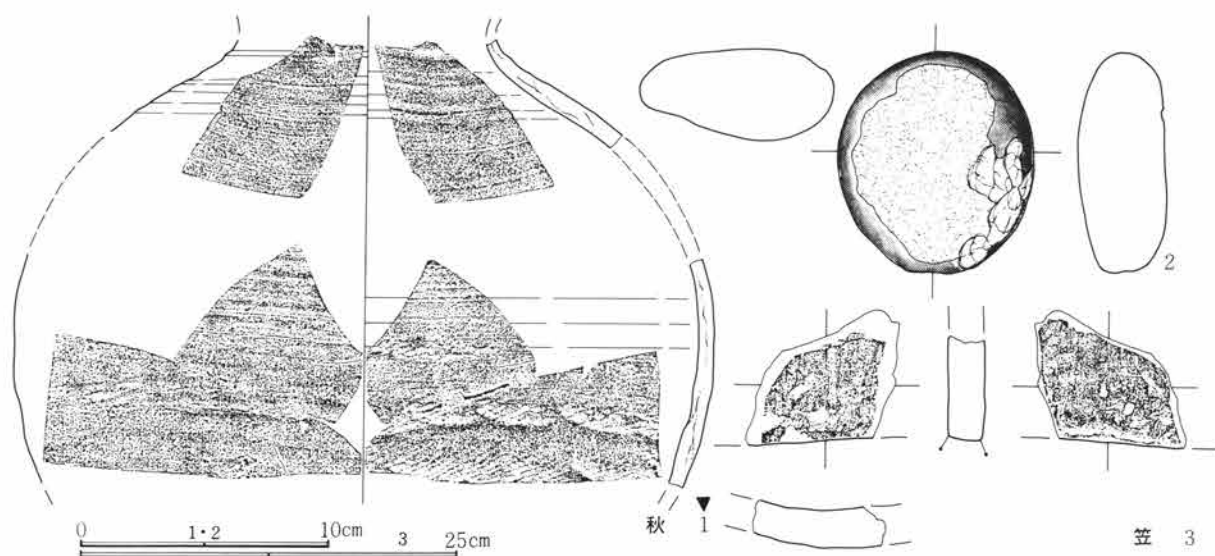
第67図 B区第64・68号住居跡実測図



遺構名称	B区第65号住居跡	位置	10～13-B-24・25グリッド内。	残存深度	約60cm
平面形態	不分明。	規模	5.12m×3.12+αm	構築基準辺	北壁
				主軸方位	北-65度-南
住居の東側半分が調査区外に延びる。壁溝は全周するか。					



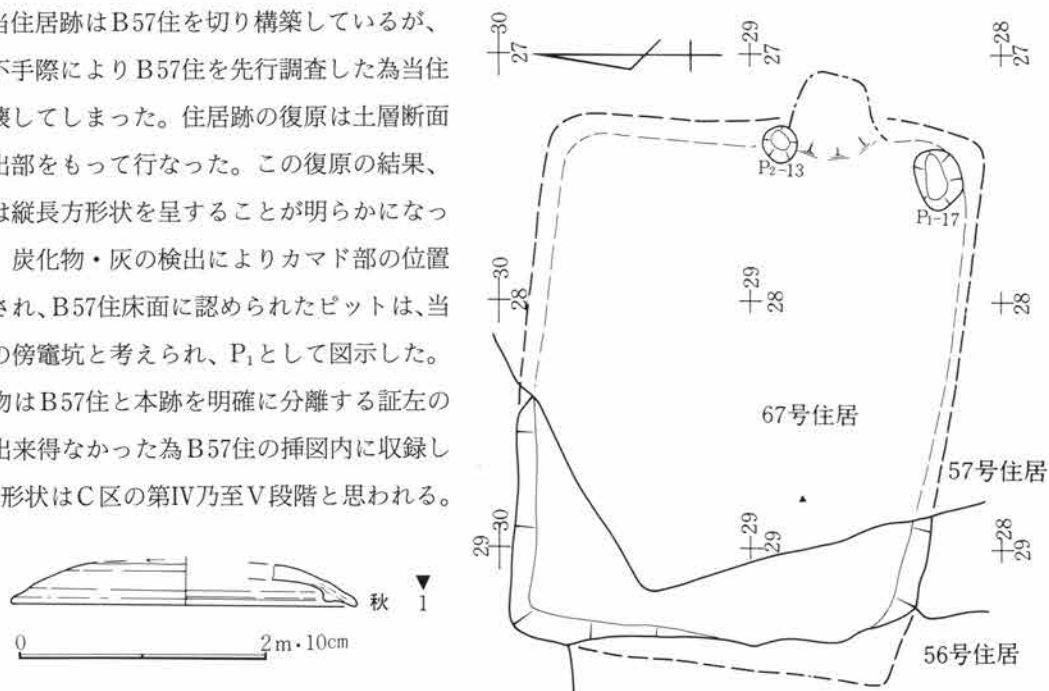
第4章 検出された遺構・遺物



第69図 B区第65号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第67号住居跡		位置	27~29-B-28・29グリッド内。			残存深度	約37cm
平面形態	縦長方形。	規模	(4.28)m× 3.3m	構築基準辺	不詳	主軸方位	北-98度-南位か。	
調査の不手際により住居を破壊している。この為詳細不明。								

所見 当住居跡はB57住を切り構築しているが、調査時不手際によりB57住を先行調査した為当住居を破壊してしまった。住居跡の復原は土層断面及び検出部をもって行なった。この復原の結果、住居跡は縦長形状を呈することが明らかになった。又、炭化物・灰の検出によりカマド部の位置も推定され、B57住床面に認められたピットは、当住居跡の傍竈坑と考えられ、P<sub>1</sub>として図示した。出土遺物はB57住と本跡を明確に分離する証左の検証が出来得なかった為B57住の挿図内に収録した。住居形状はC区の第IV乃至V段階と思われる。

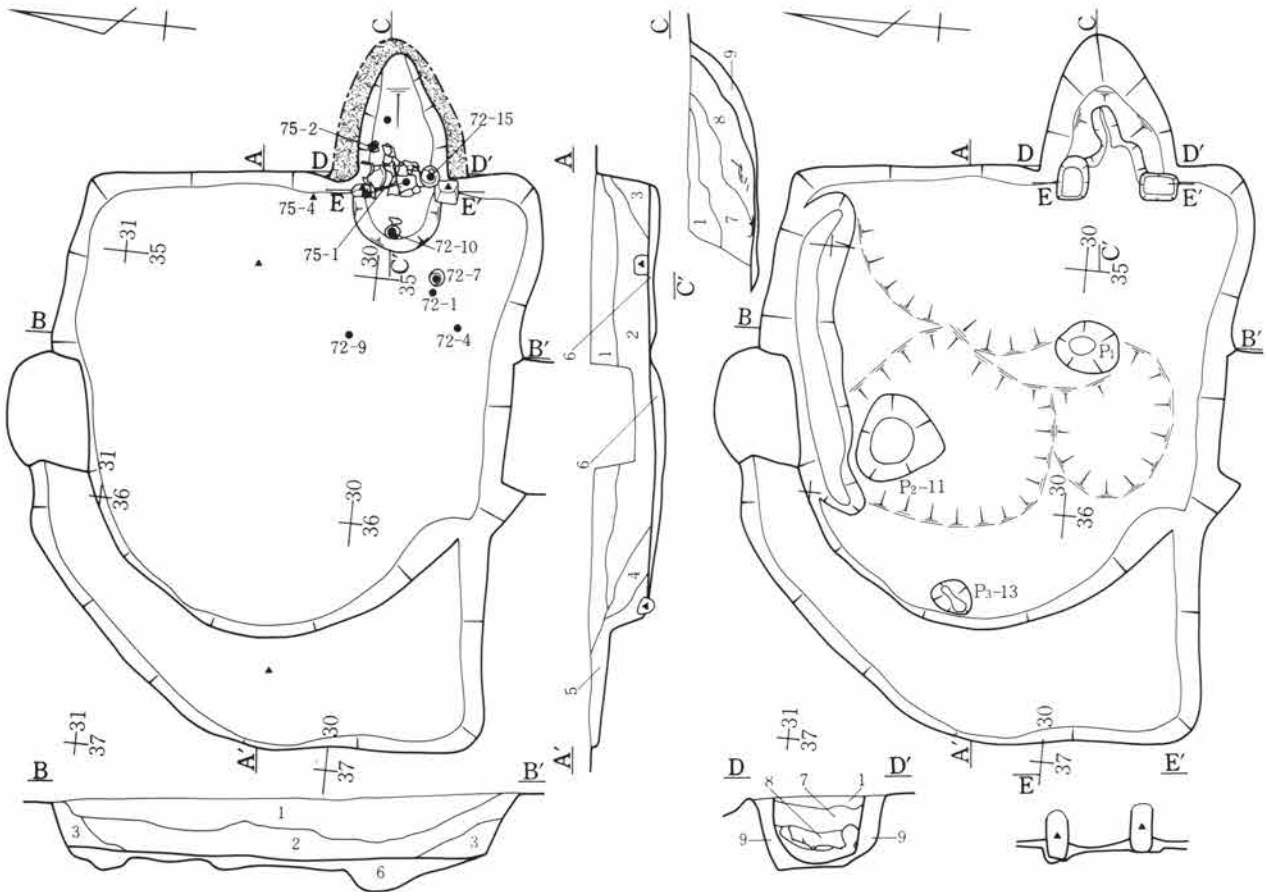


第70図 B区第67号住居跡実測図・出土遺物実測図

所見 (B73住) 本住居跡は試掘調査時に確認された住居跡で、一部が同時のトレンチにより破壊されている。住居は東壁中央より南東隅部寄りにカマドを具備する。カマドは両袖に地山砂岩質土の截り出し材を用い、更に焚口天井部に土師器長甕2個体(第75図-1・2)を用い構築している。住居跡の形状・状態は、平面図に図示した如く、西壁側が不整形になっており、住居掘削構築途中で中ば不完全な状態で上屋を構築したかの如くである。出土遺物はC区の第III段階以降の空白期の様相と考えられる。

第3節 検出された住居跡について

遺構名称	B区第73号住居跡		位置	29～31—B—34～36グリッド内。		残存深度	約45cm
平面形態	長方形基調。	規模	4.64m×3.82m	構築基準辺	東壁	主軸方位	北-83度-南
壁	ほぼ垂直～斜位に立ち上がる。		床面	平坦。全体的に造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状に浅いものが多い。図示した平面図は、断面図・写真から復原した。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-83度-南	
改築	有。掘り方内の焼土・炭化物が多い。			形状	舌状。		
規模	全長158cm・屋外長100cm・屋内長 58cm・袖部幅 83cm・燃烧部幅 63cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。焚口天上は土器を用いる。						
	袖	礫を用いる。礫は角柱状に成形されている。					
煙道	仰角55度位で立ち上がる。			掘り方	大きい舌状を呈し、袖材の据え方を検出。		
遺物出土状態	カマド前面に完形個体等の遺物が床面直上で出土している。						

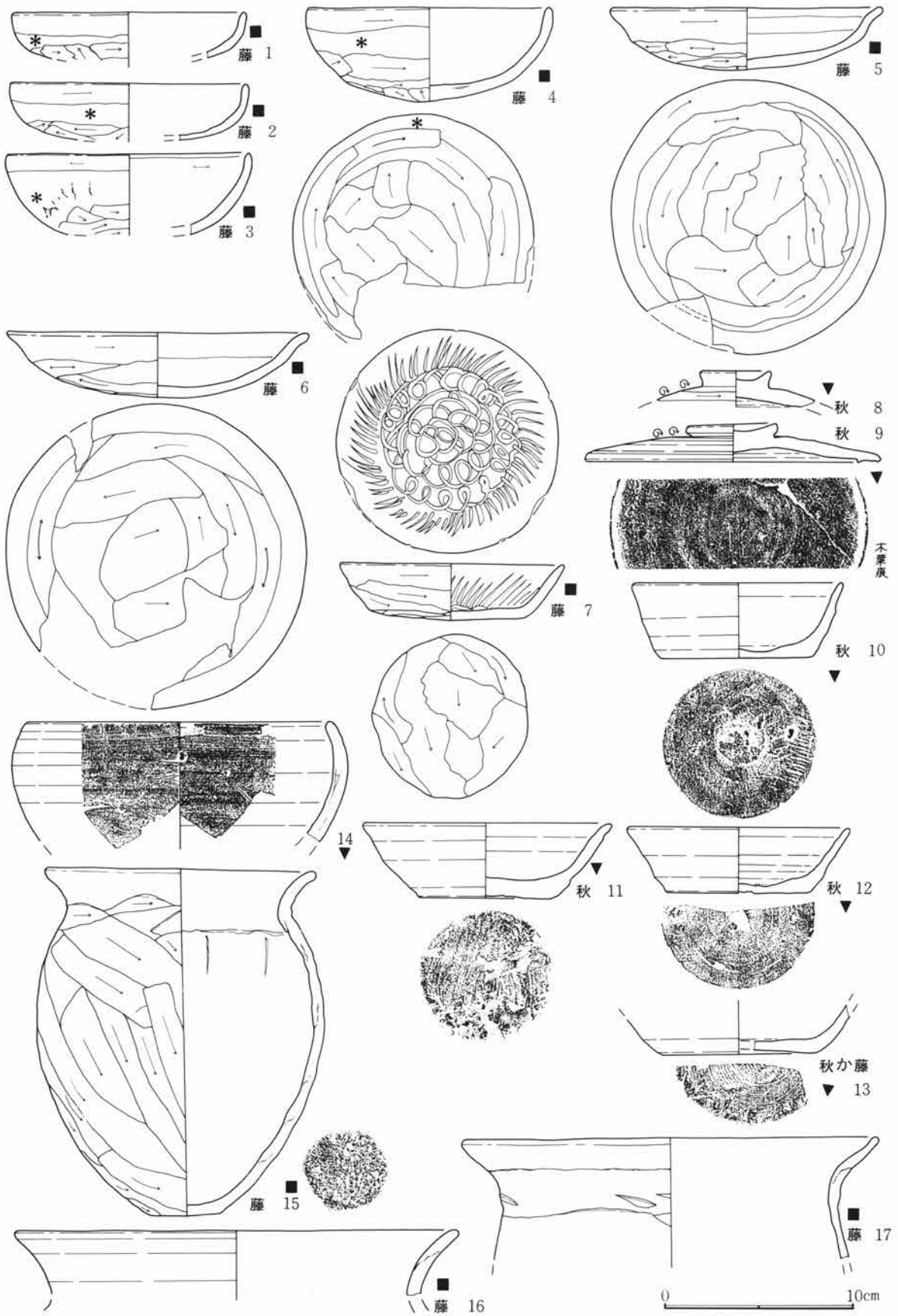


層 序 (B 73 住) L=126.80 m

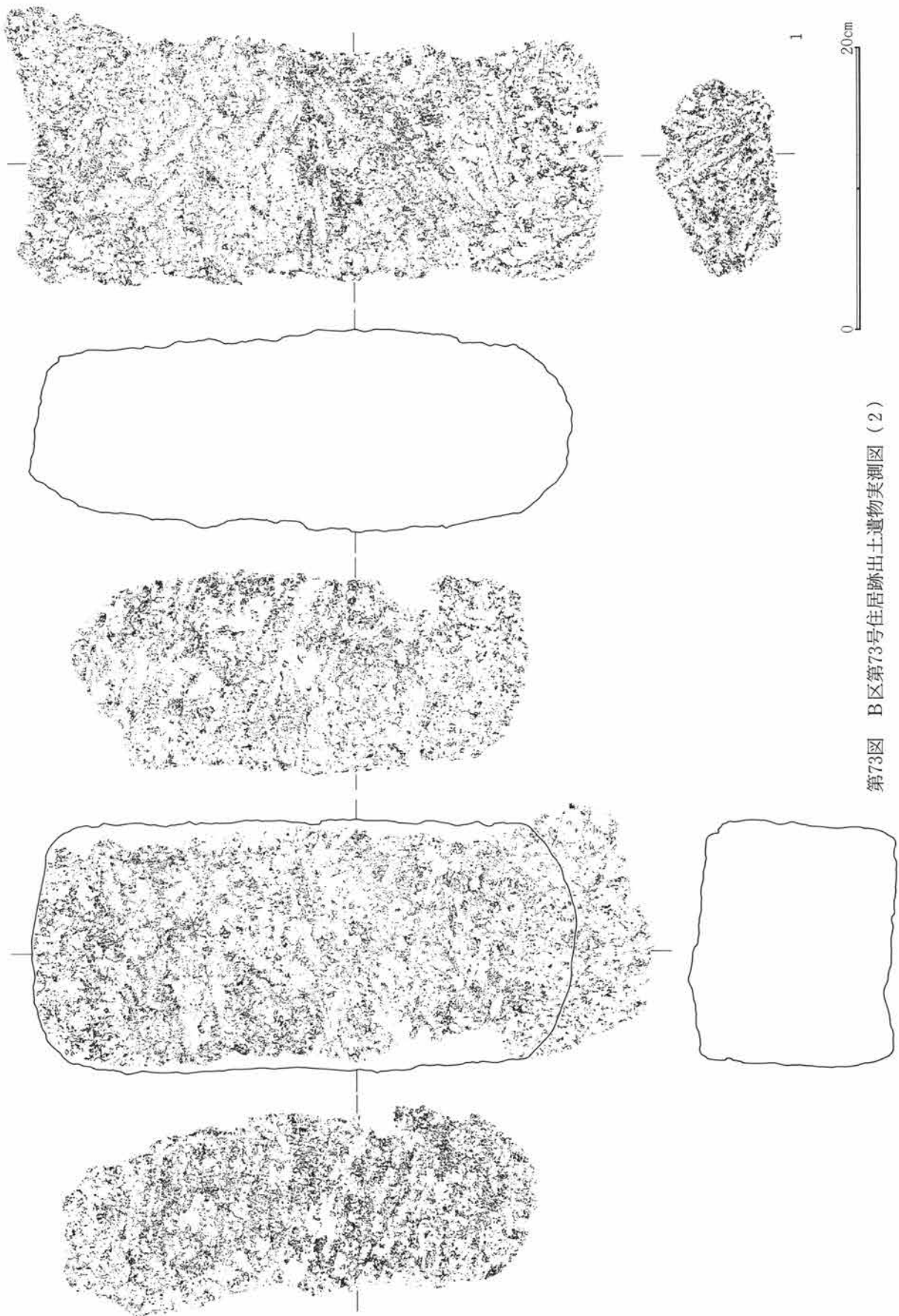
1. 粗・細粒状C軽石多量。
2. 粒状C軽石混入・塊状VII層土少量。
3. 細粒状C軽石若干・塊状VI層土多量。
4. 粒状C軽石多量。
5. 細粒状C軽石少量(粘質土)。
7. 粒状C軽石多量・粒状焼土多量。
8. 細粒状C軽石少量・粒状焼土多量。
9. 細粒状C軽石若干・粒状焼土混入・粒状炭化物含有。

第71図 B区第73号住居跡実測図

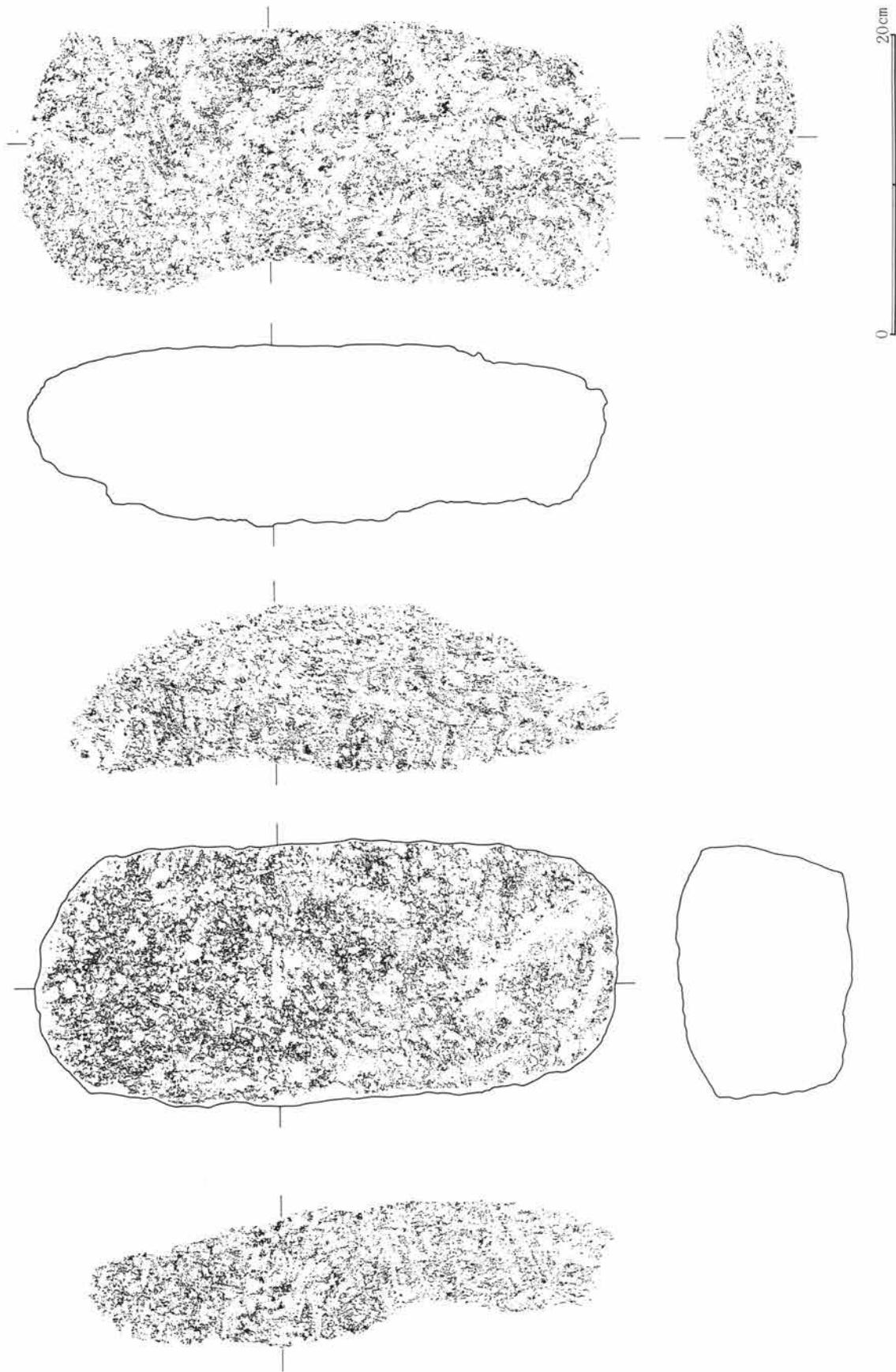
0 2m



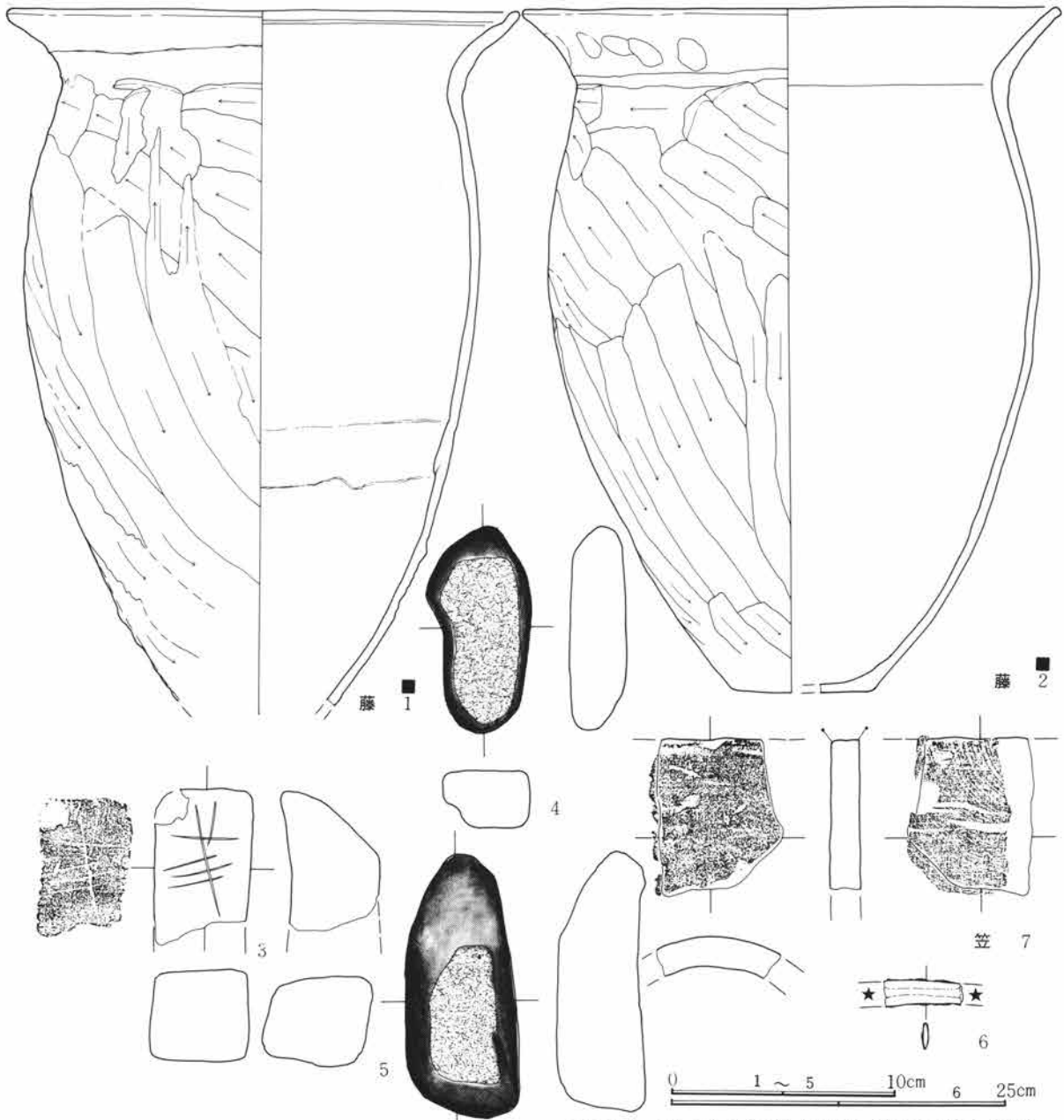
第72図 B区第73号住居跡出土遺物実測図(1)



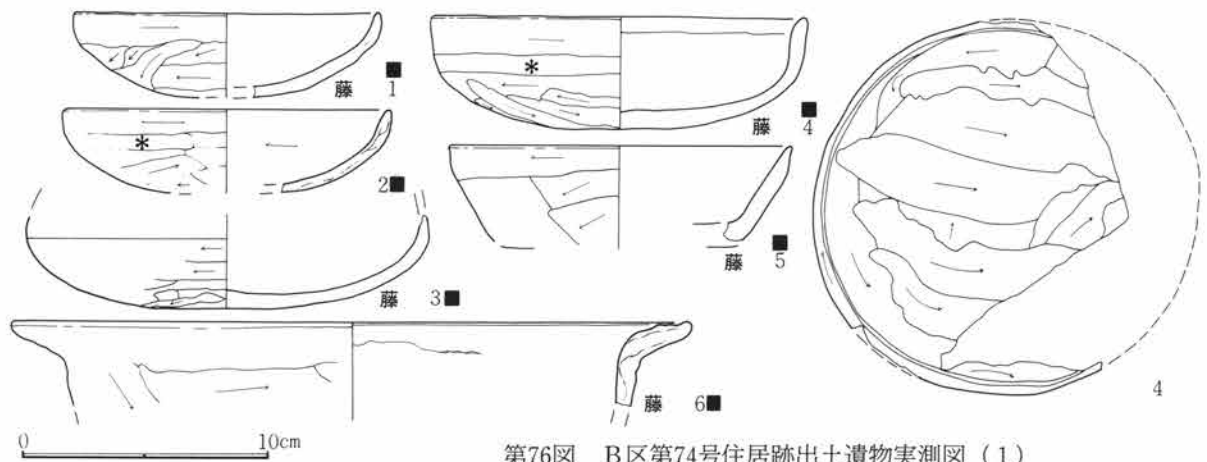
第73図 B区第73号住居跡出土遺物実測図(2)



第74図 B区第73号住居跡出土遺物実測図(3)



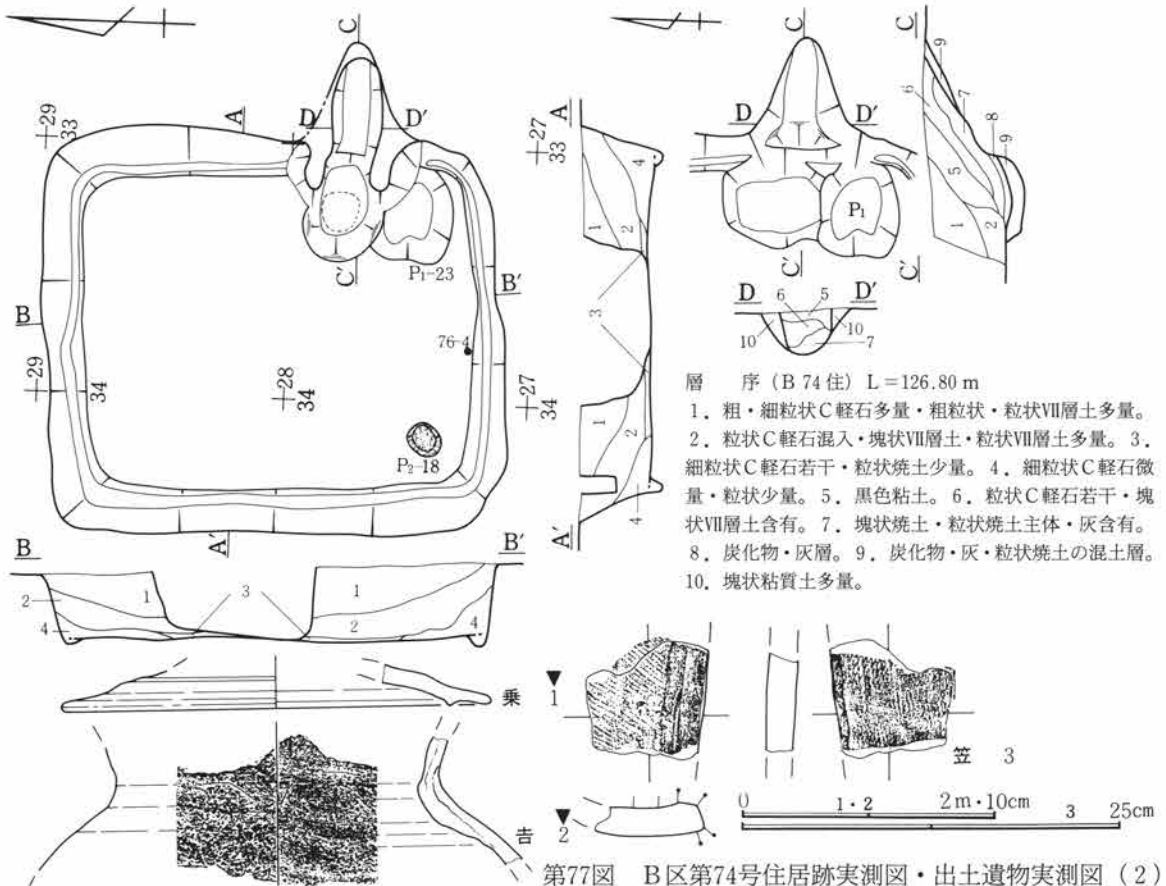
第75図 B区第73号住居跡出土遺物実測図(4)



第76図 B区第74号住居跡出土遺物実測図(1)

遺構名称	B区第74号住居跡		位置	27・28-B-32~34グリッド内。		残存深度	約60cm
平面形態	横長方形。	規模	3.2m×3.74m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-88度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。造床はなかった。			
壁溝	全周。幅員 8~30cm		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・隅丸方形。74×66cm・深度-23cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から40cm。			主軸方位	北-93度-南	
改築	有。火床面は確実に変えられている。			形状	舌状。		
規模	全長158cm・屋外長 65cm・屋内長 93cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 38cm・煙道部幅 38cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	両袖共に幅が広く堅固である。屋内側にやや長く突出する。					
煙道	仰角60度柱で立ち上がり長く突出する。		掘り方	煙道部は三角形状で焚口部は土坑状である。			
遺物出土状態	遺物は覆土内での出土が大半である。						

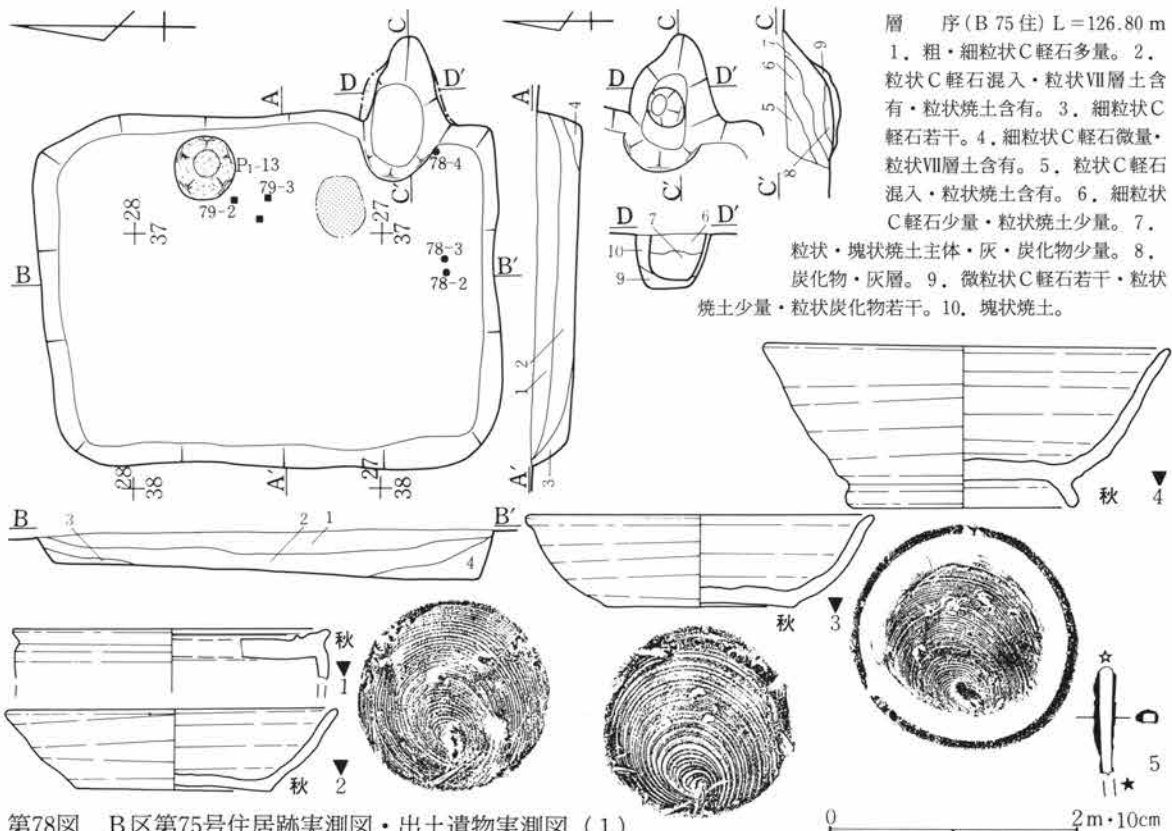
所見 当住居跡は東壁中央より南東隅部側に偏在シカマドを具備し、南東隅部で東壁寄りの位置に備える傍竈坑と重複する状態でカマドが構築されている。カマドは、両袖共に堅固で長く屋内側に突出している。壁溝は壁下で全周している。焚口は袖より更に屋内側に位置し灰等の掻出しによりやや深く窪んだ状態になっている。煙道は燃烧部奥壁より若干立ち上がった位置から斜位に長く屋外に延びている。出土遺物は非常に少なく、図示し得たものは3点に過ぎない。住居形状も第III段階に類するが空白期の可能性が高い。





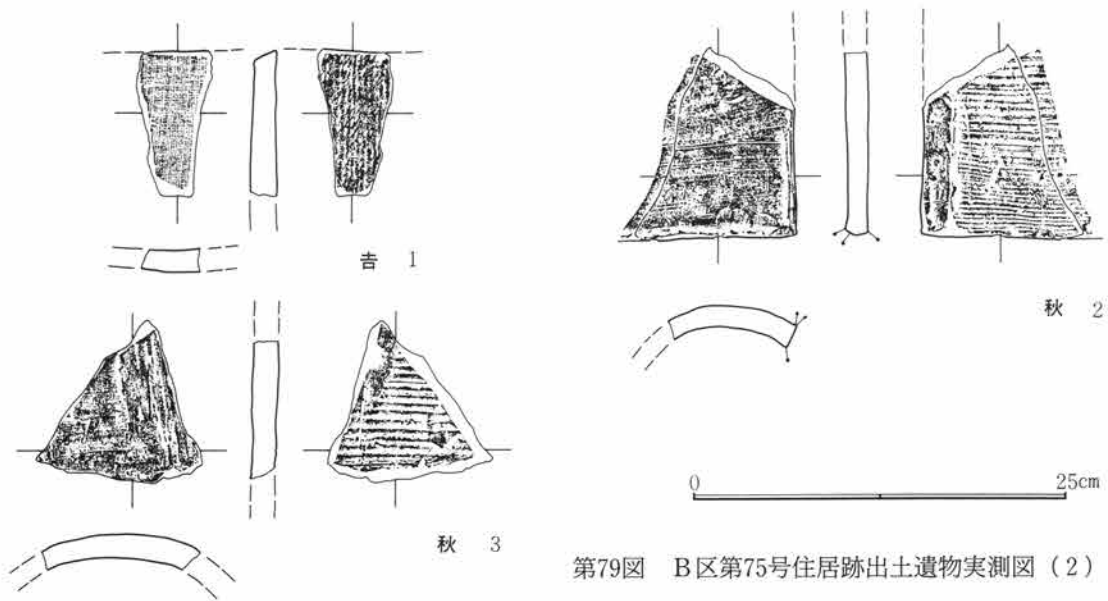
遺構名称	B区第75号住居跡		位置	27~28-B-37・38グリッド内。		残存深度	約36cm
平面形態	横長方形。	規模	2.78m×3.72m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味~斜位に立ち上がる。		床面	地山VII・VI層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> か。円形状。径47cm・深度-13cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から27cm。			主軸方位	北-99度-南	
改築	有。掘り方底面の理土から焼土を検出。		形状	舌状。			
規模	全長114cm・屋外長 66cm・屋内長 48cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 54cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	瘤状で僅かに屋内側に突出している。					
煙道	未検出。		掘り方	燃烧部で壁・火床下が顕著である。			
遺物出土状態	遺物は少ない。床面直上遺物として、カマド右袖部で第78図-4が出土している。						

所見 当住居跡はB161B住・76住を切り構築している。カマドは東壁で南東隅部に偏在した位置に付設し、燃烧空間の幅は広く、煙道は斜位に燃烧部底面から立ち上がっている。傍竈坑は認められなかったが、傍竈坑に類すると考えられる施設と思われるP<sub>1</sub>が東壁中央よりやや北東隅部に寄った位置で検出されている。床面は平坦であるが水平では無く、南・東に向かい傾斜した状態であった。出土遺物は量的に少量であるが、C区第IV~VI段階の住居跡に伴う土器類に共通するが、全体的に第IV段階に対比される。この点から、住居形状も同階呈に近い頃に対比されると考えられ、9世紀前半代の住居跡と考えられる。



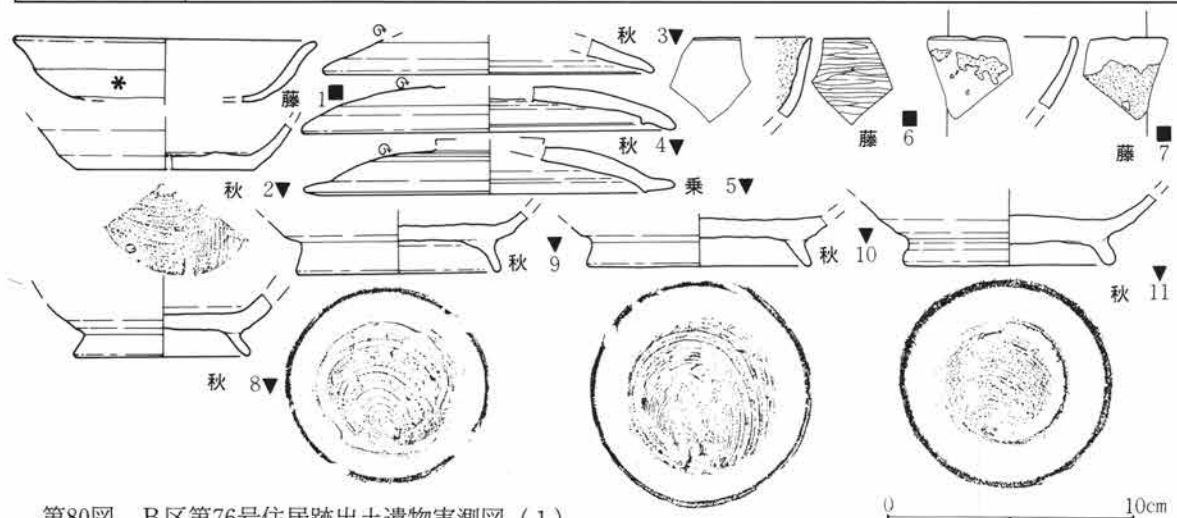
第78図 B区第75号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第79図 B区第75号住居跡出土遺物実測図(2)

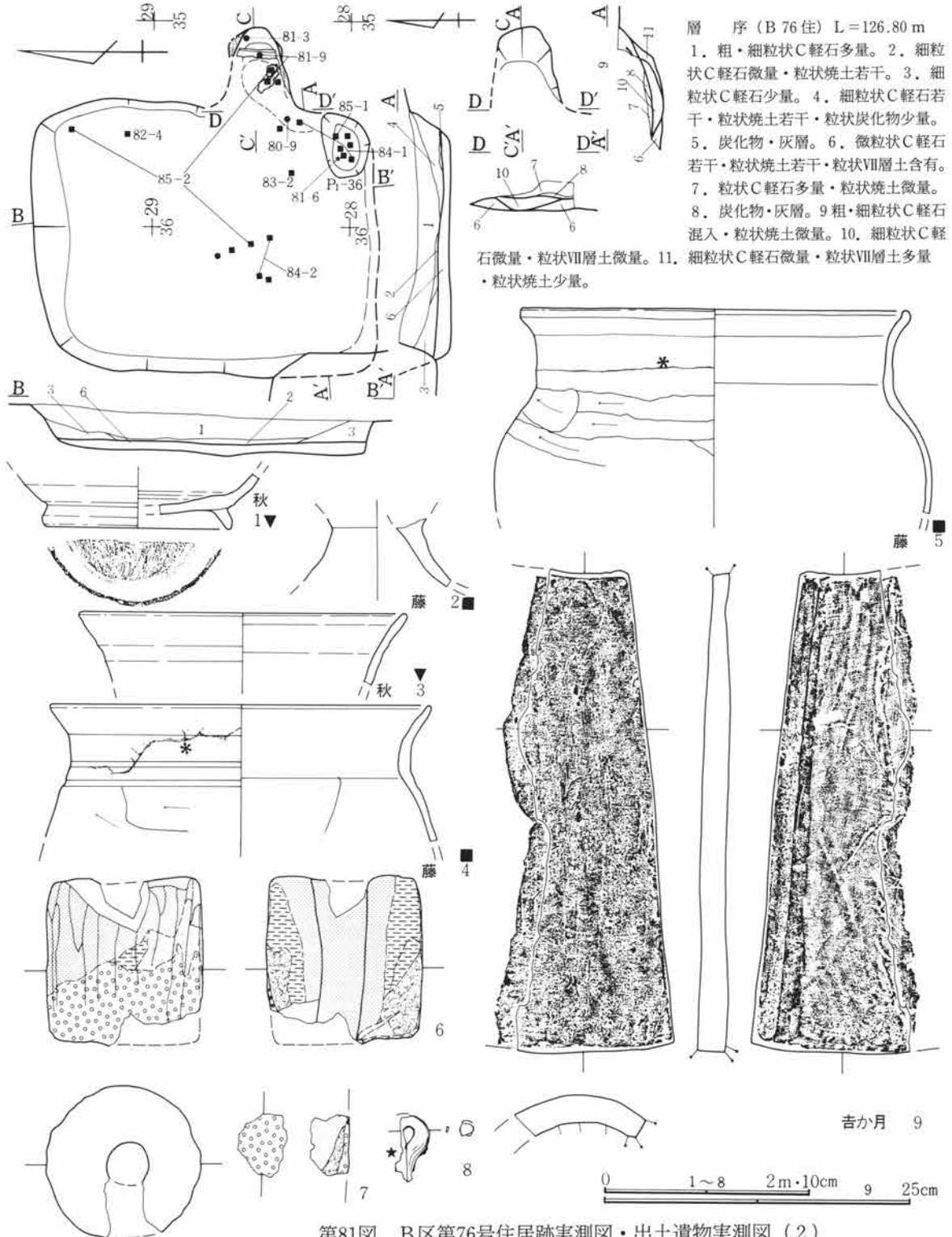
遺構名称	B区第76号住居跡		位置	27~29-B-35・36グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	横長方形。	規模	2.65m×3.44m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-0度-南
壁	斜位気味~斜位に立ち上がる。		床面	平坦。全面造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・不整楕円形。62×50cm・深度-36cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全面に認められるが、底面はほぼ平坦。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm。			主軸方位	不分明	
改築	有。2回の改築が考えられる。		形状	舌状と考えられるが、詳細不分明。			
規模	全長108cm・屋外長 80cm・屋内長 28cm・袖部幅70?cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	調査の不手際の為詳細不分明。					
煙道	立ち上がり部周辺を瓦で補強している。		掘り方	調査の不手際により詳細不分明。			
遺物出土状態	床面直上、床面直上層での瓦の出土が多い。						



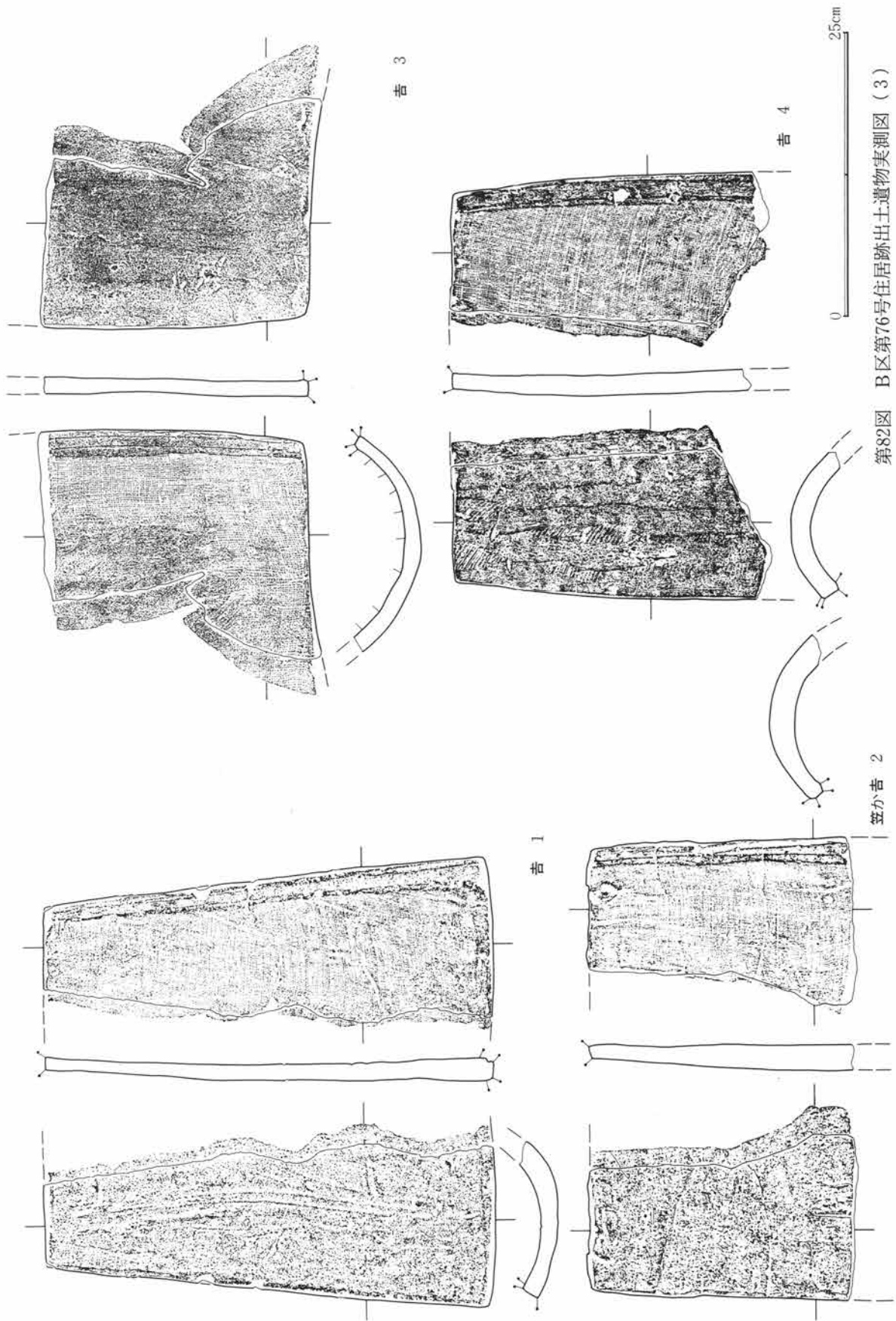
第80図 B区第76号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について

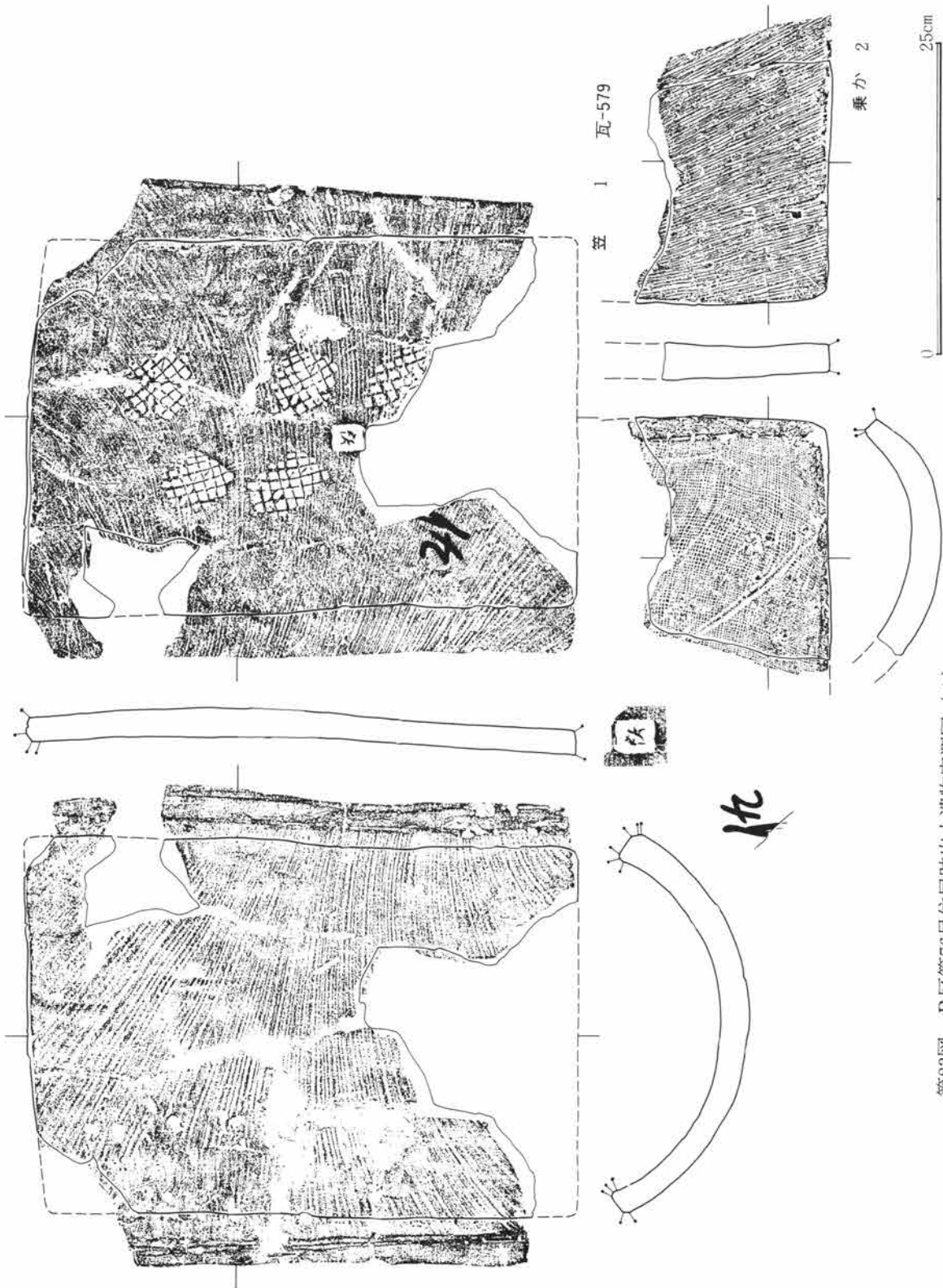
所見 当住居跡はB161A住を切り構築している。住居跡は調査の不幸により南壁及びカマド部分は平面露呈出来なかった。南壁の推定は土層断面により図上に復原した。カマドは、東壁中央部よりやや南東隅部寄りに具備し、南東隅部に傍竈坑を備えている。カマドは調査の不幸により完全露呈は出来なかったが、瓦の大形片を用い部分補強する構造であることは判明している。出土遺物では第83図-1の瓦に「佐」の墨書が認められている。住居形状はC区の第VII段階に対比される。



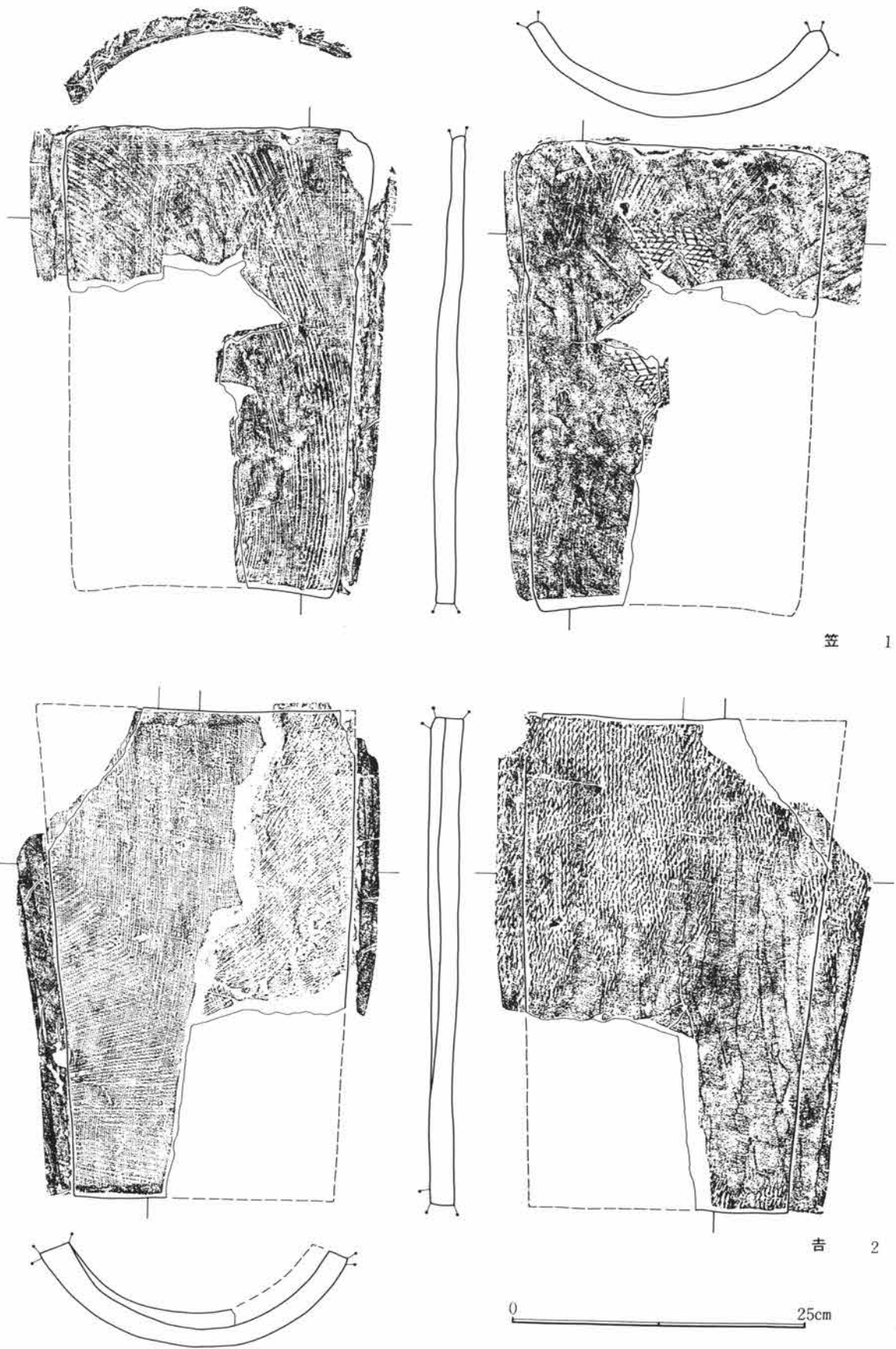
第81図 B区第76号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



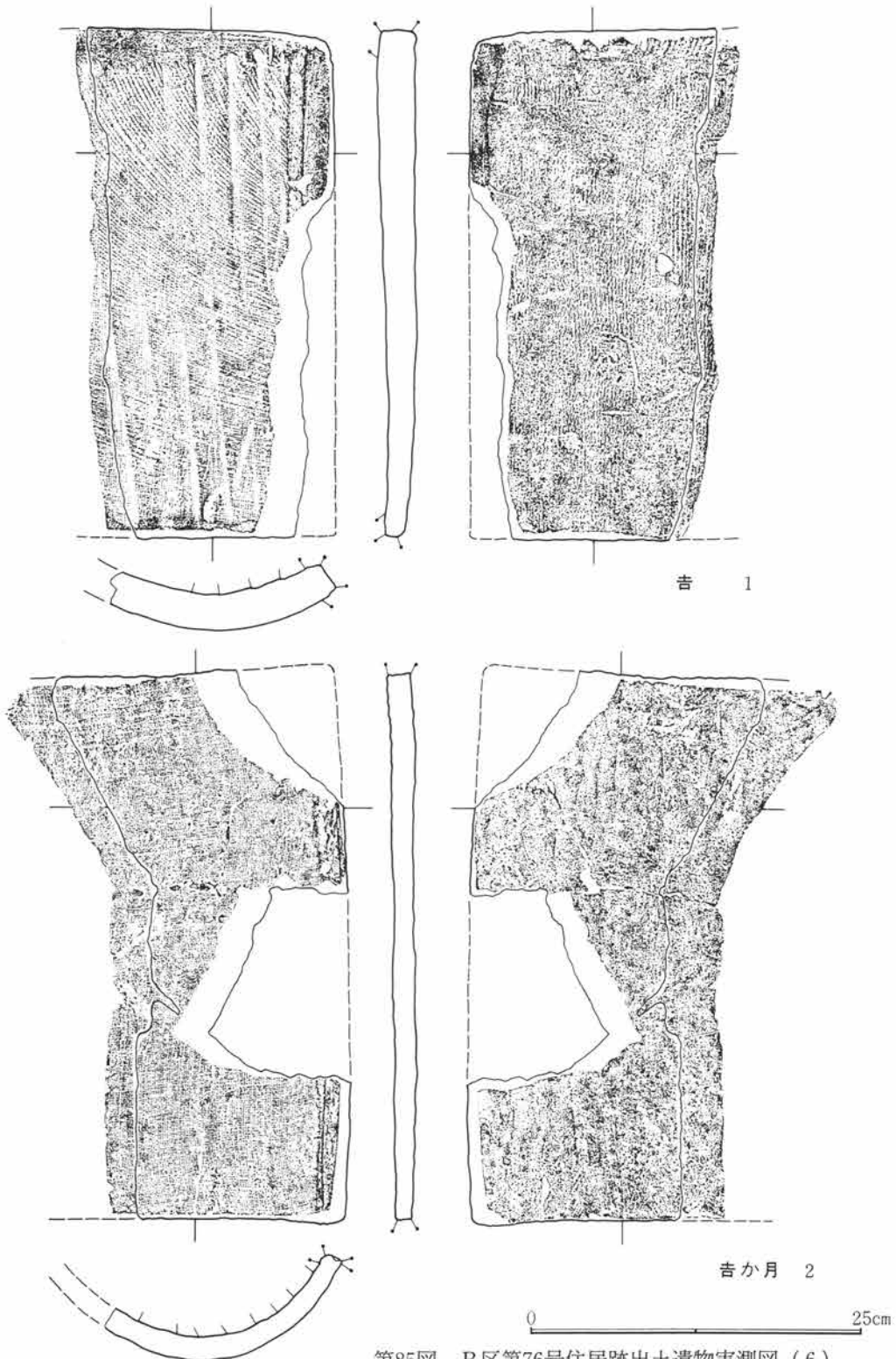
第82図 B区第76号住居跡出土遺物実測図(3)



第83図 B区第76号住居跡出土遺物実測図(4)



第84図 B区第76号住居跡出土遺物実測図(5)



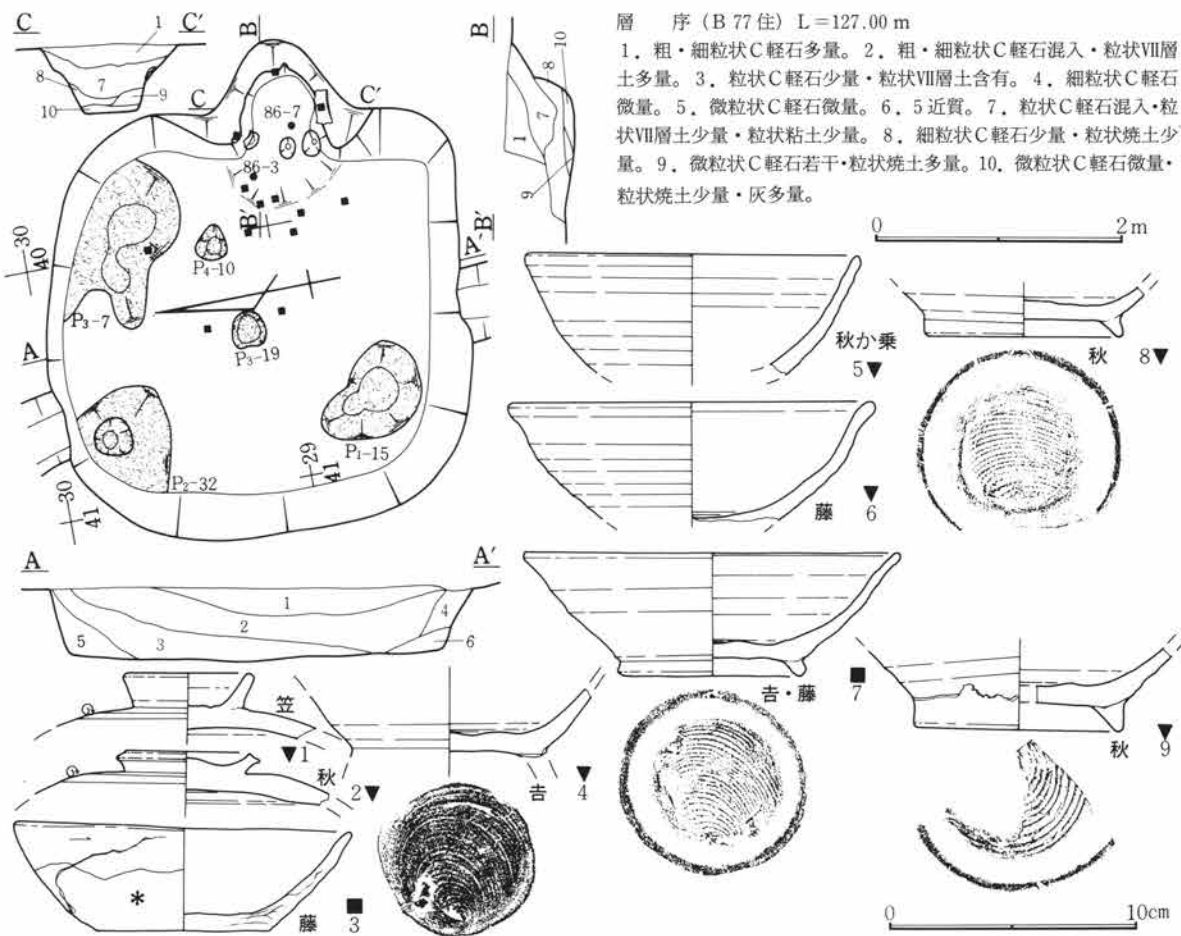
第85図 B区第76号住居跡出土遺物実測図(6)

所見 (B77住) 当住居跡は切り合い関係のない単独住居である。住居の平面形状は、南東隅部以外が丸味を強く帯びる「胴張り」状の形状であるが、基調な方形にしている。そして、南東隅部のみが東壁・南壁がほぼ直交する状態になっている。この部分での住居構築時の企画が想定される。このことは、この両壁に構築の基準が存在したことを顕わしている。

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	B区第77号住居跡		位置	39~41-B-28・29グリッド内。		残存深度	約57cm
平面形態	正方形基調。	規模	3.33m×3.5m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-100度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	P <sub>1</sub> ~P <sub>3</sub> の土坑状の掘り込みが認められた。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm。				主軸方位	北-100度-南
改築	無か。			形状	馬蹄形状を呈する。		
規模	全長134cm・屋外長 58cm・屋内長 76cm・袖部幅 158cm・燃烧部幅 68cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖は瓦により補強された状態。右袖は据え方を検出。					
煙道	未検出。		掘り方	外部が掘り方の可能性がある。			
遺物出土状態	床面直上層で瓦の出土が多く、カマド前面に集中する。						

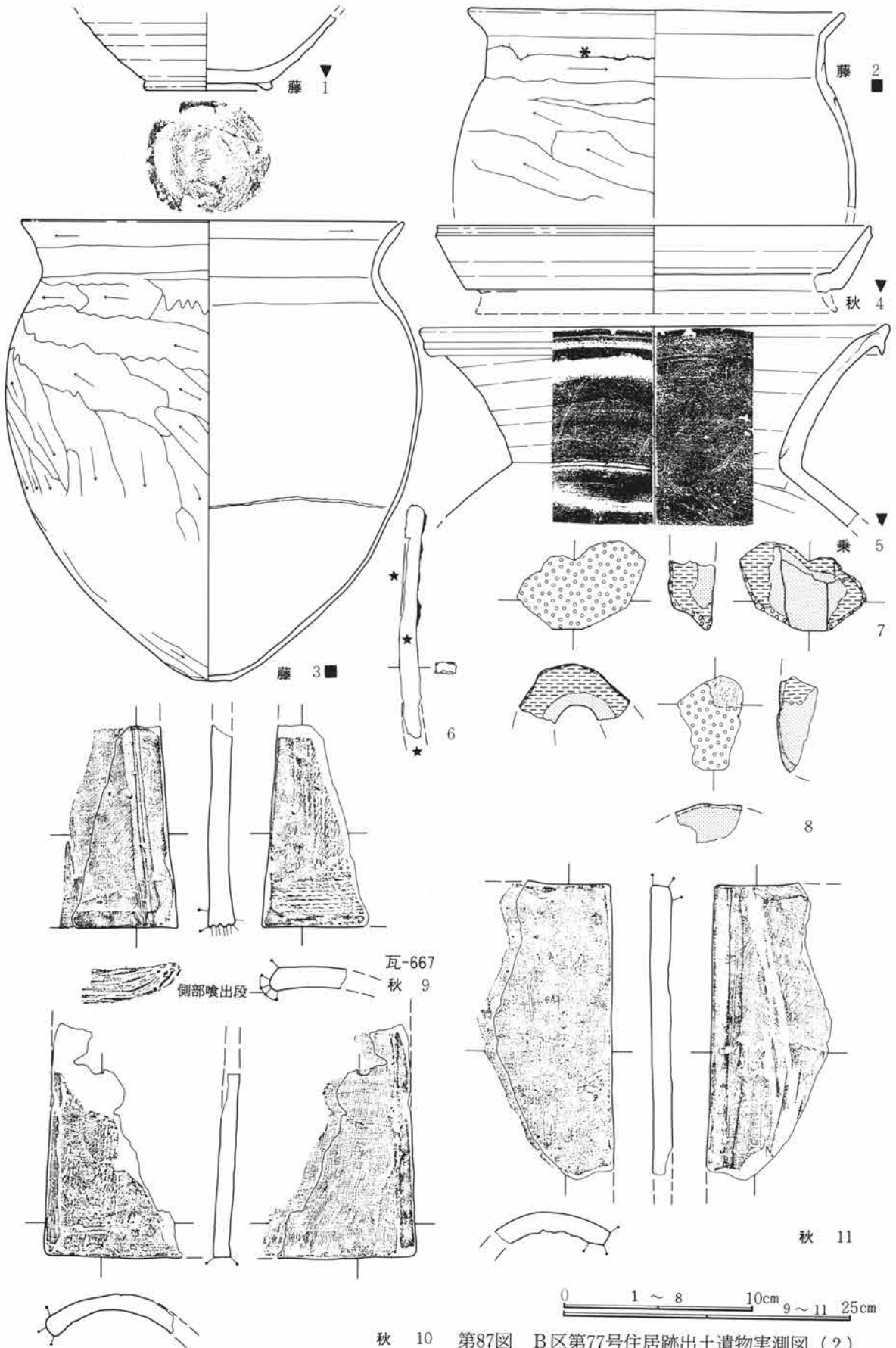
住居は、東壁中央部にカマドを具備する。カマドは礫・瓦により袖部周辺・燃烧部壁を補強している。掘り方は認められず、この点から大きな改築等がなされなかったことが想起される。出土遺物はカマド周辺に集中し大形の瓦片・ほぼ完形品等が多い。出土遺物からはC区の住居形状第IV段階に対比される。



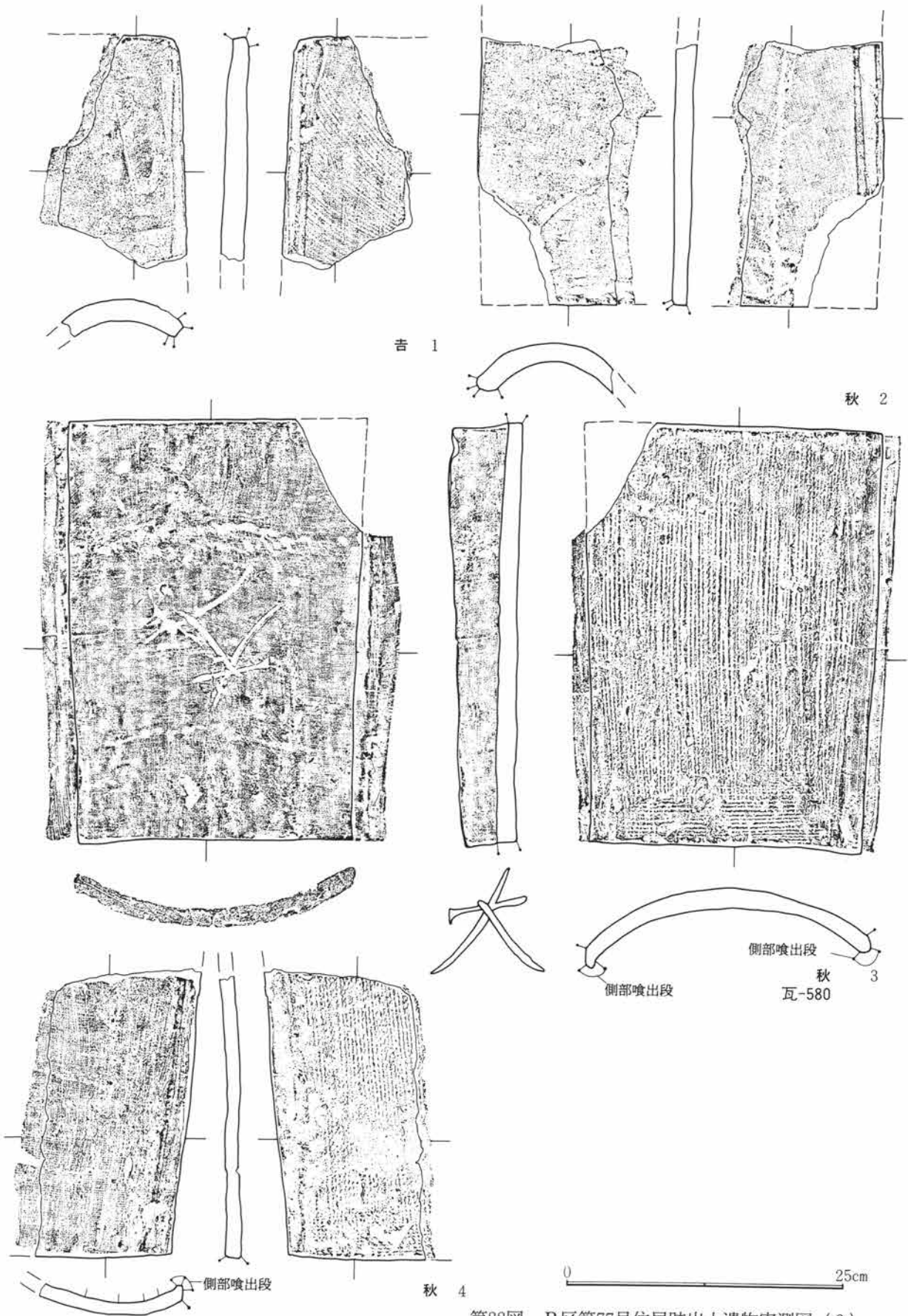
第86図 B区第77号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第3節 検出された住居跡について

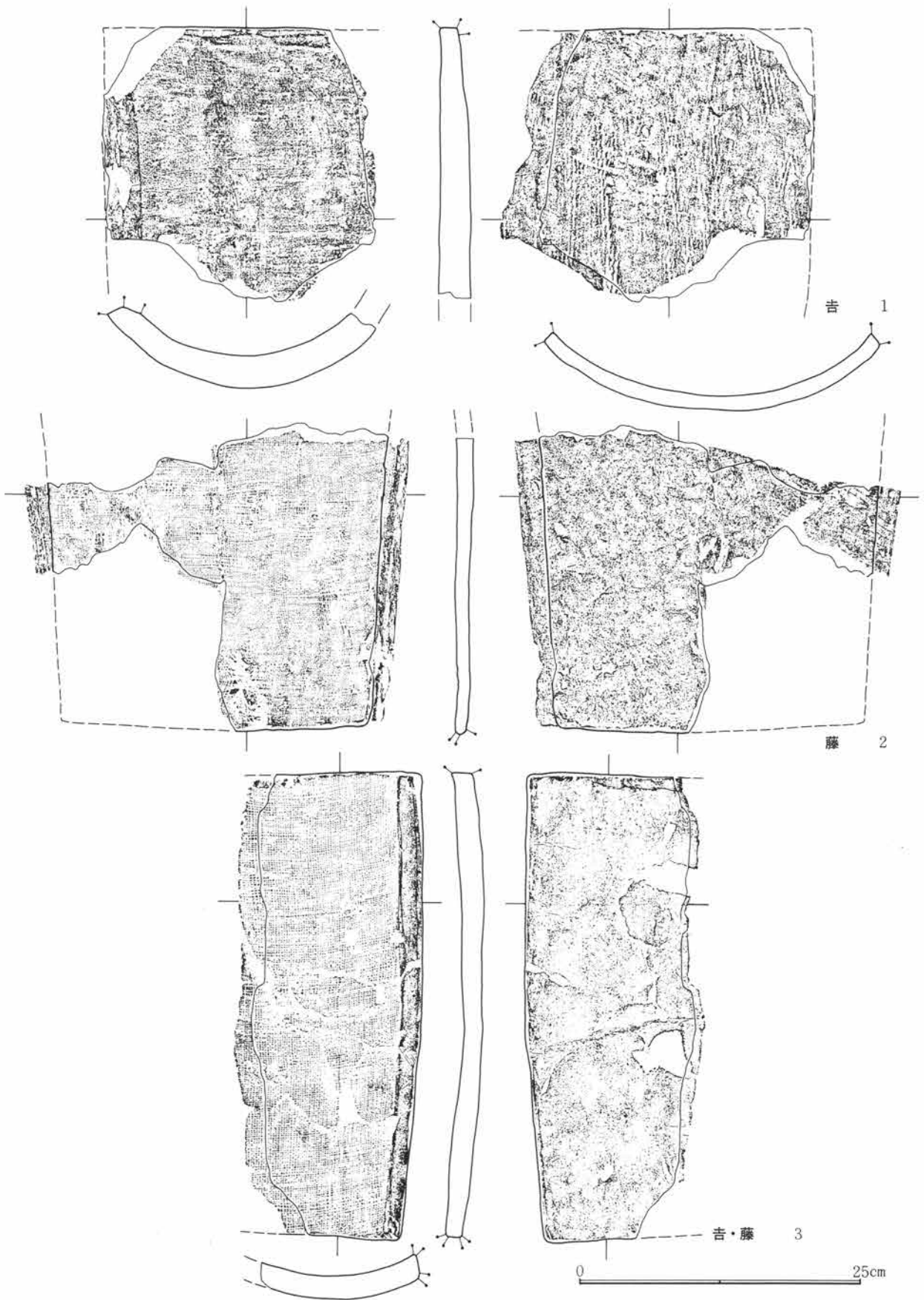


秋 10 第87図 B区第77号住居跡出土遺物実測図(2)

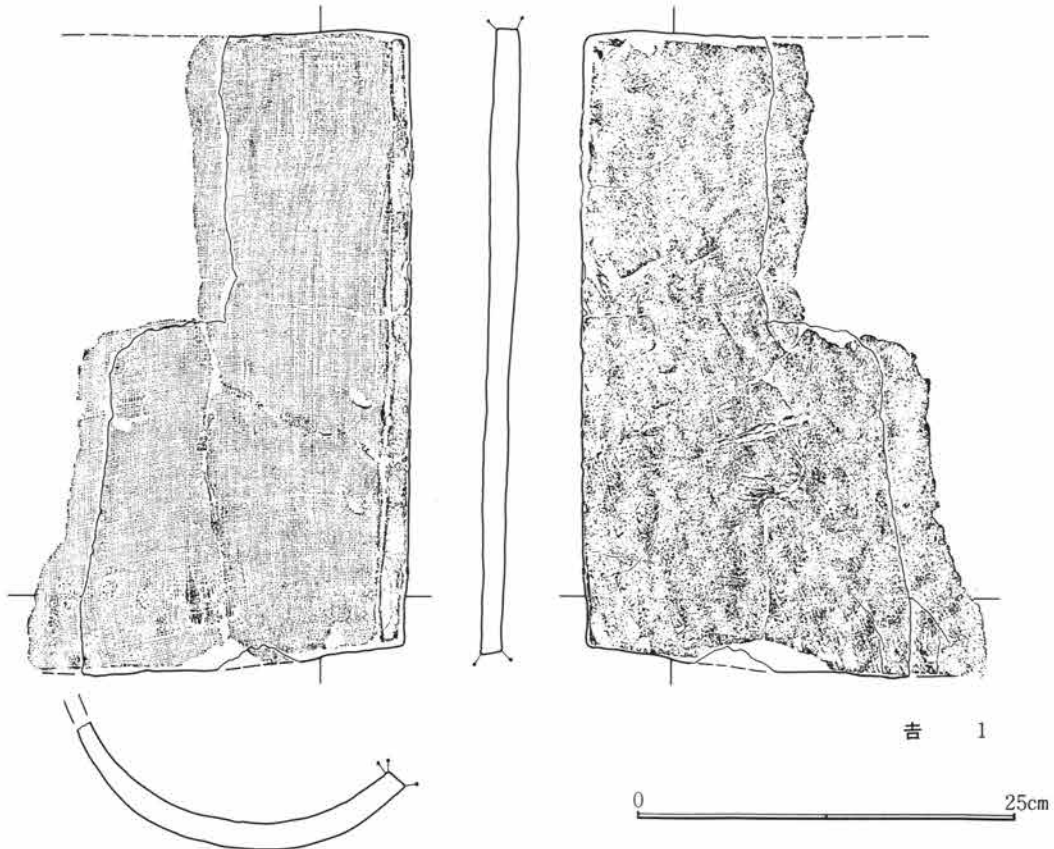


第88図 B区第77号住居跡出土遺物実測図(3)

第3節 検出された住居跡について



第89図 B区第77号住居跡出土遺物実測図(4)



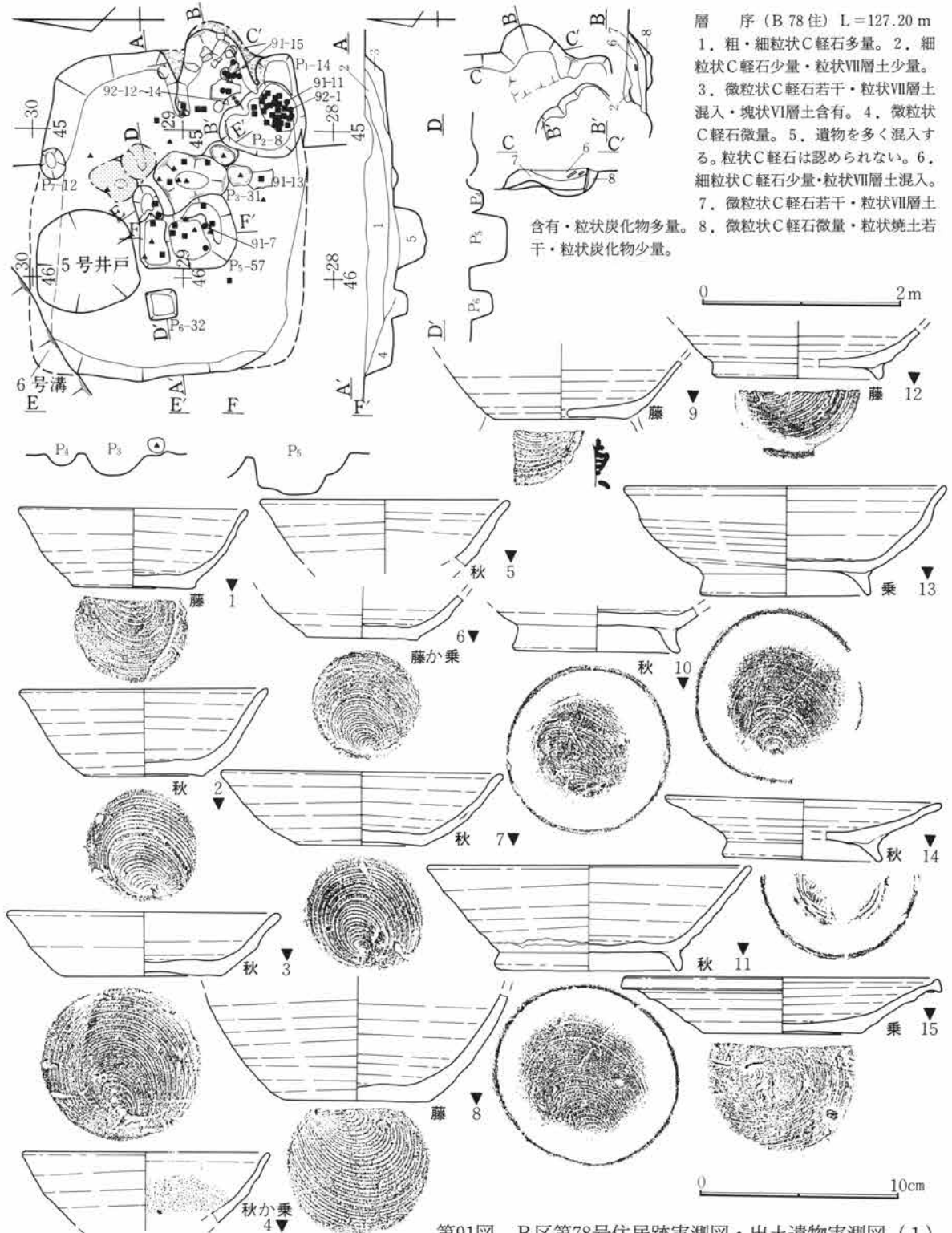
第90図 B区第77号住居跡出土遺物実測図(5)

遺構名称	B区第78号住居跡		位置	28・29-B-39~41グリッド内。			残存深度	約26cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.46m×3.48m	構築基準辺	不分明壁	主軸方位	北-90度-南位か。	
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用するも平坦ではない。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。60×38?cm・深度-14cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。(一部西壁下周辺が不明な部分がある。)							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から28cm。				主軸方位	北-77度-南	
改築	不分明な点があるが、有と思われる。			形状	馬蹄形状を呈する。			
規模	全長108cm・屋外長 33cm・屋内長 75cm・袖部幅145cm・燃烧部幅 84cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	細く長い。補助材は認められなかった。						
煙道	未検出。		掘り方	大きく、馬蹄形状を呈する。				
遺物出土状態	P <sub>3</sub> ・P <sub>5</sub> から集中出土し、スラグが非常に多い。又、羽口の出土もやや多い。							

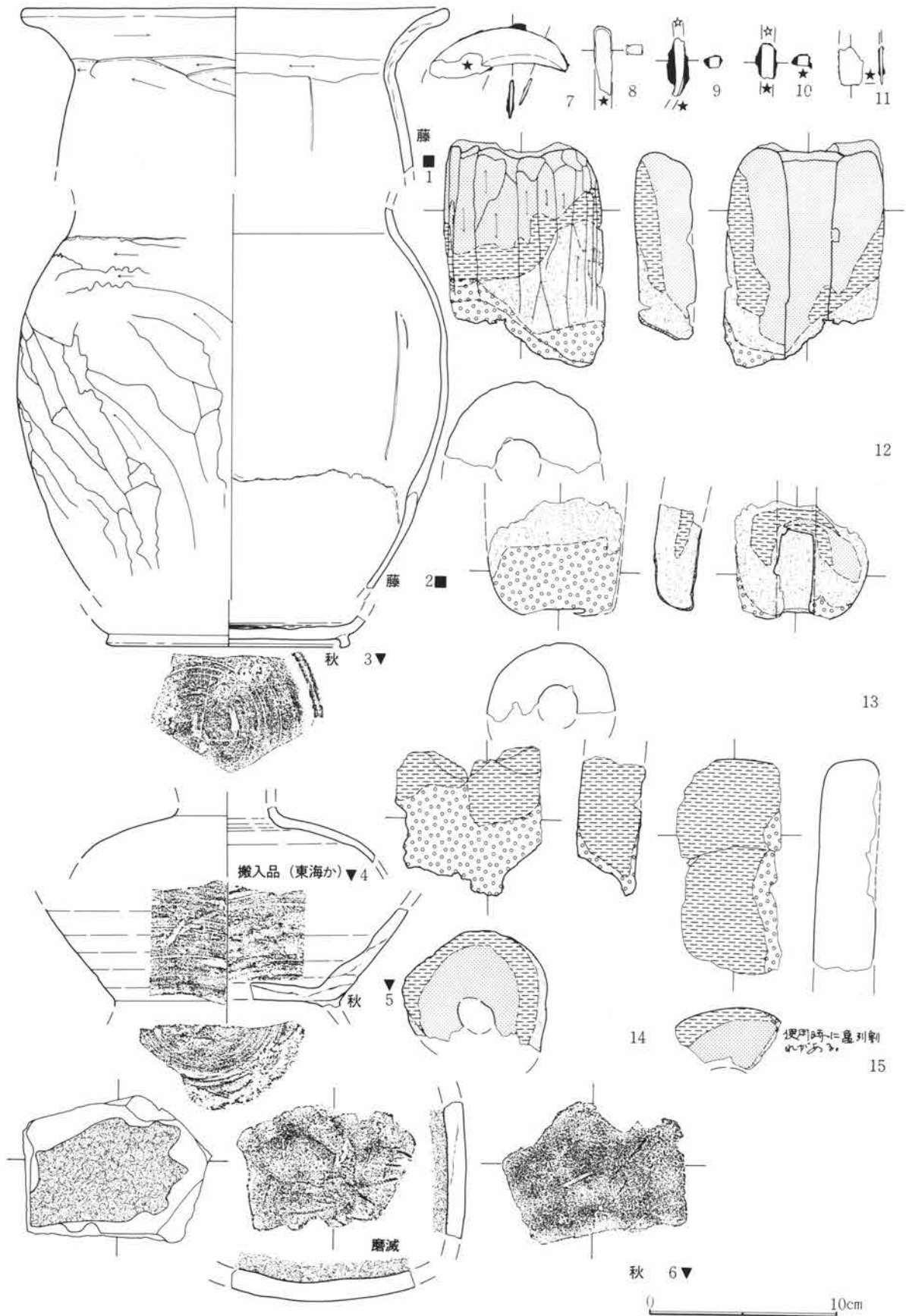
所見 当住居は79号住居跡を切り構築し、B 5 井戸 (15世紀)・6 溝 (14~15世紀) に切られている。平面形状は縦長方形で類例として少数例の住居である。住居は、東壁中央より南東隅部寄りにカマドを備え、カマド右袖に接し南東隅部直下に傍竈坑 (P<sub>1</sub>) が検出されている。床面からは、住居中央部より北東隅部寄りの2ヶ所に炉床が検出されている。この炉床は住居内中央部で検出されたP<sub>3</sub>~P<sub>5</sub>と共に機能していたと考えられる。一方出土遺物に極多量のスラグ・フィゴ羽口等鍛冶に伴なう遺物が出土している。この点から、当住

第3節 検出された住居跡について

居跡は小鍛冶を行なった住居であることが考えられる。そして、住居中央部よりP<sub>2</sub>に接した位置からは2ヶ所から礫が床面直上から出土している。この礫が台石と考えられる。これらの出土遺物の他には、数点の鉄器があり、内、92-7は左利の鎌である。土器類では、坏の底部(91-9)に「東」?の墨書が認められるもの等がある。又、スラグはコンテナケースに6箱出土し、内、所謂「塊形」を呈するものが多い。本住居跡の他に近接して小鍛冶が多く検出されている。住居形状はC区の第VI段階に相当させられる。

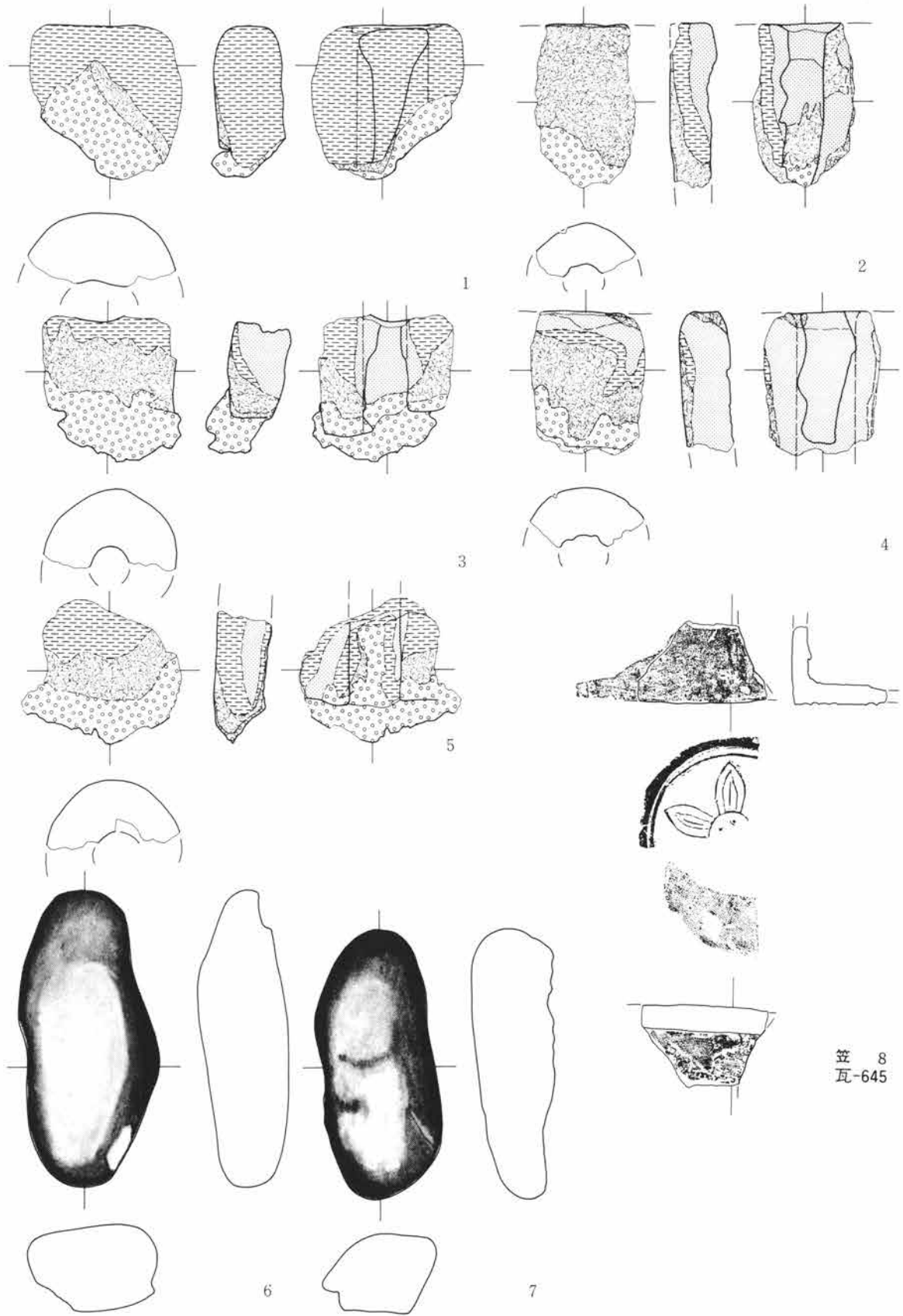


第91図 B区第78号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

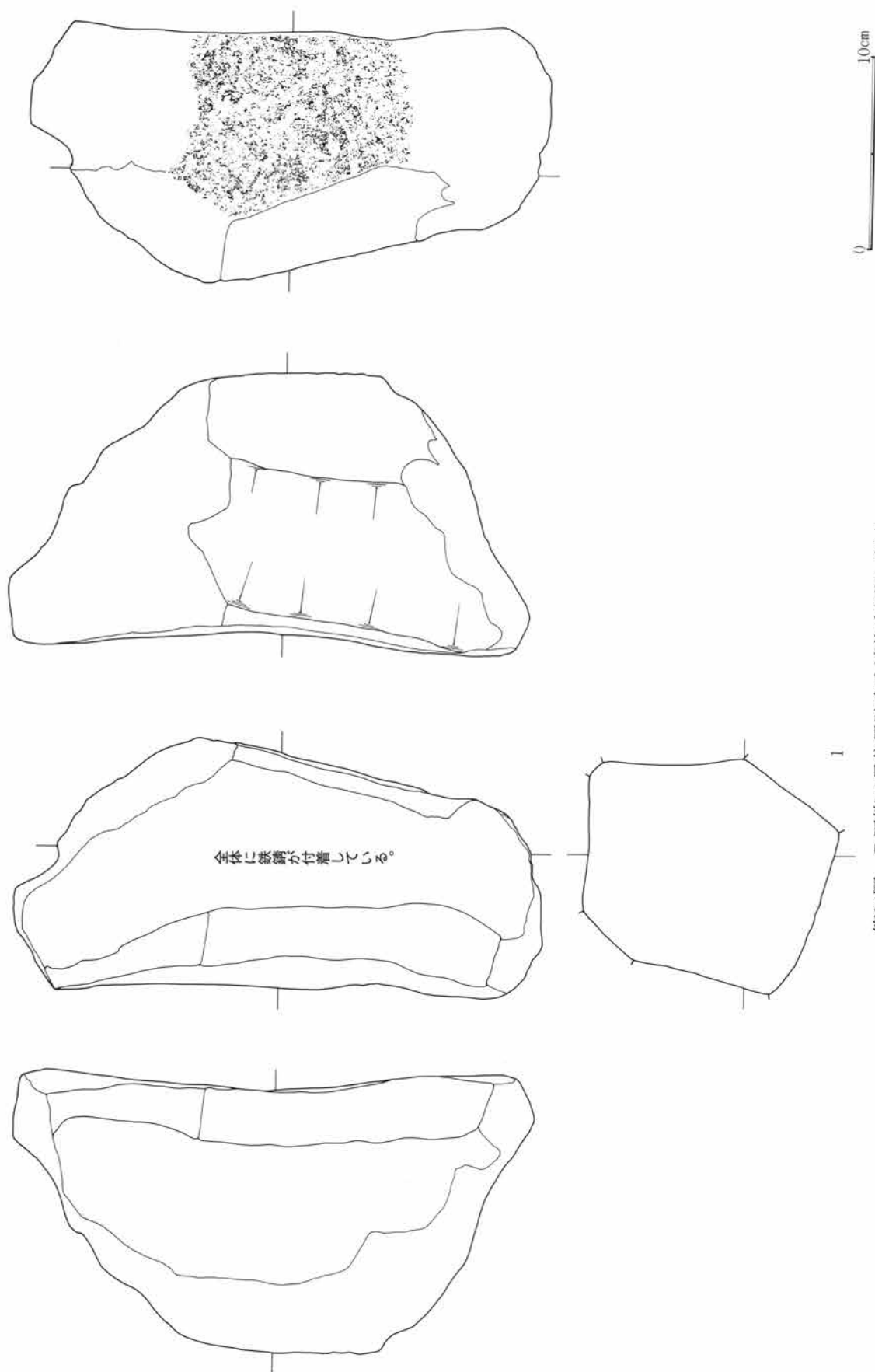


第92図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(2)

第3節 検出された住居跡について

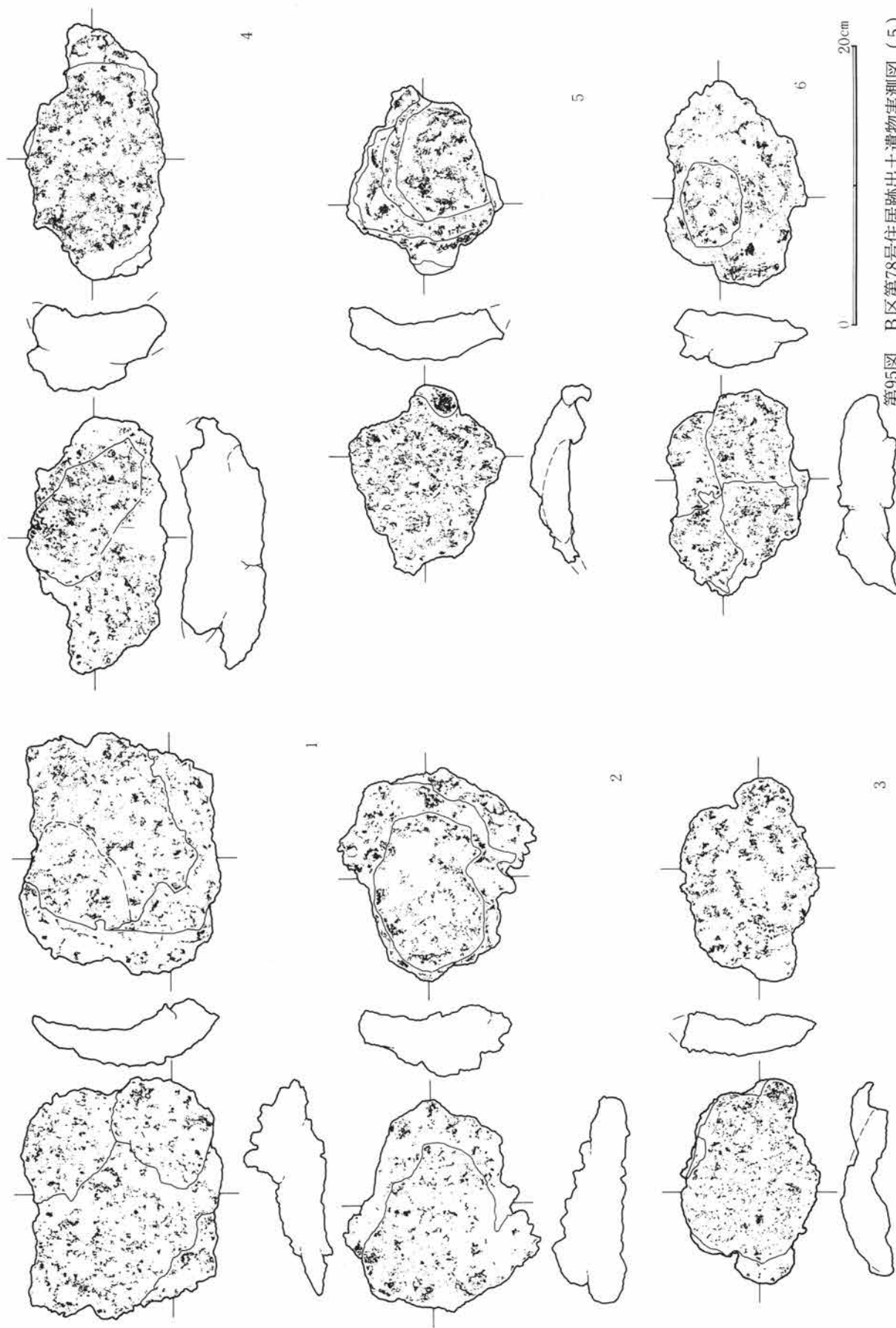


第93図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(3)

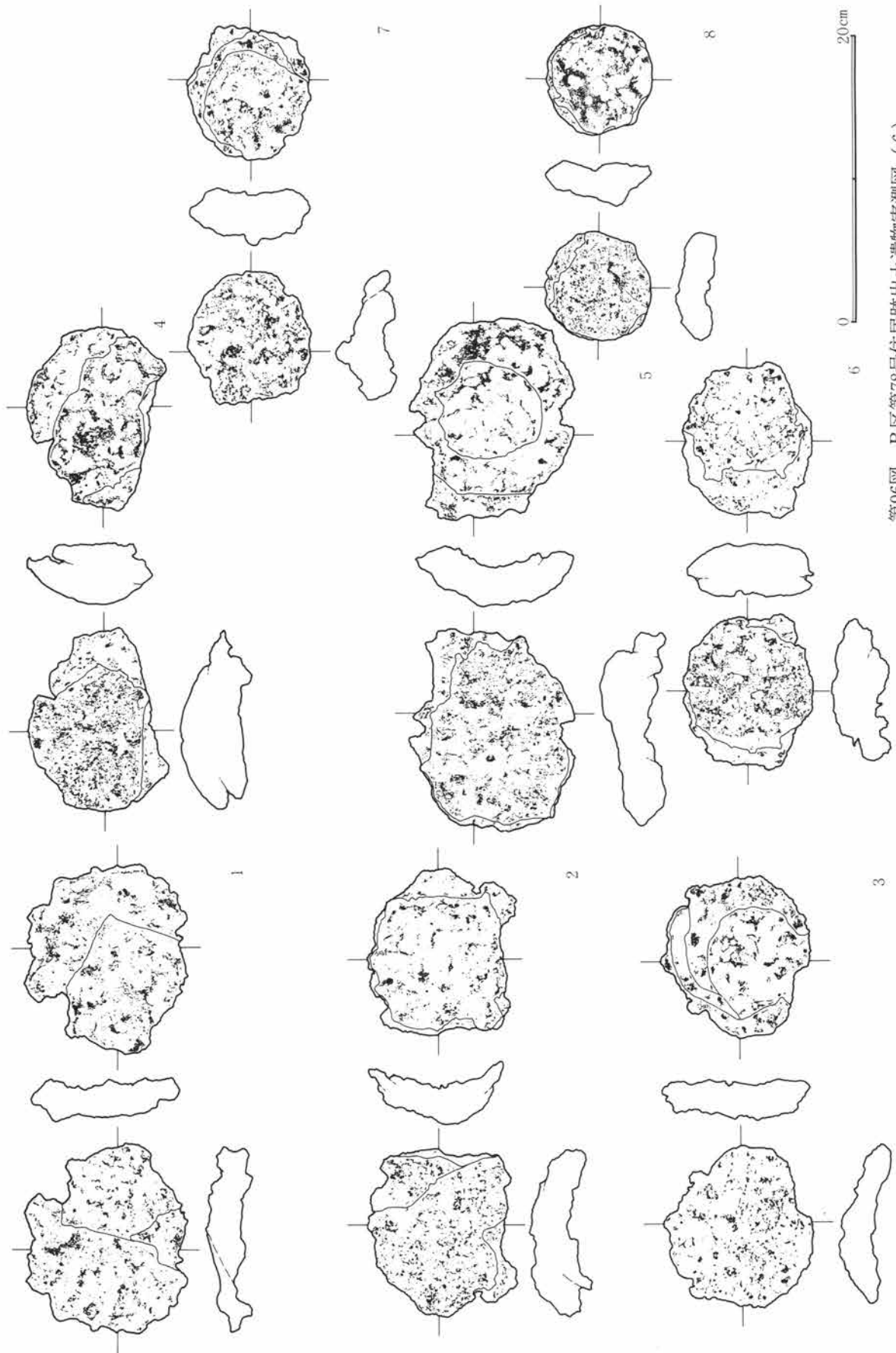


第94図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(4)

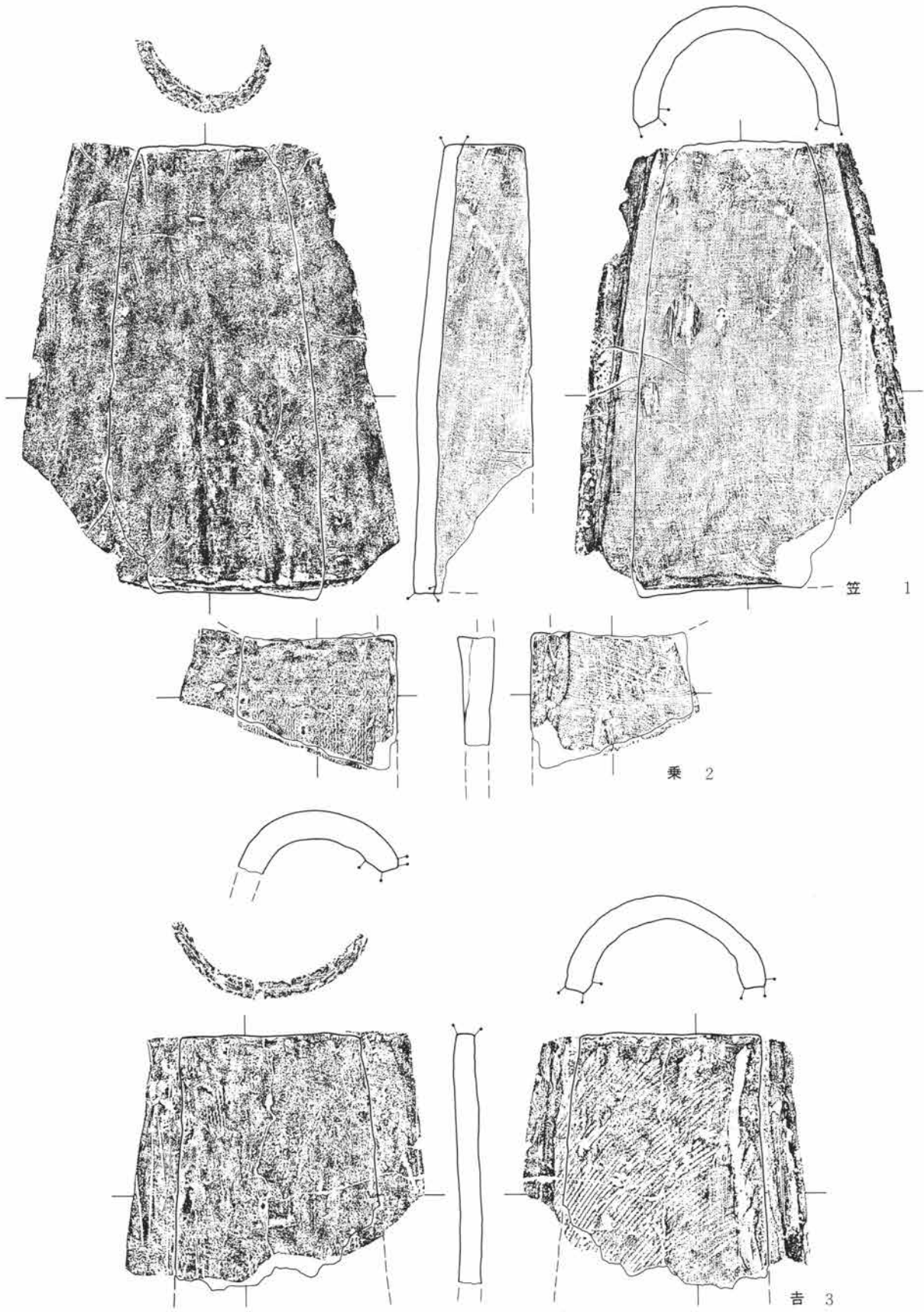




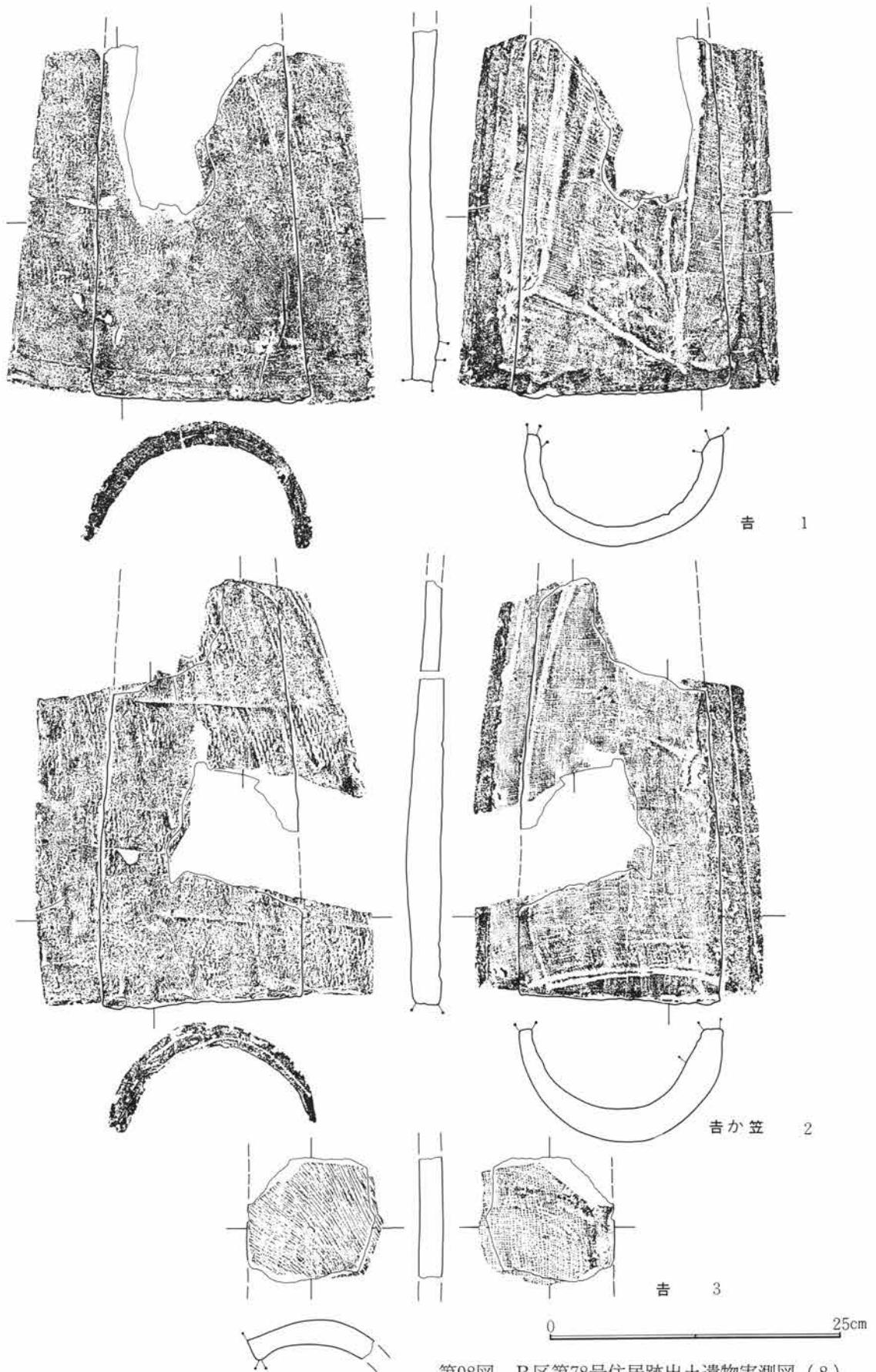
第95図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(5)



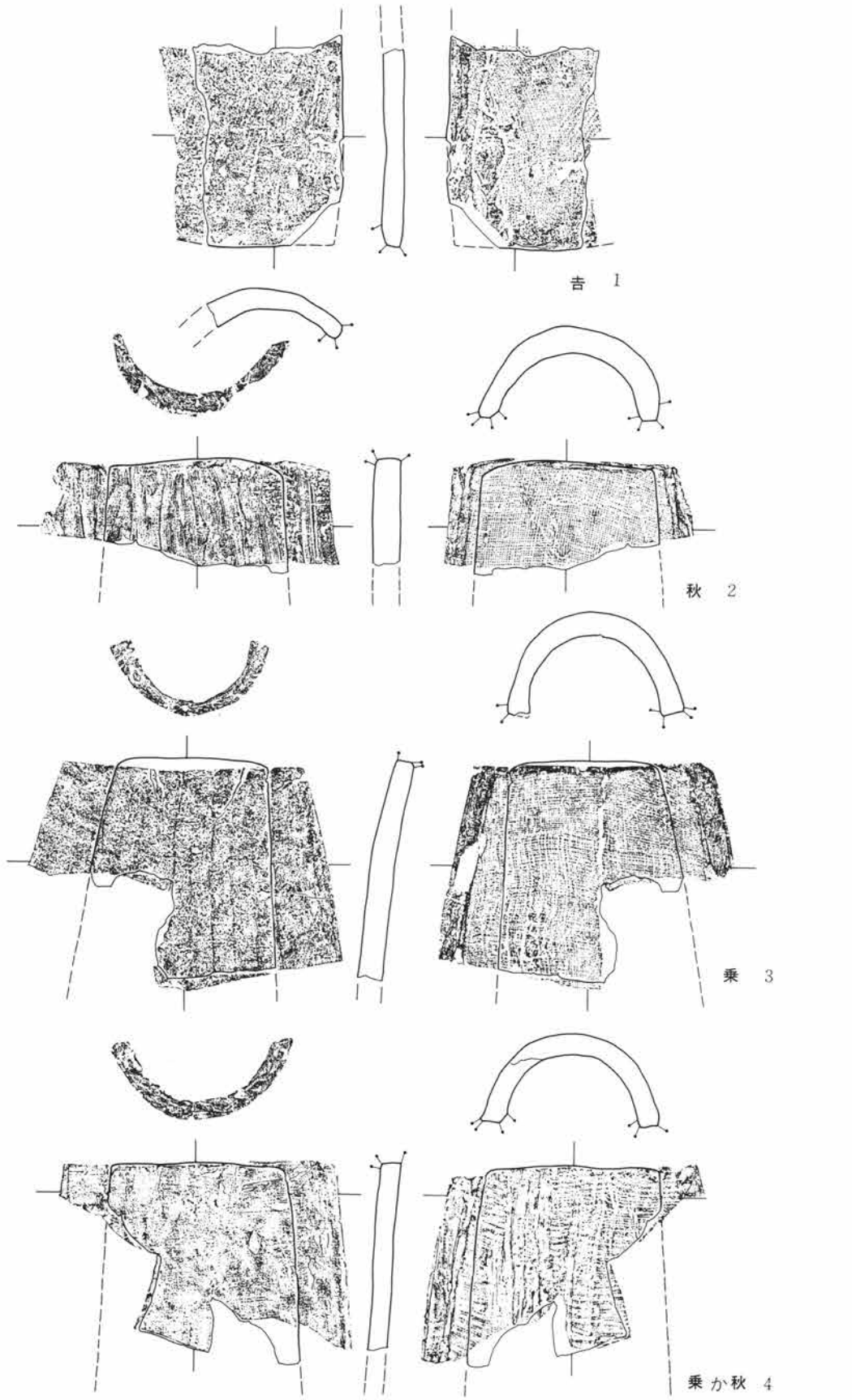
第96図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(6)



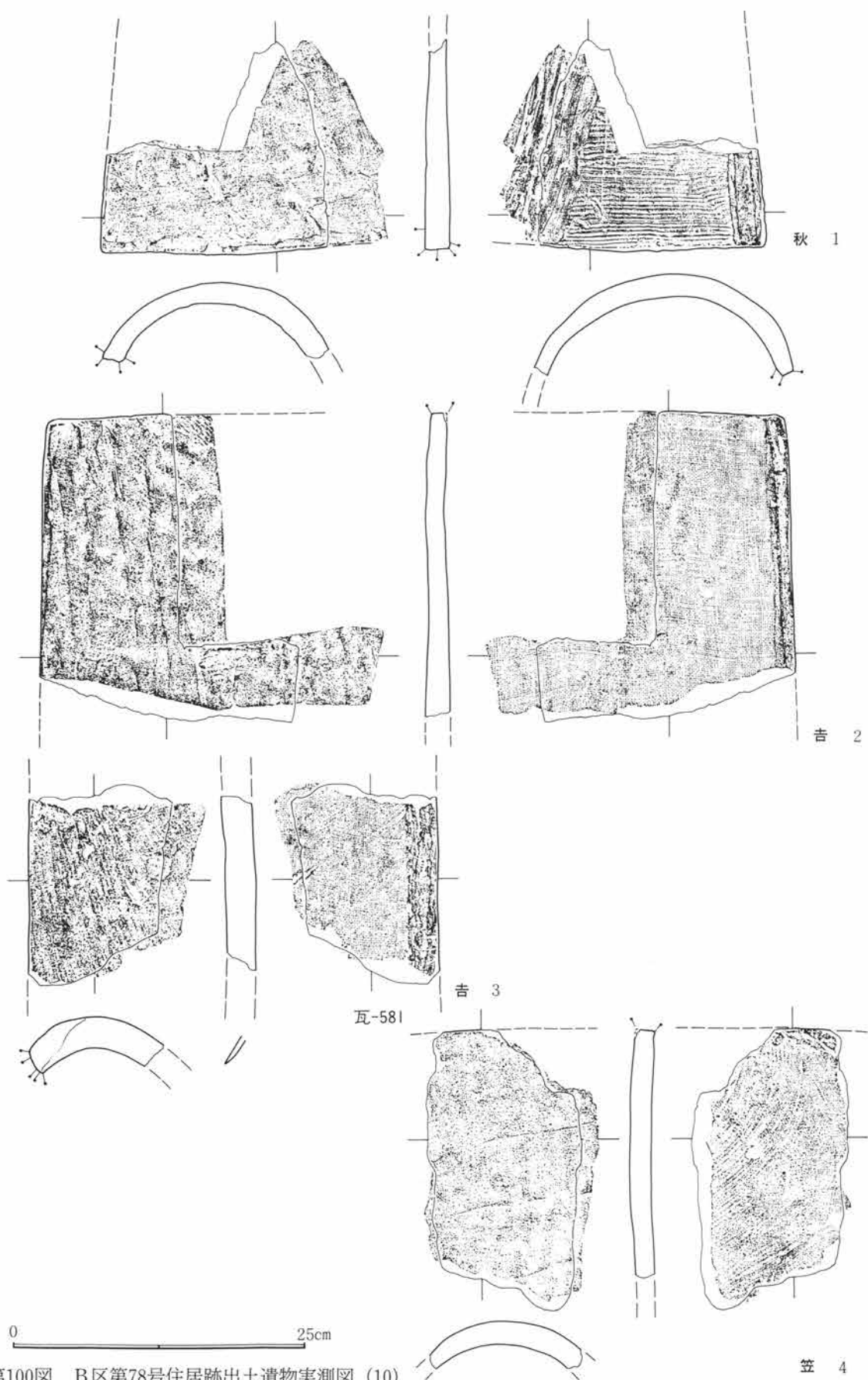
第97図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(7)



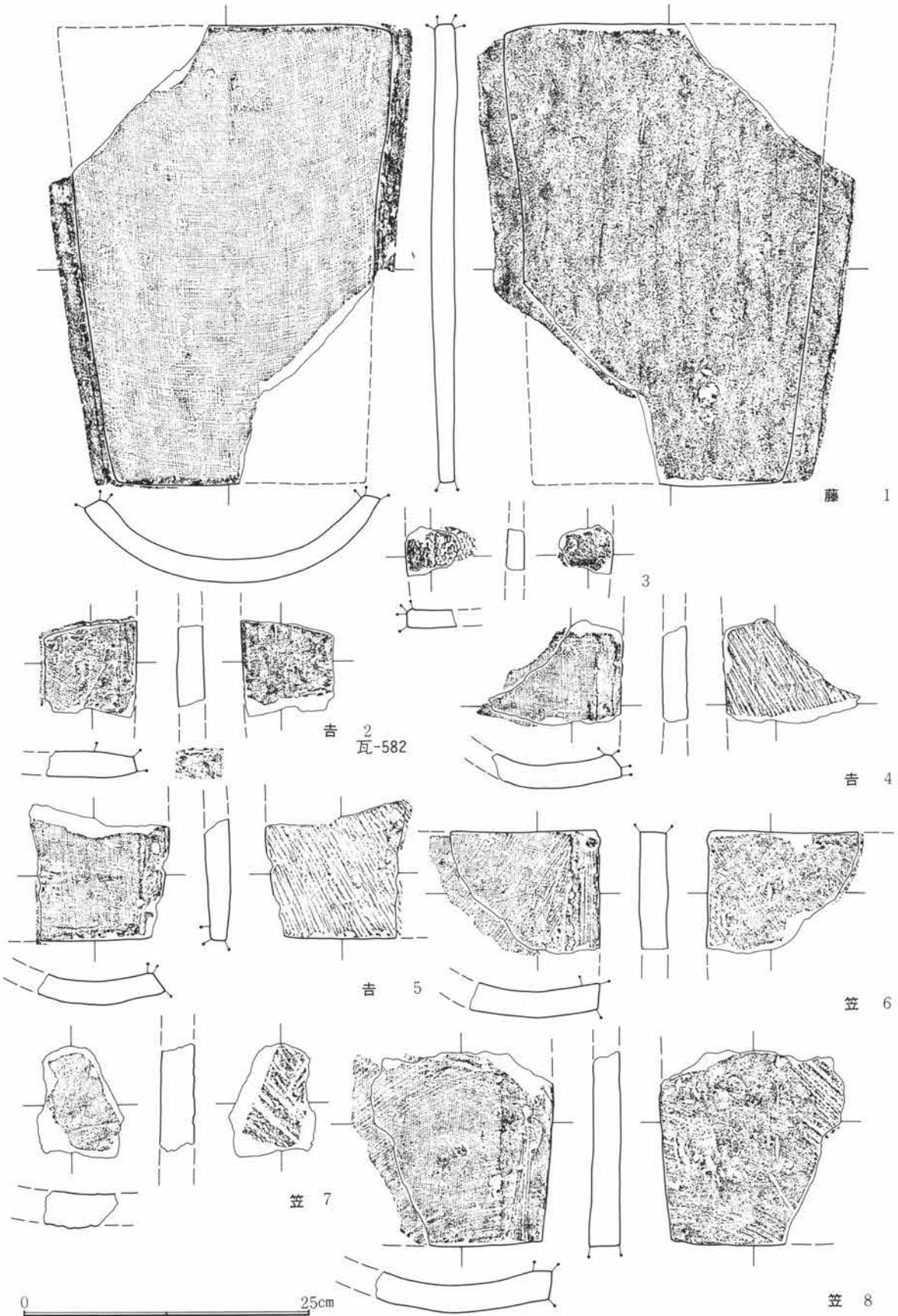
第98図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(8)



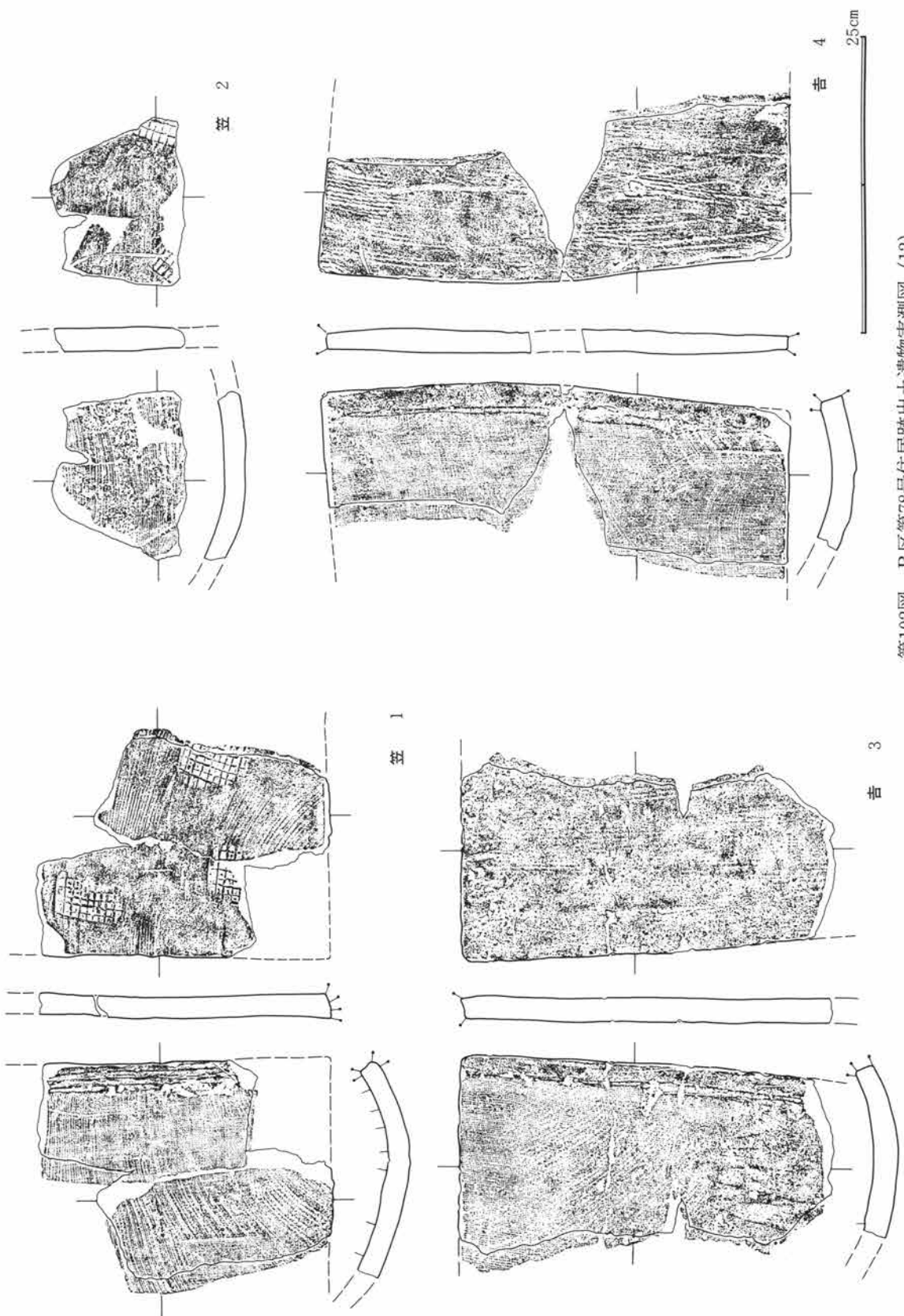
第99図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(9)



第100図 B区第78号住居跡出土遺物実測図 (10)

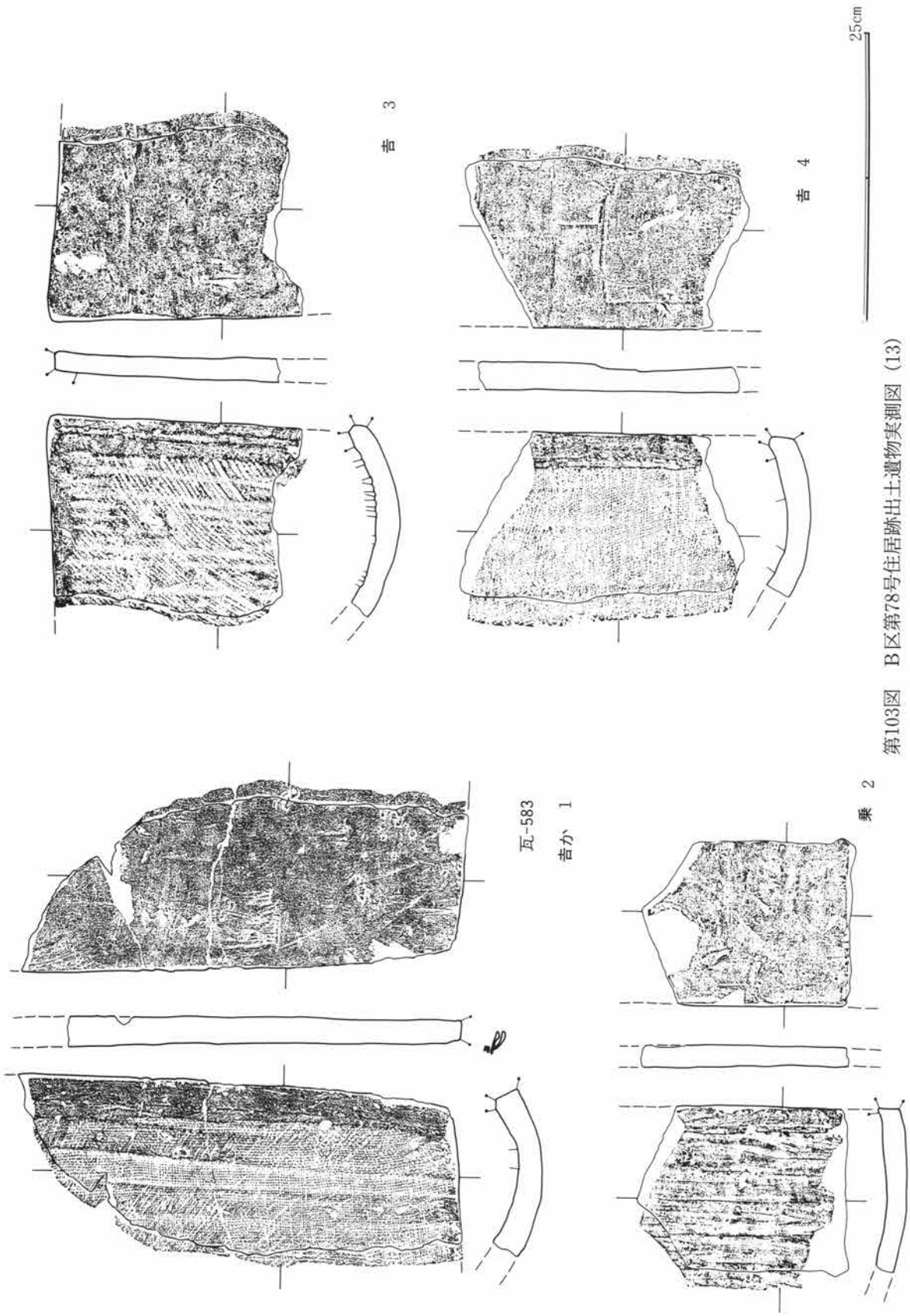


第101図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(11)



第102図 B区第78号住居跡出土遺物実測図(12)



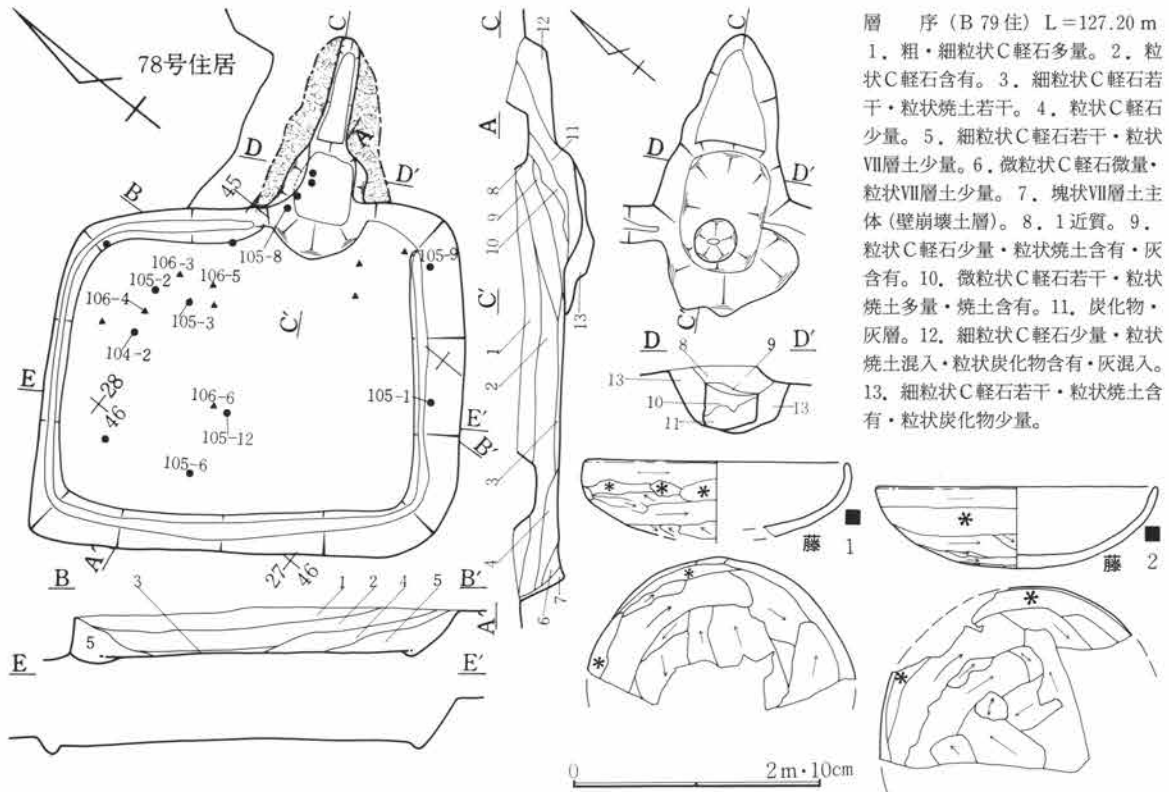


第103図 B区第78号住居跡出土遺物実測図 (13)

第4章 検出された遺構・遺物

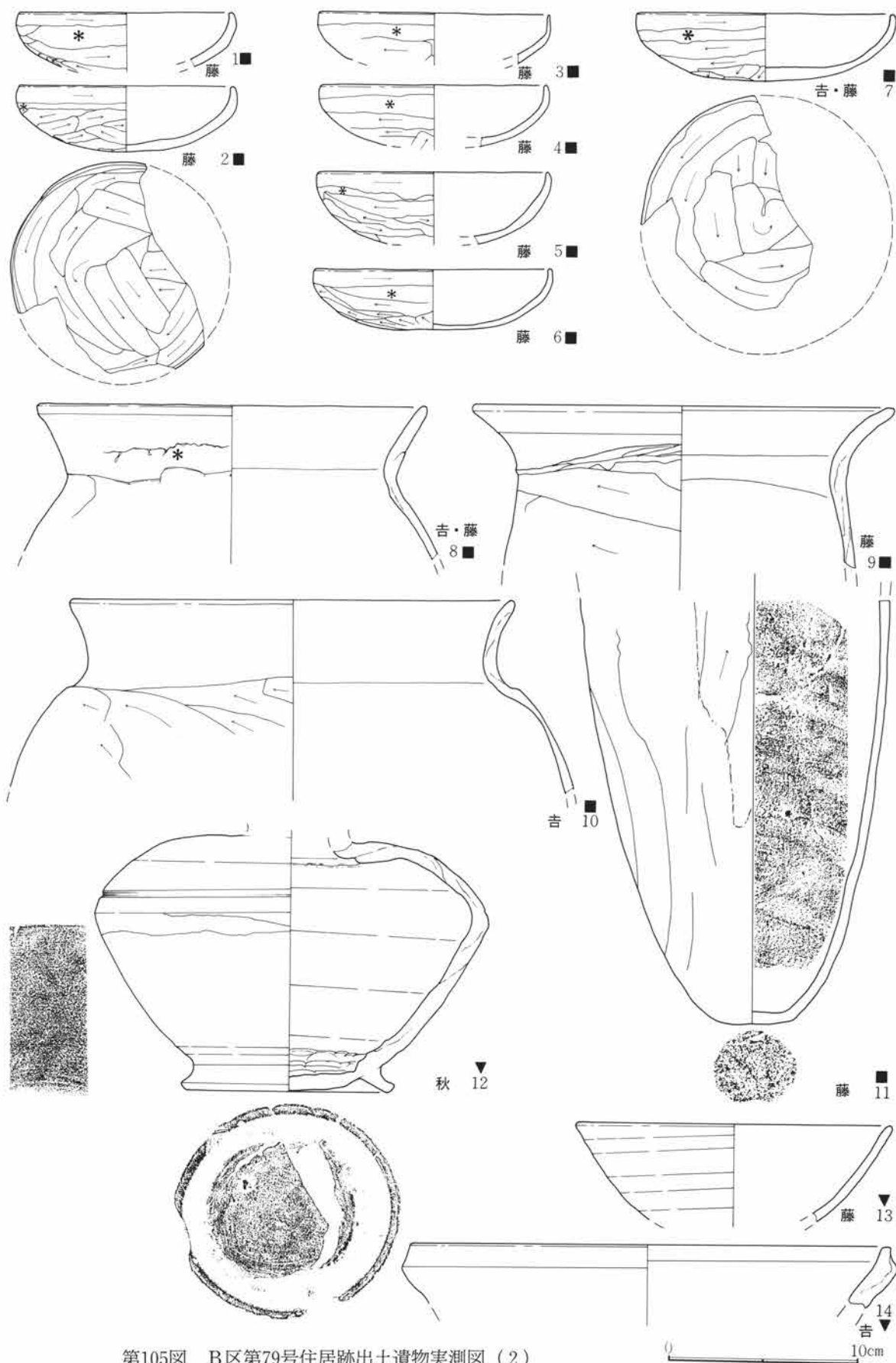
遺構名称	B区第79号住居跡		位置	26~28-B-44~46グリッド内。		残存深度	約35cm
平面形態	横長方形。	規模	2.7m×3.46m	構築基準辺	南乃至西壁	主軸方位	北-50~55度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VII・VI層土を使用し平坦。造床は極一部分。			
壁溝	全周。幅13~20cm		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無に近い。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-62度-南	
改築	有。掘り方内の焼土、灰化物がやや多い。		形状	箱状の燃焼部から細長い煙道が延びる。			
規模	全長173cm・屋外長132cm・屋内長 41cm・袖部幅100cm・燃焼部幅 41cm・煙道部幅 22cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。左壁はオーバーハングしている。						
	袖	瘤状で小さい。補強材等は認められなかった。					
煙道	細長い。		掘り方	全体に舌状を呈する。			
遺物出土状態	床面直上層中出土の遺物がやや多い。						

所見 当住居跡はB78住に切られている。住居は、東壁中央より南東隅部にやや寄りカマドを具備し、カマドは方形を呈する燃焼部を長く屋外に突出する煙道を備えている。壁溝は、カマド及び南東隅部以外で認められている。出土遺物で特筆されるものとして、小形の須恵器の硯がある(106-1)。この硯は、中空状の円面硯で外側に舌状に突出した部分があり、この部分と本体の中空部には孔を施して内側にも液体が蓄えられる仕組みになっている。然し、この内側及び上面には墨の痕跡が認められないが、上面には使用に伴う磨滅が顕著である。住居形状はC区第Ⅲ段階に対比される。特に、C区9住に類する住居である。



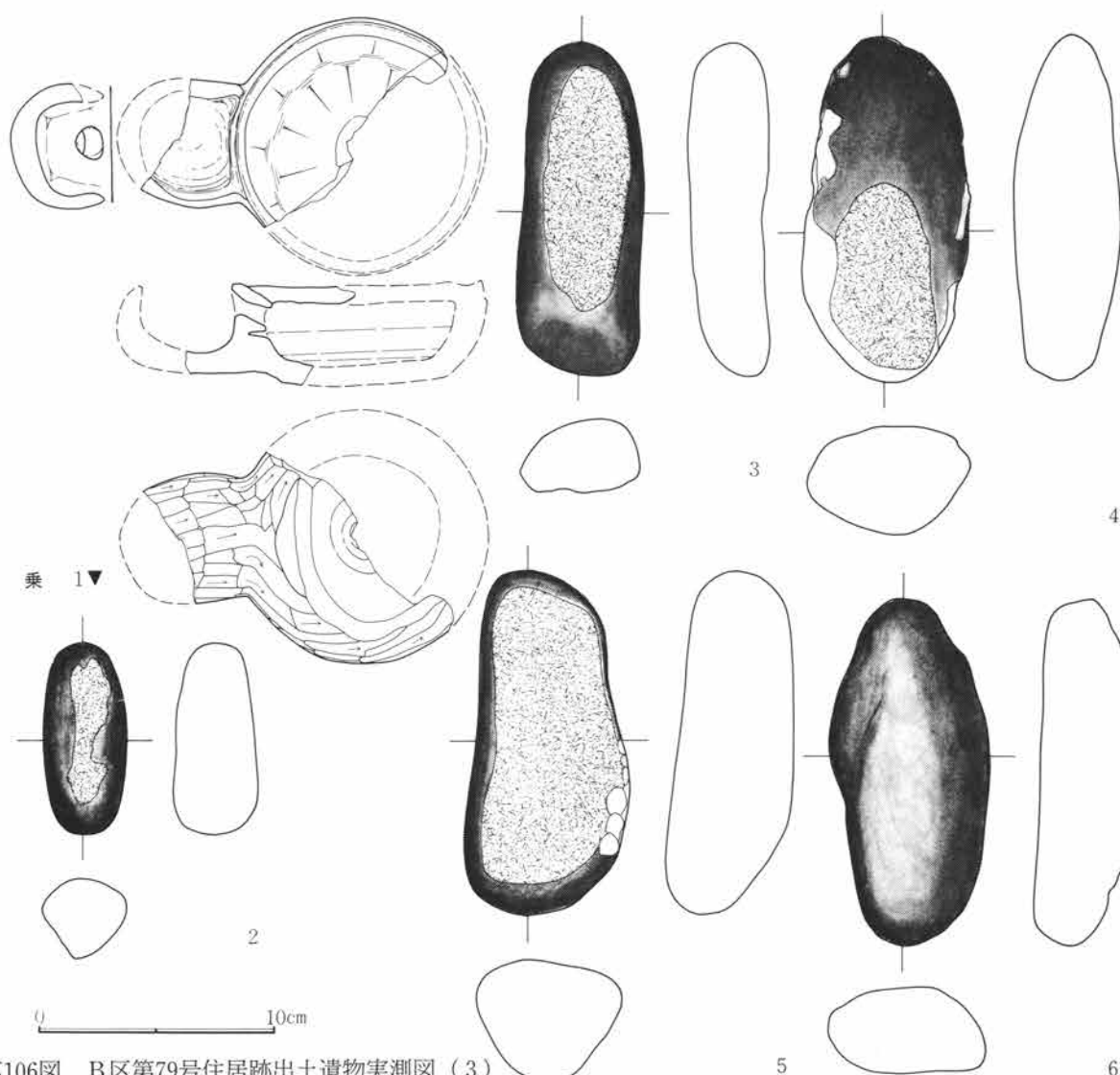
第104図 B区第79号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について



第105図 B区第79号住居跡出土遺物実測図(2)

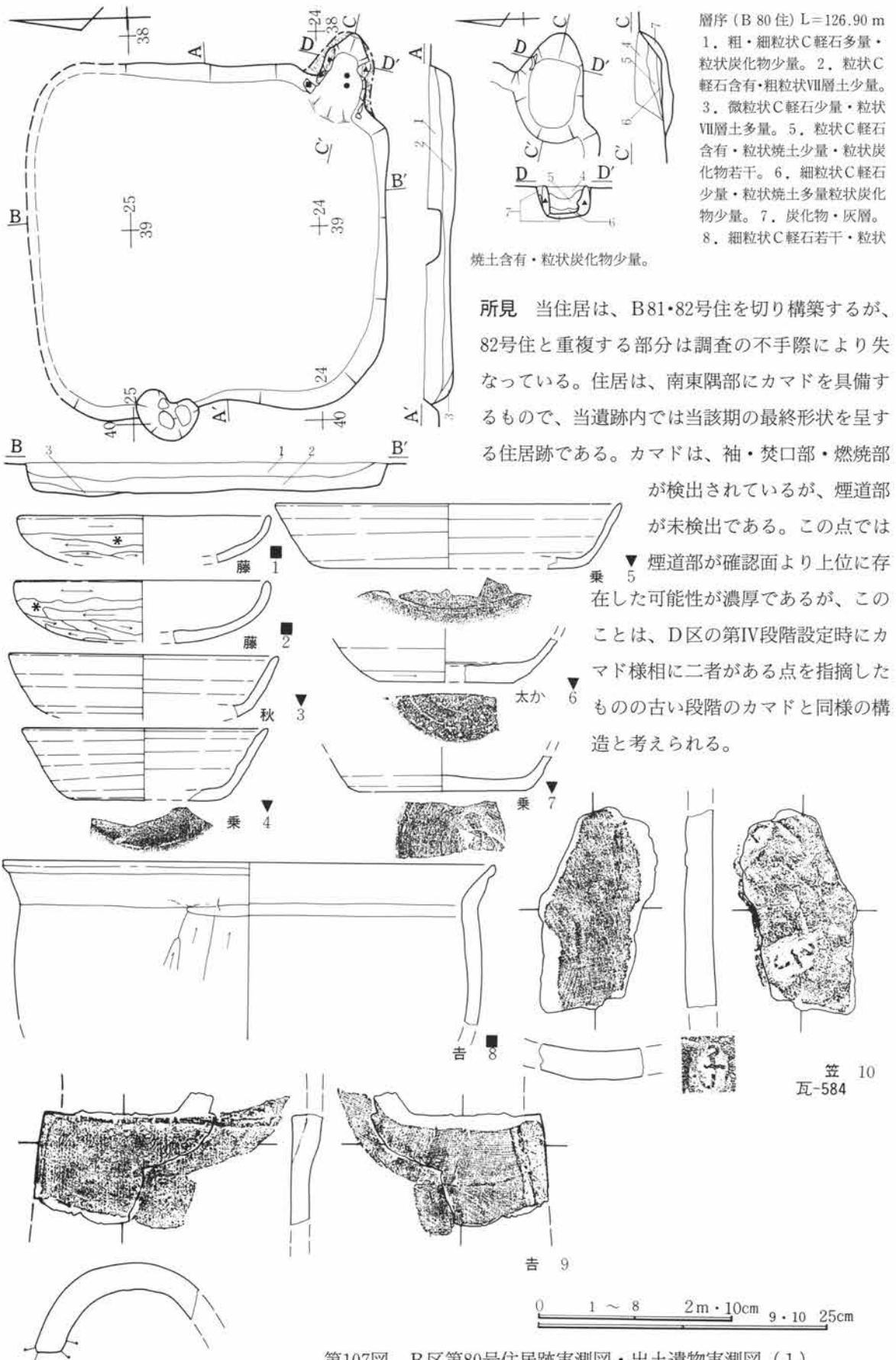
第4章 検出された遺構・遺物



第106図 B区第79号住居跡出土遺物実測図(3)

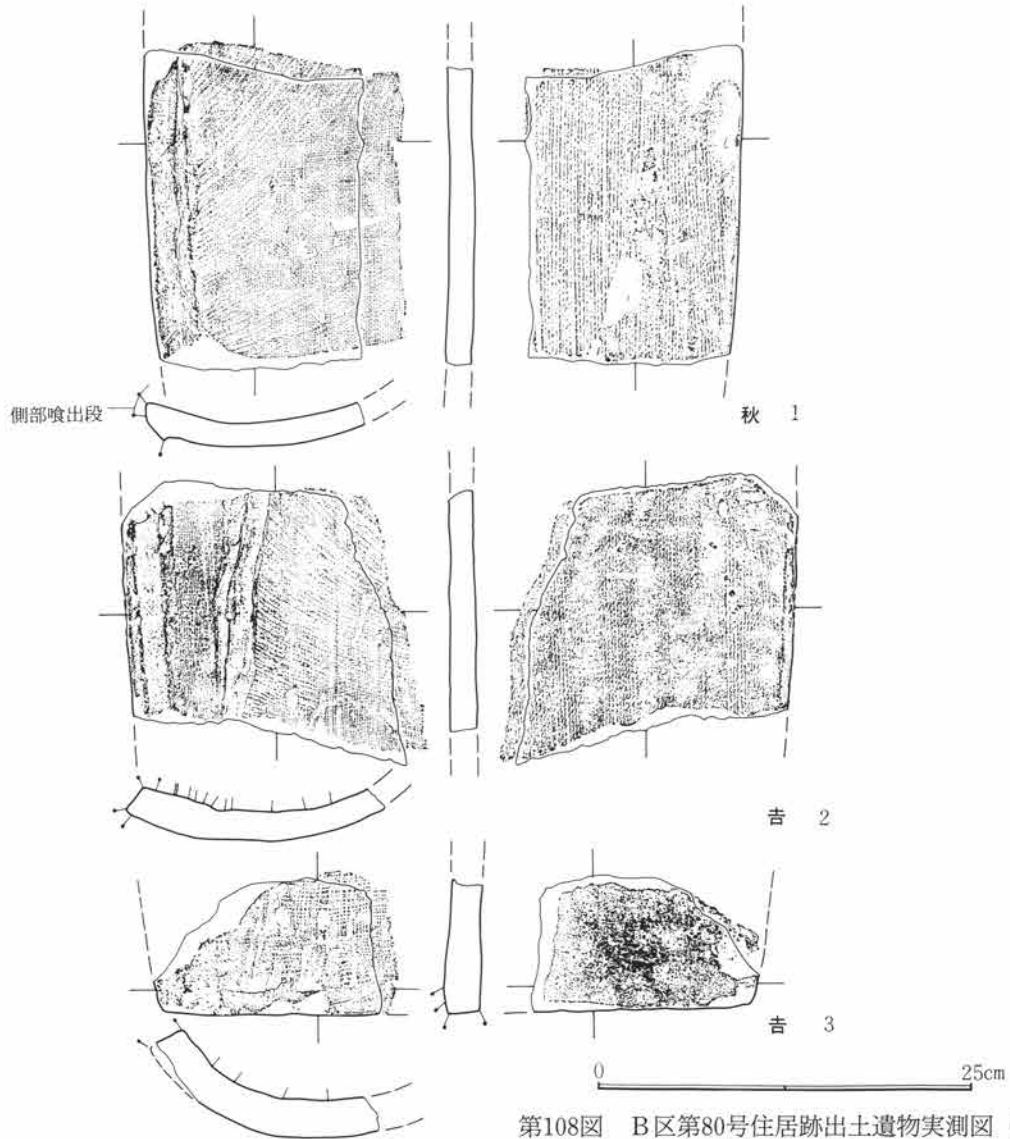
遺構名称	B区第80号住居跡		位置	23～25-B-38・39グリッド内。			残存深度	約30cm
平面形態	矩形。	規模	3.64m× 3.8m	構築基準辺	南乃至東壁	主軸方位	北-92度-南	
壁	ほぼ垂直～斜位気味に立ち上がる。		床面	P <sub>1</sub> 部分以外地山Ⅶ層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から0cm。				主軸方位	北-110度-南	
改築	有。掘り方内で焼土・灰化物を検出。			形状	箱状。			
規模	全長 70cm・屋外長 62cm・屋内長 8cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 32cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁を礫・瓦で補強する。			袖	瘤状も若干突出する程度で小さい。			
煙道	立ち上がる部分を検出したのみである。			掘り方	楕円形状の土坑状を呈する。			
遺物出土状態	覆土内では当住の時期より古期の土器類が少量出土したのみである。							

第3節 検出された住居跡について



第107図 B区第80号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

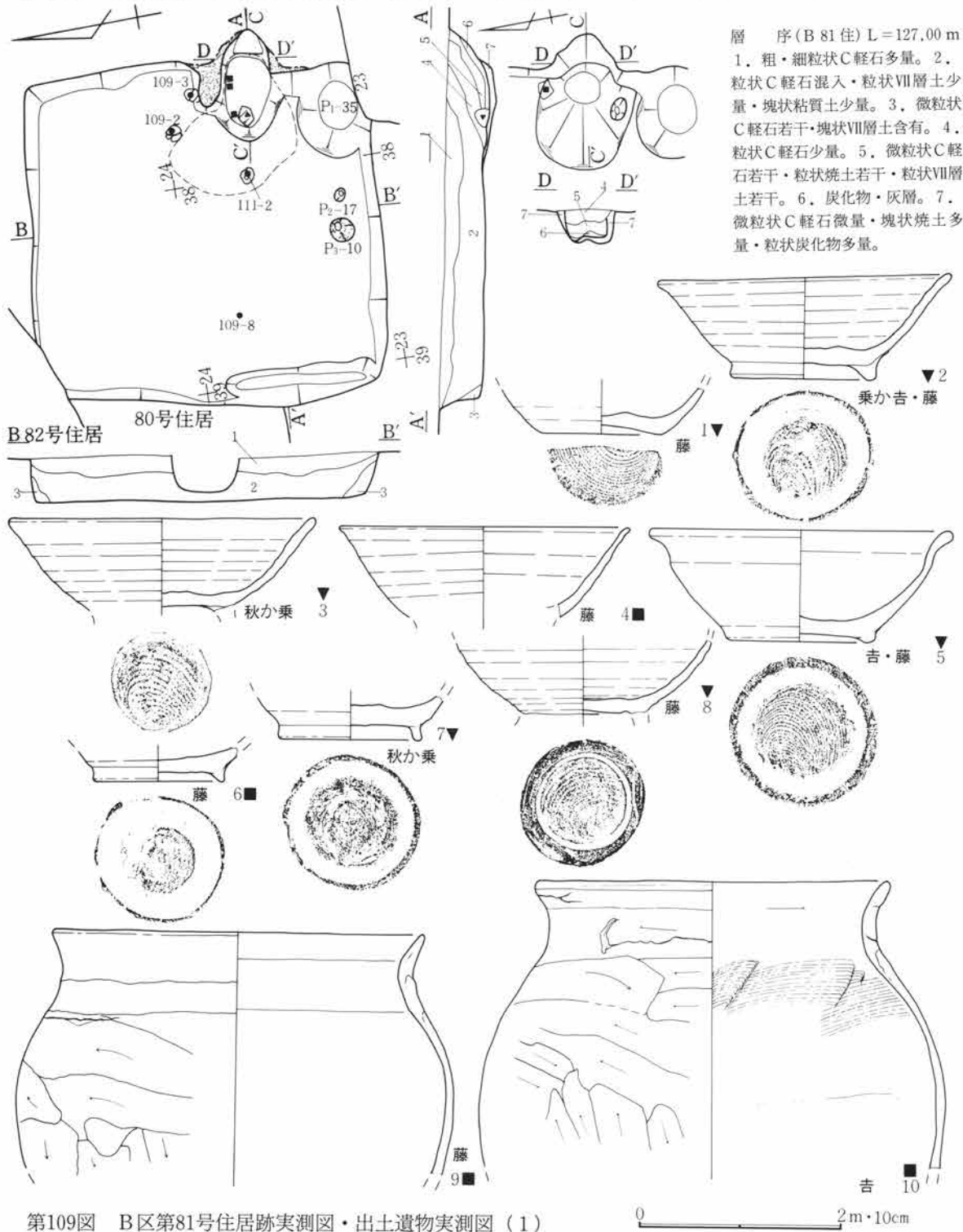
第4章 検出された遺構・遺物



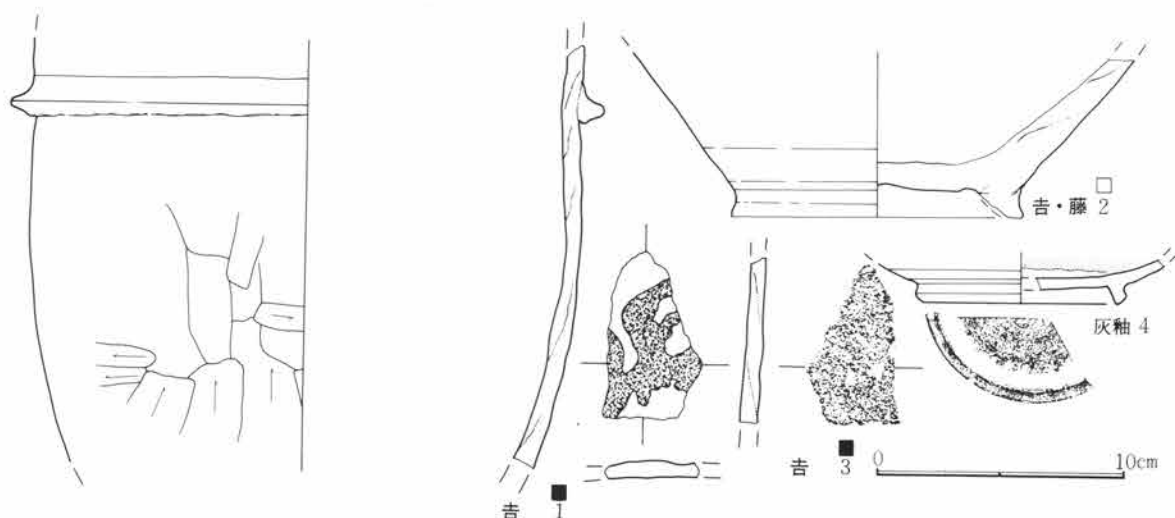
第108図 B区第80号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第81号住居跡		位置	22~24-B-37~39グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	正方形基調。	規模	3.35m×3.50m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-100度-南
壁	ほぼ垂直~斜位気味。		床面	地山VII層土を使用し平坦である。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形状。径68cm・深度-35cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から40cm。			主軸方位	北-100度-南	
改築	有。掘り方内に多量の焼土を含む。			形状	箱状に近い。		
規模	全長110cm・屋外長 40cm・屋内長 70cm・袖部幅100cm・燃烧部幅 47cm・煙道部幅 28cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖はしっかりしているが、右袖は未検出。					
煙道	仰角45度程で立ち上がる。		掘り方	土坑状の燃烧部に短かい舌状の煙道部が付く。			
遺物出土状態	カマド前面で床面直上遺物がやや多い。						

所見 当住居はB82住を切り構築し、80住に切られている。住居は均整のとれた正方形基調の住居跡で、東壁中央より若干南東隅部に寄った位置に備え、南東隅部直下には傍竈坑P<sub>1</sub>を具備している。又、壁溝は西壁下で一部検出されたのみで、他の部分では検出されていない。カマドは、左袖が右袖より長く見られるが、東壁自体の造作に起因するものであるが、全体的に屋内側に入った状態で構築されている。傍竈坑は比較的大きく円形状を呈するものである。カマド以外の施設にP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>が入口施設に伴う可能性がある。出土遺物の内110-1は上位80住の遺物の可能性も考慮される。住居形状・遺物からC区第IV段階以前と想定される。



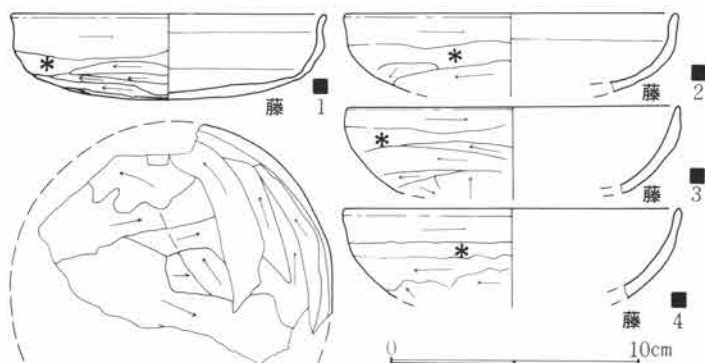
第109図 B区第81号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第110図 B区第81号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第82号住居跡		位置	24~27-B-37~40グリッド内。		残存深度	約57cm
平面形態	横長方形	規模	3.76m×5.26m	構築基準辺	西乃至北壁	主軸方位	北-70度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	全周。幅員15~50cm		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・長甕を伴なう。円形。経38cm・深度-34cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から110cm。			主軸方位	北-70度-南	
改築	有。掘り方内で焼土・灰化物を検出。		形状	箱状。			
規模	全長155cm・屋外長 66cm・屋内長 97cm・袖部幅204cm・燃烧部幅 58cm・煙道部幅約50cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部中央で支脚が検出されここに器設部分が考えられる。						
	袖	明らかな状態ではない。左袖下から補強材の据え方を検出。					
煙道	断面で確認したのみである。		掘り方	長方形の土坑状で、先端に煙道部を具備する。			
遺物出土状態	南東隅部で遺存の良好な個体の出土が多い。						

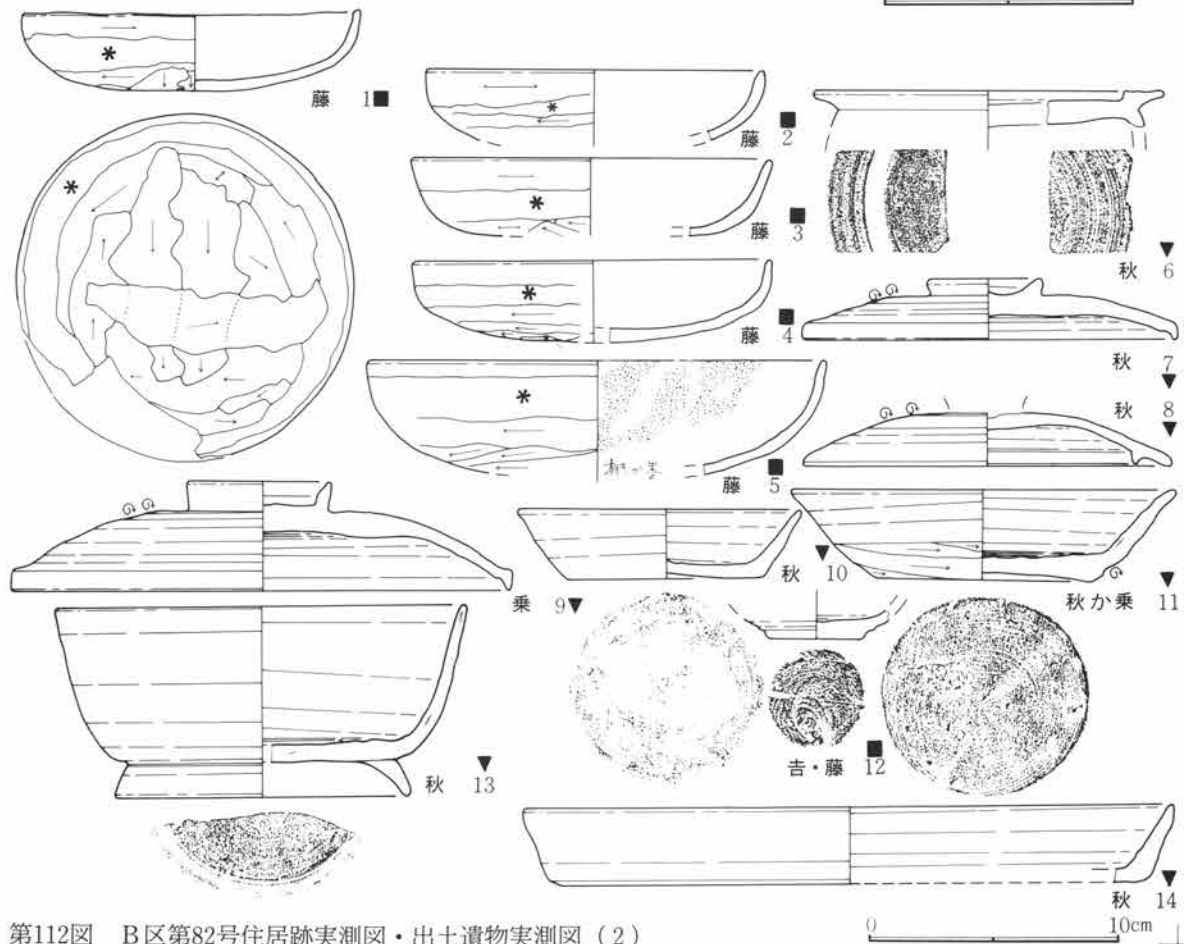
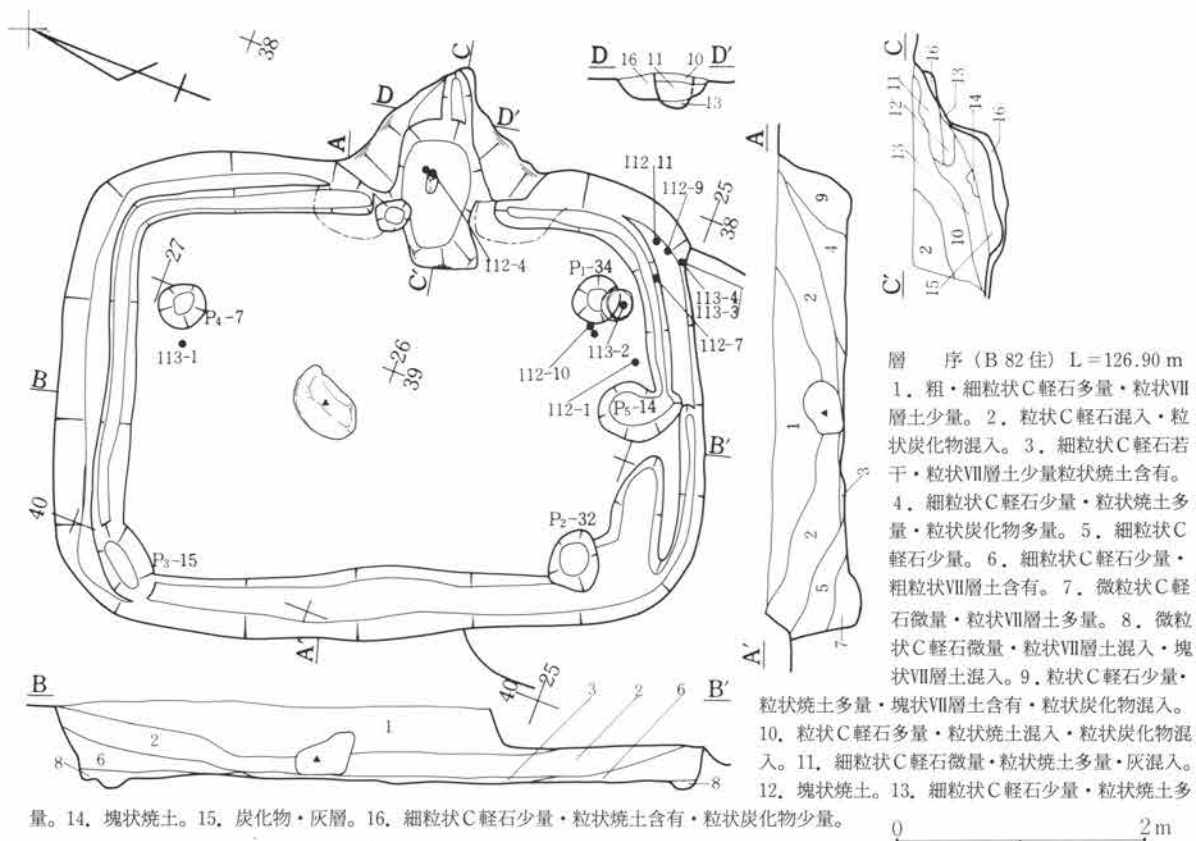
所見 当住居は前述の81・80号住居に切られている。住居はカマドを東壁中央部に備えている。壁下には若干内側に壁溝を全周させ南壁下では一部二重になっている。この壁溝の状態と北壁の状況は、土層断面では壁溝が古い状態であることが看取されることから当住居は改築により拡張されたことが考えられる。ピット



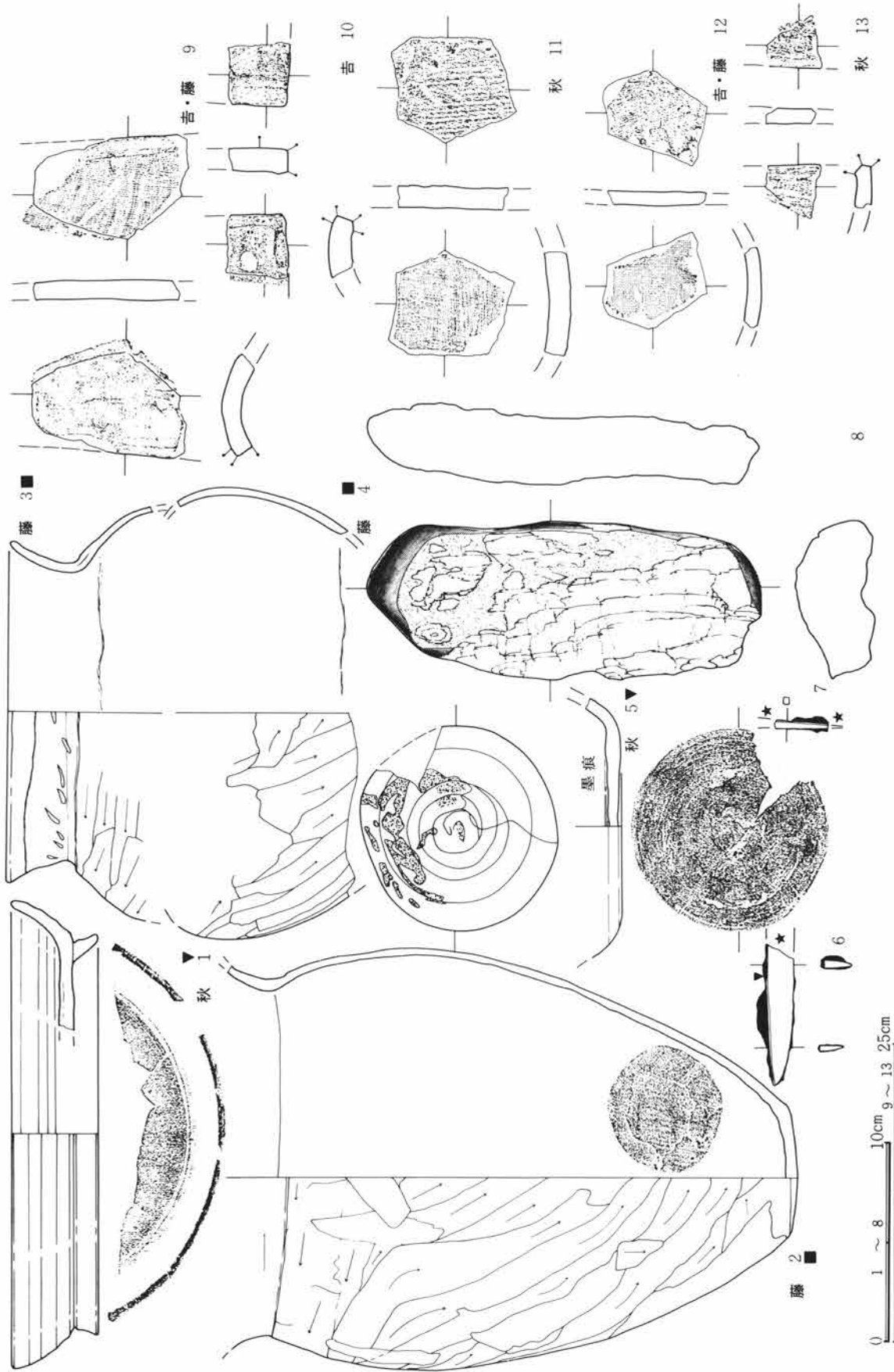
第111図 B区第82号住居跡出土遺物実測図(1)

等の施設は柱穴と認定し得るものは無い。P<sub>1</sub>内からは長甕1個体(113-2)が出土している。この点から貯蔵穴等の使用が想起されるが、ピット自体の規模が小さい点から貯蔵穴とするには更なる検討が必要と考える。寧、平安期の住居(当遺跡)の傍竈坑と同様に性格を限定し難い屋内施設と考えられる。住居形状はC区第III段階に対比される。





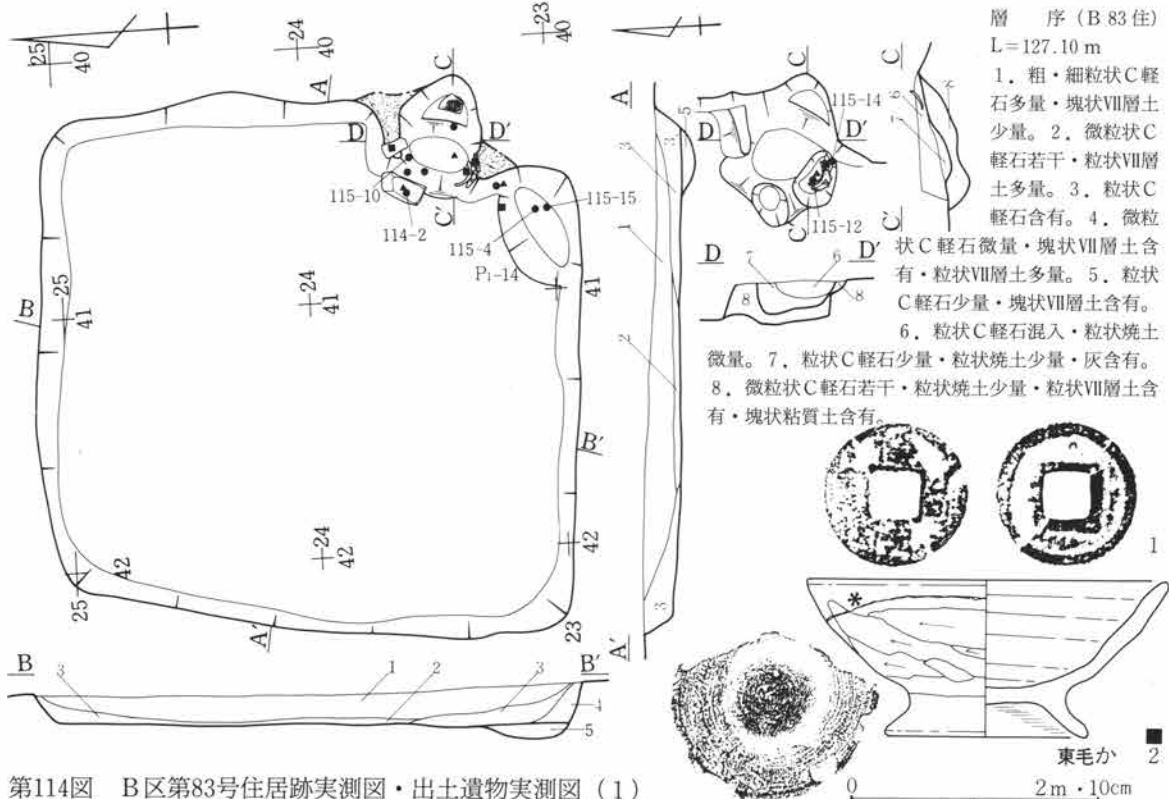
第112図 B区第82号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



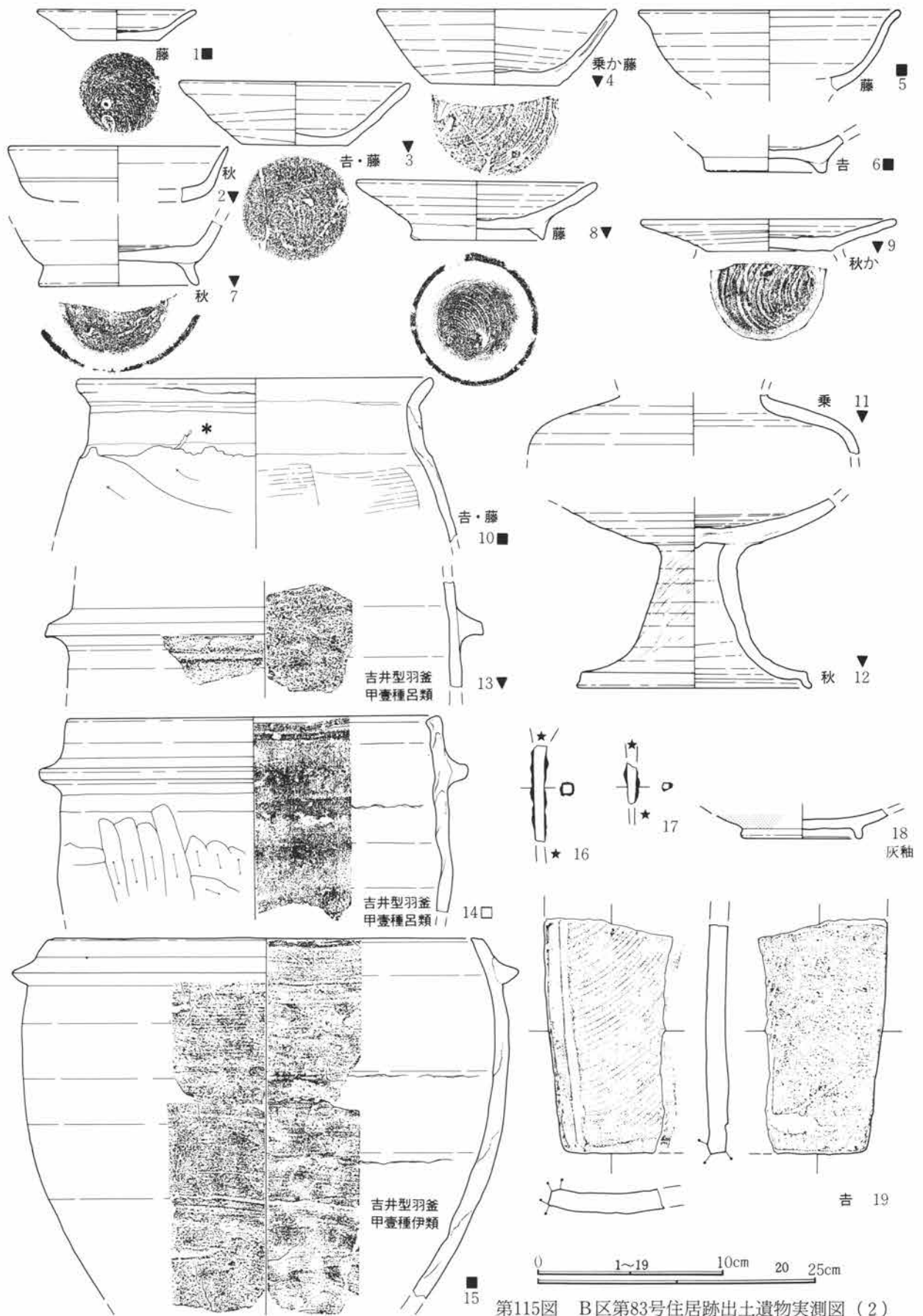
第113図 B区第82号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第83号住居跡		位置	22～25—B—40～42グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	正方形基調。	規模	4.3m×4.4m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-94度-南
壁	斜位気味～斜位に立ち上がる。		床面	平坦。地山VII層土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形状。90×56cm・深度-14cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から44cm。			主軸方位	北-107度-南	
改築	有。掘り方形状と掘り方内に焼土が多い。		形状	馬蹄形状。			
規模	全長 96cm・屋外長 50cm・屋内長 46cm・袖部幅122cm・燃烧部幅 66cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。燃烧空間は広い。						
	袖	左右共に屋内に突出する。右袖は瓦・礫により補強する。					
煙道	立ち上がり部周辺が検出されている。		掘り方	左袖の造り出しが認められる。			
遺物出土状態	カマド部に集中する。カマド周辺で饒益神寶が出土している。						

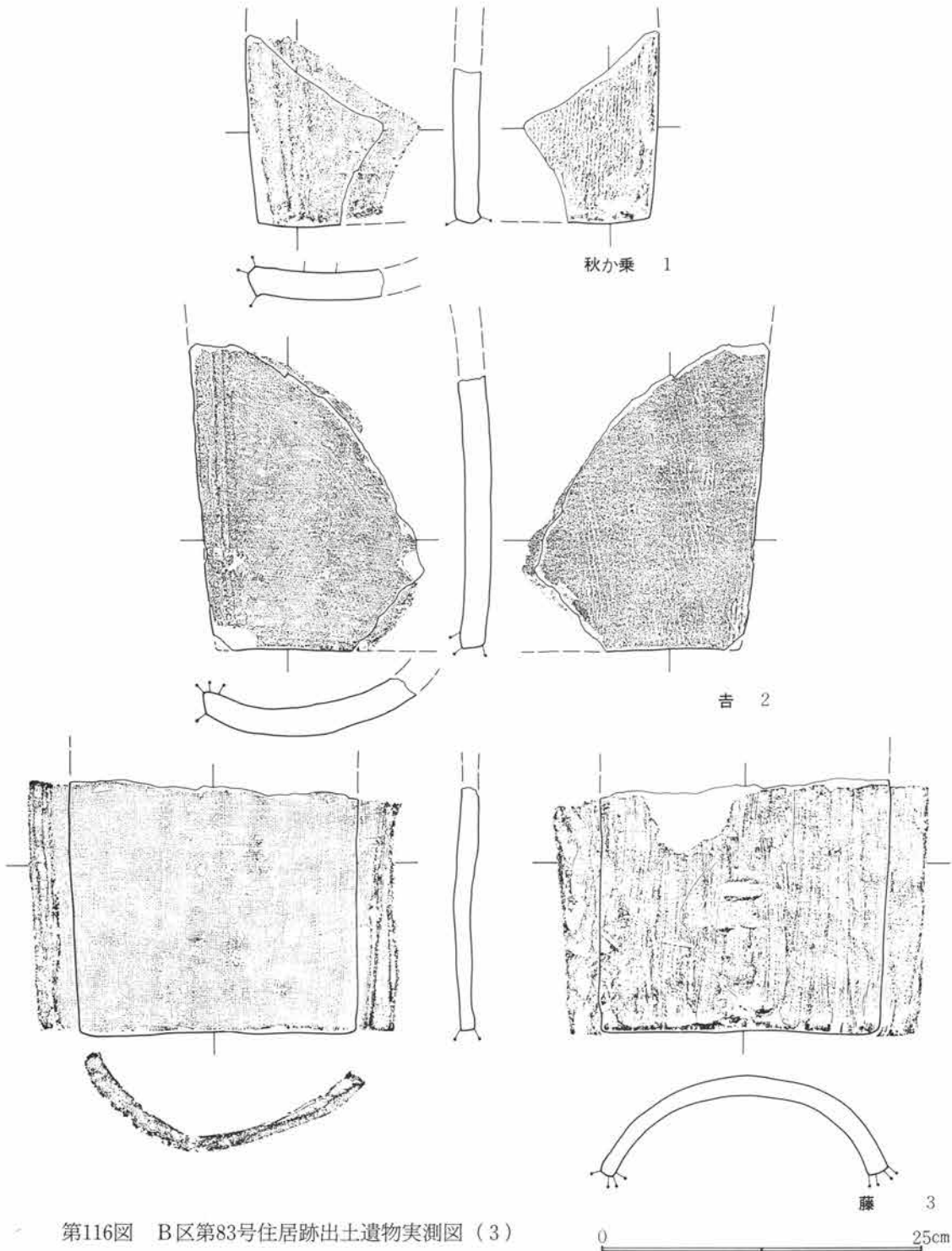
所見 当住居跡は東壁で南東隅部寄りにカマドを具備する。東壁は、南東隅部の東壁部分より東側に全体的に大きく張り出した状態の構造になっている。カマドは、この東壁部と南東隅部の境の部分に主軸をやや南東側に向けて備えている。そして、南東隅部直下には傍竈坑 (P<sub>1</sub>) が検出されている。この状態は既刊第III分冊中で報告したD区31号住居跡と同様な状態である。則、住居の東壁が張り出す部分は、カマドの改築と共に住居も改築・拡張されたことが考えられる。そして、改築以前の形状は、傍竈坑の形状からC区第VII段階の横長方形を呈したと考えられ、改築後のカマドが南東にその指向が振ることから改築段階はC区第IX段階にあったことが考えられる。これらのことから、当住居は比較的長期に亘り存続したことが考えられる。



第114図 B区第83号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



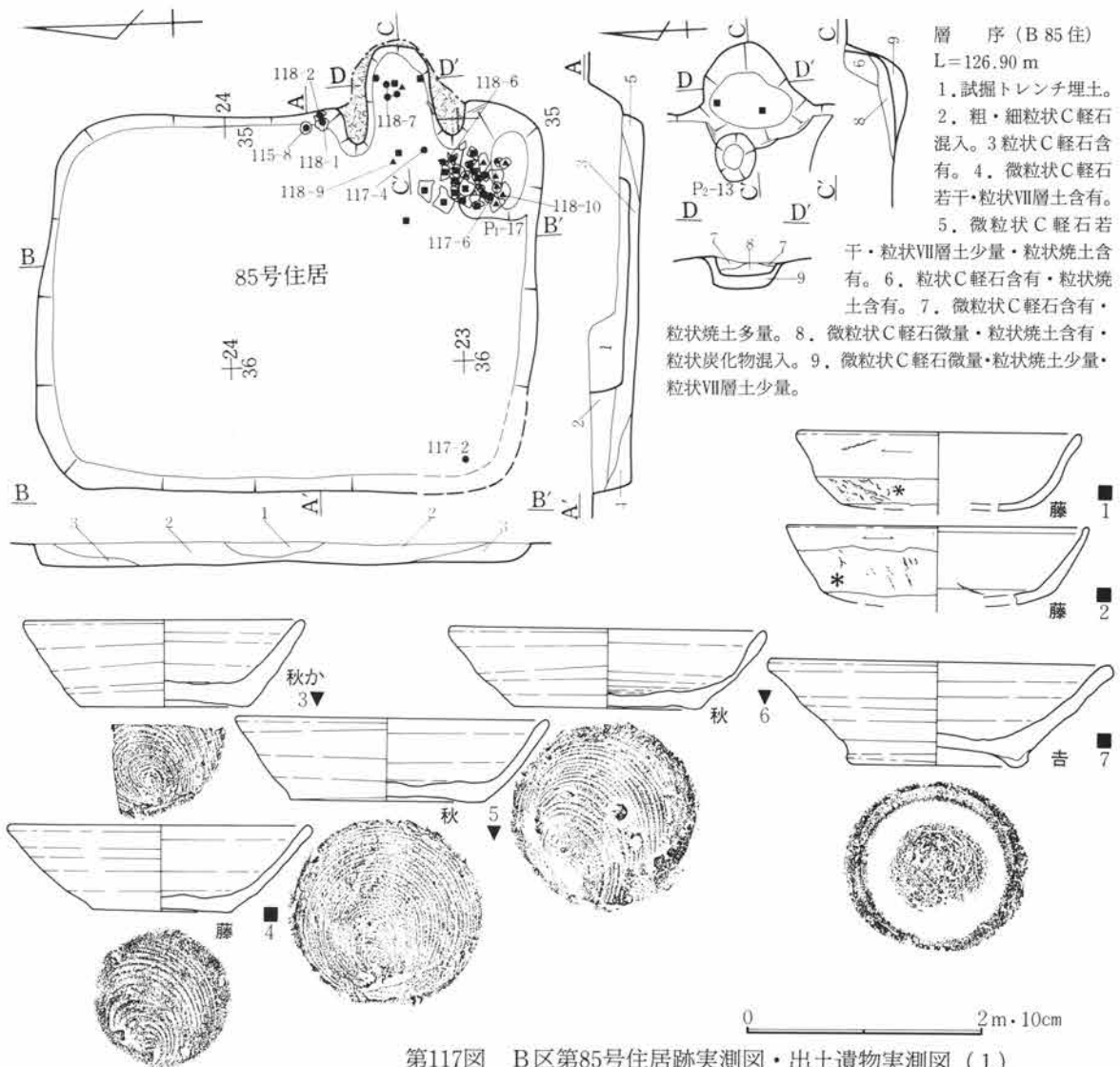
第115図 B区第83号住居跡出土遺物実測図(2)



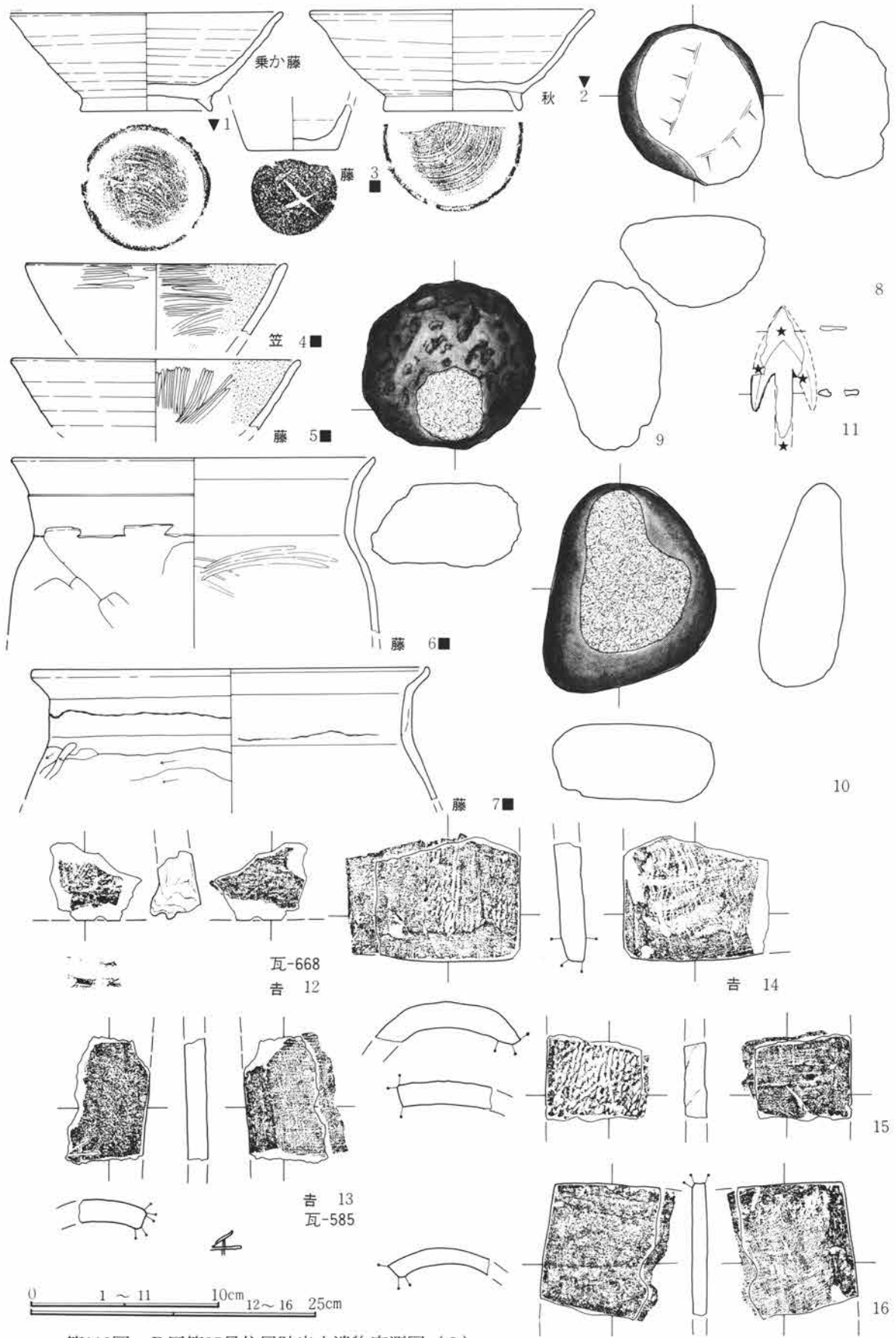
第116図 B区第83号住居跡出土遺物実測図(3)

所見 当住居は横長方形の住居で、東壁で南東隅部に偏在した位置にカマドを備え、南東隅部直下には縦長方形の傍竈坑を備えている。カマドは、左右両袖共屋内側にやや長く突出した状態である。燃焼部はやや広くD区第I段階の様相が認められる。出土遺物では、瓦類が多く特に傍竈坑部周辺の床面直上乃至床面直上層に集中していた。然し、傍竈坑の覆土内では遺物の出土量がやや認められるものの大半が上面を被覆するかの状態であり、傍竈坑は使用時には埋設されていたか、有機質の蓋状のものを備えていたとも想起される。住居形状はC区の第III段階に対比されるが、出土遺物には古い様相が認められる。

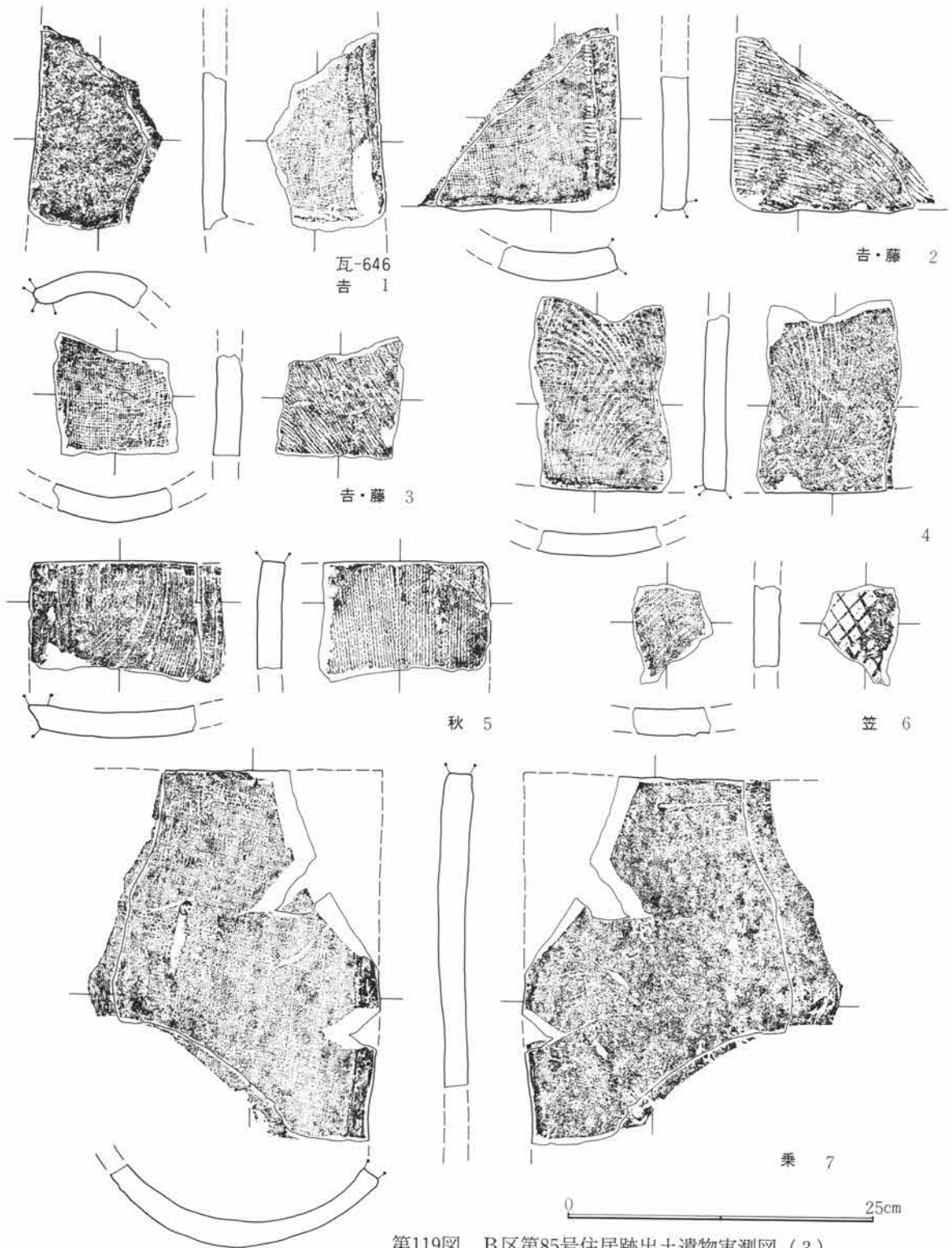
遺構名称	B区第85号住居跡		位置	22～24-B-34～36グリッド内。			残存深度	約37cm
平面形態	横長方形	規模	3.12m×4.30m	構築基準辺	東壁か	主軸方位	北-93度-南位か。	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	南側はVII層土を使用し、北側はB87・108住居覆土を使用。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・隅丸長方形。82×62cm・深度-17cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から66cm。				主軸方位	北-89度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	舌状。			
規模	全長 88cm・屋外長 50cm・屋内長 38cm・袖部幅123cm・燃烧部幅 55cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。右壁は瓦で補強する。							
	袖	両袖共に屋内側にやや長く突出する。						
煙道	未検出。			掘り方	円形土坑状を呈し、P <sub>2</sub> を検出。			
遺物出土状態	傍竈坑内及びカマド寄りの部分から瓦・礫が集中して出土。(傍竈坑内に流れ込む状態)							



第117図 B区第85号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第118図 B区第85号住居跡出土遺物実測図(2)



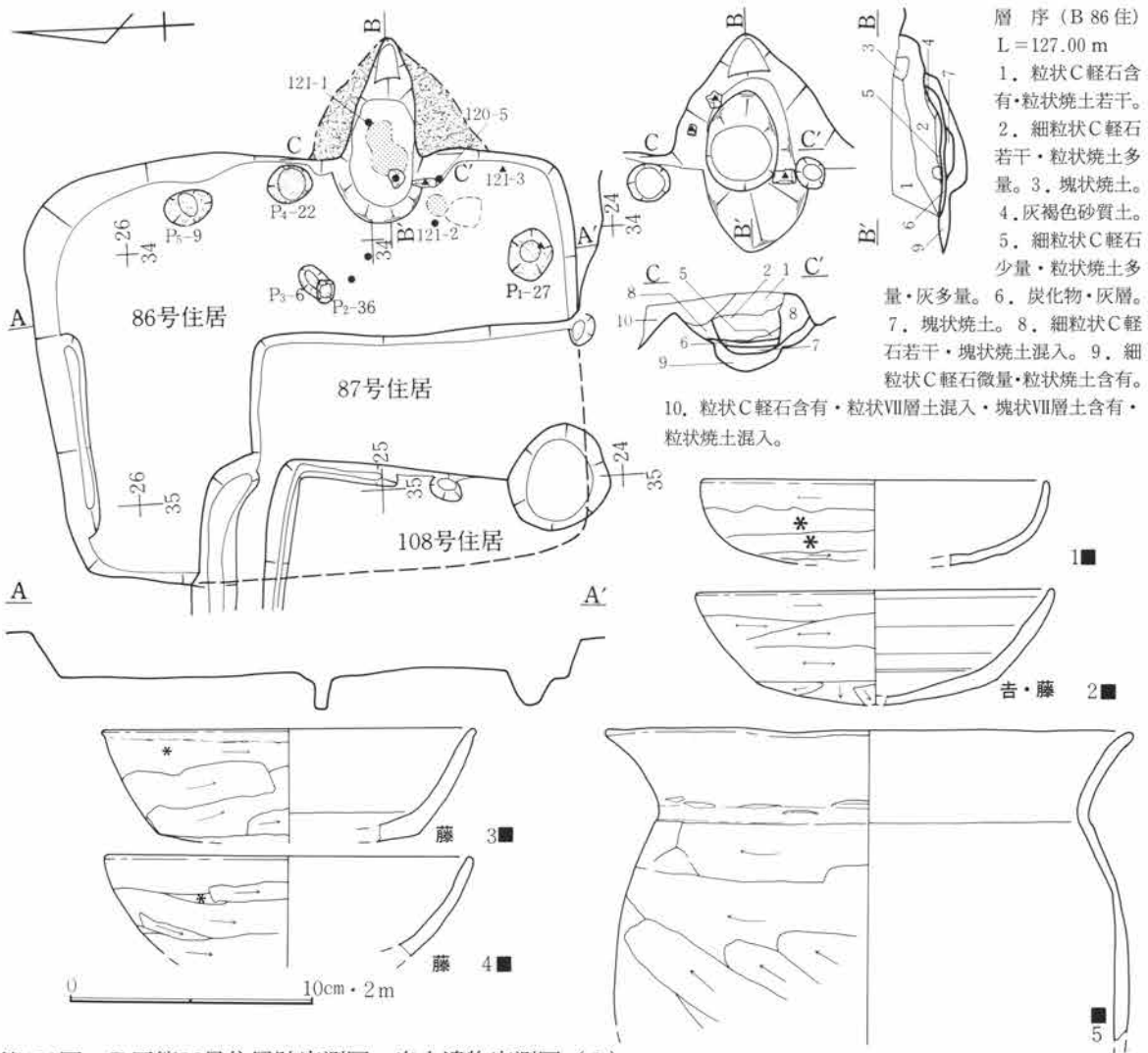
第119図 B区第85号住居跡出土遺物実測図(3)

所見 当住居跡は87号住に切られている。住居は東壁中央より南東隅部寄りに備える。カマドは燃焼部がやや幅が広く長い。煙道は、奥壁中位程より立ち上がっている。南壁下南東隅部寄りに検出されたP1は、土器の出土は無いものの前述82住のP<sub>1</sub>に対比されるものと考えられる。この他のピットでP<sub>4</sub>・P<sub>2</sub>共にやや深目のものであるが、性格は言及出来ない。出土遺物の中で121-1・5は、住居跡の切り合い関係等を考慮すれば本跡に伴わないと考えられる。住居形状は、前述82住同様にC区第III段階に対比されると考えられる。



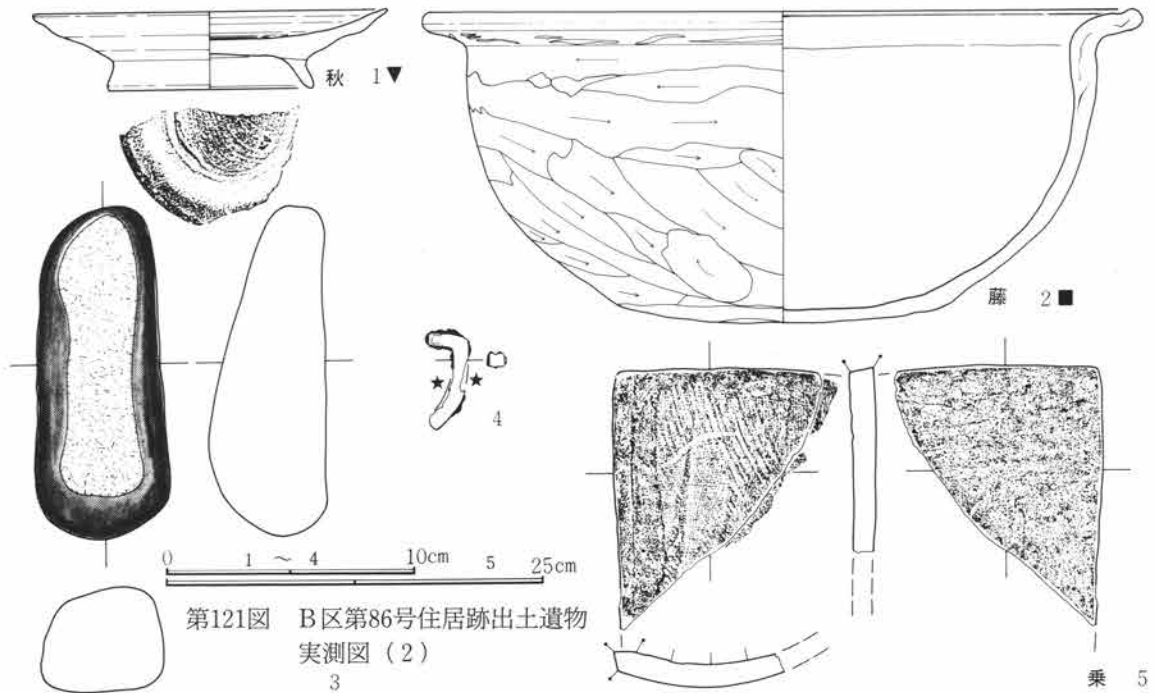
第3節 検出された住居跡について

遺構名称	B区第86号住居跡		位置	24~26-B-33~35グリッド内。		残存深度	約32cm
平面形態	横長方形。	規模	3.42m×4.52m	構築基準辺	東乃至南壁	主軸方位	北-★度-南
壁	斜位気味~斜位。		床面	地山VII層土を使用し平坦である。			
壁溝	北壁下北西隅部。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> か。円形状。41×37cm・深度-27cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。			主軸方位	北-96度-南	
改築	有。掘り方内から旧状の補強材を検出。		形状	舌状。			
規模	全長150cm・屋外長 97cm・屋内長 53cm・袖部幅125cm・燃烧部幅 58cm・煙道部幅 24cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。燃烧部は全体的に広い。		袖	瘤状。右袖先端を地山砂岩質削り出し材で補強。			
煙道	全長30cmでほぼ垂直に立ち上がる。		掘り方	全体に大きく三角形状を呈する。			
遺物出土状態	全体に少ないが、カマド部分で少量出土している。						



第120図 B区第86号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

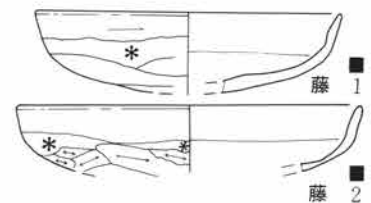


第121図 B区第86号住居跡出土遺物  
実測図(2)

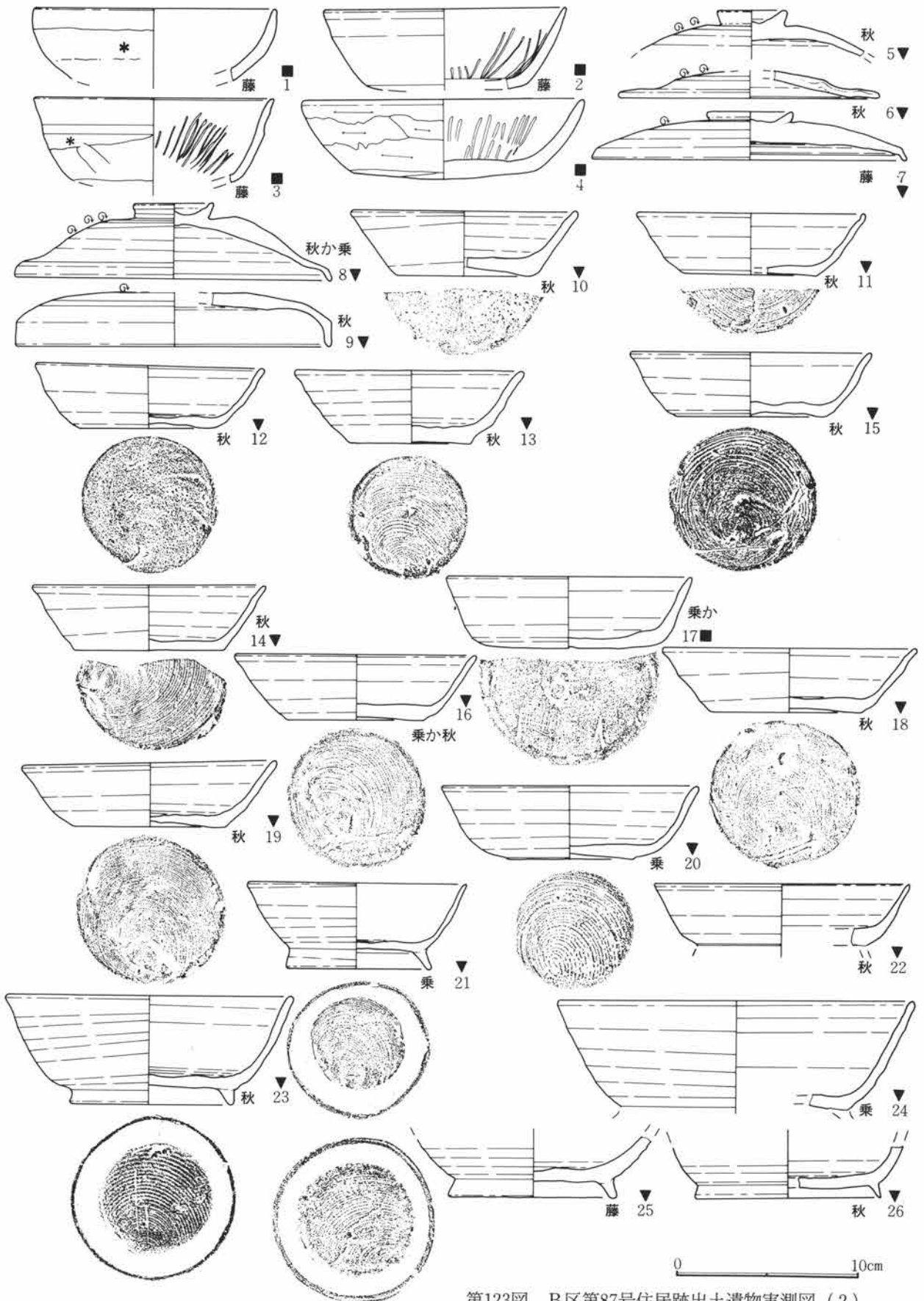
遺構名称	B区第87号住居跡		位置	23~25-B-34~37グリッド内。		残存深度	約60cm
平面形態	縦長方形。	規模	6.08m×4.53m	構築基準	不分明壁	主軸方位	北-90度-南位か。
壁	ほぼ垂直~斜位気味。		床面	地山VII層土を使用するが、B88・108住に大半を切られる。			
壁溝	北壁・西壁・南西隅部壁下。		傍竈坑・貯蔵穴	無。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から45cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	無。			形状	舌状。先端に細い煙道が付く。		
規模	全長142cm・屋外長130cm・屋内長 12cm・袖部幅 92cm・燃烧部幅 65cm・煙道部幅 28cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分があり、土師器甕が付設された状態で検出。						
煙道	細長い。検出長70cmで緩やかに立ち上がる。	掘り方	使用面とほぼ同様で袖材の据え方を検出。				
遺物出土状態	B88・108住の破壊により不明な点が多い。カマド周辺での完形個体の出土が多い。						

所見 当住居跡はB108・88住に切られているが、調査着手時は複数の存在は想定されたが平面確認出来なかった。この為調査は、断面による確認として調査を実施した。これによりB108住のカマドは大半を逸した状態となった。

住居跡は、東壁で南東隅部寄りにカマドを備え北壁を除き均整のとれた住居である。北壁は北東隅寄りの部分に折れ状の隅部があり壁下には壁溝が検出されている。調査事は別住居と想定したが、壁溝東端の状態より1軒の住居と考えた。この縦長方形住居として次の報告区の中ではB124住に次規模を有している。住居形状・出土遺物様相ではC区の空白期のものと考えられる為後章で再考したい。

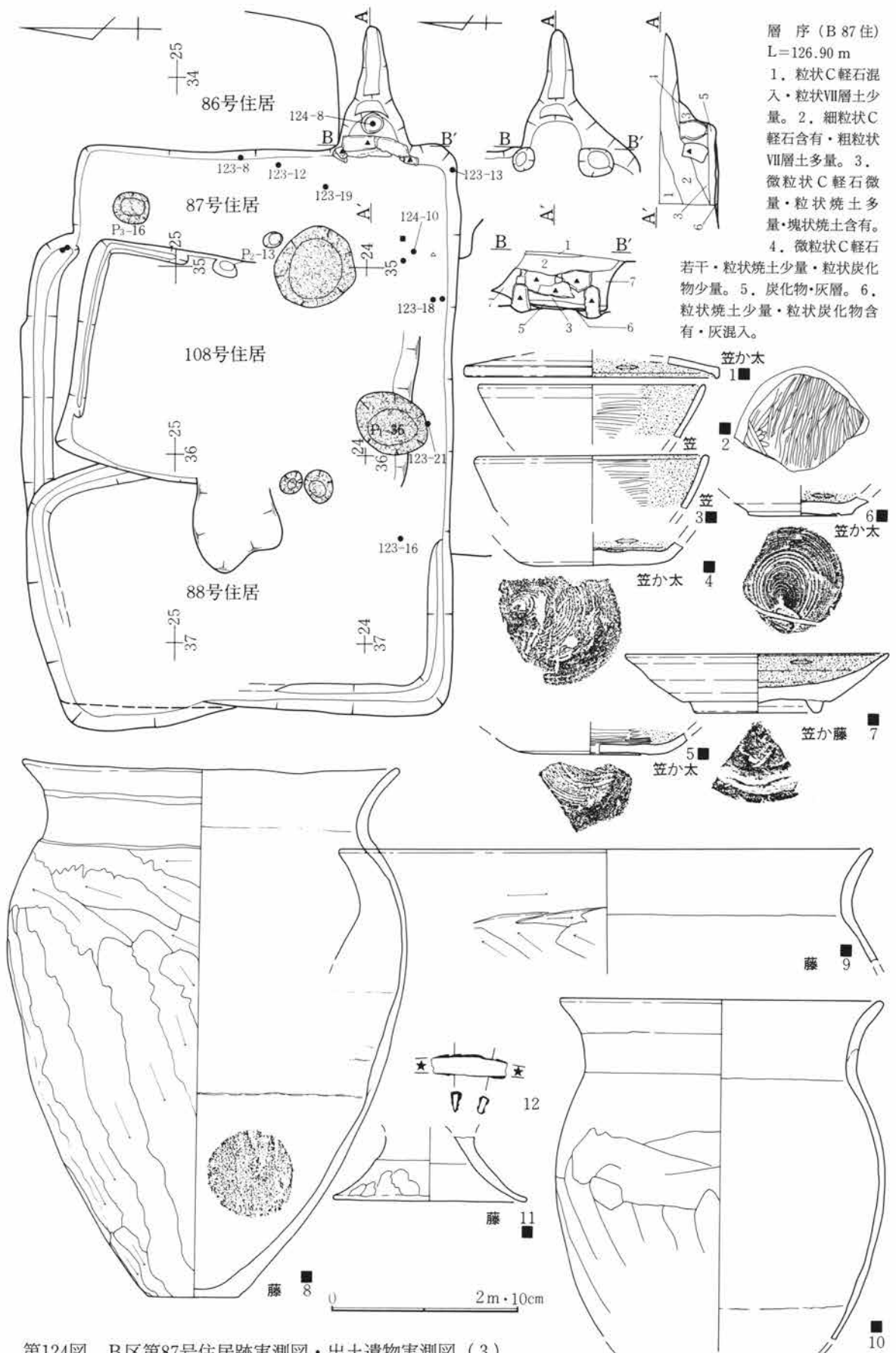


第122図 B区第87号住居跡出土  
遺物実測図(1) 1:3



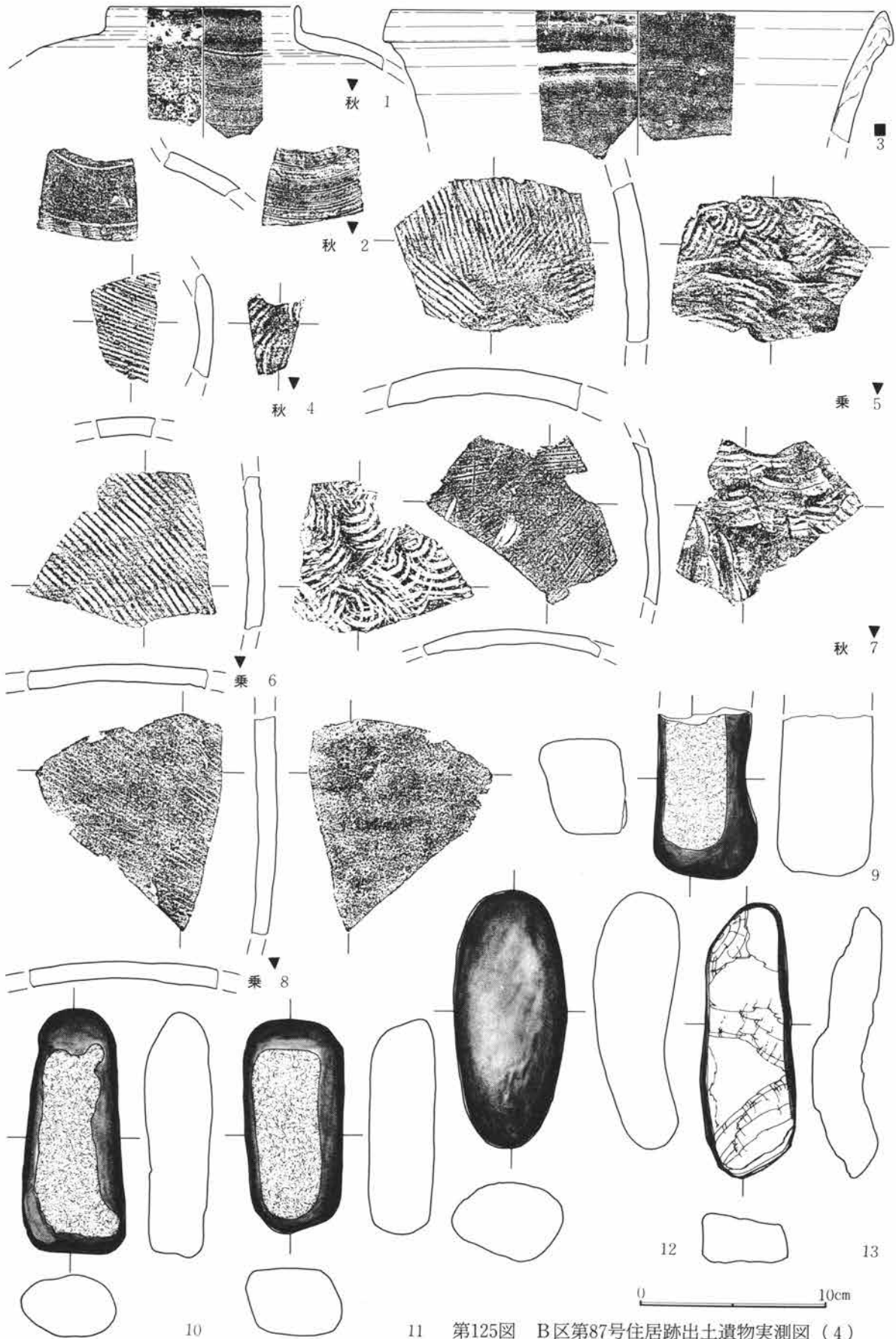
第123図 B区第87号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物

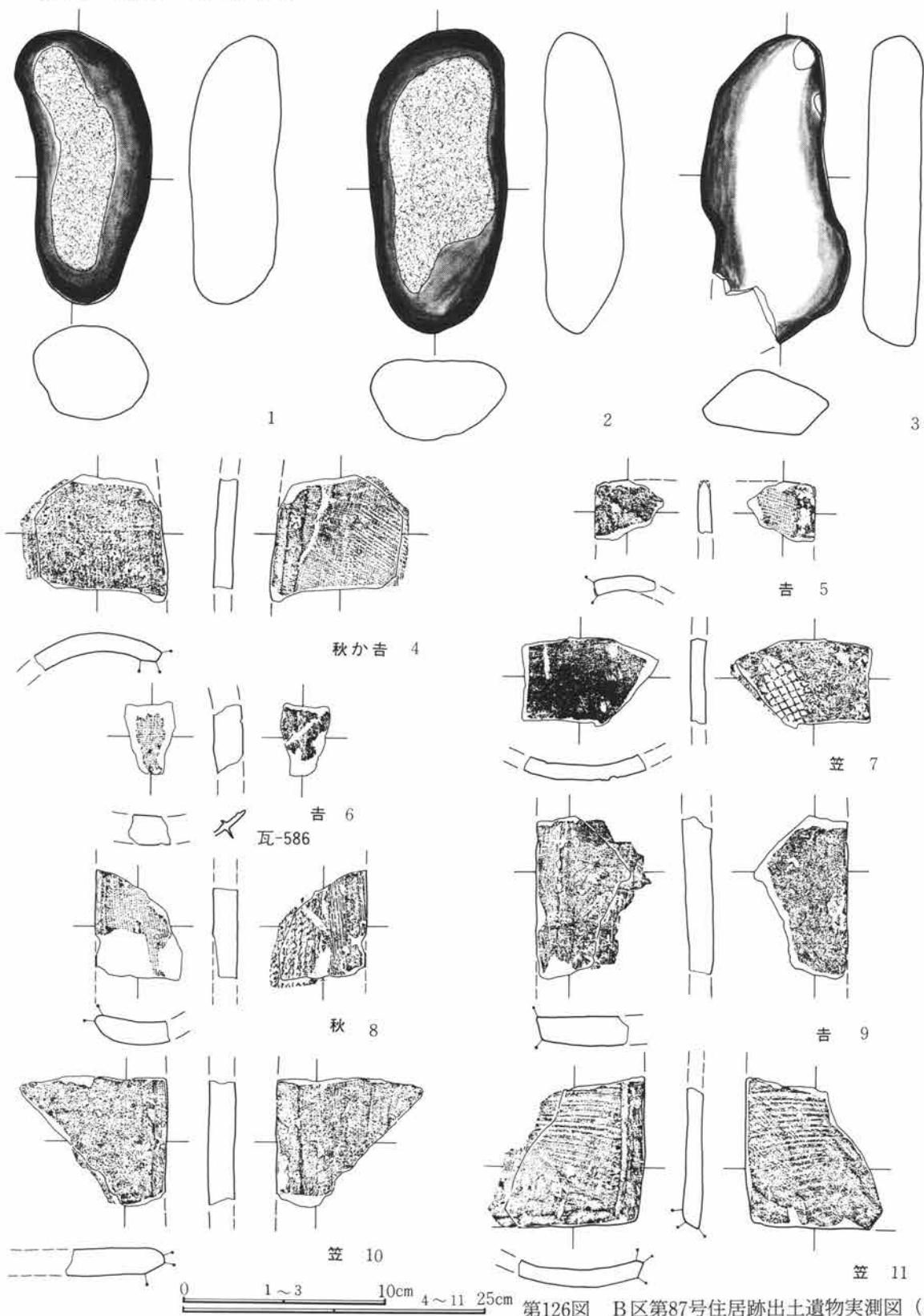


第124図 B区第87号住居跡実測図・出土遺物実測図(3)

第3節 検出された住居跡について



11 第125図 B区第87号住居跡出土遺物実測図(4)

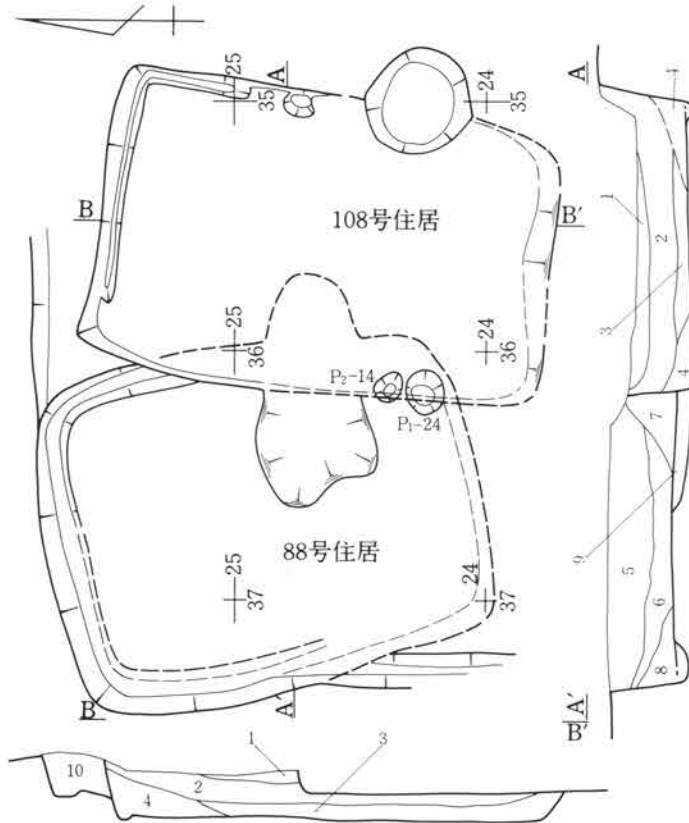


第126図 B区第87号住居跡出土遺物実測図(5)

所見(B88住) 当住居は87住を切り構築し108住に切られている。又、87住の所見の中で記述したとおり調査の下手際により壁の大半を失ない形状は断面等より図上復原したが、南壁側は復原出来なかった。推定される住居形状は横長方形で、カマド想定位置からC区の第VI段階以前の住居と思われる。

遺構名称	B区第88号住居跡		位置	23～25-B-35～37グリッド内。		残存深度	約50cm
平面形態	横長方形。	規模	2.85m×3.50m	構築基準辺	不分明壁	主軸方位	北-78度-南位か。
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。地山VII層土を使用する。			
壁溝	南壁以外の壁下で検出。幅20cm程。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> か。円形状径32cm・深度-24cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
遺物出土状態	調査の不幸により詳細不分明。						

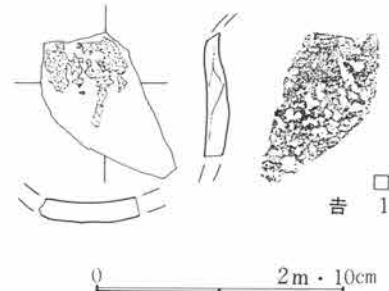
遺構名称	B区第108号住居跡		位置	23～25-B-34～36グリッド内。		残存深度	約68cm
平面形態	横長方形。	規模	2.45m×3.60m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-100度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	無し。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
遺物出土状態	調査の不幸により詳細不分明。						



所見 (B108住) 当住居も87住調査時にカマドの焼土が認められ、87住の北壁の折れ部分に相当する住居と思われたが、精査・平面確認を実施しても同一住居と思われなかったことにより断面確認として調査実施した。この為、住居の大半を逸し前述88住と同様な状況となった。土層断面の観察結果88・87住を切ることが判断された。住居は横長方形を呈し、東壁中央より南東隅部に寄った位置にカマドを具備するも、傍竈坑等の施設に就いては未確認に終わった。出土遺物は87住で収納した中に含まれる可能性が非常に大きい。住居形状は88住同様と考えられる。

層序 (B108・88住) L=127.00 m

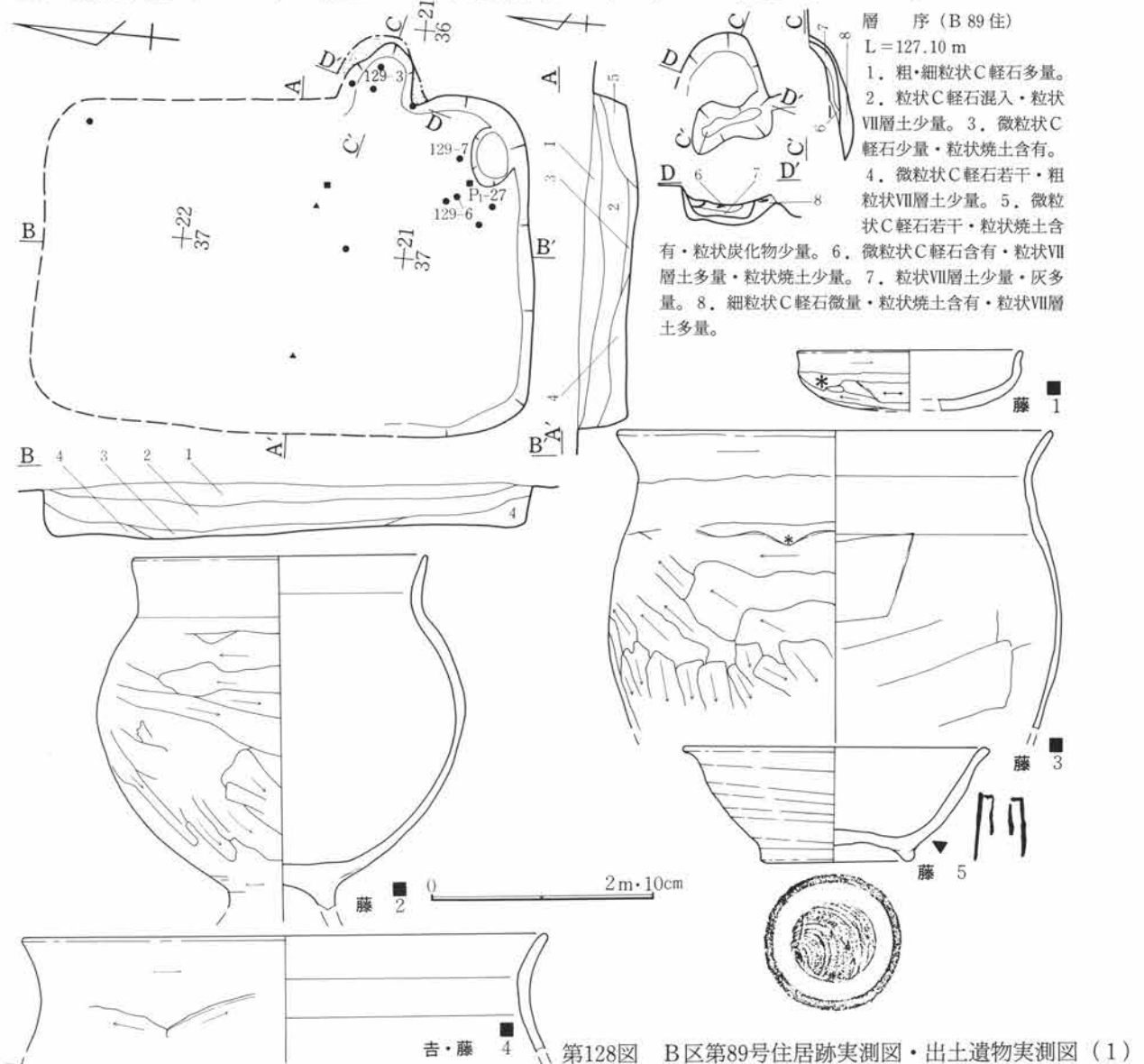
1. 粗・細粒状C軽石多量・粒状VII層土少量。
2. 粗・細粒状C軽石混入・粗粒状VII層土少量。
3. 細粒状C軽石少量・塊状VII層土多量。
4. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土少量。
5. 粗・細粒状C軽石多量・塊状VII層土少量。
6. 粒状C軽石含有・塊状VII層土多量。
7. 微粒状C軽石少量・粒状VII層土少量・粒状焼土含有。
8. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土少量。
9. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土少量・粒状焼土混入。



第127図 B区第88・108号住居跡実測図・出土遺物実測図

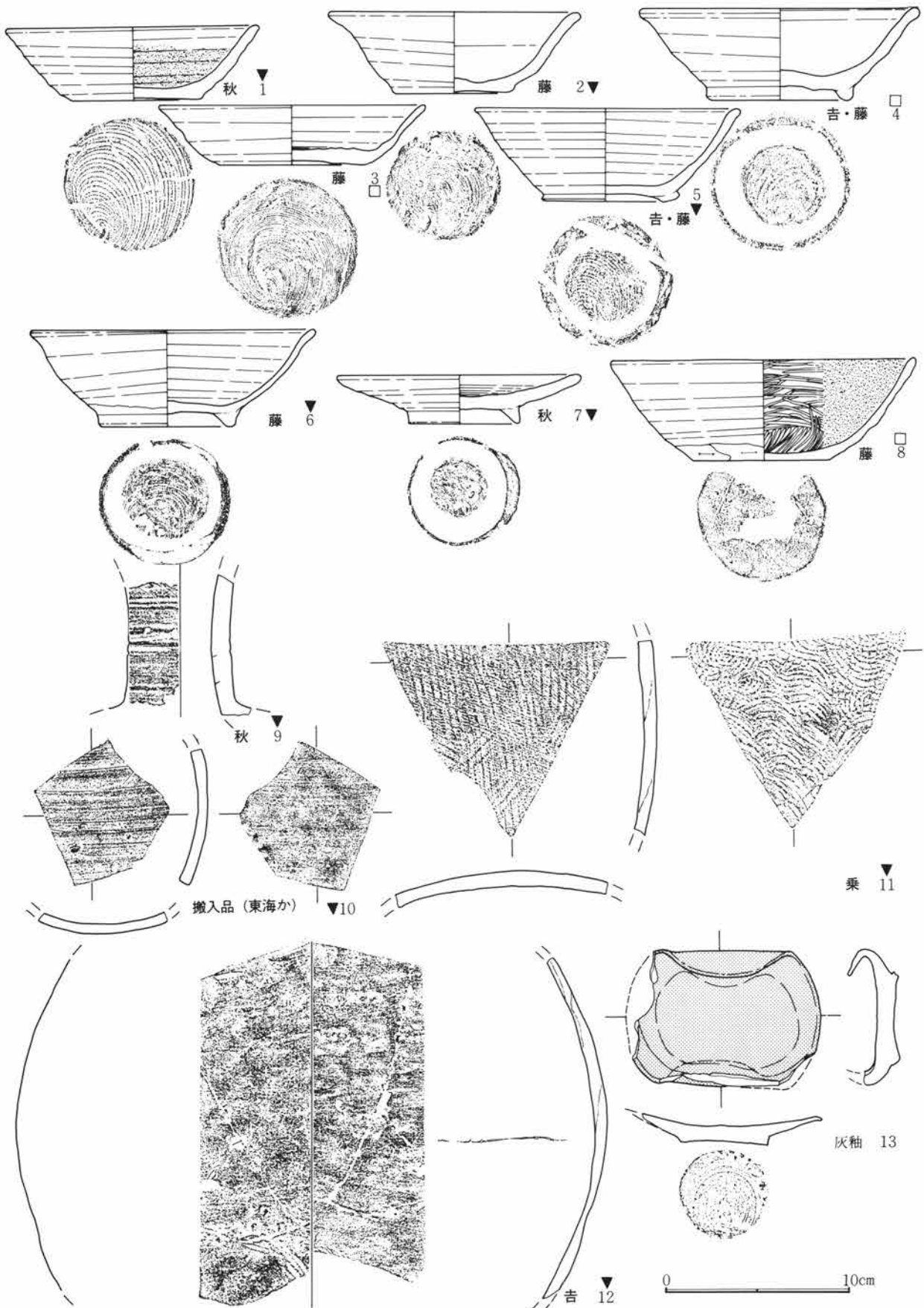
遺構名称	B区第89号住居跡		位置	21~23-B-36~38グリッド内。		残存深度	約48cm
平面形態	横長方形。	規模	2.92m×4.43m	構築基準辺	不分明壁	主軸方位	北-83度-南(南壁)
壁	ほぼ垂直~斜位気味。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・52×39cm・深度-27cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
遺物出土状態	住居内南東隅部周辺でやや多く、床面直上からの出土も認められる。						

所見 当住居はB95住を切り構築している。調査時は、この両者が重複していることは確認されたが、新旧関係までは確認出来なかった。この為調査は断面確認による併行調査とした。そして、図化した住居図は、土層断面で確認した位置での図上復原である。住居跡は東壁中央より南東隅寄りにカマドを備えており、南壁下の南東隅部寄りに傍竈坑を備えている。カマドは、調査時に左袖側を破壊している。出土遺物では墨書土器(判読不能)(128-5)が出土している。住居形状はC区の第Ⅵ~Ⅶ段階と考えられる。



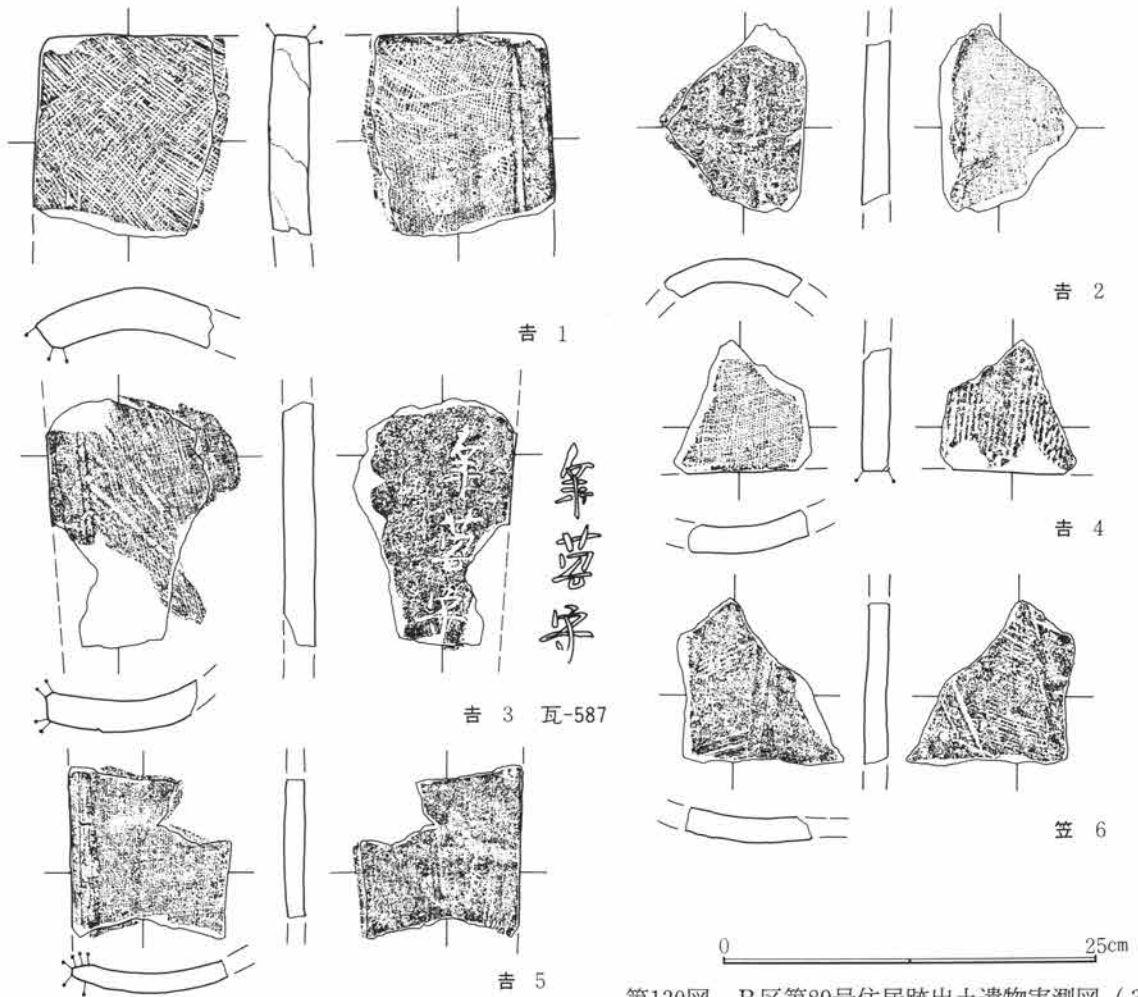


第3節 検出された住居跡について



第129図 B区第89号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



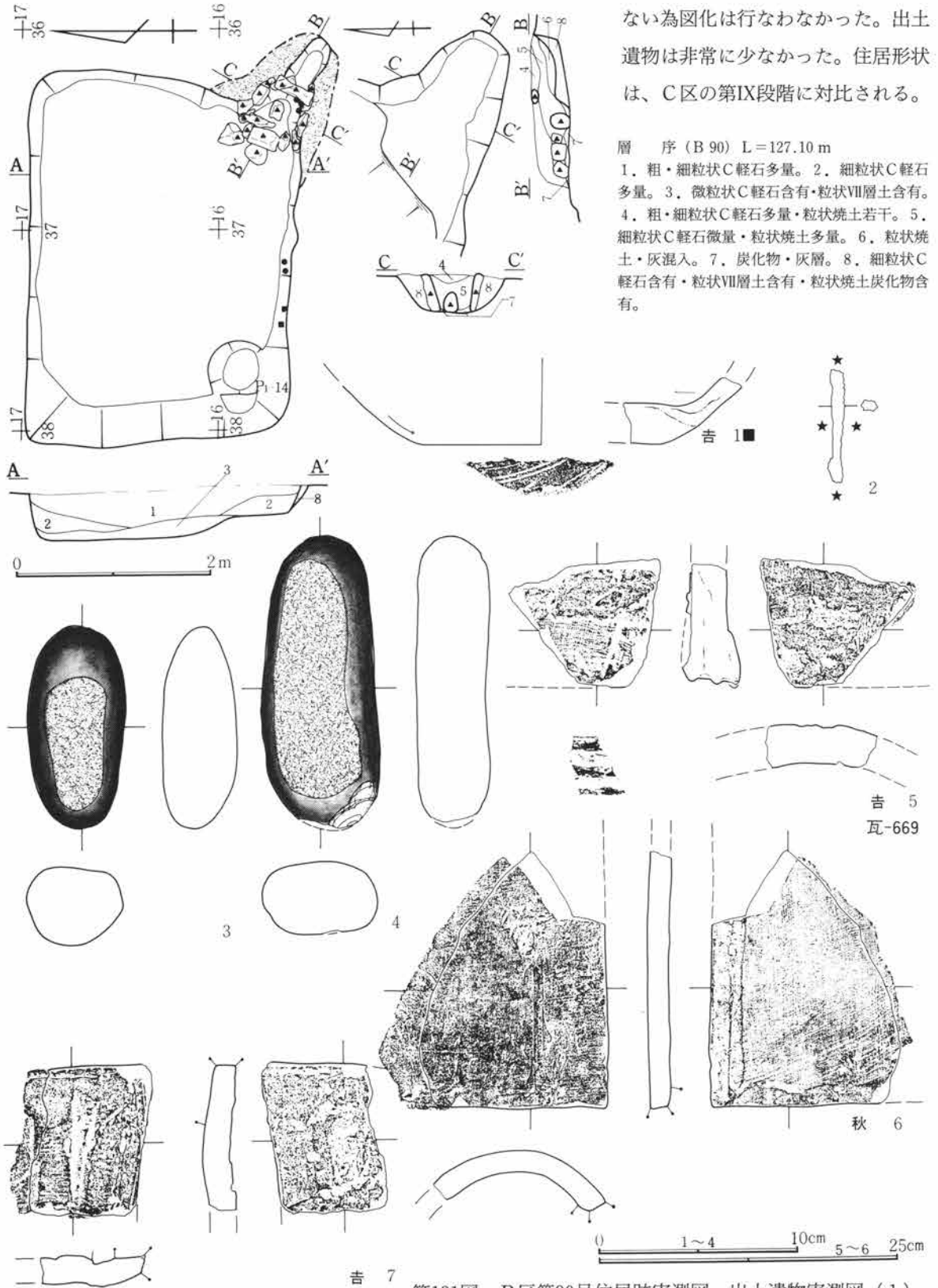
第130図 B区第89号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第90号住居跡		位置	16・17-B-37~39グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.74m×2.67m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-90度-南
壁	ほぼ垂直~斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦?、井戸覆土の沈下により中央が窪んでいる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形基調径60cm・深度-14cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から0cm。			主軸方位	北-121度-南	
改築	有。掘り方内		形状	細い舌状を呈し燃烧と煙道の境に段を有する。			
規模	全長160cm・屋外長 90cm・屋内長 70cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 44cm・煙道部幅 20cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。側壁を礫で補強する。		袖	左袖は瘤状であるが、右袖は、南壁の一部となっている。			
煙道	細く比較的短い。		掘り方	大きな舌状を呈す。			
遺物出土状態	出土遺物はやや多いが、当住居の推定時期より古期のものが大半であった。						

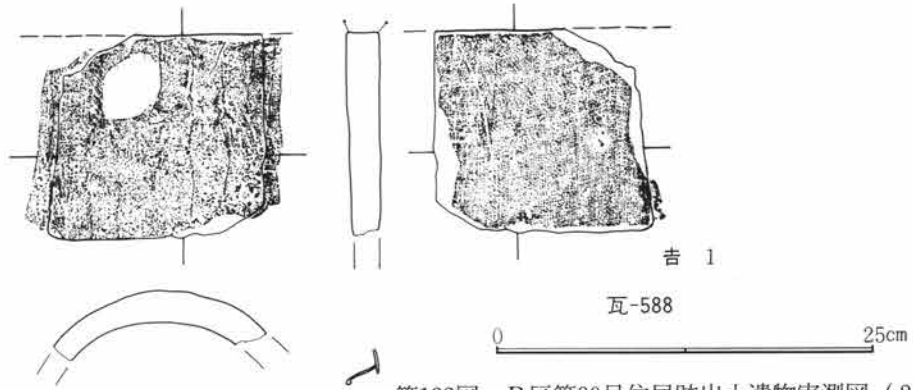
所見 当住居跡はB117住・B4井戸を切り構築している。住居は南東隅部にカマドを具備し、南西隅部に貯蔵穴(?)を備えている。カマドは、燃烧部底面と煙道部底面が同一面で構築されており、礫を補強材・部

第3節 検出された住居跡について

材として多用している。特に袖・焚口部・燃焼部に限定される。住居の掘り方は、土層断面図中3層に思われるが、同層は、下位の4井戸の覆土・埋土の沈下に伴ない、当住居跡埋没後沈下・陥没した部分と考えられる土層であり、3層の下面が床面となる。図上にはこれにより生じている段差は、本来当住居跡の施設でない為図化は行なわなかった。出土遺物は非常に少なかった。住居形状は、C区の第IX段階に対比される。

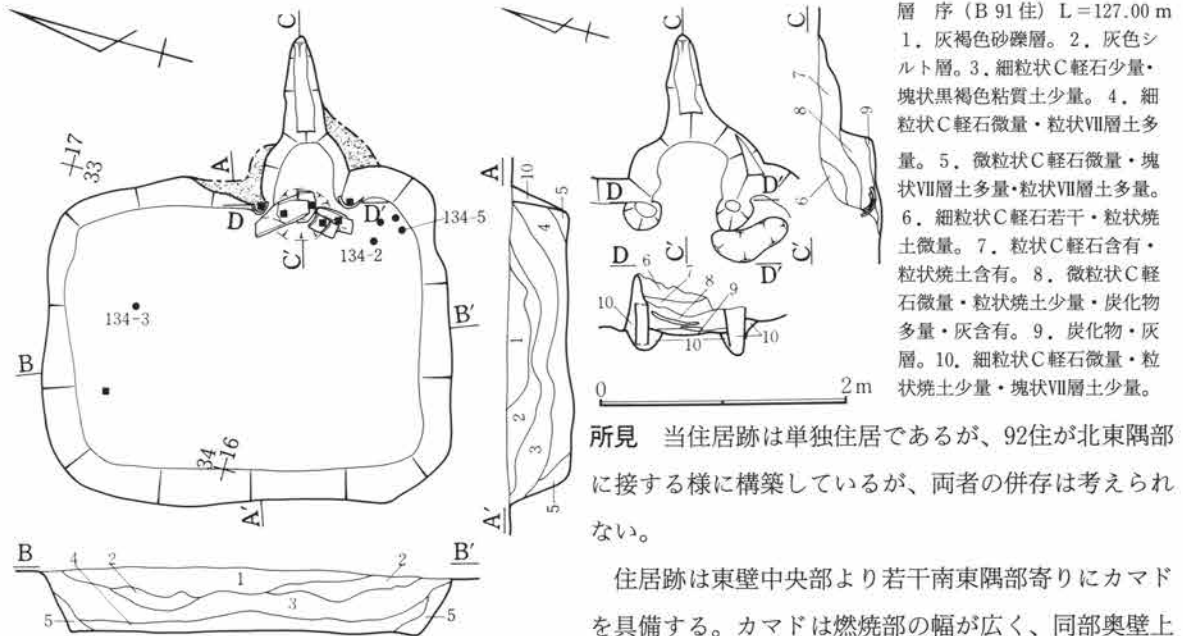


第131図 B区第90号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第132図 B区第90号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第91号住居跡		位置	16・17-B-33~35グリッド内。		残存深度	約54cm
平面形態	横長方形。	規模	2.6m× 3.3m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-74度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から54cm。			主軸方位	北-73度-南	
改築	有。掘り方内より焼土検出。		形状	逆「U」字状の燃烧部に細い煙道が付設する。			
規模	全長160cm・屋外長107cm・屋内長 53cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 70cm・煙道部幅 30cm						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左右両袖共に男瓦を芯材としている。					
煙道	細く屋外に突出する。		掘り方	燃烧部でやや認められた。			
遺物出土状態	全体に床面直上出土の遺物は無く、孰れも床面より遊離している。						



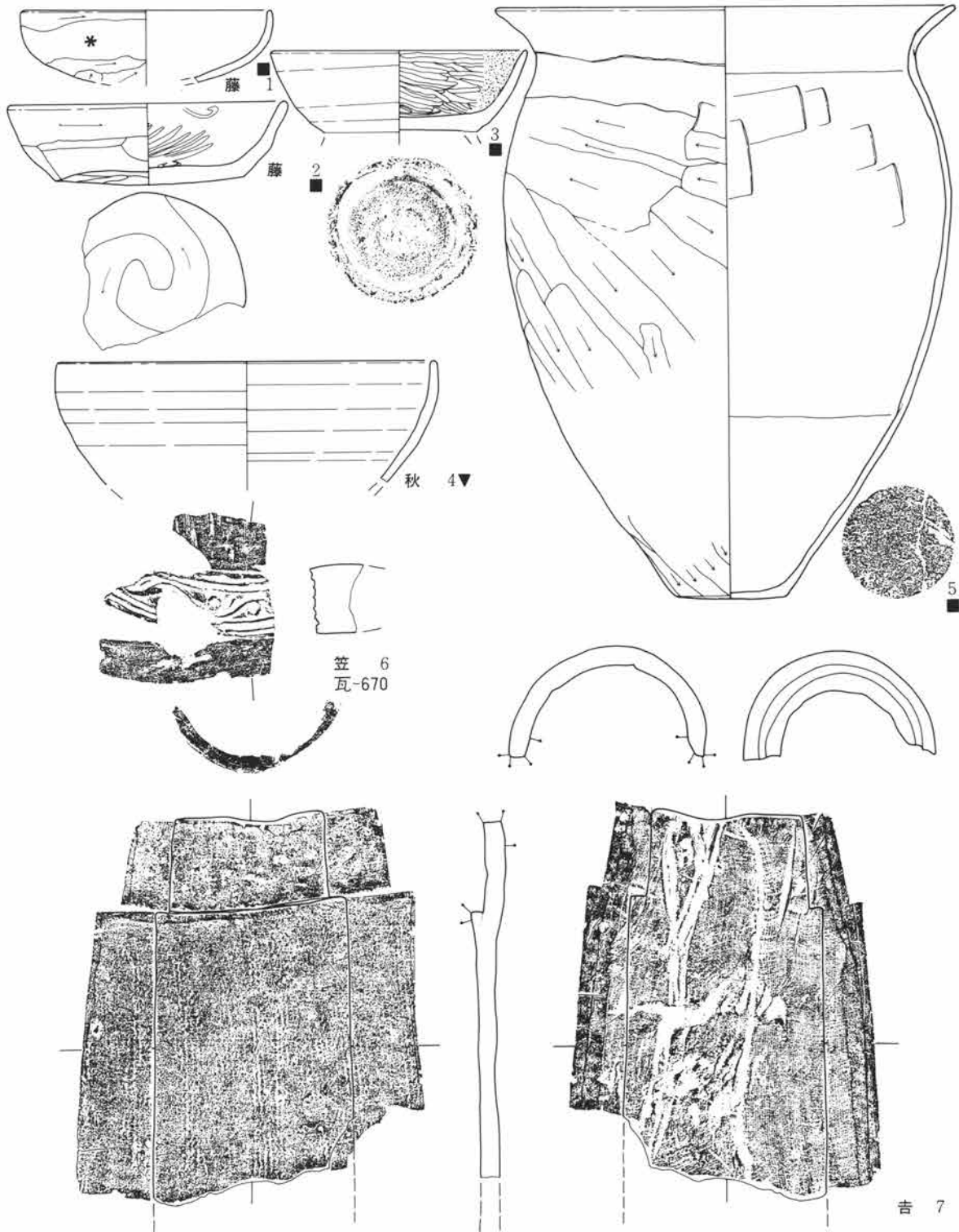
第133図 B区第91号住居跡実測図

所見 当住居跡は単独住居であるが、92住が北東隅部に接する様に構築しているが、両者の併存は考えられない。

住居跡は東壁中央部より若干南東隅部寄りにカマドを具備する。カマドは燃烧部の幅が広く、同部奥壁上半部より長く細い煙道が付設されている。袖は、左右

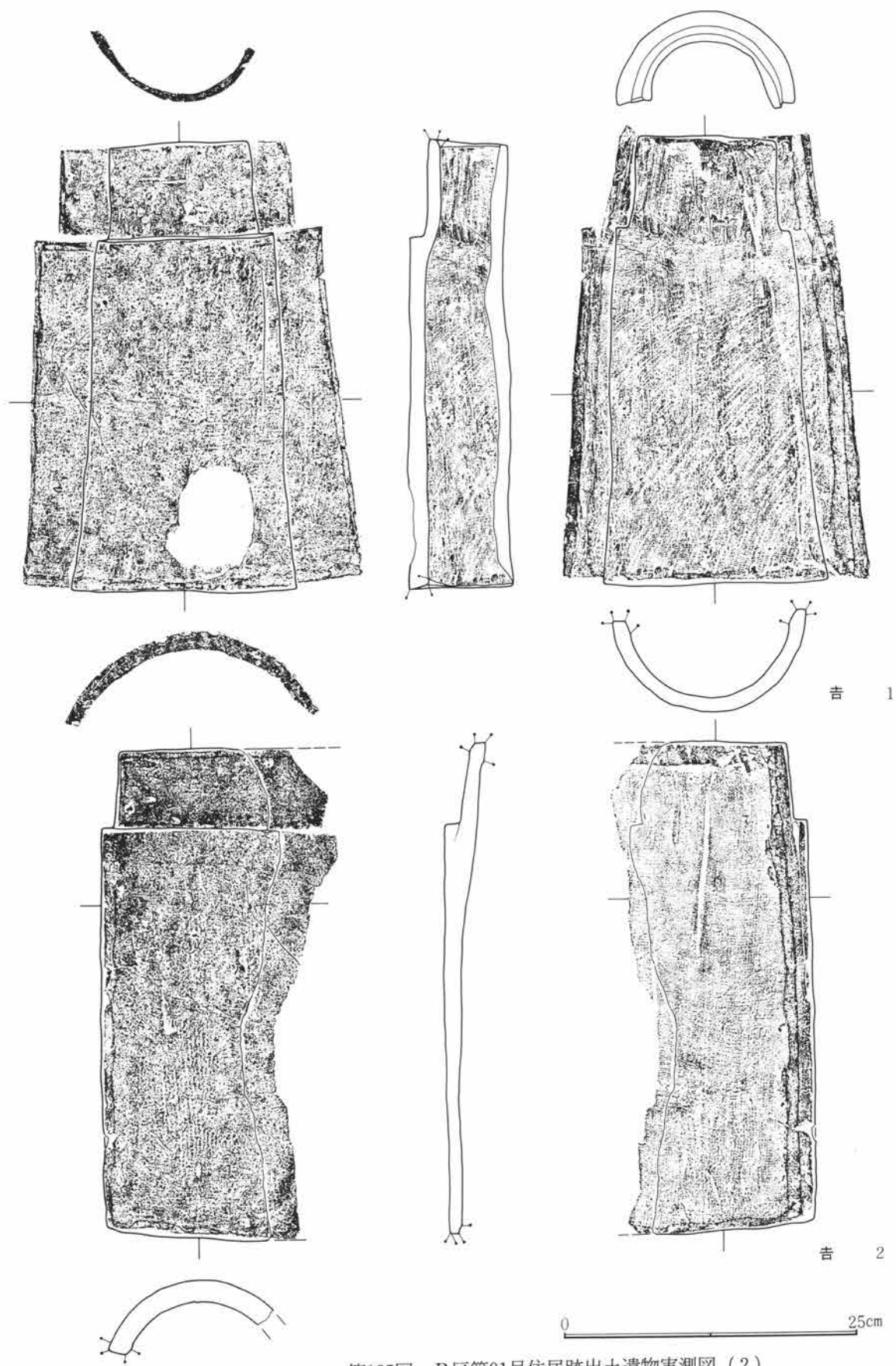
第3節 検出された住居跡について

両袖共に男瓦を用い、左袖は134-1を右袖は136-1を用いている。又、焚口部には同部天井部に用いたと考えられる男瓦の大形品等が集中して出土しており、135-1の玉縁付男瓦の完形品はこの焚口部での出土である。この他では、134-5の土師器甕が南東隅部の覆土・床直層より出土している。住居形状はC区の空白期で8世紀後半頃の住居と考えられる。国分寺瓦で当該の年代を付与される貴重な資料である。



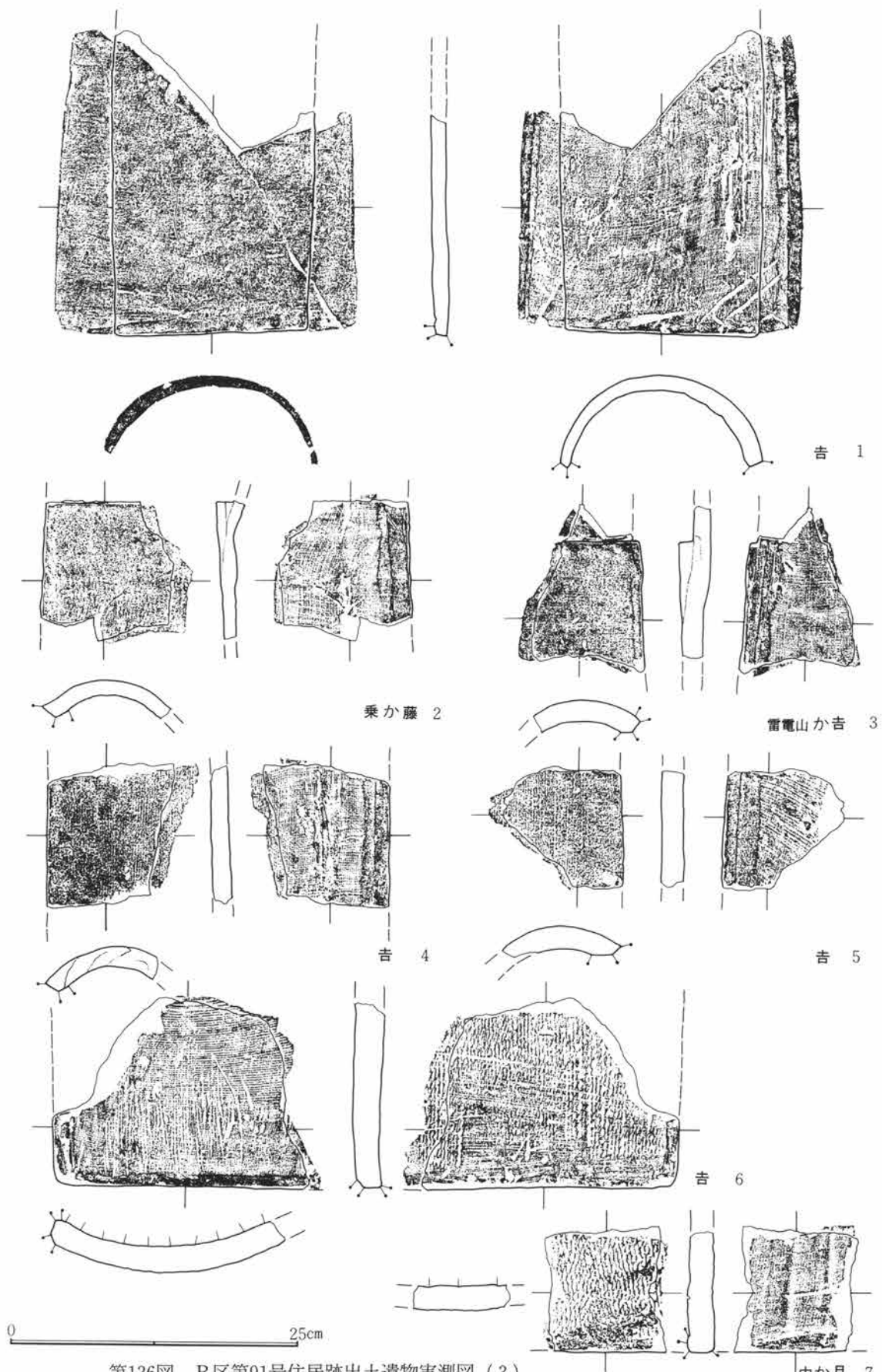
第134図 B区第91号住居跡出土遺物実測図(1)

0 1 ~ 5 10cm 6.7 25cm



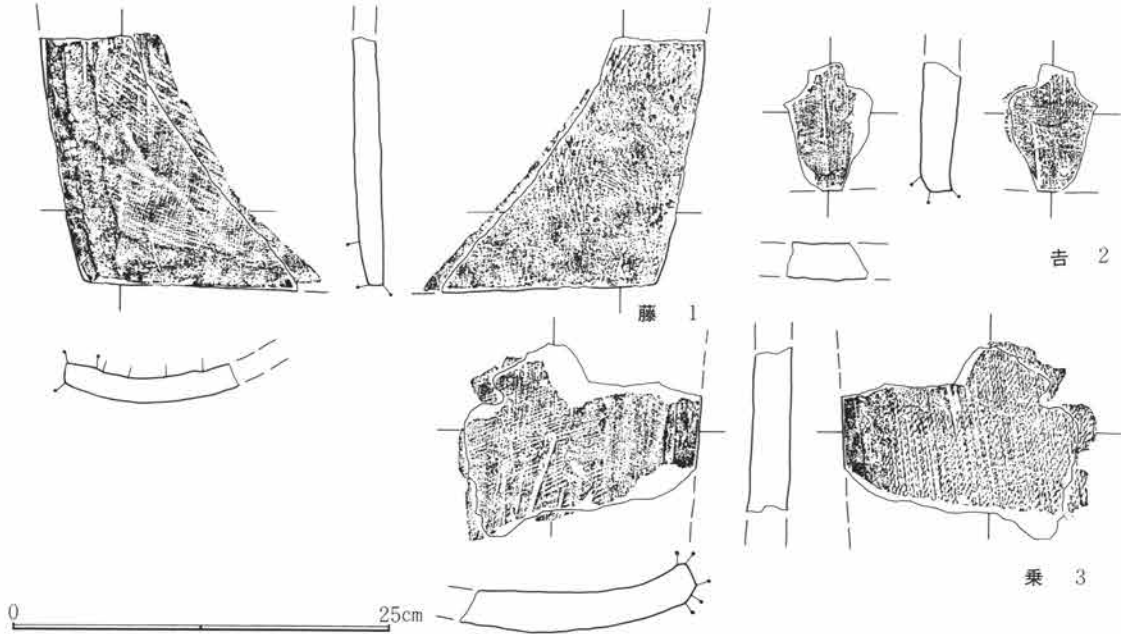
第135図 B区第91号住居跡出土遺物実測図(2)

第3節 検出された住居跡について



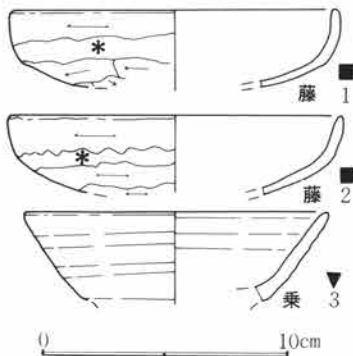
第136図 B区第91号住居跡出土遺物実測図(3)

中か月 7



第137図 B区第91号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	B区第92号住居跡		位置	17~20-B-33~35グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	横長形状	規模	3.85m×4.6m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-90度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。一部に造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形状。径140cm・深度-10cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から120cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内から焼土が検出されている。		形状	箱状の燃焼部に煙道を付設する。			
規模	全長164cm・屋外長110cm・屋内長54cm・袖部幅140cm・燃焼部幅74cm・煙道部幅30cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。			袖	右袖は礫を芯材とする。		
煙道	細く緩やかに立ち上がる。		掘り方	平面検出は調査の不幸により出来なかった。			
遺物出土状態	大形品の出土もやや多いが、孰れも覆土層中に遊離している。						

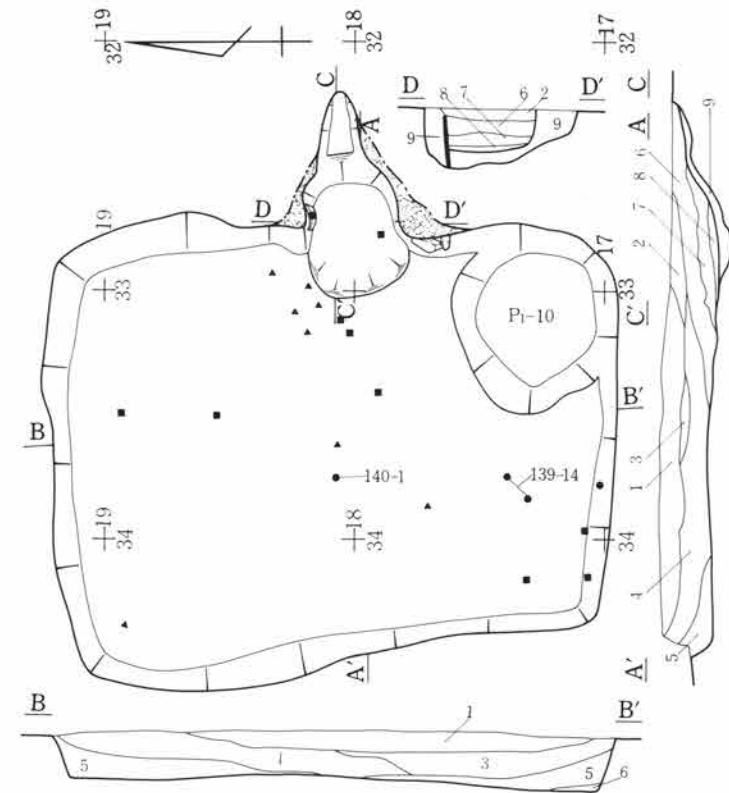


第138図 B区第92号住居跡出土遺物実測図(1)

所見 当住居跡は前述91住と近接している。住居は東壁中央部にカマドを具備し南東隅部に円形状の大きな傍竈坑を備えている。カマドは、隅丸長方形の燃焼部は幅が広く、煙道は燃焼部奥壁の上位部に付設している。このカマド形状はC区第III段階以降で第IV段階以前の空白期の構造と考えられる。この空白期の住居でこれ程顕著な傍竈坑を備える住居は少ないと思われる。出土遺物では空白期としては少数例になる完形に近い瓦の出土が2点あり他にも少数ある。この瓦は、国分寺瓦の年代観を付与する意味では前述91住と同様に貴重な資料である。この瓦以外では、東毛の太田乃至笠懸系の内黒土器が2点出土している。この東毛系の内黒の出土はC区の空白期にやや集中する傾向が看取される。詳細は後章で詳述したい。

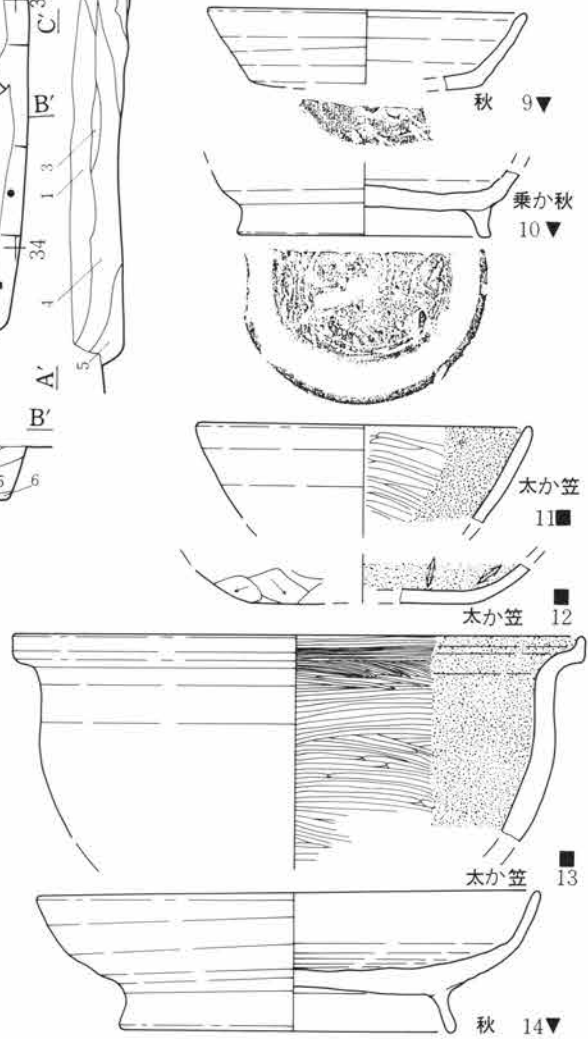
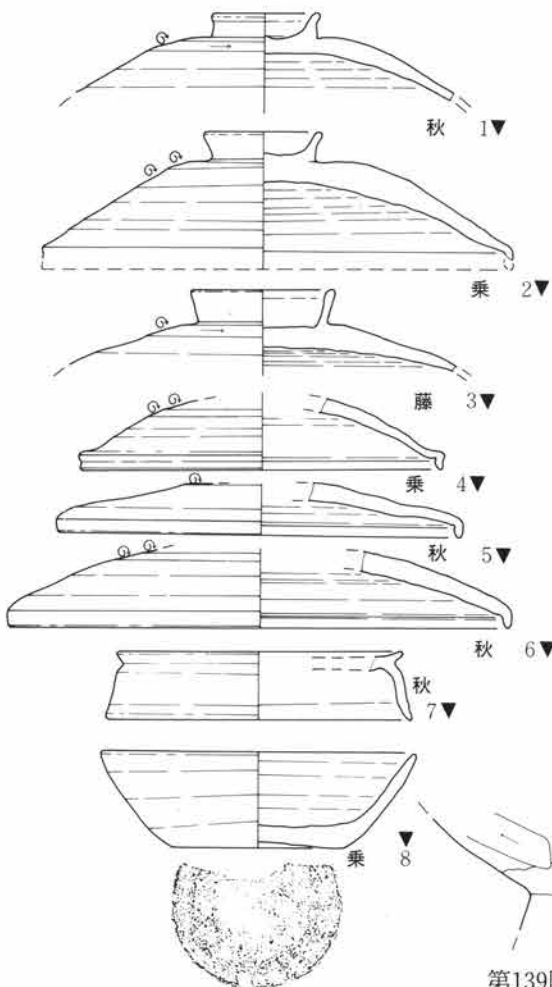


第3節 検出された住居跡について



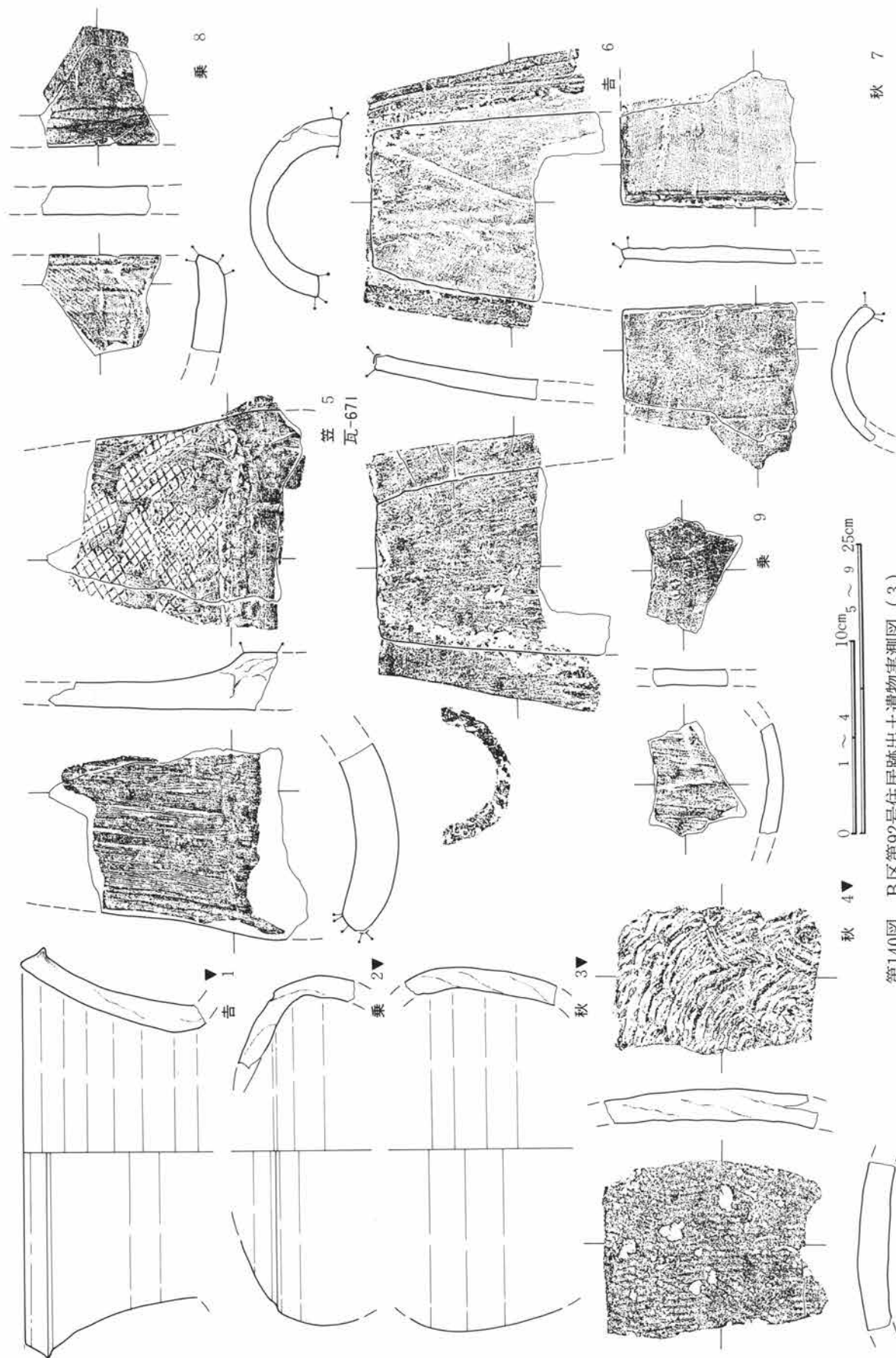
層 序 (B 92 住) L=127.10 m

1. 塊状灰色シルト層。2. 細粒状C軽石微量・塊状灰色シルト混入。3. 1近質(1より細粒)。4. 粒状C軽石多量・粒状炭化物含有。5. 粒状C軽石混入・塊状VII層土少量・粒状VII層土少量。6. 粒状C軽石混入・粒状炭化物含有・粒状焼土含有。7. 粒状VII層土多量・粒状炭化物含有・粒状焼土含有。8. 炭化物・灰層。9. 粒状VII層土多量・灰・粒状焼土微量。

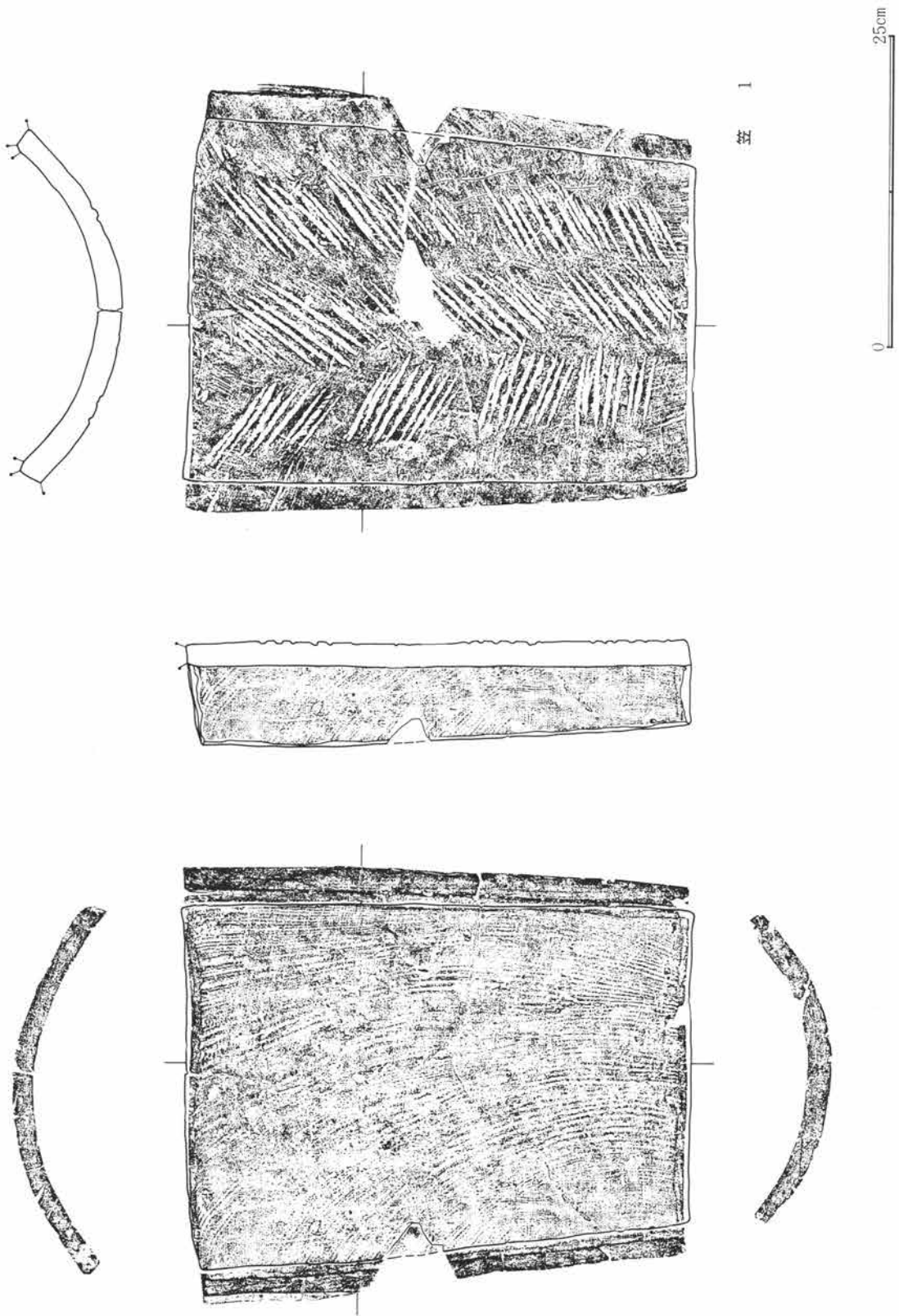


0 2m・10cm

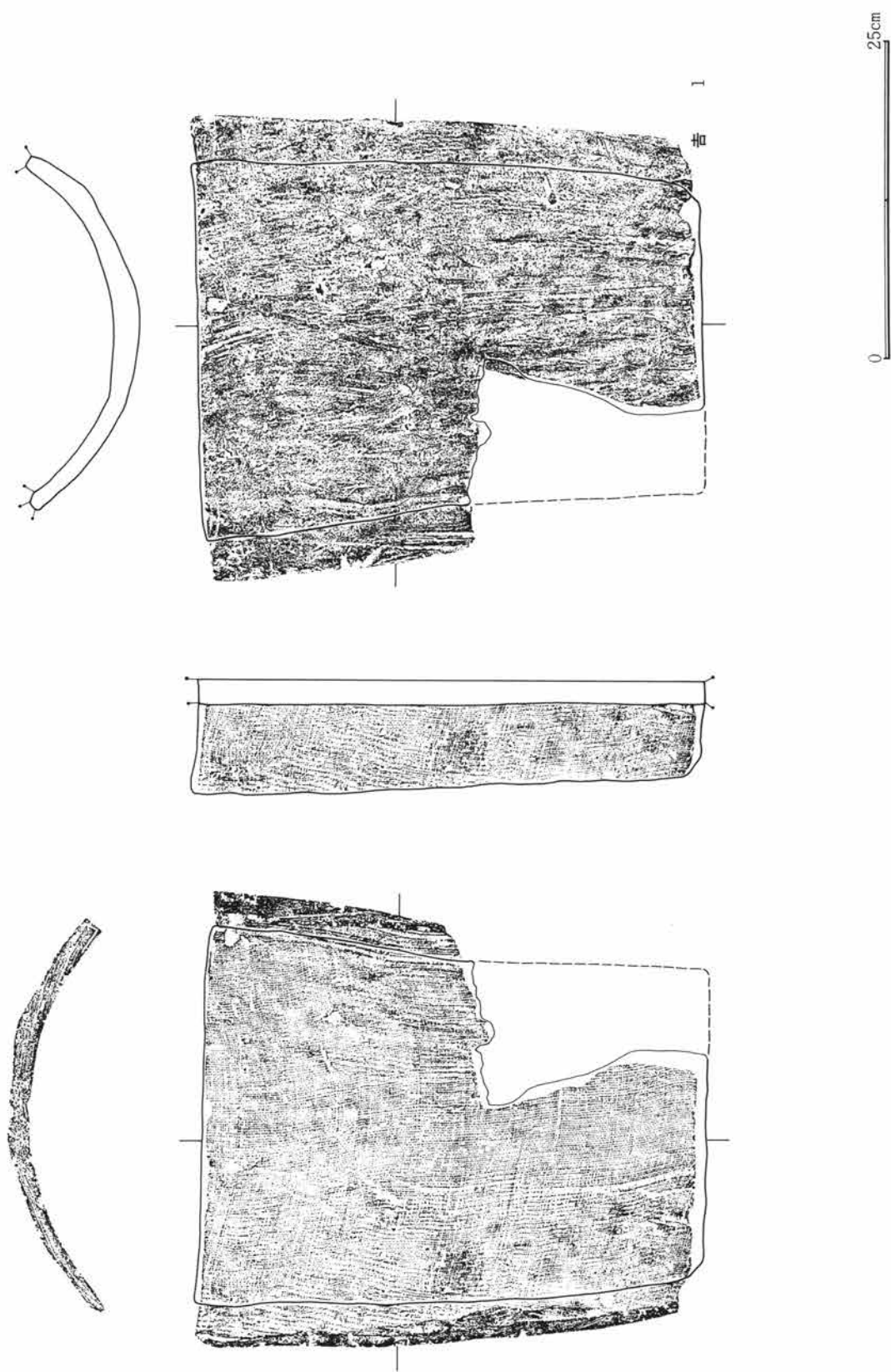
第139図 B区第92号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



第140図 B区第92号住居跡出土遺物実測図(3)



第141図 B区第92号住居跡出土遺物実測図(4)

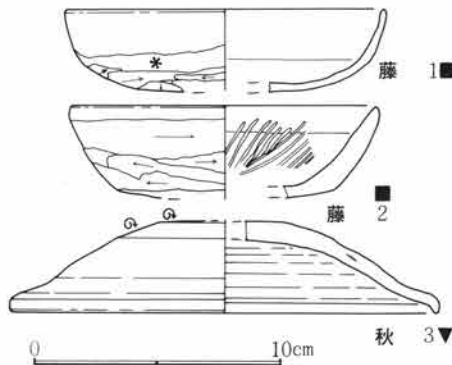


第142図 B区第92号住居跡出土遺物表測図(5)



第143図 B区第92号住居跡出土遺物実測図(6)

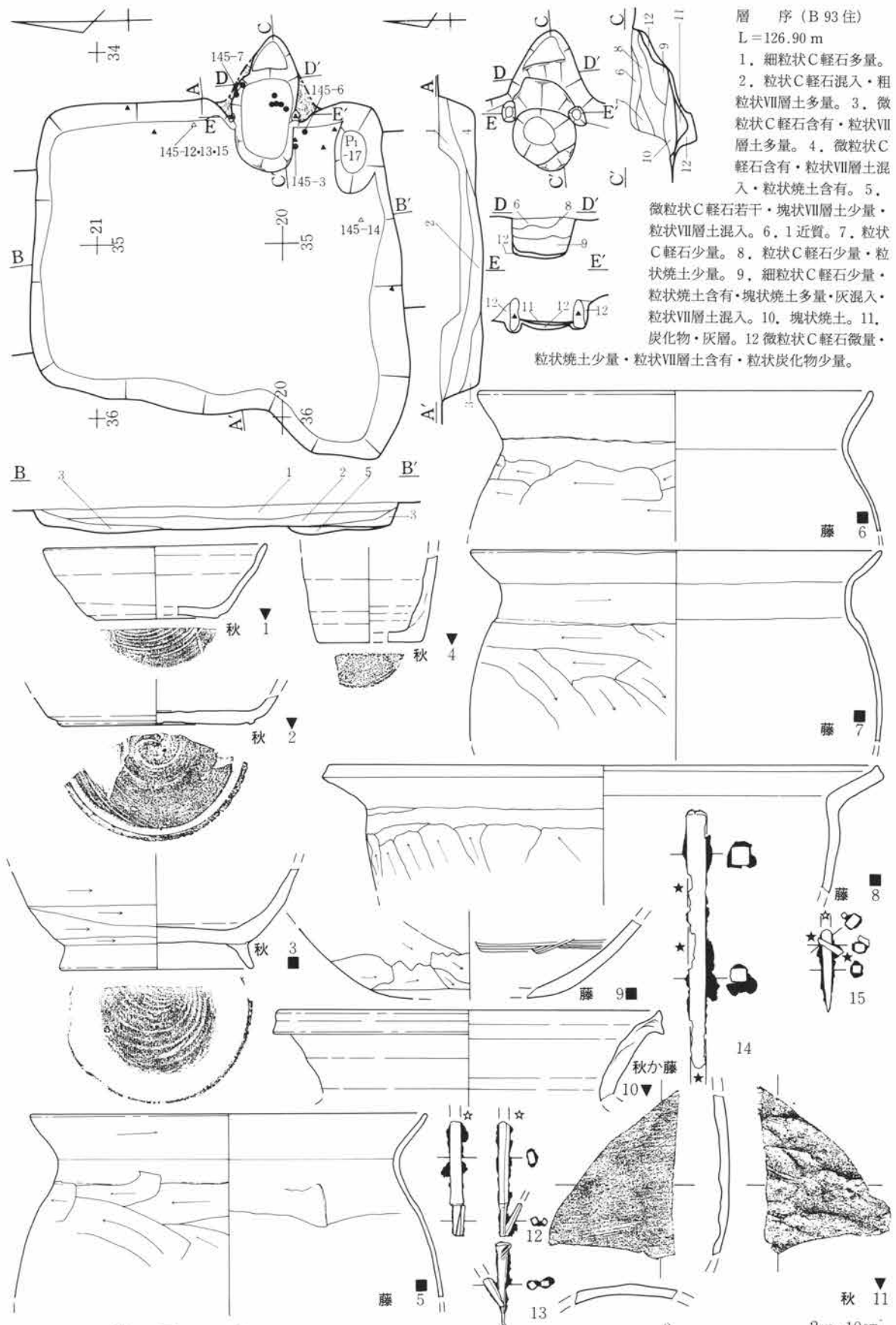
遺構名称	B区第93号住居跡		位置	20~22-B-34~37グリッド内。		残存深度	約45cm
平面形態	横長方形。	規模	3.06m×4.06m	構築基準辺	東壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。地山V・VI層土・縄文遺構の覆土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。80×40cm・深度-17cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	ほとんど無し。南壁下で部分的に認められたが、平面図化を行なはなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-92度-南	
改築	有。掘り方で焼土が少量であった。		形状	箱状を呈し、三角形状の煙道を付設する。			
規模	全長140cm・屋外長 72cm・屋内長 68cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 67cm・煙道部幅 36cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	袖の先端側に芯材として礫を用いる。					
煙道	先端部から垂直に立ち上がる。		掘り方	全体的に三角形状を呈する。			
遺物出土状態	カマド周辺での直面上出土遺物が多いが土器類は少ない。						



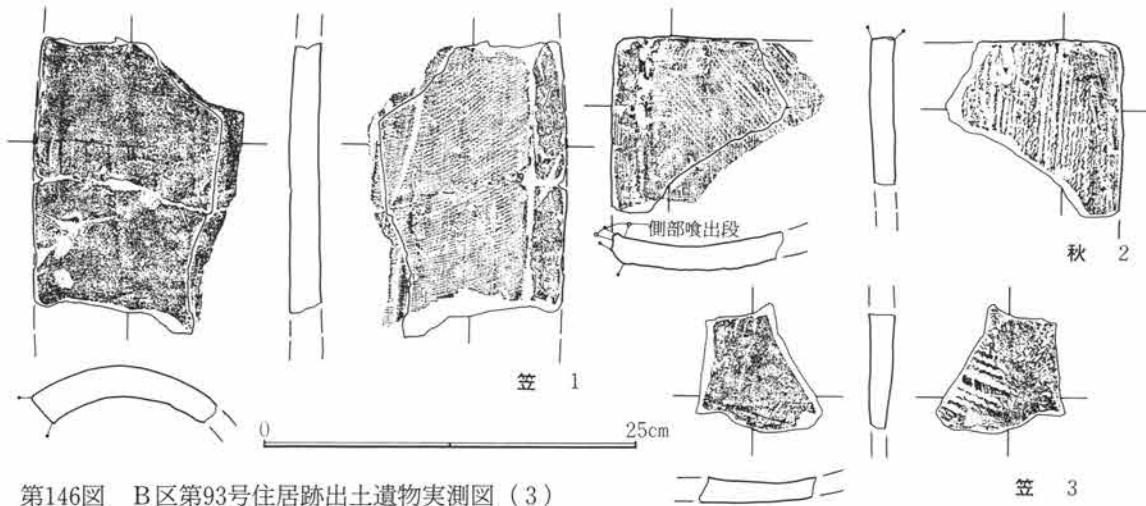
所見 (B93住) 当住居跡は昭和55年度に実施した試掘調査時に確認された住居である。住居はB94住と重複する。調査時の所見では本跡が94住を切るという認識で調査実施したが、94住の平面形状を見る限りに於いては本跡より94住が新しい段階の様相が窺われる。当住居は、南西隅部に西へ突出する張り出しを備えている。カマドは東壁中央より南西隅部に寄った位置に具備し、燃烧部は隅丸縦長形状を呈し幅も広い構造になっている。傍竈坑は南東隅部直下に備え、カマドと若干の距離をとっている。出土遺物には遺存状態の良好なものは非常に少ない。

第144図 B区第93号住居跡出土遺物実測図(1) 住居形状はC区第IV段階以前と考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物



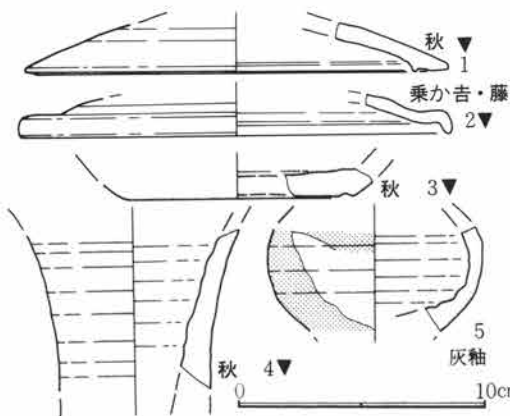
第145図 B区第93号住居跡実測図・出土遺物実測図 (2)



第146図 B区第93号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第94号住居跡		位置	21・22-B-35・36グリッド内。		残存深度	約50cm
平面形態	正形状。	規模	3.60m×3.10m	構築基準辺	西及至北壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。西側で造床が認められた。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。52×42cm・深度-14cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	西側部で浅く認められた。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から82cm。			主軸方位	北-95度-南	
改築	不明。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長 67cm・屋外長 23cm・屋内長 44cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 44cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	未検出(調査の下手際に起因する)。					
煙道	斜位(垂直気味)に立ち上がる。		掘り方	不詳。			
遺物出土状態	覆土内から少量の土器・瓦類の出土があったのみである。						

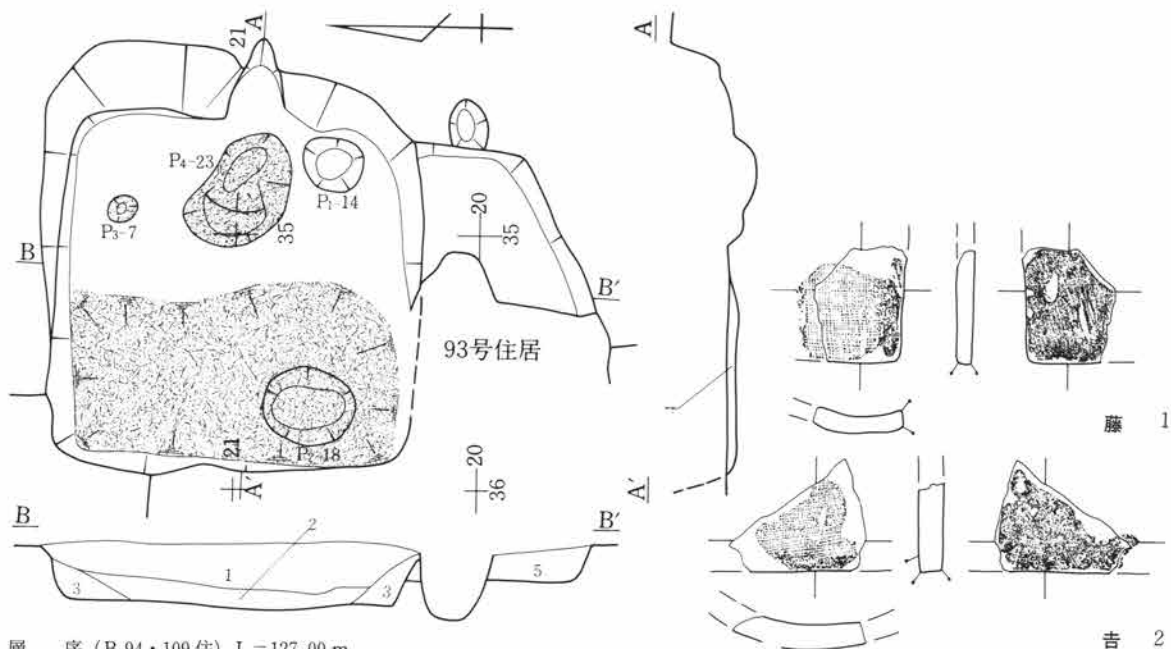
遺構名称	B区第109号住居跡	位置	20・21-B-35・36グリッド内。	残存深度	約30cm
B93・94号住の破壊により詳細不詳。					



所見 当住居跡は前述の93住と重複しB109址を切る。住居の東壁は崩壊によると考えられ著しく東側へ広がった状態になっている。元来の東壁位置はカマド燃烧部中央程の位置に相当したと考えられる。住居は東壁中央にカマドを具備し、東壁南東隅部寄りの直下でカマドに近接する状態で傍竈坑を備えている。カマドは一見すれば煙道部が住居から小さく突出したかの状態である。燃烧空間はやや広目である。住居形状は、C区の第IV乃至V段階に対比されると思われる。一方、93住所見で前述した状況もあるが、出土遺物が少量であった

第147図 B区第94号住居跡出土遺物実測図(1) 為不明な点が多い。

第4章 検出された遺構・遺物

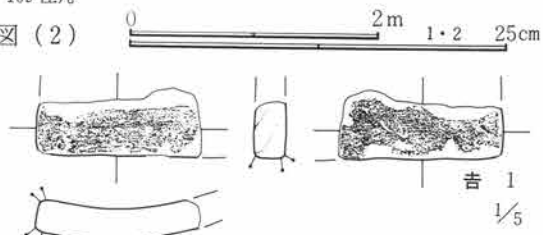


層序 (B 94・109住) L=127.00 m

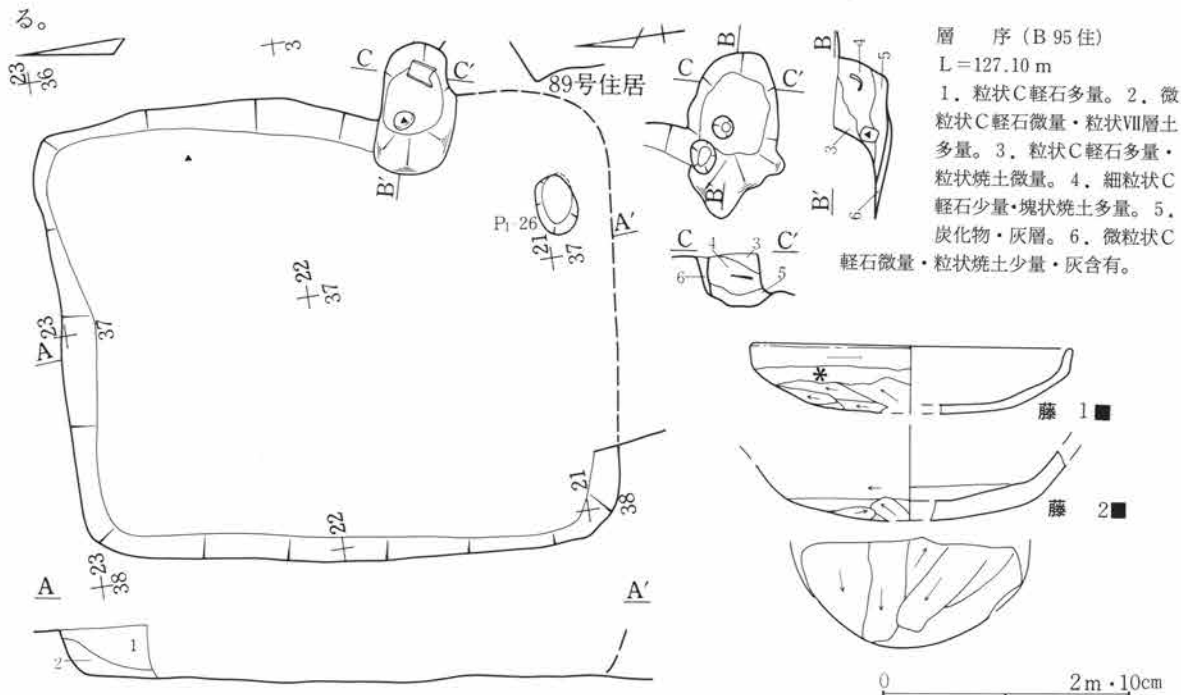
1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粗・細粒状C軽石混入・粒状VII層土少量。3. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土多量。4. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土含有・塊状VII層土少量・粒状焼土微量。5. 細粒状C軽石含有・粒状VII層土少量・塊状VII層土多量 (B 109住)。

第148図 B区第94・104号住居跡実測図・出土遺物実測図 (2)

所見 当住居跡は前述93・94号住に大半を切られ失っており、住居跡を确实視される証左は殆ど認められなかった。又、形状も南壁側が著しく東壁の方向に対し開く状態である。出土遺物は瓦1点のみである。時期は両住居より古い段階で国分寺創建以降と思われる。



第149図 B区第109号住居跡出土遺物実測図



層序 (B 95住)

L=127.10 m

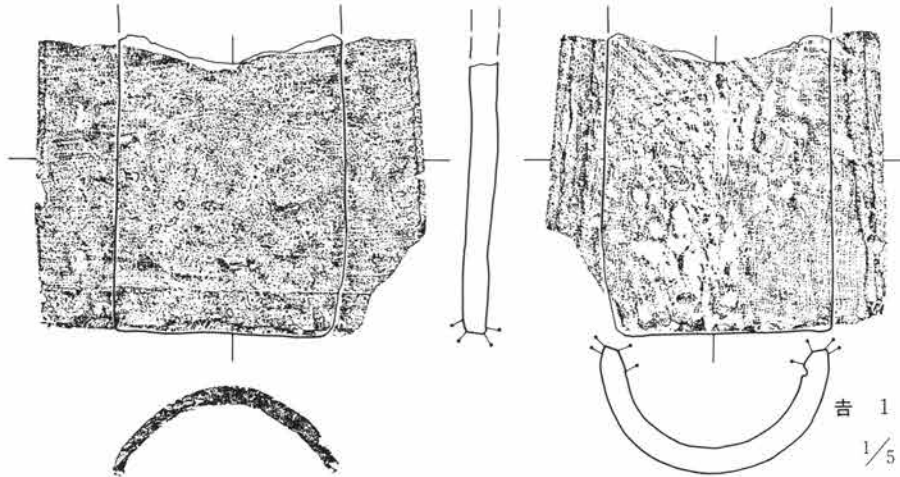
1. 粒状C軽石多量。2. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土多量。3. 粒状C軽石多量・粒状焼土微量。4. 細粒状C軽石少量・塊状焼土多量。5. 炭化物・灰層。6. 微粒状C軽石微量・粒状焼土少量・灰含有。

第150図 B区第95号住居跡実測図・出土遺物実測図 (1)



遺構名称	B区第95号住居跡		位置	21～24-B-36～38グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	横長方形。	規模	3.6m×4.52m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-100度-南
B85号住の破壊により詳細不詳。							

所見 当住居跡は前述の89住に切られ南壁及び覆土の大半を失っており、カマドも焚口部及び燃焼部中程迄が失われているが隅丸形状の燃焼部である。住居跡は、一部残した南西隅部から南壁を推定すると住居平面形状は横長方形になる。カマドは、東壁中央より南西隅部寄りに位置している。南東隅部は失われているが、P<sub>1</sub>の傍竈坑



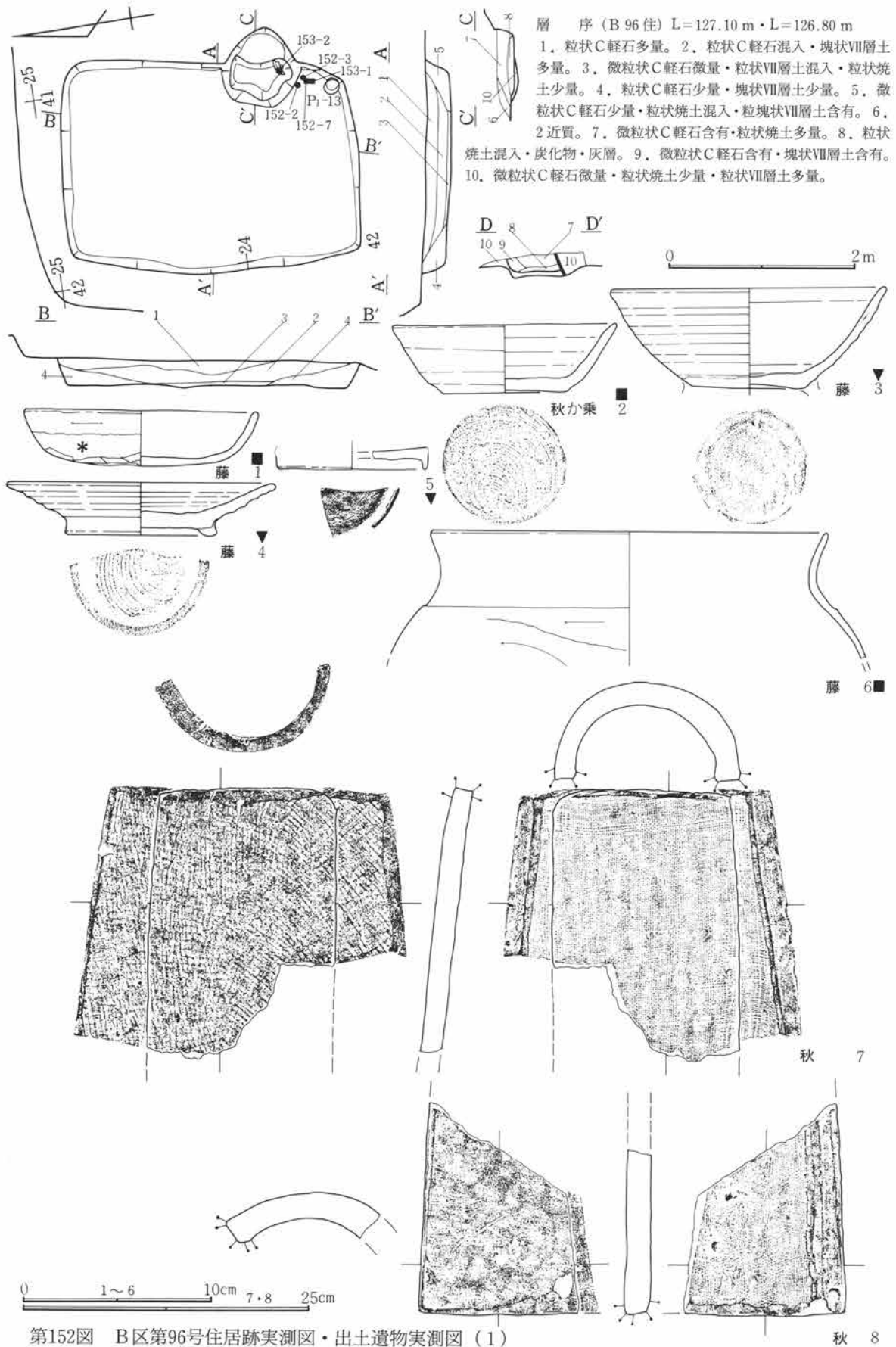
に相当すると思われるピットが検出されている。出土遺物は、89住により覆土の大半が失われていた為非常に少なかった。住居形状はカマドからC区の第IV段階頃と思われる。

第151図 B区第95号住居跡出土遺物実測図(2)

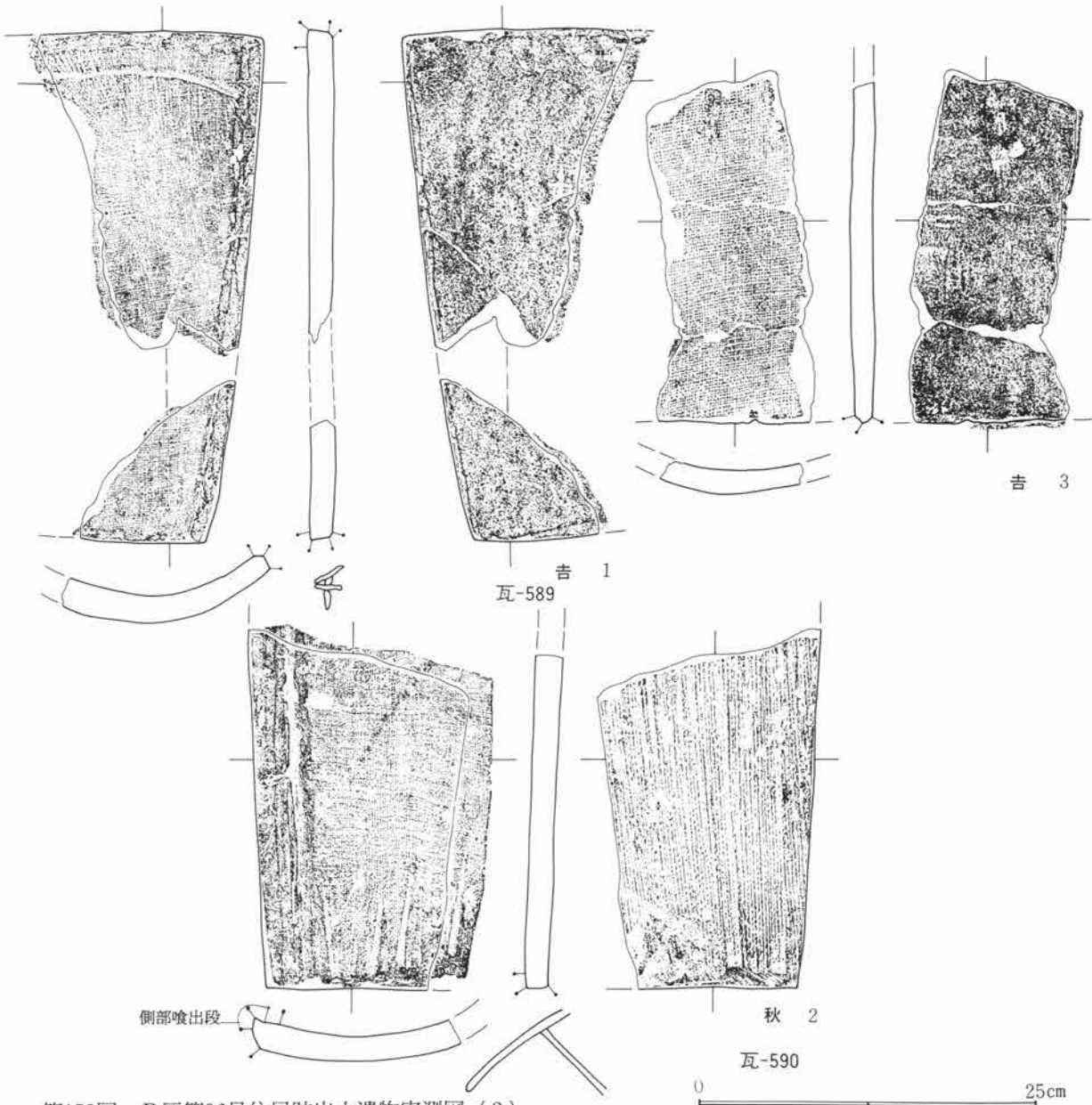
遺構名称	B区第96号住居跡		位置	23・24-B-40～42グリッド内。		残存深度	約25cm
平面形態	横長方形。	規模	2.2m×3.18m	構築基準辺	北乃至南壁	主軸方位	北-93度-南(南壁)
壁	斜位に立ち上がる		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> か。円形柱穴状。径17cm・深度-13cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-103度-南	
改築				形状			
規模	全長 70cm・屋外長 33cm・屋内長 37cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。詳細不分明。						
煙道	未検出。		袖	右袖部乃至燃焼部右壁を瓦で補強する。			
掘り方	未検出。		掘り方	円形土坑状を呈し、焚口部下が若干窪む。			
遺物出土状態	カマド右袖周辺で少量の瓦・土器類が認められたが、他は殆どなかった。						

所見 当住居跡は86住に切られ、83住の床面直下で検出された住居跡である。然し、住居跡は掘り込みがやや深かったことから、遺存は比較的良好であった。住居跡は、南北軸がやや長い横長形状を呈している。カマドは、東壁中央より南東隅部寄りに具備する。燃焼部は、右壁が崩壊し燃焼空間側に倒れた状態であった為使用時の平面図作製は割愛し断面図であらわした。これにより図示したカマド平面図は掘り方の図である。傍竈坑と考えたものは南東隅部直下で円形で径17cmの小規模なものであった。この規模の検出例がA～D区内では本例のみであり検討も要する。住居形状は、上述の点からC区の第VII段階頃と思われる。

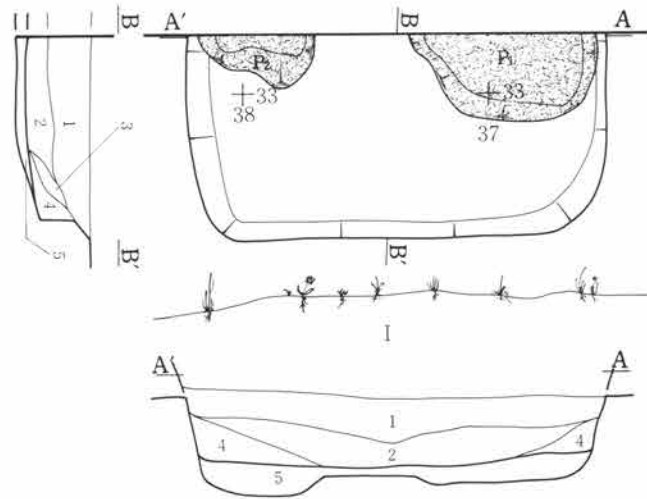
第4章 検出された遺構・遺物



第152図 B区第96号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第153図 B区第96号住居跡出土遺物実測図(2)



所見 当住居跡の東半分は調査区外に延びている為全面露呈は出来なかった。この為カマド等の東壁側の諸施設の状態は不明である。一方、出土遺物も少量の土器類の細片が若干量出土したのみであった。

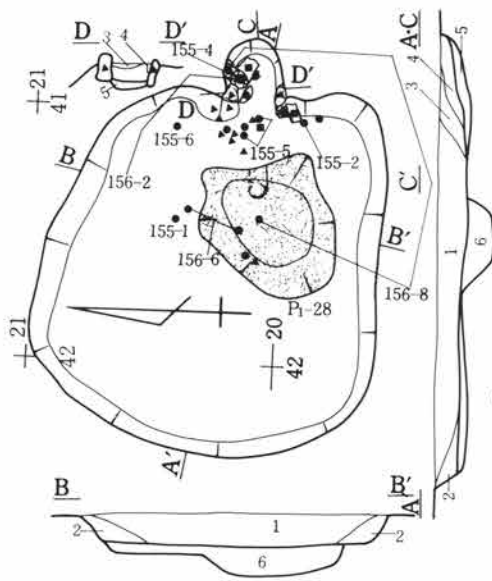
層序 (B 97 住) L=127.00 m

1. 粗・細粒状C軽石多量。
2. 粒状C軽石混入・塊状VII層土少量。
3. 粒状C軽石多量。
4. 細粒状C軽石若干粘質土。
5. 細粒状C軽石微量・粒状VII層土含有・塊状VII層土含有・粒状焼土若干。

第154図 B区第97号住居跡実測図

遺構名称	B区第97号住居跡	位置	33・34-B-37~39グリッド内。	残存深度	約52cm
調査部は南側だけの為詳細不詳。					

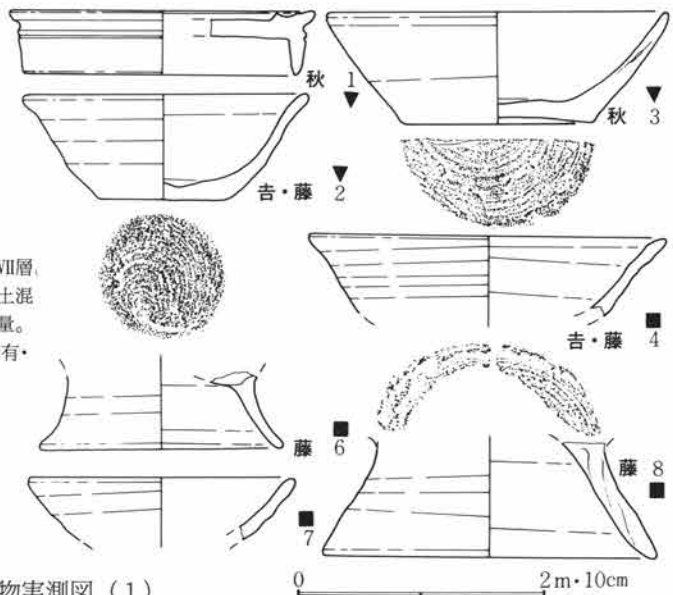
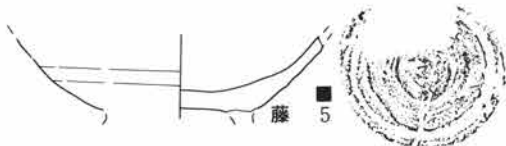
遺構名称	B区第98号住居跡	位置	20・21-B-41~43グリッド内。	残存深度	約25cm
平面形態	不整形状。	規模	3.86m×2.82m	構築基準刃	南壁
壁	斜位に立ち上がる。	床面	造床による。平坦。	主軸方位	北-93度-南
壁溝	未検出。	傍竈坑・貯蔵穴	未検出。		
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。				
掘り方	北西側でやや浅い掘り方が認められ、カマド寄りの部分で土坑状の掘り込み (P <sub>1</sub> ) を検出。				
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から66cm。	主軸方位	北-84度-南	
改築	無か。	形状	舌状を呈する。		
規模	全長 62cm・屋外長 46cm・屋内長 16cm・袖部幅 96cm・燃烧部幅 32cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。				
	袖	左右両袖共に礫を芯材としている。			
煙道	未検出。	掘り方	外形は使用時と同じで、底面が若干下がる。		
遺物出土状態	カマド内及びカマド前面に集中している。				



所見 当住居跡はB134住のカマド煙道部に至近の位置である。住居跡平面で北・西壁は歪んだ状態であるが東・南壁はやや均整がとれており、南壁の指向方向をもって主軸とした。カマドは、住居東壁中央に具備し、袖・燃烧部側壁を礫・瓦等を多用し補強している。傍竈坑は未確認である。掘り方では、住居中央部床面下でP<sub>1</sub>の土坑状の掘り込みを検出している。住居形状はC区第VIII段階と考えられ、出土遺物も同期のもので矛盾がない。

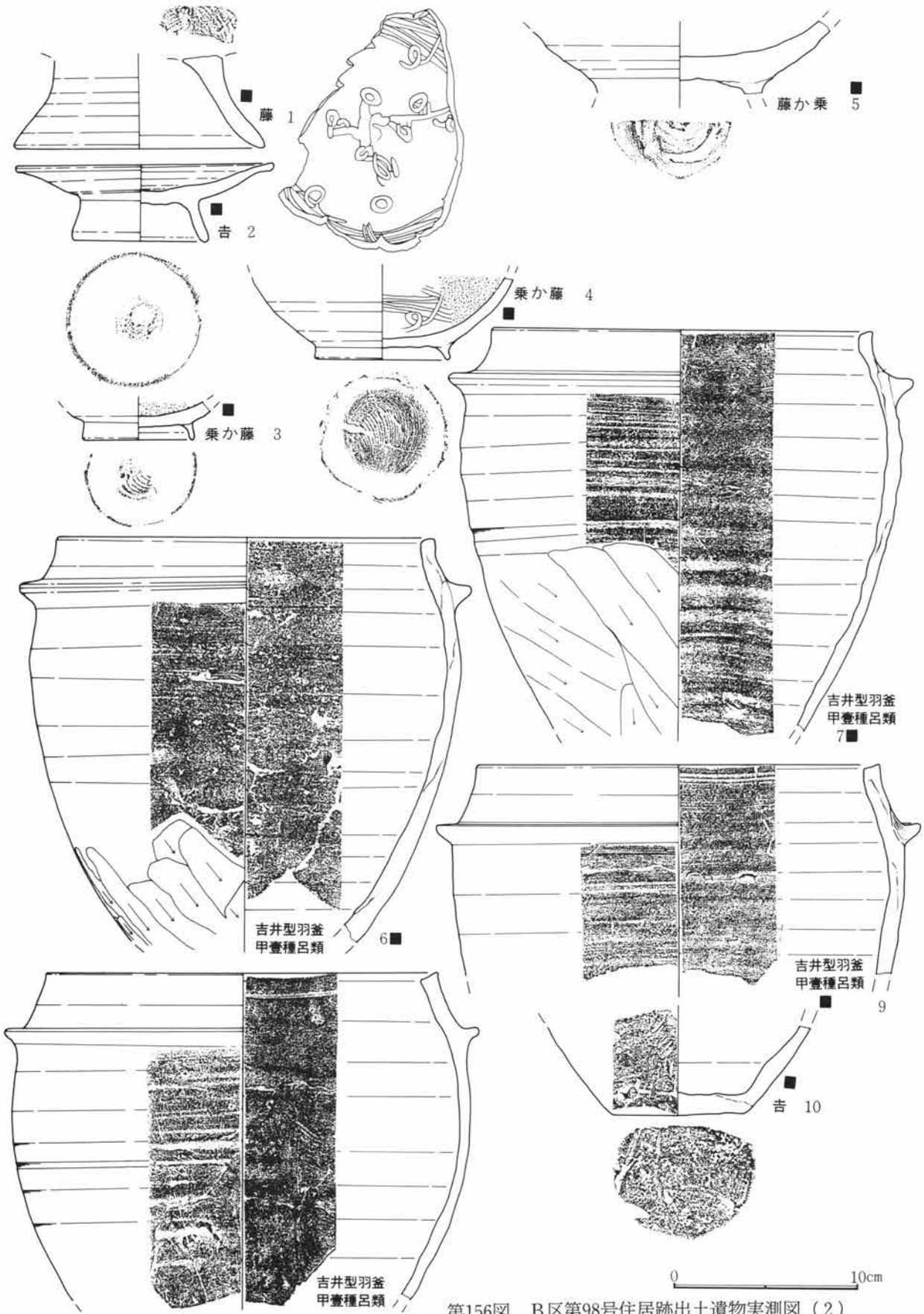
層序 (B 98 住) L=127.20 m

1. 粗・細粒状C軽石混入。2. 微粒状C軽石少量・粒状VII層土含有・塊状VII層土少量。3. 細粒状C軽石若干・粒状焼土混入。4. 微粒状C軽石微量・粒状焼土混入・粒状炭化物多量。5. 細粒状C軽石若干・粒状焼土若干。6. 細粒状C軽石含有・粒状VII層土含有。

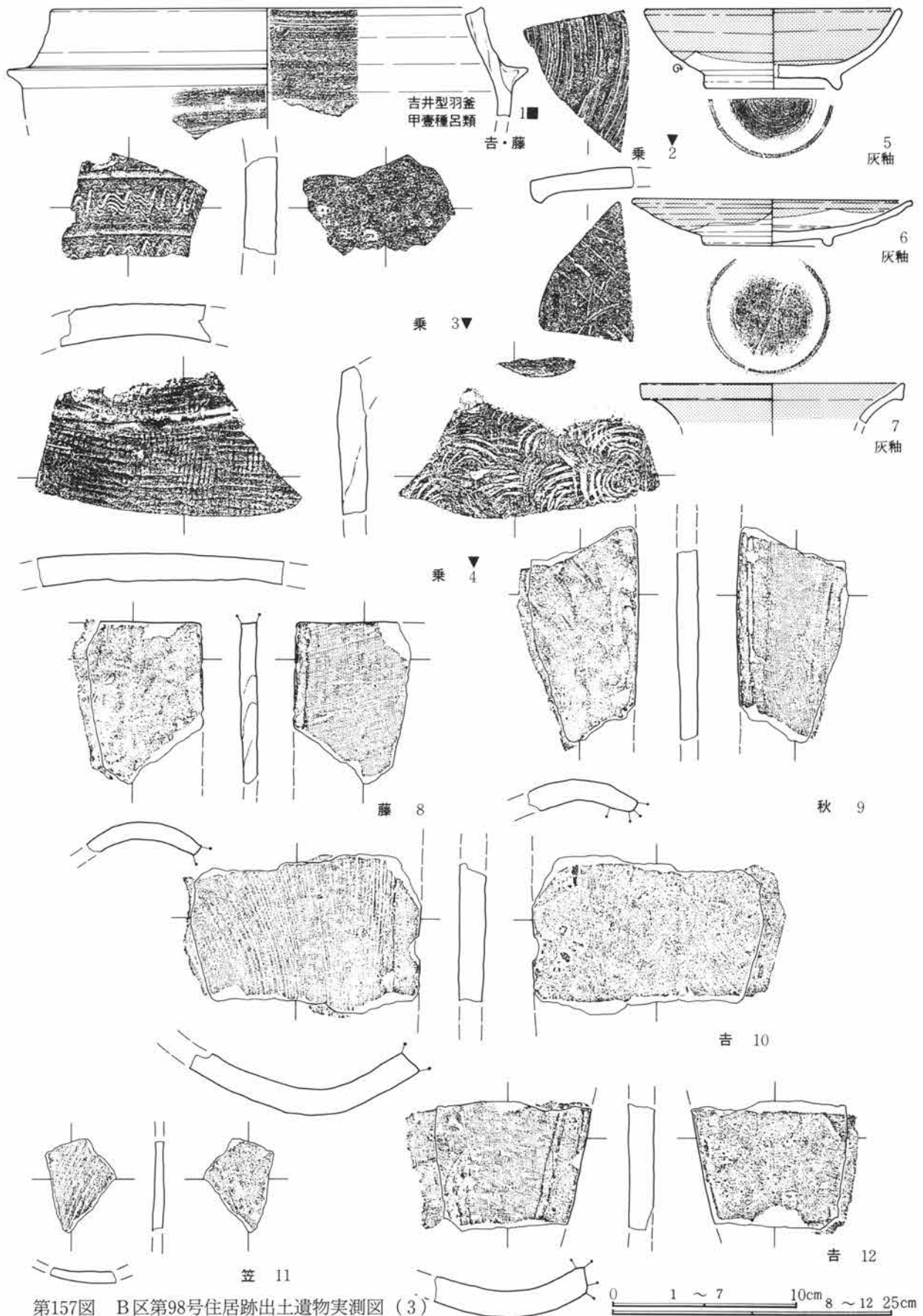


第155図 B区第98号住居跡実測図・出土遺物実測図 (1)

第3節 検出された住居跡について



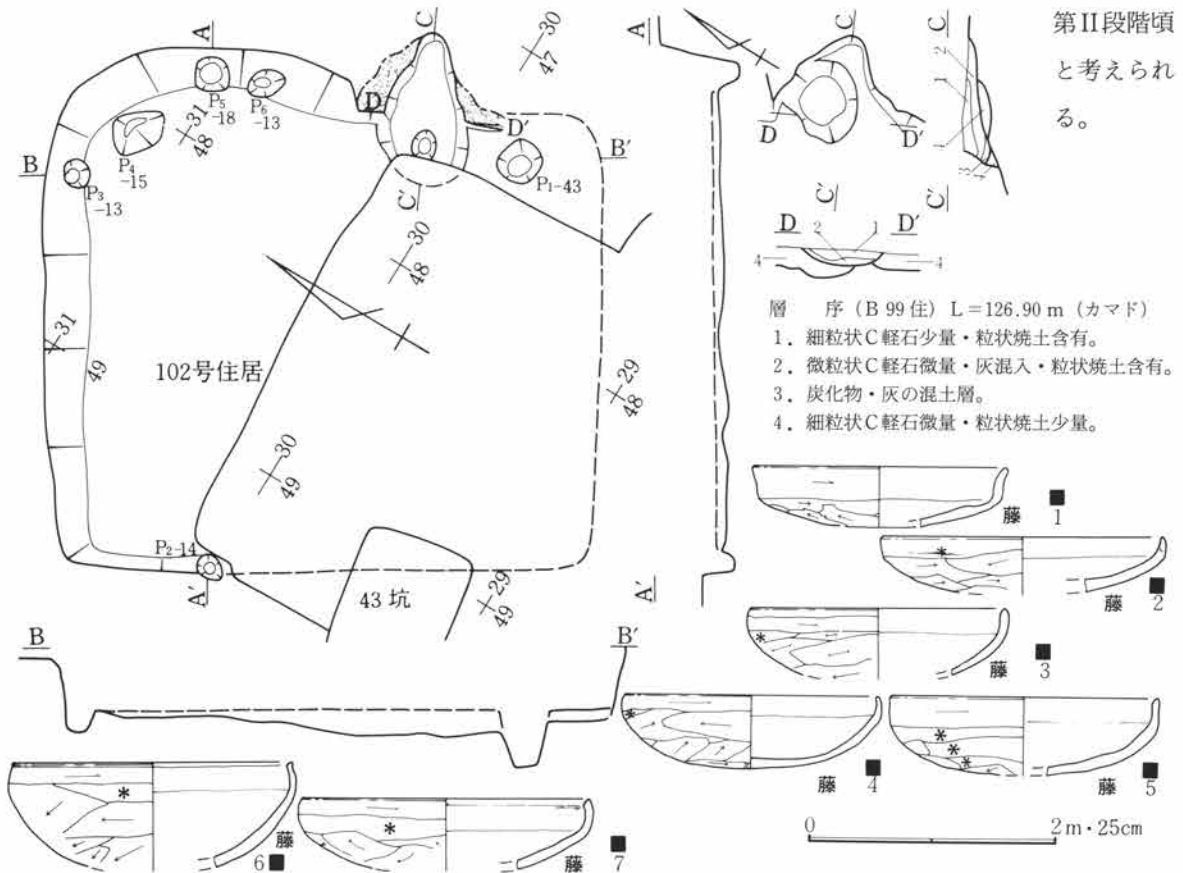
第156図 B区第98号住居跡出土遺物実測図(2)



第157図 B区第98号住居跡出土遺物実測図(3)

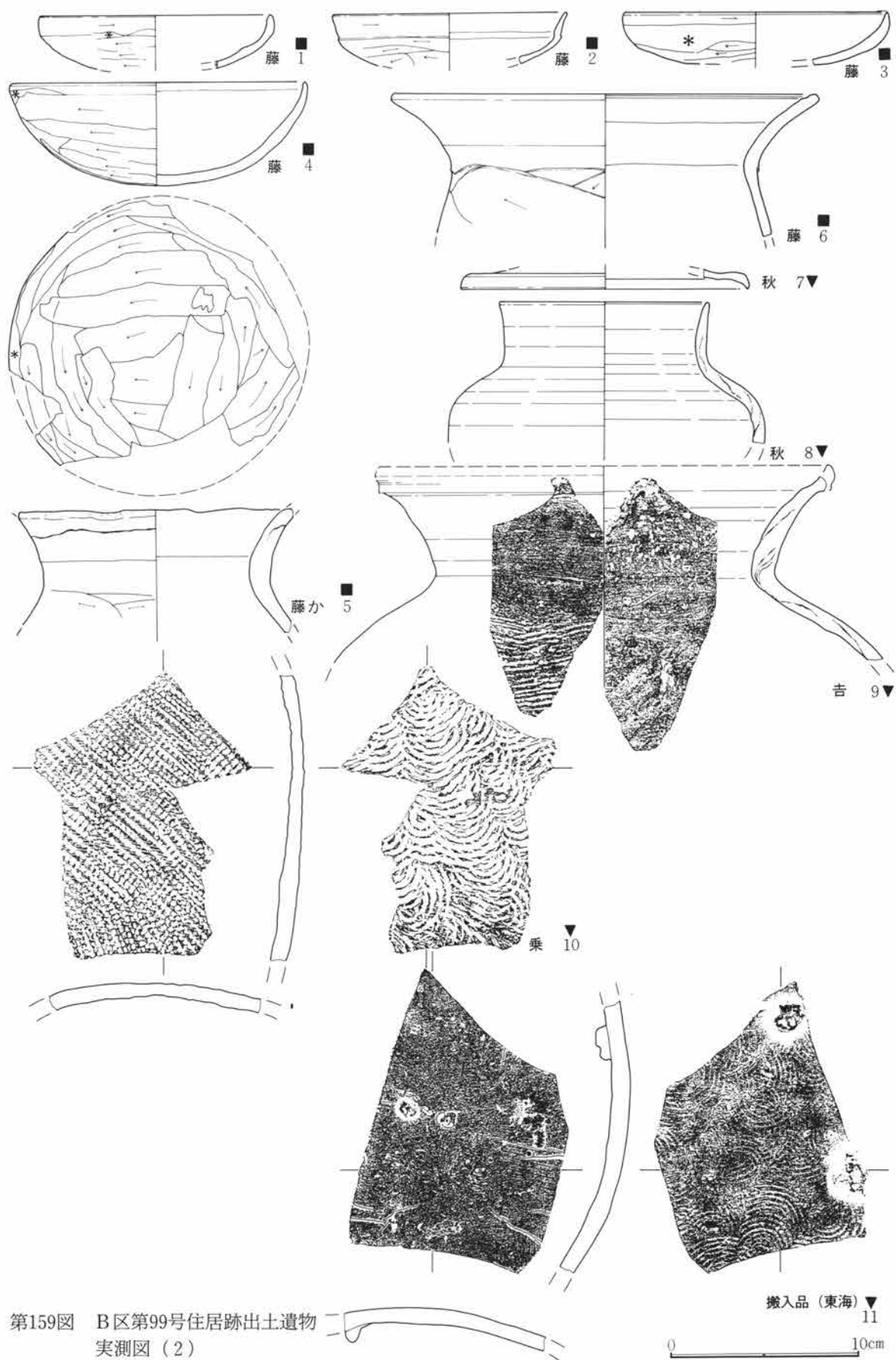
遺構名称	B区第99号住居跡		位置	29～32-B-48～50グリッド内。		残存深度	約52cm
平面形態	正形状。	規模	4.20m × 3.62 + αm	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-58度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	造床が全体に残り認められた。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形状。径35cm・深度-43cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体が窪んだ状態。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から85cm位か。			主軸方位	北-65度-南	
改築	不分明。(有か)			形状	舌状か。		
規模	全長(120cm)・屋外長(48cm)・屋内長(72cm)・袖部幅(110cm)・燃烧部幅64cm・煙道部幅26cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
			袖	詳細不分明。			
煙道	全体に短い。			掘り方	三角形を呈する。		
遺物出土状態	覆土内から少量の土師器が出土している。						

所見 当住居跡はB102住に切れ住居の南側半分程を失っている。更に、東隅部はB6溝により逸しているが、部分的な残存により形状の復原が可能であった。住居は、東壁中央よりやや南隅部に寄った位置に備えている。カマドは、燃烧部・焚口が楕円形状を呈すもので、煙道は燃烧部底面と同位で立ち上がっている。柱穴の施設としてP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>が指向方向とほぼ同位の方で壁添いに設けられている。傍竈坑はP<sub>1</sub>と考えられるが、B54住等の例と同様でピットの掘り込みである。P<sub>3</sub>・P<sub>3</sub>はP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>と係わると思われる。住居形状はC区



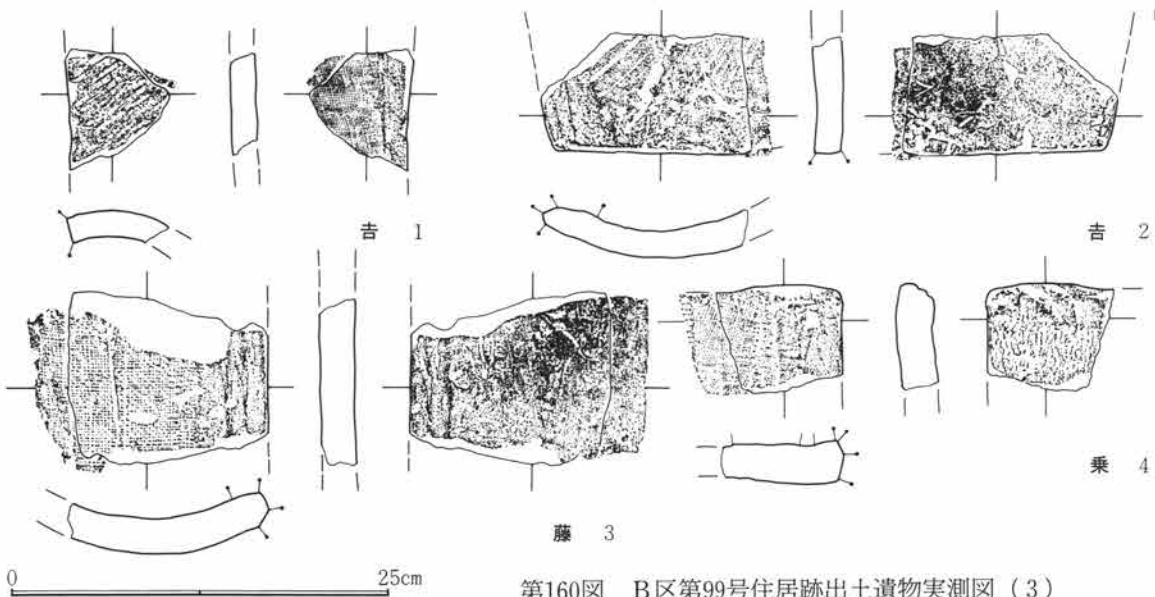
第158図 B区第99号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第159図 B区第99号住居跡出土遺物  
実測図(2)



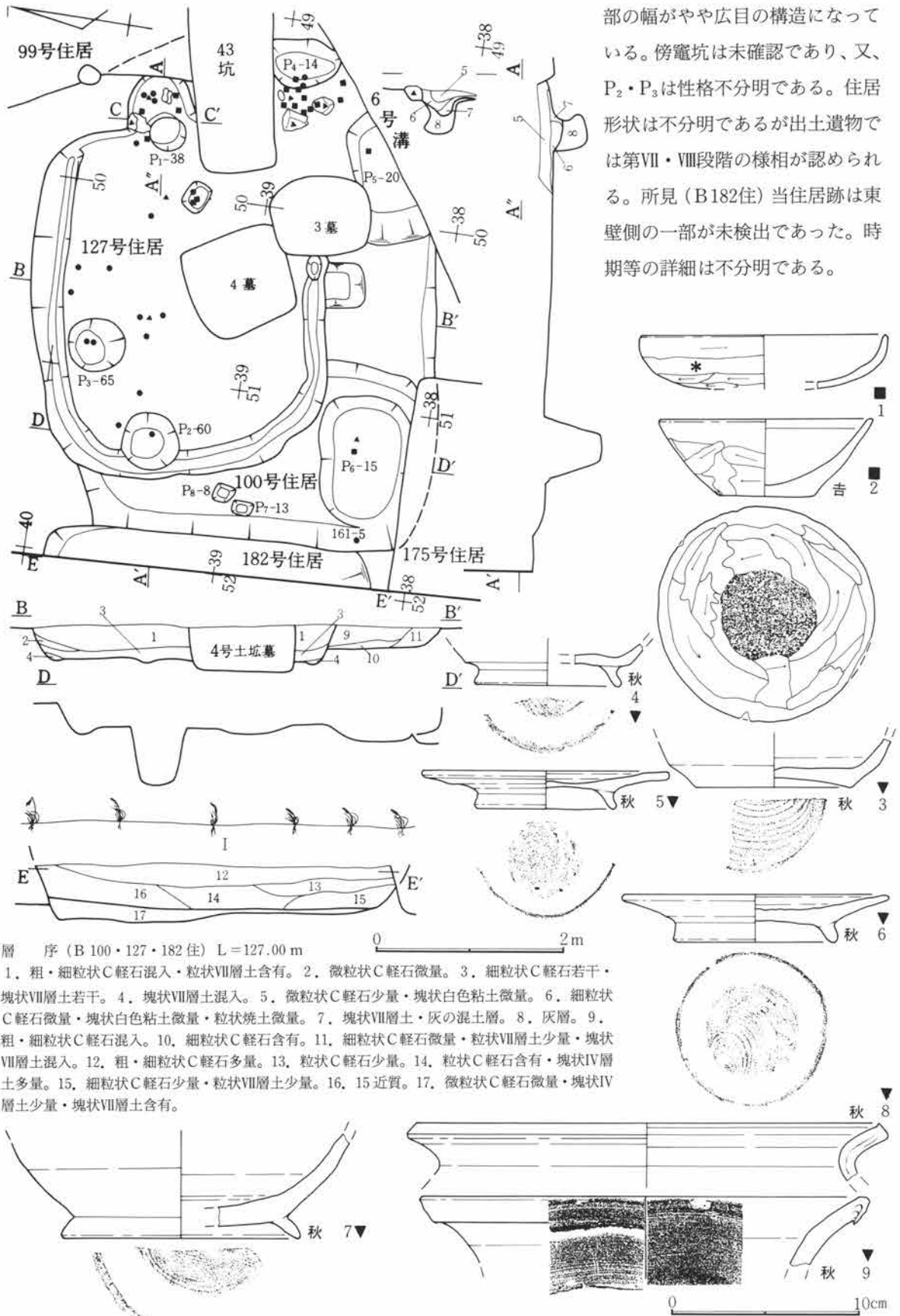


第160図 B区第99号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第100号住居跡		位置	38・39-B-50-52グリッド内。		残存深度	約23cm	
B127号住の破壊により詳細不詳。								
遺構名称	B区第127号住居跡		位置	39・40-B-50~52グリッド内。		残存深度	約36cm	
平面形態	縦長方形。	規模	3.73m×3.06m	構築基準辺	不詳	主軸方位	北-80度-南位か。	
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。				
壁溝	東壁以外の壁下で検出。幅20cm程。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm程か。				主軸方位	北-79度-南	
改築	有。カマド下のピット内より灰を検出。		形状	舌状。				
規模	全長 75+ $\alpha$ cm・屋外長 50+ $\alpha$ cm・屋内長 83+ $\alpha$ cm・袖部幅 83+ $\alpha$ cm・燃烧部幅 69cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	左袖は礫で補強する。						
煙道	未検出。		掘り方	無に近い。				
遺物出土状態	住居中央部で覆土内の出土が多い。北壁下で完形品が2点出土している。							
遺構名称	B区第182号住居跡		位置	38~40-B-52グリッド内。		残存深度	約10cm	
大半部が調査区外の為詳細不詳。								

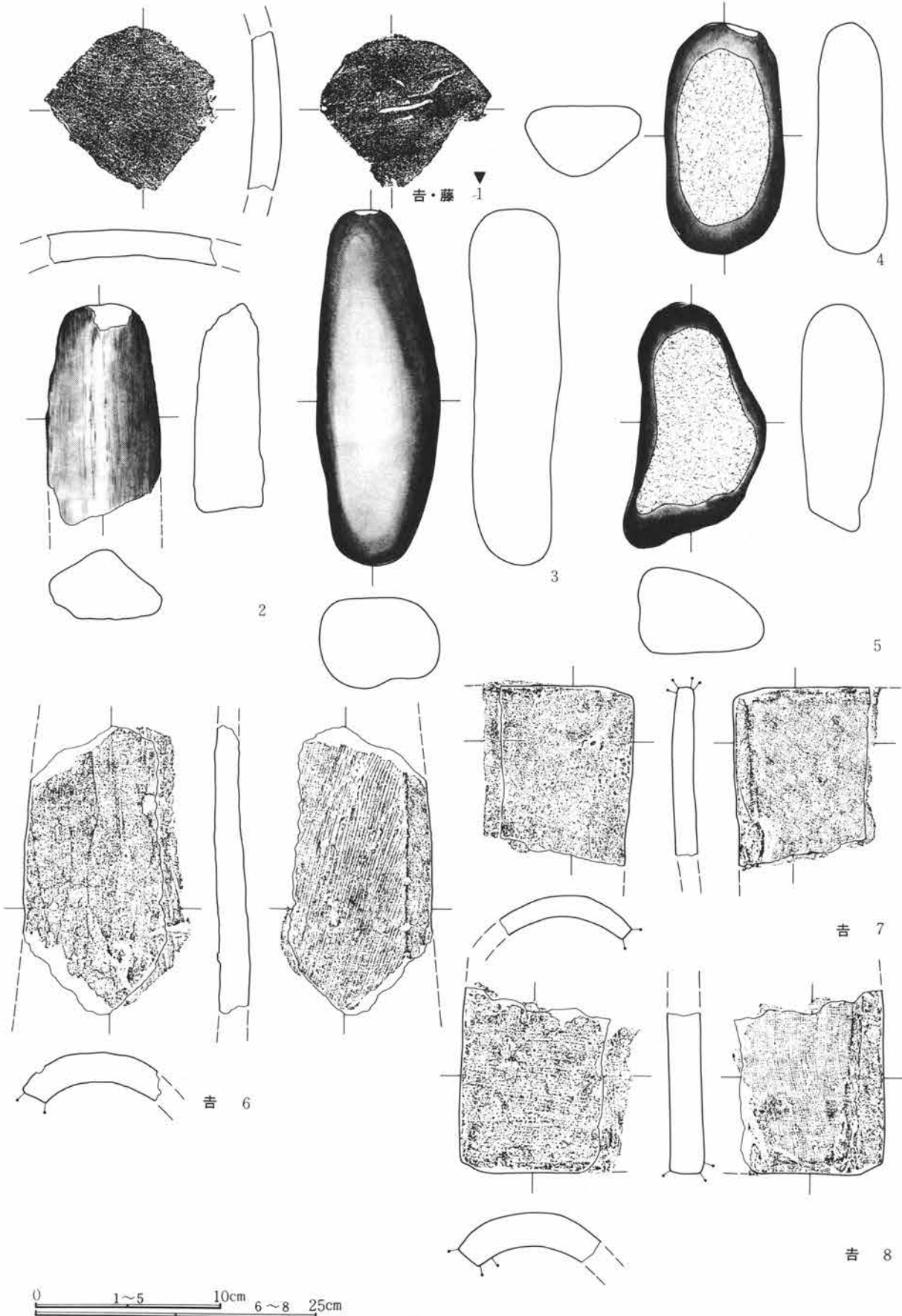
所見 (B100住) 当住居跡はB127住に切られ大半を失ない更にB102住と重複し、B6溝に切られているが、残存部からは、比較的規模の大きい住居であったことが窺える。カマドは確認出来なかったが、恐らく43坑に接する部分で礫等が集中する部分周辺に想定される。掘り方は土坑状のものが目立ち、西壁下の掘り込みは特に大きい。住居形状は不明であるが、出土遺物からC区の第V段階に伴なう遺物が目立つ。

所見 (B127住) 当住居跡は100住を切り構築している。平面形状は全体に歪んだ状態で壁下には壁溝が検出されている。カマドは東壁中央よりやや北側と考えられる。カマドは遺存状態が良好とはいえないが、燃烧

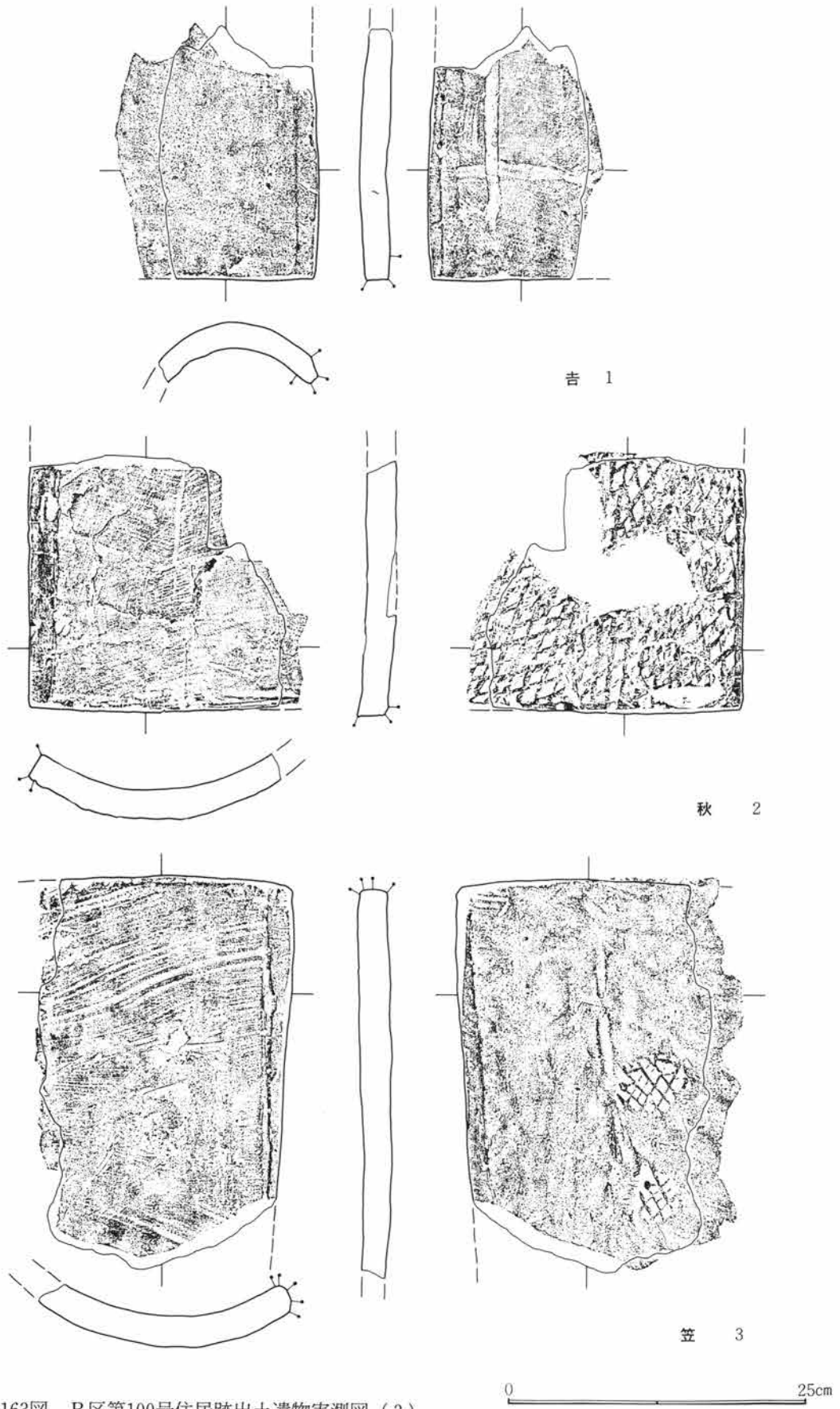


部の幅がやや広目の構造になっている。傍竈坑は未確認であり、又、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は性格不分明である。住居形状は不分明であるが出土遺物では第VII・VIII段階の様相が認められる。所見 (B182住) 当住居跡は東壁側の一部が未検出であった。時期等の詳細は不分明である。

第161図 B区第100・127・182号住居跡実測図・B区第100号住居跡出土遺物実測図(1)

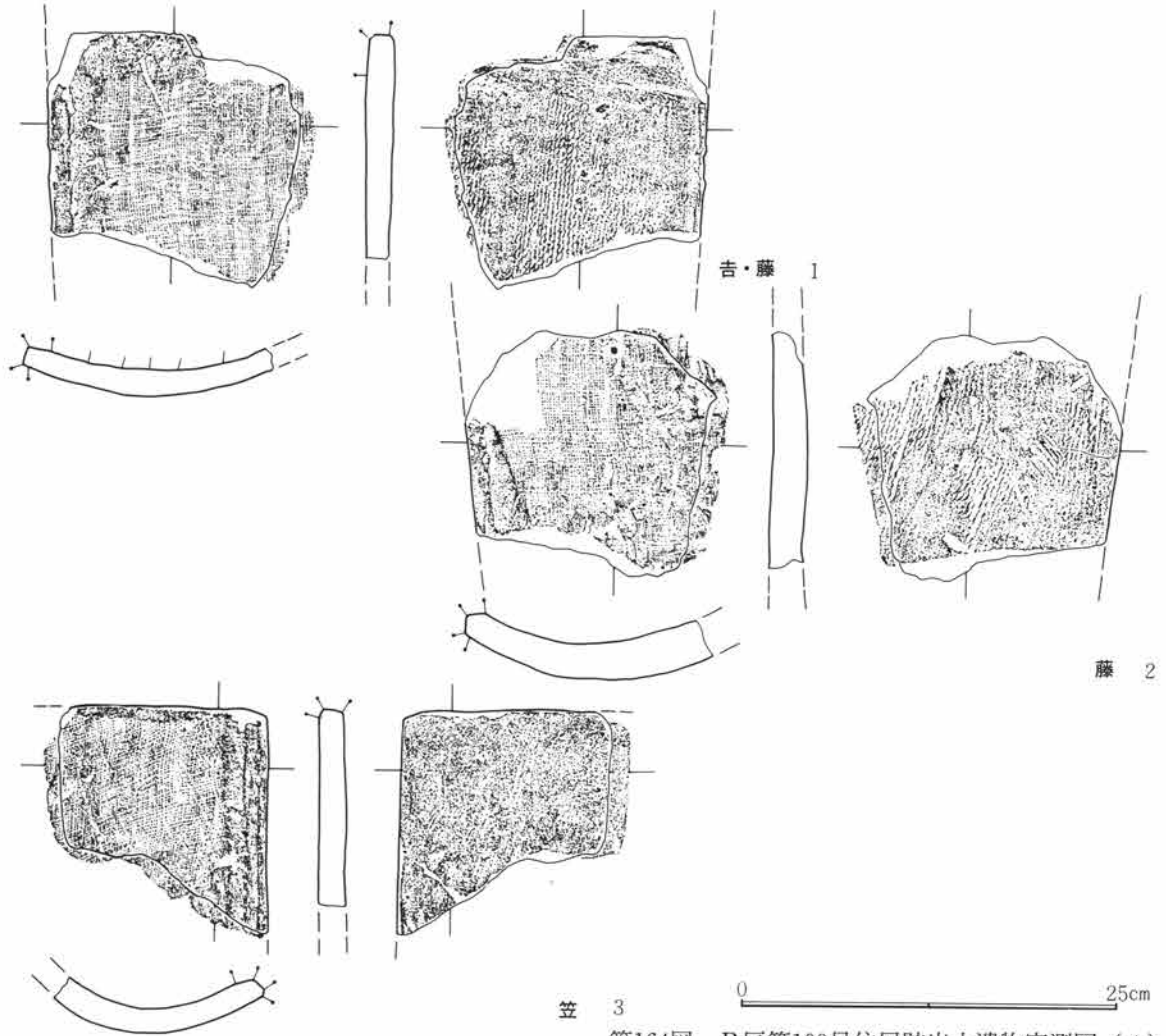


第162図 B区第100号住居跡出土遺物実測図(2)

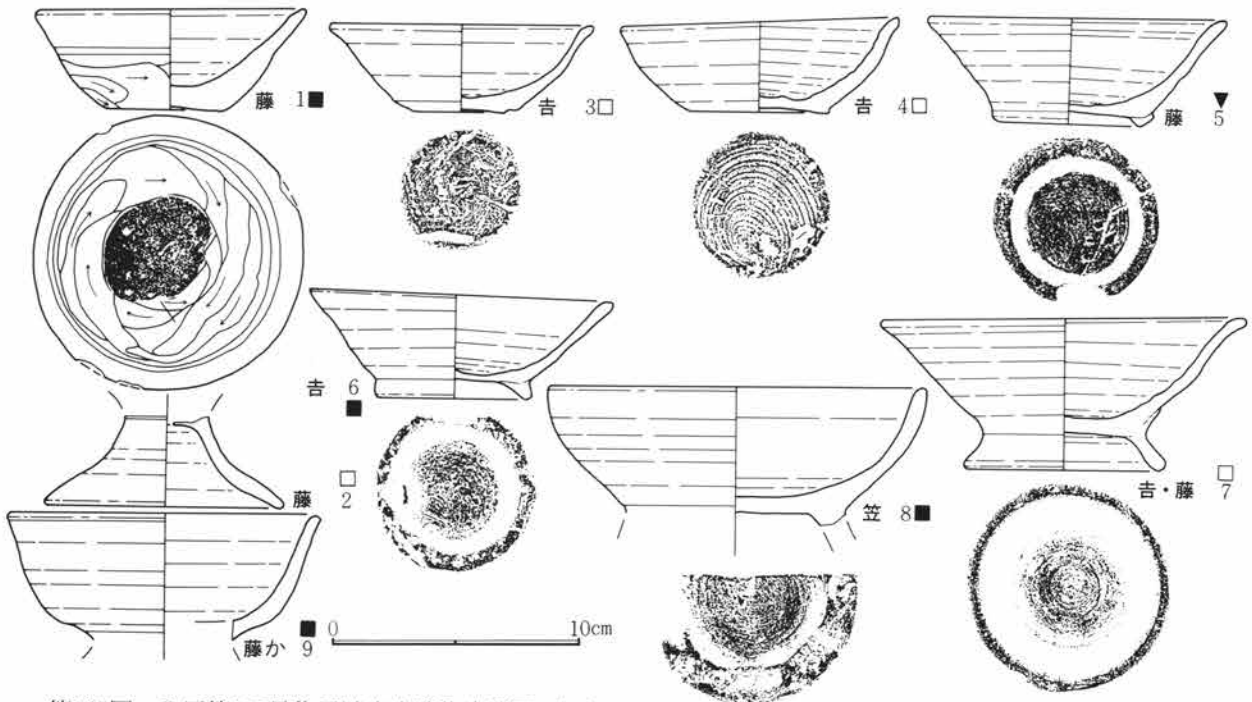


第163図 B区第100号住居跡出土遺物実測図(3)

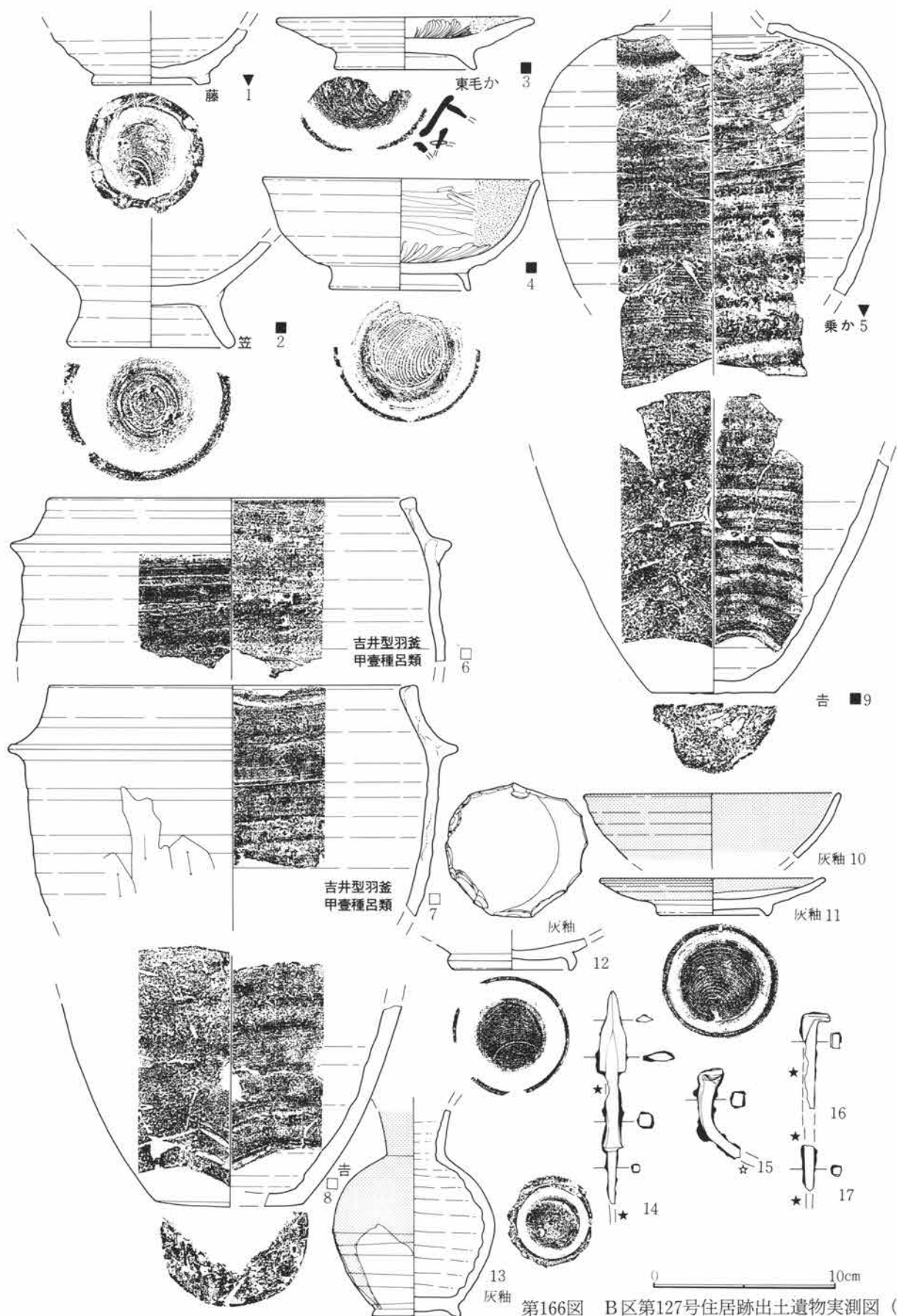
第3節 検出された住居跡について



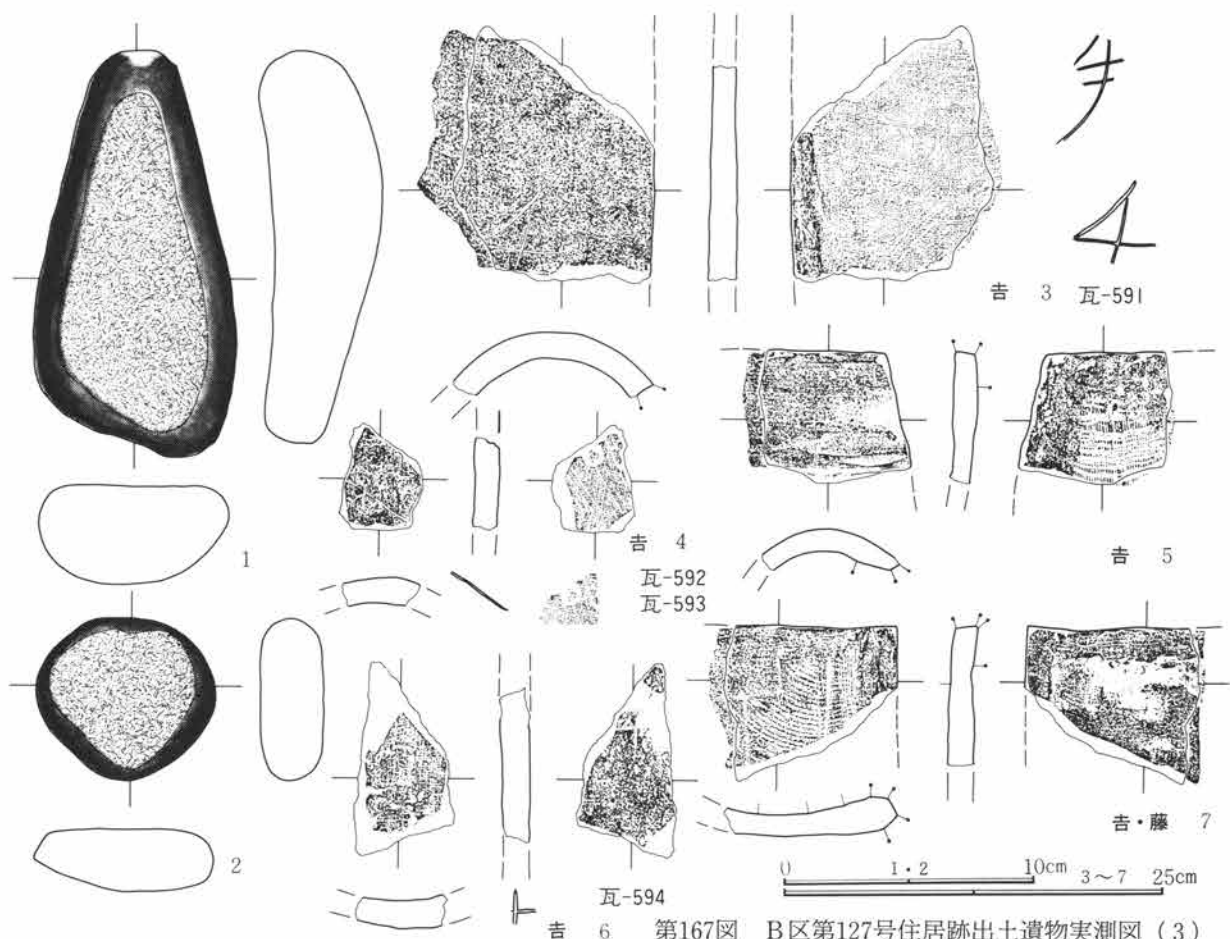
第164図 B区第100号住居跡出土遺物実測図(4)



第165図 B区第127号住居跡出土遺物実測図(1)



第166図 B区第127号住居跡出土遺物実測図(2)



第167図 B区第127号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第101号住居跡	位置	28・29-B-47・48グリッド内。	残存深度	約24cm
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から30cm。		主軸方位	北-?度-南
改築	遺存不良により詳細不明。		形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。	
規模	全長 88+αcm・屋外長 42cm・屋内長 46+αcm・袖部幅140cm・燃烧部幅 60cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。				
	袖	屋内側に削り出されている。			
煙道	未検出。	掘り方	不詳。		
遺物出土状態	カマド内から羽釜が出土しているのみである。				

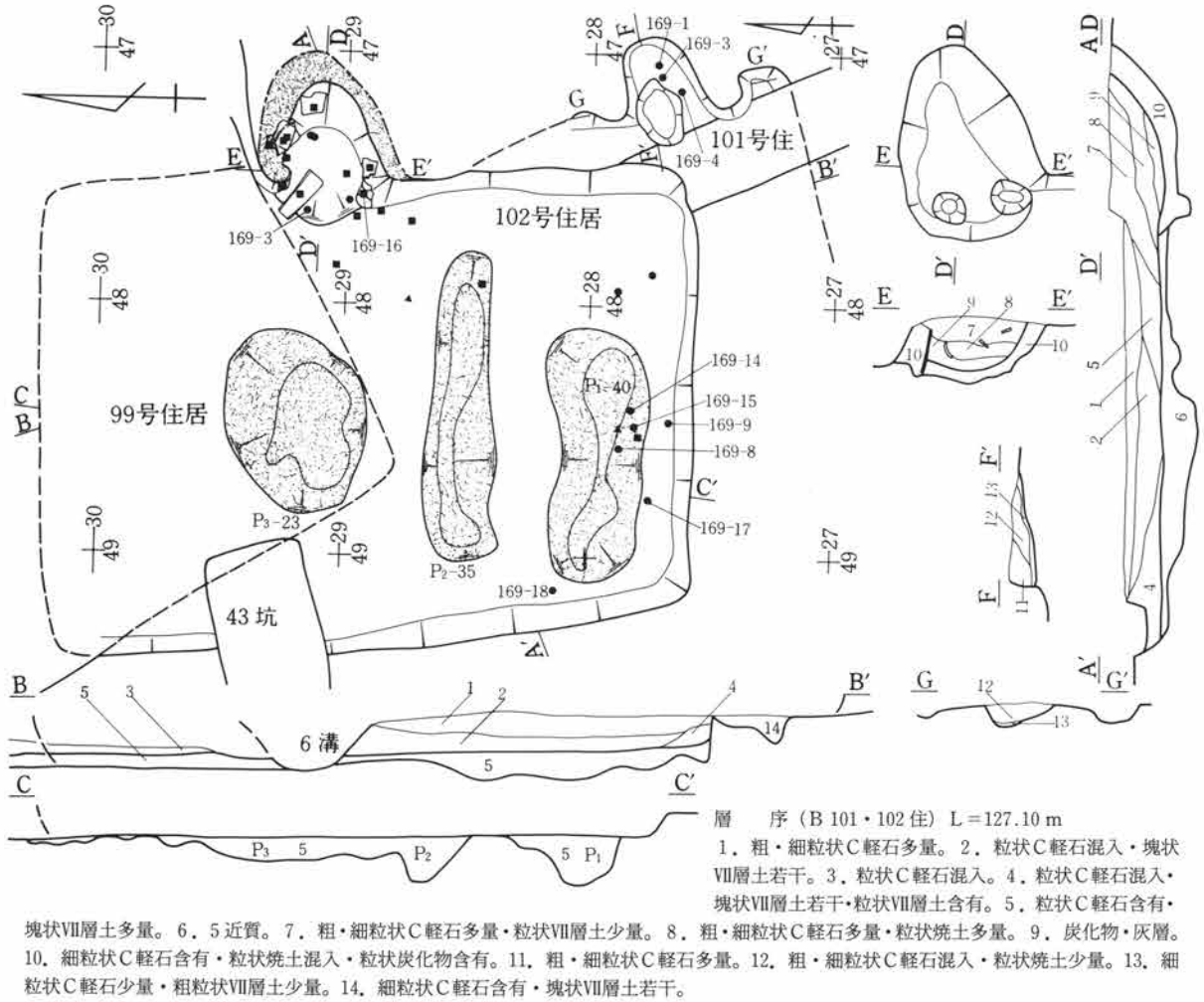
所見 (B101住) 当住居跡は乱により遺存状態が不良である。住居はカマド周辺部が残存し、カマドは南南隅部に偏し傍竈坑の構築は不能なカマド位置であり、C区の住居形状第VIII段階に対比される。出土遺物の組成も同様にC区第VIII段階の様相が色濃い点から、当住居は10世紀中頃の年代観が与えられる。

所見 (B102住) 当住居跡は上述のB101住に切られているものの深度が当住居の方が深かった為重複部は遺存する。北側は、B99住に切られて失なっているが、土層断面ではB99住の立ち上がりは確認出来なかった。これは、中世のB6溝に切られる部分で立ち上がった為によると考えられる。住居は東壁にカマドを備えるものの詳細な位置は言及しかねるが、恐らく北東隅部に偏在したと考えられる。傍竈坑は未検出であった。カマドは、焚口・燃烧部の幅が広く、袖は遺存の良好な男瓦を用いている。住居形状はカマドを考慮すればC区第IV段階以前と考えられ、遺物も同様である。このことから、瓦は国分寺の古段階のものであることが

第4章 検出された遺構・遺物

考えられ、瓦の時期を判断するに重要な住居といえる。

遺構名称	B区第102号住居跡		位置	28~30-B-48~50グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	横長方形。	規模	3.84m×4.84+αm	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-88度-南
壁	斜位気味からほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦であるが、99住との境は不分明。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状の掘り込み(P <sub>1</sub> ~P <sub>3</sub> )が顕著で全体に起伏が多い。P <sub>3</sub> は99住に伴う可能性が有る。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から222cm。			主軸方位	北-93度-南	
改築	有。掘り方の焼土が多い。			形状	舌状。		
規模	全長112cm・屋外長 73cm・屋内長 39cm・袖部幅(120cm)・燃烧部幅 73cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁は瓦により補強される。						
煙道	未検出。		袖	両袖共に男瓦を芯材として補強している。			
掘り方	未検出。		掘り方	ピット2本招検出。一方は瓦の据え方。			
遺物出土状態	南壁側での出土が多い。第169図-17は完形で床面直上での出土。						

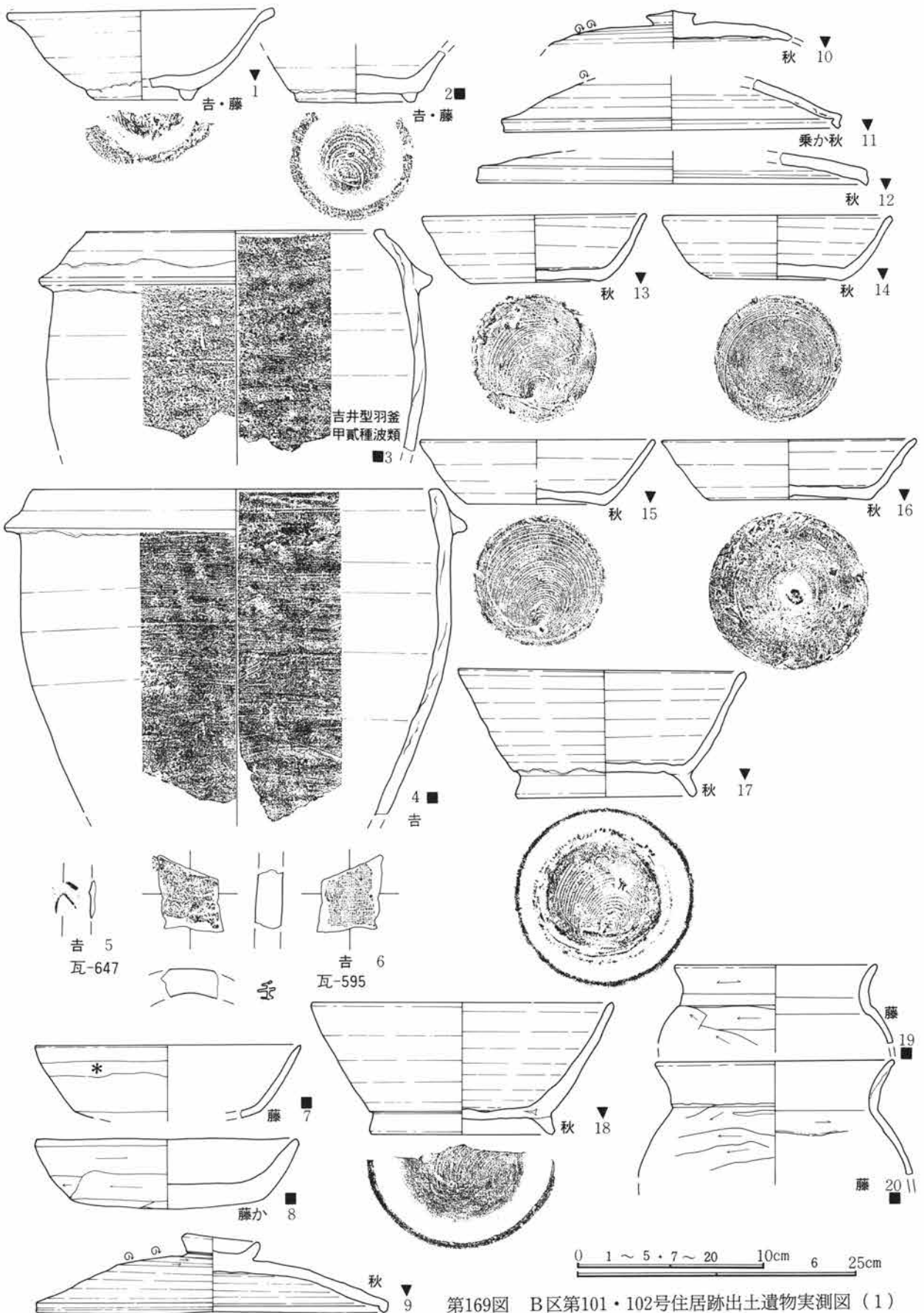


第168図 B区第101・102号住居跡実測図

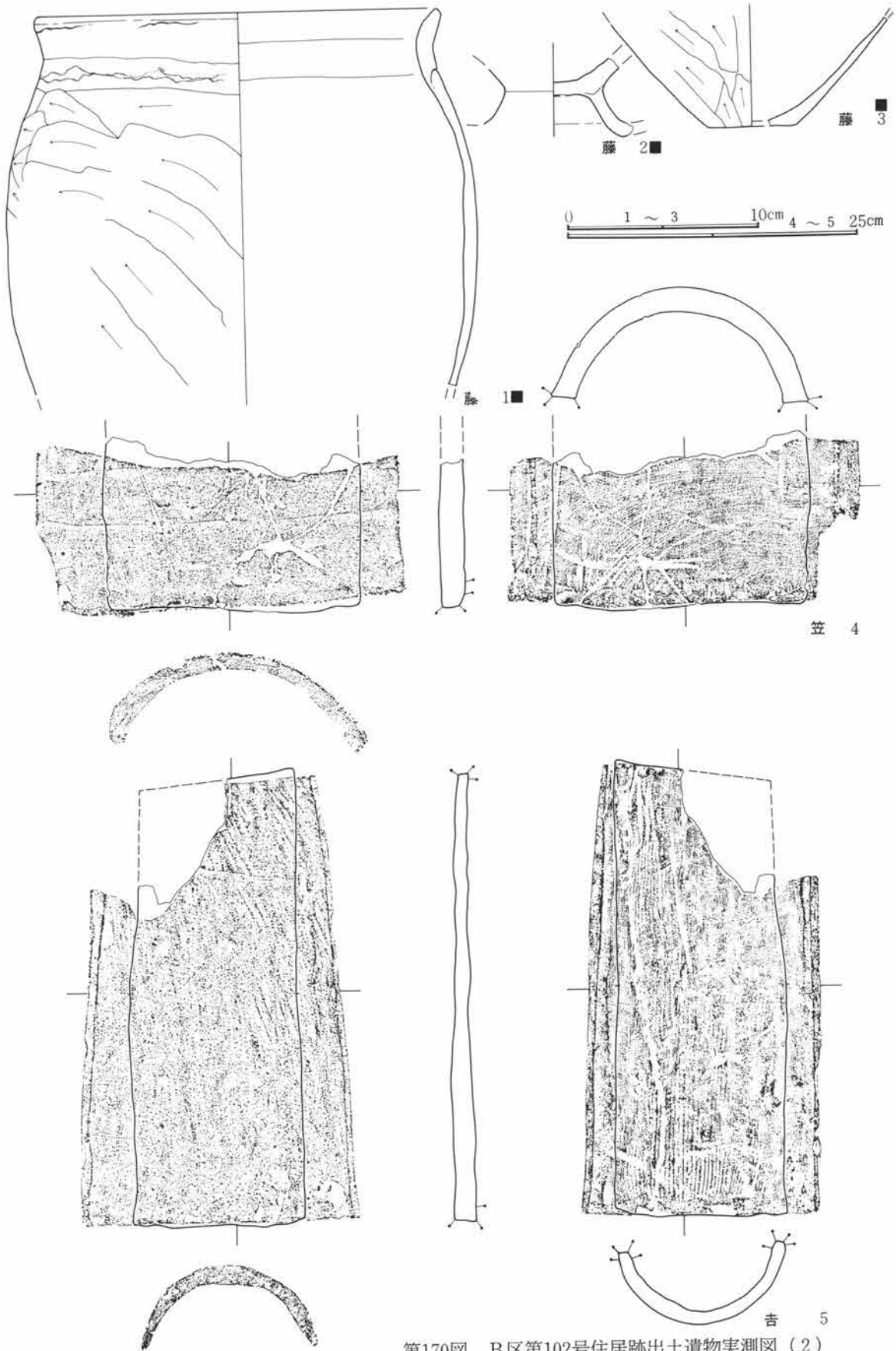
0 2m



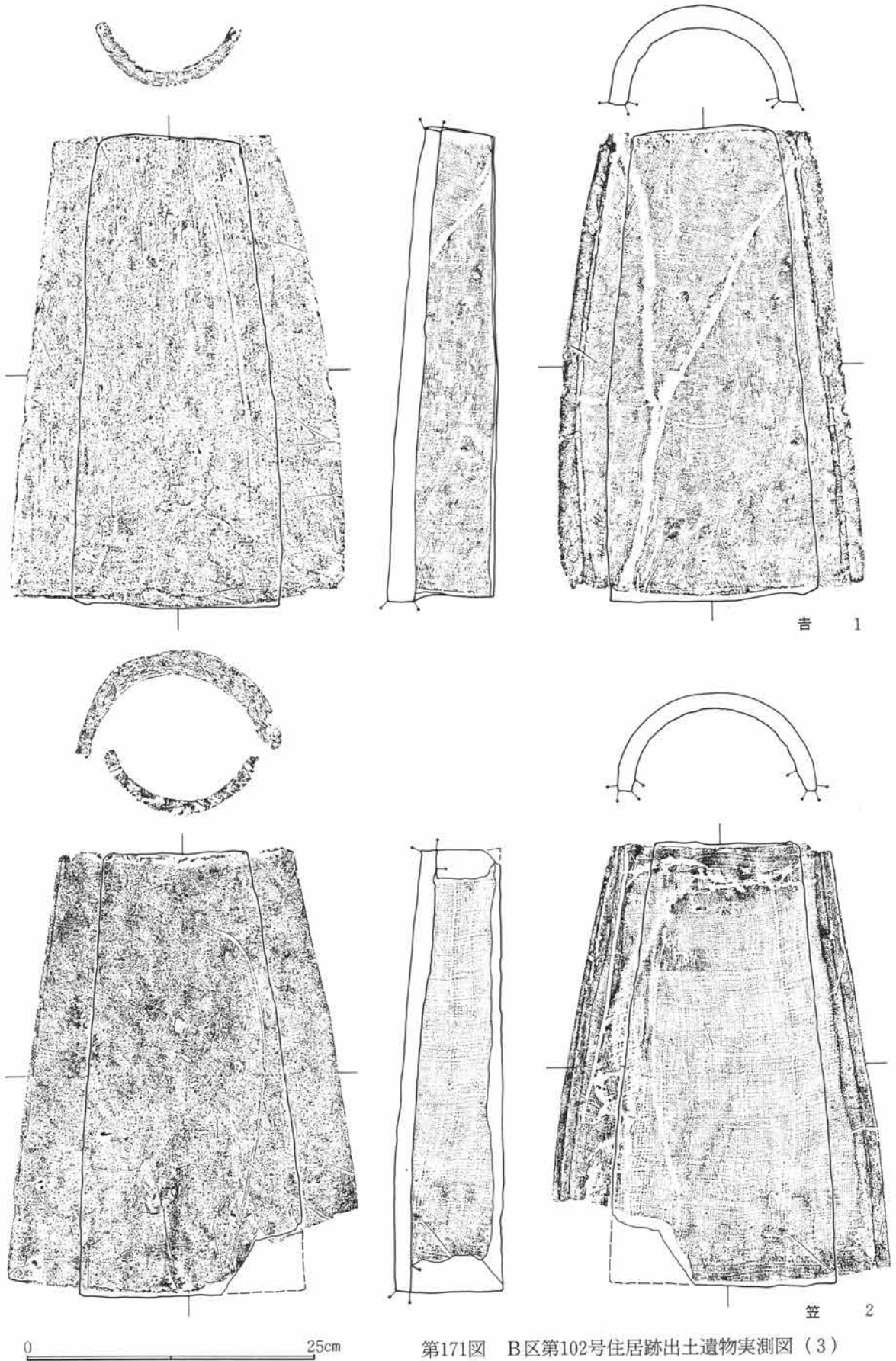
第3節 検出された住居跡について



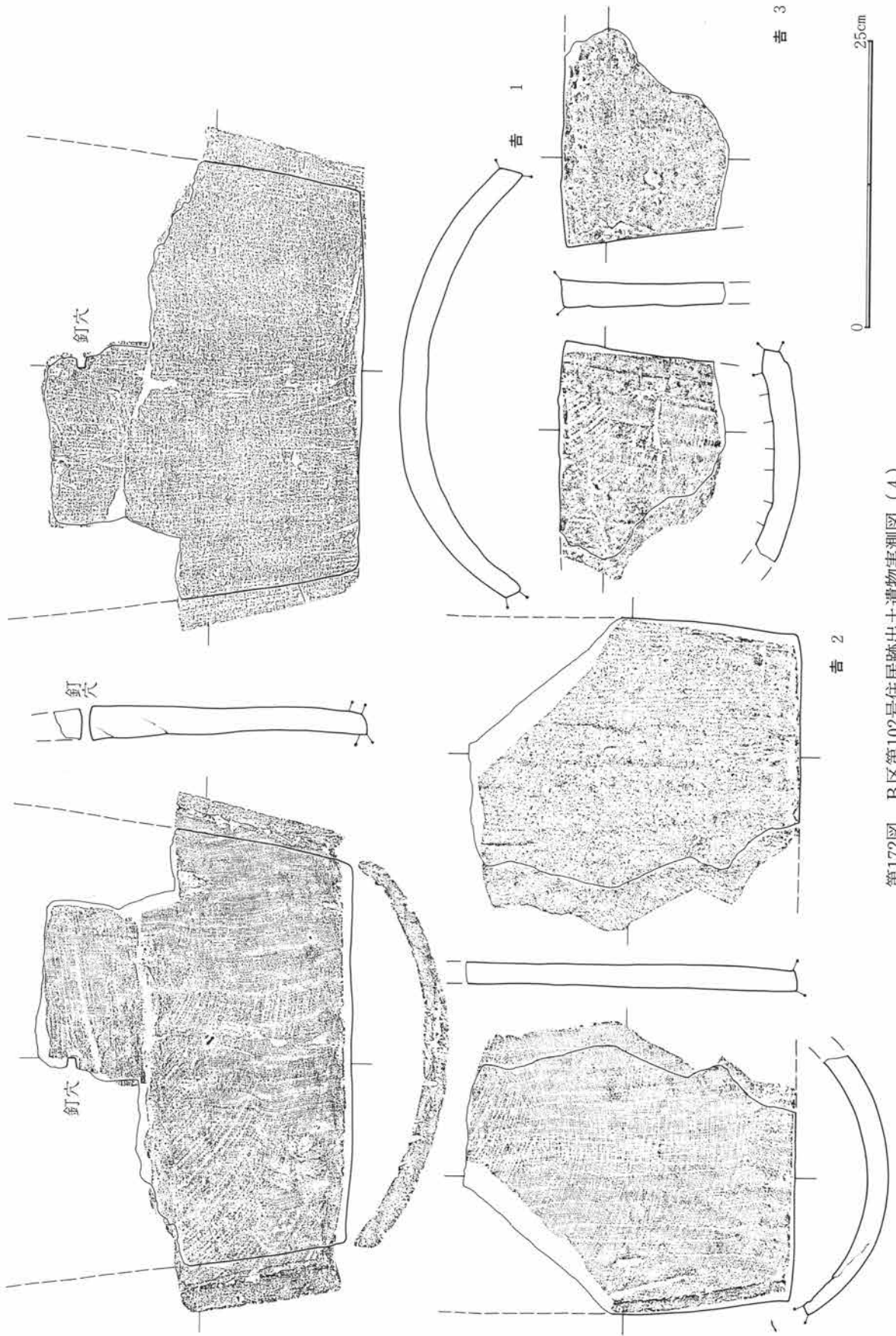
第169図 B区第101・102号住居跡出土遺物実測図(1)



第170図 B区第102号住居跡出土遺物実測図(2)

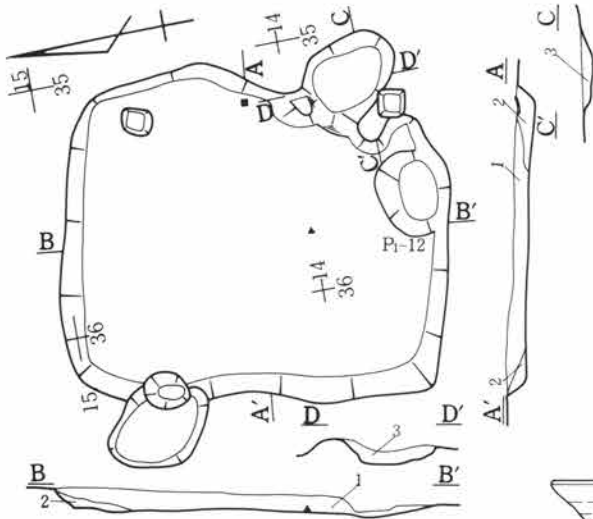


第171図 B区第102号住居跡出土遺物実測図(3)



第172図 B区第102号住居跡出土遺物実測図(4)

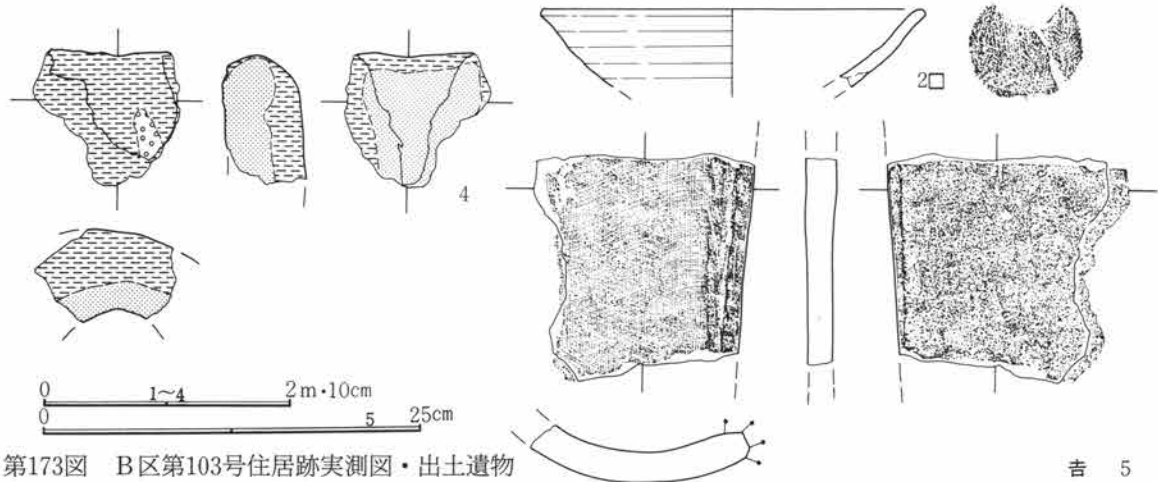
遺構名称	B区第103号住居跡		位置	14~16-B-36・37グリッド内。		残存深度	約18cm
平面形態	横長方形。	規模	2.67m×3.10m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-101度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VI・VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。68×54cm・深度-12cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から54cm。			主軸方位	北-120度-南	
改築	不分明。			形状	馬蹄形状。		
規模	全長 85cm・屋外長 62cm・屋内長 23cm・袖部幅107cm・燃烧部幅 54cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
煙道	未検出。		袖	地山削り出しか。詳細不詳。			
掘り方	不詳。						
遺物出土状態	覆土内から少量の土器類・瓦類が出土しているのみである。						



所見 当住居跡は南東隅部にカマドを備え、同部に傍竈坑を具備する。カマドの詳細は調査の不手際により不分明である。住居形状は、C区第VII段階の様相が看取される。又、カマドの付設位置は、傍竈坑の位置からすれば改築（住居東壁側）も考慮されるところである。出土遺物は全体に少なく時期の確定に明定さを欠くが、概、C区第V段階以降であることは判断されるが、当住居跡は、住居形状での年代観の10世紀前半頃を想定したい。

層序 (B 103住) L=127.00 m

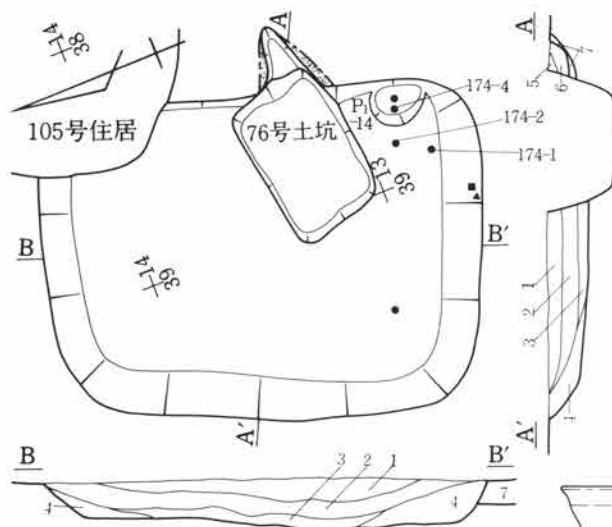
1. 粗・細粒状C軽石混入・粒状VII層土微量。2. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土多量。3. 微粒状C軽石若干・粒状焼土含有・灰含有。



第173図 B区第103号住居跡実測図・出土遺物実測図

遺構名称	B区第104号住居跡		位置	13~15-B-39・40グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	横長方形。	規模	2.60m×3.58m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-112度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用するが平坦ではなく部分的に窪ぼむ。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。32×43cm・深度-14cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
遺物出土状態	全体に少ない。傍竈坑周辺で若干量の出土が目立っている。						

所見 当住居跡のカマドは、近代の耕作に伴なうと判断された土坑により破壊され煙道部しか遺存しない。

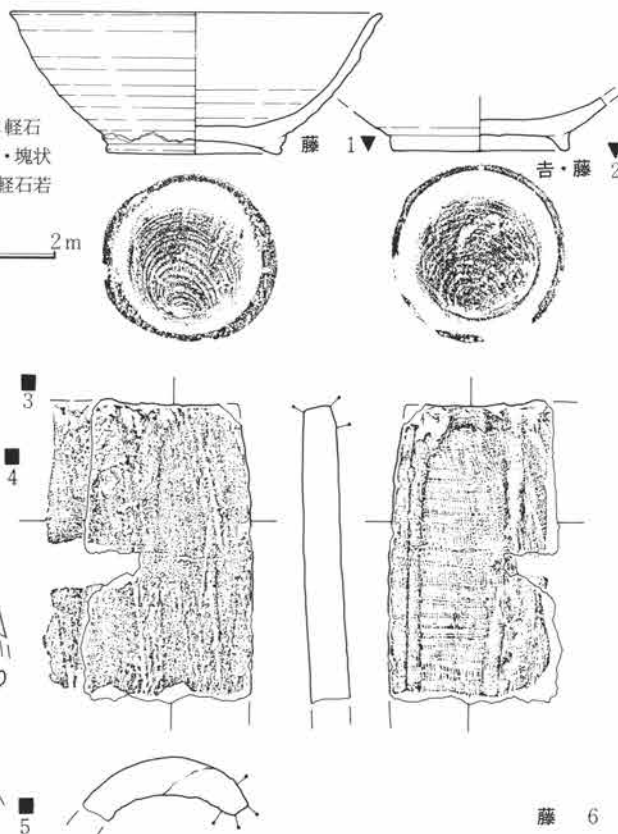


そして、北東隅部ではB105住を本住居が切って構築している。住居跡は、主軸をやや南向きにとっている。この主軸方位は近接する住居跡のB103・105・106に共通する点である。カマドは、東壁中央より若干南西隅部に寄りに具備する。傍竈坑は規模が小さく、南東隅部に寄りに備えている。住居形状はC区の第VI段階に対比されると考えられ、出土遺物ではC区第VII段階の様相が認められる。この点から当住居は、10世紀初頭頃の住居と想定される。

層序 (B 104 住) L=127.10 m

1. 粗・細粒状C軽石混入。2. 粒状C軽石多量。3. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土多量。4. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土含有・塊状VII層土若干。5. 粒状C軽石含有・粒状焼土若干。6. 細粒状C軽石若干・粒状炭化物・灰層少量・粒状VII層土含有・粒状焼土混入。7. 微粒状C軽石微量・粒状焼土少量。

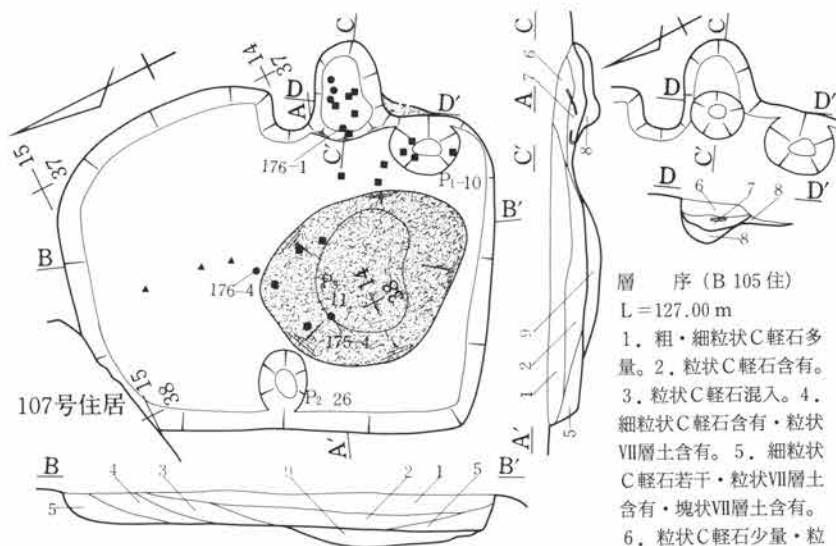
0 2m



第174図 B区第104号住居跡実測図・出土遺物実測図

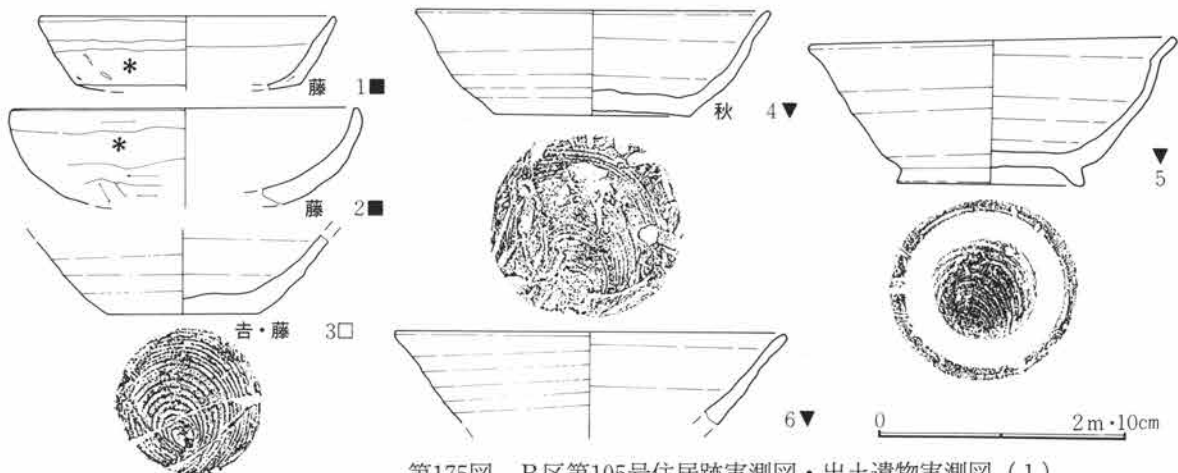
第3節 検出された住居跡について

遺構名称	B区第105号住居跡		位置	14~16-B-37~39グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	横長方形。	規模	2.70m×3.48m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-117度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土及び造床を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形状。44×56cm・深度-10cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	P <sub>3</sub> の土坑状の掘り込みを検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm。			主軸方位	北-117度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	舌状。		
規模	全長 80cm・屋外長 62cm・屋内長 18cm・袖部幅115cm・燃烧部幅 55cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖は地山を削り出すが右袖は殆ど認められない。					
煙道	未検出。			掘り方	焚口直下から土坑状の掘り込みを検出。		
遺物出土状態							

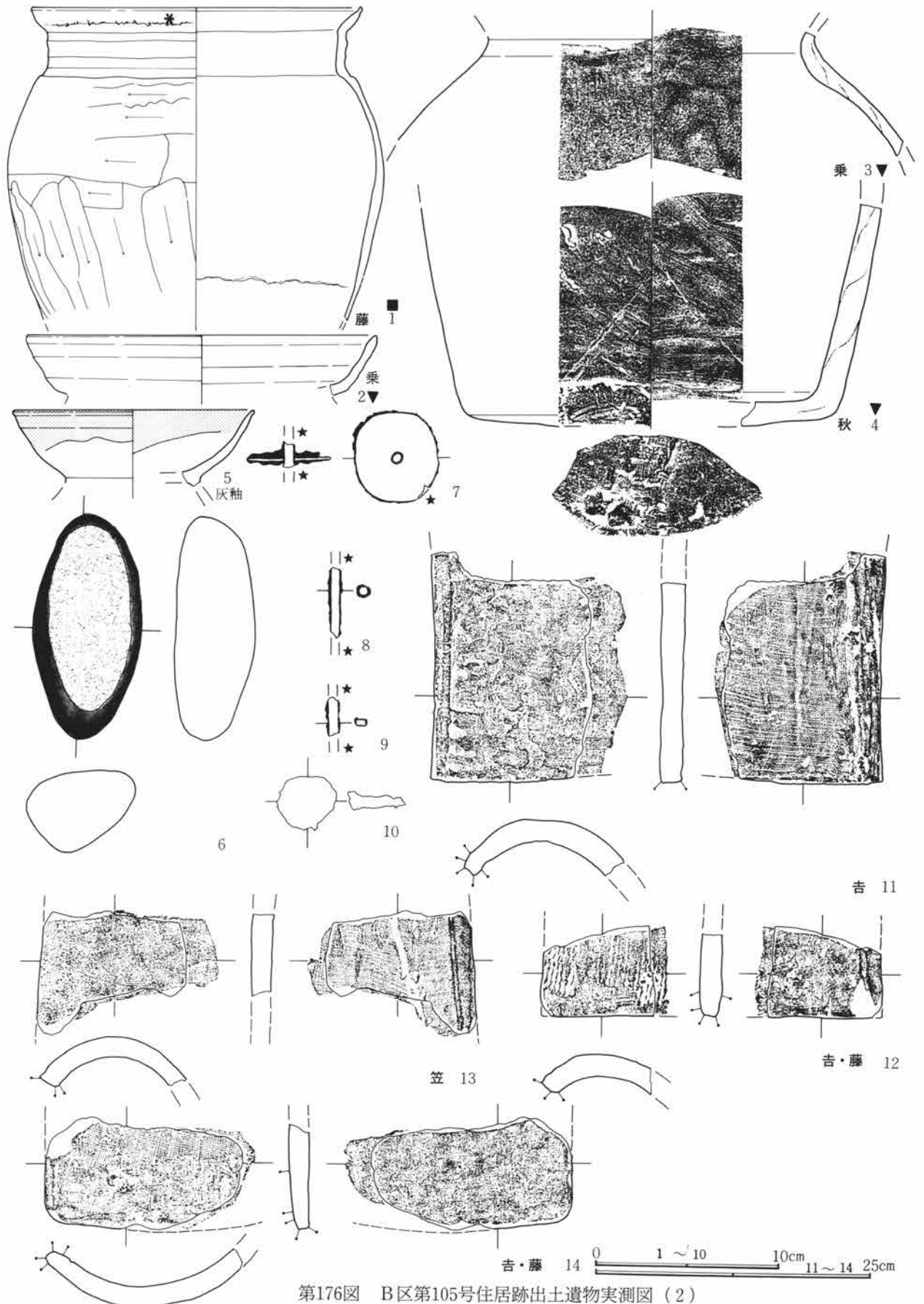


所見 当住居は東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部とカマドの間に傍竈坑を備えている。一方、西壁中央部直下にはP<sub>2</sub>の検出があるが性格は分明ではない。掘り方は不整形土坑状の掘り込みが認められている。住居形状はC区の第VI段階と考えられる。出土遺物はやや夾雑する感があるが同段階の様相は看取される。

層序 (B 105 住) L=127.00 m  
 1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石含有。  
 3. 粒状C軽石混入。4. 細粒状C軽石含有・粒状VII層土含有。  
 5. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土含有・塊状VII層土含有。  
 6. 粒状C軽石少量・粒状炭化物微量。7. 細粒状C軽石微量・粒状焼土微量。  
 8. 微粒状C軽石若干・粒状炭化物・灰層若干・粒状VII層土多量。



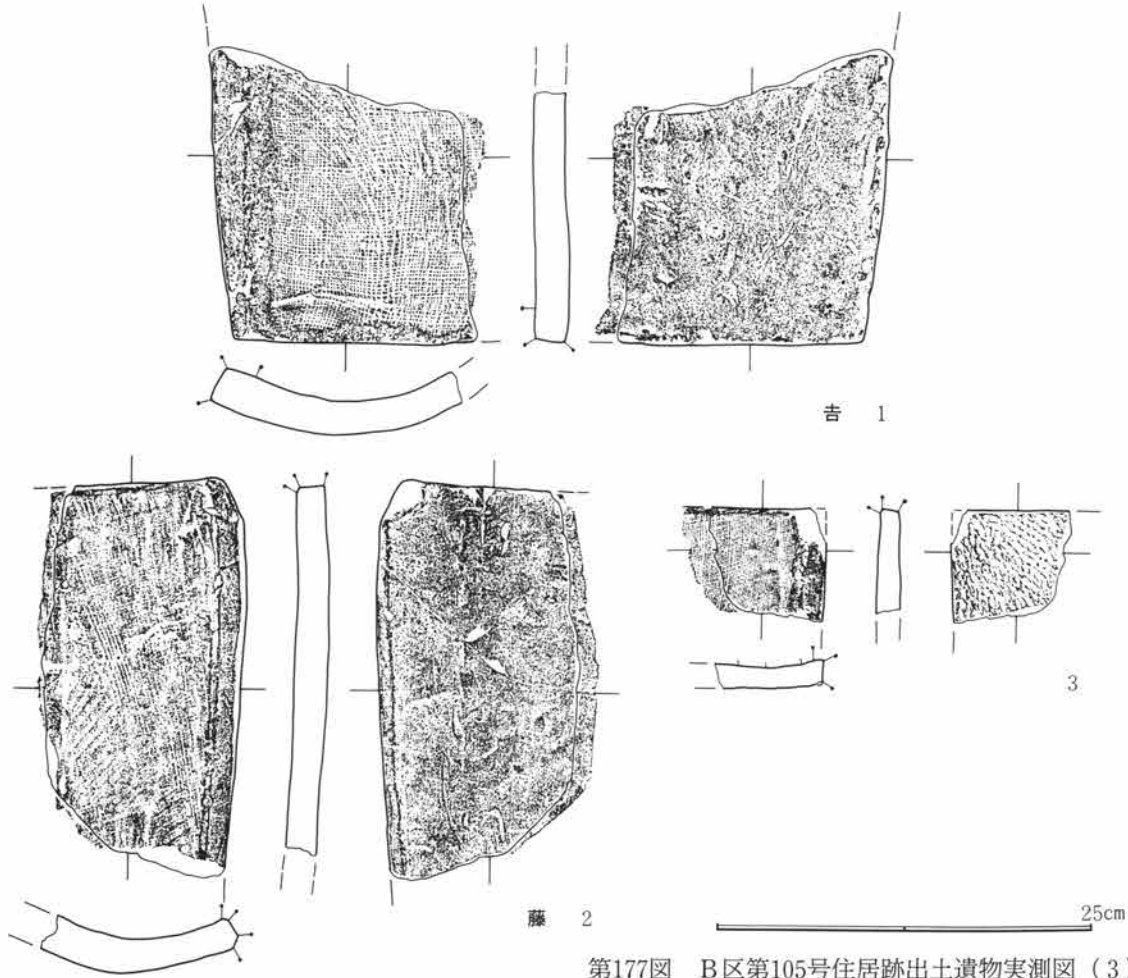
第175図 B区第105号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第176図 B区第105号住居跡出土遺物実測図(2)

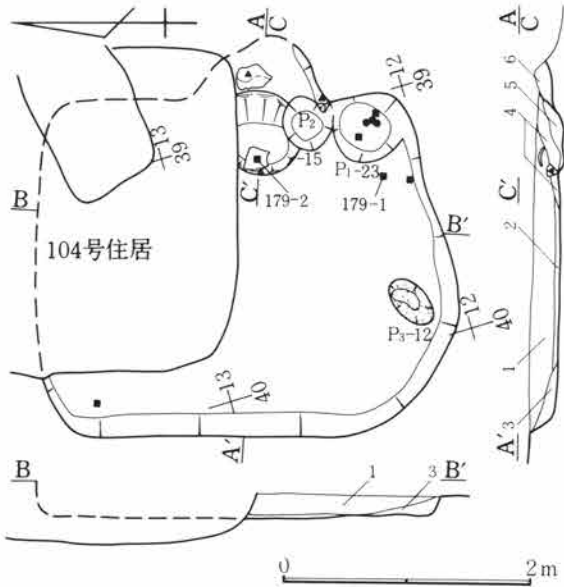


第3節 検出された住居跡について



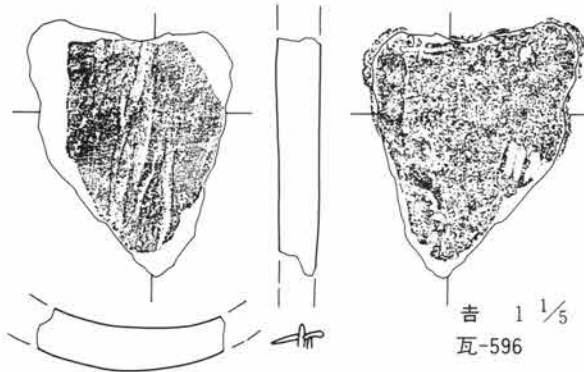
第177図 B区第105号住居跡出土遺物実測図(3)

所見 (B106住) 当住居跡はB104住に北側半分を破壊されている。住居は、東壁中央部にカマドを具備し、南東隅部には傍竈坑を備えている。又、カマド右袖部ではP<sub>2</sub>が検出されているが、傍竈坑等の性格ではなく、袖の補強材等の据え方と考えられる。そして、主軸方位は前述した如くやや南に振っており、4軒の住居跡が有機的な関係にあったことを示唆している。住居形状はC区の第V段階頃と考えられる。



層序 (B106住) L=127.10 m

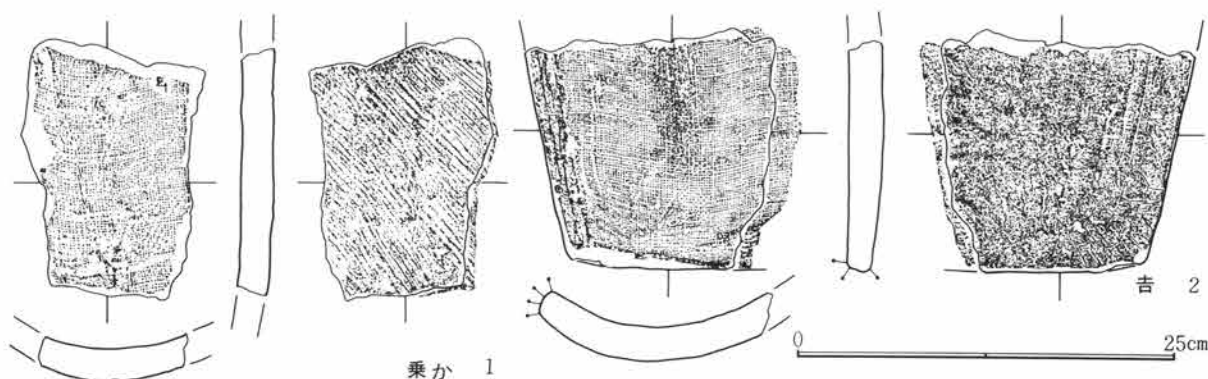
1. 粗・細粒状C軽石混入。2. 微粒状C軽石若干・粒状焼土少量。
3. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土含有・塊状VII層土含有。
4. 細粒状C軽石少量・塊状焼土多量。5. 炭化物・灰層。
6. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土含有・粒状焼土少量。



第178図 B区第106号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物

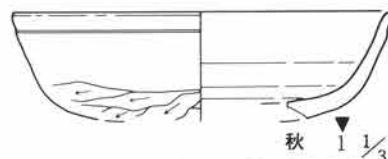
遺構名称	B区第106号住居跡		位置	13・14-B-39~41グリッド内。		残存深度	約17cm
平面形態	矩形状。	規模	2.70m×3.34m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-106度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	地山VI・VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形状。50×56cm・深度-23cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
遺物出土状態	傍竈坑内からやや集中して出土している。						



第179図 B区第106号住居跡出土遺物実測図(2)

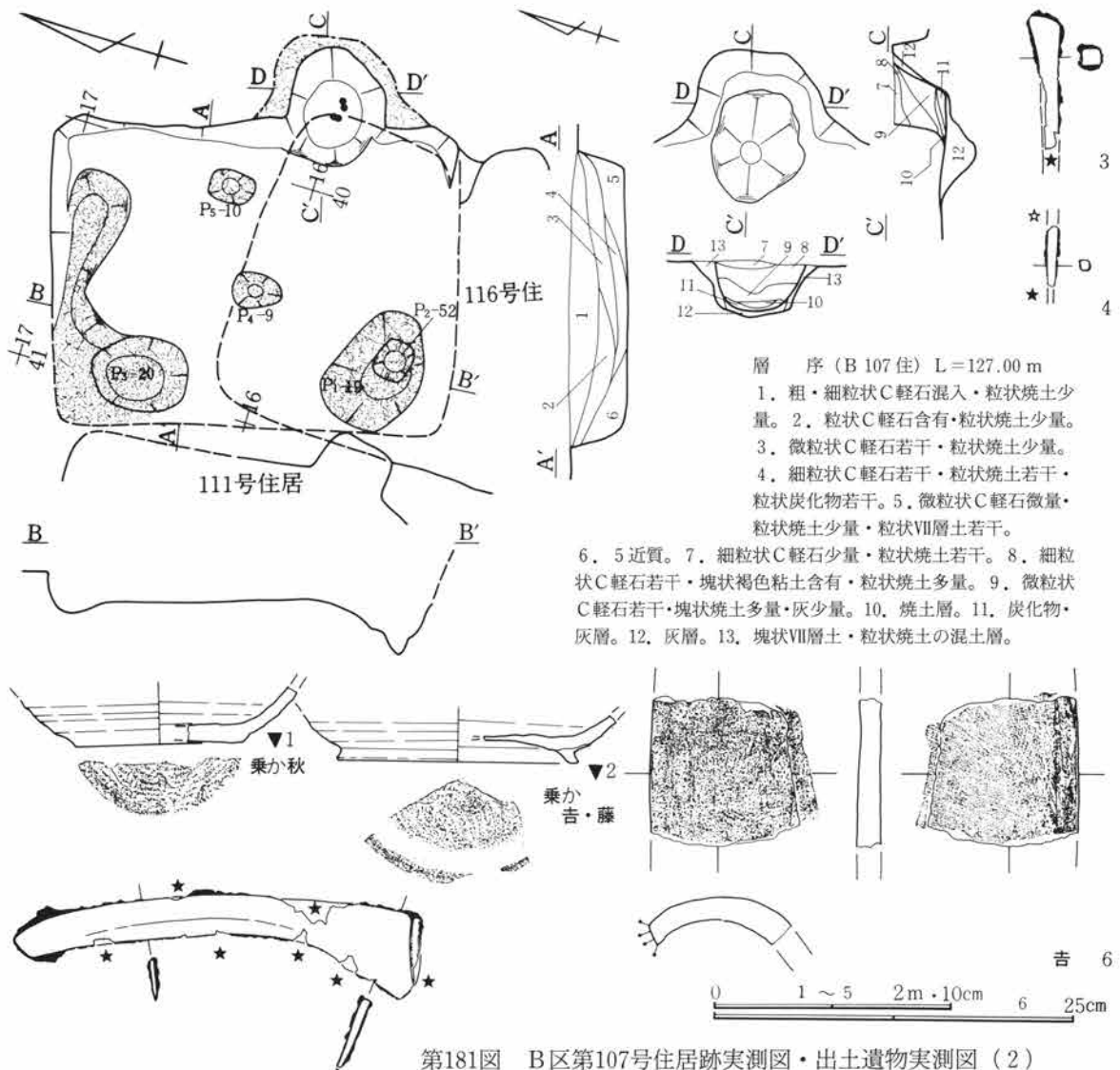
遺構名称	B区第107号住居跡		位置	16~18-B-40~42グリッド内。		残存深度	約50cm
平面形態	横長方形。	規模	2.50m×3.45m	構築基準辺	不詳	主軸方位	北-73度-南位か。
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> かP <sub>3</sub> か。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北壁下で若干認められたが、B106住の破壊により不分明な点がある。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から46cm。				主軸方位	北-70度-南
改築	有。掘り方覆土内から焼土を検出。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長 98cm・屋外長 62cm・屋内長 36cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 82cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	顕著な状態ではなく右袖が若干瘤状に認められた。		
煙道	未検出。		掘り方	大きな箱状を呈する状態である。			
遺物出土状態	カマド内より土師器坏の完形が出土しているが不手際により所在不明。						

所見 当住居跡はB111・112・116住と重複しB112・116住に切られており、B112住は当住居跡が切っている。住居は、主軸を北側にやや振っている。カマドは東壁中央部より南東隅部に偏在し、燃烧部幅は広いが袖は明らかな状態ではない。傍竈坑は未検出であるが、南西隅部で貯蔵穴状のピットを検出しているが、内側には、柱穴状の施設が検出されている。このピットと同様な状態は前刊書中のC21住でも認められている。住居形状はカマドの状態を考慮すればC区の空白期と考えられ、本跡を切るB116住の出土遺物も考慮される。



第180図 B区第107号住居跡出土遺物実測図(1) 1:3

第3節 検出された住居跡について



第181図 B区第107号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)

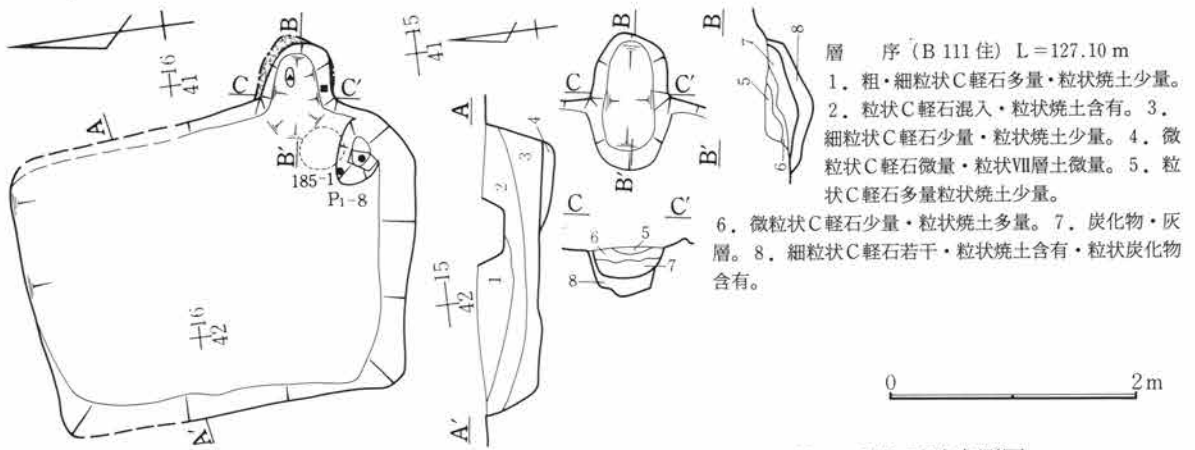
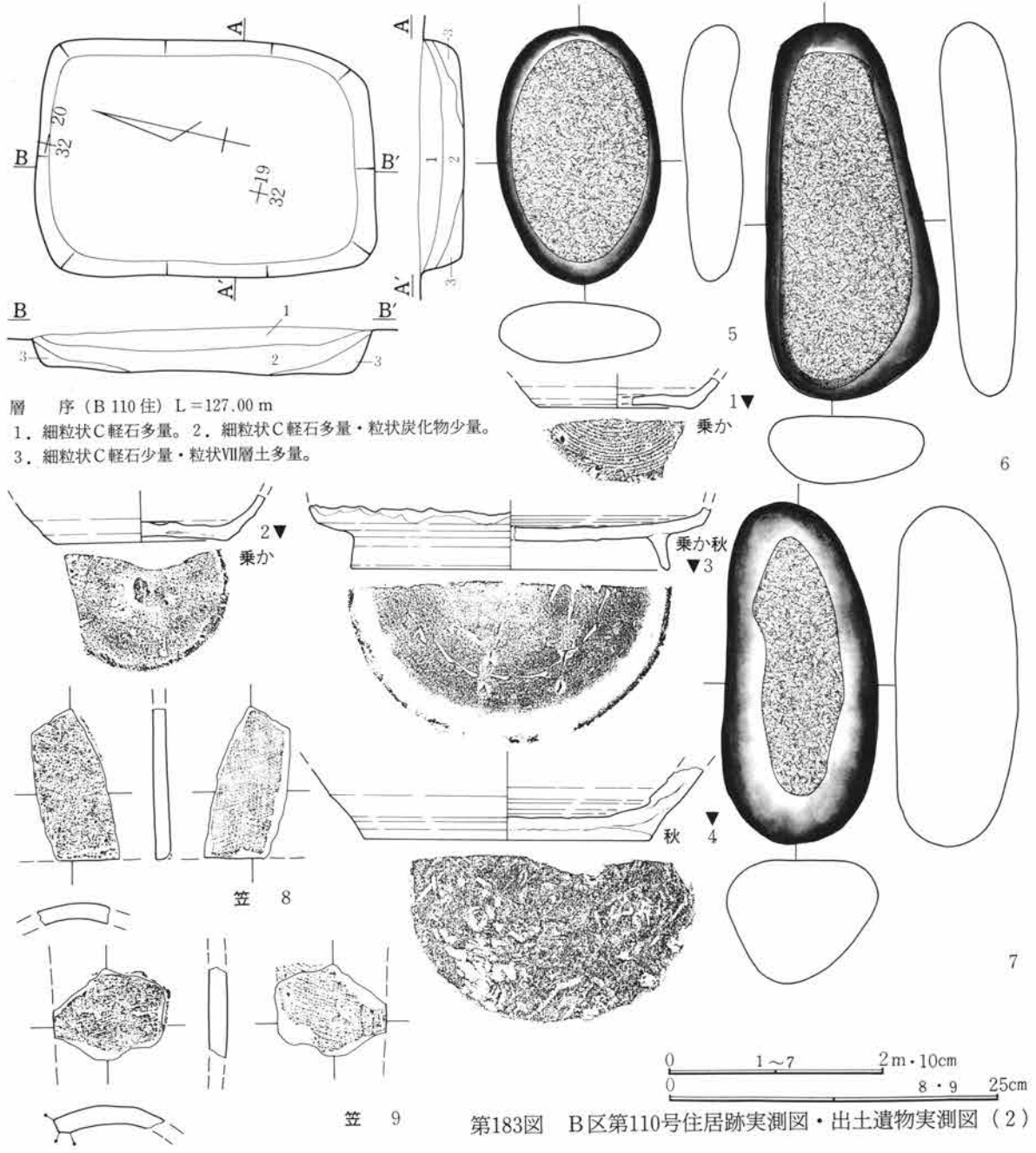
遺構名称	B区第110号住居跡	位置	19~21-B-32・33グリッド内。	残存深度	約43cm
平面形態	横長方形。	規模	2.14m×3.12m	構築基準辺	西壁か
				主軸方位	北-102度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。	床面	地山VII層土を使用し平坦。		
壁溝	未検出。	傍竈坑・貯蔵穴	未検出。		
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。				
掘り方	無し。				
遺物出土状態	若干量の瓦・土器類が覆土内から出土したのみである。				

所見 当址は、確認段階でもカマドが認められず大形の土坑の認識もあったが、規模自体小形住居に匹敵することと、覆土・底面(床面)の状態等住居跡と共通する状況が認められたことにより竪穴状遺構とした。出土遺物では、C区の空白期・C区の第III段階に伴う遺物があるものの、完存品はなかった。時期は、瓦の出土からは8世紀中頃以降と考えられる。



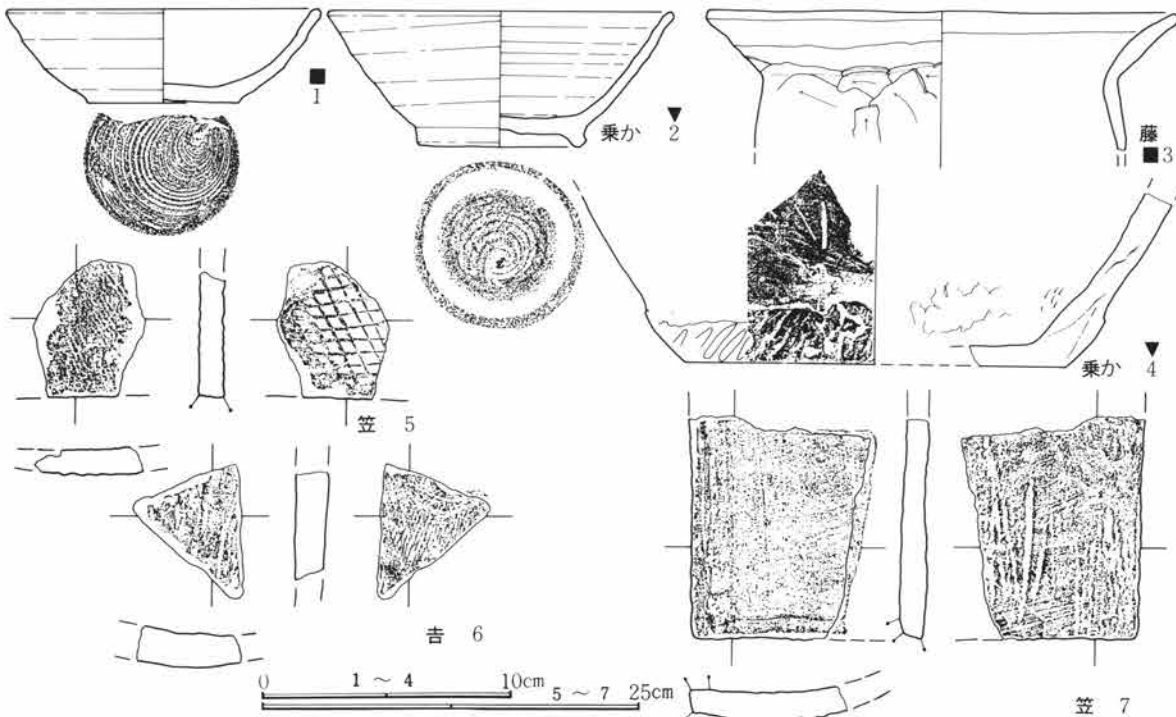
第182図 B区第110号址出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



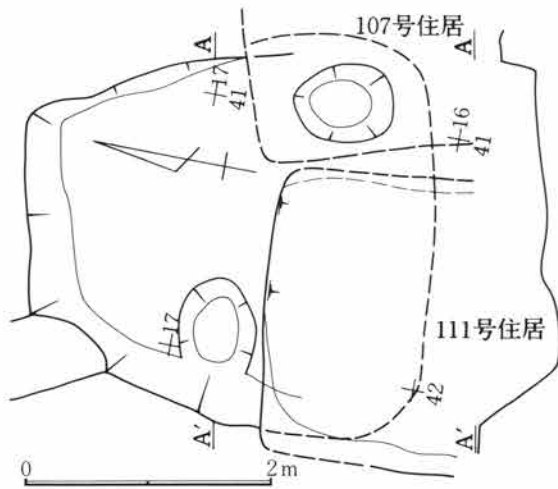
遺構名称	B区第111号住居跡		位置	16・17-B-41~43グリッド内。		残存深度	約48cm
平面形態	横長方形状。	規模	2.40m×3.22m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-97度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	一部に造床を施こし、他は地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・不整円形状。51×32cm・深度-8cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	東壁下で検出されたが、浅い窪みの状態であった為平面図化は行なわなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-99度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長 75cm・屋外長 44cm・屋内長 31cm・袖部幅 78cm・燃烧部幅 54cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	殆んど認められなかった。					
煙道	未検出。			掘り方	長楕円形状を呈する土坑状。		
遺物出土状態	覆土内から土器類、瓦類がやや多く出土している。						

所見 当住居跡はB107住を切り構築している。住居は東壁中央より南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部直下には傍竈坑を備えている。住居の主軸方位は、南側に7°振るが全体的には東への指向が認められる。カマドは、燃烧空間が狭く小作りである。傍竈坑も不整楕円形で小形化している。住居形状はC区の第VII段階に対比される。出土遺物ではC区の第VI・VII段階に伴う遺物様相が看取される。このことから、当住居跡は10世紀中頃の廃棄と考えられる。

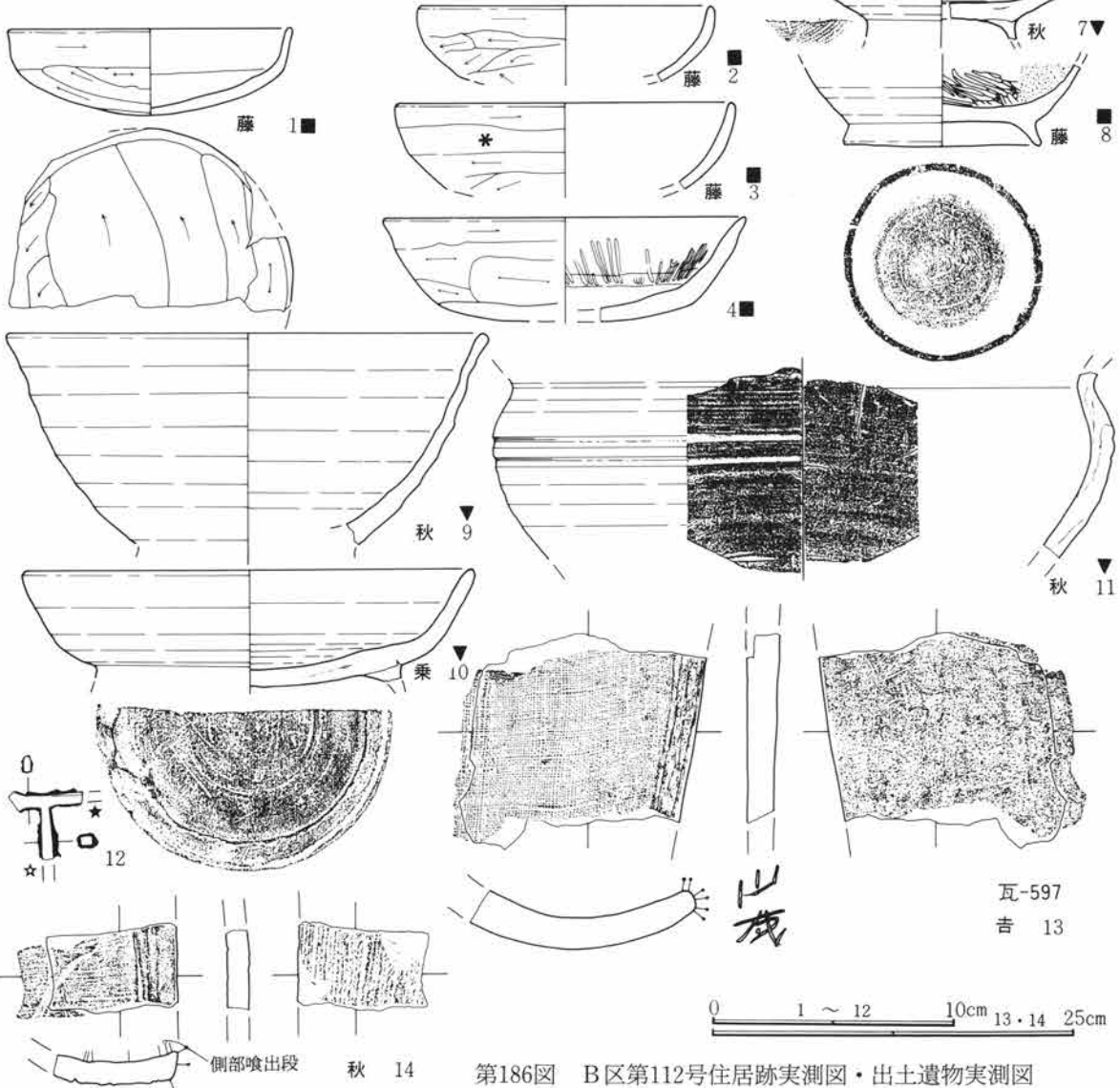


第185図 B区第111号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	B区第112号址	位置	17・18-B-41~43グリッド内。	残存深度	約40cm
B107・111号住の破壊により詳細不詳。					



所見 当址は前述のB107・111住に南側半分が切られ失なっている。規模の復元はB107住のP<sub>3</sub>を傍竈坑として想定した。然、この場合カマドの位置が問題となる。そして、この点から前述したB110址の竪穴状遺構の可能性はある。出土遺物は多く、C区の第III段階の住居形状の遺物様相が認められるが明定は不能。

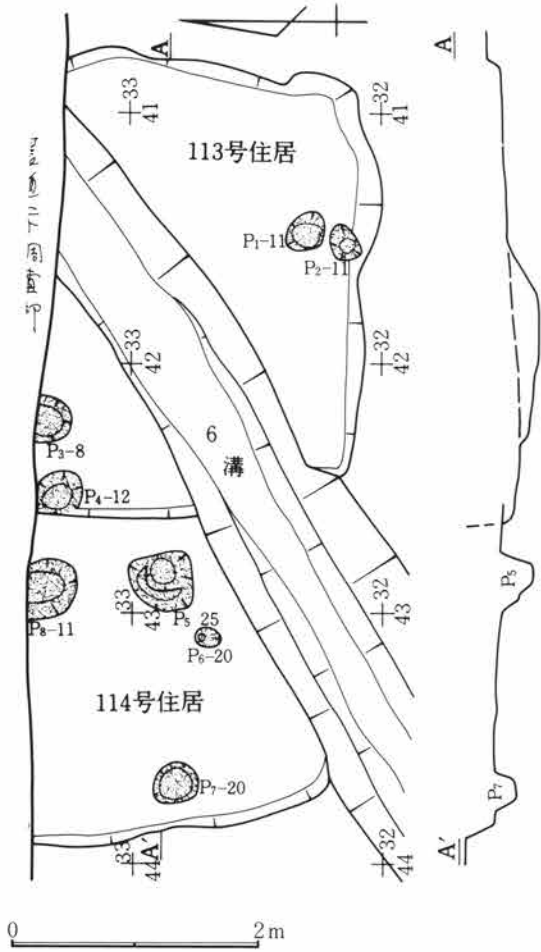


第186図 B区第112号住居跡実測図・出土遺物実測図

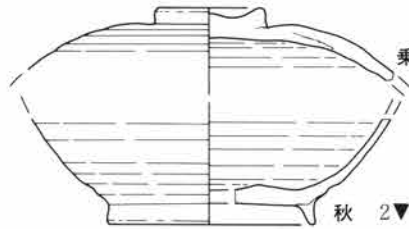
所見 (B113住) 当住居跡は、B6溝に切れ、調査区内を東西に走行する農道下に北半分が延びるが調査不能で完掘が出来得なかった。この為詳細は不明である。又、カマドも未調査部になると考えられ、住居跡の遺存が浅かった。出土遺物は土器類が少なく時期の確定は出来ないが、概、9世紀頃と考えられる。

遺構名称	B区第113号住居跡	位置	33・34-B-41~43グリッド内。	残存深度	約32cm
平面形態	横長方形か。	規模	3.76m×2.6+αm	構築基準辺	南壁か
				主軸方位	北-93度-南位か。
B区第6号溝の破壊・未調査部がある為詳細不詳。					

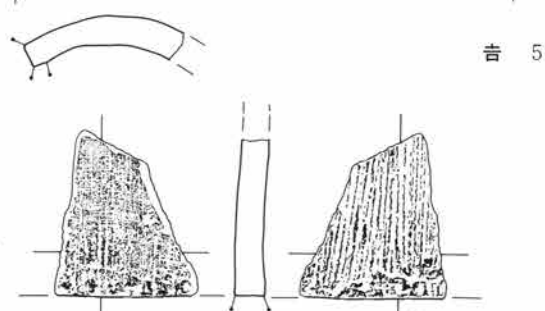
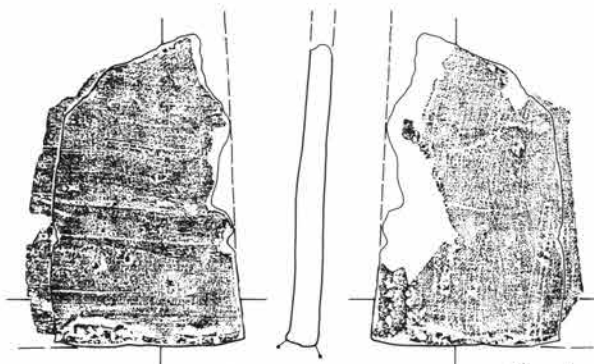
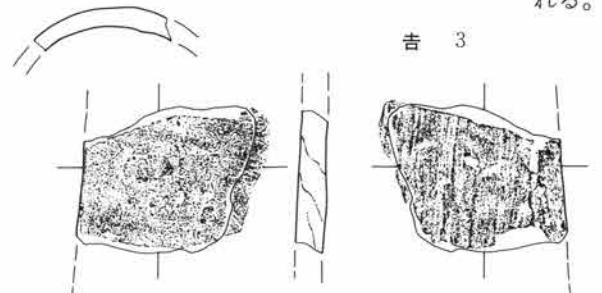
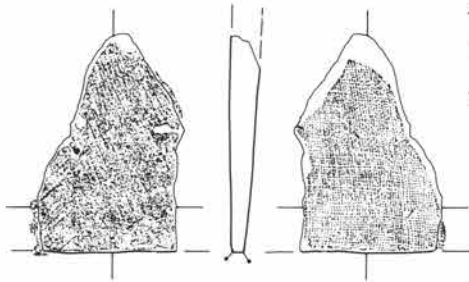
遺構名称	B区第114号住居跡	位置	33・34-B-43・44グリッド内。	残存深度	約22cm
B区第6号溝・B113号住の破壊・未調査部が多い為詳細不詳。					



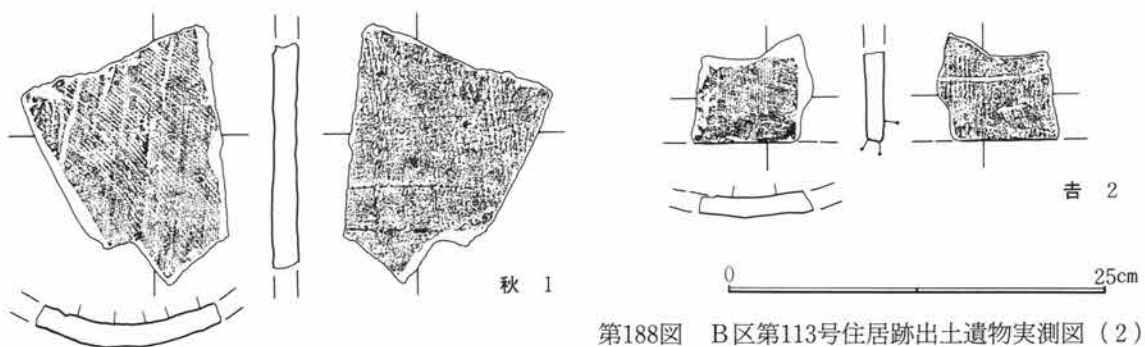
所見 (B114住) 当住居跡は、前述のB113住に切られると考えられたが、B113住の東側床面標高値と当住居の床面がほぼ同位であり、南壁の東延長部はB113住とほぼ同じであることから、元来、この両住居跡は、一軒の住居である可能性



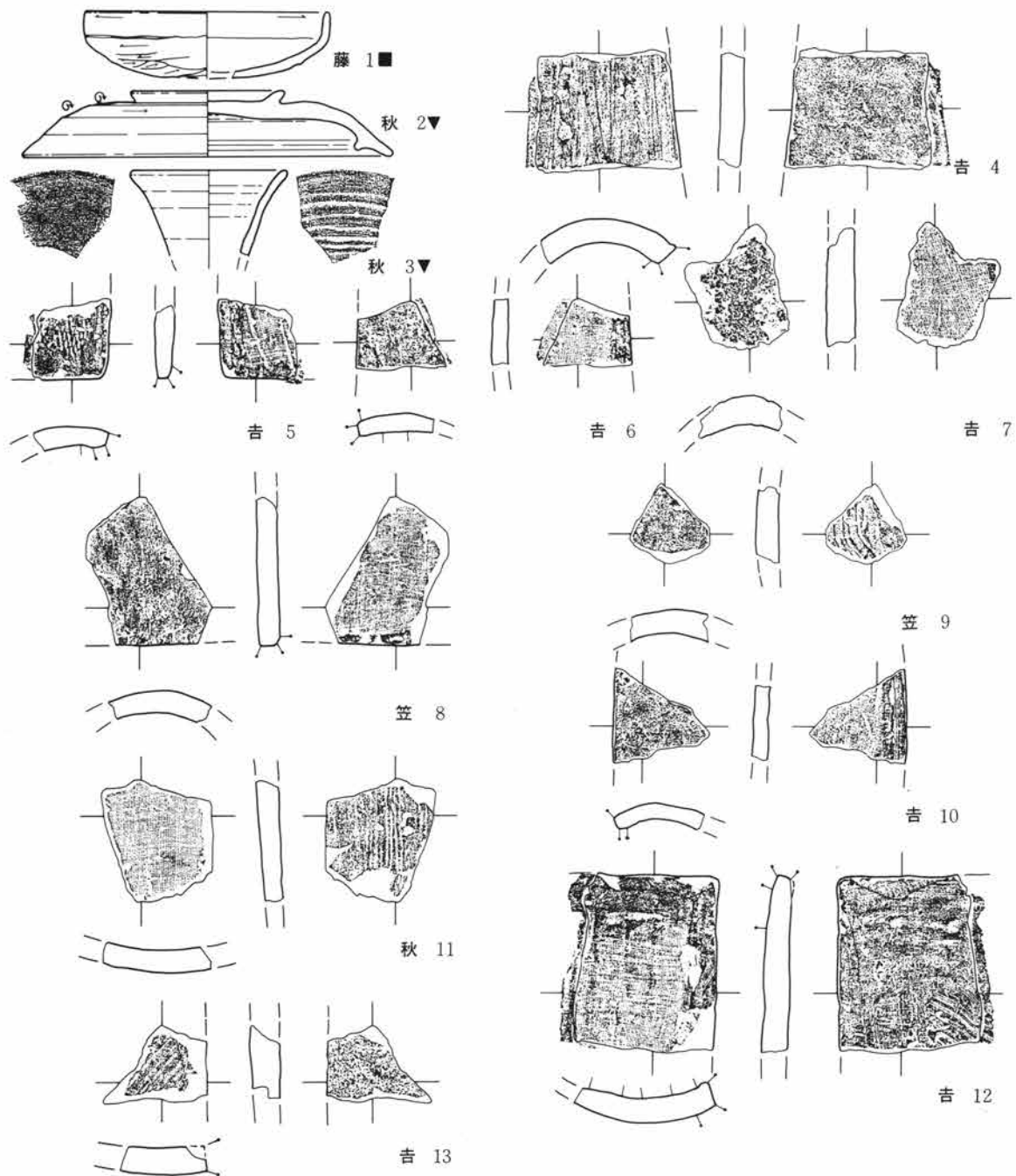
がある。この場合、1辺6m程の大形住居であったことが想定される。そして、時期を明定する遺物がないがやはり9世紀頃と考えられる。



第187図 B区第113・114号住居跡実測図・B区第113号住居跡出土遺物実測図(1)



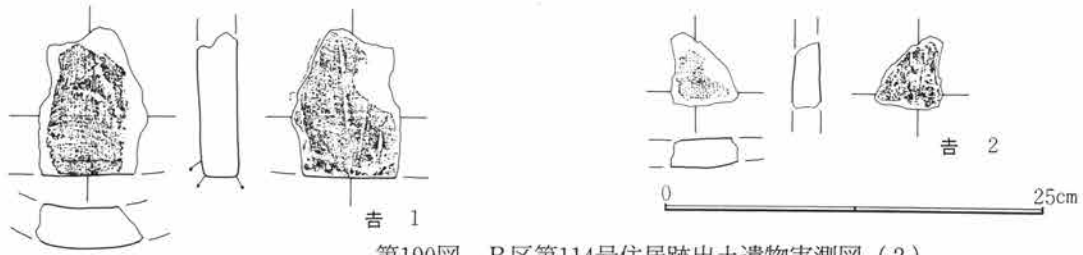
第188図 B区第113号住居跡出土遺物実測図(2)



第189図 B区第114号住居跡出土遺物実測図(1)



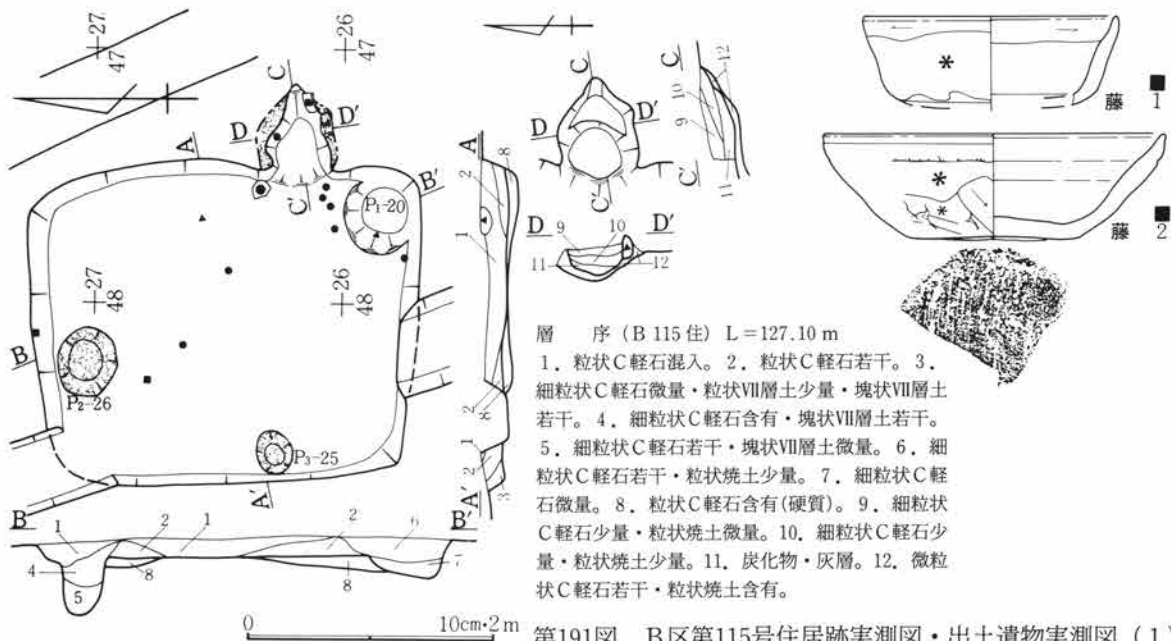
第3節 検出された住居跡について



第190図 B区第114号住居跡出土遺物実測図(2)

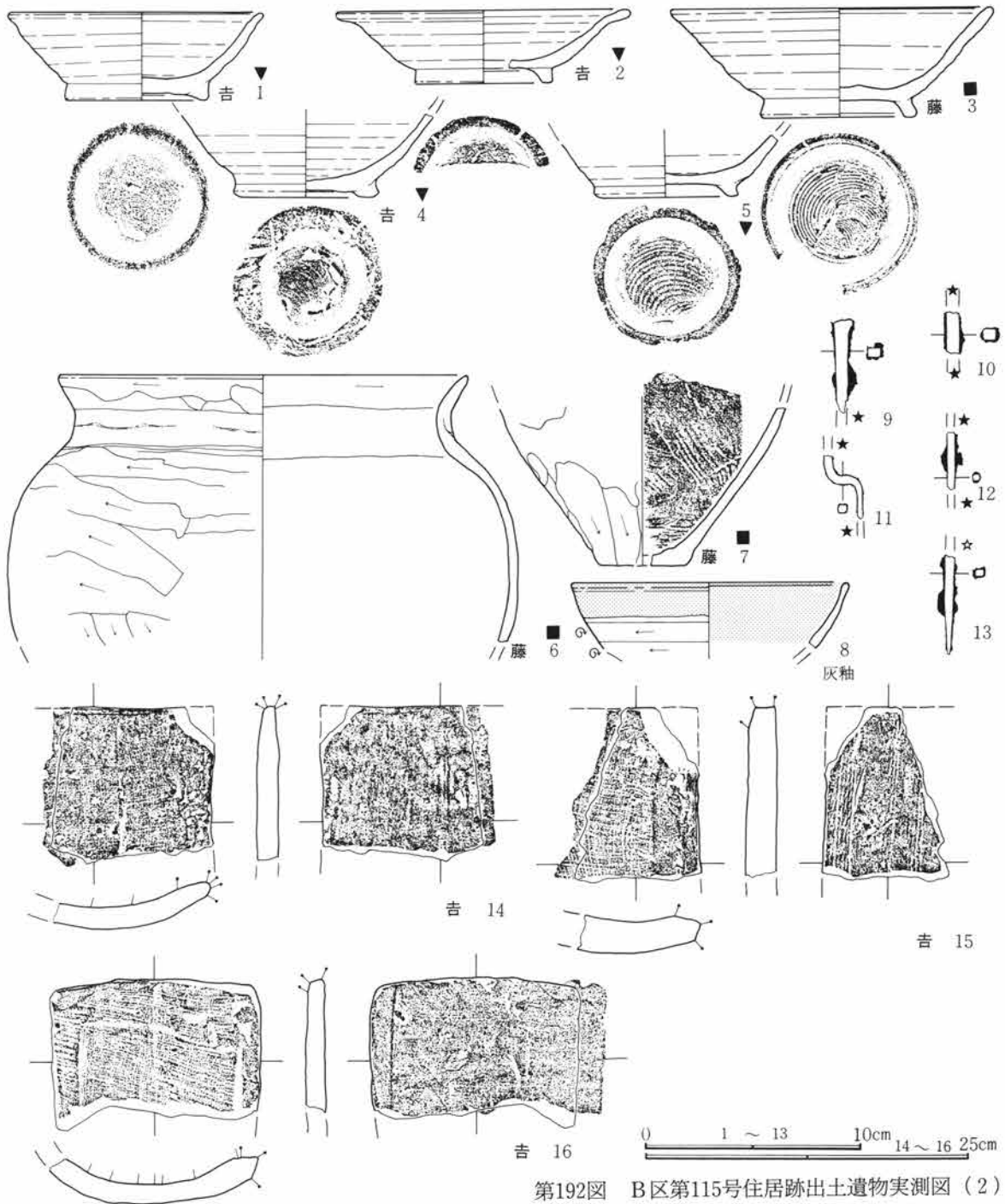
遺構名称	B区第115号住居跡		位置	25~27~48・49グリッド内。		残存深度	約20cm
平面形態	横長方形。	規模	2.35m×3.15m	構築基準辺	西乃至南壁	主軸方位	北-89度-南(西壁)
壁	斜位に立ち上がる。		床面	全体に造床が多い。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形。径60cm・深度-20cm			
柱穴	住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	住居中央部には地山VII層土を使用する面があったが、他は全て造床であった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-86度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出している。		形状	舌状。			
規模	全長 80cm・屋外長 65cm・屋内長 15cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 46cm。						
焚口・燃烧部	全体に皿状に窪んでいる。燃烧部先端側右壁に礫の補強材が出土している。焚口と燃烧部は重複が考えられる。						
	袖	微若な状態である。補強材はない。					
煙道	右壁を瓦で補強する。		掘り方	煙道寄りのテラス部は補強材の裾方か。			
遺物出土状態	全体に床面直上層での出土が多い。						

所見 当住居跡はB101・157・180住と重複すると考えられ、この中でB101住のみが切り合いが認められている。B157・180住との重複関係は机上での想定で現地では両者の遺存が不良であった為による。住居は東壁の南東隅部寄りに備え、南東隅部には傍竈坑を備えている。一方、C区の第VIII段階のB101住に切られることから、当住居跡の形状はC区の第VII段階に対比され、10世紀前半頃の住居と考えられる。



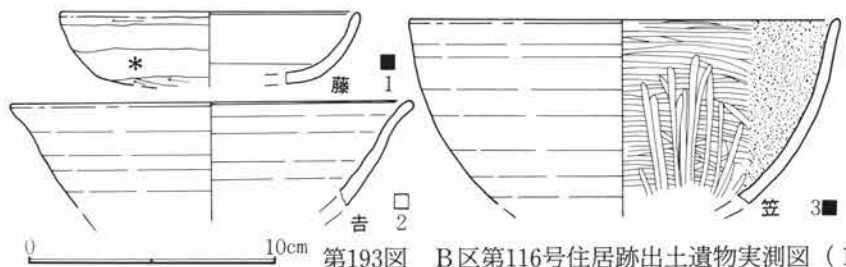
層序 (B 115 住) L=127.10 m  
 1. 粒状C軽石混入。2. 粒状C軽石若干。3. 細粒状C軽石微量・粒状VII層土少量・塊状VII層土若干。4. 細粒状C軽石含有・塊状VII層土若干。5. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土微量。6. 細粒状C軽石若干・粒状焼土少量。7. 細粒状C軽石微量。8. 粒状C軽石含有(硬質)。9. 細粒状C軽石少量・粒状焼土微量。10. 細粒状C軽石少量・粒状焼土少量。11. 炭化物・灰層。12. 微粒状C軽石若干・粒状焼土含有。

第191図 B区第115号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



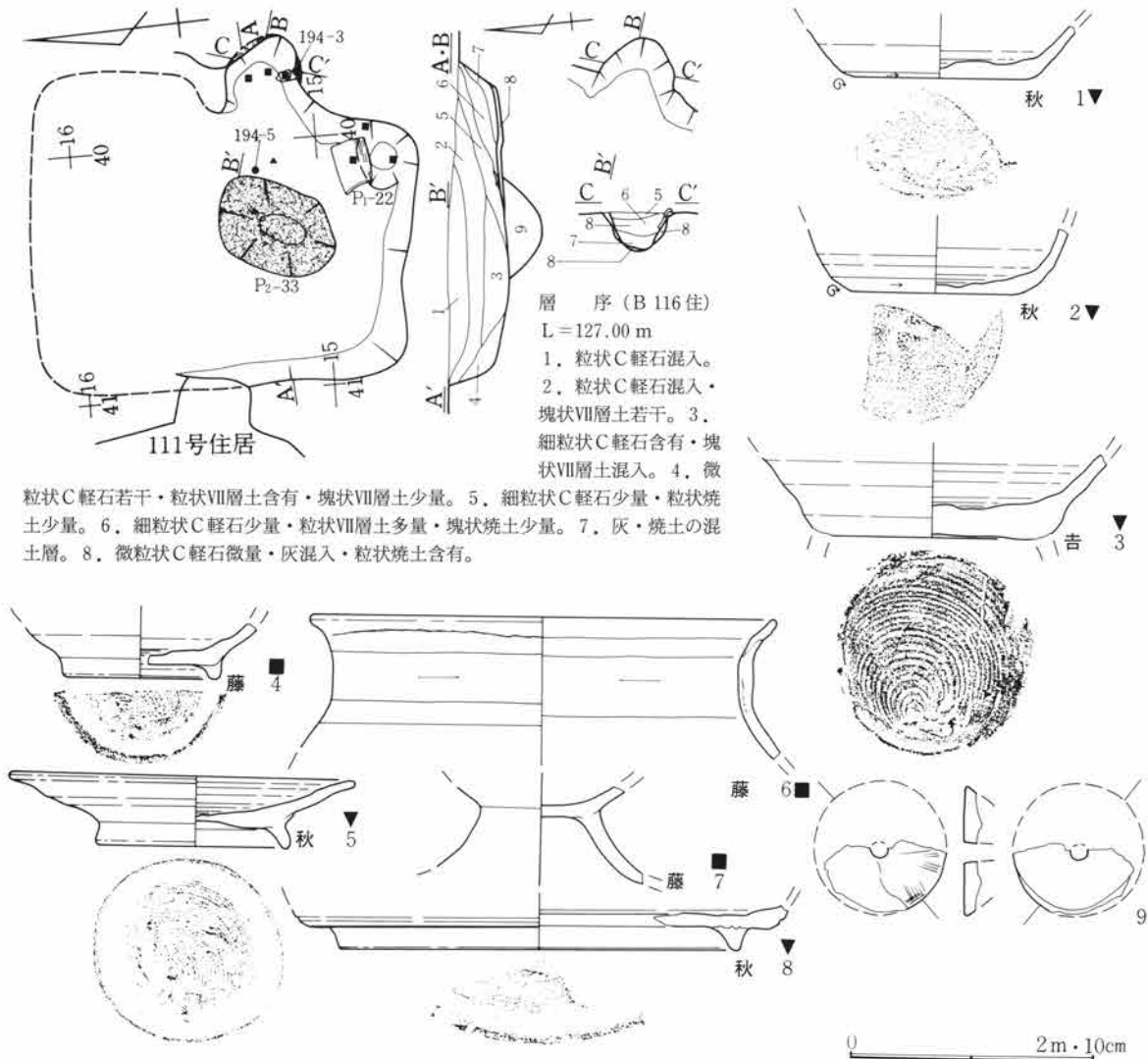
第192図 B区第115号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 当住居跡は前述のB107住を切り構築しており、南壁側ではB111住に切られている。北半分は調査時の不手際により逸している。住居は、東壁のほぼ中央部にカマドを具備し、南東隅部直下には傍竈坑を備えている。カマドは焚口の幅がやや広い。傍竈坑の規模は小さい。住居形状は、C区の第V段階乃至VI段階に対比され、9世紀後半代の住居と考えられる。

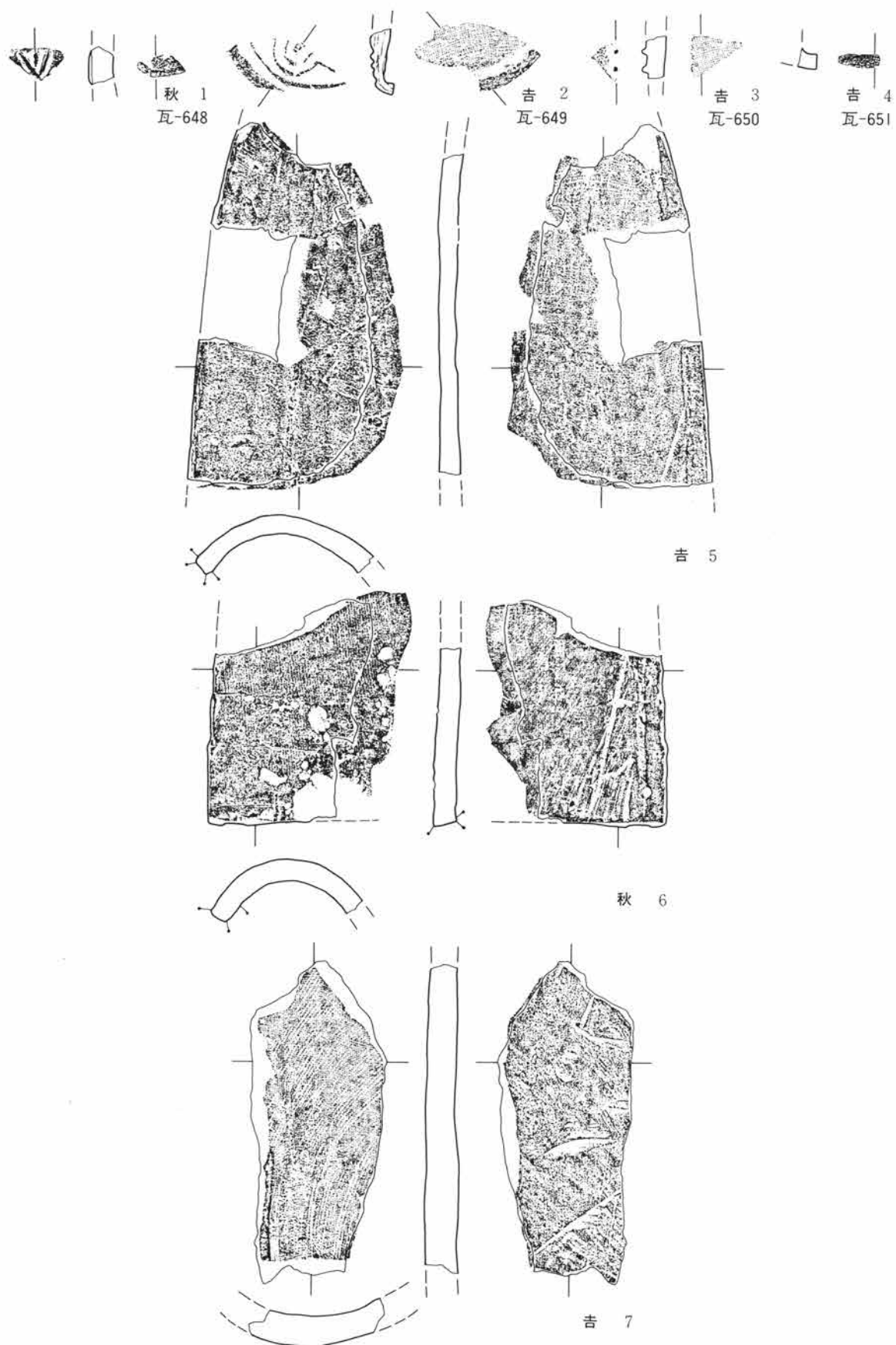


第193図 B区第116号住居跡出土遺物実測図(1)

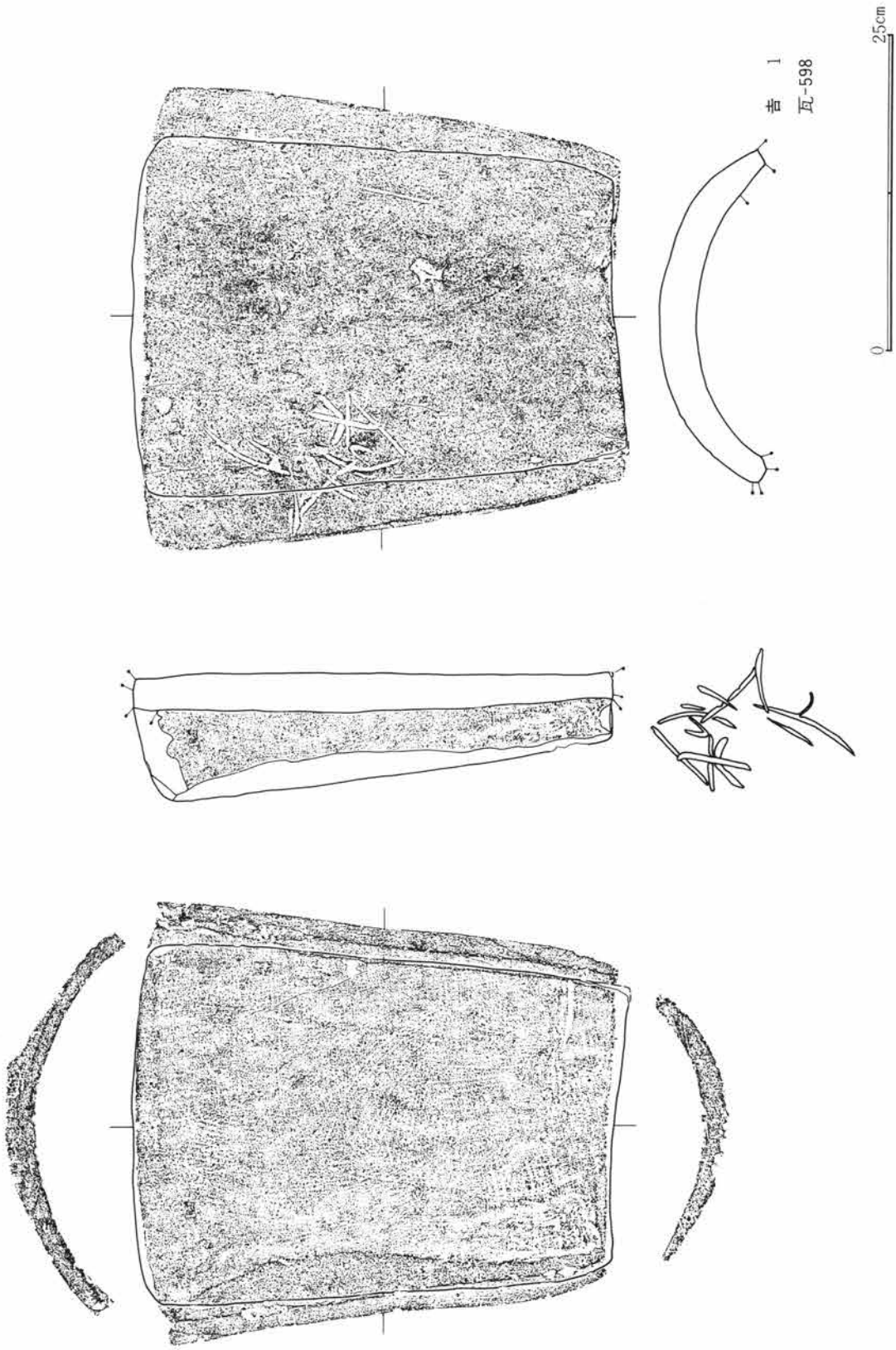
遺構名称	B区第116号住居跡		位置	15~17-B-40・41グリッド内。		残存深度	約50cm
平面形態	横長方形。	規模	2.54m×(3.00)m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-90度-南位か。
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	大半が地山VII層土を使用したと思われる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形状。43×37cm・深度-22cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	P <sub>2</sub> の土坑状の掘り込みを検出したが覆土の詳細は不詳である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から65cm。			主軸方位	北-90度-南位か。	
改築	有か。掘り方の覆土の状態は有と考えられる。		形状	舌状を呈すると考えられる。			
規模	全長(90)cm・屋外長(48)cm・屋内長(42)cm・袖部幅(120)cm・燃烧部幅(64)cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。右壁を瓦で補強する。						
煙道	未検出。		袖	顕著な状態では検出出来なかった。			
掘り方	使用形状に殆ど変わらない。						
遺物出土状態	南東隅部の傍竈坑の傍らから女瓦の完形(第196図-1)が出土している。						



第194図 B区第116号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



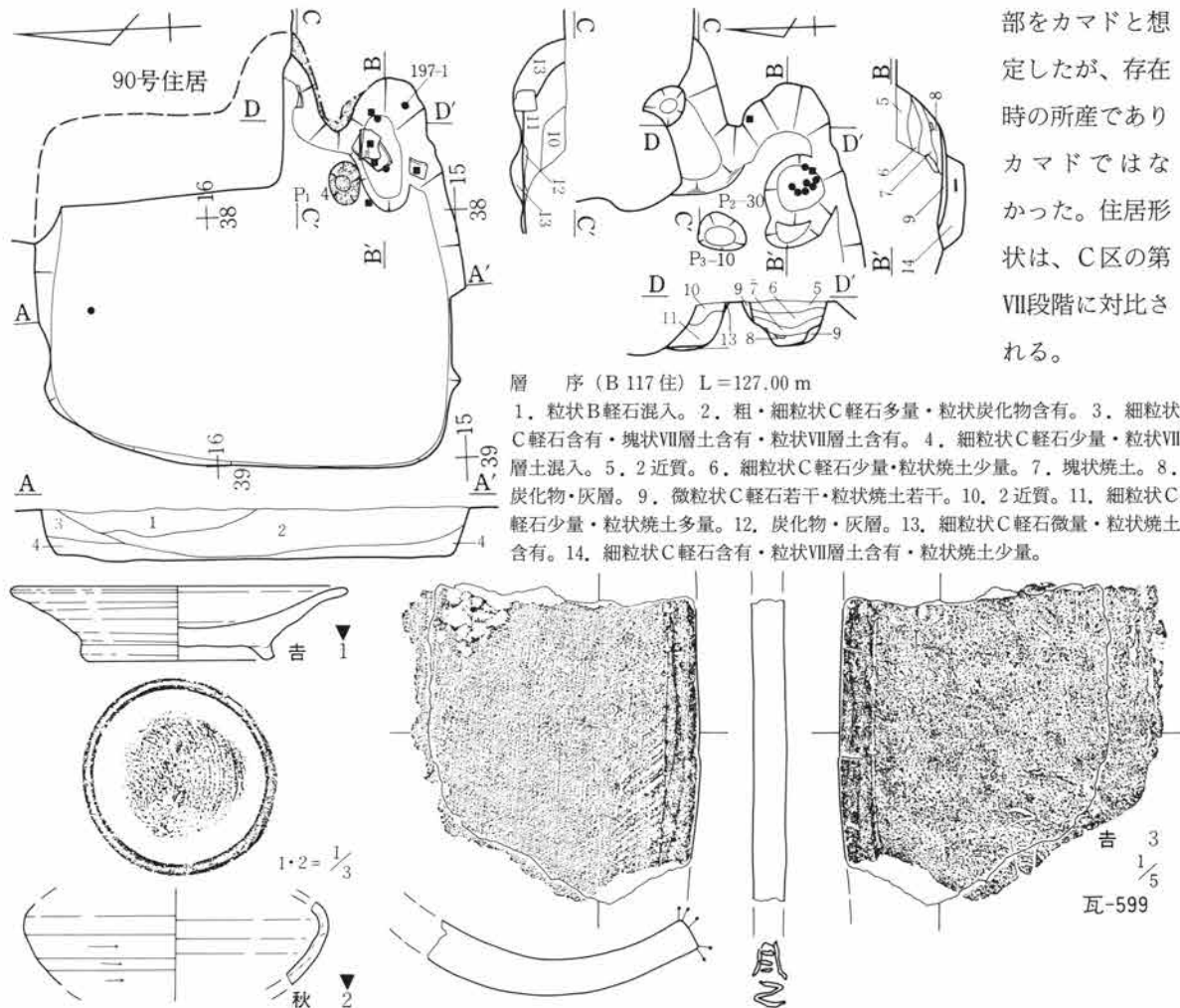
第195図 B区第116号住居跡出土遺物実測図(3)



第196図 B区第116号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	B区第117号住居跡		位置	15~17-B-38~40グリッド内。		残存深度	約41cm
平面形態	矩形状。	規模	2.77m×3.41m	構築基準辺	不詳壁	主軸方位	北-92度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・第2カマド直下。73×58cm・深度-30cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から0cm。(第2カマド)			主軸方位	北-92度-南	
改築	不分明。		形状	舌状を呈し、高位置に煙道を付設する。			
規模	全長105cm・屋外長 45cm・屋内長 60cm・袖部幅 86cm・燃烧部幅 62cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。壁を瓦で補強する。						
	袖	殆ど無い状態。					
煙道	未検出。		掘り方	殆ど無い状態。			
遺物出土状態	全体に攪著に及んでおり覆土の大半は失われている。この為詳細不詳。						

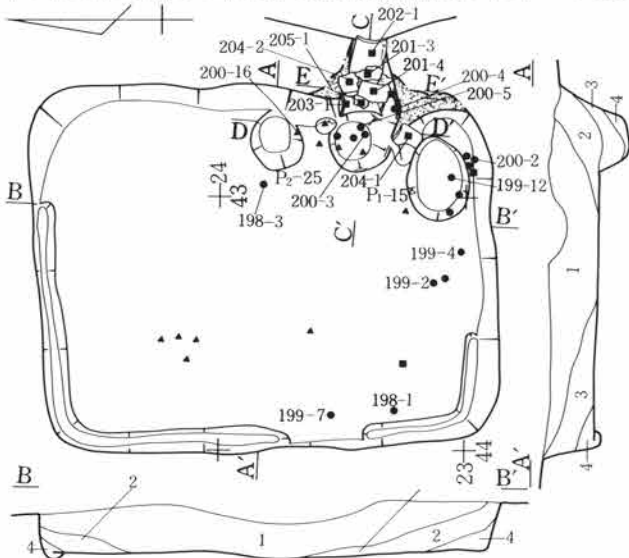
所見 当住居跡はB90住に切られている。住居跡は東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部直下には傍竈坑を備えている。この傍竈坑の直上には薄い間層と挟み上位には灰層が認められたため、同部をカマドと想定したが、存在時の所産でありカマドではなかった。住居形状は、C区の第VII段階に対比される。



第197図 B区第117号住居跡実測図・出土遺物実測図 1・2=1:3 3=1:5

遺構名称	B区第118号住居跡		位置	27~29-B43~45グリッド内。		残存深度	約42cm
平面形態	横長方形。	規模	2.9m×3.77m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-90度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山V~VII層土を使用する。一部縄文遺構の覆土も使用。			
壁溝	北・西・南西隅部で検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P1・鶏卵状。66×52cm・深度-15cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から45cm。			主軸方位	北-95度-南	
改築	無しか。		形状	燃烧部は馬蹄形状を呈する。			
規模	全長 104+ $\alpha$ cm・屋外長 43+ $\alpha$ cm・屋内長 61cm・袖部幅 90cm・燃烧部幅 34cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦により補強されている。						
焚口は円形状に落ち込む。			袖	右袖は顕著であるが、左袖は礫だけである。			
煙道	女瓦を用い天井材とする。		掘り方	左壁瓦の裾え方が認められる。			
遺物出土状態	傍竈坑P <sub>1</sub> 内・周辺での出力がやや多く、周辺部で出土遺物は床面直上が主体。						

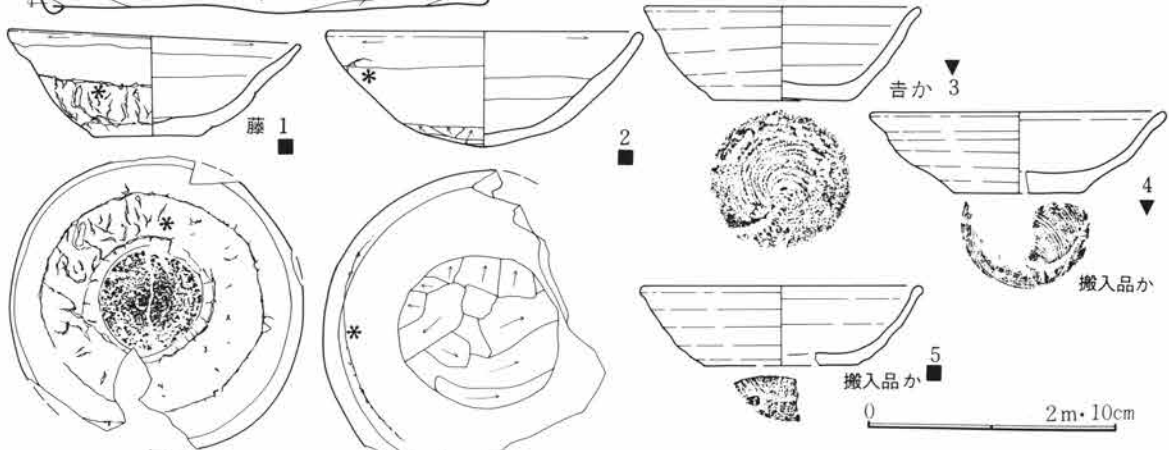
所見 当住居跡はB123・124住を切り構築している。住居跡は均整のとれた横長方形を呈し、北・西・南壁下には壁溝が認められた。東壁南東隅部寄りにカマドを具備し、南東隅部下には傍竈坑を備えている。カマドは煙道部が長く屋外に向かい突出している。傍竈坑は楕円形状を呈し広く大きい。又、カマドの北側東壁直下で検出されたP<sub>2</sub>の性格の特定は出来かねる。住居形状はC区の第V段階で、遺物もC区の第VI段階の様相が認められる。



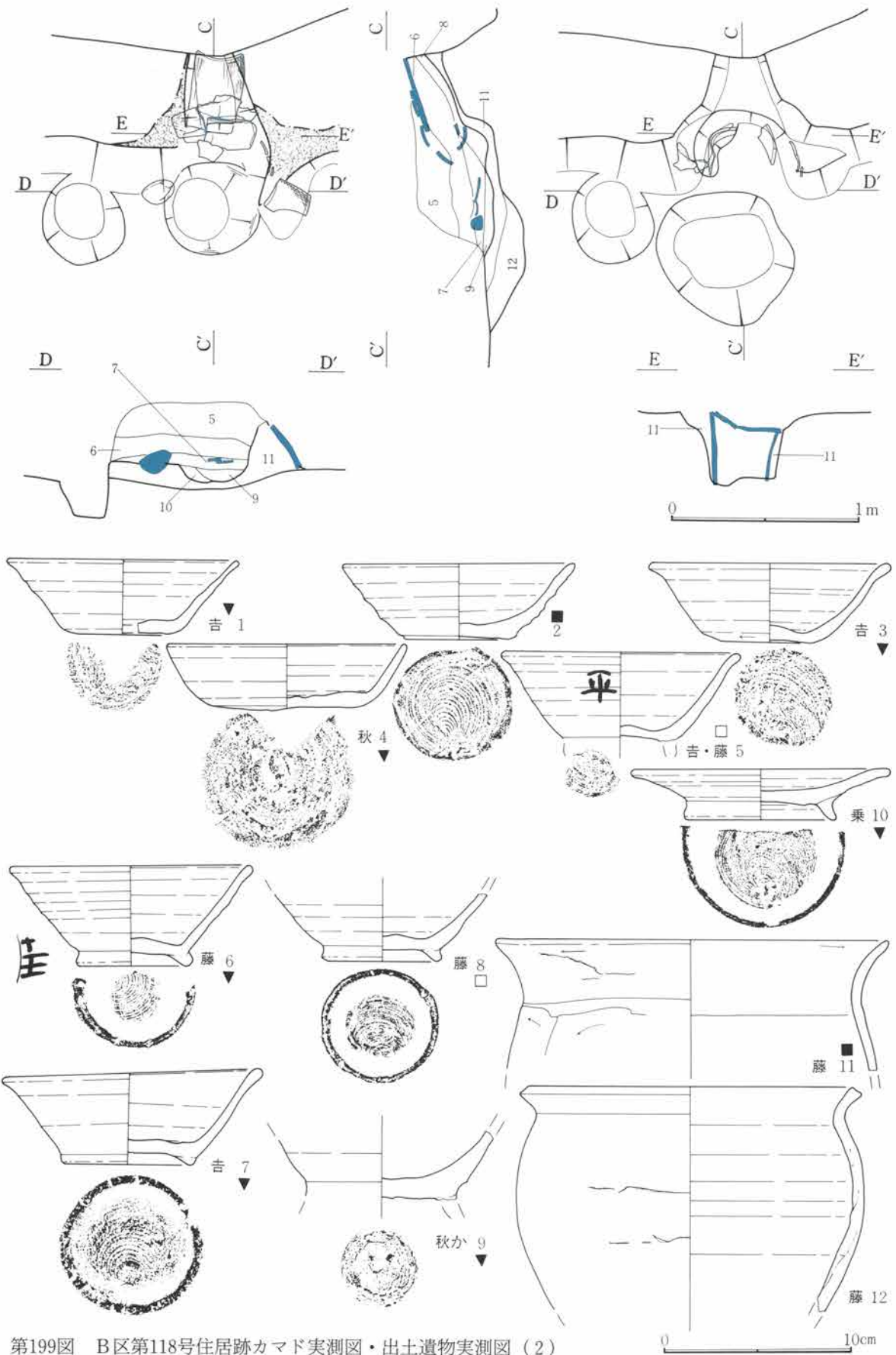
カマドは煙道部が長く屋外に向かい突出している。傍竈坑は楕円形状を呈し広く大きい。又、カマドの北側東壁直下で検出されたP<sub>2</sub>の性格の特定は出来かねる。住居形状はC区の第V段階で、遺物もC区の第VI段階の様相が認められる。

層序 (B 118住) L=127.20 m

1. 粗・細粒状C軽石多量・粒状VII層土少量。
2. 粒状C軽石混入・塊状VII層土多量。
3. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土微量。
4. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土多量。
5. 1近質。
6. 粒状C軽石多量・塊状VII層土微量。
7. 細粒状C軽石少量塊状焼土含有・粒状焼土多量・粒状炭化物含有。
8. 灰・炭化物・焼土の混土層。
9. 炭化物・灰層。
10. 塊状焼土・灰の混土層。
11. 微粒状C軽石少量・微粒状VII層土少量。

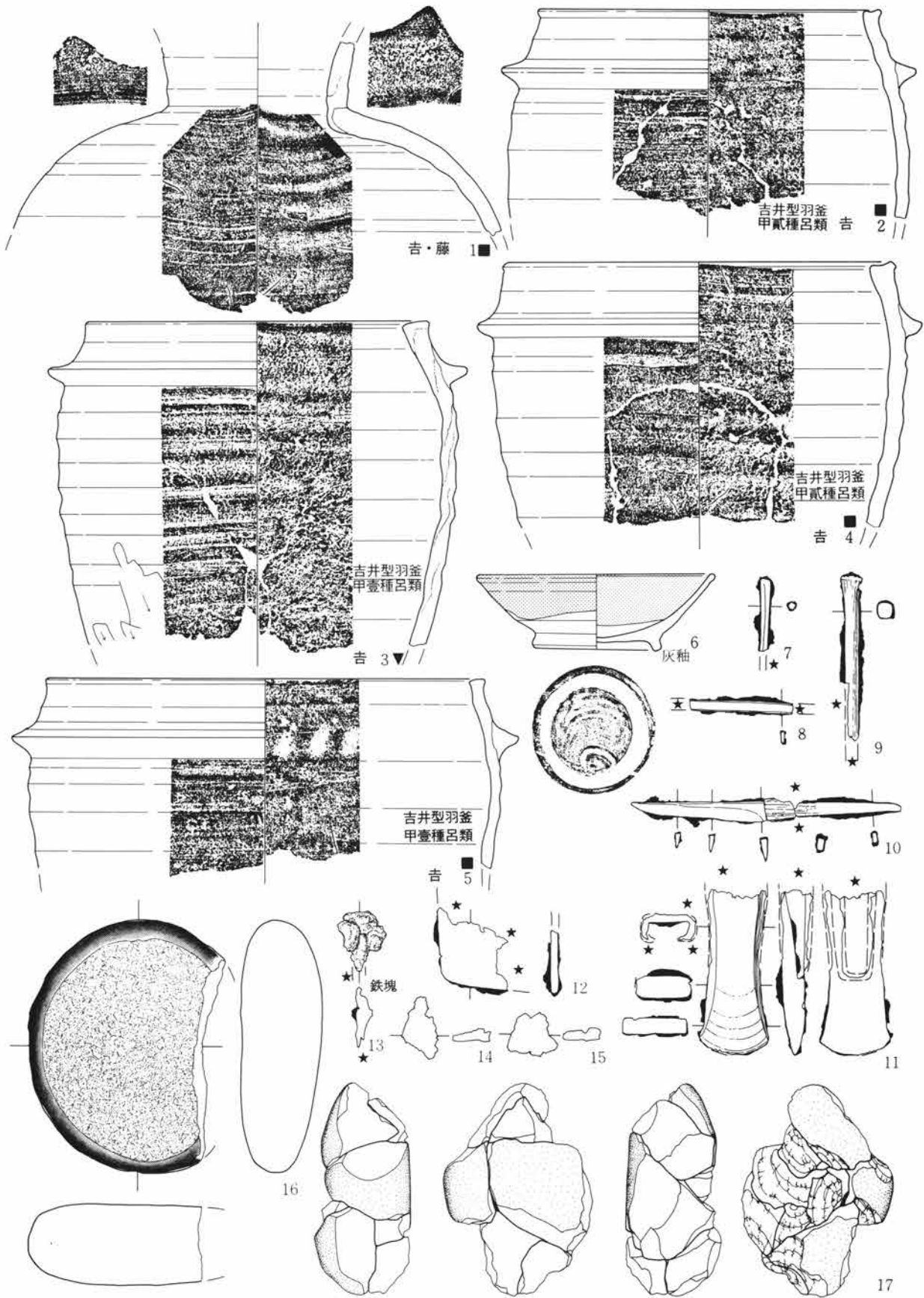


第198図 B区第118号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

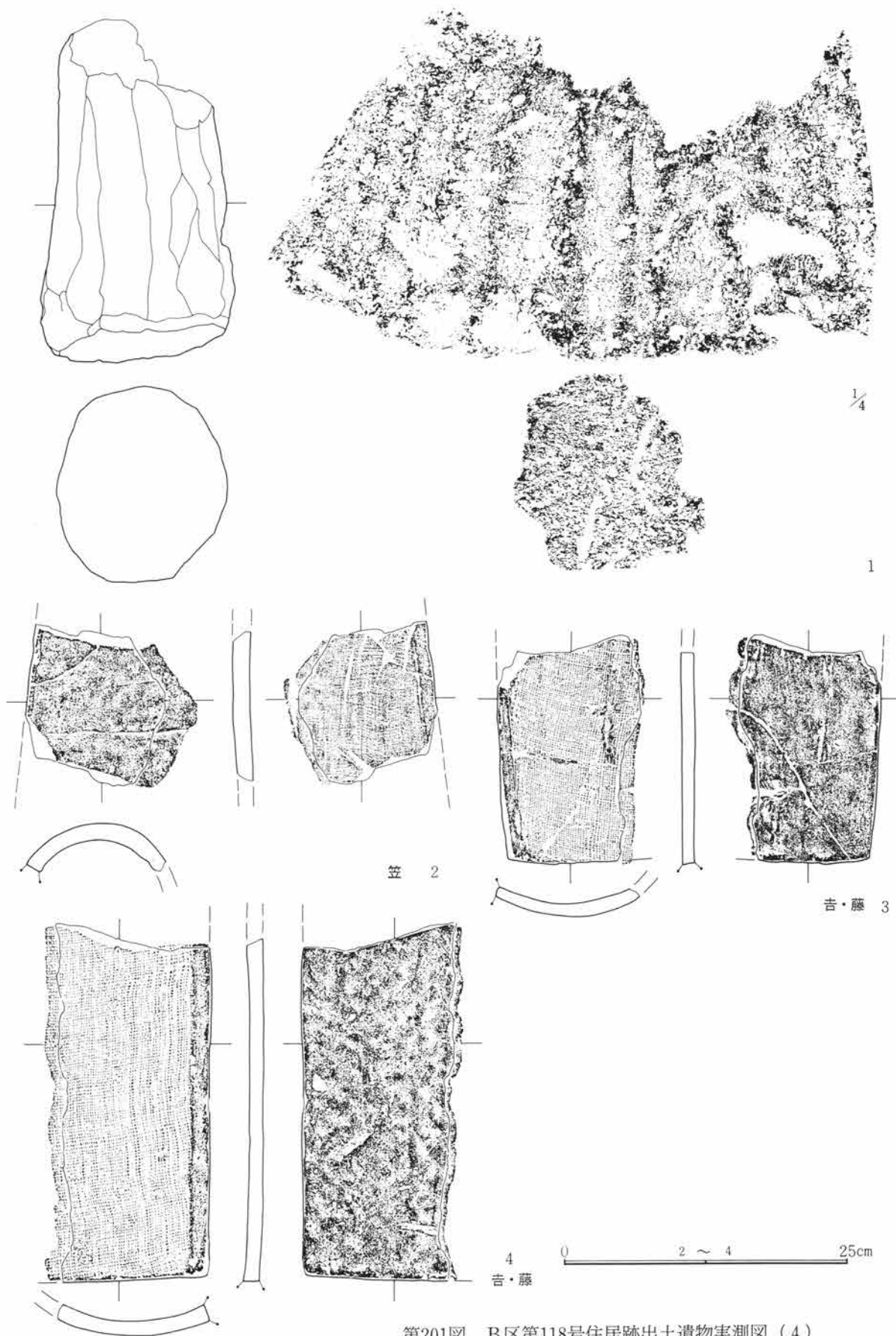


第199図 B区第118号住居跡カマド実測図・出土遺物実測図(2)

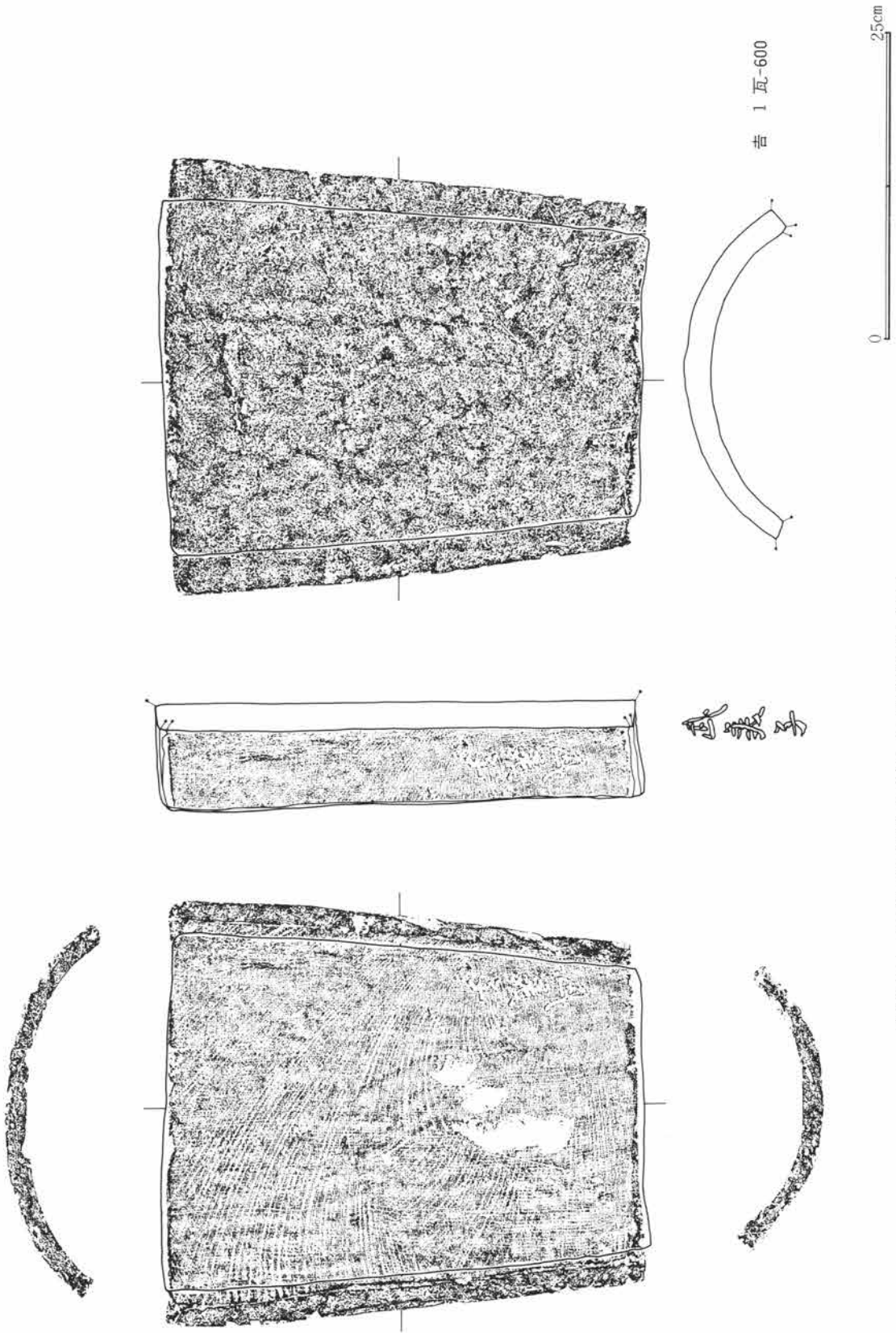




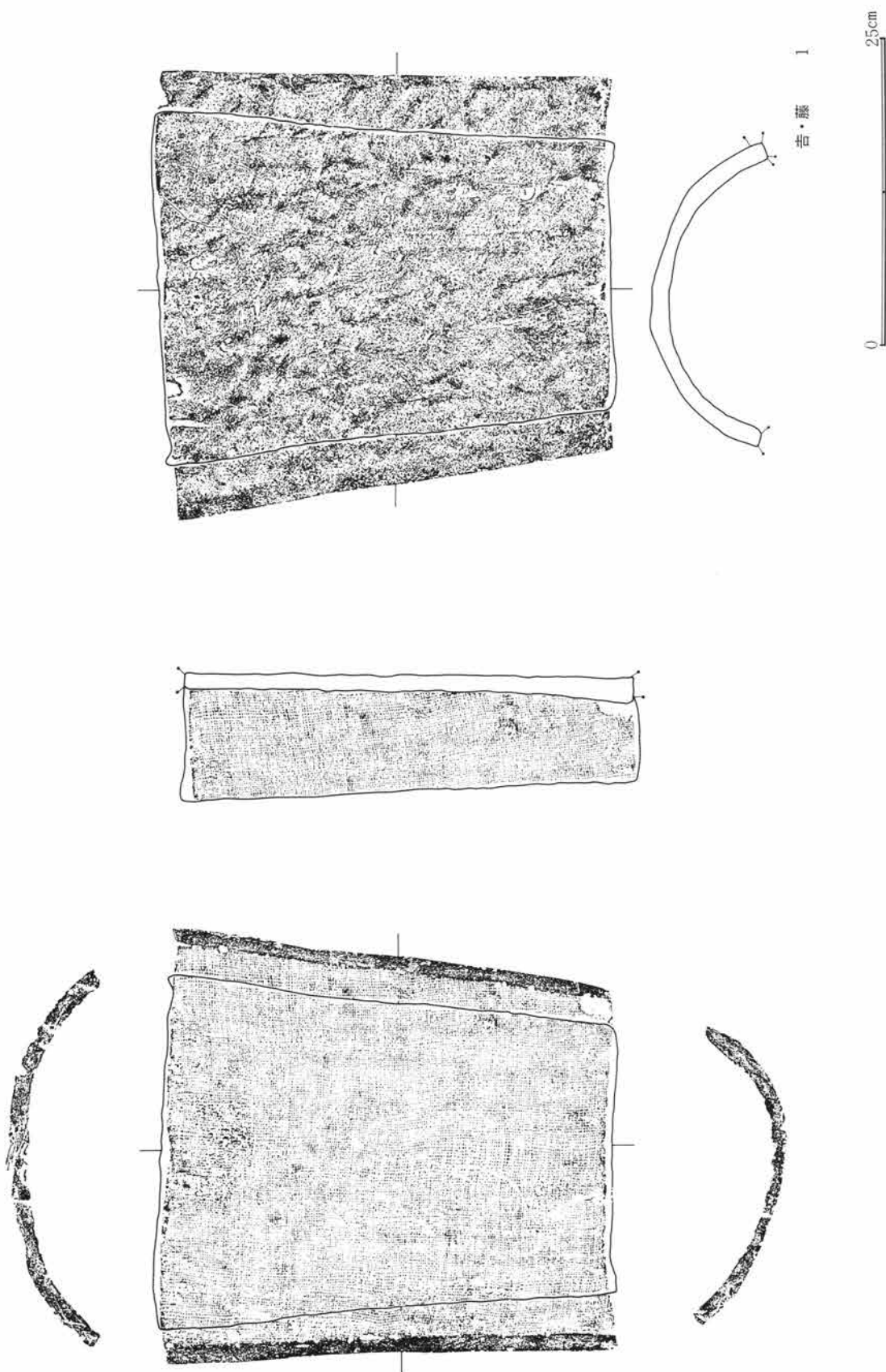
第200図 B区第118号住居跡出土遺物実測図(3)



第201図 B区第118号住居跡出土遺物実測図(4)

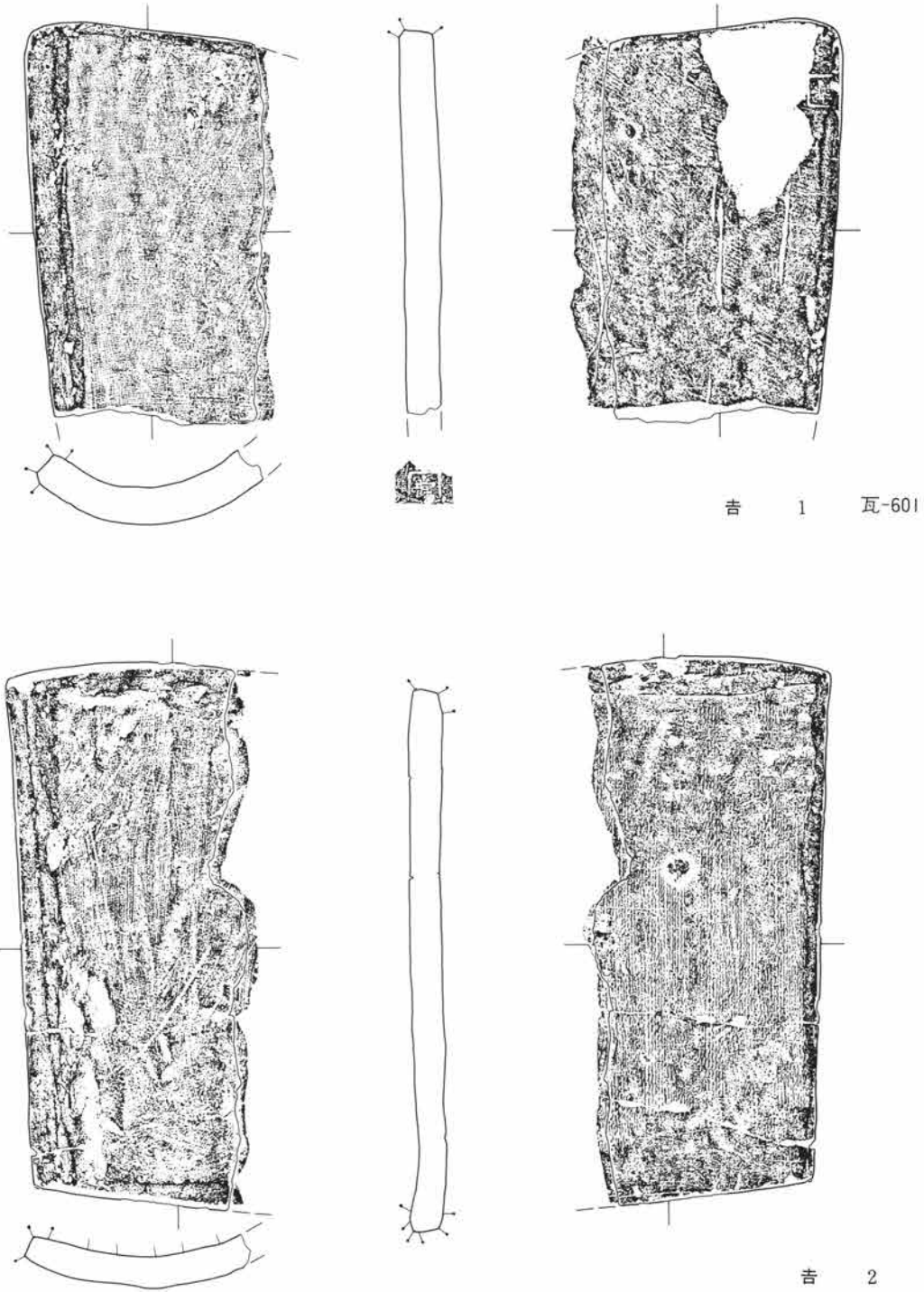


第202図 B区第118号住居跡出土遺物実測図(5)



第203図 B区第118号住居跡出土遺物実測図(6)

第3節 検出された住居跡について

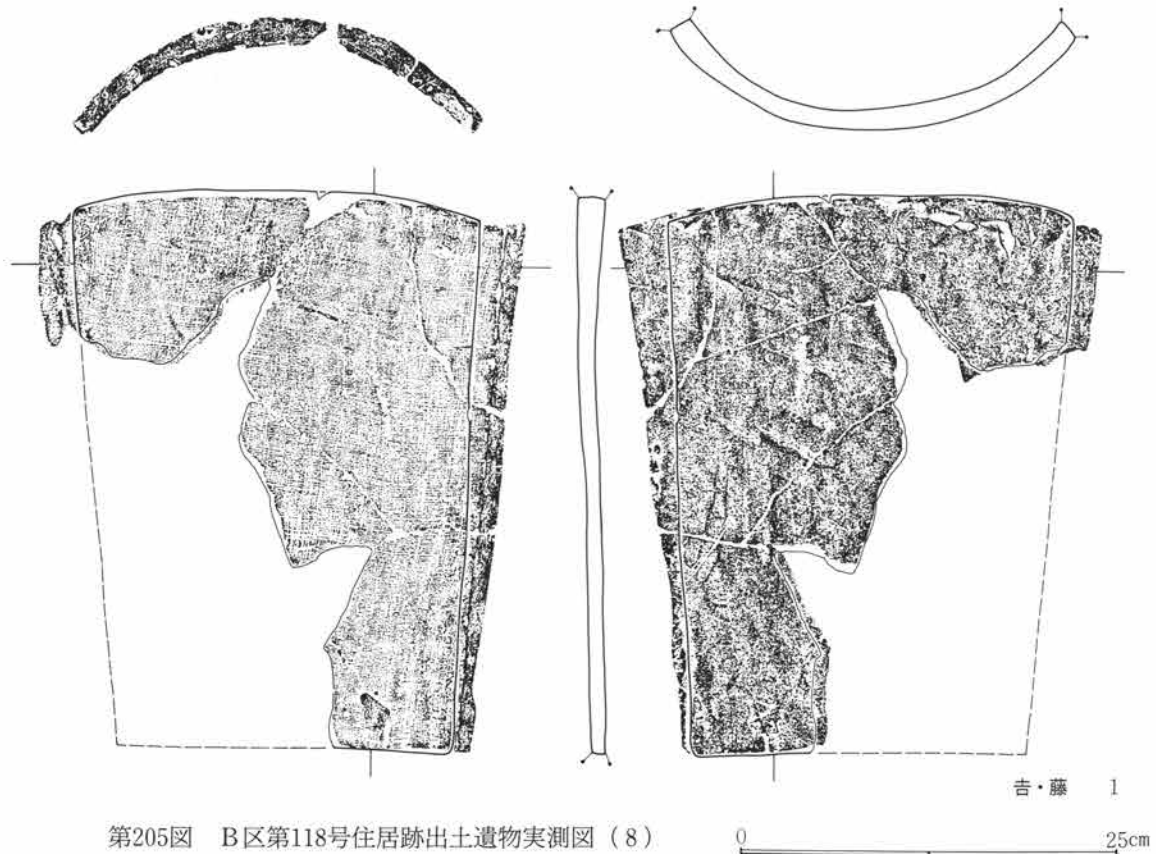


吉 1 瓦-601

吉 2

0 25cm

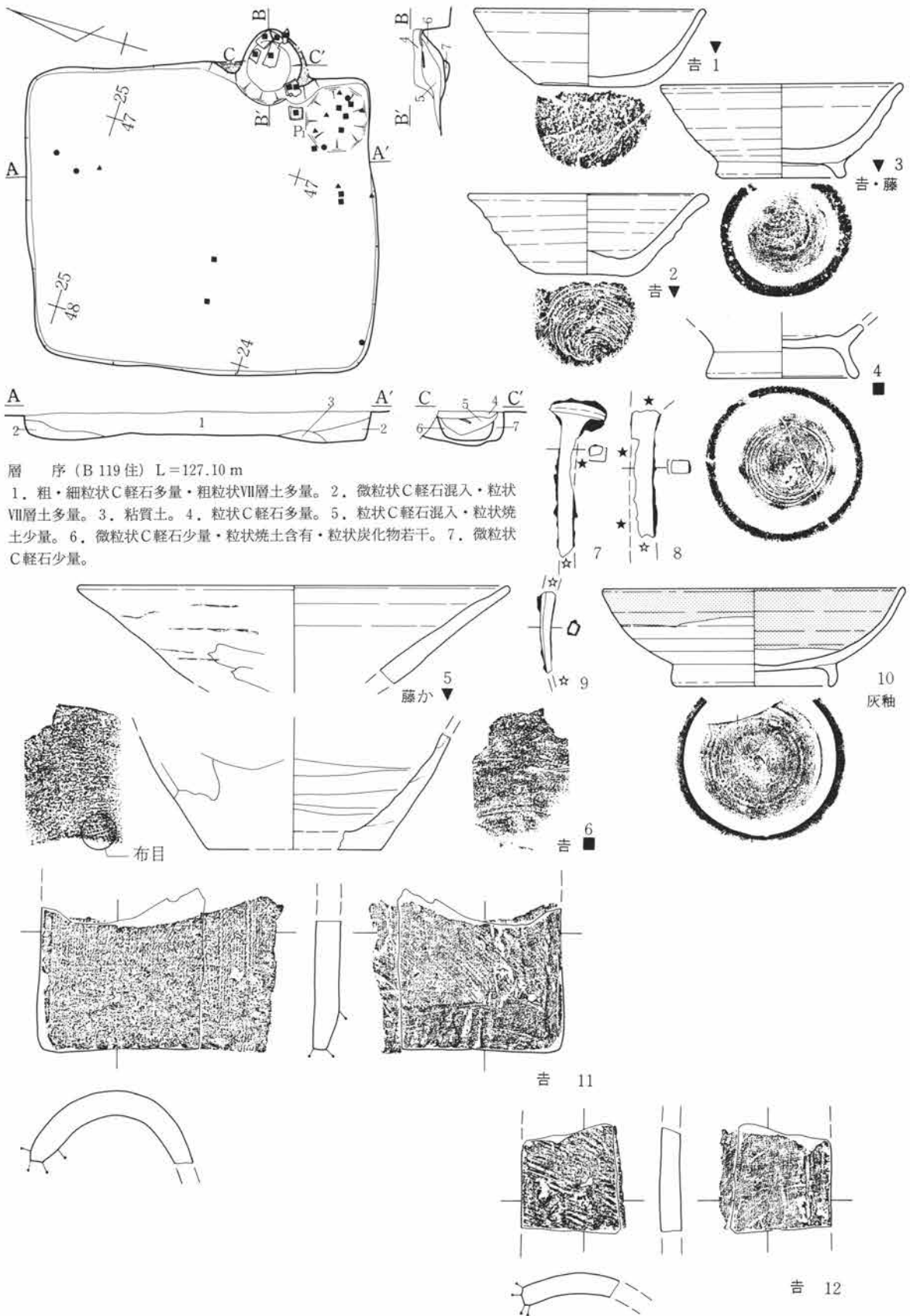
第204図 B区第118号住居跡出土遺物実測図(7)



第205図 B区第118号住居跡出土遺物実測図(8)

遺構名称	B区第119号住居跡	位置	47~49-B-24~26グリッド内。			残存深度	約27cm
平面形態	矩形。	規模	3.20m×3.65m	構築基準辺	壁	主軸方位	北-度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	大半がVII層土及び一部B129・124住の覆土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・径60cm程か詳細不明。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北壁に浅い掘り込み認められる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から53cm。			主軸方位	北-72度-南位か	
改築	無か。掘り方内で焼土が確認されていない。			形状	馬蹄形状を呈する。		
規模	全長 77+αcm・屋外長 39+αcm・屋内長 38cm・袖部幅125cm・燃烧部幅 63cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦により補強されている。						
焚口部底面は皿状に窪んでいる。	袖	左袖は瘤状を呈する。					
煙道	未検出。		掘り方	両袖が作られているが詳細不明な点が多い。			
遺物出土状態	南東隅部に瓦類が集している。出土層位は床面直上層より下位が主体である。						

所見 当住居跡はB120・124・125住を切り構築している。形状は均整のとれた矩形を呈し、南壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部には浅い皿状の傍竈坑を具備している。カマドは、燃烧部幅が広く、奥壁部には瓦を用いて煙道の立ち上がりとしている。右袖は長方体に成形した地山砂岩質の補強材を用いている。傍竈坑には、床面同位面（覆土上面）には多くの瓦が出土している。住居形状はC区の第VI段階に対比され、遺物様相は、C区の第VII段階の住居の様相に類似している。



層 序 (B 119 住) L=127.10 m

1. 粗・細粒状C軽石多量・粗粒状VII層土多量。2. 微粒状C軽石混入・粒状VII層土多量。3. 粘質土。4. 粒状C軽石多量。5. 粒状C軽石混入・粒状焼土少量。6. 微粒状C軽石少量・粒状焼土含有・粒状炭化物若干。7. 微粒状C軽石少量。

布目

藤か

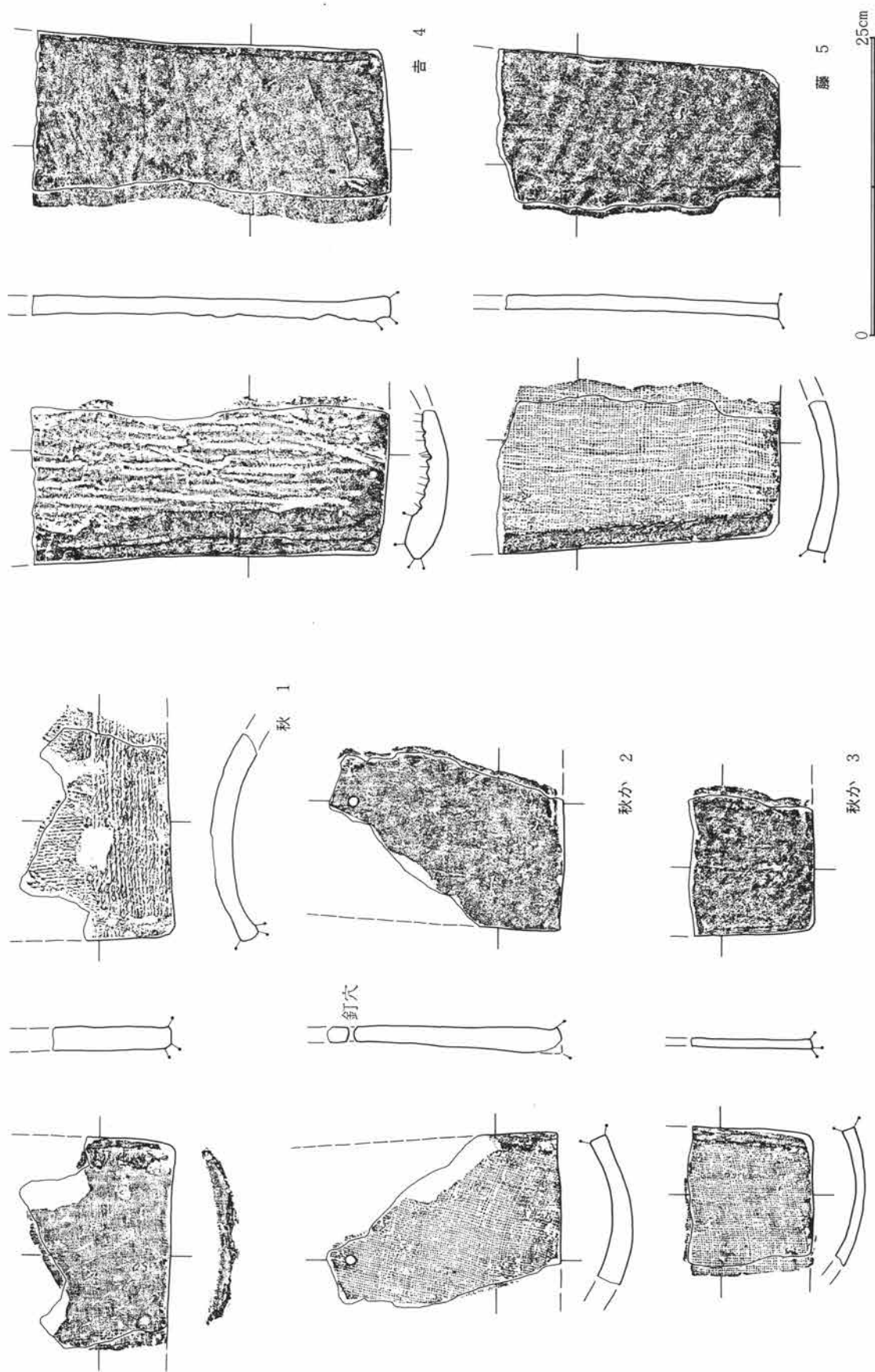
灰釉

吉 11

吉 12

第206図 B区第119号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

0 1~10 10cm 11-12 25cm

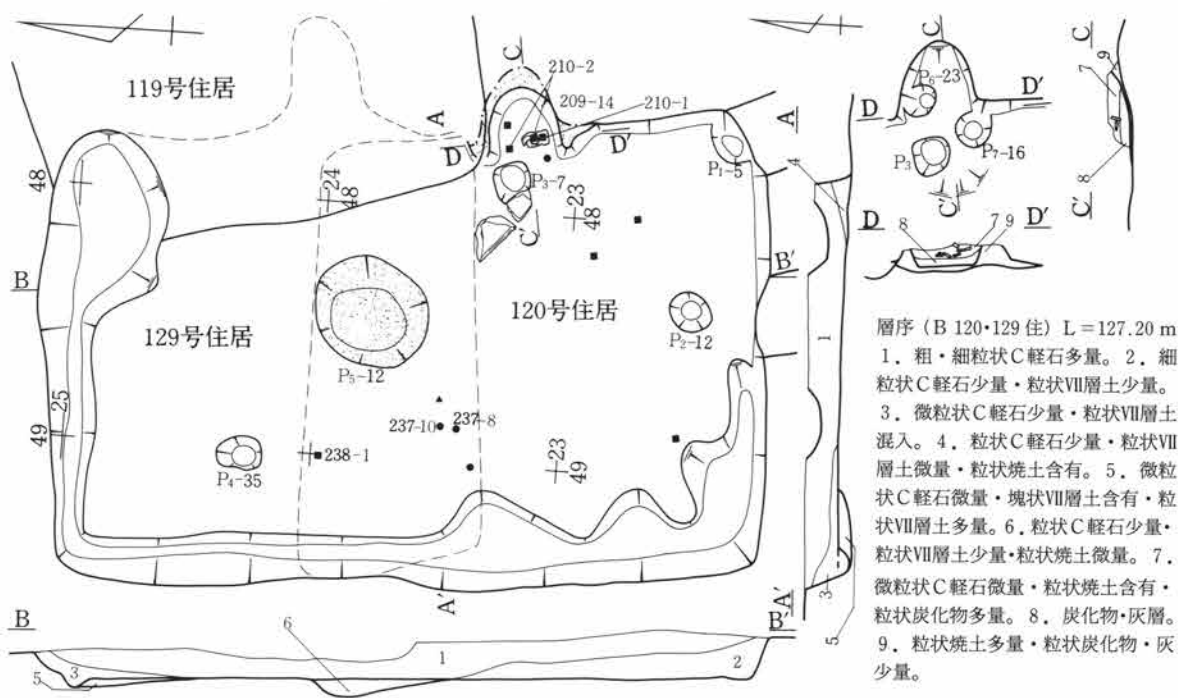


第207図 B区第119号住居跡出土遺物実測図(2)



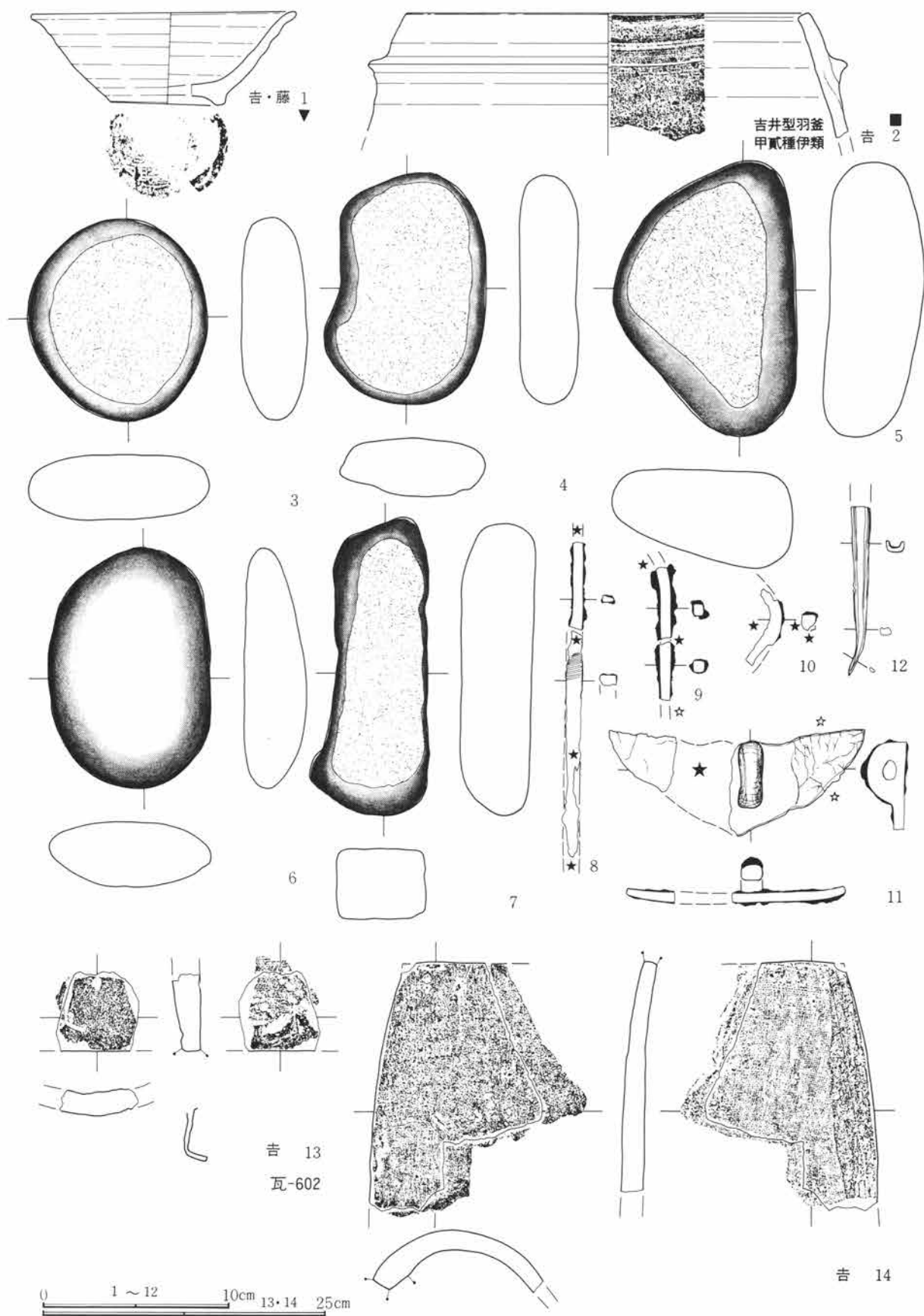
遺構名称	B区第 <sup>120</sup> / <sub>129</sub> 号住居跡		位置	48～50—B—23～26グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	横長方形。	規模	3.65m×5.93m	構築基準辺	不明	主軸方位	北—86度—南位か
壁	斜位～斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用する部分が大半である。			
壁溝	北壁下・西壁下・南西隅部。幅23cm。		傍竈坑・貯蔵穴	不明（未検出。）			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	壁溝と土坑状の掘り込みP <sub>5</sub> を検出しのみである。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から127cm。			主軸方位	北—86度—南	
改築	有。掘り方内の焼土が多い。			形状	馬蹄形状を呈する。		
規模	全長110cm・屋外長 30cm・屋内長 80cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦により補強されている。						
P <sub>5</sub> を検出したが用途等は不明。		袖	左袖はB119住に切られ大半を失っている。				
煙道	未検出。		掘り方	全体的に舌状を呈する感がある。			
遺物出土状態	全体に遺物の出土量が少ない。						

所見 (B120・129住) 両住居跡は、調査段階では2軒の重複と考えたが、長軸の土層断面では両者の何れかの立ち上がりも認められなかった。そして、西壁下で検出された壁溝も二軒の重複を想定するには無理があると判断され、B119住の調査時点でB129住のカマドの痕跡が認められなかったことから判断して1軒の住居跡と結論し、住居番号の若い120をもって当住居跡の称号とした。このことにより、当住は南北軸が長い大形の住居跡であることが明らかとなった。住居跡は東壁中央より南東隅部寄りにカマドを具備し、南東隅部には小規模の傍竈坑状のピットを備えている。カマドは、住居規模に比較して小さく、C区第VI段階のカマドに対比される。P<sub>5</sub>は、当住居跡が切るB180住の傍竈坑状の施設と考えられる。そして、P<sub>2</sub>は入口施設に係わる所産と想定される。住居形状では具体的に対比されない。



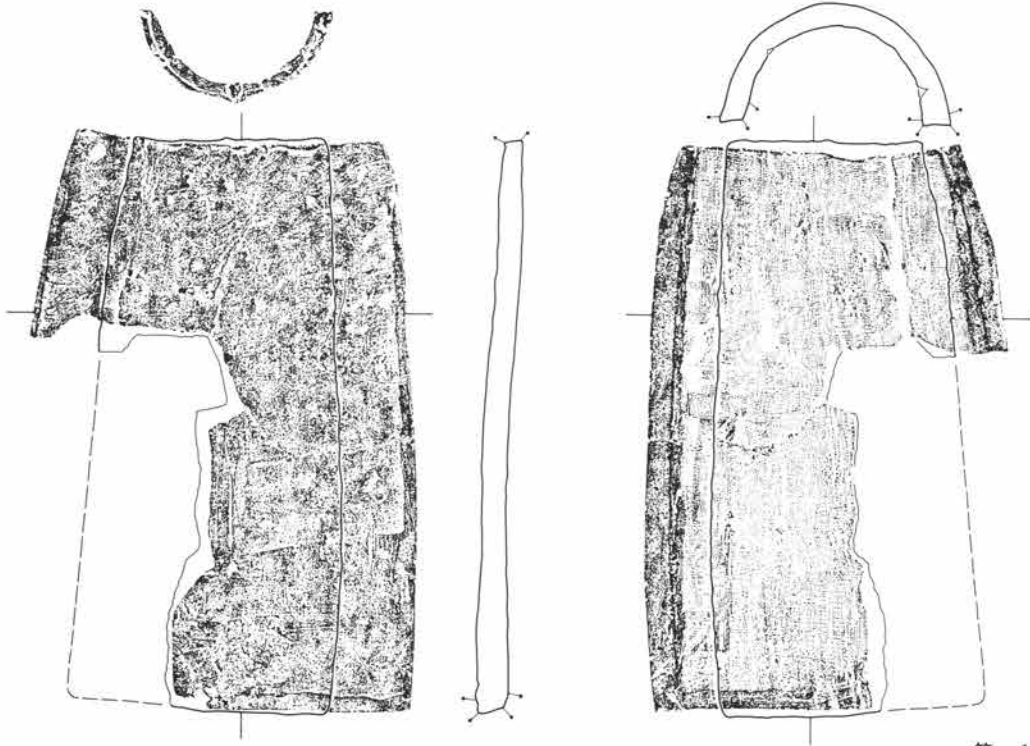
第208図 B区第120号住居跡実測図

0 2m

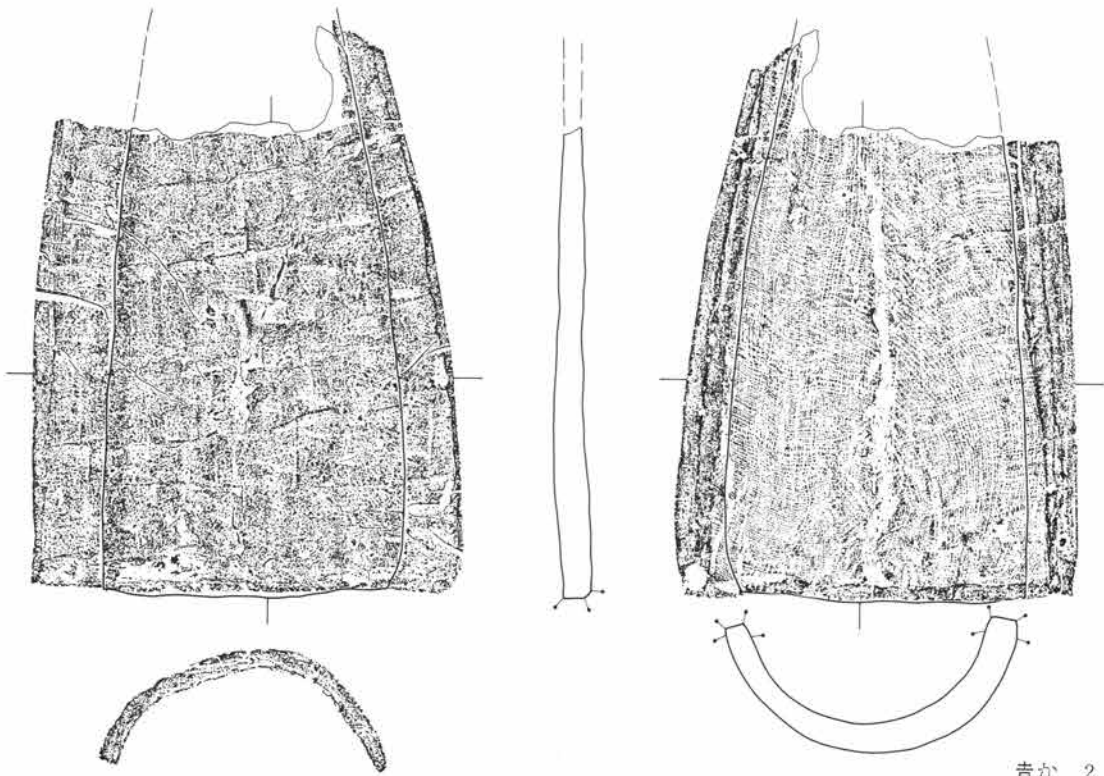


第209図 B区第120号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について



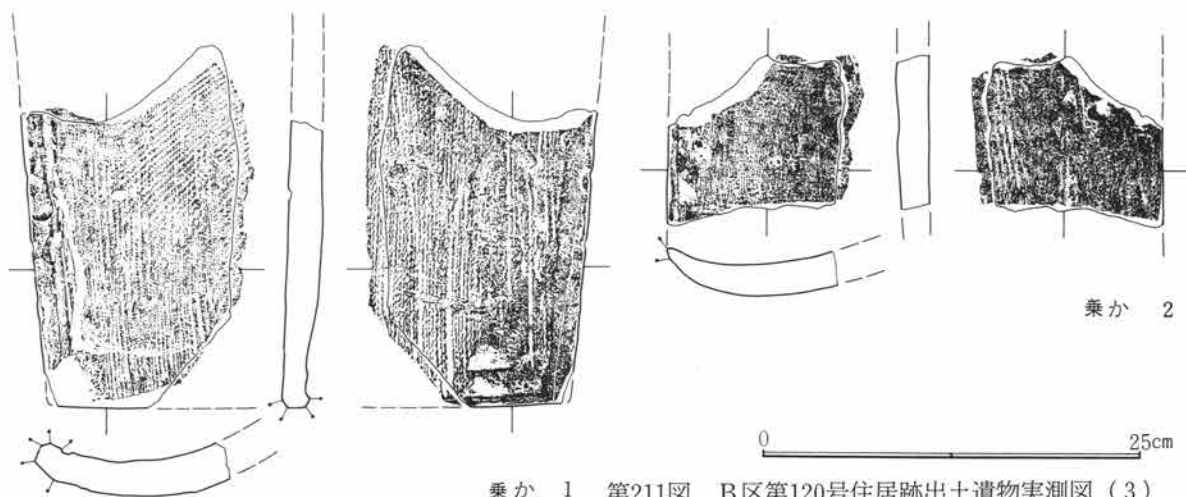
笠 1



吉か 2

0 25cm

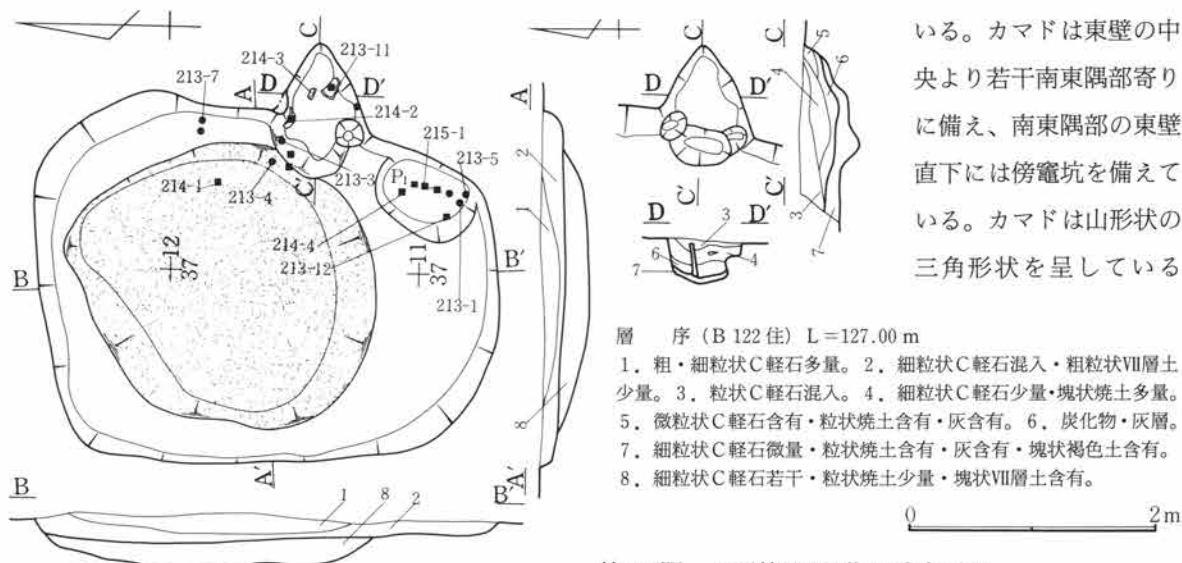
第210図 B区第120号住居跡出土遺物実測図(2)



乗か 1 第211図 B区第120号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第122号住居跡		位置	37・38-B-11~13グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	横長方形基調	規模	2.91m×3.76m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位に立ち上がる。		床面	中央部が皿状に造床がされている。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・85×55cm・深度-9cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	中央部が皿状に掘り窪められている。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から92cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内の焼土・灰が多い。		形状	三角形状を呈する。支脚(瓦)が検出されている。			
規模	全長106cm・屋外長 60cm・屋内長 46cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 59cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。左壁は瓦により補強されている。石壁は縄文期の石器を壁にする。						
	袖	左袖は瓦で補強する。右袖は補強材が抜かれている。					
煙道	未検出。		掘り方	左袖補強材の据え方が検出されている。			
遺物出土状態	傍竈坑内にやや集中するが、全体的に遺物量が少ない。						

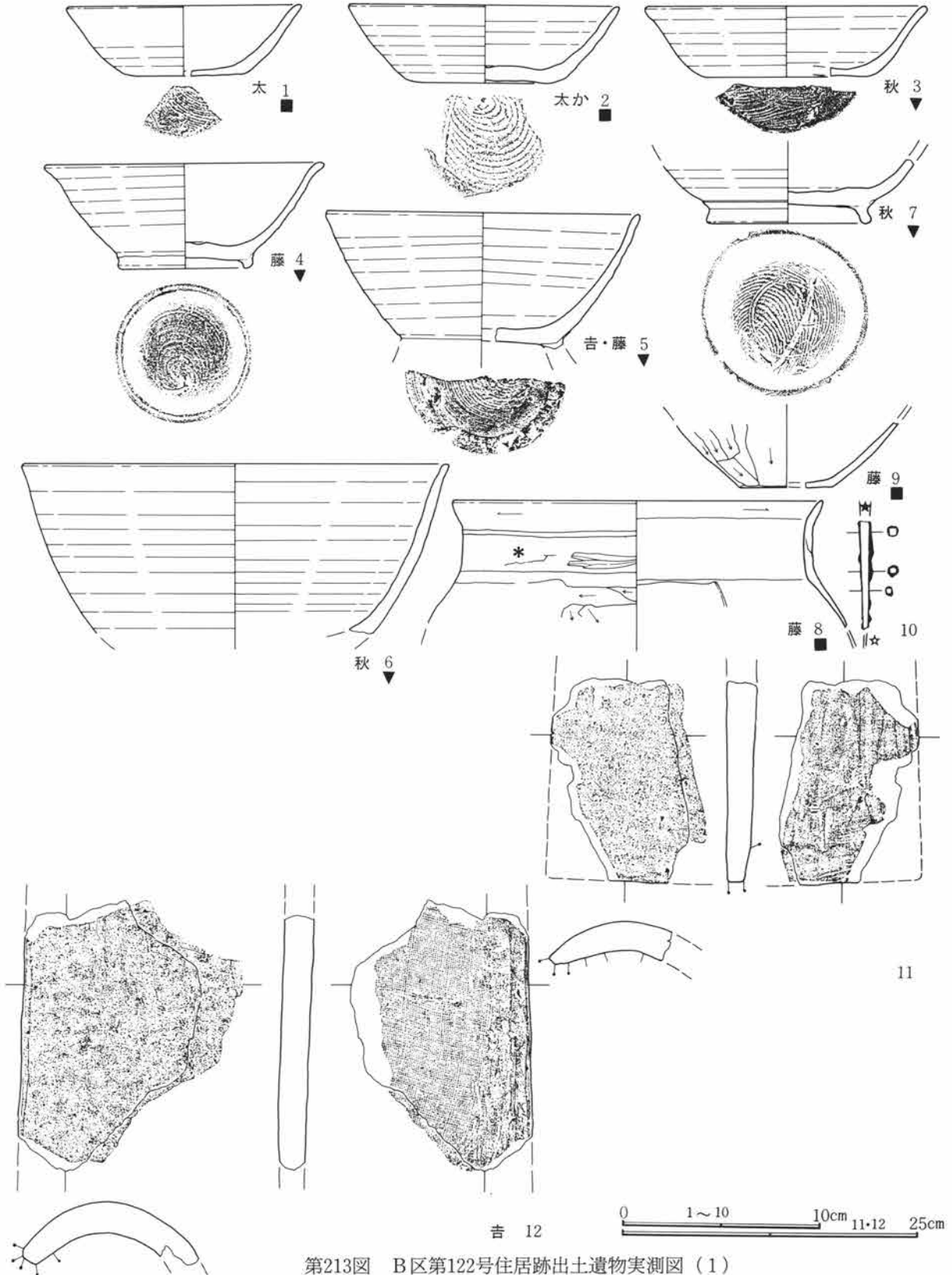
所見 当住居跡は切り関係のない単独住居である。住居跡の形状は全体的に丸味の強い横長方形を呈している。カマドは東壁の中央より若干南東隅部寄りに備え、南東隅部の東壁直下には傍竈坑を備えている。カマドは山形状の三角形状を呈している



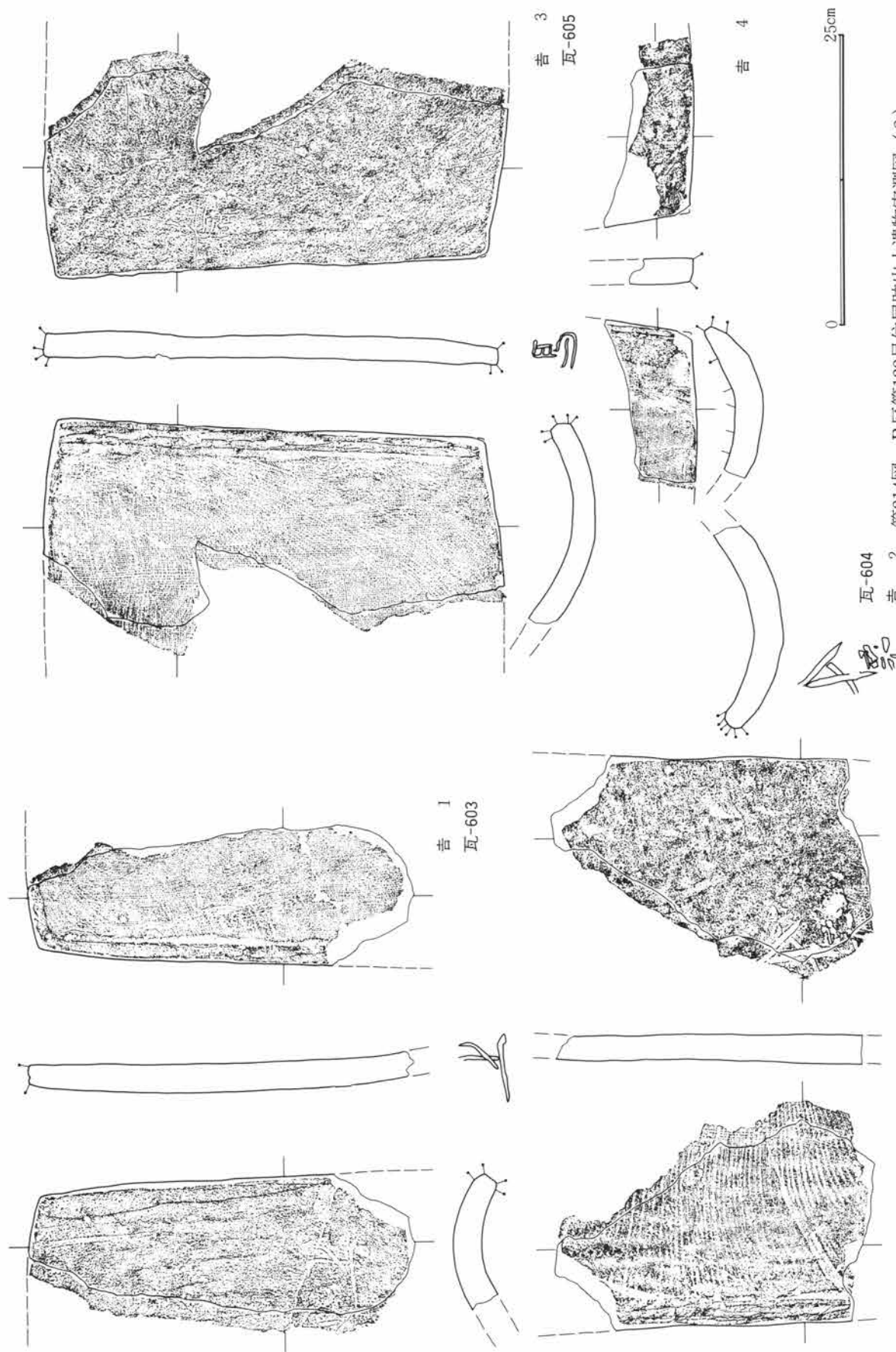
第212図 B区第122号住居跡実測図

第3節 検出された住居跡について

が、燃烧部奥壁部底面は、煙道の立ち上がりを意識し小さく突出する様な状態に作られている。傍竈坑は住居跡の長軸に沿った状態で楕円形を呈しており、平面図中の瓦は、住居跡の覆土内からの出土である。住居の掘り方は大きな土坑状を呈している。住居形状はC区の第IV乃至V段階に対比される。

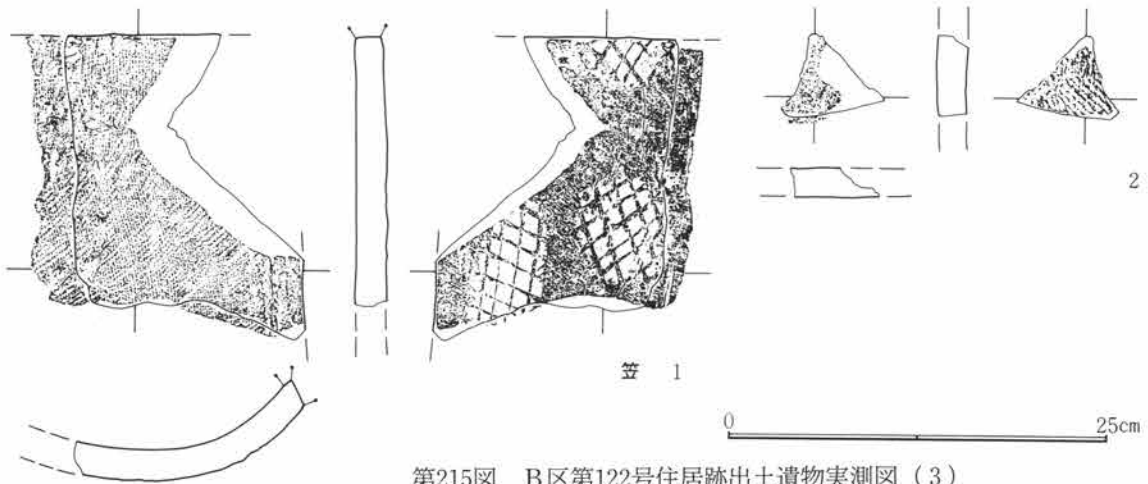


第213図 B区第122号住居跡出土遺物実測図(1)



第214図 B区第122号住居跡出土遺物実測図(2)

第3節 検出された住居跡について

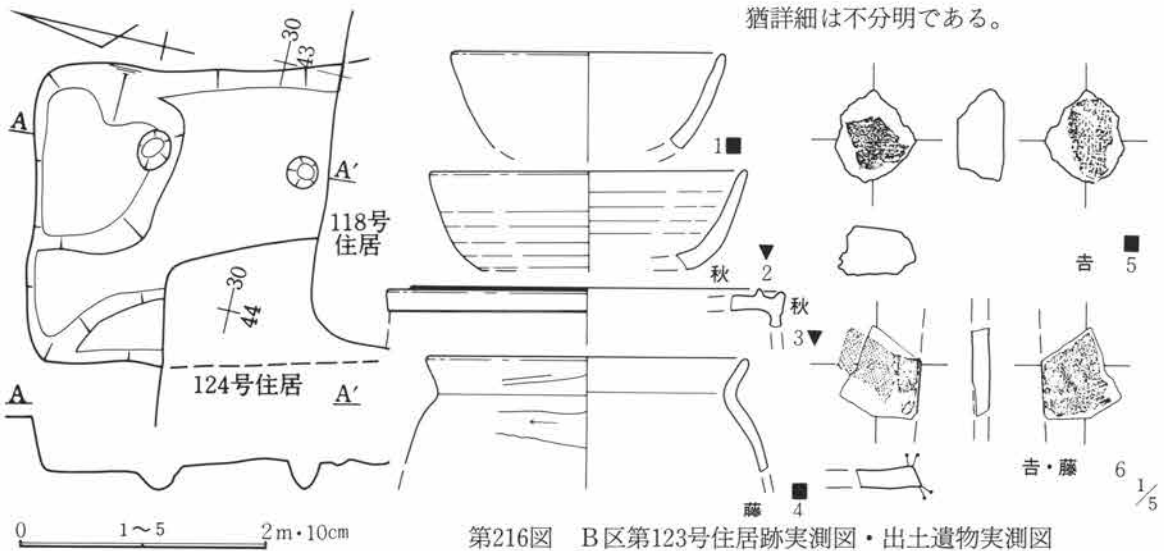


第215図 B区第122号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第123号住居跡	位置	43~45-B-30・31グリッド内。			残存深度	約42cm
平面形態	横長方形。	規模	2.36m×3.50m+αm	構築基準辺	不詳	主軸方位	北-76度-南位か
B118・124号住の破壊により詳細不明。							

所見 当住居跡はB118住に南側を切られ失っており、B124住を切っている。尚、B124住との重複部は調査時の不手際により失っている。このB118住の破壊によりカマドも失なったものと考えられ、残存部の状態からは詳細な状況は得られなかった。住居図は掘り方の状態を平面図とした。出土遺物は小破片が多かった為、

猶詳細は不明である。



第216図 B区第123号住居跡実測図・出土遺物実測図

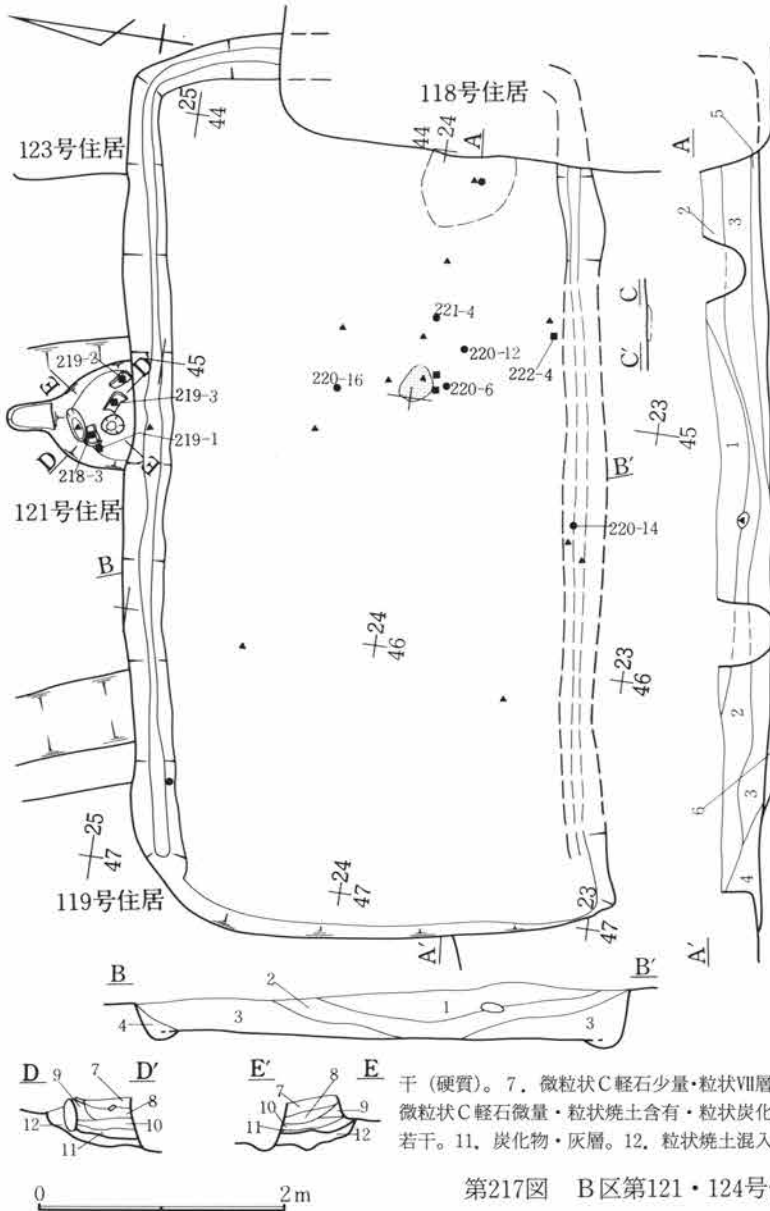
遺構名称	B区第121号住居跡	位置	46-B-26グリッド内。			残存深度	約32cm
B124号住の破壊により詳細不明。							

遺構名称	B区第124号住居跡	位置	44~48-B-23~26グリッド内。			残存深度	約50cm
平面形態	縦長方形。	規模	7.20m×3.84m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-80度-南位か
B118・119号住の破壊及び近世の耕作による攪乱更に調査の不手際により詳細不明。							

所見 (B121住) 当住居跡はカマドのみが検出されている。カマドは北向きで、検出からすればC区の第IX乃至X段階の住居のそれに対比される。出土遺物からは時期の特定は不能である。

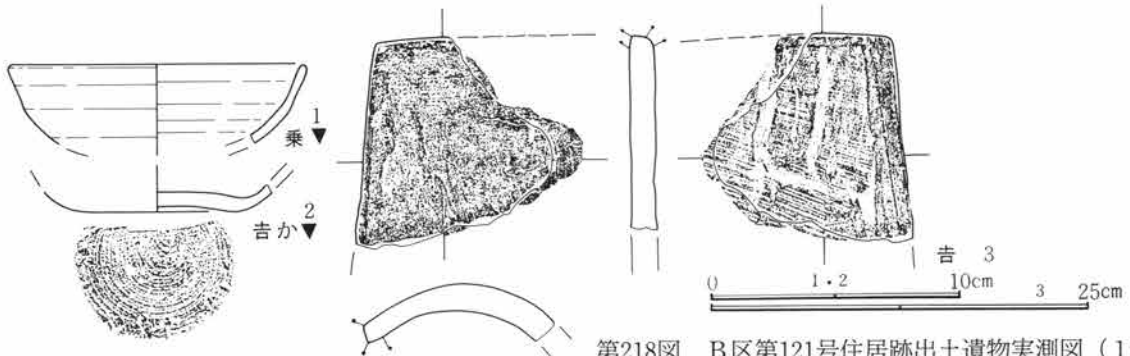
所見 (B124住) 当住居跡は前述のB118・123住に切られており、B118住は当住居跡のカマドも破壊している。破壊されたカマドは床面でB118住の西壁際の部分に灰と炭化物の散布が認められており、この部分の東壁側延長部にカマドが存在したと考えられる。南壁側ではB125住を切っているが、調査時は、耕作の乱が非常に著しかった為平面での新旧関係の確認は不能であった。この為、新旧関係は土層断面により行ったが

これもやはり乱により判然としなかったが、B125住の覆土を床面としていた為に明らかになった。又、同部では壁溝の存在は明らかにならなかったが、西壁以外では壁溝が認められている。住居跡の規模はB区区内では最大の1群に含まれている特殊な住居跡である。この大形住居は当住居周辺に集中する傾向が看取され、ここに、特殊な状況が内在すると考えられる。そして、これらが直接的・間接的に切り合うことから大形住居は単数で存在したことが考えられる。このことは、当該部が時間の経過の中で世代を継続した可能性が示唆される。

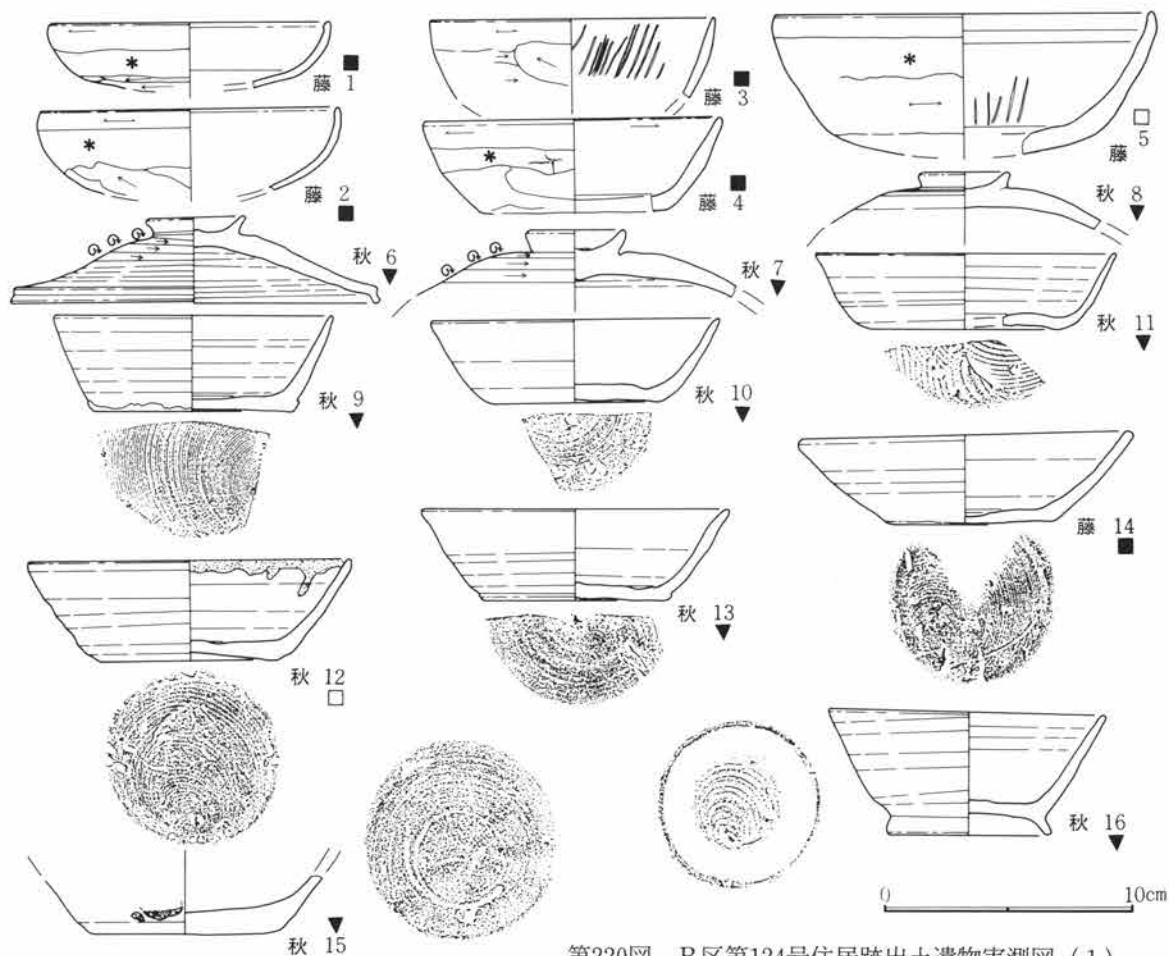
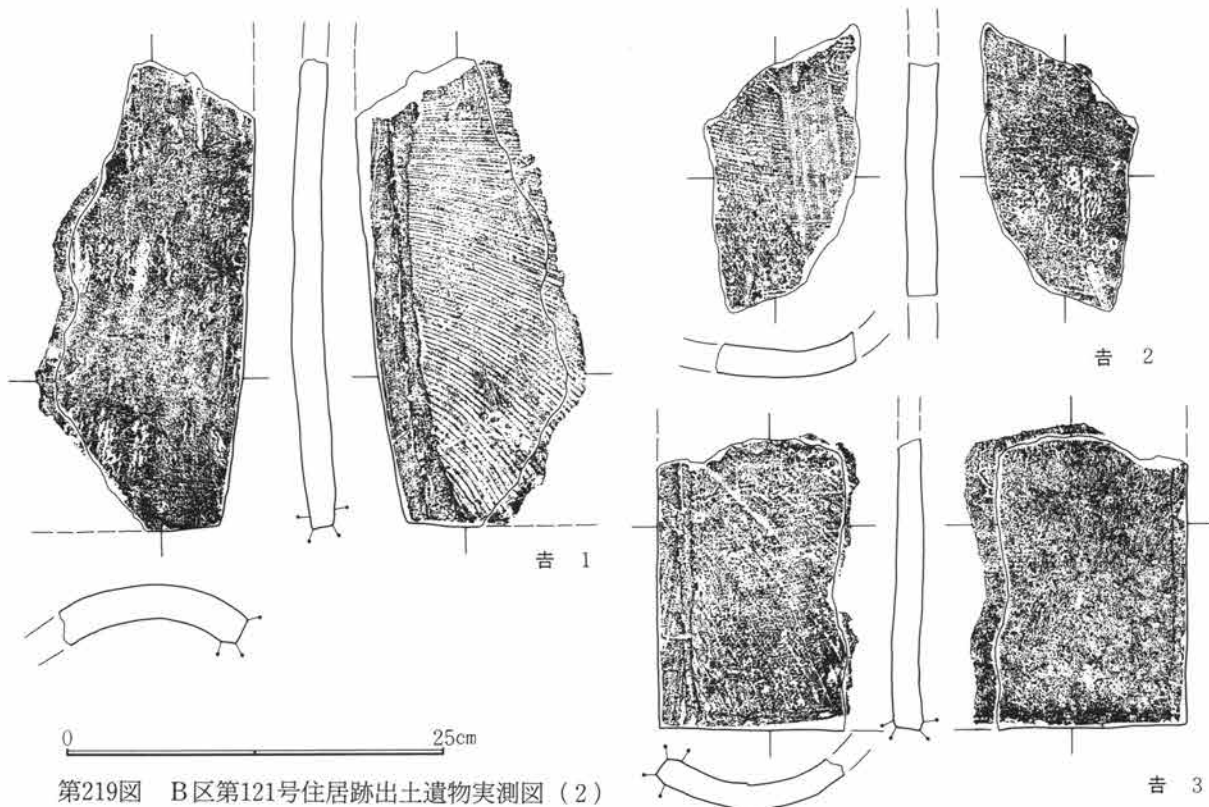


層序 (B121・124住) L=127.20 m

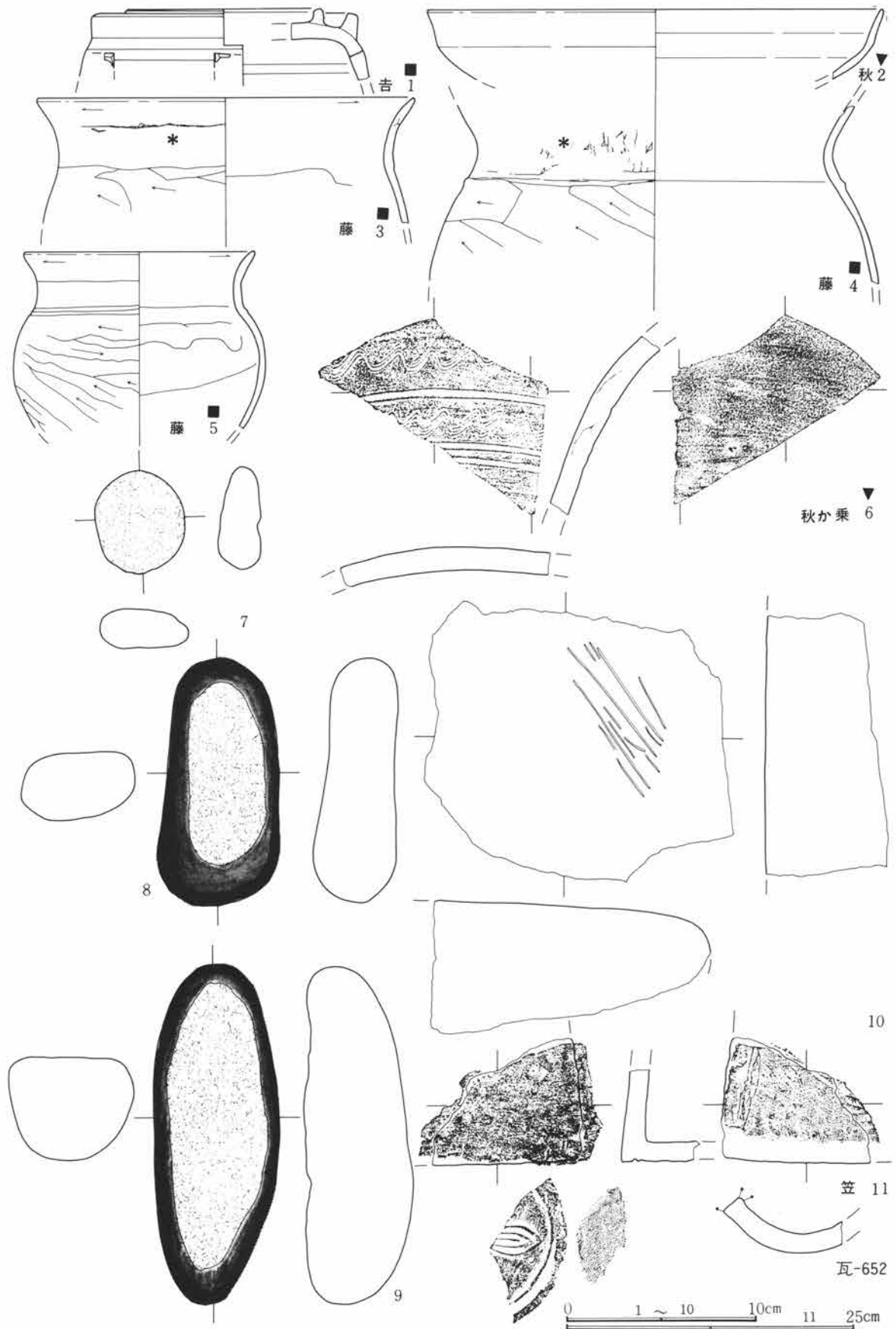
1. 粗・細粒状C軽石多量・粒状焼土多量・粒状VII層土微量。
2. 粗・細粒状C軽石混入・粒状炭化物微量。
3. 細粒状C軽石少量・塊状VII層土少量。
4. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土含有・塊状VII層土少量。
5. 微粒状C軽石微量・粒状焼土混入・粒状炭化物多量・灰含有。
6. 粒状C軽石若干・粒状VII層土含有・粒状焼土若干 (硬質)。
7. 微粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。
8. 微粒状C軽石少量・粒状焼土少量。
9. 微粒状C軽石微量・粒状焼土含有・粒状炭化物含有・灰含有。
10. 微粒状C軽石少量・粒状焼土若干。
11. 炭化物・灰層。
12. 粒状焼土混入・粒状炭化物含有。





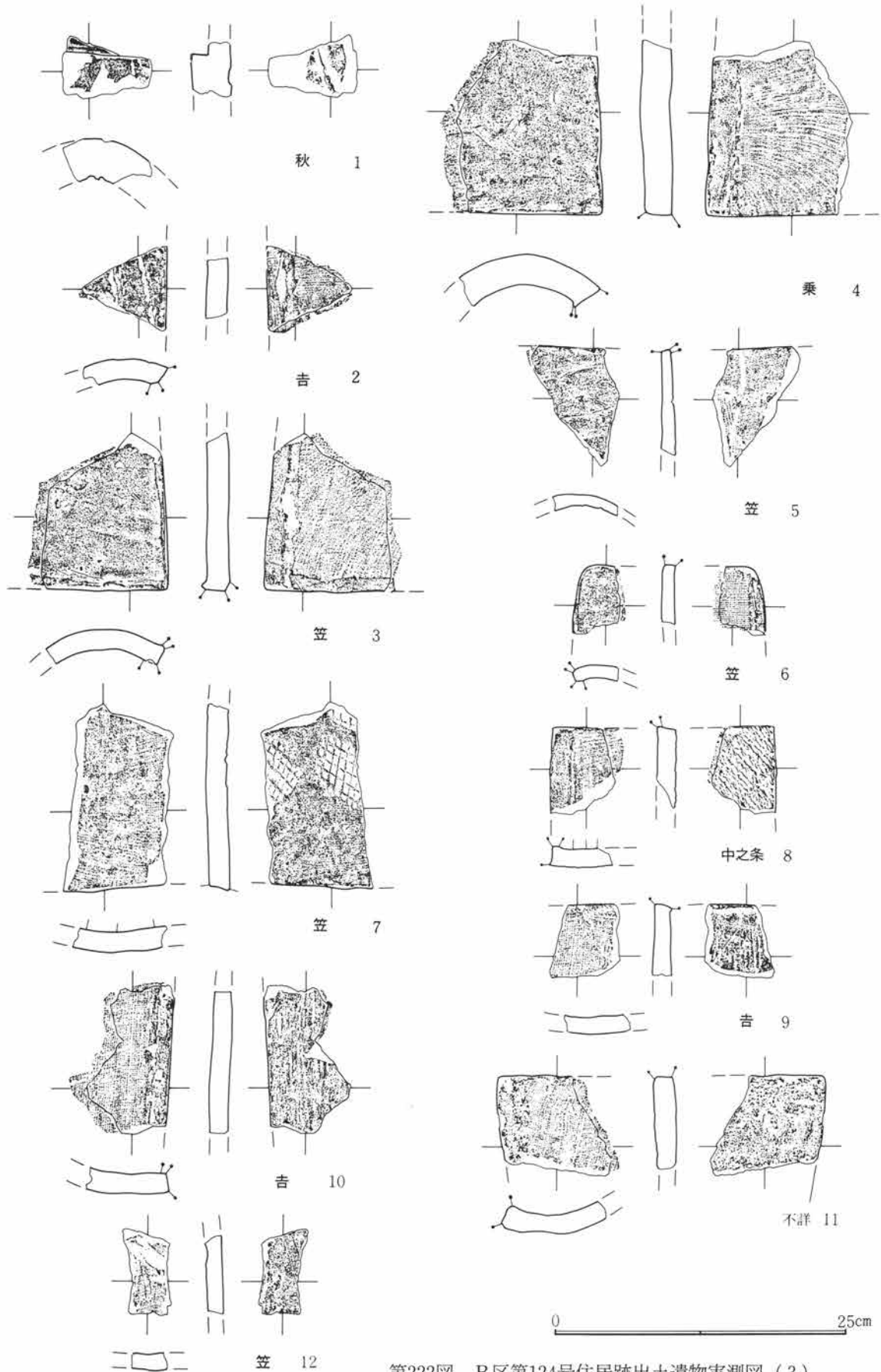


第4章 検出された遺構・遺物



第221図 B区第124号住居跡出土遺物実測図(2)

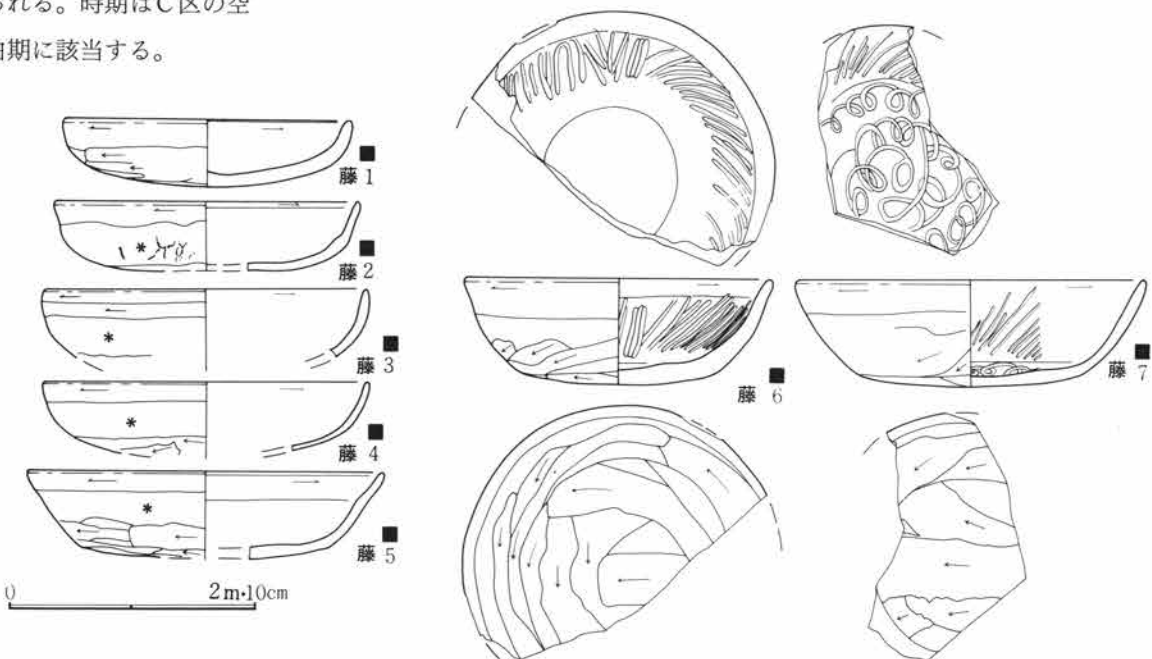
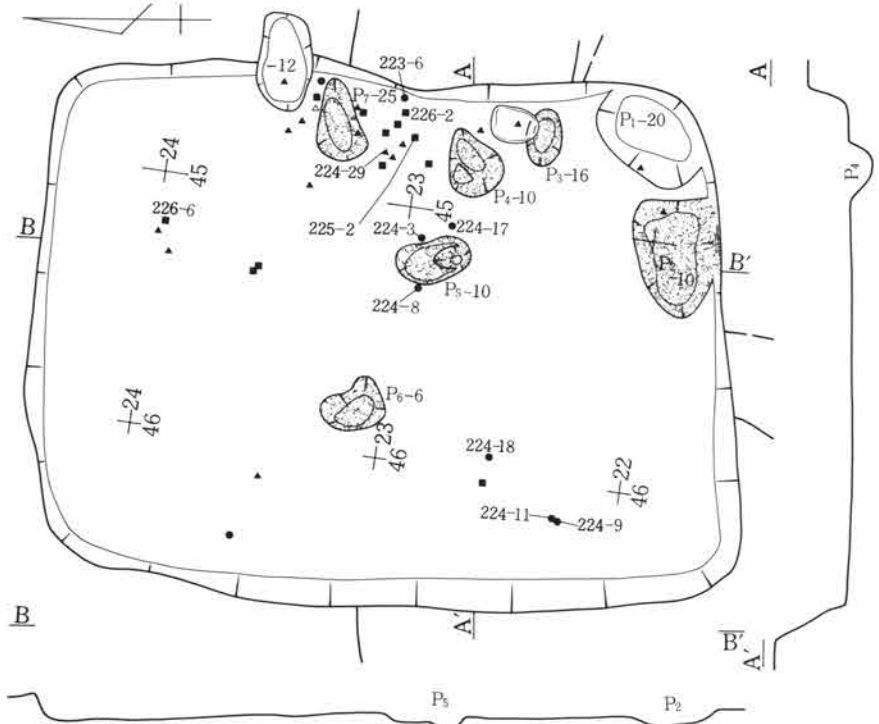
第3節 検出された住居跡について



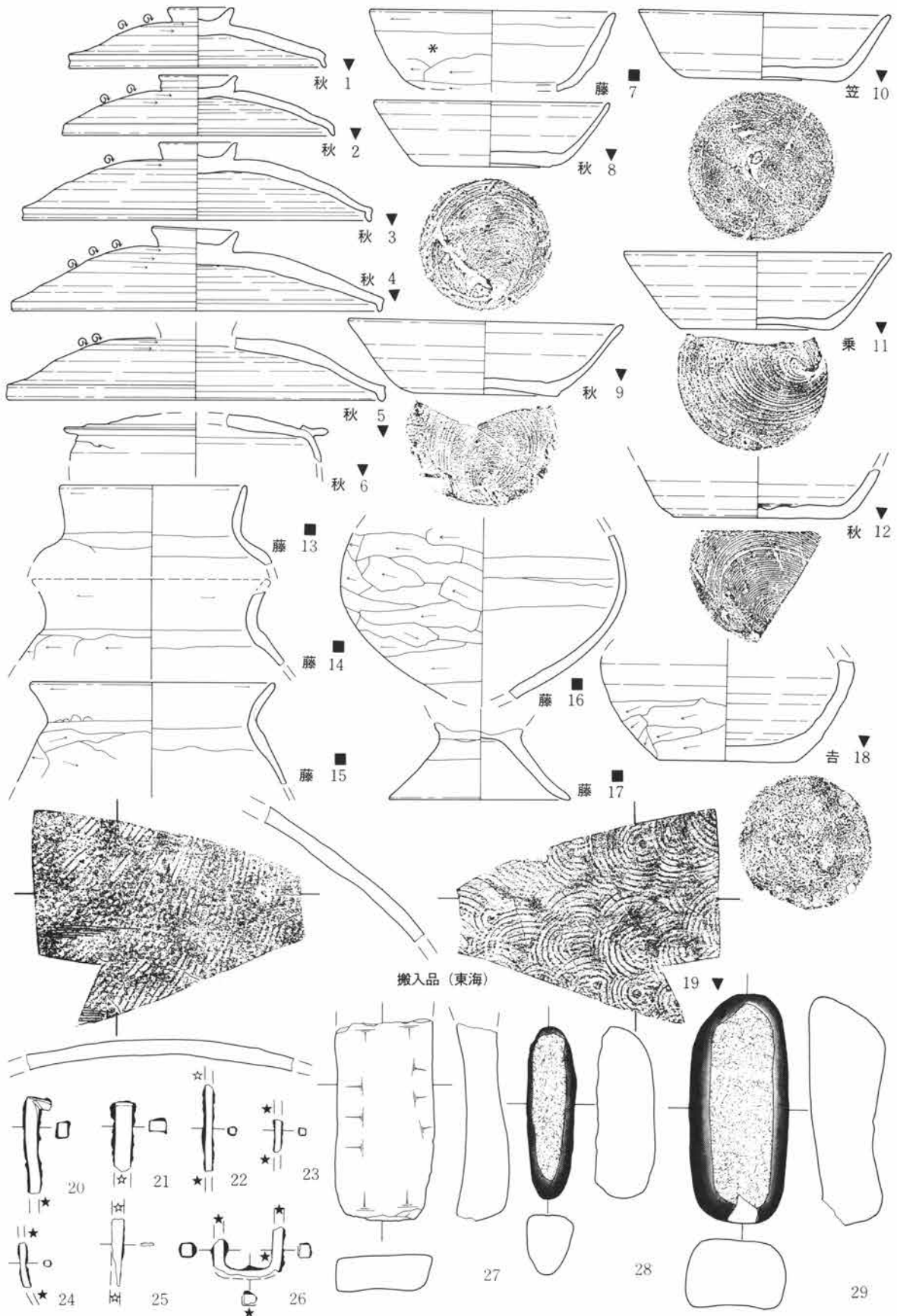
第222図 B区第124号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第125号住居跡		位置	45-47-B-22~25グリッド内。		残存深度	約60cm
平面形態	横長方形。	規模	4.32m×5.72m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-82度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	全体的にやや凸凹があるが造床はない。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。95×48cm・深度-20cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
遺物出土状態	東壁中央下にやや集中するが、全体に攪乱等により覆土の大半が失なわれている。						

所見 当住居は前述のB124住に切られ、南東隅部ではB149・126住に切られている。カマドはこれらの住居跡の切り合い関係を考慮しても構築されなかった可能性が考えられる。東壁中央部直下周辺には、ピットの集中する部分がありここに何らかの施設の存在を想起させるものがある。そして、住居跡の規模も大きい点から、当住居も、B124住同様に特殊な住居と考えられる。時期はC区の空白期に該当する。

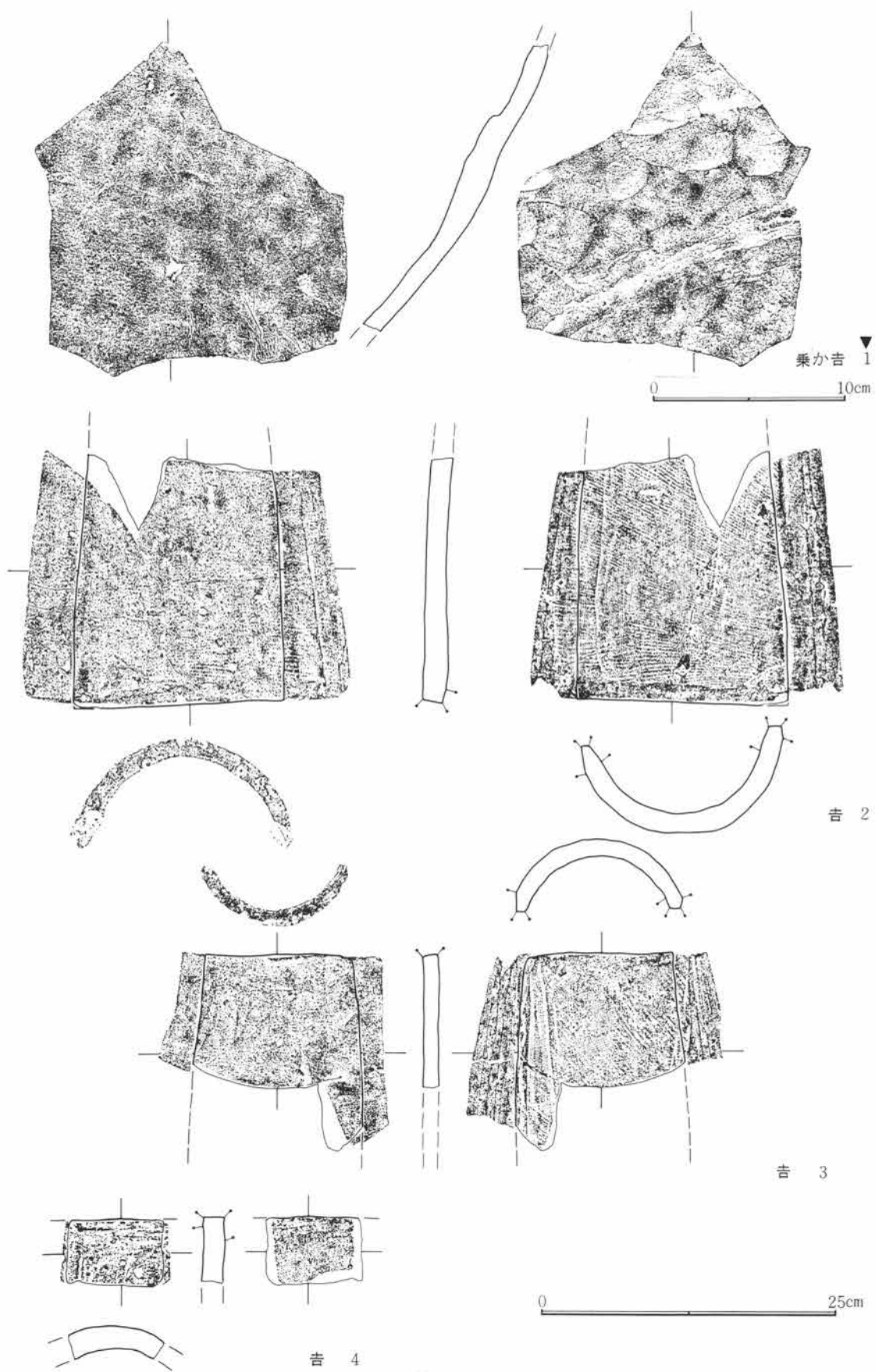


第223図 B区第125号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

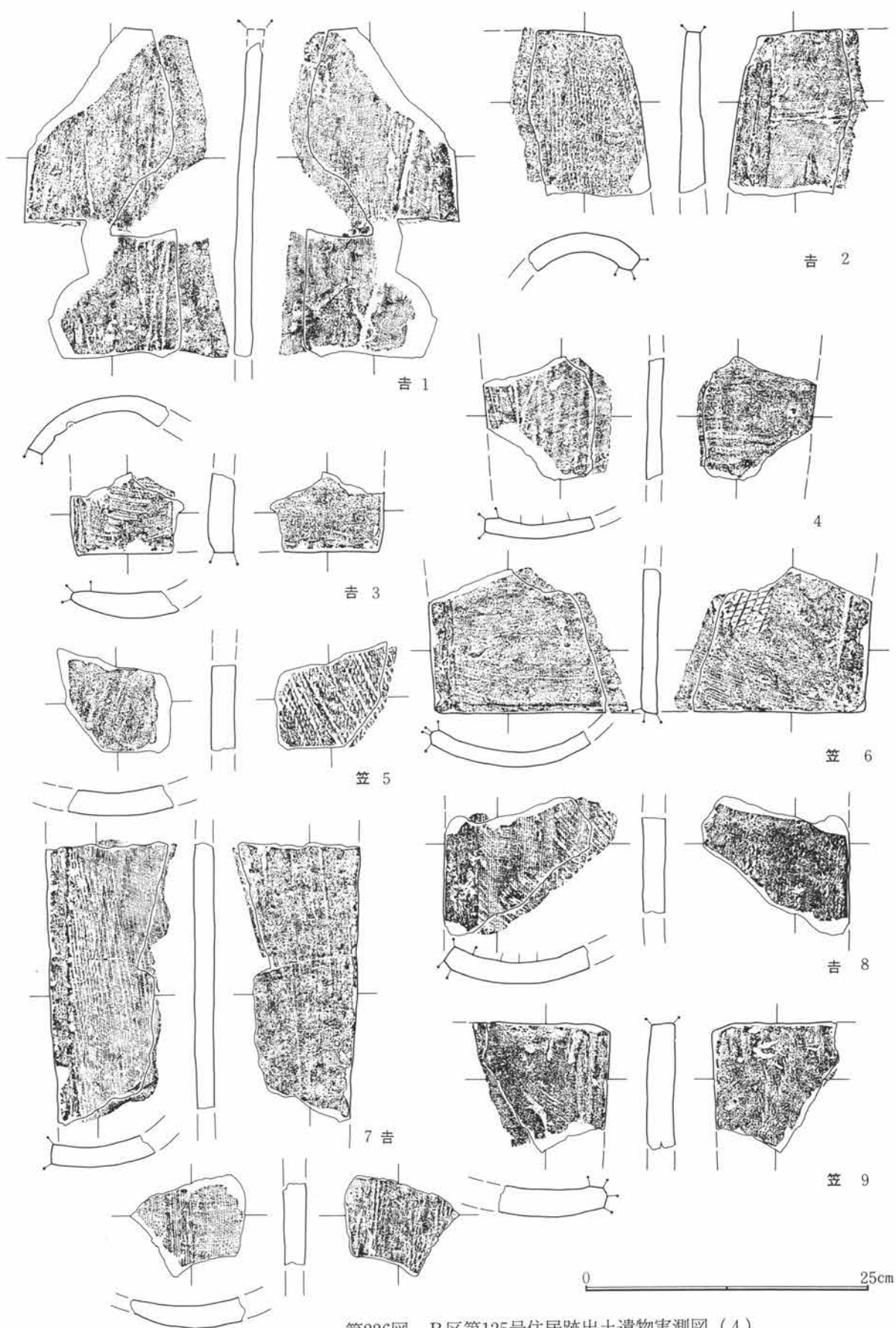


第224図 B区第125号住居跡出土遺物実測図(2)

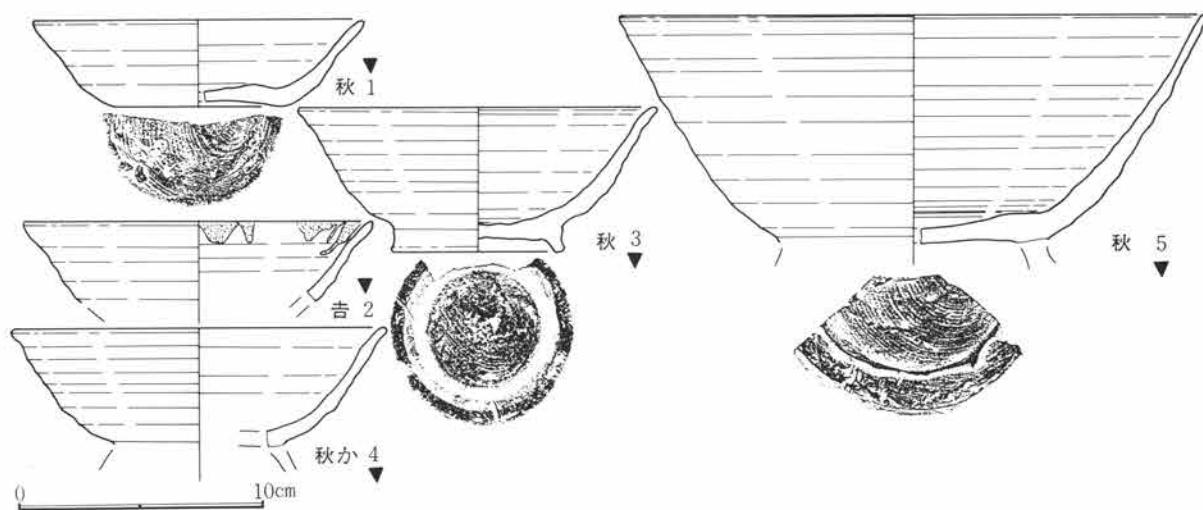
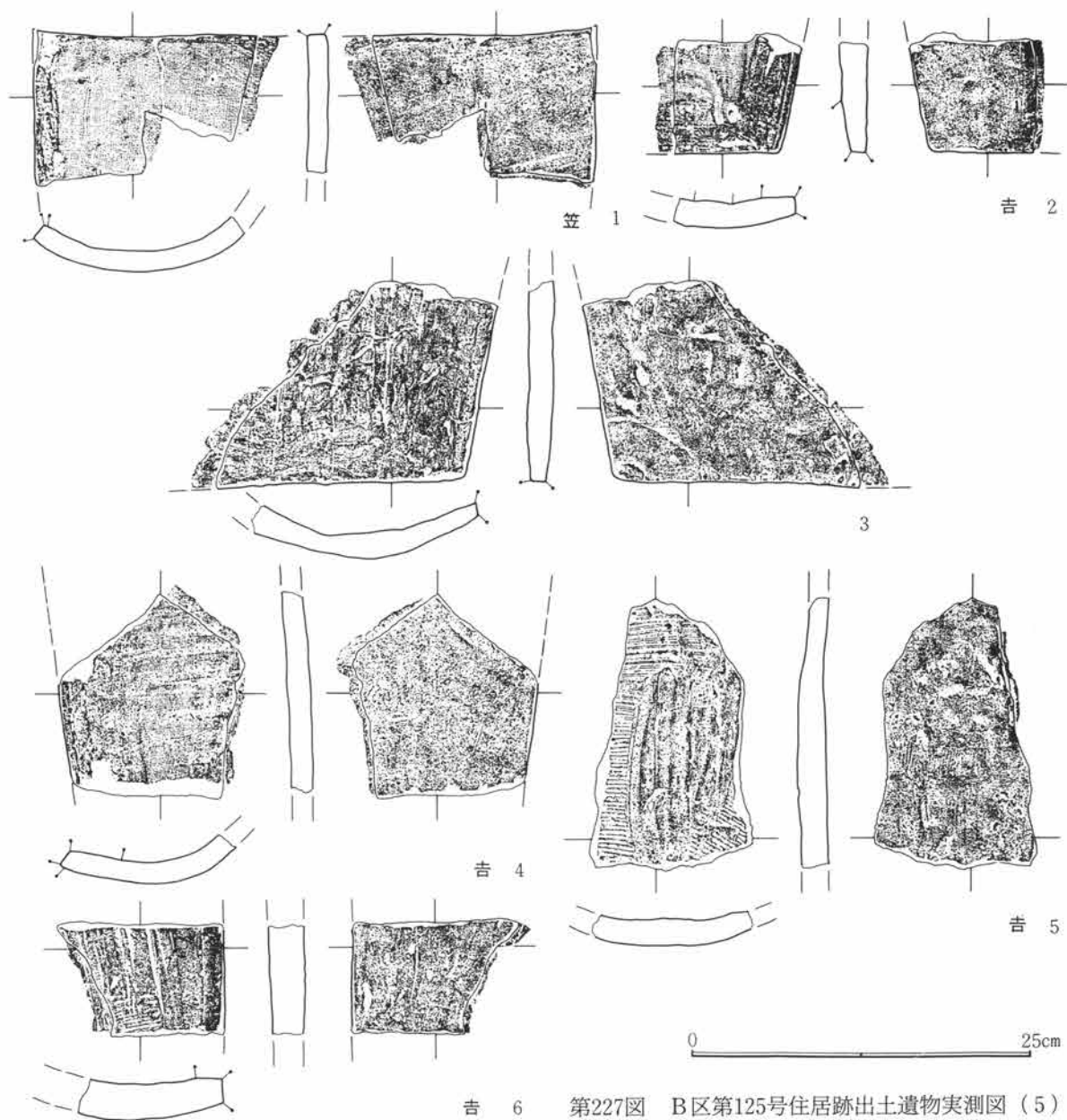
0 10cm



第225図 B区第125号住居跡出土遺物実測図(3)



第226図 B区第125号住居跡出土遺物実測図(4)

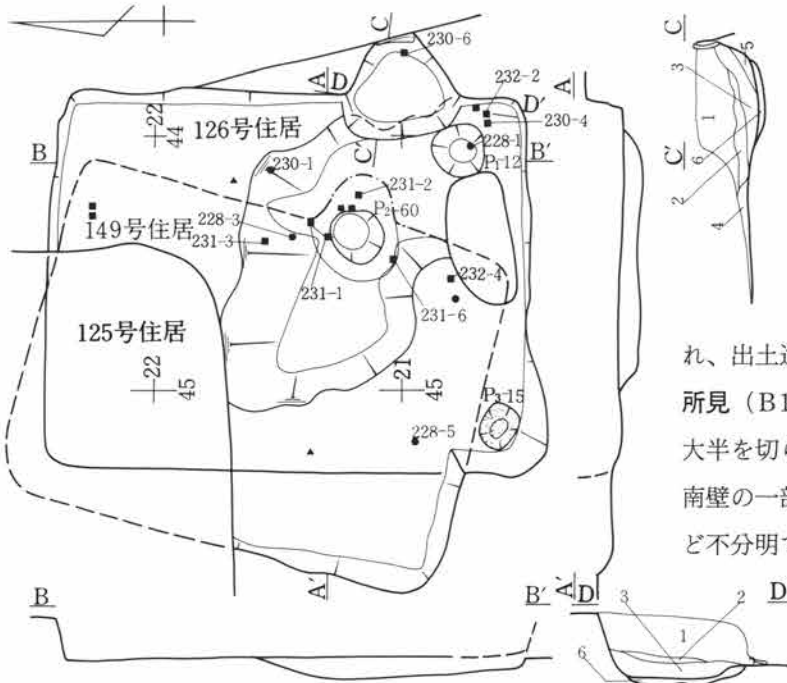




遺構名称	B区第126号住居跡		位置	44~46-B-21~23グリッド内。			残存深度	約30cm
平面形態	横長方形。	規模	2.98m×4.02m	構築基準辺	不明	主軸方位	北-90度-南位か	
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	カマド前面の造床が最も顕著である。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形。径43cm・深度-12cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	カマド前面で顕著であるが、不整形形で、床面-30cm程に底面がある。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から45cm。				主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内に灰・焼土が多い。			形状	三角形状を呈し、焚口は非常に広い。			
規模	全長 80cm・屋外長 51cm・屋内長 29cm・袖部幅108cm・燃焼部幅 78cm。							
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しい。壁の補強材等は何ら検出されなかった。							
			袖	無し。				
煙道	未検出であるが立ち上り部で瓦を出土。			掘り方	平面形状にほぼ同じ。			
遺物出土状態	全体的に覆土内で多いが、カマド右側で傍竈坑周辺で瓦・須恵器が床面直上で出土。							

遺構名称	B区第149号住居跡		位置	45・46-B-21~23グリッド内。			残存深度	約20cm
平面形態	横長方形か。	規模	2.83m×3.60?m	構築基準辺	不明	主軸方位	北-104度-南位か	
B126号住の破壊により詳細不明。								

所見 (B126住) 当住居跡は、前述のB125住と後述のB149・134住を切り構築している。尚、住居跡の検出時調査の不幸からB125住と併行調査した為北西隅部周辺を失っている。カマドは、山形状で三角形を呈し東壁中央部から南東隅部に偏在し具備し、カマド右袖の位置に寄った位置では傍竈坑が検出されている。又、南西隅部直下からP<sub>3</sub>が検出されているが深度もやや浅い点から柱穴とは考え難い。住居形状はC区の第VII段階に対比され、出土遺物の様相も同様である。



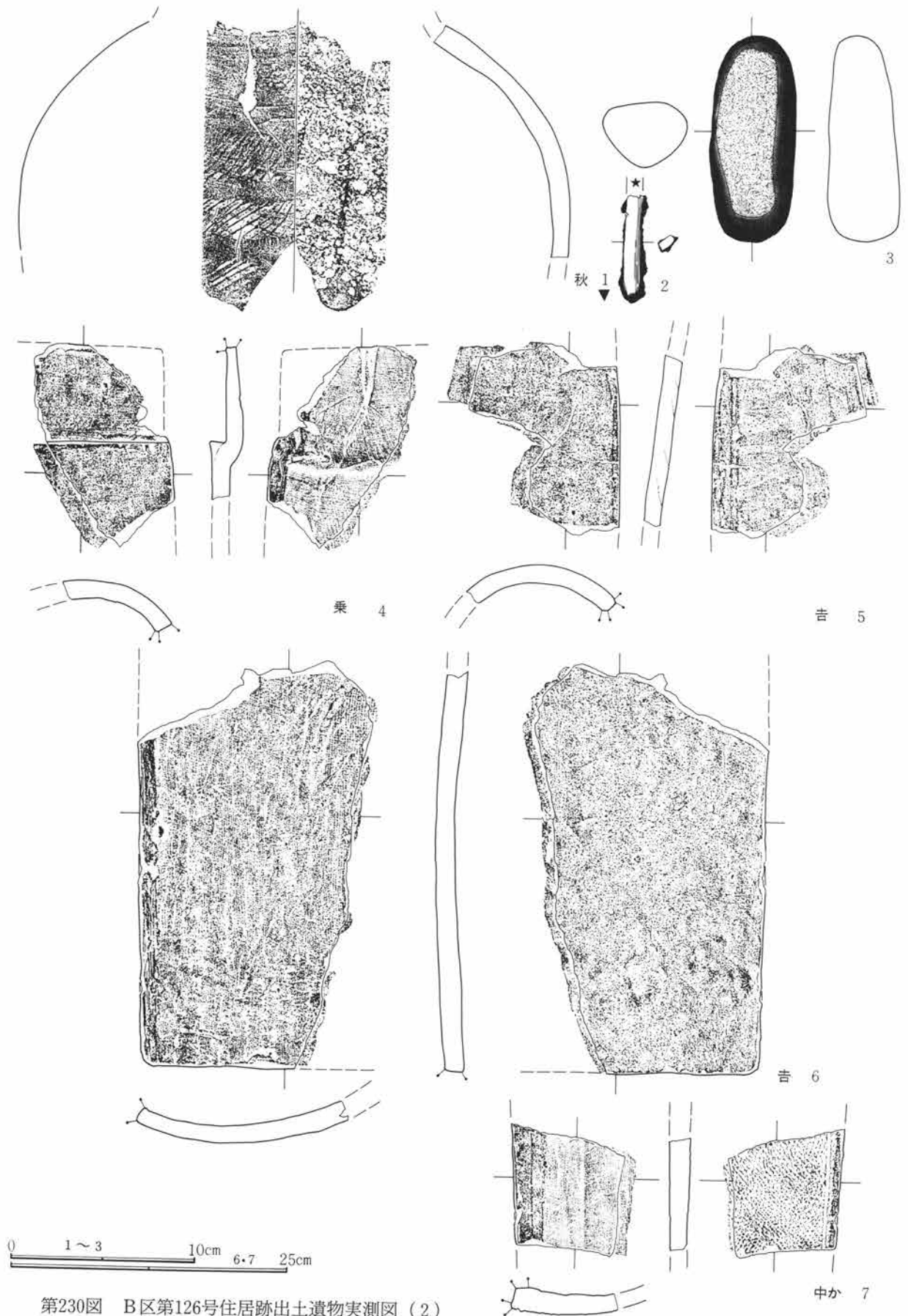
所見 (B149住) 当住居は上述のB126住に大半を切られ失っている。検出された部分は南壁の一部である。この為詳細に就いては殆ど不明であるが、図中P<sub>2</sub>周辺部からは焼土粒子・炭化物の出土が多い為、カマドが想定されける。同部を断割ったが、平面検出は出来なかった。住居形状はC区の第VI段階が想定される。

層序 (B126・149住) L=127.20 m

1. 粒状C軽石混入。
2. 微粒状C軽石含有・粒状焼土混入。
3. 微粒状C軽石微量・粒状焼土混入・炭化物・灰含有。
4. 細粒状C軽石微量・粒状焼土多量。
5. 細粒状C軽石微量・粒状焼土混入・炭化物・灰混入。
6. 細粒状C軽石微量・灰多量。

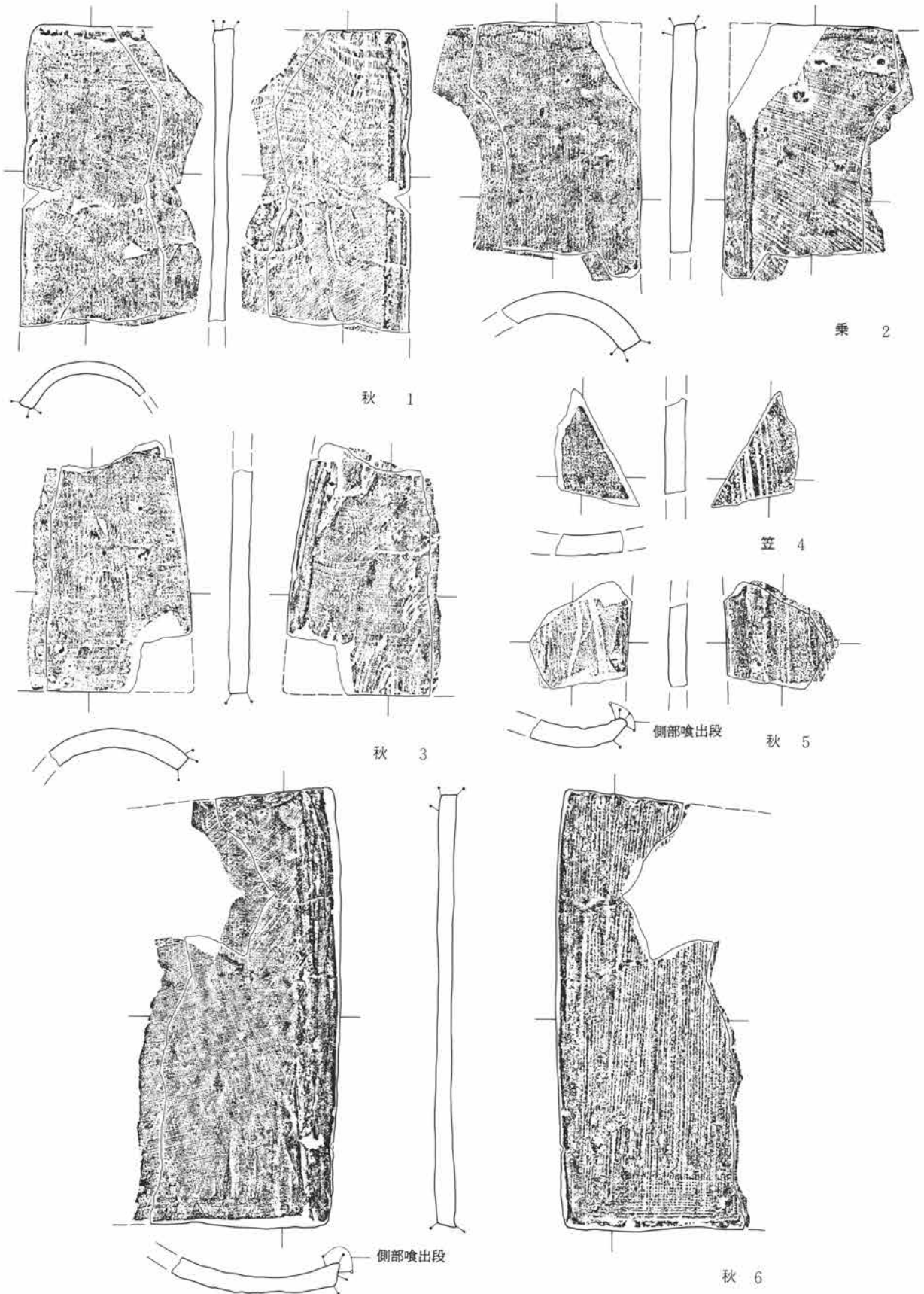
第229図 B区第126・149号住居跡実測図

0 2m



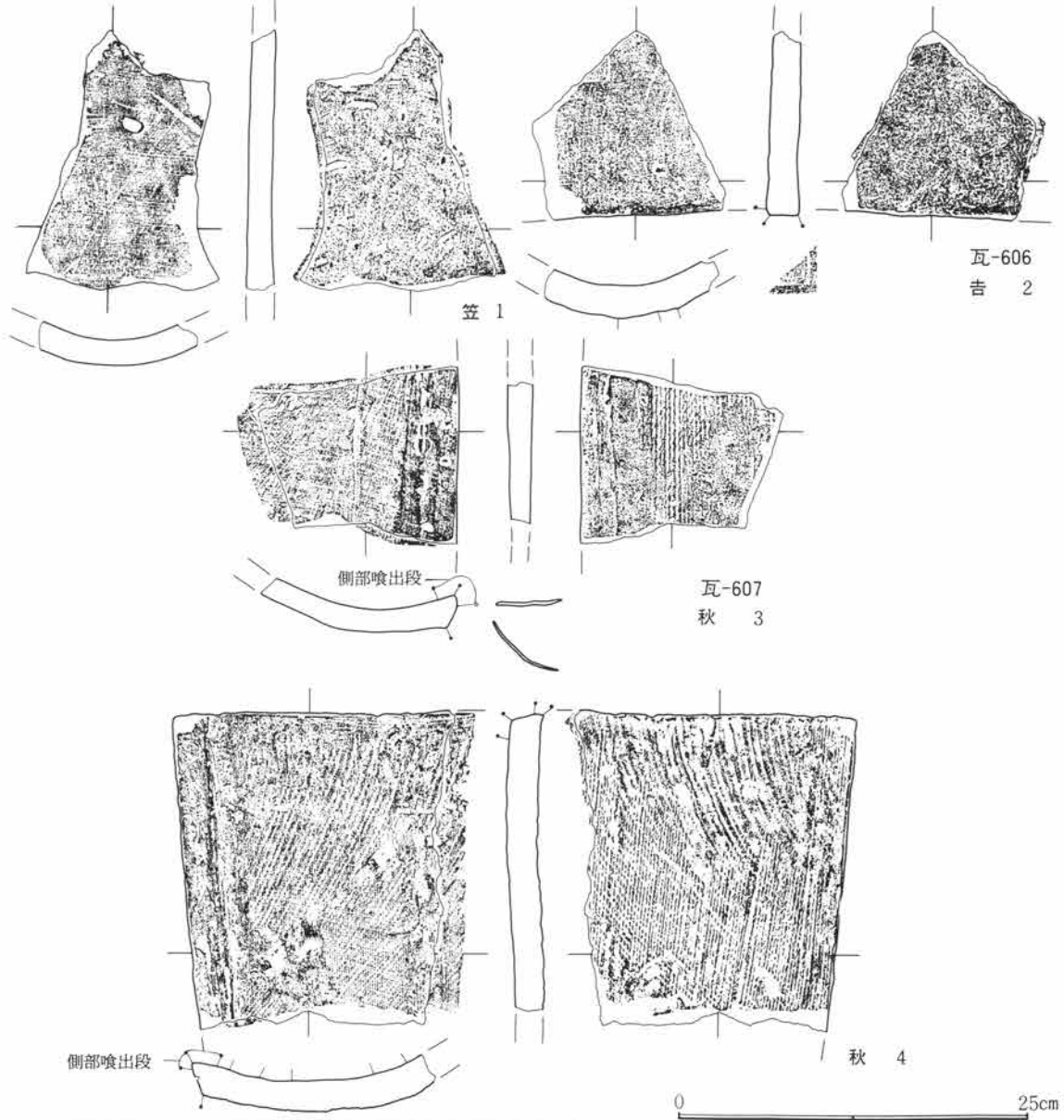
第230図 B区第126号住居跡出土遺物実測図(2)

第3節 検出された住居跡について



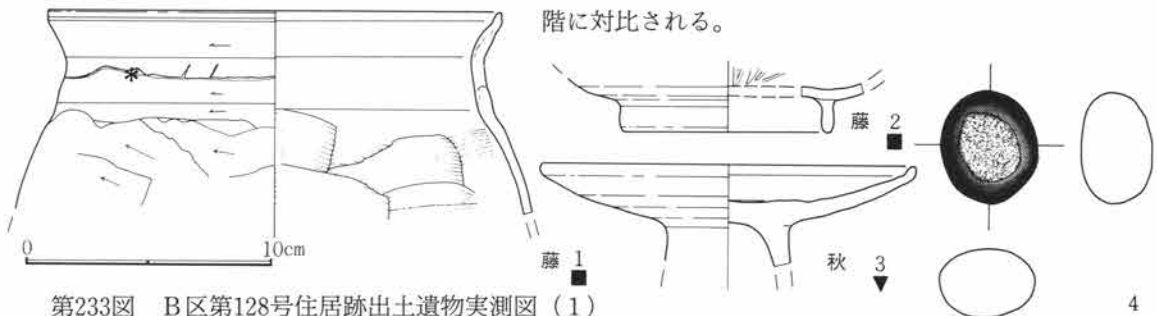
第231図 B区第126号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物



第232図 B区第126号住居跡出土遺物実測図(4)

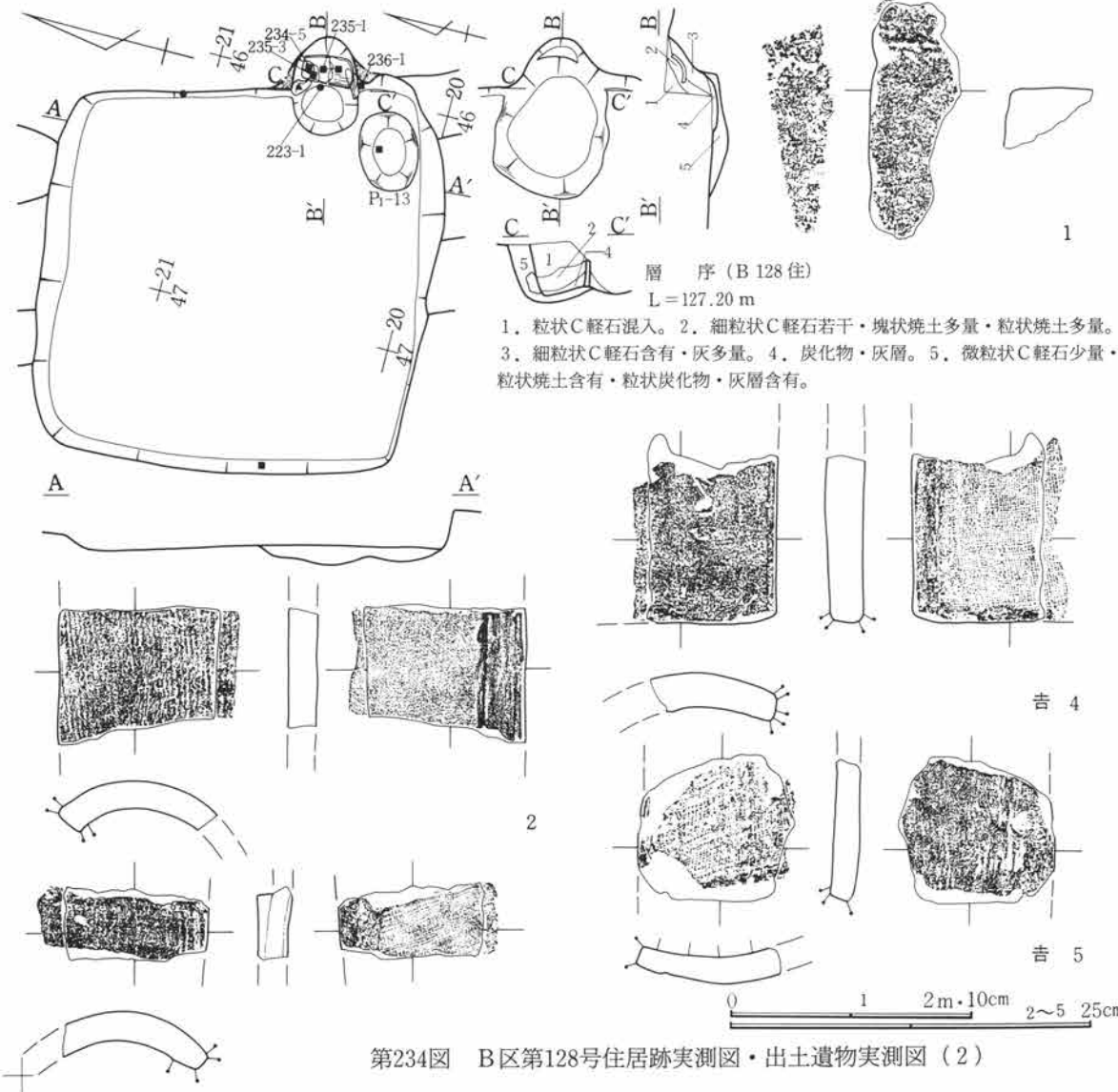
所見 当住居跡は、B125・131住を切り構築している。住居は東壁南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部に傍竈坑を備えている。住居の指向方向は、表中の北-75°-南と、南壁・西壁の状態から北-90°-南も想定される。これは、図中南壁東半分と東壁は、ほぼ直交する状態であるのに対し、この方向に対して南壁西半分はほぼ東西にとるためである。カマドは、燃焼部天井に女瓦の完形を用いている(第235図-1)。袖は耕作による乱が及び失なっている。住居形状はC区の第VII段階に対比される。



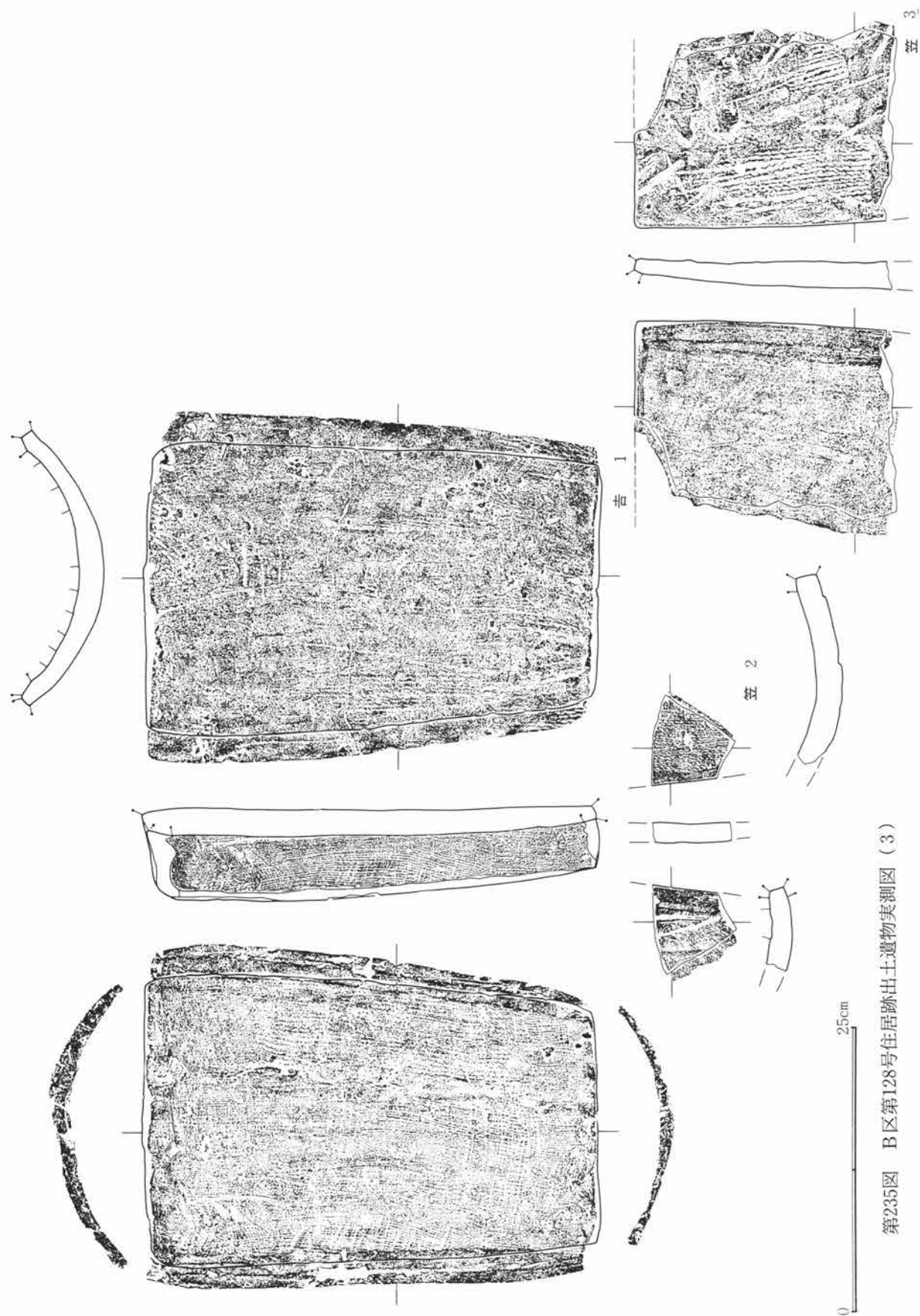
第233図 B区第128号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について

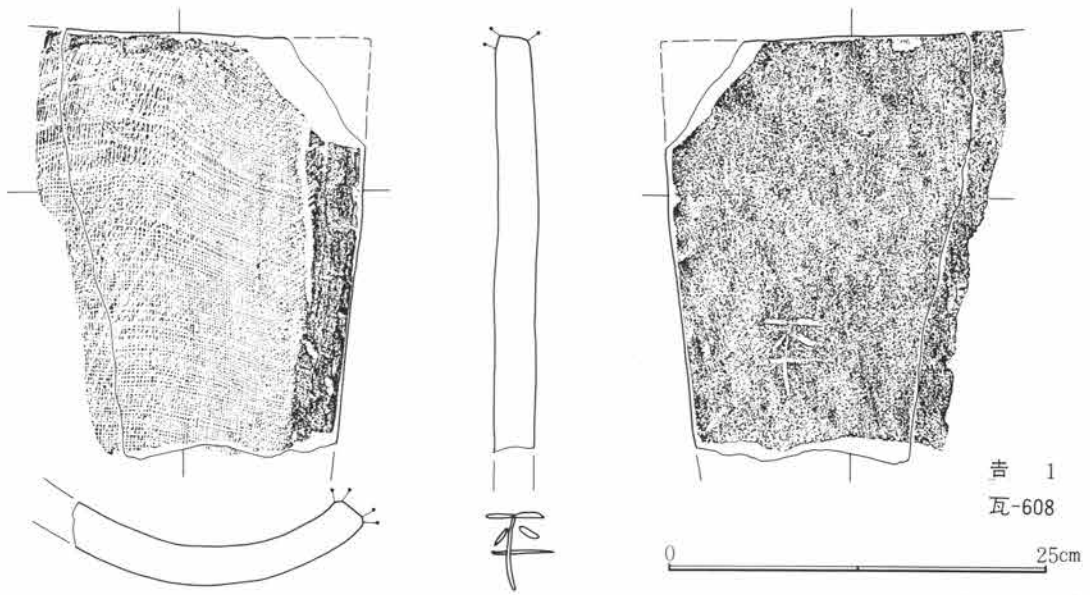
遺構名称	B区第128号住居跡		位置	47・48-B-20~22グリッド内。		残存深度	約30cm
平面形態	矩形。	規模	3.20m×3.45m	構築基準辺	東乃至南壁	主軸方位	北-75度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。一部131住の覆土を使用するが他はVII層土を使用。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形63×49cm・深度-13cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から34cm。			主軸方位	北-76度-南	
改築	有。掘り方内の灰・焼土が多い。		形状	舌状を呈するが攪乱により完全露呈されていない。			
規模	全長 80cm・屋外長 37cm・屋内長 43cm・袖部幅 70cm・燃焼部幅 46cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しい。壁は瓦により補強されている。						
奥壁側も天井に瓦を使って使用する。	袖	攪乱により不分明。					
煙道	未検出。		掘り方	土坑状を呈する。			
遺物出土状態	カマド内で原位置を留めるが、他は覆土内で少量のみ土器類・瓦類が出土している。						



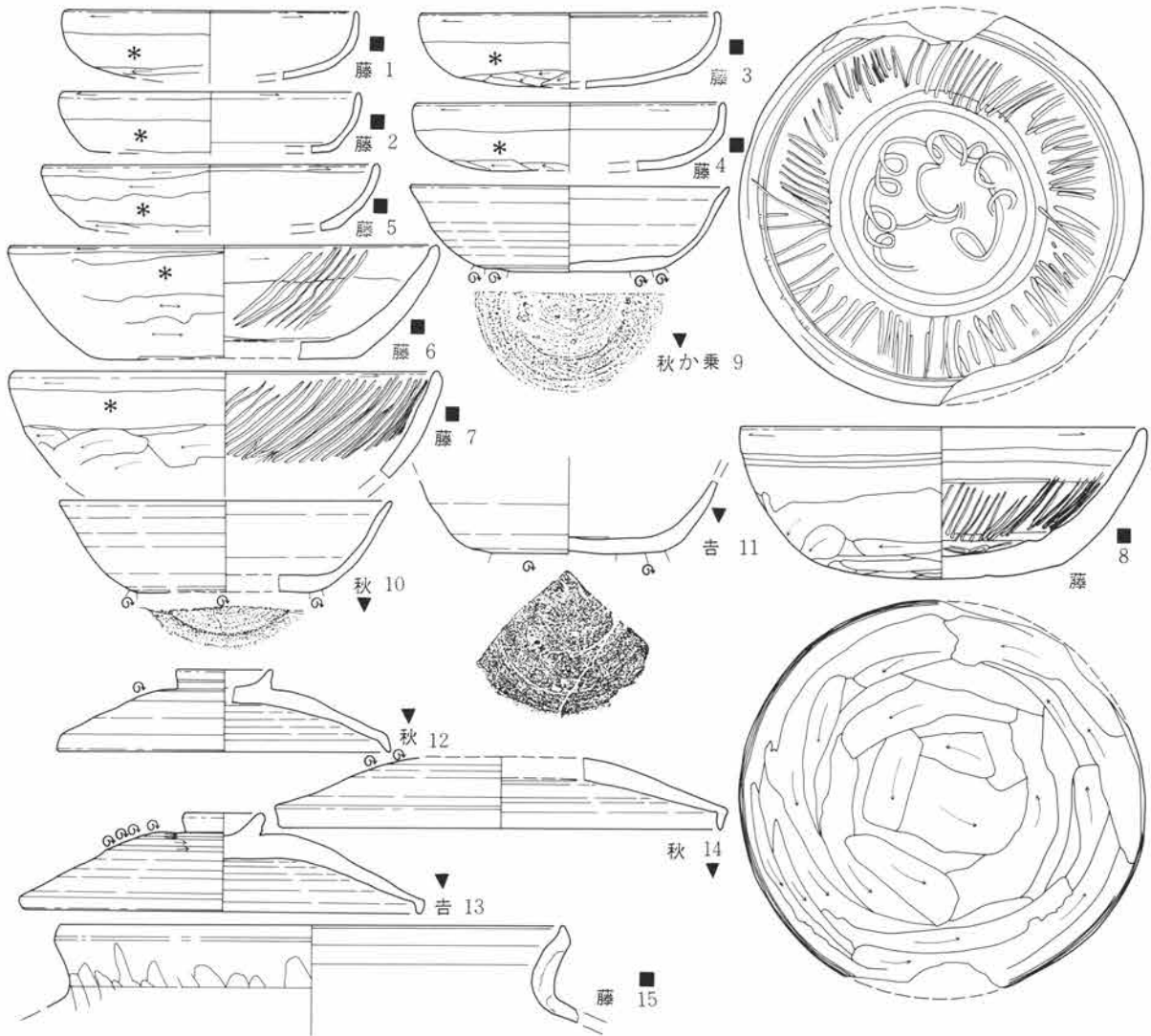
第234図 B区第128号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



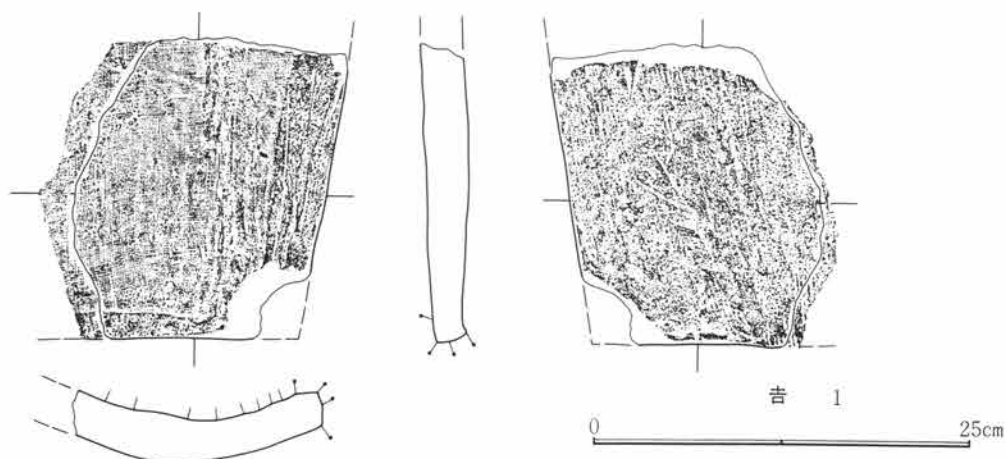
第235図 B区第128号住居跡出土遺物実測図(3)



第236図 B区第128号住居跡出土遺物実測図(4)



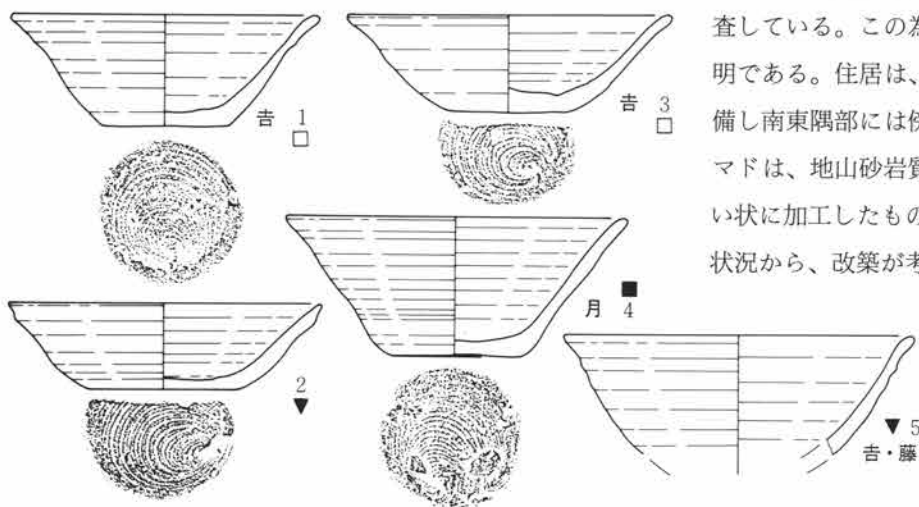
第237図 B区第129号住居跡出土遺物実測図(5)



第238図 B区第129号住居跡出土遺物実測図(6)

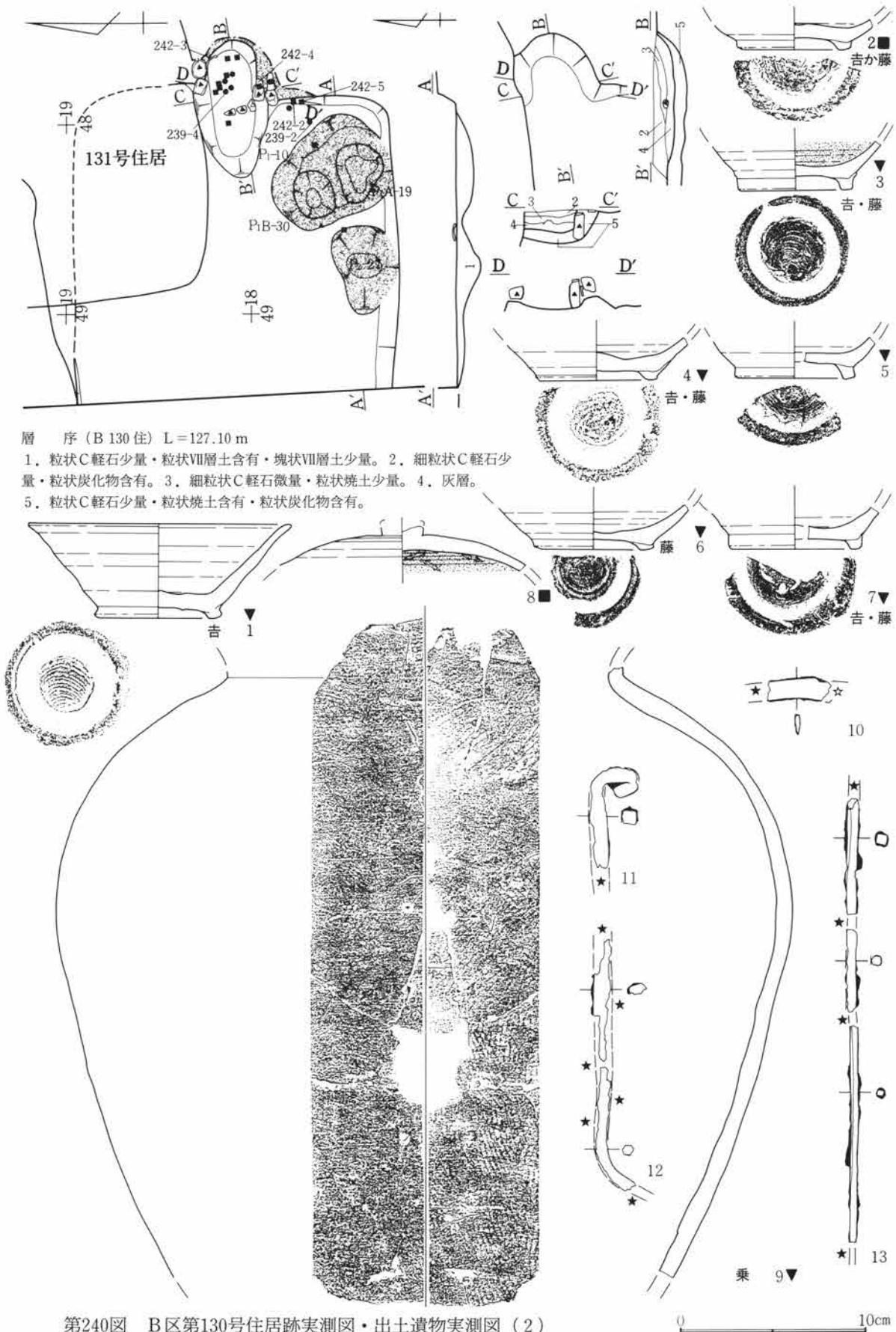
遺構名称	B区第130号住居跡		位置	48-50-B-18・19グリッド内。		残存深度	約20cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.30m×3.45m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-90度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。全体的に造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> か。130×105cm・深度-19~30cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体的に皿状で部分的に深目の掘り込みが認められたが平面図化出来得る状況ではなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から112cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。袖が据え変えられている。			形状	「U」字状を呈する。		
規模	全長144cm・屋外長 59cm・屋内長 85cm・袖部幅104cm・燃烧部幅 54cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦・地山砂岩質土の削り出し材により補強されている。						
煙道	未検出。		掘り方	平面形状は馬蹄形状を呈する。			
遺物出土状態	カマド内で集中したが、他は覆土内で少量出土している。						

所見 当住居跡はB131住と重複するが、両者の新旧関係は不明であるが、調査段階ではB131住を先行調査している。この為、北東隅部周辺は不明である。住居は、東壁中央にカマドを具備し南東隅部には傍竈坑を備えている。カマドは、地山砂岩質土の削り出し材を角すい状に加工したものを多用し、右袖周辺の状況から、改築が考えられ、焚口部幅がやや縮小している。住居形状は、C区の第VI段階頃に対比され、遺物は第V段階の様相が認められる。

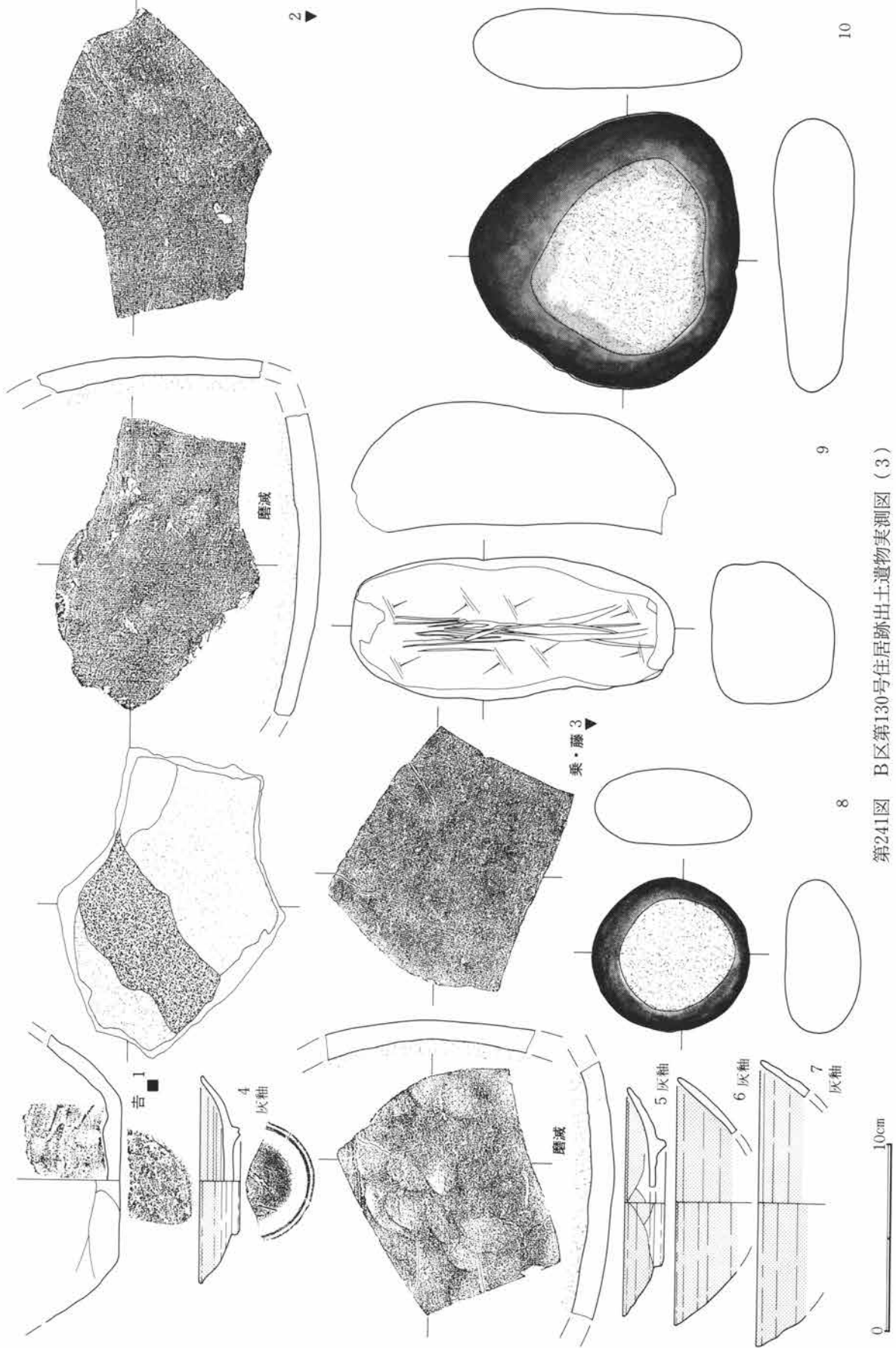


第239図 B区第130号住居跡出土遺物実測図(1)

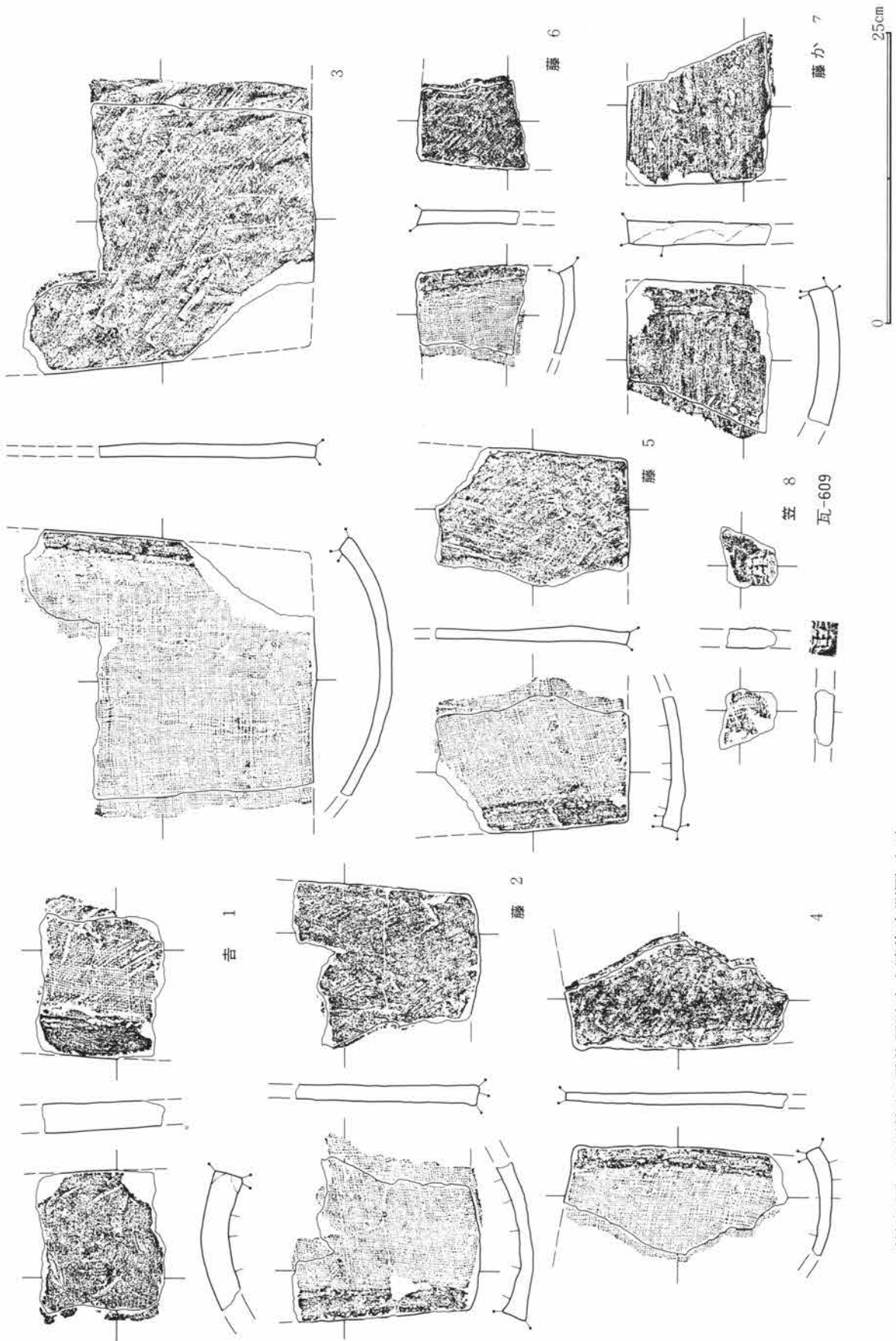




第240図 B区第130号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



第241図 B区第130号住居跡出土遺物実測図(3)

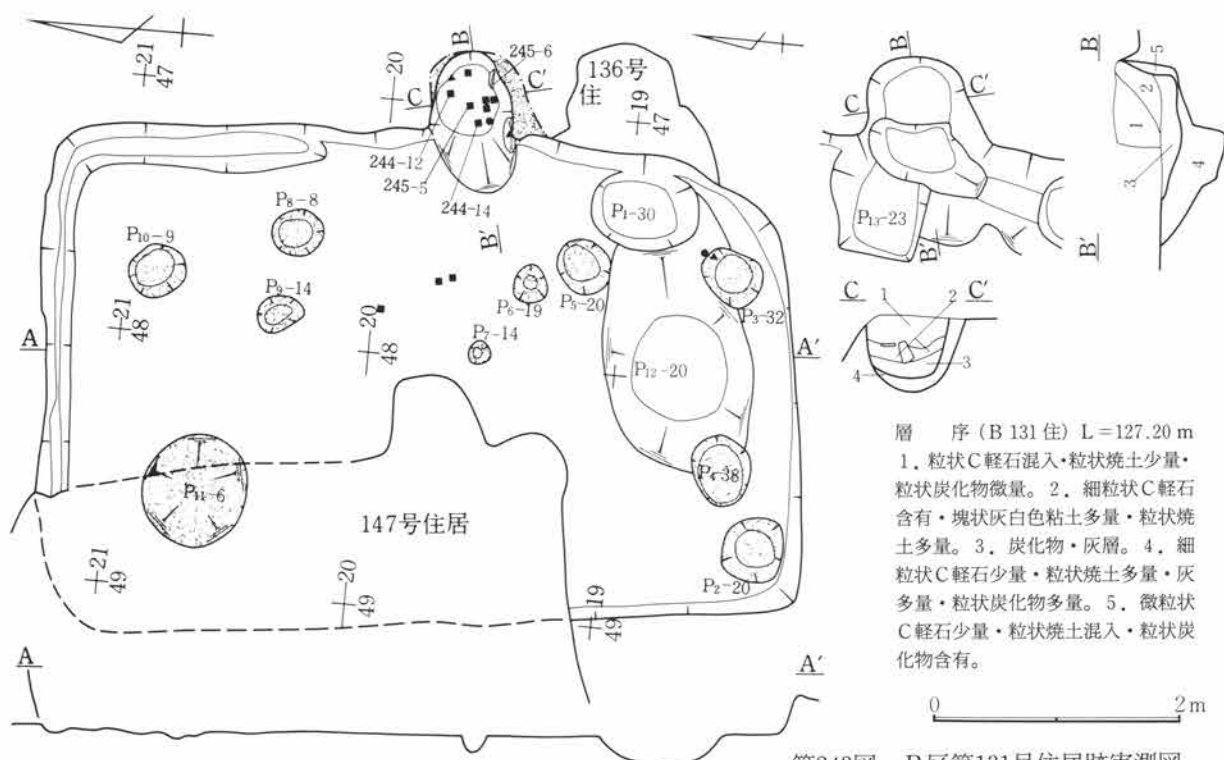


第242図 B区第130号住居跡出土遺物実測図(4)

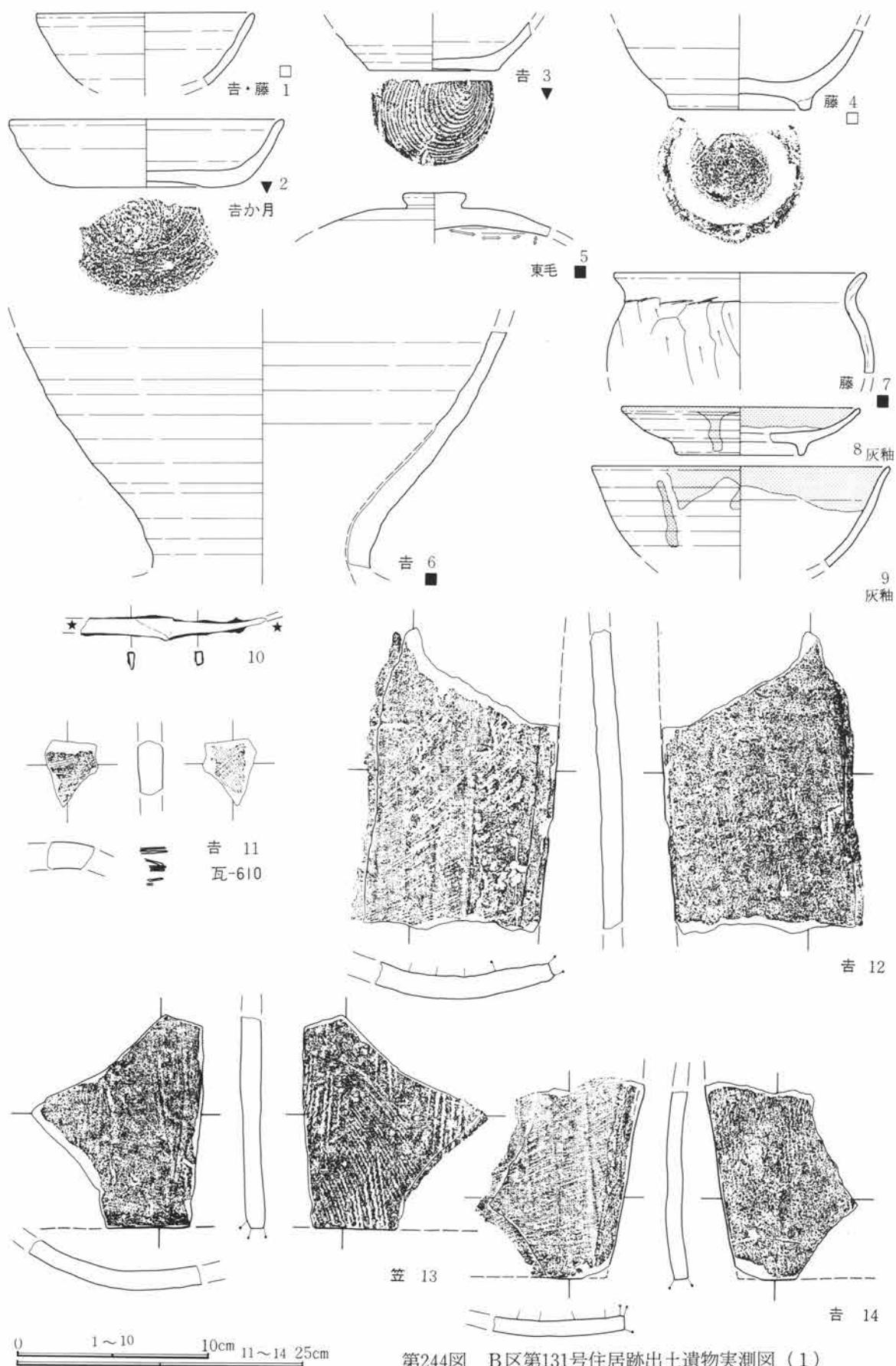
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	B区第131号住居跡		位置	47～50-B-19～22グリッド内。		残存深度	約36cm
平面形態	横長方形。	規模	3.83m×6.06m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-85度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	基本的に地山VII層土を用い、部分的な造床を行なう。			
壁溝	北壁下・東壁の北東隅寄りで検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・隅丸胴張長方形。84×60cm・深度-30cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状のP <sub>12</sub> が顕著であるが、他の部では非常に浅い状態であった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から210cm。			主軸方位	北-85度-南	
改築	有。掘り方内から多量の焼土等を検出。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長110cm・屋外長 62cm・屋内長 48cm・袖部幅 98cm・燃烧部幅 62cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。右壁は瓦により補強されている。焚口・燃烧の落ち込みがやや深い。						
袖	非常に微弱である。右袖は礫を用い補強する。						
煙道	未検出。		掘り方	土坑が切り合う様な状態。			
遺物出土状態	覆土内から土器類・瓦類等の出土が少量ある。床直等の遺物は非常に少ない。						

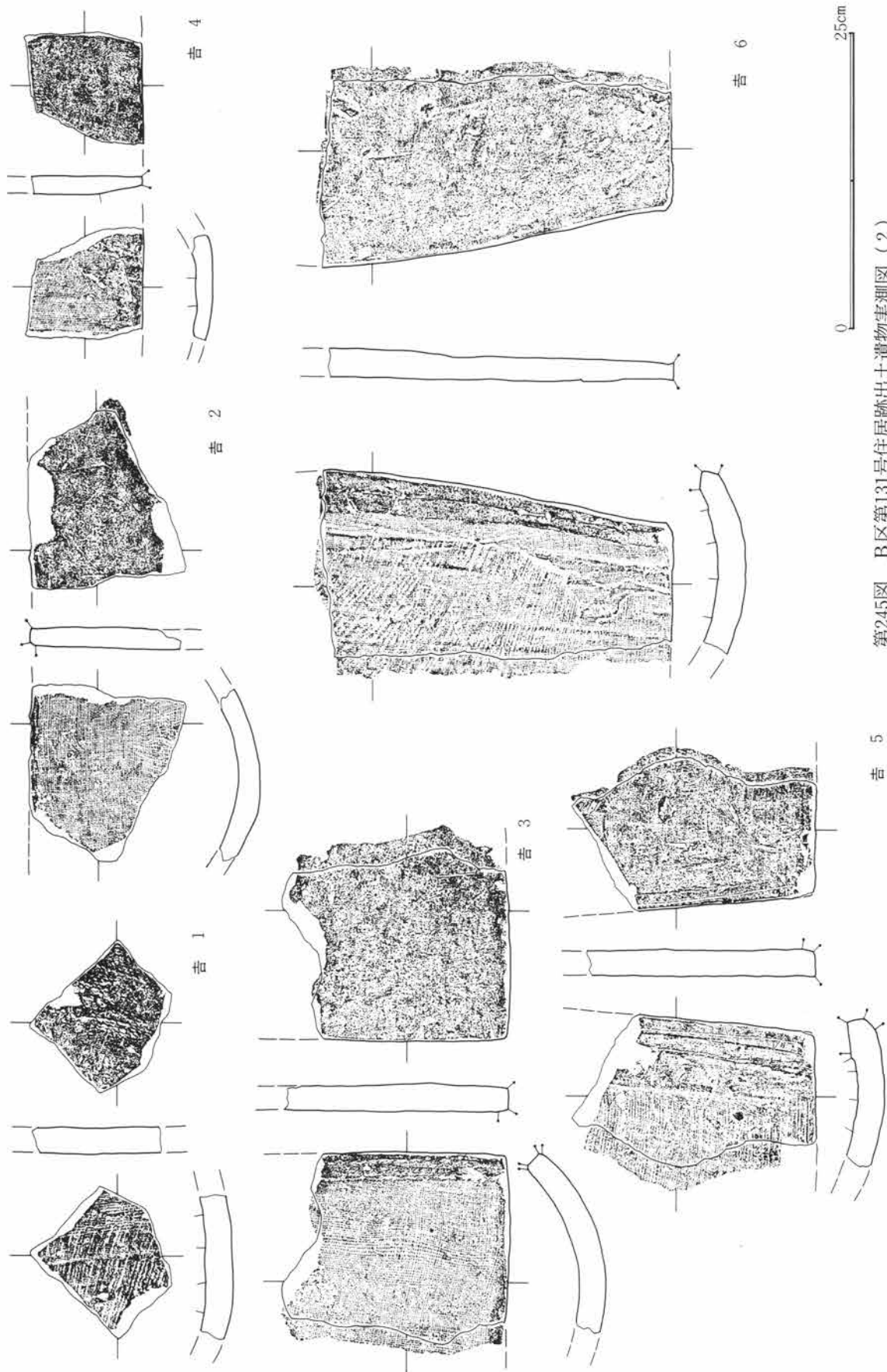
所見 当住居跡は、B128・136・147住に切られ、B130住と重複するがその新旧関係は調査時点では不明であった。住居は、東壁のほぼ中央部にカマドを備え、同壁南東隅部とカマドのほぼ中央に傍竈坑を備えている。カマドは、住居規模に対して小形ではあるものの、比較的形状が整っており、燃烧部右壁は礫と瓦による補強が行なわれている。住居床面ではP<sub>2</sub>～P<sub>12</sub>の多くの柱穴状乃至土坑状の掘り込みが検出されている。これらの中で、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は深度も深く住居の施設に伴なうものと考えられ、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は南壁下隅部に位置している。一方、P<sub>12</sub>は掘り方に伴なうと考えられ、他のピットは性格等の詳細は不明である。壁溝は北壁・東壁部で検出されている。住居形状はC区第V～VI段階頃に対比される。



第243図 B区第131号住居跡実測図



第244図 B区第131号住居跡出土遺物実測図(1)

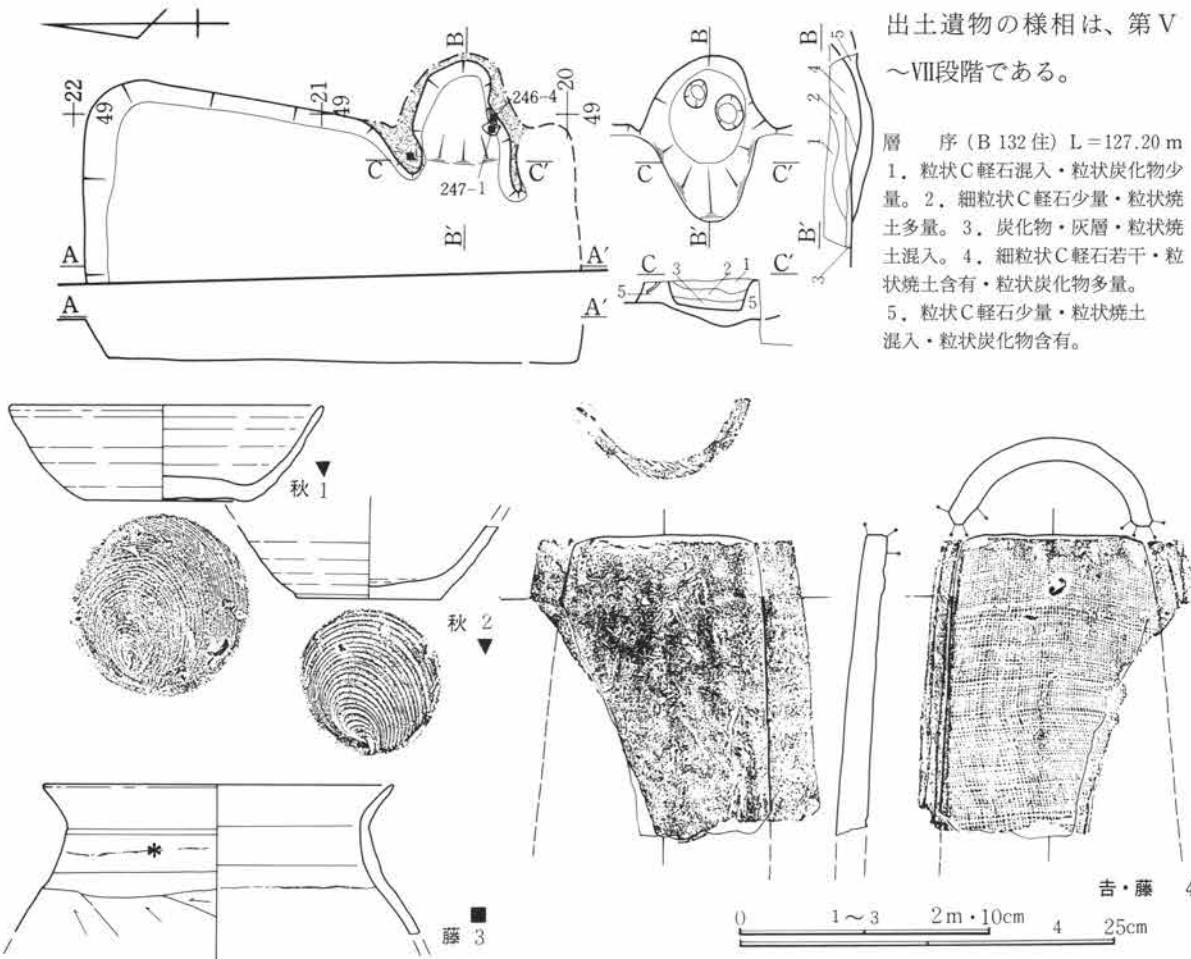


第245図 B区第131号住居跡出土遺物美測図(2)

第3節 検出された住居跡について

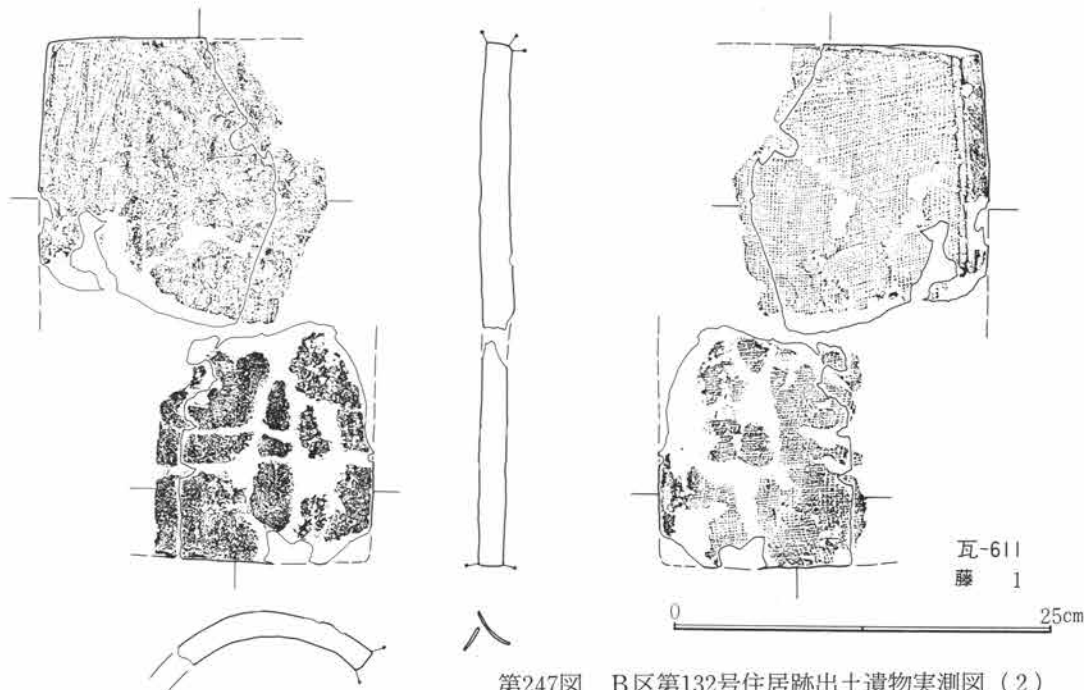
遺構名称	B区第132号住居跡		位置	49・50-B-20~22グリッド内。		残存深度	約32cm
平面形態	不分明。	規模	1.60+αm×4.02m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-90度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	南半分はB147住の覆土の使用が考えられる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	B147住と切り合い関係にある為と調査の不便により不分明である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から20cm位か。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。		
規模	全長108cm・屋外長 46cm・屋内長 68cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 68cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。右壁は瓦により補強されている。焚口部底面は窪んだ状態である。						
	袖	右袖は非常に長い。					
煙道	未検出。			掘り方	鶏卵状を呈する土坑状の掘り込み。		
遺物出土状態	覆土内から少量の土器類・瓦類が出土したのと、カマド右壁から瓦2点が出土した。						

所見 当住居跡はB147住を切り構築している。住居跡の西半分は、調査進行上の都合から後行させたが、同部の調査時に確認面の下げ過ぎにより検出出来なかった。住居は東壁南東隅部寄りにカマドを備えているが、南東隅部は、調査の不便により逸し平面図化が能わなかった。住居形状は、C区の第Ⅷ段階に対比される。



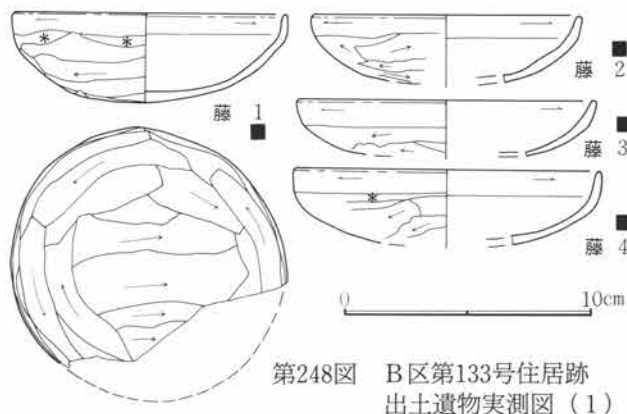
第246図 B区第132号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第247図 B区第132号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第133号住居跡		位置	31~33-B-9・10グリッド内。		残存深度	約66cm
平面形態	矩形。	規模	3.41m× 3.0m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北- <sup>78</sup> (252)度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平担。造床は壁溝以外無し。			
壁溝	全周。東壁カマド下は改修か。		傍竈坑・貯蔵穴	無し。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東西両壁に各々備える。西壁、住居南東隅部から40cm。			主軸方位	北-72度-南	
改築	有。掘り方内から焼土・灰を検出。			形状	舌状。		
規模	全長143cm・屋外長 83cm・屋内長 60cm・袖部幅116cm・燃烧部幅 73cm・煙道部幅 57cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁の補強材は袖以外検出されていない。						
	袖	左右共に長く幅が広く、土師器甕で補強する。					
煙道	奥壁中位から迎角70度で立ち上がる。			掘り方	外形は使用平面と大きな違はない。		
遺物出土状態	カマド袖から土師器長甕が2個体出土している。覆土内では土師器片がやや多い。						

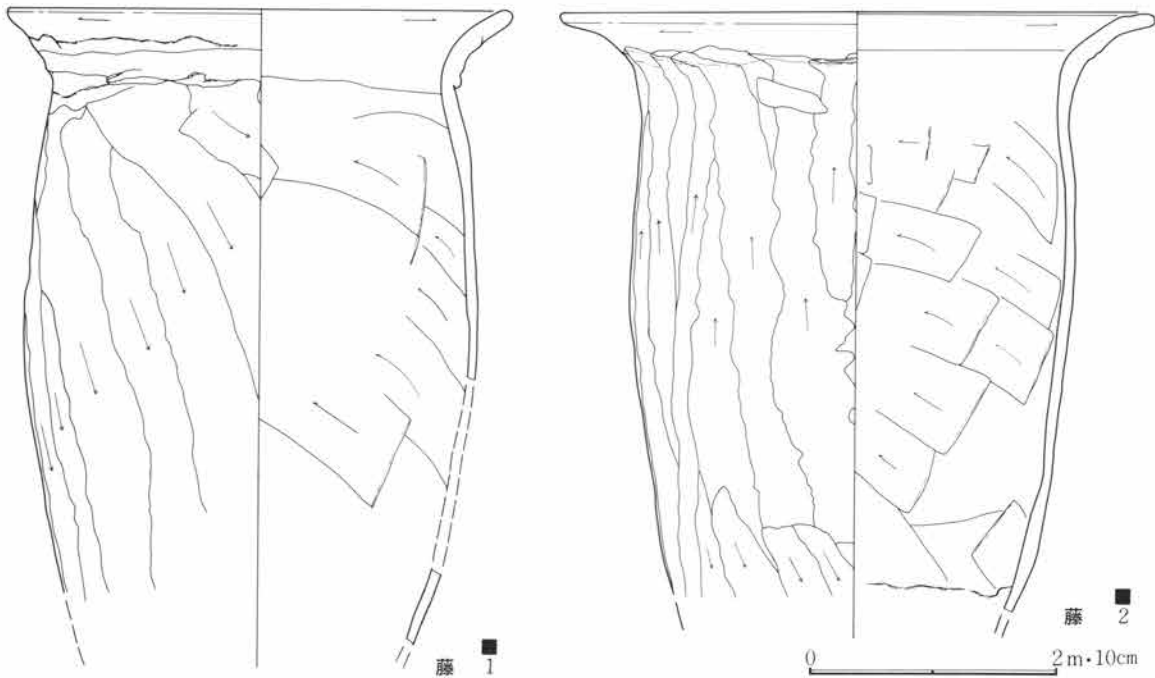
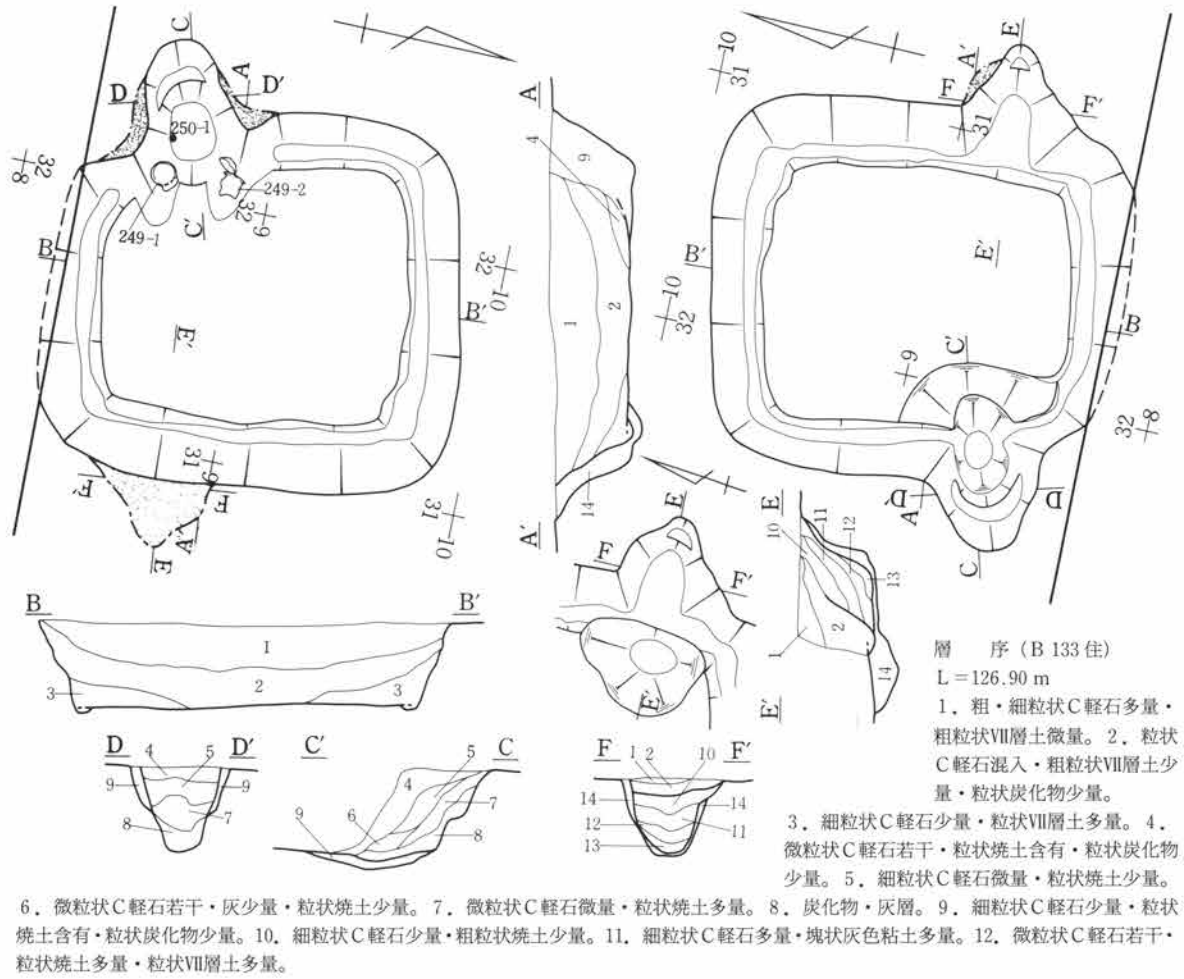


第248図 B区第133号住居跡出土遺物実測図(1)

所見 当住居跡の南壁の一部は、調査区内を東西方向に流走する水路により検出出来なかった。住居は、東・西両壁にカマドを備えているが、東壁のカマドは住居廃棄段階には使用されていない。そして、西壁カマドは、住居存続段階で構築されたと考えられる。この両カマド共に南側隅部に偏在した位置に構築している。この状況から、東カマドのE-E'で認められる様に、住居自体の改築が考慮される。西カマドは、両袖共先端側には長



甕2個体を用いている。住居形状はC区第II段階と考えられ出土遺物はC区の口段階である。

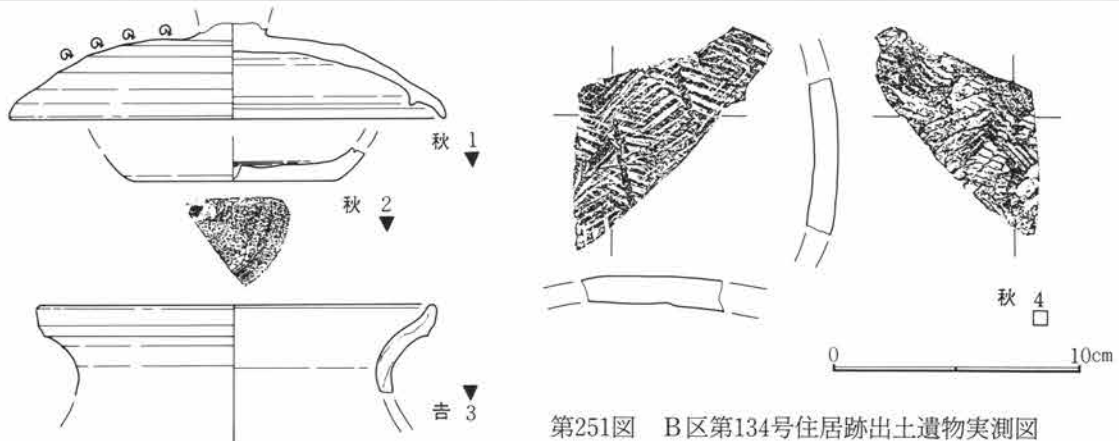


第249図 B区第133号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



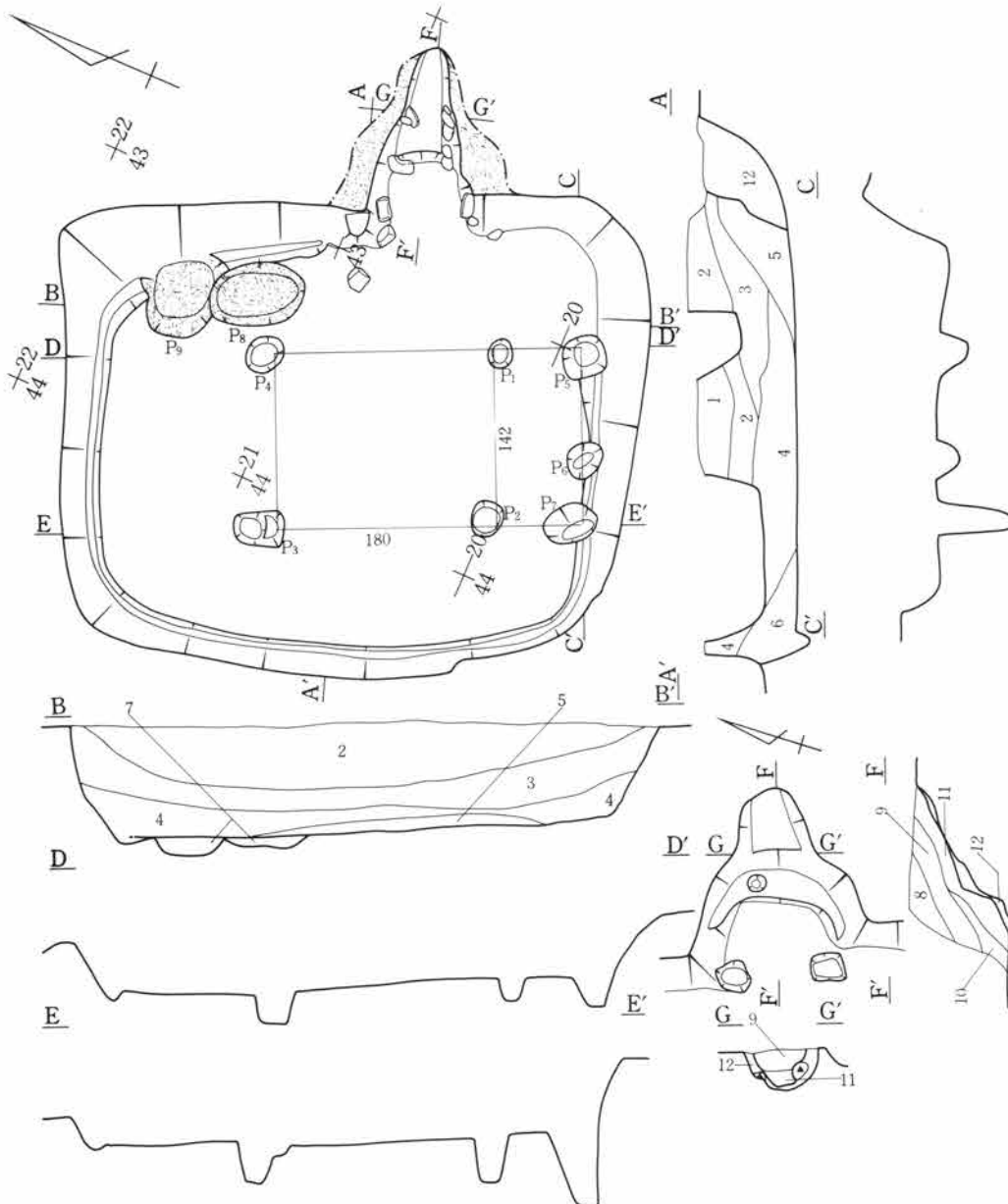
藤 1 第250図 B区第133号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第134号住居跡	位置	43~45-B-20~23グリッド内。			残存深度	約90cm
平面形態	横長方形。	規模	3.70m× 4.8m	構築基準辺	東壁	主軸方位	北-75度-南
壁	下半は垂直気味で上半は斜位気味。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。造床は北東隅部のみ。			
壁溝	南東隅部以外で検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	支柱穴P <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の4本。入口部施設P <sub>5</sub> ・P <sub>6</sub> 及びP <sub>7</sub> の3本中の2本で構築されたか。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から115cm。			主軸方位	北-75度-南	
改築	有か。掘り方内で焼土を検出。		形状	全体に長い舌状を呈する。			
規模	全長156cm・屋外長118cm・屋内長 38cm・袖部幅152cm・燃烧部幅 80cm・煙道部幅 36cm。						
焚口・燃烧部	器設部は燃烧部奥寄りに想定される。壁体基部は散漫ではあるが礎で補強される。焚口の窪みは認められなかった。						
	袖	左右共に瘤状より微小である。削り石で補強される。					
煙道	俯角20度程で立ち上がる。		掘り方	奥壁にテラスを有し全体的に大きい。			
遺物出土状態	覆土内で土器類(土師器甕類)がやや多い。又、新しい時期の遺物も上層で混入している。						



第251図 B区第134号住居跡出土遺物実測図

所見 当住居跡はB126・149・135・148住に切られている。住居は東壁中央より若干南東隅部に寄った位置にカマドを備えている。カマドは、燃烧部が正方形を呈し、奥壁上位より斜位に立ち上がる煙道を具備している。燃烧部の袖周辺・壁は礫により壁体の補強が行なわれ、煙道部の立ち上がり部も同様に補強されている。支柱穴は4本検出され、入口部施設に伴うと考えられる柱穴（P<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>）3本が検出されている。柱間の距離から36cm程を公約数とする尺度の使用が想定される。この1単位の尺度は、通有の知見からは高麗尺の使用が考えられる。そして、住居構築時の柱穴計画線を図中に示した。P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>は、形状・規模から、貯蔵穴と考えられる。住居形状は、主軸等からC区の第I段階頃と考えられる。



層 序 (B 134 住) L=127.30 m

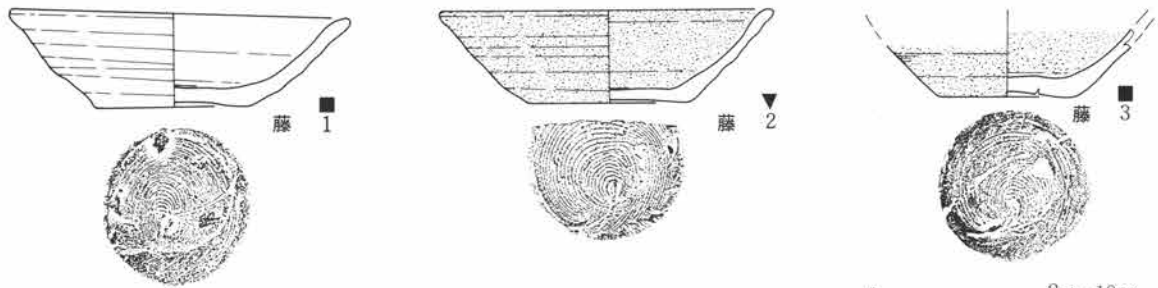
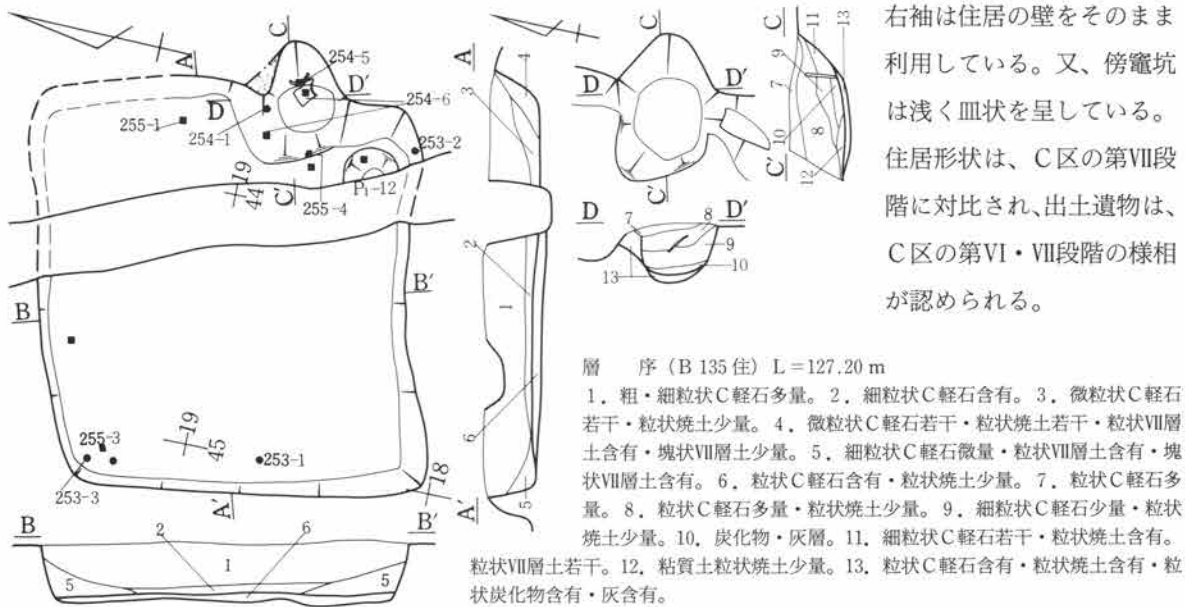
1. 粗・細粒状C軽石多量。
2. 粗・細粒状C軽石混入・粗粒状VII層土少量。
3. 粒状C軽石含有・粗粒状VII層土微量。
4. 細粒状C軽石少量・粗粒状VII層土多量。
5. 細粒状C軽石若干・粒状焼土少量・粗粒状VII層土含有。
6. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土含有・塊状VII層土含有。
7. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土混入。
8. 粒状C軽石混入・粒状焼土少量。
9. 細粒状C軽石含有・粒状焼土混入。
10. 細粒状C軽石微量。
11. 細粒状C軽石微量・塊状焼土多量・粒状炭化物含有。
12. 細粒状C軽石少量・粒状焼土少量・粒状VII層土少量。

第252図 B区第134号住居跡実測図

0 2m

遺構名称	B区第135号住居跡		位置	44~46-B-19・20グリッド内。		残存深度	約43cm
平面形態	矩形。	規模	3.28m×2.95m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-78度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。B148住の覆土を使用する部分が多い。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形乃至楕円形。深度-12cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	下位のB148住の覆土と、本住居の埋土が分別出来なかった。為未検とした。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から36cm。			主軸方位	北-77度-南	
改築	有。掘の方の焼土等が多い。			形状	短かい舌状を呈する。		
規模	全長 94cm・屋外長 43cm・屋内長 51cm・袖部幅128cm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁体の補強材等は検出されなかった。						
			袖	屋内側に長く突出する。			
煙道	未検出。		掘り方	土坑状で左袖側にテラス状になる。			
遺物出土状態	出土遺物の大半が覆土内である。土器類・瓦類は大半が破片であった。						

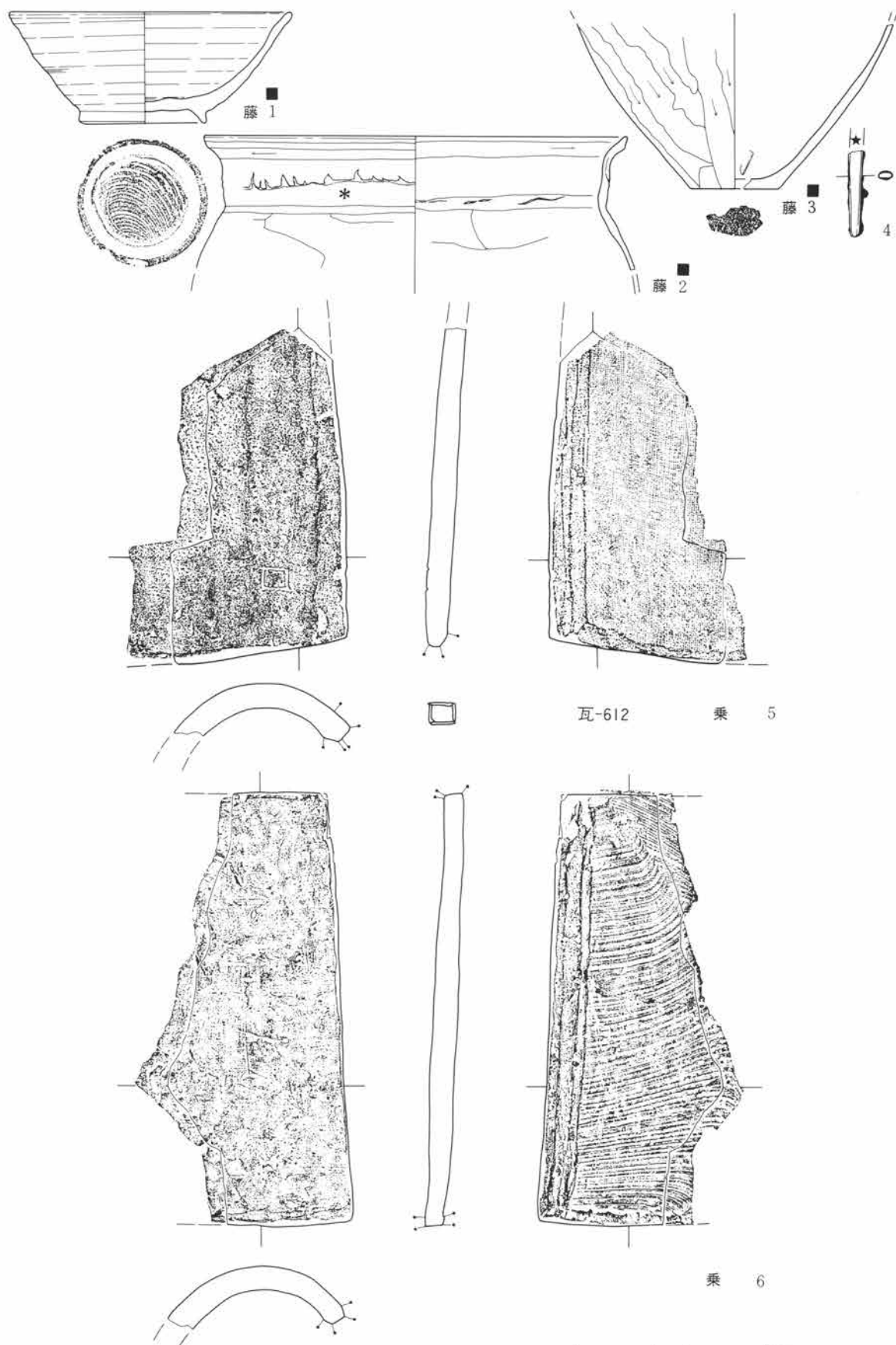
所見 当住居跡は、B148・134住を切り構築しているが、調査の不幸から北東隅部を失っている。住居は、カマドを東壁中央よりやや南東隅部寄りに備え、南東隅部には傍竈坑を備えている。又、東壁はカマド位置から北側の部分は、カマド以南部と食い違いが認められる。この為カマドの左側は壁から袖を突出させ



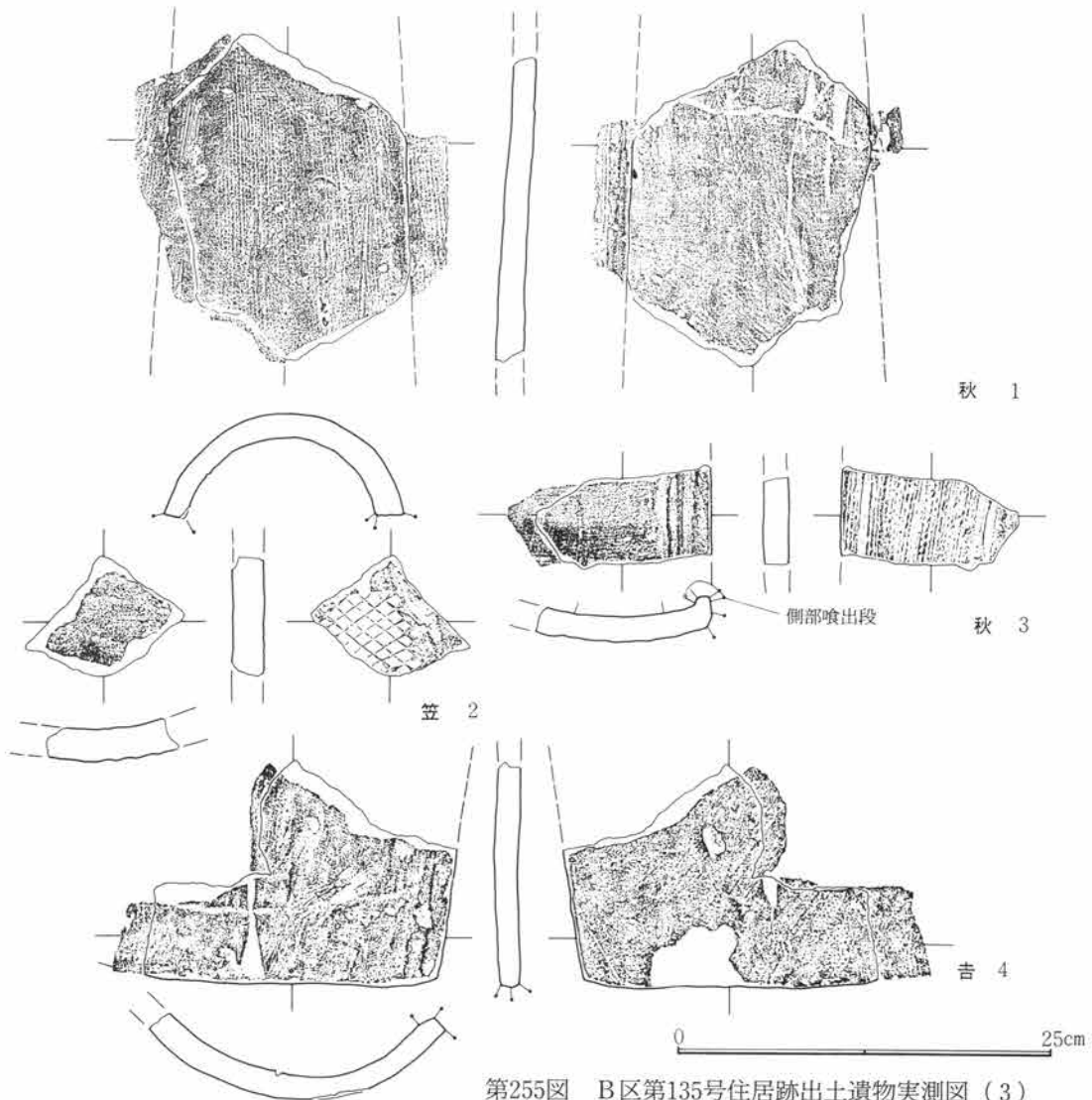
第253図 B区第135号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

0 2m・10cm

第3節 検出された住居跡について



第254図 B区第135号住居跡出土遺物実測図(2)



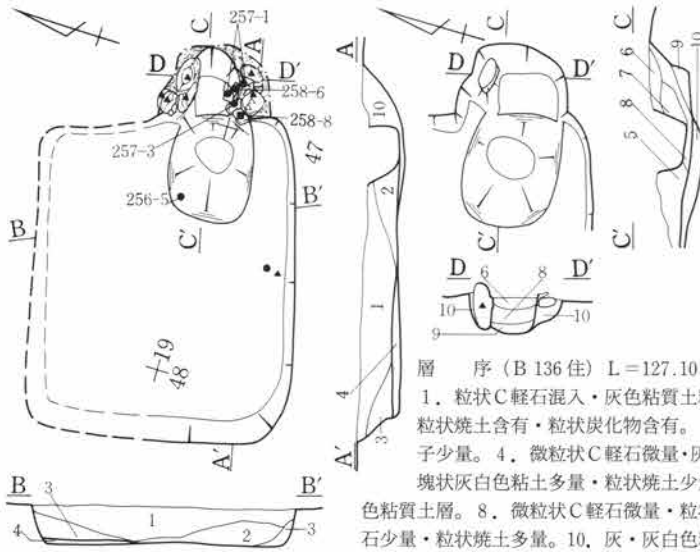
第255図 B区第135号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第136号住居跡		位置	47~49-B-19・20グリッド内。			残存深度	約30cm
平面形態	縦長方形。	規模	2.10m×2.56m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-73度-南位か	
壁	ほぼ垂直~斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。北西部に造床(貼り床)が認められる。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	顕著な状態はない。造床部は、下位のB131住の覆土を使用している可能性がある。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から18cm。				主軸方位	北-73度-南	
改築	有。右壁掘り方内から補強材を検出。			形状	舌状を呈する。			
規模	全長135cm・屋外長 55cm・屋内長 80cm・袖部幅100cm・燃焼部幅 38cm。							
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しい。右壁は礫・土器・瓦により補強され、左壁も礫を用い補強材としている。							
煙道	未検出。		袖	ほとんど無い状態。				
掘り方	方形状の燃焼部と土坑状の焚口部を検出。							
遺物出土状態	カマド部に遺物が集中している。覆土内も遺物が少なかった。							

第3節 検出された住居跡について

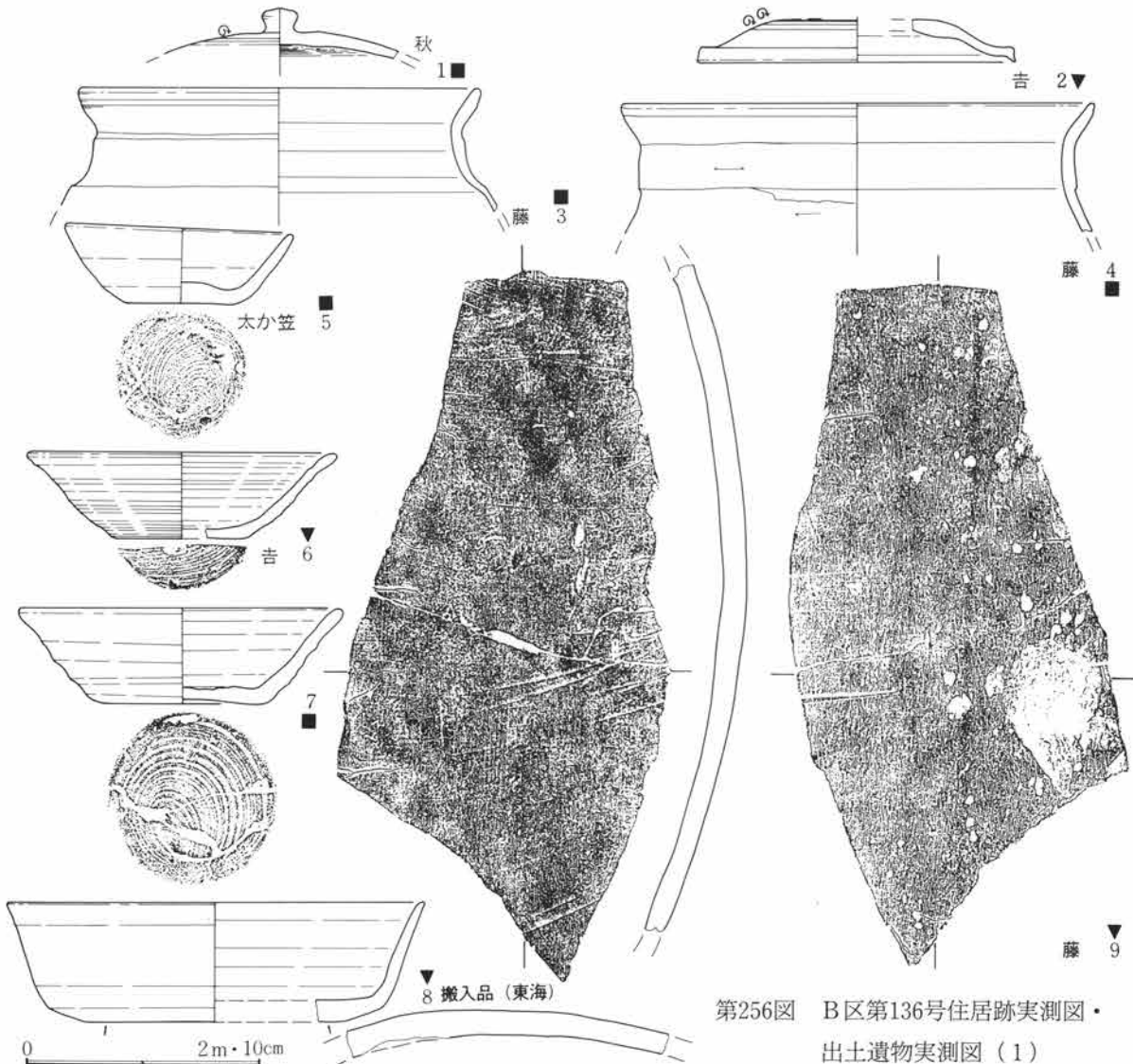
所見 当住居跡は、B131住を切り構築し、B147住に切られている。又、調査時にB131住との新旧関係が平面で看取されなかった為、断面により確認した。この為住居の北半分の平面検出は出来なかった。住居は、

今次の報文中最も小形の住居である。カマドは東壁南東隅部寄りに具備する。カマドは、燃烧部側壁の礫を多用し補強材とし、方形を基調の煙道は、燃烧部奥壁中位より立ち上がっている。住居形状ではC区の第Ⅷ段階と考えられる。出土遺物では第Ⅵ段階以前のものが多い。



層 序 (B 136 住) L=127.10 m

1. 粒状C軽石混入・灰色粘質土粒子少量。
2. 粒状C軽石少量・塊状灰白色粘土多量・粒状焼土含有・粒状炭化物含有。
3. 微粒状C軽石微量・粒状炭化物微量・灰色粘質土粒子少量。
4. 微粒状C軽石微量・灰色粒子多量・粒状炭化物多量。
5. 細粒状C軽石少量・塊状灰白色粘土多量・粒状焼土少量。
6. 細粒状C軽石少量・粒状灰白色少量。
7. 灰白色粘質土層。
8. 微粒状C軽石微量・粒状焼土含有・粒状炭化物含有・灰多量。
9. 微粒状C軽石少量・粒状焼土多量。
10. 灰・灰白色粘土の混土層。



第256図 B区第136号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

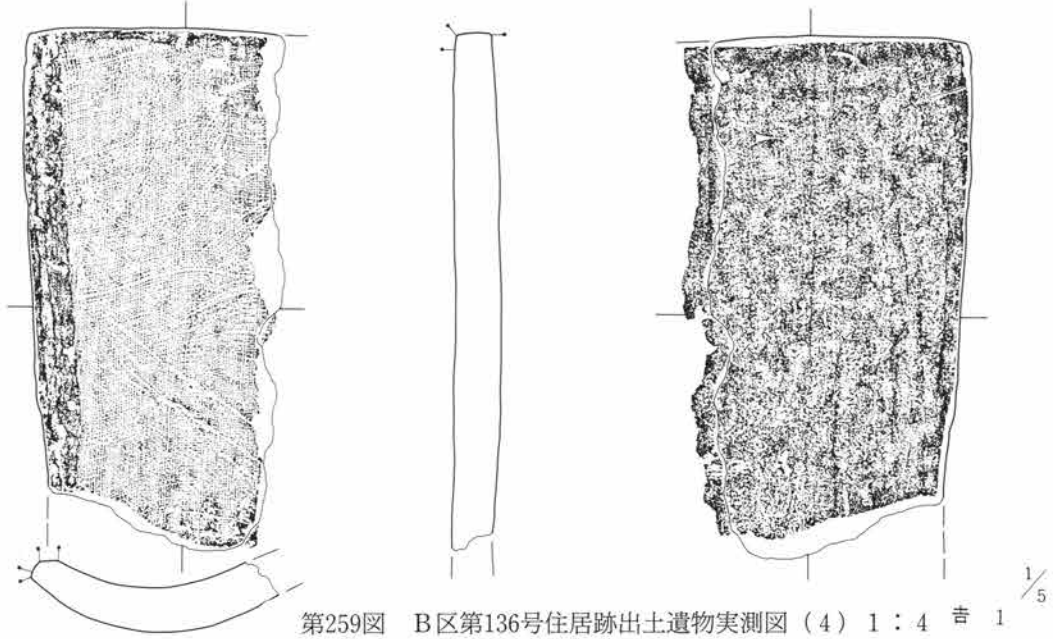






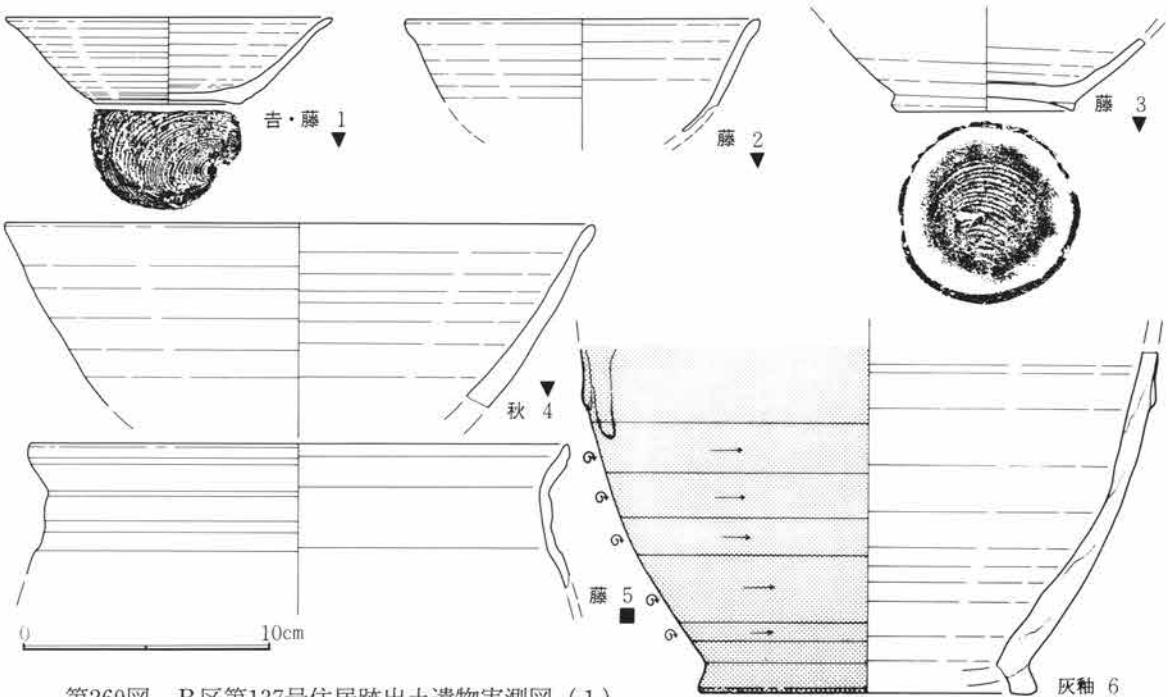
第258図 B区第136号住居跡出土遺物実測図(3)

第4章 検出された遺構・遺物



第259図 B区第136号住居跡出土遺物実測図(4) 1:4 吉 1

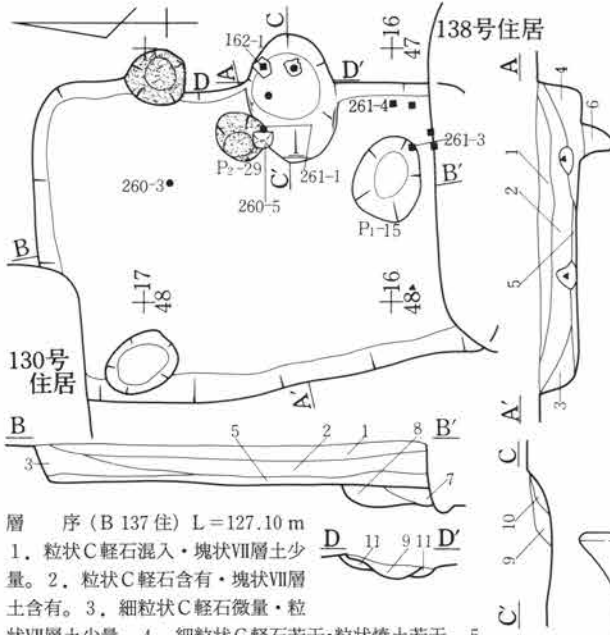
遺構名称	B区第137号住居跡		位置	48・49-B-16~18グリッド内。			残存深度	約32cm
平面形態	横長方形	規模	2.56m×3.65+αm	構築基準辺	東壁	主軸方位	北-90度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。69×55cm・深度-15cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
遺物出土状態	南東隅部周辺に若干集中するかの如くであるが、大半が覆土内での出土である。							



第260図 B区第137号住居跡出土遺物実測図(1)

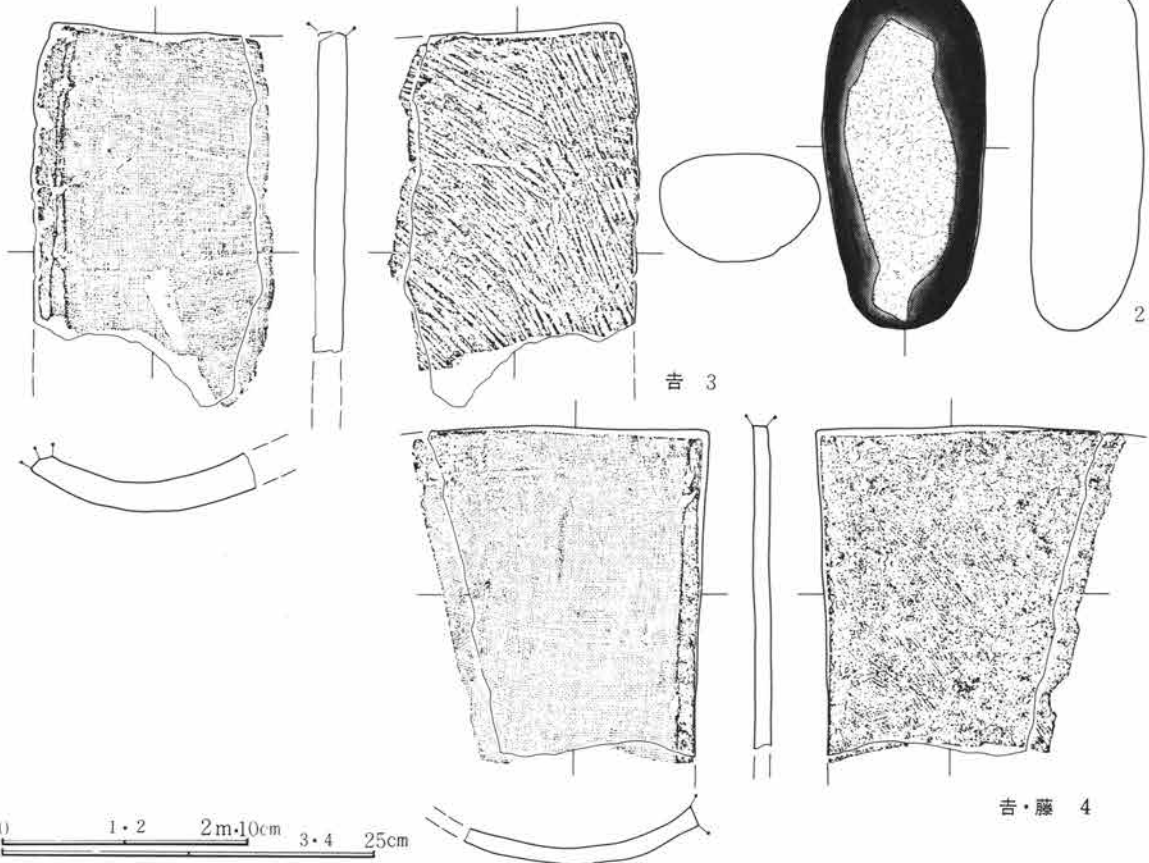
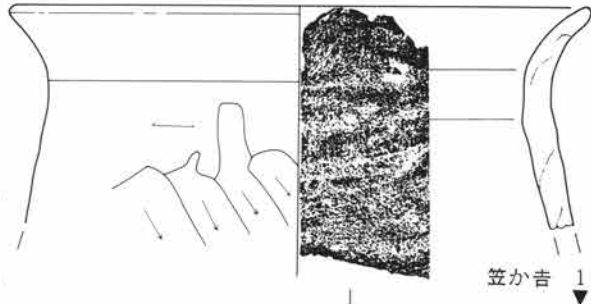
第3節 検出された住居跡について

所見 当住居跡はB130・138住・60号土坑と重複する。住居は、東壁のほぼ中央にカマドを備えている。図に示した住居跡は、掘り方時の平面図である。P<sub>1</sub>は、土層断面から住居跡床面下の存在であり、南壁側の掘り方がやや起伏が顕著であったため、南側の立ち上がりは不明な部分がある。又、P<sub>2</sub>は、住居廃棄以前に柱穴状の施設として存在している。住居形状はC区第X段階に対比され、出土遺物は、第261図-1があり、整合性が認められるものの、B138住との新旧関係に矛盾がある。この点から調査時の新旧関係に誤認が考えられる。

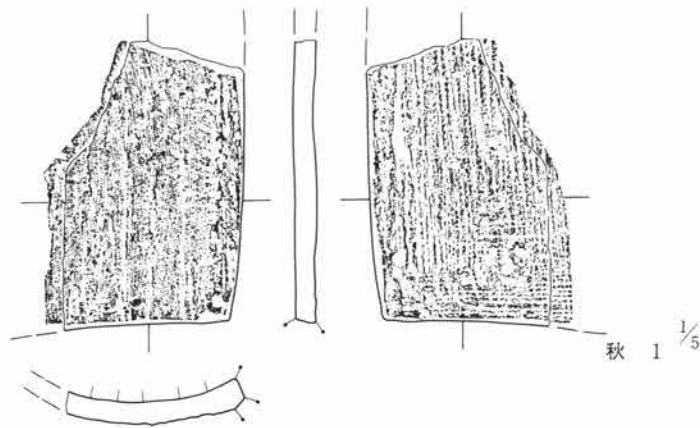


層序 (B137住) L=127.10 m

1. 粒状C軽石混入・塊状VII層土少量。
2. 粒状C軽石含有・塊状VII層土含有。
3. 細粒状C軽石微量・粒状VII層土少量。
4. 細粒状C軽石若干・粒状焼土若干。
5. 細粒状C軽石微量・粒状焼土少量・粒状VII層土若干。
6. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土少量。
7. 細粒状C軽石微量・粒状VII層土多量・粒状炭化物少量。
8. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土多量・粒状VII層土少量。
9. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土少量・粒状焼土少量・粒状炭化物少量。
10. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土混入。
11. 細粒状C軽石微量・粒状VII層土微量・粒状焼土少量・灰多量。



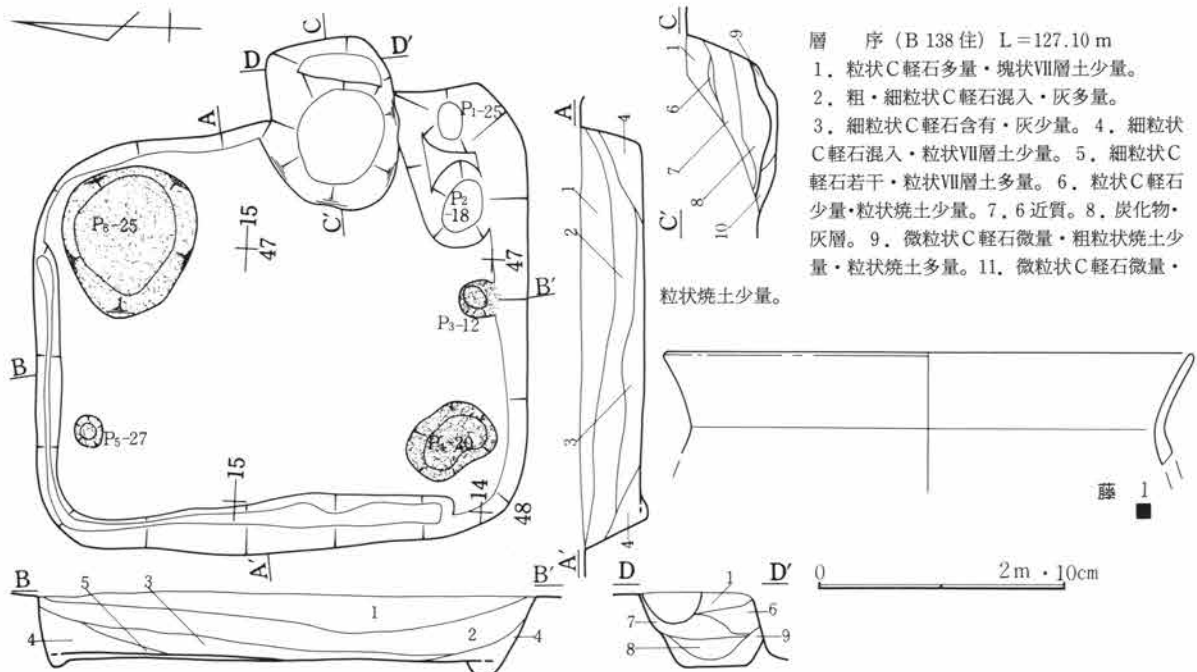
第261図 B区第137号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



第262図 B区第137号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第138号住居跡	位置	47~49-B-14~16グリッド内。			残存深度	約52cm
平面形態	矩形。	規模	3.50m×4.0m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-87度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面 南西隅部周辺が貼り床状の造床が認められた。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴 P <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> , P <sub>1</sub> は楕円形。70×55cm・深度-18cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	P <sub>4</sub> ~P <sub>6</sub> が床面下での検出であり、P <sub>6</sub> は土坑状の掘り込みである。造床は貼り床状であった。						
遺物出土状態	床面直上での出土遺物は皆無であった。						

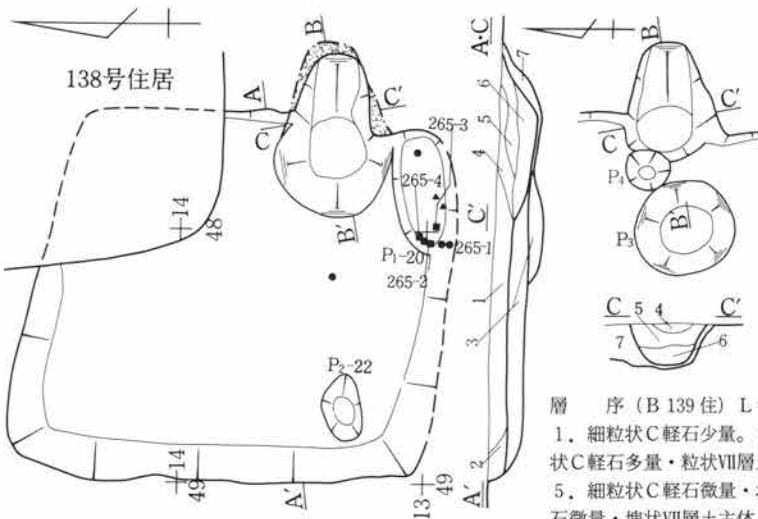
所見 当住居跡は、調査時点では前述のB137住を切ると判断しているが、前頁でも記述したとおりで、B137住の様相からすれば、この新旧関係は誤認であったことが考えられる。住居は、東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部には傍竈坑を具備している。この傍竈坑は内側で2基が重複する状態となっているが、新旧関係等の時間差による所産かは確認されていない。この外のP<sub>3</sub>~P<sub>6</sub>の内P<sub>3</sub>は入口施設に伴なうことが想起され、P<sub>4</sub>は貯蔵穴的存在とも思われる。住居形状はC区第VI段階頃と考えられる。



第263図 B区第138号住居跡実測図・出土遺物実測図

遺構名称	B区第139号住居跡		位置	48・49-B-13~15グリッド内。		残存深度	約13cm
平面形態	梯形。	規模	2.90m×3.40m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	全面造床。平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・長楕円形。95×45cm・深度-20cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体的に平坦。カマド前面にP <sub>3</sub> (円形土坑状)を検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から30cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	無か。掘り方内での焼土粒がない。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長128cm・屋外長 57cm・屋内長 71cm・袖部幅 95cm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁には補強材等の施設は認められなかった。						
	袖	左袖は調査の下手際で欠失している。					
煙道	未検出。		掘り方	舌状を呈し使用面形状と大きな異なりは無い。			
遺物出土状態	傍竈坑内に遺物やや集中する。他は覆土内での土器類・瓦類がある。						

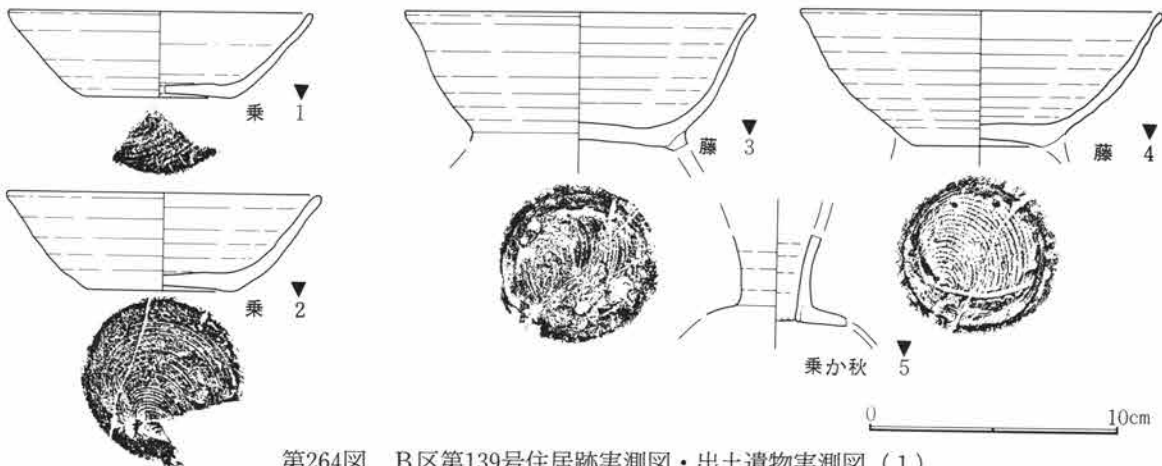
所見 当住居跡はB138住と重複している。住居は東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部には長楕円形状の傍竈坑を具備している。カマドは、左袖を調査の下手際で失なっている。煙道は燃烧部底



面より40度程で立ち上がっており、確認面より更に斜上位方向に延びたものと考えられる。尚、住居平面図は、カマドを除き掘り方面での状態である。住居形状では、カマドの特徴からC区の第VI段階に対比され、出土遺物も同様に第VI段階の様相が認められる。

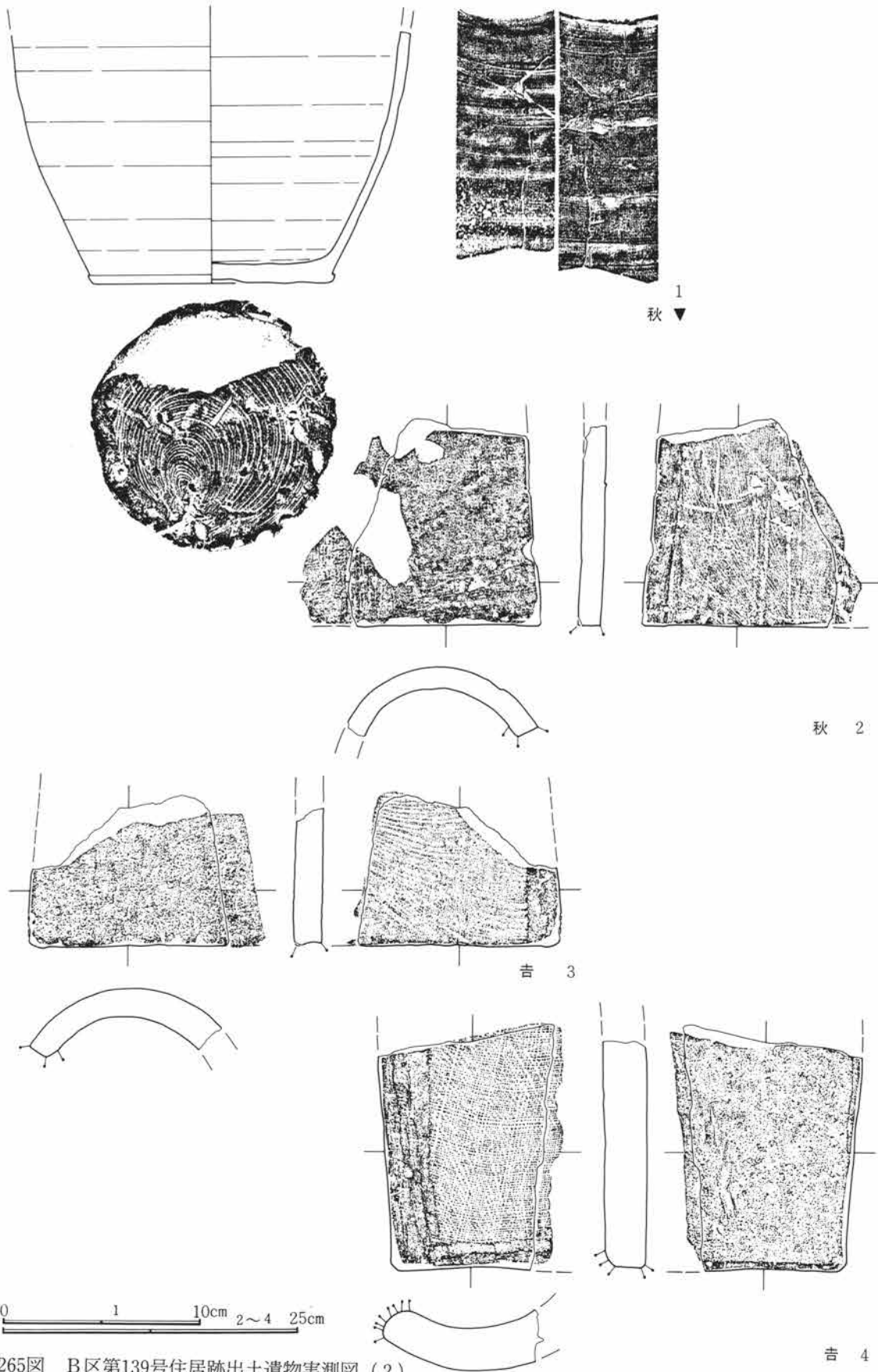
層序 (B 139 住) L=127.10 m

1. 細粒状C軽石少量。
2. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土多量。
3. 細粒状C軽石多量・粒状VII層土少量。
4. 細粒状C軽石若干・塊状焼土若干。
5. 細粒状C軽石微量・塊状焼土多量。
6. 炭化物・灰層。
7. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土主体。



第264図 B区第139号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



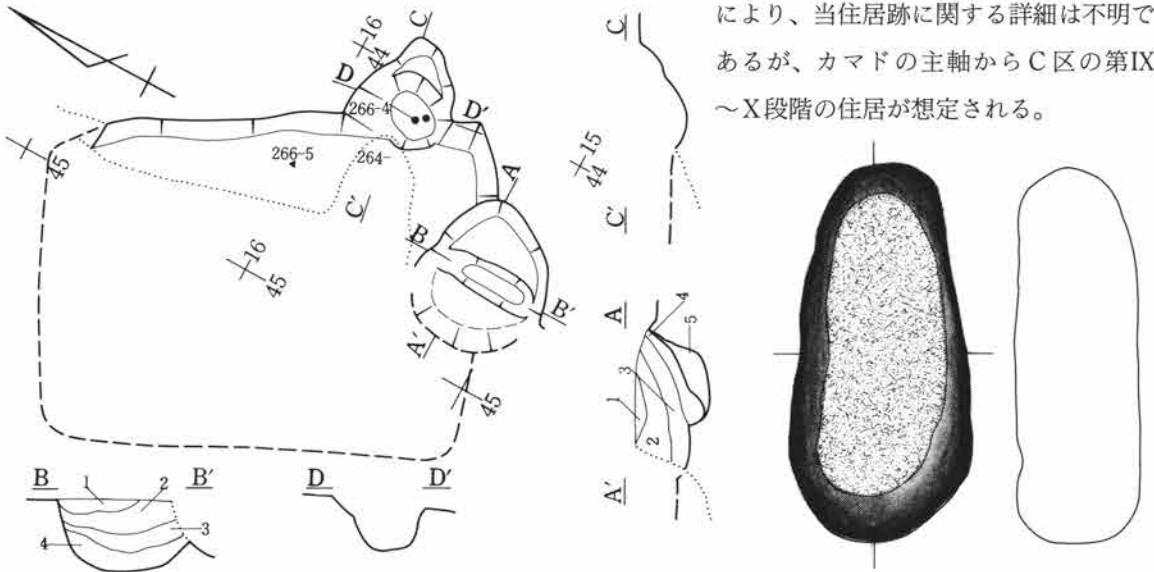
第265図 B区第139号住居跡出土遺物実測図 (2)

遺構名称	B区第140号住居跡	位置	45-B-15・16グリッド内。	残存深度	約35cm
調査の不手際により詳細不詳。					

遺構名称	B区第153号住居跡	位置	44~46-B-15~17グリッド内。	残存深度	約40cm
平面形態	横長方形。	規模	(2.55)m×(3.65)m	構築基準辺	不分明
		主軸方位	北-62度-南位か		
調査不手際・B140号住の破壊により詳細不詳。					

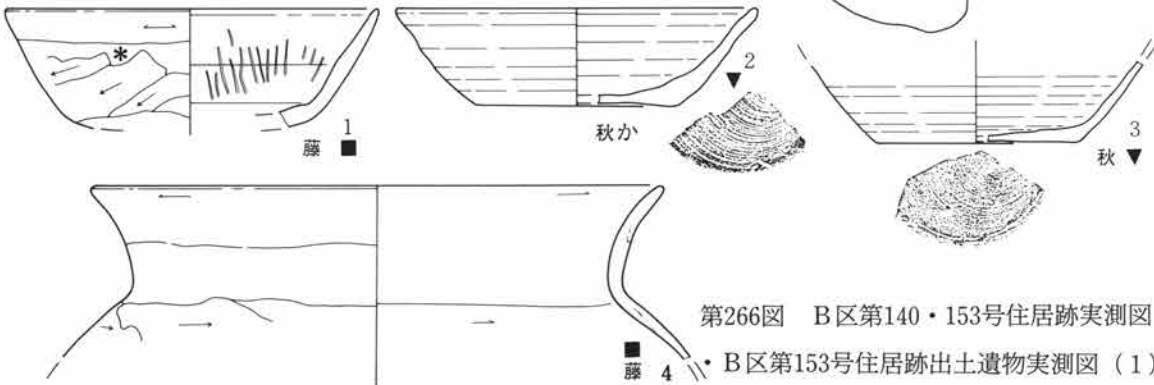
所見 当住居跡はB150・153住を切り構築しているが、検出されたのはカマドのみである。これは、調査時に、B153住を含め、B150住の1軒分の住居跡として調査着手したためによるもので、B150住の調査途中で本住居跡の存在を知り、B150住のカマド調査時点でB153住の存在も明らかとなった。この調査時の不手際

により、当住居跡に関する詳細は不明であるが、カマドの主軸からC区の第IX～X段階の住居が想定される。



層序 (B140住) L=127.10 m

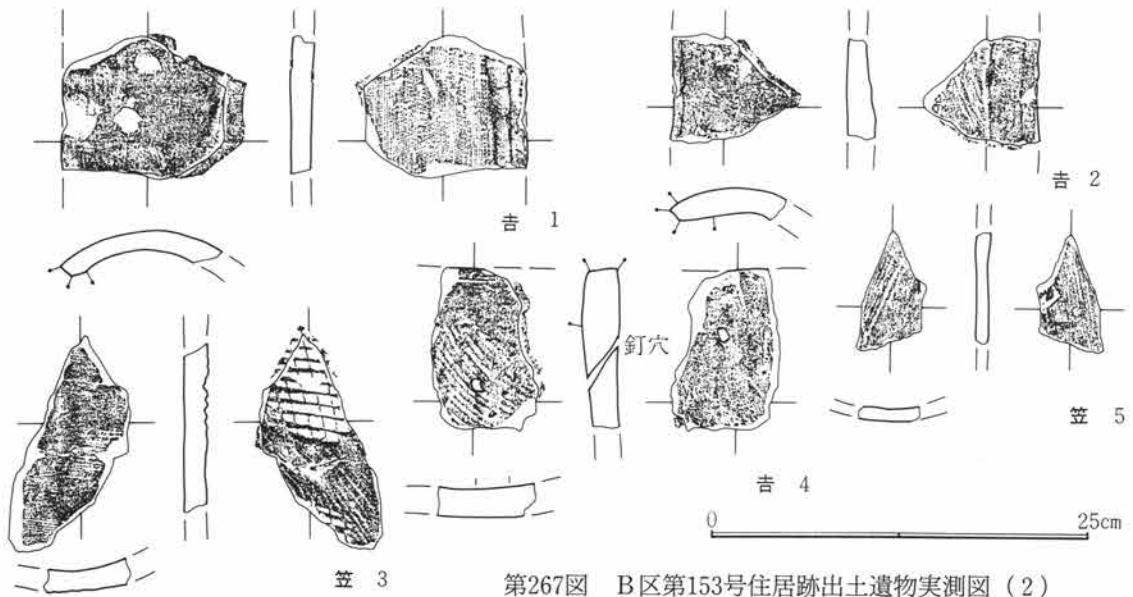
1. 粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石少量・塊状粘土含有。3. 細粒状C軽石少量・塊状焼土含有。4. 炭化物・灰層。5. 微粒状C軽石含有・粒状焼土含有。



第266図 B区第140・153号住居跡実測図

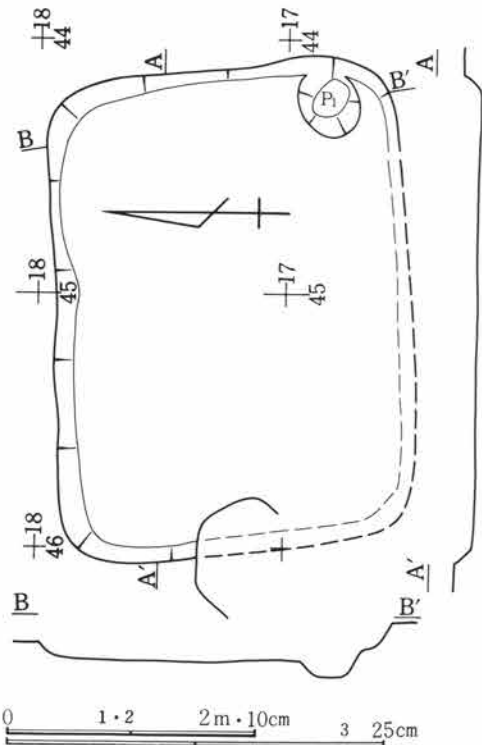
■ 藤 4 ▼ 秋

所見 当住居跡は前述のB140住に切られ、B150住を切っている。住居は、東壁中央より南東隅部に偏在してカマドを備えている。傍竈坑は検出されなかった。そして、前述B140住所見でも記述したとおり、調査時の不手際により、住居跡の大半を失っている。この為、詳細に就いては不分明な点が多い。住居形状はカマドの位置からC区の第VIII段階に対比されるが、遺物の様相は、B150住の時期のものが混在している。



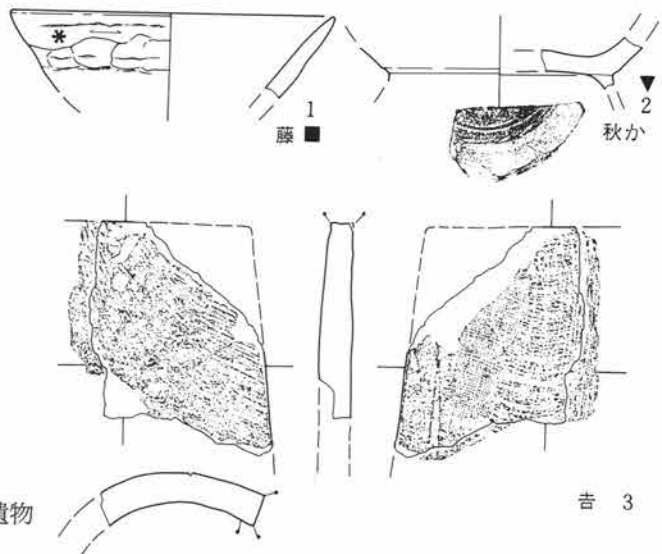
第267図 B区第153号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第141号址跡		位置	45・46-B-19・18グリッド内。		残存深度	約20cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.83m×2.86m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-87度-南位か
壁	詳細不分明。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。56×50cm・深度-22cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
遺物出土状態	覆土内から極めて少量の土器類・瓦の出土があったのみである。						



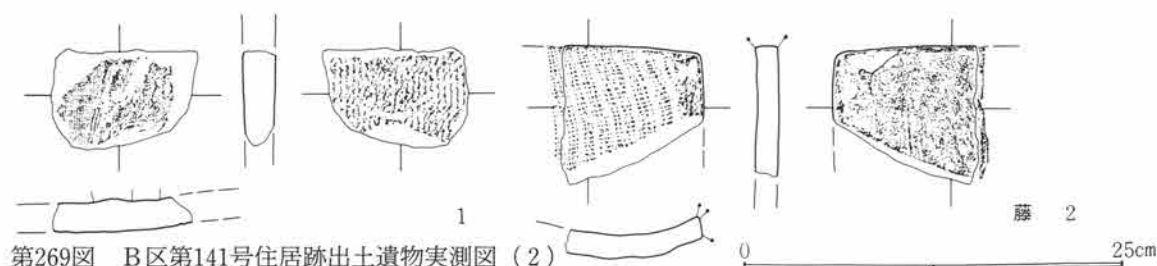
第268図 B区第141号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

所見 当住居跡はB150・153住を切り構築しているが、調査時の不手際により南側を失っている。この両者間の新旧関係は土層断面で確認している。住居は、検出部にはカマドが認められなかったが、B150住と重複する部分でも認められなかった。時期は新しい段階以降と考えられる。





第3節 検出された住居跡について



第269図 B区第141号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第142号住居跡	位置	45~47-B-13~15グリッド内。			残存深度	約60cm
平面形態	横長方形。	規模	3.03m×4.30m	構築基準辺	全壁か	主軸方位	北-89度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	西壁下で検出。幅員30cm。		傍竈坑・貯蔵穴	無し。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-90度-南位か	
改築	有。掘り方土に焼土が認められた。		形状	馬蹄形状。			
規模	全長104cm・屋外長 48cm・屋内長 56cm・袖部幅100cm・燃烧部幅 72cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁には補強材等は認められなかった。		袖	右袖は地山砂質土の削り出し材で補強している。			
煙道	未検出。		掘り方	やや舌状を呈する状態である。			
遺物出土状態	B143住の破壊により不分明。カマド内で少量の土師器が出土している。						

遺構名称	B区第143号住居跡	位置	44~46-B-13~16グリッド内。			残存深度	約52cm
平面形態	横長方形。	規模	(3.50)m×(5.10)m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-82度-南位か
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土及び、B142住の覆土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。P <sub>2</sub> は入口施設の柱穴か。						
掘り方	未確認部が多く不分明。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から220cm位か。			主軸方位	北-82度-南	
改築	有。掘り方内から焼土・灰を検出。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長100cm・屋外長 36cm・屋内長 64cm・袖部幅 83+αcm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。改築以前は壁は礫により補強されている。		袖	左袖は微小の瘤状である。右袖部はB141住の破壊で不分明。			
煙道	未検出。		掘り方	楕円形状を呈する土坑状の状態である。			
遺物出土状態	覆土内の出土はやや多いが、調査自体に精緻さを欠く為詳細不詳。						

遺構名称	B区第151号住居跡	位置	47-B-13~15グリッド内。			残存深度	約36cm
B138・142号住の破壊により詳細不詳。形状は正方形に類似する形状と思われる。							

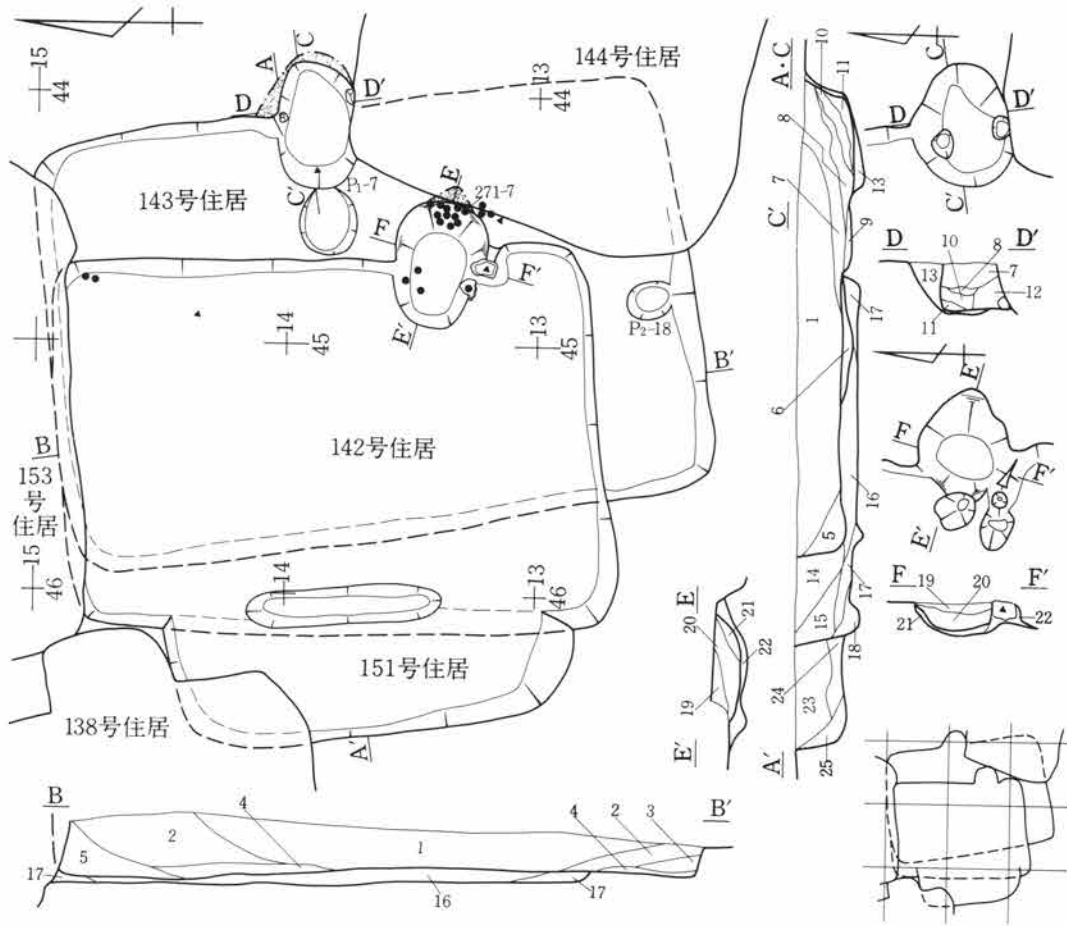
所見 (B143住) 当住居は、B142・151・150住を切り構築し、B140・144住に切られている。調査段階では、当住居とB142・151住の重複が確認されていたが、B142住との新旧関係は平面では認められなかった為、

第4章 検出された遺構・遺物

断面確認とした。この為、3基の住居を一挙に調査した。この結果、当住及びB142住の西壁を逸している。住居は、東壁中央よりやや北東隅部寄りにカマドを備えるが、南東部ではB144住の破壊により、傍竈坑の確認は行なえなかった。カマドは、比較的燃焼部の広い形状で、左右両壁を礫により補強されている。又、カマド掘り方では、袖部周辺の補強材の据え方が二ヶ所で検出されたが、位置的に廃棄時の補強材の据え方ではなかった。この点から、カマドは確実に据え変えがあったと判断される。住居形状はC区の第X段階に対比されるが、カマド形状が異なっている。出土遺物は夾雑が著しい。

**所見 (B142住)** 当住居跡は、上述のB143住に切られ大半が削平されているが、住居跡の床面直上層迄が残存していた為、住居形状は平面図化が出来た。住居跡は、東壁で南東隅部に偏在する位置にカマドを備えている。傍竈坑は検出されなかった。カマドは遺存が悪いものの、右袖には地山砂岩質の載り出し材が残存している。住居形状はC区第VIII段階に対比されるが、カマドの状態は第III段階の時期と推定される。

**所見 (B151住)** 当住居跡は、B143・142住に大半を破壊されている為、詳細は不明である。

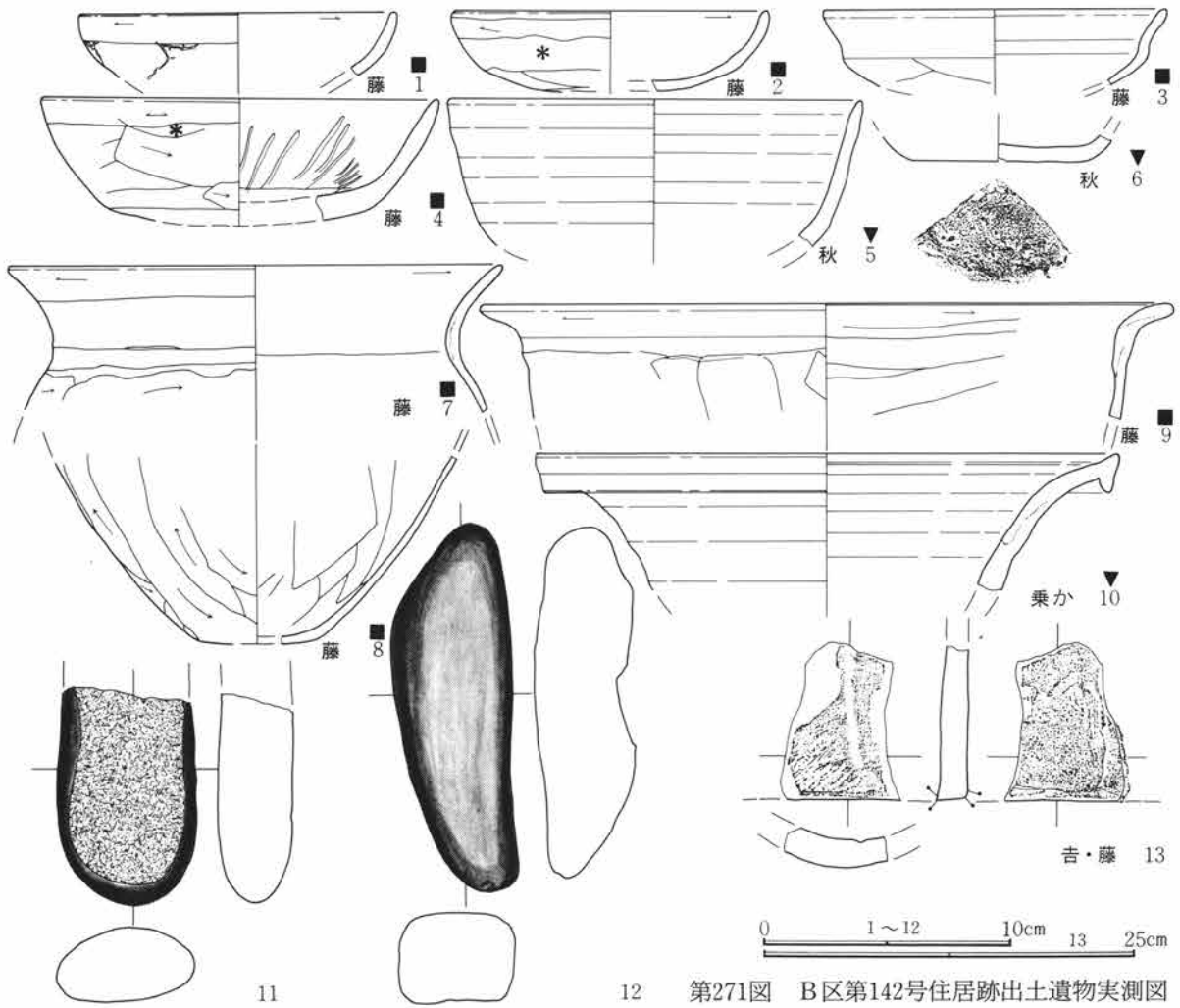


層 序 (B142・143・151住) L=127.10m

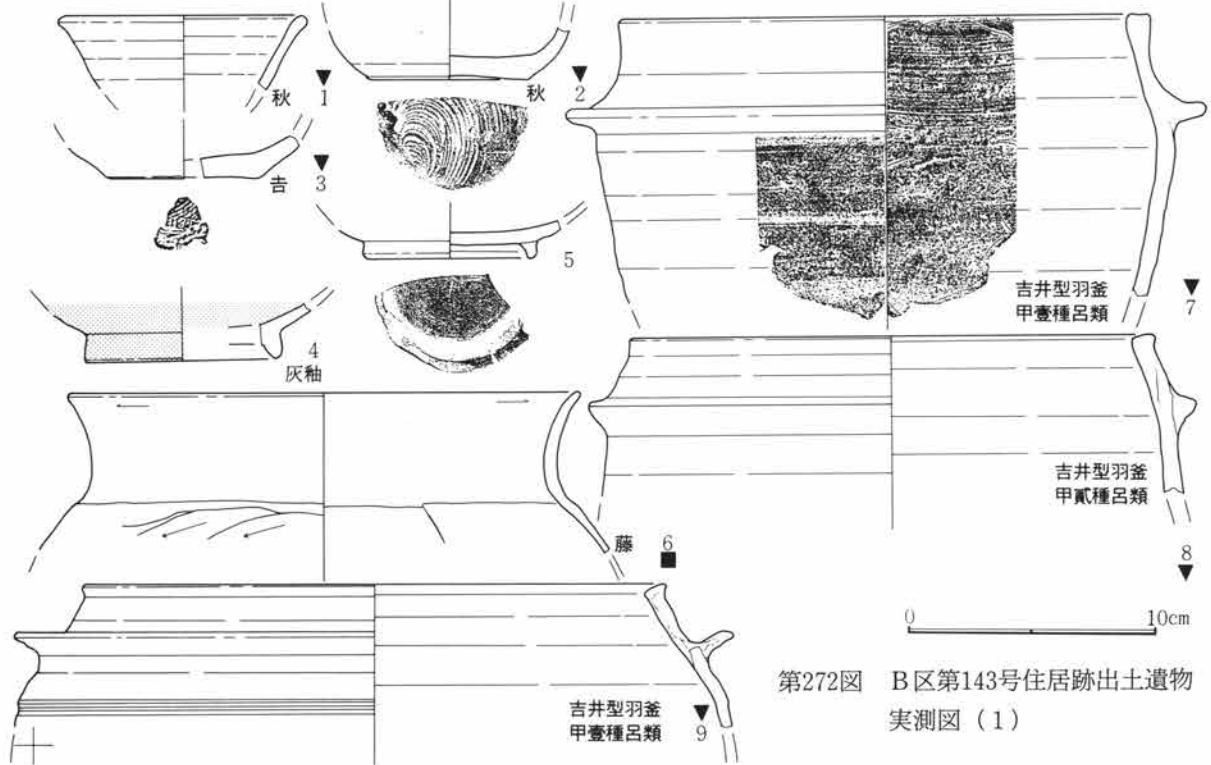
1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石混入・粒状VII層土含有。3. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土含有・塊状VII層土少量。
4. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土混入。5. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土含有・塊状VII層土少量。6. 粒状C軽石若干・粒状焼土少量。
7. 粒状C軽石少量・粒状焼土少量。8. 細粒状C軽石少量・塊状焼土多量。9. 塊状焼土層。10. 細粒状C軽石少量・粒状粘土多量。11. 炭化物・灰層。12. 細粒状C軽石微量・粒状焼土少量。13. 細粒状C軽石少量・粒状焼土少量・灰少量。(B143住)
14. 粒状C軽石混入・粒状VII層土少量。15. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土含有。16. 粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。
17. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土若干・粒状VII層土混入。18. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土混入・塊状VII層土含有。
19. 細粒状C軽石少量・粒状焼土少量・粗粒状焼土少量。20. 細粒状C軽石微量・粒状焼土少量・塊状焼土多量。21. 細粒状C軽石若干・粒状焼土少量・粒状炭化物含有。22. 微粒状C軽石若干・粒状焼土微量。23. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土多量。(B142住)
24. 粒状C軽石含有。25. 粒状C軽石少量。26. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土多量・粒状VII層土多量。(B151住)

第270図 B区第142・143・151号住居跡実測図 0 2m

第3節 検出された住居跡について

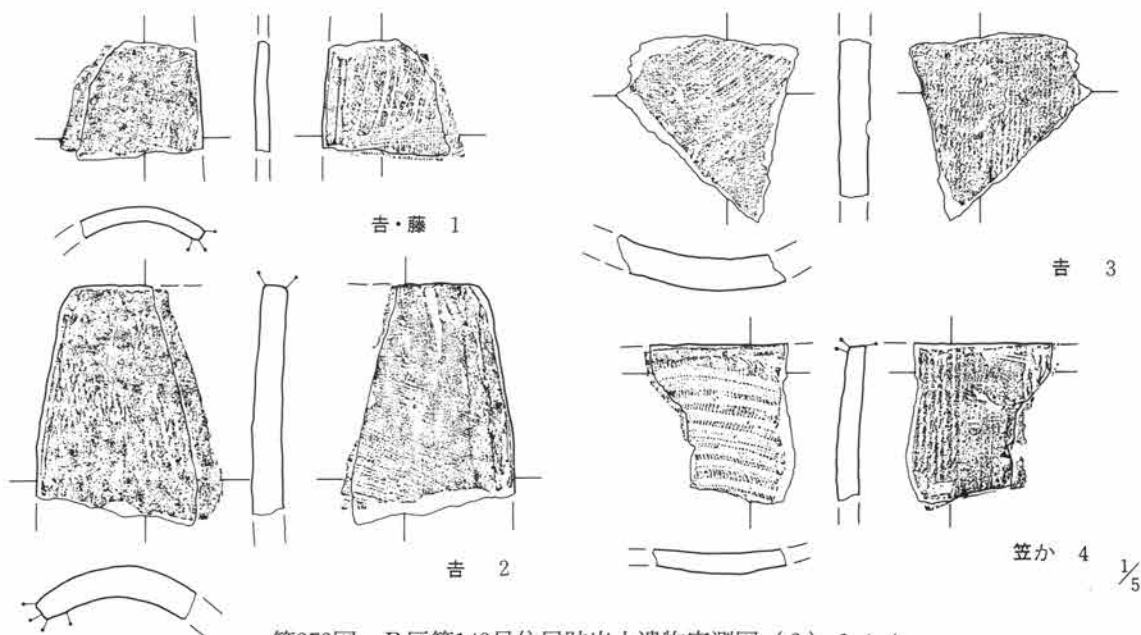


12 第271図 B区第142号住居跡出土遺物実測図



第272図 B区第143号住居跡出土遺物実測図(1)

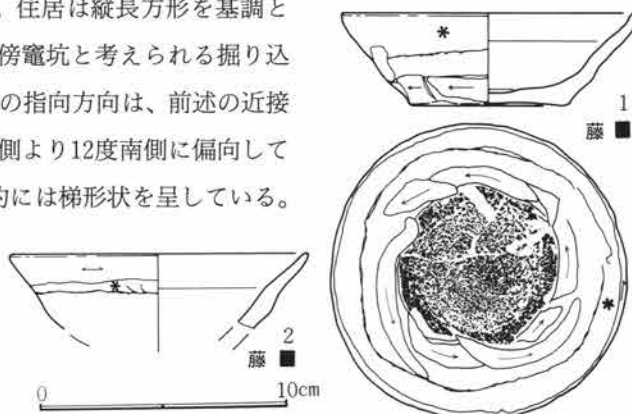
第4章 検出された遺構・遺物



第273図 B区第143号住居跡出土遺物実測図(2) 1:4

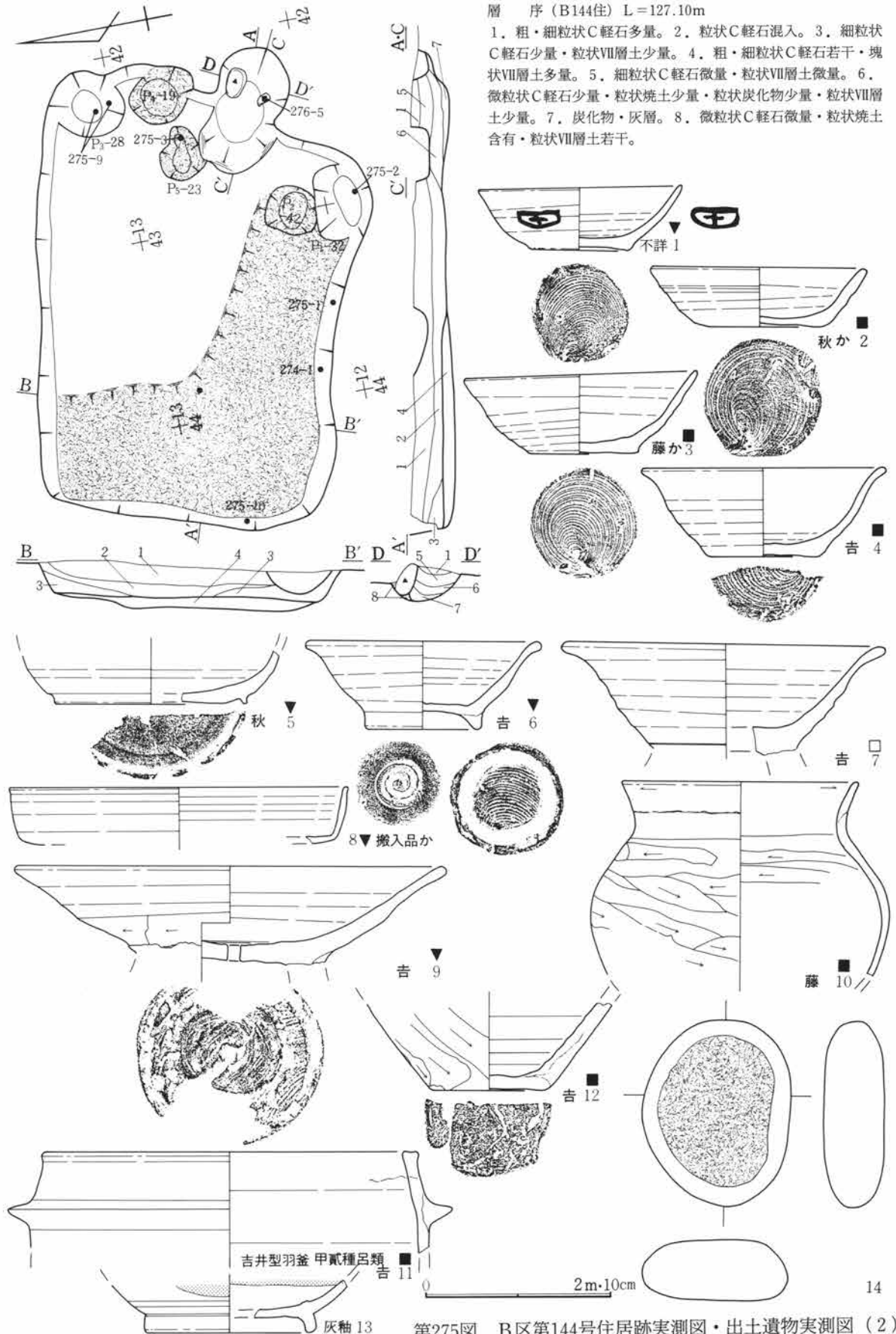
遺構名称	B区第144号住居跡		位置	43~45-B-12~14グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.58m×3.53m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-102度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	西側及び南西部側で造床が認められた。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・隅丸長方形。80×53cm・深度-32cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	造床下でVII層土を底面とする。底面は平坦である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から120cm。			主軸方位	北-123度-南	
改築	不明。			形状			
規模	全長136cm・屋外長 70cm・屋内長 66cm・燃烧部幅 46cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、浅く皿状を呈し燃烧空間と重複する部分が著しい。左壁は礫により補強されている。						
	袖	認められなかった。					
煙道	未検出。			掘り方	長楕円形状を呈する。		
遺物出土状態	P <sub>1</sub> ・P <sub>3</sub> ~P <sub>5</sub> 内で完形個体第273図-3の出土がある。						

所見 当住居跡はB143住を切り構築している。住居は縦長方形を基調とし、東壁中央にカマドを備えている。そして、傍竈坑と考えられる掘り込みは、P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の5ヶ所で認められている。住居の指向方向は、前述の近接するB103~106住の4軒とはほぼ同様であり、東側より12度南側に偏向している。又、東壁は40度南方へ偏向しており、全体的には梯形状を呈している。そして、主軸の方向からB103住等と何らかの関係が示唆される。カマドは、焚口部の窪みが大きく燃烧部全体は丸味の強い形状となっている。住居形状は対比し得るものがないが、カマド形状はD区の第IV段階に対比される。

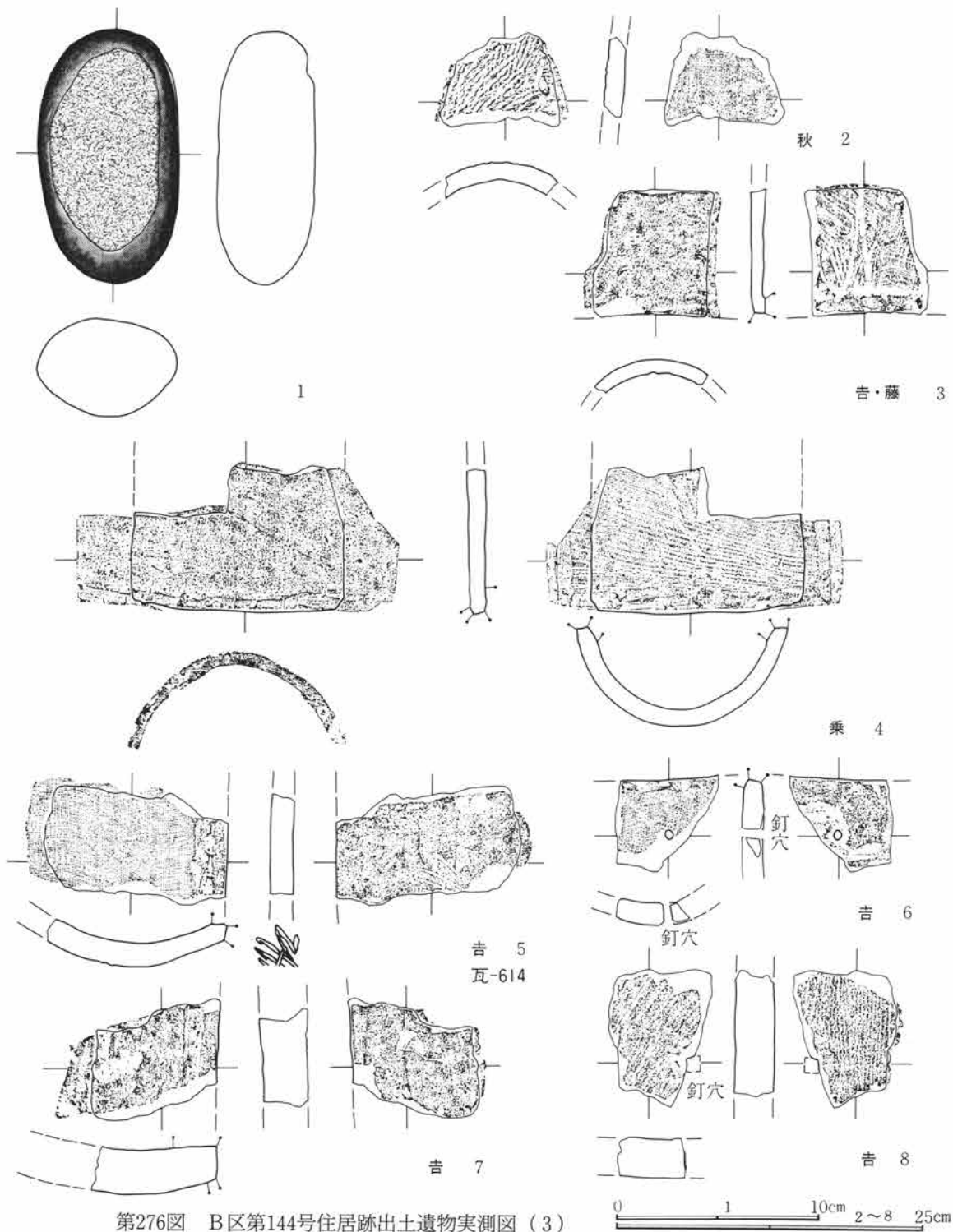


第274図 B区第144号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について



第275図 B区第144号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



第276図 B区第144号住居跡出土遺物実測図(3)

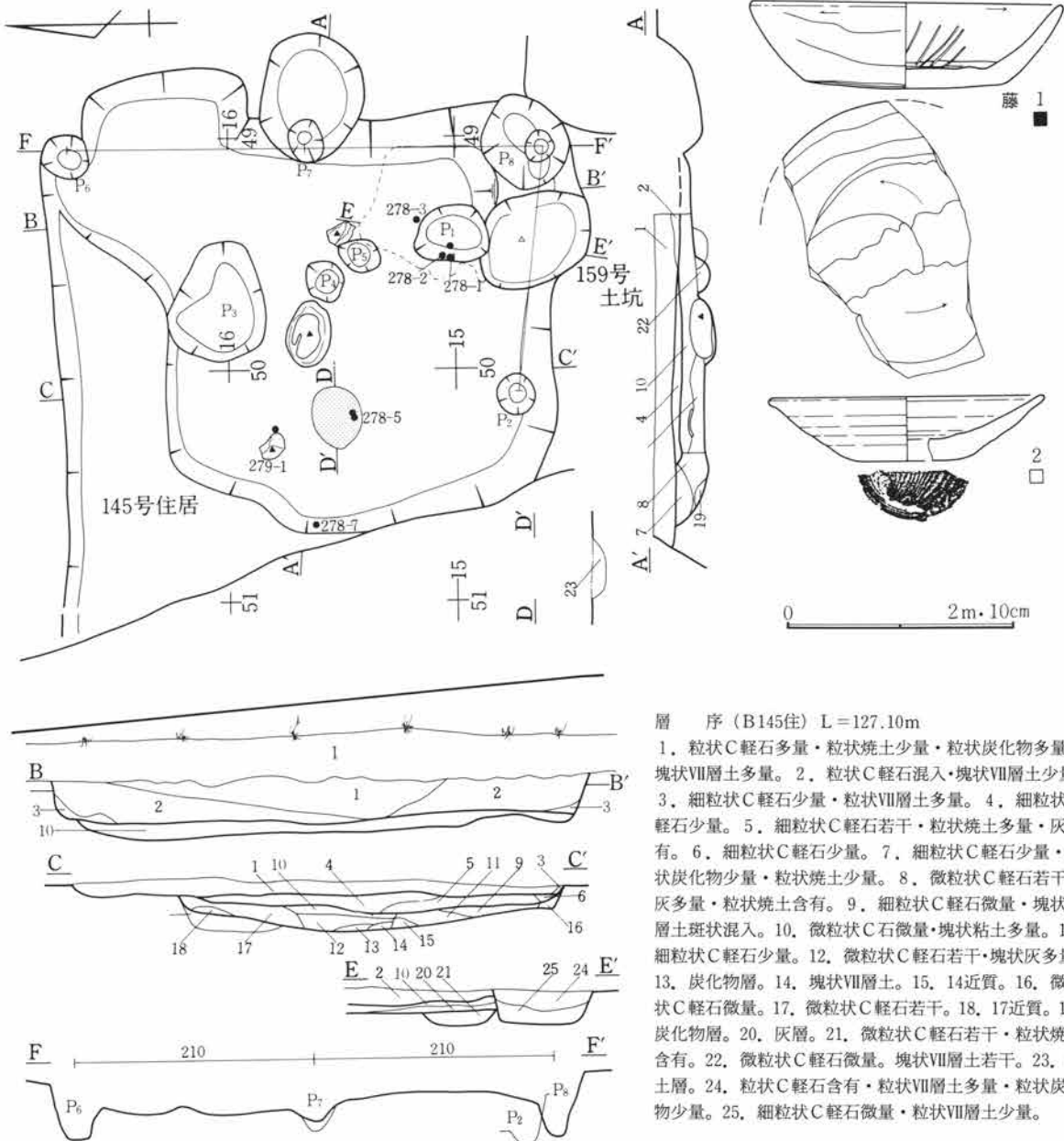
所見 当遺構は調査時点では住居跡と認識していたが、整理を実施した結果特殊な小鍛冶遺構であることが判明した。以下“小鍛冶跡、”として記述する。

当跡の床面は3面が土層断面で確認され、最下層の構築頭初の床面からは小鍛冶に伴う土坑・炉・台石が検出されている。又、 $P_2 \cdot P_6 \sim P_8$ ピットは、東壁から南壁にかけて検出されている。そして、これらの柱間は210cmの等間であり、公約数として30cmが得られる。この公約数は通有知見に基づけば“唐尺、”の1尺と相当し、天平尺の1尺と判断される。更に、この中の $P_7 \cdot P_8$ 間には、灰がこのピット間に遮蔽された形で検出され

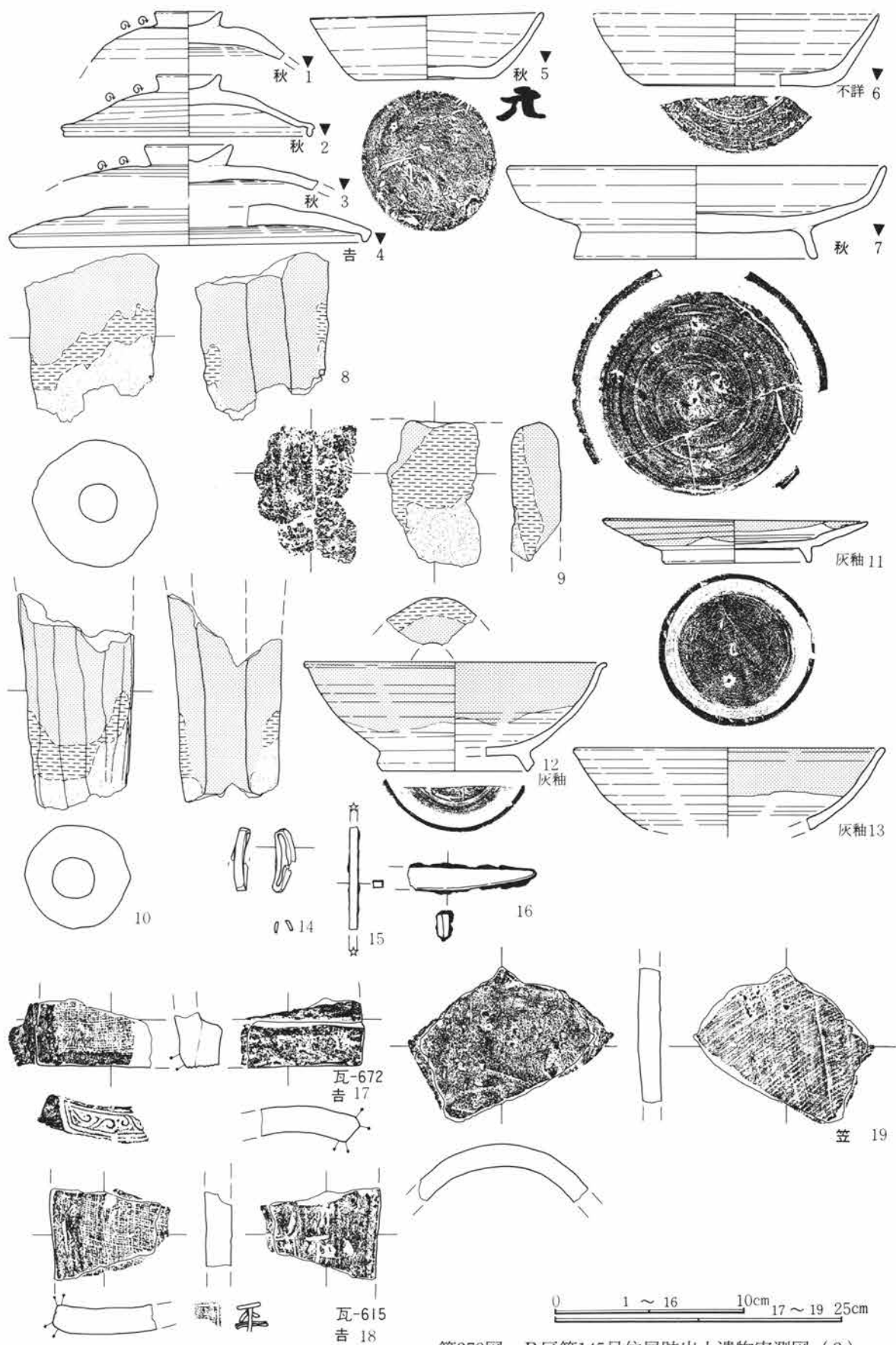
第3節 検出された住居跡について

ており、 $P_2 \cdot P_6 \sim P_8$ には「壁」の存在が考えられ、当跡が小鍛冶跡であることから、東・南からの入光遮断する為のものと考えられる。だが、 $P_6 \cdot P_7$ の間には突出部があり、この部分が入口部であったことが考えられる。

遺構名称	B区第145号住居跡		位置	49~52-B-15~17グリッド内。		残存深度	約53cm
平面形態	不分明。	規模	4.04+ $\alpha$ m×4.50m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-87度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	三時期が認められる。構築当初は中央が窪む。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	床面に同じ。						
遺物出土状態	第1次床の埋土中から少量の出土があり、 $P_1$ 上面（灰面）から土器片の出土がある。						

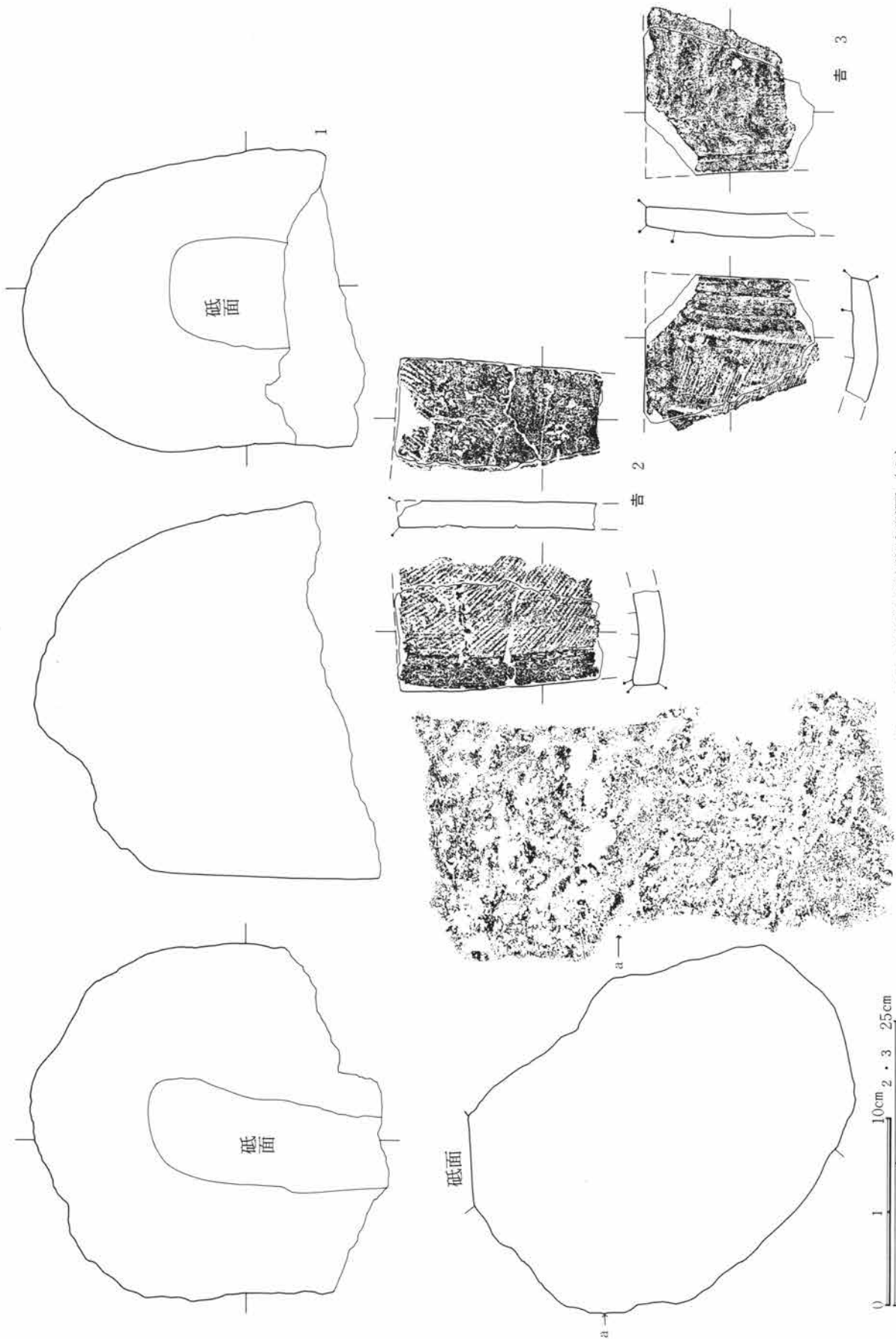


第277図 B区第145号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第278図 B区第145号住居跡出土遺物実測図(2)



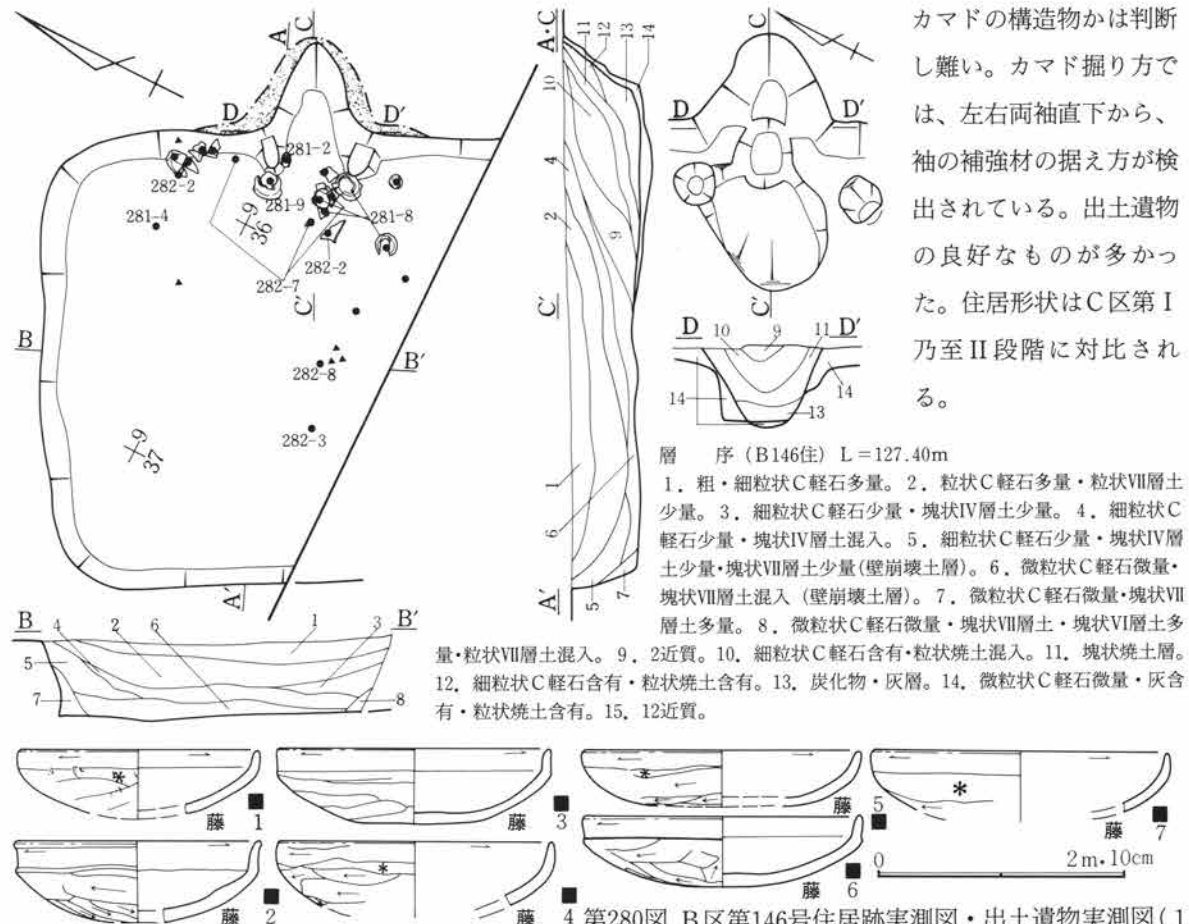


第279図 B区第145号住居跡出土遺物実測図(3)

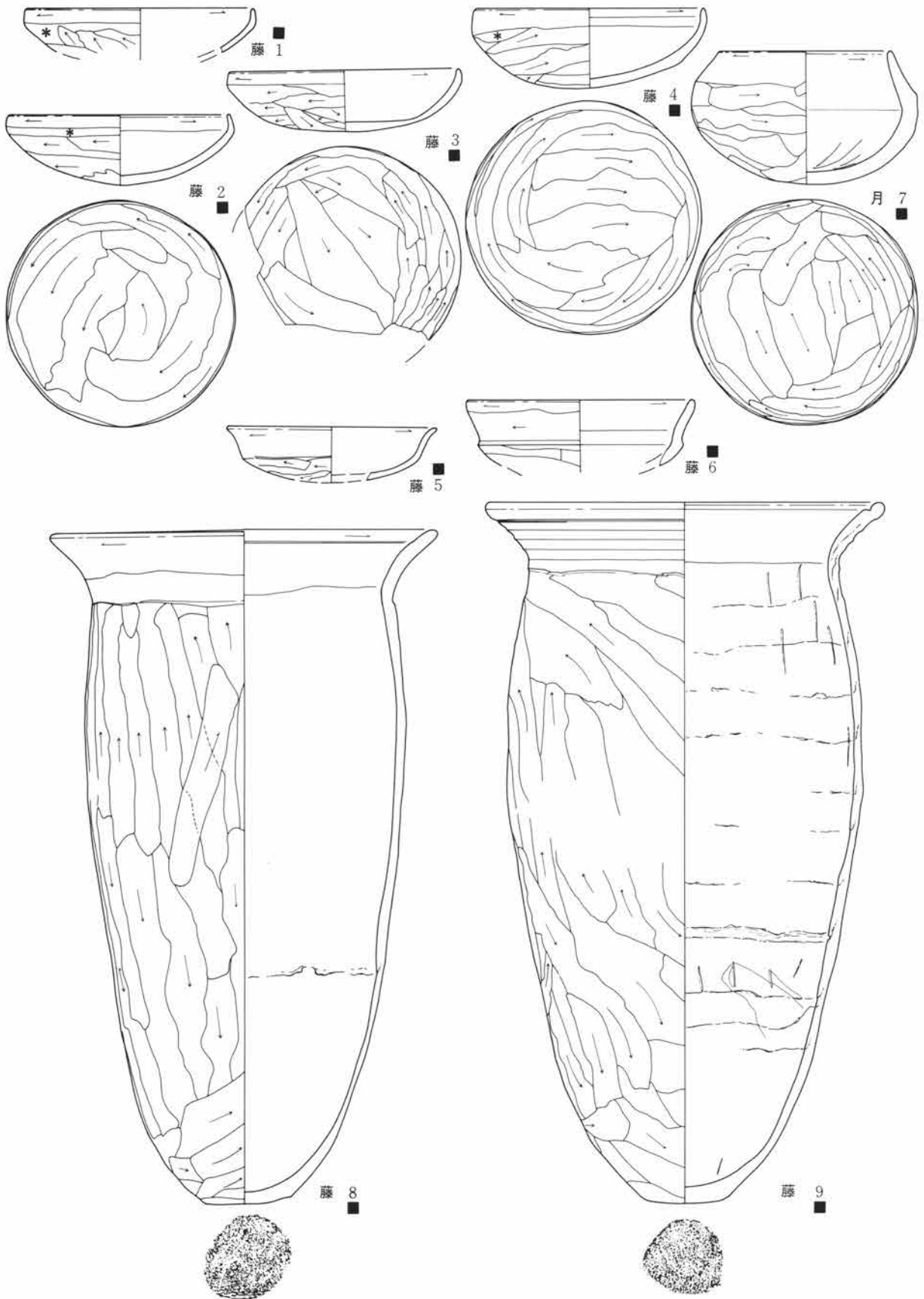
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	B区第146号住居跡		位置	30~38-B-9・10グリッド内。		残存深度	約64cm
平面形態	矩形か。	規模	3.62m×3.75+ $\alpha$ m	構築基準辺	4壁か	主軸方位	北-64度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から90+ $\alpha$ cm。				主軸方位	北-64度-南
改築	有。掘り方内に焼土粒子を検出。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長105cm・屋外長 69cm・屋内長 36cm・袖部幅110cm・燃烧部幅 64cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁の補強材等は検出されなかった。						
	袖	両袖共屋内に突出し、先端側に土師器甕を据える。					
煙道	未検出。	掘り方	燃烧部は舌状を呈し、焚口部下は浅い皿状を呈する。				
遺物出土状態	カマド両袖で土師器甕2個体が出土。東壁下で土師器甕が出土。						

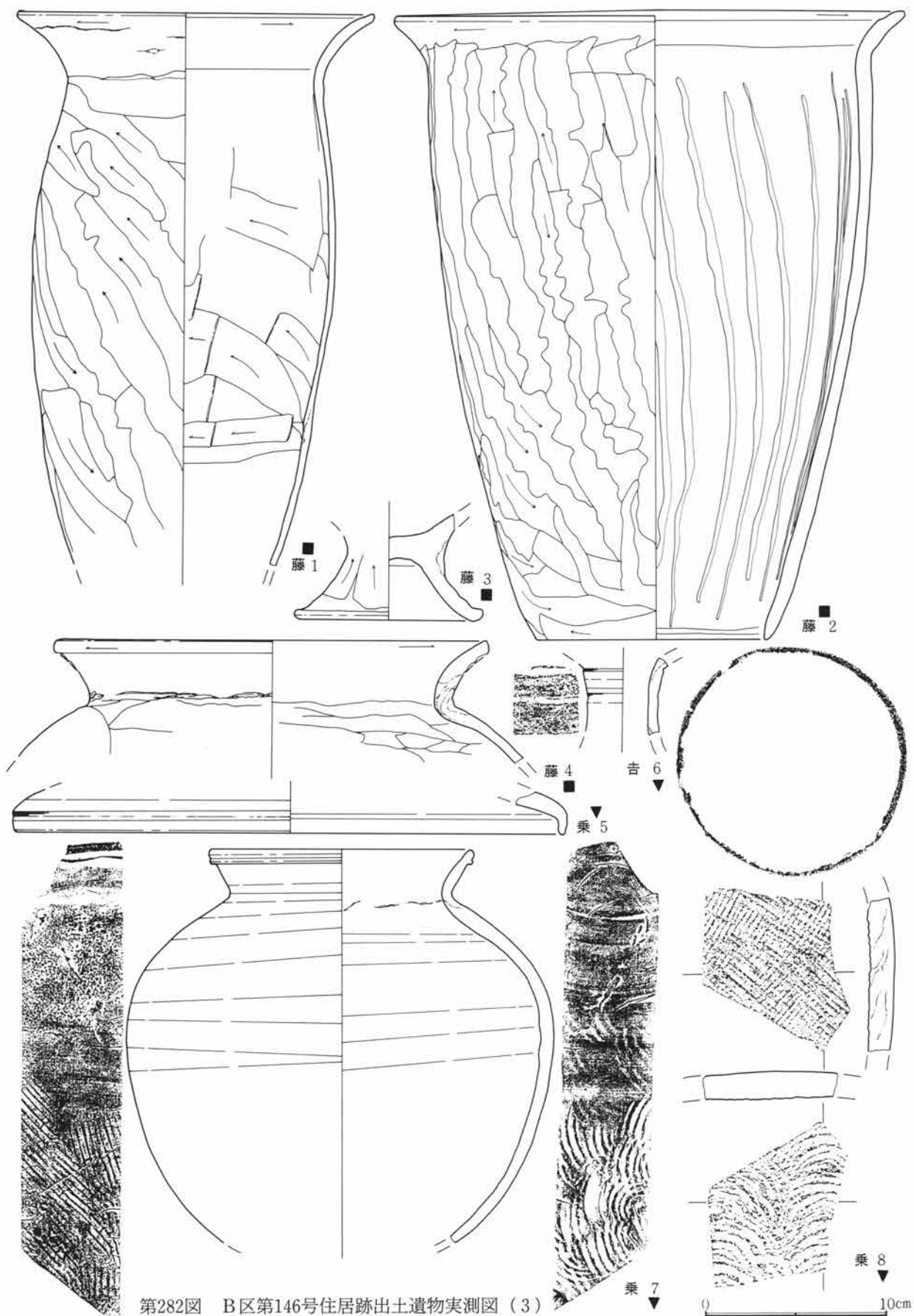
所見 当住居跡は、南壁及び西壁の一部が、調査区内を東西に流走する水路により未調査となった。住居は東壁にカマドを備えるが、詳細な位置は上述の状況から不明である。カマドは、細身の三角形を呈し、両袖共屋内側に突出し、先端側には長甕を設置している。この長甕は2個体で第281図-9と第282図-1である。又、第281図-8は、カマド焚口周辺とカマド右袖から住居中央寄り出土した個体の接合であるが、



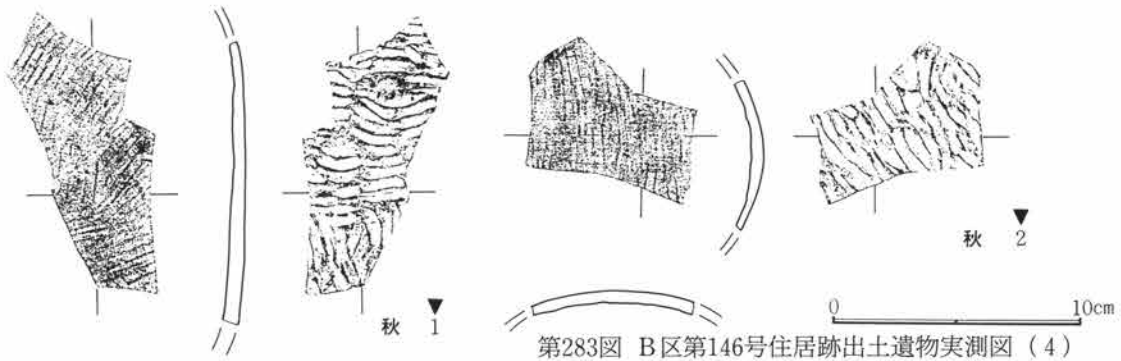
第3節 検出された住居跡について



第281図 B区第146号住居跡出土遺物実測図(2) 0 10cm

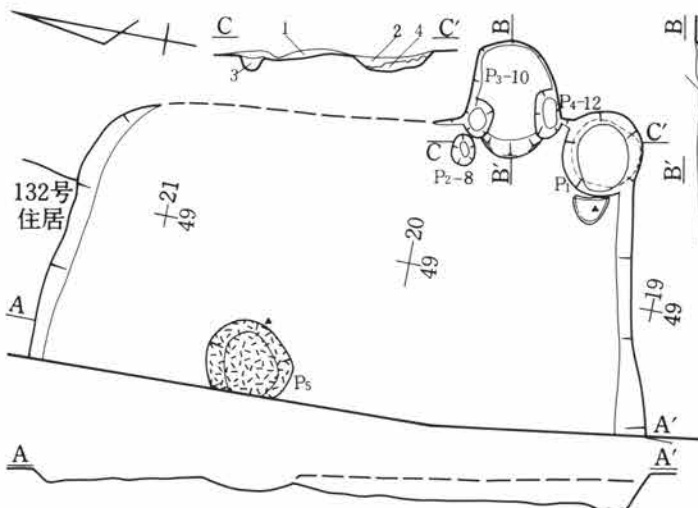


第282図 B区第146号住居跡出土遺物実測図(3)



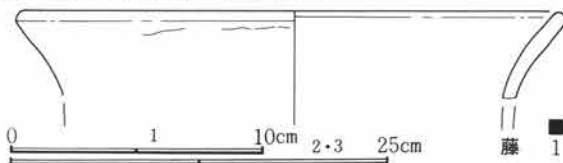
第283図 B区第146号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	B区第147号住居跡	位置	49・50-B-19~22グリッド内。	残存深度	約10cm
平面形態	不明。	規模	2.53+αm×5.0m	構築基準辺	南壁か
壁	詳細不明(斜位か)。	床面	平坦。地山Ⅶ層土及びB131住の覆土を使用する。	主軸方位	北-80度-南位か
調査の 不手際・未調部の存在により詳細不詳。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形状。径63cm・深度-16cm。		



層 序 (B147住) L=126.90m

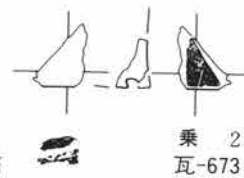
1. 細粒状C軽石微量・粒状焼土含有・灰含有・塊状粘質土含有・粒状Ⅶ層土含有。
2. 細粒状C軽石若干・粒状焼土多量・粒状炭化物含有・灰含有。
3. 微粒状C軽石若干・粒状Ⅶ層土混入。
4. 炭化物層。



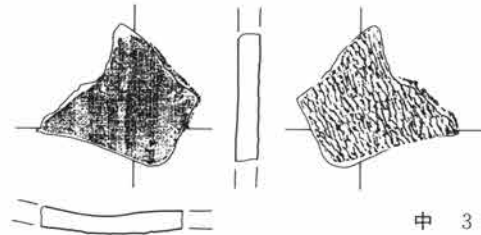
第284図 B区第147号住居跡実測図・出土遺物実測図

所見 当住居跡はB131住を切り構築し、B132住に切られている。住居は東壁南東隅部に偏在してカマドを備えており、南東隅部には傍竈坑を備えている。調査方法はB132住と同様で西側半分が検出されなかった。又、耕作による乱が著しかった為、東壁が破壊されている。カマドは、耕作の破壊により

遺存は非常に悪く、この為、図は掘り方の状態に図化してあ



乗 2  
瓦-673

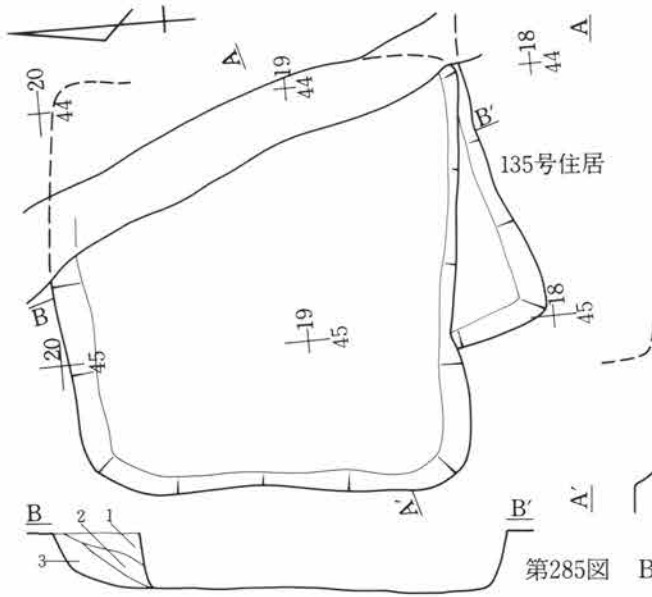


中 3

遺構名称	B区第148号住居跡	位置	44~46-B-19・20グリッド内。	残存深度	約43cm
平面形態	正方形。	規模	(3.40)m×3.40m	構築基準辺	不明
壁	B135号住の破壊により詳細不詳。				
主軸方位	北-95度-南位か				

る。この掘り方の状態から、袖乃至焚口部の補強材の据え方が三ヶ所に認められている。この据え方にはP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の関係が看取されることから、カマドは据え変えがあったことが想定される。又、特筆される点にP<sub>5</sub>が内には粘土が貼られた状態であった。住居形状はC区の第Ⅶ段階に対比される。

第4章 検出された遺構・遺物

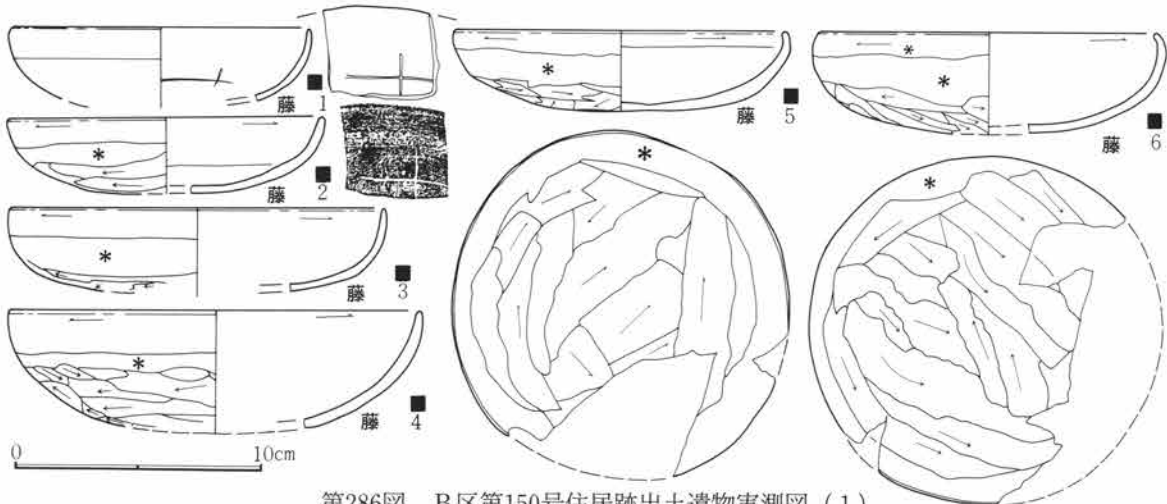


**所見** 当住居跡はB135住に切られ大半を失っている。これによりカマドも破壊消滅している。出土遺物も殆どなく、詳細に就いては不明であるが、B135住がC区の第VII段階の住居形状である点から、これ以前の住居形状であったことが想定され、主軸の状況からC区第IV段階以降であることが推定される。

層序 (B148住) L=127.20m  
 1. 粒状C軽石多量。2. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。3. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土混入・塊状VII層土含有。

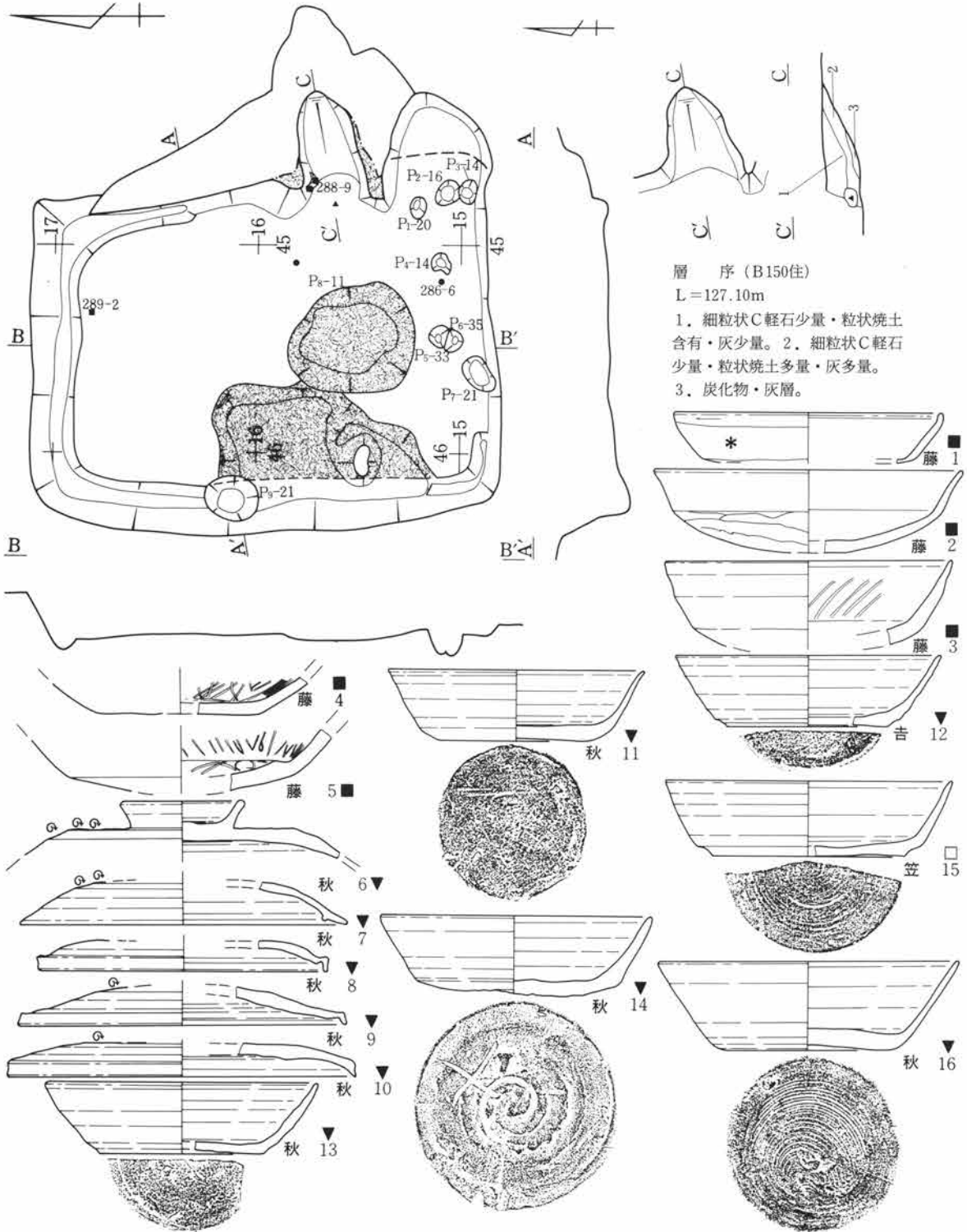
第285図 B区第148号住居跡実測図

遺構名称	B区第150号住居跡		位置	45～47-B-15～18グリッド内。		残存深度	約50cm
平面形態	横長方形。	規模	3.42m×4.67m	構築基準辺	北乃至西壁	主軸方位	北-89度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	一部に造床が認められる。他はVII層土を使用し平坦。			
壁溝	東壁の一部・西壁・南西隅部下。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	西壁下で不整形の掘り込みと、住居中央部で土坑状の浅いP <sub>11</sub> を検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm位か。			主軸方位	北-78度-南	
改築	不分明。		形状	舌状を呈する。			
規模	全長123cm・屋外長 70cm・屋内長 53cm・袖部幅152cm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦による補強は認められなかった。						
	袖	左袖が瓦により補強されている。袖自体は大きい。					
煙道	未検出。		掘り方	燃烧部がやや認められたのみである。			
遺物出土状態	覆土内で土器類・瓦類の出土がやや多いものの床面・床面直上層中の出土量は少ない。						

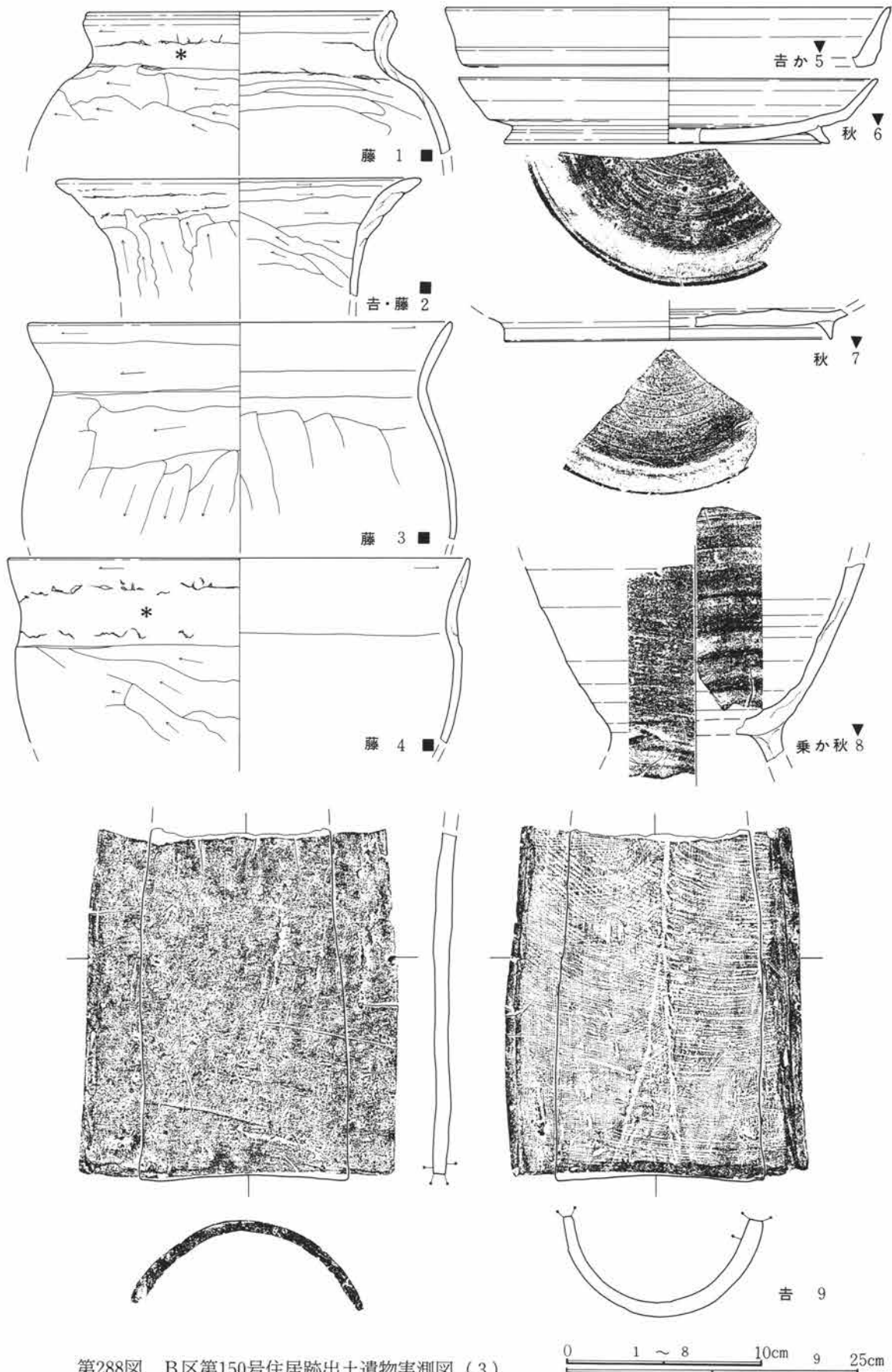


第286図 B区第150号住居跡出土遺物実測図 (1)

所見 当住居跡はB140・153住に切られている。住居は東壁中央部よりやや南東隅部寄りにカマドを具備している。カマドは、左右両袖共屋内に向かい突出している。煙道は燃烧部底面より27度程の仰角で立ち上がっている。壁溝は、カマド周辺及び南壁以外の壁下では検出されている。南壁下では、小ピットが7本検出されている。この集中傾向から、入口部施設に伴うピットと考えられる。住居跡の掘り方は、P<sub>8</sub>の土坑状のものと同壁下で検出されている。住居形状はC区の第Ⅲ段階に類似する。

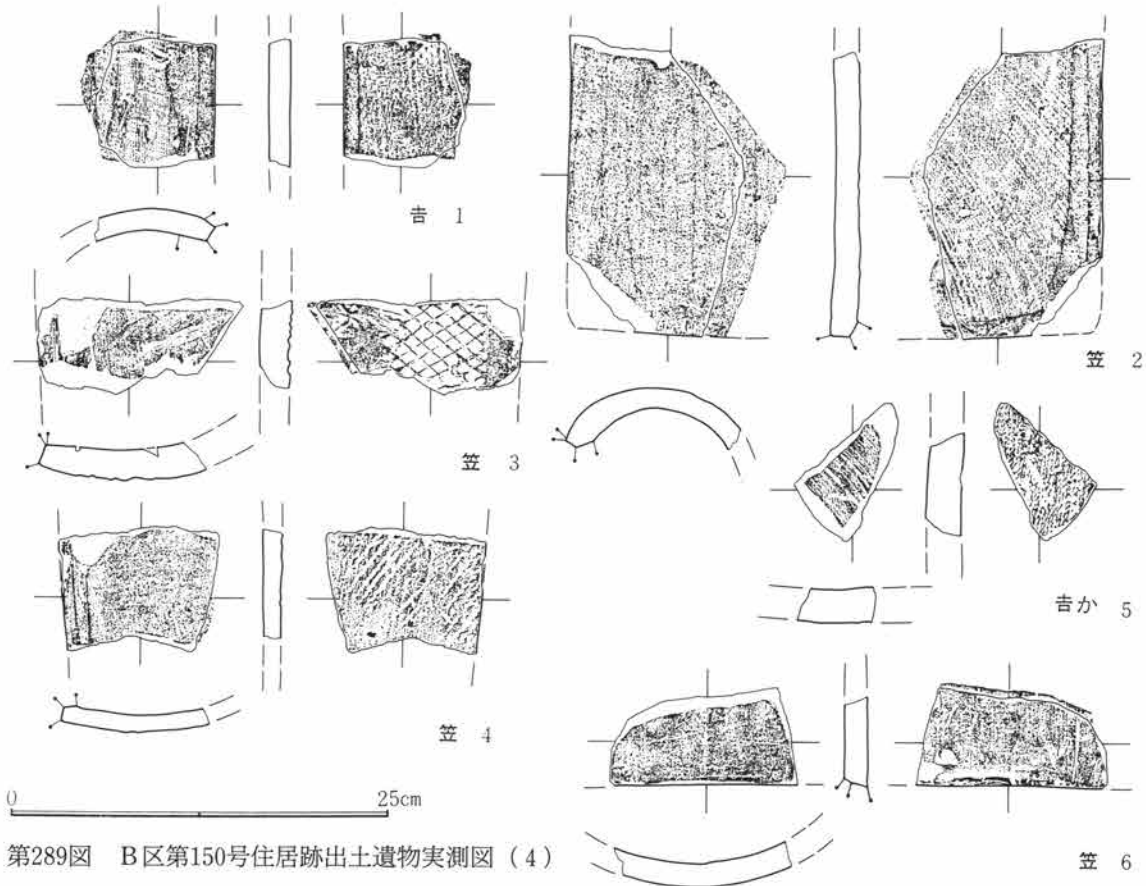


第287図 B区第150号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



第288図 B区第150号住居跡出土遺物実測図(3)

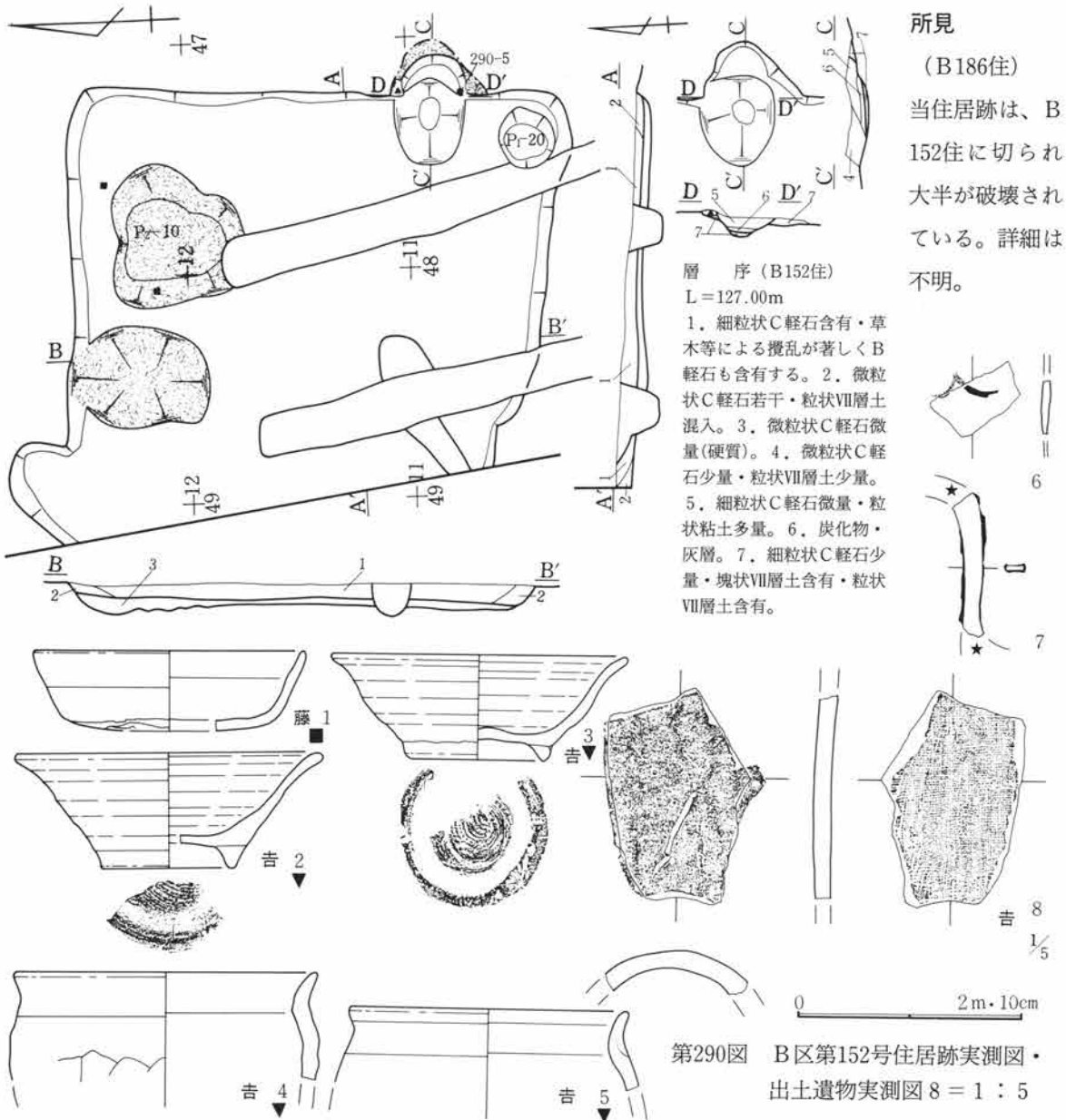




第289図 B区第150号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	B区第152号住居跡	位置	48~50-B-11~13グリッド内。			残存深度	約16cm
平面形態	横長方形か梯形	規模	3.95+ $\alpha$ m×4.50m	構築基準辺	東乃至北壁	主軸方位	北-90度-南
壁	詳細不詳。		床面	大半が造床。平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形。径50cm。深度-20cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状のP <sub>2</sub> を検出。他は部分的な掘り込みが認められたが、底面は凡平坦であった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	不明。			形状	全体的に遺存が悪く馬蹄形状に残存する。		
規模	全長 96cm・屋外長 34cm・屋内長 62cm・袖部幅 67cm・燃烧部幅 55cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁体は何らの補強材は認められなかった。						
		袖	殆んど無い状態である。左袖のみ地山砂質の截出材を用いる。				
煙道	未検出。		掘り方	三角形の燃烧部と楕円形状の掘り込が付する。			
遺物出土状態	覆土自体が攪乱により遺存も悪く、遺物は少量のみ出土しただけである。						

所見 当住居跡はB168住を切り構築している。住居は、東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置に備え、南東隅部直下には傍竈坑を備えている。カマドの燃烧部幅はやや広い。南東隅部の傍竈坑周辺は、南東隅部がやや屋外に向かい突出した状態になっている。この状況は、既刊第3冊分中で報告した、D区第35号住のオーバーハングする状況に類似しており、当住居の遺存状態が不良であるものの、同部がオーバーハングしていた可能性は大と考えられる。住居形状はC区の第VI段階に対比される。

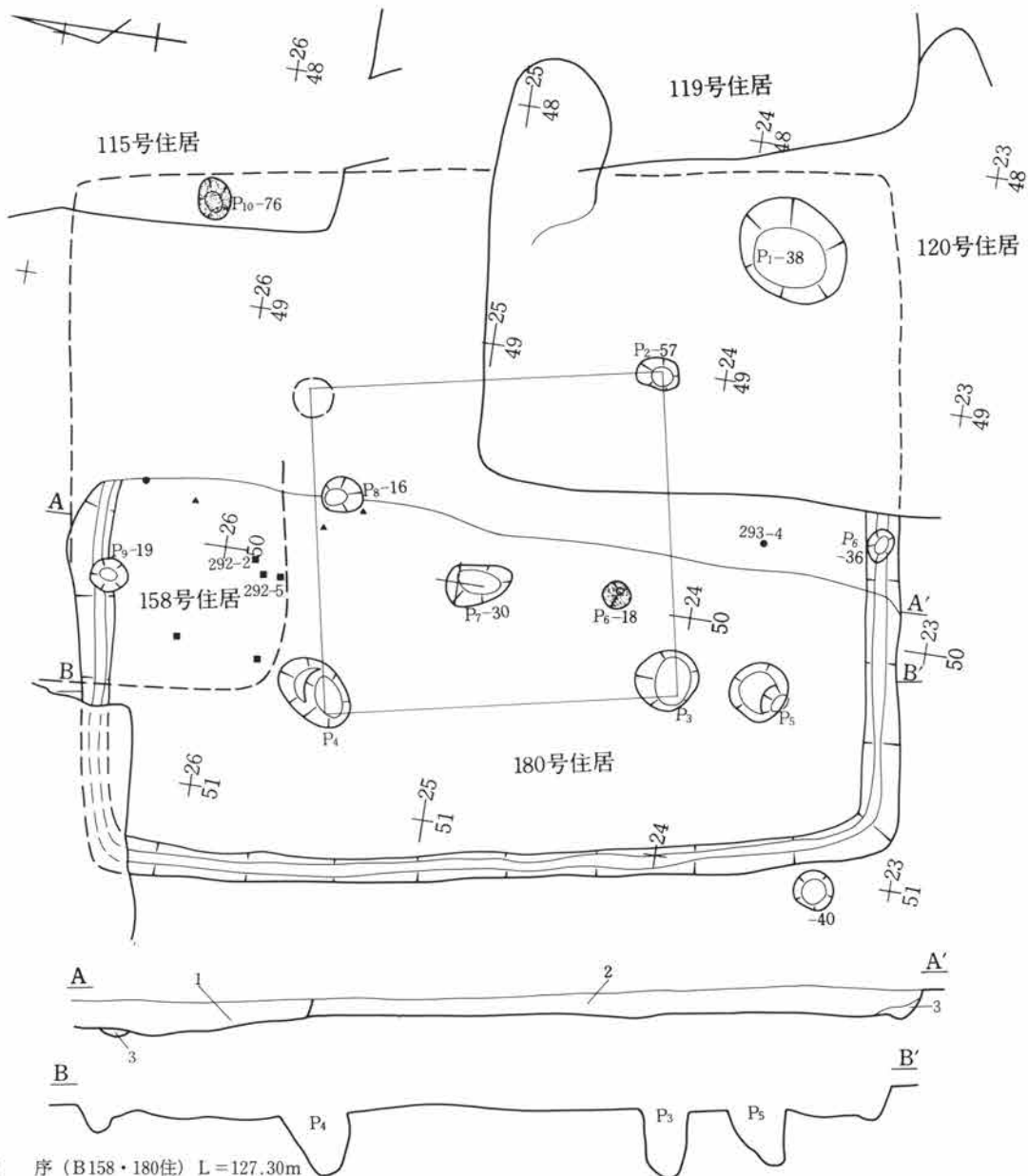


遺構名称	B区第158号住居跡	位置	50・51-B-26・27グリッド内。	残存深度	約20cm
調査の下手際により詳細不詳。					

遺構名称	B区第180号住居跡	位置	48~52-B-24~27グリッド内。	残存深度	約23cm
平面形態	矩形(横長方形)	規模	(6.0)m×7.03m	構築基準辺	4壁か
壁	遺存不良の為詳細不詳。		床面	地山VII層土を使土する。全体に起伏が認められる。	
壁溝	全周か、幅員23cm程。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。98×80cm・深度-38cm	
柱穴	P <sub>2</sub> ~P <sub>4</sub> が支柱穴。P <sub>5</sub> は斜位の掘り込でP <sub>3</sub> 側に向かう為、P <sub>3</sub> の補強材か。壁柱穴P <sub>6</sub> ・P <sub>9</sub> ・P <sub>10</sub> 。				
掘り方	分明ではない。				
カマド	位置	東壁、南東隅部から230cm位か。遺存不良なため詳細不詳。		主軸方位	不詳
遺物出土状態	詳細不詳。				

所見 (B158住) 当住居跡はB180住を切るものの、調査の不幸により破壊されその詳細は不明である。出土遺物では瓦が大半であった。そして、少量の土器からは8世紀代の須恵器杯の出土がある。

所見 (B180住) 当住居跡は、B120・115・157住東側半分を切られ失っており、カマドも破壊され消滅している。この為、住居跡の詳細は不明な点が多い。住居の復元は、B120住内で検出されたP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>を主柱穴・傍竈坑に相当させて行なった。この結果、第291図に図化した住居跡の復元が出来た。そして、カマドは、B120住の北壁下で、壁溝は異常な状態を示す部分をカマドの痕跡として捉えた。これにより、主柱4本が想定される。そして、B120住のP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>をそれぞれP<sub>2</sub>・P<sub>1</sub>を改変した。又、この外のピットでは、P<sub>5</sub>が斜位の掘り込みである為、P<sub>3</sub>の補助材と考えられる。P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>は、想定される南・北壁の各々中央部に位置することから、上屋構造に係わる所産と推定される。住居形状はC区の第II段階に類似する。

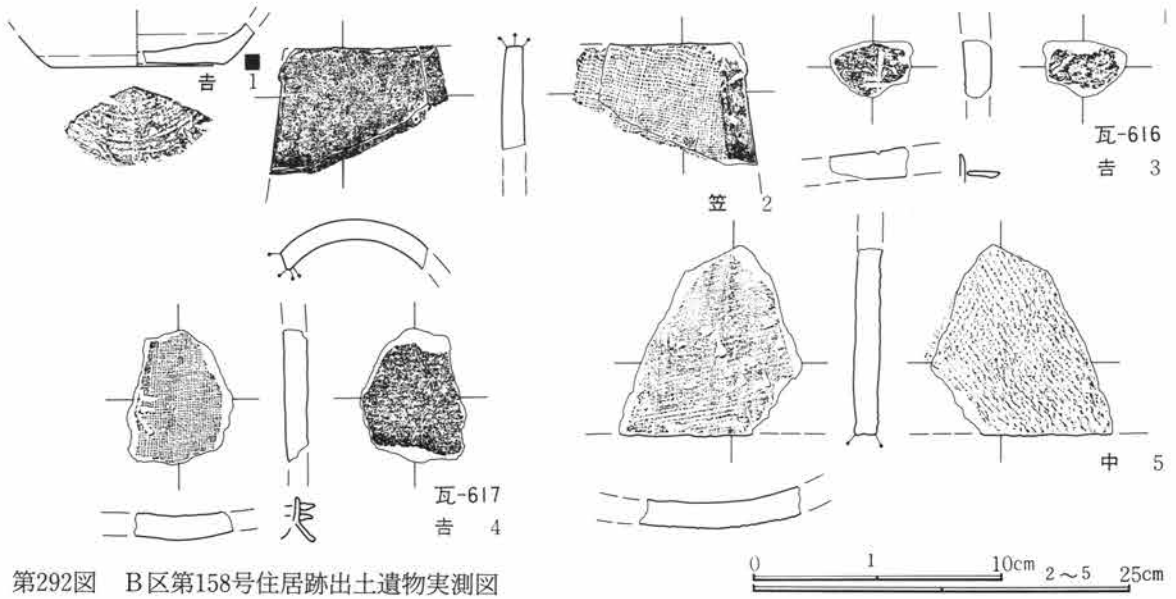


層序 (B158・180住) L=127.30m

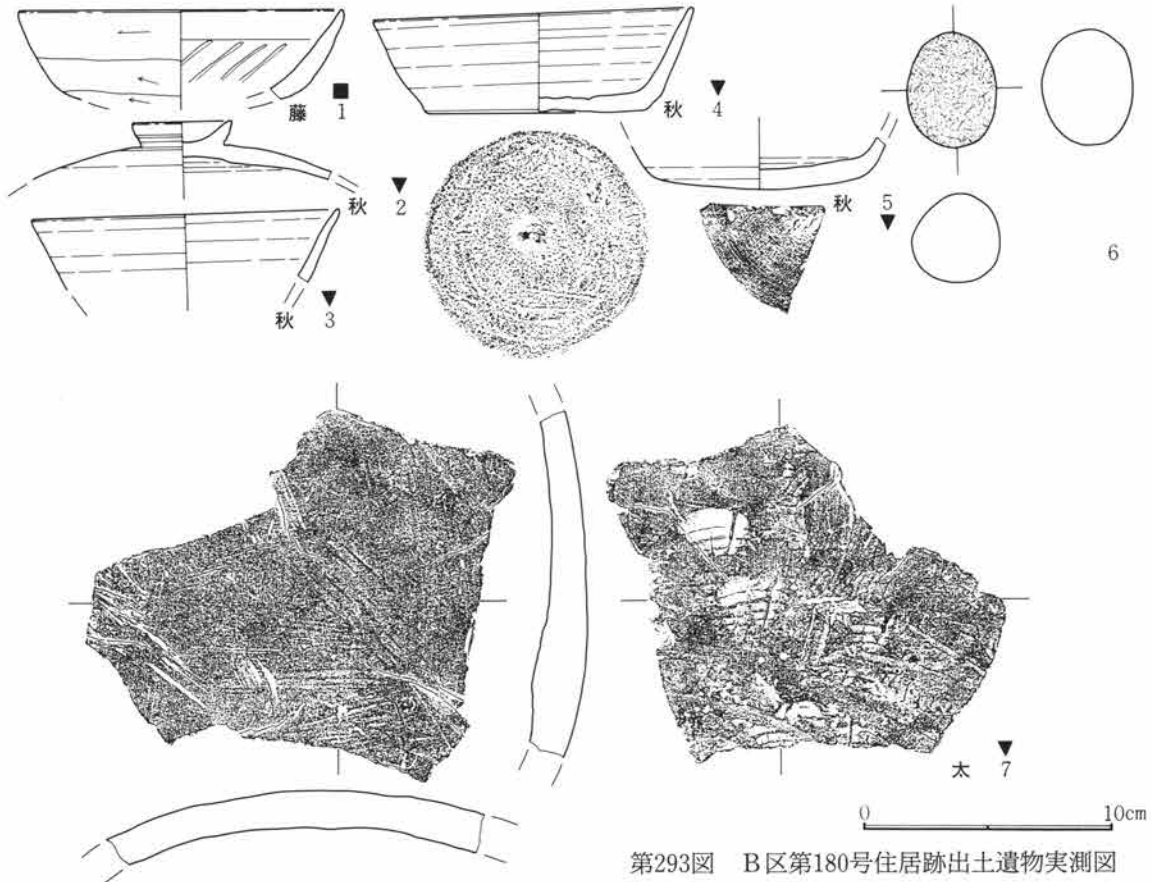
1. 粒状C軽石含有・粒状VII層土含有。2. 細粒状C軽石少量。3. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土少量。

第291図 B区第158・180号住居跡実測図

第4章 検出された遺構・遺物



第292図 B区第158号住居跡出土遺物実測図

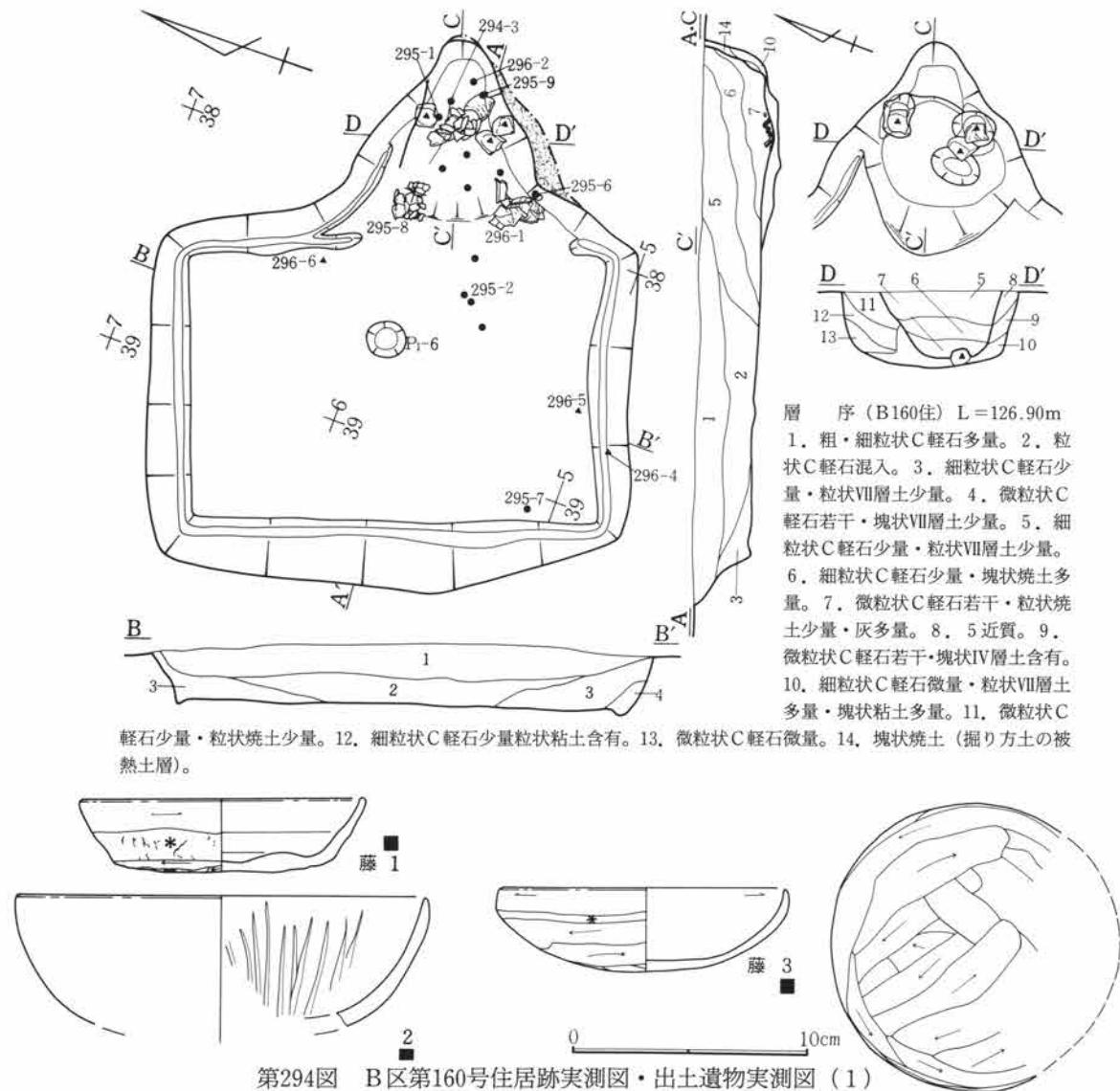


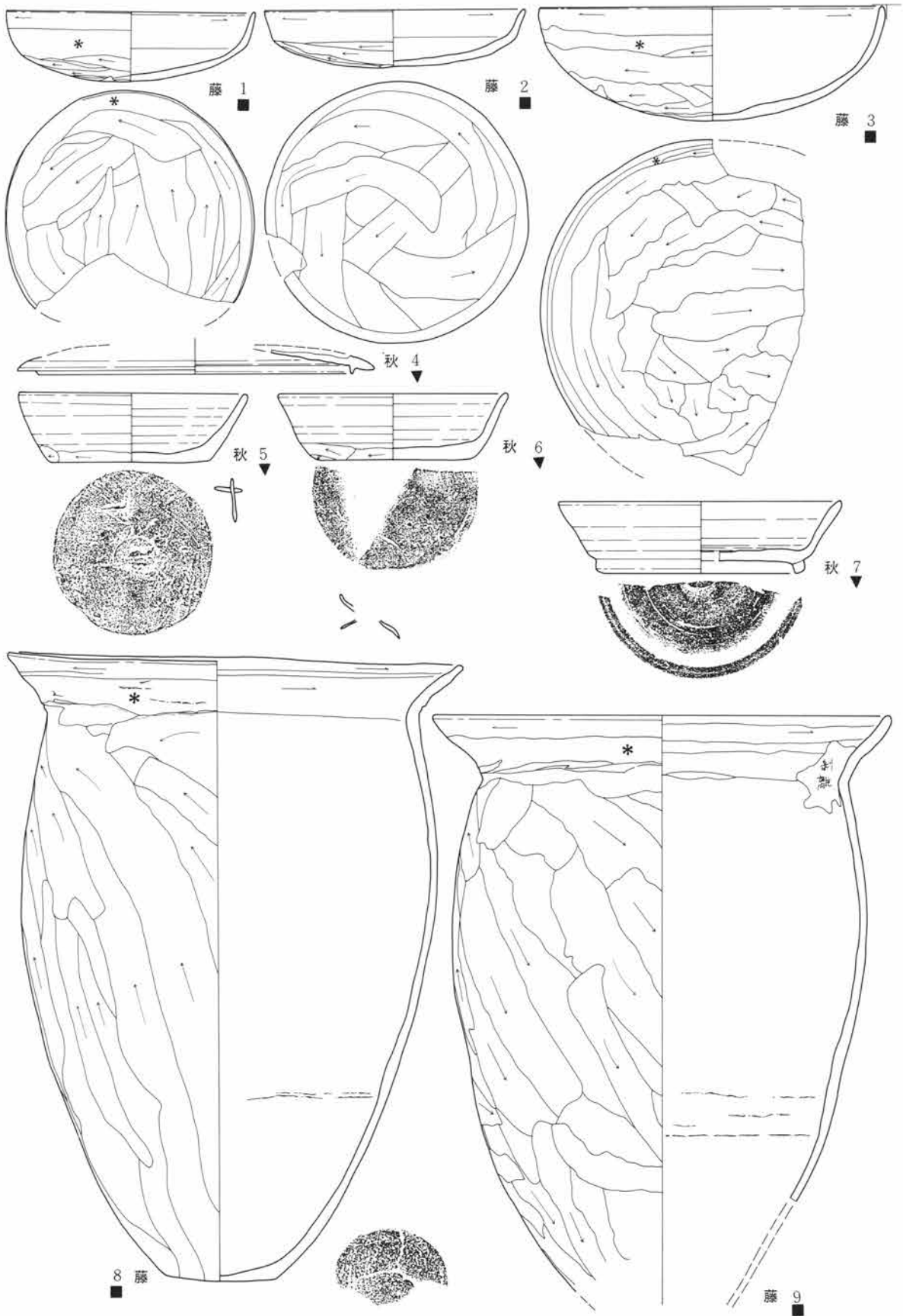
第293図 B区第180号住居跡出土遺物実測図

所見 当住居跡は切り合い関係の無い単独住居跡である。住居は整った形状で、東壁の中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備えている。カマドは大きく屋外に突出し、焚口を含め、この突出部内に収められている。構造は、調査の下手際により不明な部分があるが、掘り方を埋設し、地山砂岩質土の截り出し材を用い燃焼部側壁を補強している。焚口部は土師器長甕を用いている。そして、カマド左側には壁溝が東壁延長の直線に延びる部分と、カマド側に向かう二者の存在が検出されていることから、カマドは改築された可能性が濃厚である。壁溝はカマド部分以外では全周している。住居形状は主軸からC区第II段階頃と考えられる。

第3節 検出された住居跡について

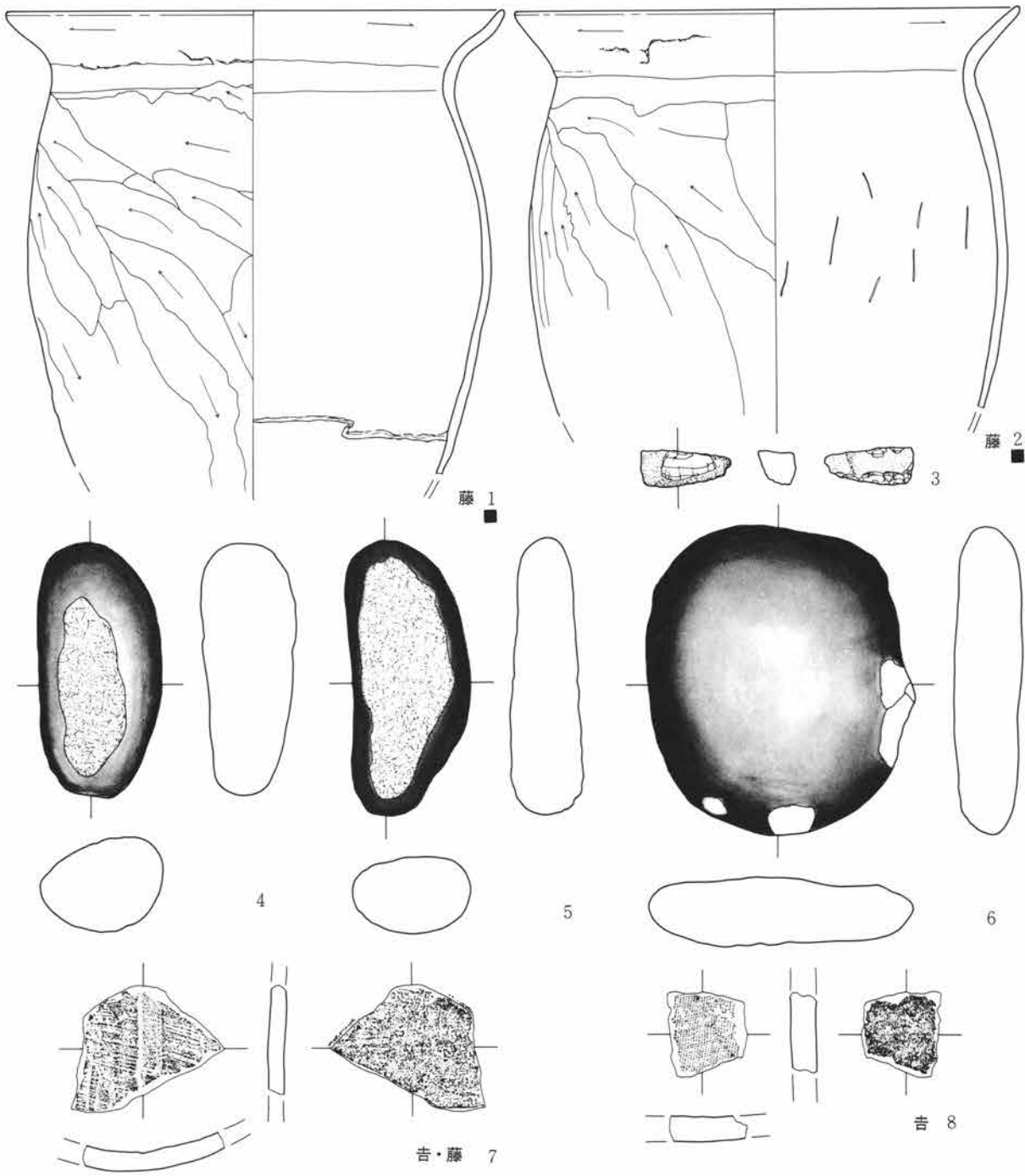
遺構名称	B区第160号住居跡		位置	38~40-B-5~7グリッド内。		残存深度	約48cm
平面形態	横長方形。	規模	3.20m×4.05m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-71度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	カマド部以外で全周、幅員10~18cm。		傍竈坑・貯蔵穴	無し。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から90cm。				主軸方位	北-71度-南
改築	有。3回は想定される。			形状	舌状。		
規模	全長148cm・屋外長148cm・屋内長 0cm・袖部幅135cm・燃烧部幅 70cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は礫（地山砂質土の截り出し材）により補強されている。						
	袖	無し。					
煙道	未検出。			掘り方	煙道部立ち上がりに段が認められる。		
遺物出土状態	カマド内集中する。覆土内では量的に少ない。						





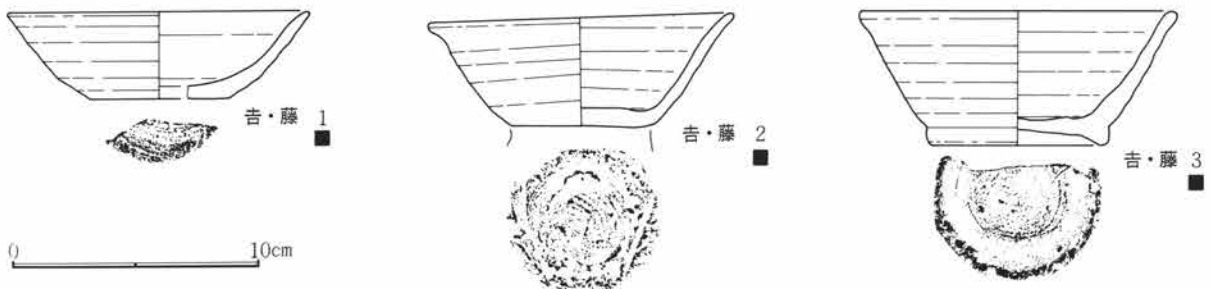
第295図 B区第160号住居跡出土遺物実測図(2) 0 10cm

第3節 検出された住居跡について



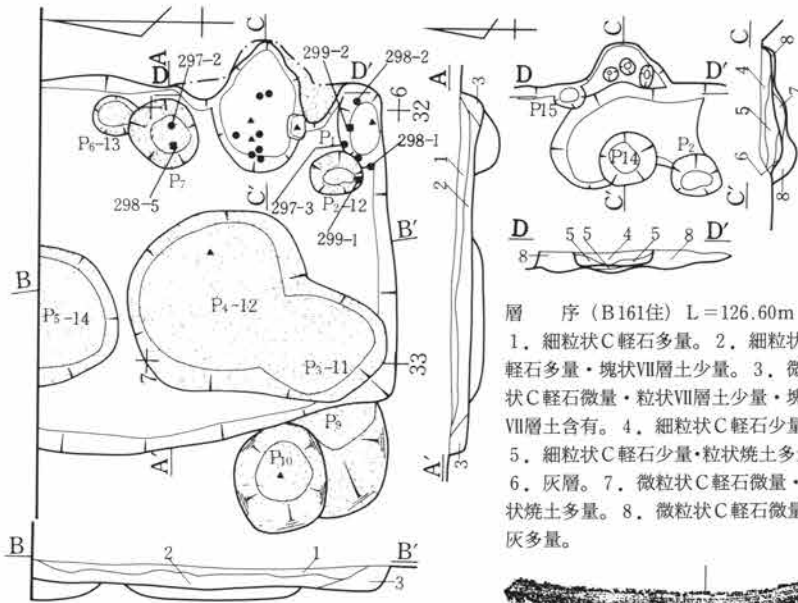
第296図 B区第160号住居跡出土遺物実測図(3)

0 1~6 10cm 7・8 25cm



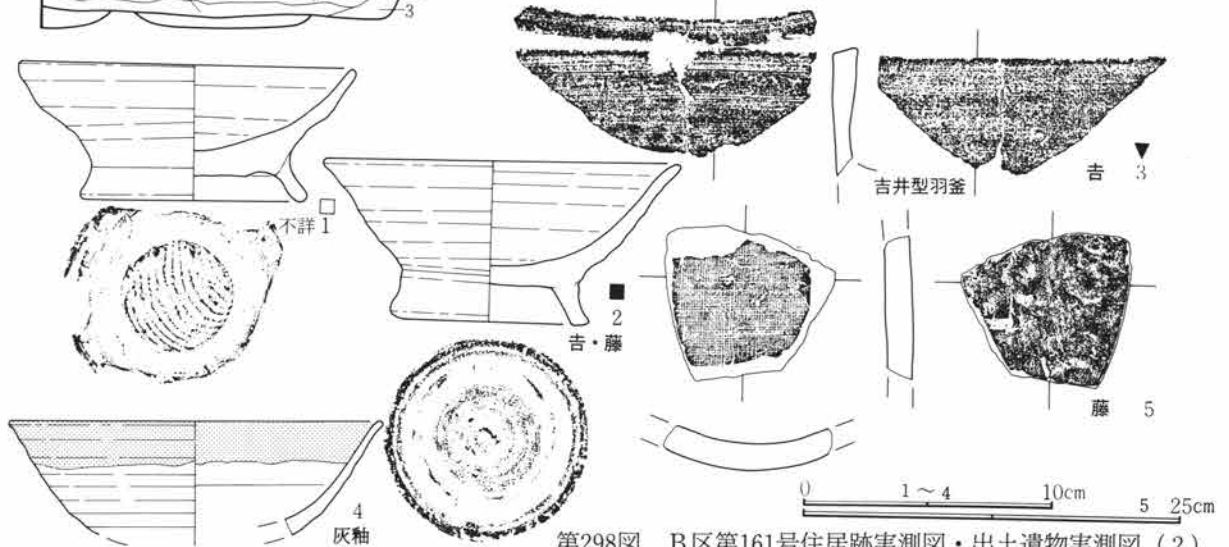
第297図 B区第161号住居跡出土遺物実測図(1)

遺構名称	B区第161号住居跡		位置	32~34-B-6~8グリッド内。		残存深度	約17cm
平面形態	横長方形か	規模	3.0m × 2.9+αm	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-86度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。造床部が多い。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・長楕円形。58×34cm・深度-17cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状の掘り込みが多い (P <sub>3</sub> ~P <sub>7</sub> )。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-96度-南	
改築	有。掘り方内での灰が多い。			形状	鶏卵状を呈する。		
規模	全長105cm・屋外長 36cm・屋内長 69cm・袖部幅140cm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁体の補強は何らも認められなかった。						
	袖	右袖は地山砂質土の載出し材で補強し、左袖より長い。					
煙道	未検出。		掘り方	P <sub>14</sub> はピットであるが改築に伴う。			
遺物出土状態	傍竈坑内での出土がやや多い。						



所見 当住居跡はB163住を接する状態で切り合っている。住居は調査区内を東西に流走する水路により北壁側が未調査である。住居は東壁南東隅部に偏在してカマドを備えている。傍竈坑はカマドの左右に4ヶ所、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>13</sub>が検出されている。又、P<sub>3</sub>~P<sub>5</sub>は住居の掘り方に伴うと考えられる。住居形状はC区の第VI段階に対比される。

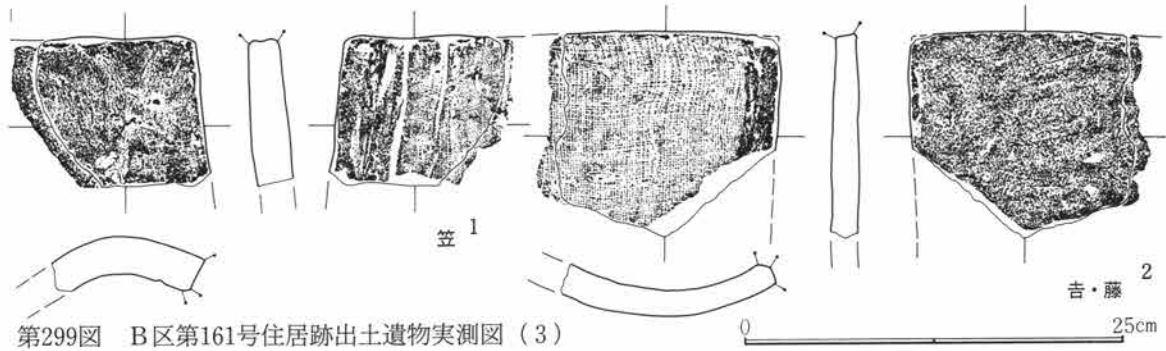
層序 (B161住) L=126.60m  
 1. 細粒状C軽石多量。2. 細粒状C軽石多量・塊状VII層土少量。3. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土少量・塊状VII層土含有。4. 細粒状C軽石少量。5. 細粒状C軽石少量・粒状焼土多量。6. 灰層。7. 微粒状C軽石微量・粒状焼土多量。8. 微粒状C軽石微量・灰多量。



第298図 B区第161号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)

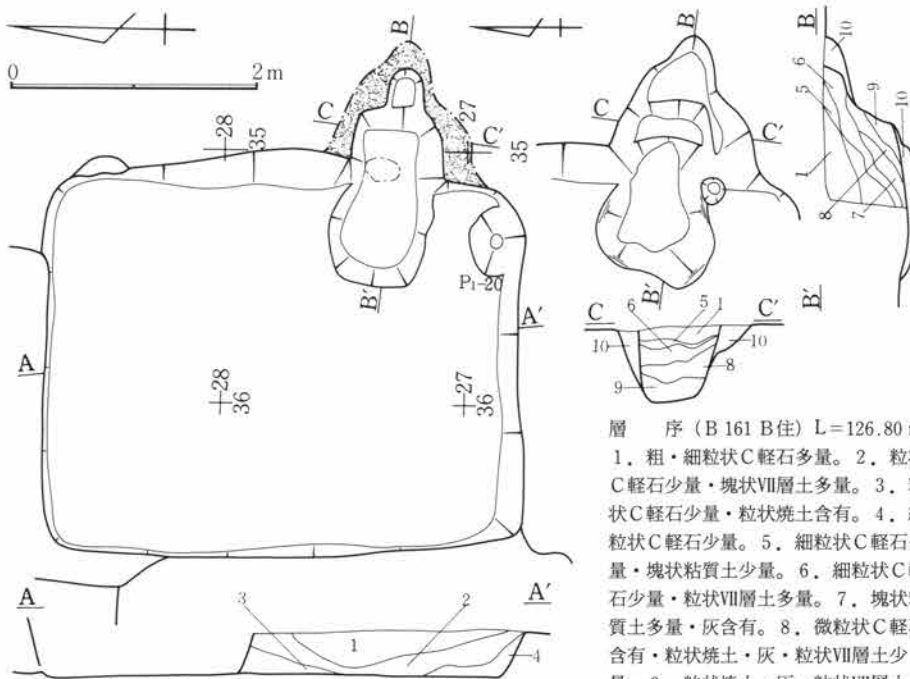


第3節 検出された住居跡について



第299図 B区第161号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第161号住居跡		位置	34~36-B-26~28グリッド内。		残存深度	約36cm
平面形態	横長方形。	規模	3.22m×3.90m	構築基準辺	西乃至北壁	主軸方位	北-92度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	平坦。VII層土を使用し造床は認められない。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。33×53cm・深度-20cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-94度-南	
改築	不分明。		形状				
規模	全長172cm・屋外長 76cm・屋内長 96cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 74cm・煙道部幅 28cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	明らかな状態な袖は検出されていない。		
煙道	掘り方では長い。立ち上がりは垂直である。		掘り方	全体に大きく三角形状を呈する。			
遺物出土状態	覆土内で少量の土器類が出土している。						

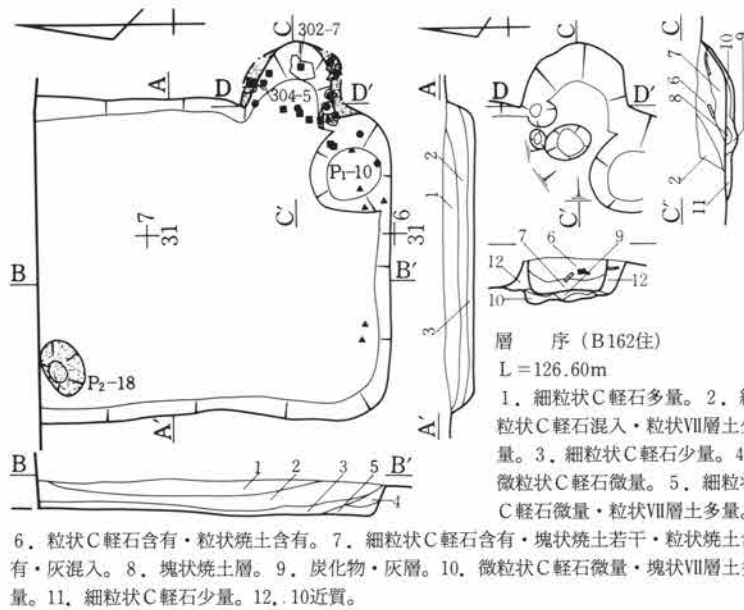


第300図 B区第161号住居跡実測図

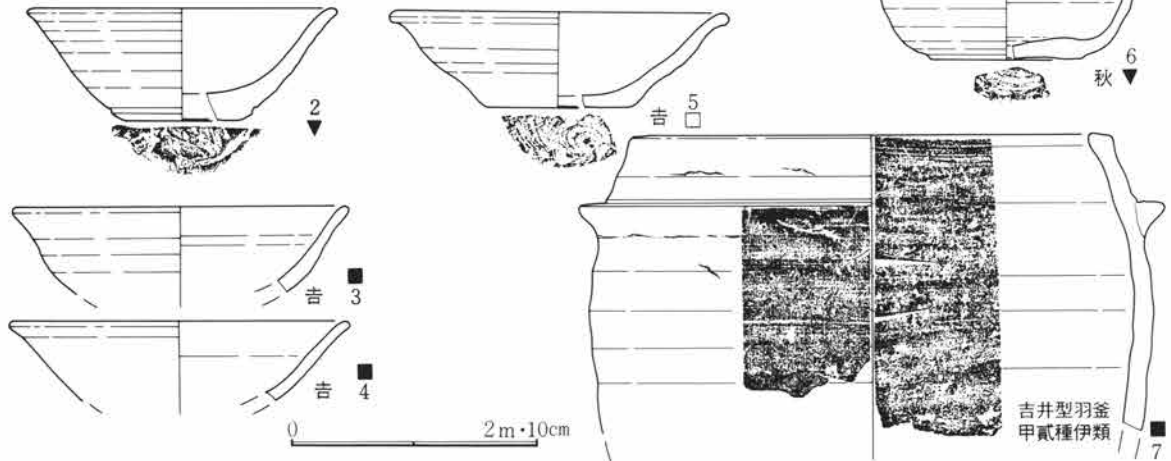
所見 当住居跡の名称は、調査に重複して称号された為、整理時点でBを付した。当跡は、B75・76住に切られている。カマドは、東壁で南東隅部寄りに具備し、南東隅部には小規模の傍竈坑を備えている。カマドの燃烧部は長方形を呈し幅が広い。住居形状はC区の第III段階以降で、空白期の可能性がある。

層序 (B 161 B住) L=126.80 m  
 1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石少量・塊状VII層土多量。3. 粒状C軽石少量・粒状焼土含有。4. 細粒状C軽石少量。5. 細粒状C軽石少量・塊状粘質土少量。6. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土多量。7. 塊状粘質土多量・灰含有。8. 微粒状C軽石含有・粒状焼土・灰・粒状VII層土少量。9. 粒状焼土・灰・粒状VII層土多量。10. 塊状粘質土多量。

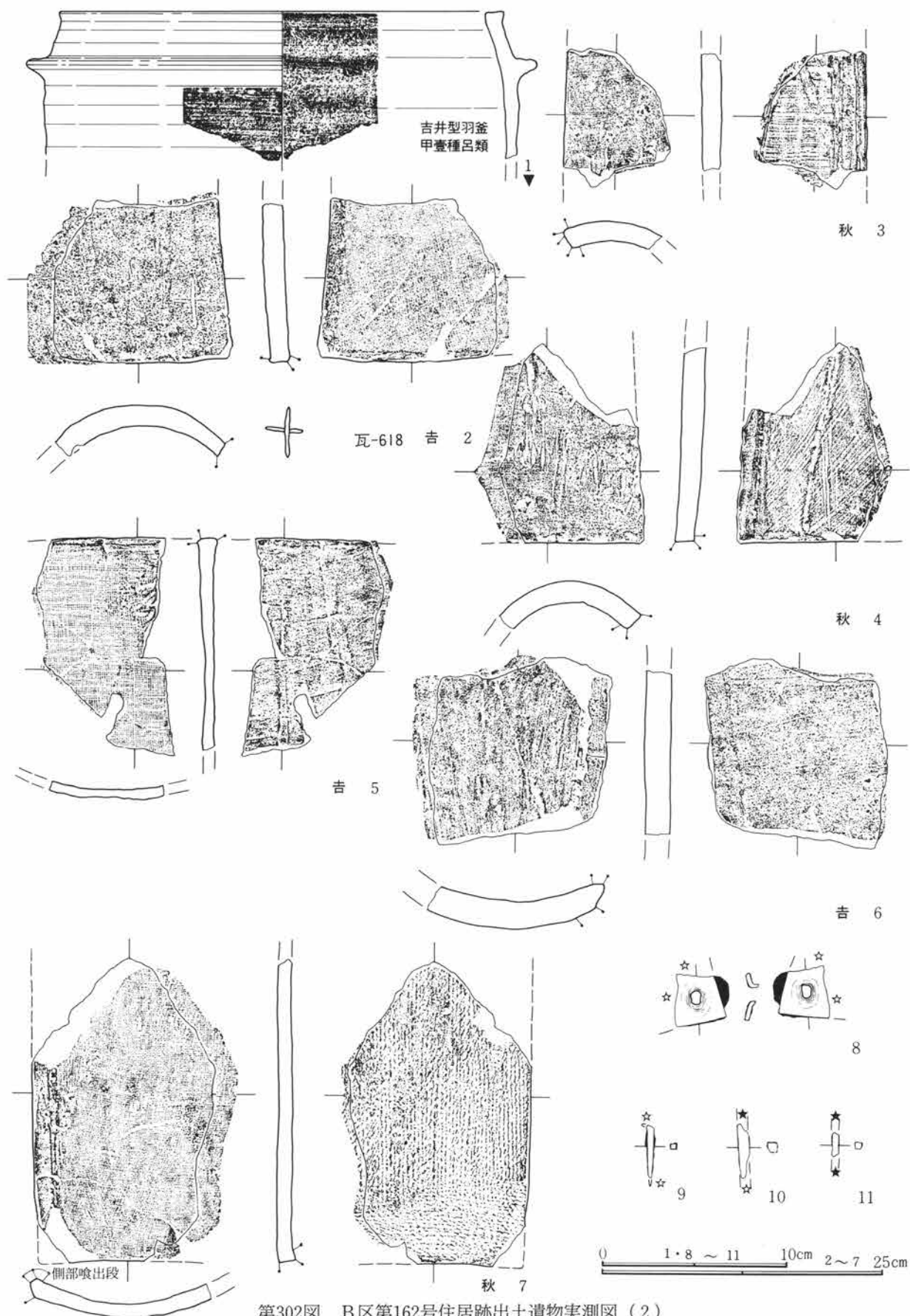
遺構名称	B区第162号住居跡		位置	31・32-B-6・7グリッド内。		残存深度	約28cm	
平面形態	横方形か。	規模	2.50m×3.83+αm		構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-90度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形。径63cm・深度-10cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から20cm。				主軸方位	北-90度-南位か	
改築	有。掘り方内に灰を混入する。			形状	舌状を呈する。			
規模	全長 68cm・屋外長 52cm・屋内長 16cm・袖部幅 93cm・燃烧部幅 64cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦・土器により補強されている。							
	袖	確実に袖と判断される状態ではない。						
煙道	未検出。		掘り方	左袖部下で補強材の据え方を検出。				
遺物出土状態	カマドの補強材としてやや多い遺物の出土がある。傍竈内にもやや多い。							



所見 当住居跡は水路により北側に未調査部がある。住居は東壁で南東隅部に偏在してカマドを備え、近接する状態で南東隅部には傍竈坑を備えている。カマドは馬蹄形を呈し袖は微若な瘤状で燃烧部幅はやや広い。掘り方からは左袖部で補強材の据え方が検出されており、この状況から据え変えが推定出来る。住居形状はC区の第Ⅶ段階に対比される。



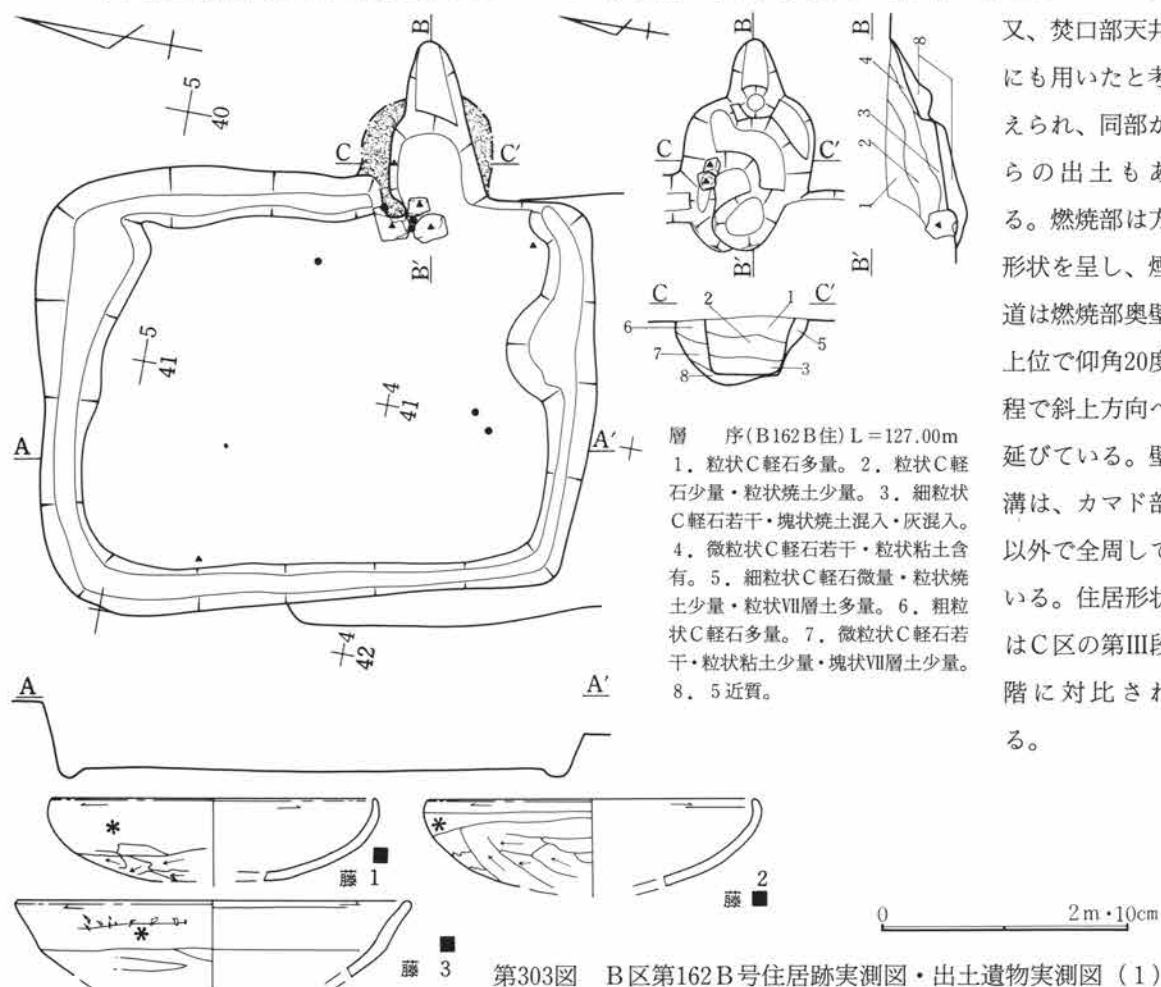
第301図 B区第162号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



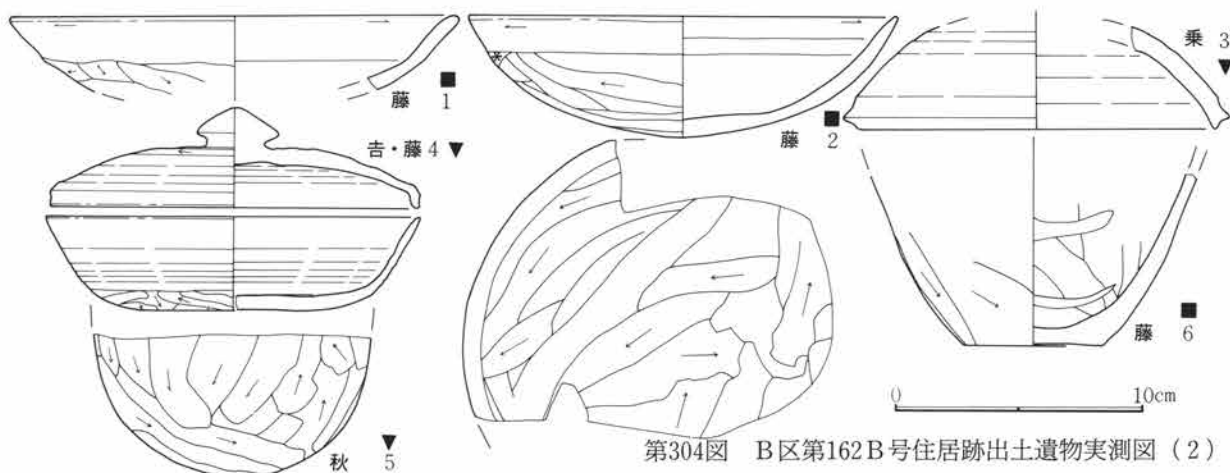
第302図 B区第162号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第162B号住居跡		位置	40~42-B-4~6グリッド内。		残存深度	約52cm
平面形態	横長方形。	規模	3.50m×4.50m	構築基準辺	西乃至東壁	主軸方位	北-80度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	無し。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。			主軸方位	北-78度-南	
改築	不分明。			形状	箱状の焼燃部にやや太目の煙道が付設される。		
規模	全長156cm・屋外長115cm・屋内長 41cm・袖部幅106cm・焼燃部幅 65cm・煙道部幅 36cm。						
焚口・焼燃部	扇状を呈する焚口部は、焼燃空間と重複する部分が著しく、焼燃部先端側に器設部分が考えられる。左壁は礫で補強する。						
	袖	左袖は地山切り出し材を用い補強する。					
煙道	仰角24度程で立ち上がる。			掘り方	石壁側は小テラス状の状態である。		
遺物出土状態	遺物は全体に少ない。出土層位は覆土内がやや多い。						

所見 当住居跡は当該期での切り合い関係の無い単独住居であるが、中世の竪穴状遺構が上層で重複している。住居は、東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備える。傍竈坑等の施設は何ら検出されていない。カマドは、左袖は検出出来たが右袖は認められなかった。左袖は、地山砂岩質の切り出し材を用いている。



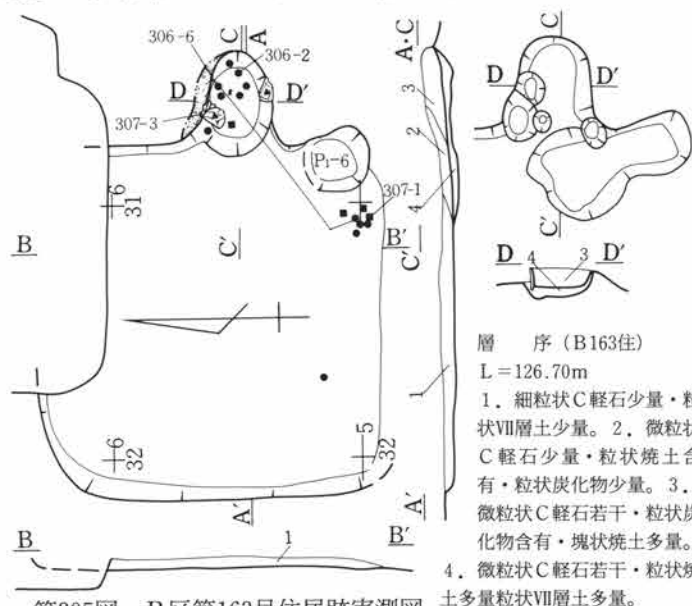
第3節 検出された住居跡について



第304図 B区第162B号住居跡出土遺物実測図(2)

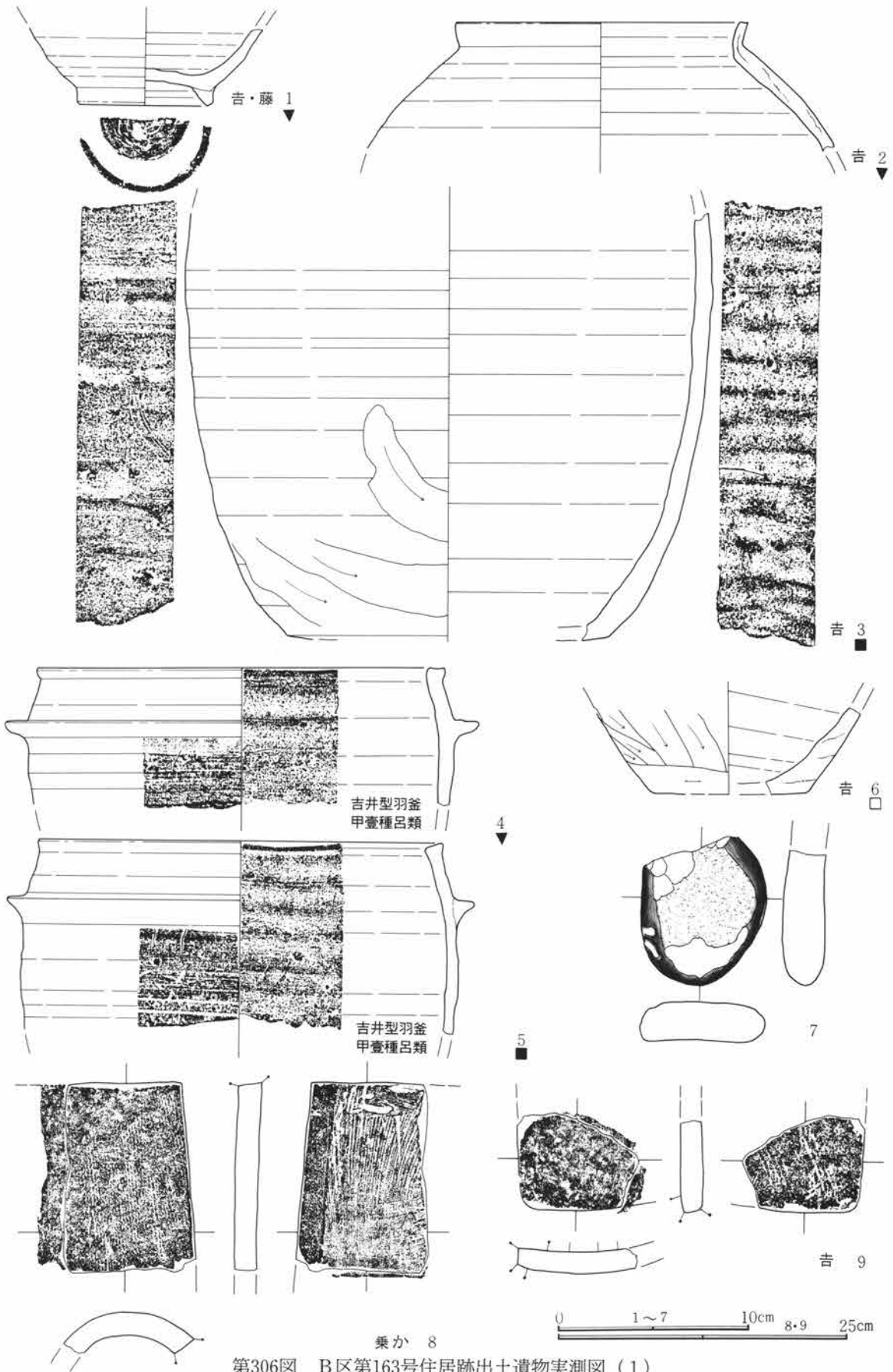
遺構名称	B区第163号住居跡	位置	31~33-B-5~7グリッド内。			残存深度	約13cm
平面形態	正方形か。	規模	2.80m×2.80+αm	構築基準辺	不明	主軸方位	北-90度-南位か
壁	詳細不明。		床面	地山VI~VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形状か。径50cm程・深度—6cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	未検出。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm位か。			主軸方位	北-90度-南位か	
改築	有。掘り方内で焼土粒子を検出。		形状	楕円形状。			
規模	全長 83cm・屋外長 74cm・屋内長 9cm・袖部幅104cm・燃烧部幅 40cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦・礫により補強されている。						
	袖	遺存が不良な為分明状態で検出出来なかった。					
煙道	未検出。		掘り方	舌状を呈する。袖補強材の据え方を検出。			
遺物出土状態	南東隅部方向で極部的に集中して検出。全体に住居の遺存が不良な為詳細不明。						

所見 当住居跡はB161A住を切り構築し、B162住に切られている。住居は、南壁側は確認時の不手際により失っている。カマドは南壁のほぼ中央部に具備し、袖は殆ど無く焚口・燃烧部が屋外部に位置する如くの形状を呈し、燃烧部(?)には地山礫を用い壁乃至袖の補強材としている。然、掘り方では通常の袖部には、補強材の据え方と考えられる掘り込みが多く検出されており、カマド自体の改築が数次に亘り行なわれたことが推定される。傍竈坑は掘り方を見るとカマド部分に接した状態である。住居形状はC区の第VI段階に対比される。



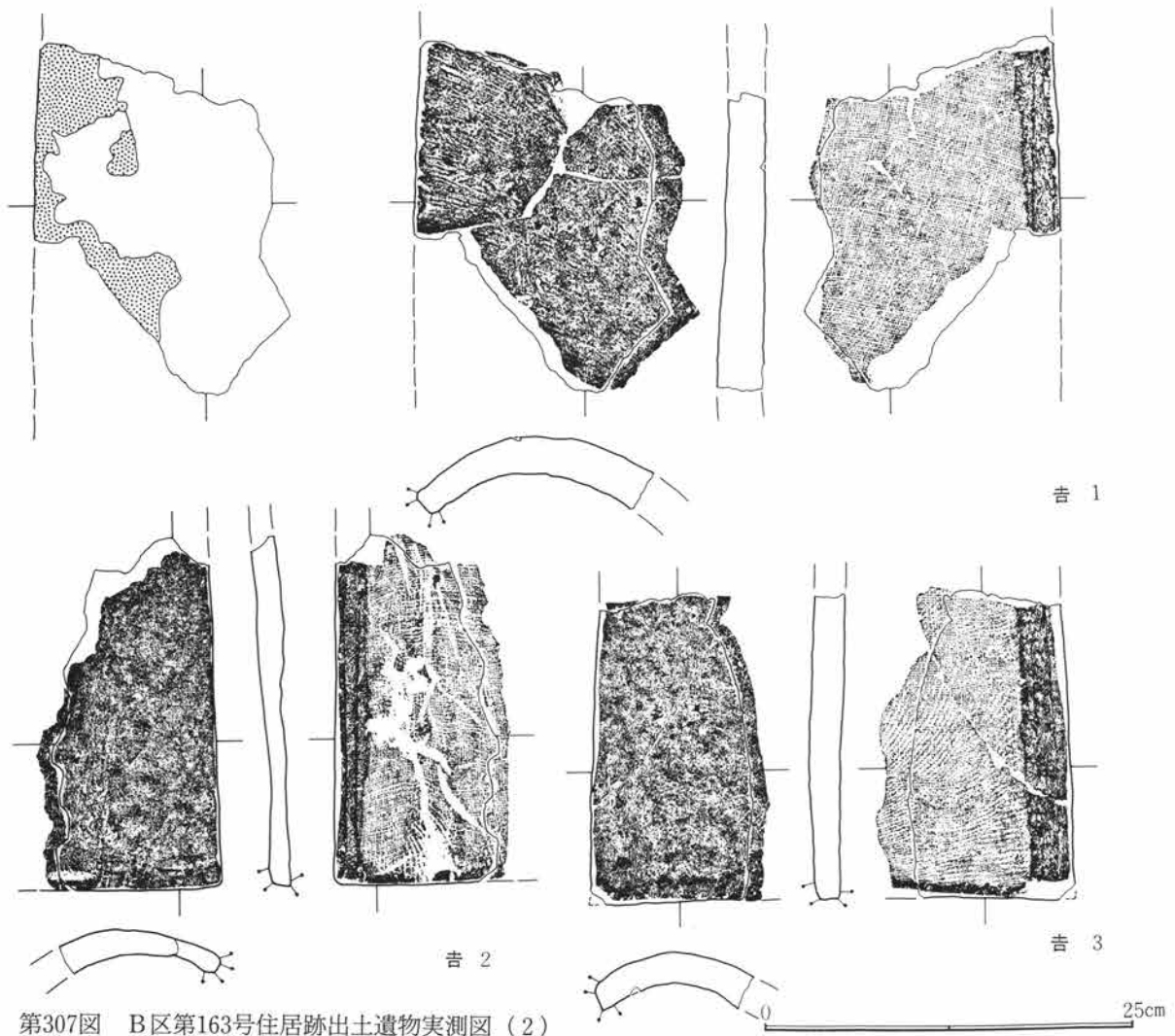
第305図 B区第163号住居跡実測図

層序(B163住)  
L=126.70m  
1. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。2. 微粒状C軽石少量・粒状焼土含有・粒状炭化物少量。3. 微粒状C軽石若干・粒状炭化物含有・塊状焼土多量。4. 微粒状C軽石若干・粒状焼土多量粒状VII層土多量。



第306図 B区第163号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について

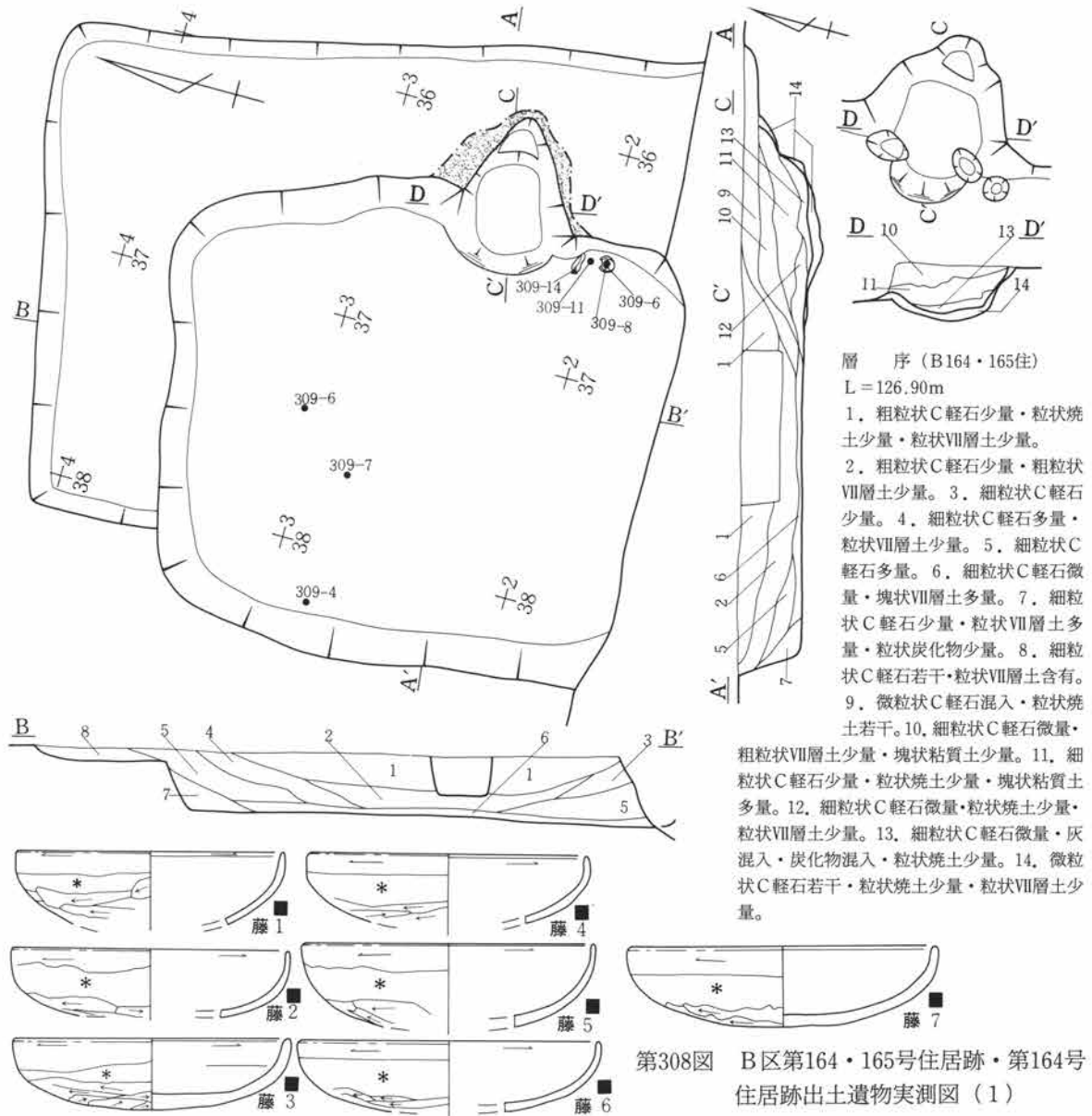


第307図 B区第163号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第164号住居跡		位置	37~39-B-2~4グリッド内。		残存深度	約58cm
平面形態	矩形か。	規模	4.26m×4.44+αm	構築基準辺	北及至東壁か	主軸方位	北-75度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm位か。			主軸方位	北-75度-南位か	
改築	有。掘り方内から焼土粒子を検出している。		形状	隅丸長方形の燃焼に煙道が付設する。			
規模	全長136cm・屋外長 80cm・屋内長 56cm・袖部幅134cm・燃焼部幅 80cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。			袖	微小で瘤状。		
煙道	立ち上り部を検出。		掘り方	袖部で袖材の据え方を検出。			
遺物出土状態	カマド右袖部の南東隅部寄りの床面直上礫・土師器片を検出。						

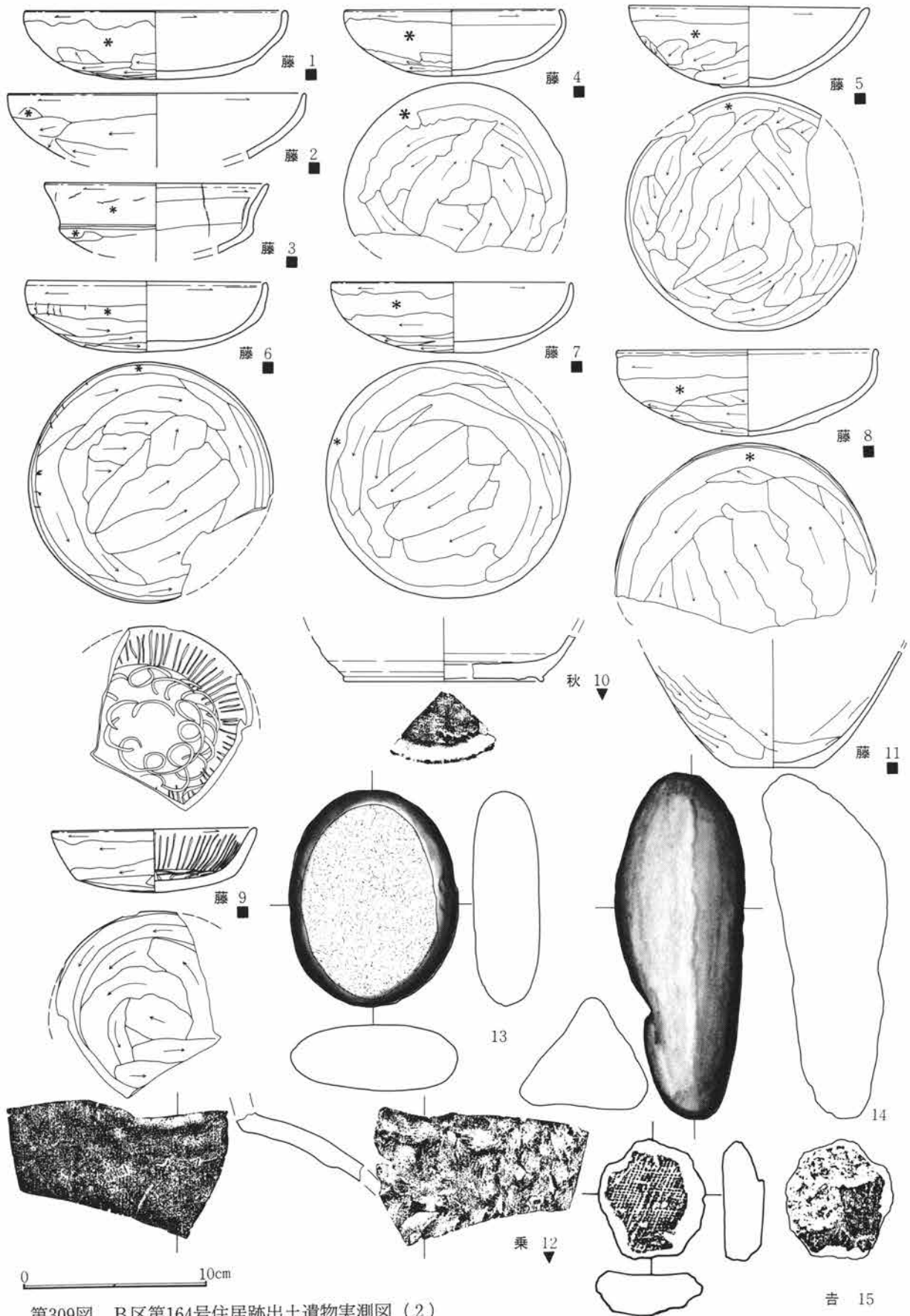
遺構名称	B区第165号址		位置	36~39-B-2~5グリッド内。			残存深度	約11cm
平面形態	横長方形。	規模	4.32m×5.60+αm	構築基準辺	不明	主軸方位	北-75度-南位か	
壁	遺存不良な為詳細不詳。		床面	地山VI・VII層土を使用し平坦。				
B164号住の破壊により詳細不詳。			傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				

所見 (B164住) 当住居跡はB165址と重複する状態であるが、調査時の土層断面観察では、その新旧関係は明らかでは無く、元来1軒の住居跡であった可能性も考慮される。又、両者共にB5溝により切られ、南壁側を失なっている。住居は、東壁中央よりやや南東隅部寄りに位置していると推定される。カマドは、全体的に三角形状を呈しているが、燃焼部は長形状を呈し規模も大きい。煙道は、燃焼部奥壁上位で立ち上がり、屋外方向への伸びは短かく地上面へ立ち上がったと推定される。袖は、右袖のみが微若な瘤状に認められているが、左袖は認められなかった。然、掘り方には、袖補強材の据え方が検出されており、カマドに改築があったことが考えられる。住居形状はC区の第Ⅲ段階に対比される。





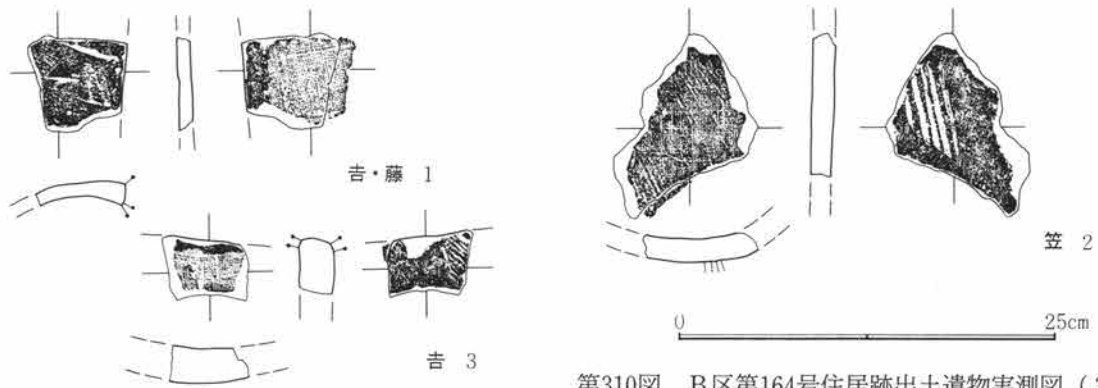
第3節 検出された住居跡について



第309図 B区第164号住居跡出土遺物実測図(2)

吉 15

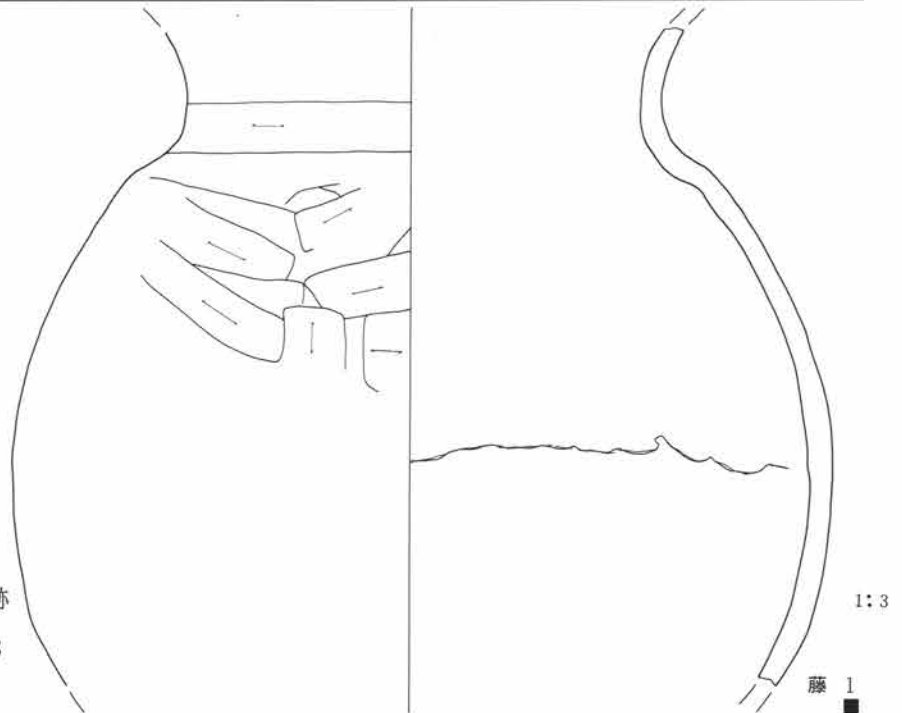
第4章 検出された遺構・遺物



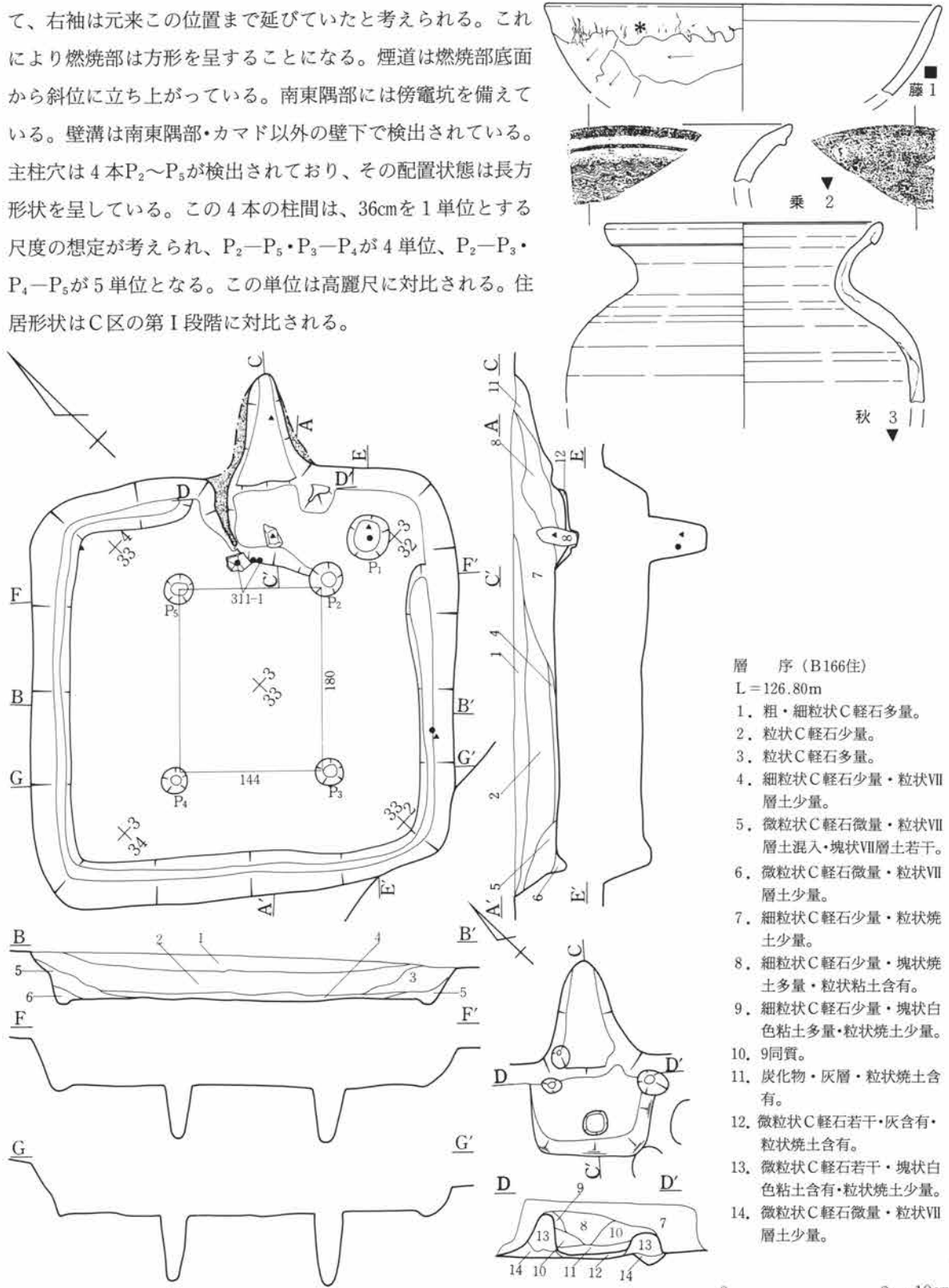
第310図 B区第164号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	B区第166号住居跡		位置	32~35-B-2~5 グリッド内。		残存深度	約45cm
平面形態	正方形。	規模	4.20m×4.30m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-46度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	カマド・南東隅部以外全周。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形。径45cm・深度-57cm			
柱穴	P <sub>2</sub> ~P <sub>3</sub> の支柱穴を検出。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm。				主軸方位	北-45度-南
改築	有。掘り方内から焼土・灰を検出。		形状	細身の舌状を呈する。			
規模	全長190cm・屋外長 95cm・屋内長 95cm・袖部幅144cm・燃烧部幅 52cm・煙道部幅 27cm。						
焚口・燃烧部	東壁より屋内に位置し、低い立ち上がりが見出された。壁は左右の袖によりなり、右袖が小さい為全体的に狭い。						
	袖	左右東壁より造り出され屋内に突出するが、右袖は小さい。					
煙道	先細り状であるが仰角10度程で立ち上がる。		掘り方	焚口を方形状に掘込んでいる。			
遺物出土状態	全体に出土遺物は非常に少ない。						

第311図 B区第166号住居跡  
出土遺物実測図(1) 1:3



所見 当住居跡は切り合い関係の無い単独住居跡である。住居は主軸値が-45度である。カマドは東壁中央に具備している。袖は、右袖は瘤状であるものの、左袖は長く屋内に向かい突出しており、左袖の先端側は浅く落ち込んでいる為、この部分が焚口と判断される。そして、右袖は元来この位置まで延びていたと考えられる。これにより燃焼部は方形を呈することになる。煙道は燃焼部底面から斜位に立ち上がっている。南東隅部には傍竈坑を備えている。壁溝は南東隅部・カマド以外の壁下で検出されている。支柱穴は4本P<sub>2</sub>~P<sub>5</sub>が検出されており、その配置状態は長方形を呈している。この4本の柱間は、36cmを1単位とする尺度の想定が考えられ、P<sub>2</sub>-P<sub>5</sub>・P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>が4単位、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub>が5単位となる。この単位は高麗尺に対比される。住居形状はC区の第I段階に対比される。

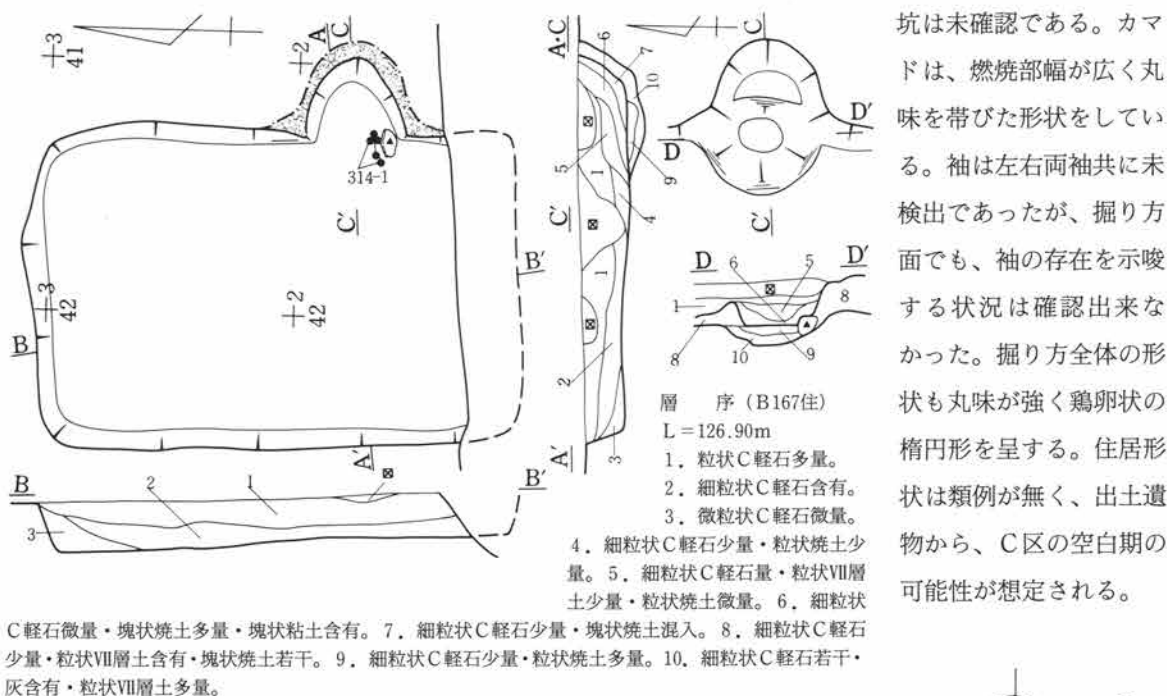


- 層序 (B166住)  
L=126.80m
1. 粗・細粒状C軽石多量。
  2. 粒状C軽石少量。
  3. 粒状C軽石多量。
  4. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。
  5. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土混入・塊状VII層土若干。
  6. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土少量。
  7. 細粒状C軽石少量・粒状焼土少量。
  8. 細粒状C軽石少量・塊状焼土多量・粒状粘土含有。
  9. 細粒状C軽石少量・塊状白色粘土多量・粒状焼土少量。
  10. 9同質。
  11. 炭化物・灰層・粒状焼土含有。
  12. 微粒状C軽石若干・灰含有・粒状焼土含有。
  13. 微粒状C軽石若干・塊状白色粘土含有・粒状焼土少量。
  14. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土少量。

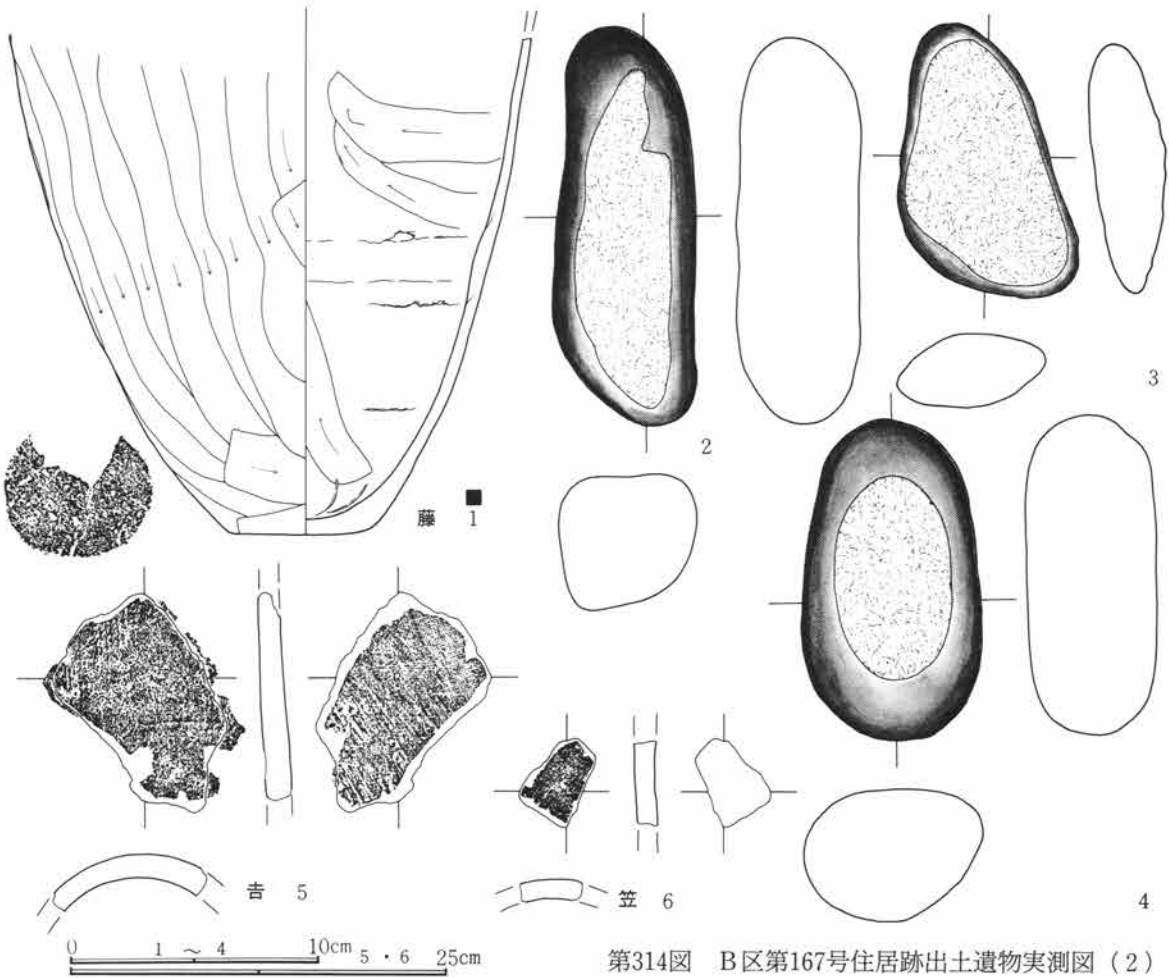
第312図 B区第166号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第167号住居跡		位置	42・43-B-2~4グリッド内。		残存深度	約40cm	
平面形態	横長方形。	規模	2.6m × $\frac{3.45+\alpha}{(4.0)}$ m		構築基準辺	西壁	主軸方位	北-88度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm位か。				主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内から焼土・灰を検出。			形状	半円形状（燃烧部）			
規模	全長 66cm・屋外長 66cm・屋内長 0cm・袖部幅 84cm・燃烧部幅 74cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁体の補強・焚口部の落ち込みは認められなかった。							
煙道	未検出。		掘り方	楕円形状を呈する土坑状。				
遺物出土状態	カマド右側壁側で少量出土している。覆土内でも量的に少なかった。							

所見 当住居跡はB5溝と重複するが、両者の新旧関係は調査段階では確認されていない。住居は比較的均整がとれた横長方形である。東壁中央部よりやや南東隅部に寄った位置に偏在していると考えられる。傍竈坑は未確認である。カマドは、燃烧部幅が広く丸味を帯びた形状をしている。袖は左右両袖共に未検出であったが、掘り方面でも、袖の存在を示唆する状況は確認出来なかった。掘り方全体の形状も丸味が強く鶏卵状の楕円形を呈する。住居形状は類例が無く、出土遺物から、C区の空白期の可能性が想定される。



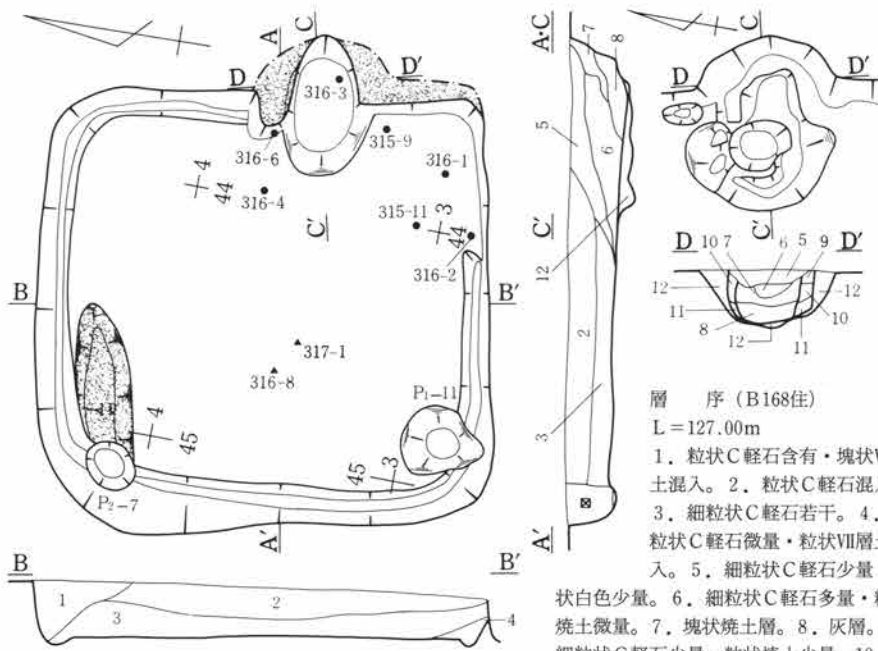
第313図 B区第167号住居跡実測図・出土遺物実測図 (1)



第314図 B区第167号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	B区第168号住居跡		位置	44~46-B-3~5グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	正方形。	規模	3.50m×3.70m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-79度-南位か
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。南東隅部以外で全周。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	北西隅部で極部的に認められた。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から85cm。			主軸方位	北-82度-南	
改築	有。掘り方で最低2回の改修が認められた。			形状	楕円形状。		
規模	全長110cm・屋外長 53cm・屋内長 57cm・袖部幅102cm・燃烧部幅 58cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	左袖のみ検出。大きく東壁から屋内に突出する。		
煙道	未検出。			掘り方	改修以前は袖補強材の据え方を具備する。		
遺物出土状態	南東隅部側で完形個体の出土が多い。出土層位は熟れも床面直上層。						

所見 当住居跡はB169住と南壁が接する状態で重複しているが、両者の新旧関係は調査段階では分明に出来なかった。住居は、東壁中央より若干南東隅部寄りにカマドを備えている。傍竈坑は未検出であるが、住居の南西隅部直下からP<sub>1</sub>が検出されている。性格は分明に出来ないが、貯蔵穴等の性格も考慮される。カマド

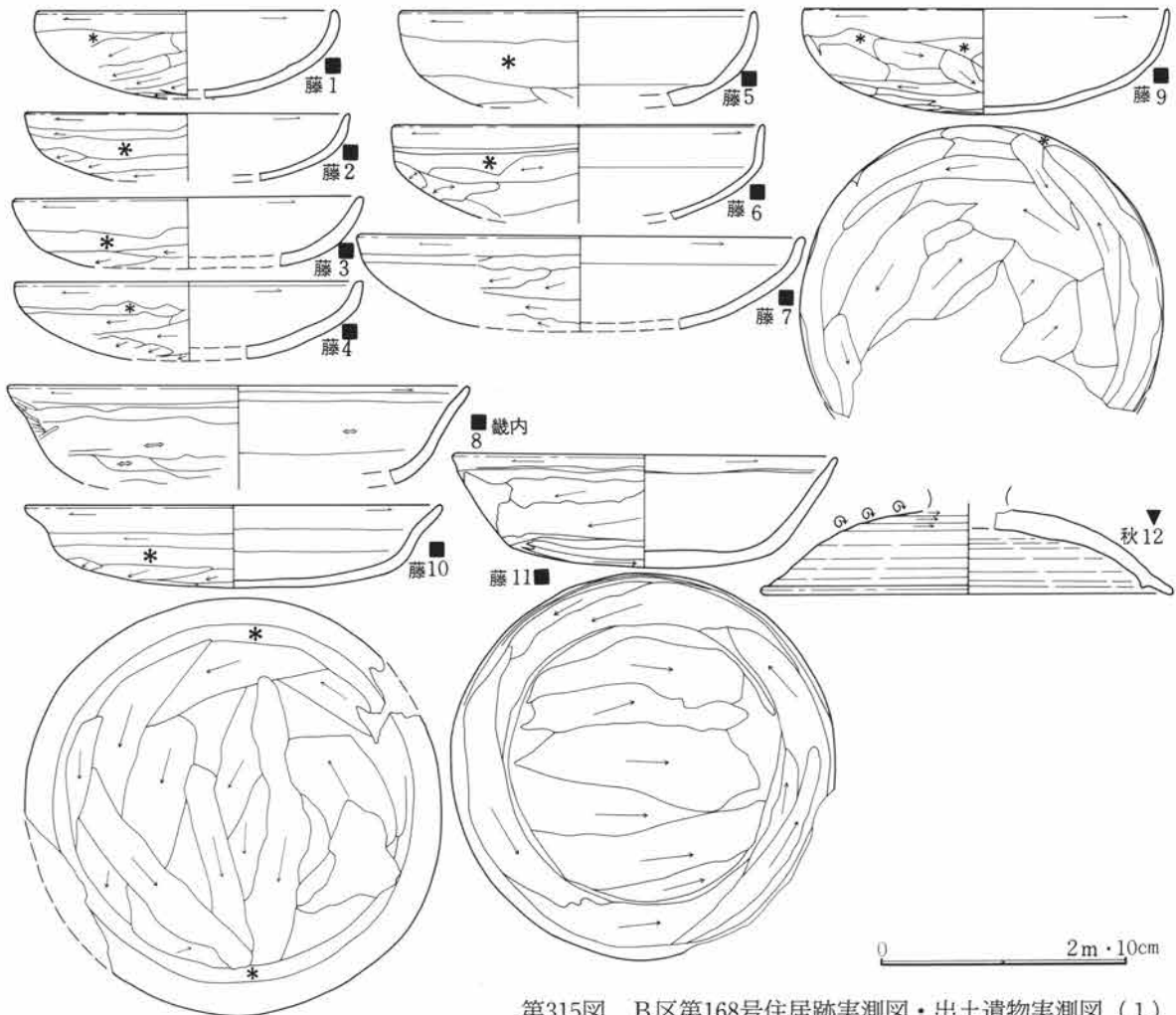


層序 (B168住)  
L=127.00m

1. 粒状C軽石含有・塊状VII層土混入。
2. 粒状C軽石混入。
3. 細粒状C軽石若干。
4. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土混入。
5. 細粒状C軽石少量・塊状白色少量。
6. 細粒状C軽石多量・粒状焼土微量。
7. 塊状焼土層。
8. 灰層。
9. 細粒状C軽石少量・粒状焼土少量。
10. 微粒状C軽石微量・粒状焼土多量。
11. 細粒状C軽石少量・塊状焼土少量・細粒状焼土少量。
12. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土少量・粒状焼土多量。

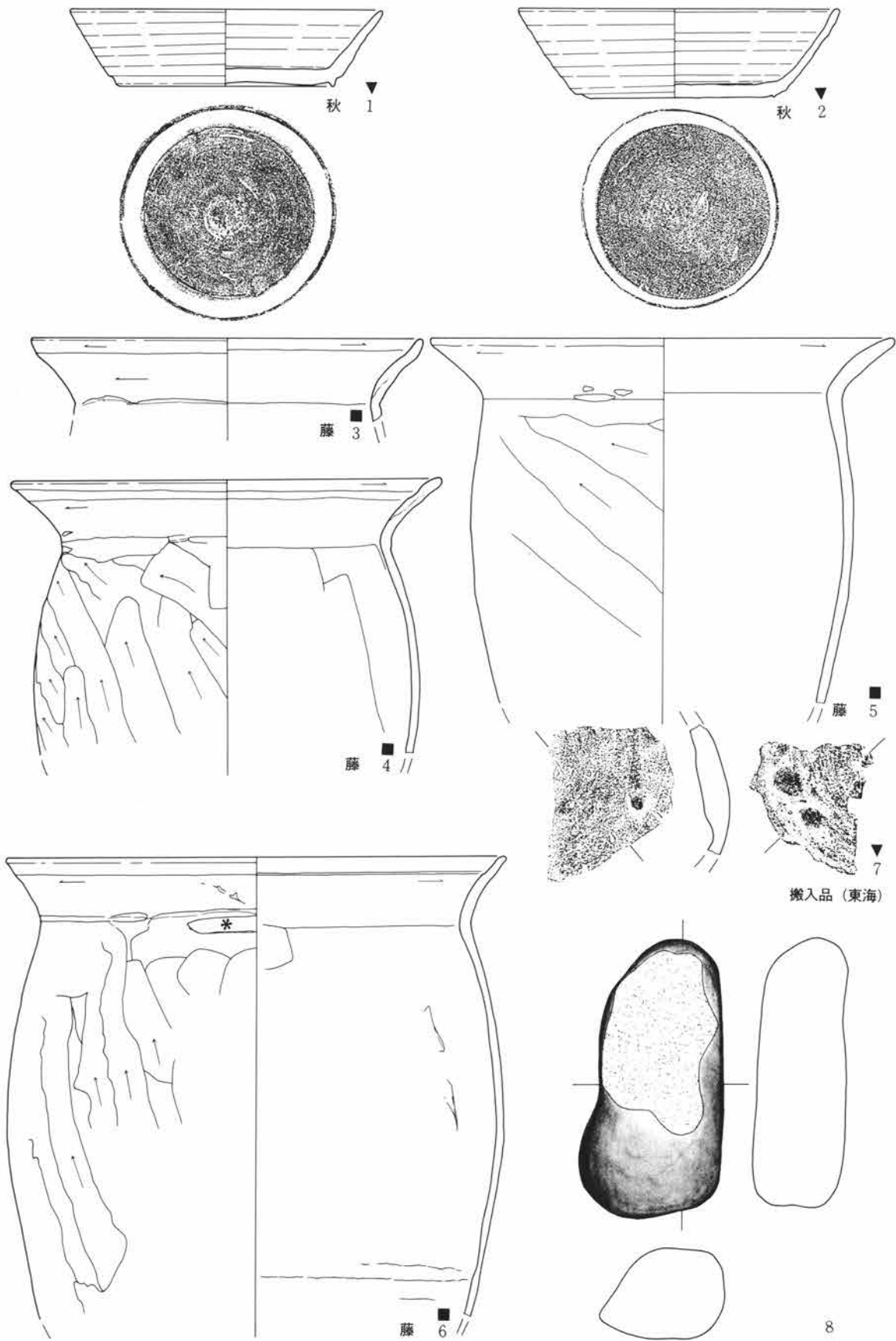
粒状C軽石微量・粒状焼土多量。11. 細粒状C軽石少量・塊状焼土少量・細粒状焼土少量。12. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土少量・粒状焼土多量。

は、左袖側は検出されたが、右袖は検出されなかった。燃烧空間は全体に丸味を帯び広く、煙道は検出出来なかった。掘り方では、右袖側は微少で瘤状の地山削り出しの袖が認められるが、位置的に袖とは考え難い。壁溝は、カマド及び南東隅部周辺以外では、壁下で検出されている。住居形状はC区第III段階に対比されるが、カマドが異なっている。

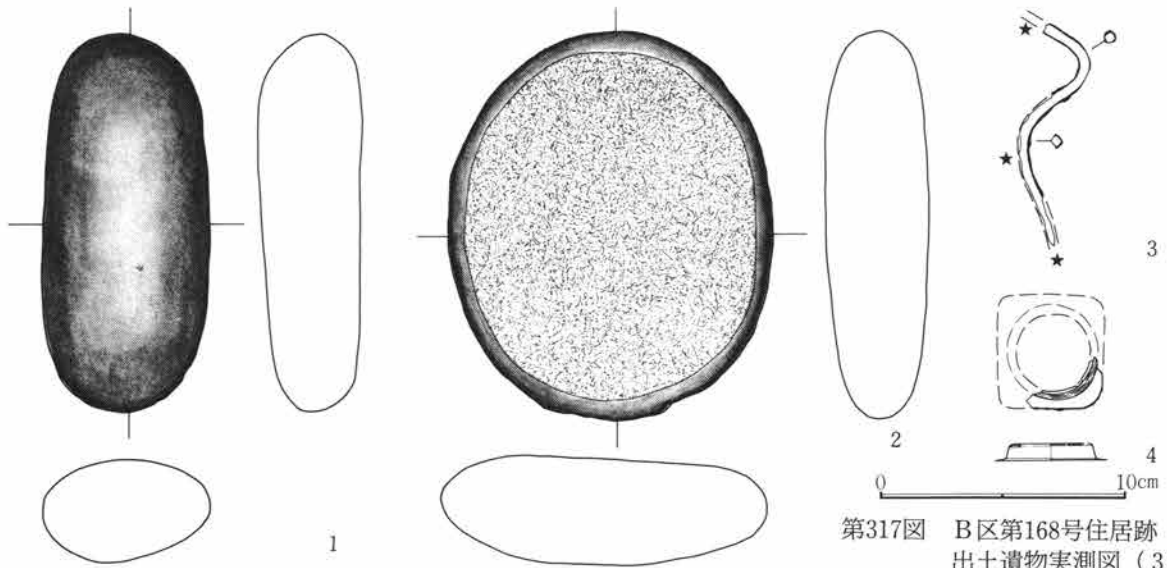


第315図 B区第168号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について

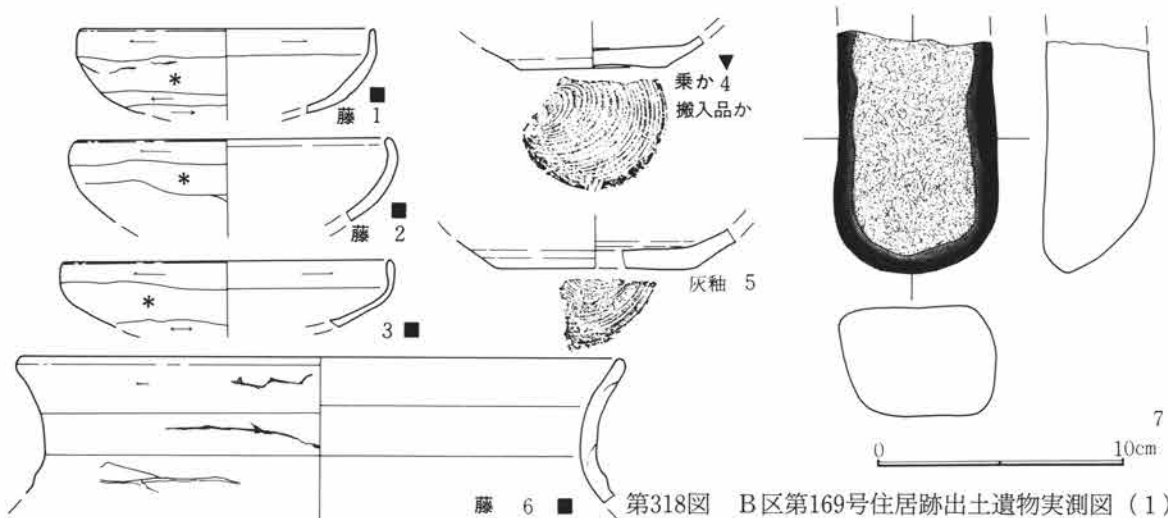


第316図 B区第168号住居跡出土遺物実測図(2)



第317図 B区第168号住居跡出土遺物実測図(3)

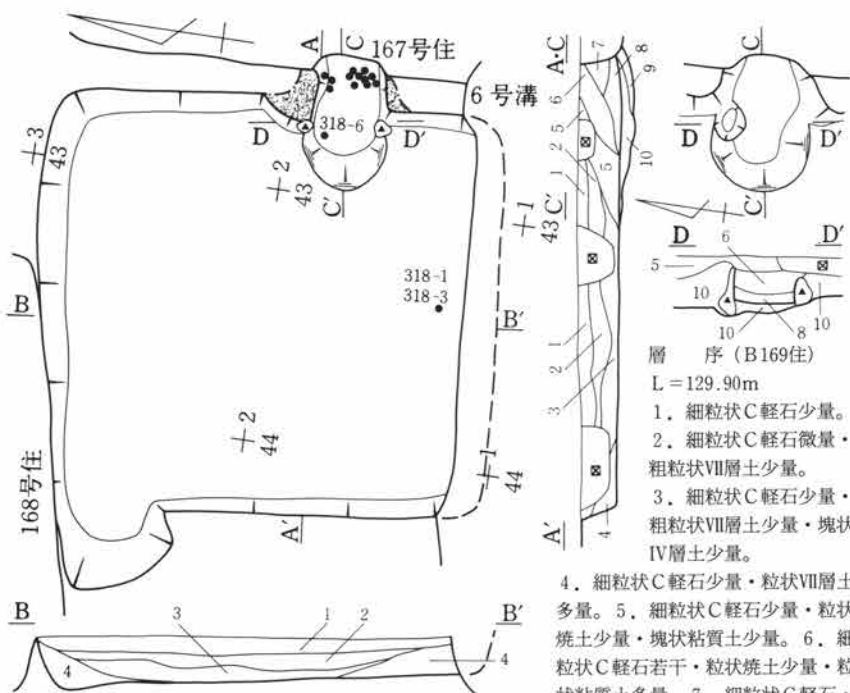
遺構名称	B区第169号住居跡		位置	43～45-B-2～3グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	矩形。	規模	3.30m × $3.50 + \alpha$ (3.80)	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-82度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm位か。			主軸方位	北-84度-南	
改築	有。掘り方から焼土等を検出。		形状	B167住に破壊され不詳。			
規模	全長 1cm・屋外長 1cm・屋内長 67cm・袖部幅105cm・燃烧部幅 59cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖は東壁から屋内に突出する。左右共に礫を補強材にする。					
煙道	未検出。		掘り方	鶏卵状を呈するののか。詳細不詳。			
遺物出土状態	全体に遺物が少なかった。出土層位は覆土内である。						



第318図 B区第169号住居跡出土遺物実測図(1)



所見 当住居跡は前述のB168住と北壁が接する状態で重複するが、調査段階では両者間の新旧関係は分明に出来なかった。南壁側は、B5溝に切れ失なわれている。住居は、東壁中央部にカマドを備えると考えら



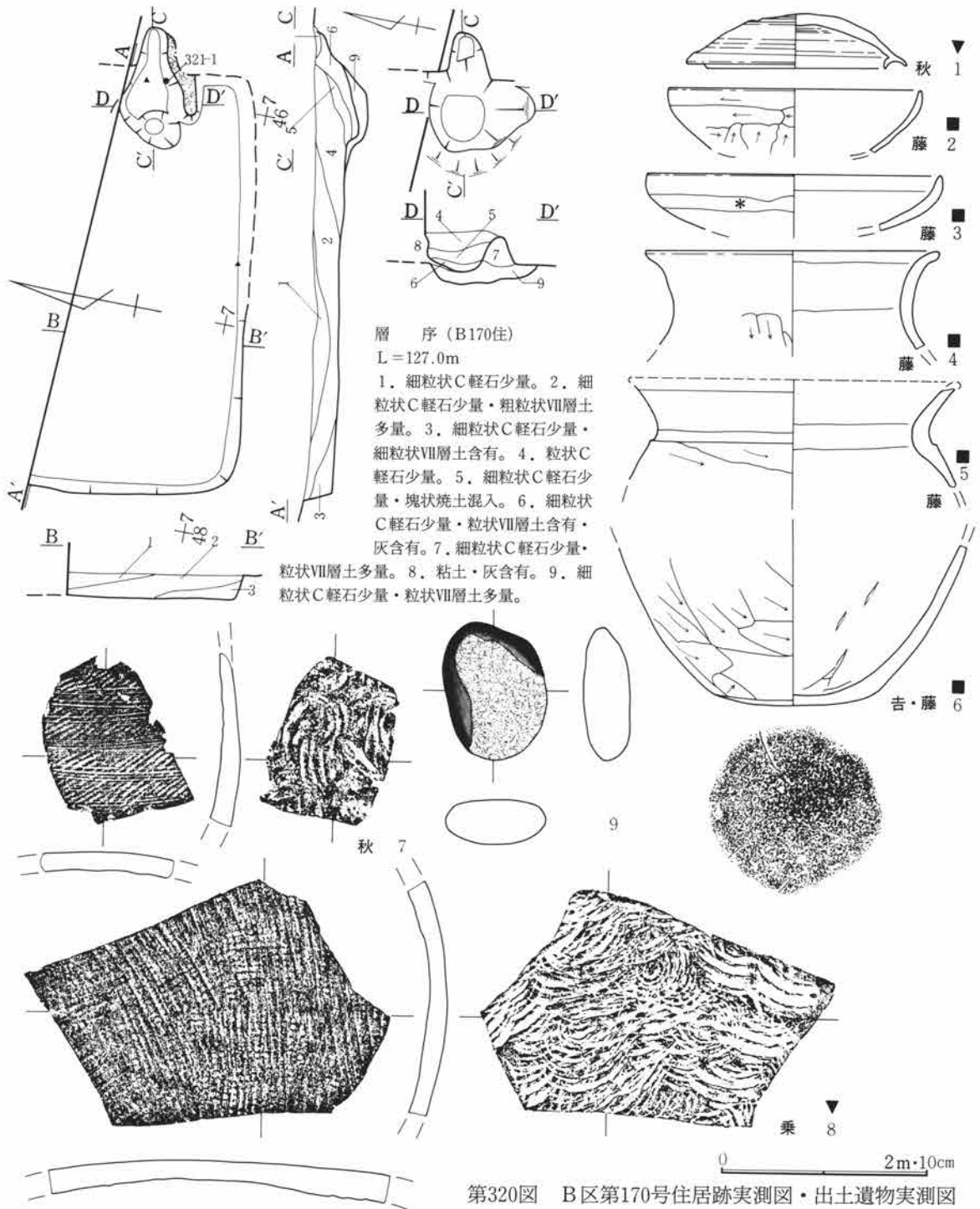
れる。又、北西隅寄りの西壁側には小規模の張り出しを有している。カマドは煙道寄りがB167住に破壊されているが、燃烧部幅は広く、左右両袖の先端は礫を用いている。袖は左袖はやや長く、右袖は顕著でない。これは東壁がカマドを境に不連続的に構築したことが最大の要因である。住居形状はC区の第III段階に対比される。出土遺物には良好なものがなかった。

第319図 B区第169号住居跡実測図

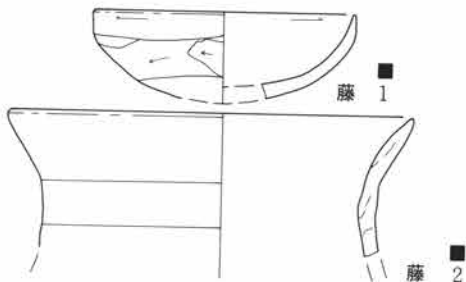
粒状焼土含有。8. 炭化物・灰層。9. 微粒状C軽石微量・灰含有・塊状焼土多量。10. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土含有・粒状粘質土多量。

遺構名称	B区第170号住居跡		位置	46~48-B-7・8グリッド内。		残存深度	約33cm
平面形態	不明。	規模	3.95m×2.05+αm	構築基準辺	不明壁	主軸方位	北-79度-南位か
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から40cm。			主軸方位	北-80度-南	
改築	不明。		形状	舌状を基調とし、屋内側に燃烧部を具備する。			
規模	全長108cm・屋外長 43cm・屋内長 65cm・袖部幅 80+αcm・燃烧部幅 45cm・煙道部幅 26cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
袖	左袖は粘土を主体とするが右袖は粘土を用いない。						
煙道	仰角42度程で立ち上がり細い。			掘り方	煙道部の半分程迄に達し土坑状である。		
遺物出土状態	全体に非常に少ない。カマド内底面から須恵器坏蓋（第320図-1）が出土している。						

所見 当住居跡はB171住を切り構築している。住居の北側半分は、調査区内を東西に流走する農業用水路の直下にあたり、同部の調査は不能であった。住居は、東壁にカマドを備える。カマドの東壁での詳細な位置は不明であるが、恐らく南東隅部に偏在していると推定される。カマドは、屋内側に長く突出した袖を具備し、屋外側へは煙道部のみが突出した状態である。煙道は燃烧部奥壁の下位の部分より仰角50度程で立ち上がり、先端側はほぼ直立に立ち上がっている。燃烧部の幅は広く、やや丸味を帯びている。傍竈坑等は未確認である。住居形状はC区第III段階に対比される。



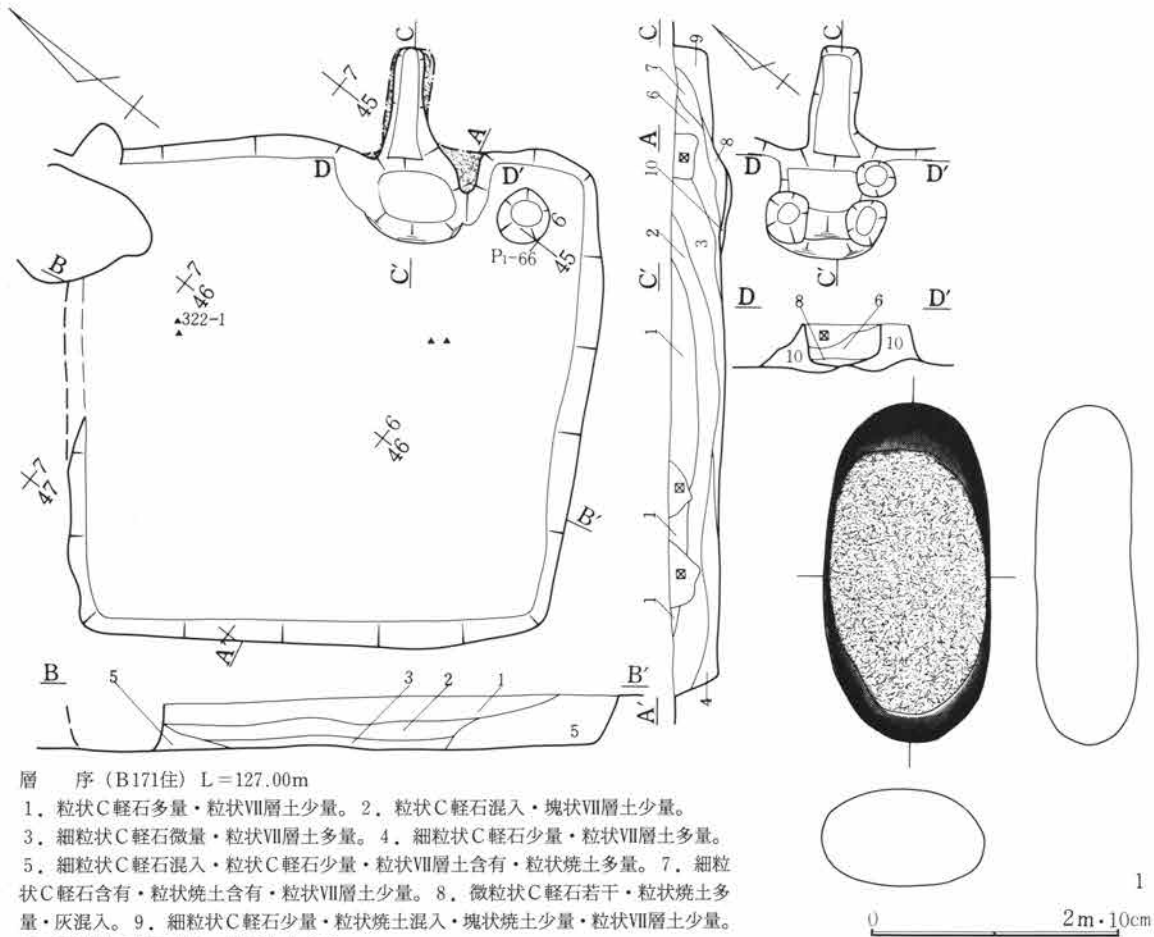
第320図 B区第170号住居跡実測図・出土遺物実測図



第321図 B区第171号住居跡出土遺物実測図(1)

所見 当住居跡はB170住に北隅部を切られている。住居の指向方向は主軸値 $-43$ 度をとる北側に傾く。カマドは東壁中央部よりやや南東隅部に寄った位置に備え、煙道部は長く屋外に突出する。左右袖は屋内側に長く突出し造り付けである。掘り方からは、袖の補強材の据え方が3ヶ所で認められている点から改築があったことが判断される。そして、南東隅部からは傍竈坑が検出されている。住居はC区の第I段階に対比される。

遺構名称	B区第171号住居跡		位置	45~48-B-6~8グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	正方形。	規模	4.00m×4.20m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-52度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形。径45cm・深度-66cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から74cm。			主軸方位	北-56度-南	
改築	有。袖材の据え方を検出。			形状	楕円形状の燃焼・焚口部に細い煙道を具備する。		
規模	全長155cm・屋外長 84cm・屋内長 71cm・袖部幅130cm・燃焼部幅 55cm・煙道部幅 23cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。			袖	両袖共東壁から屋内に突出する。改築以前は補強材を据える。		
煙道	細く70cm程屋外に突出し平坦。		掘り方	浅い箱状の掘り方に、袖材の据え方を有する。			
遺物出土状態	全体に非常に少ない。						

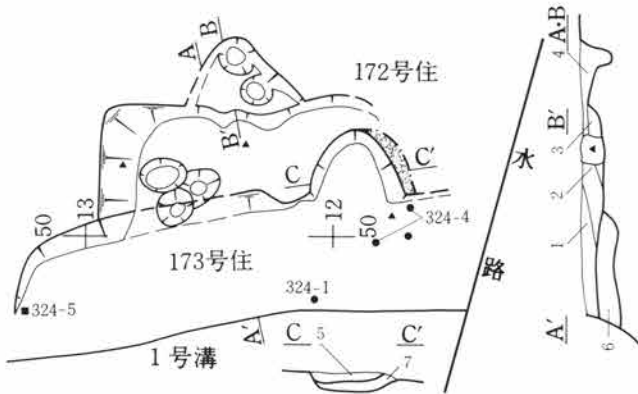


第322図 B区第171号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)

所見 (B172住) 当住居跡はB173住を切り構築しているが、西側半分程はA1溝に切られ破壊されている。又、調査時の確認面の下げ過ぎにより、住居跡自体の残存を悪くさせている。住居は、三角形に屋外に突出する部分をカマドと想定して調査を実施した。この結果、燃焼部底面と考えられる顕著な底面は検出され

遺構名称	B区第172号住居跡	位置	50・51-B-12~14グリッド内。	残存深度	約15cm
A1号溝状遺構（中世）破壊・調査の不幸により詳細不詳。					

遺構名称	B区第173号住居跡	位置	50・51-B-12~14グリッド内。	残存深度	約16cm
A区1号溝状遺構（中世）の破壊により詳細不詳。					



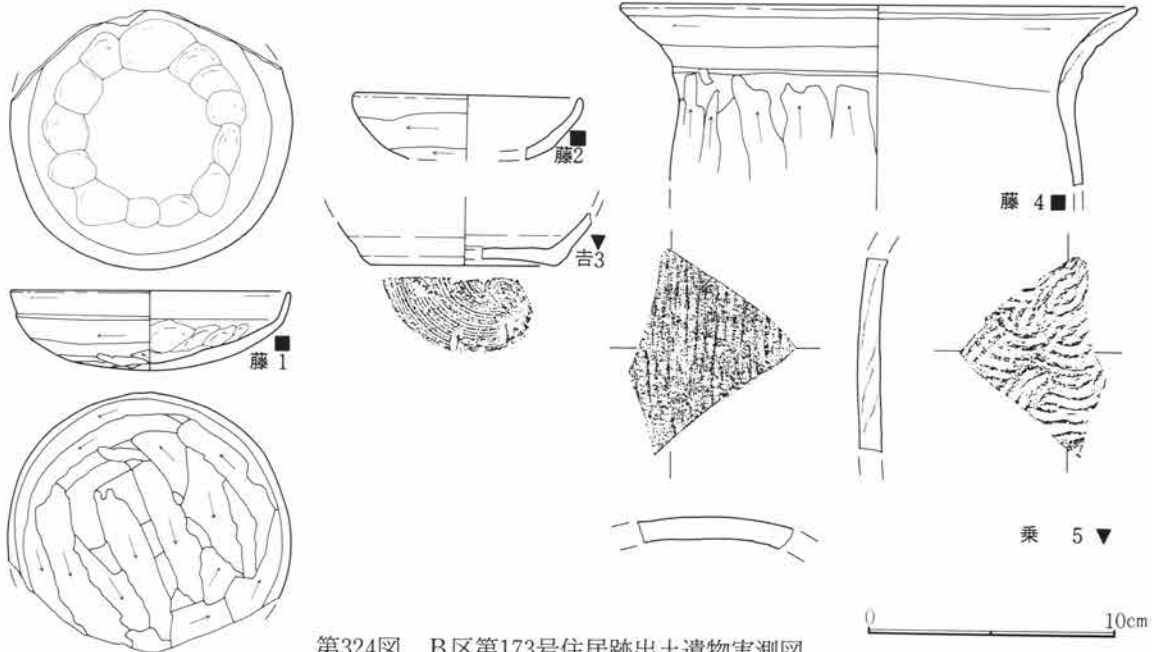
層序 (B172・173住) L=126.50m

1. 細粒状C軽石多量・粒状VII層土少量。
2. 細粒状C軽石少量・粒状焼土少量・灰少量。
3. 細粒状C軽石若干・粒状焼土少量。
4. 微粒状C軽石微量・灰少量。
5. 微粒状C軽石少量・粒状焼土含有・粒状炭化物少量。
6. 細粒状C軽石少量・粒状炭化物焼土微量。
7. 微粒状C軽石若干・粒状炭化物少量・粒状焼土若干。

第323図 B区第172・173号住居跡実測図

ず、住居跡東壁より上位にテラス状の構造となる底面が検出されている。この点から、この部分をカマドと確定しかねる。唯、想定した焚口部分からは地山砂岩質の切り出し材が出土している為、これを重視すれば、カマドは東壁に存在した該然性は高い。住居形状は対比はしかねる。遺物は殆どなかった。

所見 (B173住) 当住居跡は上述のB172住に切られており、更に、A1溝により両側の大半が破壊消滅されている。この為、住居跡の詳細は不分明な点が多い。住居は、東壁にカマドを具備しているが遺存が悪い。住居跡の時期は、出土遺物がC区第II段階に対比され、住居形状はこの段階と推定される。

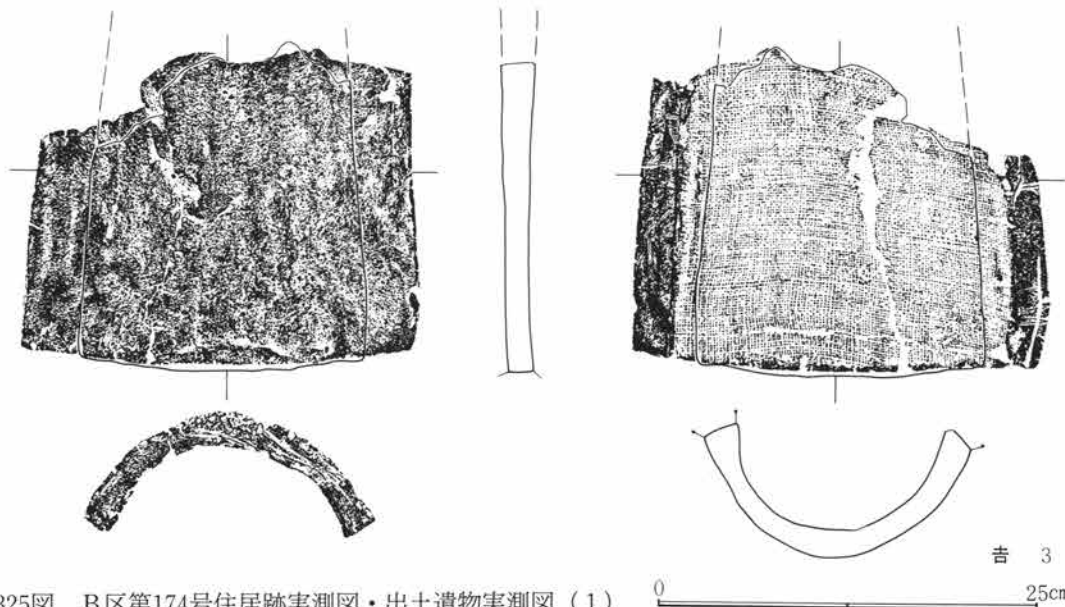
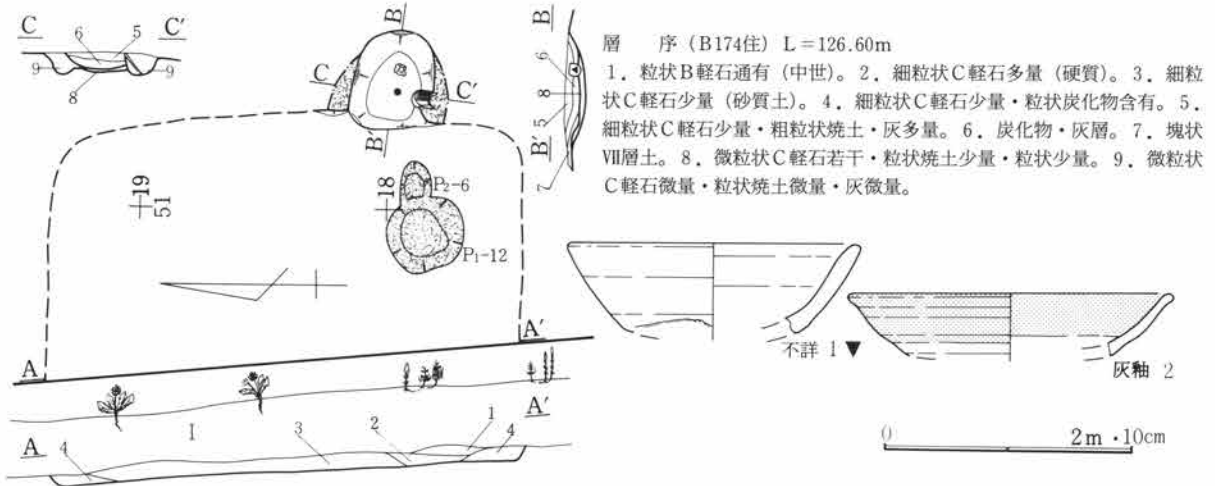


第324図 B区第173号住居跡出土遺物実測図

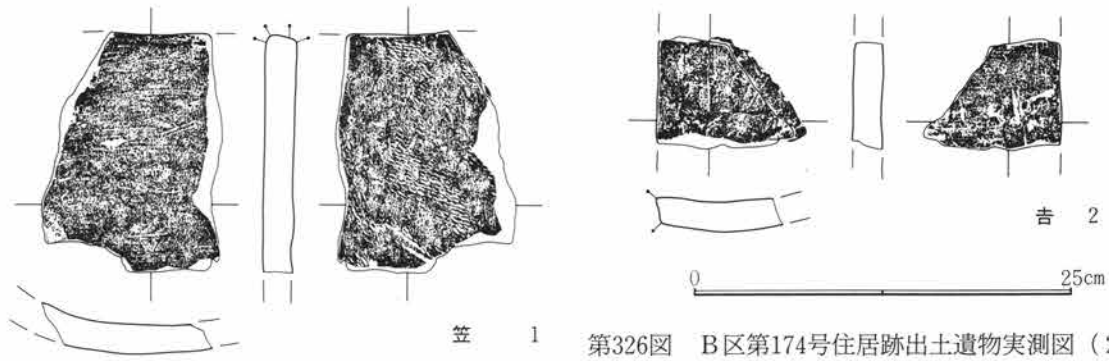
所見 当住居跡は、調査の進行上二次期に分けて調査実施した。然、西側の半分は、確認面の下げ過ぎにより検出されず破壊した可能性が高い。又、東側半分も、住居自体の遺存が不良で図上の平面形状は、調査区西側断面で確認された土層断面からの復元である。この復元図上では、カマドは東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置となるが詳細は不分明である。時期は出土遺物等からC区第VI段階以降と推定される。

第3節 検出された住居跡について

遺構名称	B区第174号住居跡		位置	51・52-B-18~20グリッド内。		残存深度	約12cm
平面形態	不明。	規模	1.96+αm×3.83m	構築基準辺	不明壁	主軸方位	北-89度-南位か
壁	詳細不詳。		床面	地山VII層土を使用し平坦である。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無しか。詳細不明な点が多い。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から55cm位か。			主軸方位	北-92度-南	
改築	有。掘り方内で焼土・灰を検出している。		形状				
規模	全長 78cm・屋外長 66cm・屋内長 12cm・袖部幅108cm・燃燒部幅 62cm。						
焚口・燃燒部	扇状を呈する焚口部は、燃燒空間と重複する部分が著しい。右壁は瓦により補強されている。支脚が奥壁寄りで出土している。						
煙道	未検出。		掘り方	馬蹄形状を呈し左右に補強材の据え方がある。			
遺物出土状態	少量の土器類・瓦類が出土しているが、全て床面直上層に近い。						



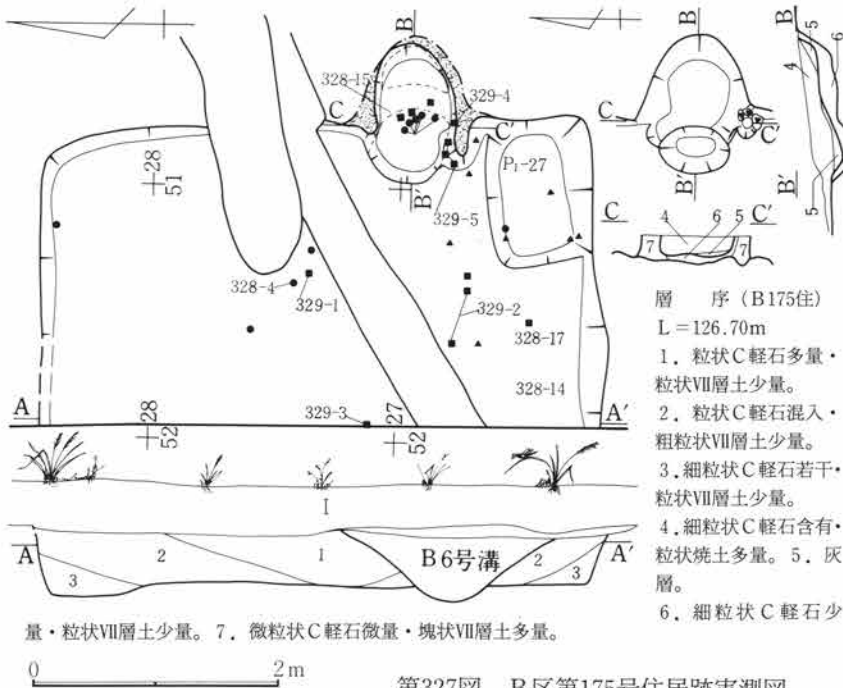
第325図 B区第174号住居跡実測図・出土遺物実測図 (1)



第326図 B区第174号住居跡出土遺物実測図(2)

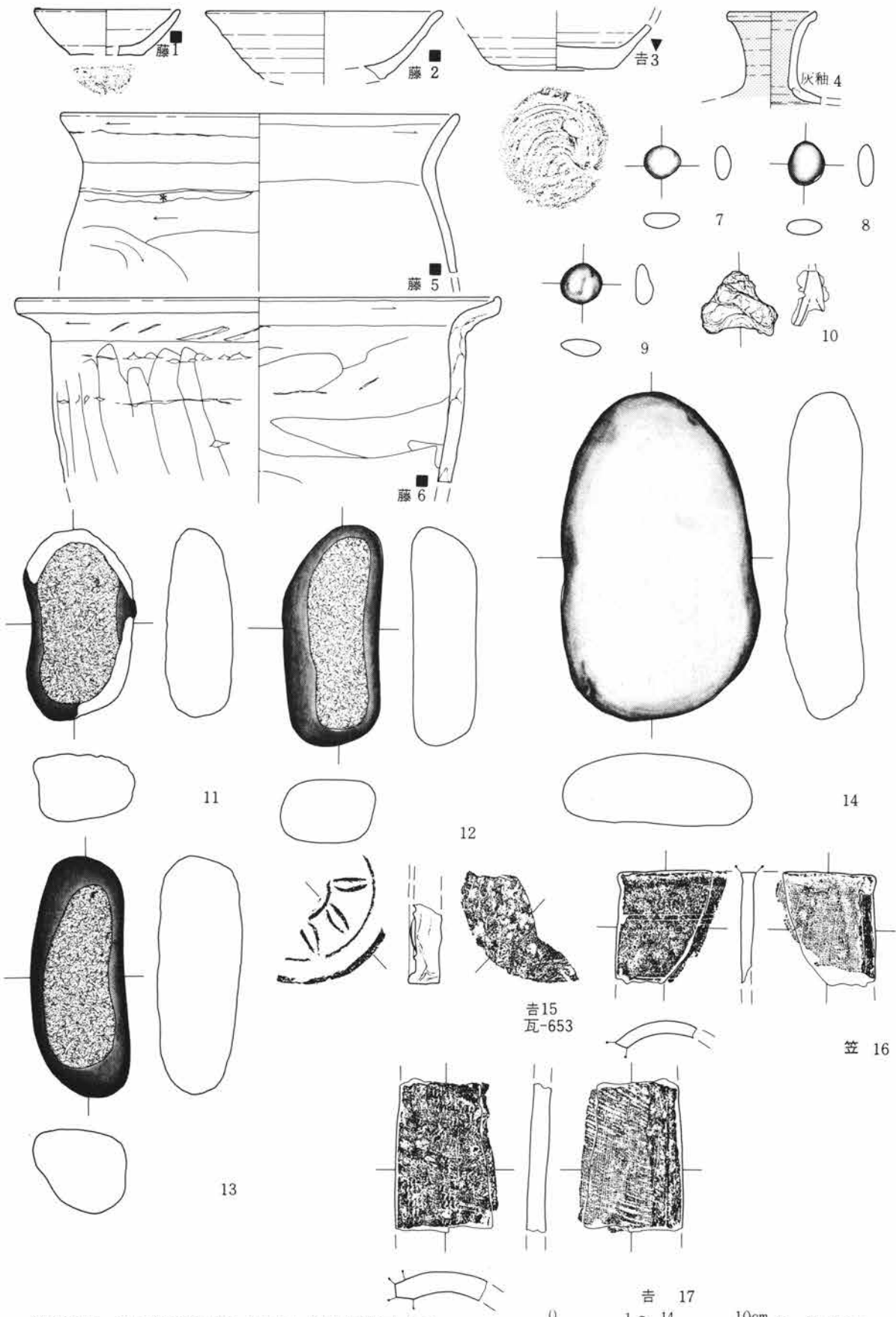
遺構名称	B区第175号住居跡			位置	51・52-B-27~29グリッド内。			残存深度	約45cm
平面形態	不明。	規模	2.32+αm×4.55m	構築基準辺	不明壁	主軸方位	北-89度-南位か		
壁	斜位気味に立ち上がる。			床面	地山VII層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。			傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・縦長方形。110×73cm・深度-27cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。								
掘り方	無し。								
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から73cm。				主軸方位	北-90度-南		
改築	有り。掘り方内より焼土粒を検出。			形状	馬蹄形状を呈する。				
規模	全長110cm・屋外長 63cm・屋内長 47cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 65cm。								
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁体の補強材は検出されなかつた。								
煙道	未検出。			掘り方	広い舌状を呈する。焚口下位で土坑状になる。				
遺物出土状態	覆土内で土器類・瓦類の出土があるが、比較的床面直上・床面直上層の出土が多い。								

所見 当住居跡は、B100・182・180住と重複するが、明な証左の検証は調査段階では得られていない。住居は、東壁中央より南東隅部に偏在した位置にカマドを具備し、南東隅部には主軸方向に長軸をとる長方形を呈する傍竈坑を具備している。カマドは、やや細身の袖を左右に備えている。燃烧部の幅は広く、底面は灰等の掻き出しによる所産か、段状を呈し2段になっている。住居形状はC区の空白期の可能性がある。出土遺物は夾雑しており、遺物では明にし難い。



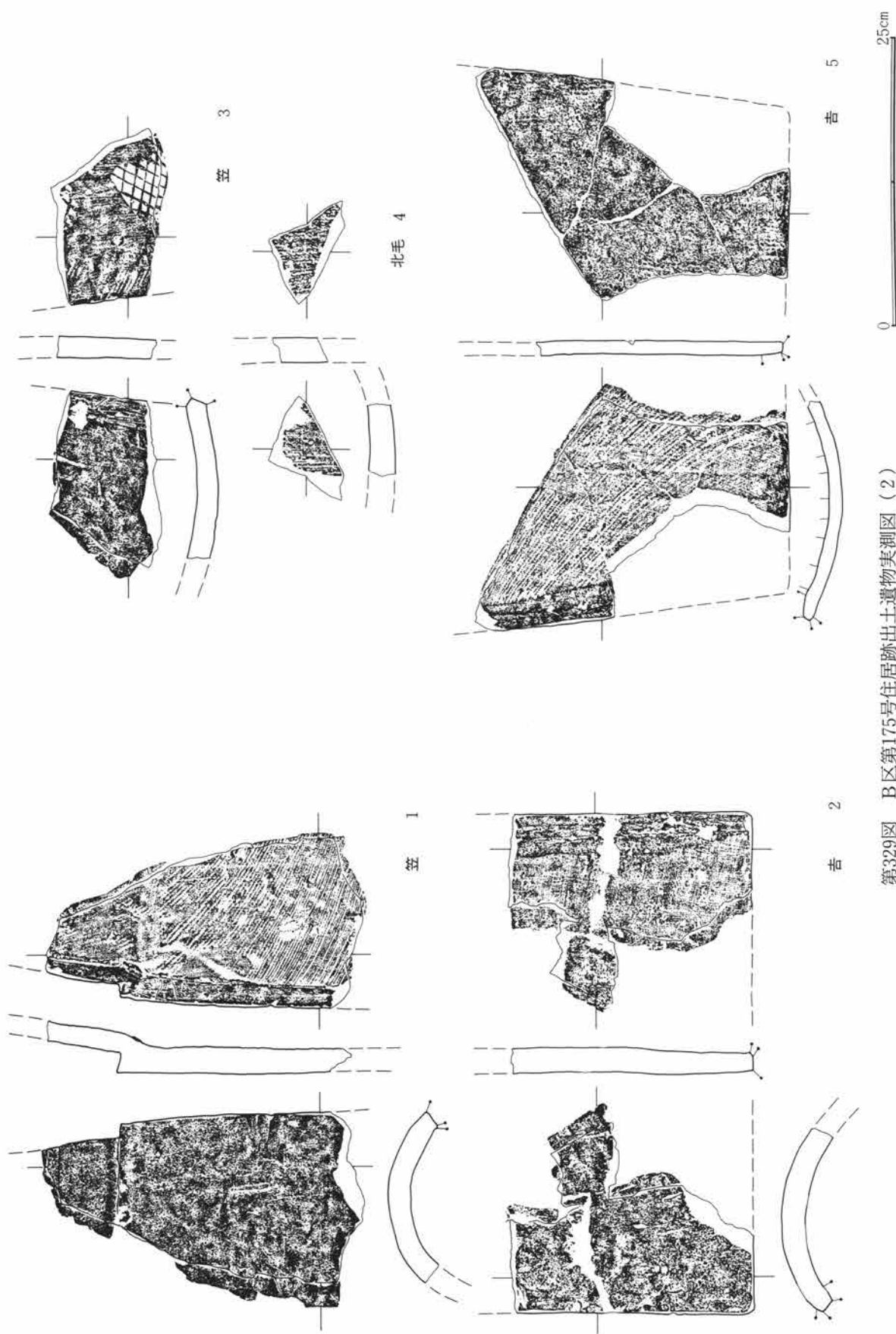
第327図 B区第175号住居跡実測図

第3節 検出された住居跡について



第328図 B区第175号住居跡出土遺物実測図(1)

0 10cm 15~17 25cm

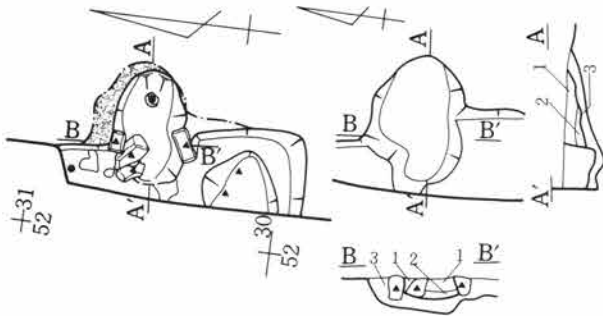


第329図 B区第175号住居跡出土遺物実測図(2)



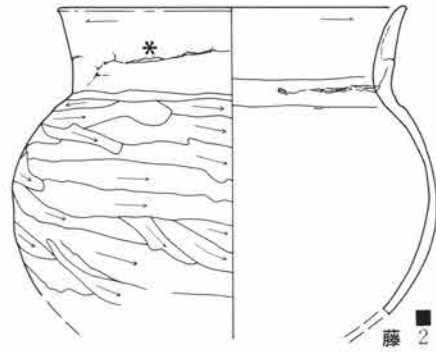
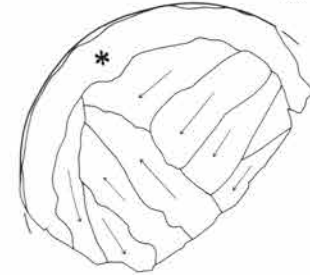
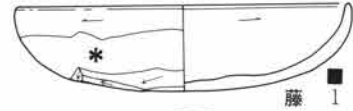
遺構名称	B区第181号住居跡	位置	52-B-30・31グリッド内。	残存深度	約10cm
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。		主軸方位	北-84度-南
改築	有。掘り方内に灰が混入する。	形状	長楕円形状を呈する。		
規模	全長190cm・屋外長 57cm・屋内長(33)cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 57cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。				
	袖	地山砂岩質土の切り出し材を芯材とする。			
煙道	仰角10~12度程で立ち上がると考えられる。	掘り方	不整形の土坑状を呈する。		
遺物出土状態	カマドの両袖・焚口天井に地山砂岩質土の切り出し材が出土し、土器類は少量であった。				

所見 当住居跡は、カマド周辺部以外は調査区外に延びる為、住居の詳細は不明な点が多い。カマドは、東壁に具備するが詳細な位置は不明であるが、恐らく、南東隅部に寄った位置と考えられる。袖は地山砂岩質の切り出し材を角柱状に成したものを補強材としている。燃烧部はやや幅が広く、緩やかに煙道方向に向かい立ち上がっている。住居形状は、傍竈坑の存在からC区第VII段階以前に対比される。



層序 (B181住) L=127.40m

1. 細粒状C軽石少量・粗大塊状VII層土含有。
2. 炭化物・灰層。
3. 細粒状C軽石若干・灰少量・細粒状VII層土少量。



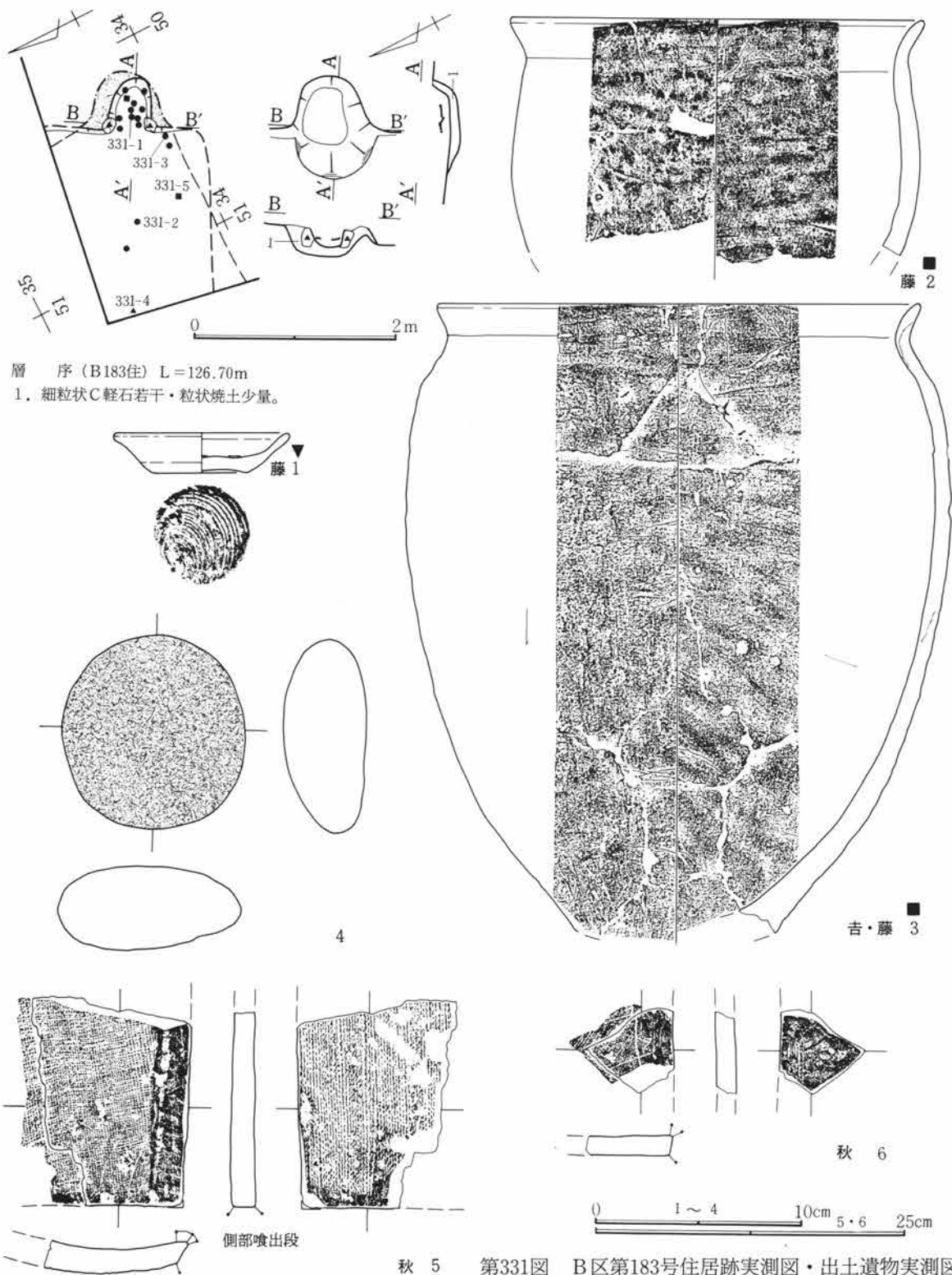
第330図 B区第181号住居跡実測図・出土遺物実測図

0 2m・10cm

遺構名称	B区第183号住居跡	位置	51・52-B-34・35グリッド内。	残存深度	約18cm
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から10cm位か。		主軸方位	北-63度-南
改築	有。掘り方から焼土を検出している。	形状	舌状を呈する。		
規模	全長 53cm・屋外長 53cm・屋内長 0cm・袖部幅 90cm・燃烧部幅 40cm。				
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。				
	袖	殆んど認められないが礫を用い補強している。			
煙道	未検出。	掘り方	楕円形状を呈し土坑状の掘り込み。		
遺物出土状態	カマド内から1個体分の土釜(第331図-3)・坏(第331図-1)が出土している。				

所見 当住居跡はB184住の覆土内に構築している。住居は、カマドの検出によりその存在を知った。この為壁の検出は出来なかった。カマドは、主軸が北東方向に指向する点と、出土遺物にC区の第VIII・IX段階の住居跡の様相が認められる点から、当住居跡の形状はC区第IX段階の形状を呈していた可能性が高い。

第4章 検出された遺構・遺物

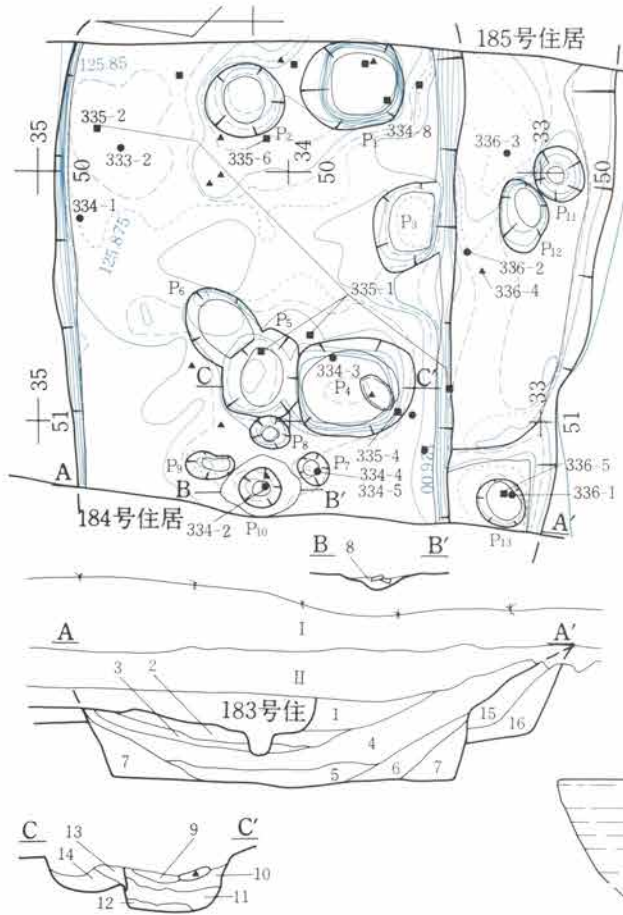


層序 (B183住) L=126.70m  
 1. 細粒状C軽石若干・粒状焼土少量。

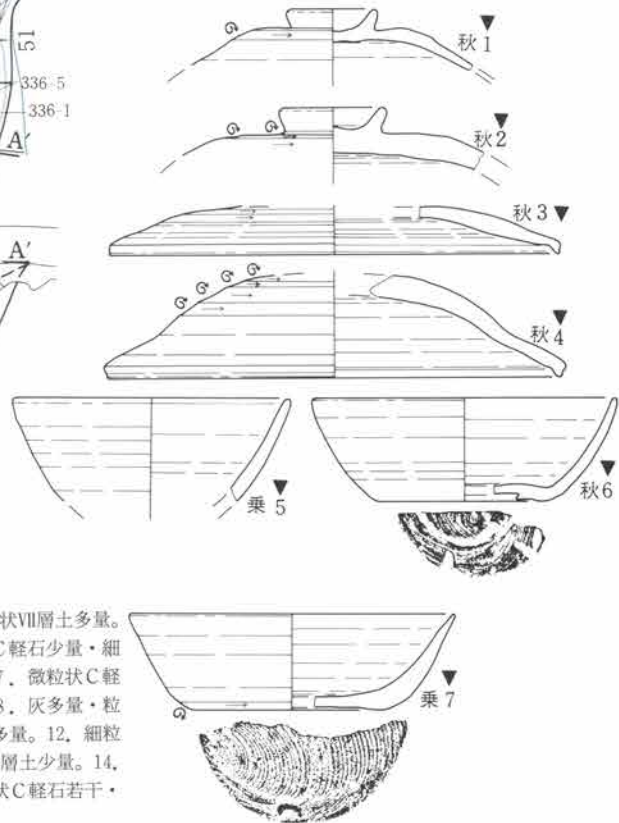
秋 5 第331図 B区第183号住居跡実測図・出土遺物実測図

所見 当住居跡は、B185住を切る状態で構築し前述のB183住に切られている。住居跡は、調査の下手際から、東壁側の検出が出来なかったが、東側は(本線敷側)、カマドの痕跡が認められなかったことから、住居自体がカマドを備えなかった特殊遺跡であることが推定される。そして、床面からは、炉床や、大小ピット、台石・羽口・スラグの出土から小鍛冶の堅穴遺構であることが判断される。この点から、当該住居を含め、周辺部には小鍛冶遺構が群集する点が指摘される。時期は遺物からC区の空白期と判断される。

遺構名称	B区第184号住居跡	位置	50~52-B-33~35グリッド内。	残存深度	約100cm
平面形態	特殊か。	規模	3.78+αm×3.20m	構築基準辺	南壁か
壁	斜位気味に立ち上がる。	床面	地山VII層土を使用する。	主軸方位	北-89度-南
壁溝	未検出。	傍竈坑・貯蔵穴	未検出か、詳細不分明。		
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。				
掘り方	無し。				
遺物出土状態	散漫な感はあるが、床面直上・床面直上層中からの出土がやや多い。				
遺構名称	B区第185号住居跡	位置	50~52-B-33・34グリッド内。	残存深度	約50cm
B184号住の破壊調査未着手の部がある為詳細不詳。					



所見 当住居跡はB184・183住に切られているが、残存部はB184住の南壁に沿った状態であることから、B184住の構築時期に近く、性格も同様の可能性が想起される。そして、出土遺物も、B184住に重複するかの如くの様相も認められることから、両住居の廃棄と構築には何らかの関係も想起される。又、当遺跡での最後の調査住居でもある。

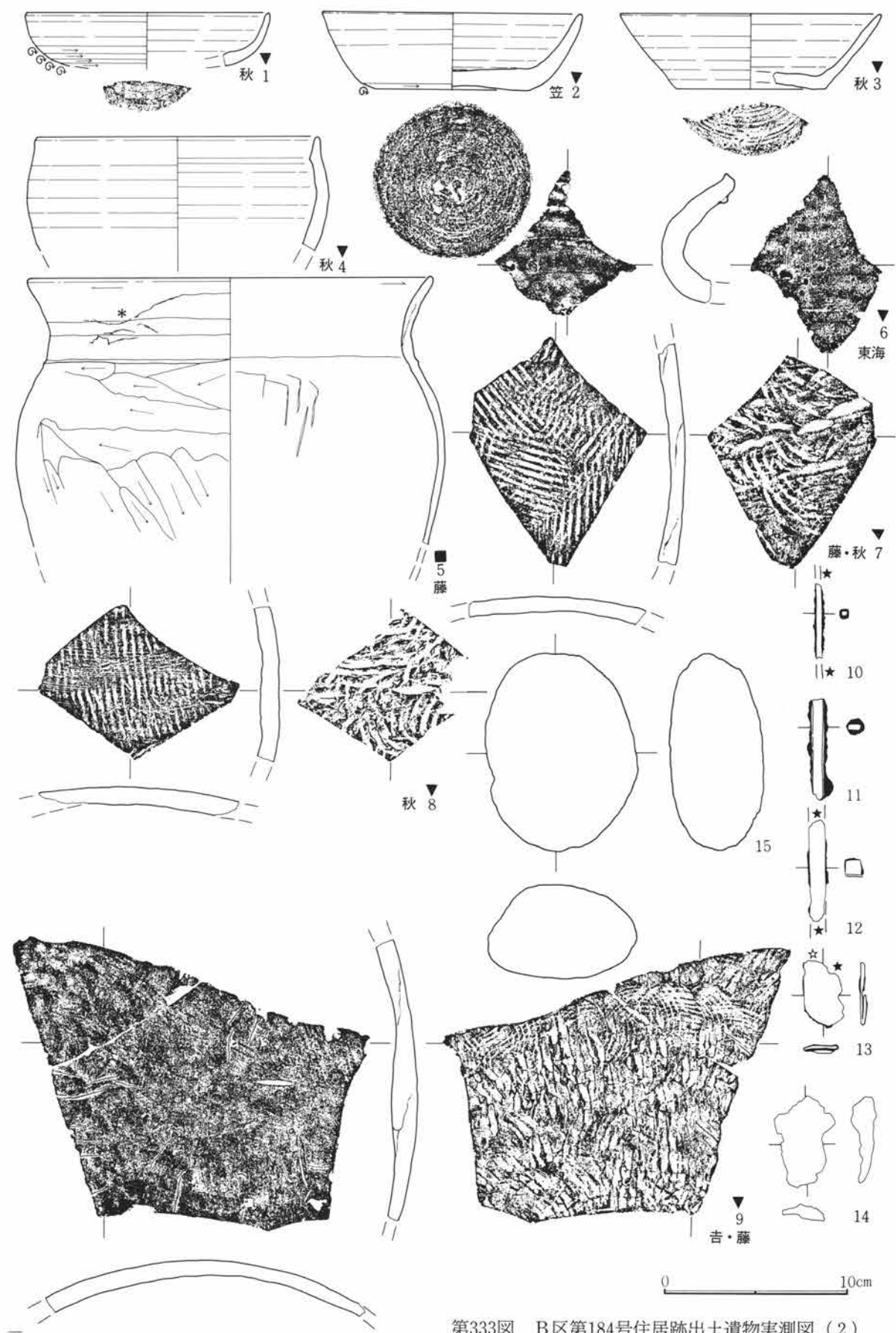


層序 (B184・185住) L=127.00m

1. 粒状C軽石少量・塊状VII層土少量。
2. 粒状C軽石少量・塊状VII層土多量。
3. 粗・細粒状C軽石多量 (発色暗)。
4. 1近質。
5. 細粒状C軽石少量・細粒状VII層土若干。
6. 微粒状C軽石少量・細粒状VII層土微量。
7. 微粒状C軽石微量・塊状IV層土多量・細粒状VII層土若干粒状炭化物少量。
8. 灰多量・粒状炭化物含有青灰褐色土。
9. 灰層。
10. 塊状焼土。
11. 鉄滓多量。
12. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土少量。
13. 細粒状C軽石微量・塊状VII層土少量。
14. 塊状VII層土主体・鉄滓少量。
15. 細粒状C軽石若干。
16. 細粒状C軽石若干・細粒状VII層土若干。

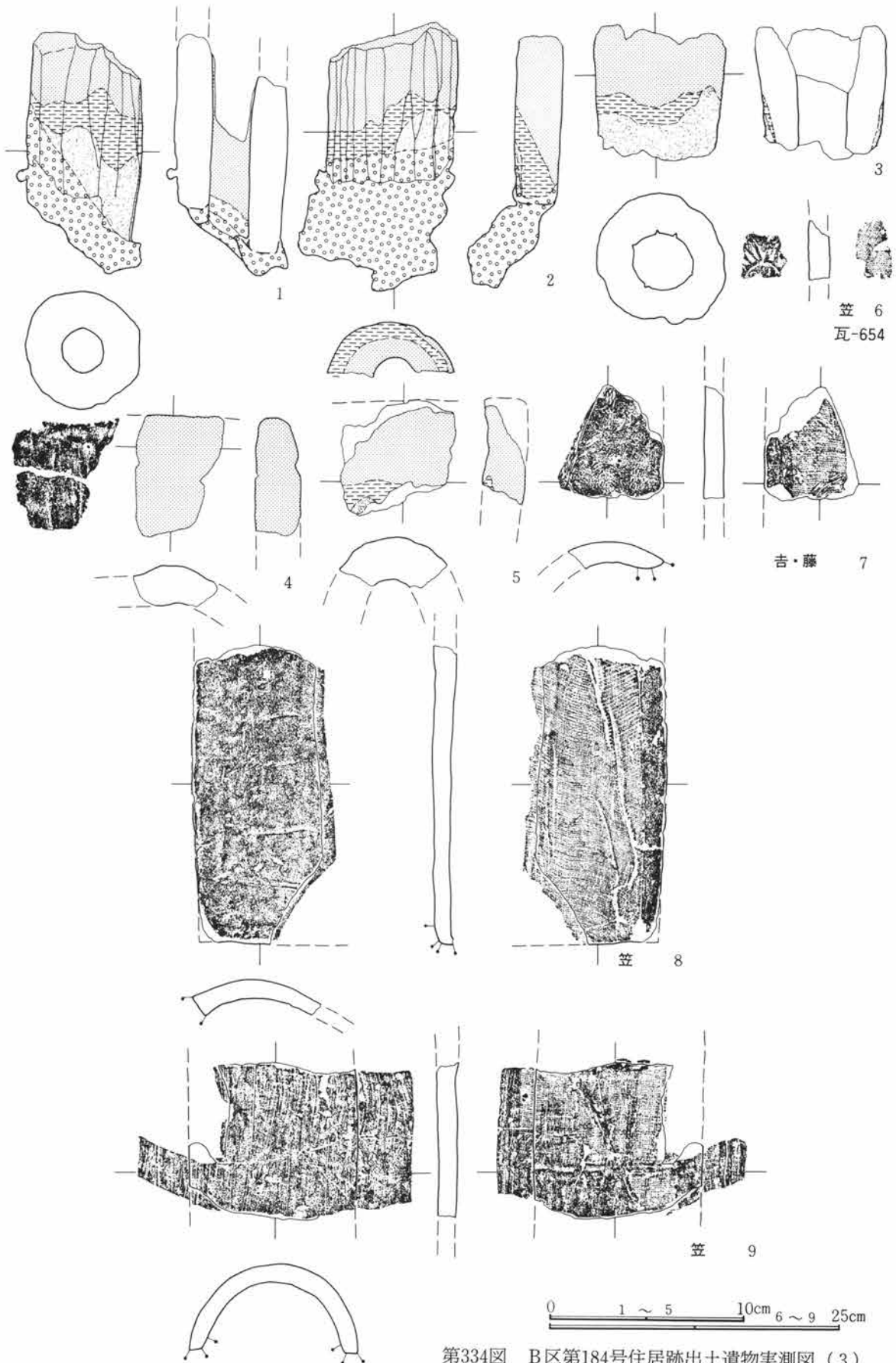
第332図 B区第184・185号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

0 2m・10cm

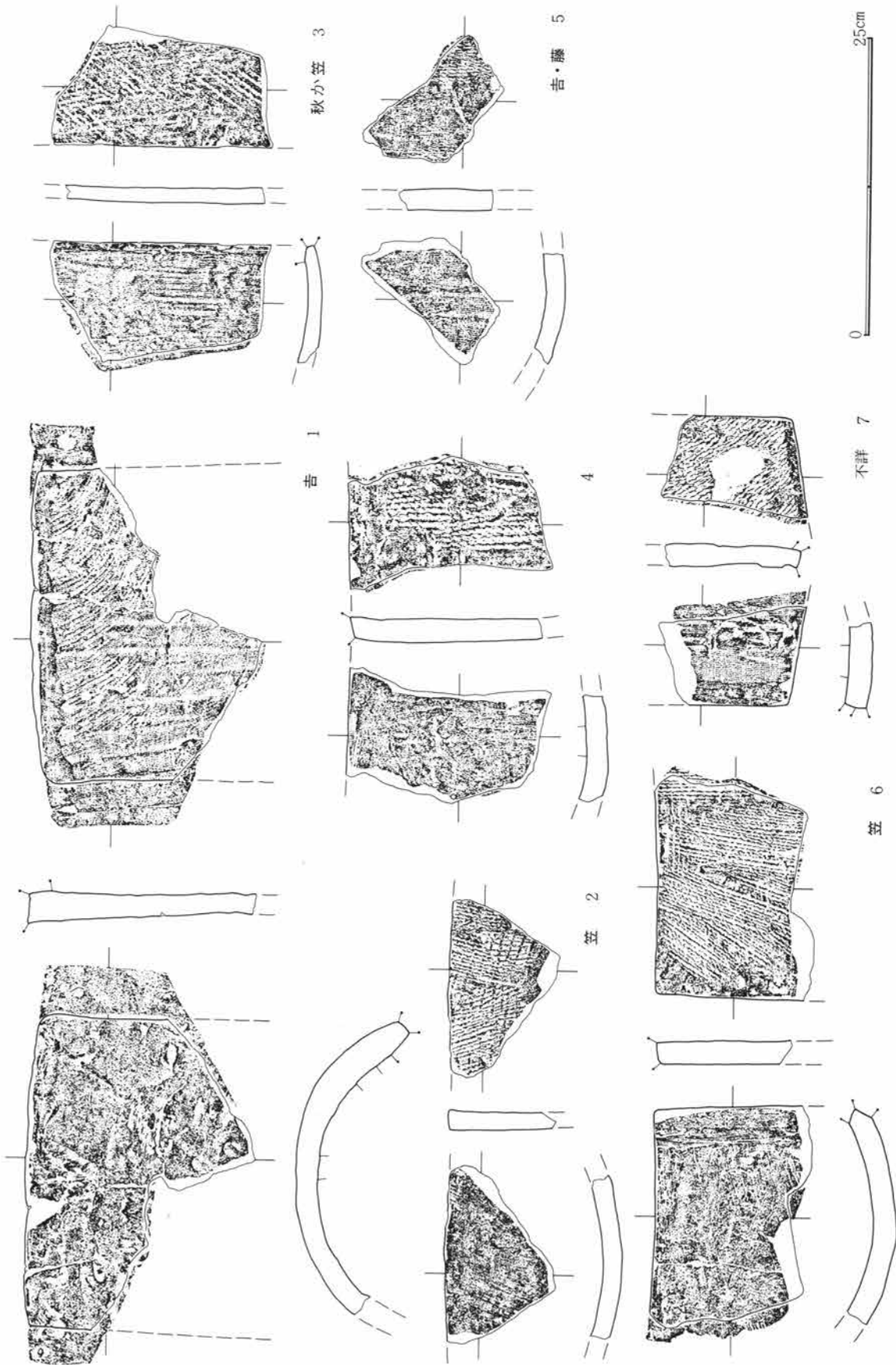


第333図 B区第184号住居跡出土遺物実測図(2)

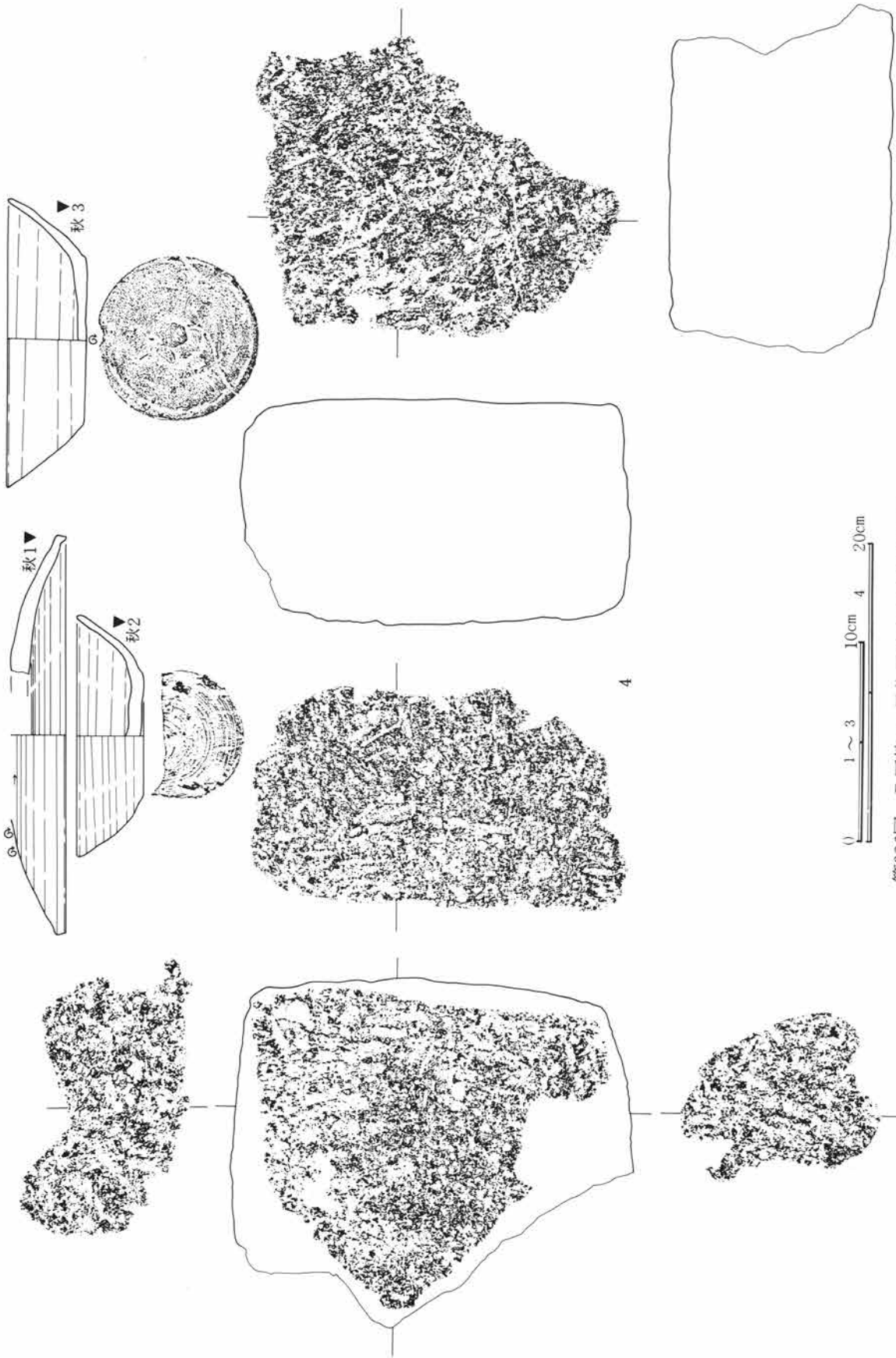
第3節 検出された住居跡について



第334図 B区第184号住居跡出土遺物実測図(3)



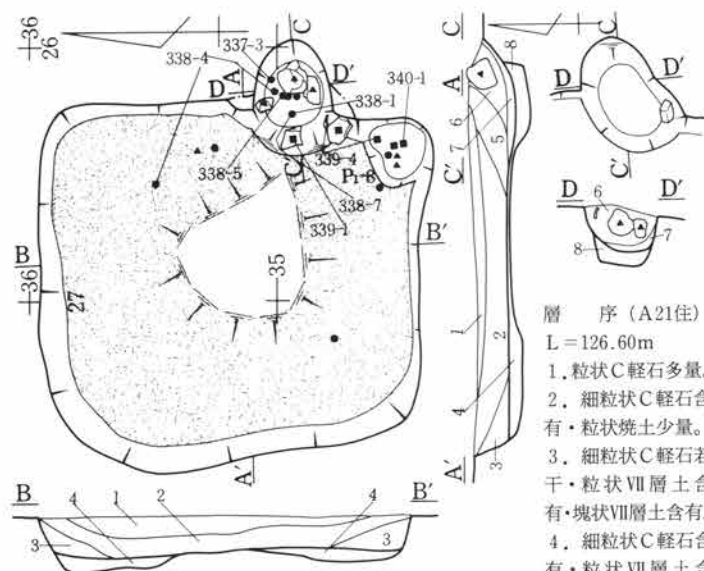
第335図 B区第184号住居跡出土遺物実測図(4)



第336図 B区第185号住居跡出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	A区第21号住居跡		位置	26~28-A-35・36グリッド内。		残存深度	約32cm
平面形態	矩形。	規模	2.9m×3.08m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-90度-南か
壁	ほぼ垂直～斜位気味に立ち上がる。		床面	住居中央部が地山VII層土を使用するが、他の部分は造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形基調。径50cm・深度—8cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	住居中央部に地山土を掘り残こす。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	幅広の舌状を呈する。		
規模	全長 92cm・屋外長 53cm・屋内長 39cm・袖部幅106cm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	右袖は瓦を芯材に補強するが、左袖は礫を用いている。					
煙道	未検出。		掘り方	楕円形を呈する土坑状。			
遺物出土状態	傍竈坑内よりやや多くの土器・瓦・礫が出土している。						



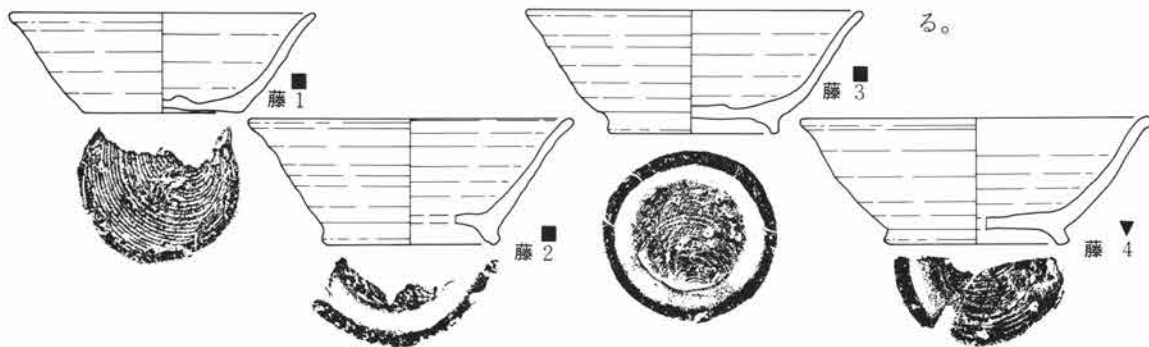
所見 当住居跡は切り合い関係のない単独住居跡である。住居は東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部直下に傍竈坑を備えている。東壁は、カマドを堺にして食い違いが認められる。カマドは、東壁の食い違いにより左袖は造り出しているが、右袖は殆ど認められない。燃烧空間は、やや広く全体的に丸味を帯びている。カマド覆土内には粗大な礫が混入しており、燃烧部奥壁寄り乃至煙道立ち上がり部あたりに設置された補強材と考えられる。住居形状はC区の第VI段階に対比され、出土遺物は、C

層序 (A21住)  
L=126.60m

1. 粒状C軽石多量。
2. 細粒状C軽石含有・粒状焼土少量。
3. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土含有・塊状VII層土含有。
4. 細粒状C軽石含有・粒状VII層土含有・粒状焼土若干・塊状VII層土含有。

5. 粒状C軽石多量・粒状焼土若干。6. 細粒状C軽石微量・粒状焼土多量・粒状炭化物多量・灰含有。7. 炭化物・灰層。8. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土多量・粒状焼土含有。

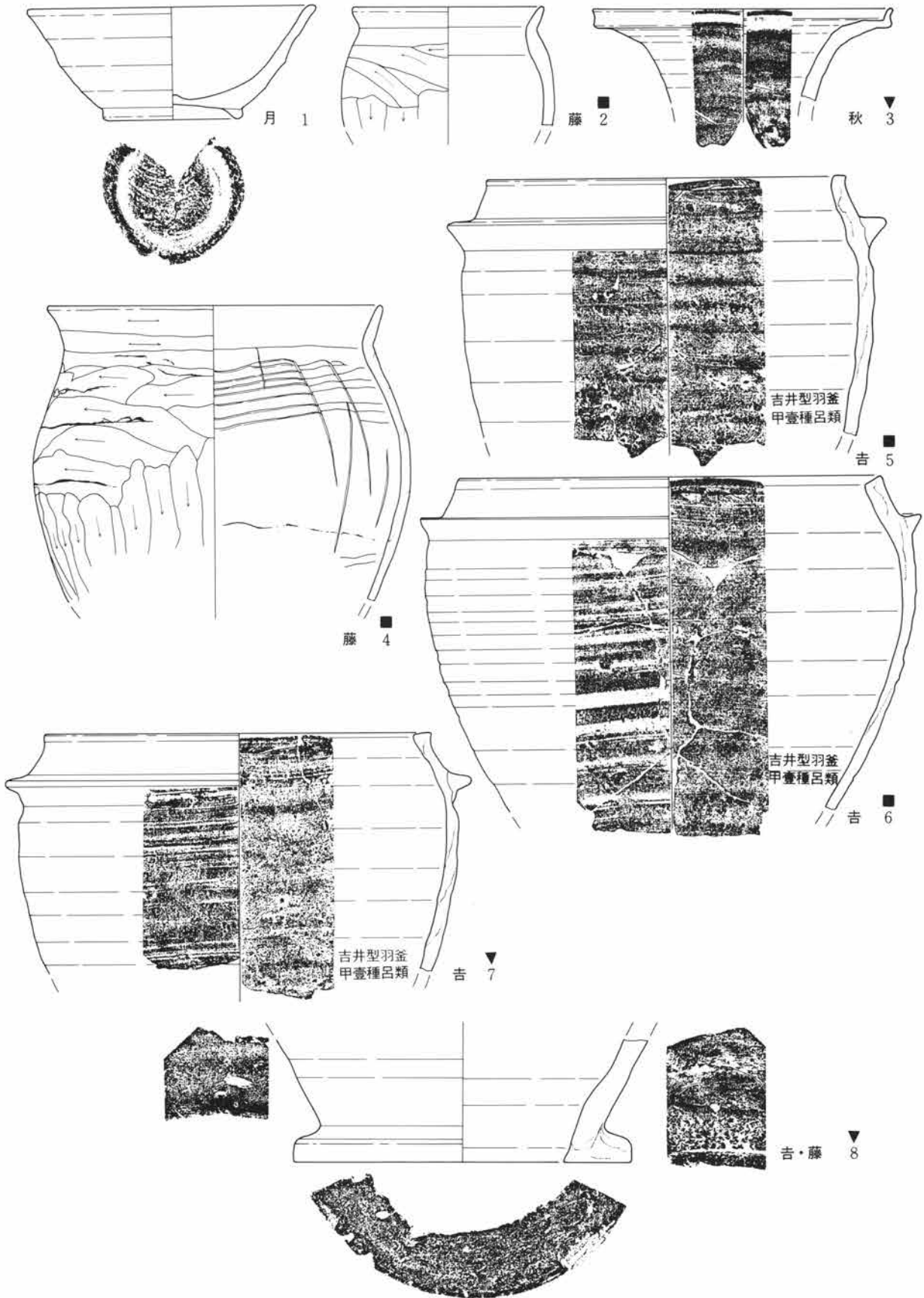
住居の掘り方は、四壁に沿って認められ



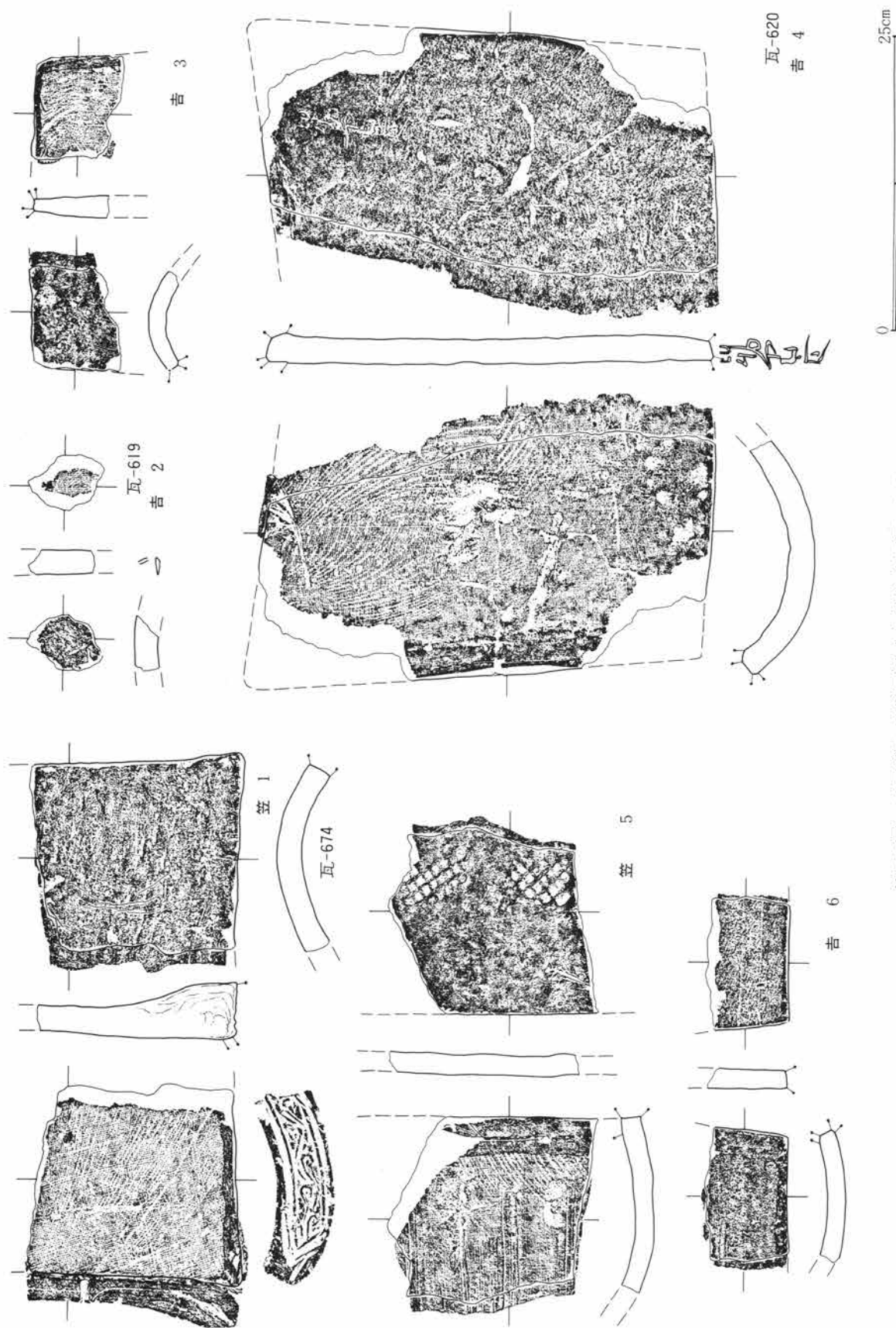
第337図 A区第21号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



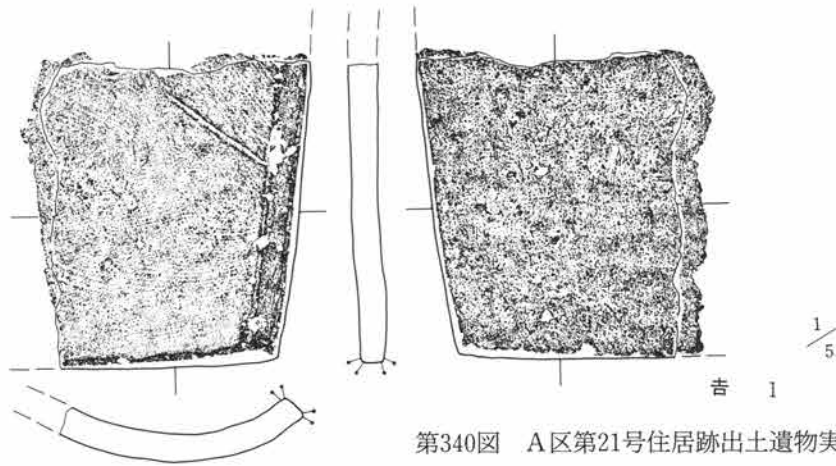
第3節 検出された住居跡について



第338図 A区第21号住居跡出土遺物実測図(2)



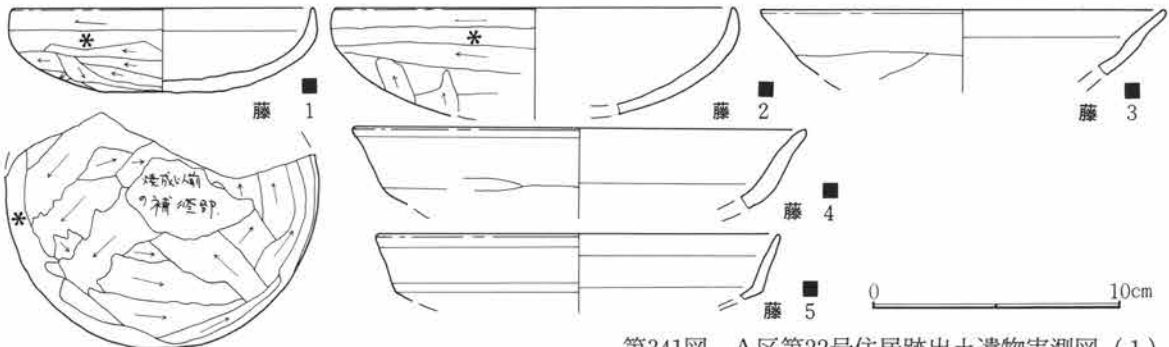
第339図 A区第21号住居跡出土遺物実測図(3)



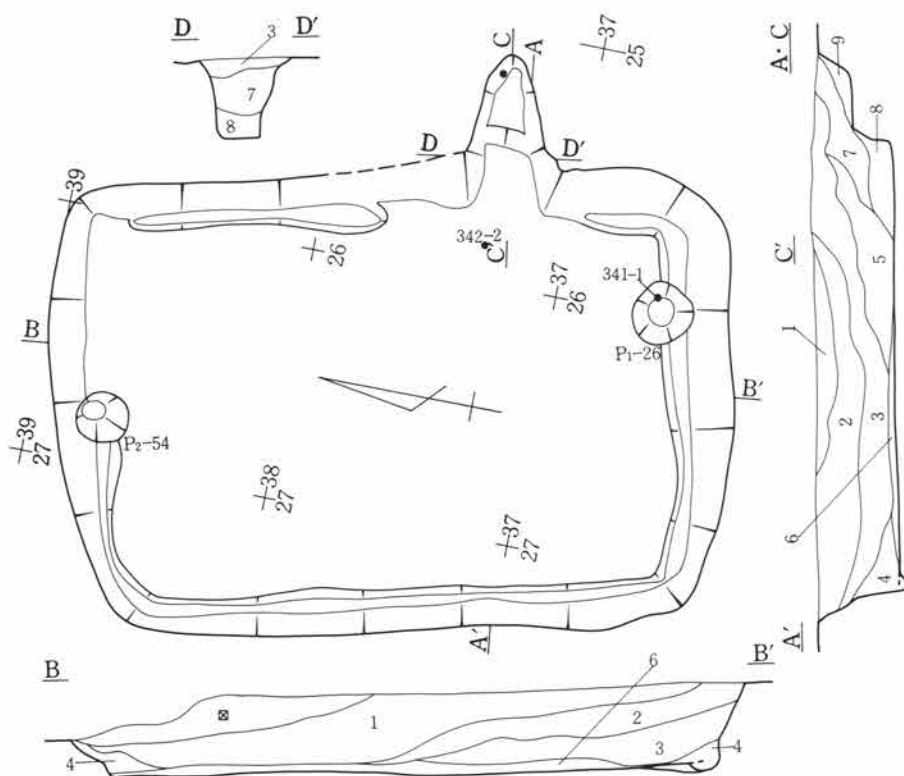
第340図 A区第21号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	A区第22号住居跡		位置	26~28-A-37~39グリッド内。		残存深度	約70cm
平面形態	横長方形。	規模	3.63m×5.52m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-77度-南
壁	垂直に立ち上がる。上半は崩壊。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	カマド部・北壁下東半が無い。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> か。円形。径50cm・深度-26cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	小単位の凹凸が認められる程度である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から123cm。			主軸方位	北-84度-南	
改築	不分明。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長123cm・屋外長 80cm・屋内長 43cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 63cm・煙道部幅 40cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	無に近く、左袖が若干屋内にせり出した状態。		
煙道	先細り状で舌状を呈し垂直に立ち上がる。		掘り方	使用面に同じ。			
遺物出土状態	少量の土器類が覆土内から出土し、P <sub>1</sub> 内で土師器坏(第341図-1)が出土している。						

所見 当住居跡はA26住を切り構築している。住居は東壁南東隅部寄りにカマドを備えている。カマドは、袖が僅かに認められるだけで、焚口部の落ち込みも認められず、更に掘り方も認められなかった。この点から、カマドの使用期間が短かったことが想起される。カマド以外の施設として、南壁南東隅部寄りには、壁溝を切る状態でP<sub>1</sub>が、北壁中央よりやや北西隅部寄りで同様にP<sub>2</sub>がそれぞれ検出されている。この両者が壁溝を切る状態から、上屋構造に係わる所産であることが推察される。壁溝はカマド周辺及び北東隅部周辺以外では認められている。住居形状はC区第II段階に対比され、住居自体の存続が短かったことが考えられる。

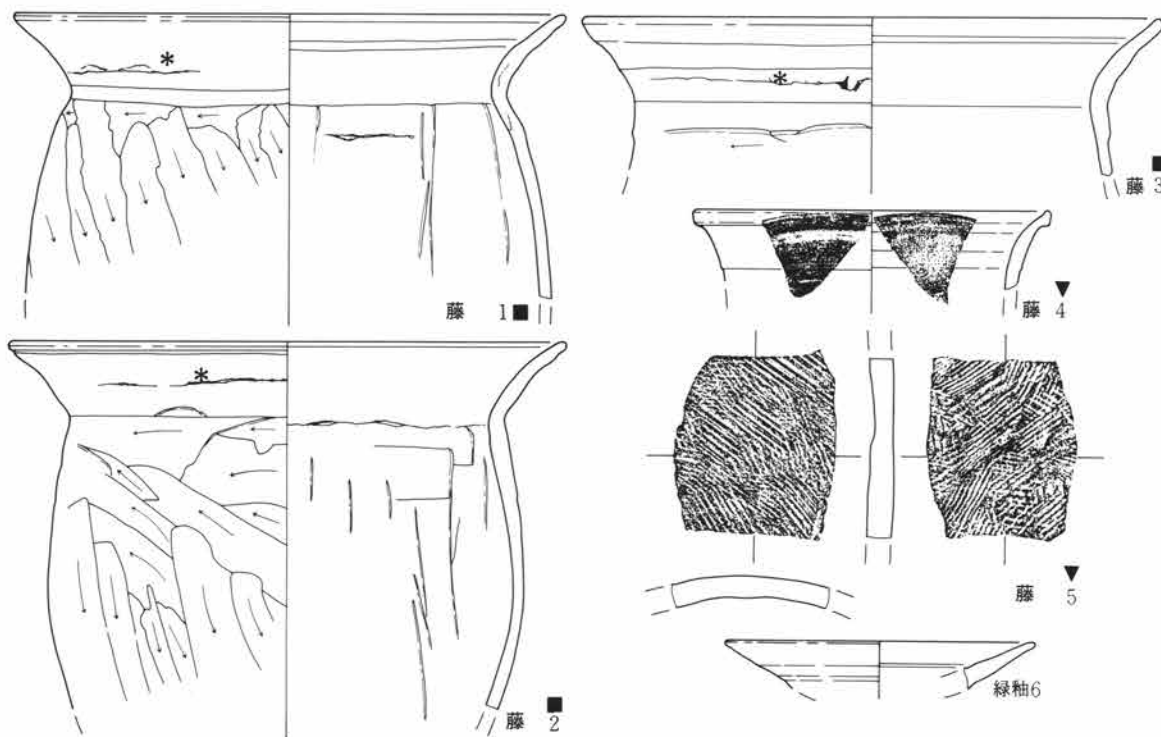


第341図 A区第22号住居跡出土遺物実測図(1)



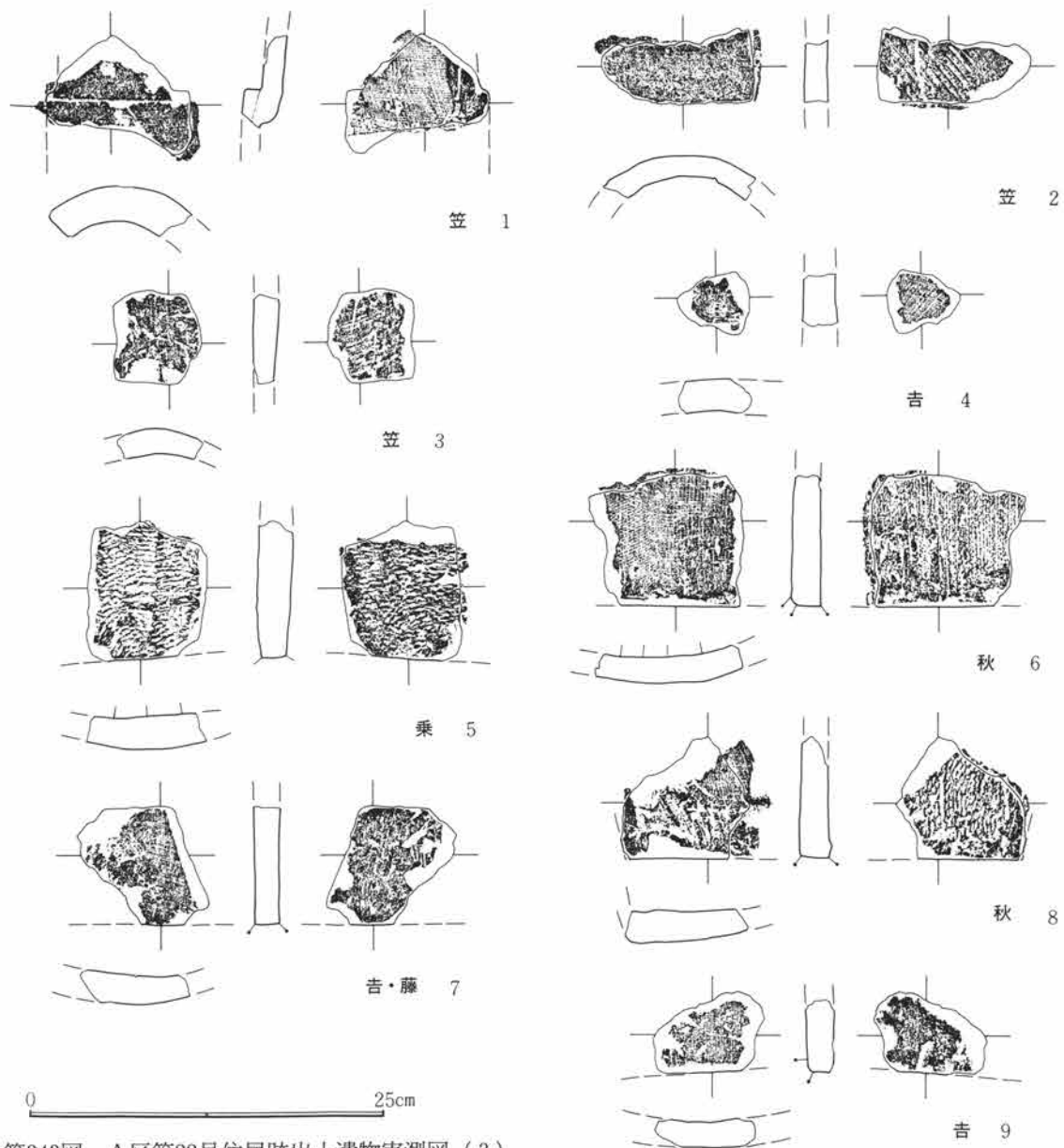
層序 (A22住) L=126.60m

1. 粗・細粒状C軽石多量・塊状VII層土少量。2. 粒状C軽石混入・塊状VII層土斑状混入。3. 粒状C軽石少量・粗大塊状VII層土斑状混入。微粒状C軽石若干・塊状VII層土少量(硬質)。5. 細粒状C軽石混入・粒状焼土多量・粒状炭化物少量。6. 細粒状C軽石含有・粒状焼土含有。7. 細粒状C軽石含有・塊状焼土含有・灰含有。8. 微粒状C軽石若干・粒状炭化物多量・粒状焼土混入・灰多量。9. 粒状C軽石少量・粒状焼土少量・粒状VII層土多量。

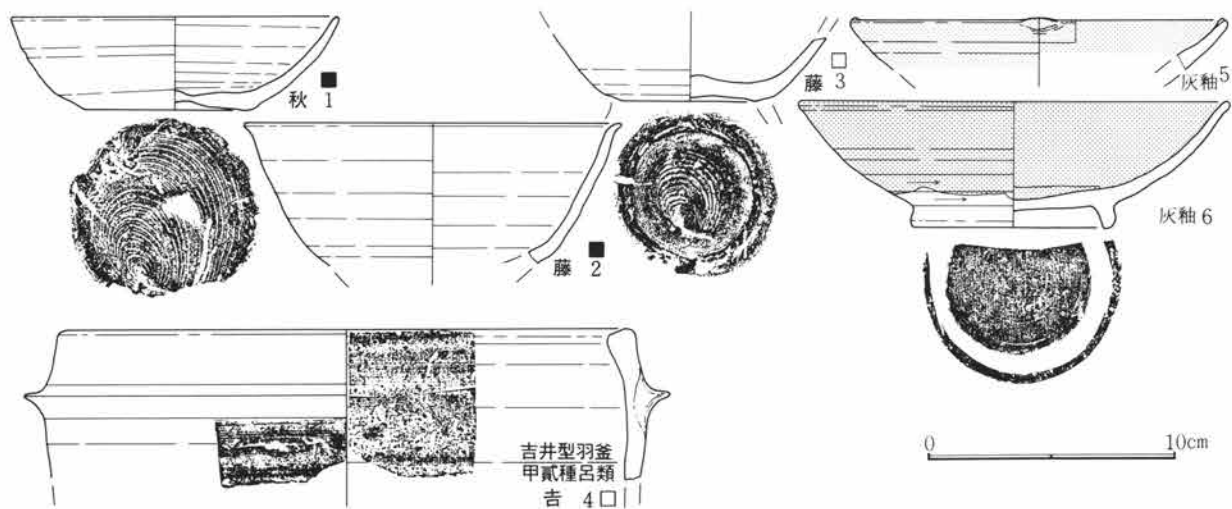


第342図 A区第22号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)

第3節 検出された住居跡について



第343図 A区第22号住居跡出土遺物実測図(3)



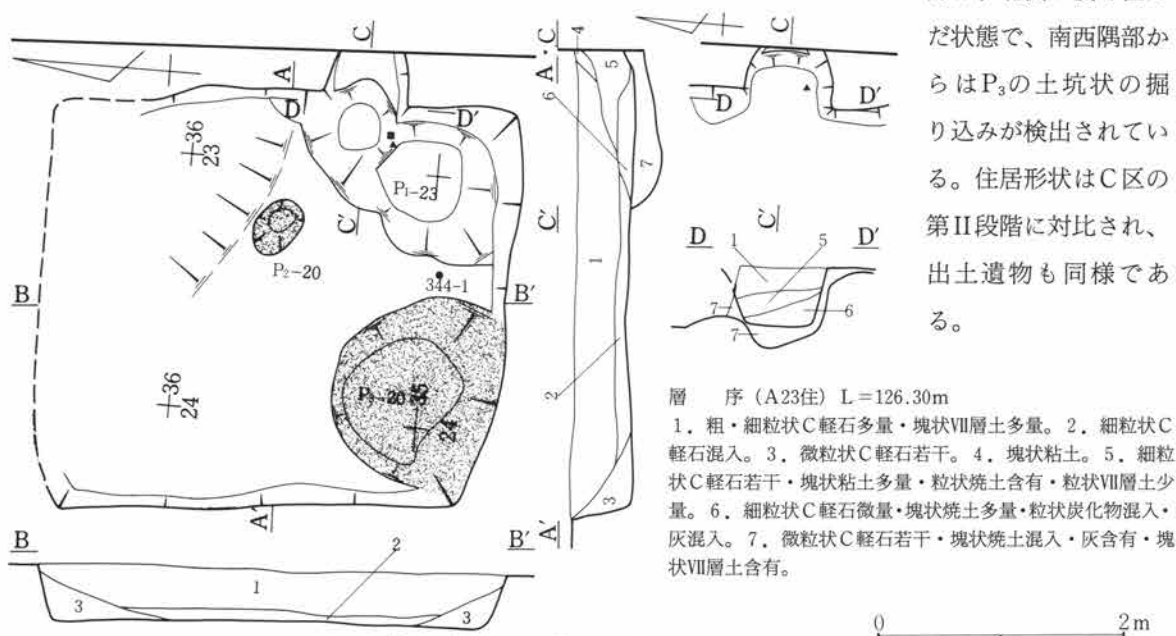
第344図 A区第23号住居跡出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	A区第23号住居跡		位置	23～25-A-35～37グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	矩形。	規模	3.35m×3.75m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-84度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	中央部は地山VII層土を使用し壁下周辺を造床。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> の一部か。詳細不詳。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南東・南西・北東隅部周辺で浅く認められるが、西壁下では認められない。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から90cm。			主軸方位	北-84度-南位か	
改築	有。掘り方内より焼土を多量に検出している。		形状				
規模	全長 64+αcm・屋外長 34+αcm・屋内長 30cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 64cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左袖のみが確認されたが、調査の不手際で詳細不分明。					
煙道	立ち上がり部のみを検出。		掘り方	焚口部下が深く掘り込まれている。			
遺物出土状態	全体に非常に少ない。						

所見 当住居跡はA24住を切り構築している。住居は東壁南東隅部寄りにカマドを備えている。南東隅部には傍竈坑を備えているが、その掘り方は、カマドを接続した状態となっている。東壁は、カマドを境として北側と南側では食い違いが認められ、この為、カマド右袖は住居壁と燃烧部壁の一部を袖としており、実質的には無いに等しい。左袖は地山を削り出し下端が僅かに瘤状に屋内側に突出した状態である。住居の掘り

方は、北側が浅く窪んだ状態で、南西隅部からはP<sub>3</sub>の土坑状の掘り込みが検出されている。住居形状はC区の第II段階に対比され、出土遺物も同様である。

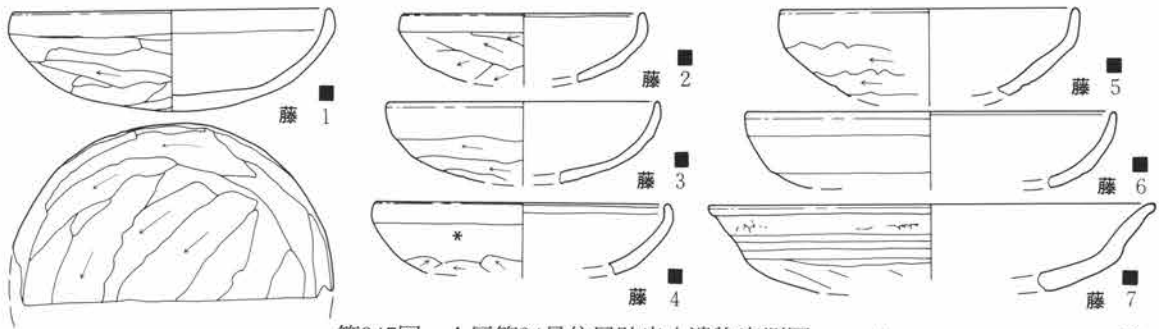


第345図 A区第23号住居跡実測図

おわび

当A区第24号住居跡は、前述のA23住に切られる7世紀代の住居跡であるが、住居の平面図が現在所在が不明となっている。昭和59年4・5月頃には、全体図作製の為使用されており、この全体図作製以降所在不明となったと考えられる。次年度、図面の所在を確認する所存である。平面・断面図は第8分冊中に掲載したい。出土遺物に就いては、次頁の第347図-1～7を掲載した。

第3節 検出された住居跡について

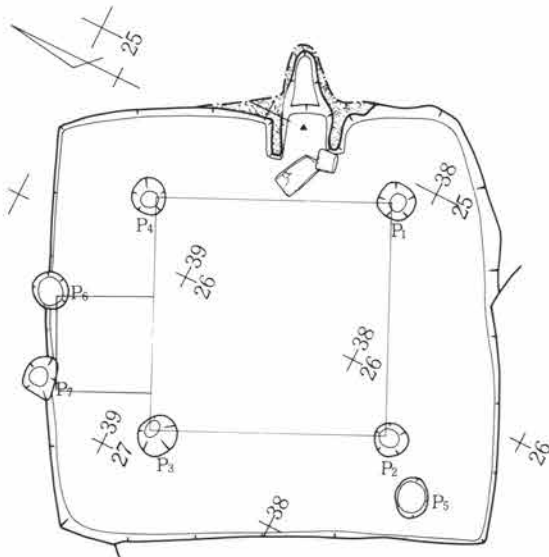


第347図 A区第24号住居跡出土遺物実測図

0 10cm

遺構名称	A区第26号住居跡		位置	25～28-A-38～40グリッド内。		残存深度	約50cm
平面形態	正方形。	規模	4.64m×4.80m	構築基準辺	西乃至北壁	主軸方位	北-65度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	大半に造床が認められる。平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>5</sub> か。楕円形。40×34cm・深度-28cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	全体が浅く皿状に窪む状態。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から110cm。			主軸方位	北-62度-南	
改築	有。掘り方内で焼土が検出されている。		形状	箱状の燃焼部に舌状の煙道を備える。			
規模	全長110cm・屋外長 65cm・屋内長 55cm・袖部幅 92cm・燃焼部幅 50cm・煙道部幅23～30cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。			袖	先端側に地山砂質の截り出し材を据える。		
煙道	細い舌状を呈し。ほぼ垂直に立ち上がる。		掘り方	袖の芯材部は皿状の浅い据え方が認められた。			
遺物出土状態	出土遺物は非常に少ない。						

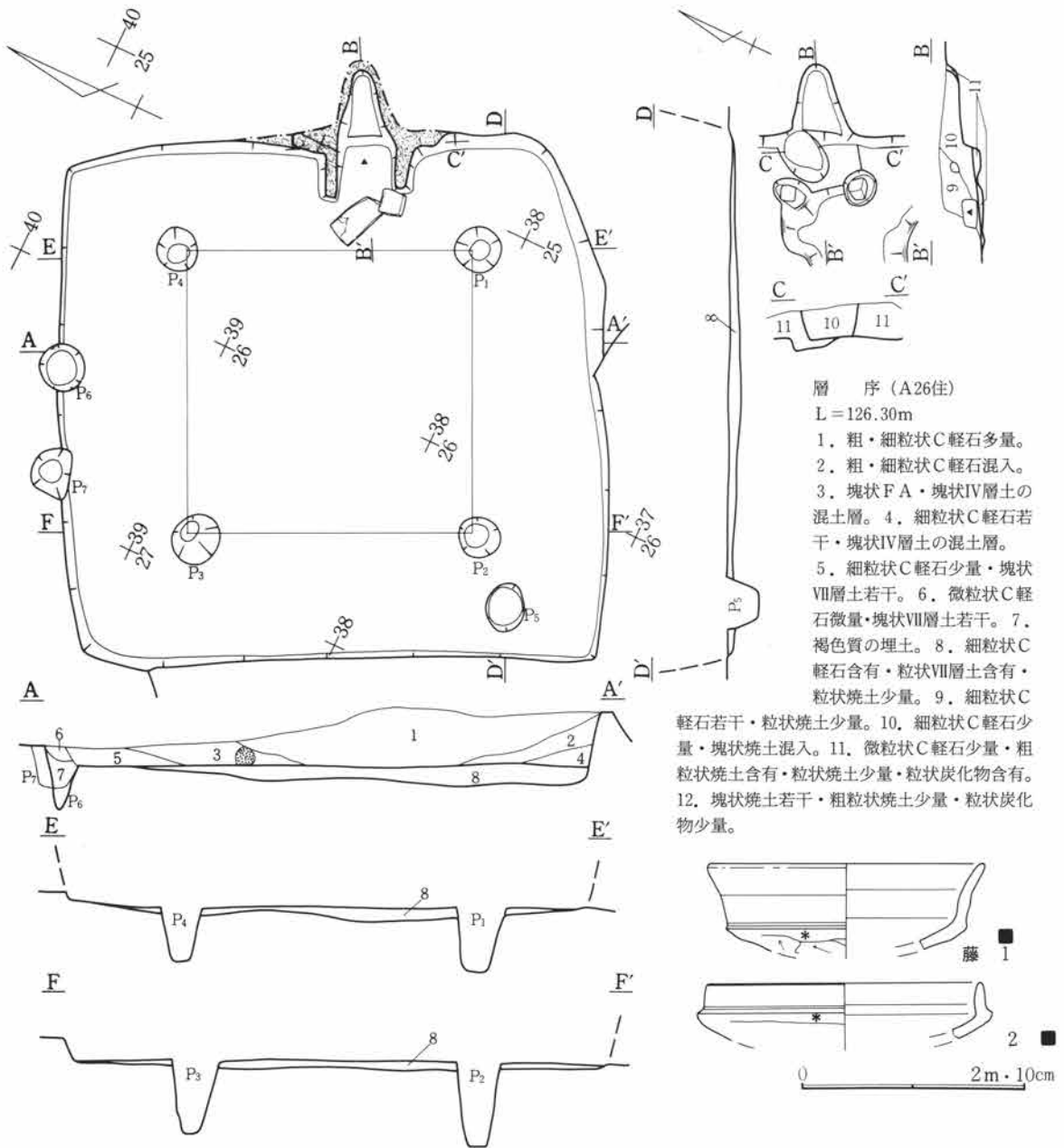
所見 当住居跡はA22住に切られている。住居は東壁中央にカマドを備えている。住居の指向方向は、東側から北側に向け30度程振っている。カマドは、左右両袖が屋内に向かい長く突出した状態であり、燃焼空間の幅は広く方形状を呈している。焚口前面には、地山砂岩質土の截り出し材を用いた焚口天井用材が床面直



第348図 A区第26号住居跡構築経過図(1:80)

上から出土している。煙道は、細長く屋外に突出しており、先端部はほぼ垂直に立ち上がっている。支柱はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4本が検出されている。深度は何れも50cm以上の深目のものであった。北壁では、同壁を切る2本のP<sub>6</sub>P<sub>7</sub>がほぼ平行した状態で検出されている。この2本のピットは深度が異なるが、その検出位置から入口施設に伴う可能性が大きい。一方、南西隅部周辺の西壁下では、P<sub>5</sub>が検出されている。このP<sub>5</sub>は、深度ではP<sub>7</sub>に近いが、床面からの掘り込みである点と、他例の住居跡を見る範囲に於いては、貯蔵穴の性格が想定される。住居跡の掘り方は、全体的に住居中部が浅く皿状に窪んだ状態であり、土坑状の顕著な掘り込みは認められなかった。住居形状

は、C区の第I段階が想定される。



第349図 A区第26号住居跡実測図・出土遺物実測図

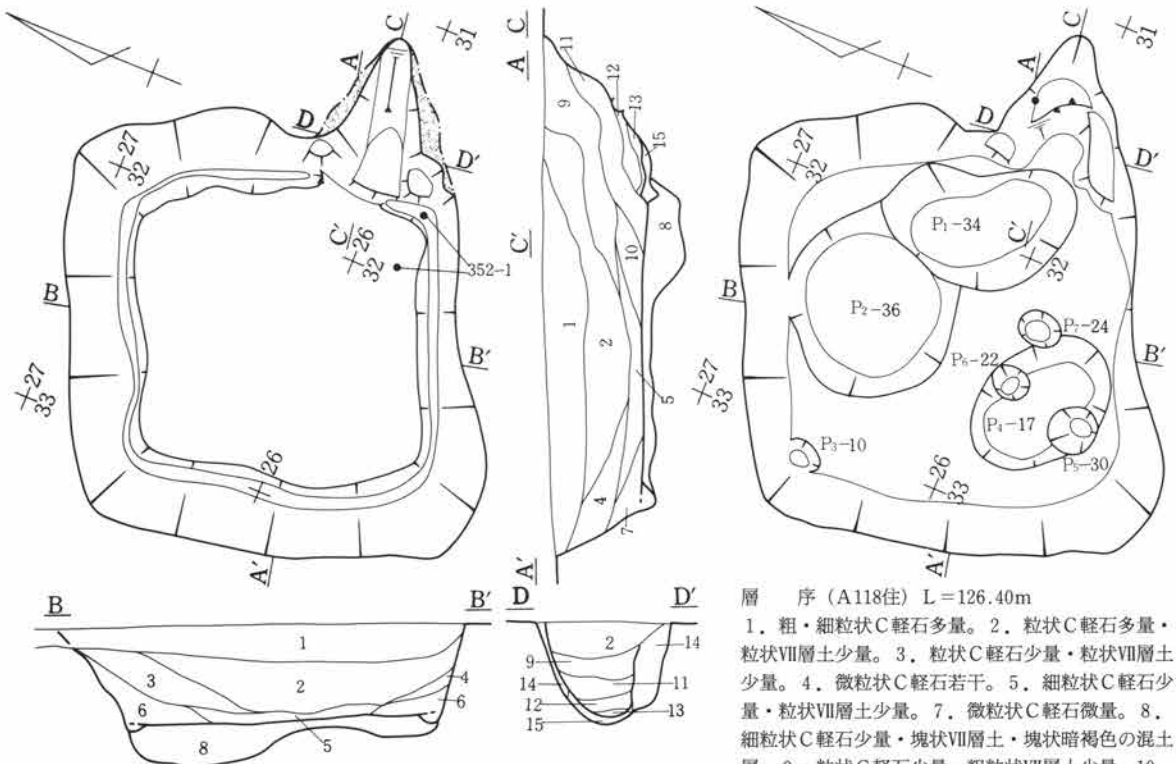
当A26住の支柱穴等に関する整理所見、検出された柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の支柱穴と、P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>の入口施設に伴うと考えられる合計6本があり、貯蔵穴に凝せるP<sub>5</sub>がある。このP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の柱間は、概、36cmを公約数として、7単位の正方形を呈する状態であり、この対角線長は約10単位となる。この公約数の36cmは、通有、高麗尺と称される「ものさし」の1単位にほぼ等しい数値である。又、P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>のP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>に対する配置位置は、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の設計線と平行し、36cmの3倍の距離の位置に相当している。同様に、柱間四辺からの壁迄の距離は、何れも3単位である。このことから、住居1辺の計画距離長は、36cmの13単位分(3+7+3)で4.68mが計画規模と算出される。この公約数=尺度は、古墳の墳丘・横穴式石室等の企画論で専らに用いられている。当住居跡の、推定される7世紀前半には横穴式石室の構築が多出する時期であり、構造物の構築には不可分の存在にやはり「ものさし」があり、同時期の構造物の住居にも、「ものさし」の使用があった点は想像にも難くない。



第3節 検出された住居跡について

遺構名称	A区第118号住居跡		位置	32～34-A-26～28グリッド内。		残存深度	約76cm
平面形態	正方形。	規模	3.80m×3.27m	構築基準辺	南及至北壁	主軸方位	北-67度-南
壁	垂直～斜位気味に立ち上がる。		床面	造床であるが平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状・ピット様の掘り込みが多い。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から0cm。			主軸方位	北-76度-南	
改築	有。掘り方内に焼土粒・粘土を検出。		形状	舌状。			
規模	全長130cm・屋外長 88cm・屋内長 42cm・袖部幅114cm・燃烧部幅 62cm・煙道部幅 26cm位。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	殆ど認められない。補強材を据えた痕跡が認められる。					
煙道	仰角45度程で立ち上がる。		掘り方	三角形状を呈し、袖・燃烧部にテラスを設ける。			
遺物出土状態	カマド右側で2点の土器が床面直上で出土している。覆土内は非常に少ない。						

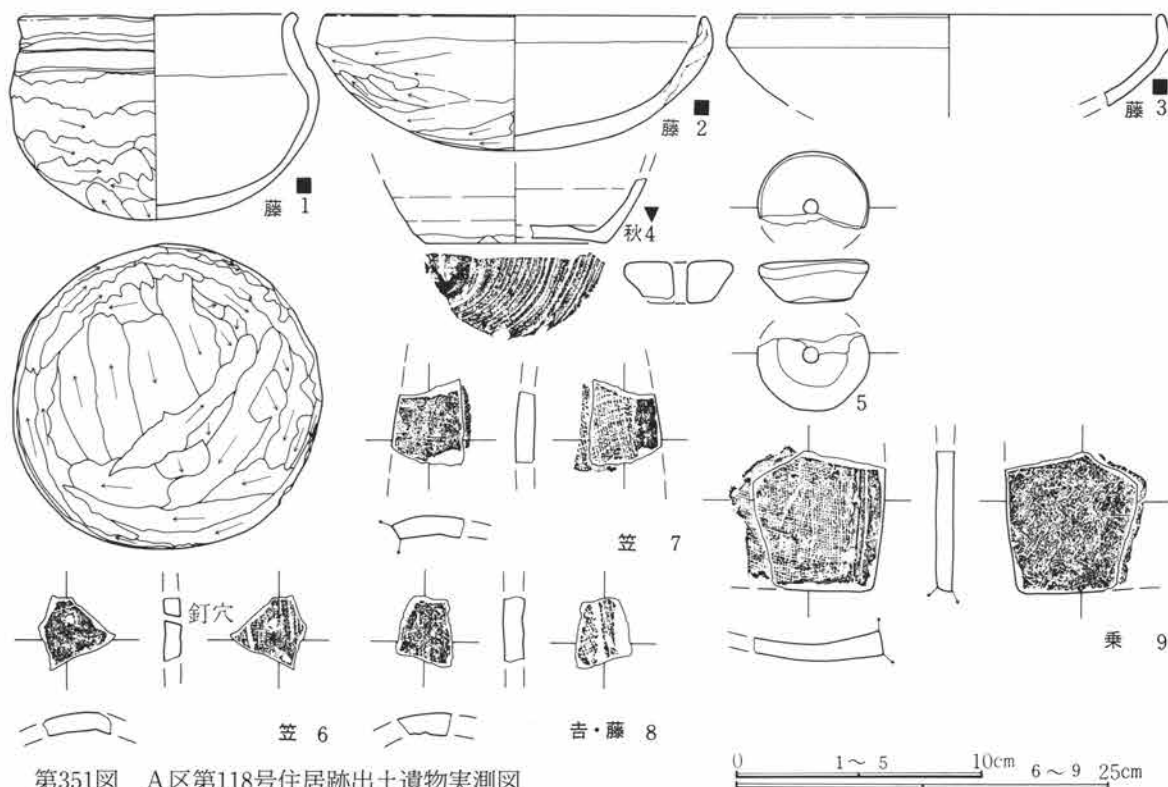
所見 当住居跡はA119址と接する状態で重複するが、新旧関係の詳細は調査段階では分明に成し得なかった。住居は小規模であり、東壁の南東隅部にカマドを備えている。カマドは、両袖が流出した状態で、部分的に掘り方面が露呈していた。燃烧部は、幅がやや狭い。煙道は、燃烧部底面より仰角45度程で立ち上がっている。壁溝はカマド部以外で全周する。住居跡の時期は、住居形状からC区第Ⅲ段階以前に考えられるが、主軸値が-28度と北側に振ることから、C区の第Ⅰ段階頃と考えられる。



層序 (A118住) L=126.40m  
 1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石多量・粒状Ⅶ層土少量。3. 粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土少量。4. 微粒状C軽石若干。5. 細粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土少量。7. 微粒状C軽石微量。8. 細粒状C軽石少量・塊状Ⅶ層土・塊状暗褐色の混土層。9. 粒状C軽石少量・粗粒状Ⅶ層土少量。10. 細粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土多量・粒状焼土少量。11. 微粒状C軽石微量・粒状Ⅶ層土多量・粒状焼土少量。12. 塊状焼土層。13. 灰層。14. 微粒状C軽石微量・塊状粘土含有。15. 細粒状C軽石微量・粒状焼土含有(粘質土)。

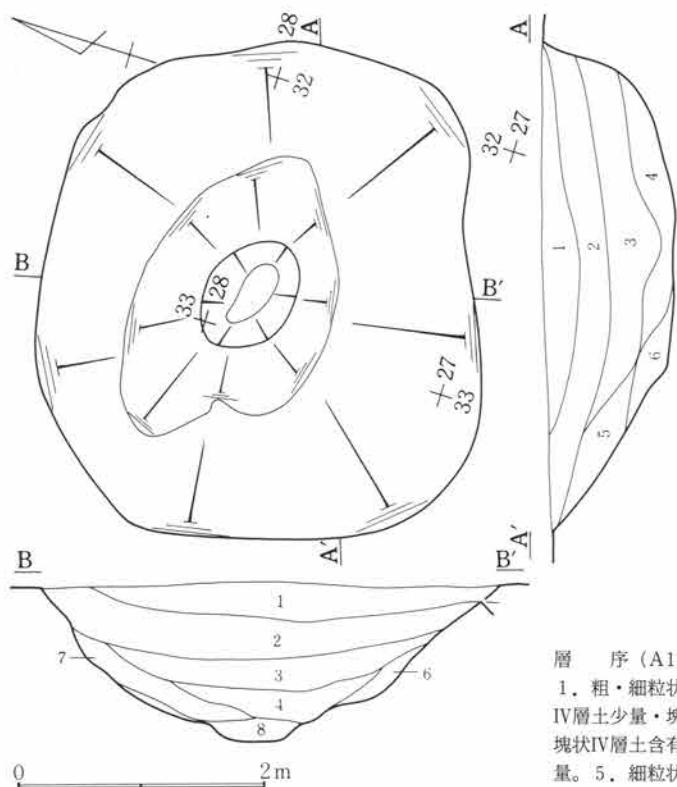
第350図 A区第118号住居跡実測図

0 2m



第351図 A区第118号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	A区第119号住居跡	位置	32~34-A-27~29グリッド内。	残存深度	約120cm
住居等の遺構とは異なる。					



第352図 A区第119号址実測図

所見 当址は、前述のA118住を重複するが新旧関係は分明ではない。当址は、平面形状が方形・円形と何れとも考えられる形状を基調としている。そして、全体形状は、井戸跡の如く中央部を円形状に掘り窪めている。この形状では住居等の掘り込みとは考えられず、井戸等の未完成の掘り込みと考えられるが、重複するA118住の規模、深度が類似する点から、短絡的に住居に係るものではないという点は言及しかねる。結論的には、単なる土坑とは異なり、何らかの遺構の掘り込み途中で廃棄されたものと考えられる。

層序 (A119址) L=126.40m

1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石混入・塊状IV層土少量・塊状VII層土少量。3. 細粒状C軽石少量・塊状IV層土含有・塊状VII層土少量。4. 細粒状C軽石少量。5. 細粒状C軽石少量・塊状IV層土含有。6. 微粒状C軽石若干・塊状VII層土多量。7. 細粒状C軽石少量・塊状IV層土少量。8. 微粒状C軽石若干。

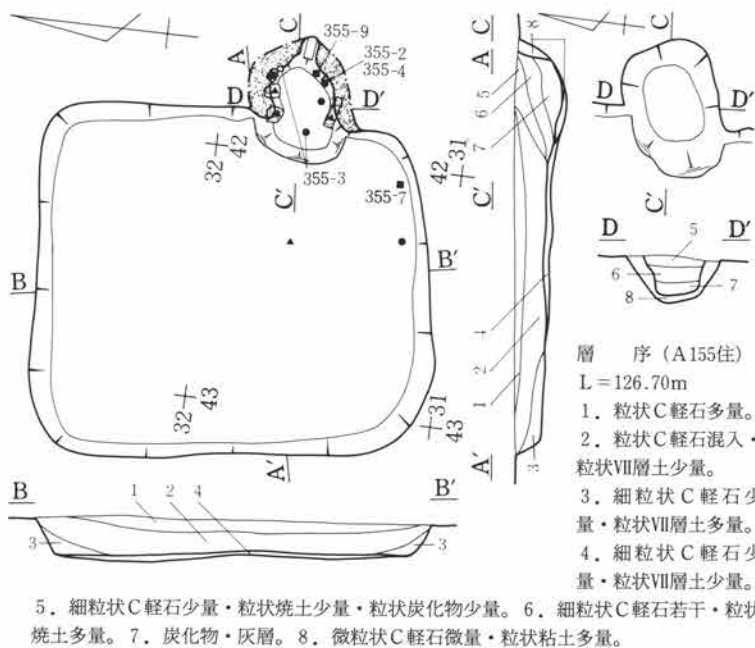
第3節 検出された住居跡について



第353図 A区第119号住居跡出土遺物実測図 0 10cm

遺構名称	A区第155号住居跡		位置	42～44-A-32・33グリッド内。		残存深度	約31cm
平面形態	矩形。	規模	2.77m×3.26m	構築基準辺	北乃至西壁	主軸方位	北-82度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	貼り床状に薄い造床で平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	浅く皿状に窪んだ状態。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から35cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有か。掘り方内には粘土粒子が多い。		形状	楕円形状で細い煙道が付設されている。			
規模	全長100cm・屋外長 66cm・屋内長 34cm・袖部幅103cm・燃烧部幅 50cm・煙道部幅 14cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は礫・土器片により補強されている。						
	袖	瘤状であり、右袖は無い状態に近い。					
煙道	部分的な検出に留まったが細いと考えられる。		掘り方	楕形の土坑状を呈する。			
遺物出土状態	全体的に非常に少なく若干量のみ出土であった。						

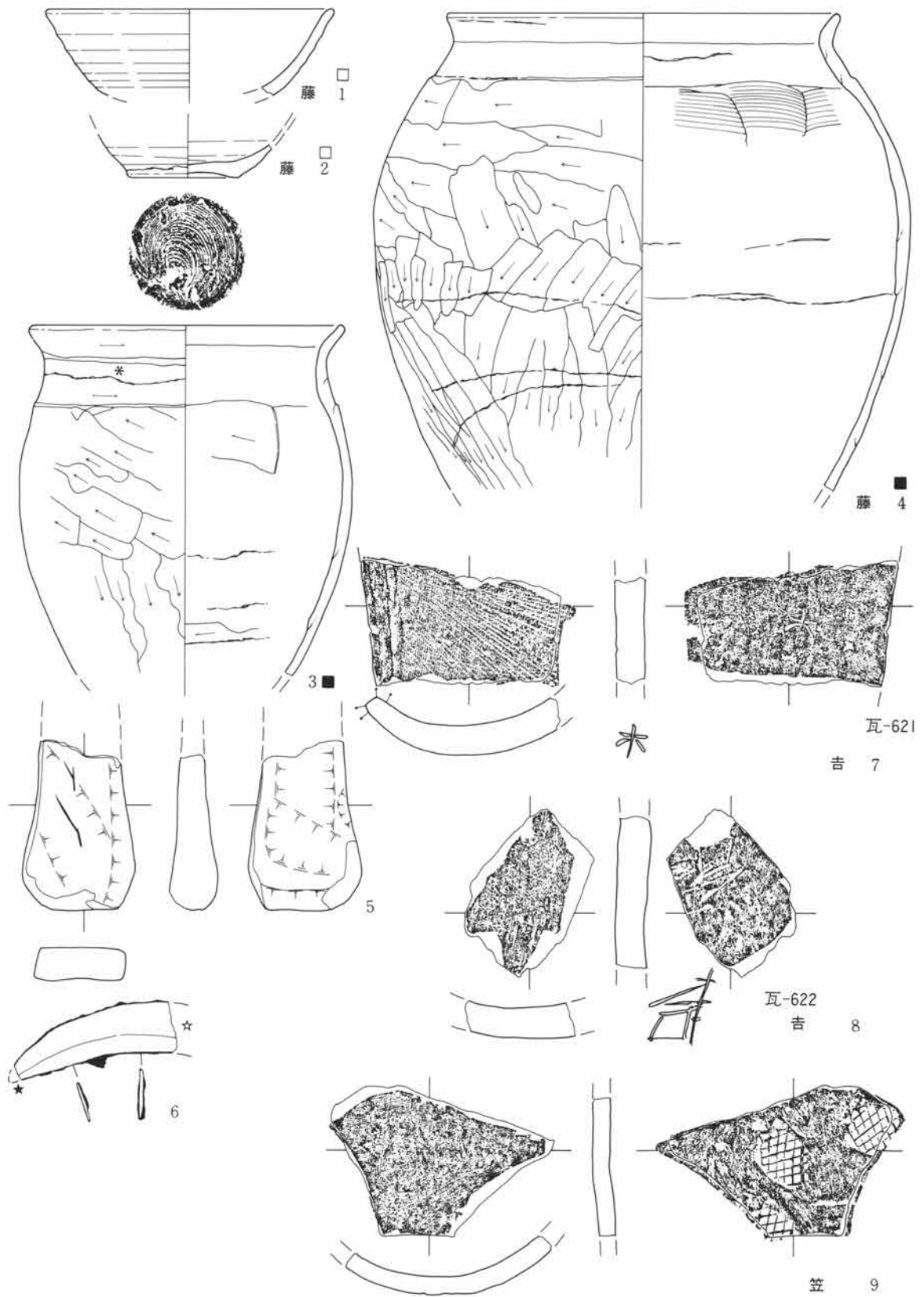
所見 当住居跡はA158住を切り構築している。住居は、東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備えている。



第354図 A区第155号住居跡実測図 0 2m

南東隅部直下には傍竈坑は検出されていない。カマドは、C区の第VII段階程の燃烧部幅を備え、左右両側壁は、礫・瓦により補強されている。煙道は、燃烧部奥壁上位で細く屋外方向に突出している。立ち上がりの仰角は約30度程である。掘り方は、隅丸長方形の土坑状を呈し、掘り込みは比較的深い。住居の掘り方は、床面下に浅く窪む程度であった。出土遺物は比較的少なく、土師器甕を伴う点が特徴である。住居形状ではC区第VIII段階的であるが、カマド・出土遺物から、第VII段階と考えられる。

第4章 検出された遺構・遺物



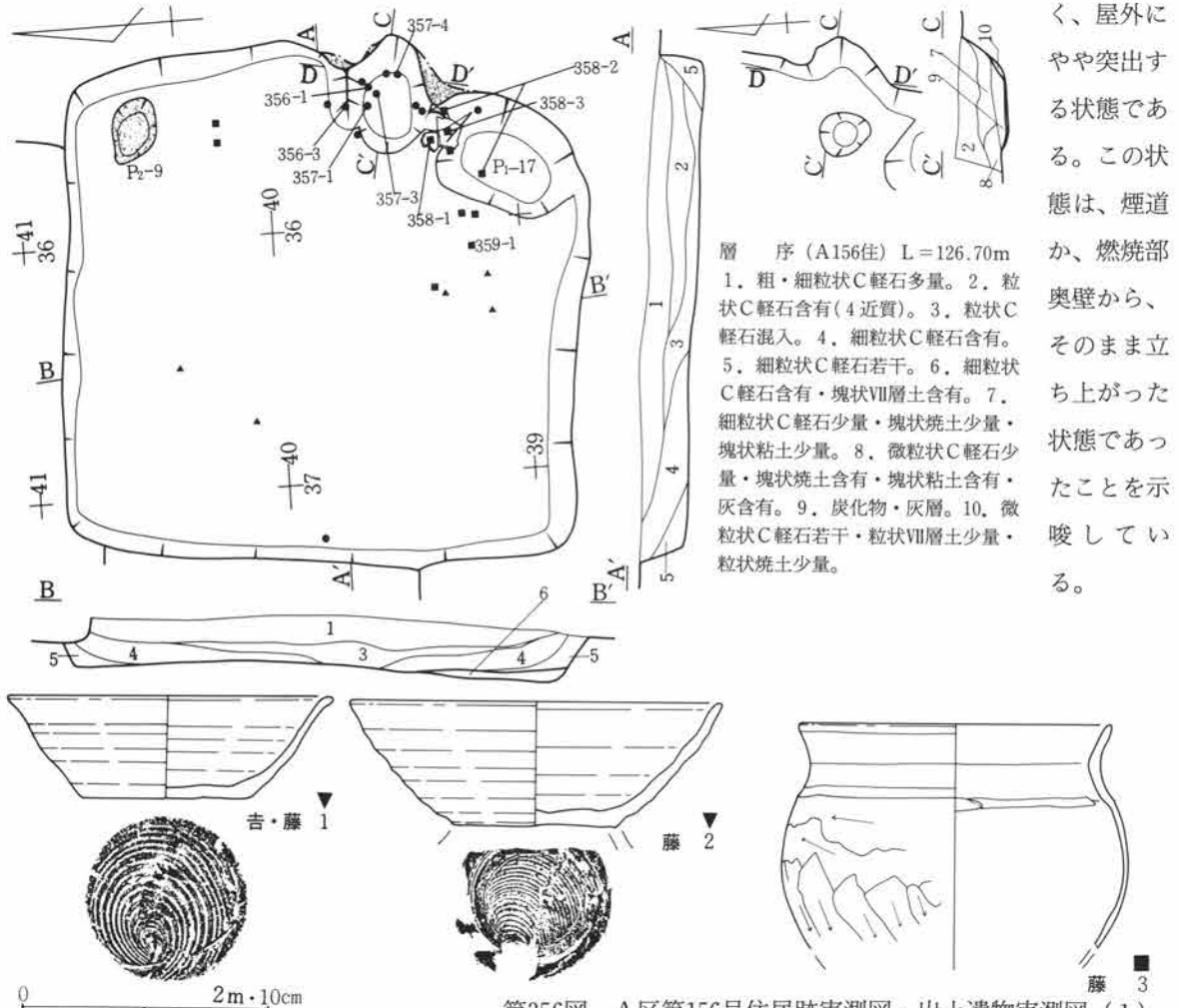
第355図 A区第155号住居跡出土遺物実測図

0 1 ~ 6 10cm 7 ~ 9 25cm

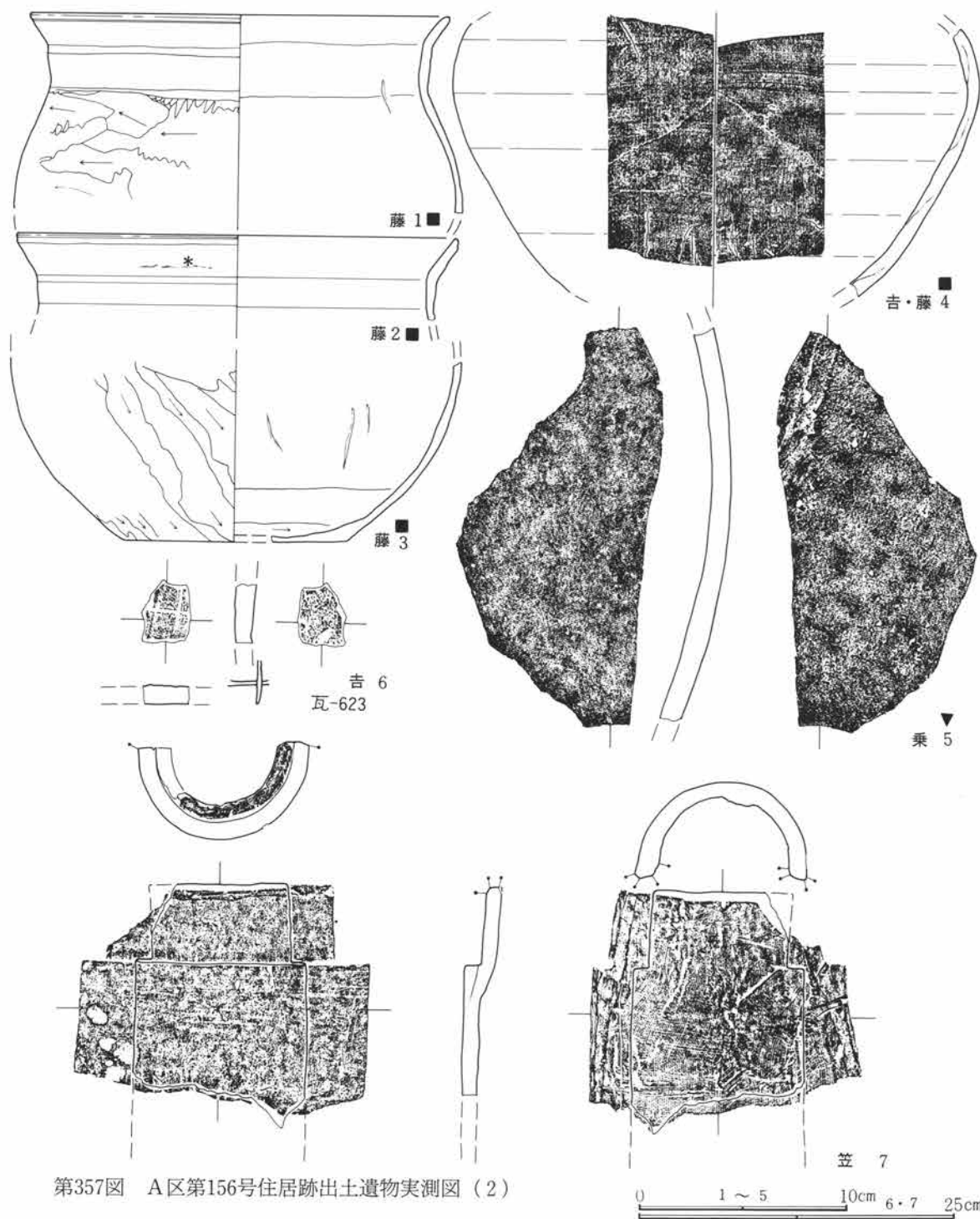
第3節 検出された住居跡について

遺構名称	A区第156号住居跡		位置	36~38-A-39~41グリッド内。		残存深度	約40cm
平面形態	正方形。	規模	4.08m×4.23m	構築基準辺	西乃至北壁	主軸方位	北-95度-南
壁	ほぼ垂直~斜位気味に立ち上がる。		床面	一部に造床が認められるが大半がⅦ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・不整長方形。110×63cm・深度-17cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南壁下で浅く認められた程度である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から84cm。			主軸方位	北-100度-南	
改築	有。掘り方内から焼土粒子を検出。		形状	屋内側に主要部を具備し楕円形状を呈する。			
規模	全長 94cm・屋外長 30cm・屋内長 64cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	屋内側に比較的長く突出する。右袖先端部は瓦で補強する。		
煙道	未検出。		掘り方	燃烧部奥壁（煙道立ち上がり部）部分のみ。			
遺物出土状態	覆土内からの出土が多く、床面直上及至床面直上層での出土は少ない。						

所見 当住居跡はA157・159住に切られている。住居は、東壁のほぼ中央部がカマドを備え、南東隅部には長方形を呈する傍竈坑を備えている。カマドは、比較的長い袖を造り出している。燃烧部は、全体的に広く、屋外にやや突出する状態である。この状態は、煙道か、燃烧部奥壁から、そのまま立ち上がった状態であったことを示唆している。



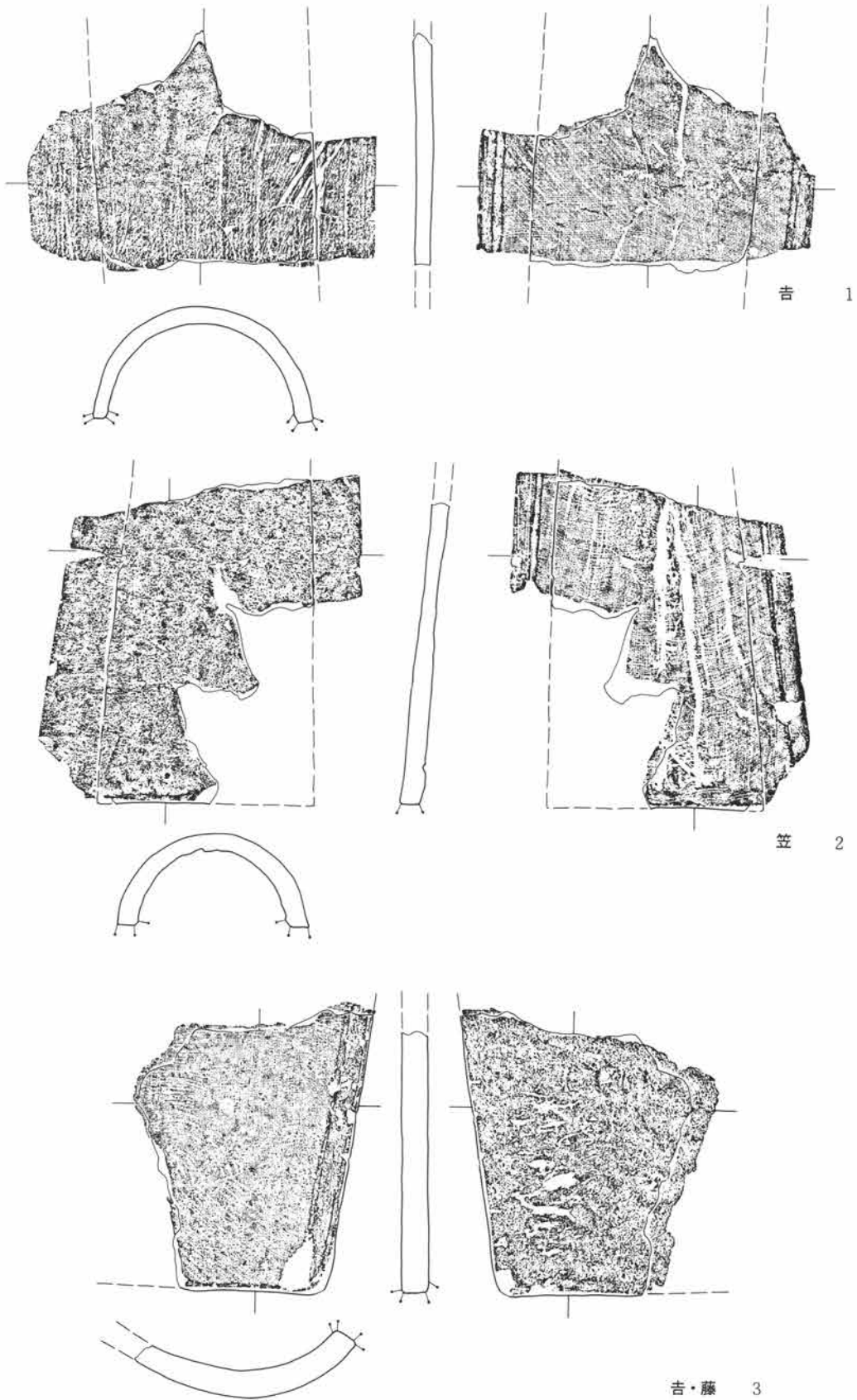
第356図 A区第156号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第357図 A区第156号住居跡出土遺物実測図(2)

又、カマドを備える東壁は、カマドを境として、南北部分では歪んだ状態となっており、特に南半分は顕著であり、傍竈坑としての施設の一部的な状態となっている。これらの東壁の状況は、カマド、東壁の北半分が改築されたことも想定されるが、傍竈坑の位置の移動等の他の詳細な状況も不明な点から、この点を具体的に示せる状況は無く、一応、改築が想定されるという程度である。住居内、北東隅部周辺では、 $P_2$ が検出されているが、その性格等を示唆する状況は調査段階でも得られている。又、深度も9cm程で浅い。この為、この $P_7$ に就いての性格等は不明である。住居形状はC区の第V段階に対比される。出土遺物の様相も同様である。

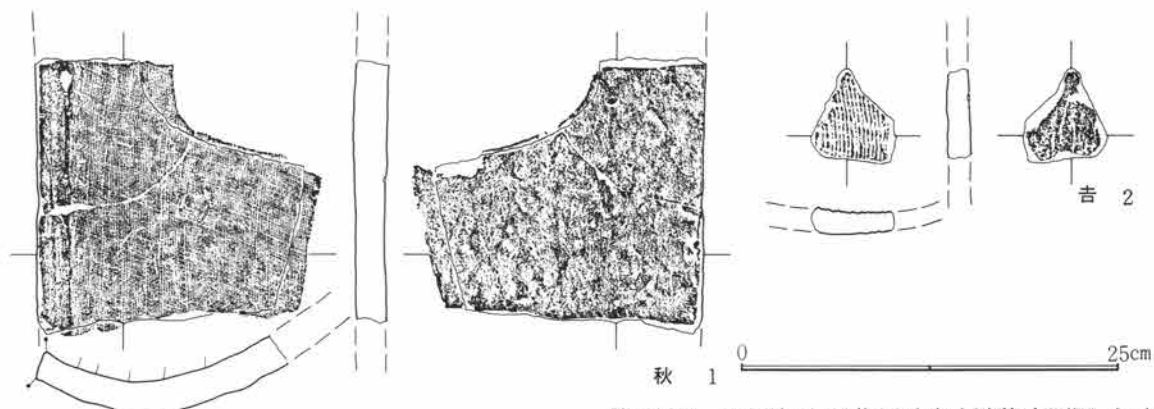
第3節 検出された住居跡について



第358図 A区第156号住居跡出土遺物実測図(3)

0 25cm

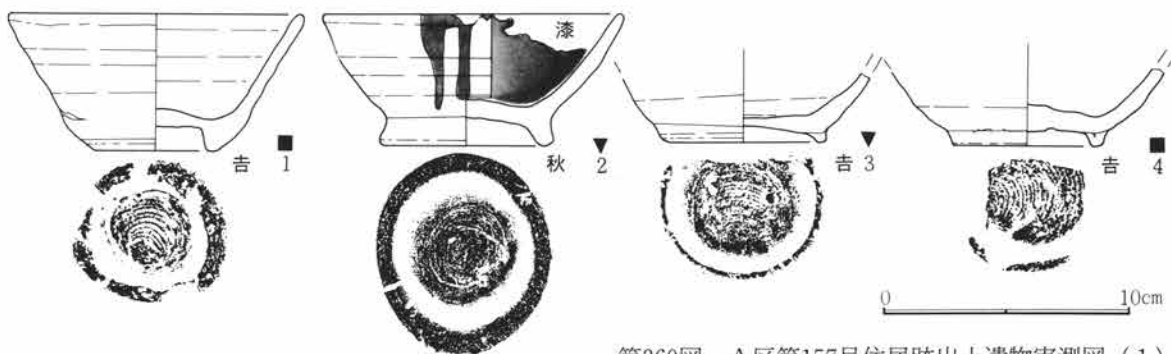
第4章 検出された遺構・遺物



第359図 A区第156号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	A区第157号住居跡		位置	34～36-A-41～43グリッド内。		残存深度	約21cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.50m×3.66m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-89度-南
壁	詳細不明。		床面	地山Ⅶ層土を使用。西壁際がやや高くなっている。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。90×76cm・深度-23cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から97cm位。			主軸方位	北-89度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。		形状				
規模	全長 97cm・屋外長 46cm・屋内長 51cm・袖部幅108cm・燃烧部幅 50cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は礫により補強されている。						
	袖	左右共に瘤状で屋内に突出し右袖は礫で補強する。					
煙道	未検出。		掘り方	楕円形を呈する土坑状である。			
遺物出土状態	カマド内に集中する。全体に床面直上層出土の遺物もやや多い。						

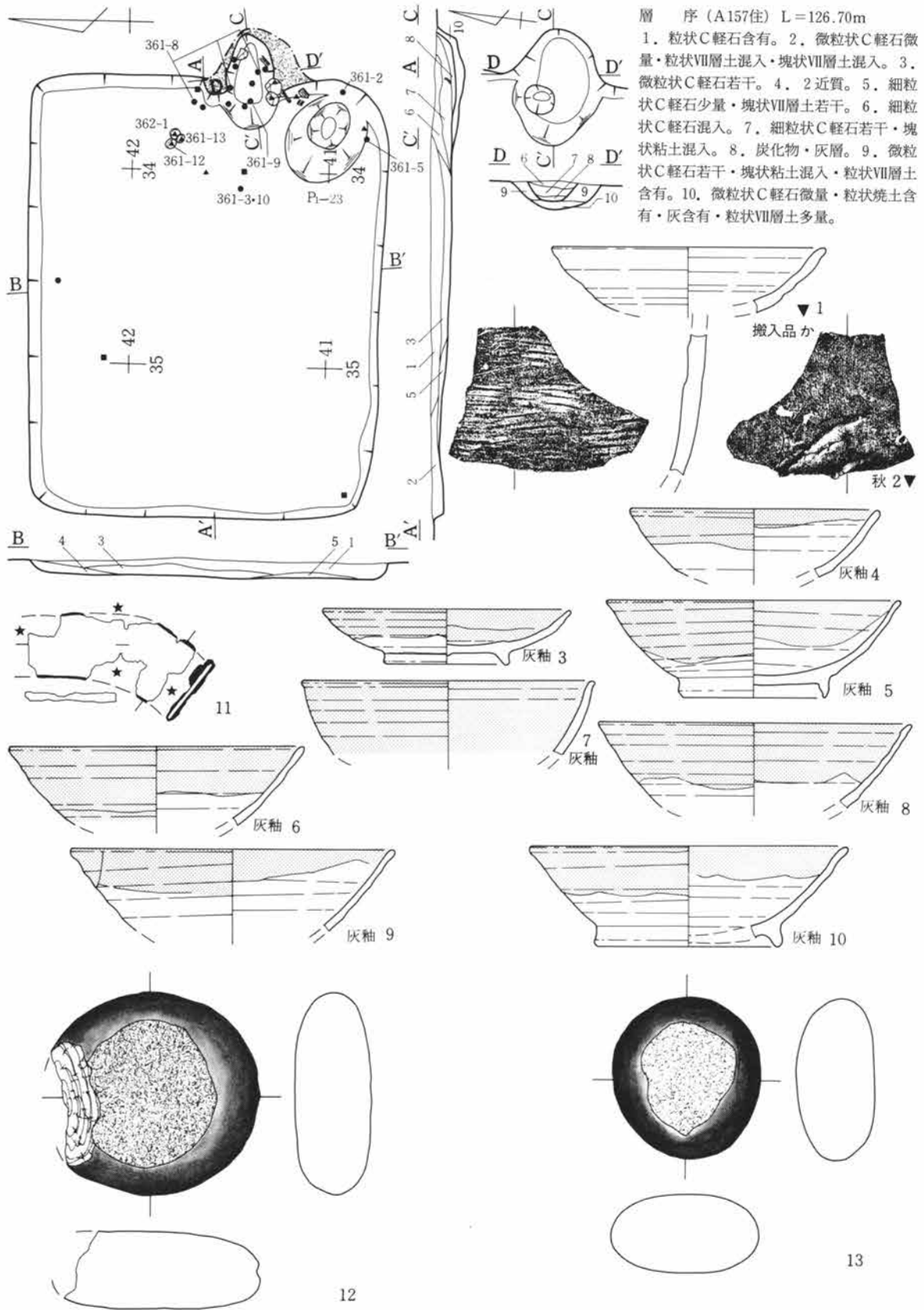
所見 当住居跡はA158住を切り構築している。住居は縦長方形を呈し、東壁中央部にカマドを具備し、南東隅部直下には傍竈坑を備えている。住居は、北壁が直線的に延び、主軸値-1度を測り、東・西両壁は、この北壁にほぼ直交する状態である。東壁は、中央部より若干南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部直下には傍竈坑を備えている。傍竈坑は楕円形を呈し、周縁部が緩やかに立ち上がり、中央部がやや深目に窪む二重の構造となっている。カマドは、瘤状の両袖を備え、燃烧部を含め左右両壁部を礫により補強され、屋外側に長く突出する。煙道は未検出である。住居形状はC区の第Ⅵ段階に対比される。出土遺物の様相はC区の第Ⅵ・Ⅶ段階の様相が認められる。



第360図 A区第157号住居跡出土遺物実測図(1)

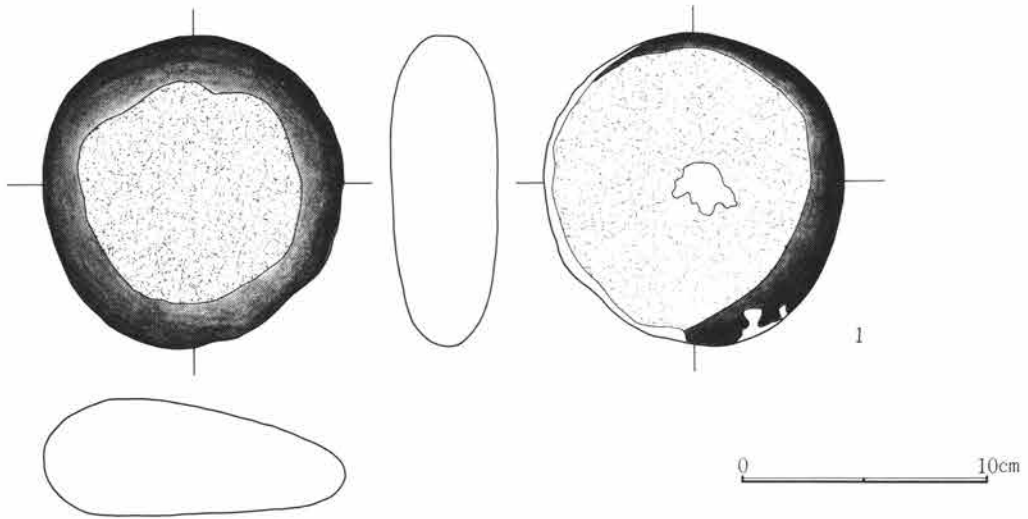


第3節 検出された住居跡について



第361図 A区第157号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)

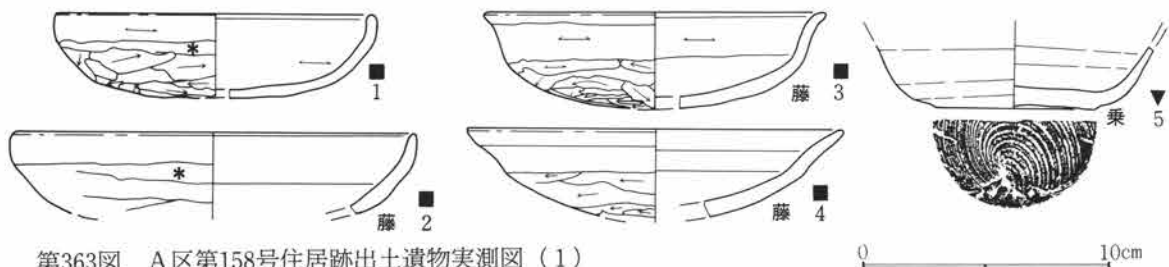
0 2m・10cm



第362図 A区第157号住居跡出土遺物実測図(3)

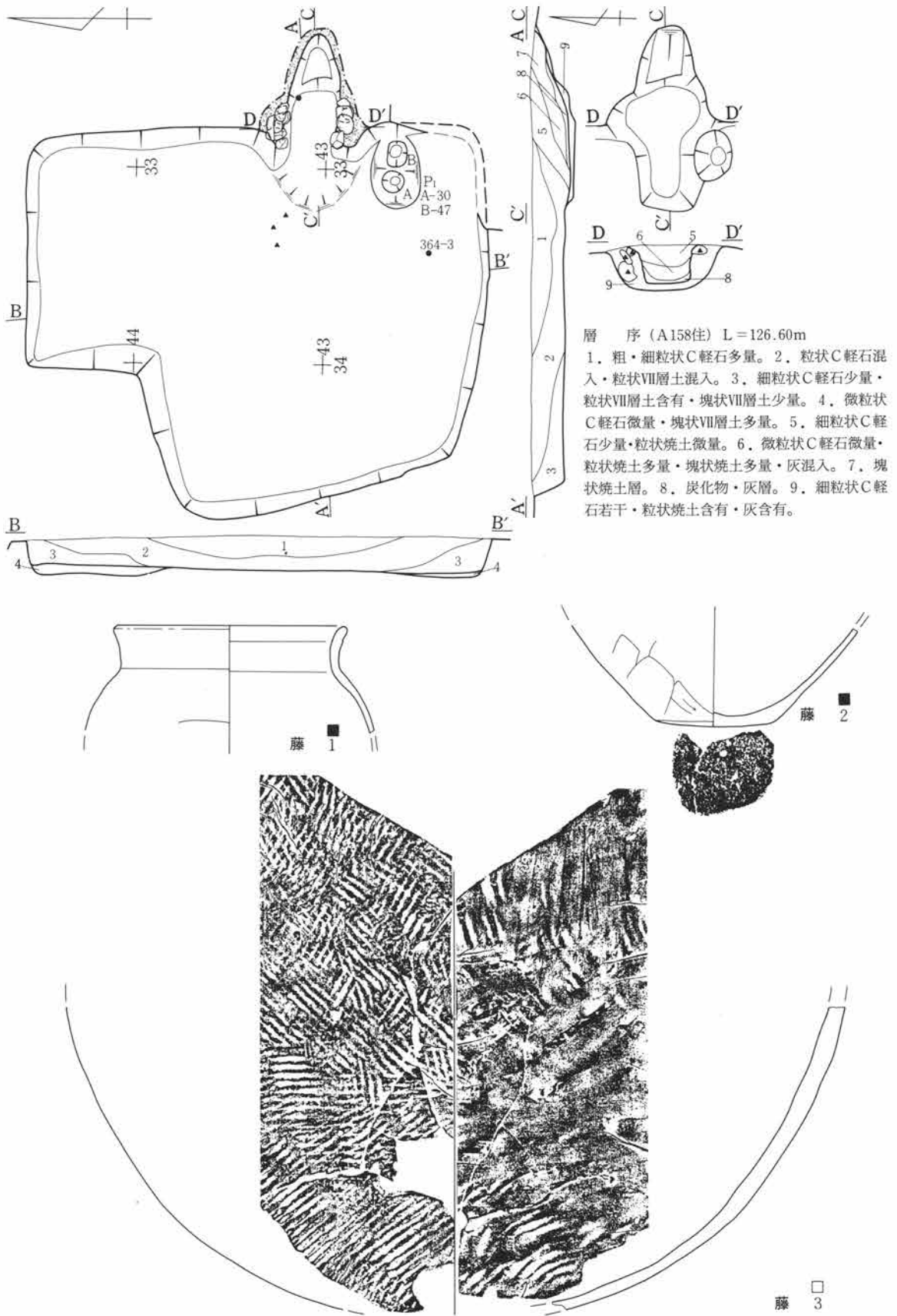
遺構名称	A区第158号住居跡		位置	33~35-A-43~45グリッド内。		残存深度	約38cm
平面形態	特殊形。	規模	4.00m× $\frac{4.87}{3.50}$ m	構築基準辺	東及至北壁	主軸方位	北-89度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土を主に用いるが、一部に造床が認められている。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・内部にA・Bがある。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南壁直下・北壁直下に浅く認められたのみである。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm位。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方から焼土を検出している。		形状	長い舌状を呈する。			
規模	全長178cm・屋外長 83cm・屋内長 85cm・袖部幅160cm・燃烧部幅 56cm・煙道部幅 30cm位。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。左右両壁は礫を多用し補強されている。						
			袖	屋内側に両袖共突出する。			
煙道	緩やかに立ち上がる。		掘り方	全体に長方形気味で燃烧部が楕円形状。			
遺物出土状態	全体に遺物量は少ない。床面直上・床面直上層中で完形乃至大形破片の出土は皆無。						

所見 当住居跡はA155・157住に切られている。住居は、北西隅部が未掘削であったのかの如く、北壁側を西壁側が、張り出した状態となっているが、通有の住居跡の張り出しとは異なった状態であり、表現的には北西隅部が掘り残された状態である。そして、北壁の状態を見る限りに於いては、東壁とほぼ直交する状態であるのに対し、西壁は、この両者に対して歪んだ状態となっていることからすれば、この北西隅部は、何らかの意図により掘り残されたと考えられる。カマドは、燃烧部側壁を礫で補強し、煙道は奥壁中位より立ち上がっている。住居形状はC区の第III段階頃と対比される。

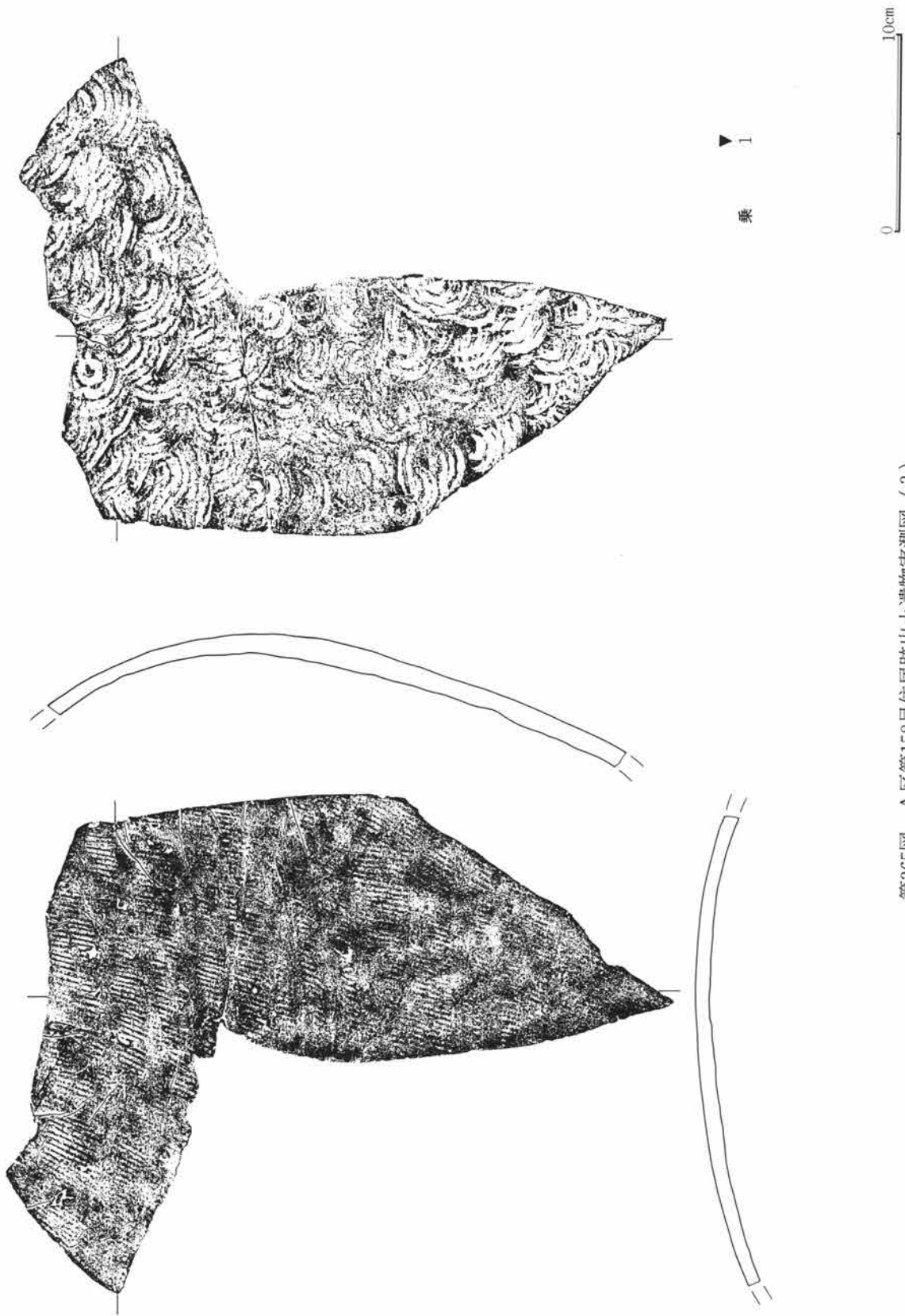


第363図 A区第158号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について

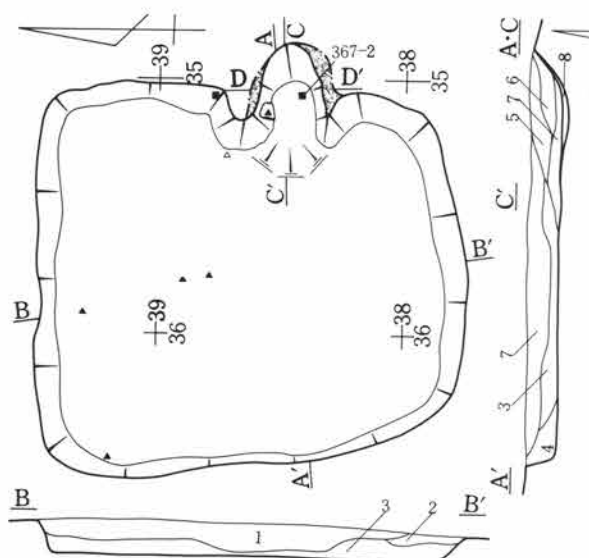


第364図 A区第158号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



第365図 A区第158号住居跡出土遺物実測図(3)

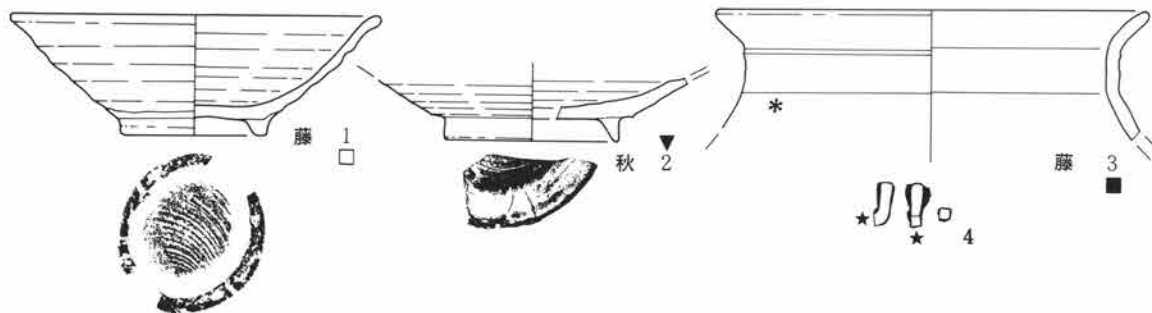
遺構名称	A区第159号住居跡		位置	36・37-A-38~40グリッド内。		残存深度	約35cm
平面形態	正方形基調。	規模	3.10m×3.47m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-90度-南
壁	ほぼ垂直～斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から63cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	舌状。		
規模	全長104cm・屋外長 36cm・屋内長 68cm・袖部幅126cm・燃烧部幅 48cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。左壁で礫の補強材を検出。						
袖	屋内側に突出する。左袖は右袖より大きい。						
煙道	未検出。		掘り方	左袖は削り出してある。楕円形状を呈する。			
遺物出土状態	全体に少量で完形品等の出土は皆無である。						



所見 当住居跡は、前述のA156住に切られている。住居は、東壁中央部にカマドを備えている。南東隅部直下では傍竈坑は検出されておらずA155住と同様な状況である。カマドは、左右両袖はしっかりしており、特に左袖は地山削り出しの状態である。燃烧部幅はやや狭い。煙道は未検出である。このカマドの位置からすれば、南東隅部直下には傍竈坑が検出される可能性は、他例の住居からすれば大である。同様にして傍竈坑が検出されていない住居には、A155・188・160住が近接しており、この点からすれば、当住居を含めC区第Ⅶ段階から第Ⅷ段階頃の住居形状上周辺部での特殊な状況があったことが示唆されるが、単に、第Ⅶ～第Ⅷ段階での過渡期的形状と考えられる。

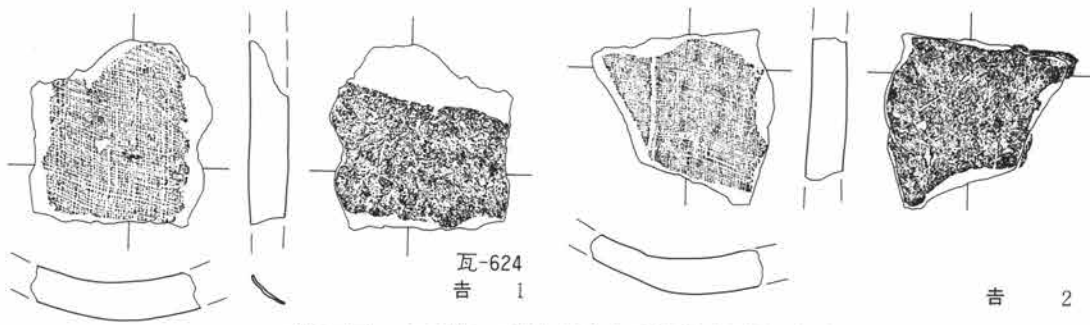
層序 (159A住) L=126.70m

1. 粒状C軽石多量 (本層下面に粘土が貼ってある)。
2. 粒状C軽石混入。
3. 細粒状C軽石少量・塊状Ⅶ層土少量。
4. 微粒状C軽石微量。
5. 粒状C軽石含有・粒状焼土多量。
6. 細粒状C軽石若干・粒状焼土含有・粒状炭化物含有。
7. 細粒状C軽石若干・粒状炭化物若干・粒状Ⅶ層土含有。
8. 細粒状C軽石若干・粒状焼土若干。



第366図 A区第159号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

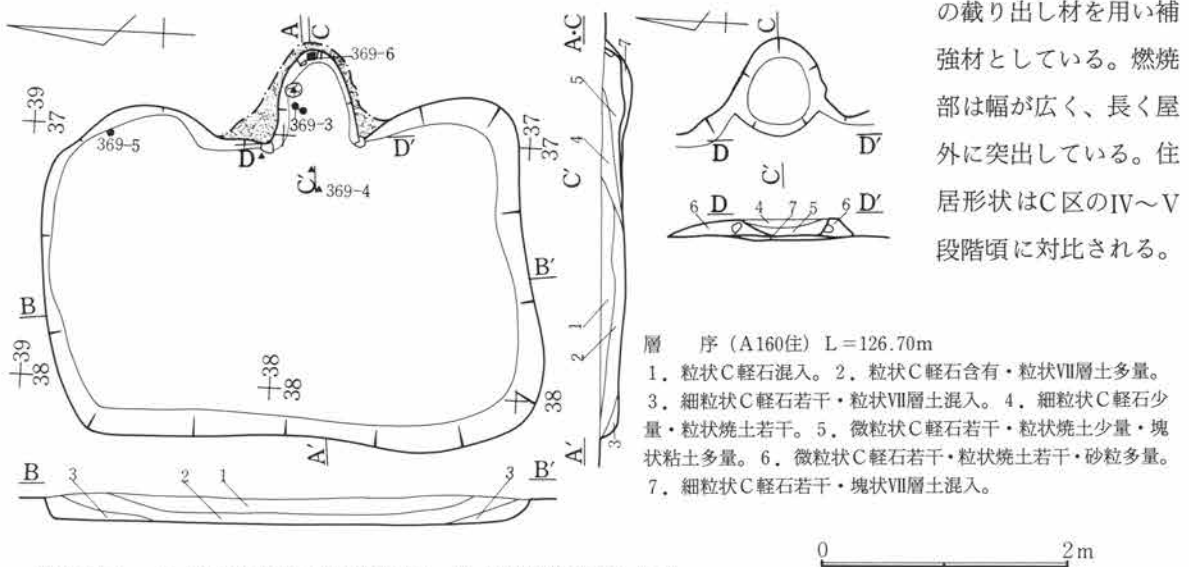
第4章 検出された遺構・遺物



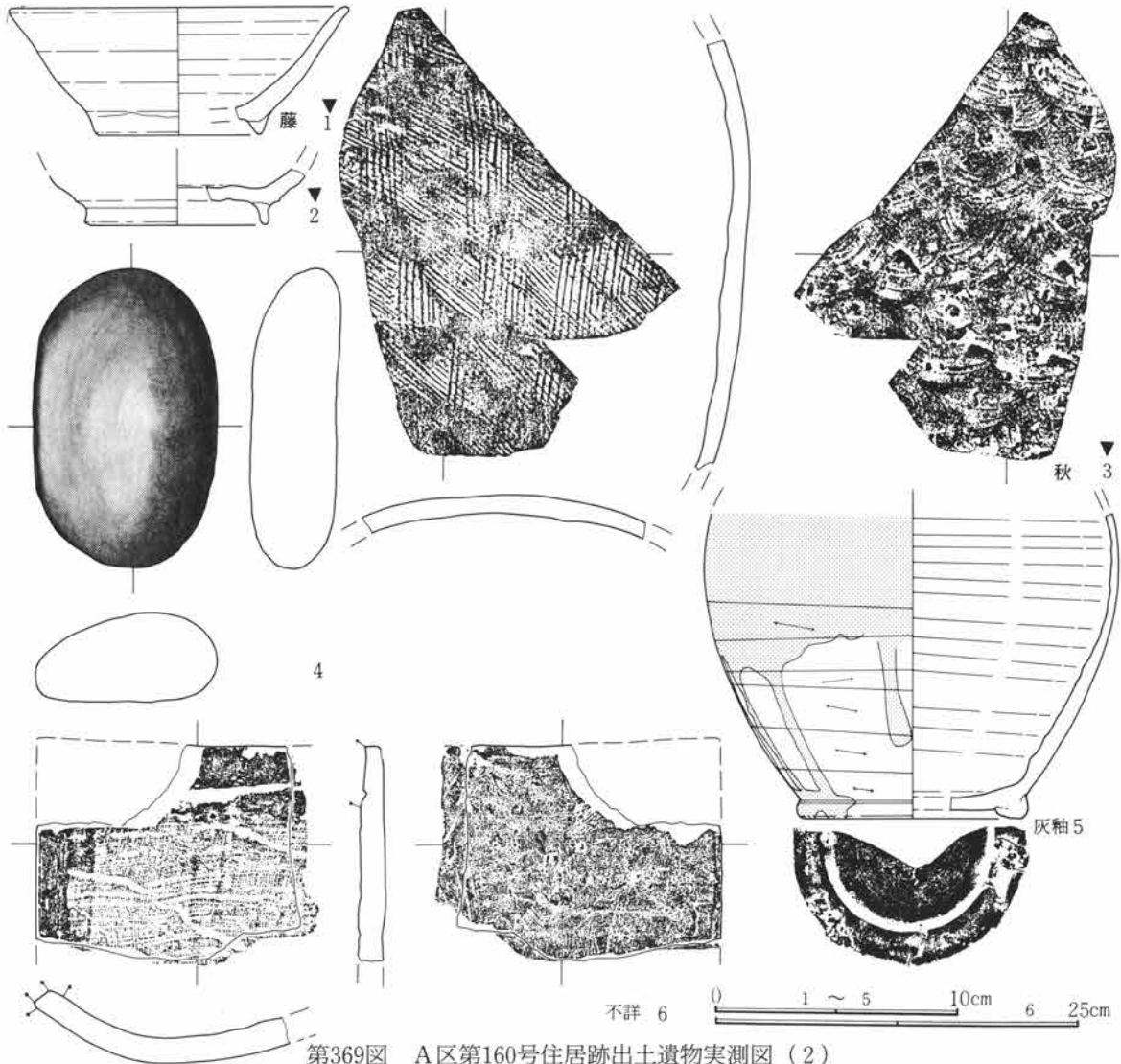
第367図 A区第159号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	A区第160号住居跡			位置	37~39-A-37~39グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	横長方形。	規模	2.80m×3.95m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-87度-南位か	
壁	斜位気味に立ち上がる。			床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。			傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm。				主軸方位	北-84度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	舌状。			
規模	全長 74cm・屋外長 40cm・屋内長 34cm・袖部幅165cm・燃烧部幅 60cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	両袖共に屋内側に若干突出する。左袖は横幅が広い。						
煙道	未検出。			掘り方	山形状を呈し先端側は円形の土坑状になる。			
遺物出土状態	遺物量は少ない。覆土内から少量の土器類・瓦類が出土している。							

所見 当住居跡は、A156住と接する状態で重複している。この為、発掘調査段階では両者の新旧関係を判断するには無理があった。住居は、四辺の壁は全体的に歪んでいる。そして、東壁中央部にカマドを備えるが、南東隅部直下は傍竈坑が検出されなかった。カマドは、微小で瘤状の両袖を備え、先端側には地山砂岩質土



第368図 A区第160号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

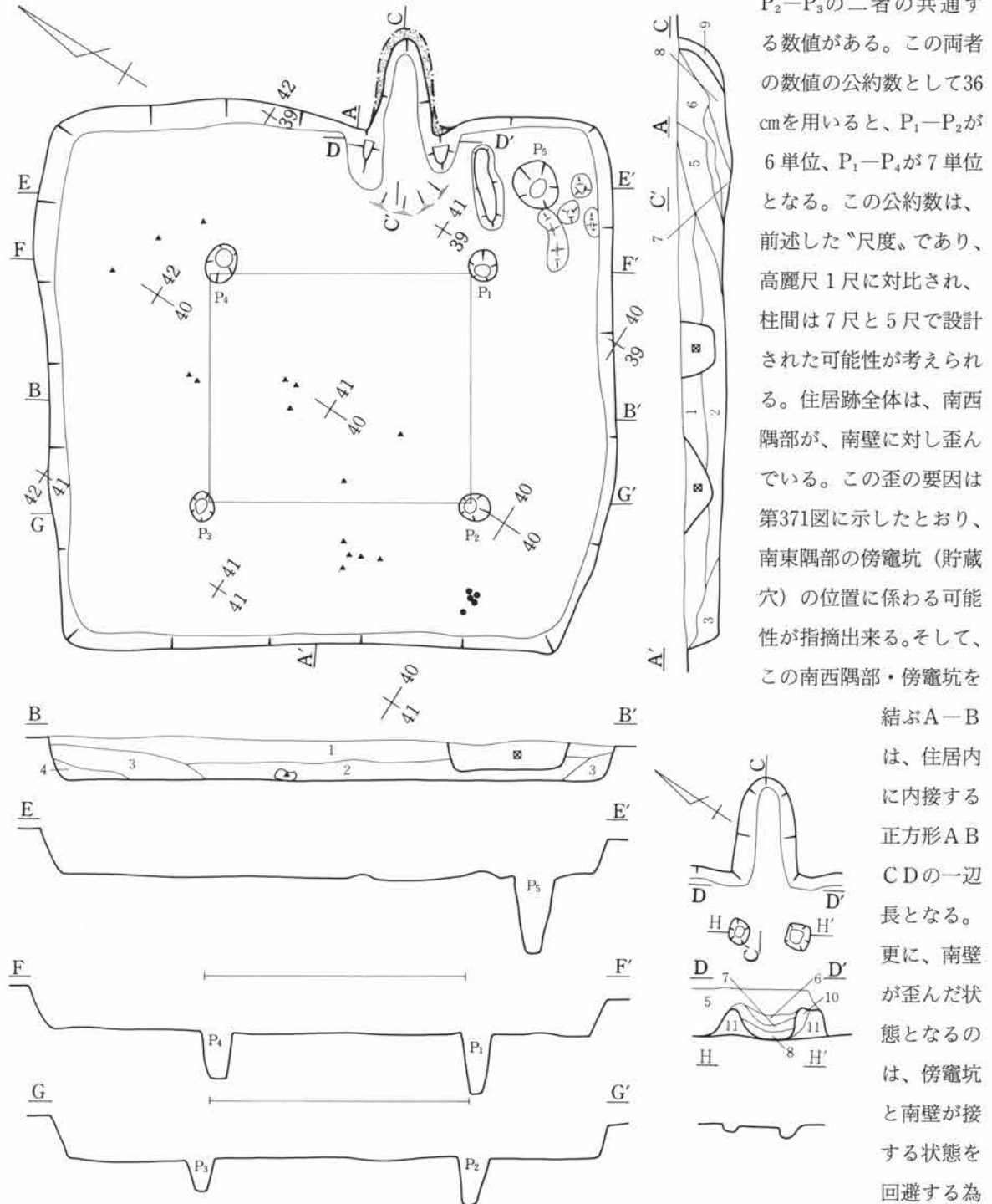


第369図 A区第160号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	A区第161号住居跡		位置	39~42-A-40~43グリッド内。		残存深度	約43cm
平面形態	正方形基調。	規模	5.15m×5.57m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-58度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形。径42cm・深度-70cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から140cm。			主軸方位	北-58度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。		形状	長い舌状を呈する。			
規模	全長160cm・屋外長 80cm・屋内長 80cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 60cm・煙道部幅 34cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	造り出しで屋内側に大きく突出する。		
煙道	仰角70度で立ち上がる。		掘り方	長い舌状を呈する。			
遺物出土状態	遺物量は少ない。覆土内でも出土する主体物は礫である。						

所見 当住居跡は切り合い関係の無い単独住居跡である。住居は、東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備えている。南東隅部周辺では、傍竈坑（貯蔵穴）を備え、周辺には低い土堤状の高まりが散在する状態で検出されている。支柱穴は4本P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が検出されている。この4本の柱間にはP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>とP<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>・

P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>の二者の共通する数値がある。この両者の数値の公約数として36cmを用いると、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>が6単位、P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>が7単位となる。この公約数は、前述した“尺度”であり、高麗尺1尺に対比され、柱間は7尺と5尺で設計された可能性が考えられる。住居跡全体は、南西隅部が、南壁に対し歪んでいる。この歪の要因は第371図に示したとおり、南東隅部の傍竈坑（貯蔵穴）の位置に係わる可能性が指摘出来る。そして、この南西隅部・傍竈坑を



結ぶA-Bは、住居内に内接する正方形ABCDの一辺長となる。更に、南壁が歪んだ状態となるのは、傍竈坑と南壁が接する状態を回避する為

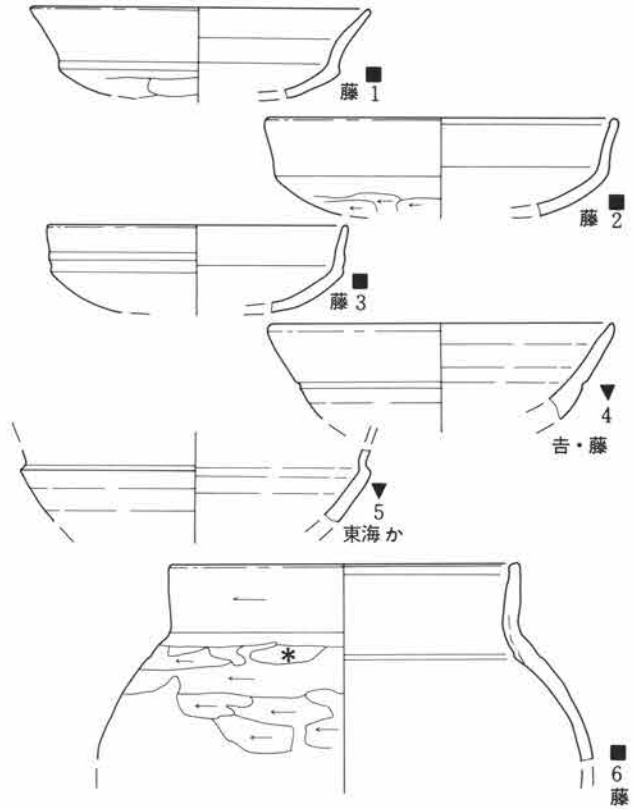
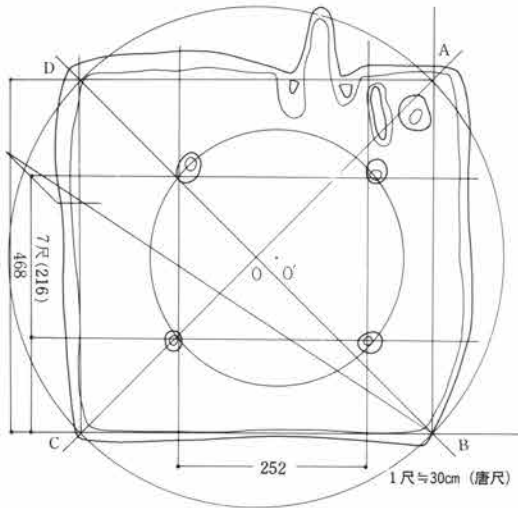
層序 (A161住) L=126.80m

1. 粗・細粒状C軽石多量。
2. 粒状C軽石混入・粗粒状VII層土少量。
3. 細粒状C軽石含有・粒状VII層土少量。
4. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。
5. 粒状C軽石多量・粒状焼土微量。
6. 細粒状C軽石少量多量の焼土少量。
7. 微粒状C軽石少量・塊状焼土多量・粒状焼土多量。
8. 灰層（粒状焼土少量）。
9. 細粒状C軽石少量・塊状焼土多量。
10. 細粒状C軽石含有・粒状焼土少量。
11. 塊状粘土。

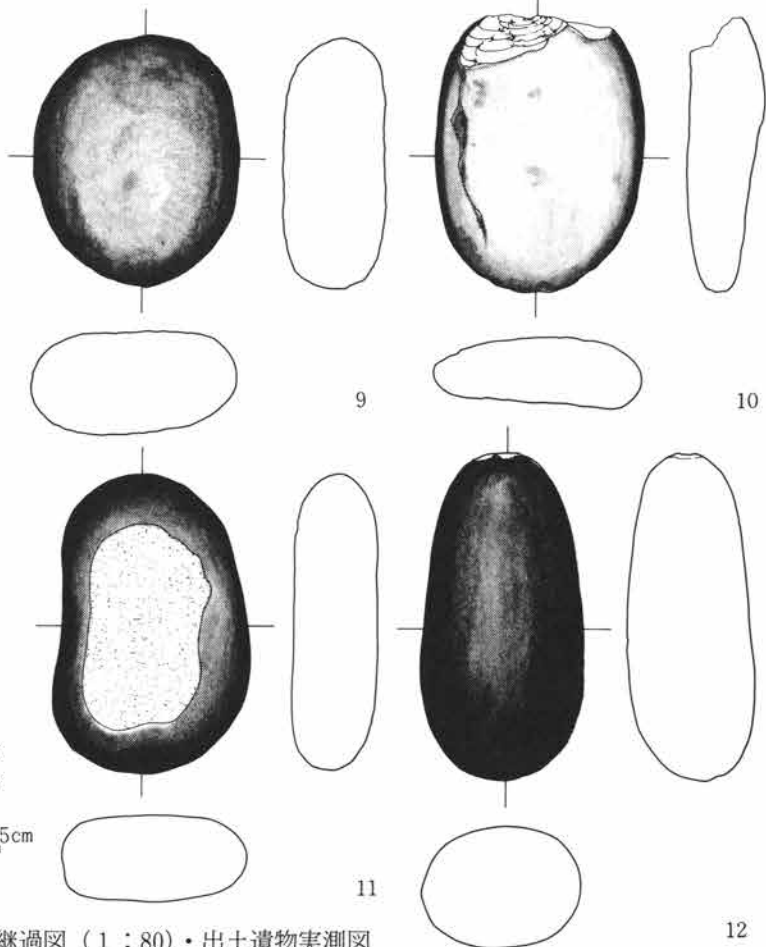
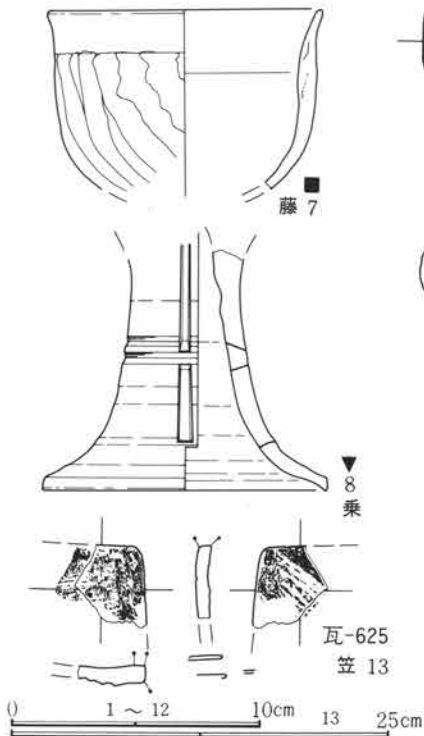
第370図 A区第161号住居跡実測図

0 2m





に、住居掘削時頭初の予定を変更して拡張的にされたものと考えられる。そして、これに伴って、支柱穴が掘削され、 $P_1-P_4 \cdot P_2-P_3$ 長が、 $P_1-P_2 \cdot P_3-P_4$ より1尺長く設定された可能性が考えられる。更に、カマド自体も、頭初の位置から移設されたことも考慮されるが、逆に、カマド位置により、柱間が1尺延長され、南壁が、A-Bより更に南側に設定された可能性がある。

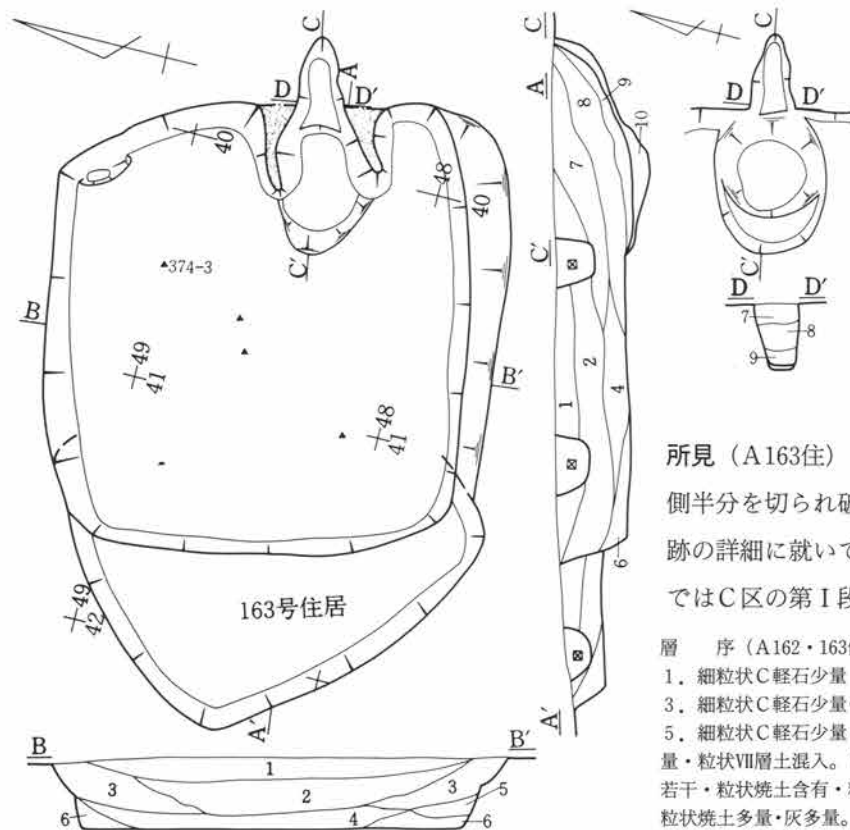


第371図 A区第161号住居跡構築経過図 (1:80)・出土遺物実測図

遺構名称	A区第162号住居跡		位置	40~42-A-48~50グリッド内。		残存深度	約58cm
平面形態	正方形基調。	規模	3.60m×3.40m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-75度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	無し。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から32cm。			主軸方位	北-75度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	楕円形状の燃焼部に細目の煙道が付設される。		
規模	全長172cm・屋外長 54cm・屋内長118cm・袖部幅125cm・燃焼部幅 62cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。			袖	幅広く長く屋内に突出する。全て造り出している。		
煙道	細く舌状で、半分が屋外に突出する。		掘り方	煙道部と燃焼部で認められる。			
遺物出土状態	遺物も少量である。床面直上等から完形の至遺存良好な個体は認められなかった。						

遺構名称	A区第163号住居跡	位置	42・43-A-48~50グリッド内。	残存深度	約35cm
A162号住の破壊により詳細不詳。					

所見 (A162住) 当住居跡はA163住を切り構築している。住居は、南北壁の上半部の立ち上がりが緩やかになっているが、土層断面からは、同部は壁の崩落による所産であることが判明している。カマドは、東壁



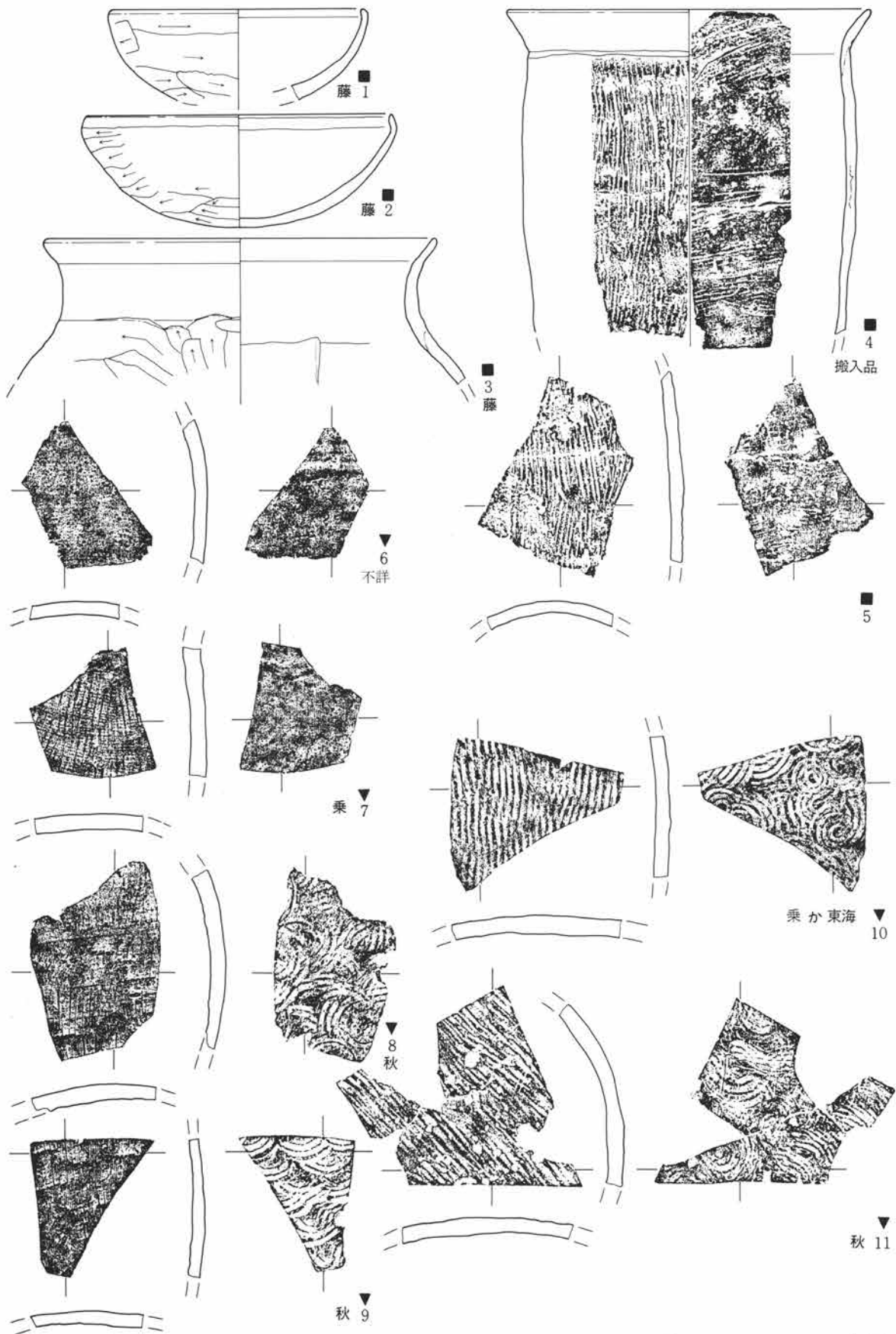
中央よりやや南東隅部に寄った位置に備えているが、南東隅部直下では傍竈坑の存在が認められなかった。カマドは、左右両袖共に長く屋内に突出状態で造り出されている。住居形状はC区の第III段階に対比される。

所見 (A163住) 当住居跡は上述A162住に東側半分を切られ破壊されている。この為、住居跡の詳細に就いては不明であるが、指向方向ではC区の第I段階以前に対比される。

- 層序 (A162・163住) L=126.90m
1. 細粒状C軽石少量 (砂質)。
  2. 細粒状C軽石少量。
  3. 細粒状C軽石少量・塊状VII層土少量。
  4. 粒状C軽石多量。
  5. 細粒状C軽石少量・塊状VII層土多量。
  6. 微粒状C軽石微量・粒状VII層土混入。
  7. 粒状C軽石含有。
  8. 細粒状C軽石若干・粒状焼土含有・粒状粘土多量。
  9. 微粒状C軽石若干・粒状焼土多量・灰多量。
  10. 微粒状C軽石少量・粒状焼土少量・粒状VII層土少量。

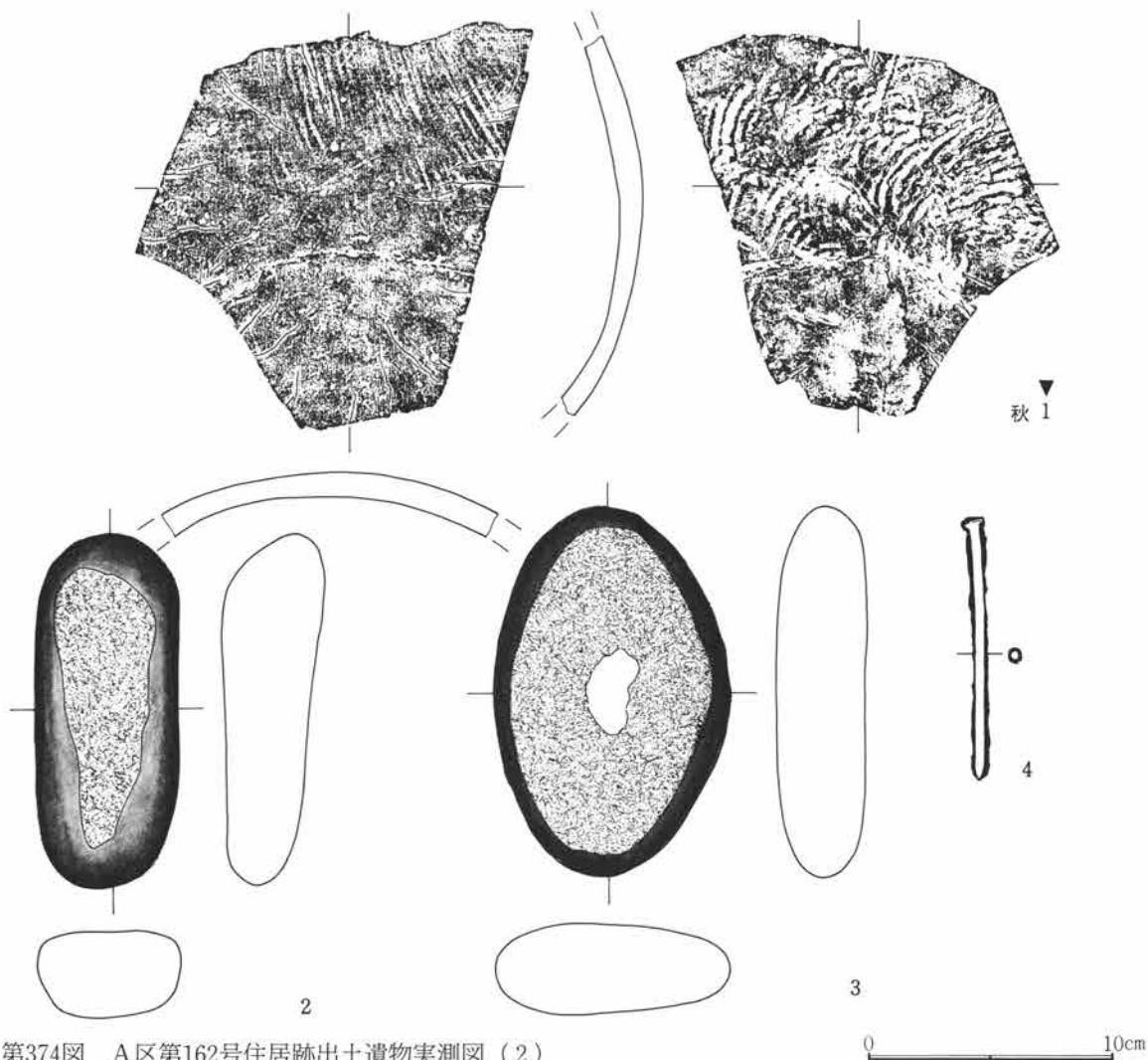
第372図 A区第162号住居跡実測図

0 2m



第373図 A区第162号住居跡出土遺物実測図(1)

0 10cm

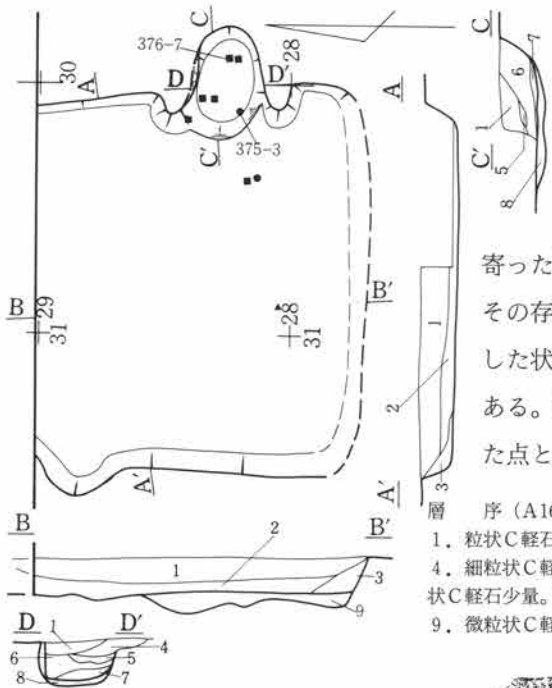


第374図 A区第162号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	A区第164号住居跡		位置	30~32-A-28~30グリッド内。			残存深度	約30cm
平面形態	横長方形か。	規模	3.15m×2.67+αm	構築基準辺	不分明壁	主軸方位	北-85~90度-南位か	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	北側は地山Ⅶ層土を使用し、南側は165住の覆土を使用。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	断面B-B'で確認されたが、平面露呈は不能であった。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から44cm位。				主軸方位	北-89度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	両袖を具備し楕円形状。			
規模	全長 89cm・屋外長 44cm・屋内長 49cm・袖部幅123cm・燃烧部幅 52cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	両袖共しっかりしており、屋内側に突出する。						
煙道	未検出。			掘り方	断面確認のみで平面露呈は出来なかった。			
遺物出土状態	全体的に少量。覆土内からは少量の土器類・瓦類の出土があったのみである。							

所見 当住居跡はA165・166・207住・A5溝を切り構築している。だが、調査段階では、A165住との新旧

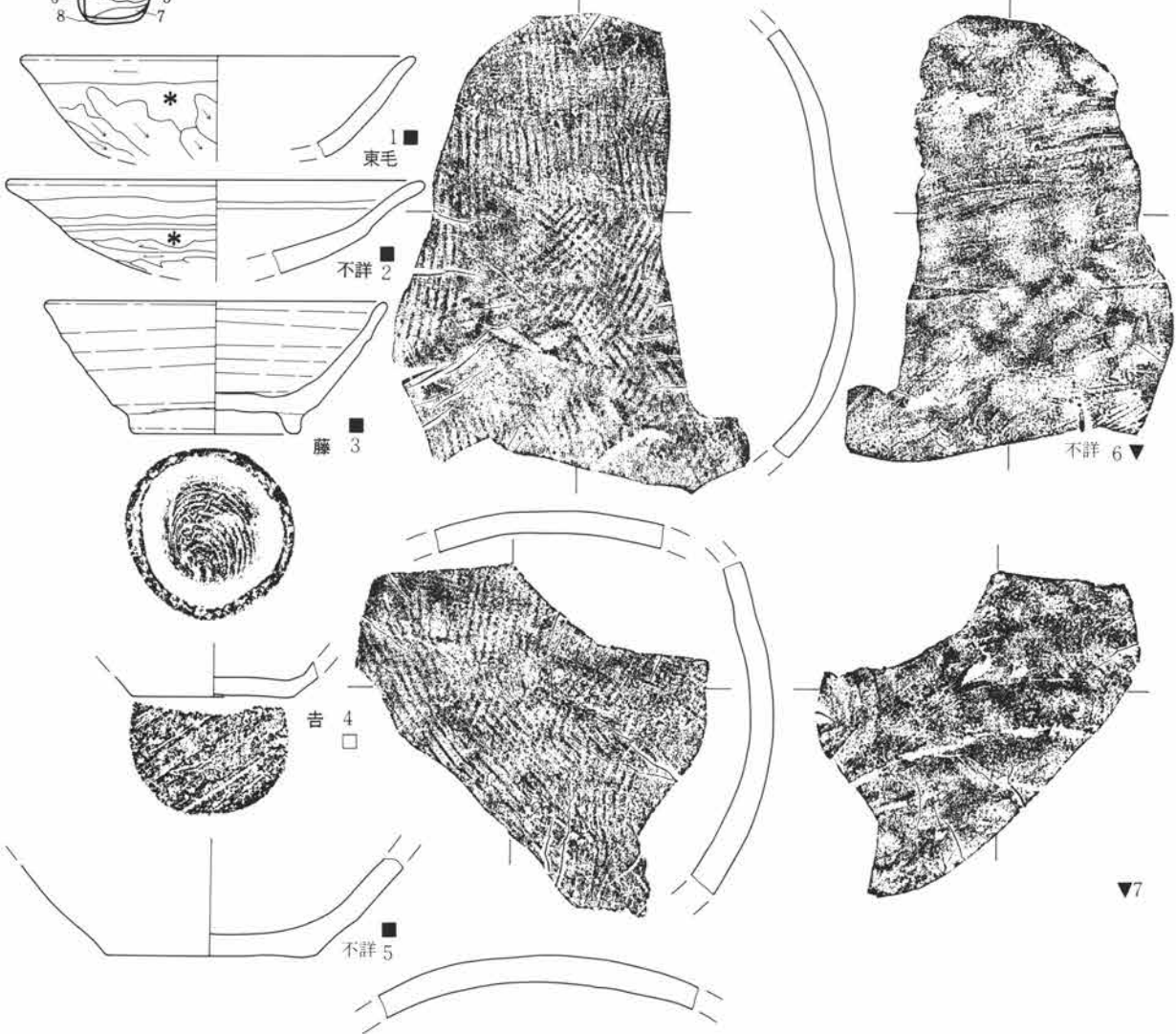
第3節 検出された住居跡について



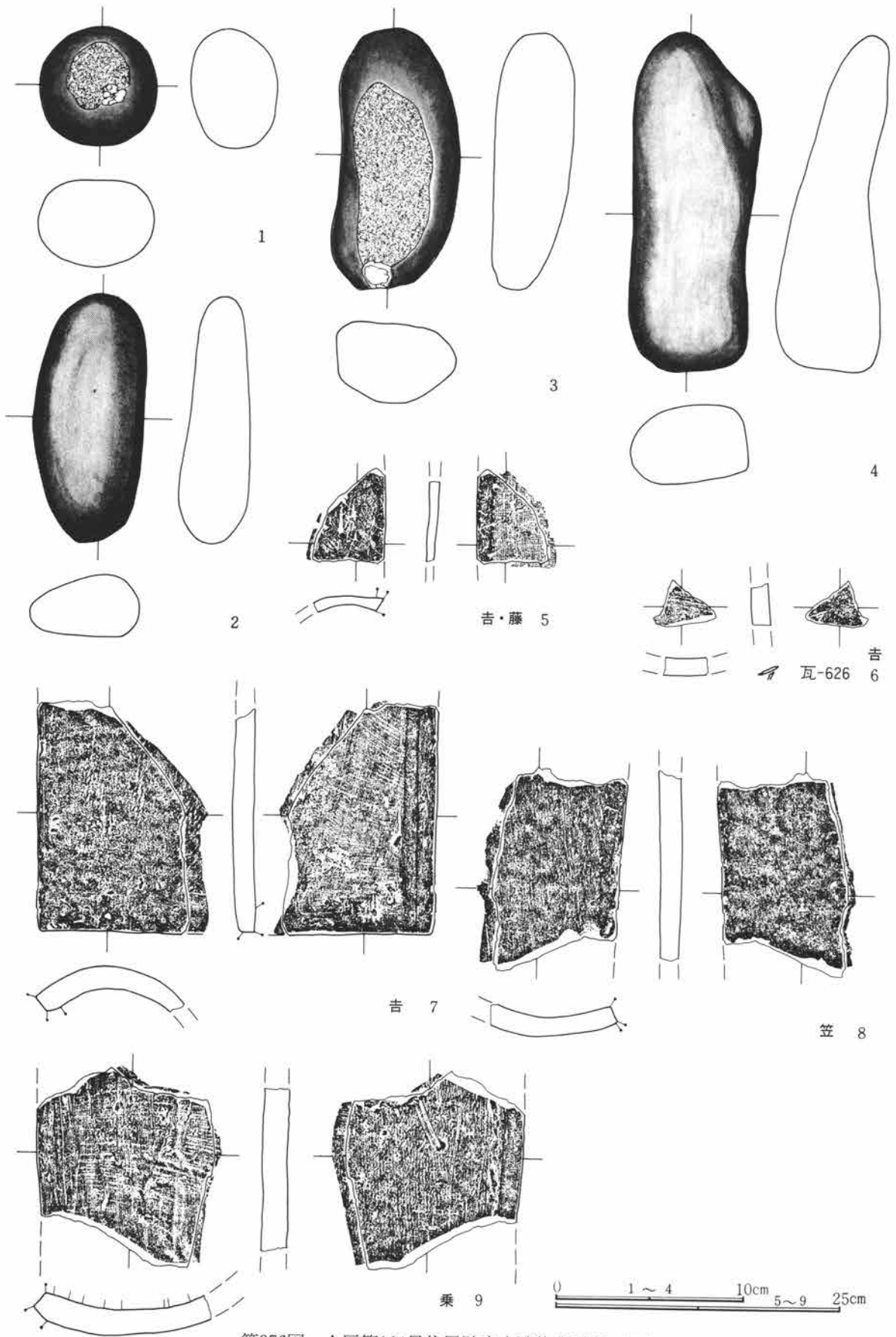
関係が、平面精査では明らかに出来なかったことにより、両者の新旧関係は断面により確認した。この為、当住居跡の南壁は土層断面からの復原である。そして、北壁側は、調査区内を東西に流走する水路により調査出来なかった。住居は、東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置にカマドを備える。傍竈坑は、上述の状況により、その存否の確認は出来なかった。カマドは、左右両袖しっかりした状態で検出されている。この左右両袖共地山の削り出しである。燃烧部幅はやや広い。住居形状は傍竈坑が未確認であった点とカマドを考慮して、C区の第VI段階に対比される。

層序 (A164住) L=126.40m

1. 粒状C軽石混入。2. 粒状C軽石含有。3. 細粒状C軽石含有・粒状VII層土含有。
4. 細粒状C軽石少量・粒状粘土多量。5. 細粒状C軽石少量・粒状焼土多量。6. 細粒状C軽石少量。
7. 炭化物・灰層。8. 細粒状C軽石少量・粒状焼土混入・粒状VII層土混入。
9. 微粒状C軽石若干。



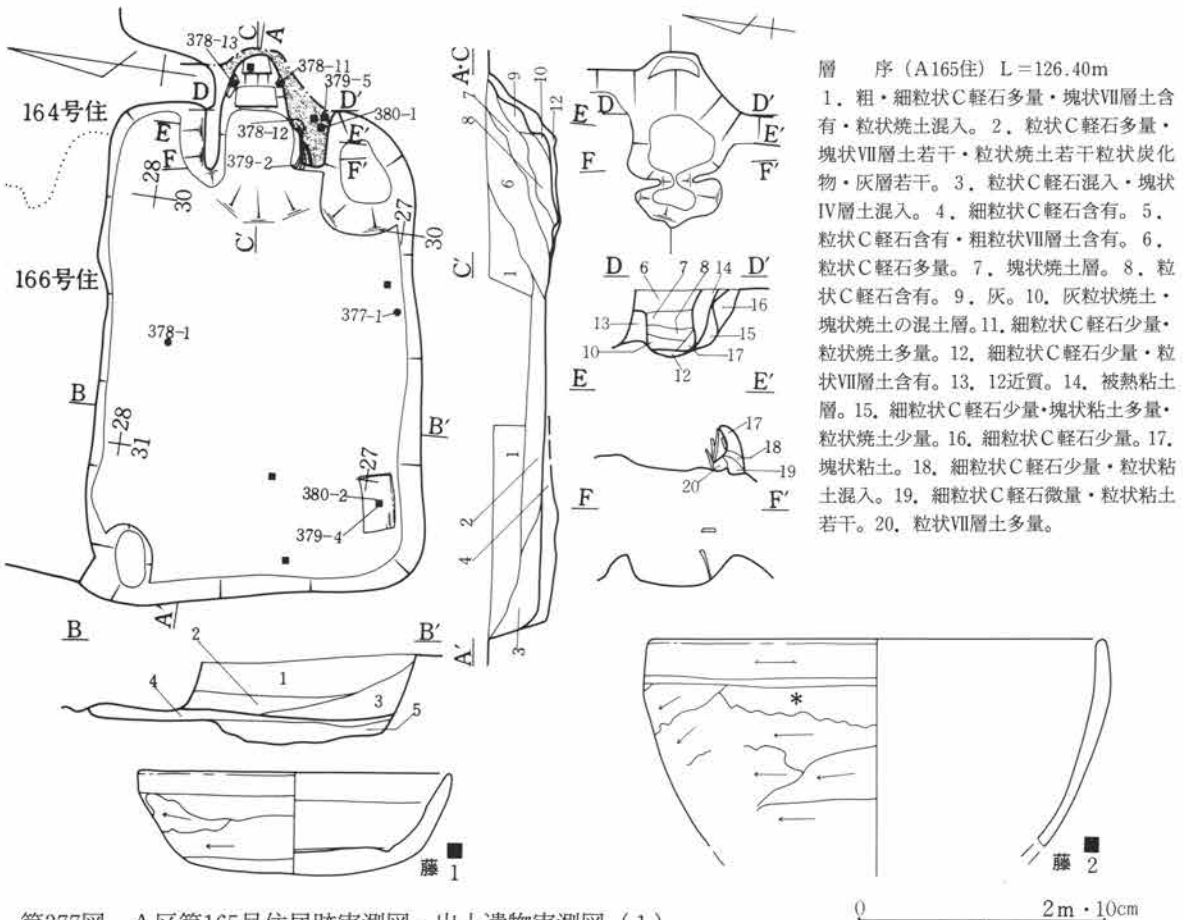
第375図 A区第164号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第376図 A区第164号住居跡出土遺物実測図(2)

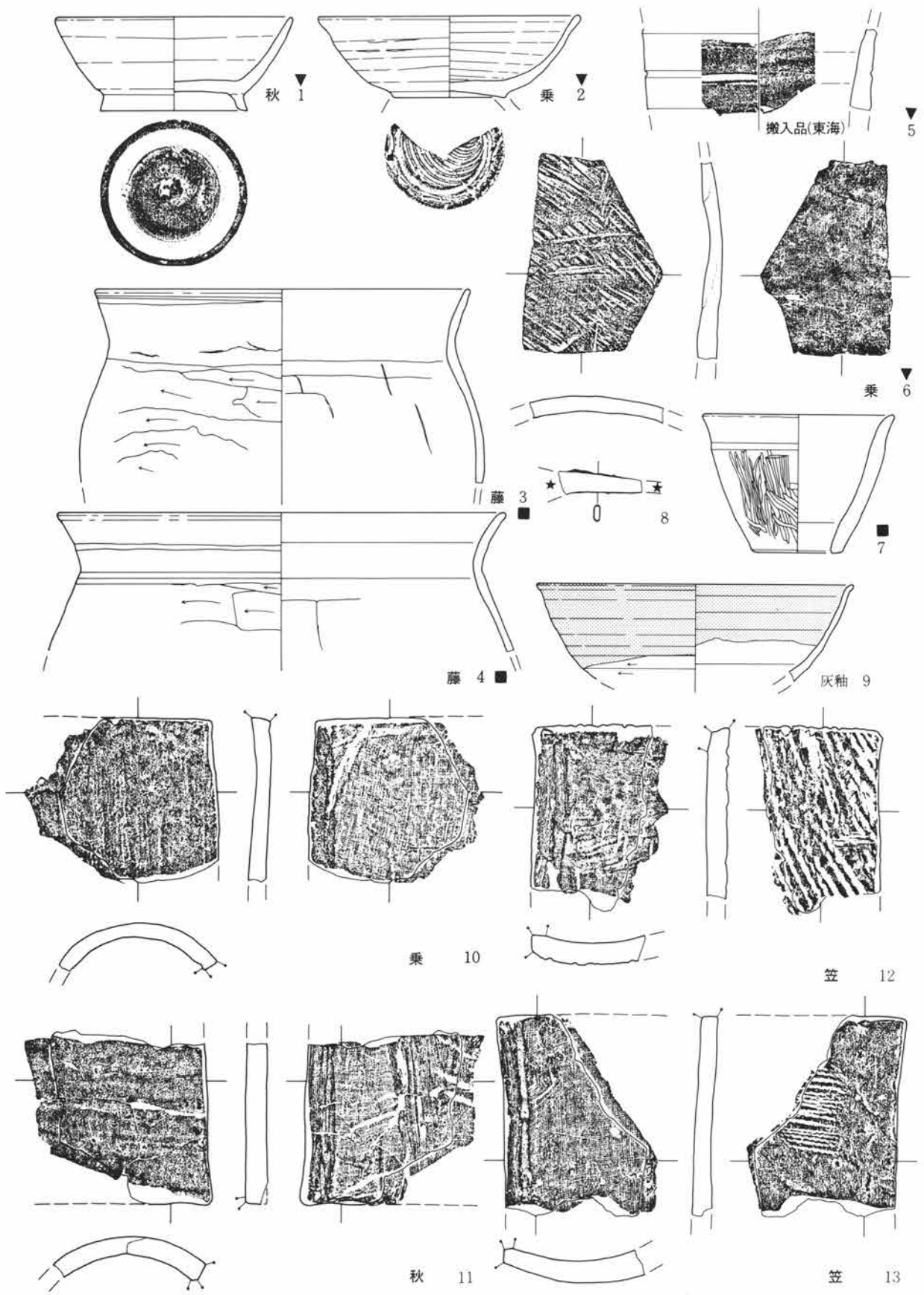
遺構名称	A区第165号住居跡		位置	30～32-A-27～29グリッド内。		残存深度	約56cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.00m×2.80m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-82度-南位か
壁	斜位気味～ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	造床で平坦であるが調査の不便により詳細不明。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・不整形。100×60cm・深度-15cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	西壁寄り側のみを確認したが完全な調査実施を行なわなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-82度-南	
改築	有。断面から数次に互ると考えられる。		形状	箱状の燃焼部に煙道が付設されている。			
規模	全長134cm・屋外長 40cm・屋内長 96cm・袖部幅122cm・燃焼部幅 60cm・煙道部幅 27cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	長く屋内側に突出する。					
煙道	仰角50度程度で立ち上がる。		掘り方	平面図は二次期の掘り方状況が混在する。			
遺物出土状態	瓦類がやや多く、国分寺創建段階のものが多い。孰れも床面直上乃至床面直上層で出土。						

所見 当住居跡は、A166住・4号掘立を切り構築し、前述A164住に切られている。住居は東壁中央にカマドを備える縦長方形の住居跡で、南東隅部直下には、比較的規模の大きい傍竈坑を備えている。カマドは、左右両袖共、造り出して屋内側に長く突出しており燃焼部幅も広い。又、右袖は瓦・礫により補強されている。住居形状は、C区の第V段階乃至C区の空白期と考えられる。



第377図 A区第165号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

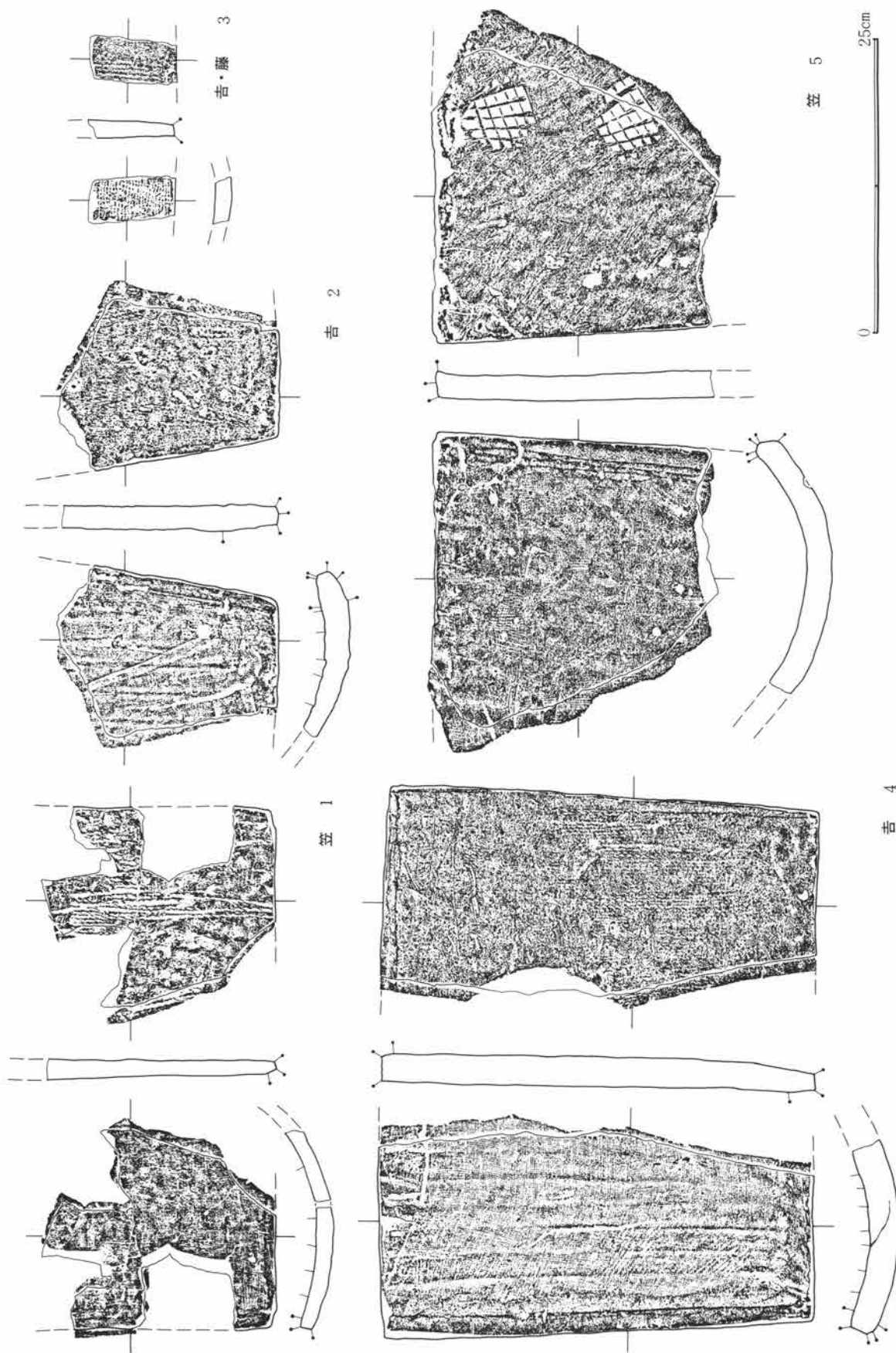
第4章 検出された遺構・遺物



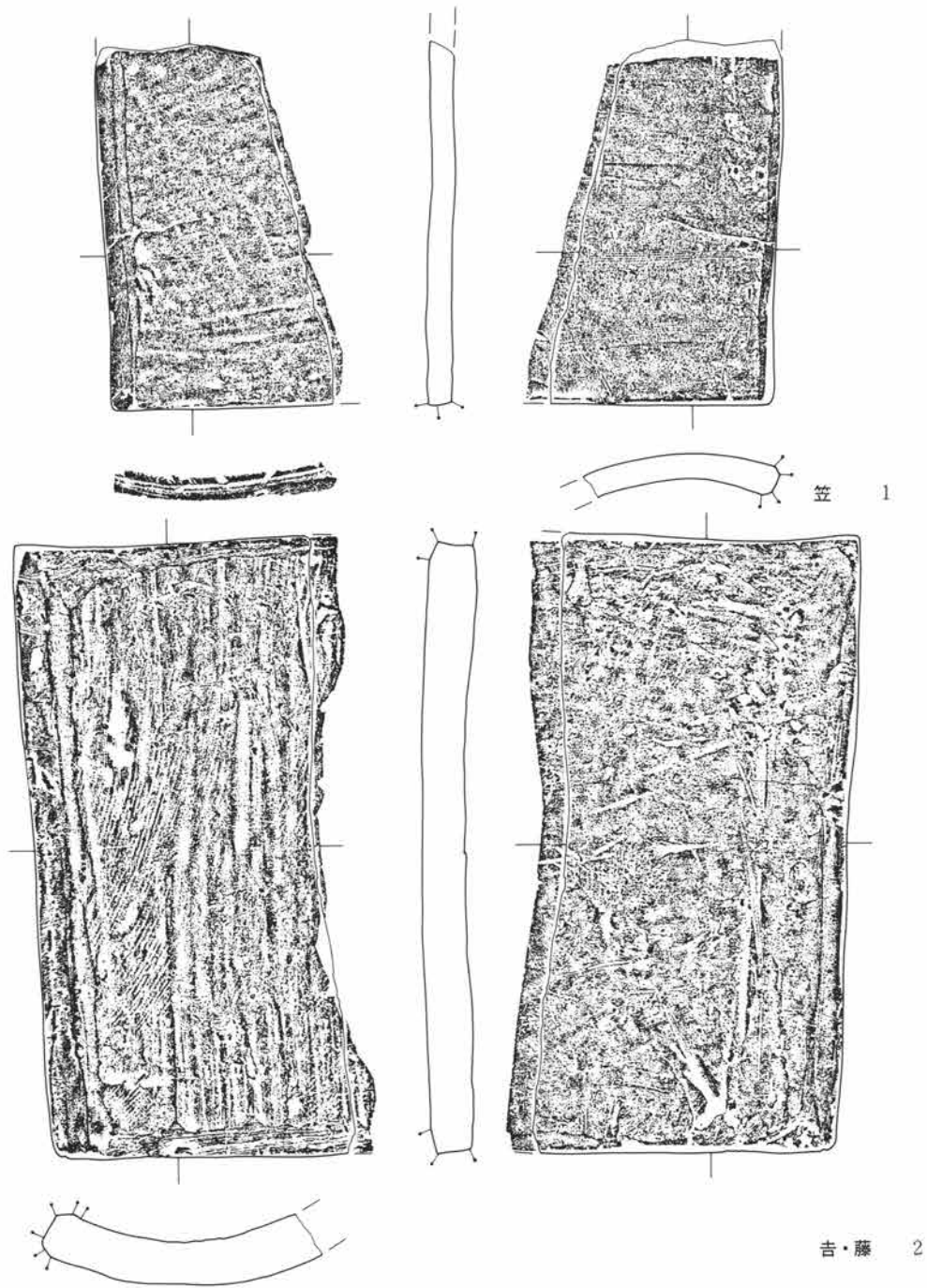
第378図 A区第165号住居跡出土遺物実測図(2)

0 1 ~ 9 10cm 10 ~ 13 25cm





吉<sup>4</sup>  
第379図 A区第165号住居跡出土遺物実測図(3)

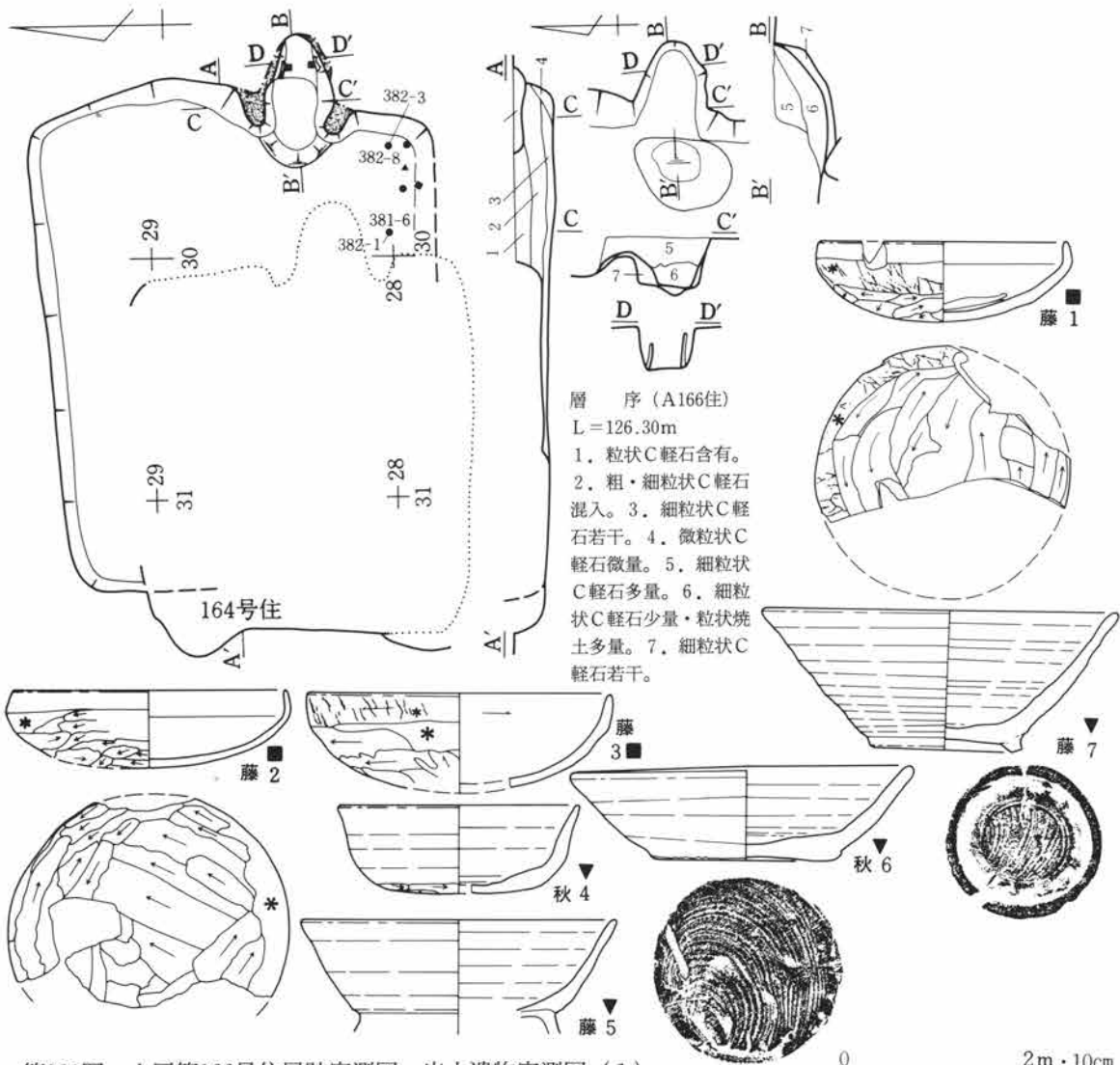


第380図 A区第165号住居跡出土遺物実測図(4)

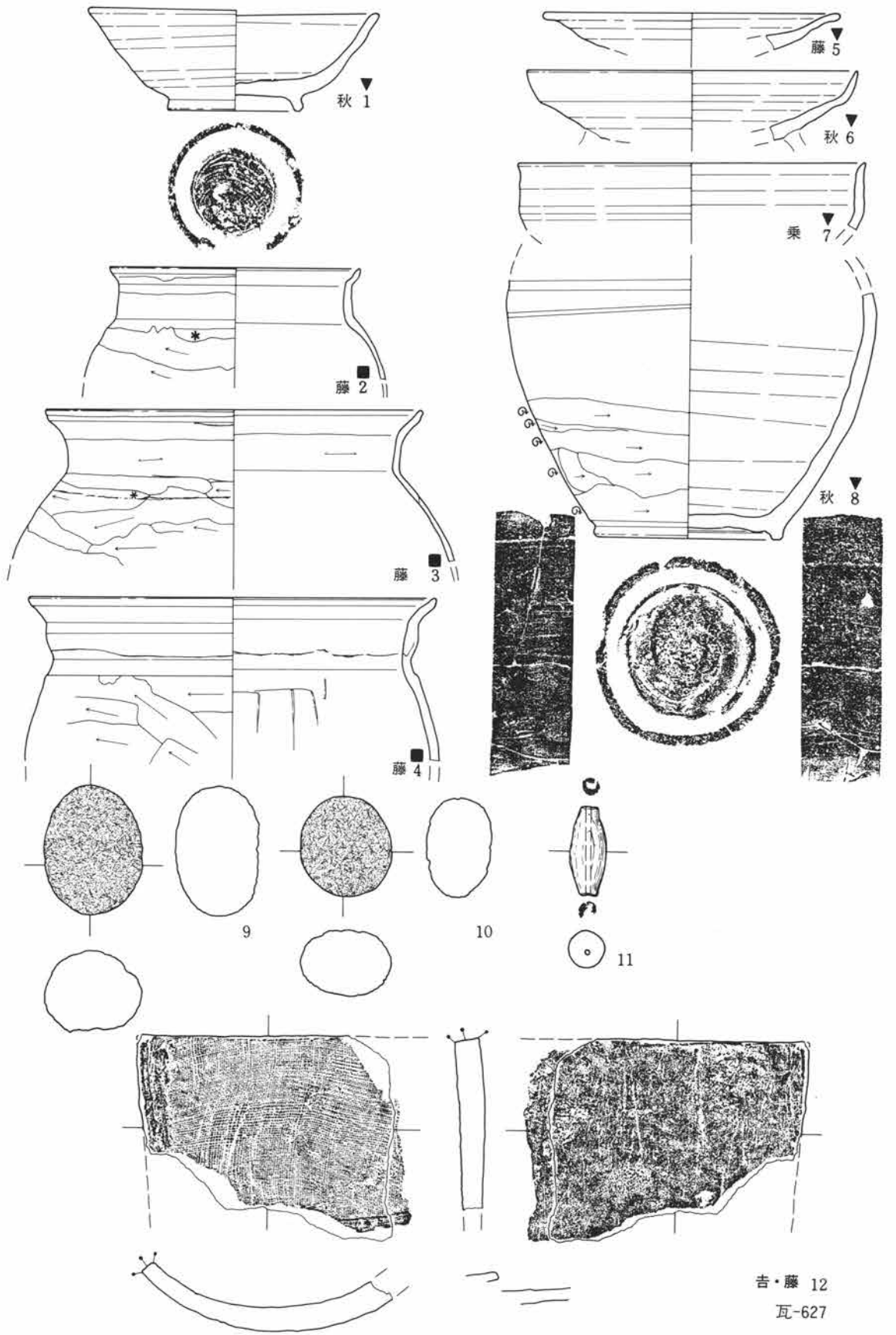
0 25cm

所見 当住居跡は、A207住を切り構築し、前述A164・165住に切られ大半が破壊されている。この為住居の詳細に就いて不明な点が多い。住居は、東壁中央より若干南東隅部に寄った位置にカマドを備えている。このカマドを備える東壁は、カマドの左袖の北側で、北東隅部より南側の部分で屈折する状態になっている。カマドは左右両袖を造り出し、比較的しっかりした袖を備えている。燃焼部は幅が広く隅丸長方形状を呈している。煙道は、燃焼部底面より仰角60度程で立ち上がっている。この煙道の立ち上がり部は二枚の女瓦を用い壁の補強としている。又、焚口部直下の地山土中には、大きい礫が埋っており、カマド構築に際して障害となっている。住居形状は、カマド・出土遺物から、C区の第Ⅲ段階頃に対比される。

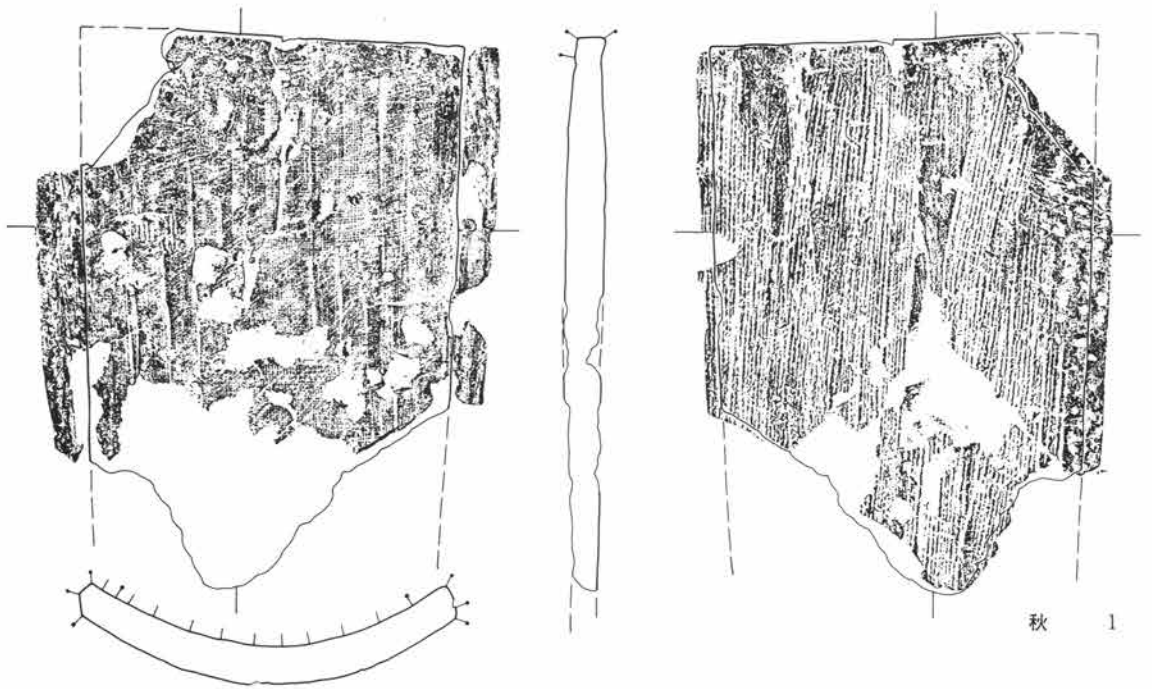
遺構名称	A区第166号住居跡		位置	30~32-A-28~29グリッド内。		残存深度	約34cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.20m×3.34m	構築基準辺	不明壁	主軸方位	北-88度-南位か
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	小単位の造床を行ない平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	調査不手際により詳細不明。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-88度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	全体的に舌状を呈する。		
規模	全長108cm・屋外長 50cm・屋内長 58cm・袖部幅123cm・燃烧部幅 58cm・煙道部幅 24cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。煙道立ち上がり部を瓦で補強。						
袖	左右両袖共しっかりしている。補強材は認められない。						
煙道	仰角40度程で立ち上がる。		掘り方	焚口直下の礫の存在により屋外側のみが舌状。			
遺物出土状態	南東隅部に集中するが、B165住との切り合により傍竈坑の確認は出来なかった。						



第381図 A区第166号住居跡実測図・出土遺物実測図 (1)

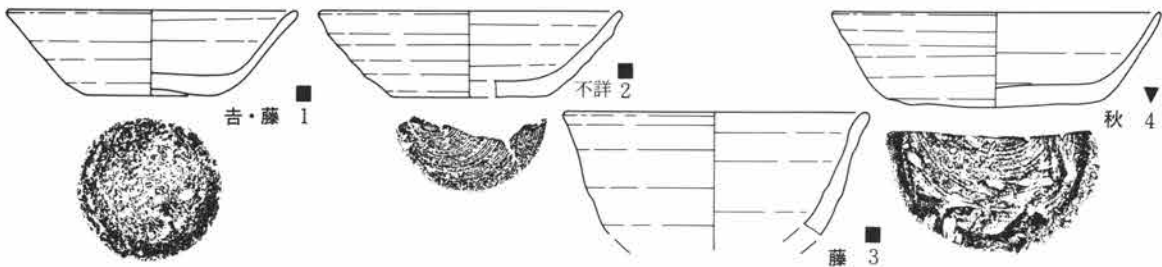


第382図 A区第166号住居跡出土遺物実測図(2)

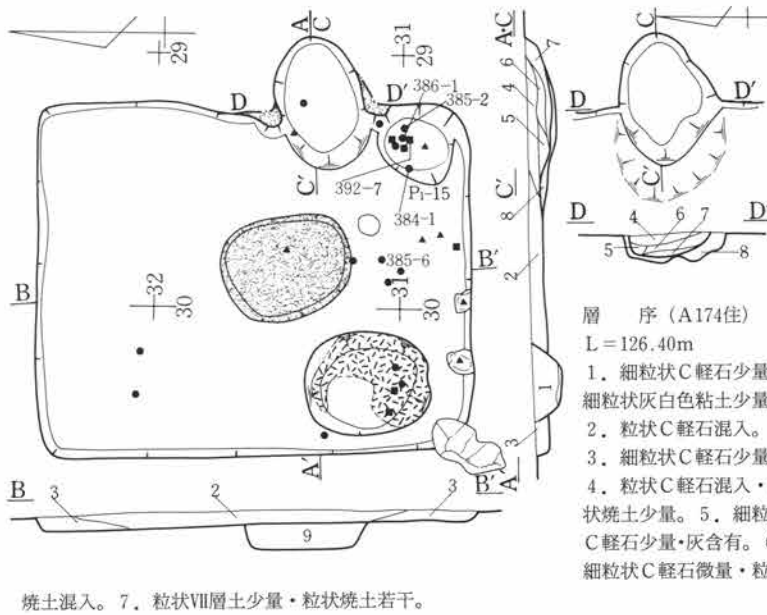


第383図 A区第166号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	A区第174号住居跡		位置	29~31-A-31~33グリッド内。		残存深度	約12cm
平面形態	横長方形。	規模	2.84m×3.50m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-88度-南
壁	詳細不詳。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。62×56cm・深度-15cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	土坑状のP <sub>2</sub> を検出したが、本跡に確実に伴うかは言及しかねる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から60cm。			主軸方位	北-79度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。		形状	楕円形。			
規模	全長106cm・屋外長 56cm・屋内長 50cm・袖部幅112cm・燃焼部幅 70cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。		袖	瘤状で左右共に検出されたが補強材等は未検出。			
煙道	未検出。		掘り方	楕円形の土坑状を呈する。			
遺物出土状態	傍竈坑内で集中しているが土器は1点のみで、瓦類・礫類が多い。						



第384図 A区第174号住居跡出土遺物実測図(1)

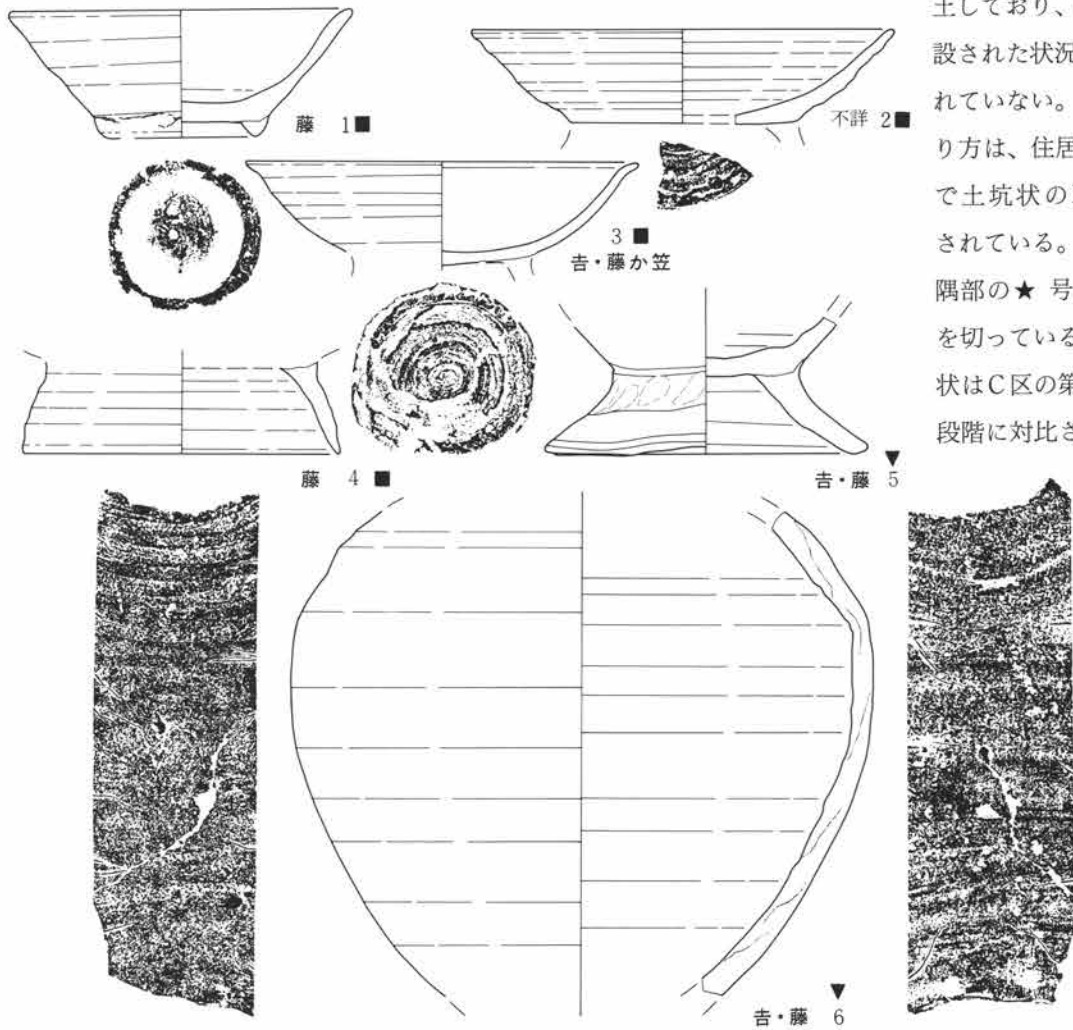


焼土混入。7. 粒状VII層土少量・粒状焼土若干。

A区第174号住居跡 P 331

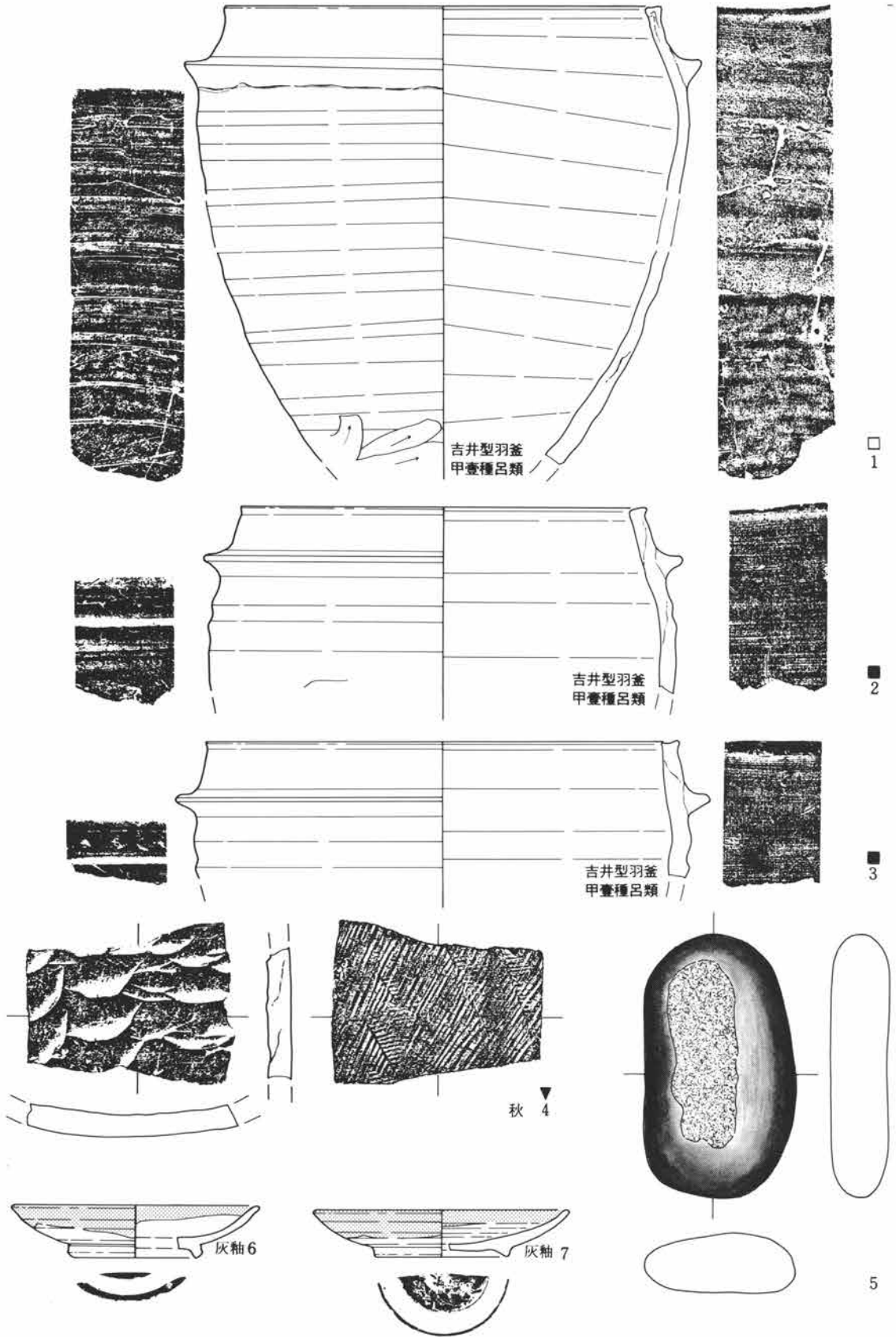
所見 当住居跡は、A176・175・208住を切り構築している。住居は、東壁中央よりやや南東隅部寄りにカマドを備え、南東隅部直下には傍竈坑を具備している。カマドは、楕円形状を呈する比較的大きな規模を有している。袖は、造り出しで小さい瘤状であり、掘り方としてはこの袖部分にしか認められなかった。傍竈坑は、南東隅部の東壁側の直下で、不整形形状を呈している。この傍竈坑内からは、土器・瓦・礫が比較的多く出土しており、特に、埋

設された状況は検証されていない。住居の掘り方は、住居内中央部で土坑状のP<sub>2</sub>が検出されている。尚、南西隅部の★号坑は当跡を切っている。住居形状はC区の第V乃至VI段階に対比される。

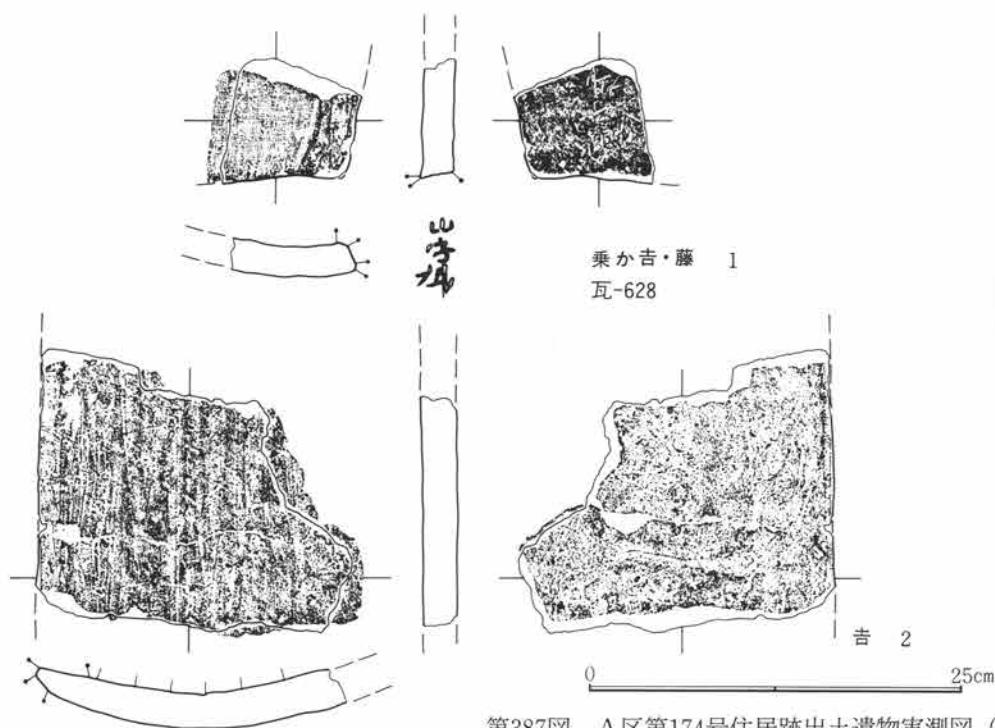


第385図 A区第174号住居跡実測図・住居跡出土遺物実測図(2)

0 2m・10cm

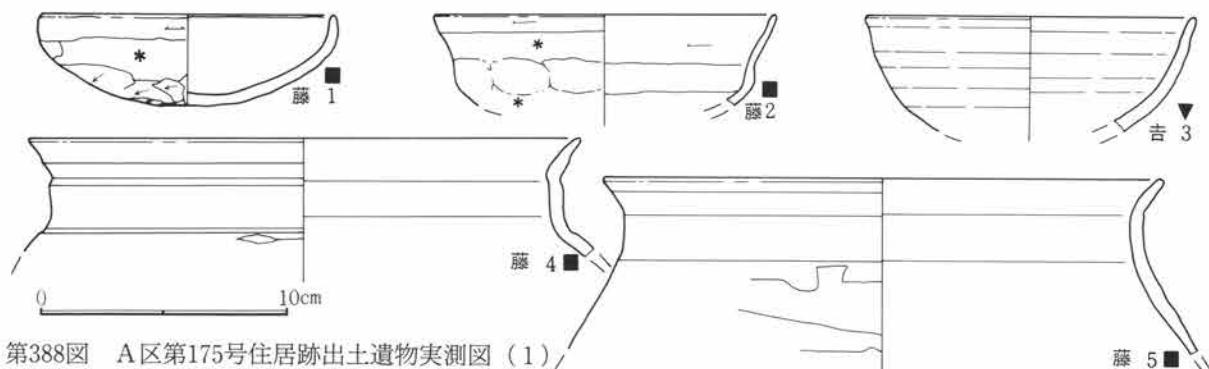


第386図 A区第174号住居跡出土遺物実測図(3)



第387図 A区第174号住居跡出土遺物実測図(4)

遺構名称	A区第175号住居跡		位置	35~37-A-33・34グリッド内。			残存深度	約18cm
平面形態	正方形か。	規模	2.60m×1.96+αm	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-75度-南位か	
壁	詳細不分明。		床面	地山VII層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無しか。							
カマド	位置	東壁。			主軸方位	北-75度-南位か		
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	馬蹄形状。B174住に切られている。			
規模	全長 45+αcm・屋外長 45cm・屋内長 ?cm・袖幅 74+αcm・燃烧部幅 54cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	左袖は断面C-C'で確認したが調査の不幸で失った。						
煙道	未検出。			掘り方	鶏卵状を呈する土坑状。			
遺物出土状態	カマド前面の床面直上層中より土師器が集中して出土している。							

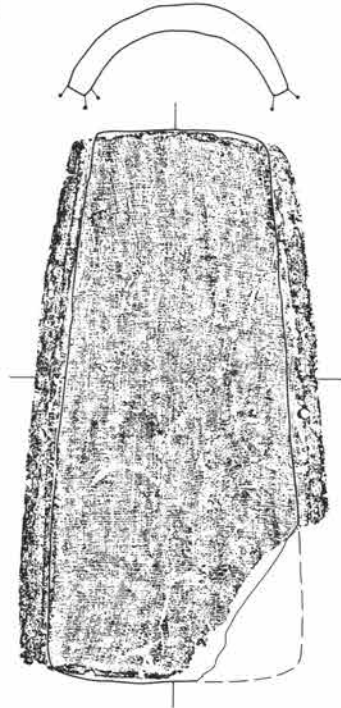
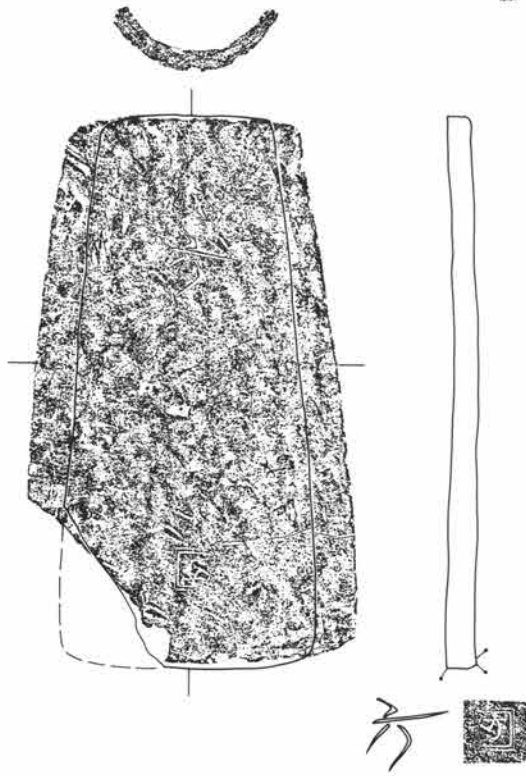
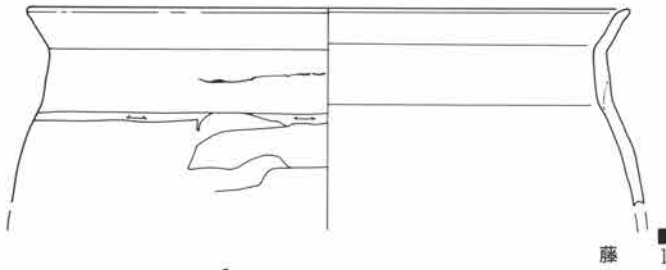
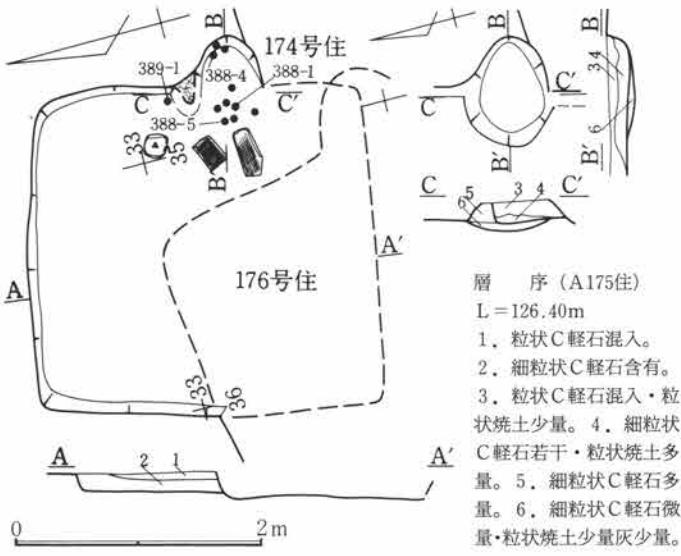


第388図 A区第175号住居跡出土遺物実測図(1)



第3節 検出された住居跡について

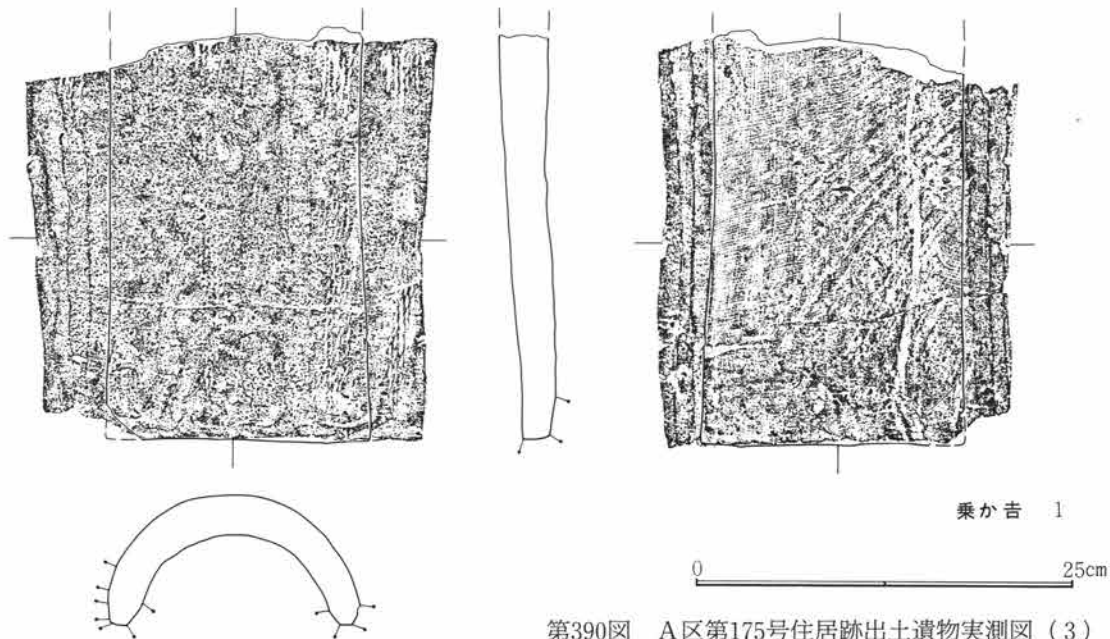
所見 当住居跡は、A176・208住を切り構築し、前述のA174住に南側3分の1程を切られている。住居は、東壁中央にカマドを備える住居である。南東隅部は、A174住の破壊で失なわれている為、傍竈坑の存否は確認出来なかった。カマドは、右袖側がA174住の破壊により失なわれている。左袖は窟状で造り出されている。燃焼部の幅は広く、壁は、補強材により補強された可能性がある。カマドの掘り方は、鶏卵状の楕円形を呈する土坑状になっている。出土遺物では、カマド前面より、男瓦2点が床面から遊離した状態で出土し、全体的にカマド部周辺に集中する。住居形状は、C区の第IV乃至V段階に対比される。



吉・藤 3  
瓦-629  
瓦-630

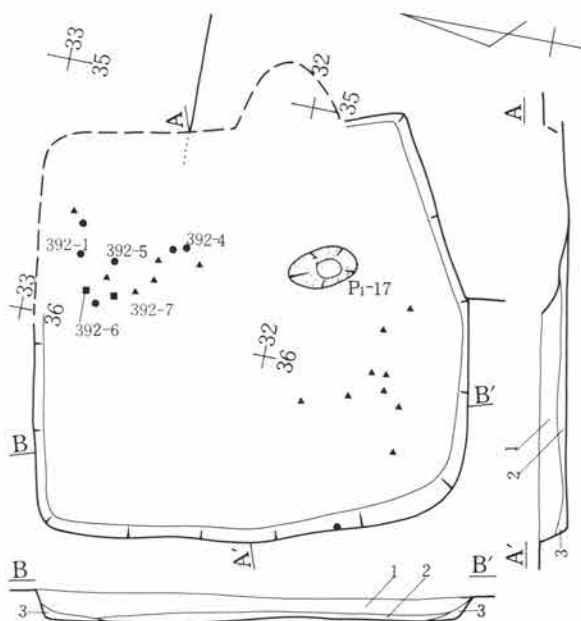
第389図 A区第175号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)





第390図 A区第175号住居跡出土遺物実測図(3)

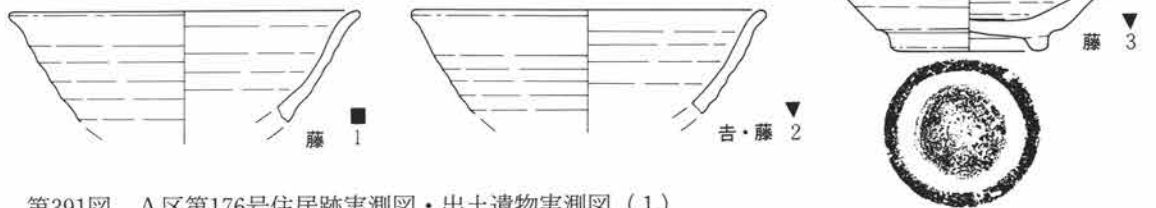
遺構名称	A区第176号住居跡		位置	35~37-A-32・33グリッド内。		残存深度	約28cm
平面形態	正方形基調。	規模	3.20m×3.54m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-78度-南位か。
B174号住の破壊により詳細不明。							



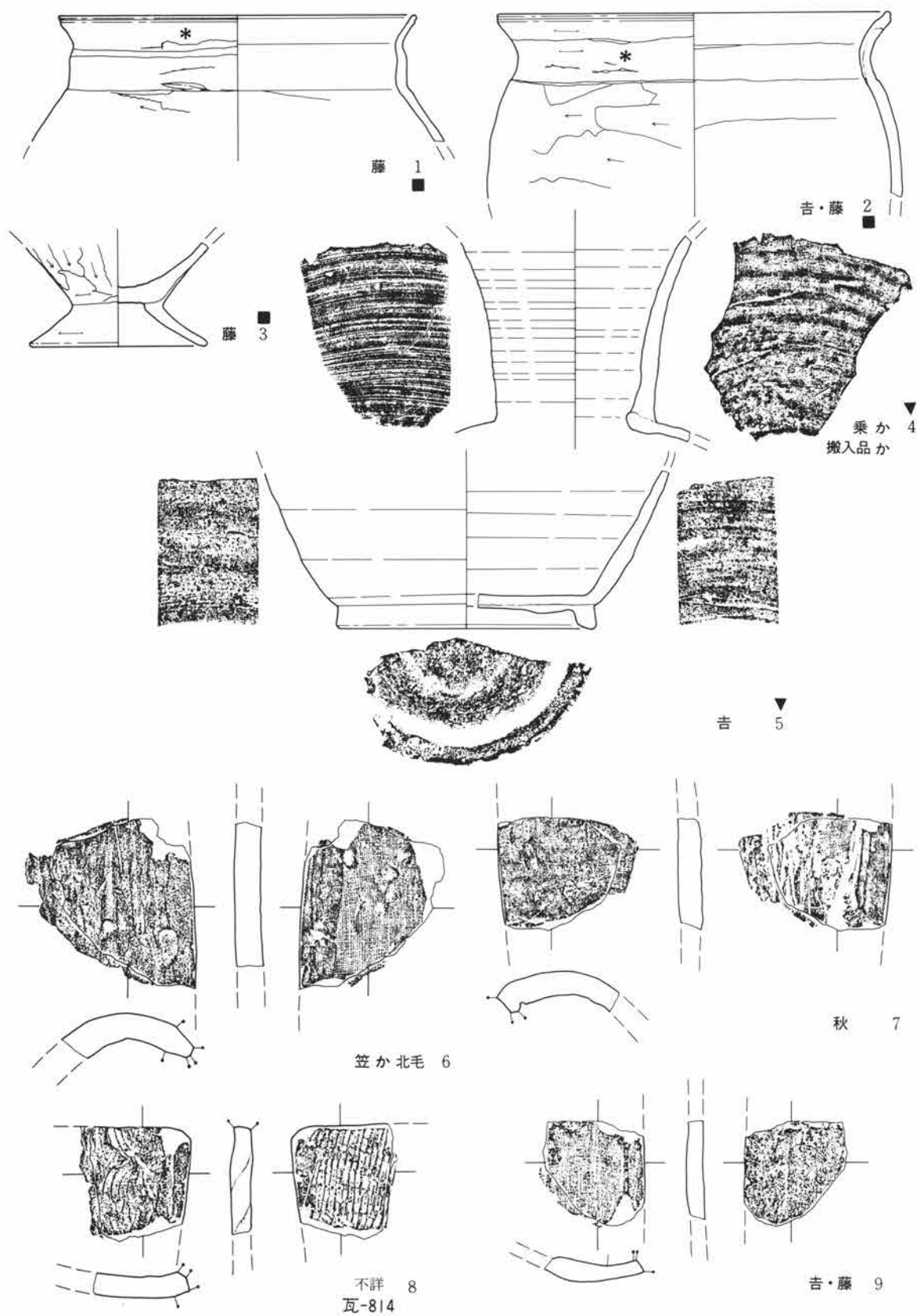
所見 当住居跡は、前述のA175・174住に切られ東側半分を失っており、カマドの痕跡も認められなかった。この為、住居跡に就いての詳細な状況は殆ど不明である。住居は、A175住が北東隅部を破壊し、A174住は東壁側を破壊しているものの、当住居跡の南東隅部は検出出来た。この両者の破壊する部分の中央部には、当住居のカマド付設位置に推定出来る。そして、同部にカマド位置とすれば、カマドは東壁中央部程の位置と判断される。南東隅部では傍竈坑は確認出来なかった。出土遺物では、覆土全体に礫の出土が多い。土器・瓦等は、この礫に混ざる状態で出土している。住居形状は切り合い関係・遺物から、C区の第IV乃至V段階と推定される。

層序 (A176住) L=126.40m

1. 粒状C軽石混入。2. 細粒状C軽石含有。3. 微粒状C軽石若干。



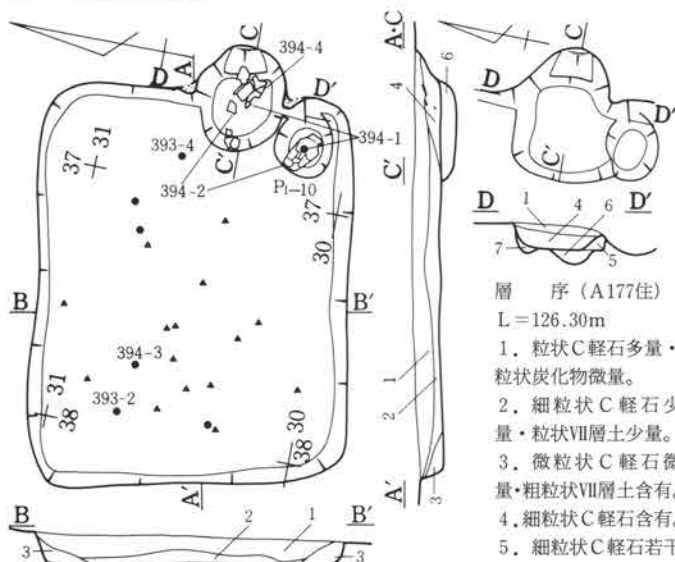
第391図 A区第176号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第392図 A区第176号住居跡出土遺物実測図(2)

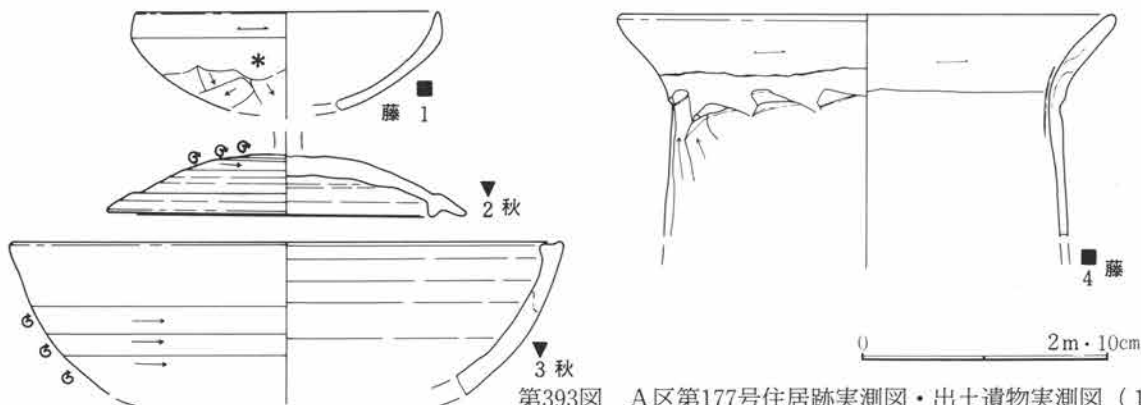
0 1 ~ 5 10cm 6 ~ 9 25cm

遺構名称	A区第177号住居跡		位置	30~32-A-37~39グリッド内。		残存深度	約26cm
平面形態	縦長方形。	規模	3.16m×2.56m	構築基準辺	南乃至北壁	主軸方位	北-78度-南位か。
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。54×47cm・深度-10cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から30cm。			主軸方位	北-78度-南	
改築	有。掘り方内より焼土を検出。			形状	箱状の燃焼部に煙道が付設される。		
規模	全長 82cm・屋外長 38cm・屋内長 44cm・袖部幅108cm・燃焼部幅 70cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	微少の瘤状であるが、調査の不手際の可能性も強い。					
煙道	仰角32度程で立ち上がる。			掘り方	燃焼部は隅丸土坑状を呈する。		
遺物出土状態	床面直上層及び覆土内からの礫の出土が多い。						

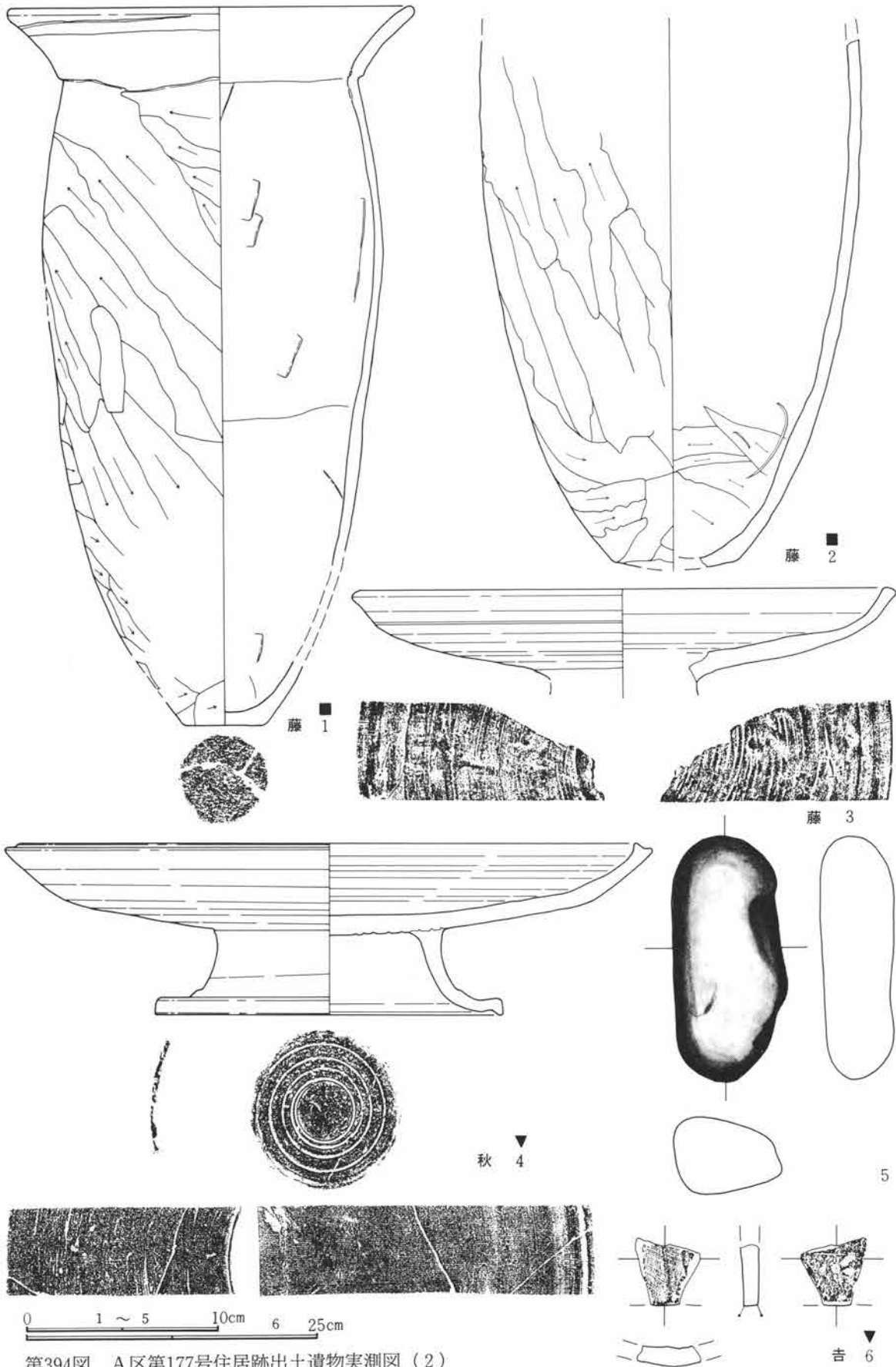


- 層序 (A177住)  
L=126.30m
1. 粒状C軽石多量・粒状炭化物微量。
  2. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。
  3. 微粒状C軽石微量・粗粒状VII層土含有。
  4. 細粒状C軽石含有。
  5. 細粒状C軽石若干(粘質土)。
  6. 細粒状C軽石若干・塊状IV層土多量。
  7. 細粒状C軽石若干・粒状粘土多量。

C軽石若干・塊状IV層土多量。7. 細粒状C軽石若干・粒状粘土多量。  
 では、第394図-2がカマド燃焼部で出土し、同図-4の脚付盤が共伴している。住居形状は、カマドの特徴から、C区の第III段階に対比されるが、住居の主軸からは、第II段階に対比される。



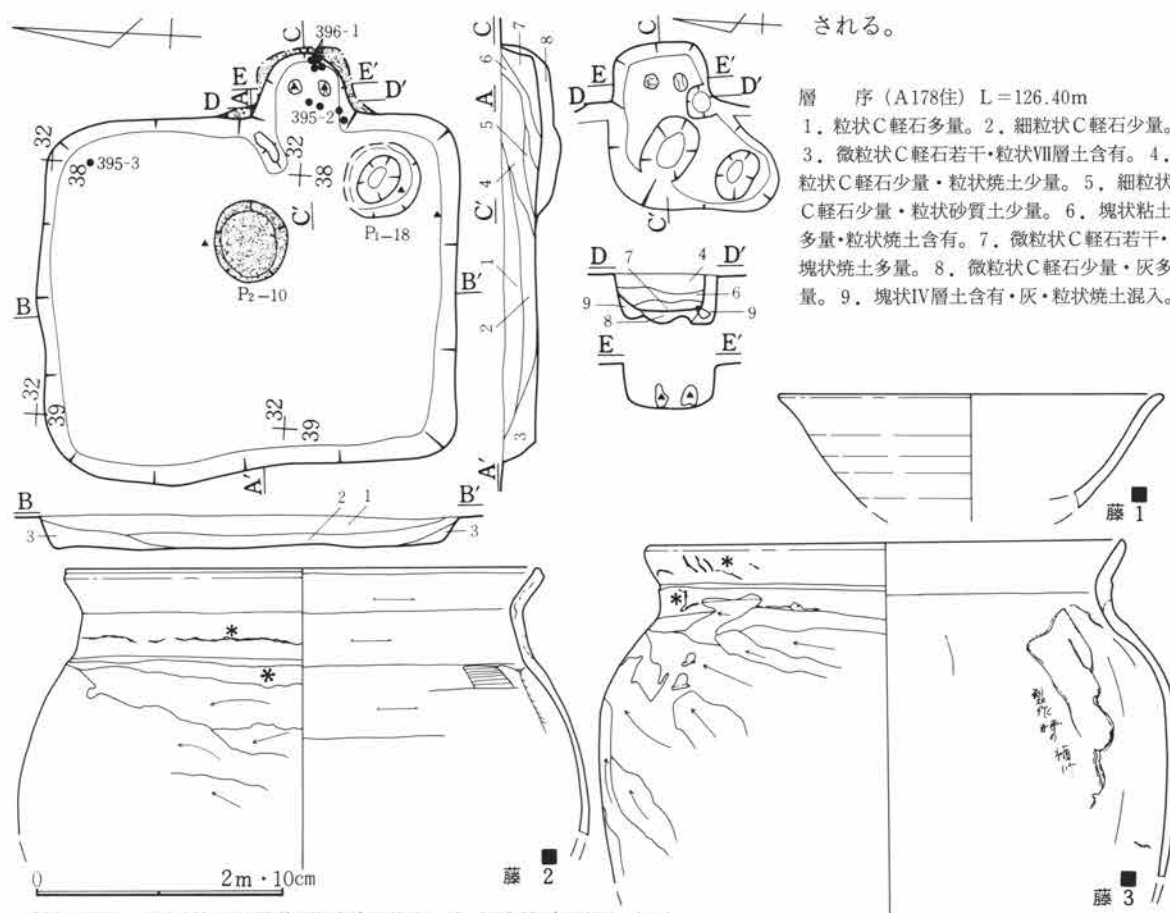
第393図 A区第177号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



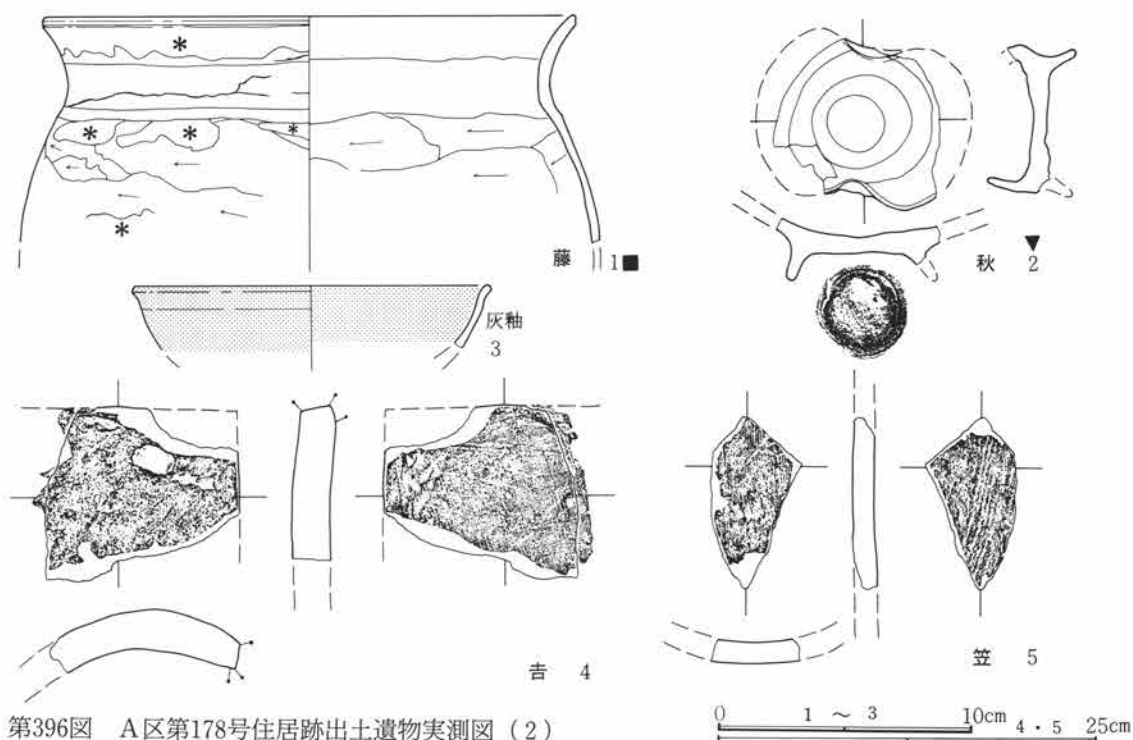
第394図 A区第177号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	A区第178号住居跡		位置	38~40-A-32~34グリッド内。		残存深度	約28cm
平面形態	矩形。	規模	2.90m×3.39m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-86度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・円形か。径60cmか・深度-18cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	P <sub>2</sub> の小円形で土坑状の掘り込みが認められる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から65cm。			主軸方位	北-84度-南	
改築	有。掘り方内から焼土・灰を検出している。		形状	隅丸長方形の燃焼部で具備する。			
規模	全長 98cm・屋外長 51cm・屋内長 47cm・袖部幅104cm・燃焼部幅 72cm。						
焚口・燃焼部	扇状を呈する焚口部は、燃焼空間と重複する部分が著しく、燃焼部先端側に器設部分が考えられる。支脚が2具出土している。						
	袖	左袖のみ検出。長く屋内側に向い突出する。					
煙道	未検出。		掘り方	隅丸長方形の土坑状の掘り込み。			
遺物出土状態	全体に遺物は少ない。						

所見 当住居跡は、切り合い関係のない単独住居である。住居は、東壁中央部より若干南東隅部に寄った位置にカマドを備え、南東隅部の直下よりやや内側から傍竈坑が検出されている。カマドは、左袖はやや長く焚口側に向い屈曲した状態で検出されている。燃焼部は、長方形を呈し幅が広く、奥壁寄りには、地山礫を用いた支脚が双設されている。傍竈坑は、二重の状態になっている。住居形状は、C区の第Ⅴ段階に対比



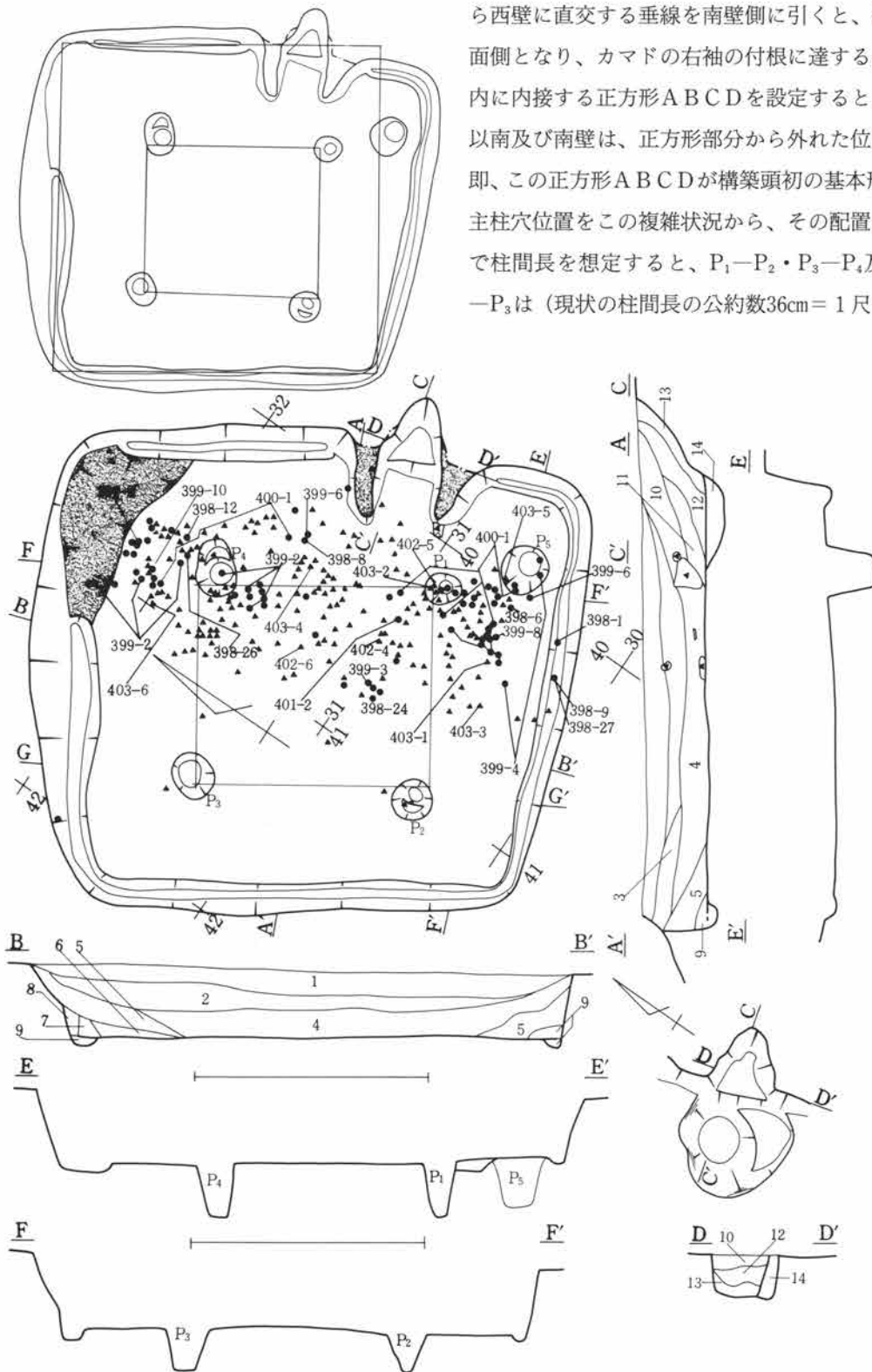
第395図 A区第178号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)



第396図 A区第178号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	A区第179号住居跡		位置	40~42-A-30~33グリッド内。		残存深度	約62cm
平面形態	正方形基調。	規模	5.00m×4.40m	構築基準辺	西南壁	主軸方位	北-57度-南
壁	ほぼ垂直~斜気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し南壁寄りが浅く澄んだ状態。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>5</sub> ・円形。径45cm・深度-46cm			
柱穴	P <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の支柱穴4本を検出。						
掘り方	北東隅部で若干認められた程度である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から97cm。			主軸方位	北-( <sup>67</sup> / <sub>57</sub> )度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。		形状	長い袖を具備する舌状を呈する。			
規模	全長120cm・屋外長 50cm・屋内長 70cm・袖部幅148cm・燃烧部幅 60cm・煙道部幅 40cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	屋内側で長く造り出されている。					
煙道	仰角50度程で立ち上がる。		掘り方	烧燃部直下で掘り込みが認められたのみ。			
遺物出土状態	住居内の東側半分側で、覆土内より多量の礫及び礫に混在する状態で土器が出土。						

所見 当住居跡は、北西隅部周辺がA1溝により切られている。住居は、東壁中央部よりやや南東隅部寄りにカマドを備えている。そして、この東壁は、カマド付設位置を境にして、南側は屈曲した状態となっており、この屈曲した東壁南半部と南壁は、ほぼ直行了した状態となっている。カマドは、この屈曲した東壁南半部に主軸方向を合わせる状態で付設されている。左右の両袖は造り出しにより長く屋内側に突出した状態となっている。燃烧部は幅が広く、造り出された袖部の内側にあたっている。煙道は、東壁の内側から立ち上がっている。支柱穴は4本(P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>)検出されており、上述の南壁等歪みにより、柱穴の配置も歪んだ状態となっている。柱間は、A161住と同様で主軸の直交軸側が長い。住居が、カマド位置以南側が屈曲する状態は、住居の構築段階での所産ではあるが、頭初の設計は、第397図の上端に示した状態で、西壁の南西隅部が



ら西壁に直交する垂線を南壁側に引くと、傍竈坑は線の外面側となり、カマドの右袖の付根に達する。そして、住居内に内接する正方形A B C Dを設定すると、東壁のカマド以南及び南壁は、正方形部分から外れた位置関係となる。即、この正方形A B C Dが構築頭初の基本形状となる。又、支柱穴位置をこの複雑状況から、その配置を基本設計位置で柱間長を想定すると、 $P_1-P_2 \cdot P_3-P_4$ 及び $P_1-P_4 \cdot P_2-P_3$ は(現状の柱間長の公約数 $36\text{cm} = 1\text{尺}$ で換算)5尺と

6尺となる。この柱間長及び基本設計時の柱穴設定位置を含め第397図中に示した。そして、住居の基本設計時における住居の一辺長は、概、 $3.6\text{m}$ 程であり、公約数の10単位で10尺と推定される。住居の形状は主軸方向・支柱穴の存在等からC区の第I段階に対比される。

層 序 (A179住) L=126.40m

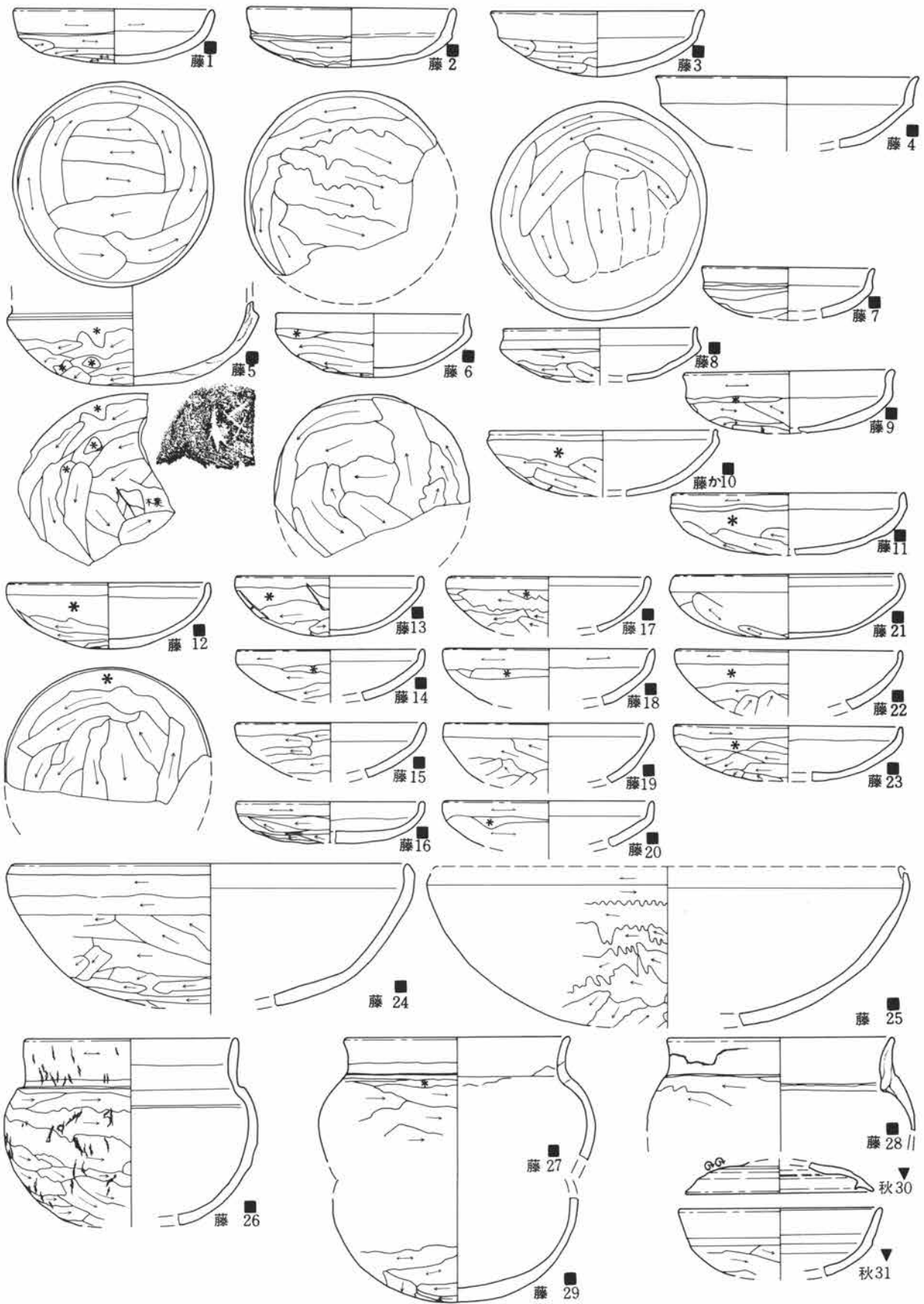
1. 粗・細粒状C軽石多量。
2. 粒状C軽石混入・粒状多量。
3. 粗粒状C軽石多量。粒状VII層土多量。
4. 粒状C軽石混入・粗粒状VII層土多量。
5. 粒状C軽石混入・塊状IV層土多量。
6. 粒状C軽石少量・粗粒状VII層土多量。
7. 微粒状C軽石微量。
8. 塊状VII層土。
9. 細粒状C軽石若干・塊状VII層土多量。
10. 細粒状C軽石少量・粒状焼土少量。
11. 粒状焼土少量・被熱塊状VII層土。
12. 細粒状C軽石若干・塊状焼土混入灰含有。
13. 微粒状C軽石若干・粒状焼土多量・灰含有。
14. 微粒状C軽石微量・粒状焼土微量。

第397図 A区第179号住居跡実測図・構築経過図 (1:80)

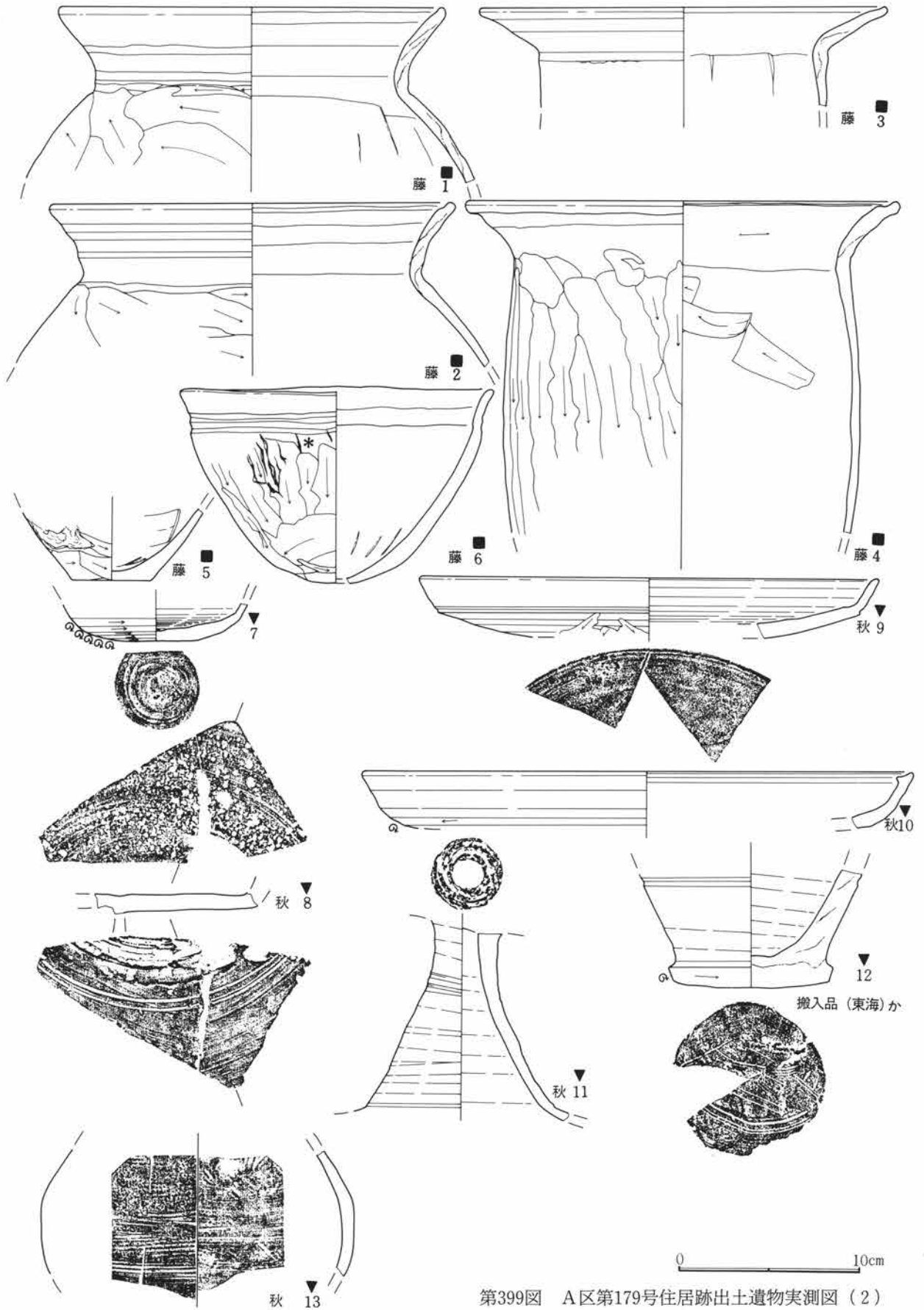
0 2m



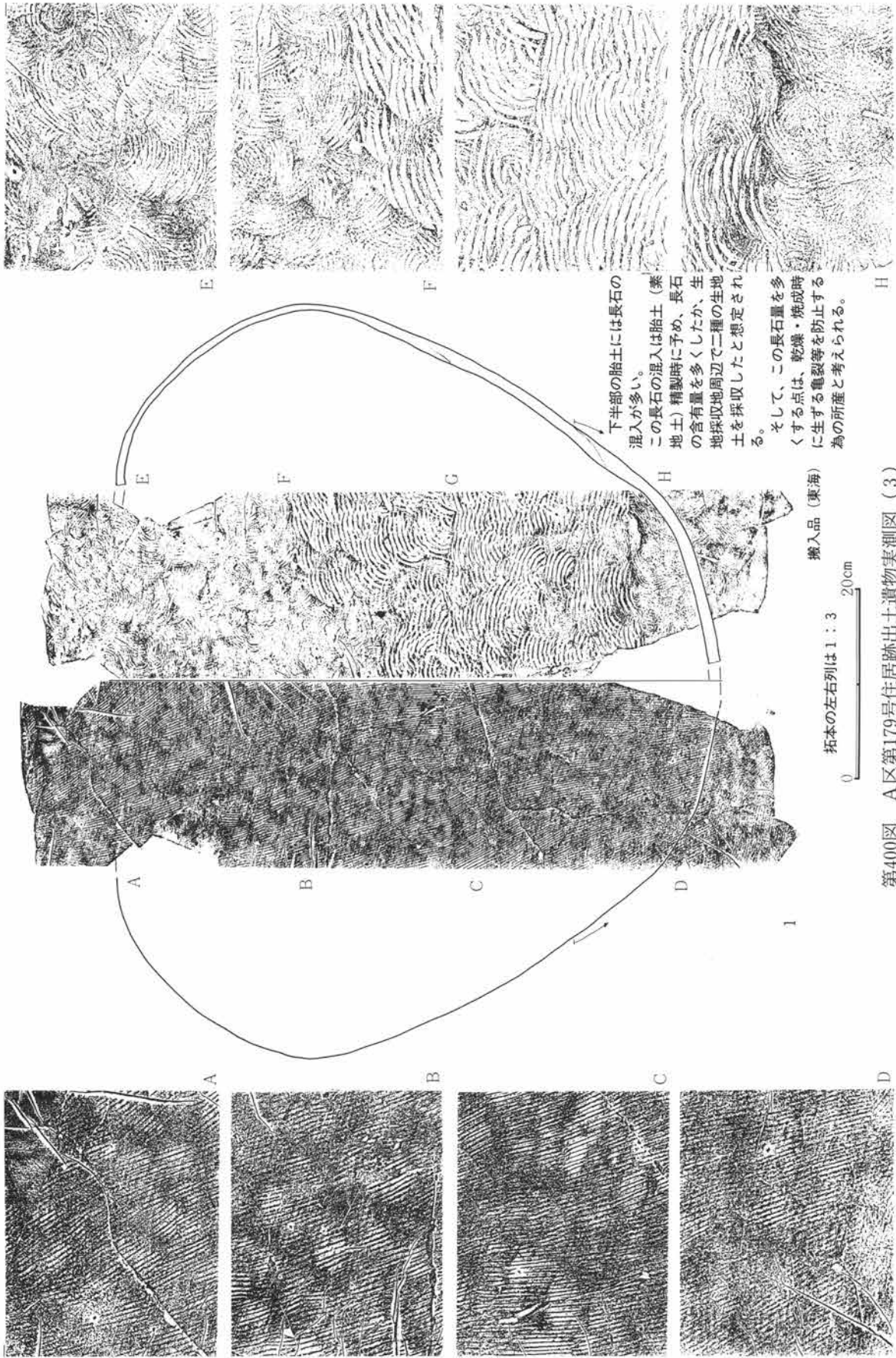
第3節 検出された住居跡について



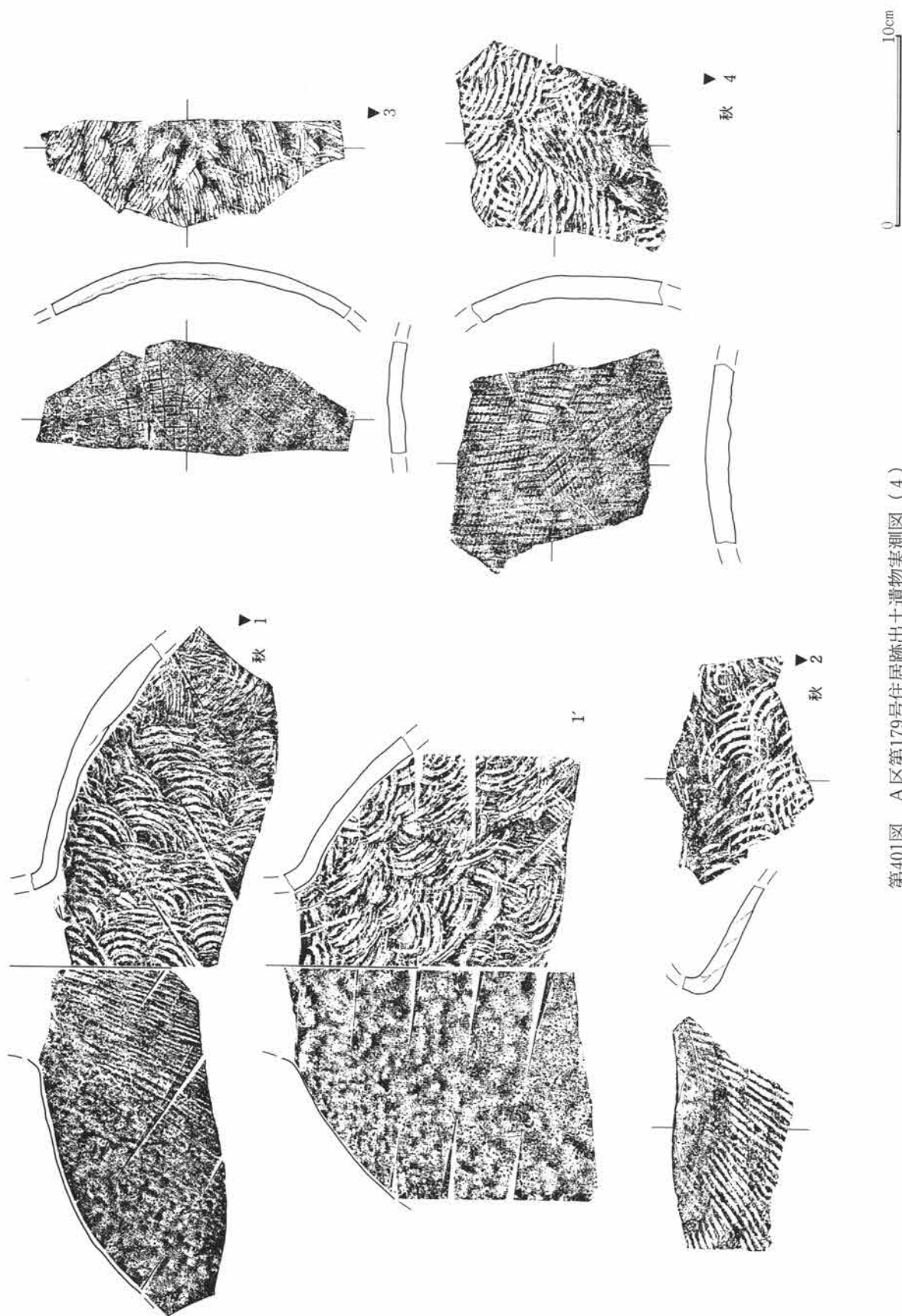
第398図 A区第179号住居跡出土遺物実測図(1)



第399図 A区第179号住居跡出土遺物実測図(2)

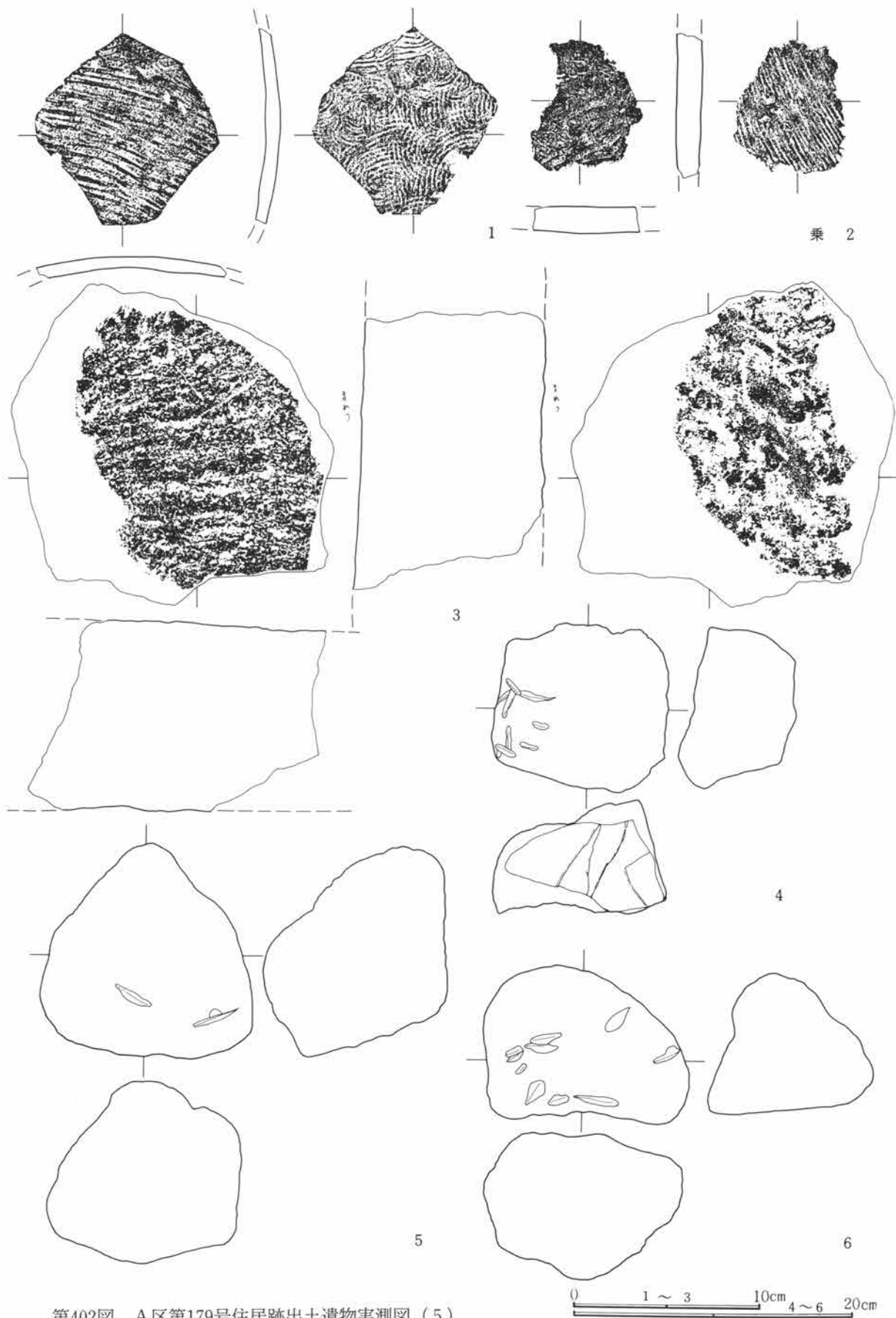


第400図 A区第179号住居跡出土遺物実測図（3）

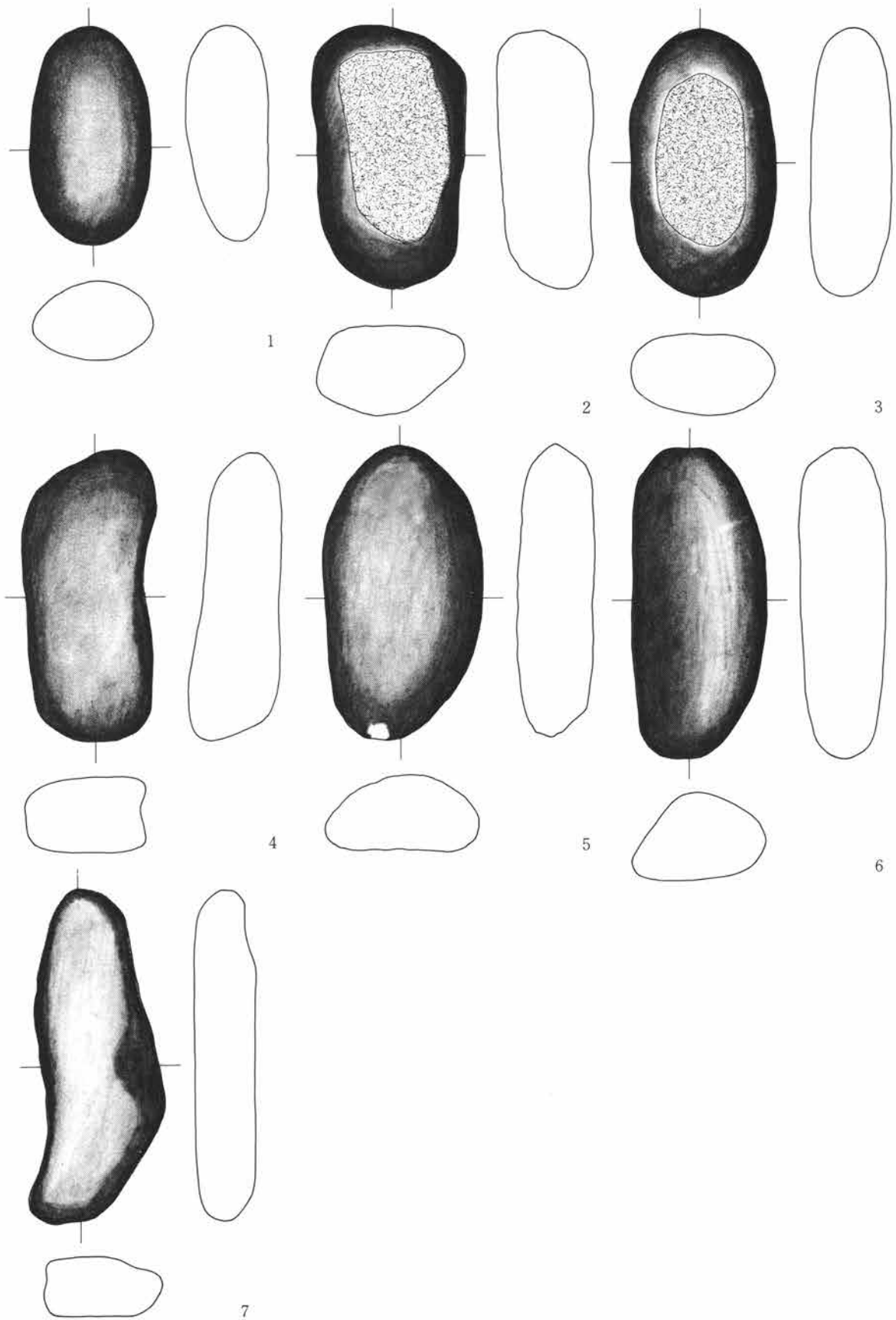


第401図 A区第179号住居跡出土遺物実測図(4)

第3節 検出された住居跡について



第402図 A区第179号住居跡出土遺物実測図(5)

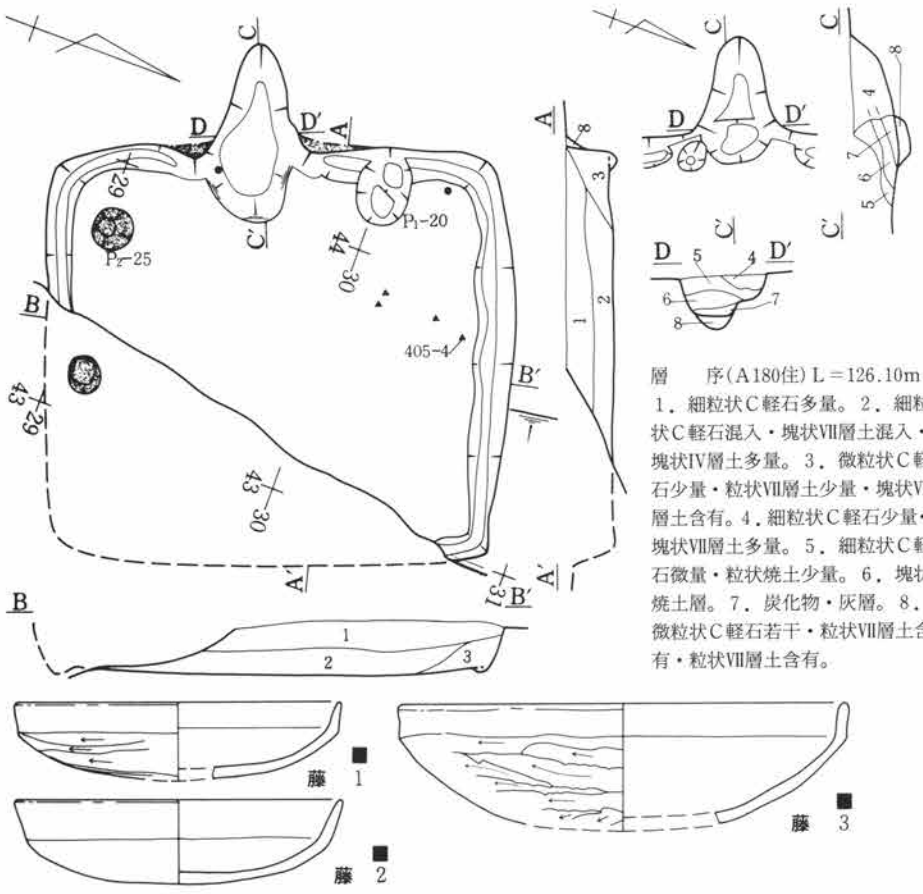


0 10cm

第403図 A区第179号住居跡出土遺物実測図(6)

遺構名称	A区第180号住居跡		位置	43~45-A-29~31グリッド内。		残存深度	約54cm
平面形態	矩形。	規模	3.20m×3.80m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-250度-南位か。
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> か。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	部分的に窪みが認められた程度。						
カマド	位置	西壁、住居南西隅部から130cm。			主軸方位	北-254度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長139cm・屋外長 75cm・屋内長 74cm・袖部幅118cm・燃烧部幅 60cm・煙道部幅 36cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	瘤状で屋内側に突出する。補強材等は認められなかった。					
煙道	屋外にやや長く突出する。			掘り方	燃烧部直下・左袖直下に認められた。		
遺物出土状態	出土遺物は殆どなく、礫が若干出土した程度である。						

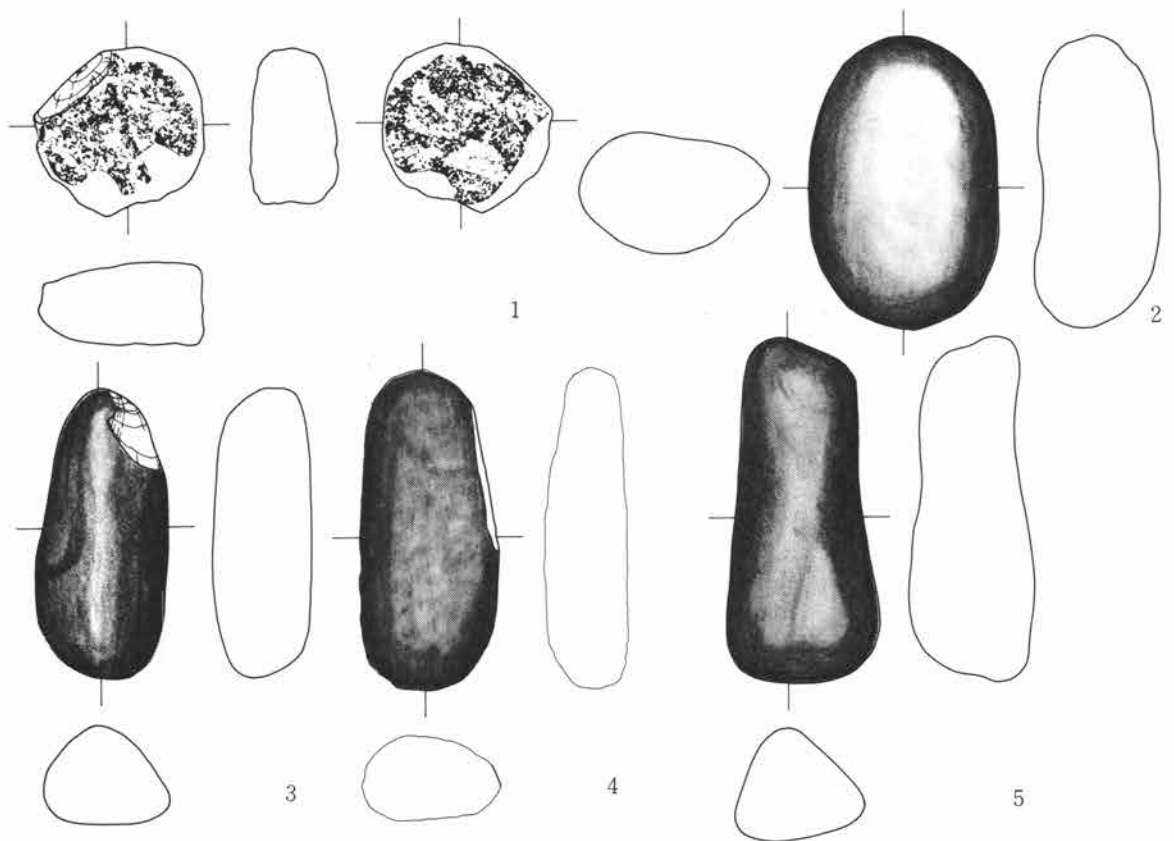
所見 当住居跡は、A198住と重複するが、発掘調査段階では、両者間の新旧関係は確認出来なかった。そして、東側半分程はA1溝に切られ破壊されている。住居は、西壁中央よりやや南西隅部寄りにカマドを備えている。カマドは、微小な瘤状の袖を左右に備えている。燃烧部は袖部でやや広く、奥壁に向かい緩やかに立ち上がっており、燃烧部の奥壁自体は煙道の立ち上がりと考えられる。そして、同部は屋外に突出した状態となっている。



カマド掘り方では左袖部直下から補強材の据え方が検出されており、この状況からカマドは改築された可能性が高い。傍竈坑として具体的な施設は判然としないが、カマド周辺ではP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が検出されており、この両者の一方がその機能が付加されていることも想起される。住居形状は、西カマドと特殊な状況であるが、主軸方位からC区第II段階に対比される。

第404図 A区第180号住居跡実測図・出土遺物実測図

0 10cm



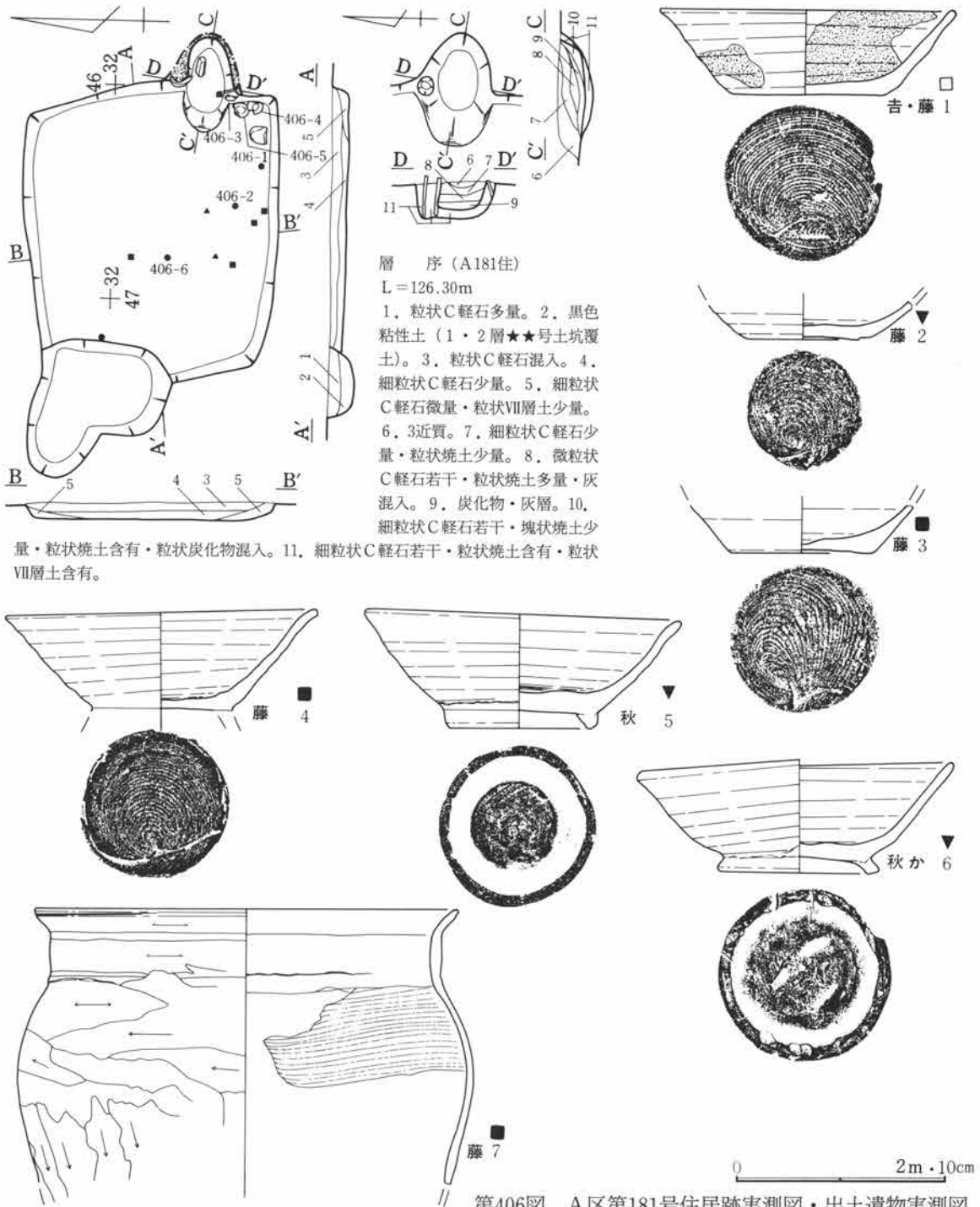
第405図 A区第180号住居跡出土遺物実測図(2)

0 10cm

遺構名称	A区第181号住居跡		位置	46~48-A-32・31グリッド内。		残存深度	約15cm
平面形態	矩形。	規模	2.80m×2.50m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-89度-南
壁	ほぼ垂直～斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VI・VII層土を主として使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	部分的に(カマド前面)土坑状?の掘り込みが認められているが、図化されなかった。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から34cm。			主軸方位	北-88度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	長楕円形状。		
規模	全長 87cm・屋外長 46cm・屋内長 41cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 42cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。支脚を検出。						
	袖	瘤状。両袖の基部は瓦で補強されている。					
煙道	未検出。			掘り方	鶏卵状を呈する。		
遺物出土状態	覆土内での出土がやや多い。南東隅部(カマド右袖寄り)で遺存の良好な坏2点が出土。						

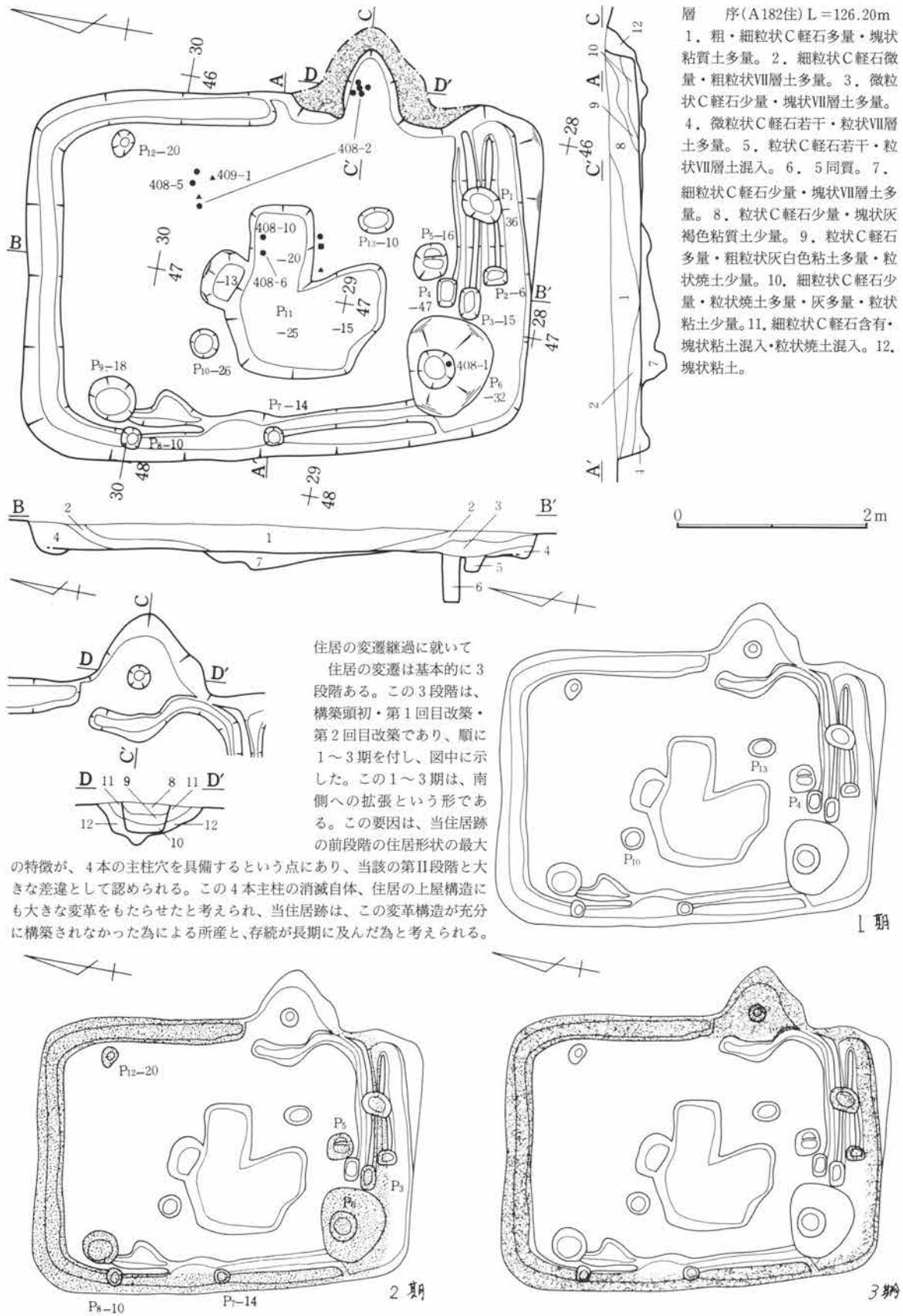
所見 当住居跡は、A199住を切り構築している。住居は縦長方形を呈し、東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置にカマドを備えている。南東隅部には傍竈坑が無いものの、遺物が集中する傾向があった。カマドは、左右袖部が燃烧部の一部になっており、突出する状態のものではなく、瓦を用いて補強材としている。形状は全体的に縦長の楕円形状を呈している。燃烧部幅はやや広いが、袖の機能も付加されていることによるものとも思われる。住居形状はC区の第VI段階に対比される。





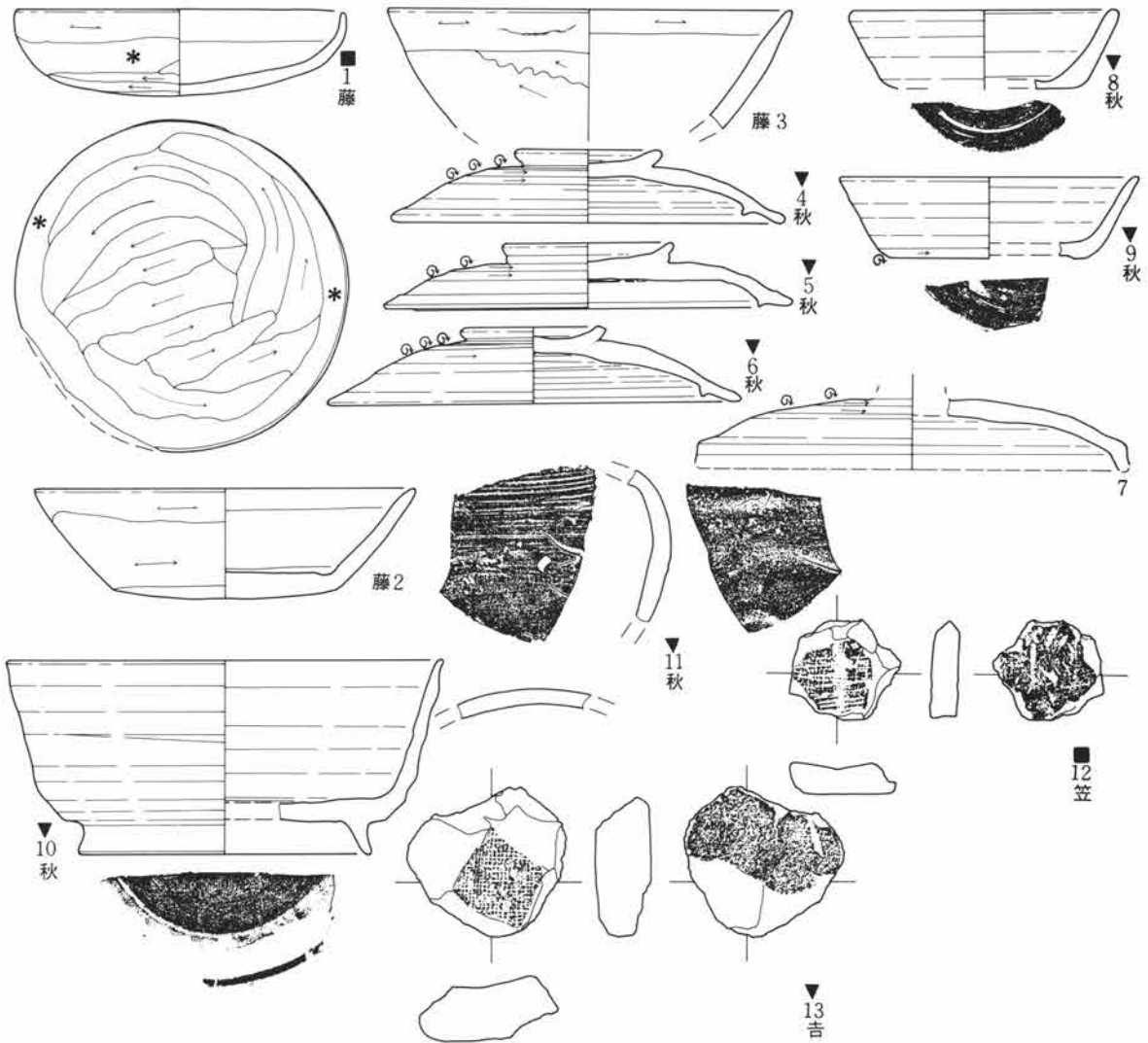
第406図 A区第181号住居跡実測図・出土遺物実測図

所見 当住居跡は切り合い関係のない単独住居跡である。住居は、東壁中央部から南東隅部に偏在した位置にカマドを備えている。カマドは、非常に大きな両袖を備えているが、燃焼部の幅は比較的狭い。傍竈坑は検出されていない。柱穴は5本検出され、入口施設に伴なうと想定される柱穴は4本検出されており、壁溝は、南壁直下で三重に検出されている。これらの柱穴と壁溝は、住居の立て変えによる所産と考えられ、都合2回の立て変えが考えられる(第407図住居変遷図)。この変遷経過の中で、第2期のP<sub>7</sub>-P<sub>10</sub>-P<sub>12</sub>の柱間には、公約数30cmでの5:5:10の数値が得られる。この公約数30cmは、唐尺・天平尺の1尺に相当するが、推定される住居の時期からは唐尺の使用が考えられる。住居形状は主軸よりC区の第II段階に対比される。



第407図 A区第182号住居跡実測図・住居変遷経過図(1:80)

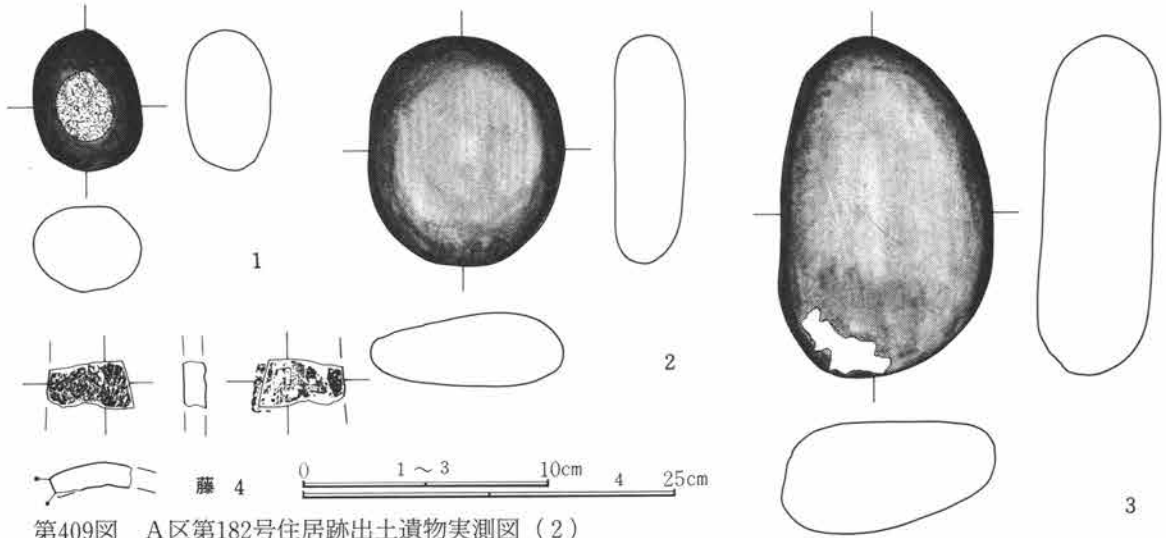
遺構名称	A区第182号住居跡		位置	46~49-A-29~31グリッド内。		残存深度	約26cm
平面形態	横長方形。	規模	3.70m×5.25m	構築基準辺	北壁	主軸方位	北-80度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	平坦。中央部に造床が認められる。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> 等。P <sub>1</sub> は40×30cm・深度-36cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	中央部に長方形土坑状の重複と思わず掘り込が認められる。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。			主軸方位	北-80度-南	
改築	有。掘り方内から焼土等を検出。			形状	舌状。		
規模	全長 82cm・屋外長 50cm・屋内長 32cm・袖部幅210cm・燃烧部幅 55cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	掘り方の範囲が広い点もあり、大きい。		
煙道	未検出。			掘り方	山形状で大きくて広い。		
遺物出土状態	床面直上出土遺物は少ない。同様に覆土内での出土も少なかった。						



第408図 A区第182号住居跡出土遺物実測図(1)

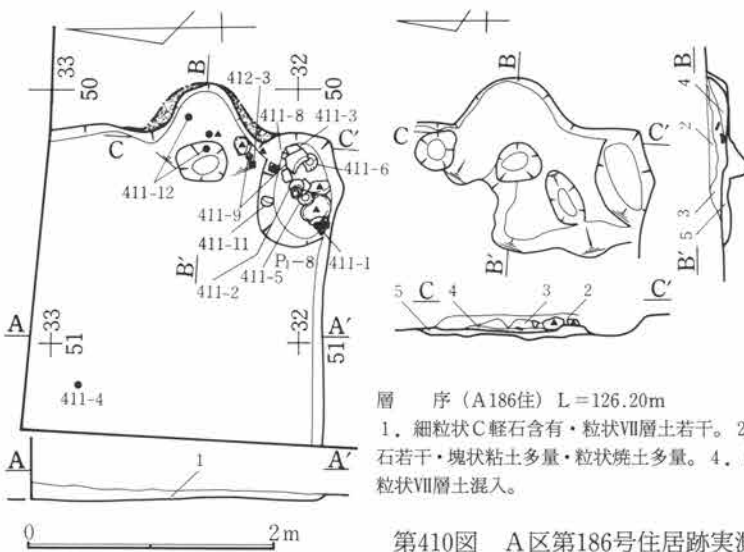
10cm

第4章 検出された遺構・遺物



第409図 A区第182号住居跡出土遺物実測図(2)

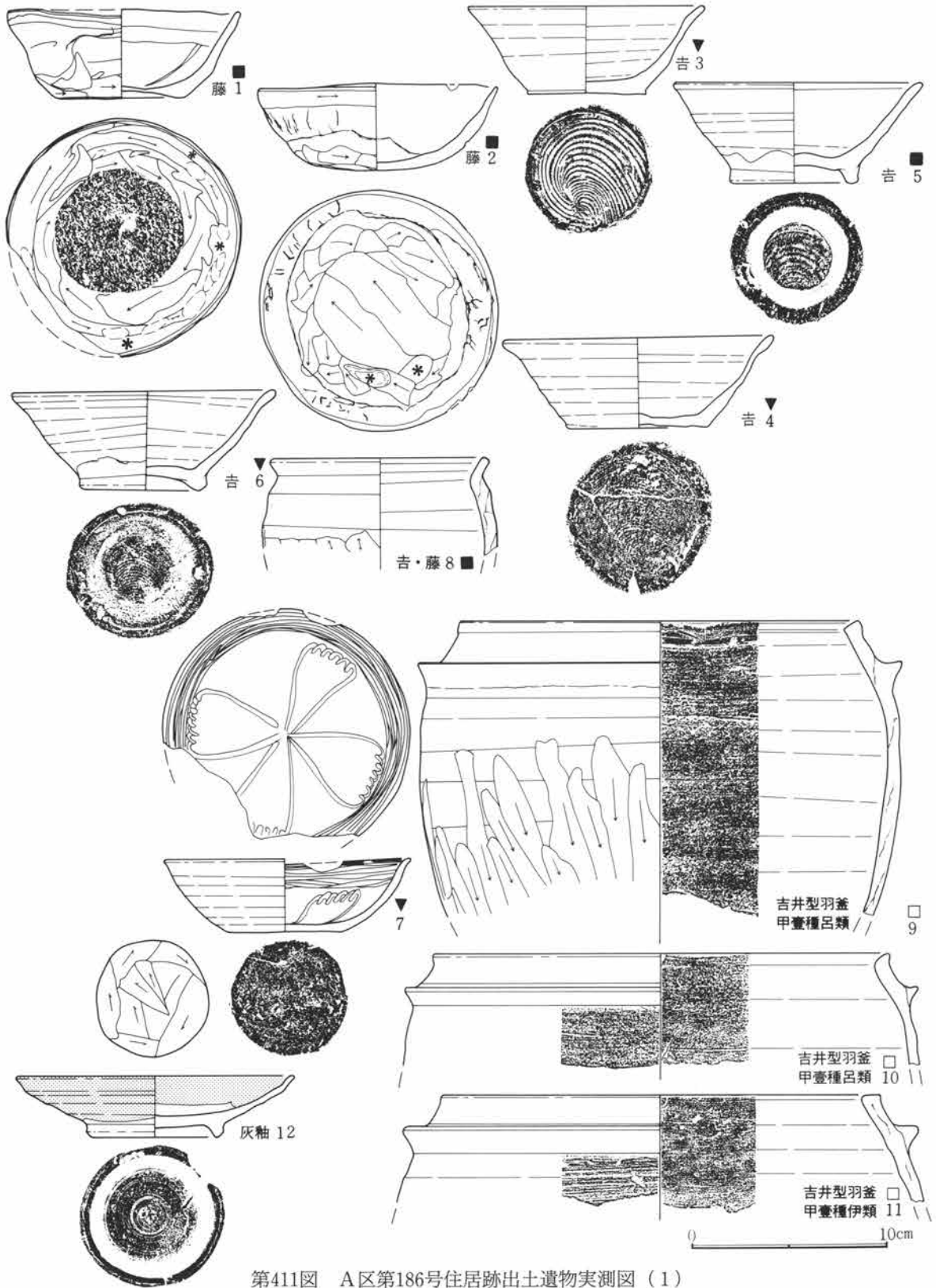
遺構名称	A区第186号住居跡		位置	50~52-A-32~33グリッド内。		残存深度	約14cm	
平面形態	不明。	規模	2.46+ $\alpha$ m×2.45+ $\alpha$ m		構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-90度-南位か。
壁	詳細不明。		床面	地山V・VI層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形。90×70cm・深度-8cm				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	部分的に浅い掘り込みが認められた。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-90度-南		
改築	有。掘り方内で焼土を検出。			形状	山形(短かい舌状)を呈する。			
規模	全長 76cm・屋外長 43cm・屋内長 33cm・袖部幅125cm・燃烧部幅 62cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	左袖は瘤状であるが、右袖は傍竈坑の壁と共有する状態。						
煙道	未検出。		掘り方	南東隅部を含め不整形の掘り込みである。				
遺物出土状態	傍竈坑内に土器類を主体としてやや多く出土している。							



第410図 A区第186号住居跡実測図

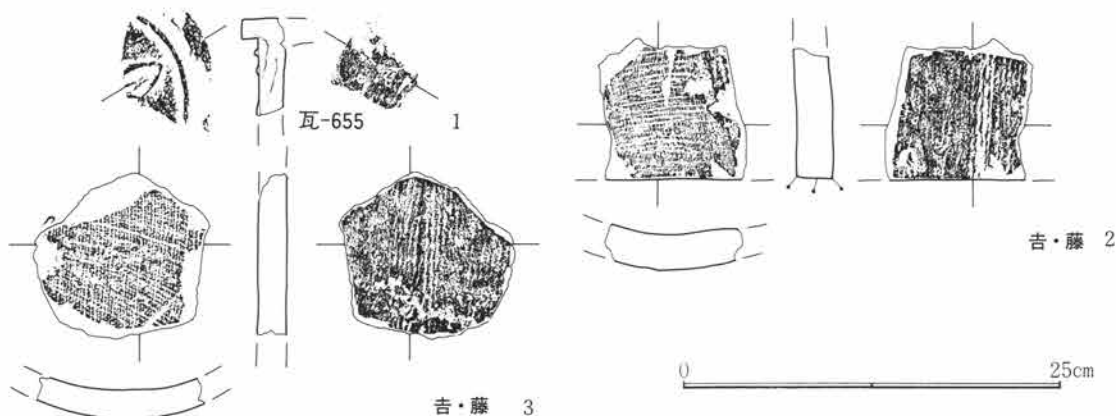
所見 当住居跡は調査区内の西端で、鍵の手状になる調査区にあっており、住居跡の北壁側・西壁側は調査区内になり、諸般の事情により部分の拡張調査は実施しなかった。この為、一部詳細不明な部分がある。住居は、東壁の南東隅部に偏在した位置にカマドを備えている。南

東隅部直下には傍竈坑を備えている。カマドは、全体に遺存が不良な為、詳細に就いて言及しかねるが、総じて燃烧部幅がやや広目である。袖に就いては不分明な点がある。傍竈坑は楕円形を呈し規模は大きく、多量の遺物が出土している。住居形状は、全体が判然としない点があるが、C区の第VI段階に対比される。



第411図 A区第186号住居跡出土遺物実測図(1)

第4章 検出された遺構・遺物



第412図 A区第186号住居跡出土遺物実測図(2)

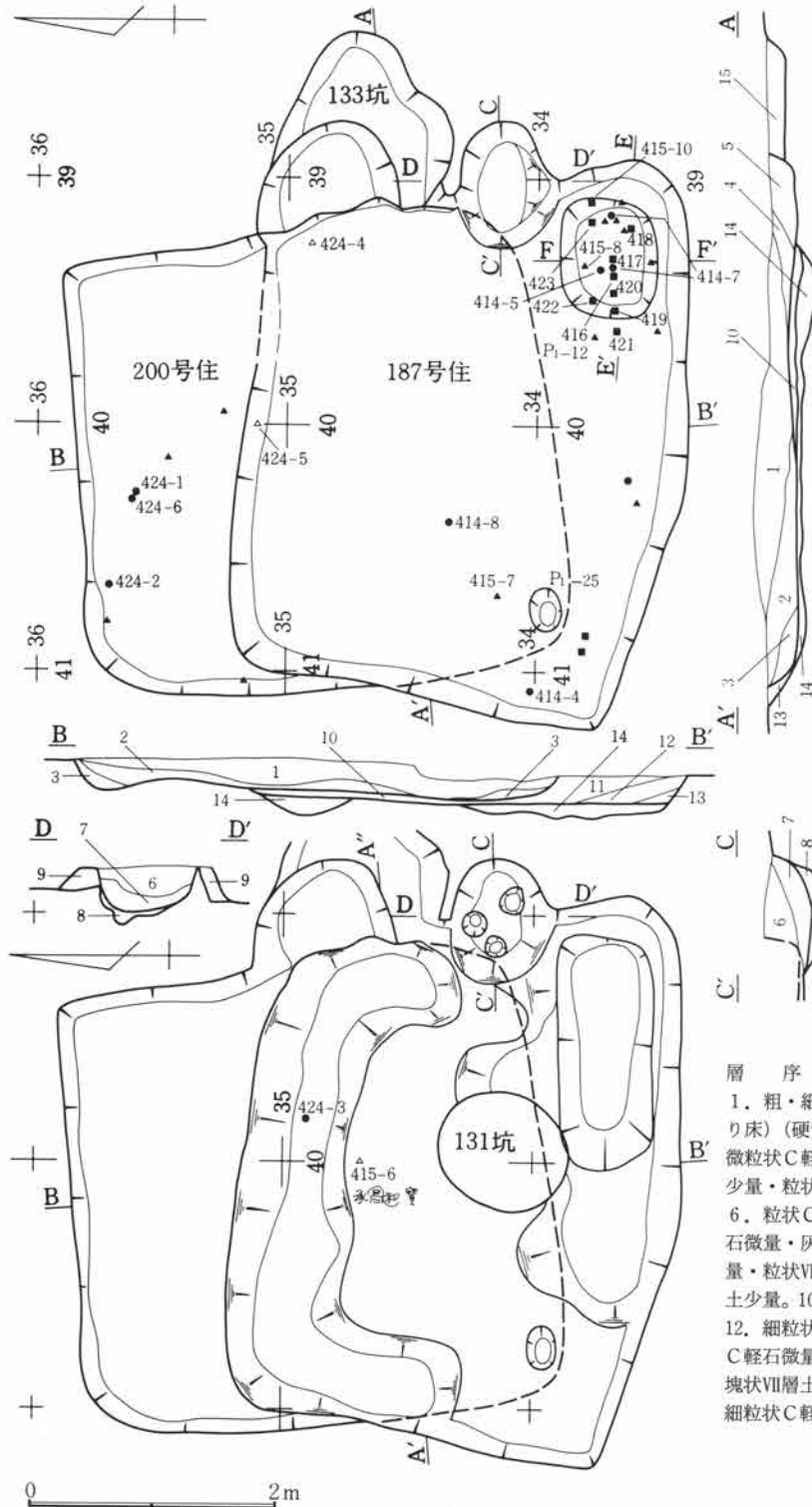
遺構名称	A区第187号住居跡		位置	39~42-A-34~36グリッド内。		残存深度	約27cm
平面形態	縦長方形基調。	規模	4.30m×3.56m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-90度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	ほぼ全面に造床が認められる。平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・長方形。95×80cm・深度-12cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	南壁下南東隅部及び北西隅部から北壁・北東隅部にかけて顕著である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から78cm。			主軸方位	北-90度-南	
改築	不明。			形状	楕円形状を呈する。		
規模	全長100cm・屋外長 52cm・屋内長 48cm・袖部幅122cm・燃烧部幅 70cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	左袖は200住に切られ先端側を失っている。		
煙道	未検出。			掘り方	楕円形状を呈する。		
遺物出土状態	傍竈坑上面から鏡瓦6点・女瓦1点・男瓦1点は何らの施設の痕跡として出土している。						

遺構名称	A区第200号住居跡		位置	39~42-A-34~36グリッド内。		残存深度	約24cm
平面形態	正方形。	規模	3.60m×3.80m	構築基準辺	北壁か	主軸方位	北-85度-南位か
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土及び187住の覆土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	部分的に浅く皿状に認められたが、平面図化は実施しなかった。						
遺物出土状態	全体に遺物は少なかった。						

所見 (A200住) 当住居跡は、次述するA187住の大半を切り構築しているが、調査段階では、両者の存在が判然としていなかった為、頭初1軒として調査着手している。そして、2基の重複は、土層断面により検証した。また、調査は上述の状況であった為、A133土坑とカマド部を一気に調査し、これにより、カマドの詳細は不手際により不明にしてしまった。住居は、東壁中央より若干南東隅部に寄った位置にカマドを備えている。カマドは、上述した様に、図上に示したのは、掘り方であり、使用時の形状等は不明である。そして、傍竈坑の存否自体も不明である。住居形状はC区の第VI段階以降と考えられる。

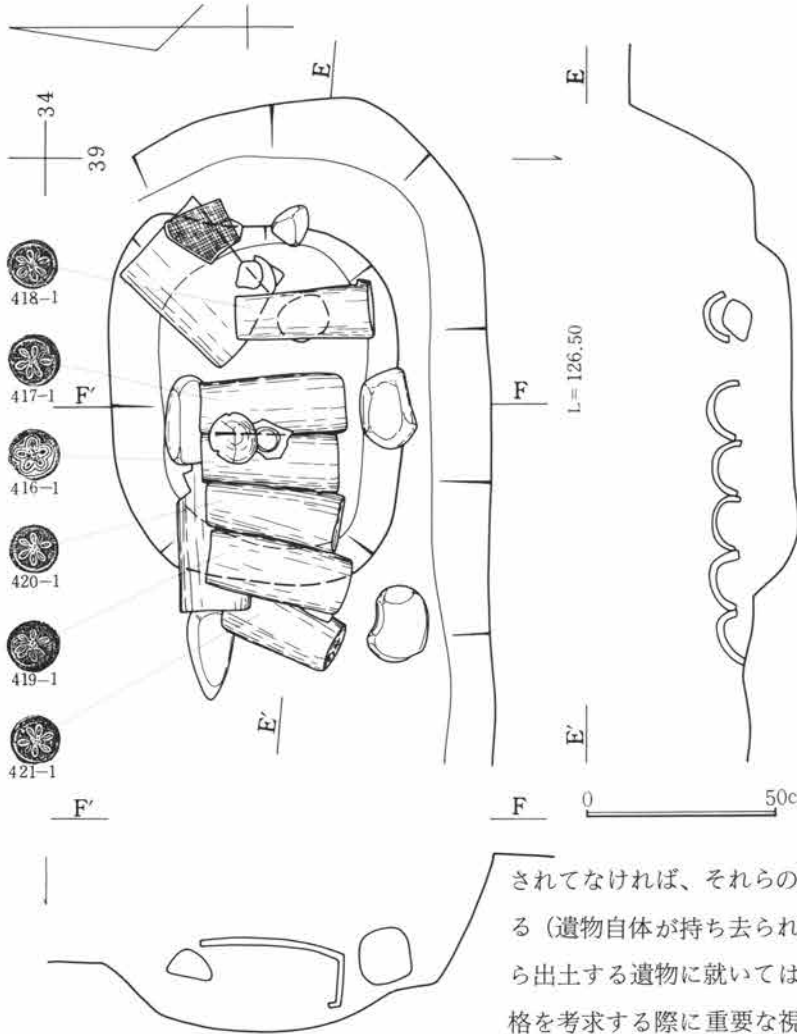
所見 (A187住) 当住居跡は、前述のA200住と同様の状況での調査で、同住居に北側半分以上を切られているが、重複部の壁は残存しており形状把握は出来た。住居は、東壁中央にカマドを備え、南東隅部の南壁直下で傍竈坑が検出されている。カマドは、左右両袖共に微小の瘤状で、燃烧部幅はやや広い。補強材等は検出されていない。傍竈坑は、南東隅部から南壁にかけて検出され、隅丸長形状を呈した状態である。そして、この傍竈坑の直上から完形・ほぼ完形の鎧瓦6枚・男瓦1枚・女瓦1枚が並んだ状態で出土し、瓦の

直上には、欠損したと須恵器環が正位の状態で出土している。恐らく、このは環の台として利用されていたと考えられる。更に直下には4ヶ所に礫が配置してあった。この状況から、これらの瓦と土器は、板材等の有機質の上に並べてあったと判断される。そして、4ヶ所で出土した礫は、何れも傍竈坑の上面であることは、傍竈自体が埋設されていた状態か、礫の下には、瓦と同様に板材等の有機質のものが敷かれていたか、傍竈坑上に渡されていたかの状態であったことが推定されるが、瓦自体が、傍竈坑の底面直上乃至直上層から



- 層序 (A187・200住) L=126.60m
1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粒状C軽石混入 (貼り床) (硬質)。3. 微粒状C軽石少量・粒状VII層土。微粒状C軽石混入・粒状粘土多量。5. 細粒状C軽石少量・粒状粘土含有・粒状焼土含有。(200号住居跡)
  6. 粒状C軽石混入・粒状焼土少量。7. 細粒状C軽石微量・灰多量・粒状焼土多量。8. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。9. 粒状C軽石少量・粒状VII層土少量。10. 微粒状C軽石微量。11. 粒状C軽石含有。12. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土混入。13. 微粒状C軽石微量・塊状VII層土少量。14. 細粒状C軽石微量・塊状VII層土含有・粒状VII層土含有。(187号住居跡) 15. 細粒状C軽石含有 (113土坑覆土)。

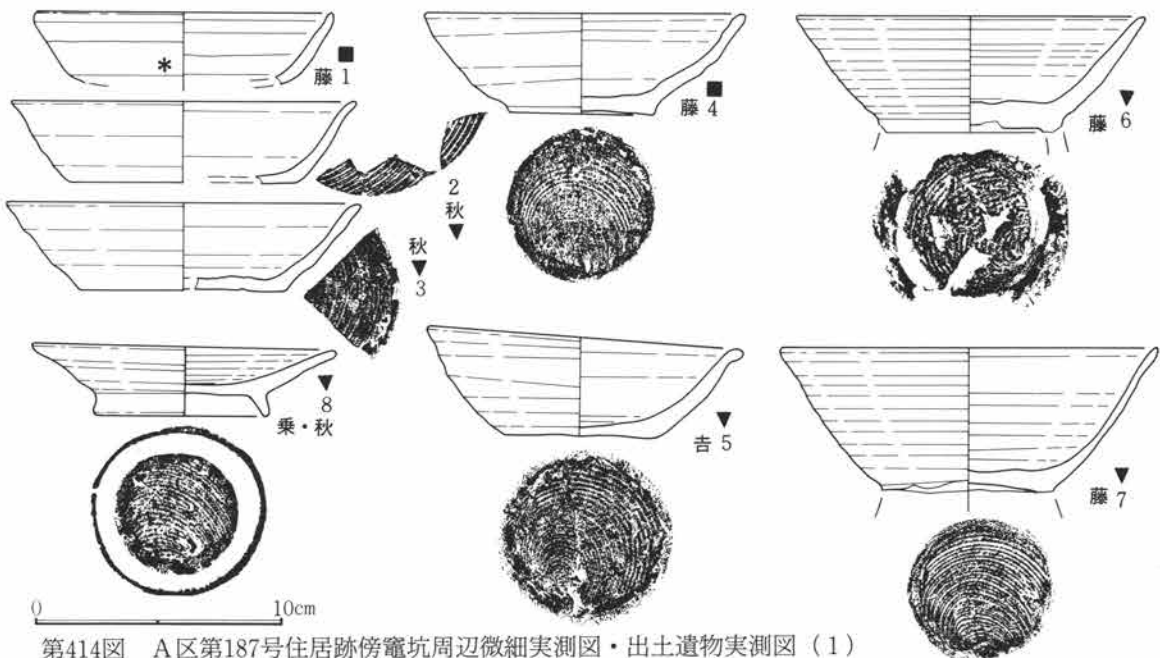
第413図 A区第187・200号住居跡実測図



の出土が無い点では、傍竈坑自体が埋設されていた該然性が高い点が指摘出来る。さすれば、この瓦を乗せて並べる施設は、傍竈坑を埋設し、その上位にある意図をもって行なわれた、傍竈坑の性格に係わる施設と判断される。この施設自体が、傍竈坑の性格に係わるとすれば、それは、既刊第3分冊中で述べた様に、精神文化に係わる所産であったことが推測される。又、この施設に、鏡瓦を多用するという点にも施設の重要性と特殊性が窺知される。この様に、傍竈坑の上位に板材を用い、傍竈坑の蓋としてその上面に遺物を並べ置いた場合、傍竈坑自体埋設

されてなければ、それらの遺物は傍竈坑内で出土する筈である（遺物自体が持ち去られていなければ）。今後、この傍竈坑から出土する遺物に就いては、その出土状況自体が傍竈坑の性格を考求する際に重要な視点となる。住居の掘り方は、北壁側で頭であり、南壁側でも認められる。この北側掘り方内からは、皇都十二銭中の「承和昌寶」が出土して

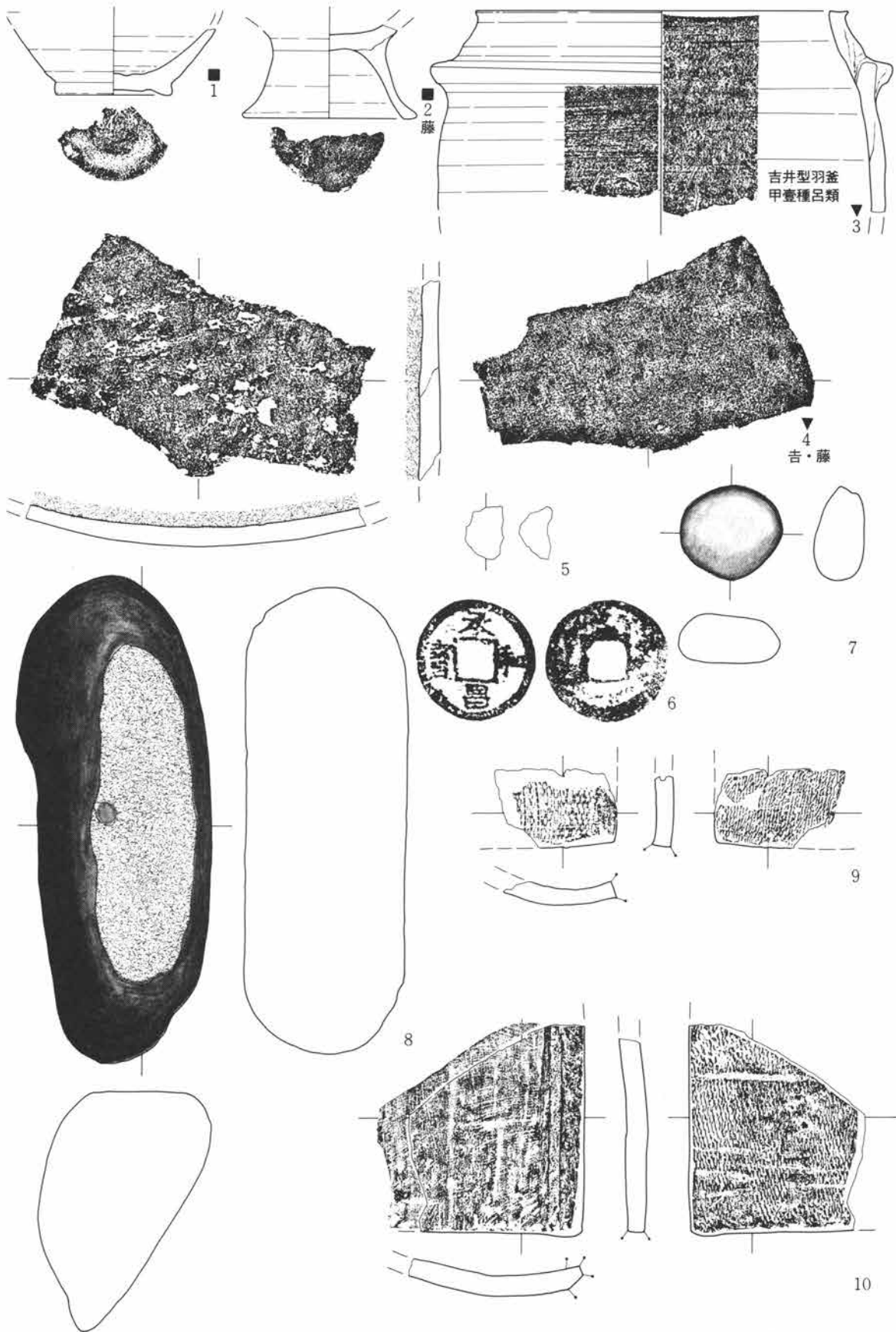
いる。住居形状はC区の第V段階に対比される。



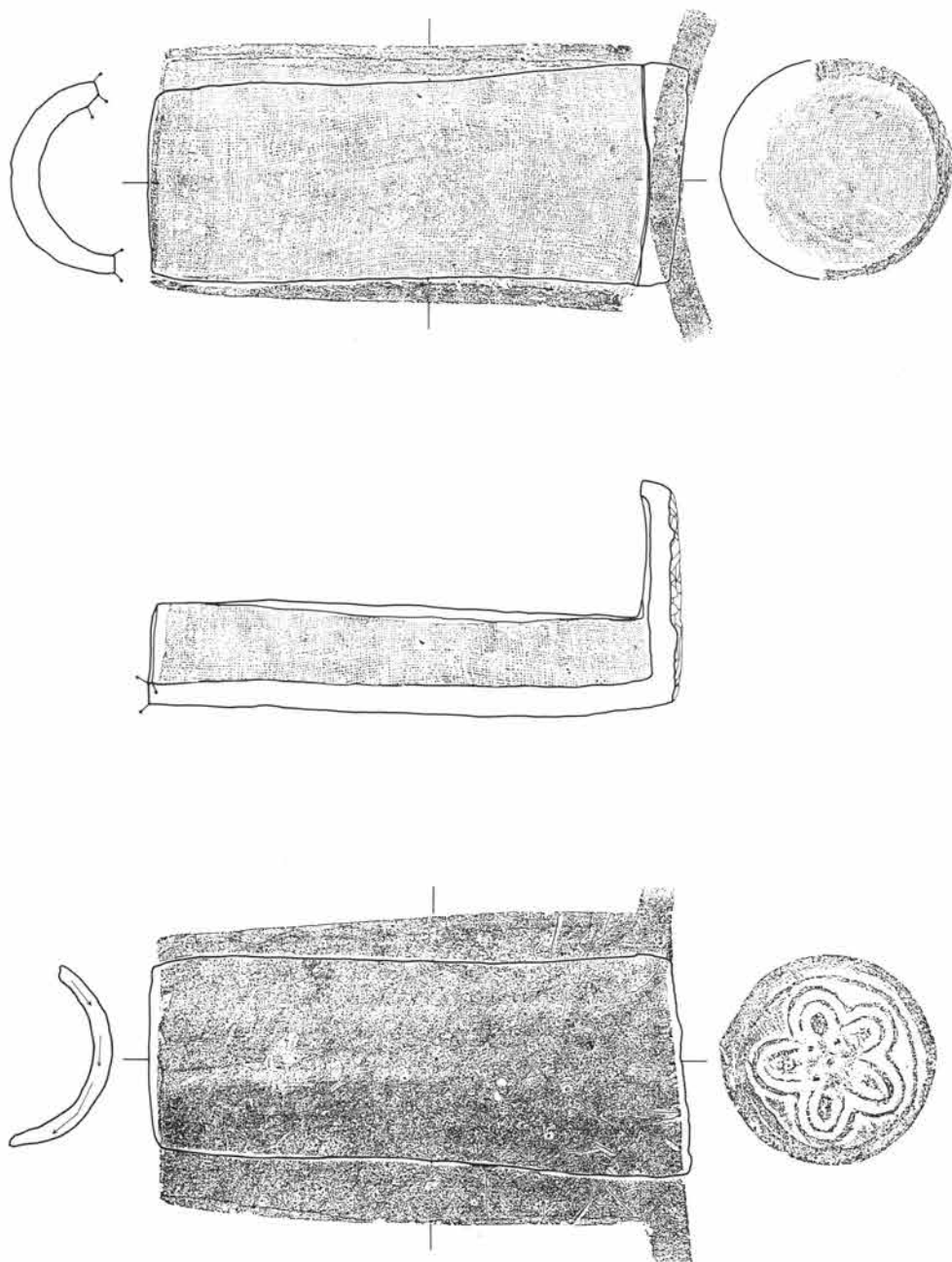
第414図 A区第187号住居跡傍竈坑周辺微細実測図・出土遺物実測図(1)



第3節 検出された住居跡について



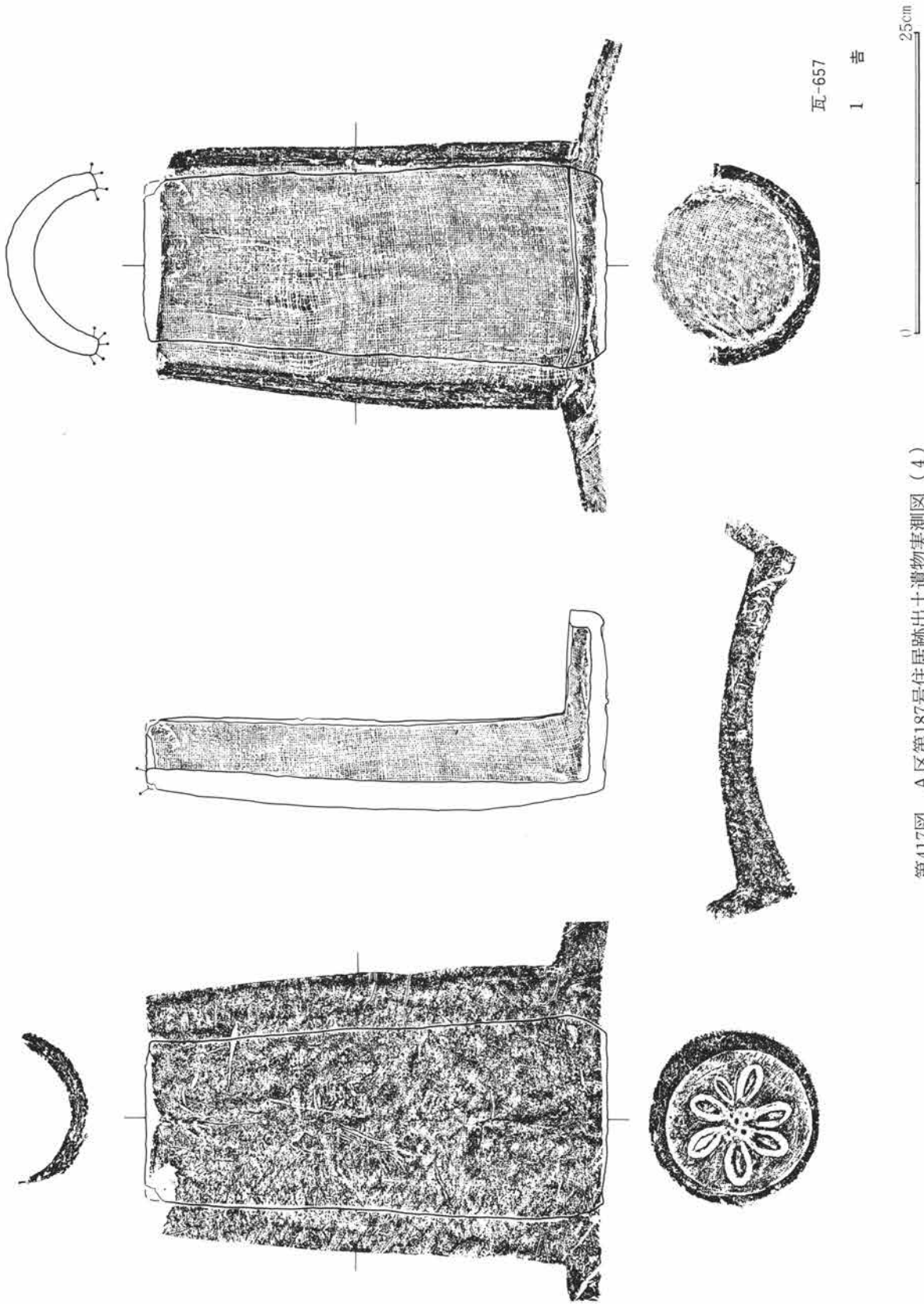
第415図 A区第187号住居跡出土遺物実測図(2)



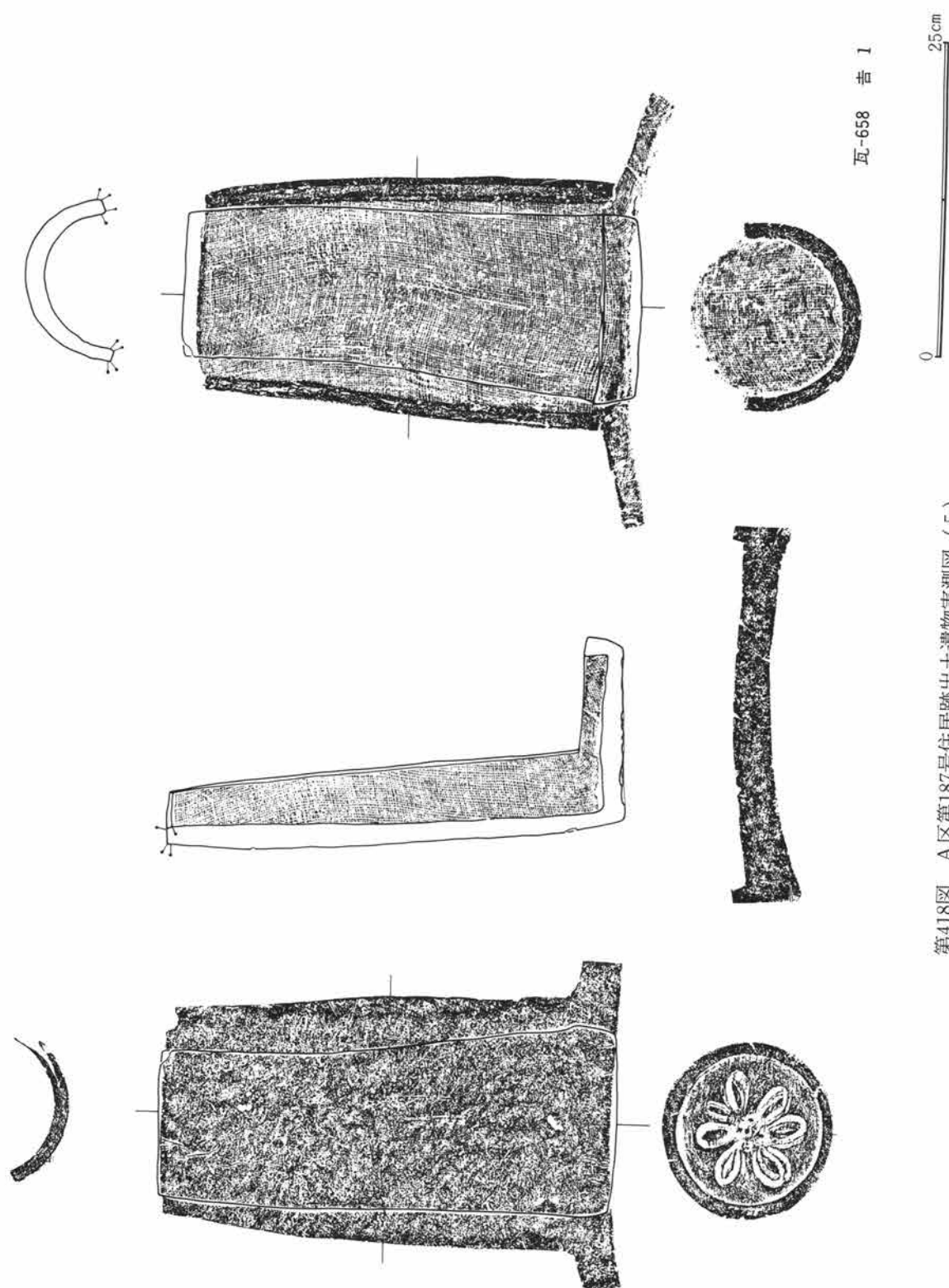
瓦-656 吉 1

0 25 cm

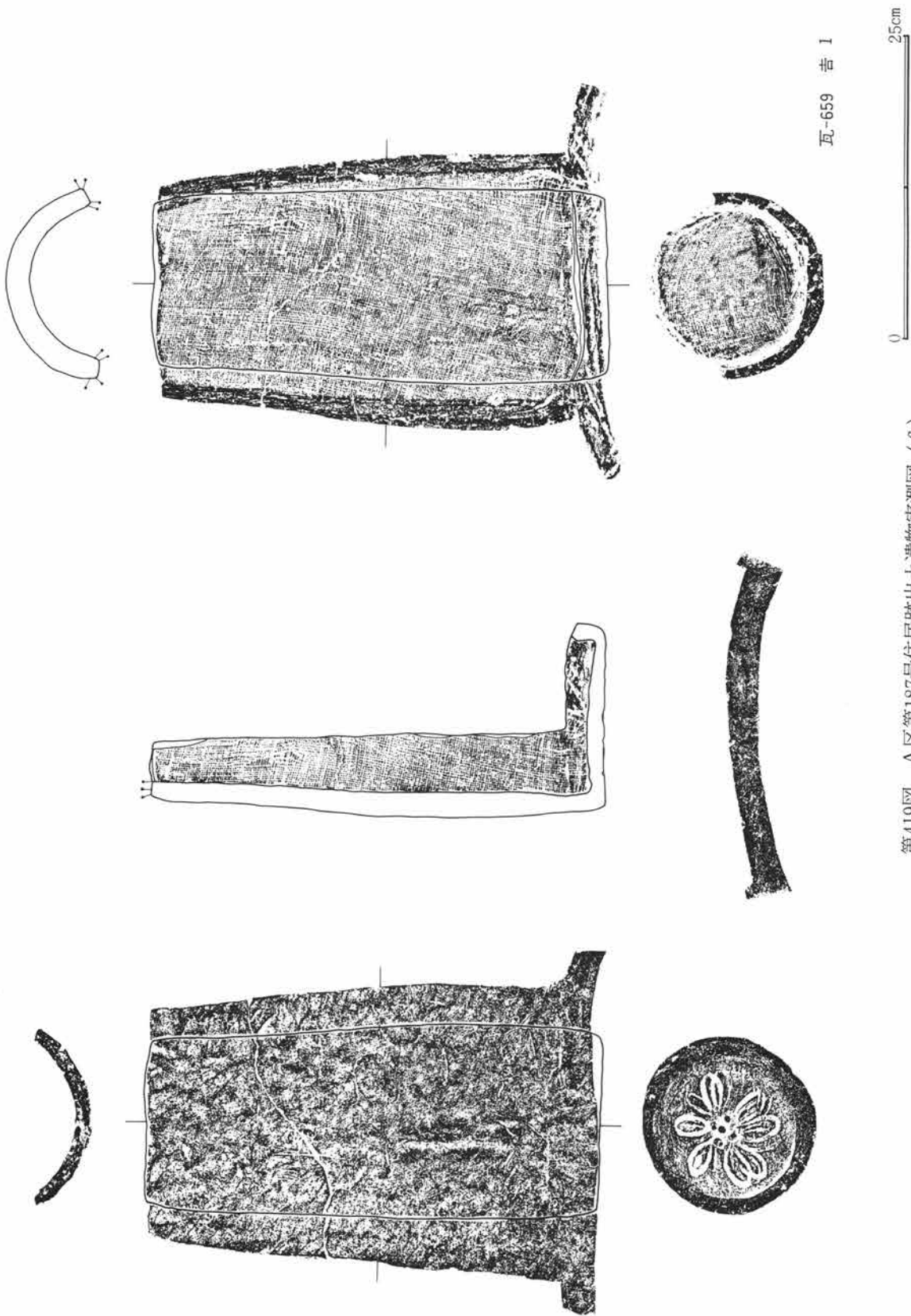
第416図 A区第187号住居跡出土遺物実測図(3)



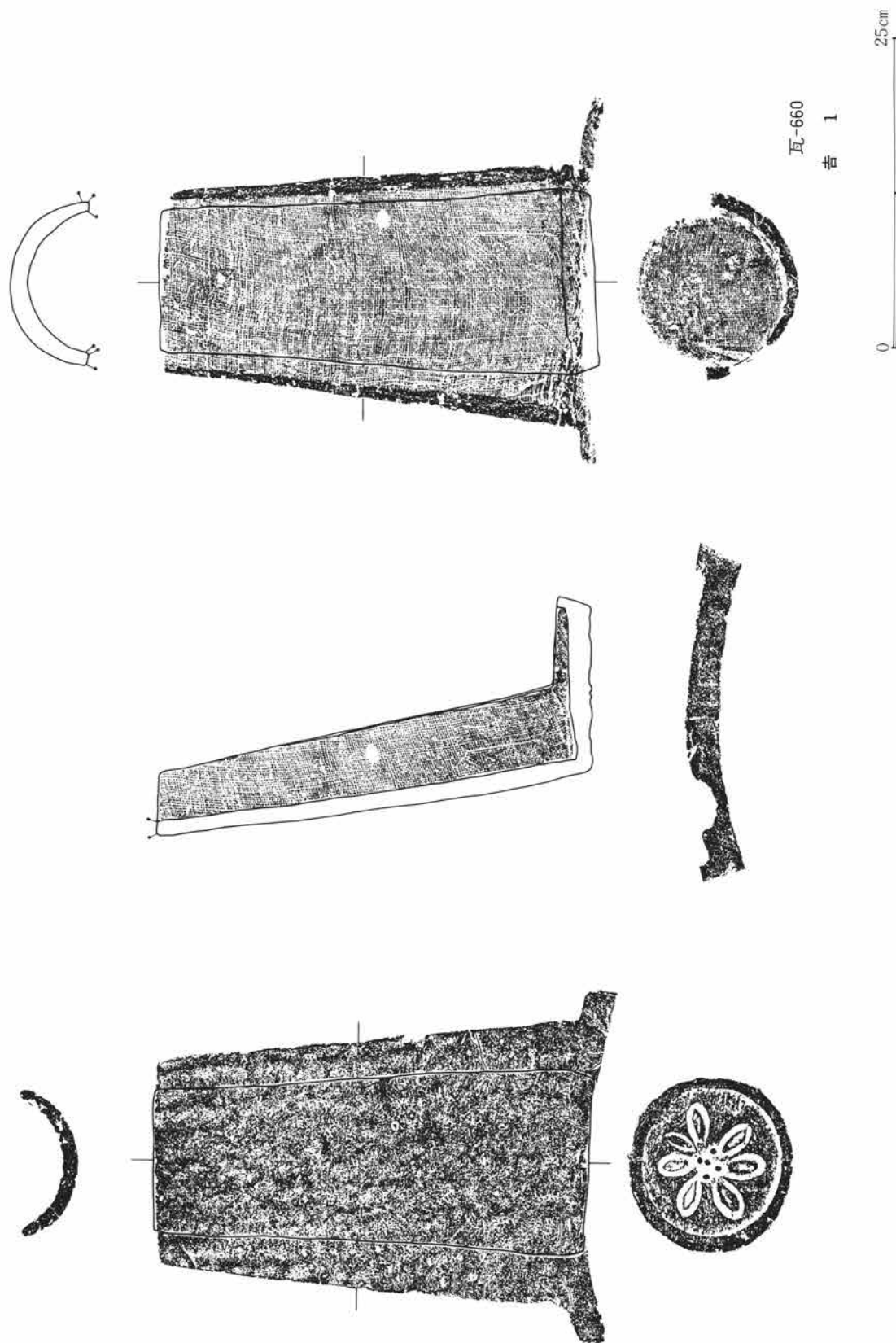
第417図 A区第187号住居跡出土遺物実測図(4)



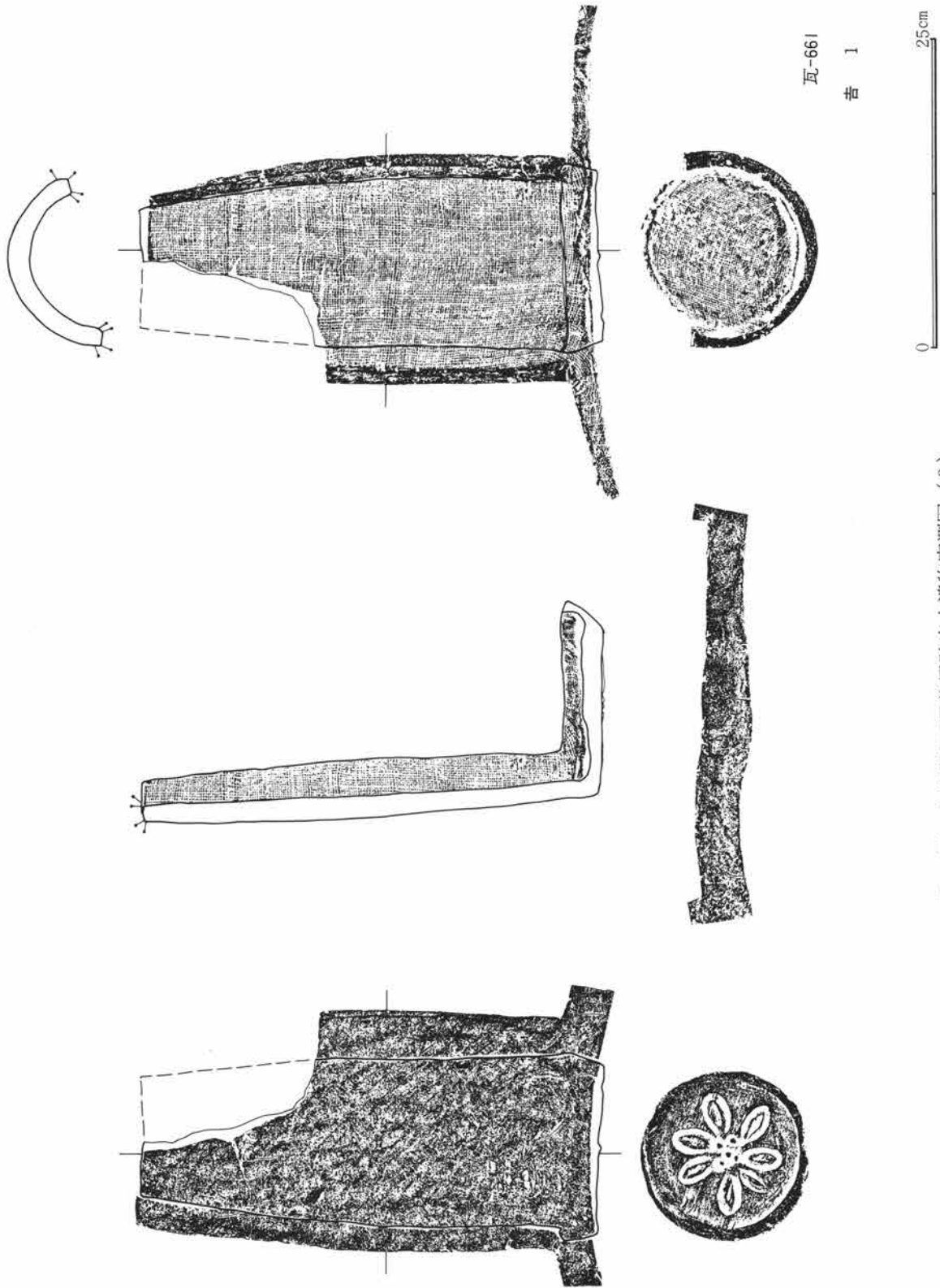
第418図 A区第187号住居跡出土遺物実測図(5)



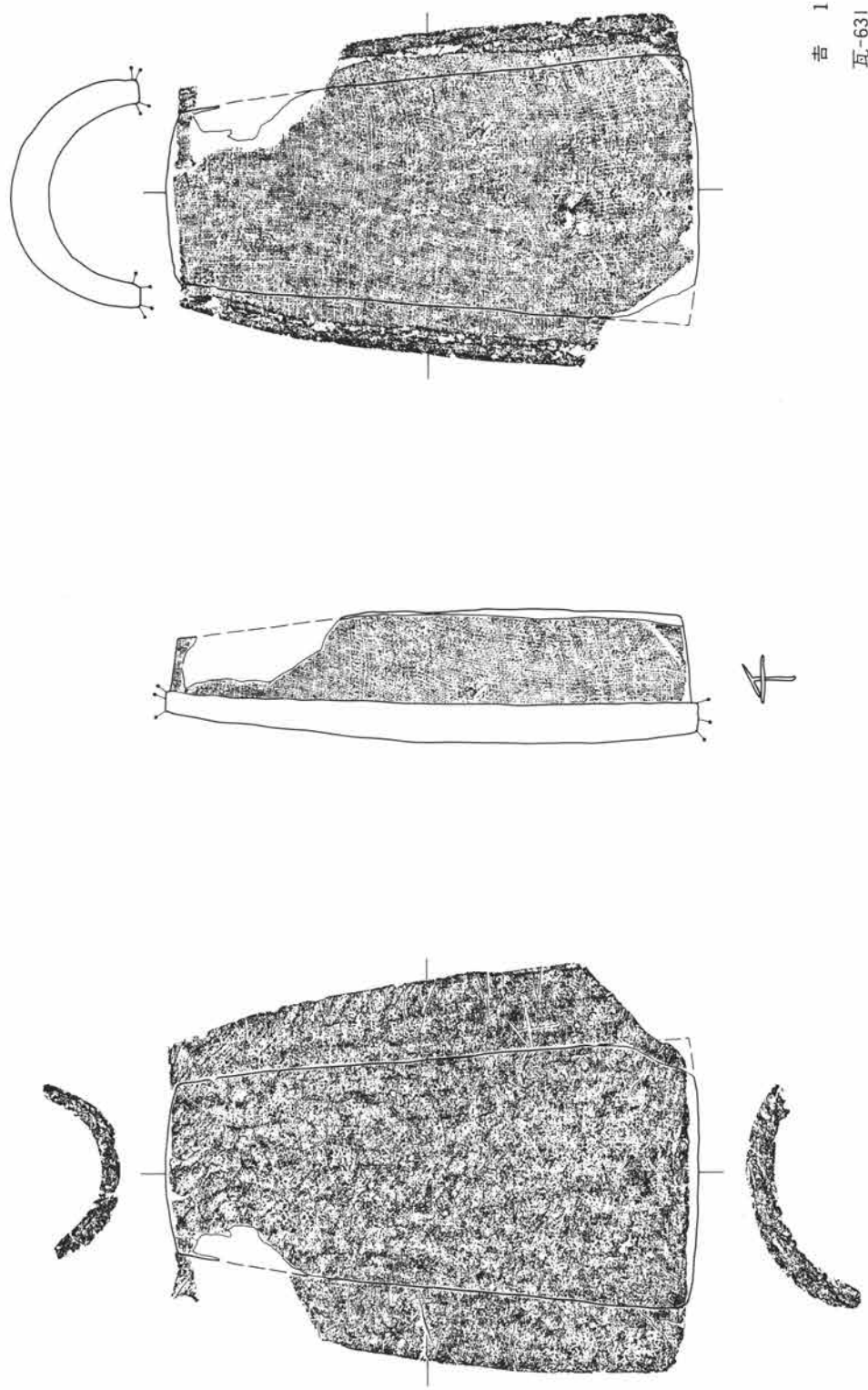
第419図 A区第187号住居跡出土遺物実測図(6)



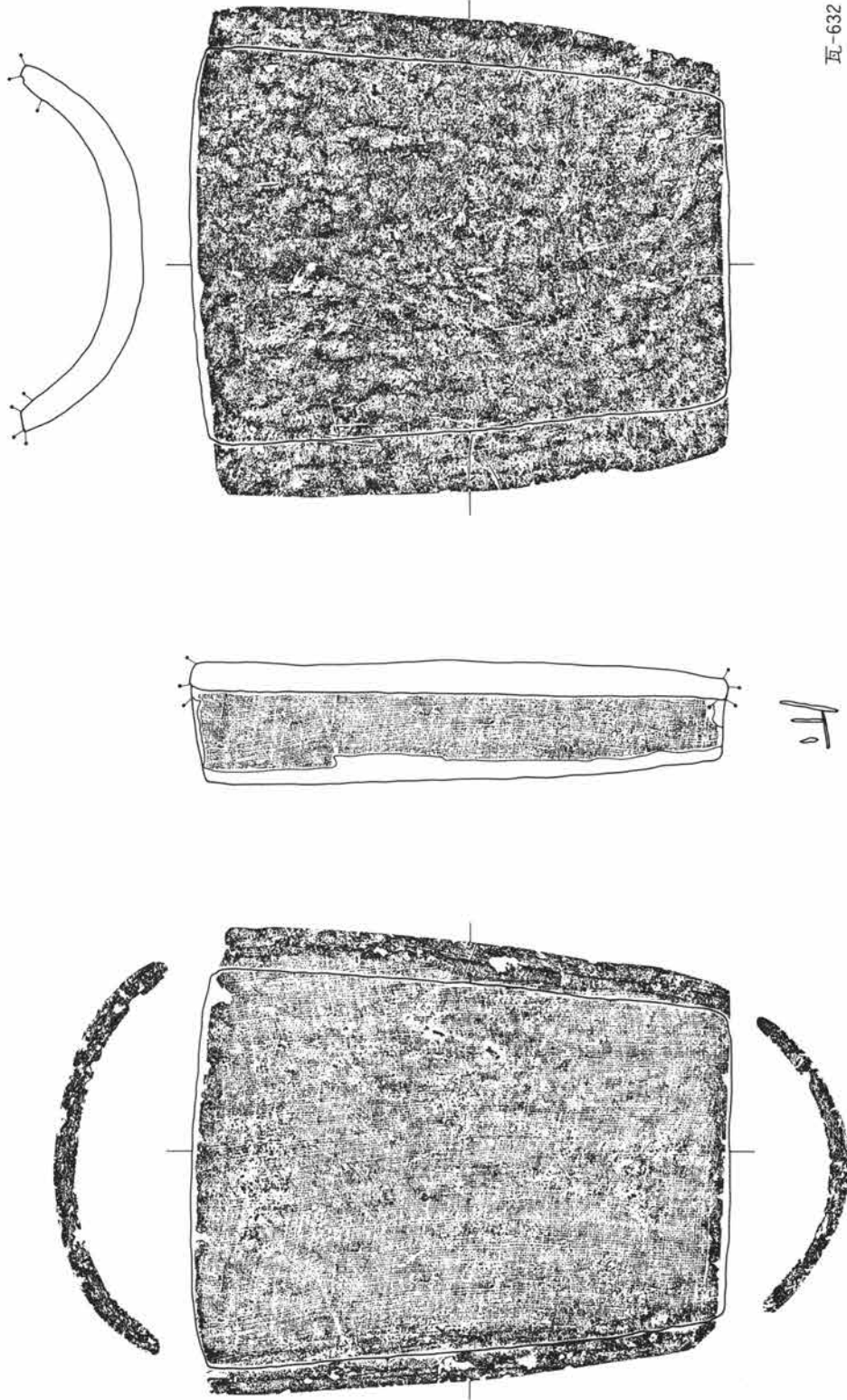
第420図 A区第187号住居跡出土遺物実測図(7)



第421図 A区第187号住居跡出土遺物実測図(8)



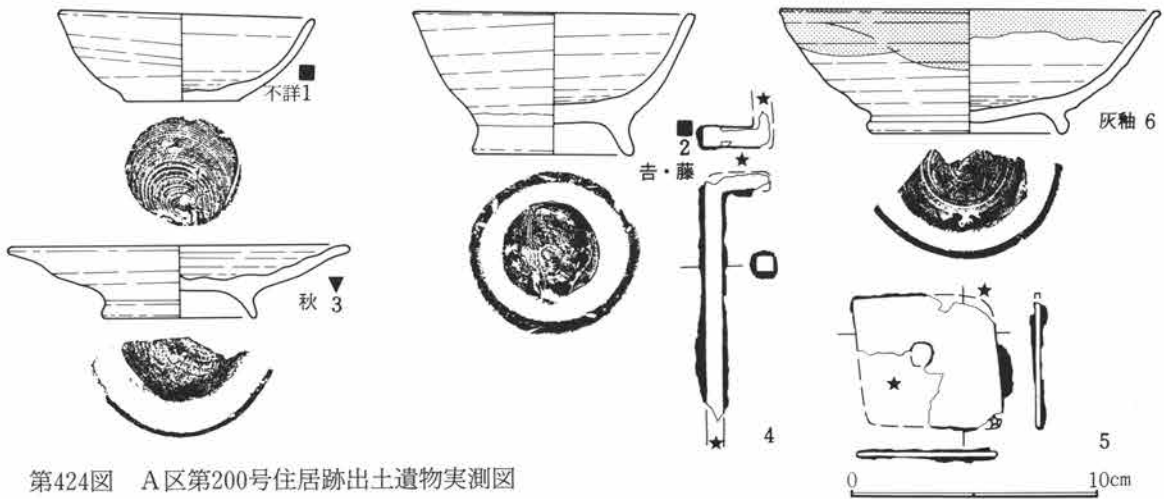




0 25cm

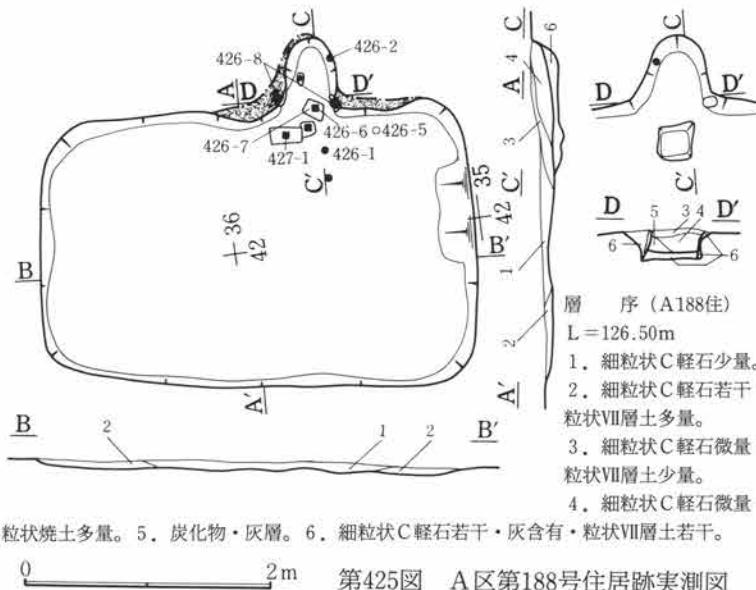
第423図 A区第187号住居跡出土遺物実測図(10)

第4章 検出された遺構・遺物



第424図 A区第200号住居跡出土遺物実測図

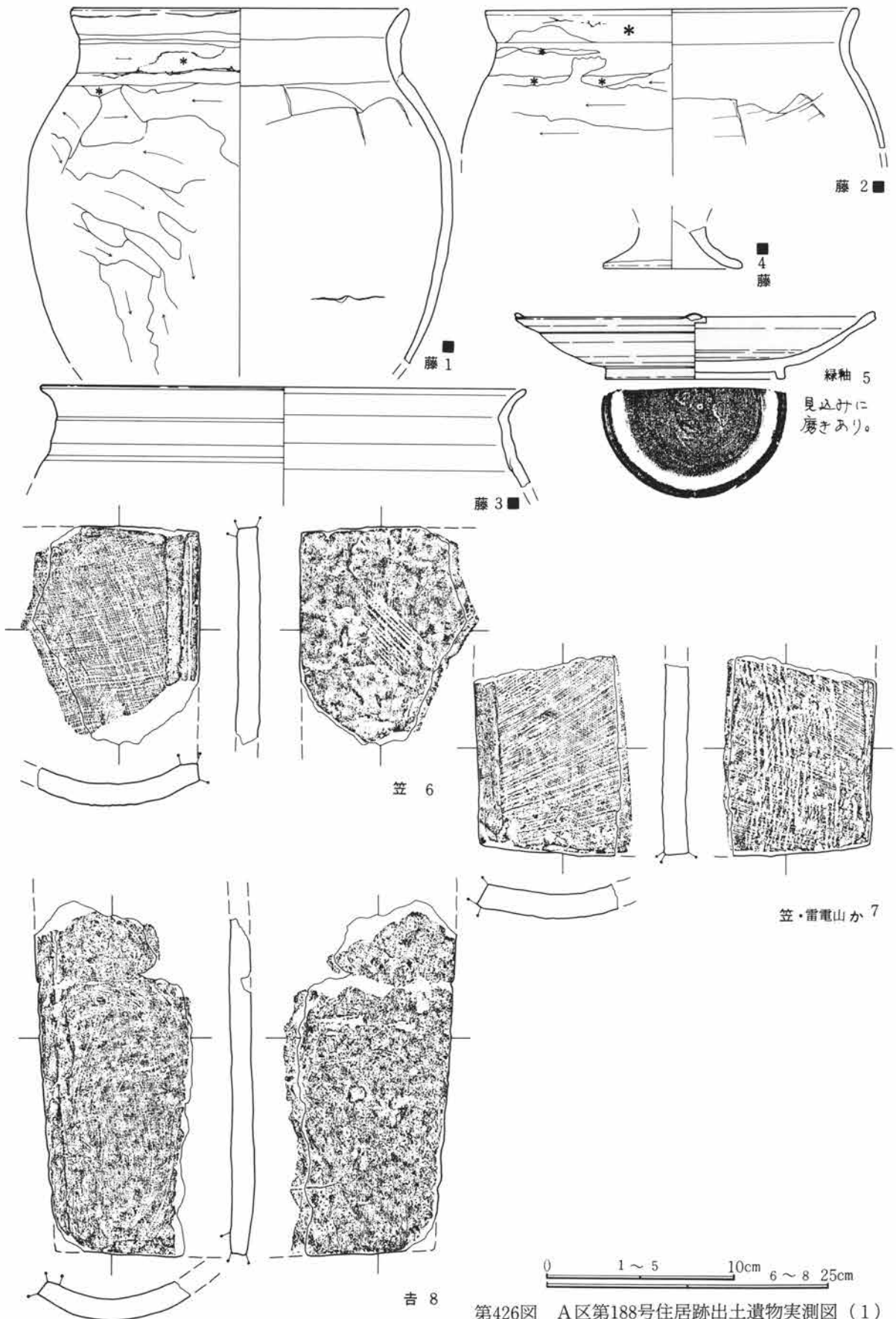
遺構名称	A区第188号住居跡		位置	42・43-A-36・37グリッド内。		残存深度	約6cm
平面形態	横長方形。	規模	2.34m×3.55m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-199度-南
壁	詳細不分明。		床面	地山VII層土を使用するも平坦ではなく凸凹がある。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無か。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から80cm。			主軸方位	北-95度-南	
改築	有。掘り方内から灰を検出している。		形状	全体に小作りで舌状を呈する。			
規模	全長 68cm・屋外長 48cm・屋内長 20cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 40cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しい。壁は瓦により補強されている。						
支脚が左壁に若干寄って検出されている。		袖	左壁側の東壁がやや膨れた感じであるが、右袖は無し。				
煙道	未検出。		掘り方	舌状を呈し、焚口前面で方形ピットを検出。			
遺物出土状態	カマド部で少量出土したが、住居の遺存が不良な為詳細不詳。						



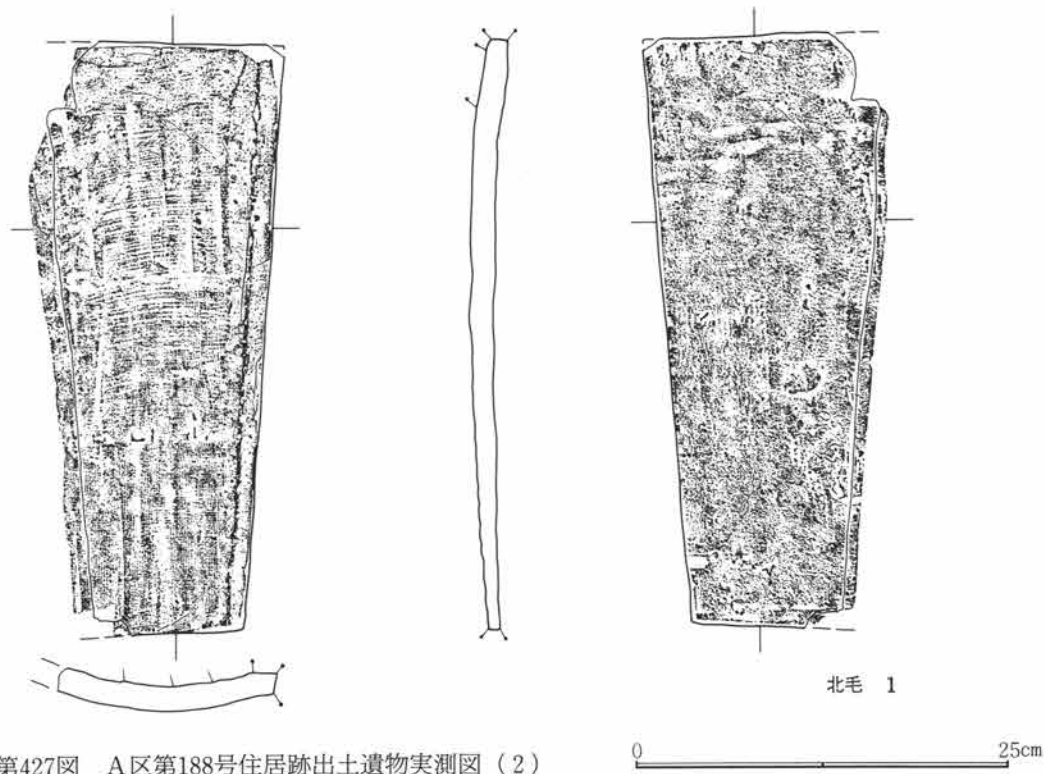
第425図 A区第188号住居跡実測図

所見 当住居跡は切り合い関係の無い単独住居跡である。住居は、東壁中央部より若干南東隅部に寄った位置にカマドを備えている。カマドは左右の両袖が微小の瘤状であり、燃烧部のほぼ中央に支脚が出土している点から袖は燃烧部の機能を兼ねた状態である。そして、袖部に相当する部分は、瓦を用い補強材としている。又、南壁中央部程には、壁が極度に緩やかな部分があり入口施設が想定される。住居形状はC区の第VI乃至VII段階に対比される。

第3節 検出された住居跡について



第426図 A区第188号住居跡出土遺物実測図(1)



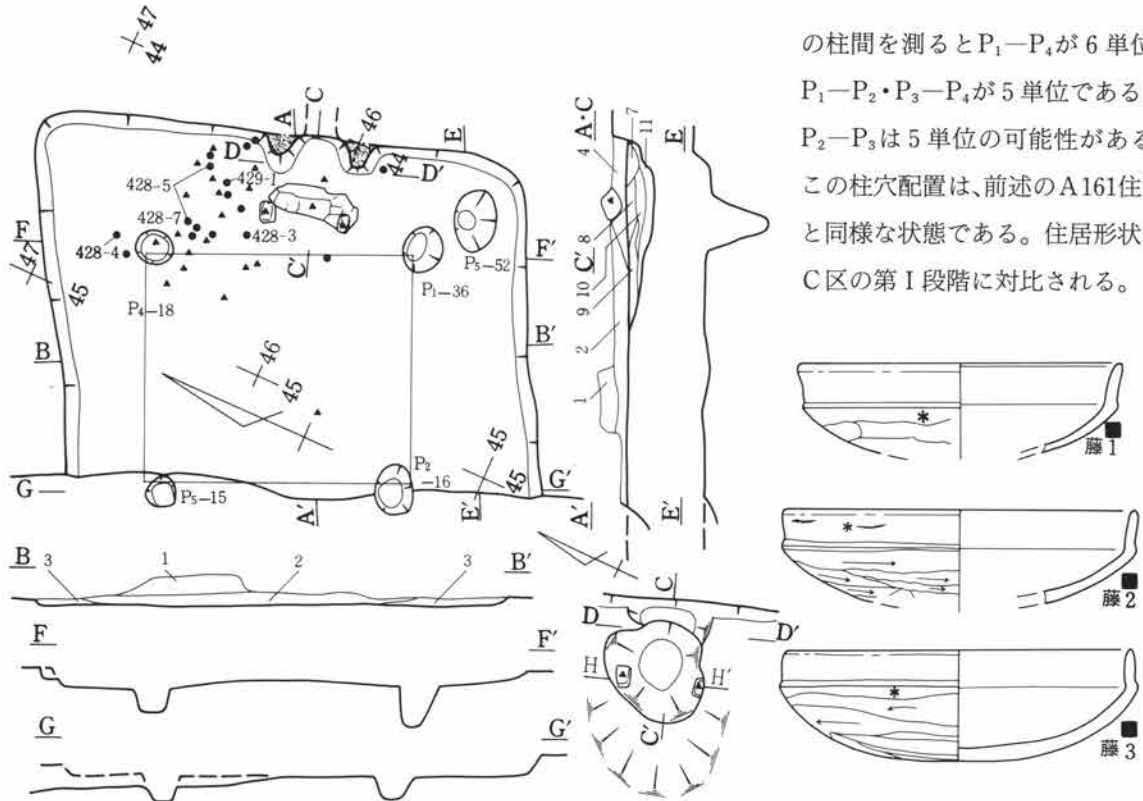
第427図 A区第188号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	A区第189号住居跡		位置	45・46-A-45~48グリッド内。		残存深度	約24cm
平面形態	正方形基調か。	規模	3.10+αm×3.94m	構築基準辺	不明壁	主軸方位	北-67度-南位か
壁	詳細不分明。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>5</sub> ・楕円形状。49×35cm・深度-52cm			
柱穴	P <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> の4本の支柱穴を検出。住居規模等に比較し全体に浅い。						
掘り方	無。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から110cm。			主軸方位	北-64度-南	
改築	有。掘り方内から灰を検出。			形状	細長い舌状か。		
規模	全長148cm・屋外長 0cm・屋内長148cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 50cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。			袖	調査の不手際により半分を失っている。		
煙道	未検出。			掘り方	円形・楕円形を呈する。		
遺物出土状態	カマド左側にやや集中している。						

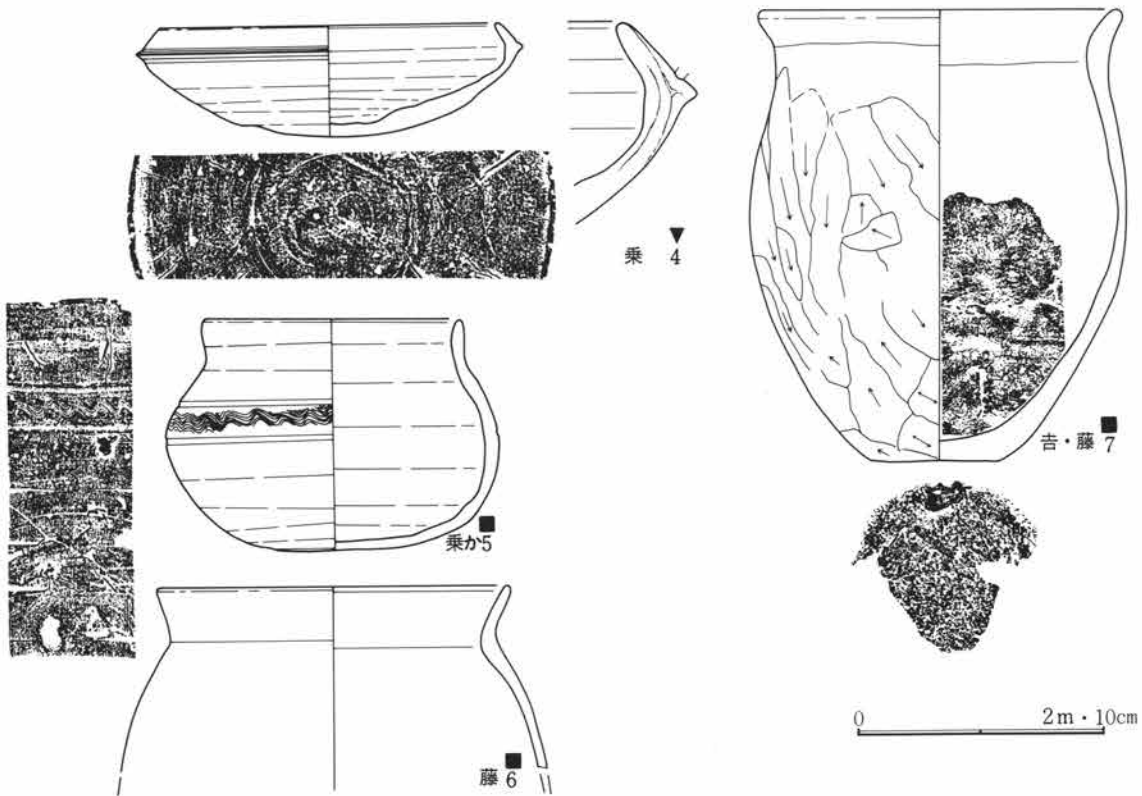
所見 当住居跡は、東側3分の1程をA1溝(中世)に切られ破壊されている。住居は、東壁中央部にカマドを備え、南東隅部には傍竈坑(貯蔵穴?)を備えている。そして、床面では、4本の支柱穴が検出されている。カマドは、屋内側に長く袖を造り出す状態であり、地山砂岩質土の切り出し材を用いた焚口部補強材が検出されているが、袖基部と焚口部補強材の間は部分的に崩壊していた為に検出出来なかった部分がある。煙道は検出されなかったが、恐らく、壁の上位で屋外に突出する状態と考えられる。傍竈坑は楕円形状の柱穴状を呈し、深度が-52cmと深くP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の支柱穴より深くしっかりしている。支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本が検出されている。この4本は全体的に深度は浅い。この4本の柱間は、36cmを1単位とする公約数(尺度)で名々

第3節 検出された住居跡について

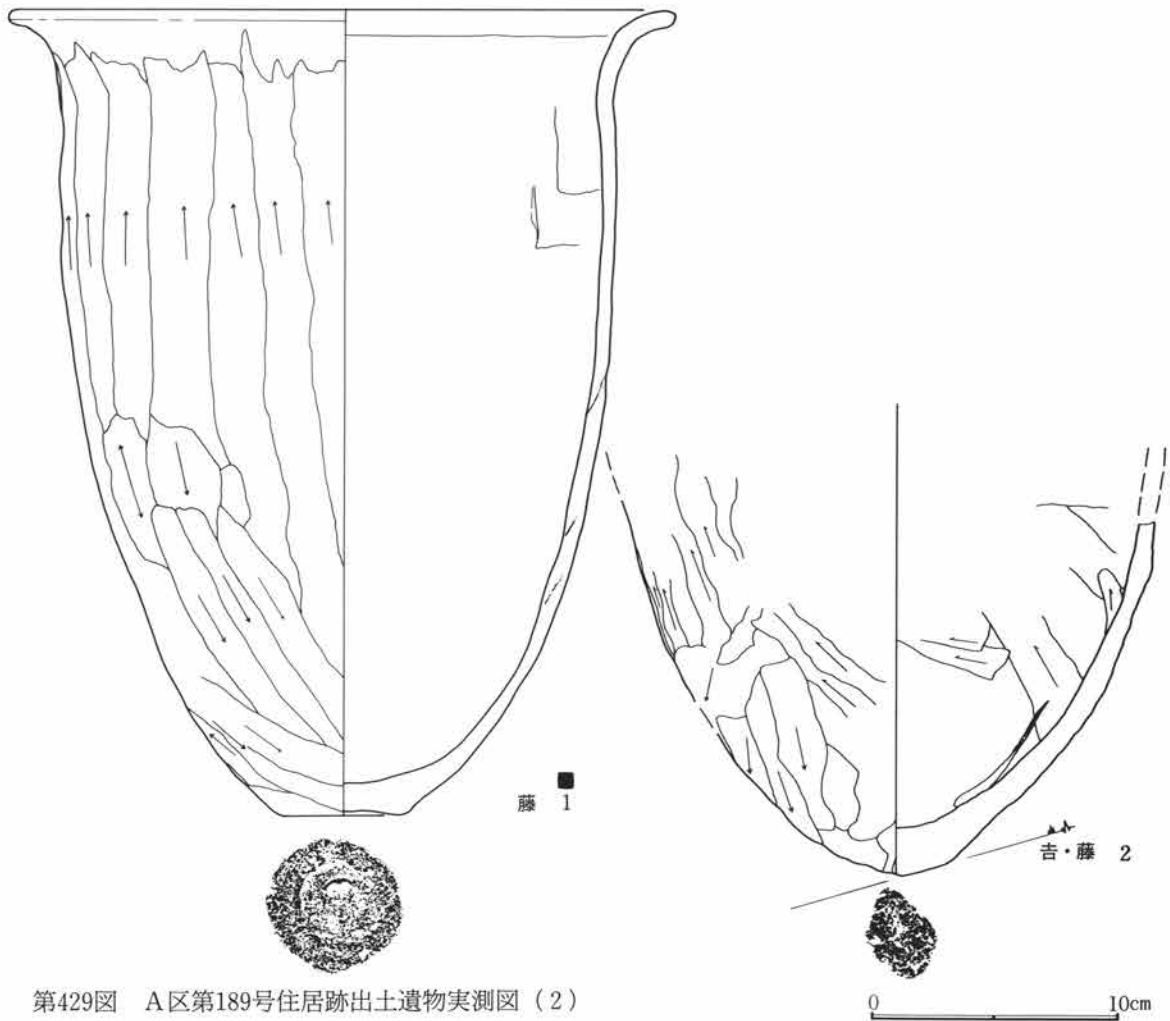
の柱間を測るとP<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>が6単位、  
P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>が5単位であるが  
P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>は5単位の可能性がある。  
この柱穴配置は、前述のA161住等  
と同様な状態である。住居形状は  
C区の第I段階に対比される。



層序 (A189住) L=126.70m  
 1. 粒状C軽石混入。2. 細粒状C軽石少量。3. 細粒状C軽石微量・塊状VII層土少量。  
 4. 細粒状C軽石少量・粒状焼土含有・灰含有粒状炭化物・灰層含有。5. 粘土主体。  
 6. 5近質。7. 細粒状C軽石若干・塊状焼土主体。8. 細粒状C軽石少量・粒状VII層土含有。  
 9. 細粒状C軽石若干・砂質VII層土含有。11. 細粒状C軽石若干・粒状VII層土多量・塊状粘土含有・粒状焼土少量。



第428図 A区第189号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

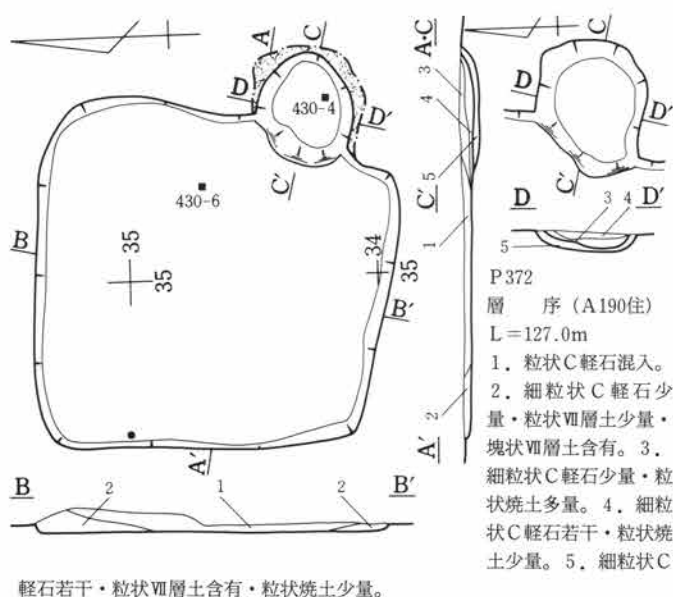


第429図 A区第189号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	A区第190号住居跡		位置	35・36-A-34~36グリッド内。		残存深度	約20cm	
平面形態	正方形基調。	規模	2.75m×2.90m	構築基準辺	北・西乃至南壁	主軸方位	北-89度-南(北壁)	
壁	詳細不明。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から40cm。			主軸方位	北-104度-南		
改築	有。掘り方内から焼土を検出。			形状	楕円形状を呈する。			
規模	全長 88cm・屋外長 61cm・屋内長 27cm・袖部幅 90cm・燃烧部幅 78cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
			袖	無い。				
煙道	未検出。		掘り方	不整形の土坑状である。				
遺物出土状態	床面直上から瓦・土器各々1点が出土している。その他も全体的に非常に少量である。							

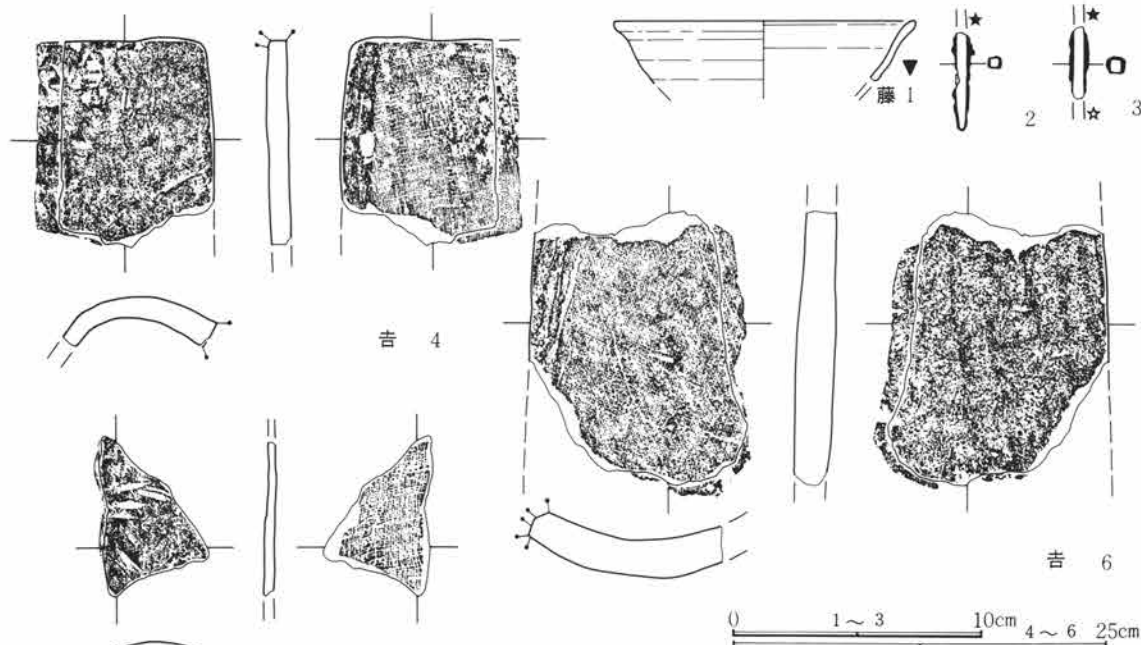
所見 当住居跡は、A208住を切り構築している。住居は、東壁南東隅部に偏在した位置にカマドを備えている。傍竈坑の検出はなかった。カマドは、住居跡全体が遺存が不良であった為、カマドも遺存が不良である。

第3節 検出された住居跡について

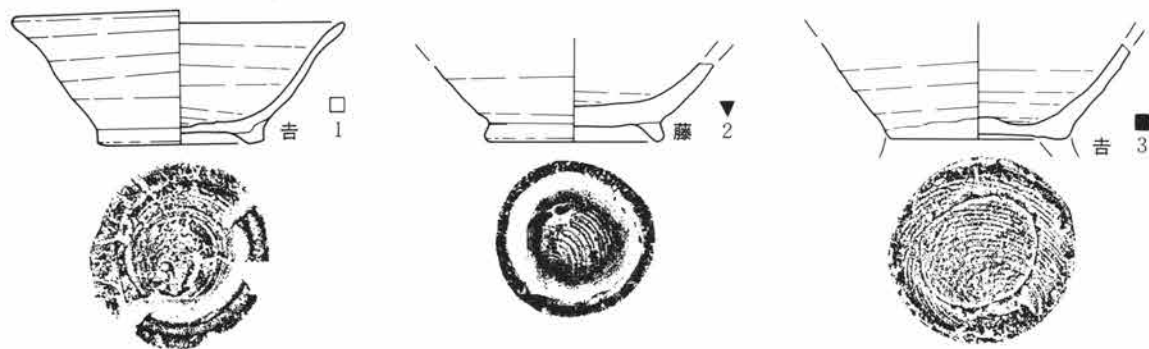


軽石若干・粒状Ⅶ層土含有・粒状焼土少量。

残存状況では、袖は明瞭なものではなかった。この点は、掘り方でも同様であり、袖の補強材の据え方が検出されていない点からも、袖が付設されなかった可能性が想定される。燃焼部は全体的に土坑状で広く大きい。この点は掘り方でも同様であり、補強材の据え方及び痕跡が認められなかった点は袖と同様である。煙道は未検出である。傍竈坑が検出されなかったことは、カマドの付設位置が関係しており、南東隅部に偏在した位置であるが為によると判断される。住居形状は、カマド位置・傍竈坑の不備の点からC区の第Ⅷ段階に対比される。



第430図 A区第190号住居跡実測図・出土遺物実測図

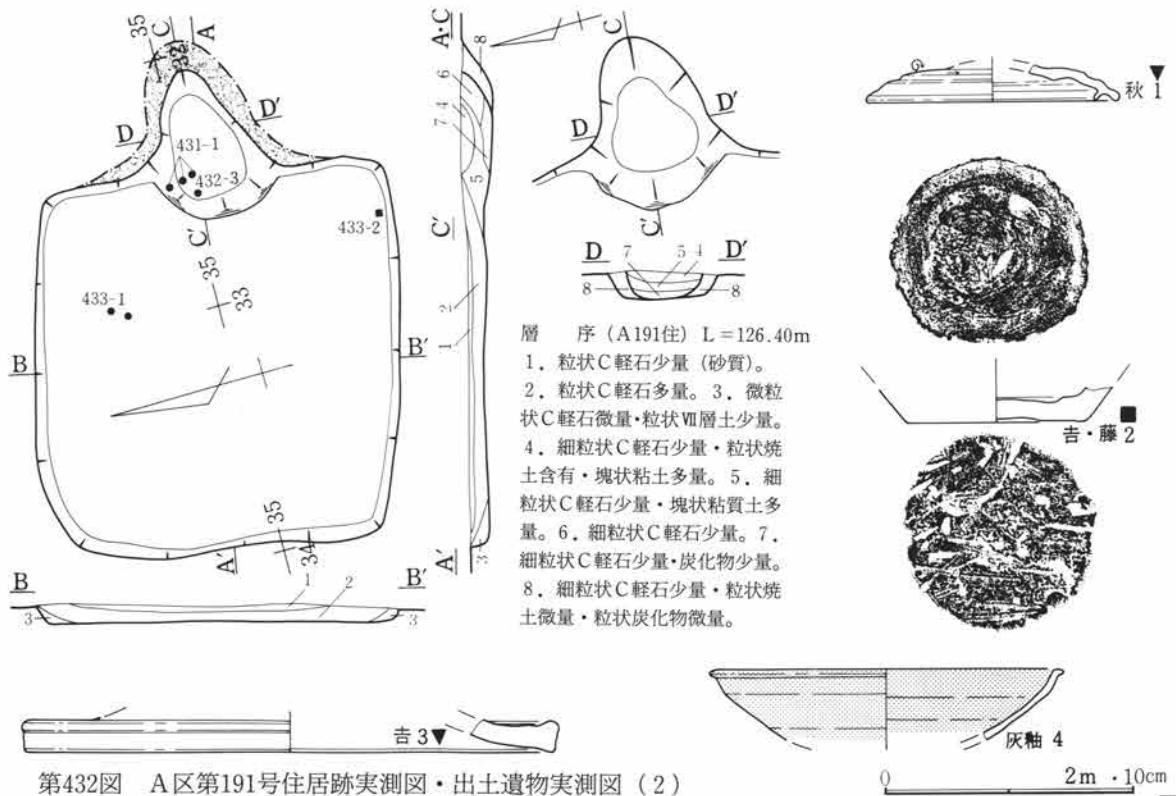


第431図 A区第191号住居跡出土遺物実測図 (1)

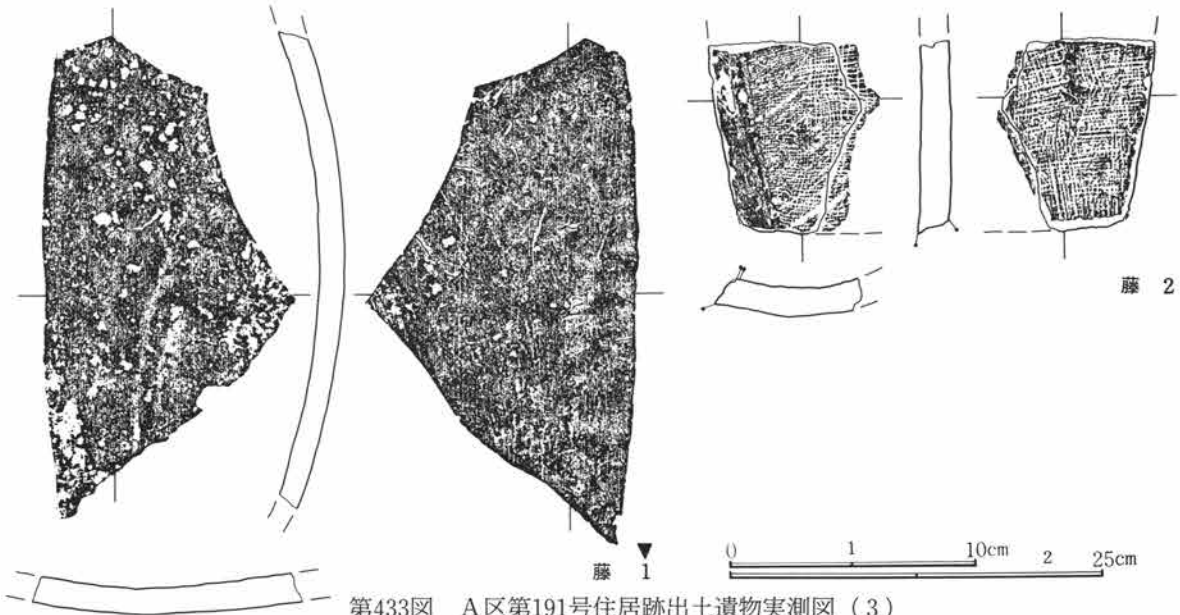
第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	A区第191号住居跡		位置	32~35-A-35~36グリッド内。		残存深度	約14cm
平面形態	正方形。	規模	2.95m×2.93m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-105度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から70cm。			主軸方位	北-92度-南	
改築	有。掘り方から焼土・炭化物を検出。			形状	舌状で屋外に長く突出する。		
規模	全長120cm・屋外長 92cm・屋内長 28cm・袖部幅130cm・燃烧部幅 64cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
			袖	無。			
煙道	未検出。			掘り方	舌状を呈する。補強材等の据え方もない。		
遺物出土状態	少量の土器類が出土している。出土層位は床面直上・床面直上層である。						

所見 当住居跡は、A192・197・204・208住を切り構築している。住居は東壁のほぼ中央部にカマドを備え、縦長傾向も考慮される正方形を呈している。南東隅部は、下位にA197住の存在があった為に、傍竈坑の存否は確認出来なかったが、カマド位置を考慮すれば、傍竈坑の存在する可能性は大である。カマドは、住居規模に対して大きく、全体的に舌状を呈している。袖は左右共に検出されておらず、掘り方からも補強材等の据え方の痕跡も認められなかったことから、袖は付設されなかった可能性がある。燃烧部も補強材等の痕跡は認められなかった。煙道は未検出である。住居形状は判然としない面がある。出土遺物では第432図-2の土釜底部片があることから、時期的には10世紀代以降と考えられる。







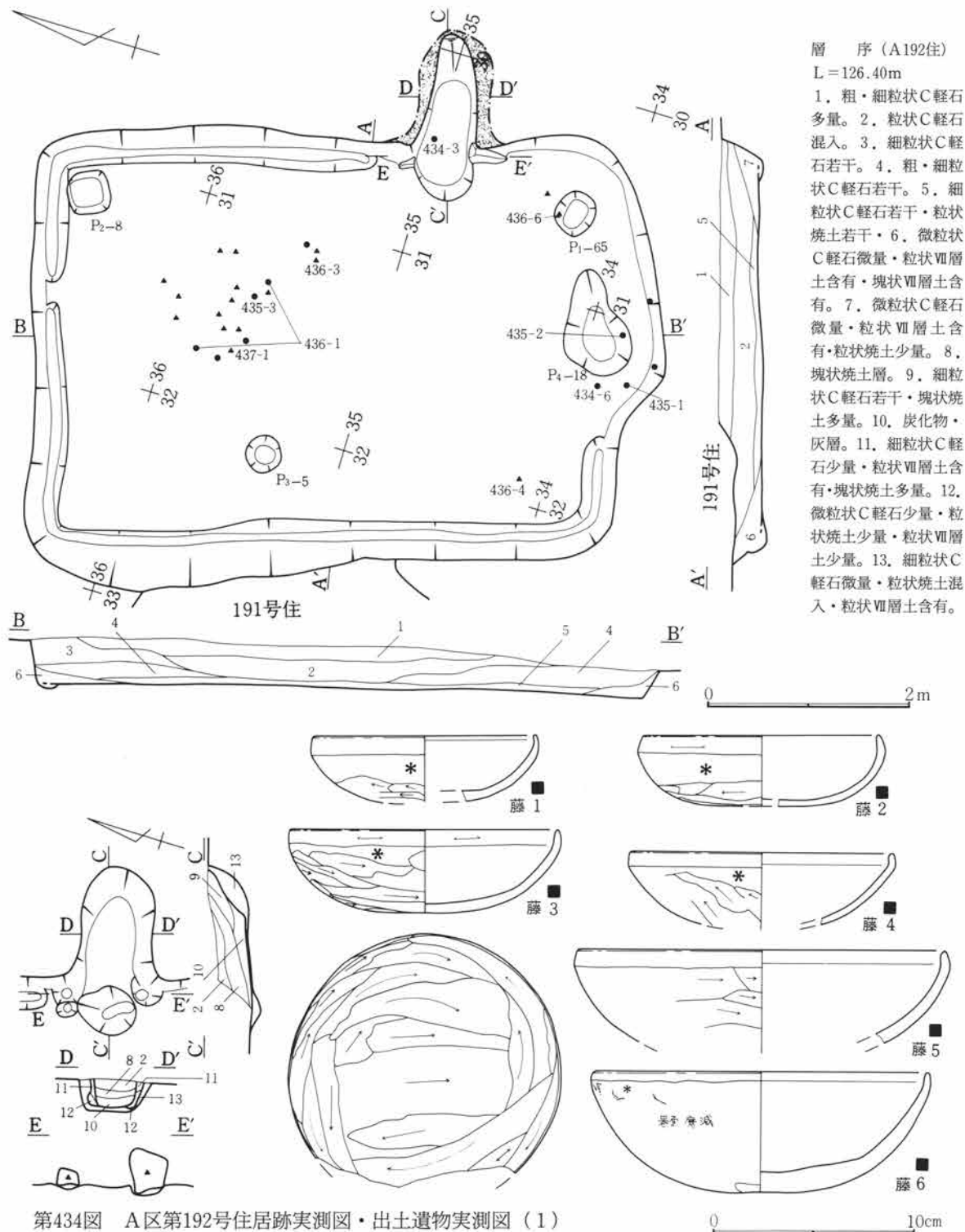
第433図 A区第191号住居跡出土遺物実測図(3)

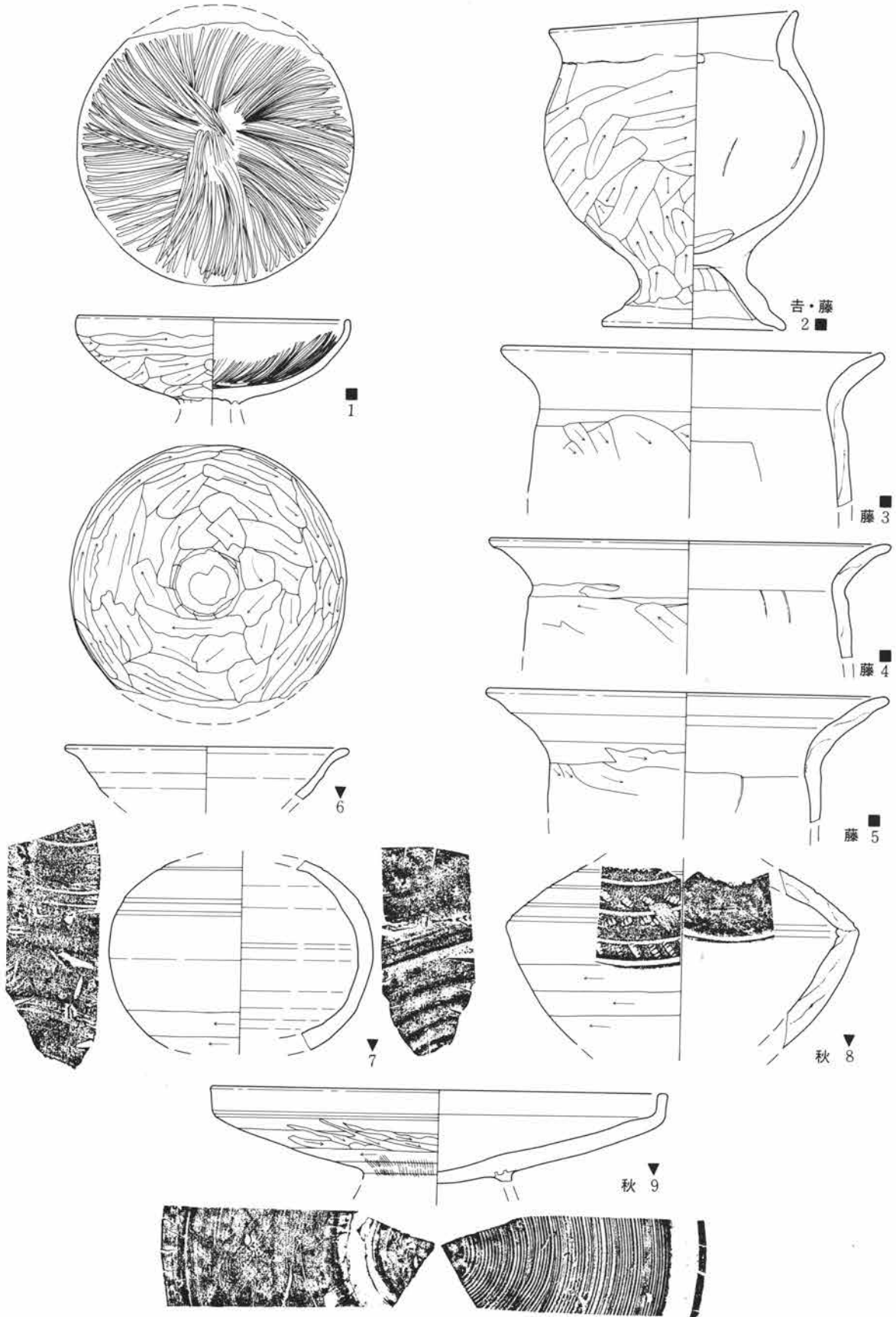
遺構名称	A区第192号住居跡		位置	30~33-A-34~36グリッド内。		残存深度	約42cm
平面形態	横長方形。	規模	4.40m×6.24m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-74度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	カマド・南東隅部側は認められない。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・楕円形状。41×38cm・深度-65cm			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	P <sub>4</sub> の土坑状の掘り込が認められた程度である。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から120cm。			主軸方位	北-78度-南	
改築	有。掘り方内から焼土・炭化物を検出。		形状	長い舌状を呈し屋外に突出する。			
規模	全長160cm・屋外長104cm・屋内長 56cm・袖部幅125cm・燃烧部幅 50cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	左右両袖共、先端側に礫を用いて補強材としている。					
煙道	未検出。		掘り方	長い舌状を呈している。			
遺物出土状態	覆土内の出土がやや多い。						

所見 当住居跡は、A191・197住に切られているが、破壊は上屋のみに止まったことにより遺存は比較的良好である。住居は規模の大きい横長方形を呈し、南壁側は歪んだ状態で張り出している。住居の指向方向は、主軸値-16度と北側に振っている。東壁の南東隅部に寄った位置にカマドを備えている。カマドは、左右袖が河原円礫を用い補強しているが、袖自体は微小の状態である。燃烧部は幅が狭く長い。煙道は燃烧部奥壁がそのまま立ち上がるものと考えられる。尚この奥壁は仰角45度程で立ち上がっている。掘り方では、袖部直下から、袖の補強材の据え方と考えられる掘り込みが、左側で2ヶ所連続した状態で検出され、右側では1ヶ所検出されている。この内左袖下の状況からは、カマドの改築が示唆される。南東隅部で検出されている傍竈坑は、同隅より住居内中央にやや寄った位置で検出され、深度が-65cmと柱穴を思わせる程の深度を備えている。他方、北東隅部でもP<sub>2</sub>の掘り込みがあるものの、深度が-8cmと浅いものである。又、P<sub>3</sub>は、住居内中央よりやや西側に寄った位置で検出されているが、深度は-5cmとP<sub>2</sub>より更に浅い。このP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>に

第4章 検出された遺構・遺物

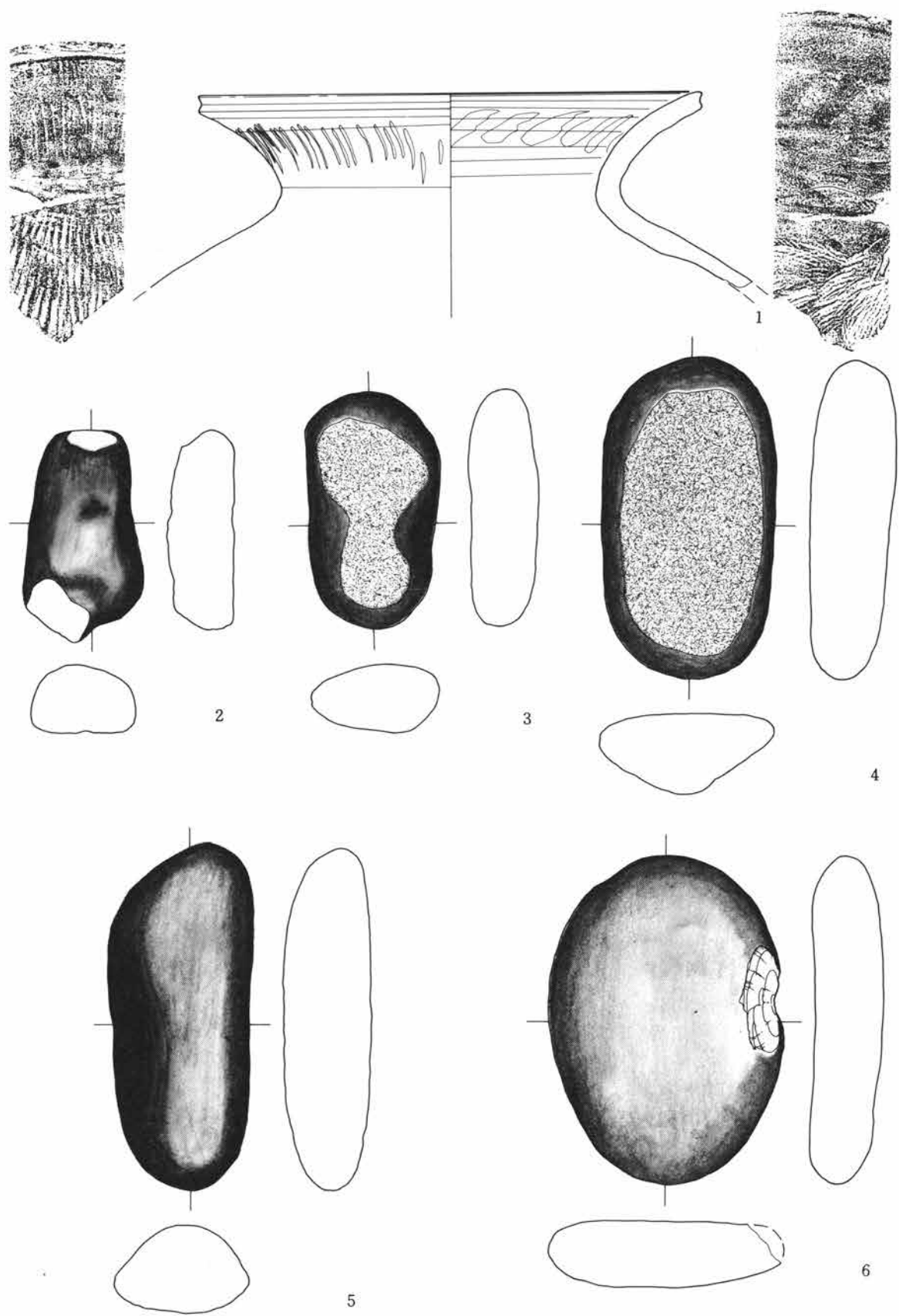
就いての性格は不明である。壁溝は、南壁の張り出し部分とカマド部以外では全周する。尚、この壁溝部での住居規模(3.6m×5.35m)を前述してきた公約数30・36cmで、各々を除すれば、前者が12:17.8後者が10:14.8の数値が得られ、特に後者は3:2の比率となり、尺度の使用を考慮すれば、後者は、高麗尺による住居設計(計画)があったことが想定される。だが、具体的には、高麗尺という固有の尺度を特定出来ないが、通有に「36cm=高麗尺」とする説を用いたが、古代7世紀代まで使用があった長尺の1単位で日本固有の尺度とも推測される。住居形状はC区の第II段階に対比される。





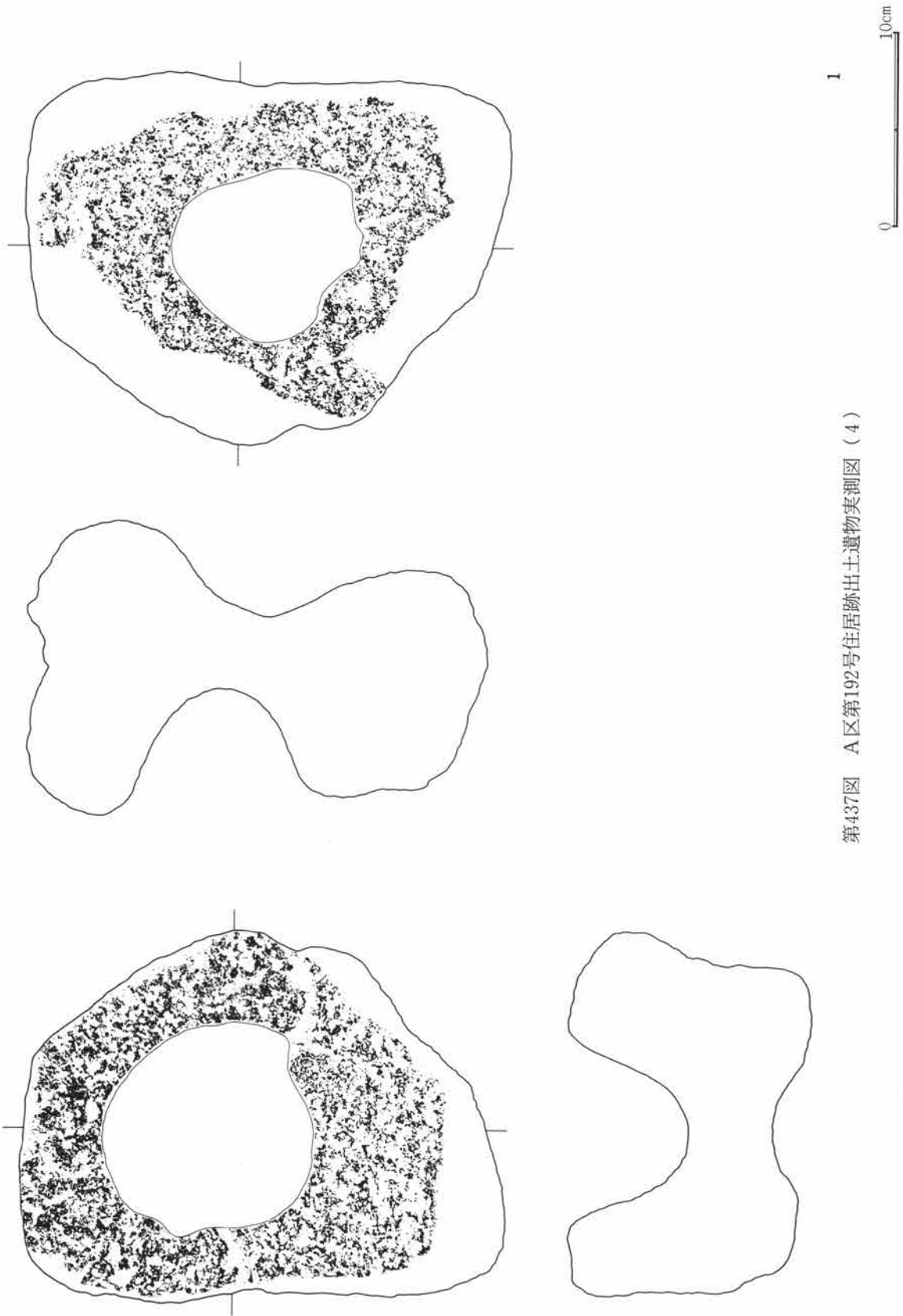
第435図 A区第192号住居跡出土遺物実測図(2)

0 10cm



第436図 A区第192号住居跡出土遺物実測図(3)

0 10cm

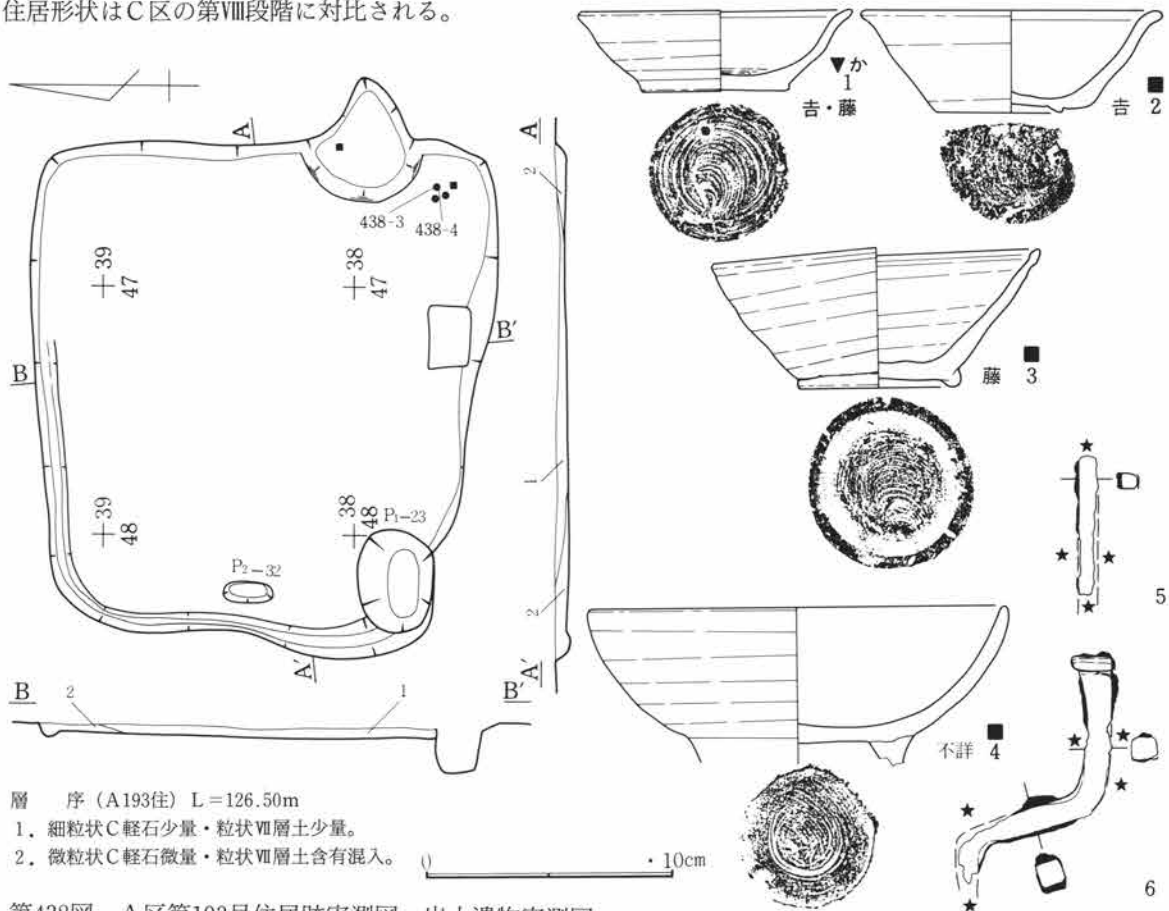


第437図 A区第192号住居跡出土遺物実測図(4)

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	A区第193号住居跡		位置	47~49-A-38~40グリッド内。		残存深度	約10cm
平面形態	縦長方形。	規模	4.1m×3.72m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-90度-南位か
壁	詳細不分明。		床面	地山Ⅶ層土及び152住の覆土を使用する。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から52cm。			主軸方位	北-90度-南位か	
改築	有。掘り方内から焼土を検出している。			形状	詳細不分明。		
規模	全長100cm・屋外長 50cm・屋内長 50cm・袖部幅 95cm・燃烧部幅 52cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
	袖	詳細不分明。					
煙道	未検出。			掘り方	燃烧部が山形を呈する。		
遺物出土状態	南東隅部に若干集中する。						

所見 当住居跡は、A194・195住を切り構築している。住居は、東壁中央より南東隅部に偏在した位置に備えている。傍竈坑は検出されなかったが、南東隅部周辺の床面直上から第193図-1~4が出土している。そして、南西隅部からはP<sub>1</sub>が検出されているが、当住居跡に直接伴うものかは、調査段階での証左は得られていない。壁溝は、北壁の西側半分と西壁直下で検出されているが、A195住と重複する部分は不分明である。住居形状はC区の第Ⅷ段階に対比される。

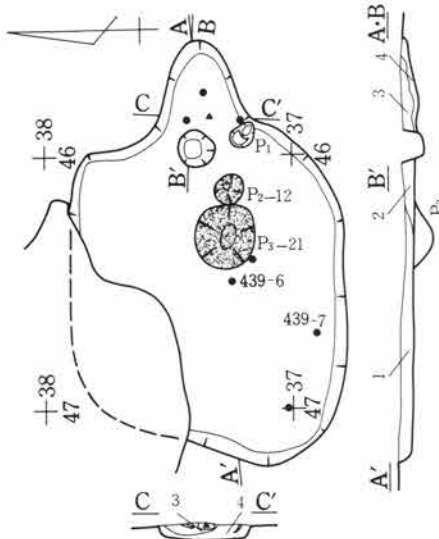


層序 (A193住) L=126.50m

1. 細粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土少量。
2. 微粒状C軽石微量・粒状Ⅶ層土含有混入。

第438図 A区第193号住居跡実測図・出土遺物実測図

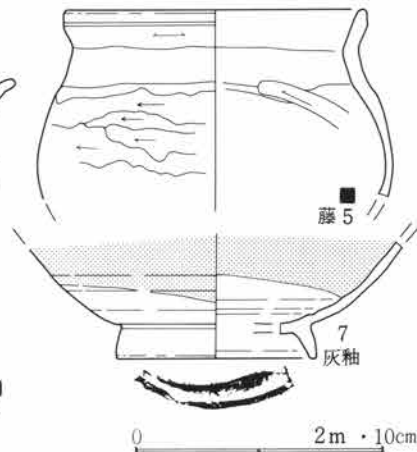
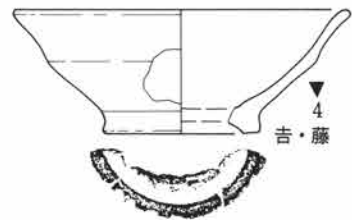
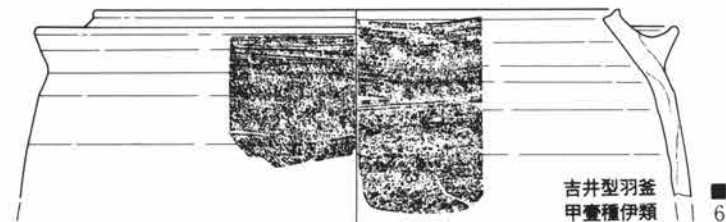
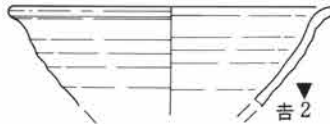
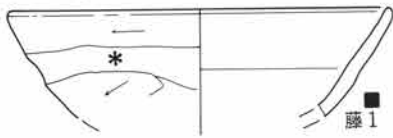
遺構名称	A区第194号住居跡		位置	46～48-A-37～39グリッド内。		残存深度	約10cm
平面形態	縦長方形基調。	規模	2.7m×2.2m	構築基準辺	不明	主軸方位	北-90度-南位か。
壁	詳細不明		床面	地山VI・VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し（部分的な掘り込の可能性はある）。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から50cm。			主軸方位	北-89度-南	
改築	不明。			形状	舌状を呈する。		
規模	全長 90cm・屋外長 60cm・屋内長 30cm・袖部幅120cm・燃烧部幅 60cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。						
			袖	無し。			
煙道	未検出。		掘り方	詳細不明。			
遺物出土状態	遺存不良な為、出土は床面直上が占める。						



所見 当住居跡は、前述のA193住に切られている。住居は、全体に均整がとれてなく、縦長方形基調ではあるものの、不整形に近い。カマドは東壁中央部に備え、全体に舌状を呈し左右両袖は検出されていない。又、掘り方も無い状態ではあるが、右袖に相当する位置からは、補強材の据え方状のピットが検出されている。この点では改築により袖は無くなったと考えられる。傍竈坑等の施設は未検出である。住居の掘り方では、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>が検出されている。住居形状はC区の第VI・VII段階に対比される。

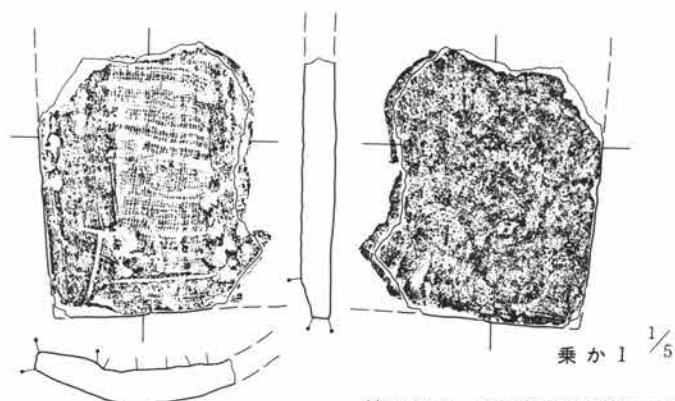
層序 (A194住) L=126.40m

1. 細粒状C軽石少量。2. 細粒状C軽石若干・粒状焼土少量・粒状炭化物・灰層含有。3. 細粒状C軽石少量・粒状焼土含有。4. 微粒状C軽石若干・粒状VII層土少量。



第439図 A区第194号住居跡実測図・出土遺物実測図(1)

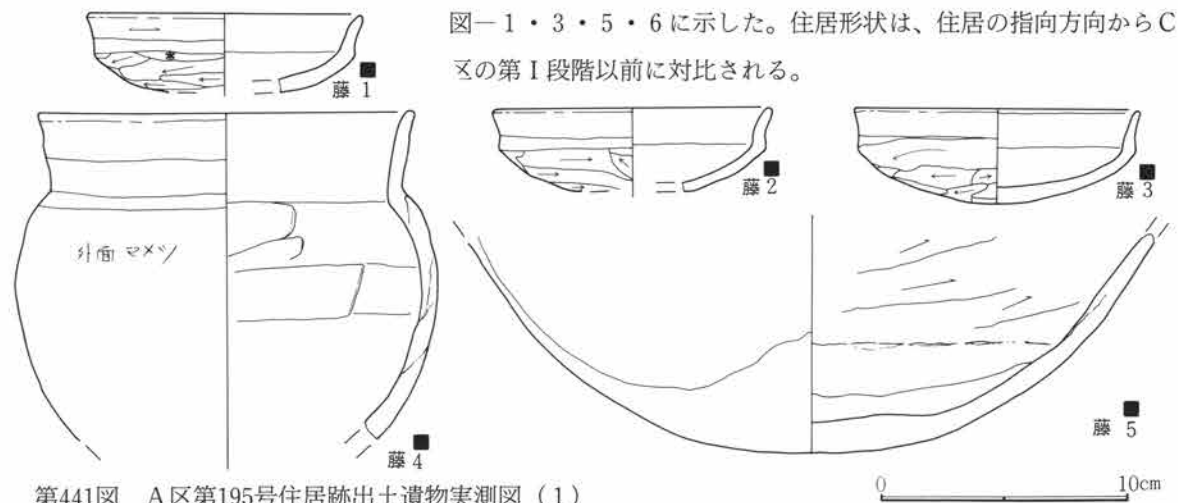
0 2m 10cm



第440図 A区第194号住居跡出土遺物実測図(2)

遺構名称	A区第195号住居跡		位置	45~48-A-39~42グリッド内。		残存深度	約12cm
平面形態	正方形。	規模	5.7m×5.40m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北-60度-南
壁	詳細不分明。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	全周。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無し。						
遺物出土状態	北隅部で礫が配置された状態で検出されている。						

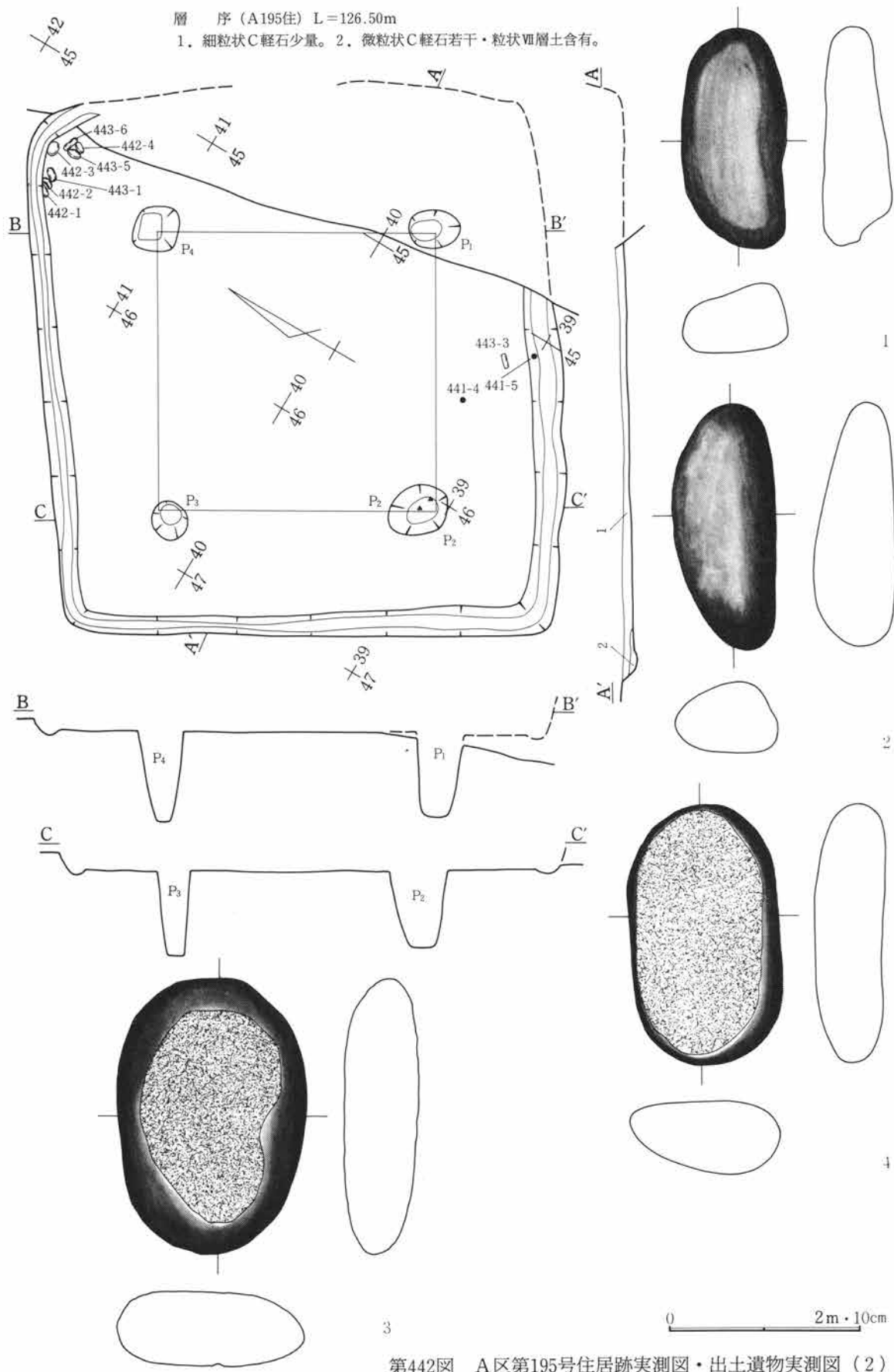
所見 当住居跡は、前述のA193住に切られ、更に、A1溝に住居跡の東側3分の1程が切られ失なわれている。住居は、上述のとおり東壁側の破壊があり、他の3壁ではカマドが検出されていないことから、カマドが付設されたとすれば、この東壁に構築されたと判断出来る。又、この点は、当遺跡での通有の在り方である。主軸の指向方向では、主軸値-30度を示している。主柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本が検出されている。この4本の主柱穴は、何れも深度が80cm以上あり深くしっかりとした柱穴である。この主柱穴の計画線を想定すれば第441図内のおおりであり、この柱穴計画位置での柱間長は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>-P<sub>4</sub>とP<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>とP<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>では、公約数36cmでは各々8単位となる。この8単位は、前述してきたとおり高麗尺8尺に相当する。そして、住居内壁溝迄の柱穴計画線からの距離は各々3単位が算出され、都合、1辺長は14尺となる。壁溝は、住居跡の検出部の壁下で全周している。出土遺物では、住居内北隅部の直下から、礫器が8点と集中して床面直上から出土しており、住居の存続期間中に置かれてあった状態と推定される。この礫器は第441図-1~4・第442



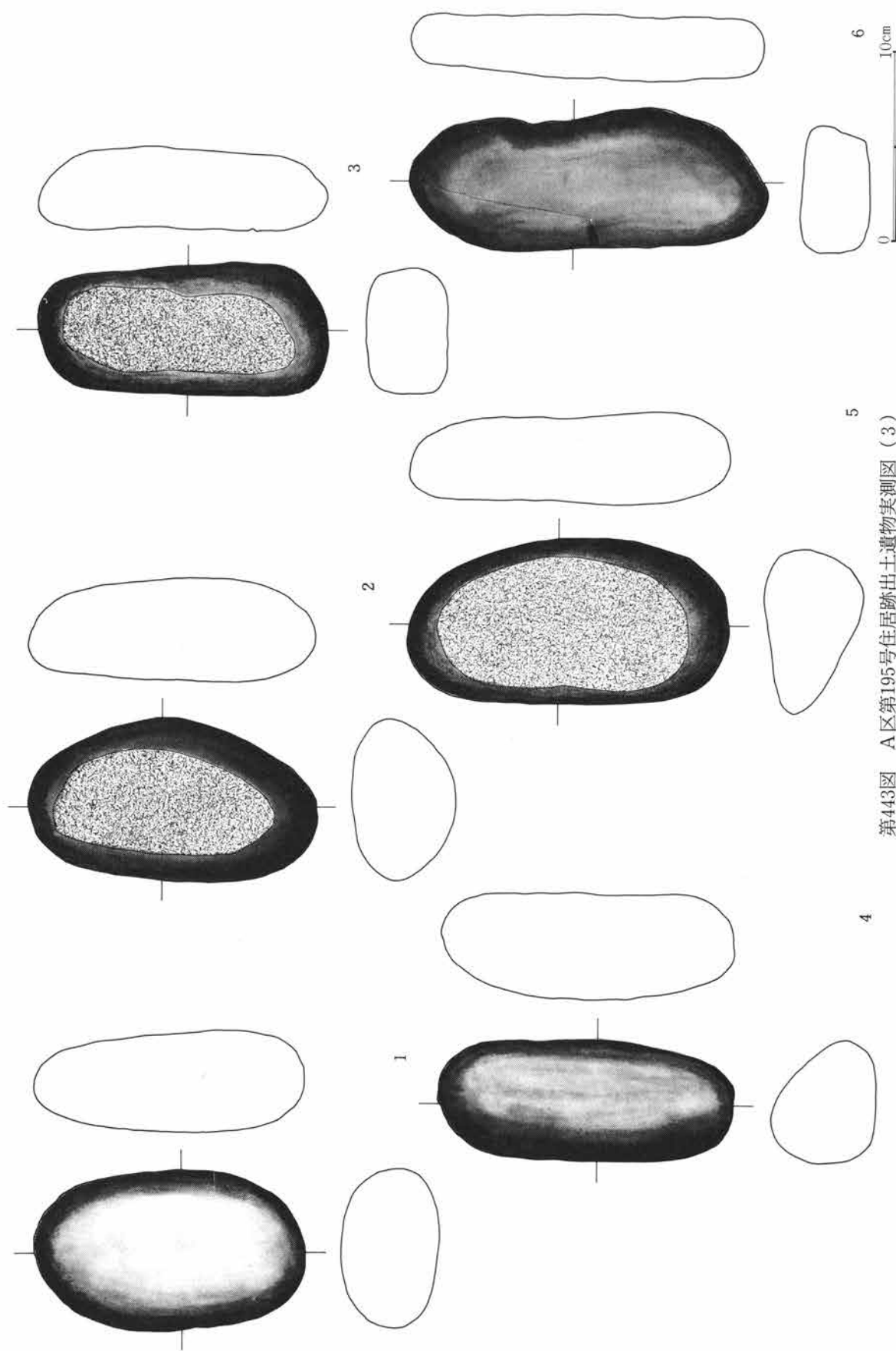
第441図 A区第195号住居跡出土遺物実測図(1)



第3節 検出された住居跡について



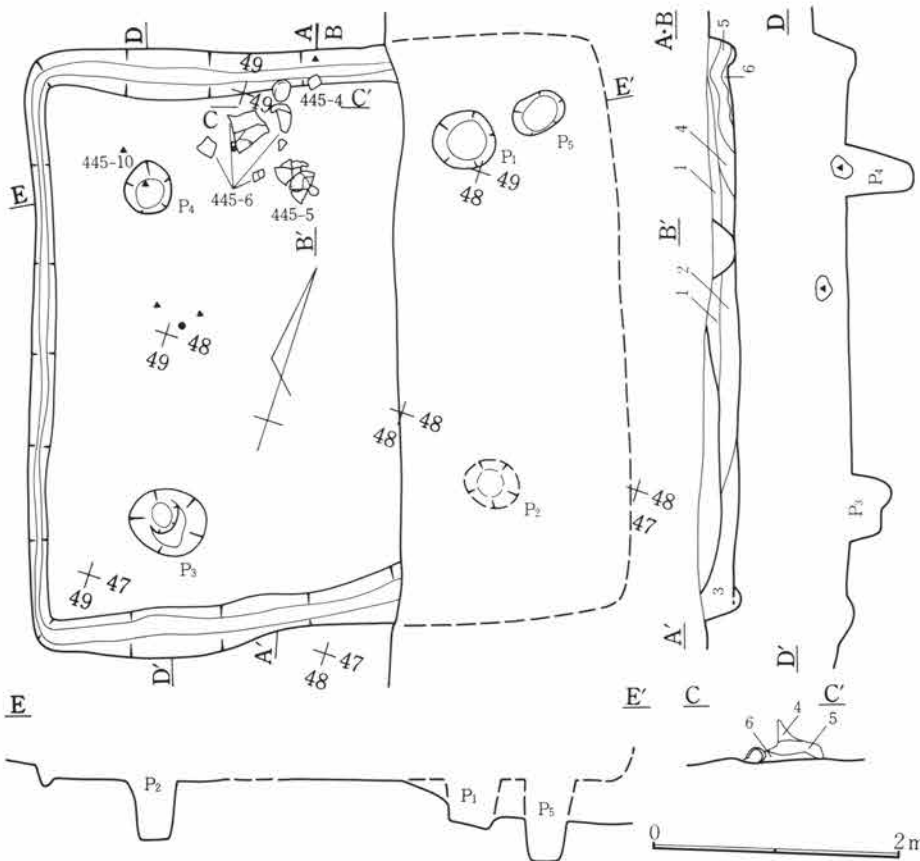
第442図 A区第195号住居跡実測図・出土遺物実測図(2)



第443図 A区第195号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	A区第196号住居跡		位置	48~50-A-47~50グリッド内。		残存深度	約34cm
平面形態	正方形か。	規模	4.80m × $3.00 + \alpha$ (4.80)m	構築基準辺	西壁	主軸方位	北- $341$ (-19)度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	地山VII層土を使用し平坦。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>5</sub> ・楕円形状。42×30cm・深度(-60)cm			
柱穴	未検出。P <sub>1</sub> ・P <sub>3</sub> ・P <sub>4</sub> を検出している。P <sub>2</sub> は机上での推定。P <sub>3</sub> の底面状態から据え変えの可能性が有る。						
掘り方	無。						
遺物出土状態	カマドと考えられる部分より甗が1個体(第441図-6)が出土している。						

所見 当住居跡は、東側半分程をA1溝の破壊により失なっている。こりA1溝の破壊によりカマドも失なっている。住居は、当遺跡の通有例からすれば、東壁にカマドを備えたと考えられる。住居形状は、A1溝の壁・溝底面から残存したP<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>が検出されており、この両者の位置関係から形状を復元すれば、概、正方形を呈したことが推定出来る。住居の指向方向は、主軸値-19度となり北側へ振っている。支柱穴は3本検出されたが(P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>)、P<sub>2</sub>が検出されないながらも、図上の位置周辺に推定され、4本で構成されたと考えられる。この4本の支柱穴の計画柱間は、1単位を36cmと想定した場合、7単位となり、前述A195住と同様な柱穴の位置計画があったと推定されるが、P<sub>1</sub>の位置にやや問題がある。しかし、この部分を上図から算出



すると、北側に更に1単位分を延ばした位置にP<sub>1</sub>の芯心がある。この点から、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>は8単位=8尺であった可能性も考慮される。同様に住居1辺長をA195住同様に壁溝の位置で求めると12単位となり、柱穴位置から、各々壁側へ2.5単位延ばした位置関係となる。出土遺物は、北壁下中央部周辺で集中して出土しており、この中には第444図-6の完形の甗が含まれている。住居形状は主軸の指向方向、支柱穴の存在からC区の第

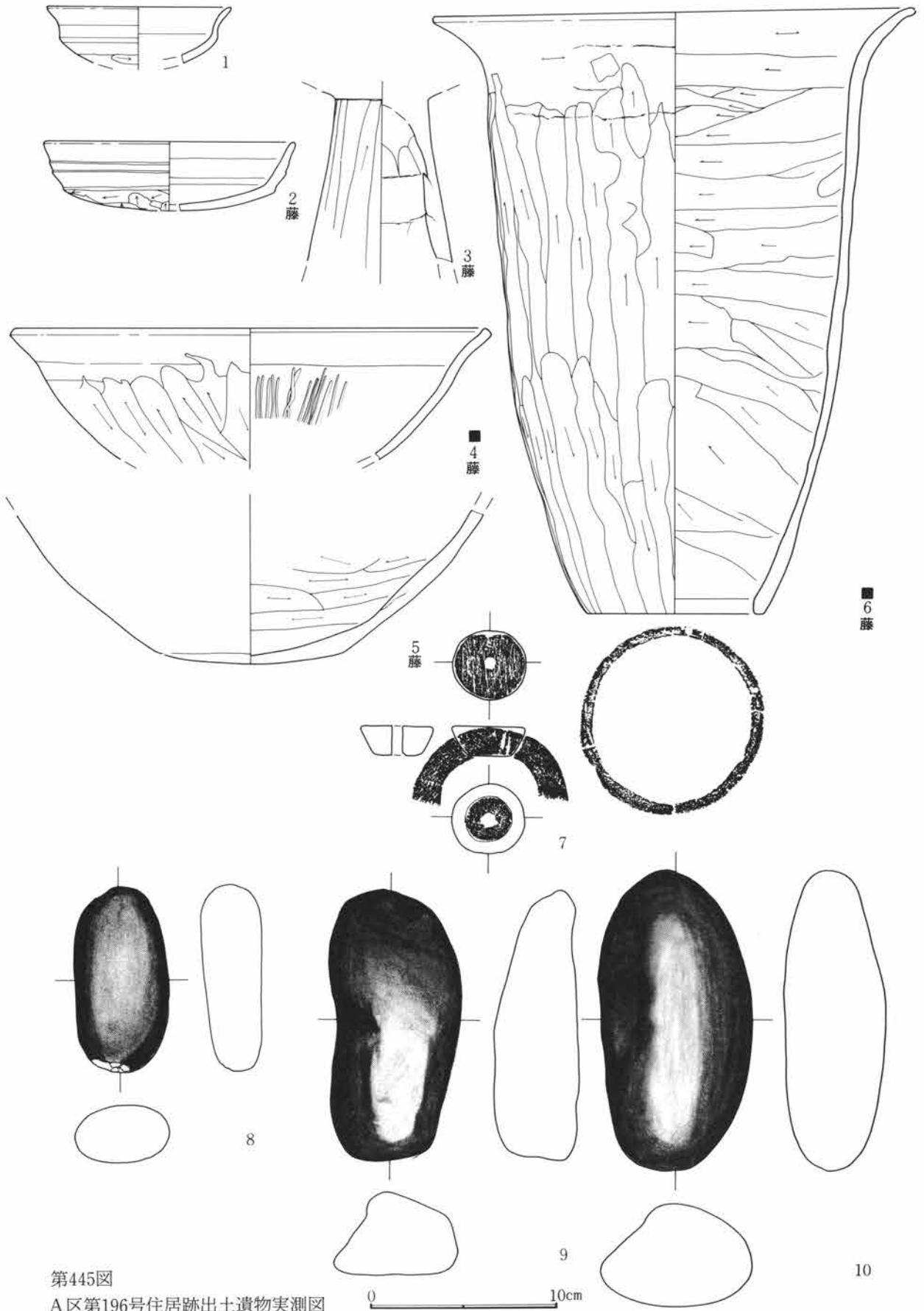
層序 (A196住) L=126.70m

1. 粗・細粒状C軽石多量。2. 粗粒状C軽石混入。3. 粒状C軽石含有・粒状VII層土含有。4. 粒状C軽石混入・粒状焼土多量。5. 粒状C軽石含有・粗粒状焼土多量・粒状焼土多量。6. 細粒状C軽石若干・粒状粘土多量・粒状焼土少量。

第444図 A区第196号住居跡実測図

I 段階に対比される。

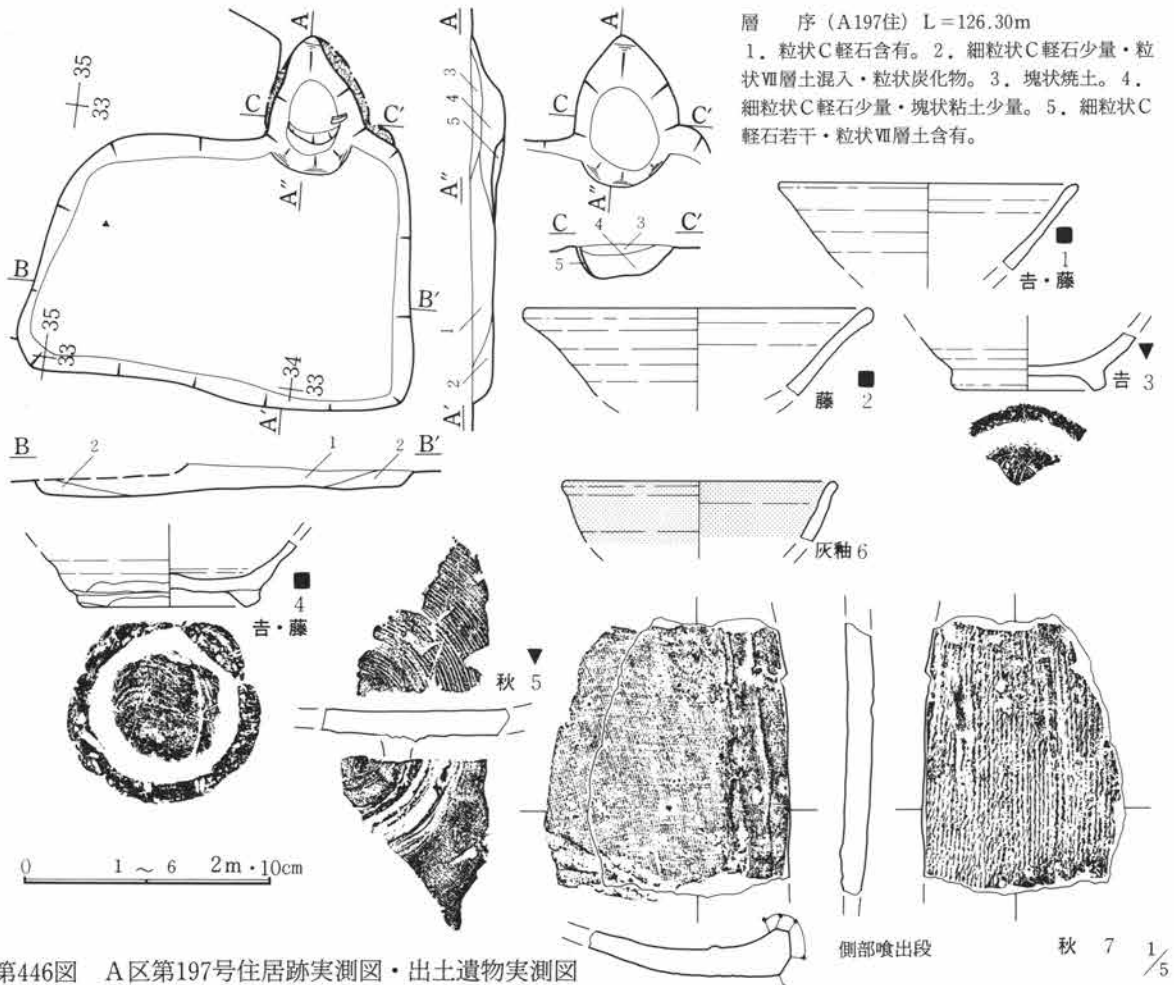
第4章 検出された遺構・遺物



第445図  
A区第196号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	A区第197号住居跡		位置	32~34-A-34~36グリッド内。		残存深度	約22cm
平面形態	横長方形。	規模	3.21m× 2.0m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北-83度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を一部に使用し、大半はい208住の覆土を使用。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	無しか。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から30cm。			主軸方位	北-83度-南	
改築				形状			
規模	全長110cm・屋外長 74cm・屋内長 36cm・袖部幅 80cm・燃烧部幅 70cm?。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。右壁を瓦で補強したのか。						
煙道	未検出。		掘り方	鶏卵状を呈する。			
遺物出土状態	遺物の出土は殆ど無かった。						

所見 当住居跡はA204・192住を切り構築し、北側でA191住に切られている。住居は東壁中央よりやや南東隅部寄りに燃烧部幅の広いカマドを備えている。南東隅部から傍竈坑は検出されていない。カマドは袖が付設されず、煙道は仰角10度程で立ち上がる。住居形状はC区の第Ⅷ段階に対比される。

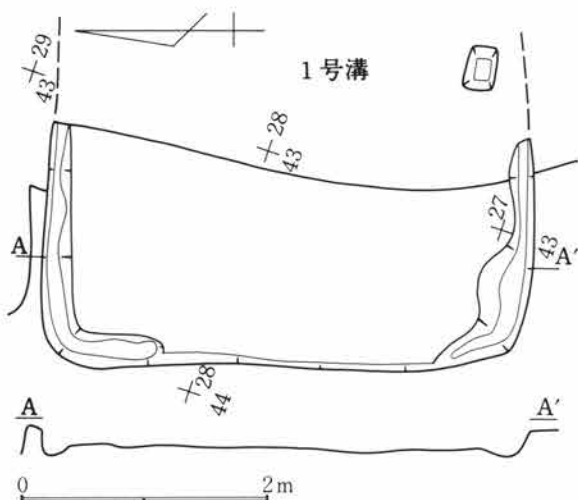


第446図 A区第197号住居跡実測図・出土遺物実測図

第4章 検出された遺構・遺物

遺構名称	A区第198号住居跡	位置	43～45-A-27～29グリッド内。	残存深度	約20cm
平面形態	不分明。	規模	1.8+ $\alpha$ m×3.98m	構築基準辺	西壁か 主軸方位
A区第1号溝状遺構の破壊により詳細不詳。					

所見 当住居跡はA1溝に大半が破壊され、残存する部分は、住居の東側半分程と考えられるが、明らかな遺存量は尚不分明である。又、A1溝の調査段階で、調査の下手際により誤って当住居跡も掘り下げてしまい、この為土層断面等も観察されず、住居跡自体の詳細を窺知し得て状況等を欠している。この為、当住居跡の



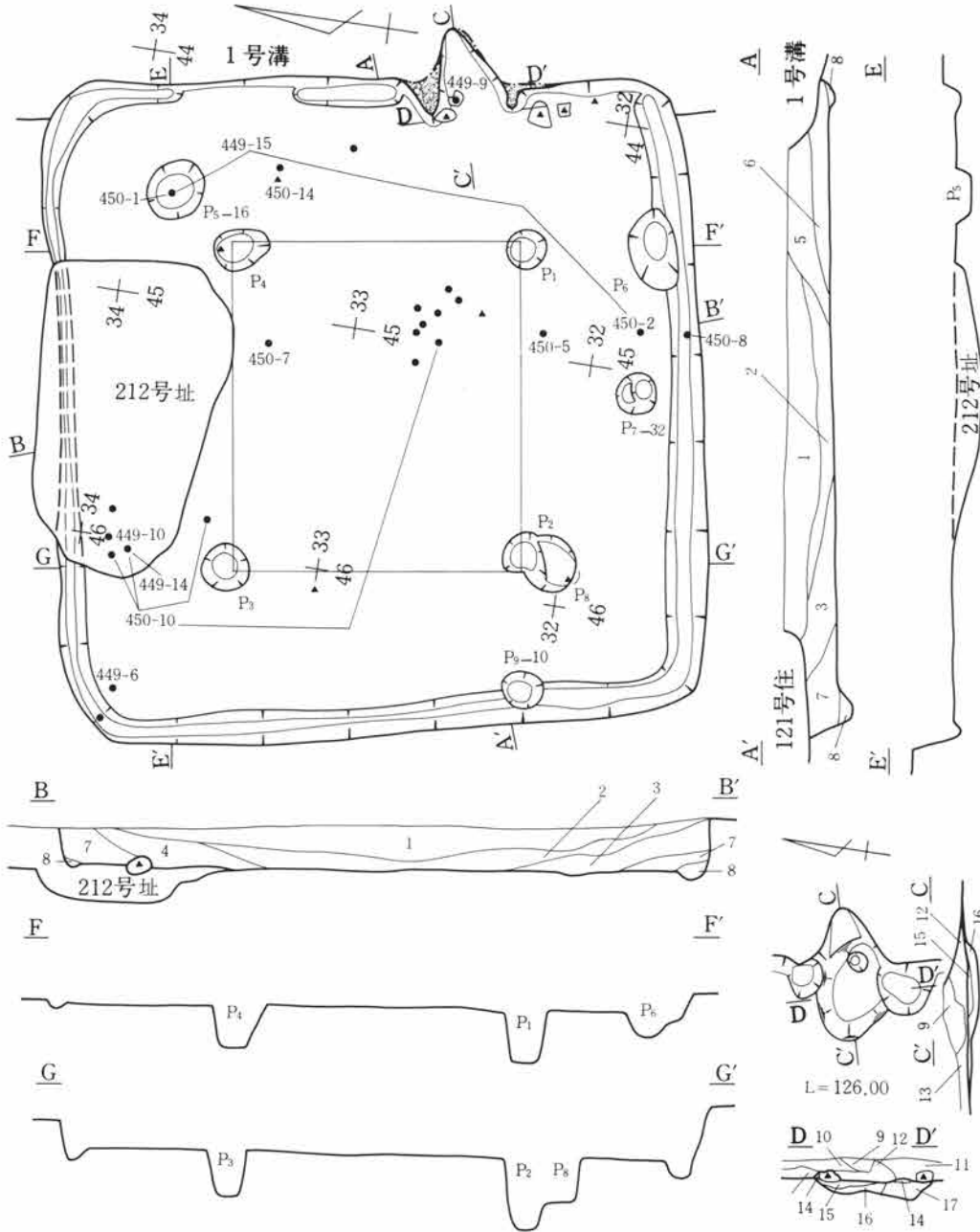
第447図 A区第198号住居跡実測図

詳細は不分明である。この状況下で明らかなことは、南北壁下で検出された壁溝の存在と、恐らく支柱穴は備えない住居であることが考えられる。又、住居跡の主軸の指向方向は、主軸値が-18度である。出土遺物もA1溝の調査時に、A1溝の出土遺物に混入してしまった。そして、A1溝の整理時に分別を試みたが、判然とする証左が無く分別は不能であった。現状では、支柱穴が不備である点と壁溝を備える点、そして、主軸の指向方向が北側に振る点しか明らかではない。これらの状況から、当住居跡の形状を復元すると正方形指向であったと推測される。この点からC区の第II段階の住居跡に対比される。

遺構名称	A区第199号住居跡	位置	44～47-A-32～35グリッド内。	残存深度	約39cm
平面形態	正方形。	規模	5.50m×5.40m	構築基準辺	不分明(南壁か) 主軸方位
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。	床面	地山VII層土を使用し平坦。		
壁溝	ほぼ全周。	傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>5</sub> か。楕円形。50×45cm・深度-16cm		
柱穴	P <sub>1</sub> ～P <sub>4</sub> は支柱穴。P <sub>7</sub> は出入口施設に伴う柱穴か。P <sub>8</sub> ・P <sub>9</sub> はP <sub>2</sub> の補助柱穴か。				
掘り方	無し。				
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から114cm。		主軸方位	北-62度-南
改築	有。掘り方内で粒土を検出している。		形状	遺存不良であるが、舌状を呈する。	
規模	全長 74cm・屋外長 43cm・屋内長 31cm・袖部幅110cm・燃焼部幅 50cm。				
焚口・燃焼部	焚口は広い。燃焼部は、A1溝に切られ遺存不良な為詳細は不分明であるが、比較的幅の広い状態と考えられる。				
	袖	左袖は右袖より大きい。左袖は先端側を礫で補強する。			
煙道	未検出。	掘り方	両袖の補強材の据え方が検出されている。		
遺物出土状態	住居規模に比較して遺物の出土量は少ない。出土層位では床面直上層中の出土が多い。				

所見 当住居跡は、A181住に南西隅部周辺を切られているものの、A181住の掘り込みが比較的浅かった為と、当住居の掘り込みが深かった為、平面形状は完全に露呈されたが、東側では、A1溝が重複し東壁側の大半を破壊している。住居は、東壁中央よりやや南東隅部に寄った位置にカマドを備えている。又、傍竈坑に対比される貯蔵穴の掘り込みは、P<sub>4</sub>に近接するP<sub>5</sub>が相当するものと考えられる。カマドは、A1溝に燃焼部より煙道が破壊されているが燃焼部は僅かに遺存していたが、同部の詳細に就いては不分明な点が多い。

袖は、左右両袖共先端側を地山砂岩質土の切り出し材を用い補強している。柱穴は、主柱穴のP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>・P<sub>8</sub>と入口施設に伴うと考えられるP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>と、西側の土層に係わると考えられるP<sub>9</sub>が検出されている。これらの柱穴の配置は、第448図内に略図で示した。この中で、P<sub>6</sub>は、P<sub>4</sub>-P<sub>1</sub>の目筋に通っており、P<sub>9</sub>はP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>の目筋に通っている。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の柱間は公約数30cmでP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>が9単位・P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>が8単位による。住居の1辺は同様に17単位となり、唐尺の使用が想定される。住居形状はC区の第II段階に対比される。

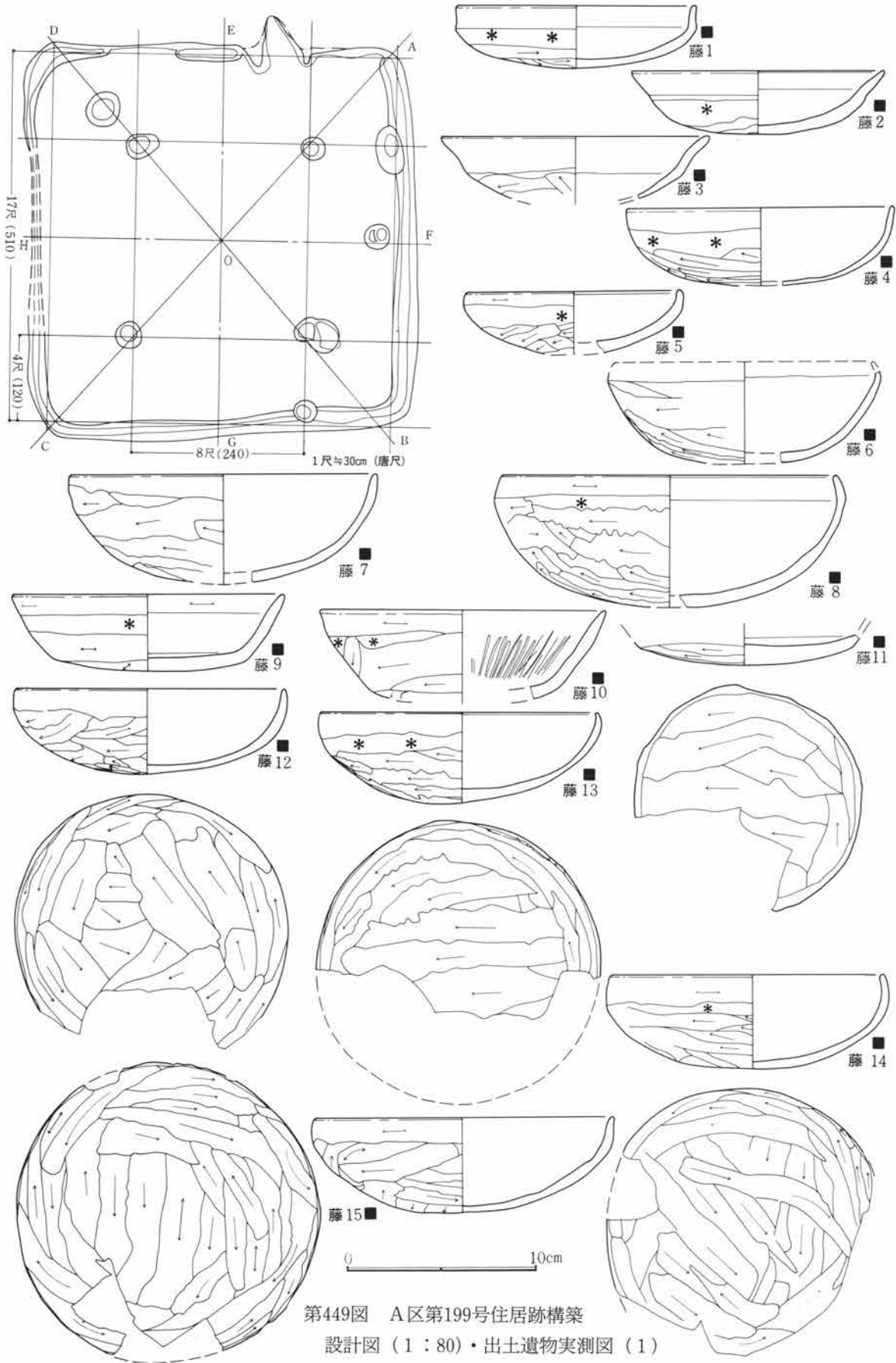


層 序 (A199住) L=126.30m

1. 粗・細粒状C軽石多量。
2. 細粒状C軽石少量・塊状Ⅶ層土多量。
3. 粒状C軽石多量。
4. 粒状C軽石多量・粗粒状Ⅶ層土多量。
5. 細粒状C軽石少量・粗粒状粘土少量・粒状焼土少量。
6. 細粒状C軽石少量・粒状焼土含有・粒状粘土含有。
7. 細粒状C軽石少量・塊状Ⅶ層土少量。
8. 粗・細粒状C軽石多量・塊状Ⅶ層土多量。
9. 塊状灰白色粘土。
10. 粒状C軽石混入・粒状焼土多量。
11. 粒状C軽石含有・塊状焼土多量。
12. 細粒状C軽石若干・粒状焼土多量・粗粒状粘土少量。
13. 12近質。
14. 塊状粘土。
15. 微粒状C軽石若干・塊状粘土多量・粒状焼土少量。
16. 細粒状C軽石若干・塊状粘土多量・粒状焼土多量。
17. 粒状C軽石含有。

第448図 A区第199号住居跡実測図

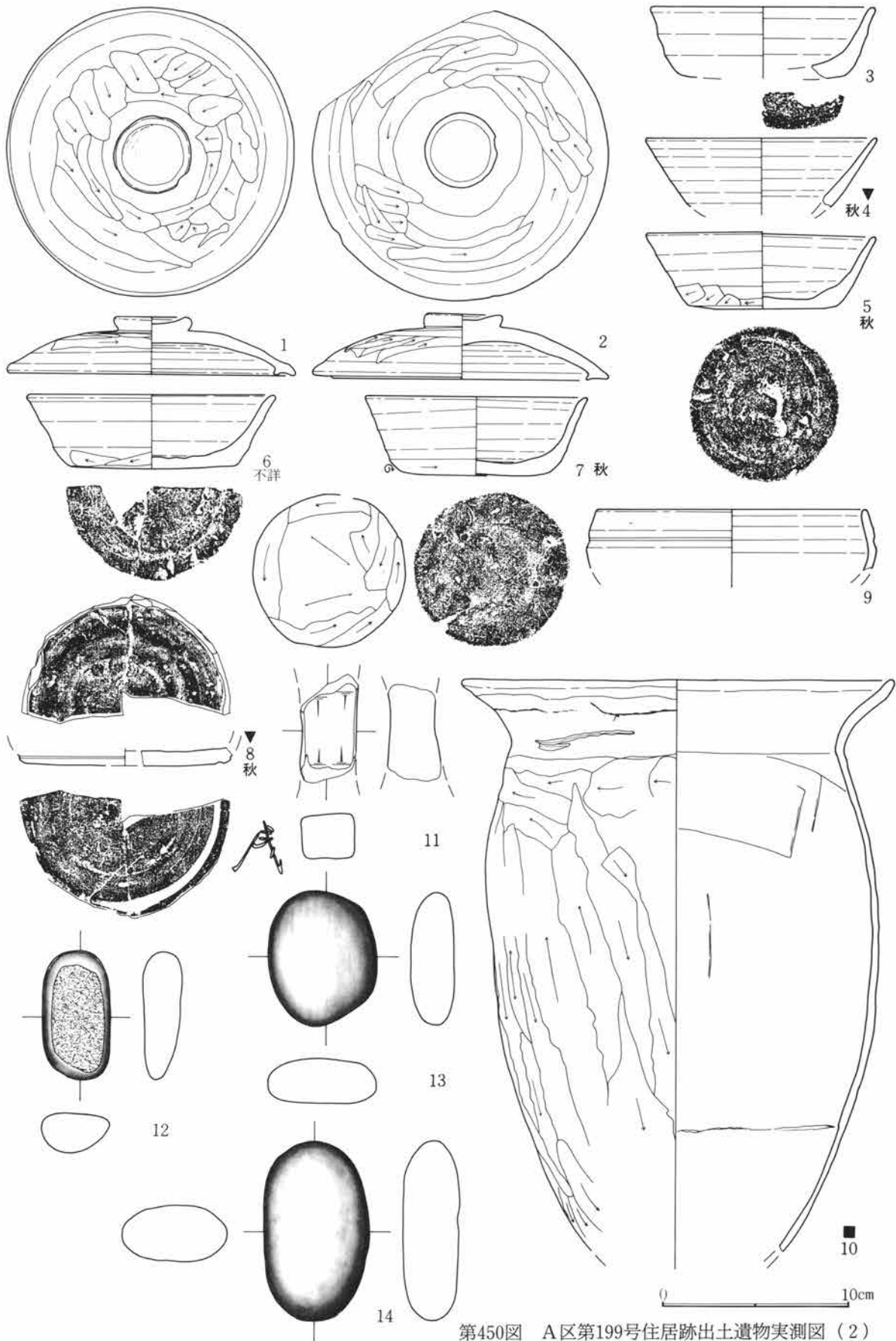
0 2m



第449図 A区第199号住居跡構築  
設計図(1:80)・出土遺物実測図(1)

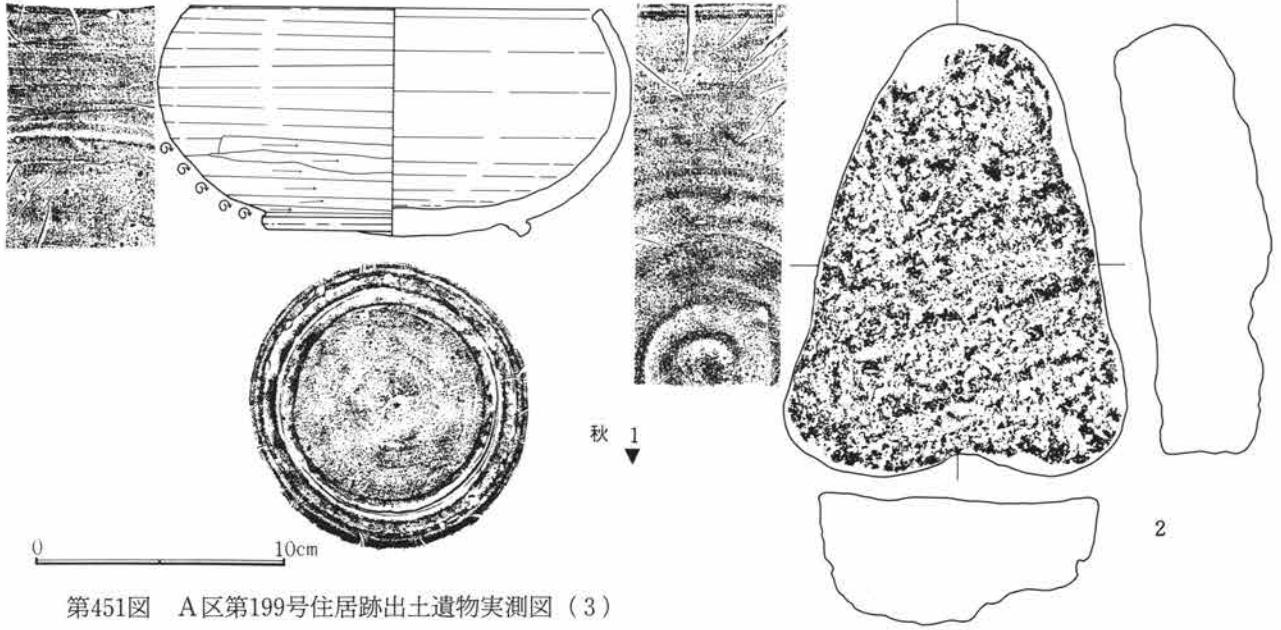


第3節 検出された住居跡について



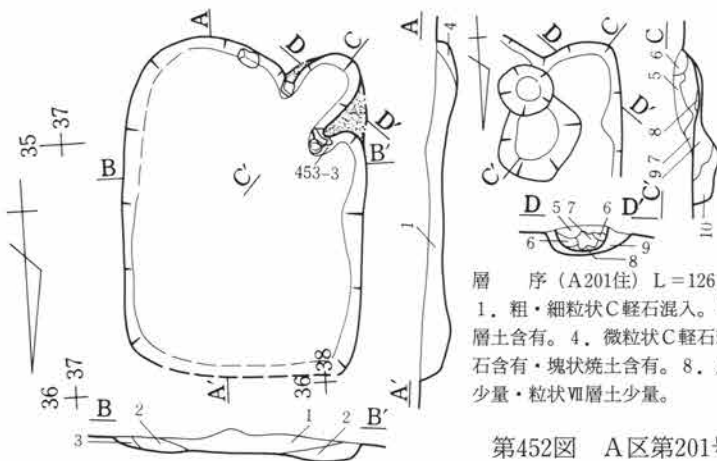
第450図 A区第199号住居跡出土遺物実測図(2)

第4章 検出された遺構・遺物



第451図 A区第199号住居跡出土遺物実測図(3)

遺構名称	A区第201号住居跡		位置	38・39-A-35・36グリッド内。			残存深度	約19cm
平面形態	縦長方形。	規模	2.65m×1.95m	構築基準辺	西壁か	主軸方位	北-185度-南	
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	全体に中央が膨れ上がる状態になっている。				
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	未検出。				
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。							
掘り方	調査の不利により不分明な点が多い。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から0cm。				主軸方位	北-215度-南	
改築	有。掘り方に右袖の削り出しが残る。			形状				
規模	全長 75cm・屋外長 42cm・屋内長 33cm・袖部幅 90cm・燃烧部幅 46cm。							
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。							
	袖	右袖が長く、左袖は短かく突出する。						
煙道	未検出。			掘り方	山形状で三角形を呈する。			
遺物出土状態	遺物の出土は非常に少量であった。							



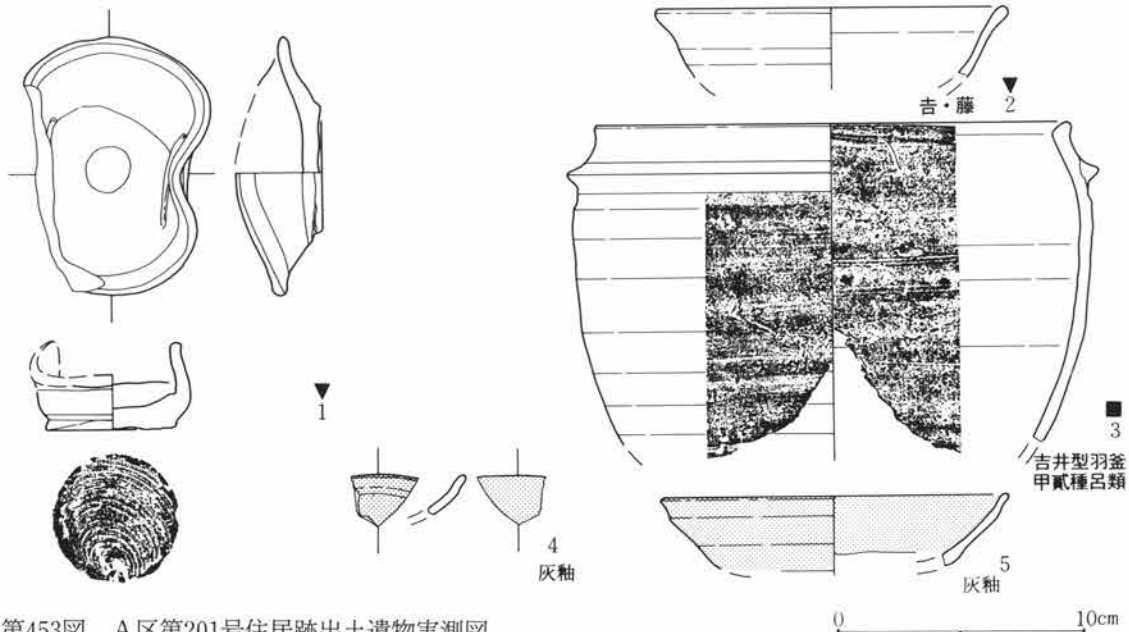
所見 当住居跡は、切り合い関係のない単独住居跡である。住居は長軸2.65mを測る縦長方形を呈している。カマドは、南西隅部に構築している。傍竈坑は検出されていない。カマドは、南

層序 (A201住) L=126.50m

1. 粗・細粒状C軽石混入。2. 細粒状C軽石少量。3. 微粒状C軽石微量・粒状Ⅶ層土含有。4. 微粒状C軽石若干。5. 1近質。6. 塊状焼土混入。7. 細粒状C軽石含有・塊状焼土含有。8. 炭化物・灰層。9. 粒状C軽石多量。10. 細粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土少量。

第452図 A区第201号住居跡実測図

西隅部に具備するが、他例の隅部にカマドを備える住居跡の場合は、南東隅部となり、南西隅部にカマドを付設する例は、南側調査区内では唯一の住居跡である。袖は左右両袖は短かく屋内に向かい突出し先端に補強材を備えている。住居形状はC区の第IX段階に対比される。

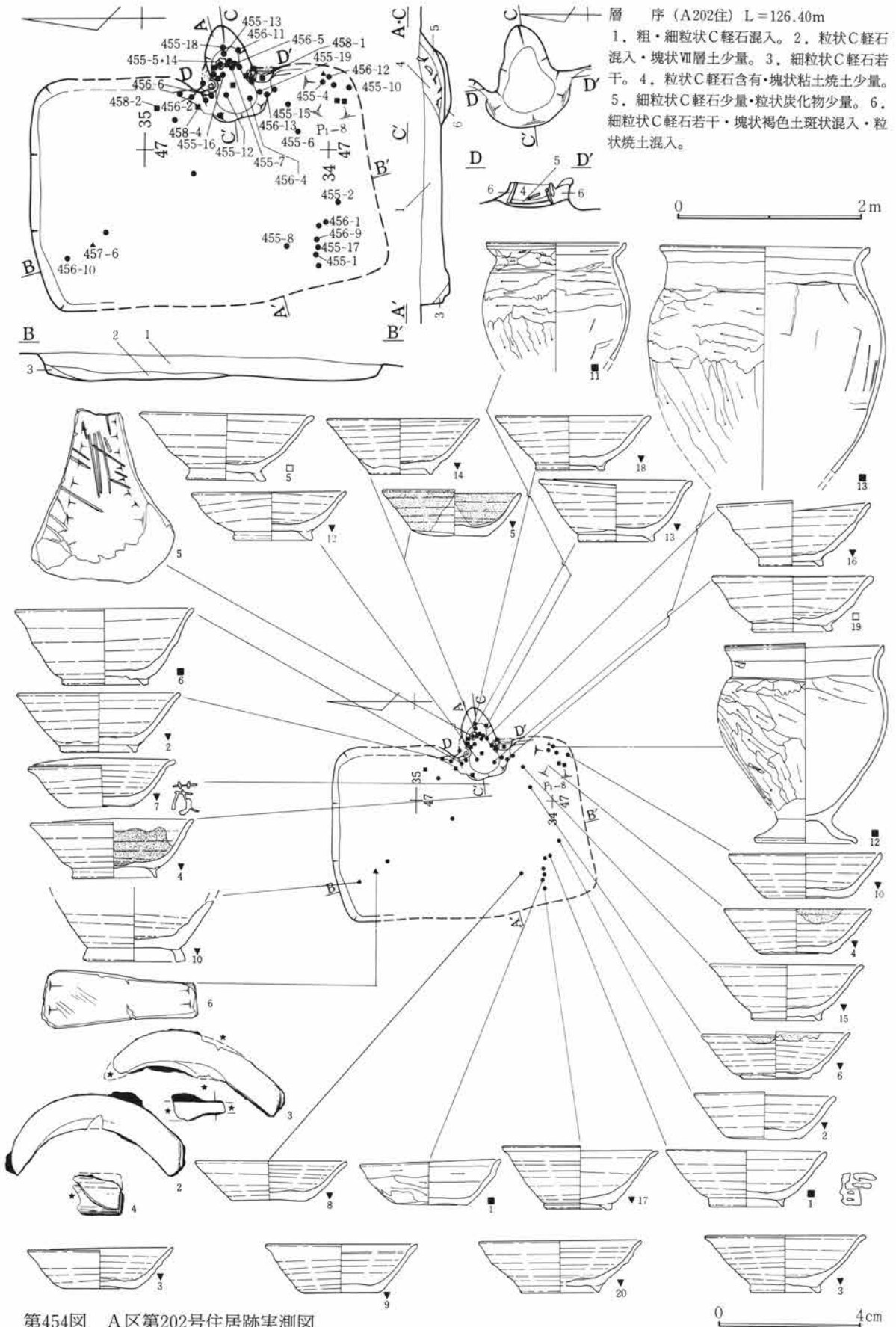


第453図 A区第201号住居跡出土遺物実測図

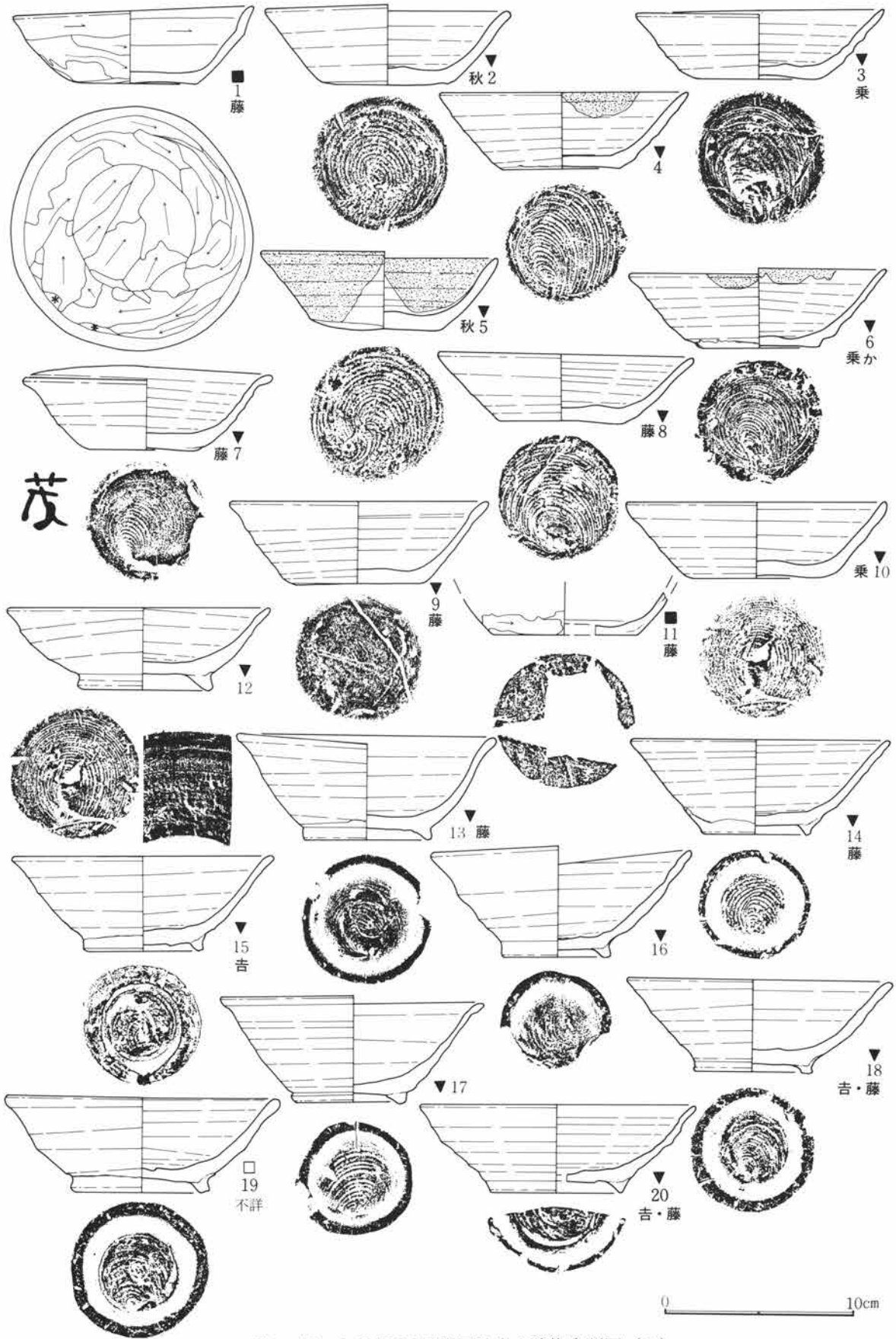
遺構名称	A区第202号住居跡		位置	47・48-A-34~36グリッド内。		残存深度	約25cm
平面形態	横長方形。	規模	3.70m×2.40m	構築基準辺	南壁か	主軸方位	北-78度-南
壁	斜位気味に立ち上がる。		床面	下位のA206住の覆土を使用する。北側が全体的に窪む。			
壁溝	未検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>1</sub> ・平面検出は出来なかったが遺物により確認。			
柱穴	未検出。住居屋内・屋外周辺の平面精査を実施したが未確認に終わる。						
掘り方	詳細は調査の下手際により不分明。						
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から86cm。			主軸方位	北-76度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出。		形状				
規模	全長100cm・屋外長 52cm・屋内長 48cm・袖部幅123cm・燃烧部幅 44cm。						
焚口・燃烧部	扇状を呈する焚口部は、燃烧空間と重複する部分が著しく、燃烧部先端側に器設部分が考えられる。		袖	両袖共に瓦で補強する。			
煙道	未検出。		掘り方	舌状を呈する。補強材の据え方は未検出。			
遺物出土状態	覆土内での完形（須恵器坏・埴類）の出土量が多い。						

所見 当住居跡は、A206・199住を切り構築してする。住居は調査段階でA206住の存在が明らかでなかったが、調査進行過程で土層断面のA206住の存在が明らかになり、この為、当住居跡の床面は掘り過ぎている。東壁中央部より若干南西隅部寄りに備えている。南東隅部では、上述の掘り過ぎにより、明瞭な形状では検出されなかったが、傍竈坑が設置されている。カマドは、左右両袖が瓦により補強されている。燃烧部はやや幅が狭く、奥壁寄りには支脚が出土している。煙道は、この付近から緩やかに立ち上がっている。出土遺物は、今次の報文中で、最も良好な状態と言得る状態で、多量の完形の須恵器坏・類が出土している。これらは、第453図中に図示した。住居形状は、C区の第VII段階に対比される。

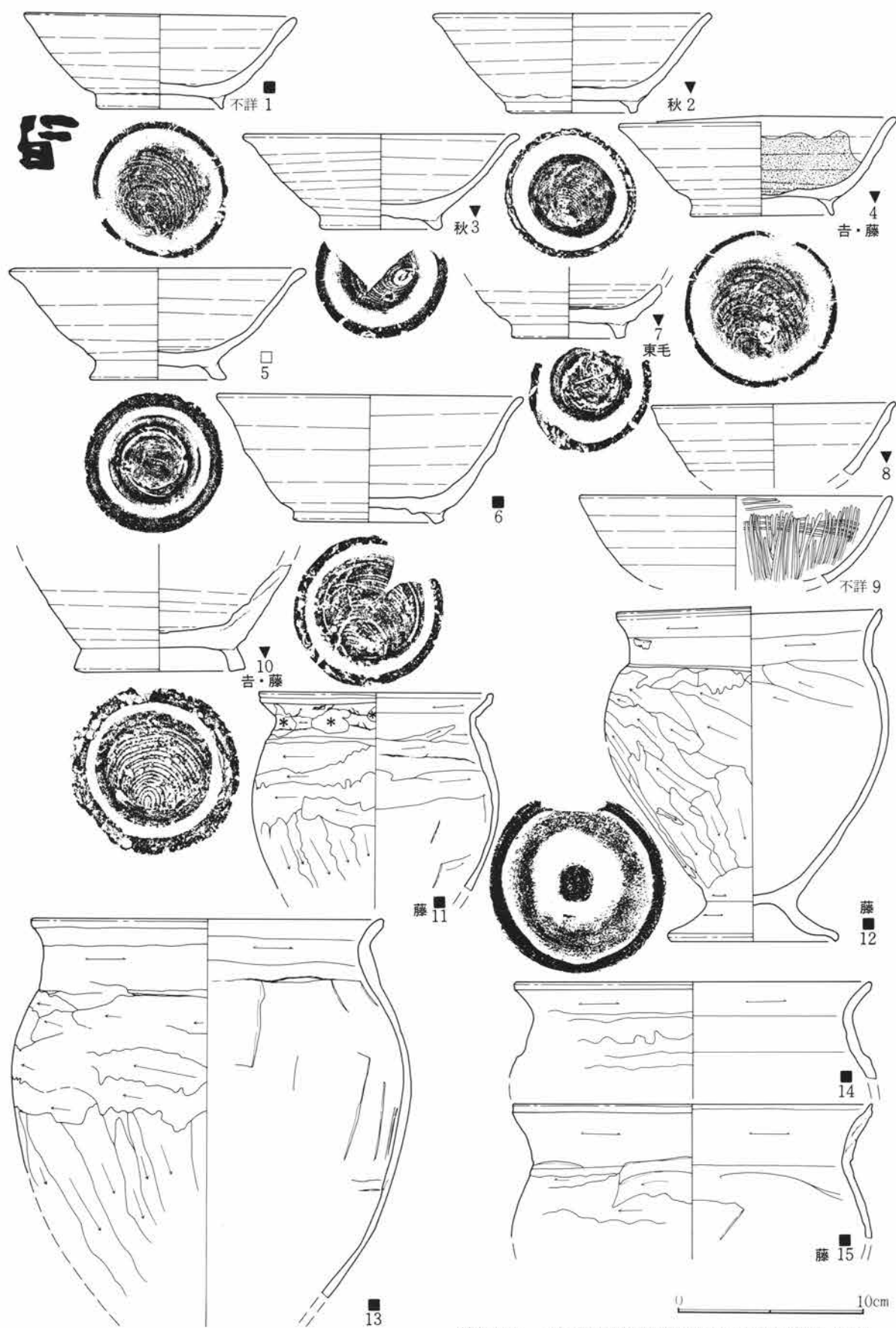
第4章 検出された遺構・遺物



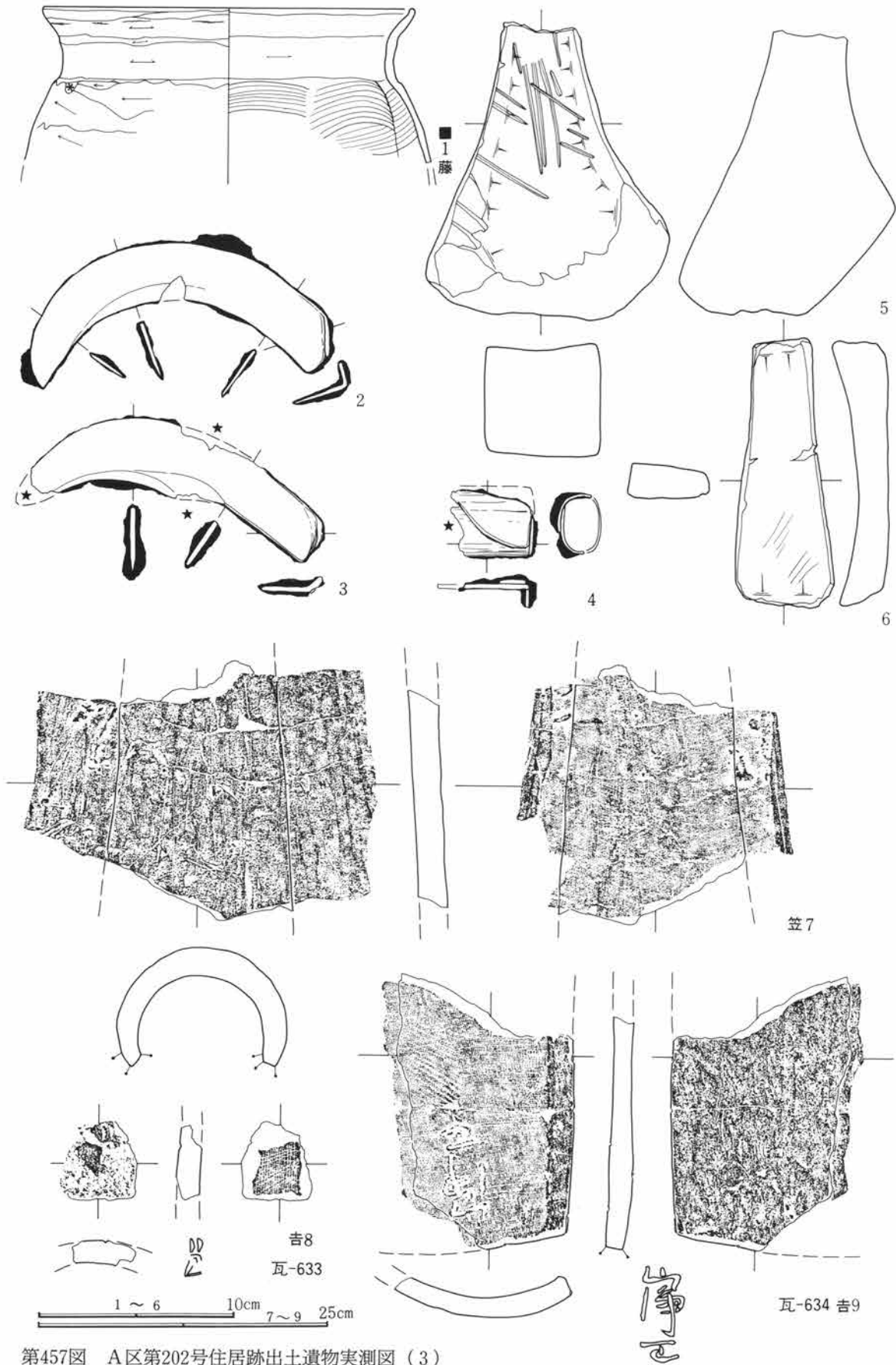
第454図 A区第202号住居跡実測図



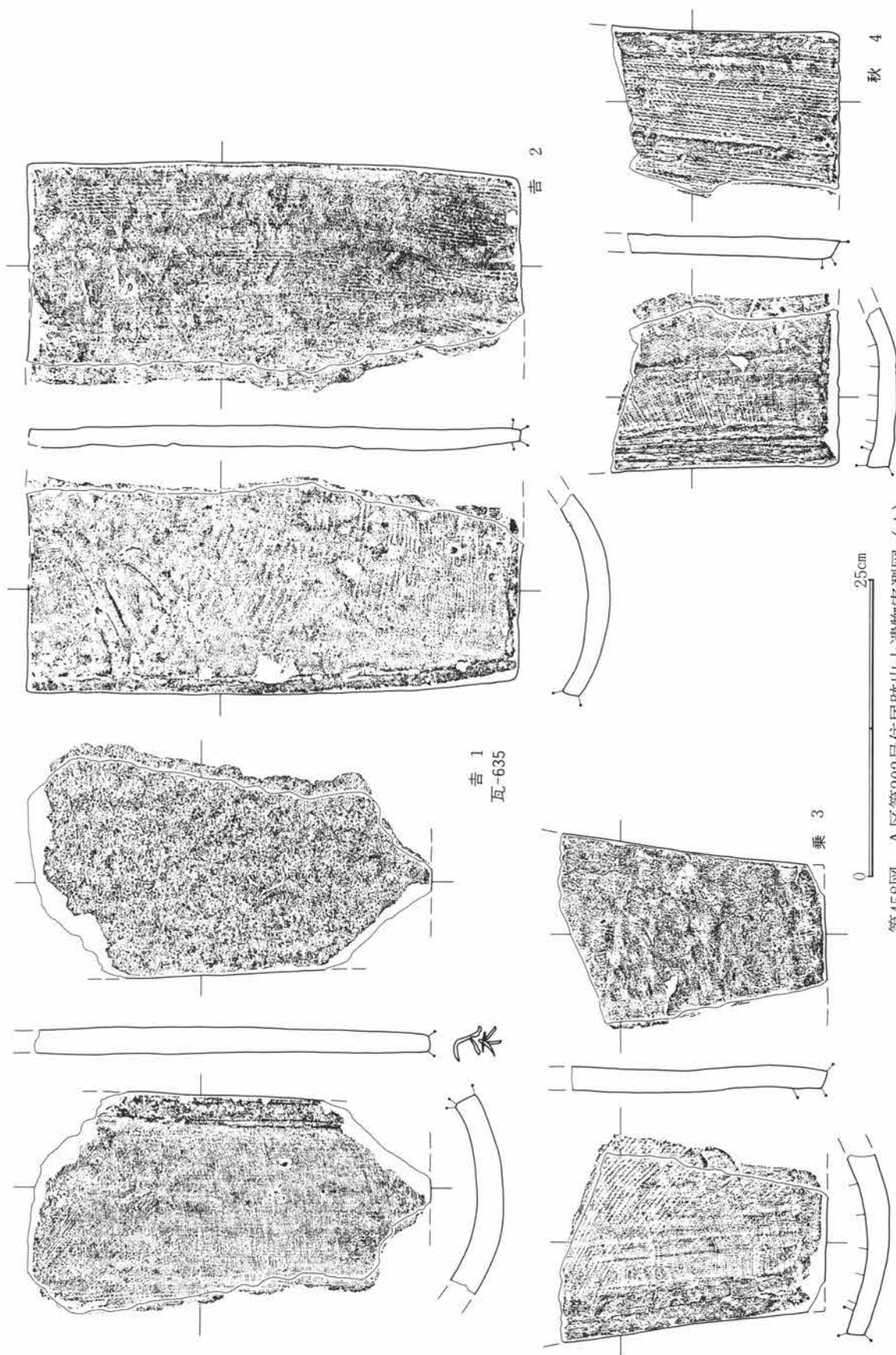
第455図 A区第202号住居跡出土遺物実測図(1)



第456図 A区第202号住居跡出土遺物実測図(2)



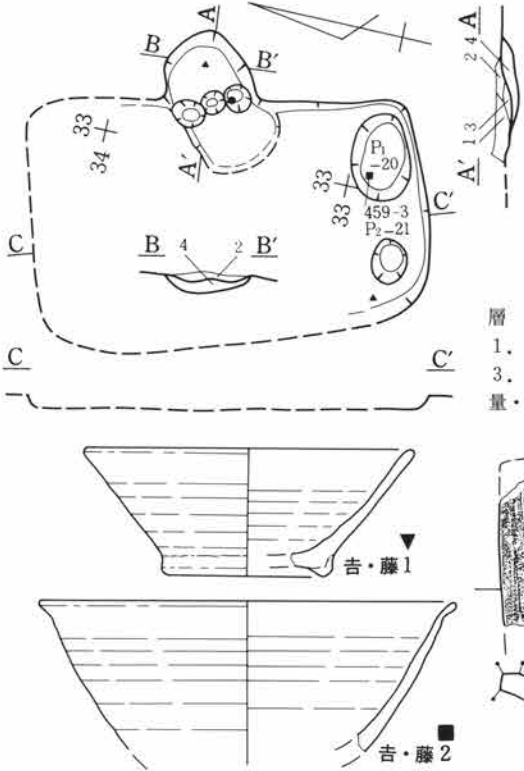
第457図 A区第202号住居跡出土遺物実測図(3)



第458図 A区第202号住居跡出土遺物実測図(4)



遺構名称	A区第204号住居跡		位置	33・34-A-33~35グリッド内。		残存深度	約10cm
平面形態	横長方形。	規模	?m× ?m	構築基準辺	不分明	主軸方位	北-78度-南位か
調査の下手際により詳細不詳。							



所見 当住居跡は、A208住を切り構築し、A197住に切られている。住居は、A197住による破壊とA208住との重複により形状全体等不分明な点が多い。カマドは東壁に備えるが詳細な位置は不分明である。南東隅部には傍竈坑を備えており、南西隅部にはP<sub>2</sub>が検出されている。住居形状はC区第V乃至VI段階と考えられる。

層序 (A204住) L=126, 30m

1. 細粒状C軽石含有・粒状焼土含有。
2. 炭化物・灰層（塊状焼土含有）。
3. 細粒状C軽石微量・粒状焼土混入。
4. 微粒状C軽石若干・粒状焼土少量・粒状Ⅶ層土少量。

第459図 A区第204号住居跡実測図・出土遺物実測図

遺構名称	A区第207号住居跡		位置	29~33-A-29~34グリッド内。		残存深度	約60cm
平面形態	縦長方形。	規模	7.18m×6.15m	構築基準辺	南壁	主軸方位	北- $\frac{244}{(64)}$ 度-南
壁	ほぼ垂直に立ち上がる。		床面	中央部は地山Ⅶ層土を使用するが、周縁部は造床。平坦。			
壁溝	西壁以外ではほぼ全周。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>5</sub> ・楕円形。60×50cm・深度-40cm			
柱穴	P <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> が主柱穴である。P <sub>2</sub> に近接するP <sub>11</sub> は補助乃至建て替え時のものか、同様にP <sub>3</sub> とP <sub>15</sub> がある。						
掘り方	壁側の住居内縁辺に認められ、一部土坑状の掘り込みP <sub>19</sub> ・P <sub>20</sub> がある。						
カマド	位置	東壁、住居北西隅部から270cm。			主軸方位	北- $\frac{236}{(56)}$ 度-南	
改築	有。袖補強材の据え方が二次期である。		形状	細長い舌状を呈し、袖はしっかりしている。			
規模	全長170cm・屋外長 80cm・屋内長 90cm・袖部幅160cm・燃烧部幅 64cm・煙道部幅 30cm。						
焚口・燃烧部	左右両袖先端部の補強材の位置より内側に焚口部が考えられる。煙道立ち上がりの直前部分に器設位置と思われる。						
煙道	先細り状で屋外に長く突出する。		掘り方	煙道部と、袖補強材の据え方が認められた。			
遺物出土状態	規模に比較して遺物量は全体に少ない。床面直上・直上層中より少量の出土がある。						

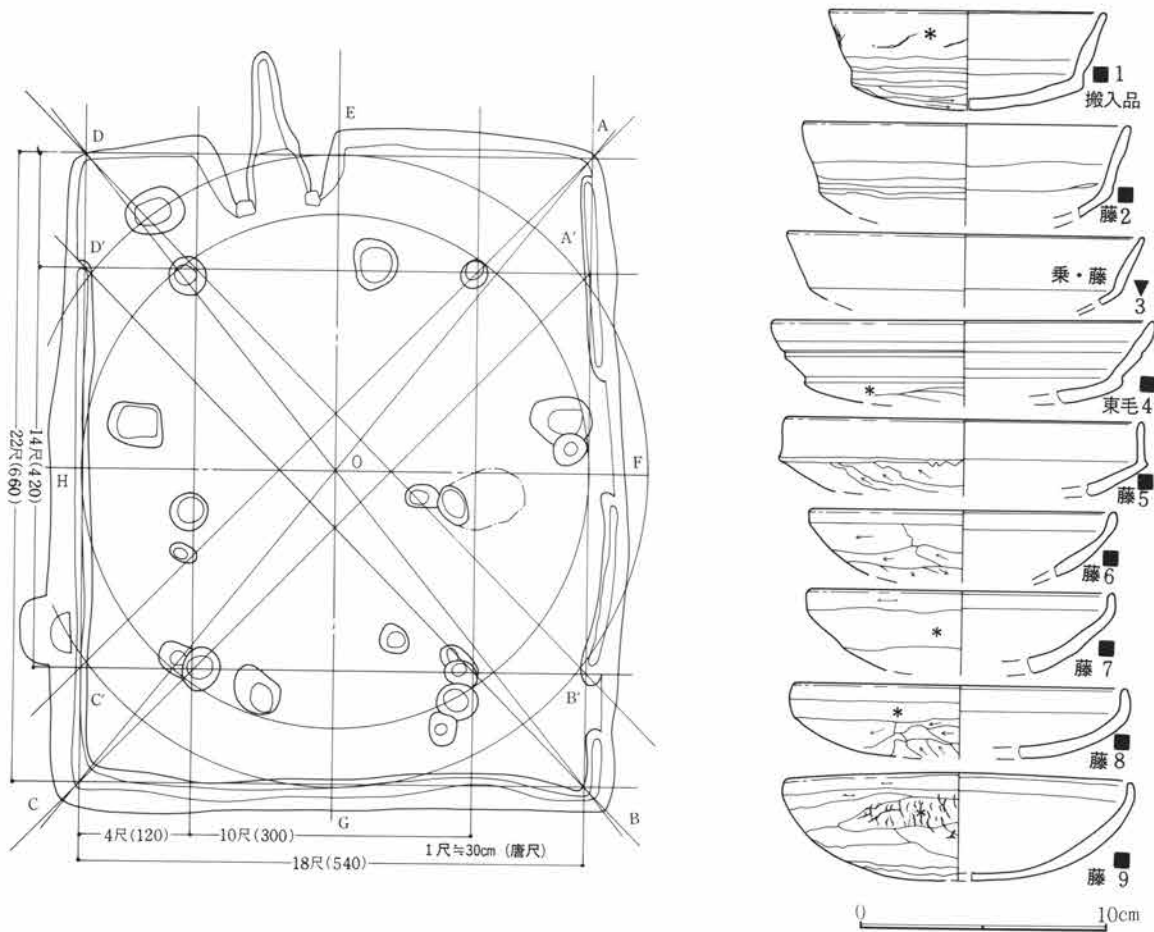
所見 当住居跡は、A166住が南西隅部を切っている。住居は主軸長7.18mを測る大規模な位置で、今次の報文中ではB180住と並び最大規模の一群に属している。カマドは、西壁中央より南西隅部寄りに位置している。袖は、左右共に長く屋内側に突出する造り出しの袖で、先端側は、地山砂岩質土の載り出し材を用い補強し、



第460图 A区第207号住居跡実測图

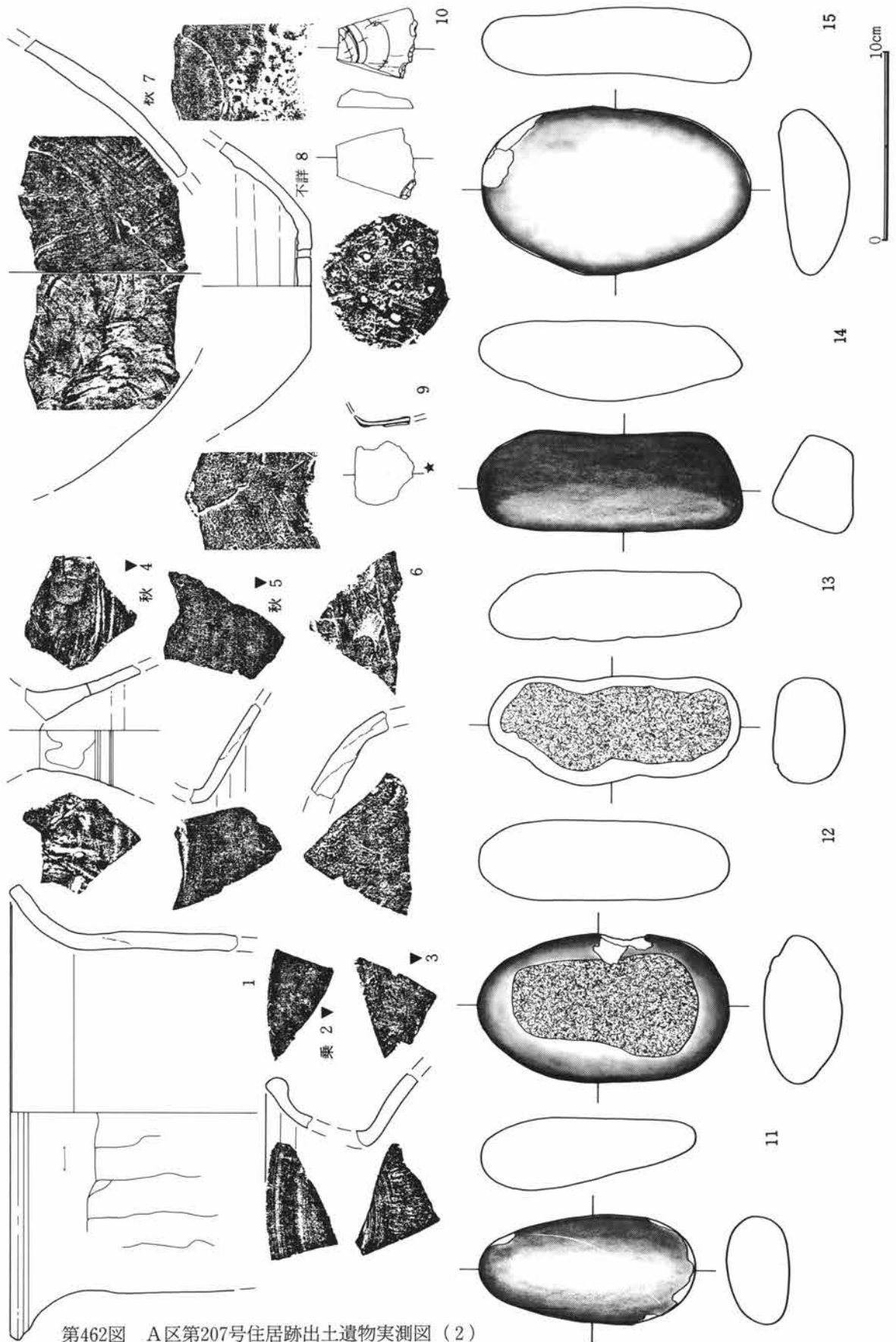
層序 (A207住) L=126.30m

1. 細粒状C軽石多量 (砂質)。
2. 細粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土若干。
3. 粗・細粒状C軽石多量・粒状Ⅶ層土若干。
4. 粒状C軽石混入・粒状Ⅶ層土少量。
5. 3近質。
6. 細粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土少量。
7. 細粒状C軽石少量。
8. 細粒状C軽石少量・塊状Ⅳ層土含有。
9. 微粒状C軽石若干・粒状Ⅶ層土若干。
10. 微粒状C軽石微量・粒状Ⅶ層土若干。
11. 細粒状C軽石若干・粒状Ⅶ層土微量。
12. 細粒状C軽石少量・粒状焼土混入・粒状炭化物含有。
13. 粒状C軽石微量・塊状Ⅶ層土混入。
14. 3近質。
15. 細粒状C軽石少量・粒状焼土多量。
16. 細粒状C軽石少量・粒状焼土多量・塊状焼土含有。
17. 粒状C軽石多量・粒状焼土少量・塊状焼土少量。
18. 炭化物・灰層 (塊状焼土含有)。
19. 細粒状C軽石少量 (粘性少)。
20. 粗粒状C軽石少量 (粘性大)。
21. 細粒状C軽石少量・粒状焼土多量・塊状焼土少量。
22. 細粒状C軽石少量・粒状Ⅶ層土多量。

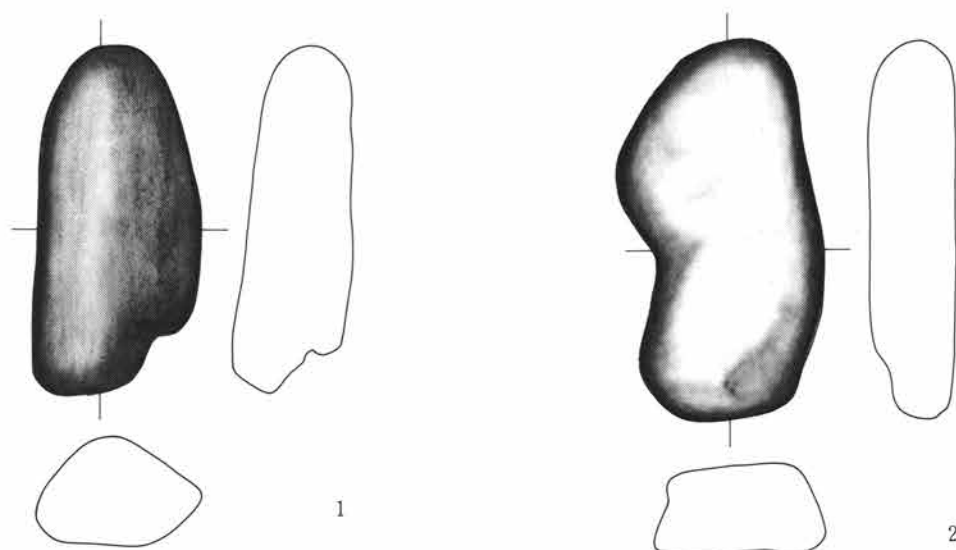


第461図 A区第207号住居跡設計計画図(1:80)・出土遺物実測図(1)

焚口天上は同材を架ける様に付設したと考えられ、袖補強材に接して同材が出土している。燃烧部は、方形状を呈し造り出しの袖部内に構築されているが、幅は広くない。煙道は、燃烧部奥側から緩やかに立ち上がり長く屋外に向かい延び、ほぼ垂直に立ち上がっている。そしてカマドの左傍(南西隅部)には傍竈坑(P<sub>5</sub>)が検出されている。柱穴は17本検出されている。これらの中で、P<sub>2</sub>周辺にはP<sub>2</sub>以外に3本連続した状態で検出されている。そして、17本中で主柱穴と考えられるピットは、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本であり、P<sub>10</sub>~P<sub>12</sub>とP<sub>15</sub>は、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>の補助的柱穴と考えられる。この補助柱と同様な柱穴として、P<sub>14</sub>・P<sub>16</sub>・P<sub>17</sub>がある。又P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>は、各々対象的な位置関係にあり、上屋構造に直接係わるとも考えられるが、両者共深度が浅い点から疑問が残る。これらの柱穴の中で主柱穴と住居跡の構築時の設計状態を見ると第460図の如くなる。この主柱穴の計画線に中心線を住居の壁まで設定し、中心線の交点Oとする。主柱穴の計画線を設定する。この計画線の柱間はP<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>では、公約数を30cmとして14単位。P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>・P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>は同様に10単位の数値が得られる。そして、A192住等で得られた所見(住居の計画線は壁溝部にある)に基づき、住居の長軸長と直交軸長を(壁溝まで)同様に公約数30cmとすると22単位と18単位となる。更に、住居自体の計画線と上述の点から行くと長方形ABCDが出来る。この長方形ABCDは、主柱穴の計画線により出来た長方形A'B'C'D'と相似形となり、長方形ABCDの内側に向かい、各辺から各々公約数の4単位分づつ縮小した状態になる。この様に当住居跡は、構築時には住居形と主柱穴位置には綿密に計画されて構築された可能性が指摘出来る。住居形状は、主軸の指向方向から、C区の第II段階に対比される。



第462図 A区第207号住居跡出土遺物実測図(2)

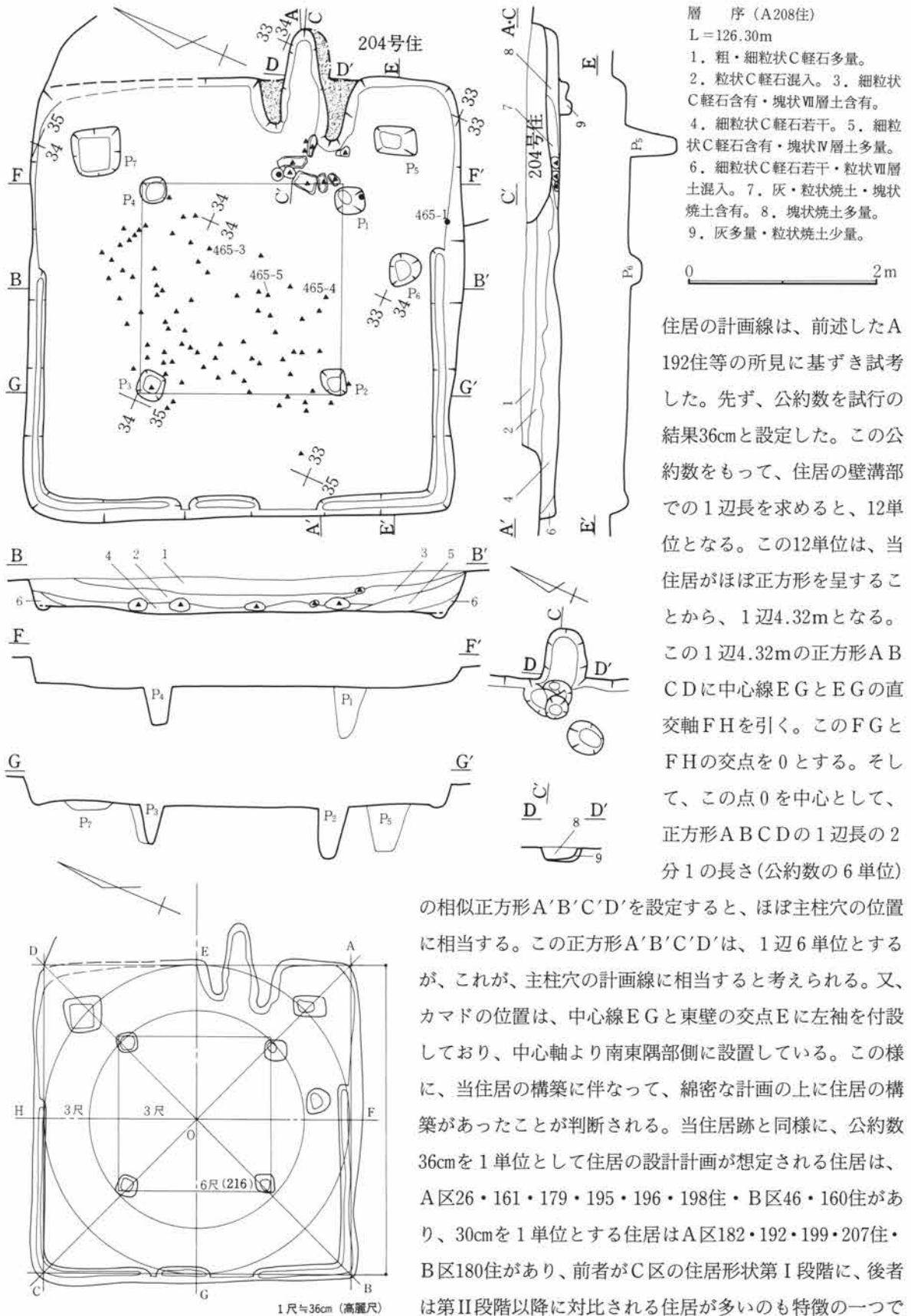


第463図 A区第207号住居跡出土遺物実測図（3）

0 10cm

遺構名称	A区第208号住居跡		位置	33～36-A-33～36グリッド内。			残存深度	約42cm
平面形態	正方形。	規模	4.50m×4.60m	構築基準辺	四壁	主軸方位	北-67度-南	
壁	ほぼ垂直～斜位気味に立ち上がる。		床面	地山Ⅶ層土を使用し平坦。				
壁溝	南・西・北壁下で検出。		傍竈坑・貯蔵穴	P <sub>5</sub> ・横長方形。45×30cm・深度-48cm				
柱穴	P <sub>1</sub> ～P <sub>4</sub> が主柱穴と考えられる。P <sub>6</sub> は残い為、柱穴以外か出入口施設に伴うものと考えられる。							
掘り方	無し。							
カマド	位置	東壁、住居南東隅部から100cm。				主軸方位	北-67度-南	
改築	有。掘り方内から焼土を検出している。		形状	細長い舌状を呈し、袖が長い。				
規模	全長124cm・屋外長 52cm・屋内長 72cm・袖部幅124cm・燃烧部幅 43cm・煙道部幅 30cm。							
焚口・燃烧部	焚口は狭。燃烧部は造り出しの袖により、その内面側に想定される。器設部の位置が特定							
出来ない為詳細不明。	袖	屋内側に粘土等を用い長く突出した状態。						
煙道	細く長く屋外に突出する。		掘り方	燃烧部直下に不整形の掘り込みを検出。				
遺物出土状態	住居中央よりやや西隅部寄りに、床面直上乃至床面直上層中から礫が多量に出土。							

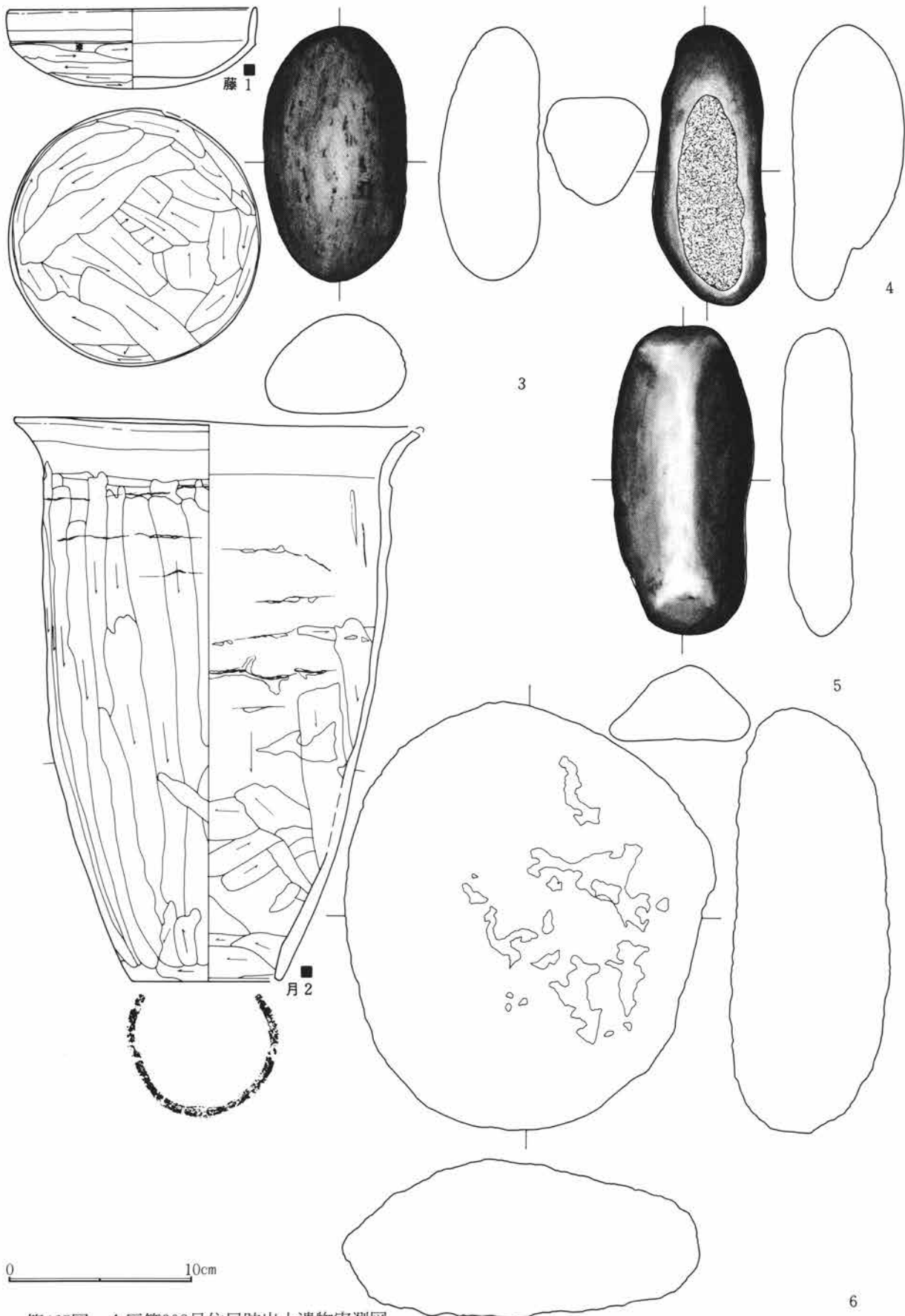
所見 当住居跡は、A174・175・190・191・197・204住に切られている。住居は、これらの住居に切られながらも、遺存状態は比較的良好である。カマドは、東壁中央よりやや南東隅部寄りに備えている。左右の両袖は長く屋内に向かい突出した状態で造り出されている。袖の先端側では、地山砂岩質土の切り出し材がやや集中して出土している点から、袖の先端側は同材により補強されていた可能性がある。燃烧部は、造り出しの袖部に当り幅は狭い。煙道は、焚口・燃烧部底面と同位で屋外に細く延び、ほぼ直垂に立ち上がっている。カマドの右側の南東隅部周辺には、長方形を呈する傍竈坑P<sub>5</sub>が検出されている。又、北東隅部周辺では、正方形を呈する傍竈坑状の施設が検出されているが、深度はP<sub>5</sub>に対して非常に浅い。この外では、P<sub>6</sub>が南壁直下で検出されており入口施設に伴う柱穴と考えられる。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が検出されている。壁溝は、西側の半分の壁下で検出されている。主柱穴の計画線及び住居の計画線は第463図中の下段に図示したとおりである。



住居の計画線は、前述したA192住等の所見に基づき試算した。先ず、公約数を試行の結果36cmと設定した。この公約数をもって、住居の壁溝部での1辺長を求めると、12単位となる。この12単位は、当住居がほぼ正方形を呈することから、1辺4.32mとなる。この1辺4.32mの正方形ABCDに中心線EGとEGの直交軸FHを引く。このFGとFHの交点を0とする。そして、この点0を中心として、正方形ABCDの1辺長の2分の1の長さ(公約数の6単位)

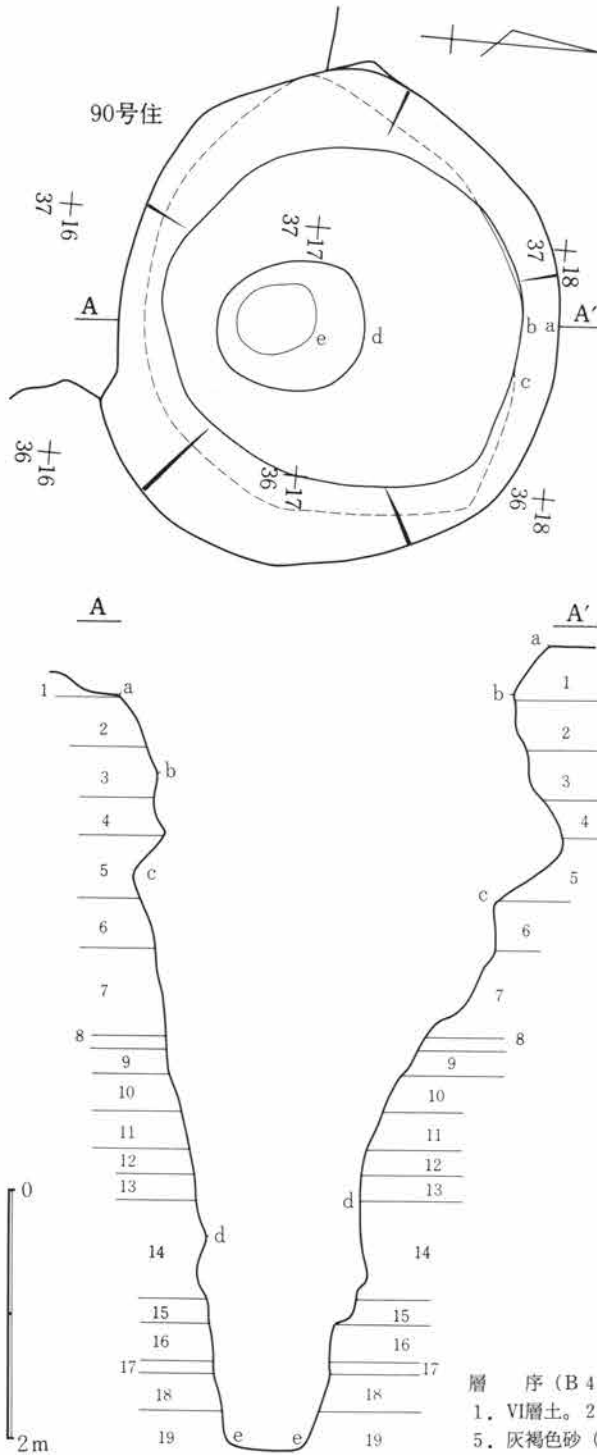
の相似正方形A'B'C'D'を設定すると、ほぼ支柱穴の位置に相当する。この正方形A'B'C'D'は、1辺6単位とするが、これが、支柱穴の計画線に相当すると考えられる。又、カマドの位置は、中心線EGと東壁の交点Eに左袖を付設しており、中心軸より南東隅部側に設置している。この様に、当住居の構築に伴って、綿密な計画の上に住居の構築があったことが判断される。当住居跡と同様に、公約数36cmを1単位として住居の設計計画が想定される住居は、A区26・161・179・195・196・198住・B区46・160住があり、30cmを1単位とする住居はA区182・192・199・207住・B区180住があり、前者がC区の住居形状第I段階に、後者は第II段階以降に対比される住居が多いのも特徴の一つである。この点を含め、後章で詳述したい。

第464図 A区第208号住居跡実測図・構築規画図 (1:80)



第465図 A区第208号住居跡出土遺物実測図

遺構名称	B区第4号井戸			位置	16~18-B-35~37グリッド内。		平面形態	円形
規模(m)	地上径 3.8	最細径0.55	最大径 3.8	深度 6.3	湧水位深度	夏期 1.55・冬期 5.0		
アグリ部最大径	夏期 3.63・冬期	1.35	湧水層	18層		耐水層	19層	



第467図 B区第4号井戸跡実測図

所見 当井戸跡は、南西から中央にかけてB90住に切られている。井戸跡としては、南側調査区内台地上で検出された当該期の井戸跡の中では、最南端に位置している。当該期の井戸跡で最も至近位置に占地するのはB区第1号井戸跡で、北側約65mに当たっている。

井戸跡確認面下の地山VII層土は、黄褐色を呈するローム土で、調査区内で確認されているVII層土二者（第4章基本層序を参照）の内、乾いたローム土である。しかし、他の調査区で検出されている井戸跡は、この乾いたローム土を掘り込むのではなく、粘性のやや強い暗褐色の発色を呈する水性堆積のローム土を掘り貫いている。この両者の状況は、粘性水性堆積ローム土の地山部は、削井占地に適合していた可能性がある。この要因として、地下での湧水量主たるものと想起される。この点を明らかにする根拠は当時の湧水量を各井戸毎に対比させねばならないが、調査時に実施した湧水量調査は日時・天候が考慮されていない為、その示唆性は薄い。これらのことを踏まえ次号でVII層土以下の地山層の対比を行ない検証を試みたい。出土遺物ではC区の住居段階から出土した土器類に適合する状態ではない。このことから、C区の空白期に対応する遺物様相と考えられる。そして、具体的には、瓦の共伴から、8世紀後半から9世紀前半頃の井戸の存在が考えられる。

層 序 (B4井) L=127.10m

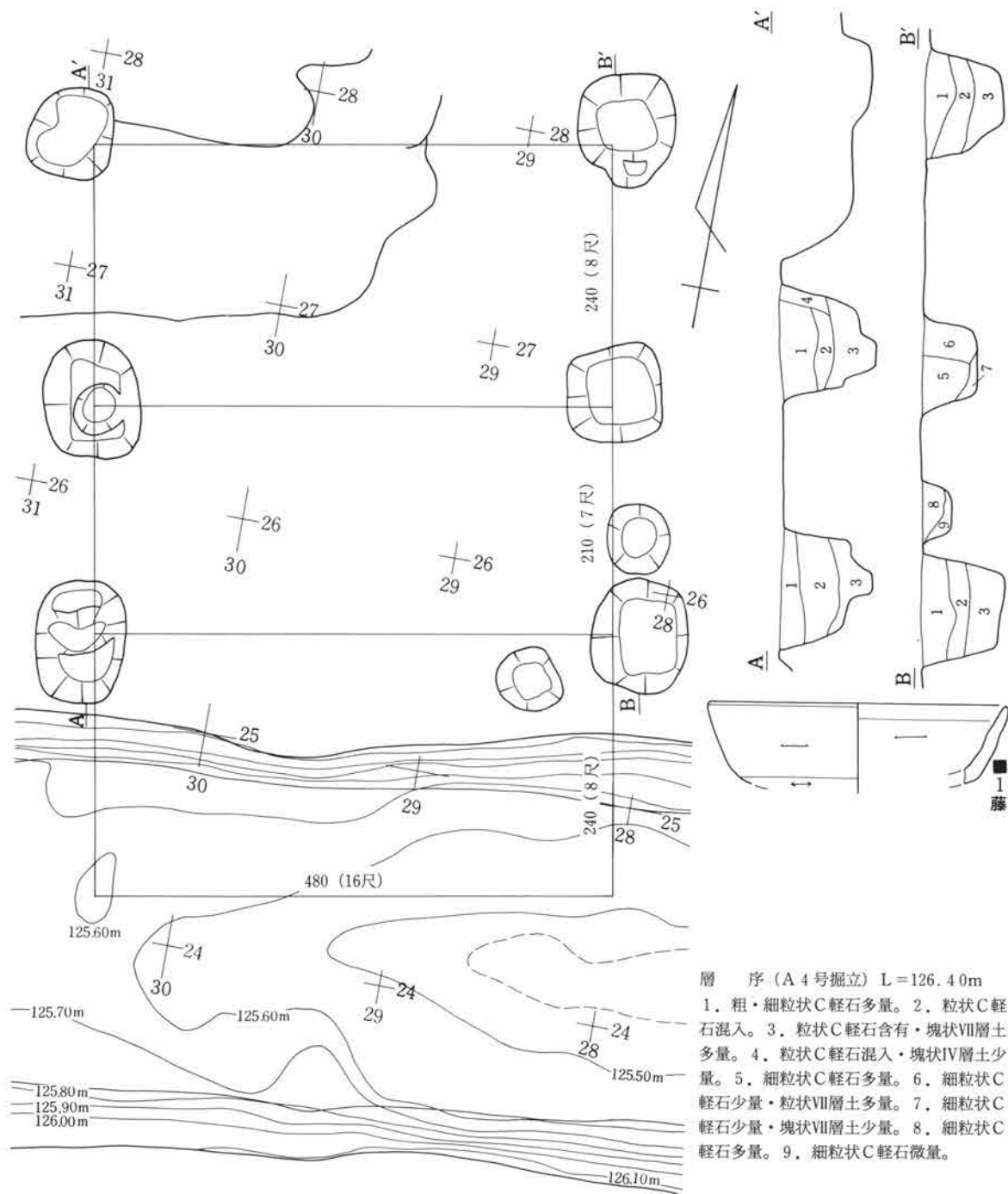
1. VI層土。2. VII層土。3. 褐灰色細粒砂（固結）。4. 灰褐色火山灰砂（固結）。5. 灰褐色砂（固結）。6. 灰褐色細粒砂（固結）。7. 6近質。8. 褐灰色シルト。9. 灰色砂（固結）。10. 褐灰色砂（小礫混入）（固結）。11. 暗色帯。12. 褐色火山灰。13. 灰色粒状軽石。14. 灰色シルト。15. 灰褐色細粒砂（固結）。16. 褐灰色粗・細粒状砂（固結）。17. 灰褐色シルト。18. 灰色火山灰砂（固結）。19. 灰褐色細粒砂（固結）。



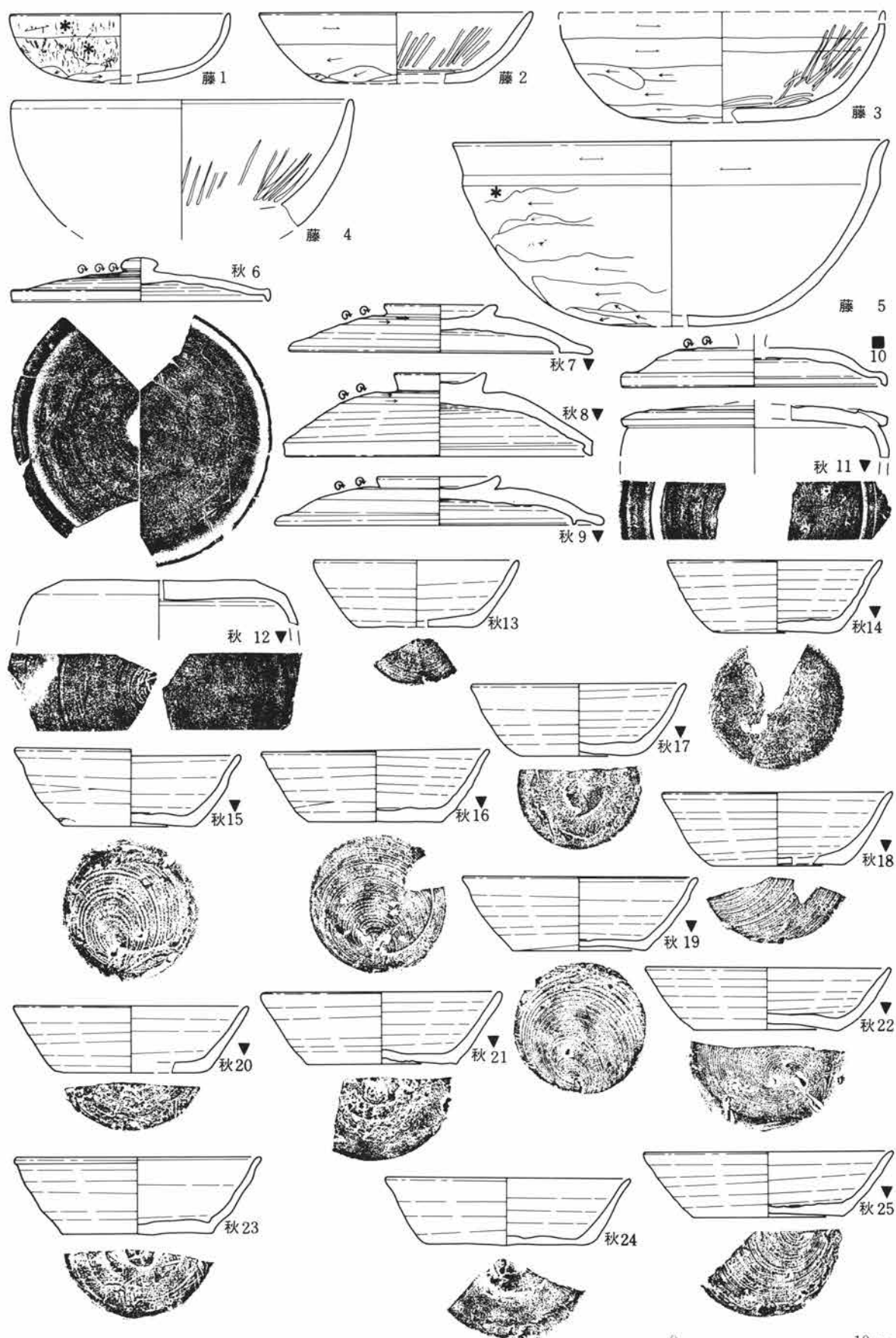
A区第4号掘立柱建物跡（以下A4掘立）

当A4掘立は、今次の報告区の南端に位置し、西側にはA区第5号掘立柱建物跡が位置している。このA5掘立は次年度の第6分冊で報告される予定である。

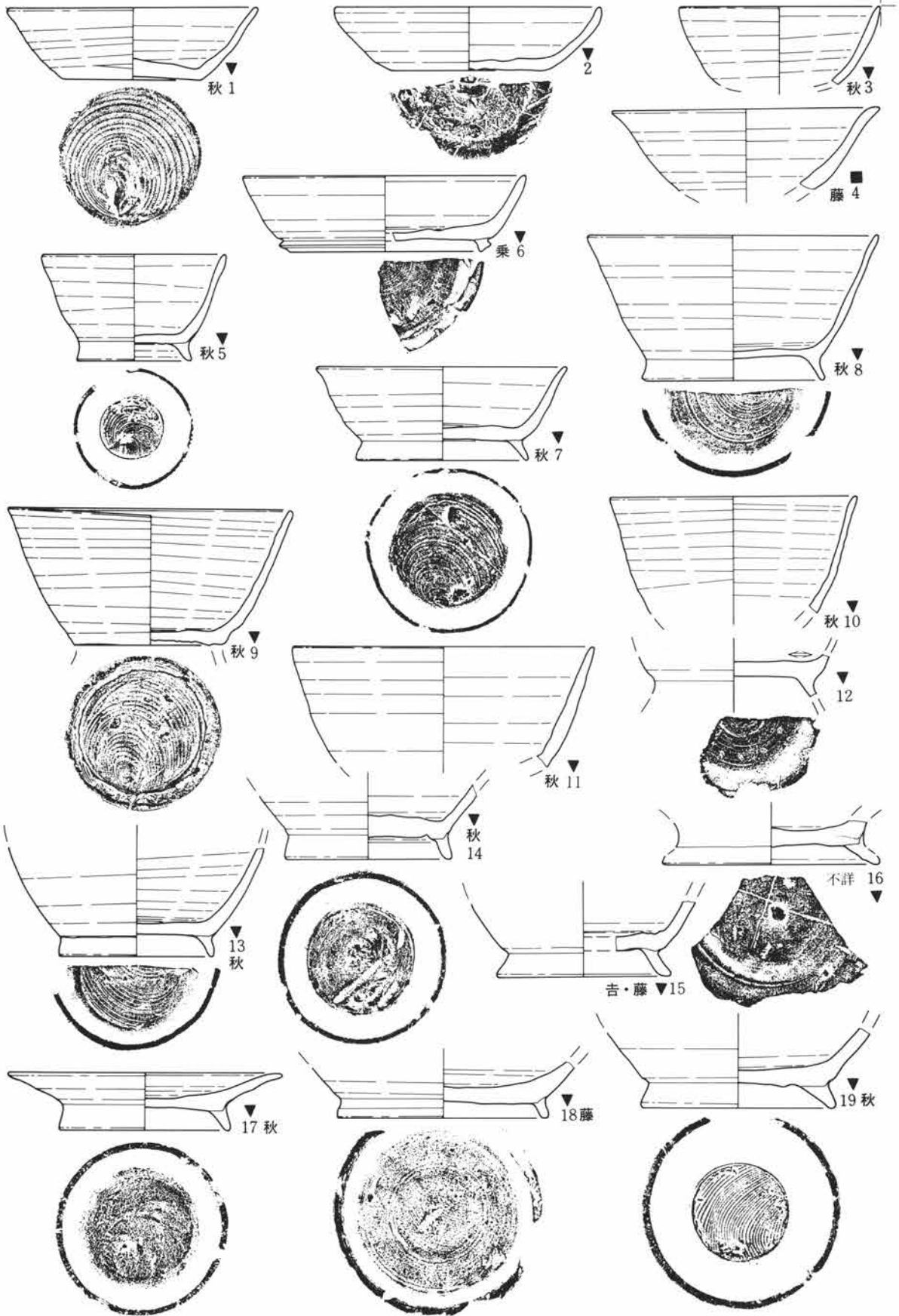
当A4掘立は、桁行3間・梁行1間ぶあつたと考えられる。図中の最南端側は、A1溝々底面に痕跡を留めていたことから判断した。柱間は図中に示したとおり30cmを1単位とする大規模な掘立である。主軸値は-10度でC区の第II段階の住居跡の主軸値と同様である。A5掘立は2間×2間の総柱構造であり倉的構造であったと思われるが、当掘立は、このA5掘立とは異なる性格が考えられる。



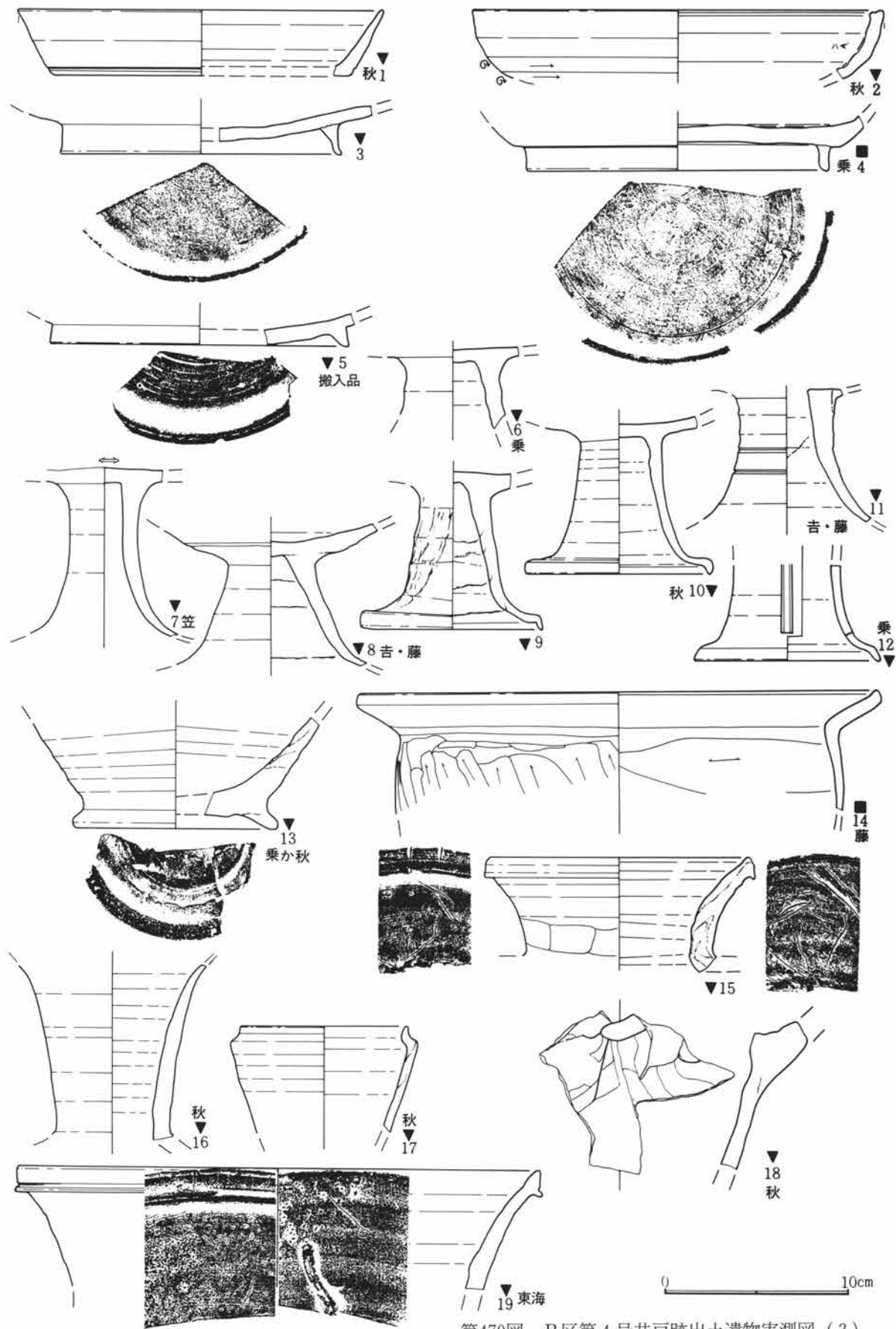
第466図 A区第4号掘立柱建物実測図



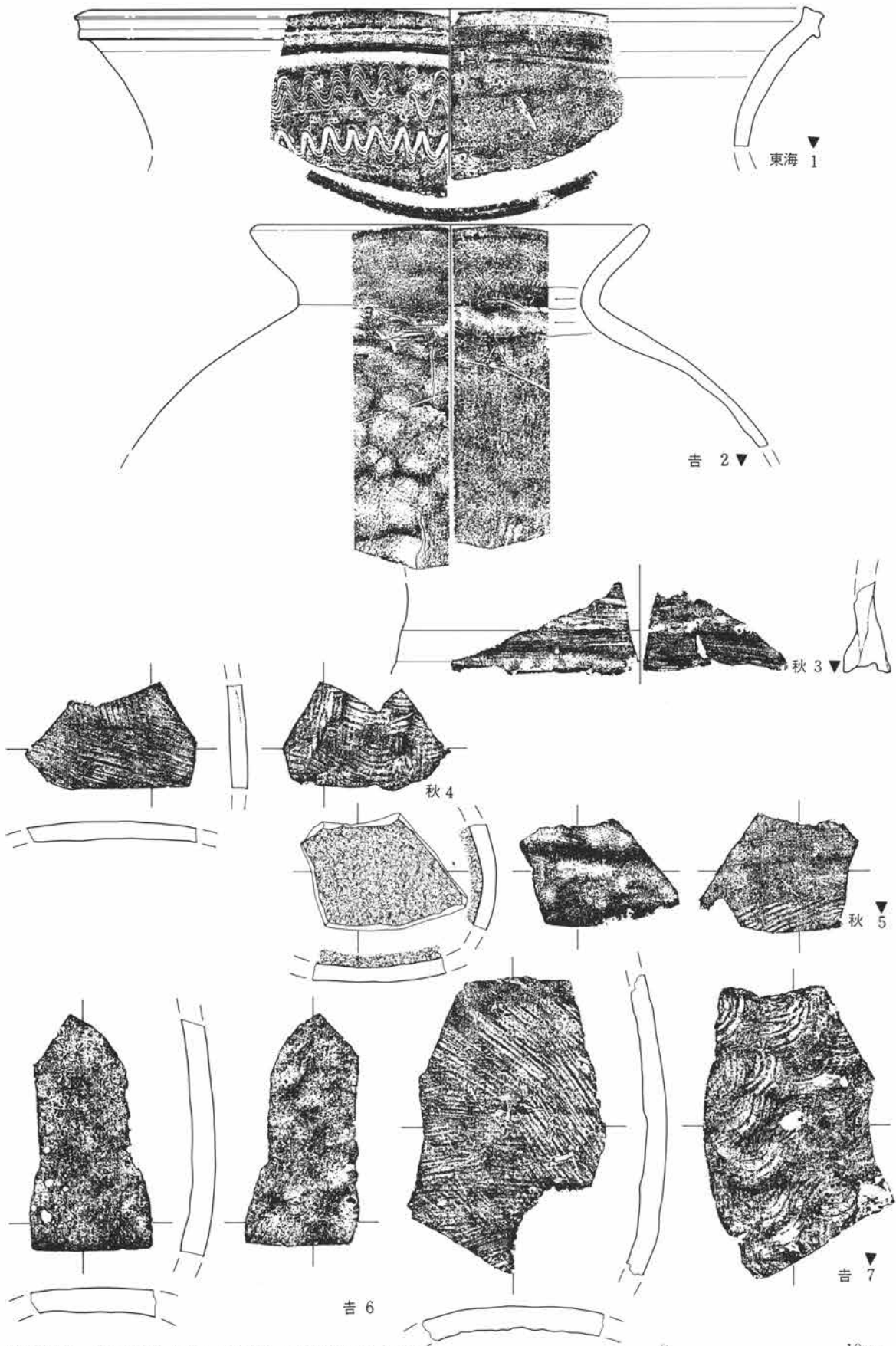
第468図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(1)



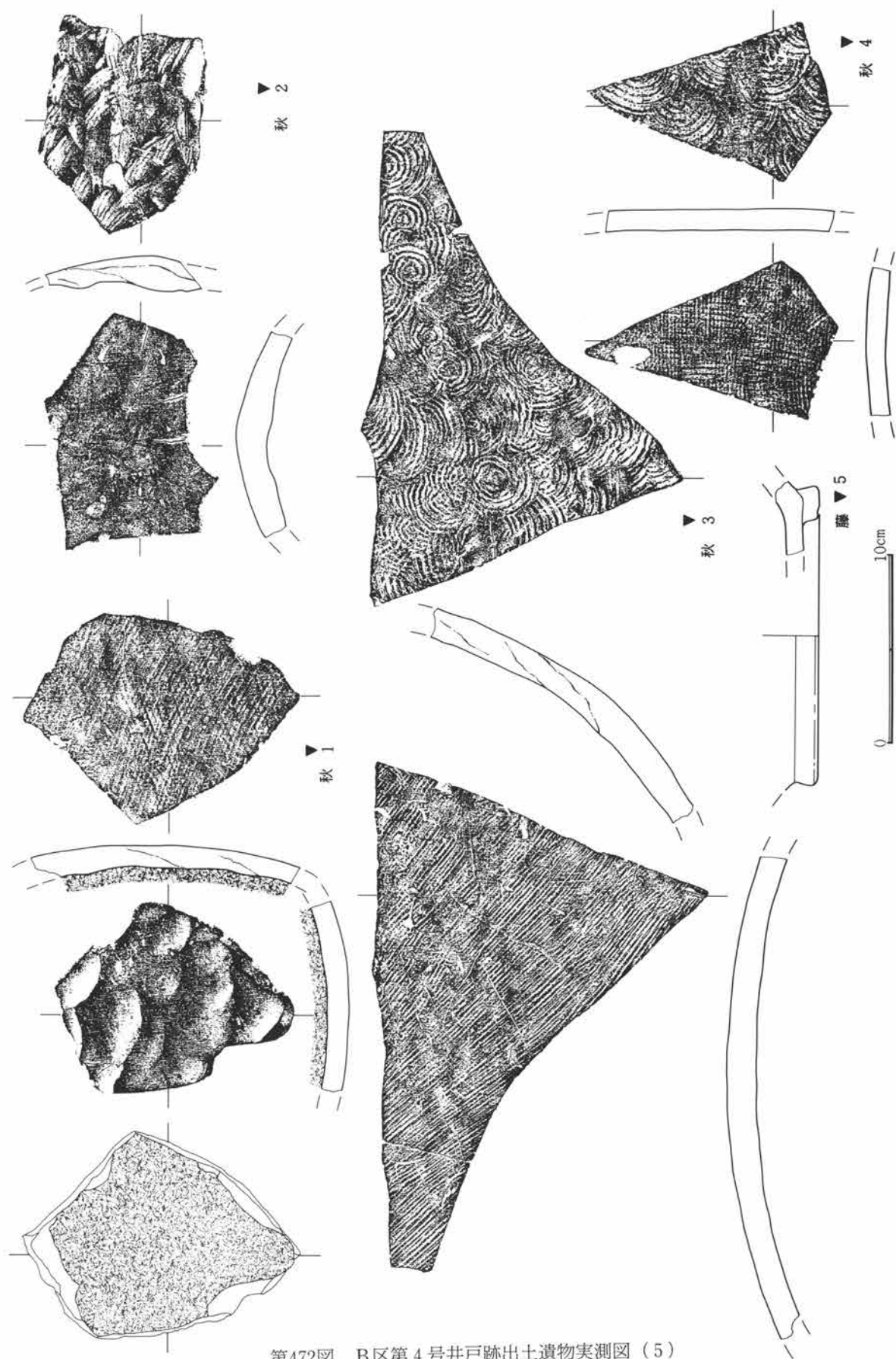
第469図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(2)



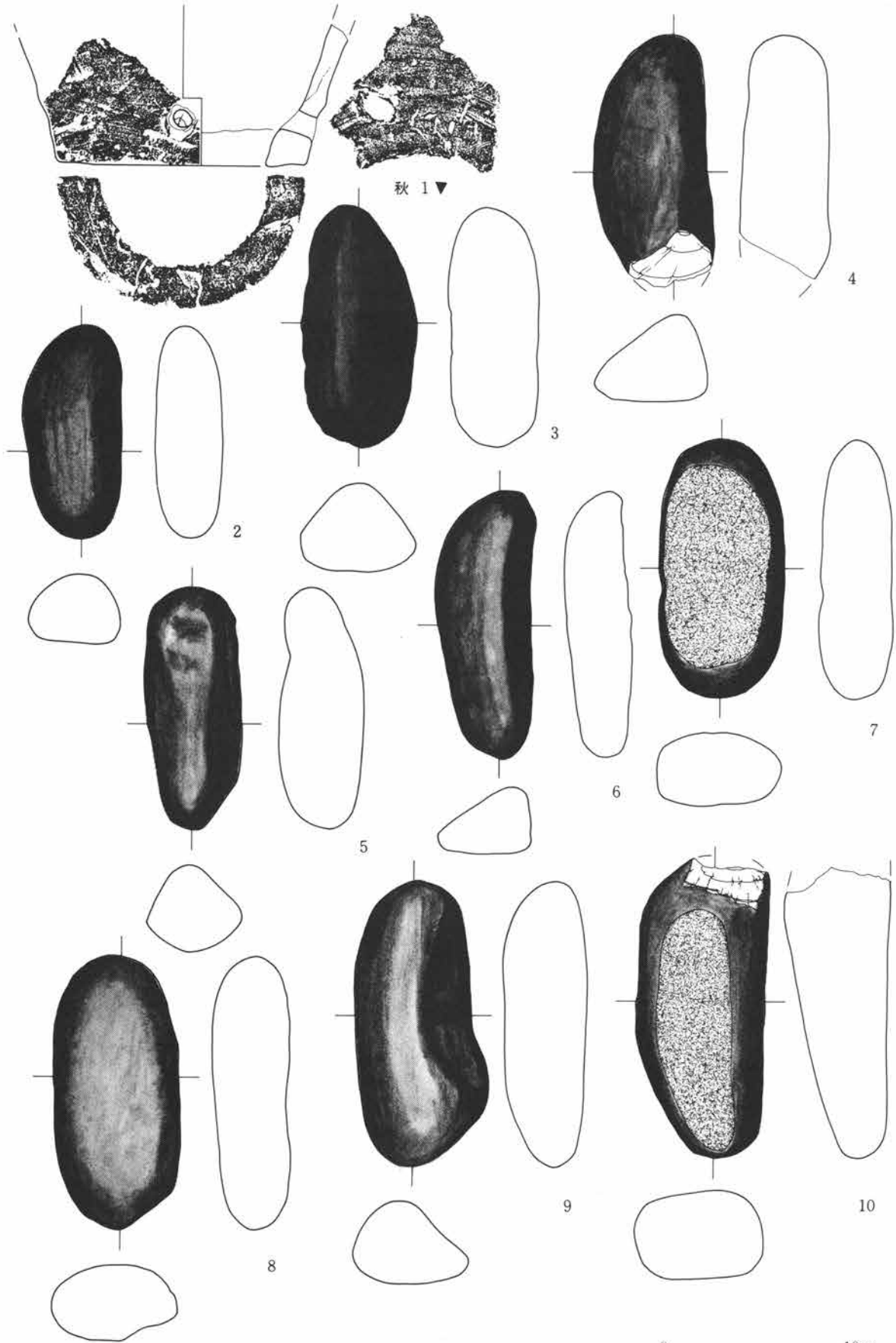
第470図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(3)



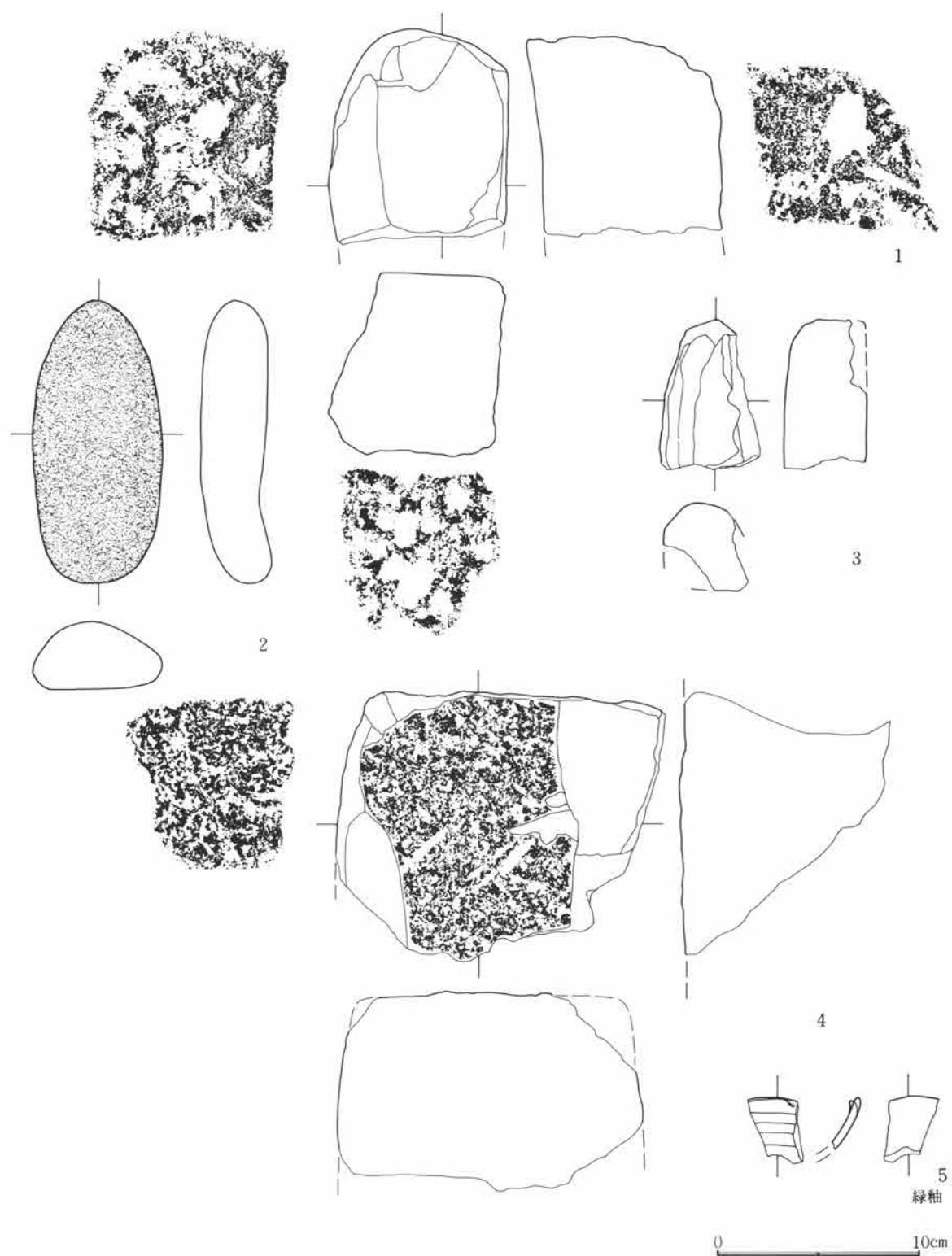
第471図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(4)



第472図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(5)

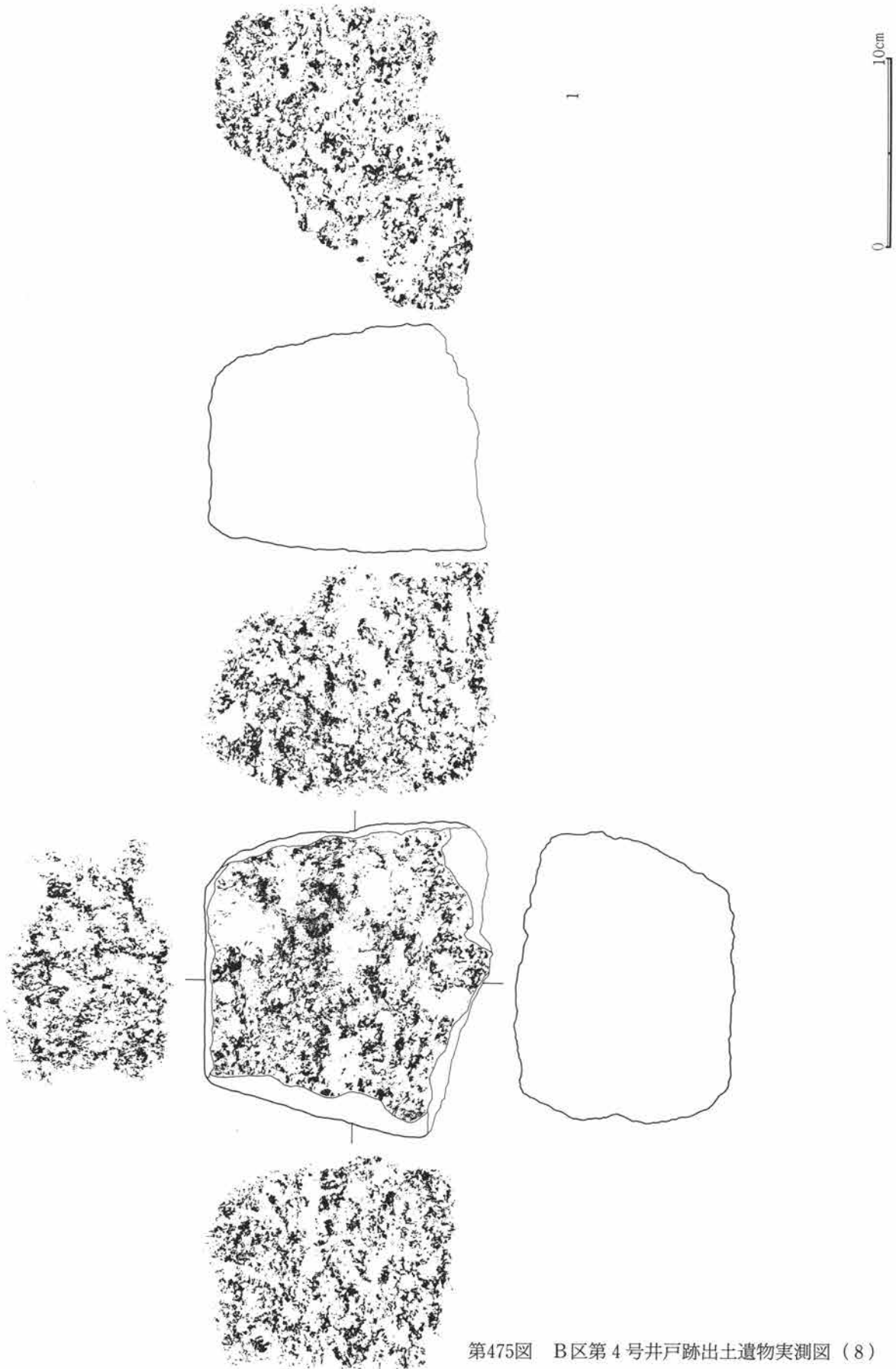


第473図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(6) 0 10cm

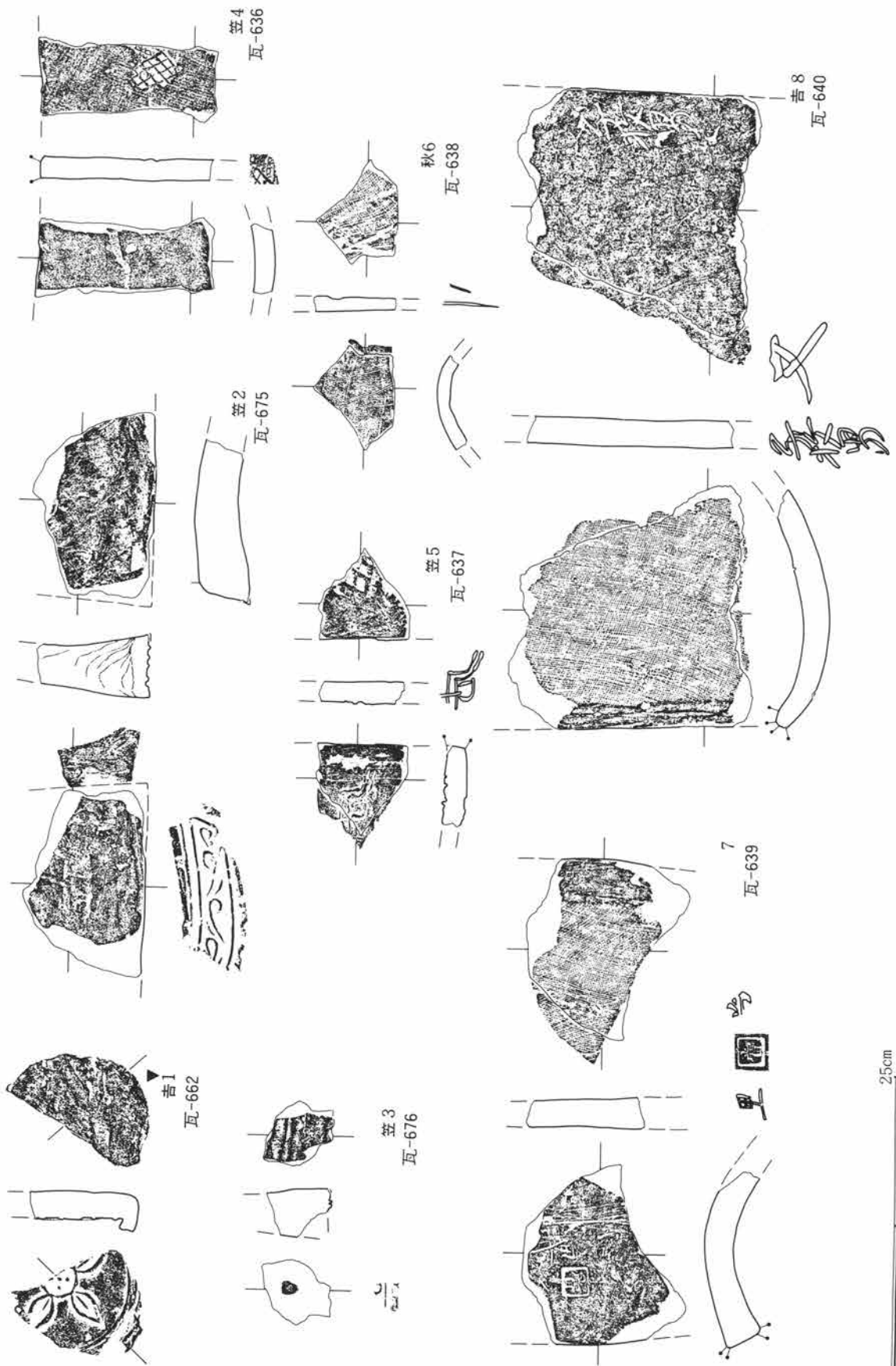


第474図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(7)

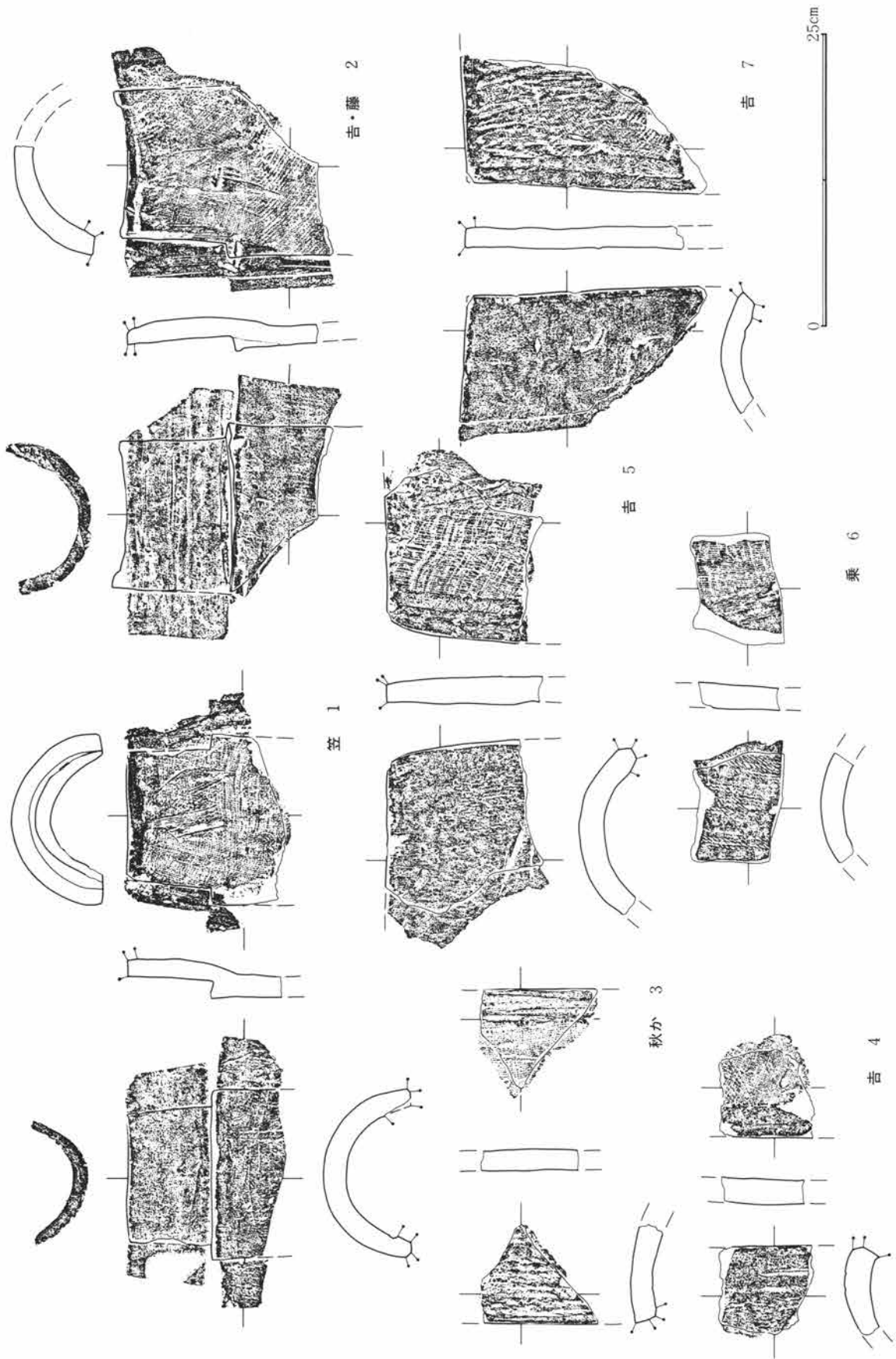




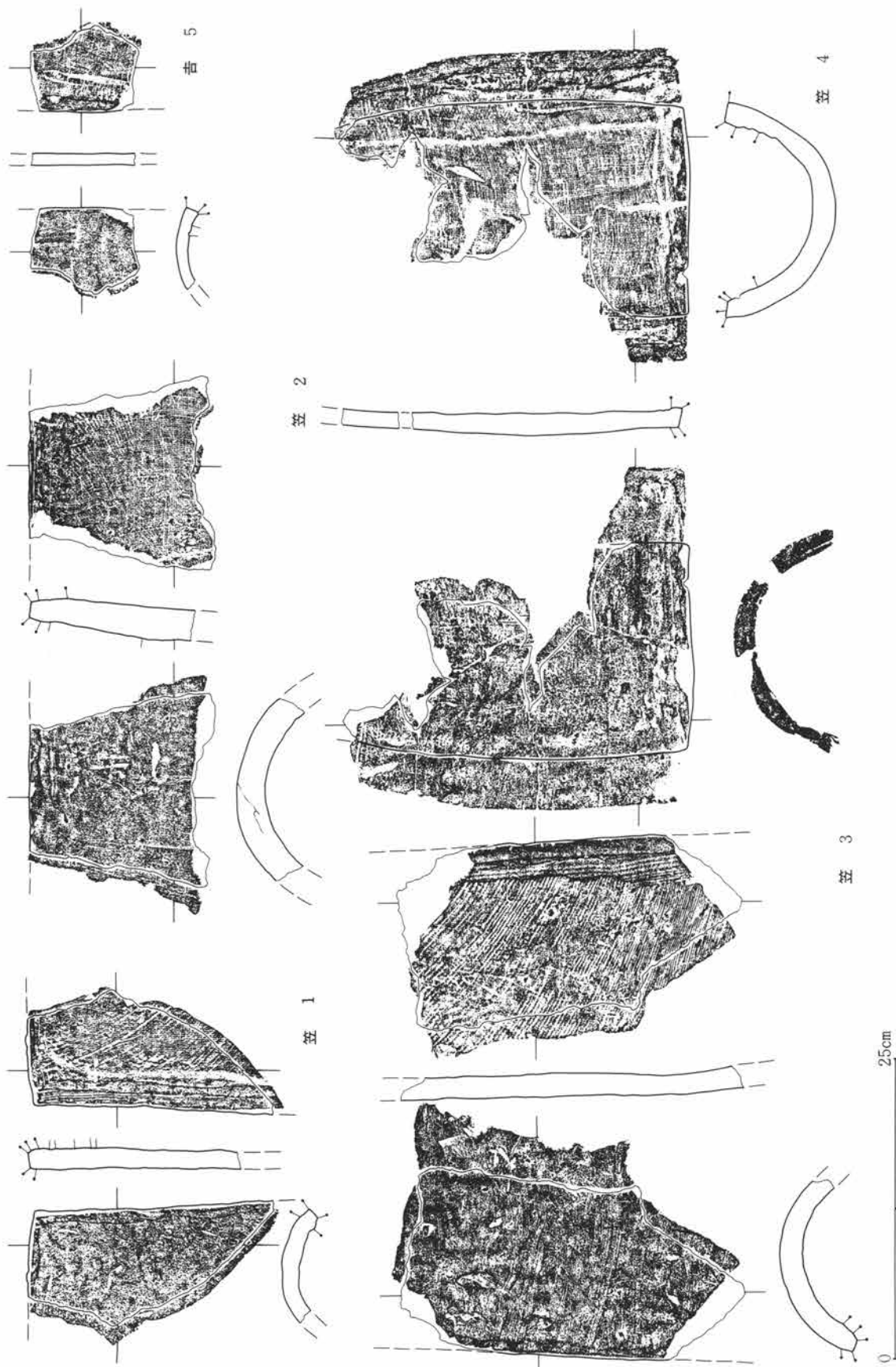
第475図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(8)



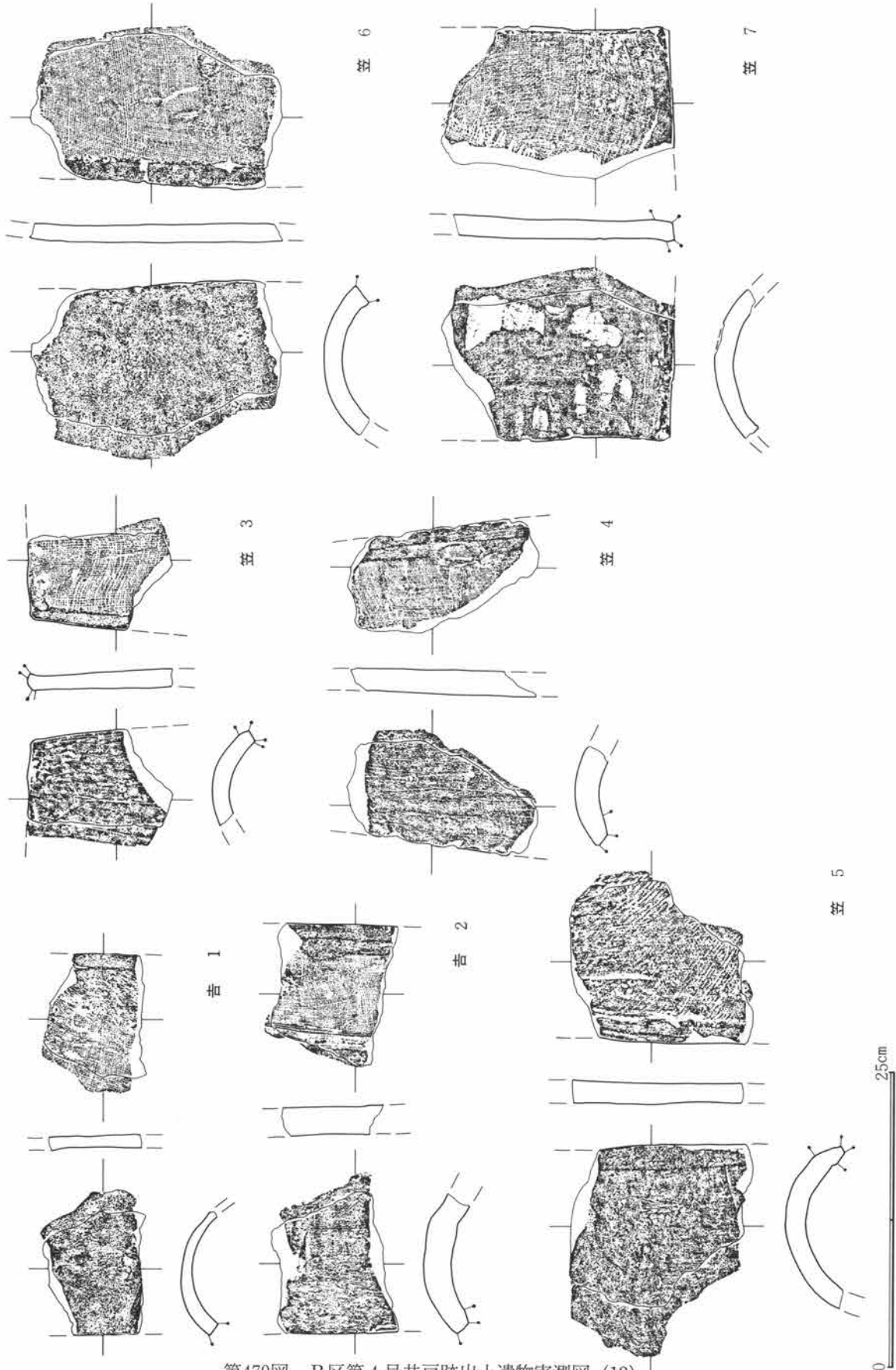
第476図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(9)



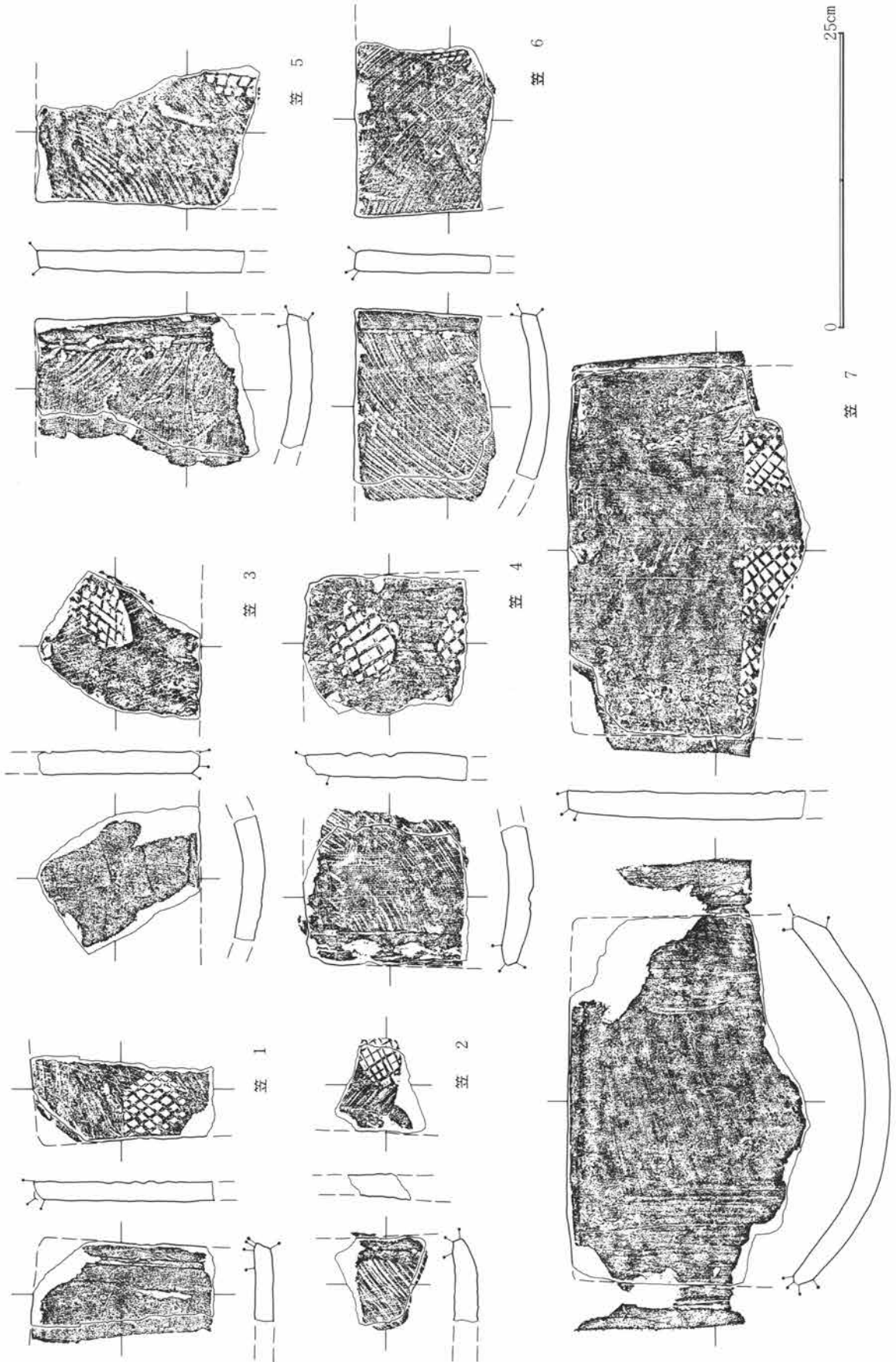
第477図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図 (10)



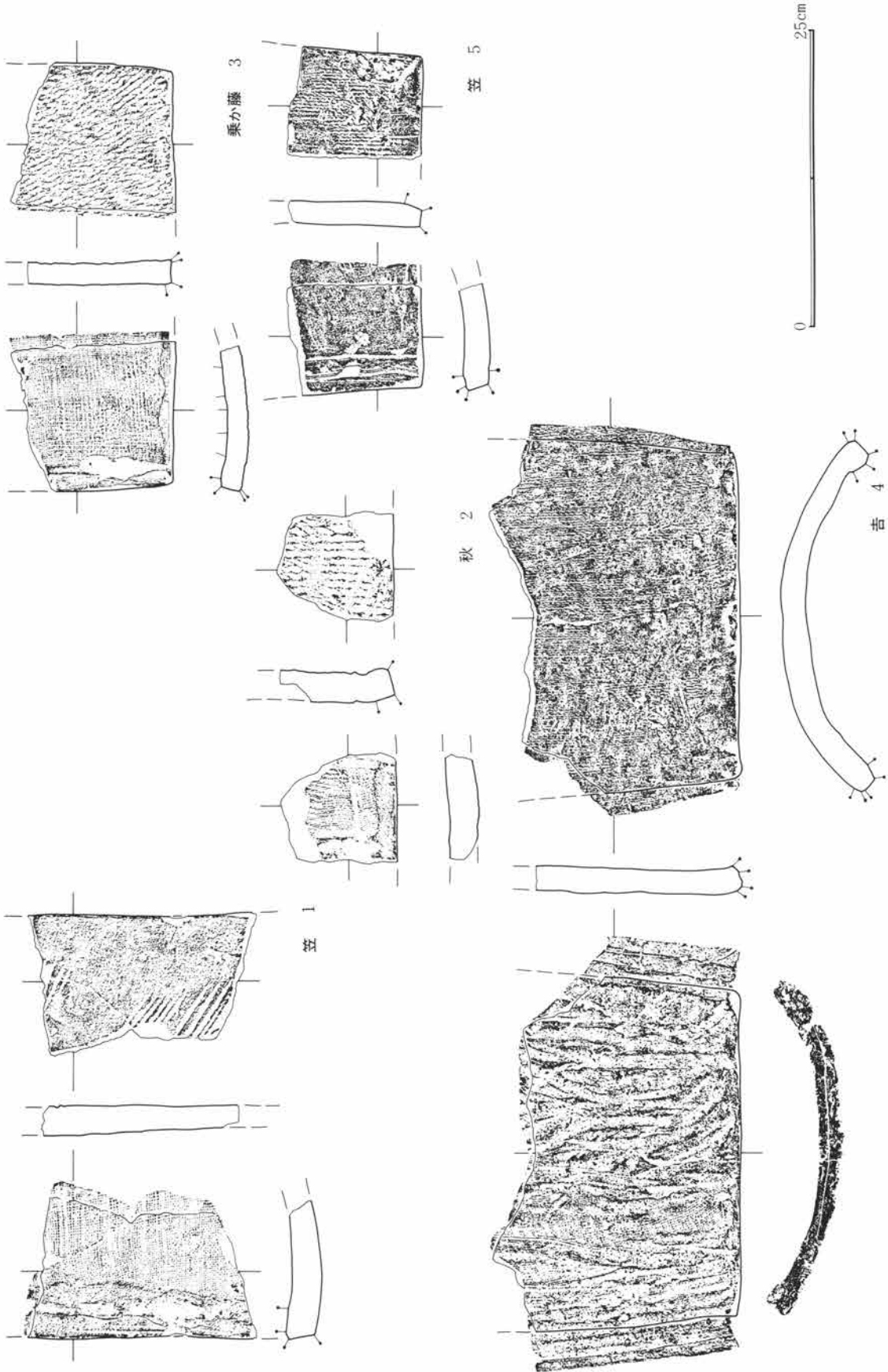
第478図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図 (11)



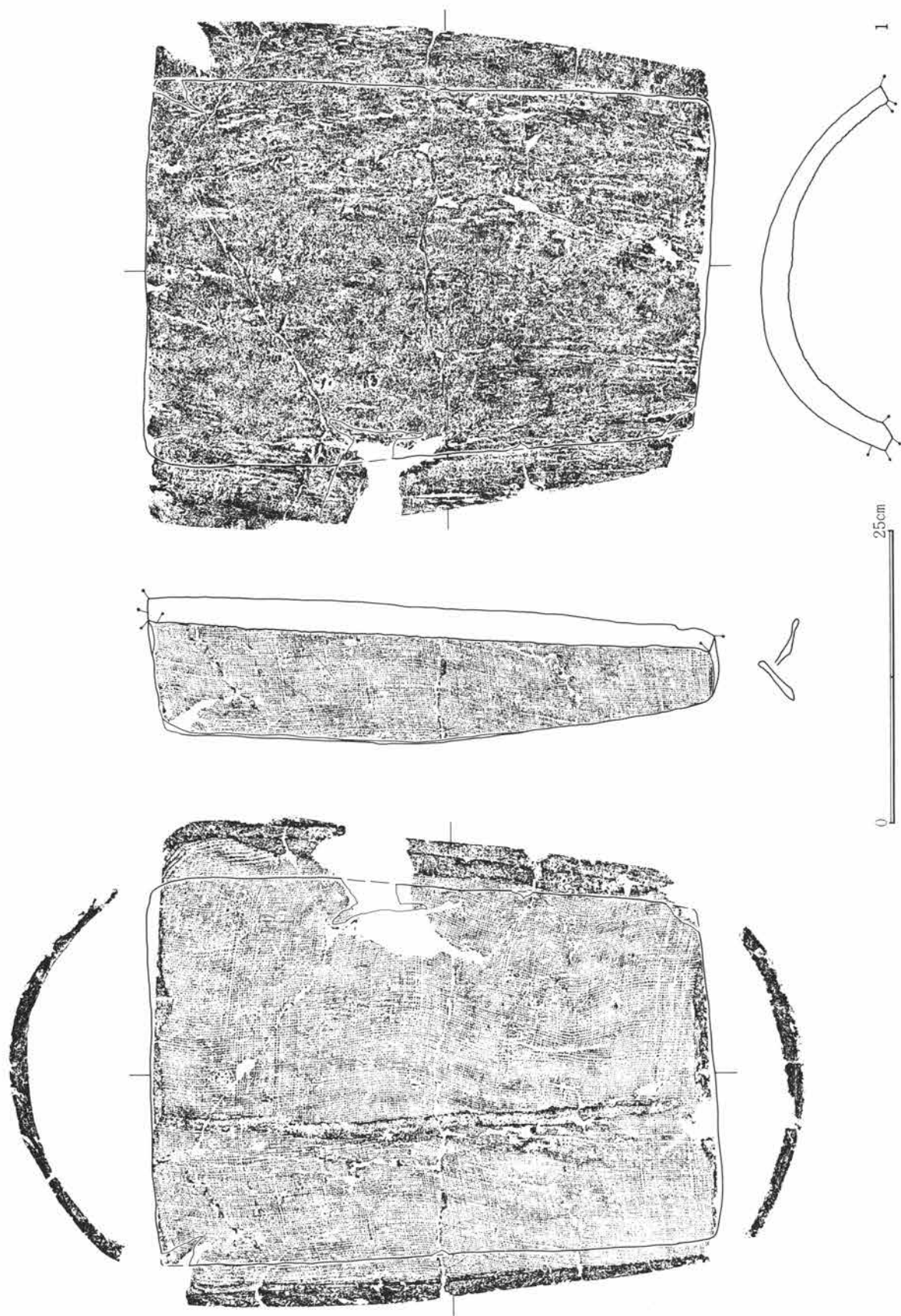
第479図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図 (12)



第480図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図 (13)

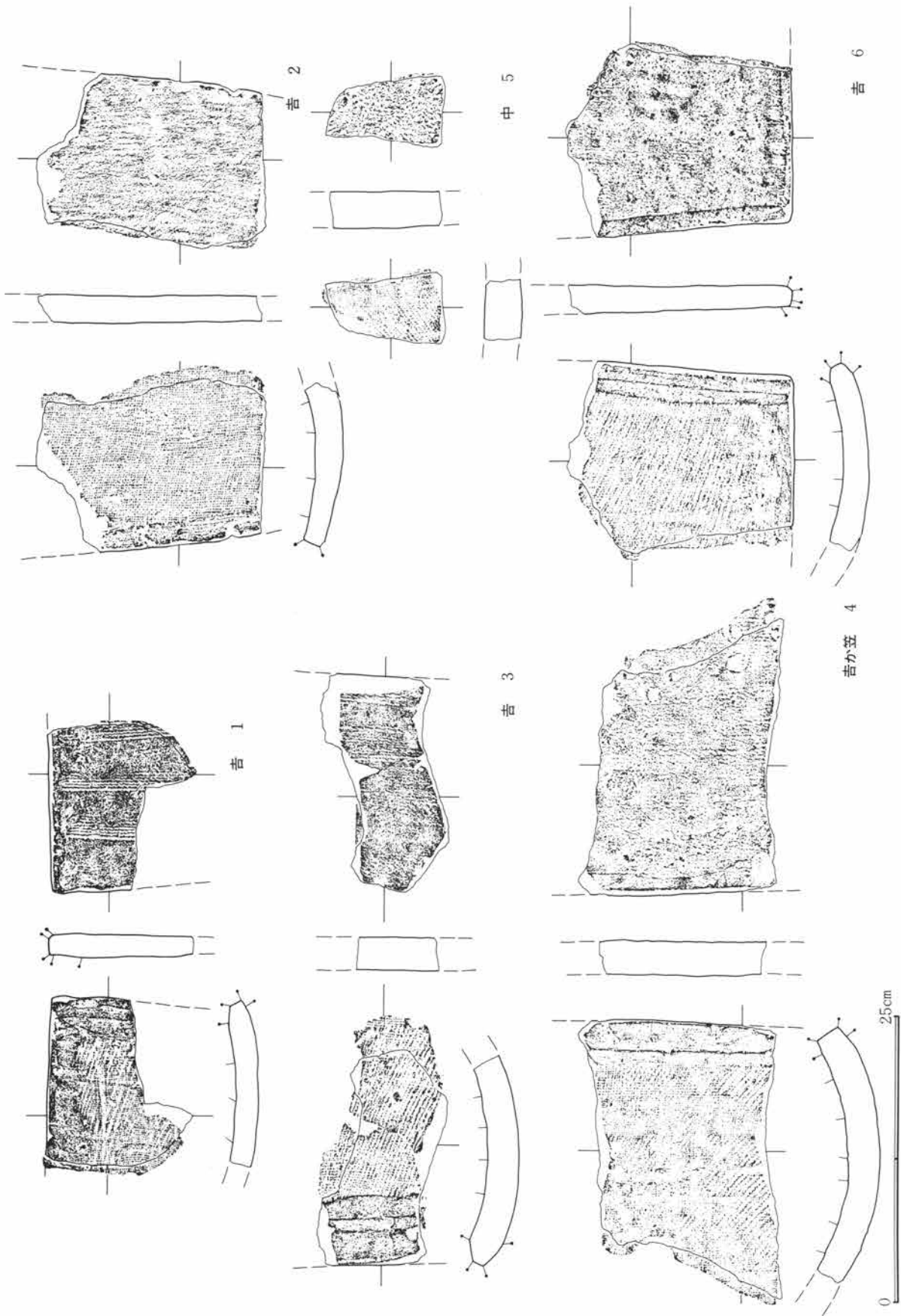


第481図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図 (14)

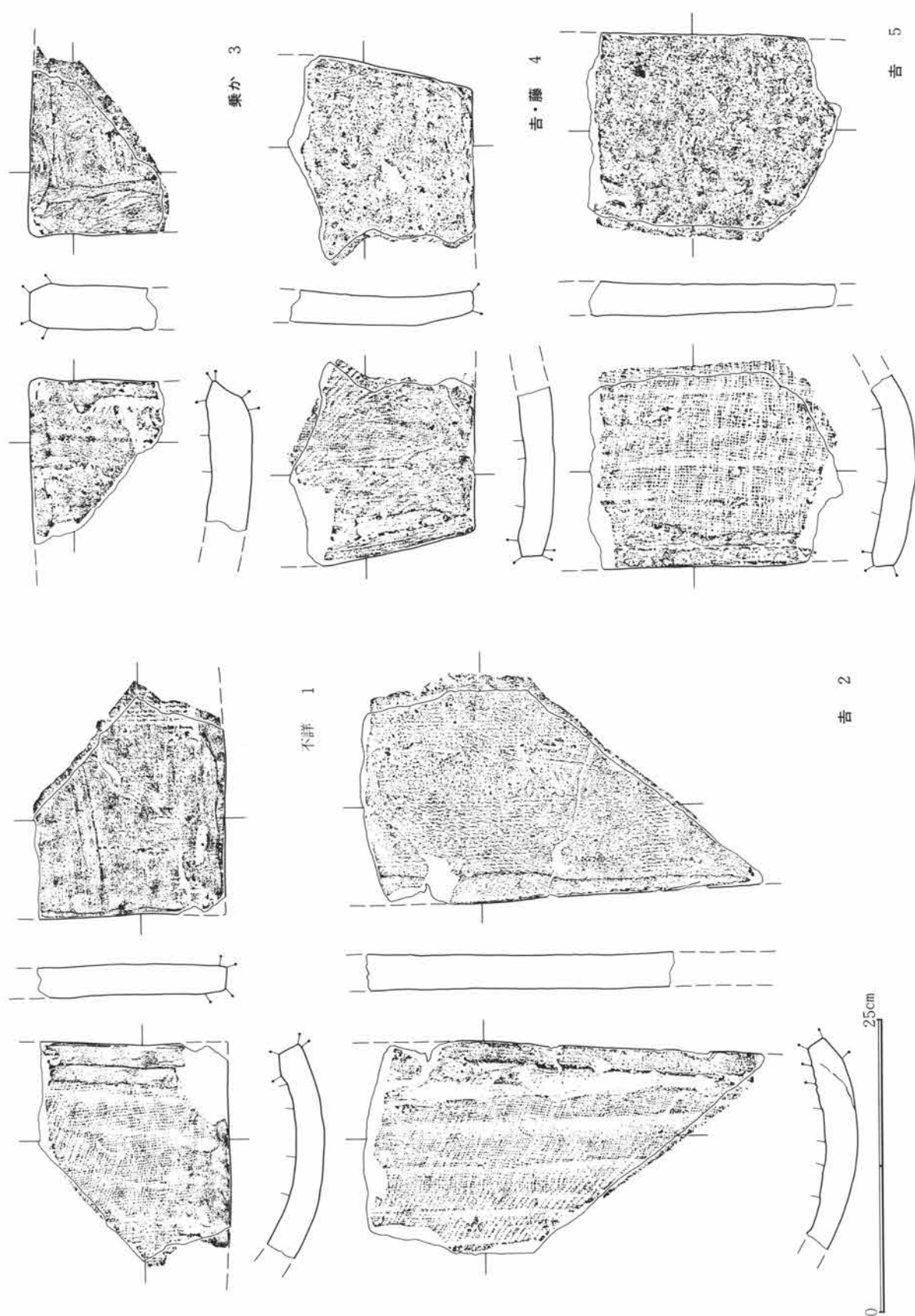


第482図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(15)

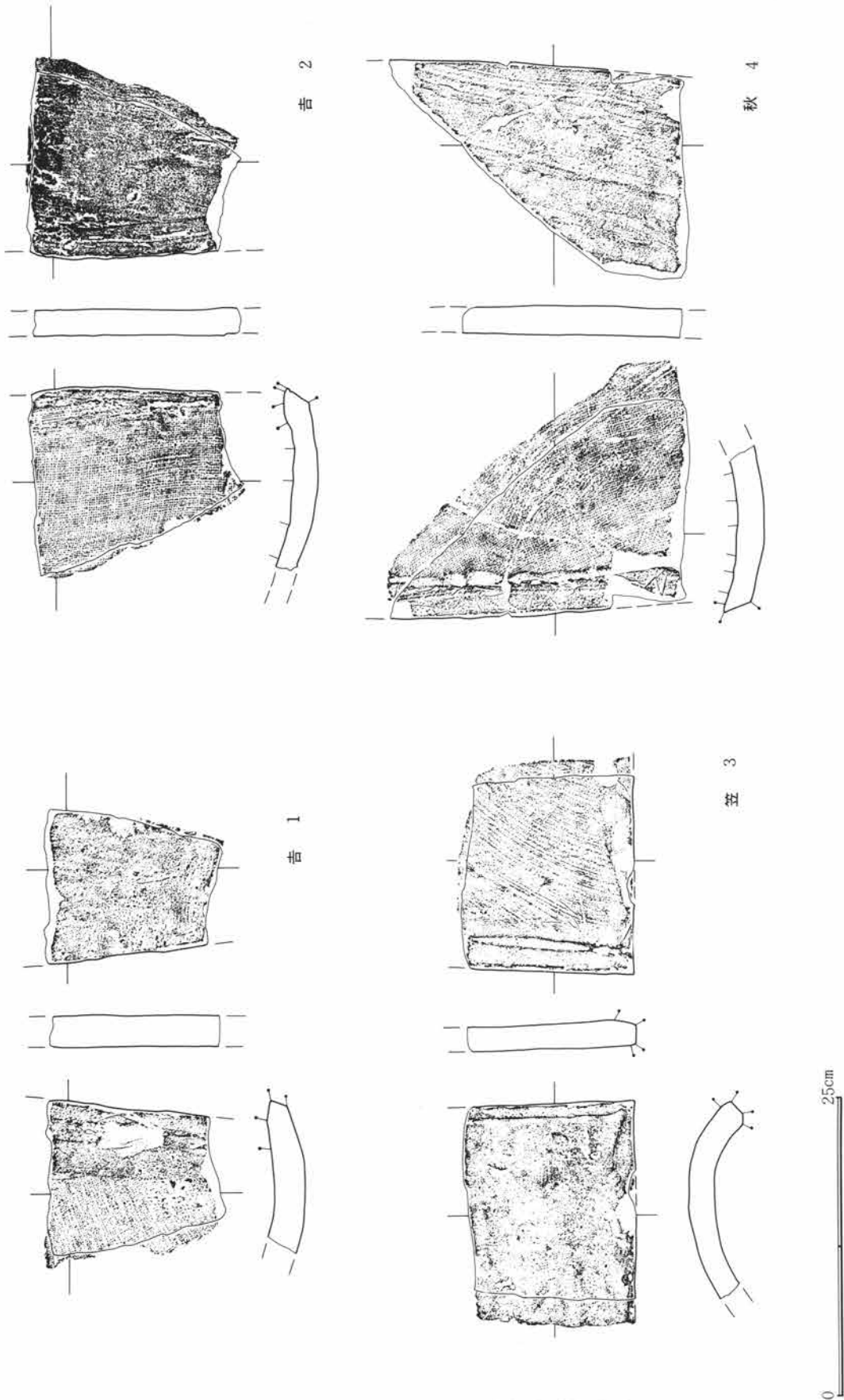




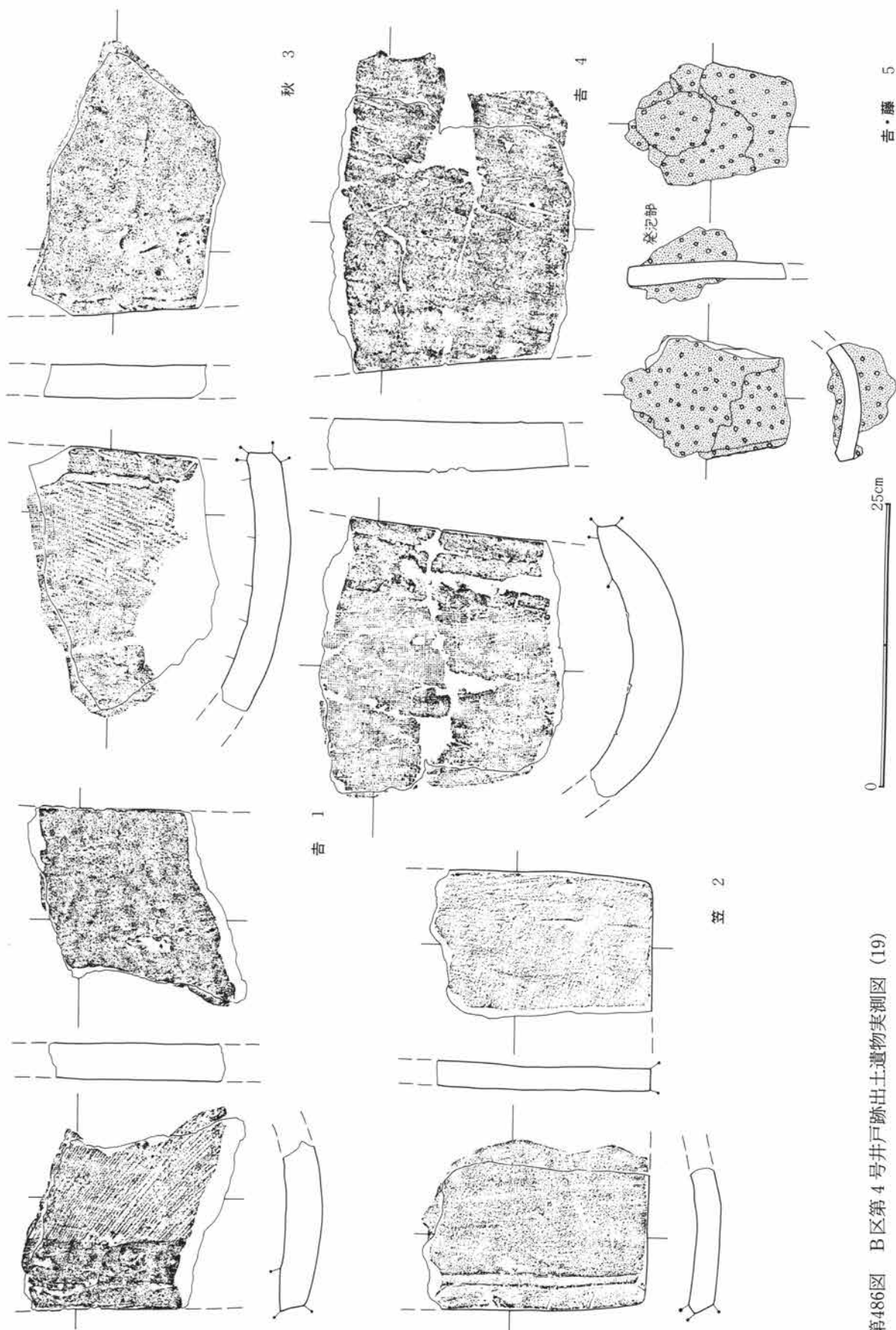
第483図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図 (16)



第484図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図 (17)



第485図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(18)



第486図 B区第4号井戸跡出土遺物実測図(19)

#### 土坑に就いて

B・A区で検出された土坑は総数1,500基ある。この1,500基の土坑のうち、第1分冊中に掲載した縄文時代所産の土坑は1,462基であり、都合、当該期の土坑は37基である。然、当該区の整理を実施する過程で、縄文時代と判定された土坑の中には、当該期の遺物を出土している土坑の存在が明らかとなった為、本号再掲載する土坑がある。この土坑は12基であり、本号に掲載する土坑数は49基である。

今次の報告対象となった土坑は上述49基である。これらの土坑は、前刊第4分冊中の土坑の項で述べたのと同じく、その検出傾向は、住居跡の存在しない部分での検出が多い。しかし一方では、住居跡覆土を切り込んで構築された場合は、特別な状況が無ければ検出はほぼ無理である。この為、住居跡の部分では、土坑の構築が一切なかったと断言することは、調査担当として出来かねる。

検出された土坑は、その主体となすが円形状土坑である。そして、D区（第3分冊）で「墓跡」の可能性が考えられた11世紀代の縦長方形の土坑の検出はなかった。この円形土坑の性格付に就いては今後に託したい。

#### 遺構外出土遺物に就いて

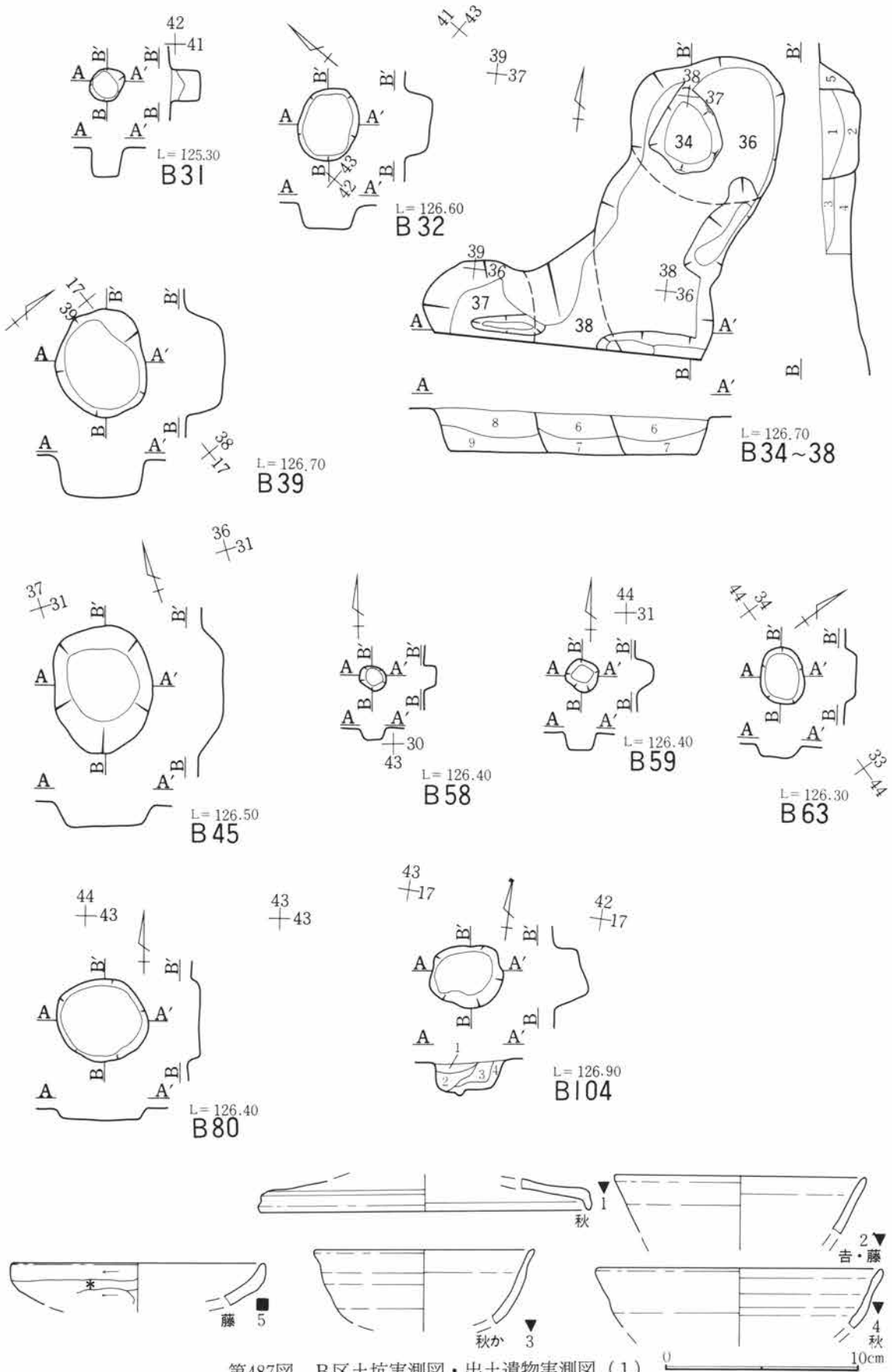
遺構外出土遺物は、溝状遺構・住居跡・土坑等の具体的な遺構から出土した遺物に就いては、各々の各項で記述掲載した以外の出土・採集遺物である。これは、表土層・鎌倉時代以降の文化層・当該期の文化層・遺構確認時の遺構覆土内出土等、遺跡の特定が出来なかった出土遺物である。

出土遺物種の傾向としては、住居跡総体の出土遺物と対比しても大きな異なりは認められない。だが、特定の器種に就いては、量的に多いという点と、特殊な加工を施したものが認められる。

量的な面では、短頸壺の蓋が多いという点である。この蓋は遺構外では10点出土した全てを図化掲載した。この蓋の外に、須恵器大甕の破片が多い点である。ただ、個体が大きいため、破片化した場合に、坏等の製品に対して多く感ぜられるのかも知れない。そして、特殊な加工とは、第502図に図化掲載した広口壺の口縁部に、一定間隔で縦位に帯状に墨書する個体の存在である。この種の類例は当遺跡内では、図化掲載した4点のみであり、特にB区内に集中するという特殊な状況も付加され、非常に特殊な遺物であることが判断される。この遺構外出土の遺物は、第495図～第536図に掲載した。

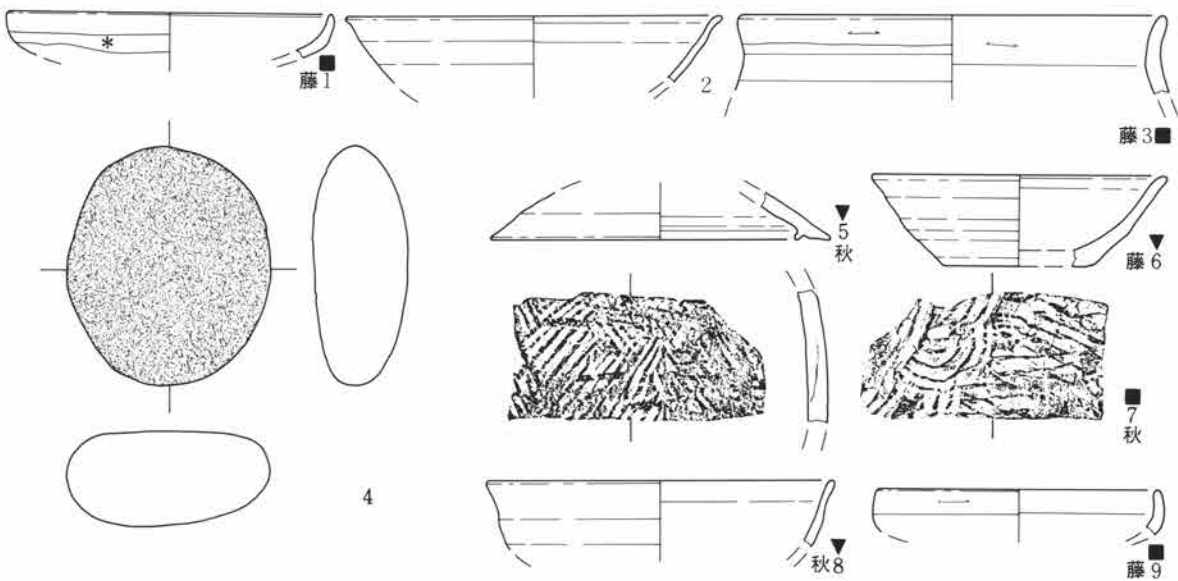
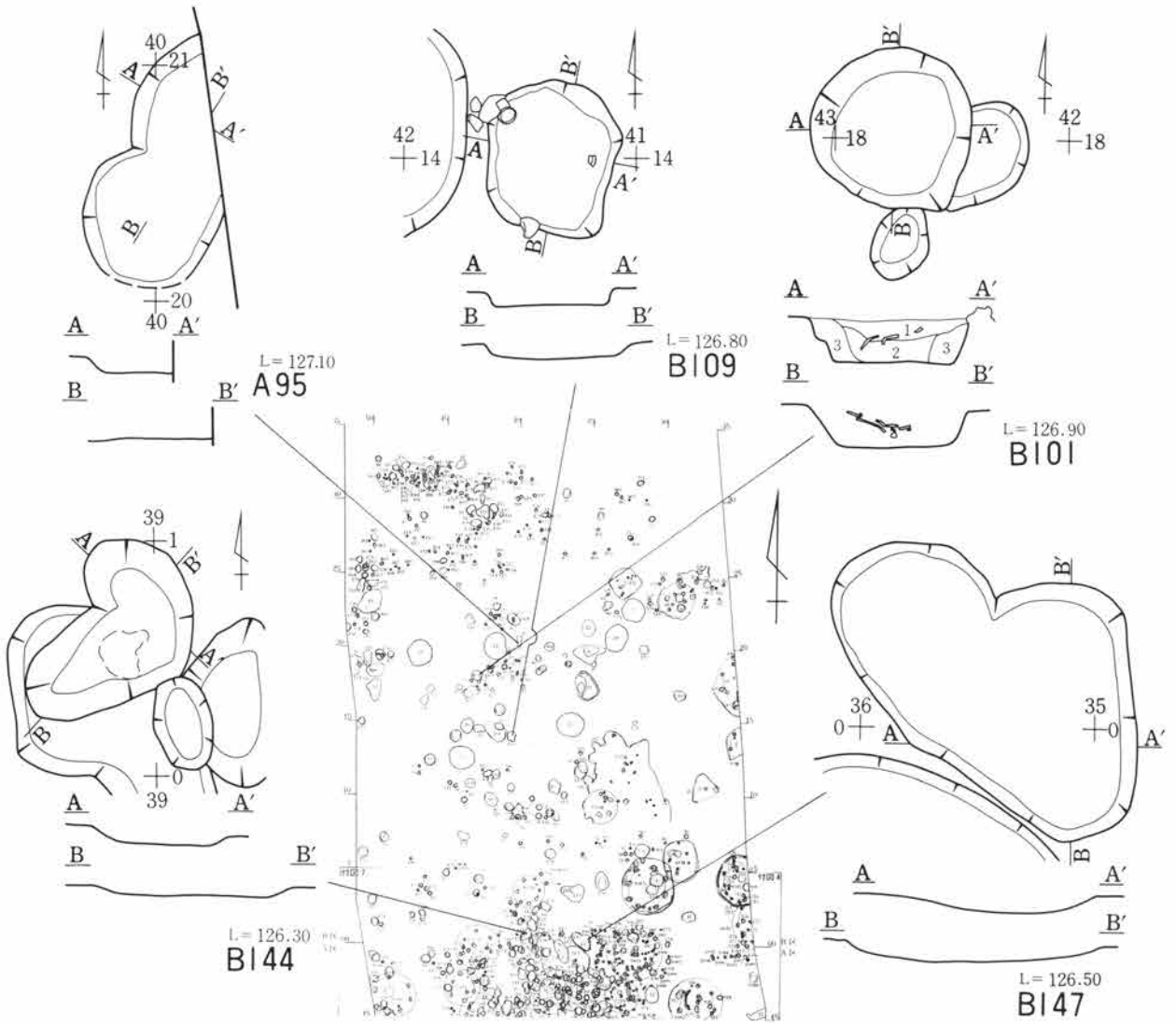
#### 追補遺物に就いて

追補の遺物は、既刊第1分冊から第4分冊の報告該当部より出土した遺物で、未報告の遺物の中で良好な資料であるが、諸般の都合上掲載されなかった遺物である。今次の追補では、第1分冊での追補が主体となっている。

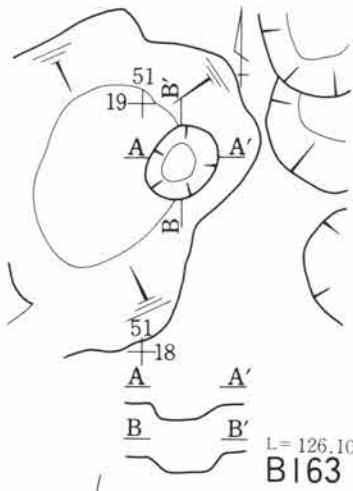


第487図 B区土坑実測図・出土遺物実測図(1)

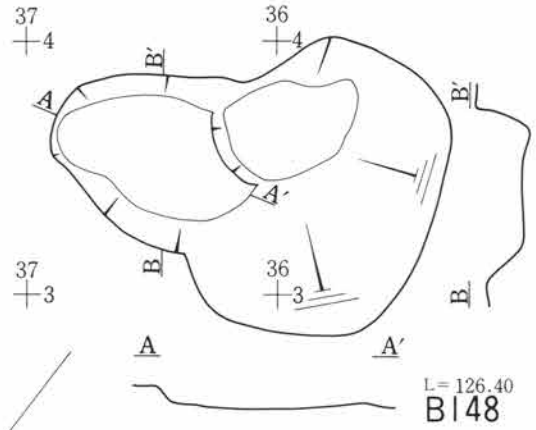
第3節 検出された住居跡について



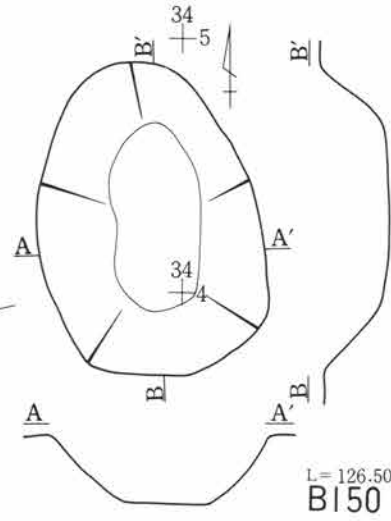
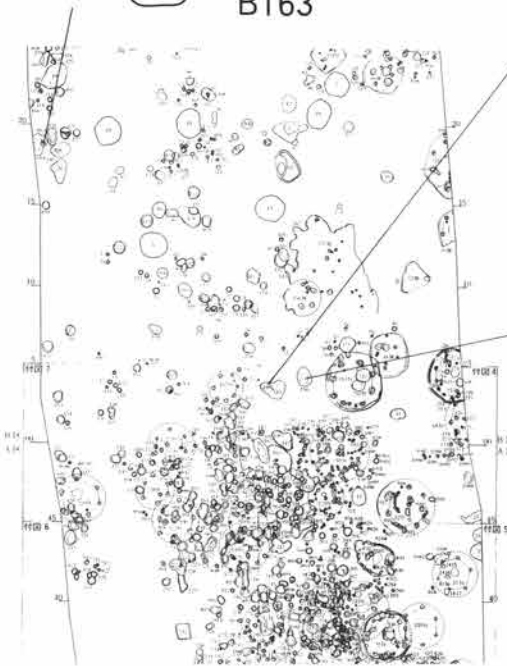
第488図 B区土坑実測図・出土遺物実測図(2) 0 10cm



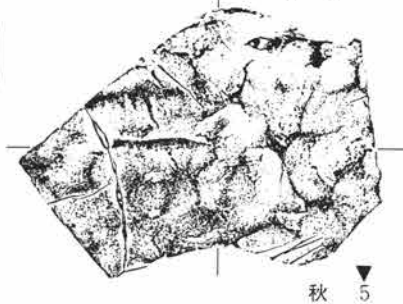
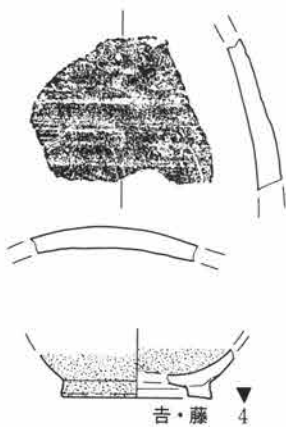
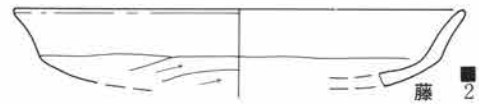
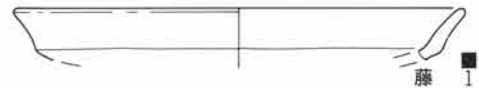
L=126.10  
B163



L=126.40  
B148



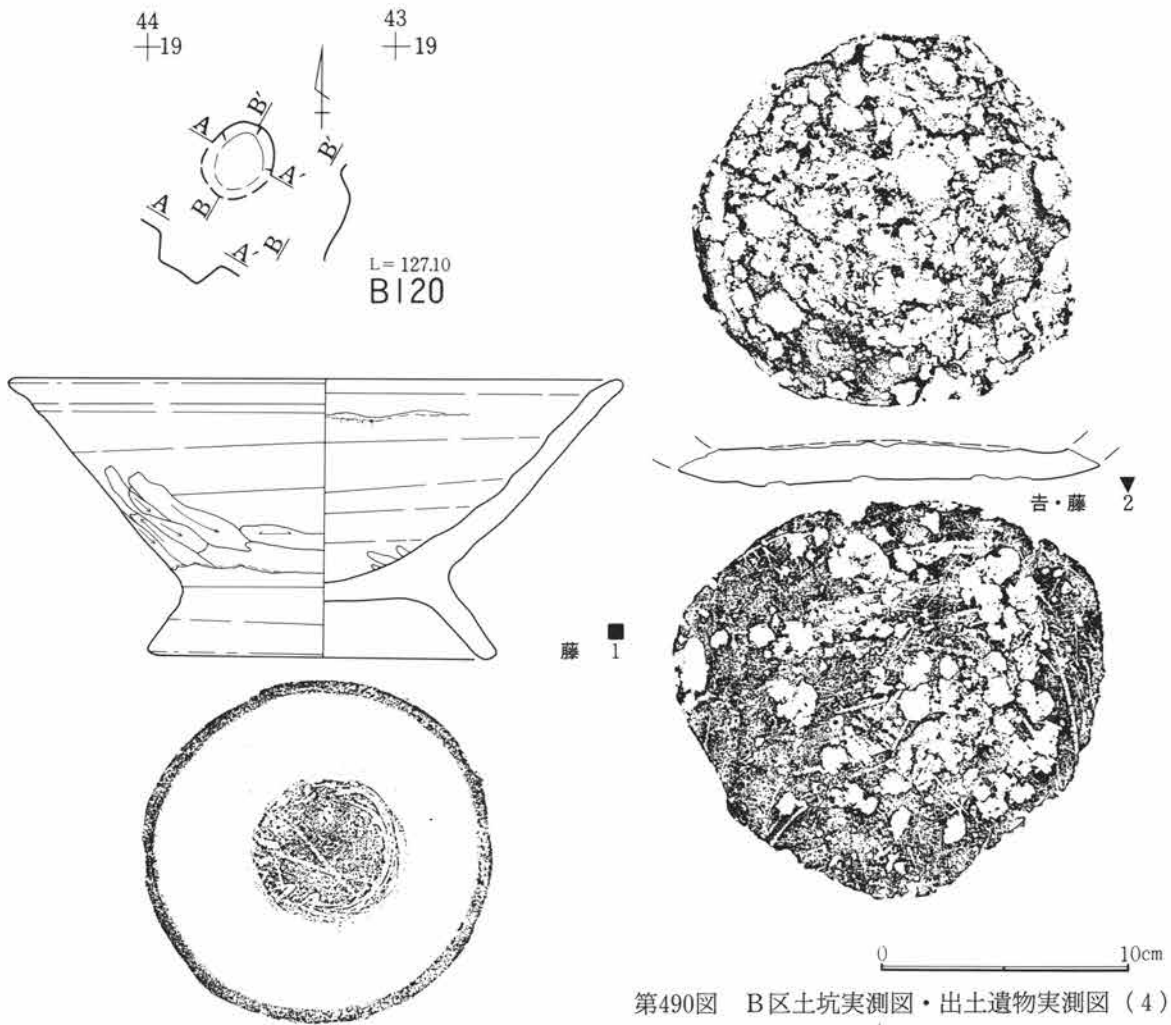
L=126.50  
B150



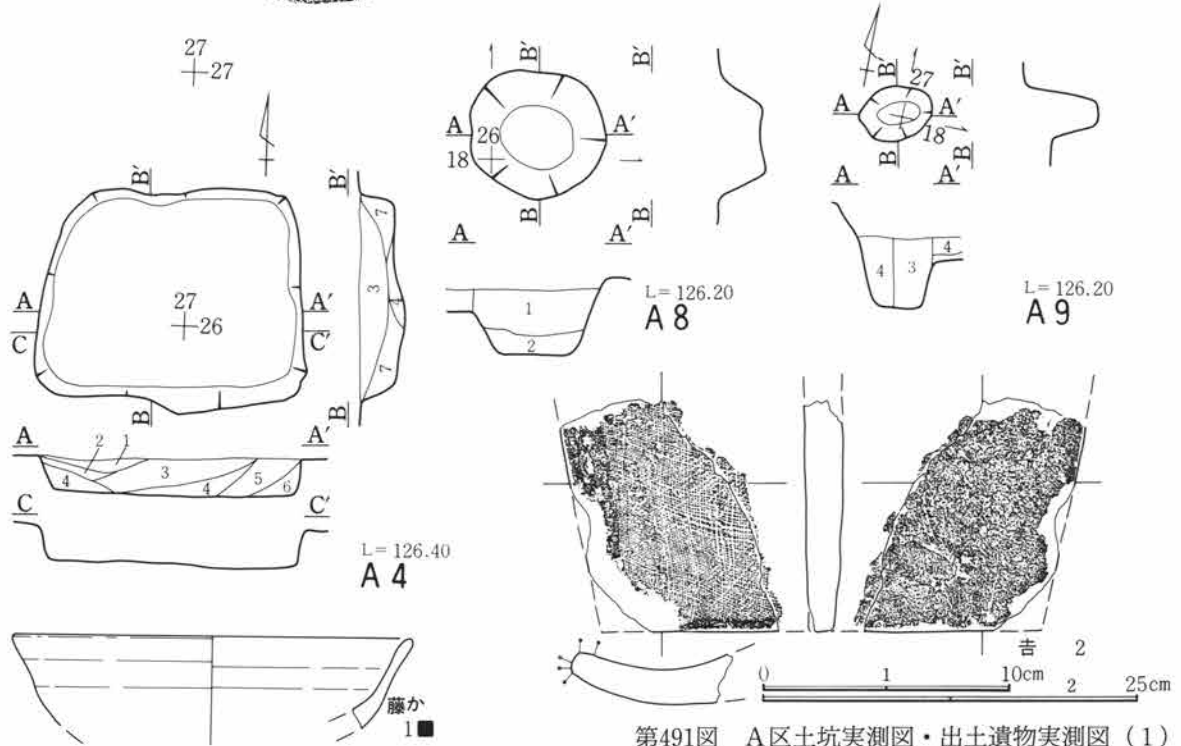
第489図 B区土坑実測図・  
出土遺物実測図(3)

0 10cm

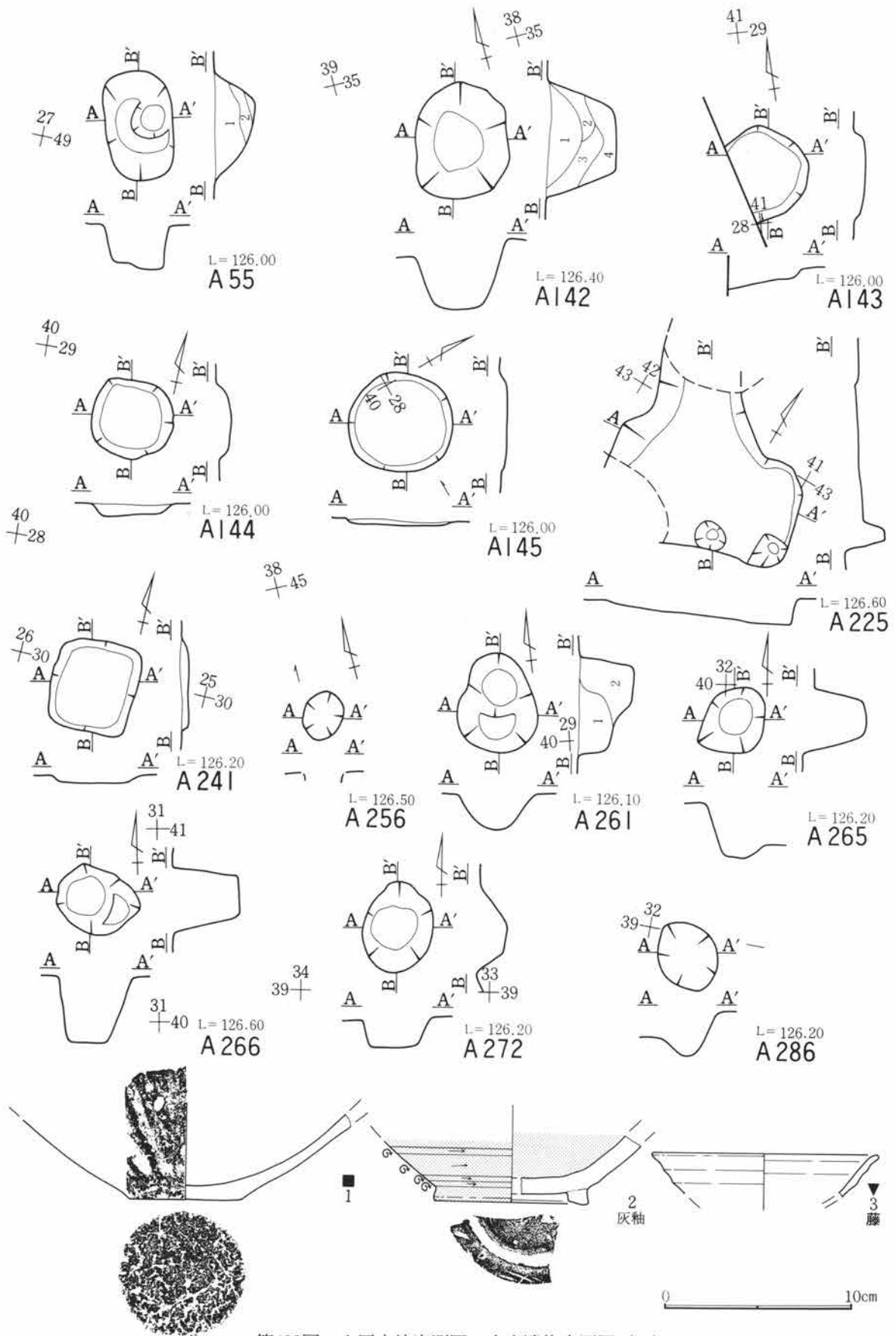




第490図 B区土坑実測図・出土遺物実測図(4)

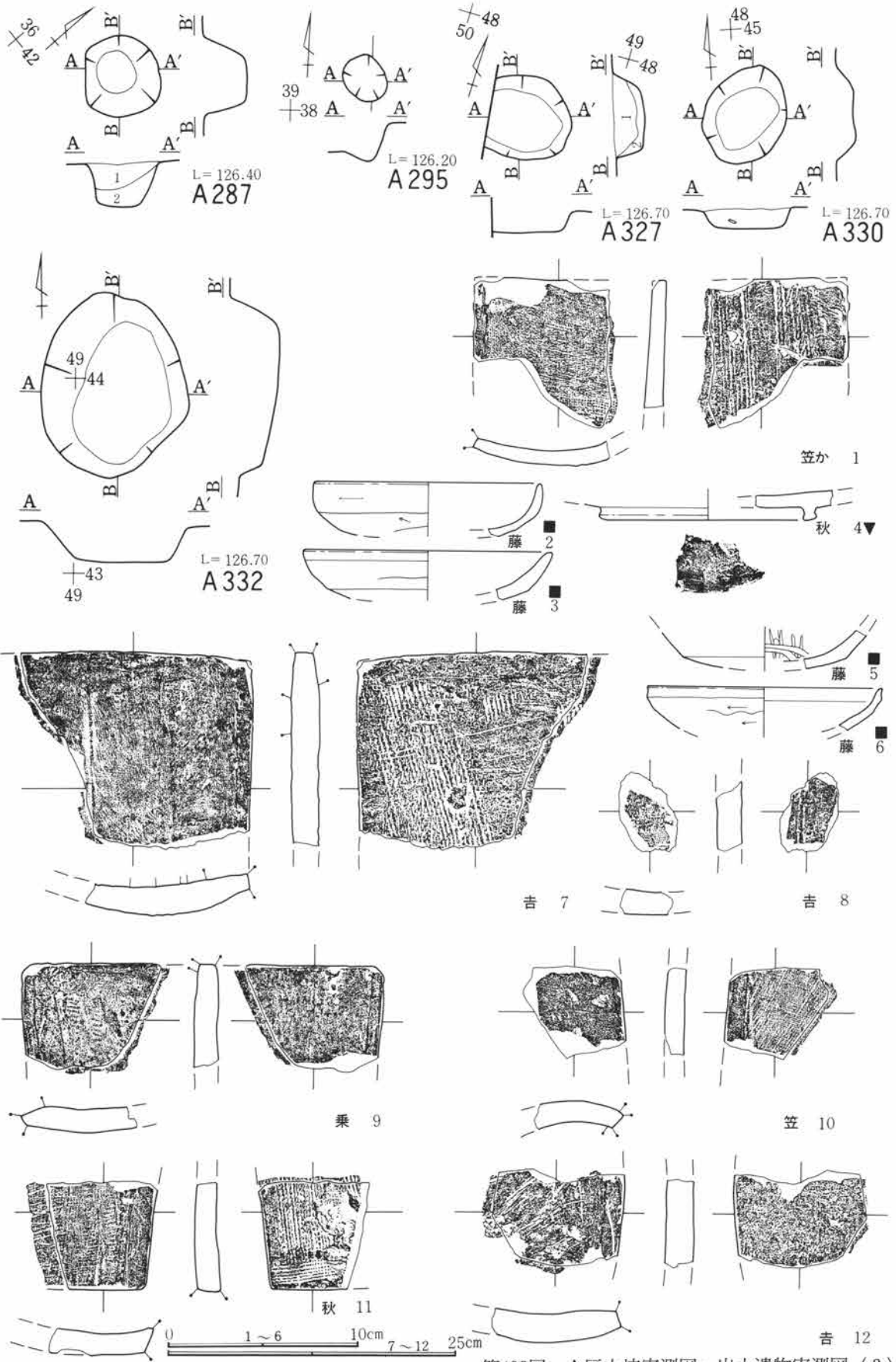


第491図 A区土坑実測図・出土遺物実測図(1)

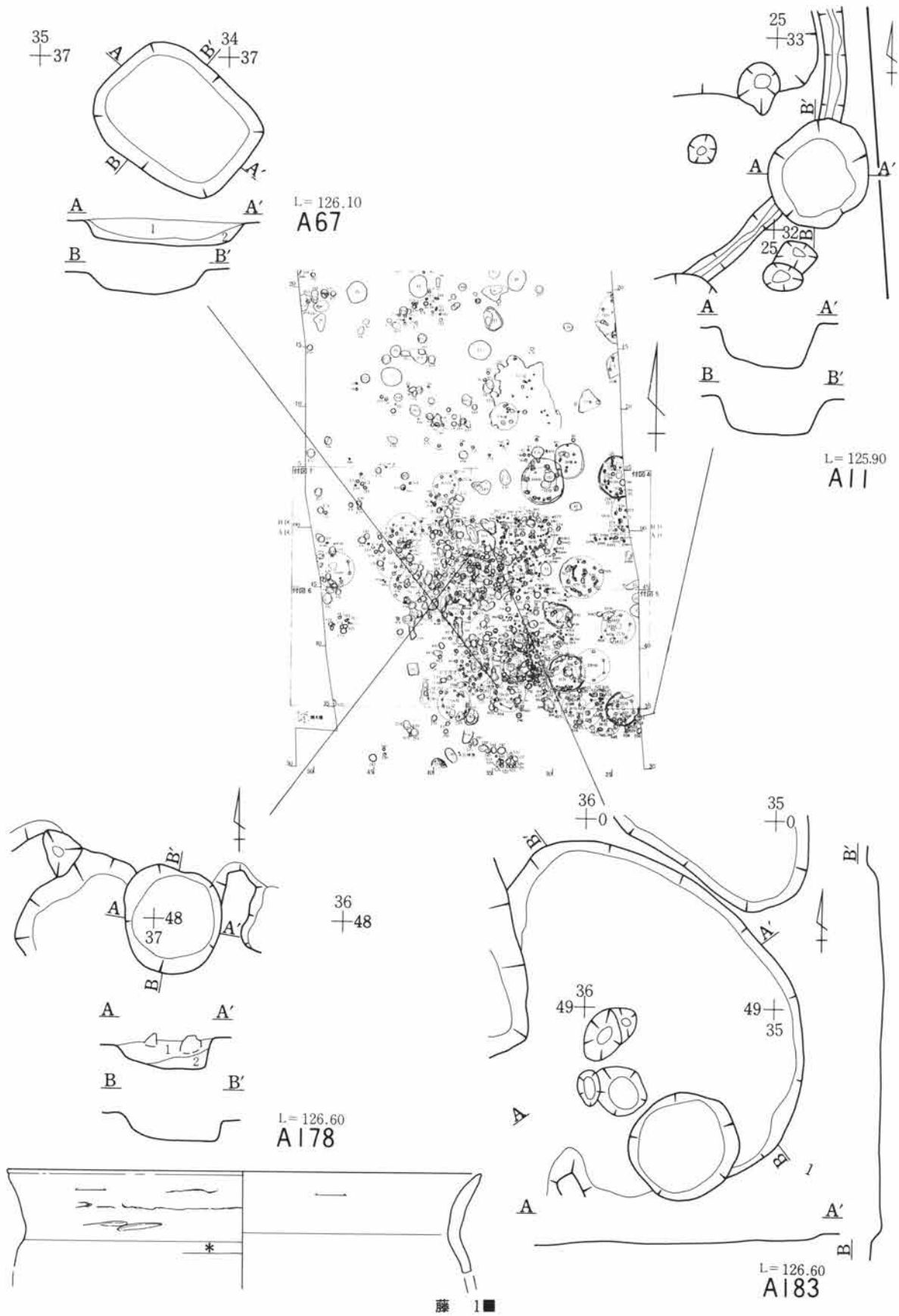


第492図 A区土坑実測図・出土遺物実測図(2)

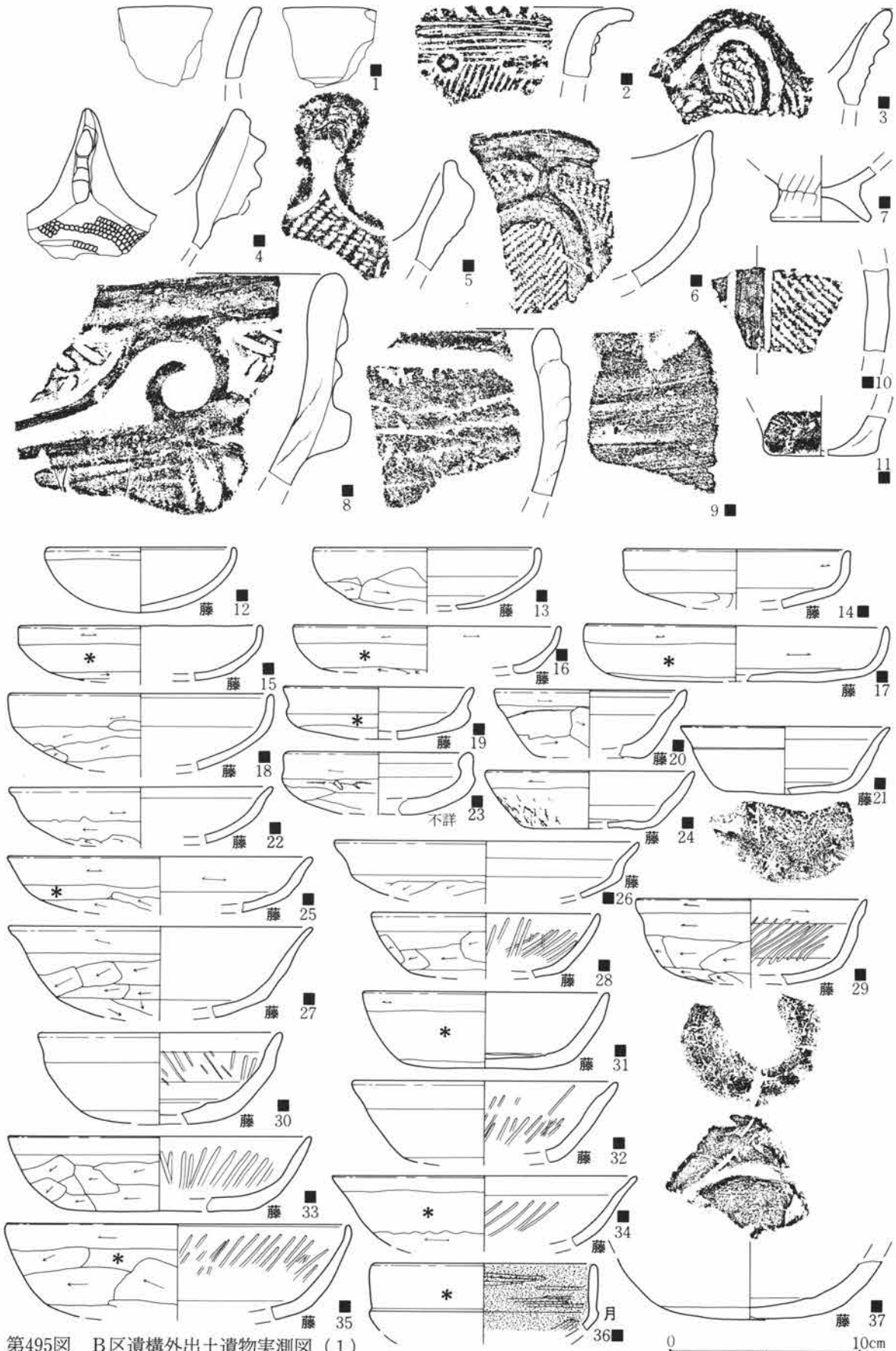
第3節 検出された住居跡について



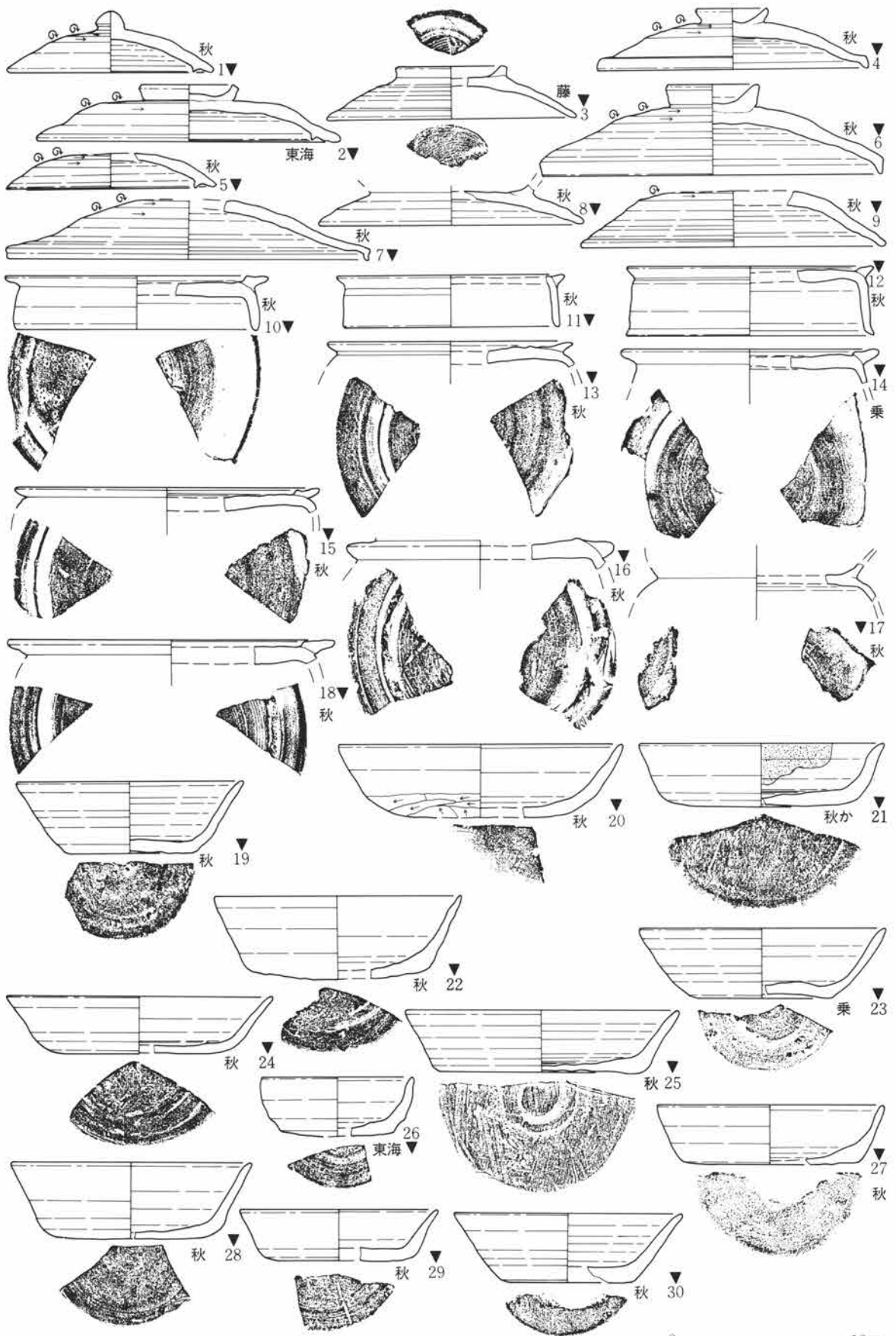
第493図 A区土坑実測図・出土遺物実測図(3)



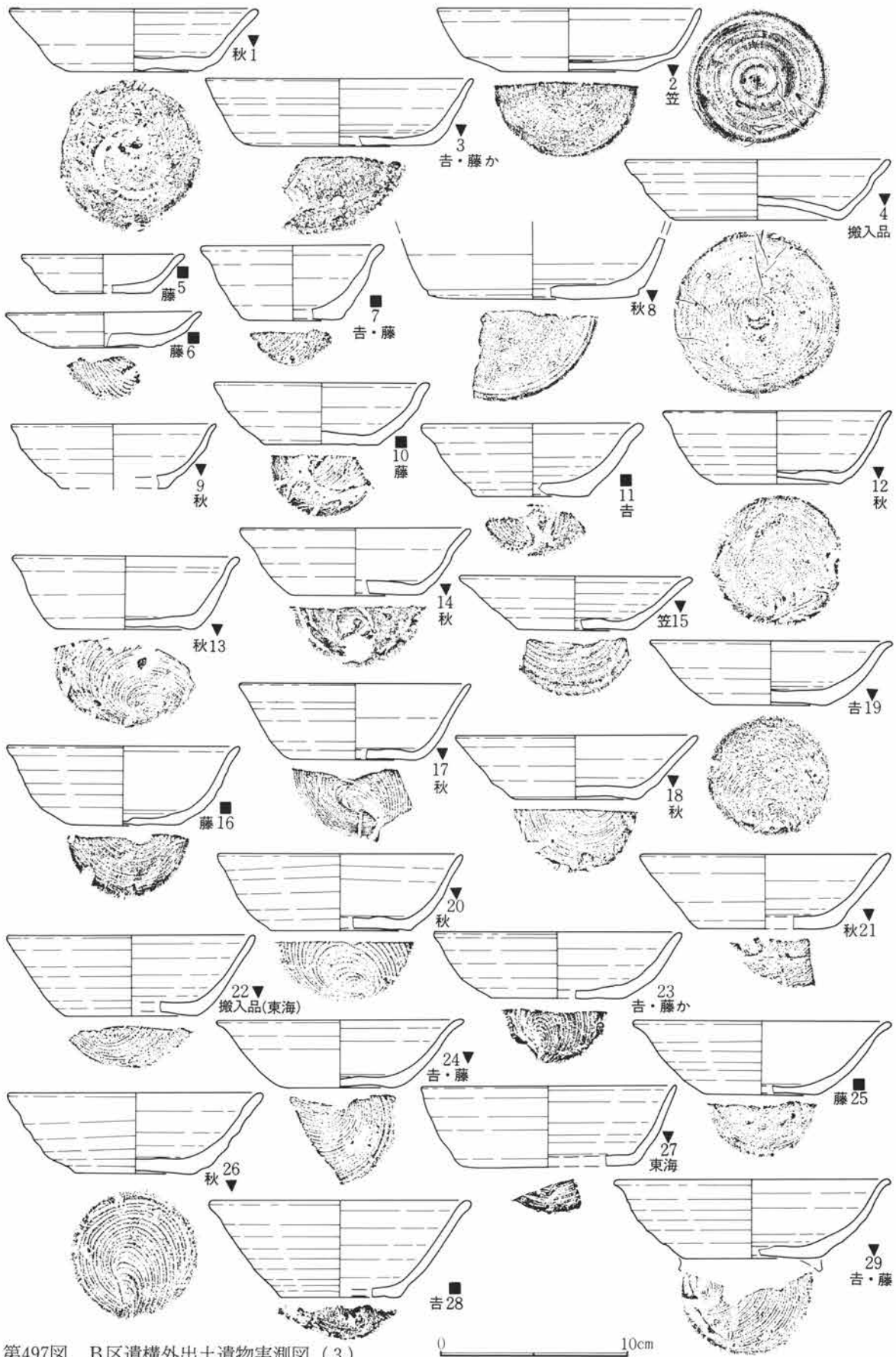
第494図 A区土坑実測図・出土遺物実測図(4)



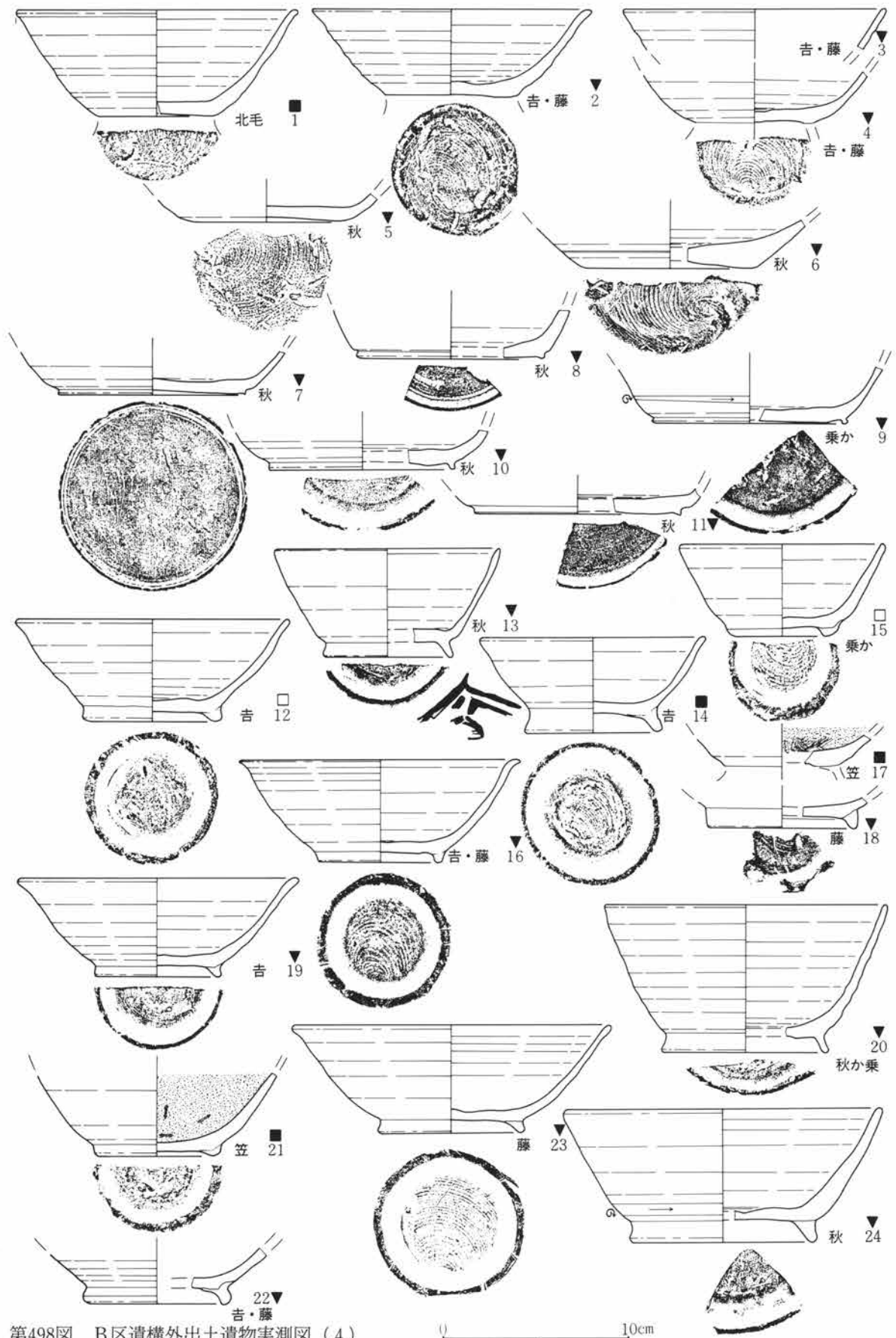
第495図 B区遺構外出土遺物実測図(1)



第496図 B区遺構外出土遺物実測図(2)



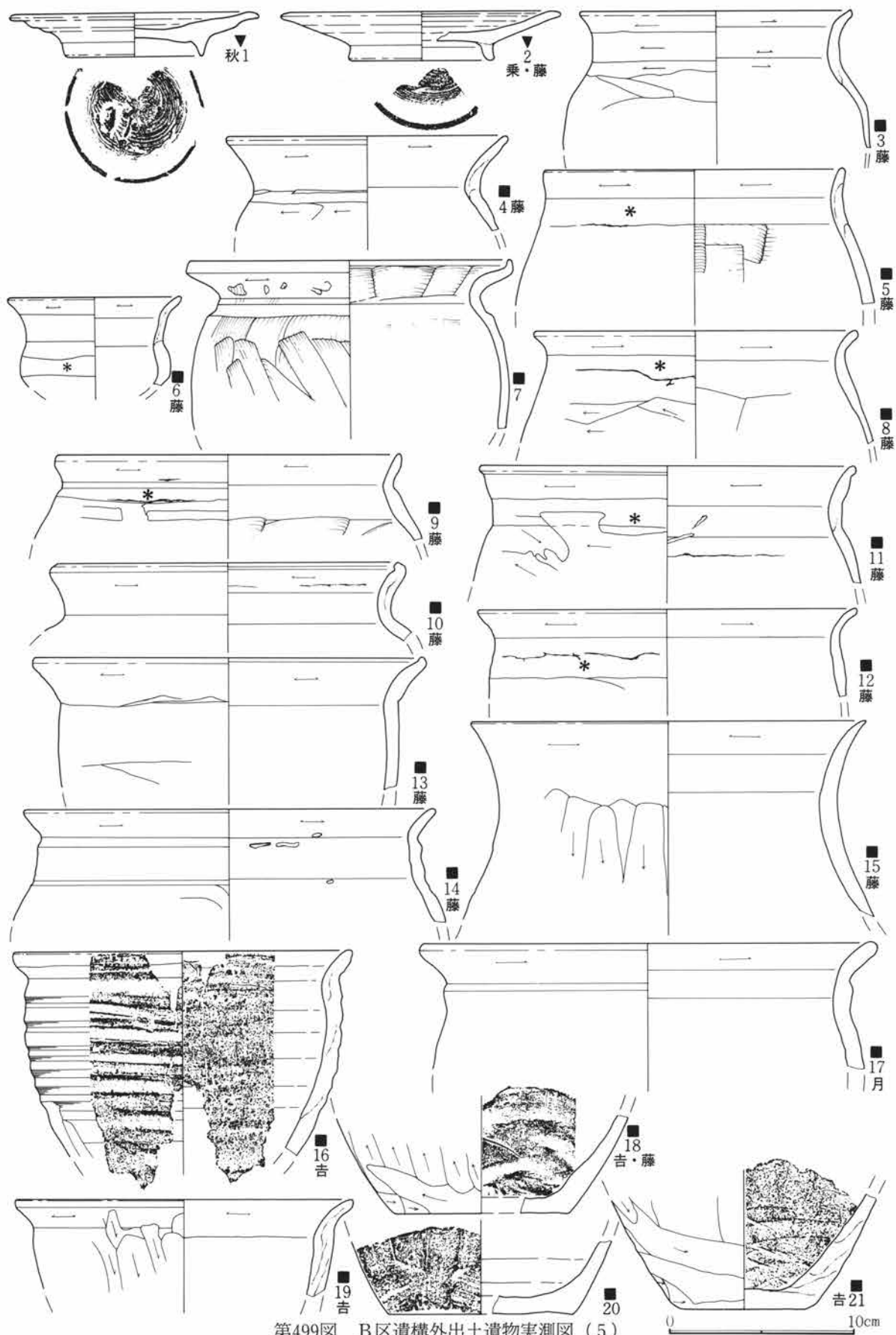
第497図 B区遺構外出土遺物実測図(3)



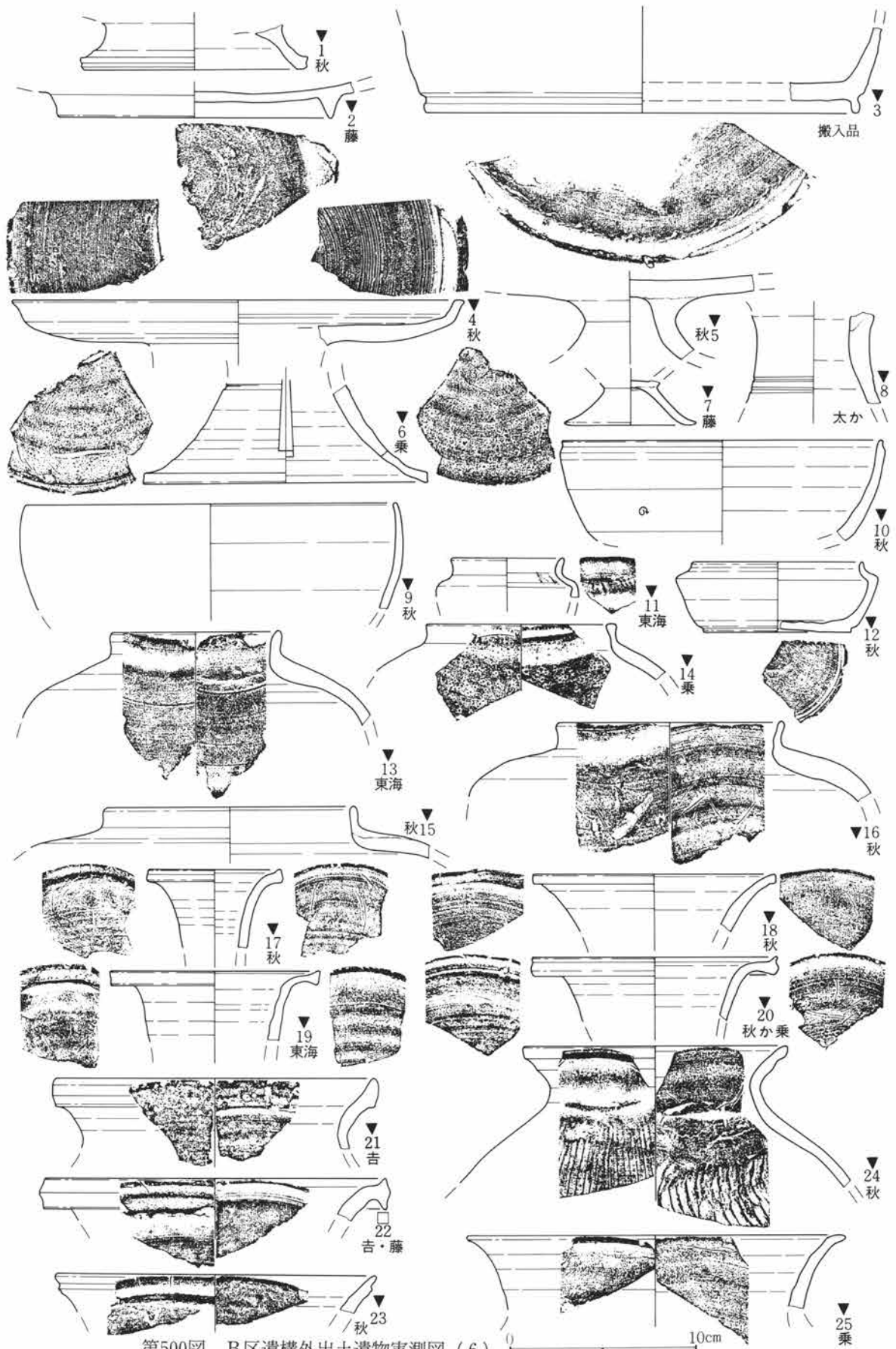
第498図 B区遺構外出土遺物実測図(4)



第3節 検出された住居跡について

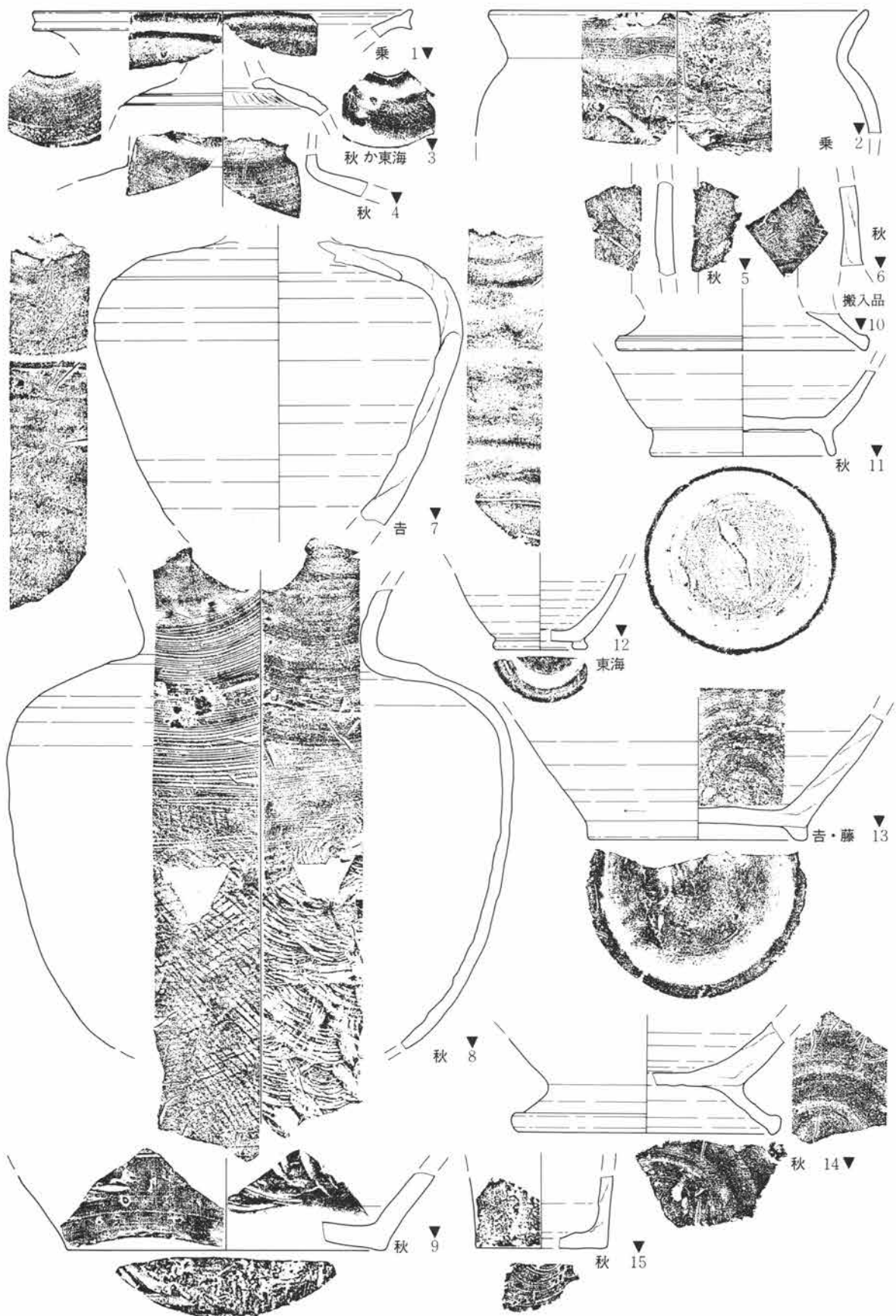


第499図 B区遺構外出土遺物実測図(5)



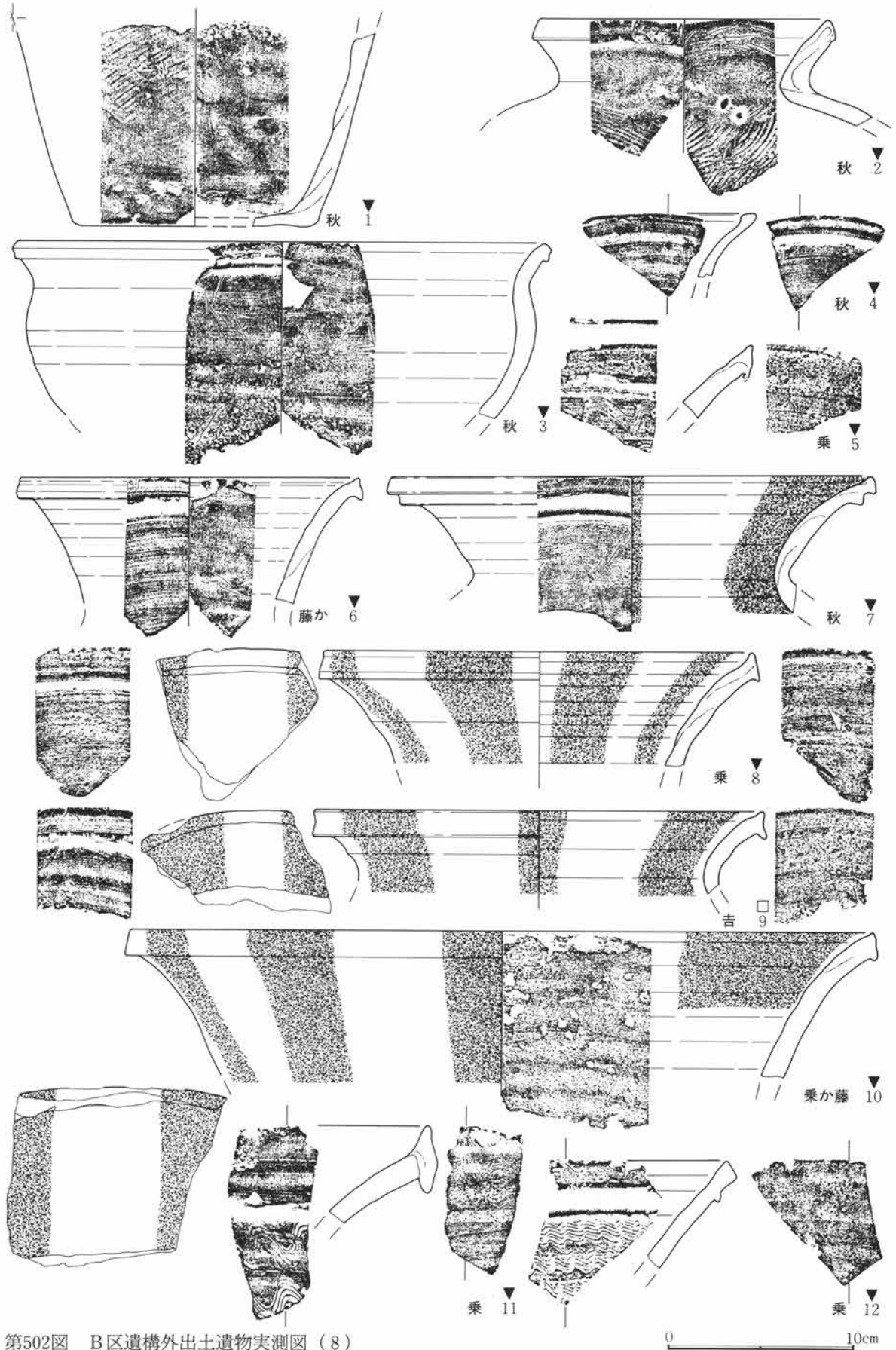
第500図 B区遺構外出土遺物実測図(6)

第3節 検出された住居跡について

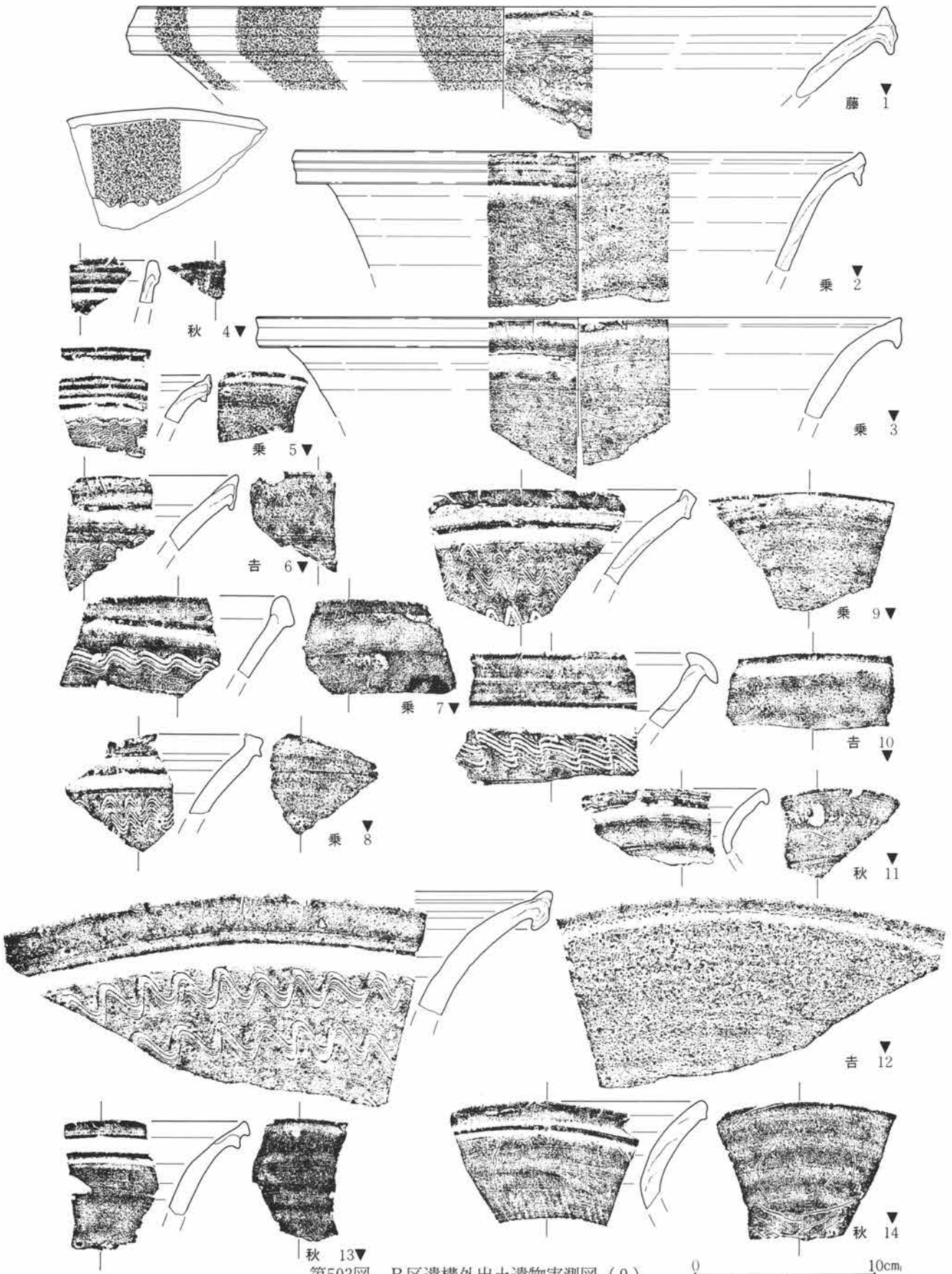


第501図 B区遺構外出土遺物実測図(7)

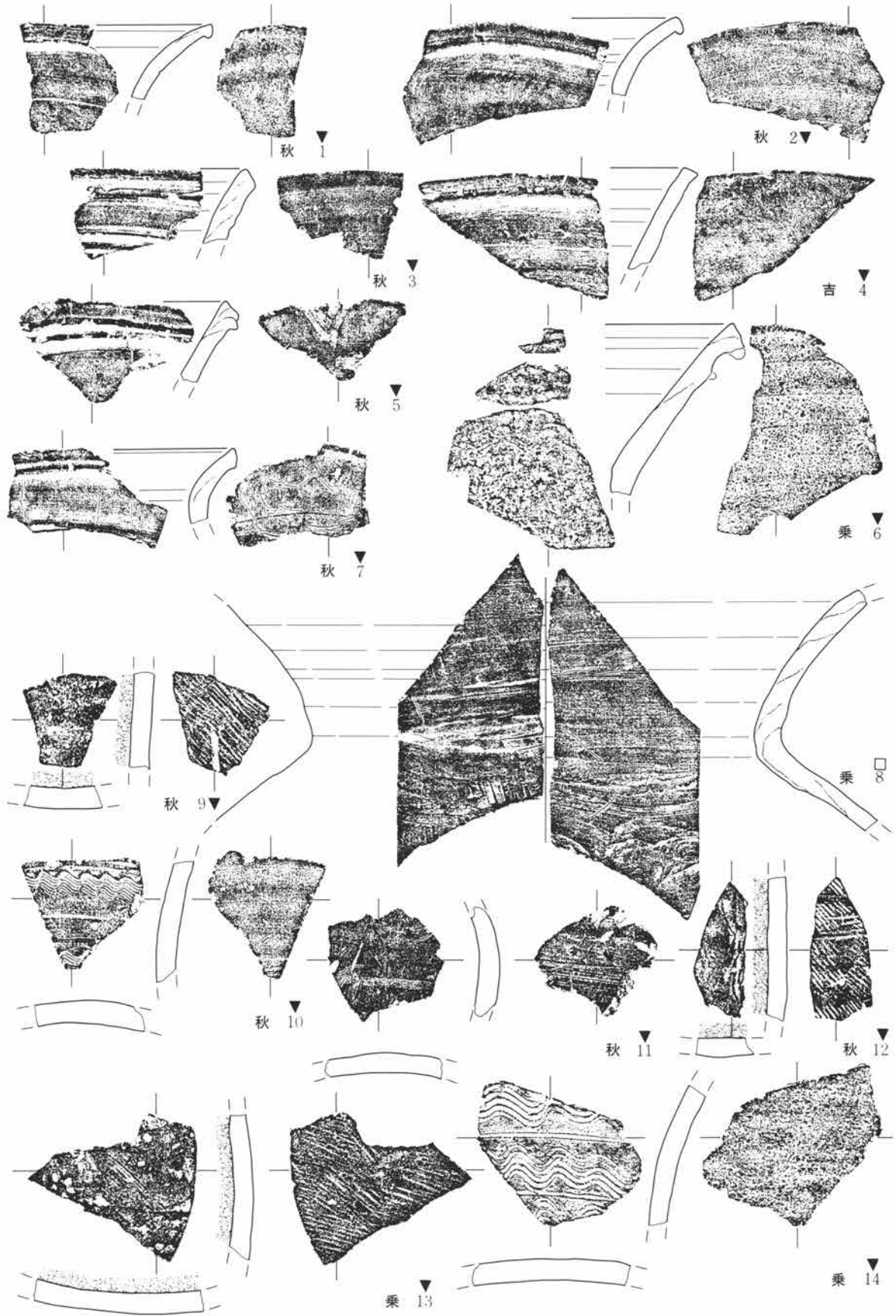
0 10cm



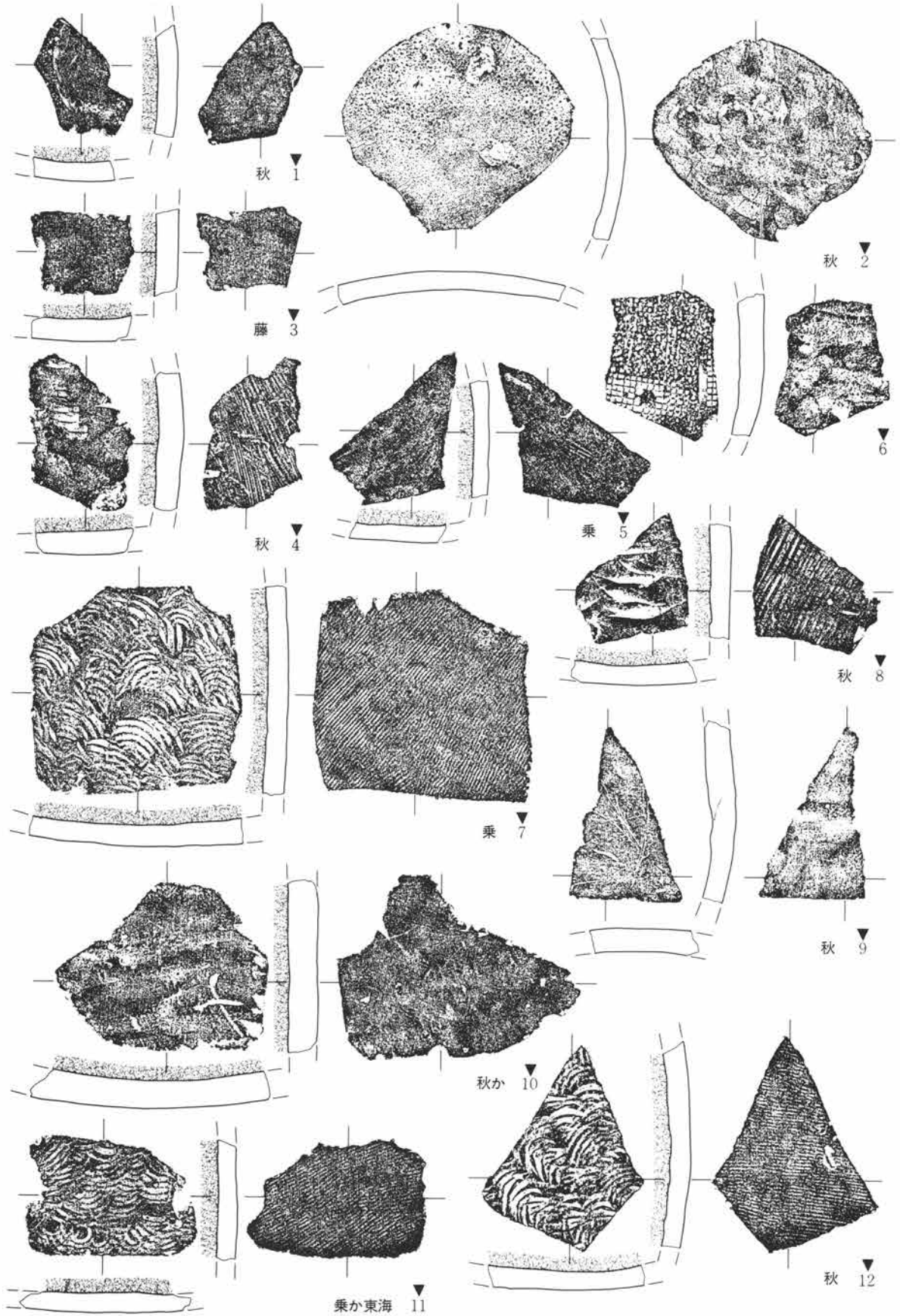
第502図 B区遺構外出土遺物実測図(8)



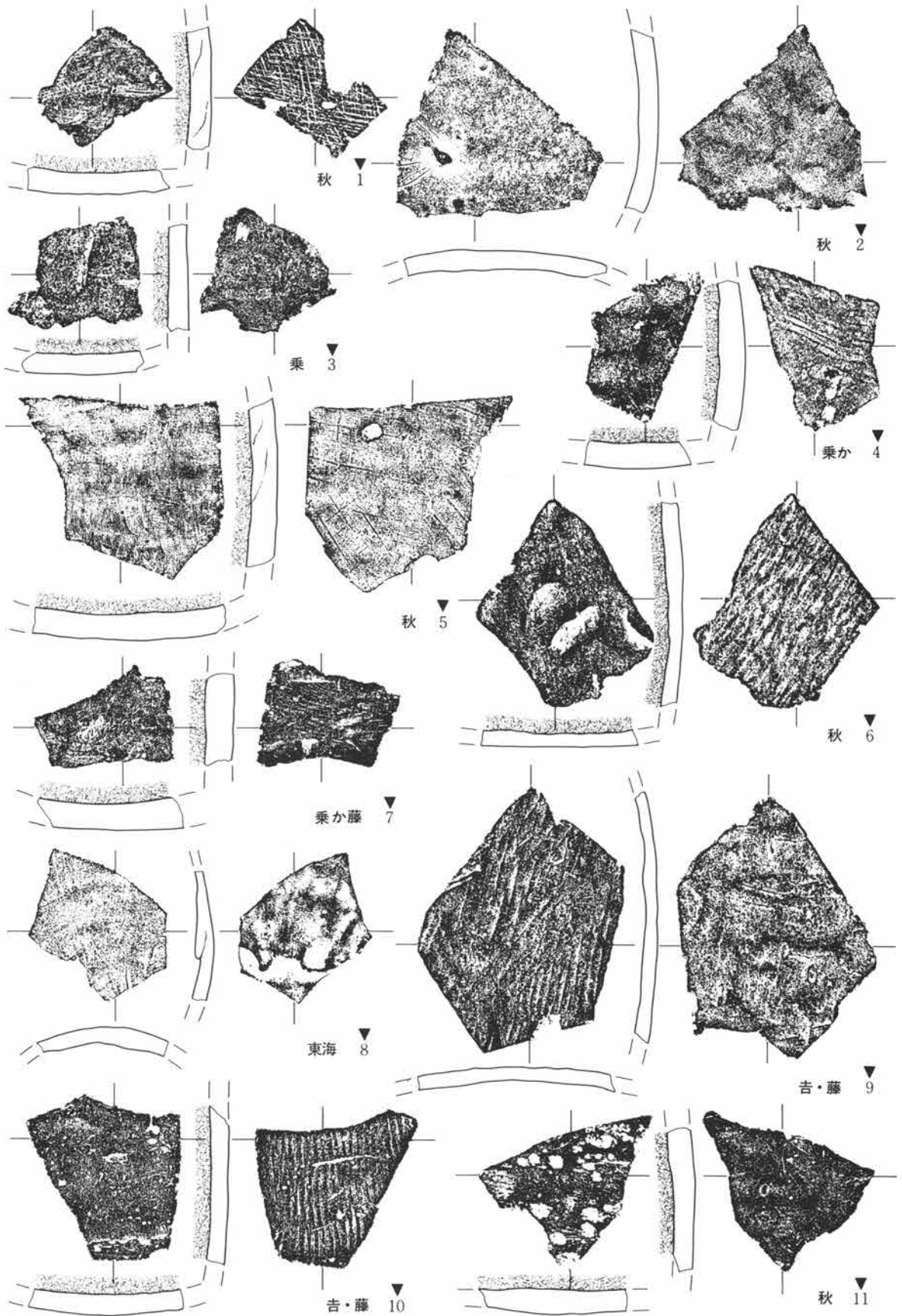
第503図 B区遺構外出土遺物実測図(9)



第504図 B区遺構外出土遺物実測図 (10)

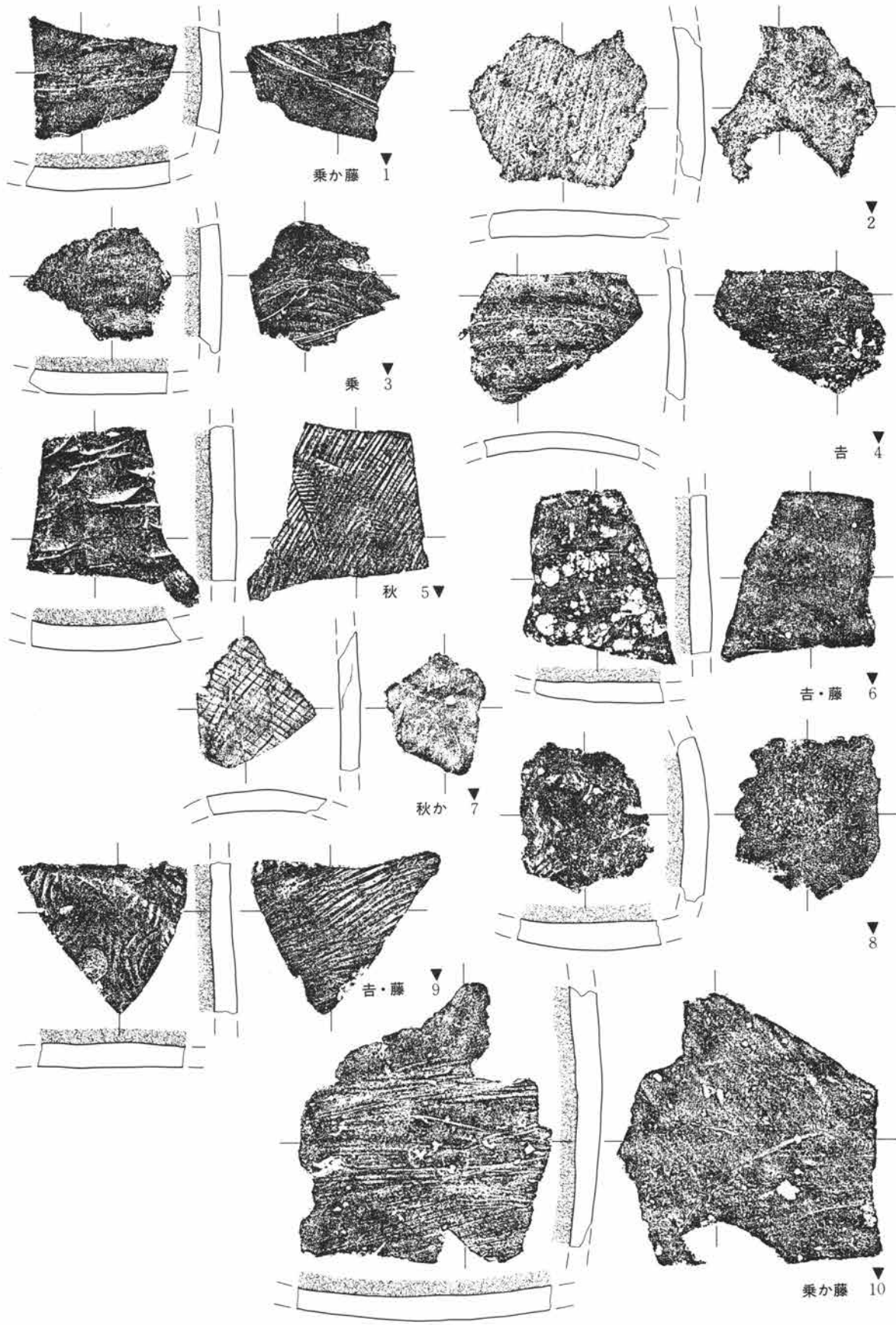


第505図 B区遺構外出土遺物実測図 (11)



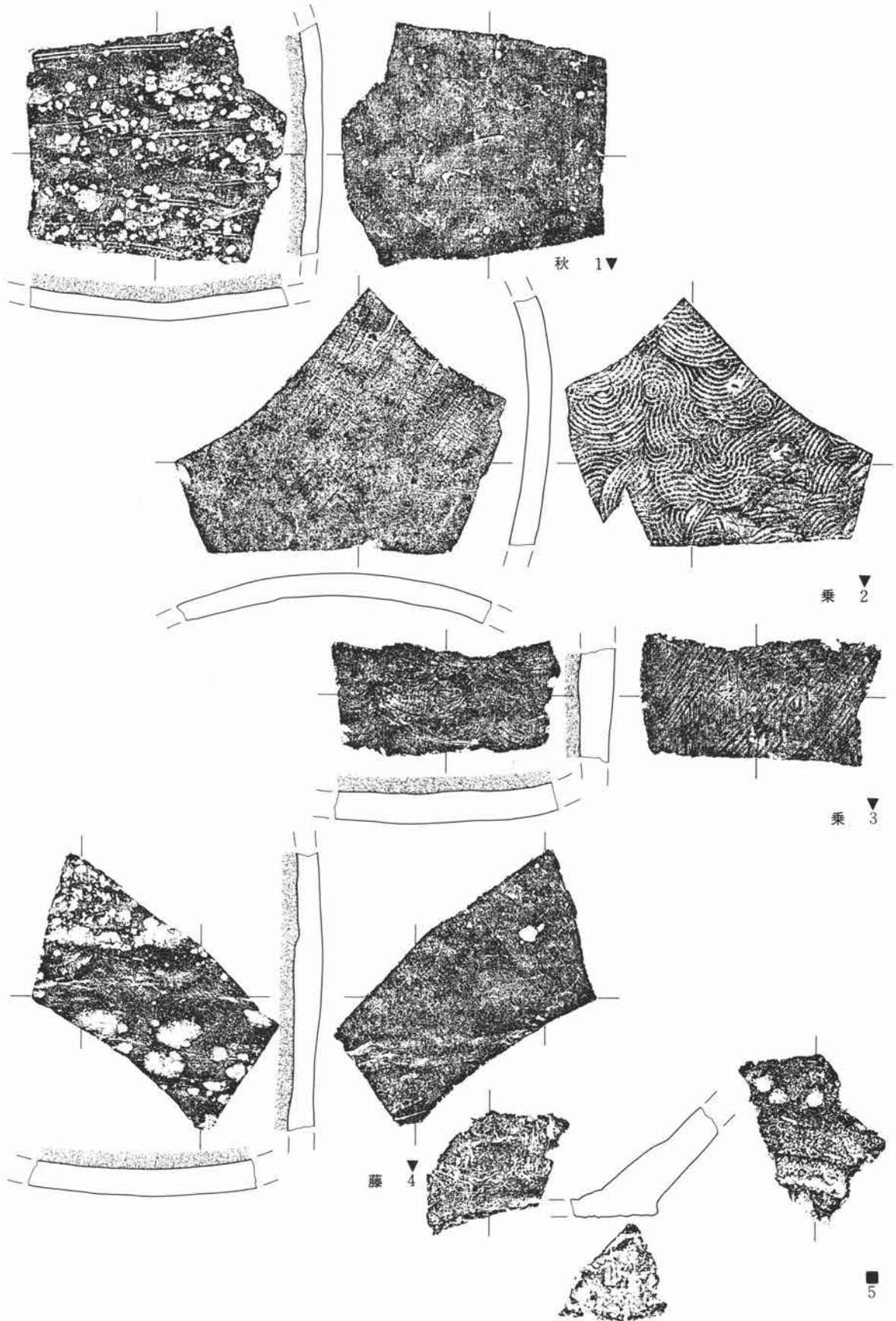
第506図 B区遺構外出土遺物実測図 (12)





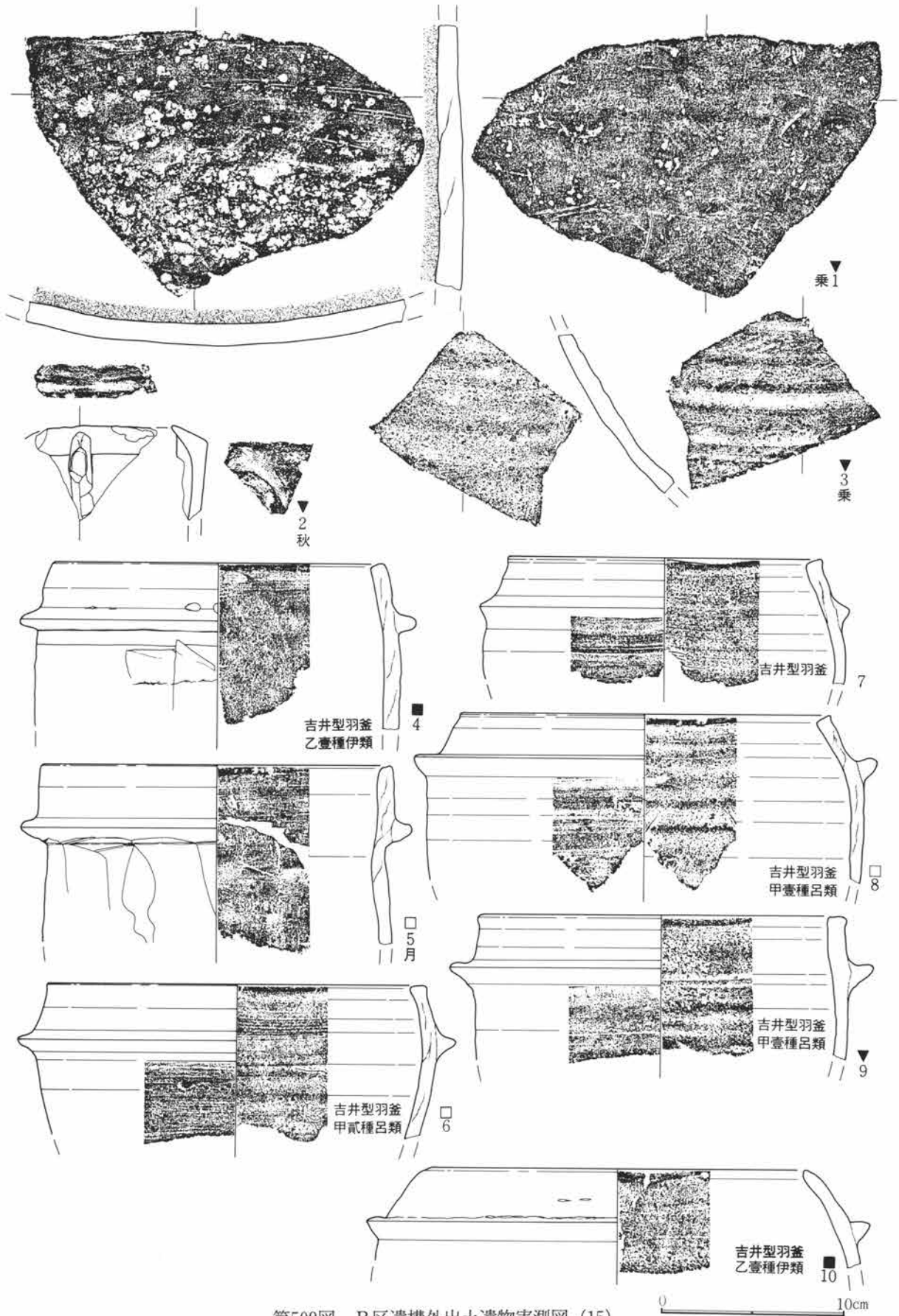
第507図 B区遺構外出土遺物実測図 (13)

0 10cm

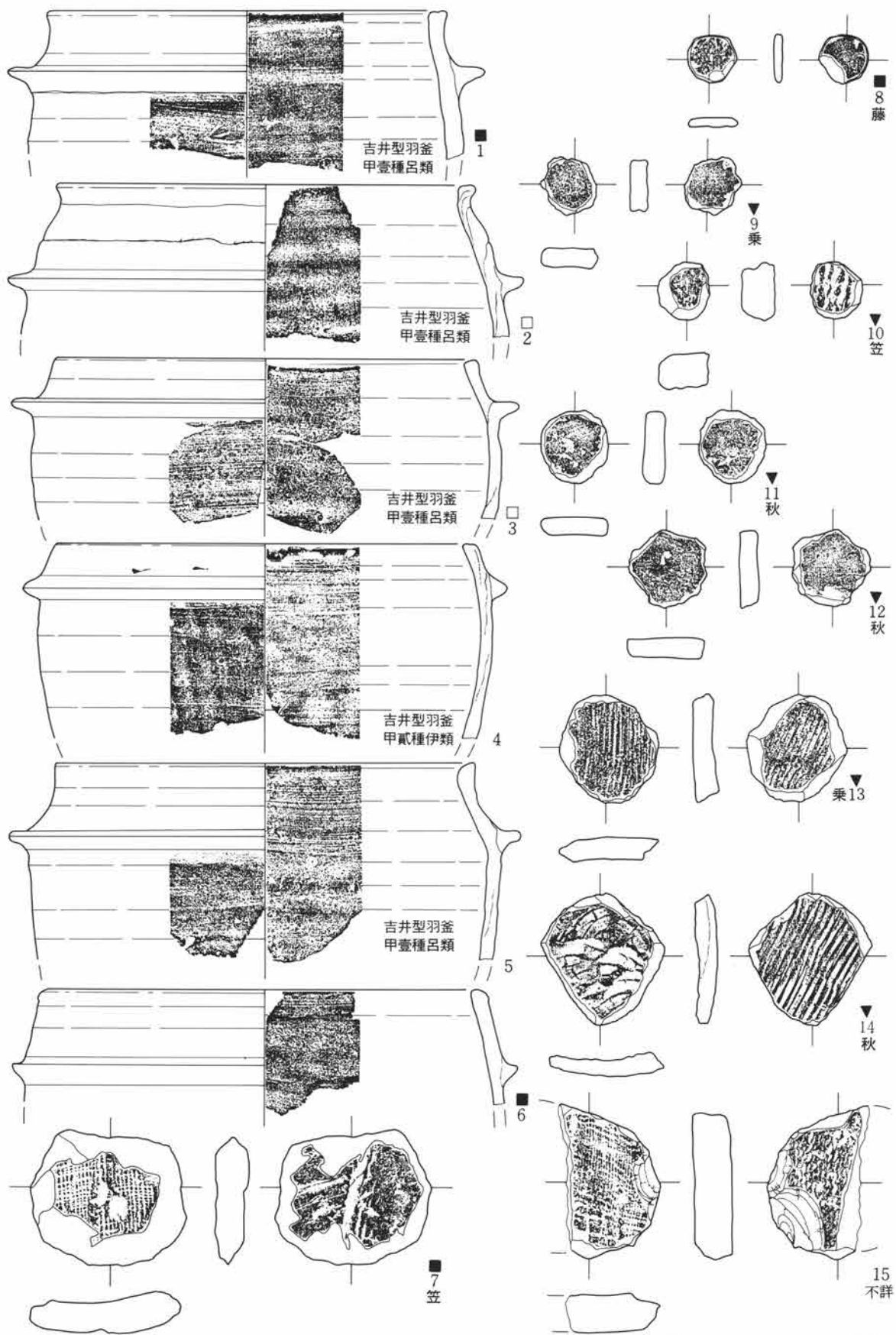


第508図 B区遺構外出土遺物実測図 (14)

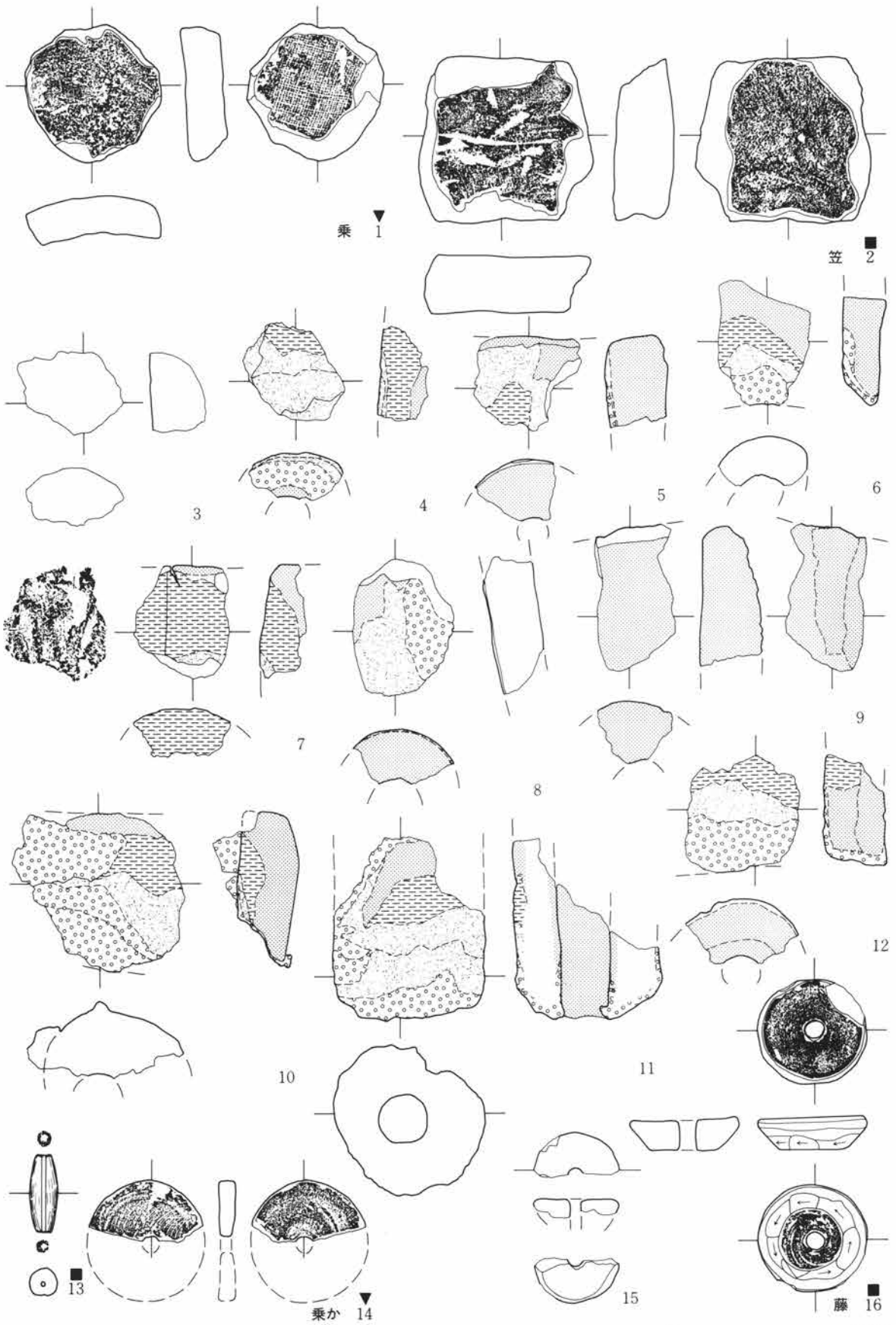
0 10cm



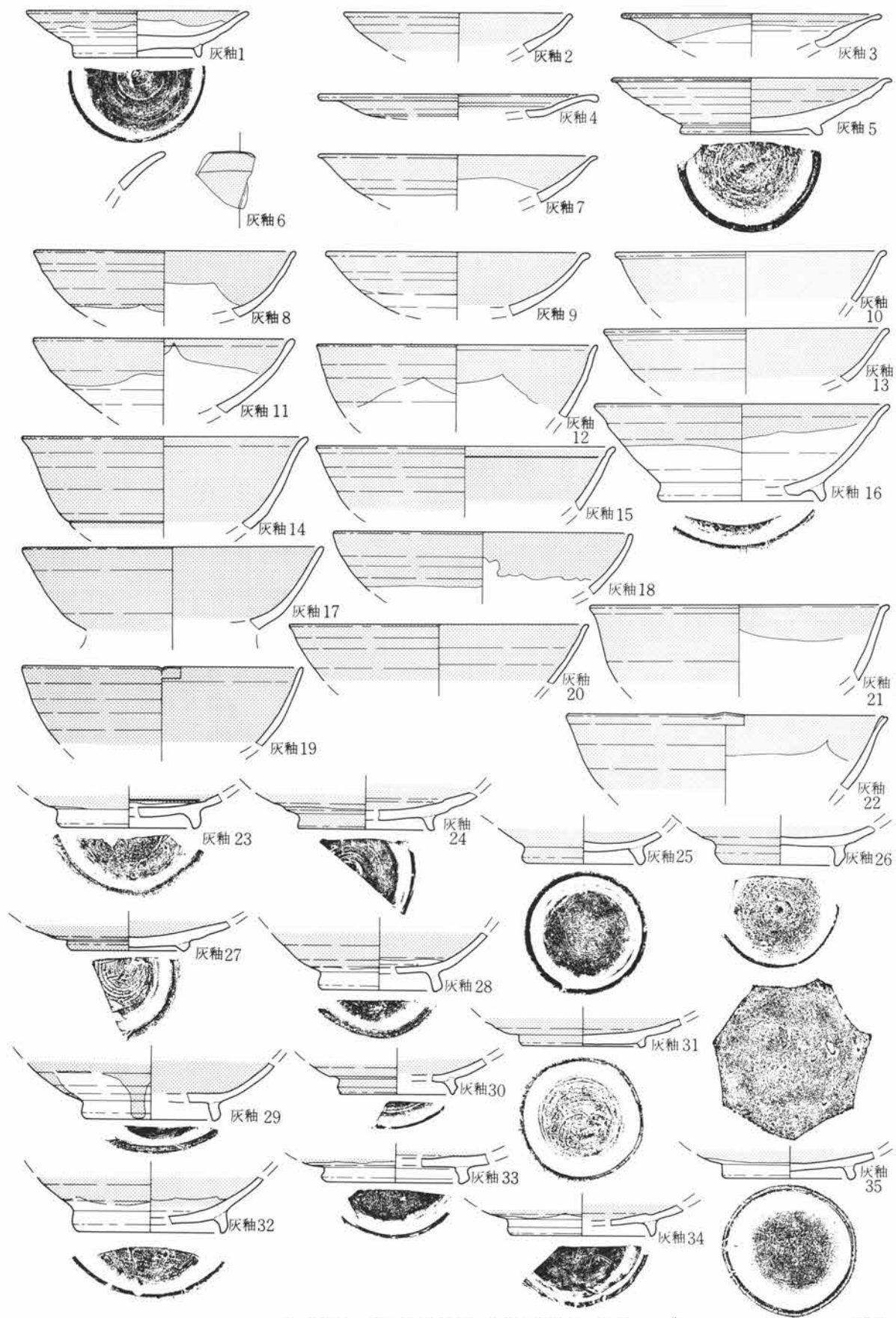
第509図 B区遺構外出土遺物実測図 (15)



第510図 B区遺構外出土遺物実測図(16)



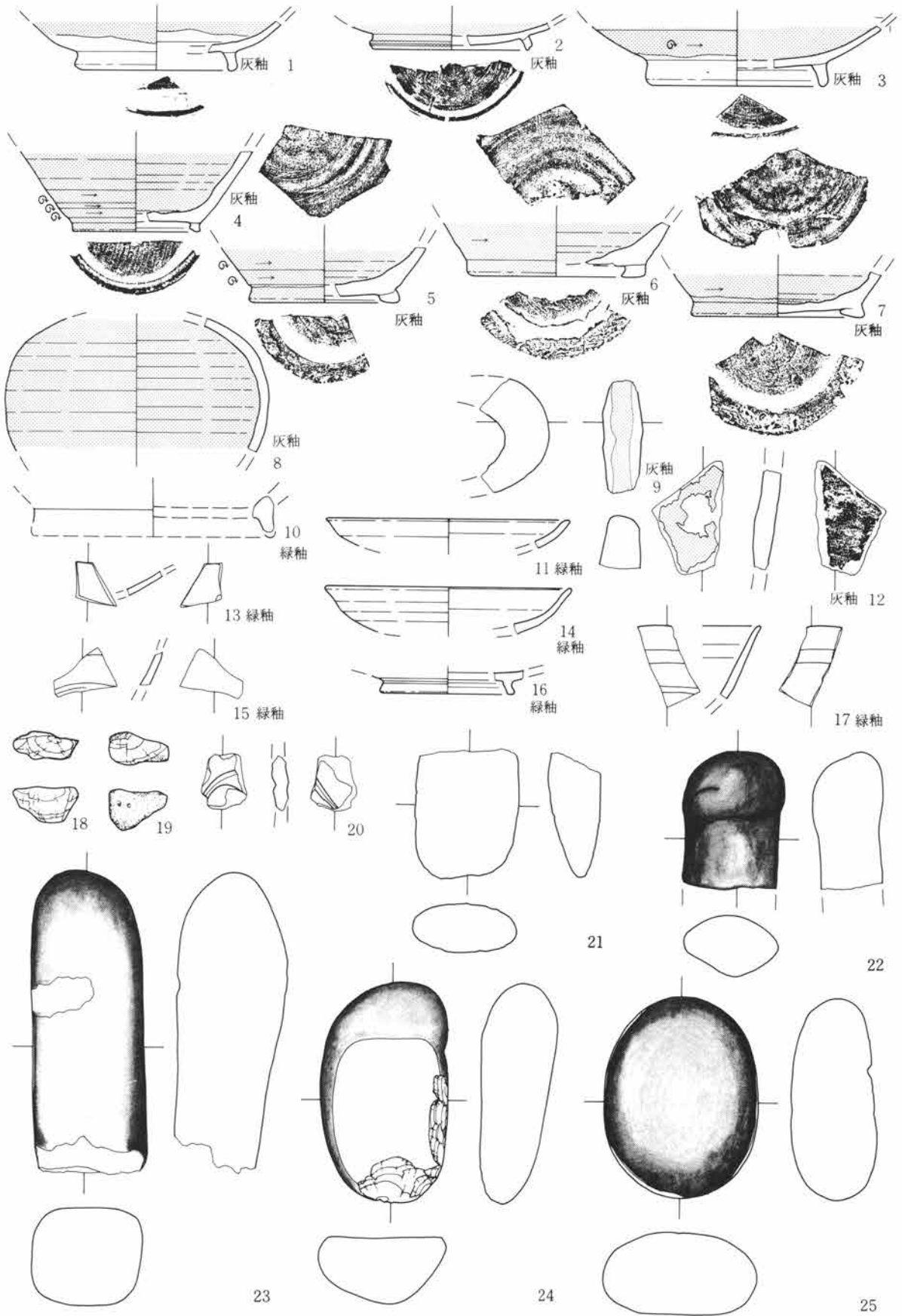
第511図 B区遺構外出土遺物実測図 (17)



第512図 B区遺構外出土遺物実測図 (18)

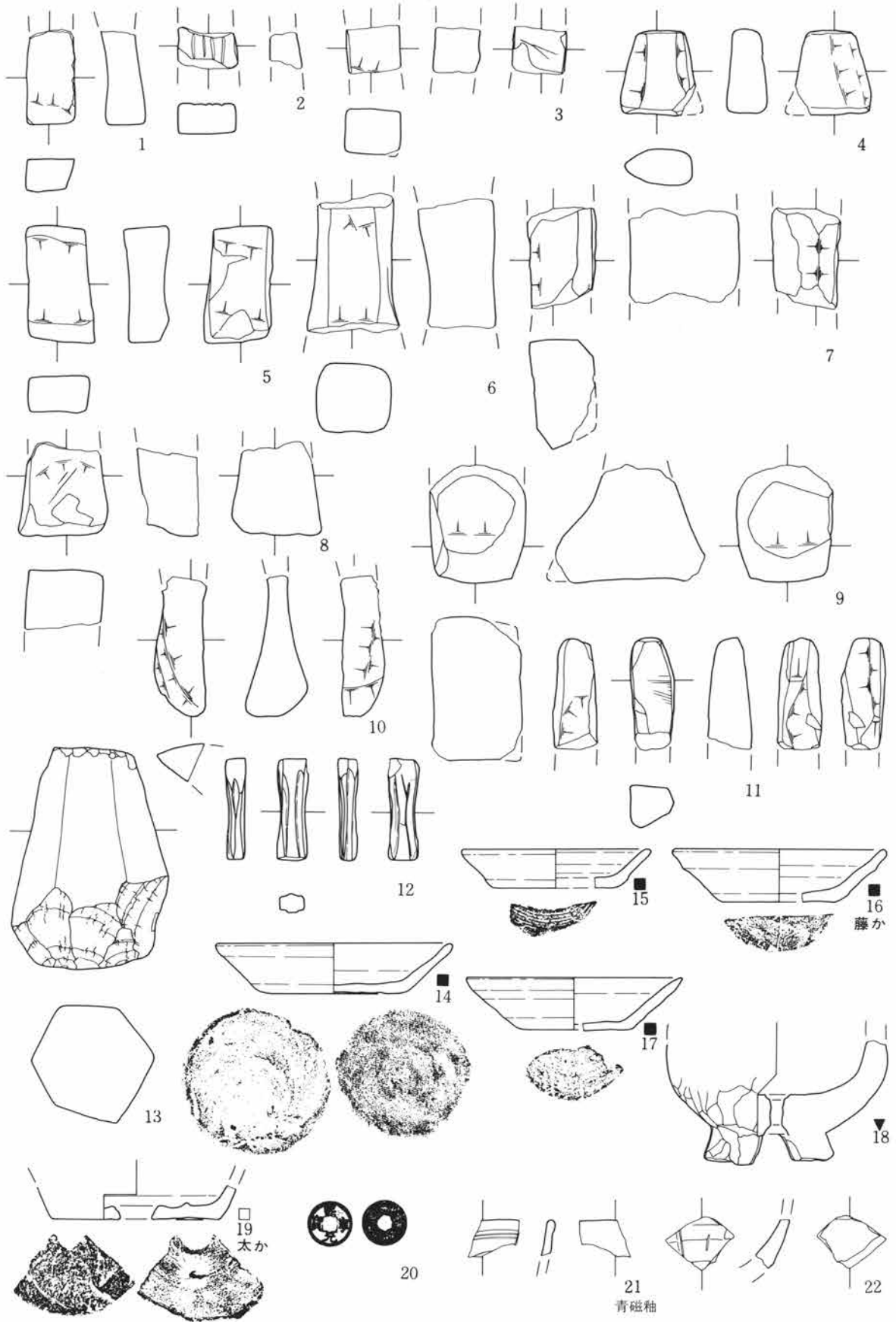
0 10cm

第3節 検出された住居跡について



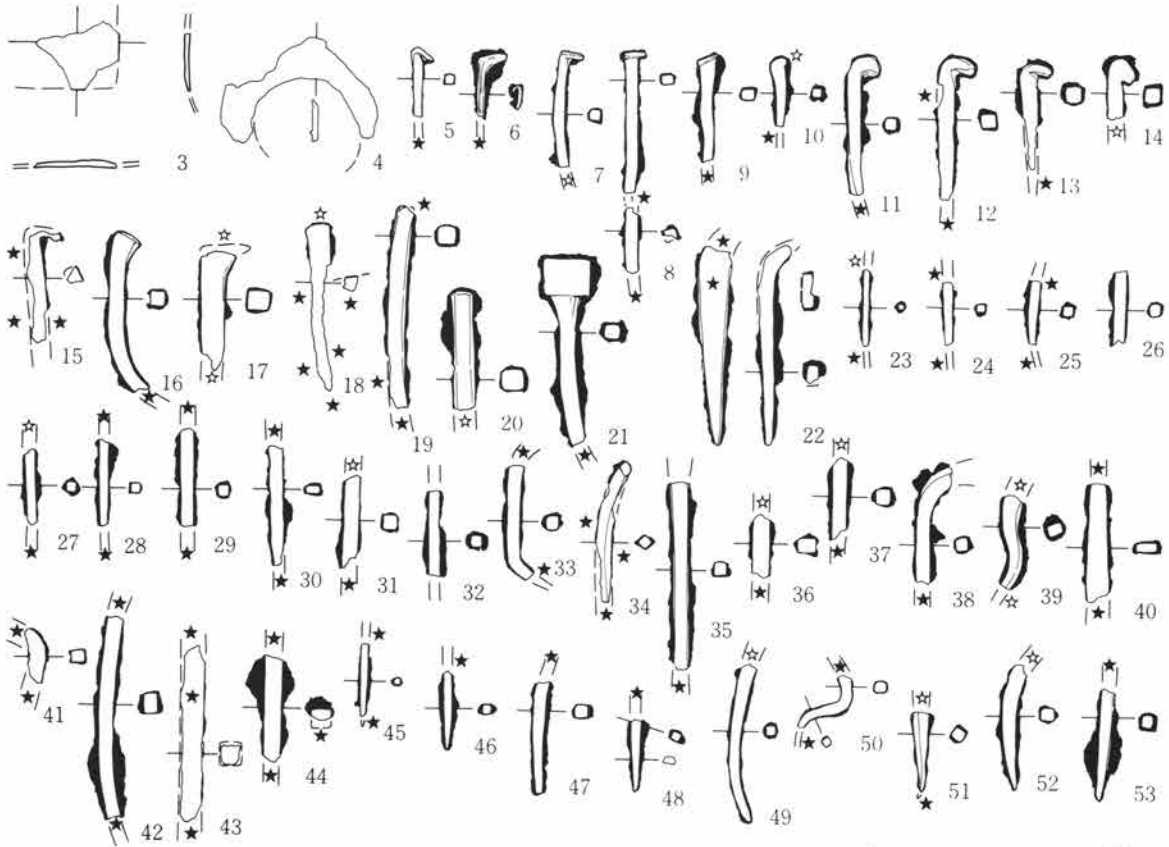
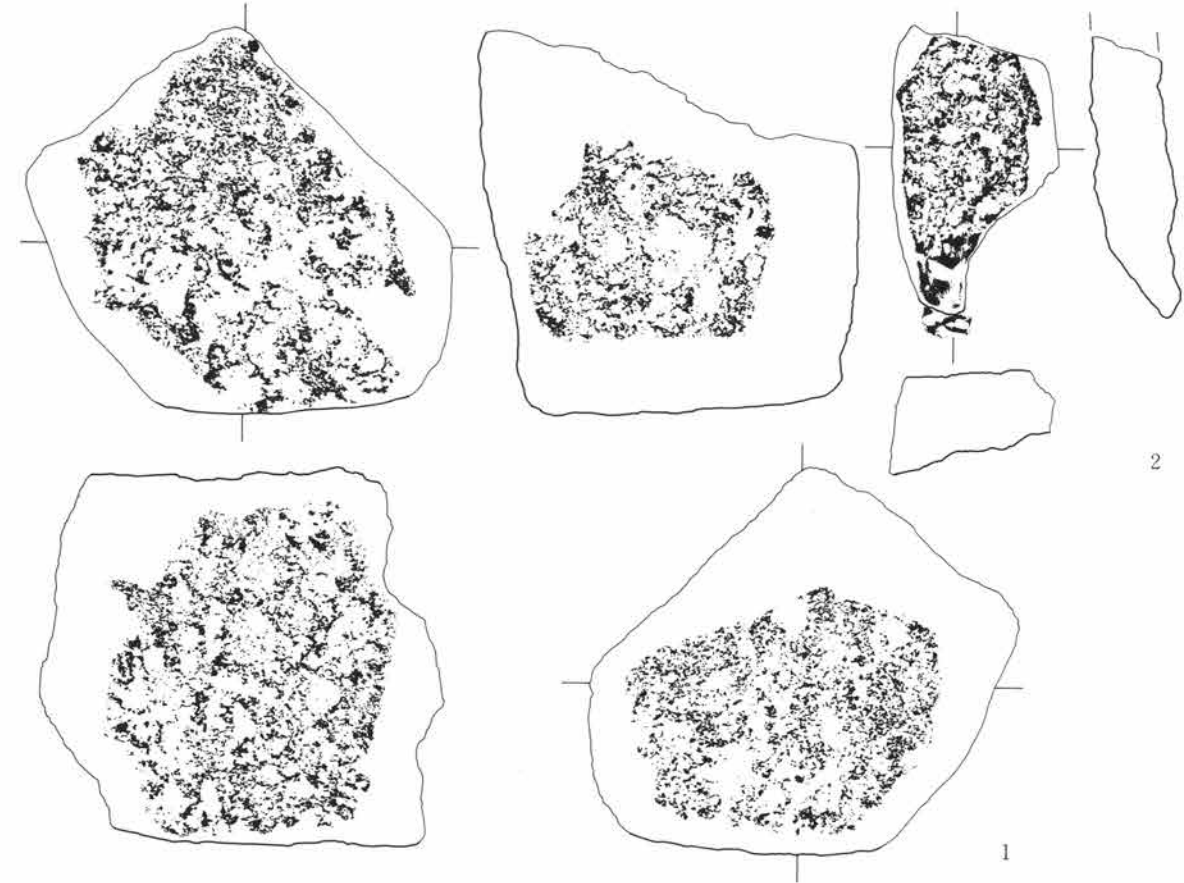
第513図 B区遺構外出土遺物実測図 (19)

第4章 検出された遺構・遺物

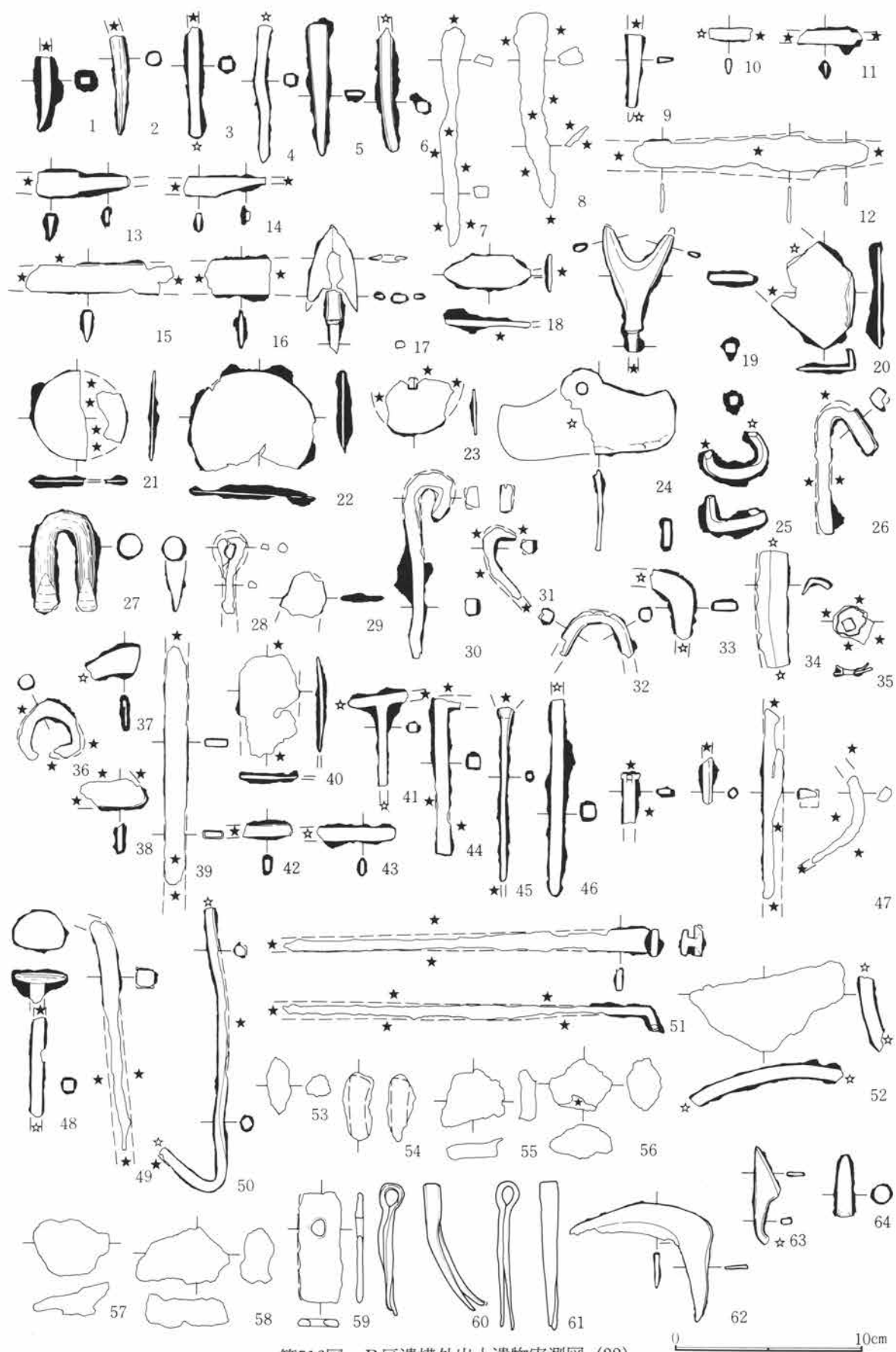


第514図 B区遺構外出土遺物実測図(20)



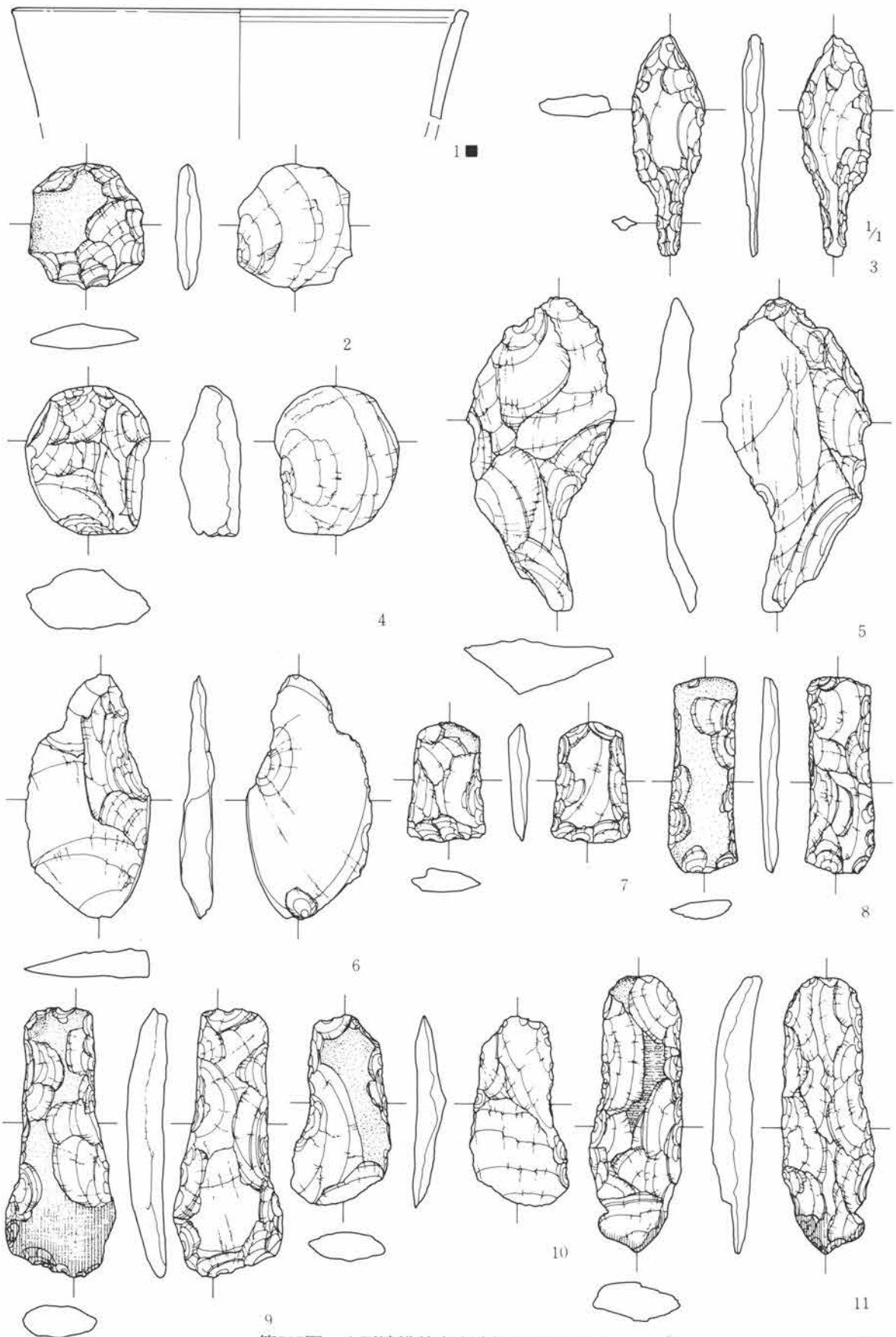


第515図 B区遺構外出土遺物実測図 (21)



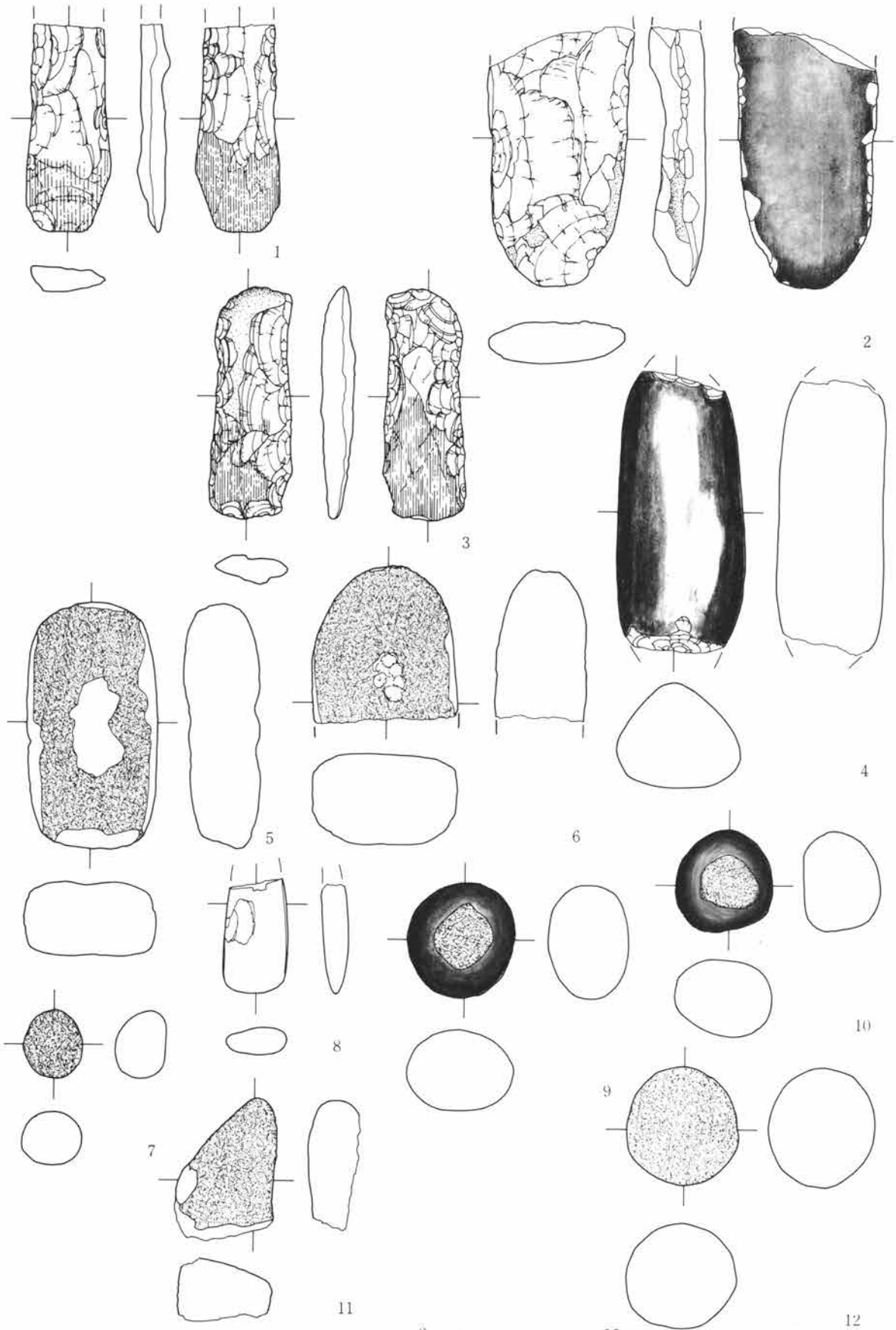
第516図 B区遺構外出土遺物実測図 (22)

第3節 検出された住居跡について



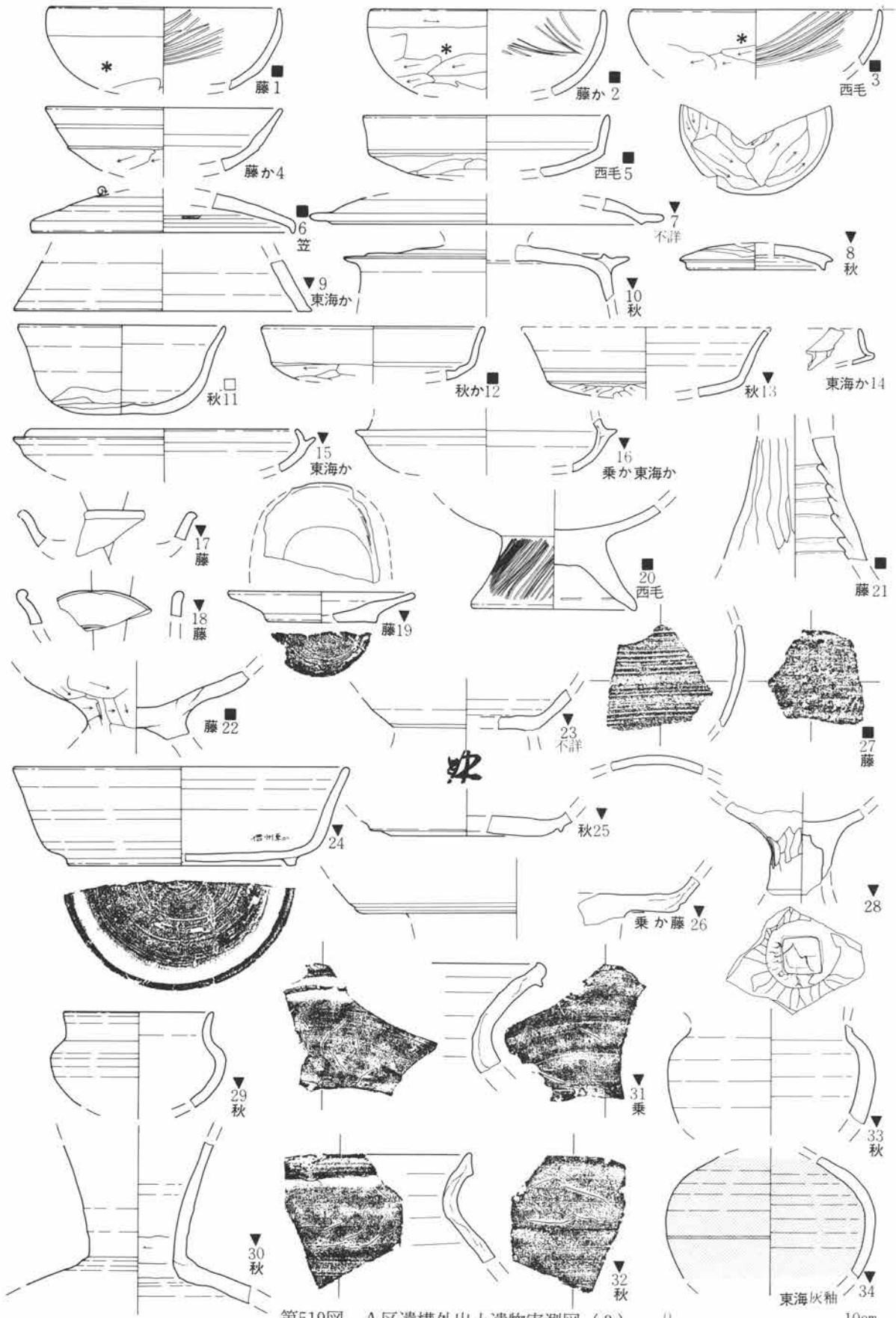
第517図 A区遺構外出土遺物実測図(1)

0 10cm

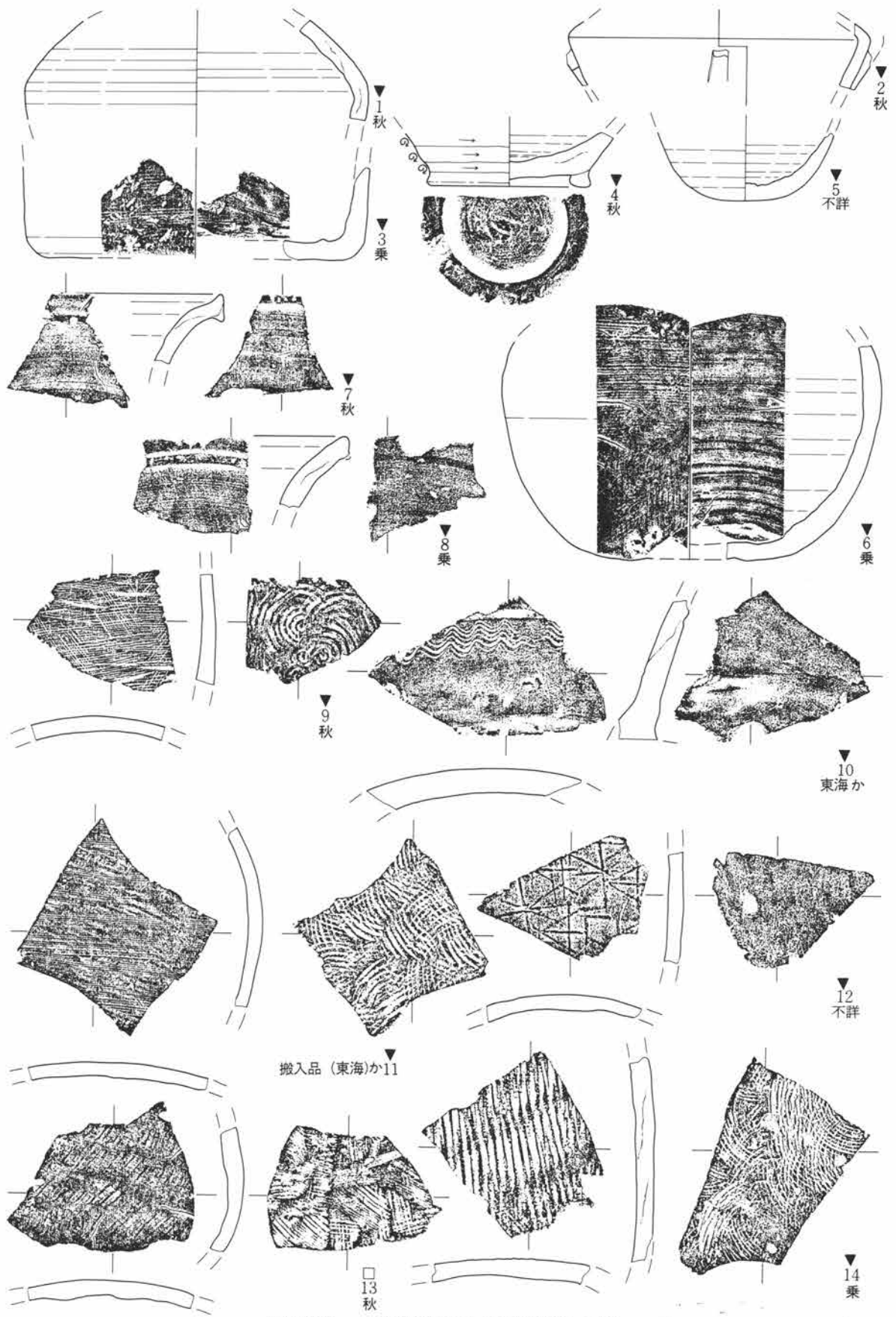


第518図 A区遺構外出土遺物実測図(2)

第3節 検出された住居跡について

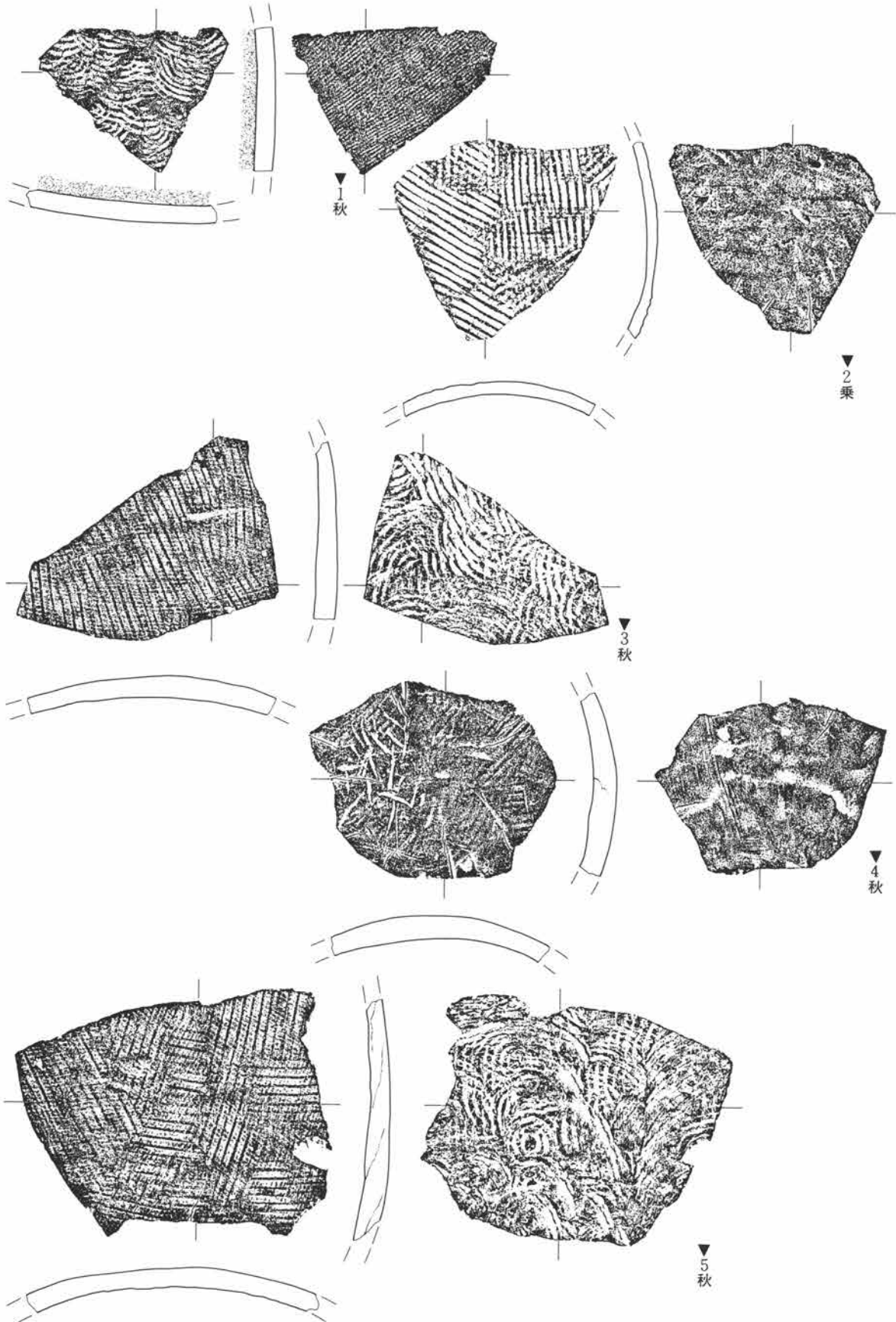


第519図 A区遺構外出土遺物実測図(3)



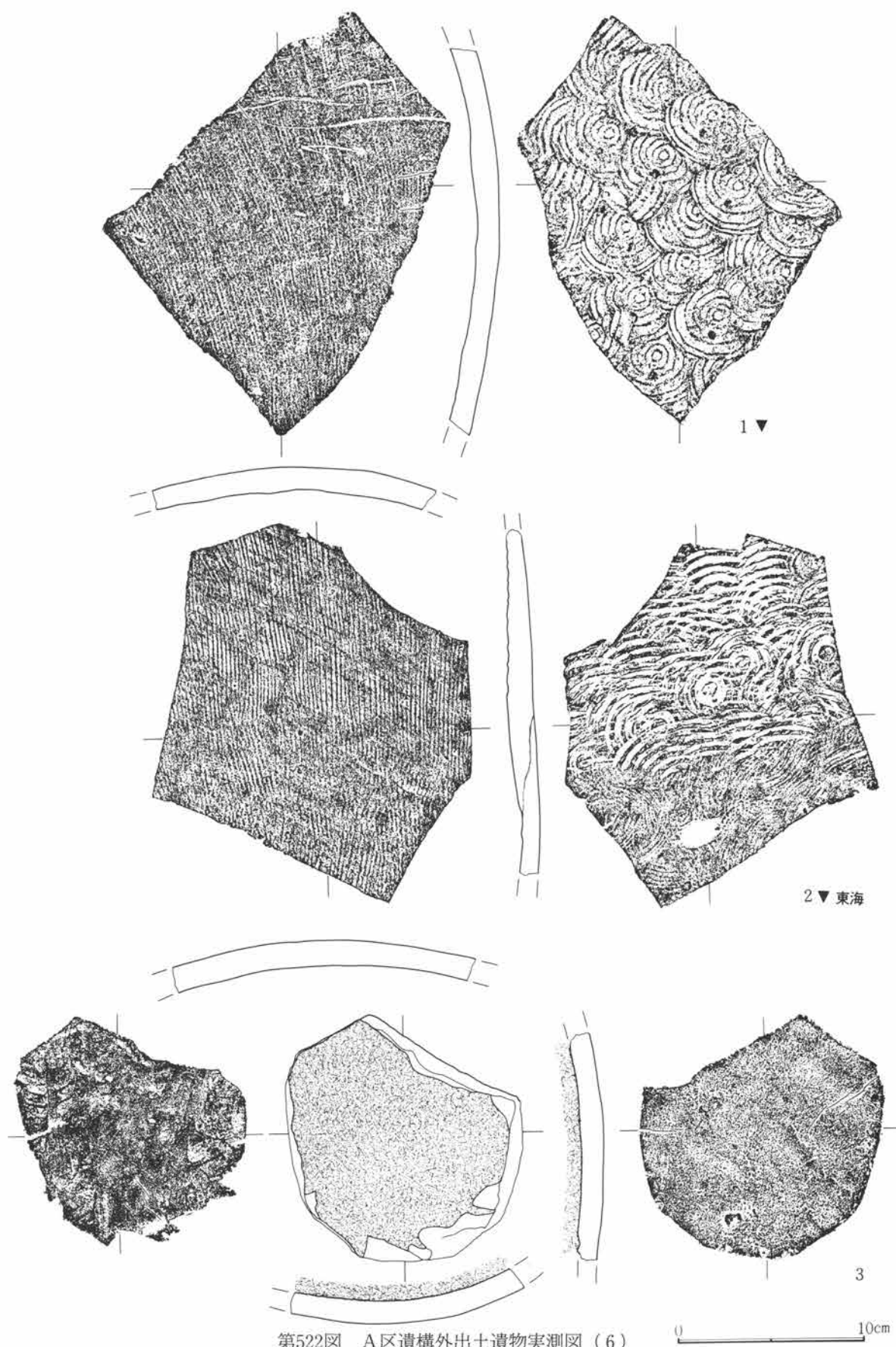
第520図 A区遺構外出土遺物実測図(4)

0 10cm



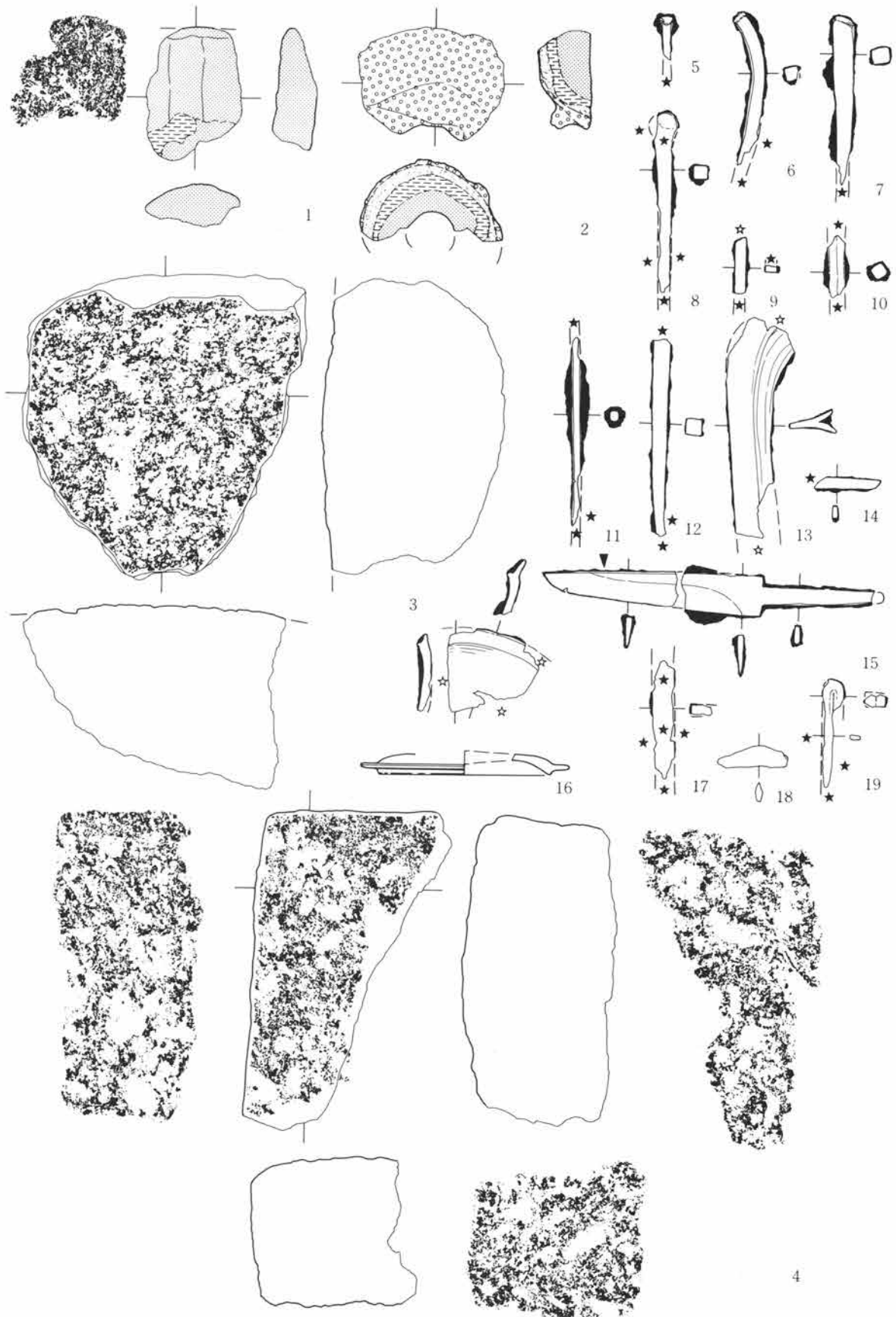
第521図 A区遺構外出土遺物実測図(5)

0 10cm



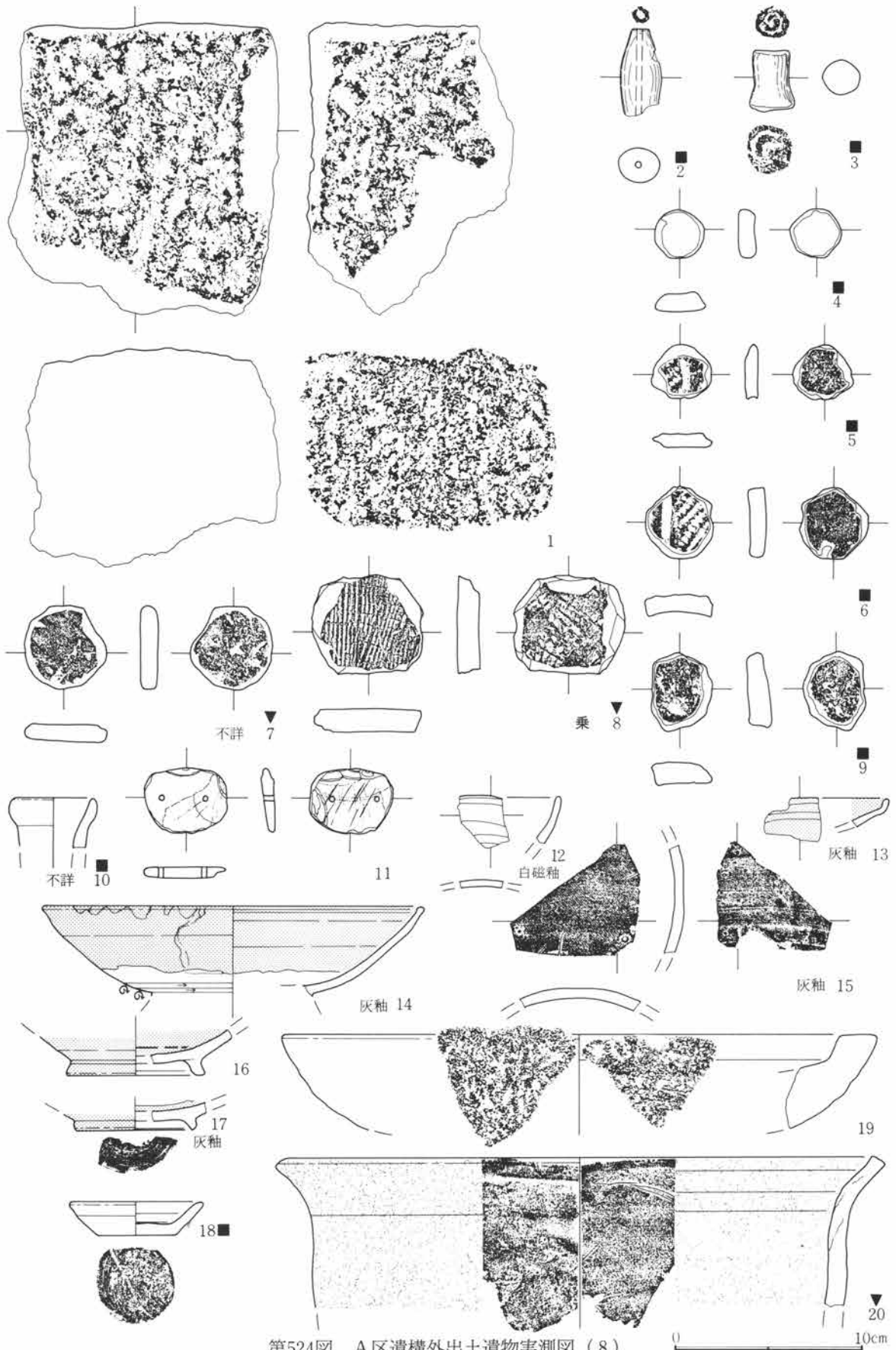
第522図 A区遺構外出土遺物実測図(6)





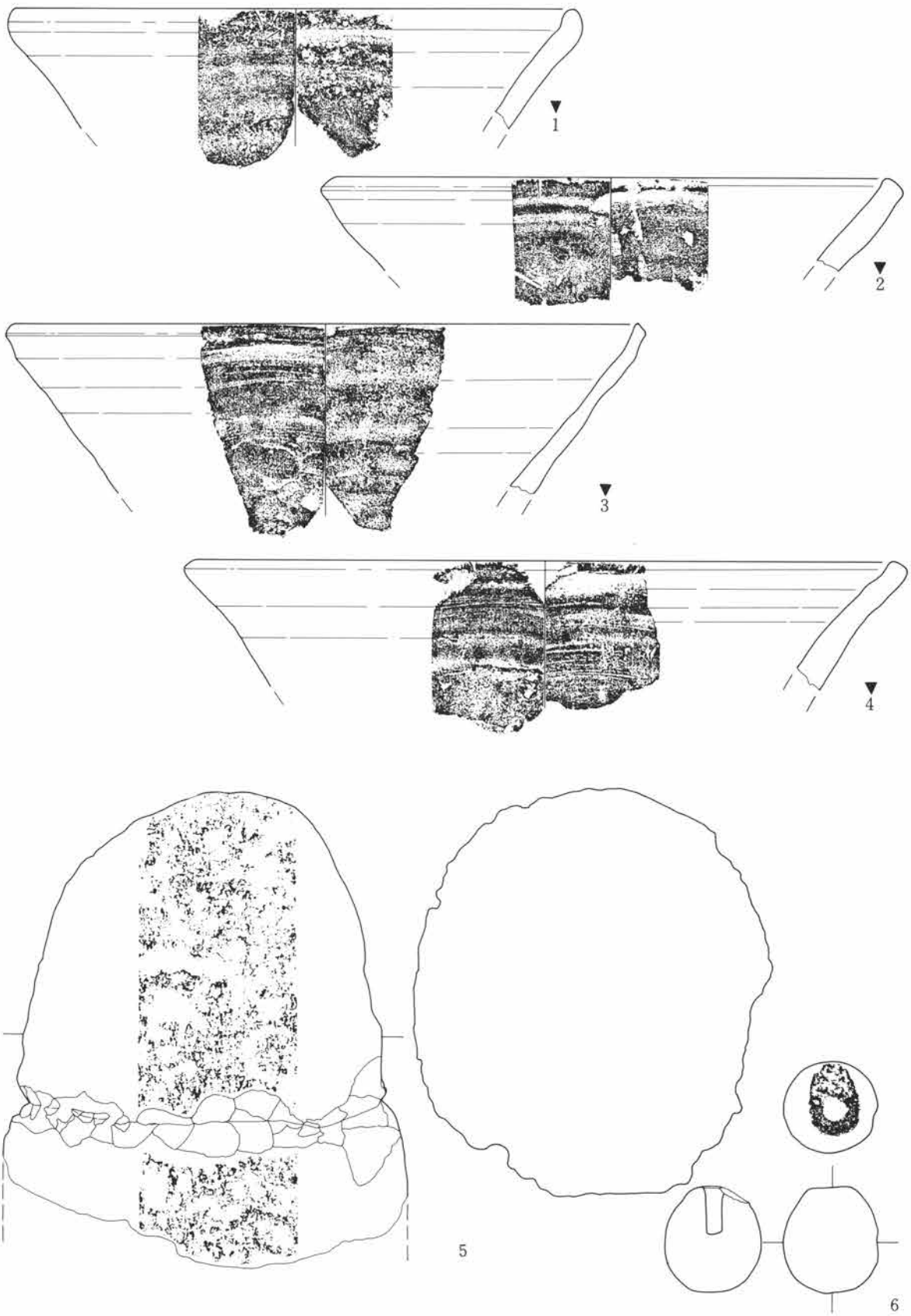
第523図 A区遺構外出土遺物実測図(7)

0 10cm



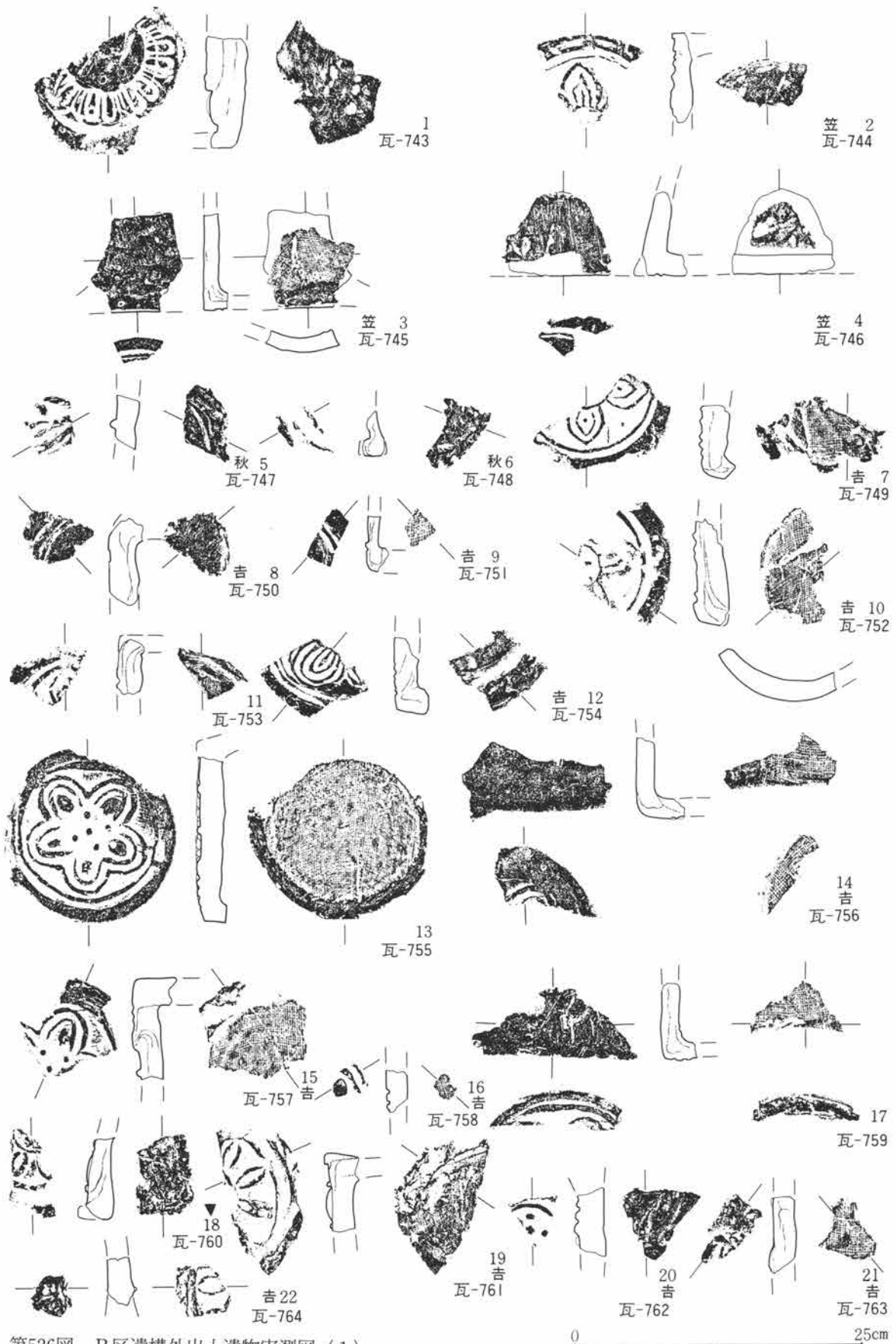
第524図 A区遺構外出土遺物実測図(8)

第3節 検出された住居跡について



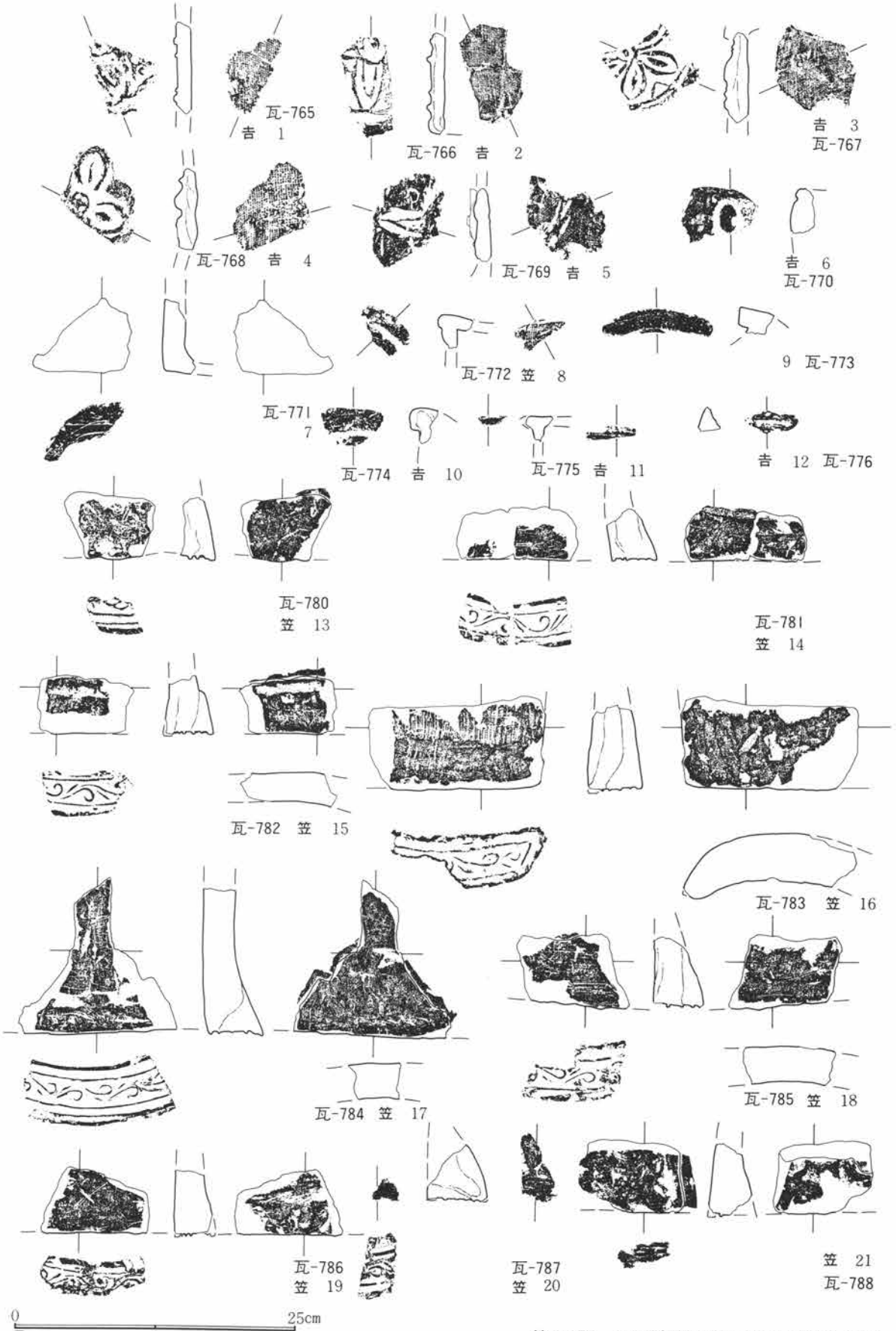
第525図 A区遺構外出土遺物実測図(9)

0 10cm



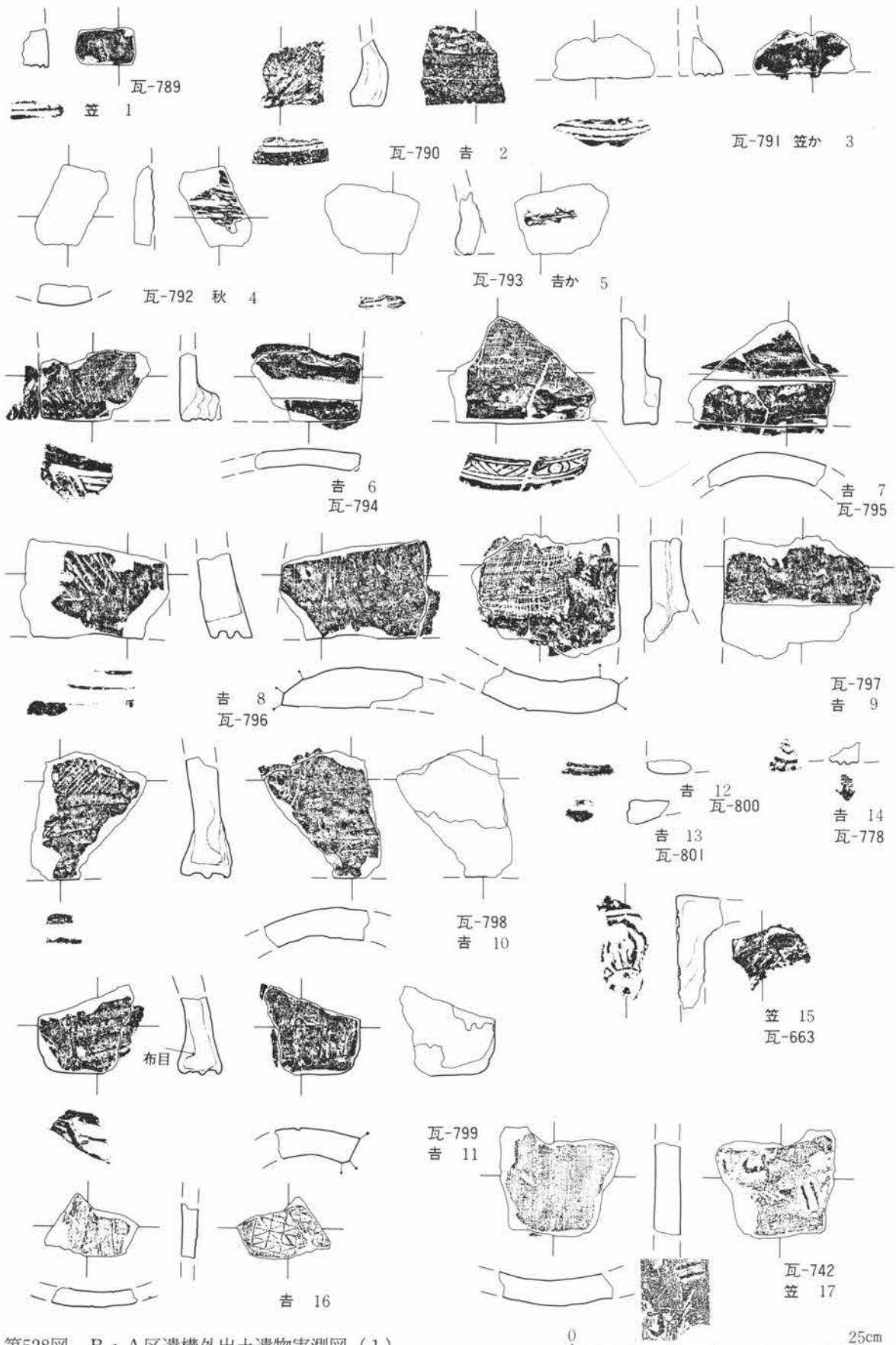
第526図 B区遺構外出土遺物実測図(1)

第3節 検出された住居跡について

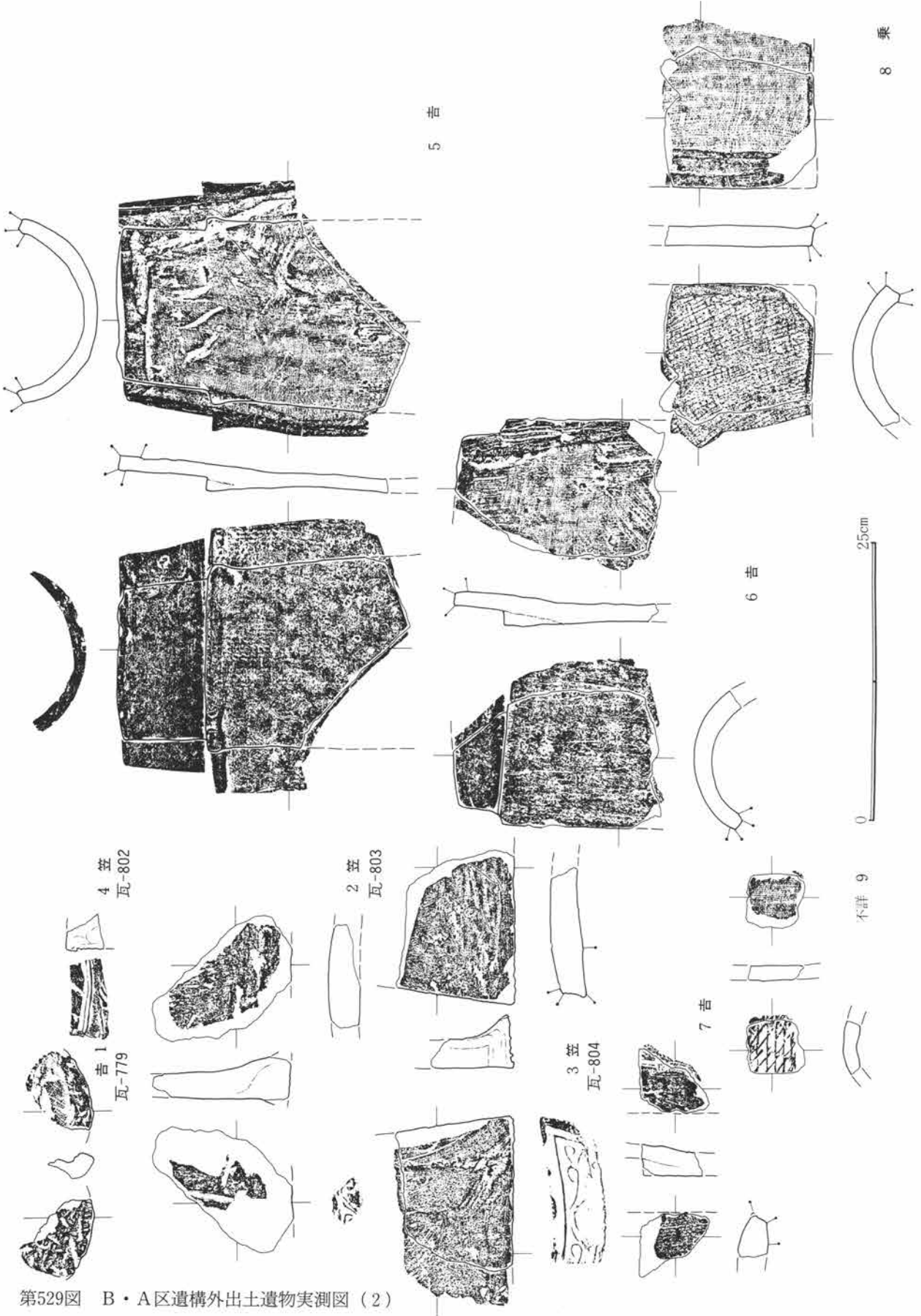


第527図 B区遺構外出土遺物実測図(2)

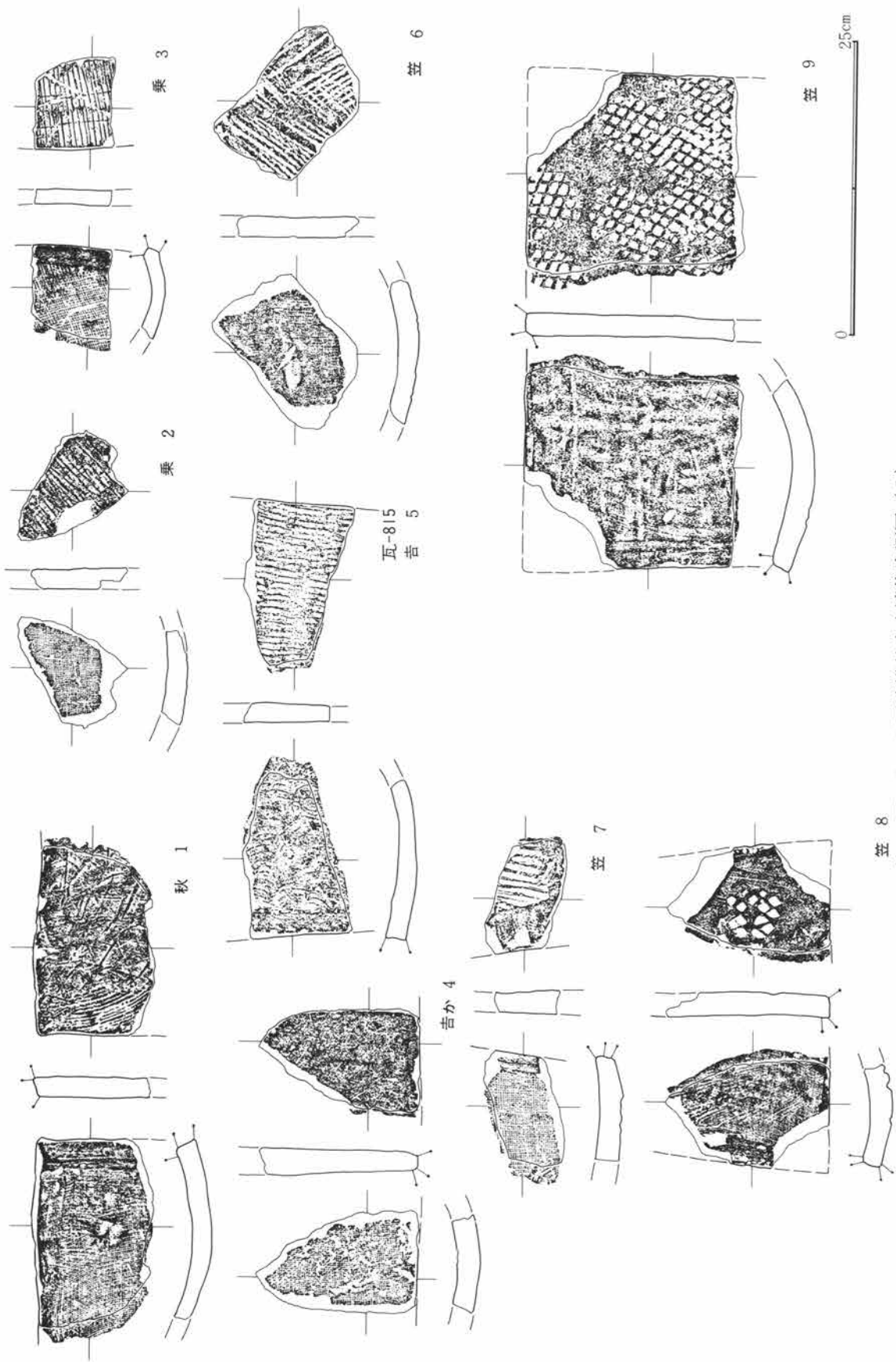
第4章 検出された遺構・遺物



第528図 B・A区遺構外出土遺物実測図(1)

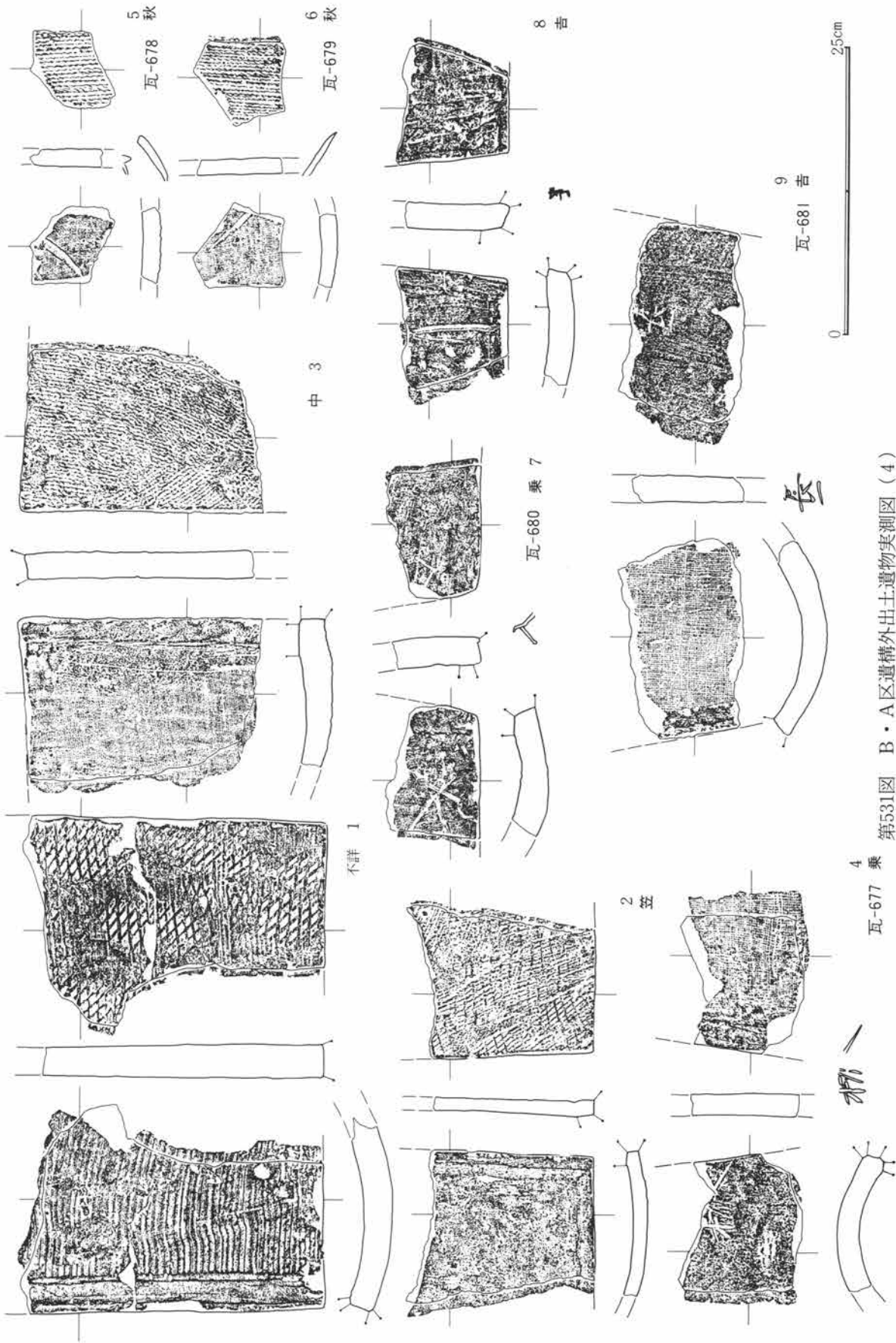


第529図 B・A区遺構外出土遺物実測図(2)

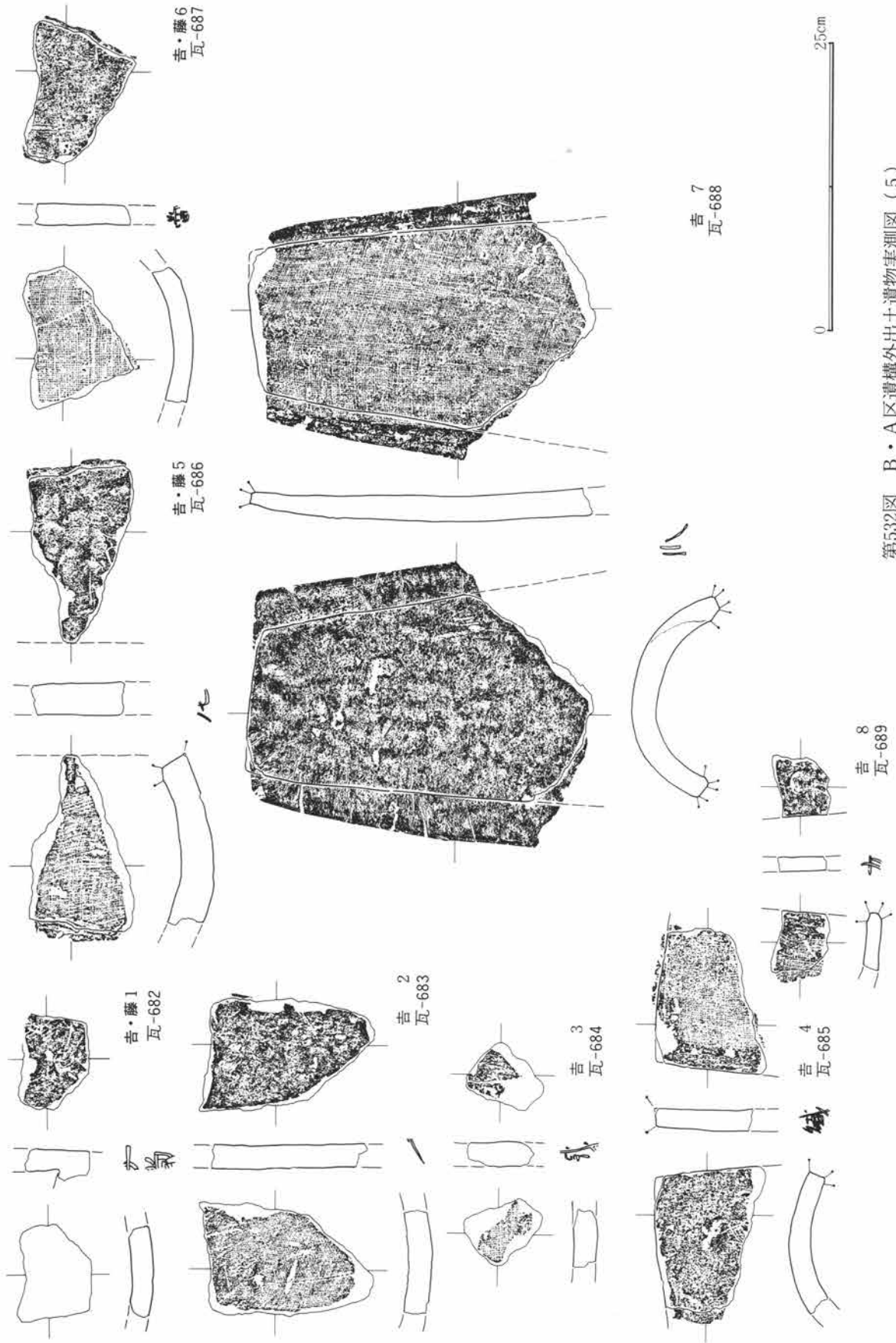


笠 8  
第530図 B・A区遺構外出土遺物実測図(3)

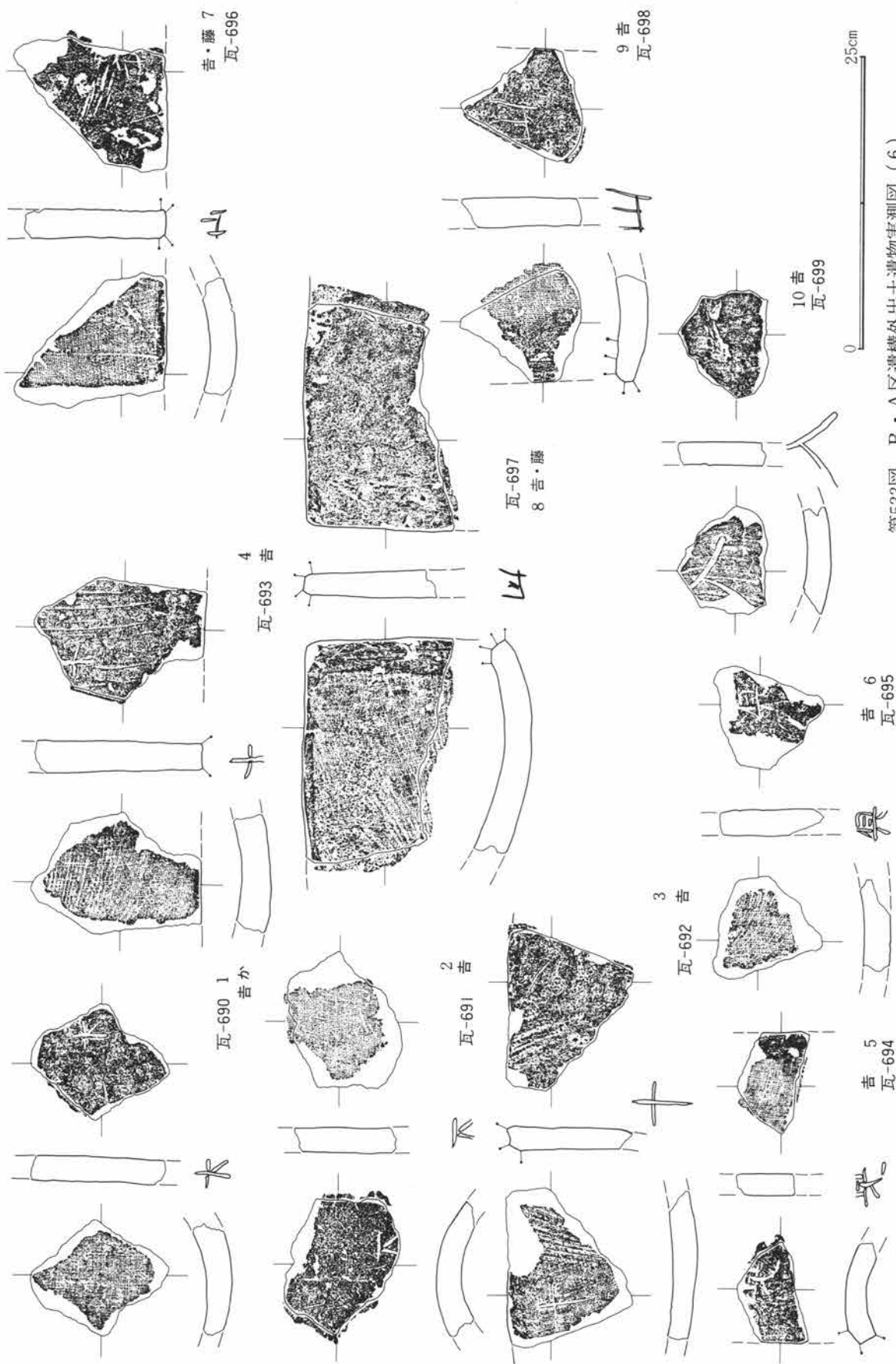




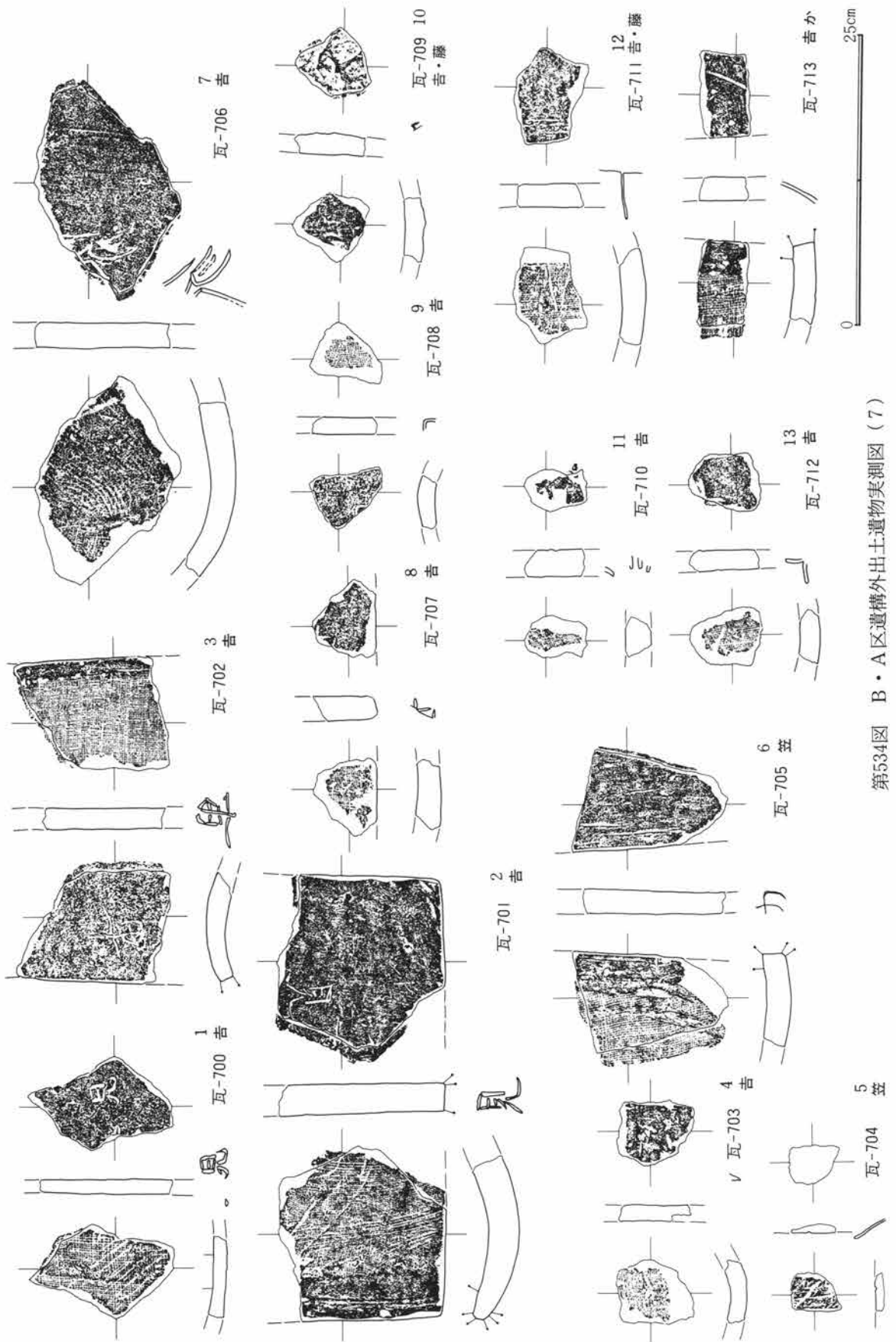
第531図 B・A区遺構外出土遺物実測図(4)



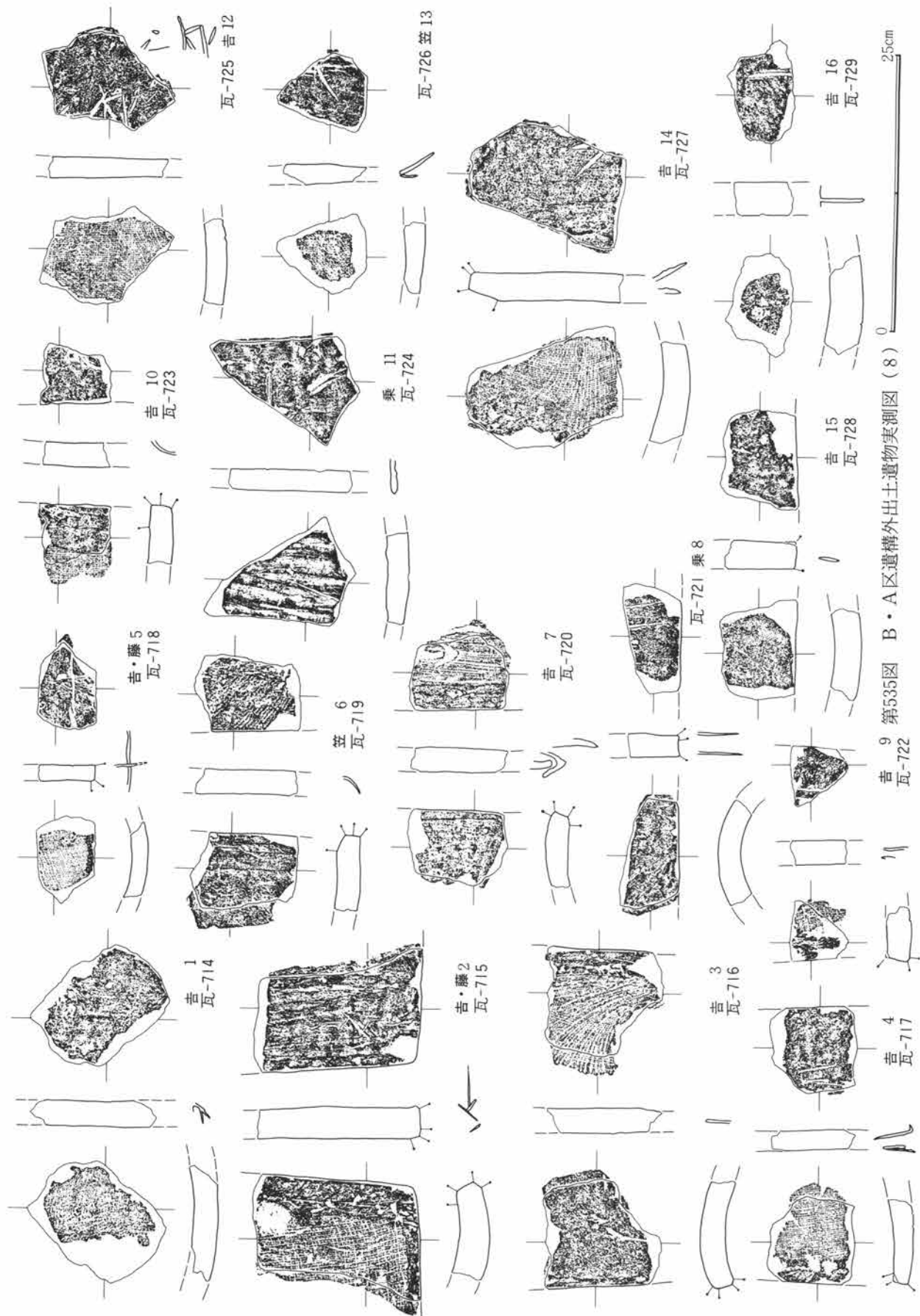
第532図 B・A区遺構外出土遺物実測図(5)



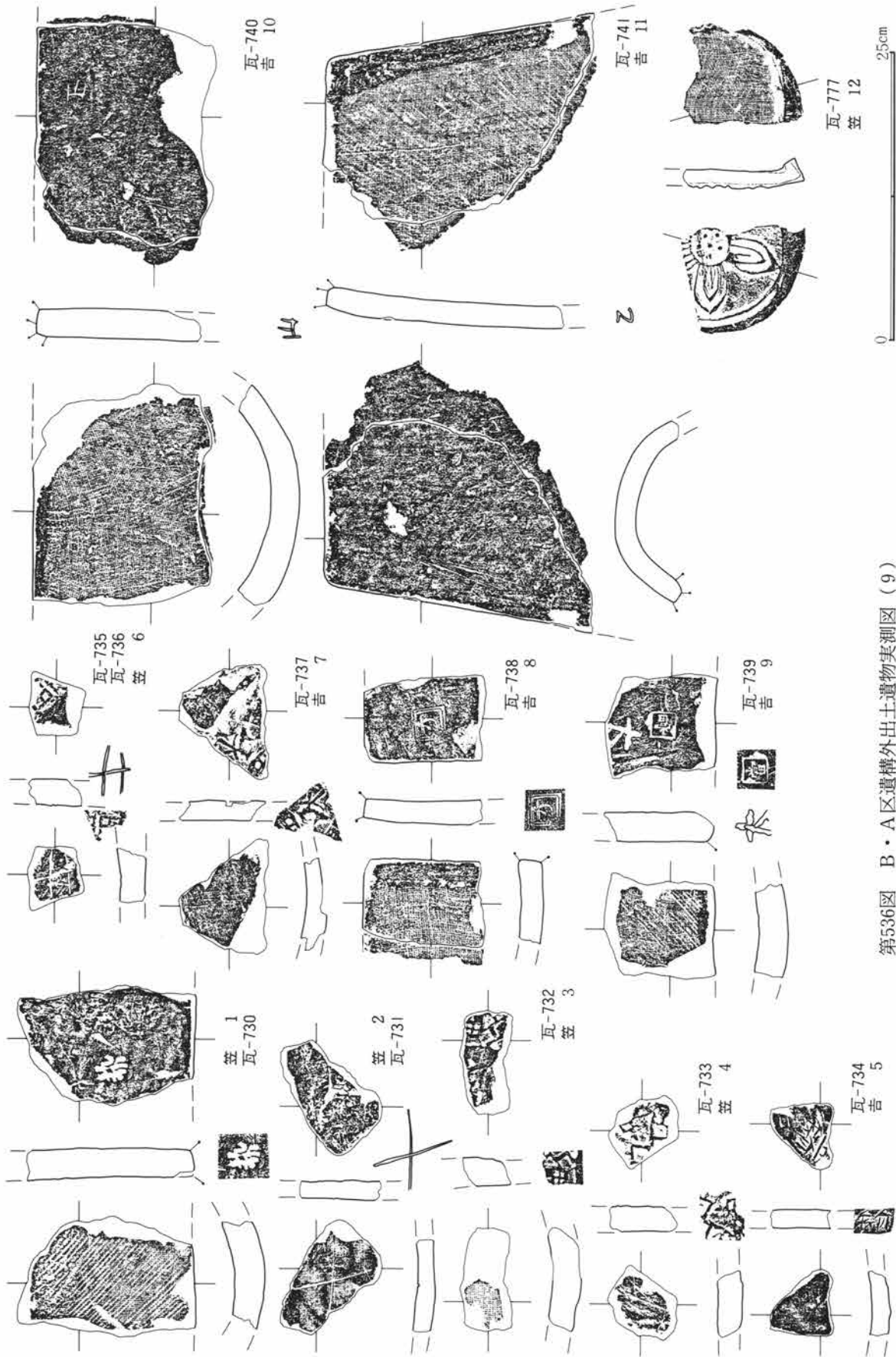
第533図 B・A区遺構外出土遺物実測図(6)



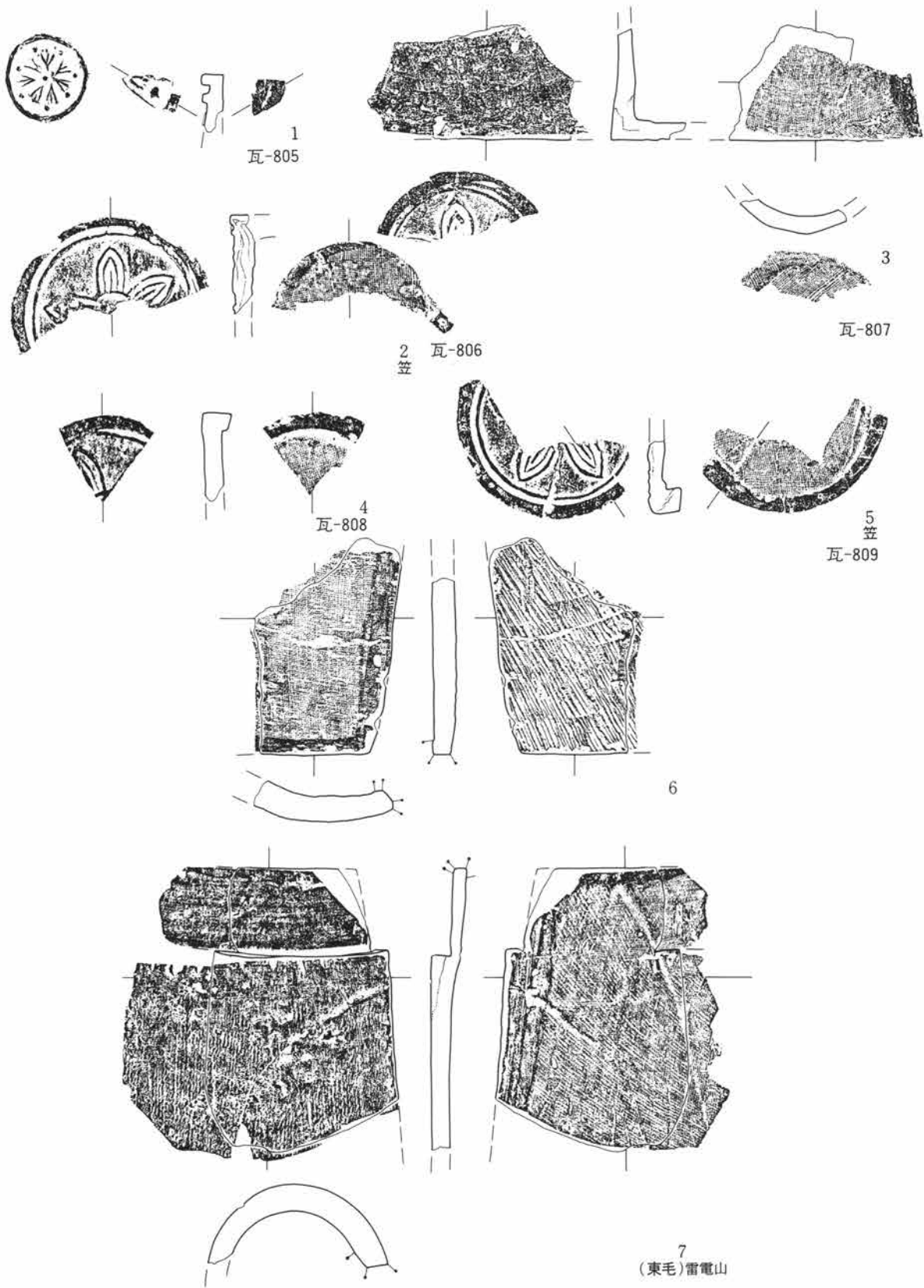
第534図 B・A区遺構外出土遺物実測図(7)



第535図 B・A区遺構外出土遺物実測図(8)

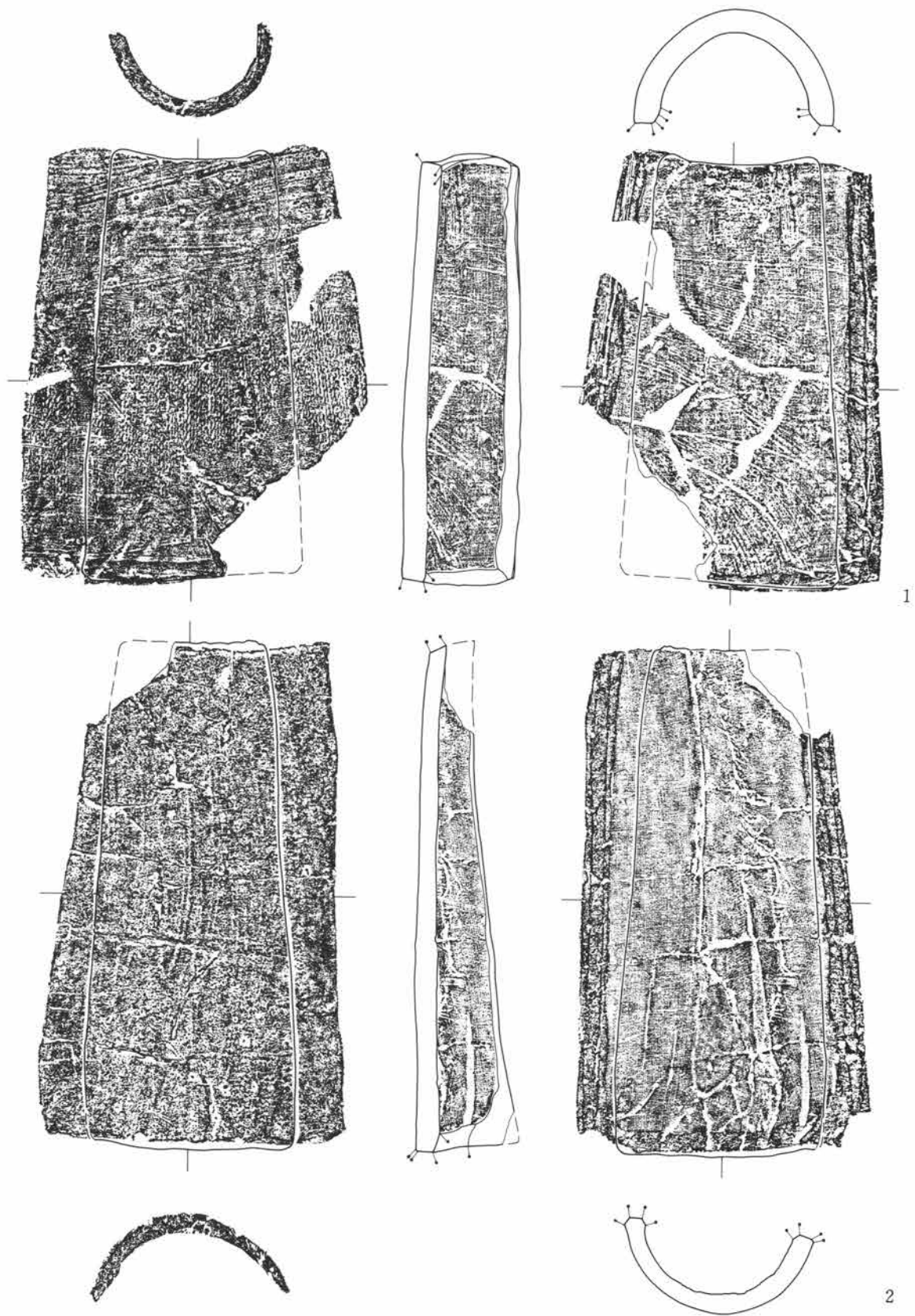


第536図 B・A区遺構外出土遺物実測図(9)



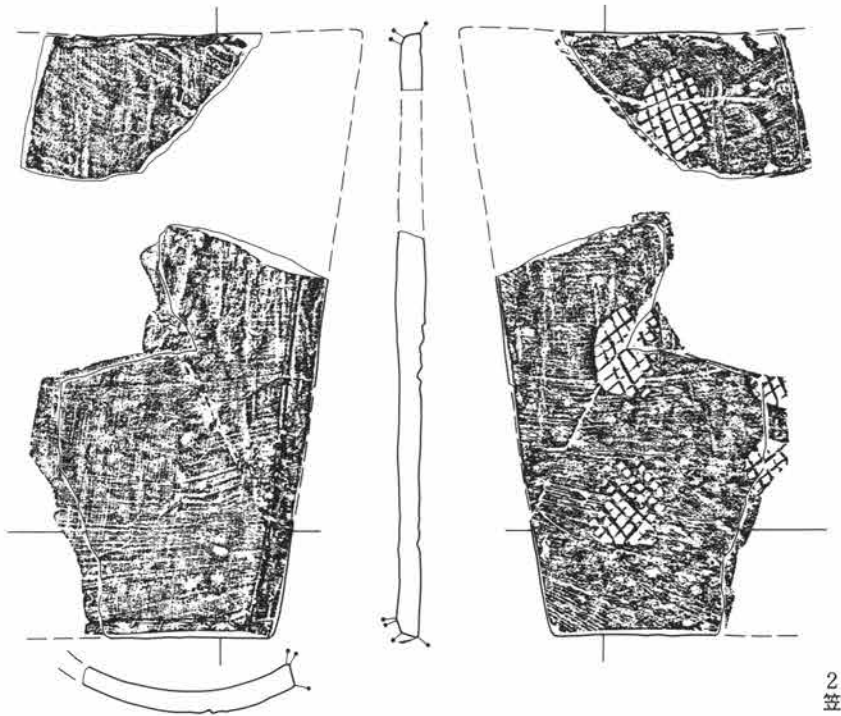
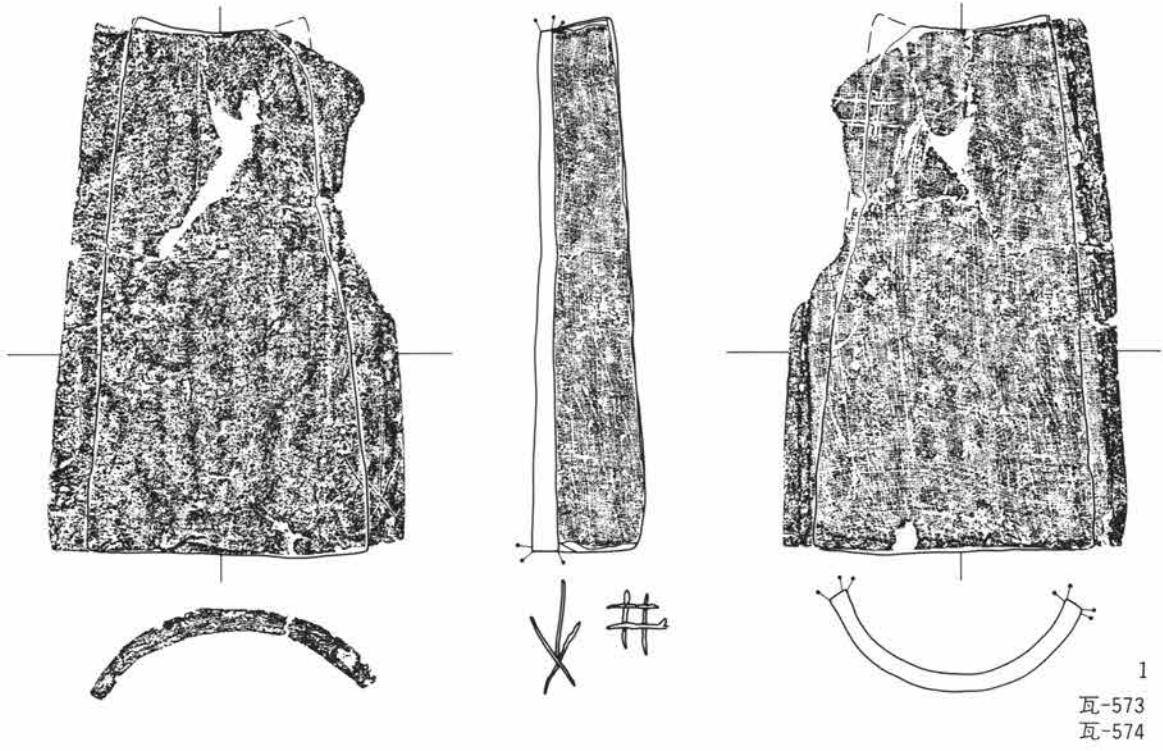
第537図 追補出土遺物実測図(1)

0 25cm



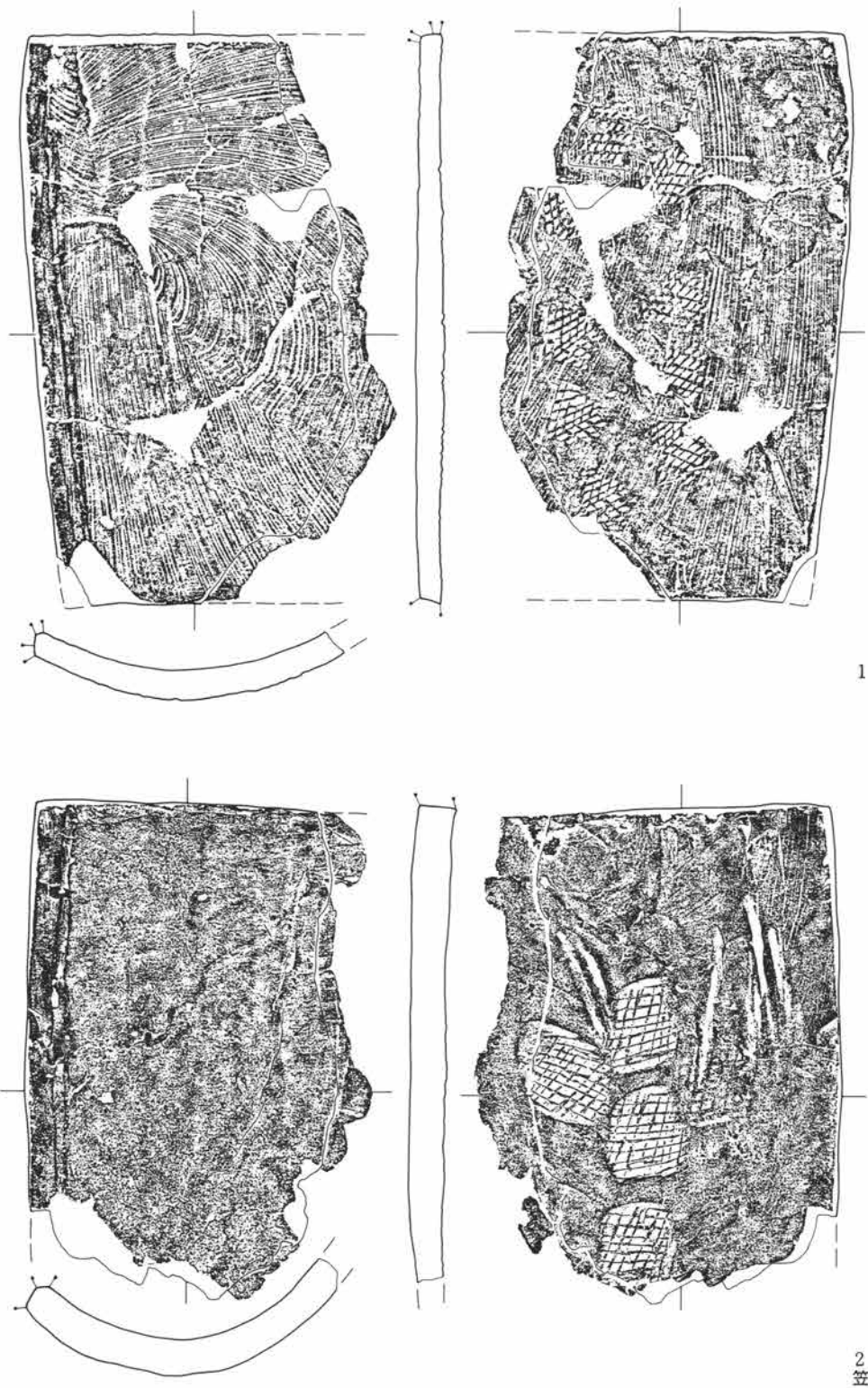
第538図 追補出土遺物実測図(2)



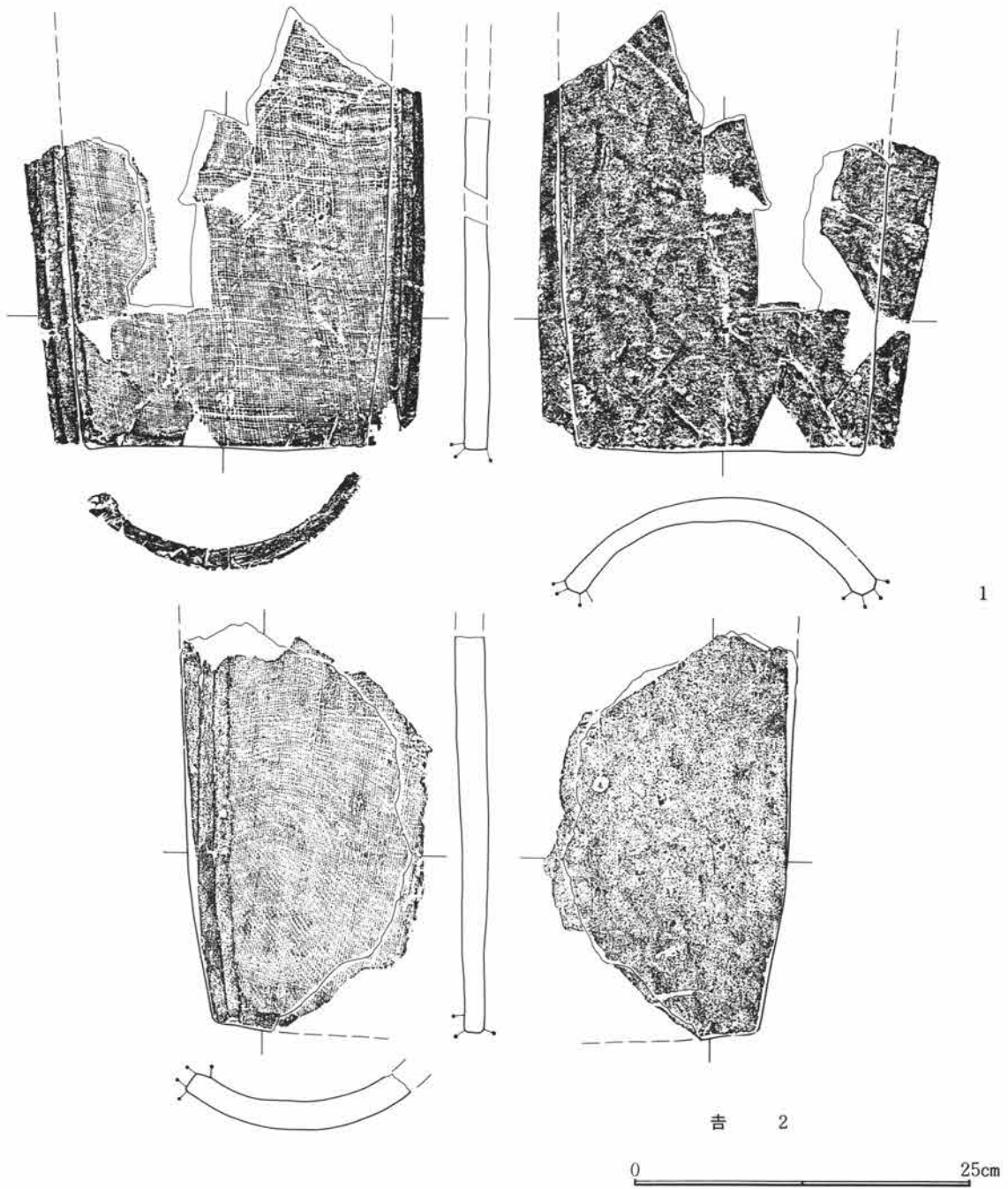


第539図 追補出土遺物実測図(3)

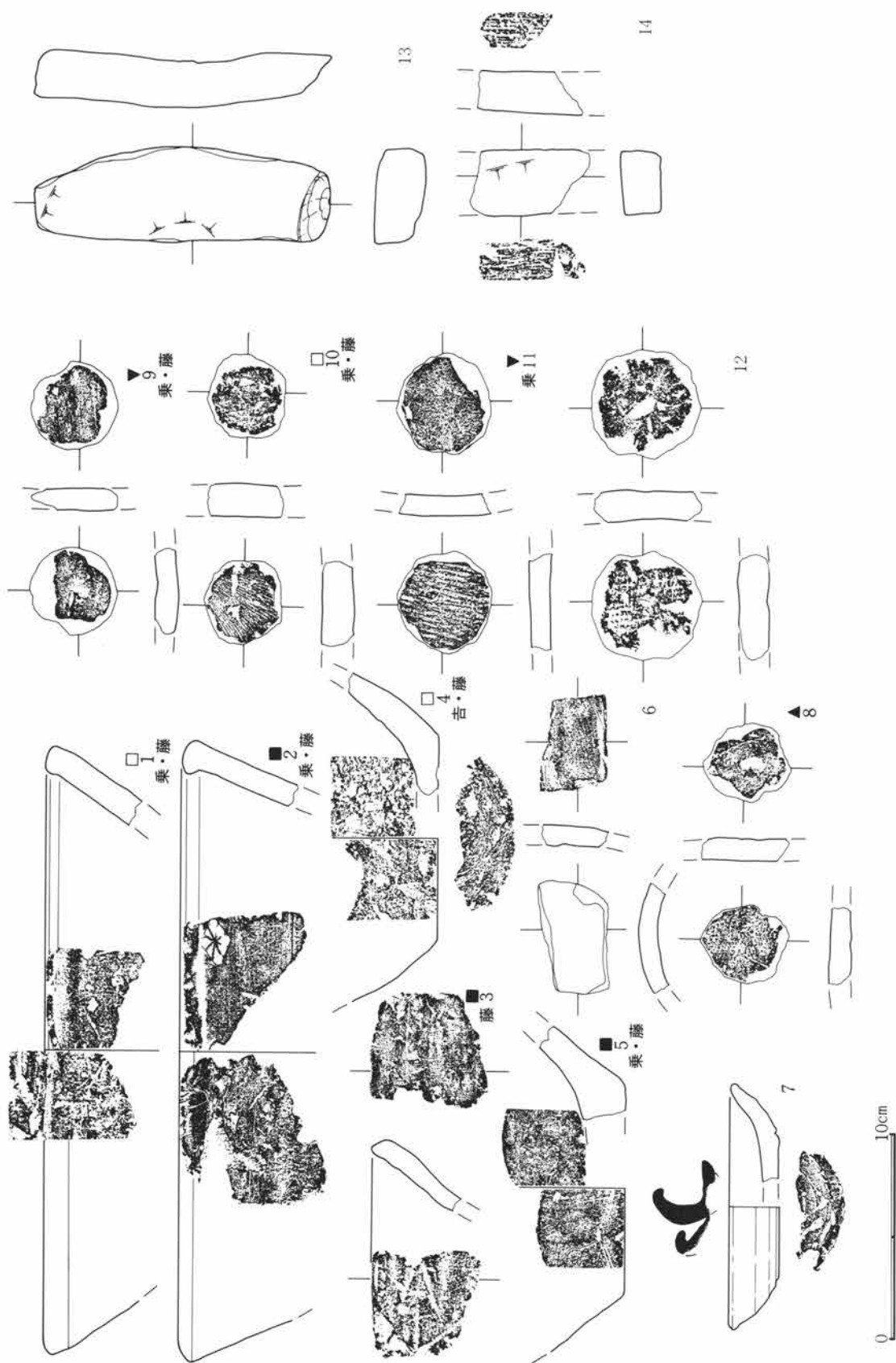
0 25cm



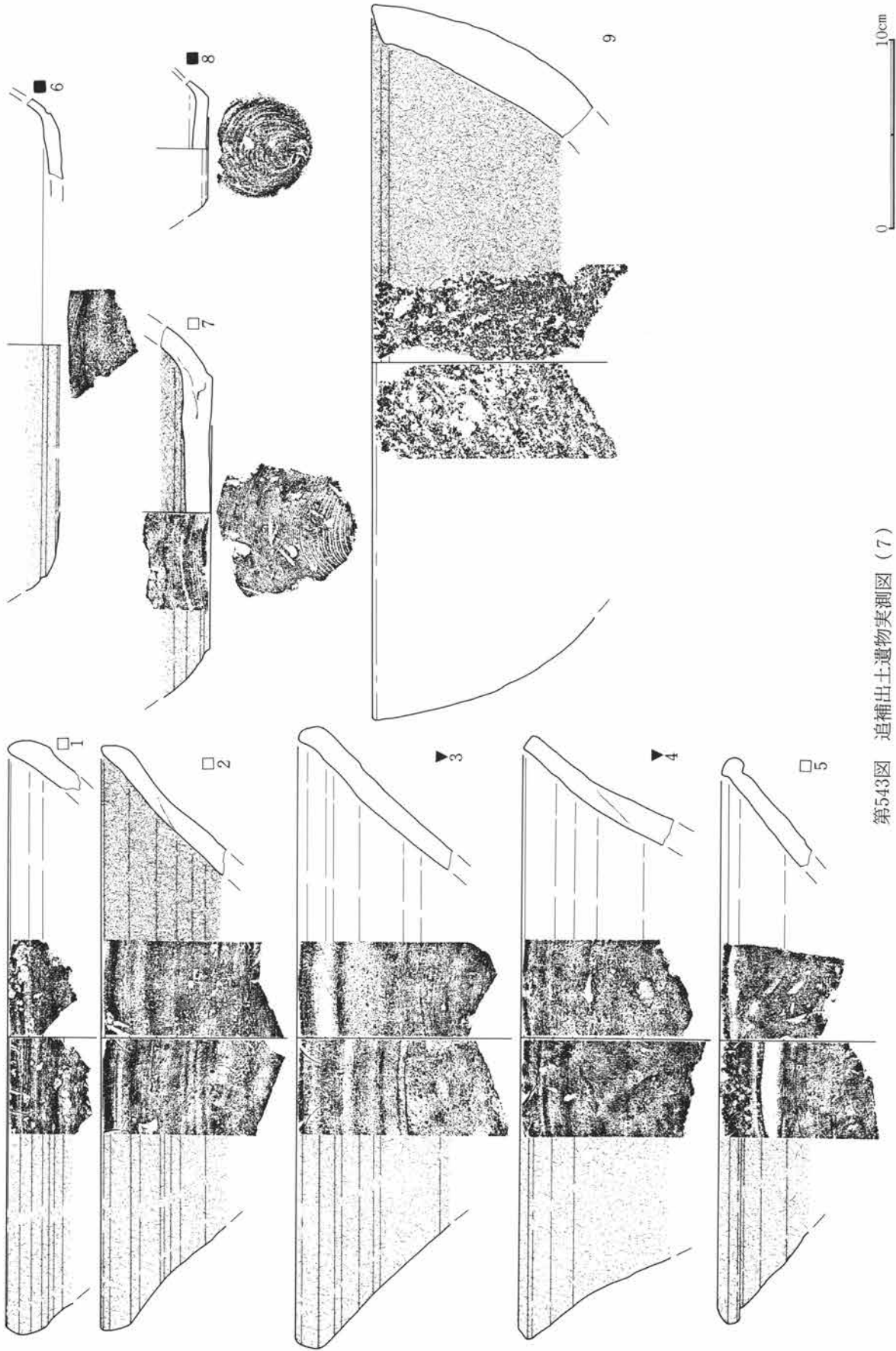
第540図 追補出土遺物実測図（4）



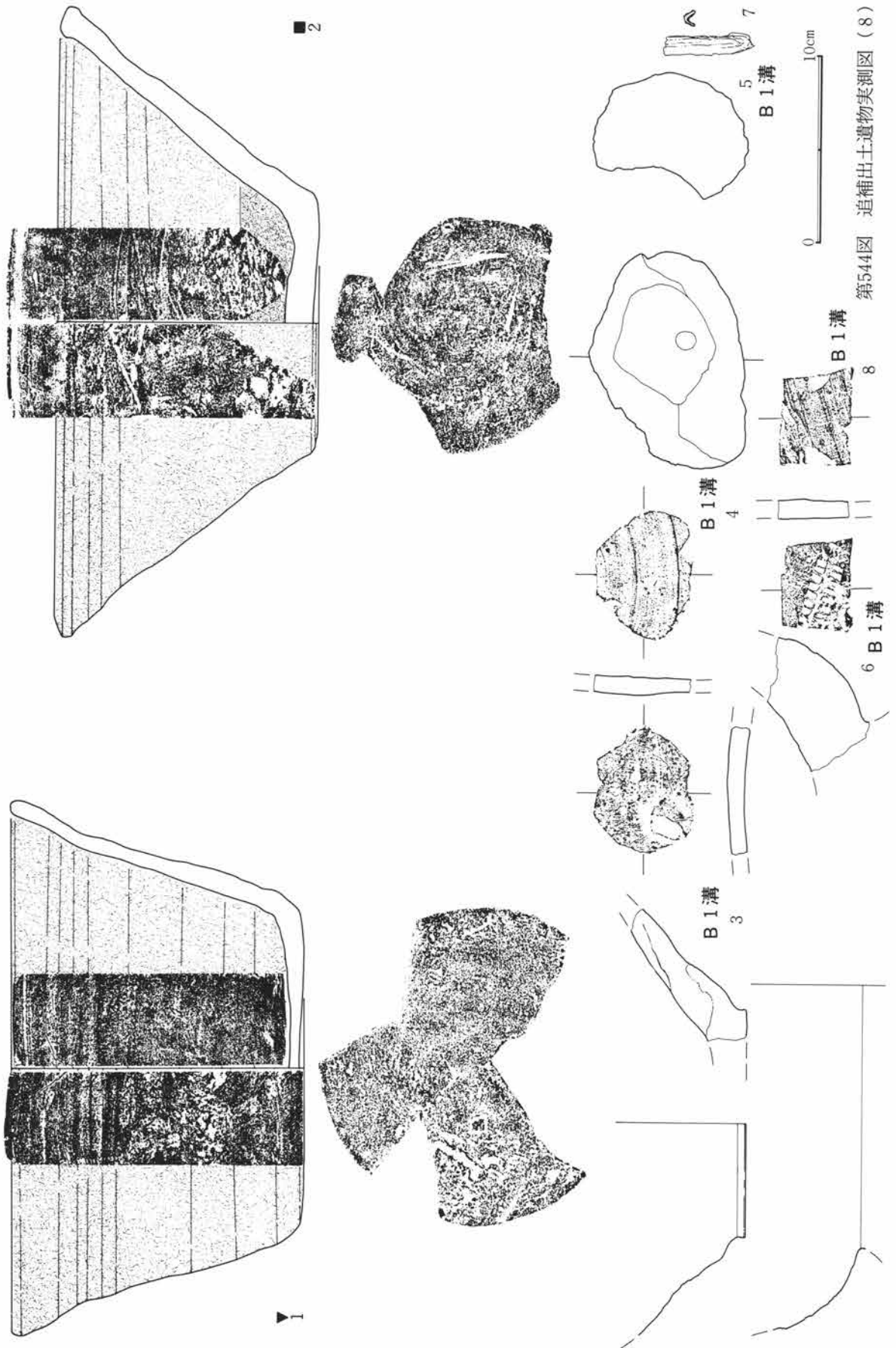
第541図 追補出土遺物実測図(5)

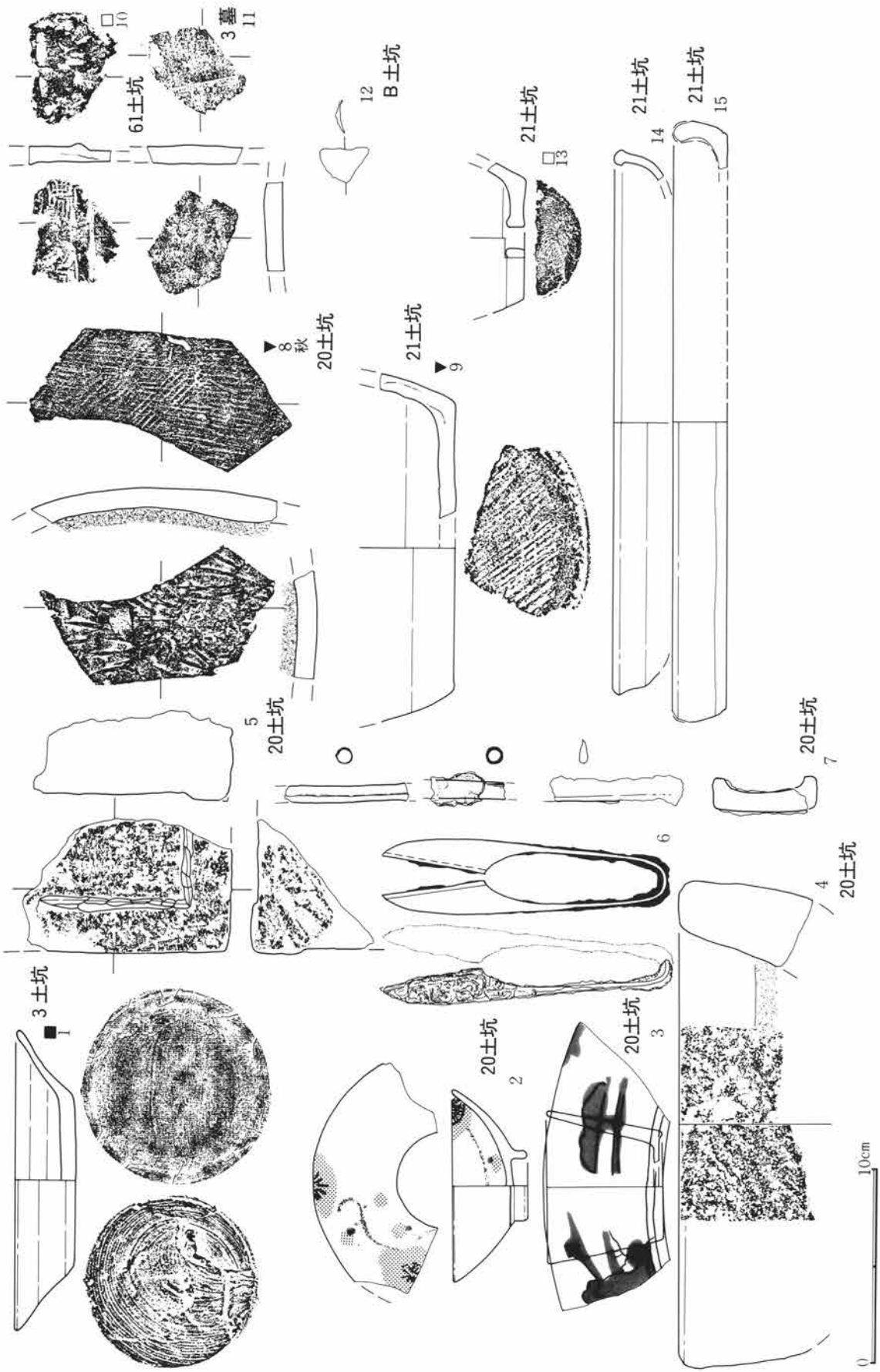


第542図 追補出土遺物実測図 (6)

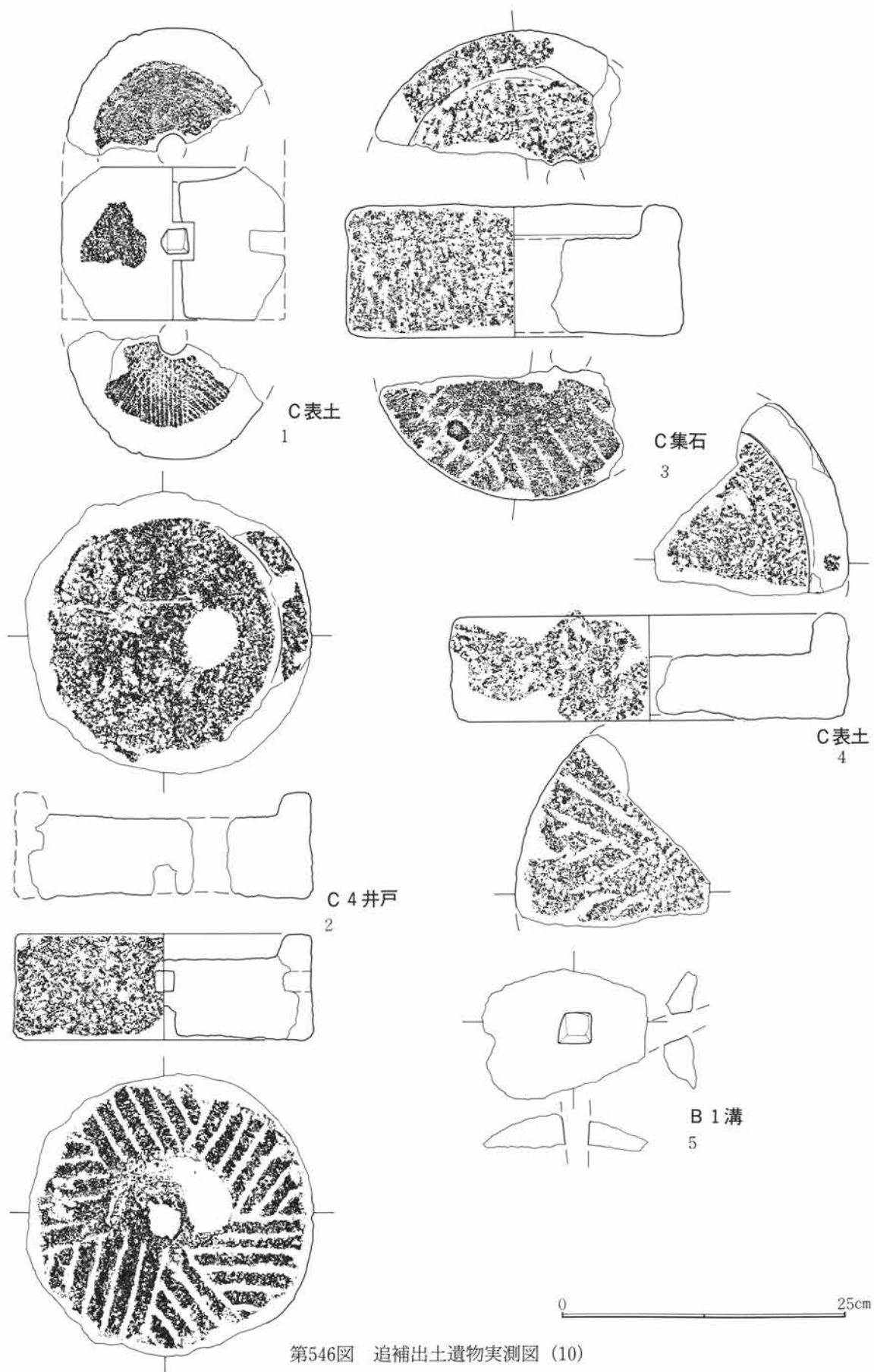


第543図 追補出土遺物実測図(7)



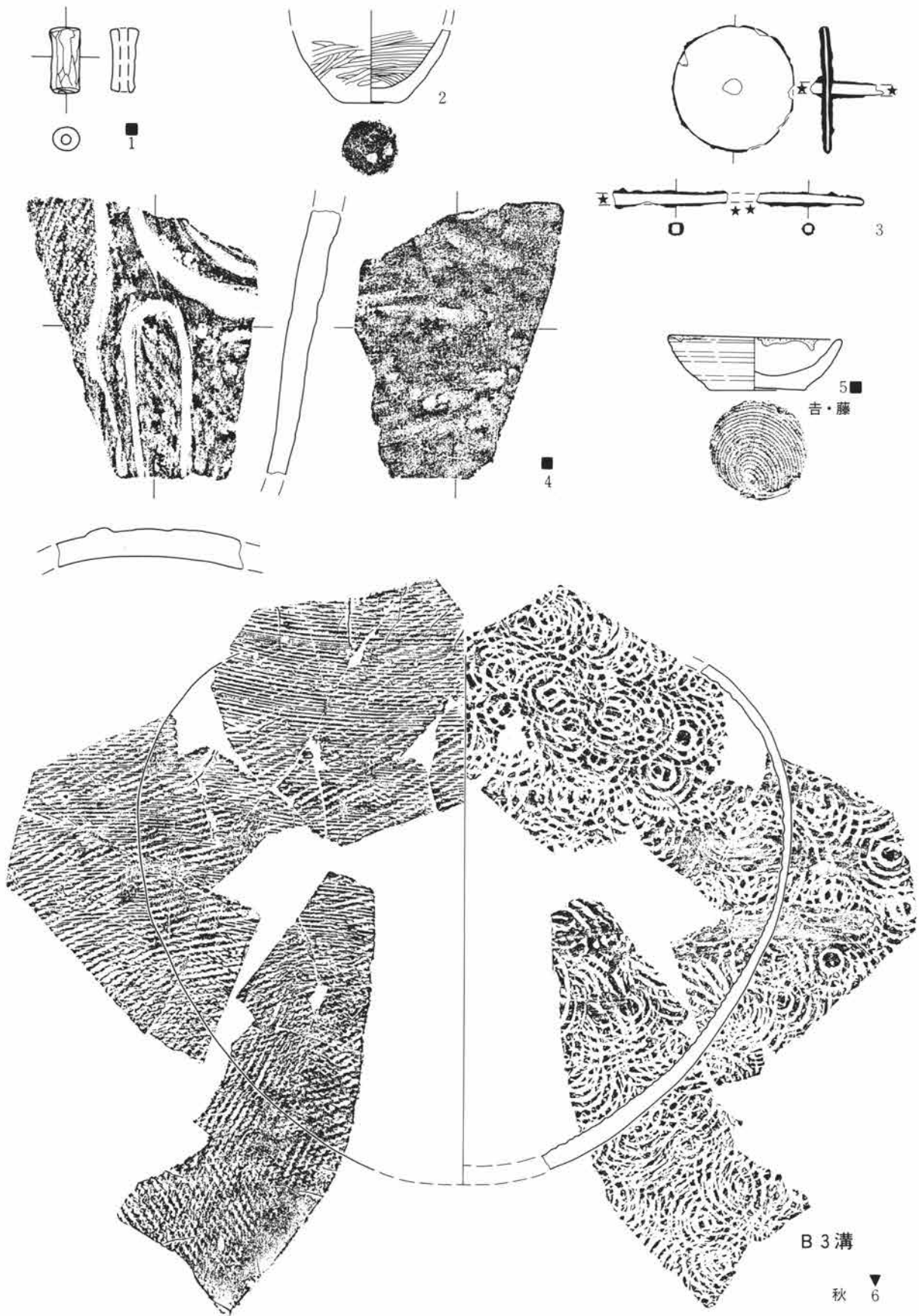


第545图 追補出土遺物実測図(9)

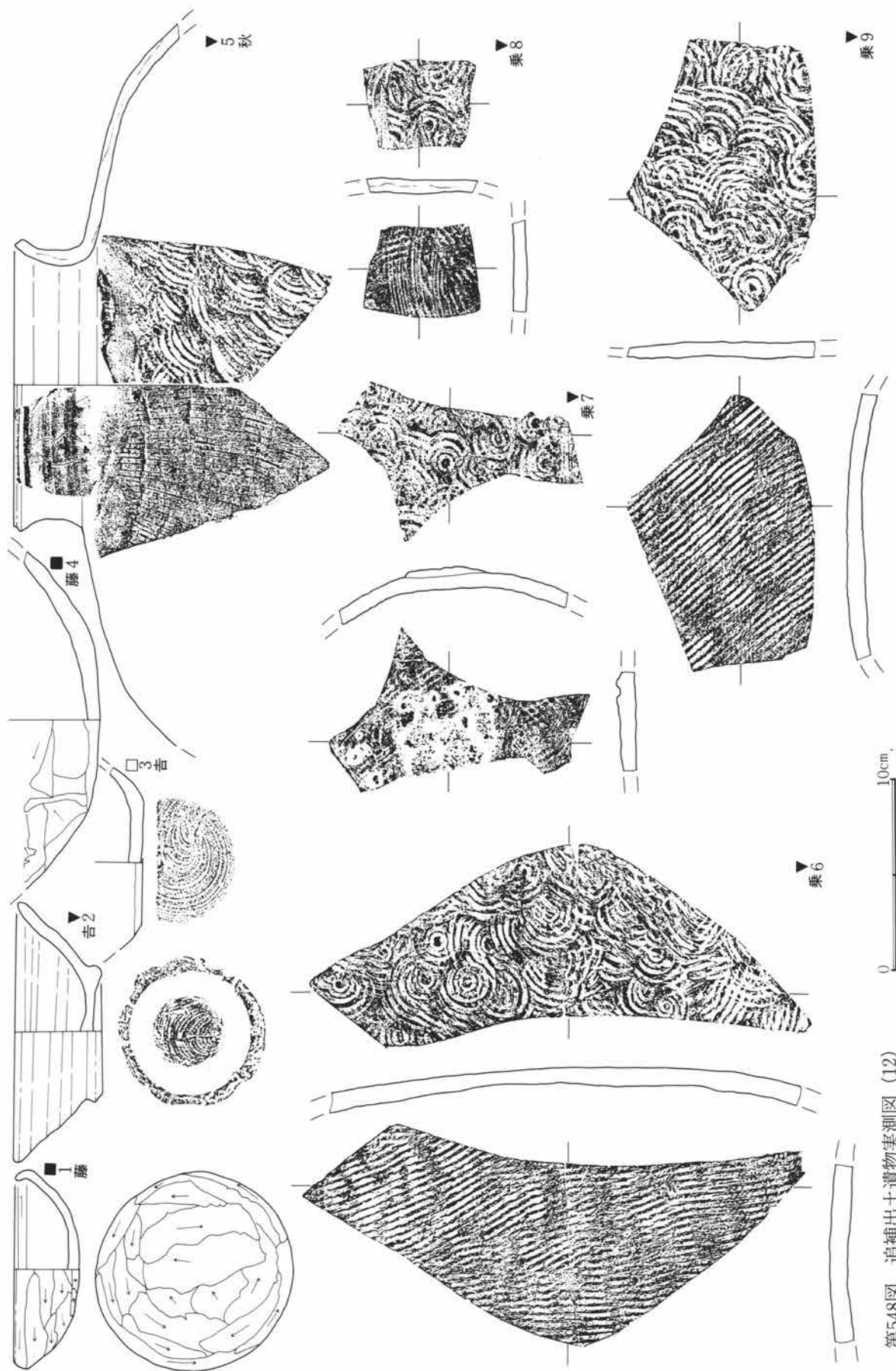


第546図 追補出土遺物実測図 (10)

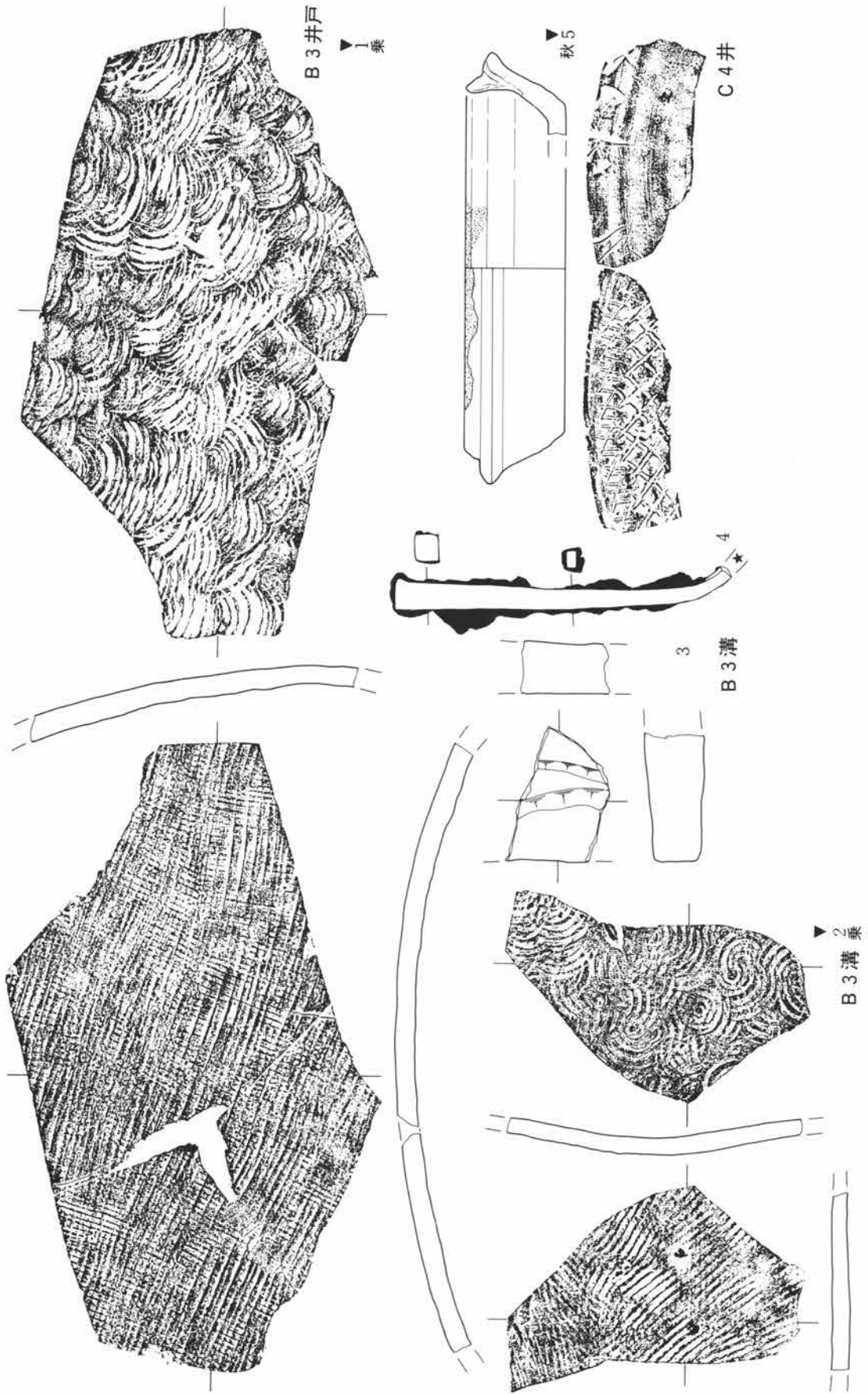




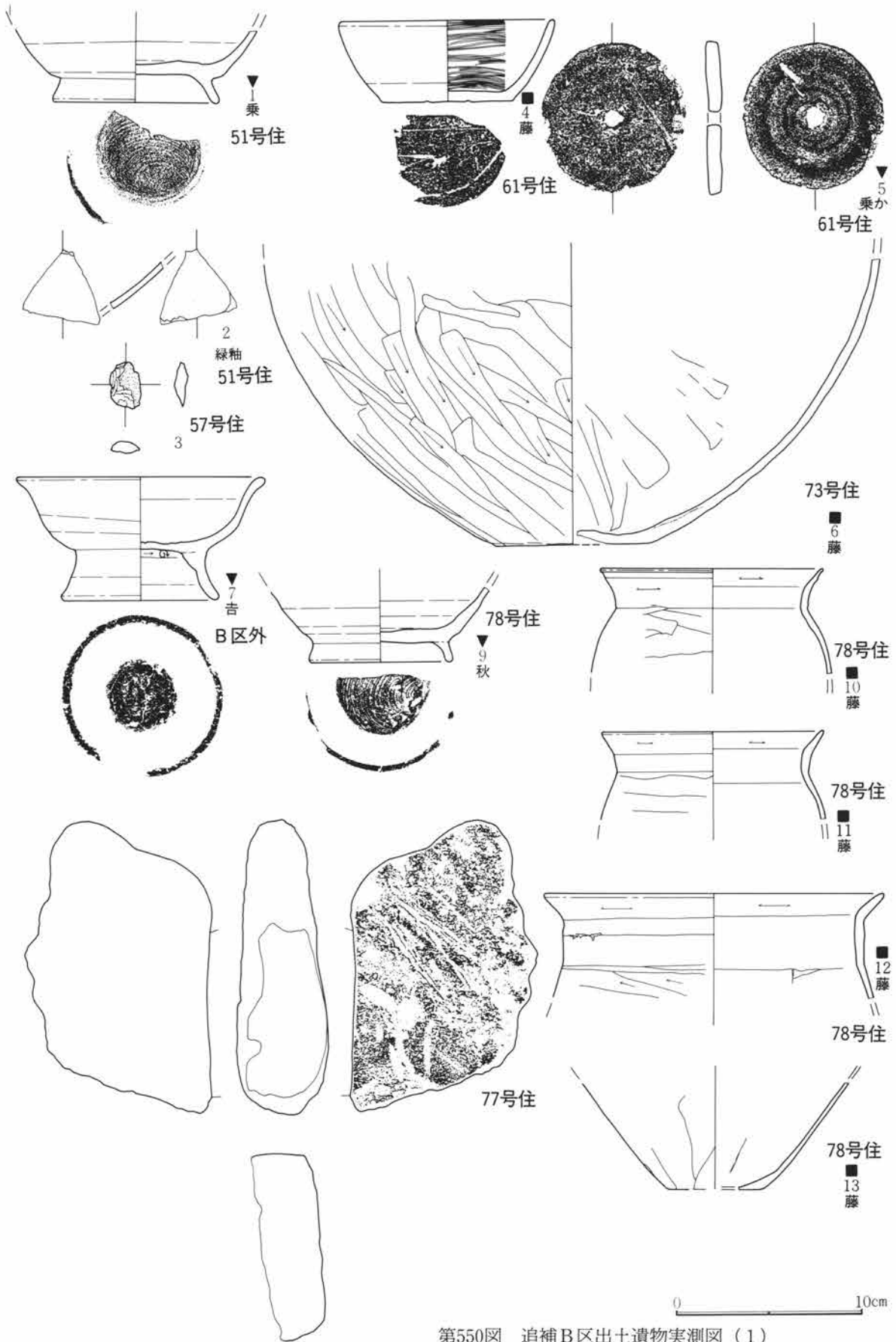
第547図 追補出土遺物実測図 (11)



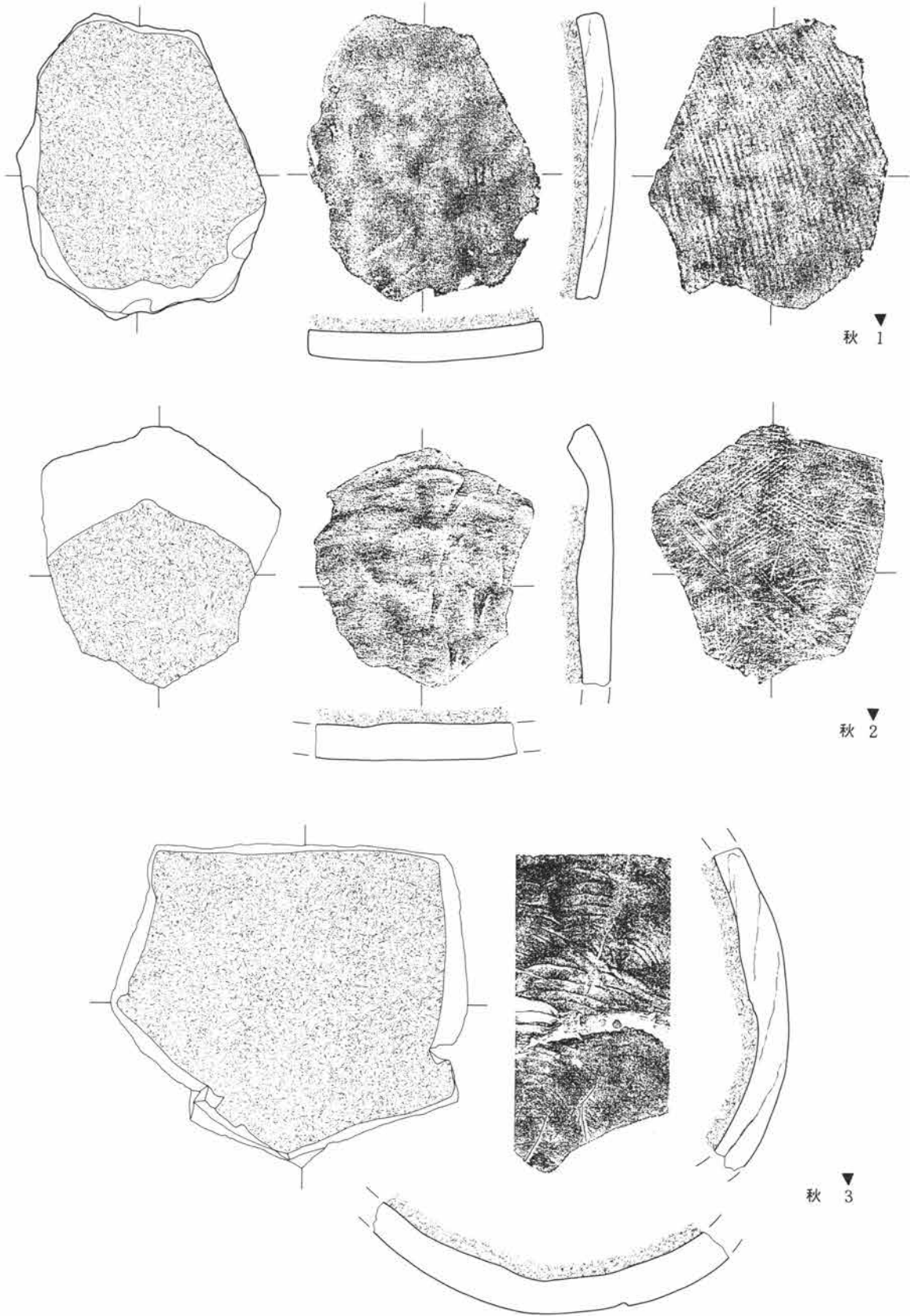
第548図 追補出土遺物実測図 (12)



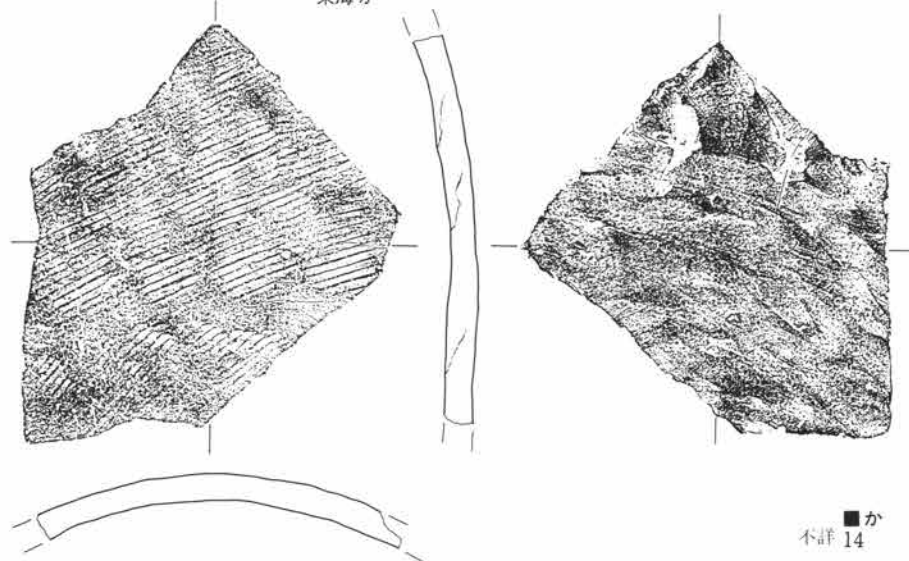
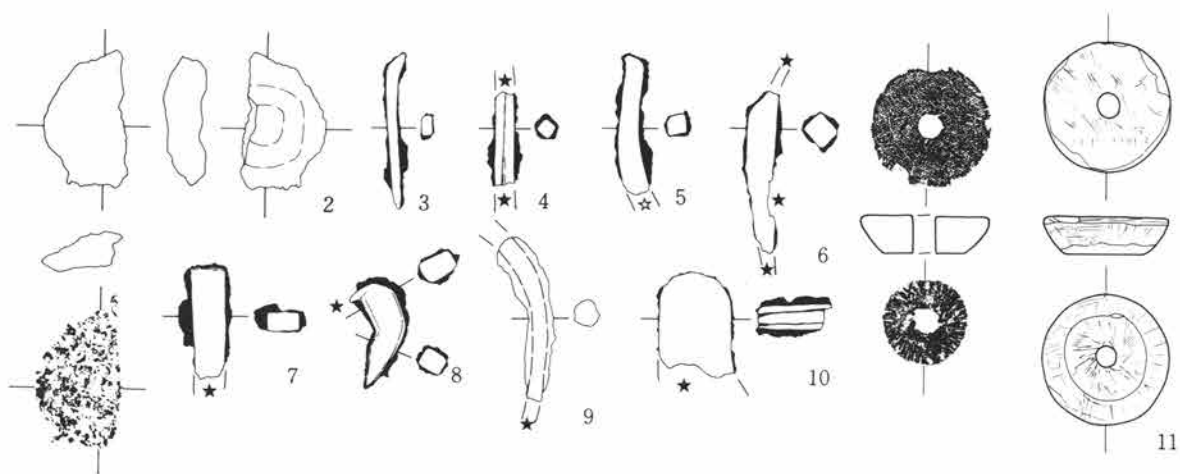
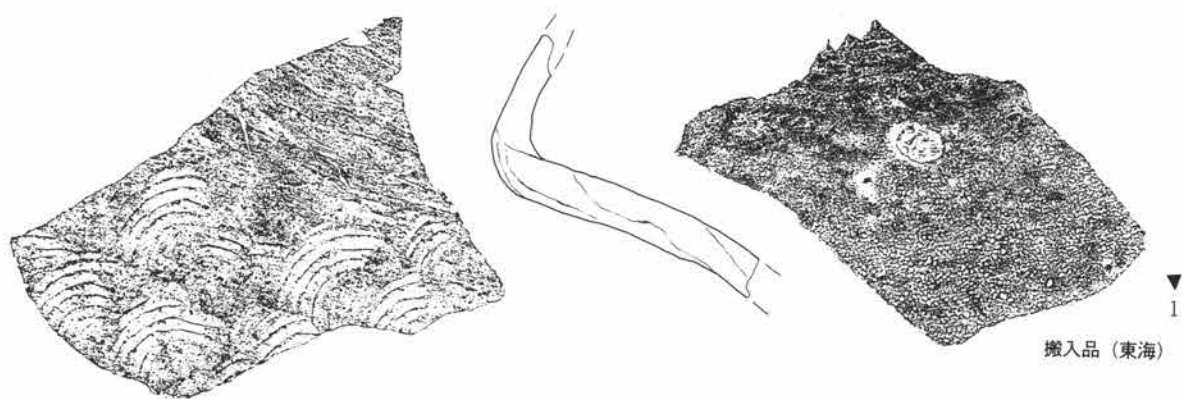
第549図 追補出土遺物実測図 (13)



第550図 追補B区出土遺物実測図(1)

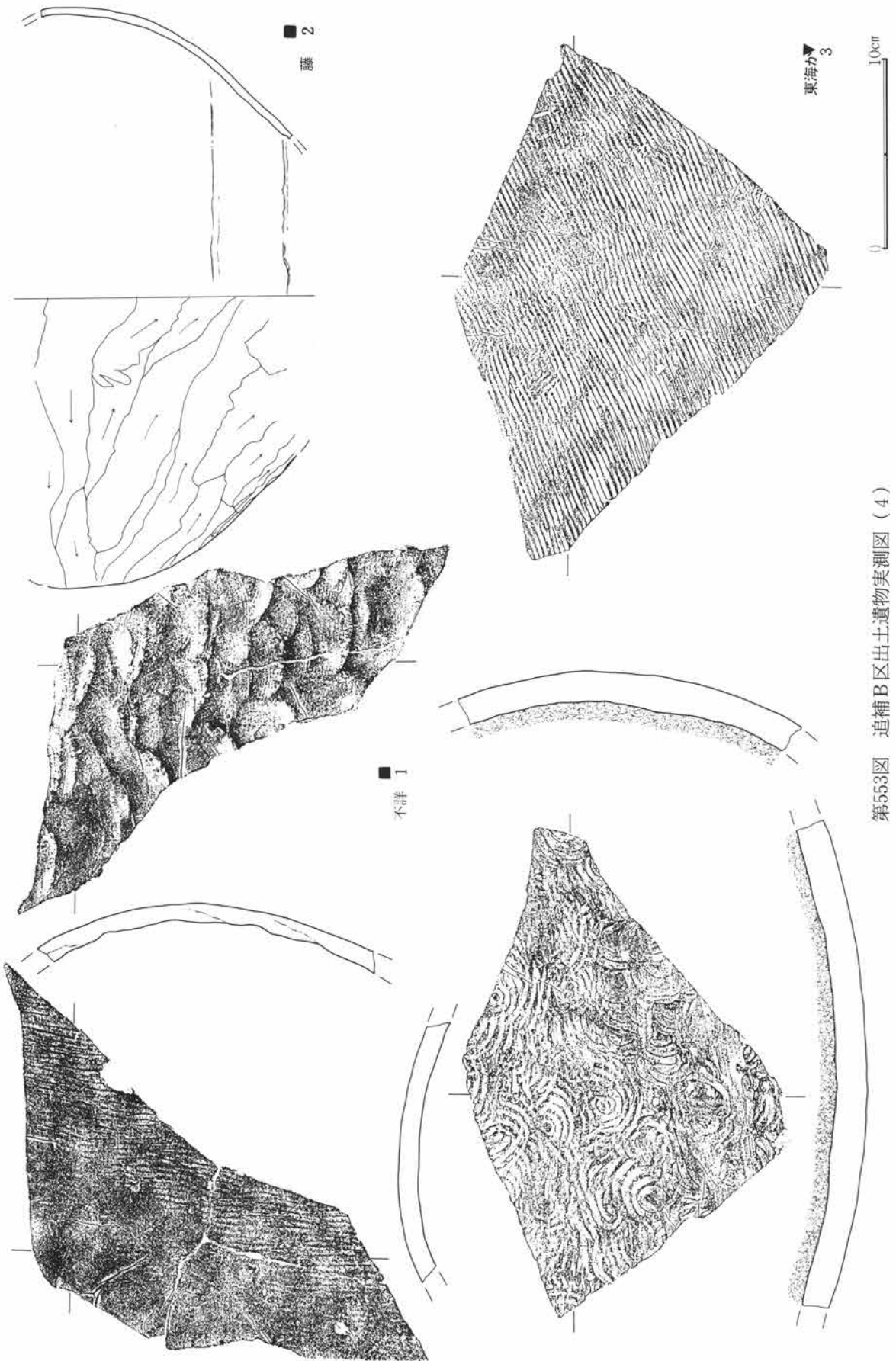


第551図 追補B区出土遺物実測図(2) 0 10cm

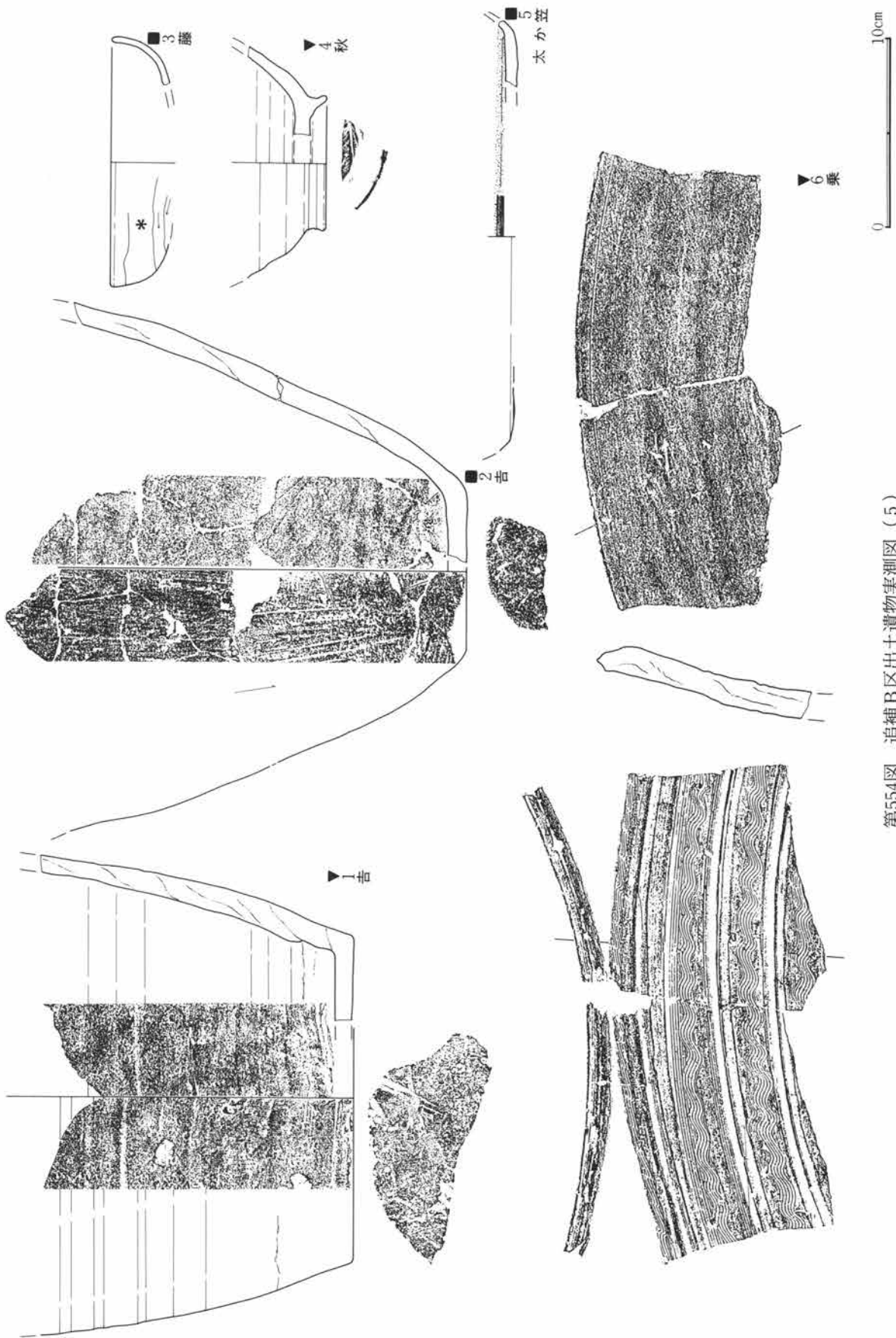


第552図 追補B区出土遺物実測図 (3)

0 10cm

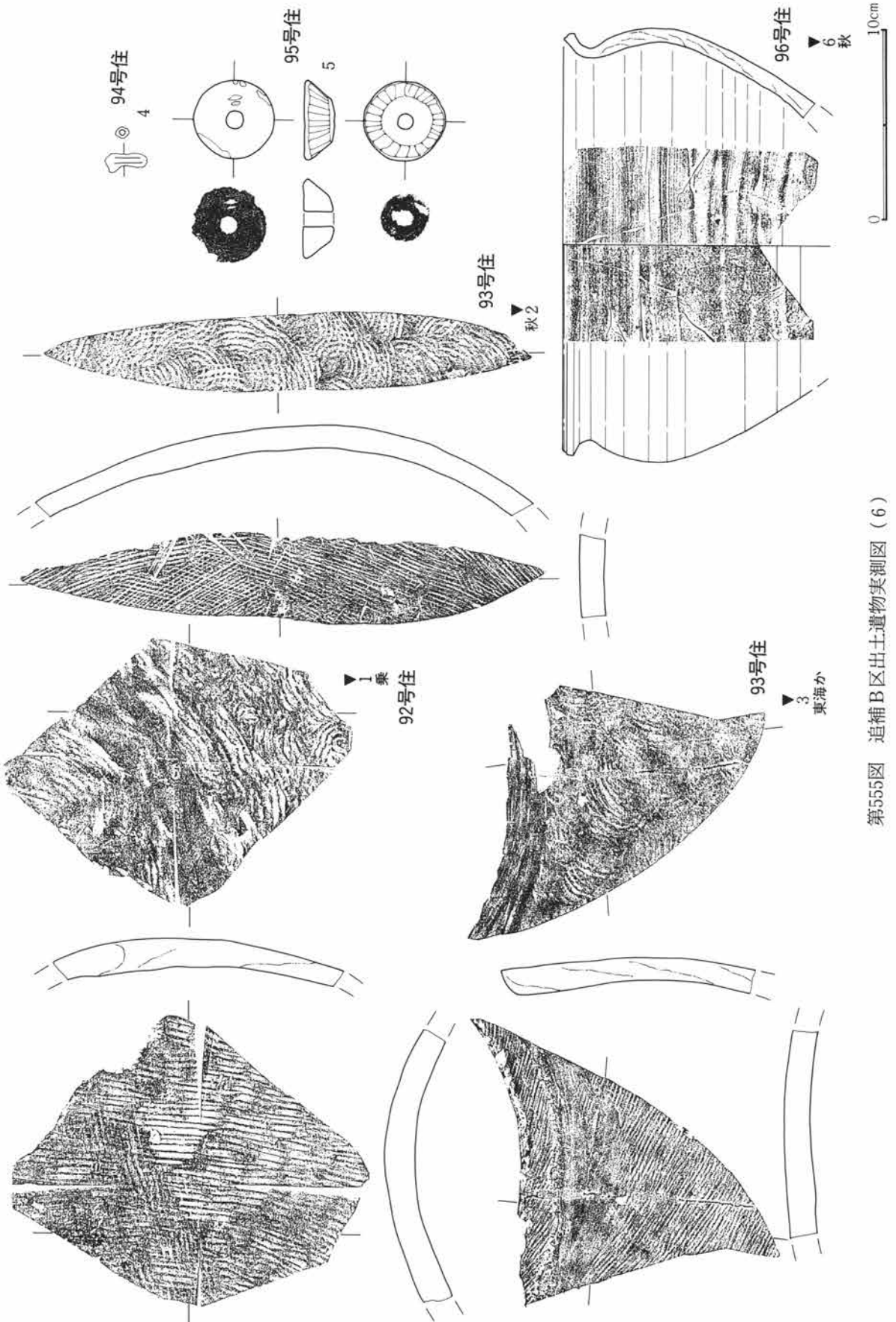


第553図 追補B区出土遺物実測図(4)

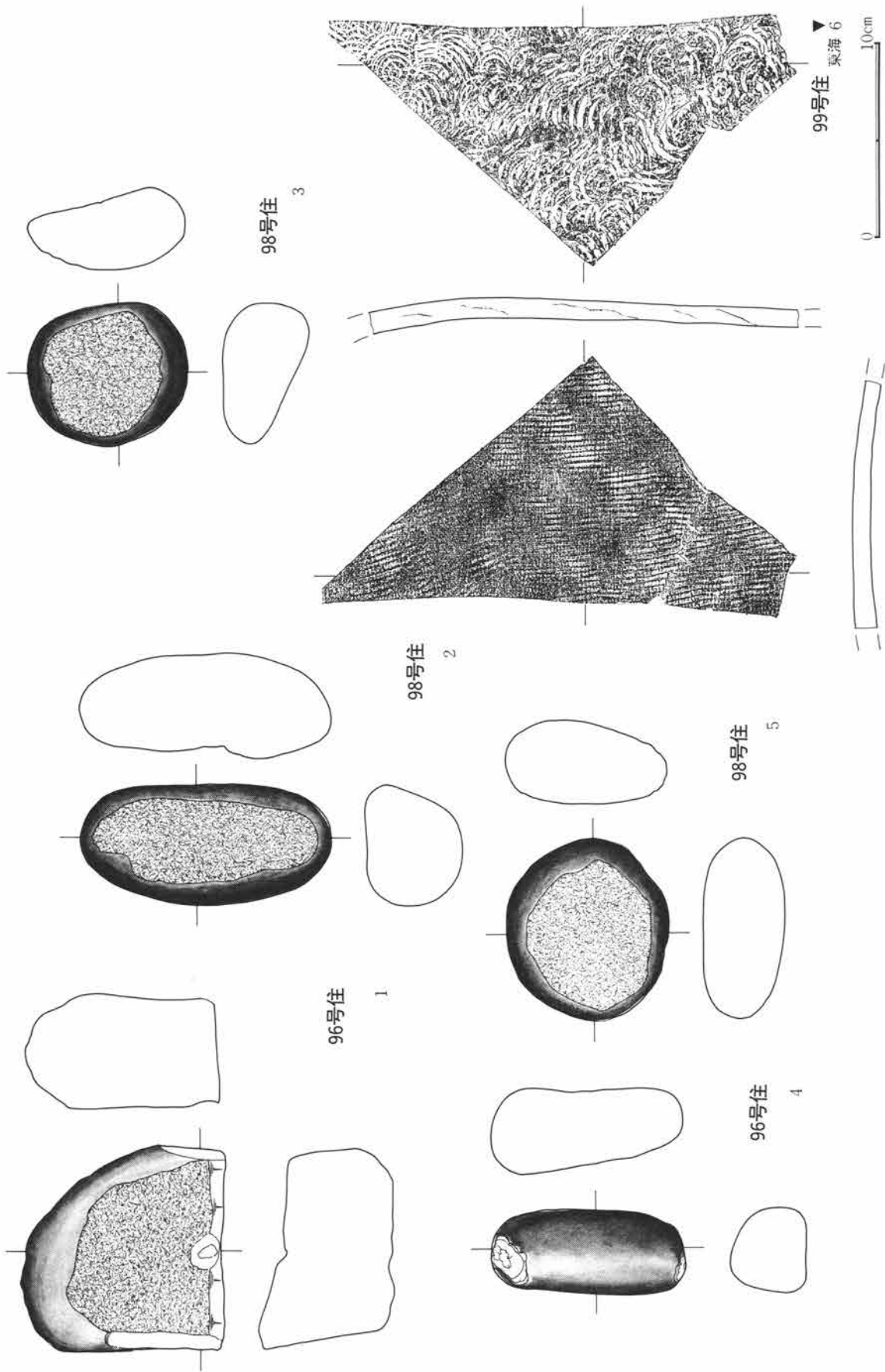


第554図 追補B区出土遺物実測図(5)

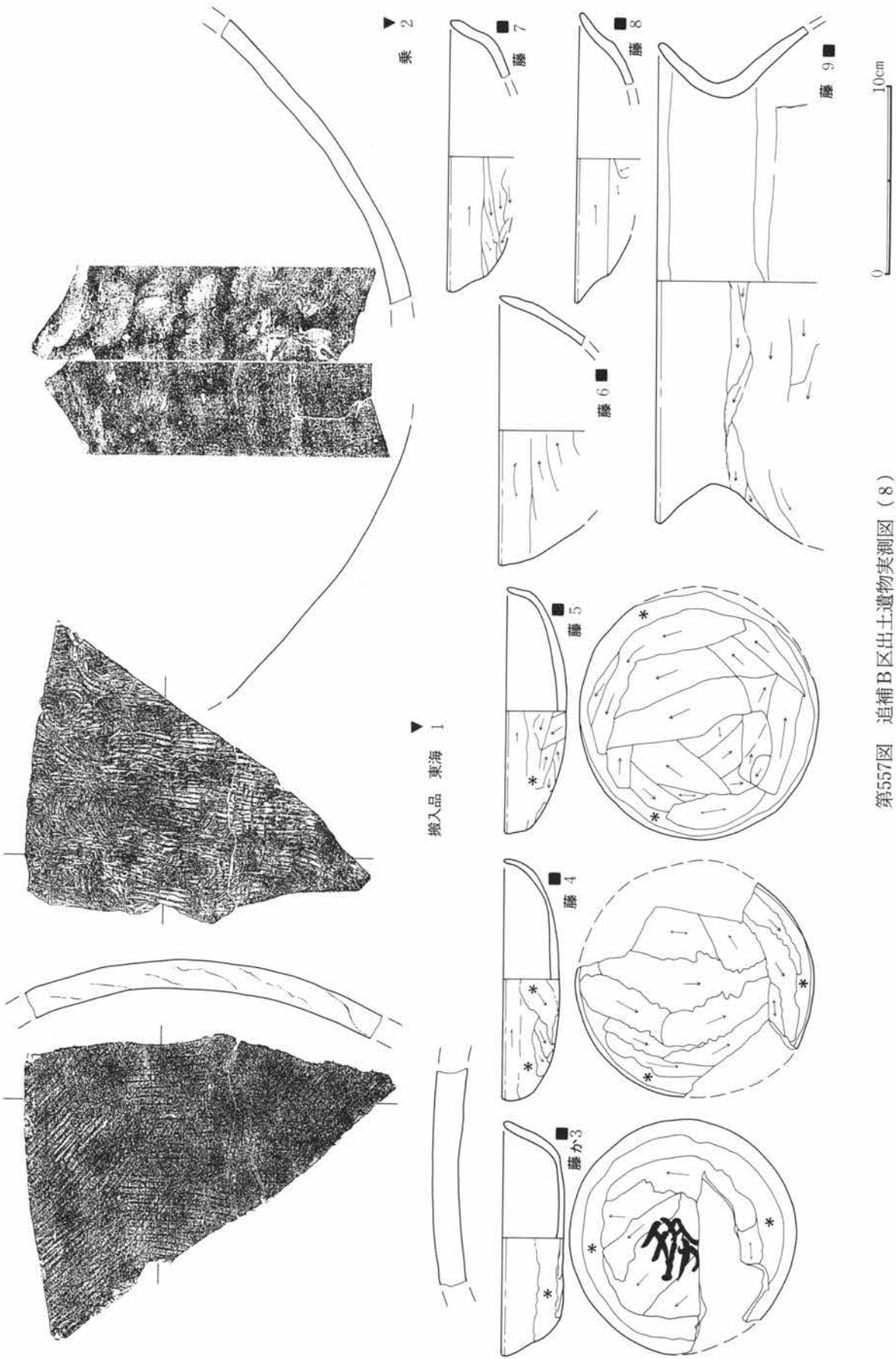




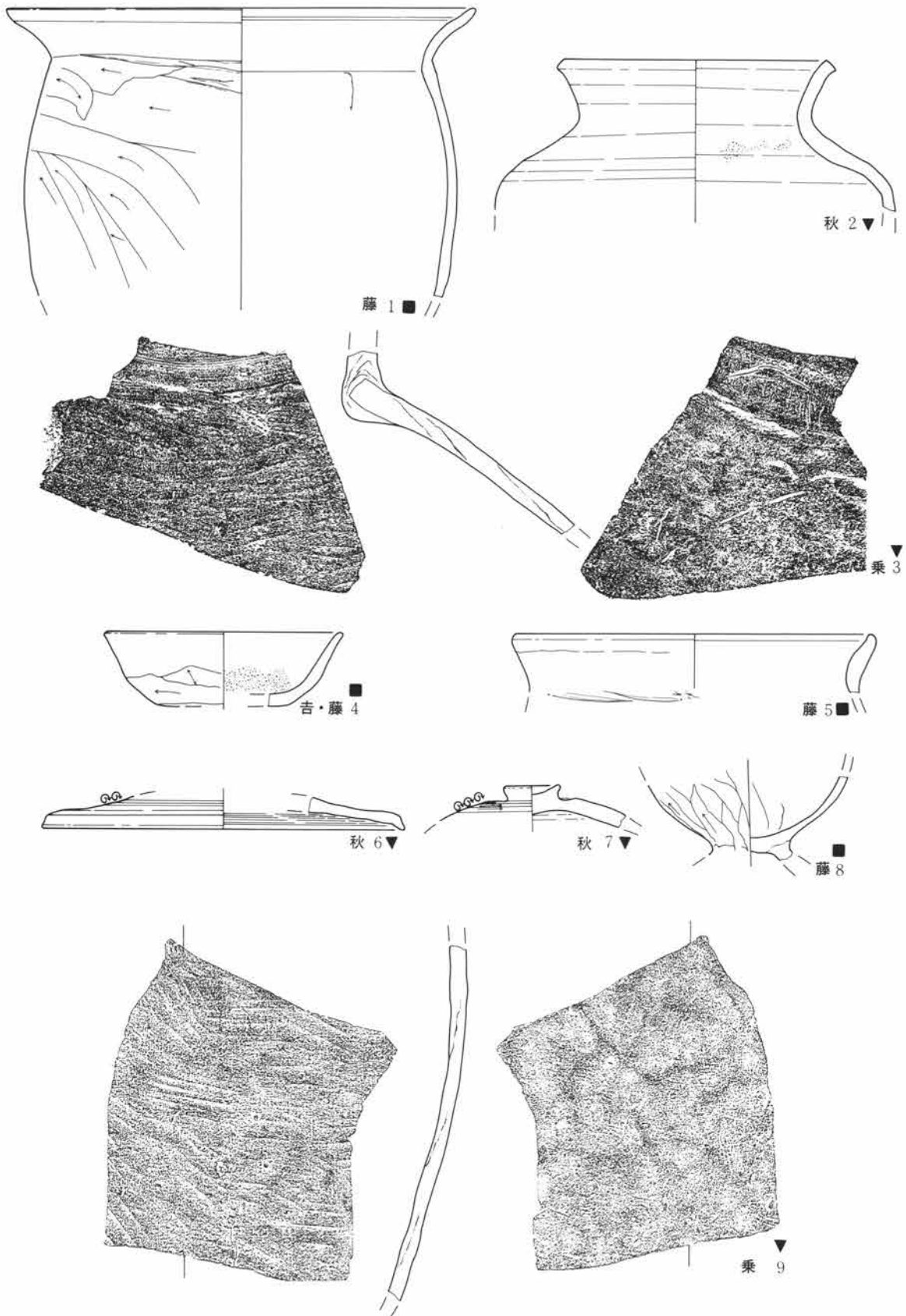
第555図 追補B区出土遺物実測図(6)



第556図 追補B区出土遺物実測図(7)

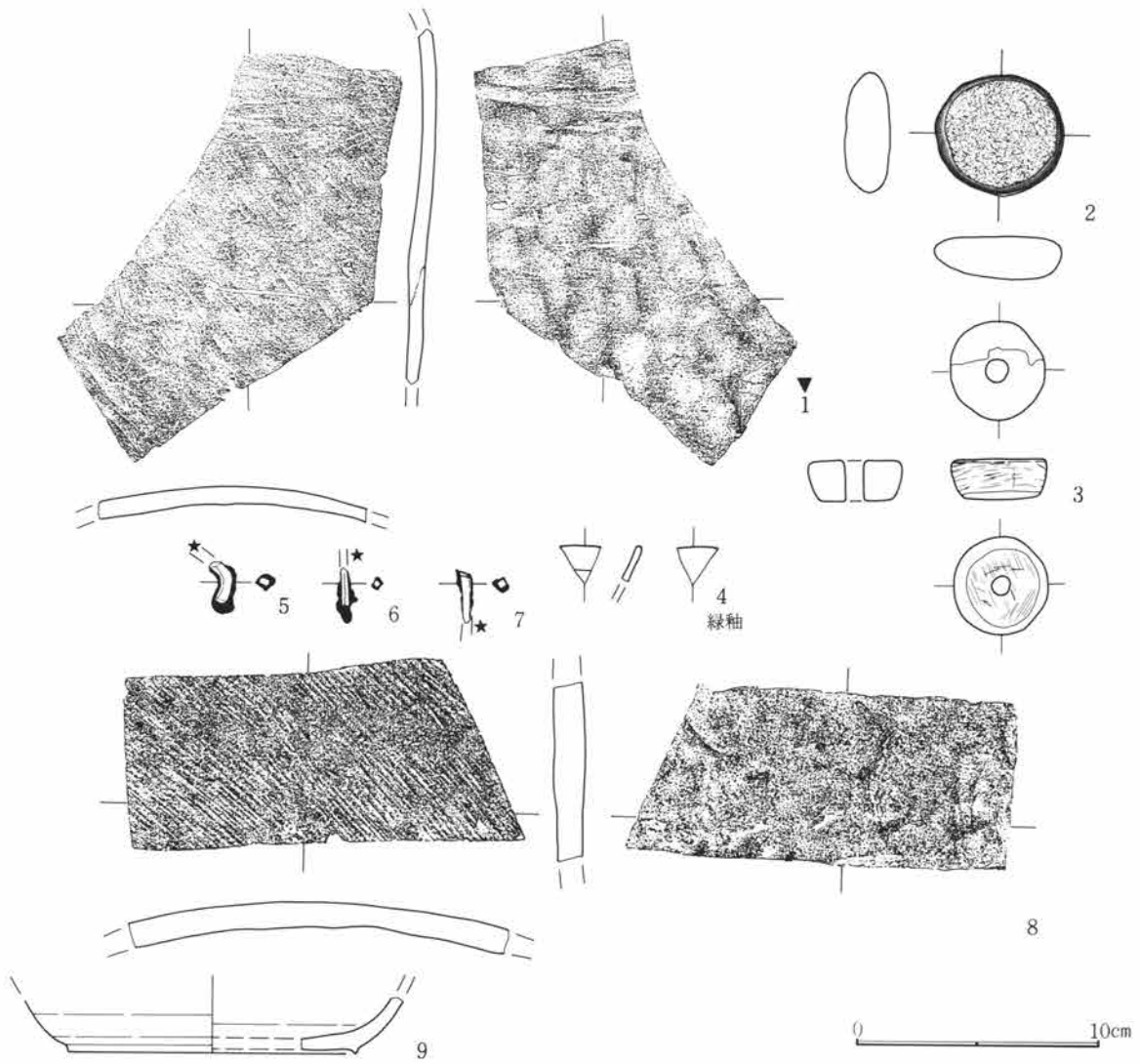


第557図 追補B区出土遺物実測図(8)

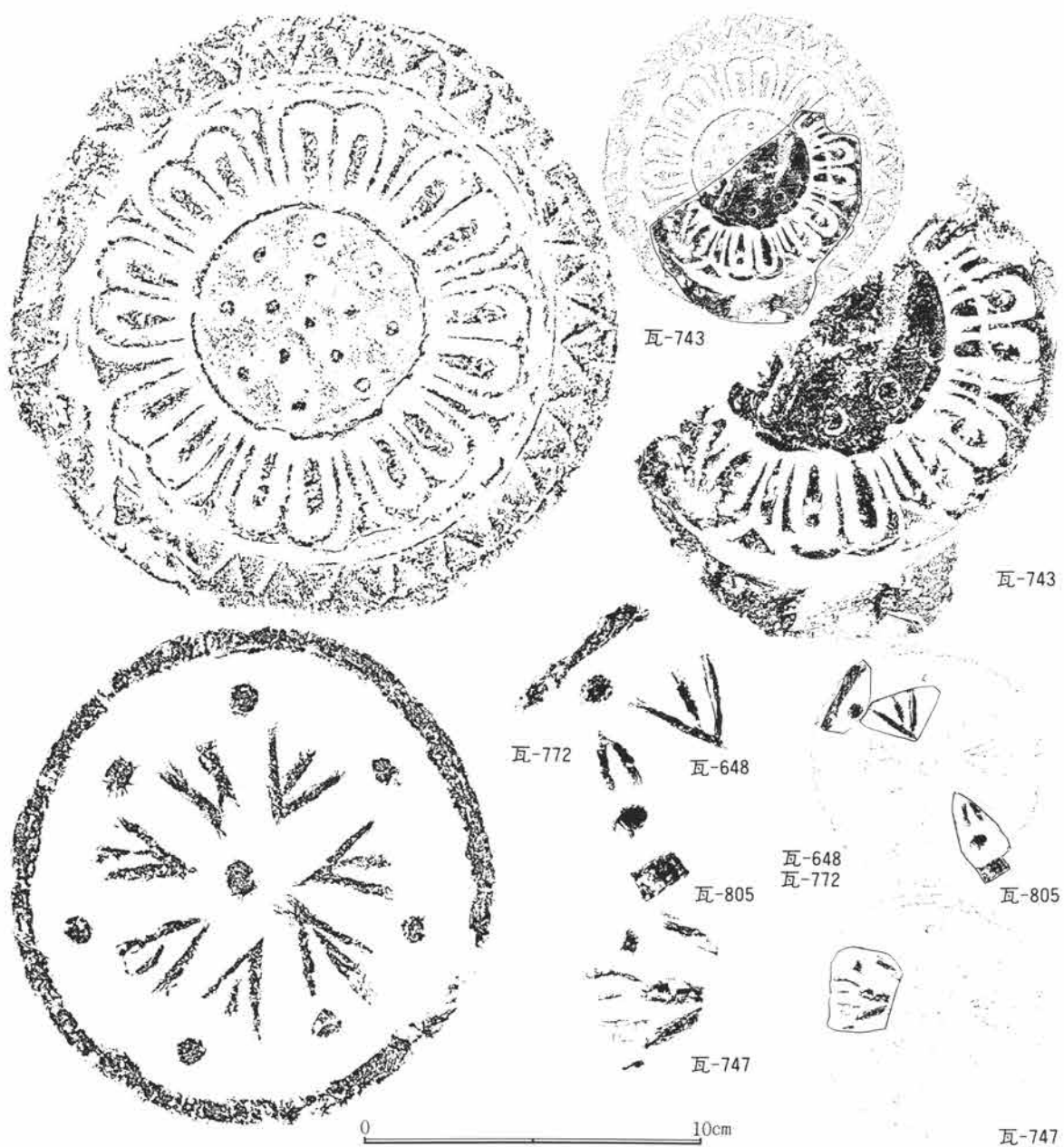


第558図 追補B区出土遺物実測図(9)

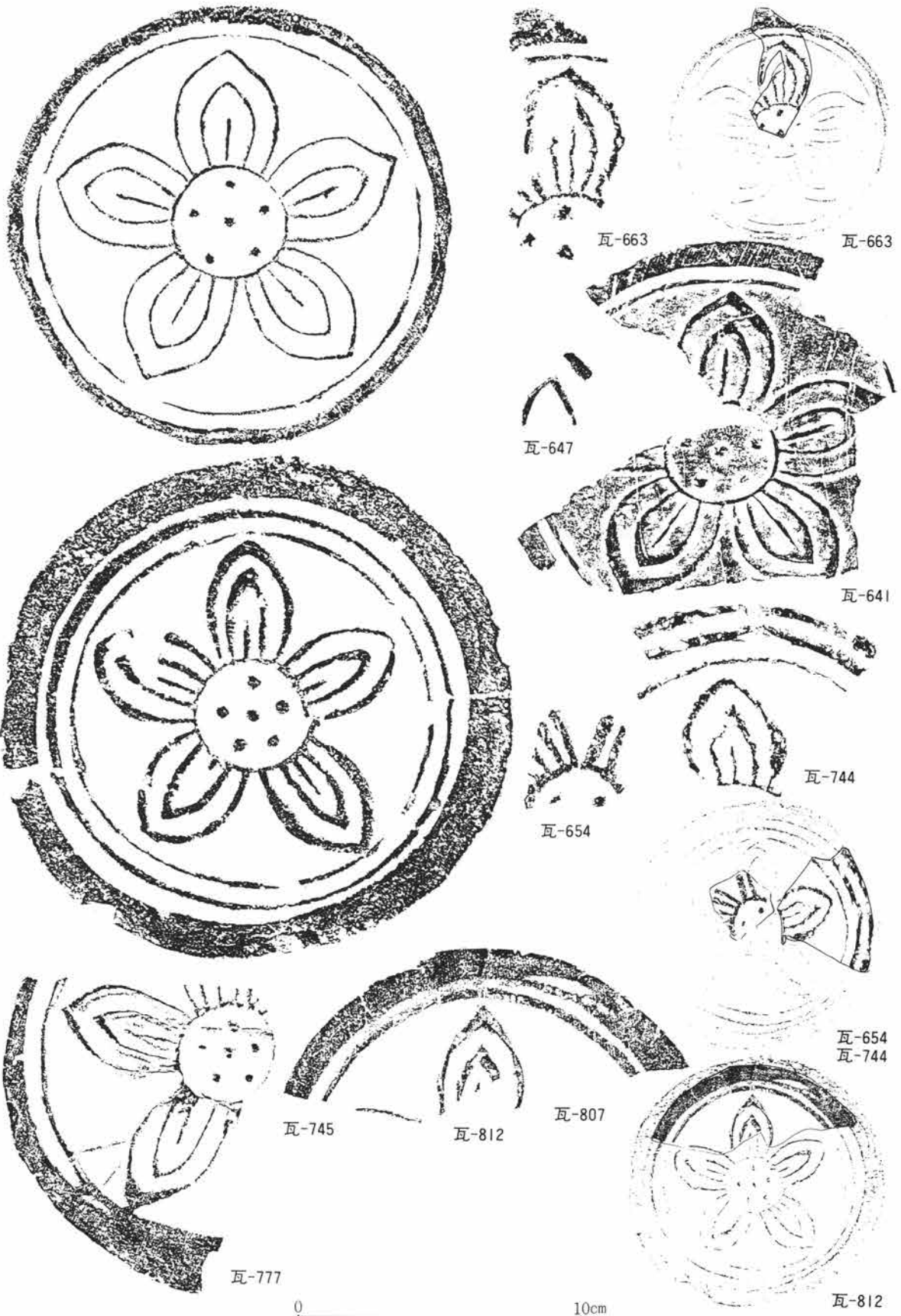
0 10cm



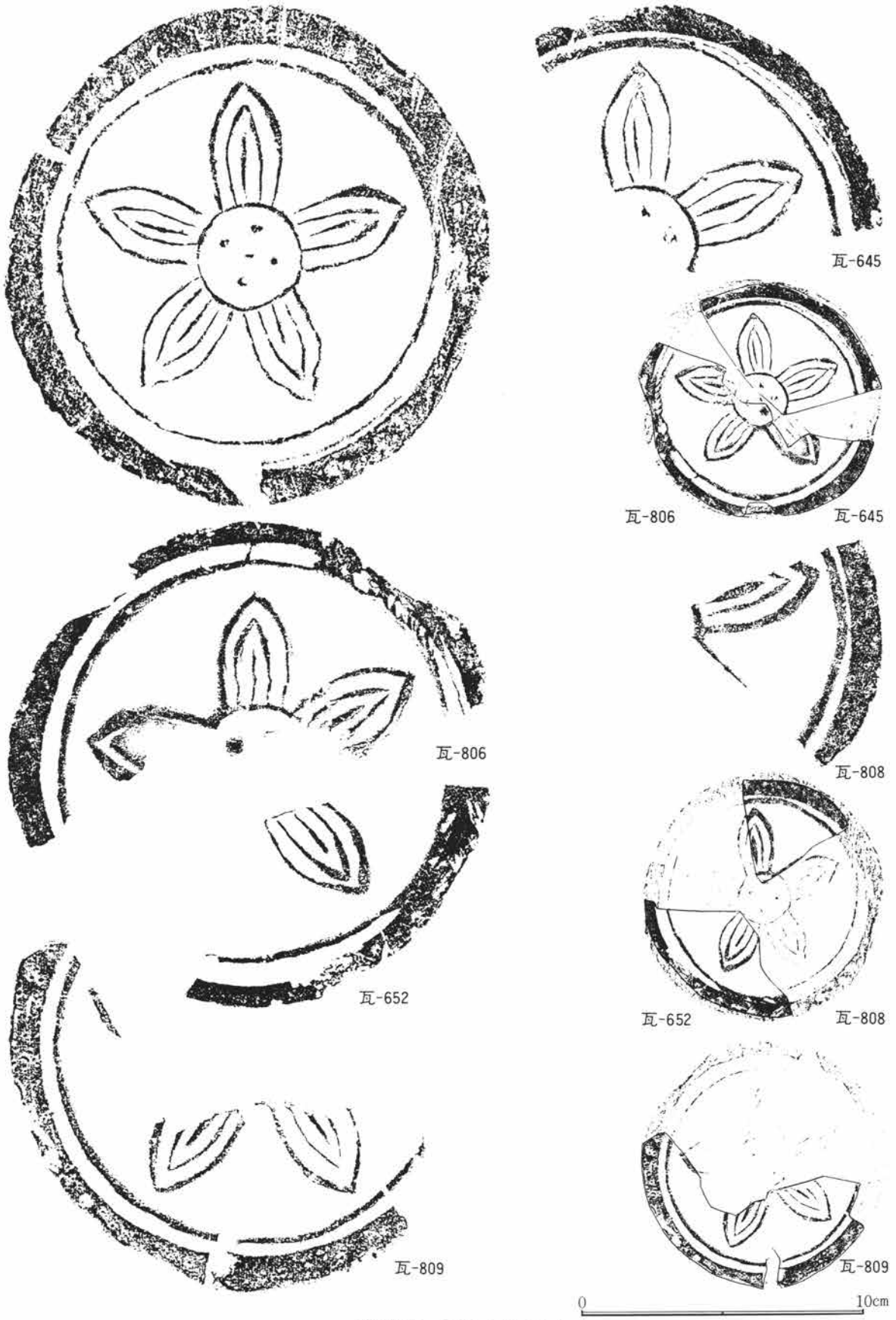
第559図 追補B区出土遺物実測図 (10)



第560图 瓦当瓦類 (1)

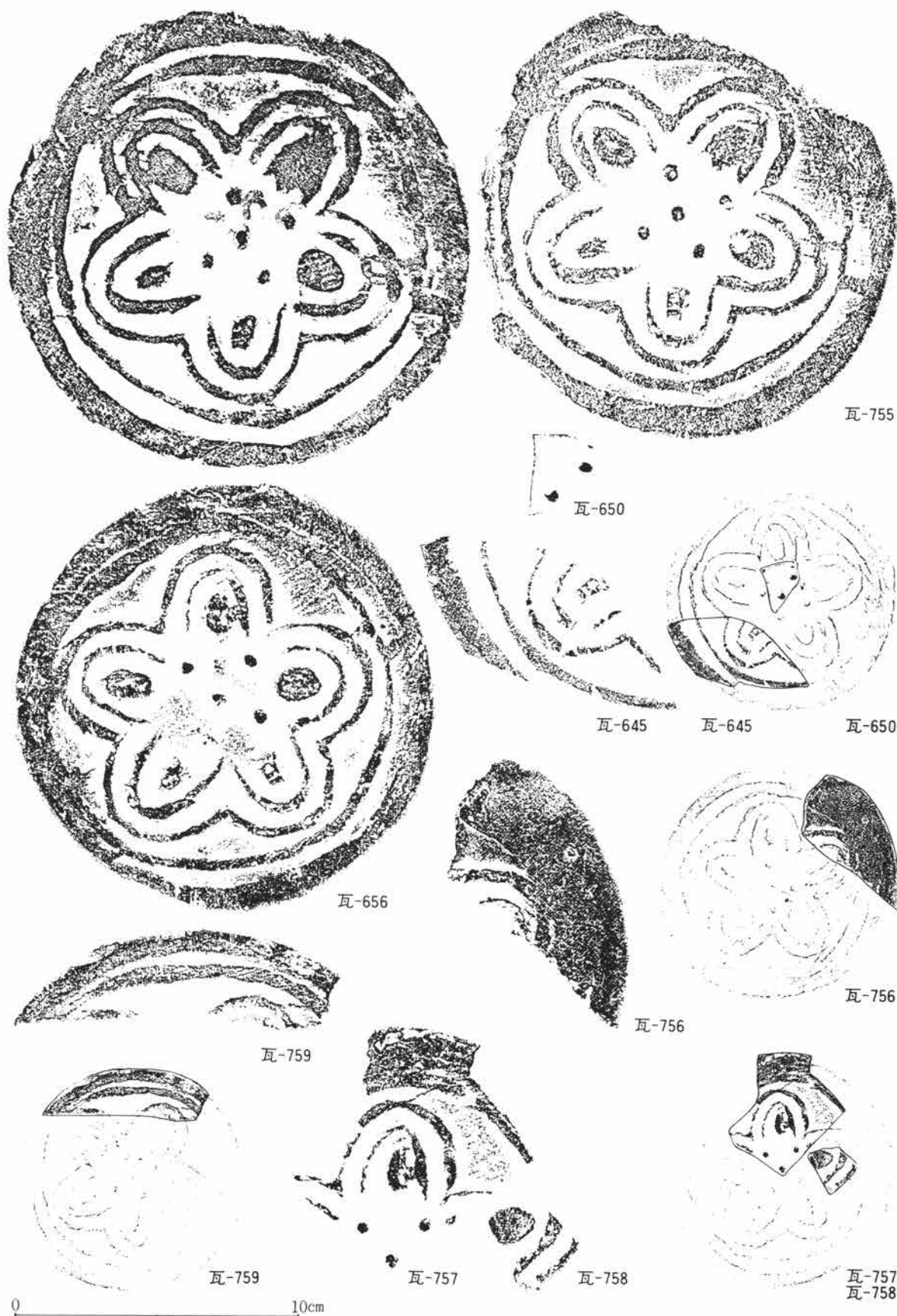


第561图 瓦当瓦類 (2)

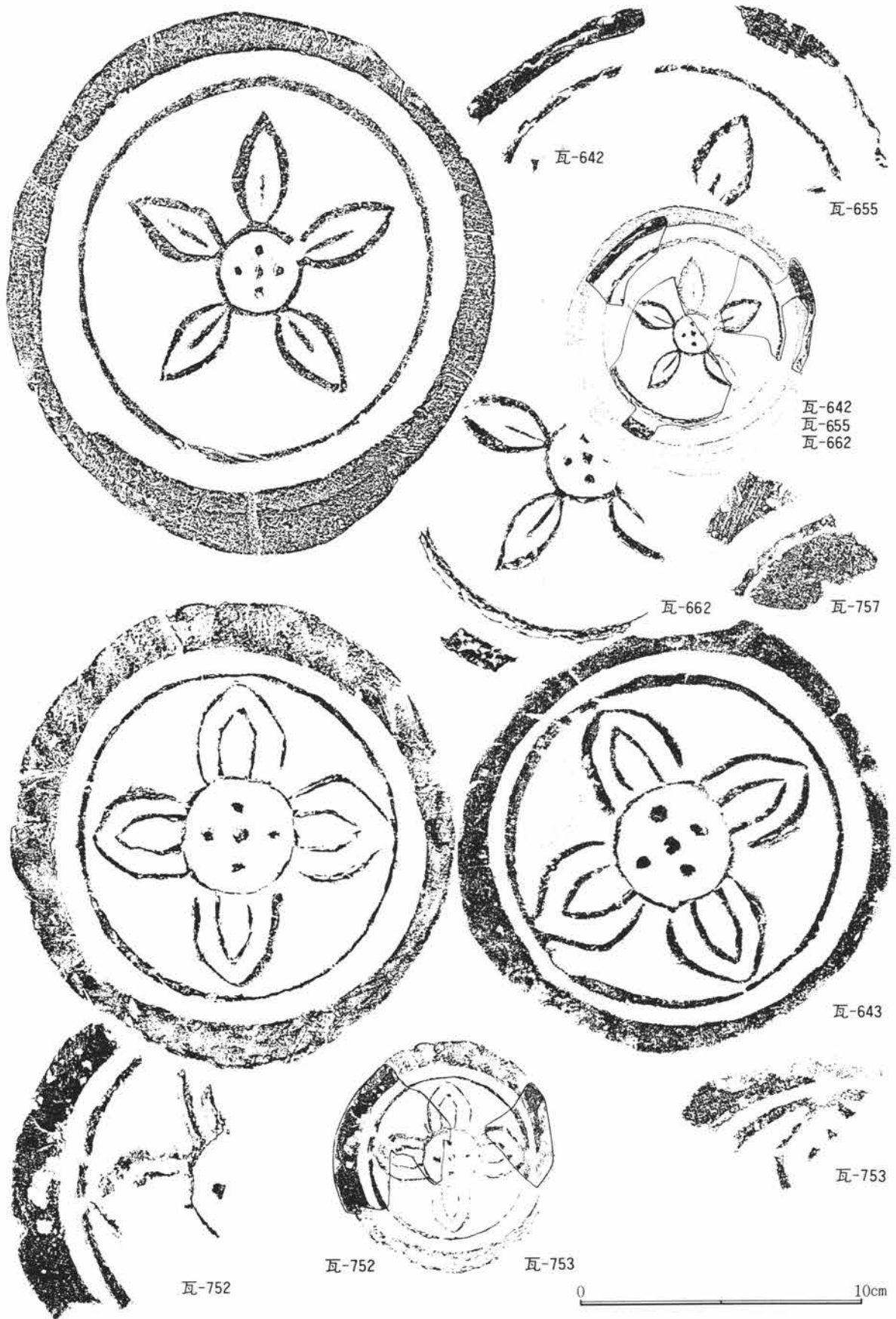


第562図 瓦当瓦類 (3)

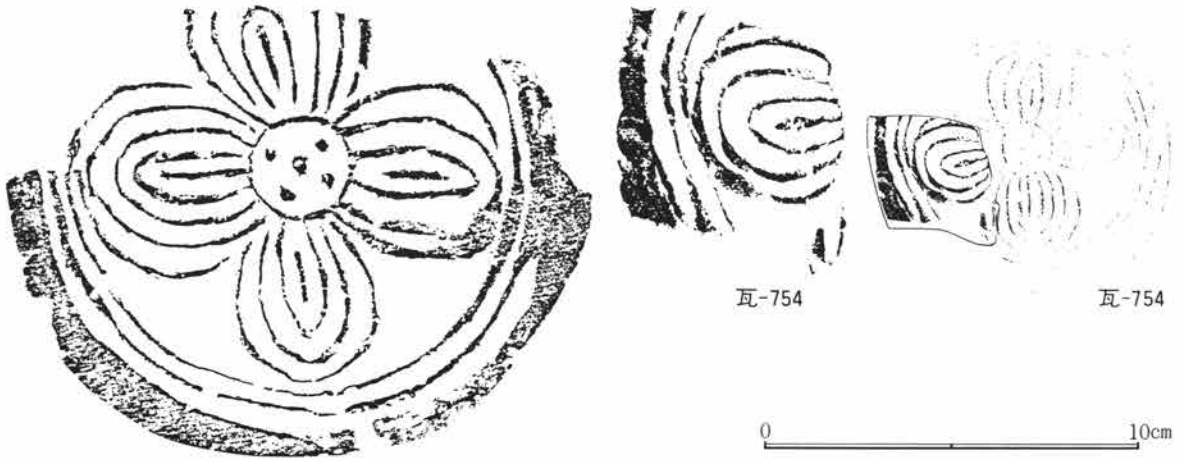




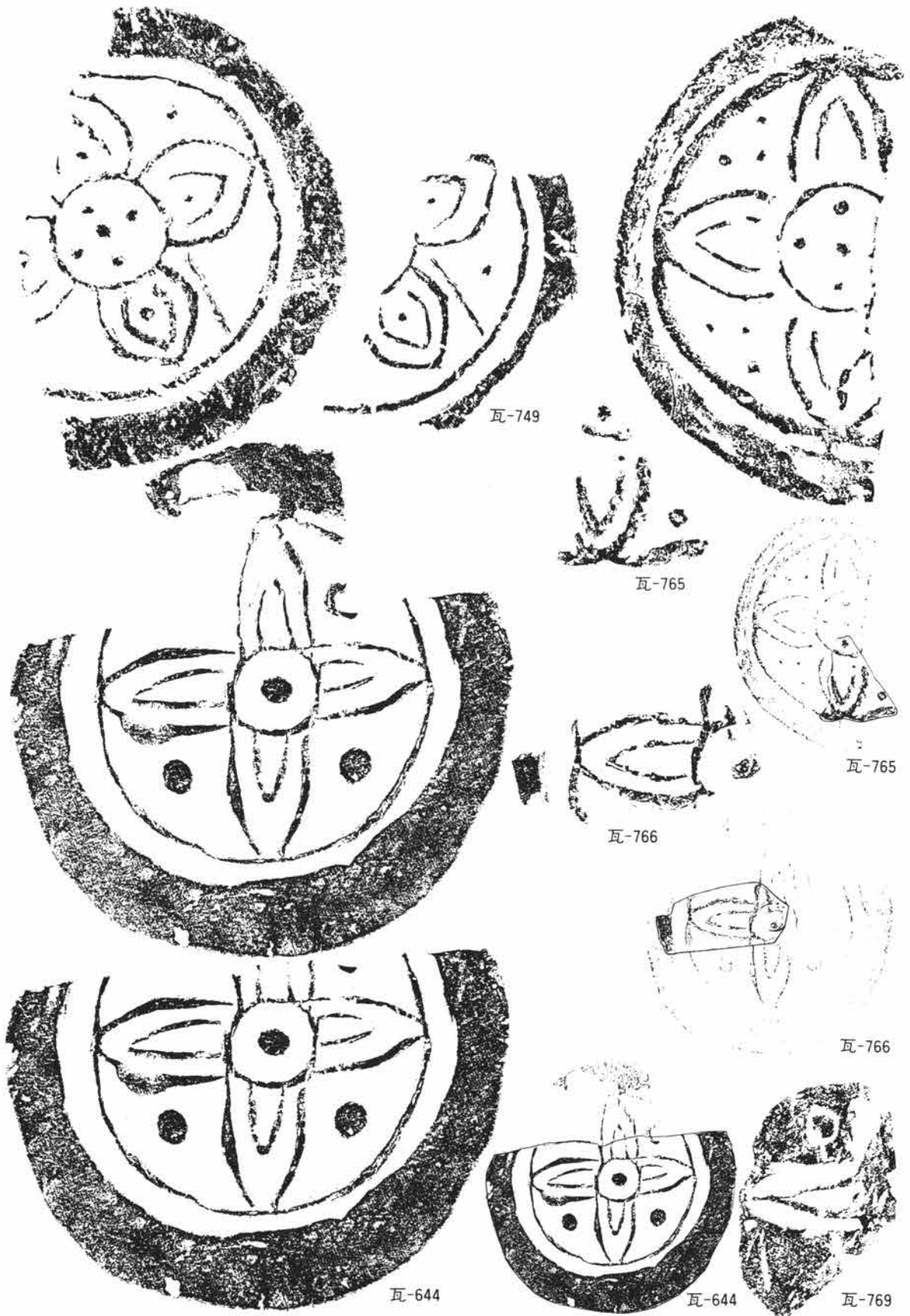
第563图 瓦当瓦類 (4)



第564图 瓦当瓦類 (5)

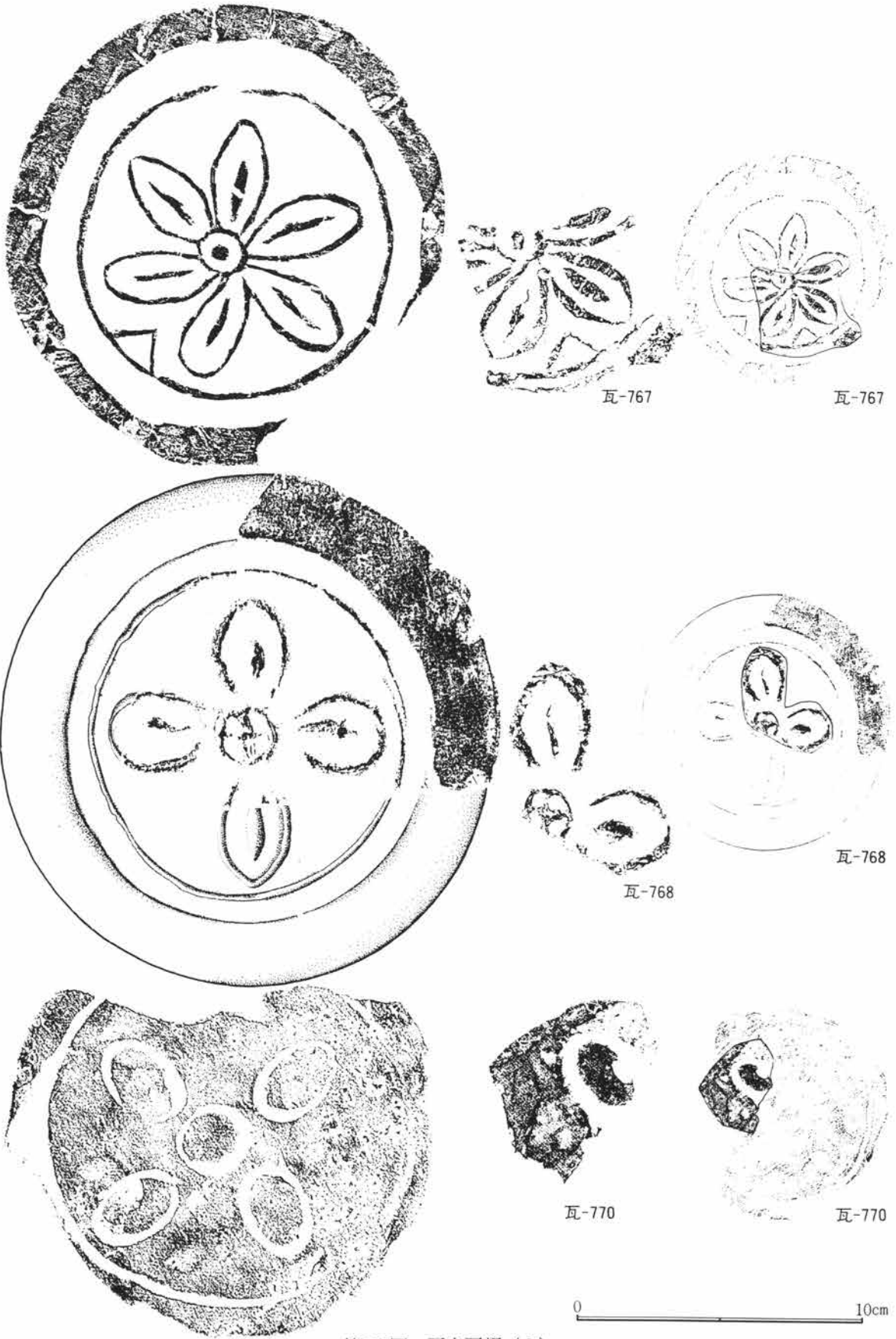


第565図 瓦当瓦類（6）

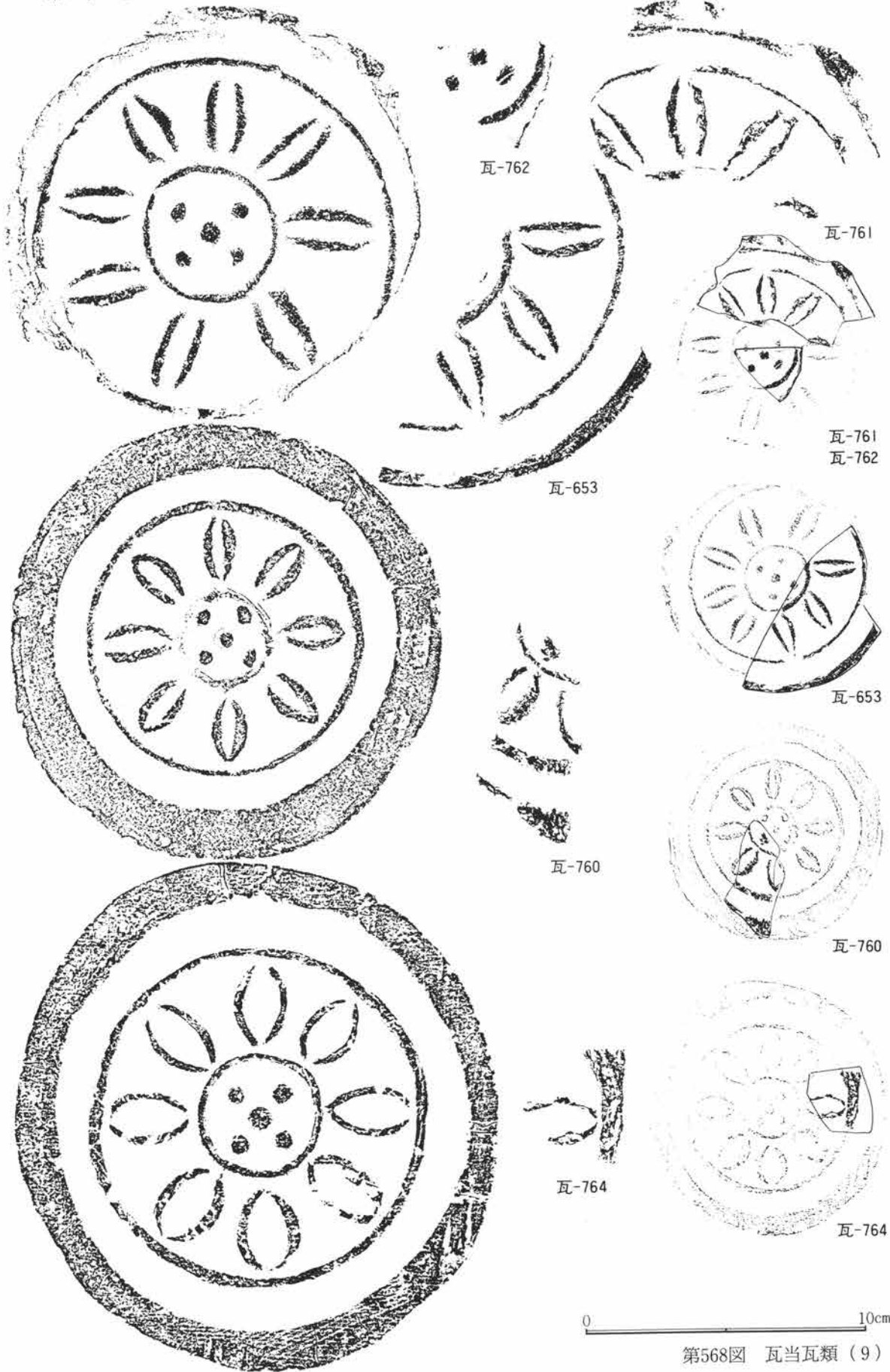


第566图 瓦当瓦類 (7)

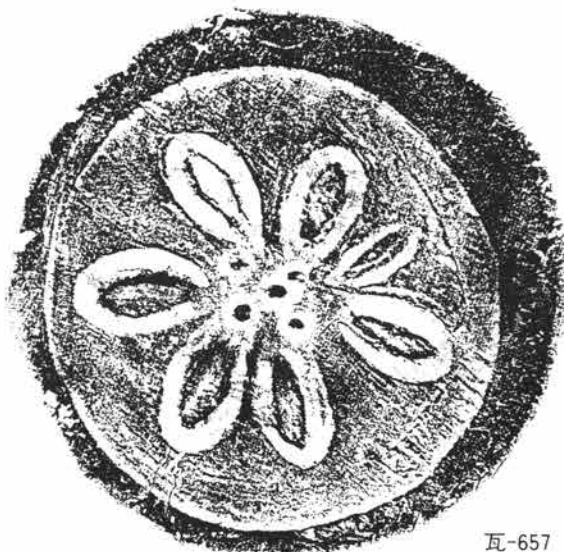
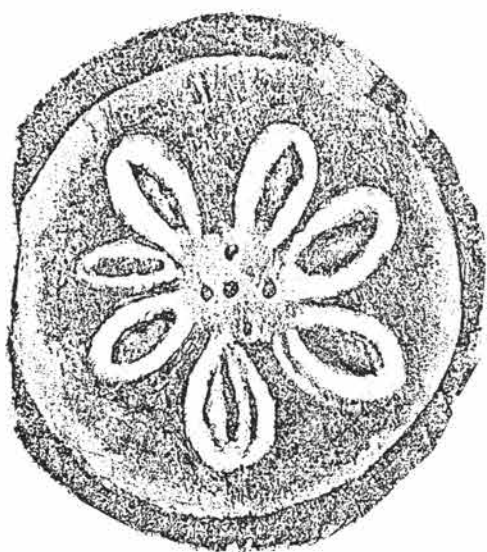
0 10cm



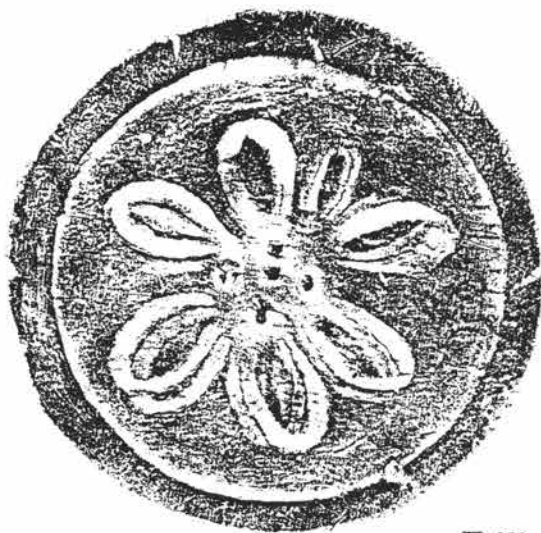
第567图 瓦当瓦類 (8)



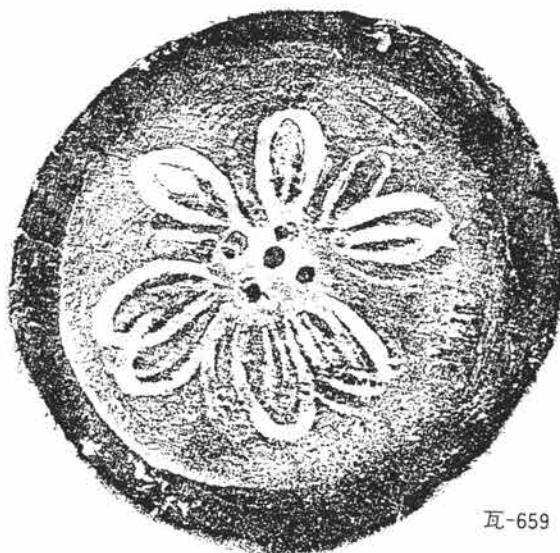
第568图 瓦当瓦類 (9)



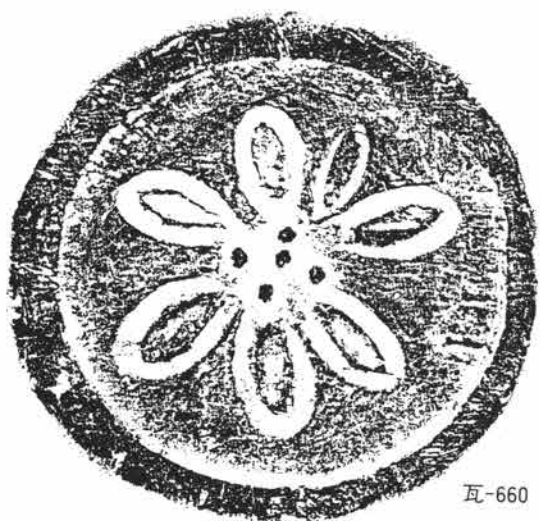
瓦-657



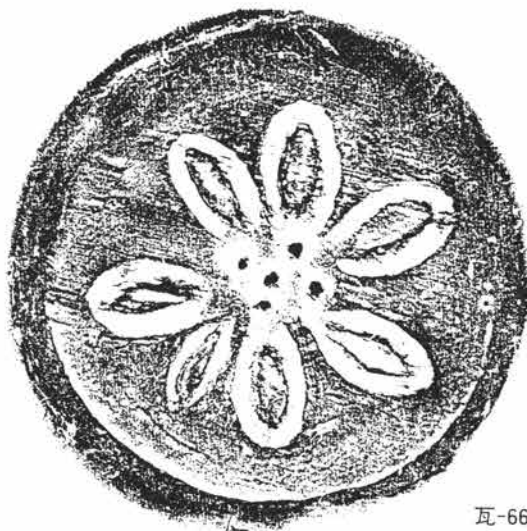
瓦-658



瓦-659

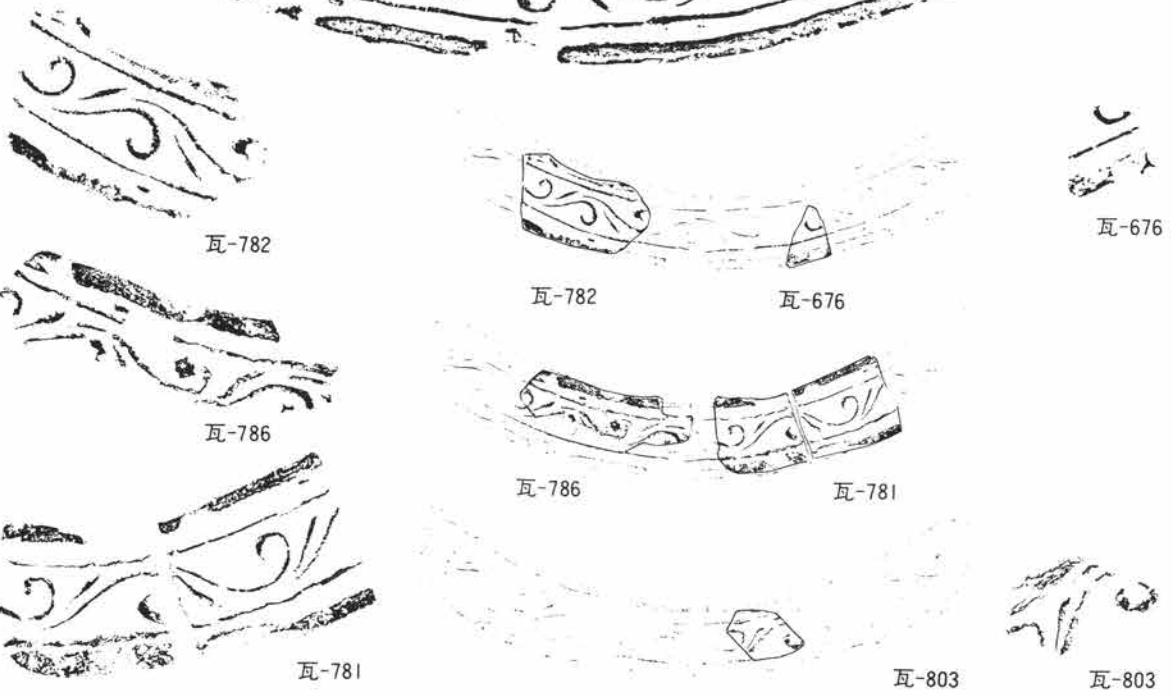
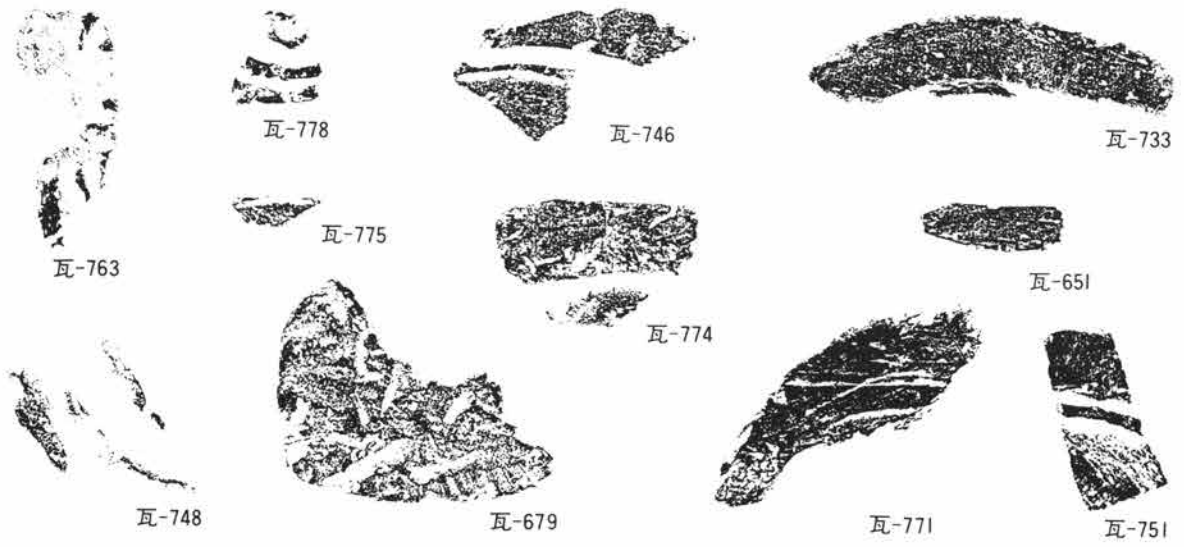


瓦-660



瓦-661

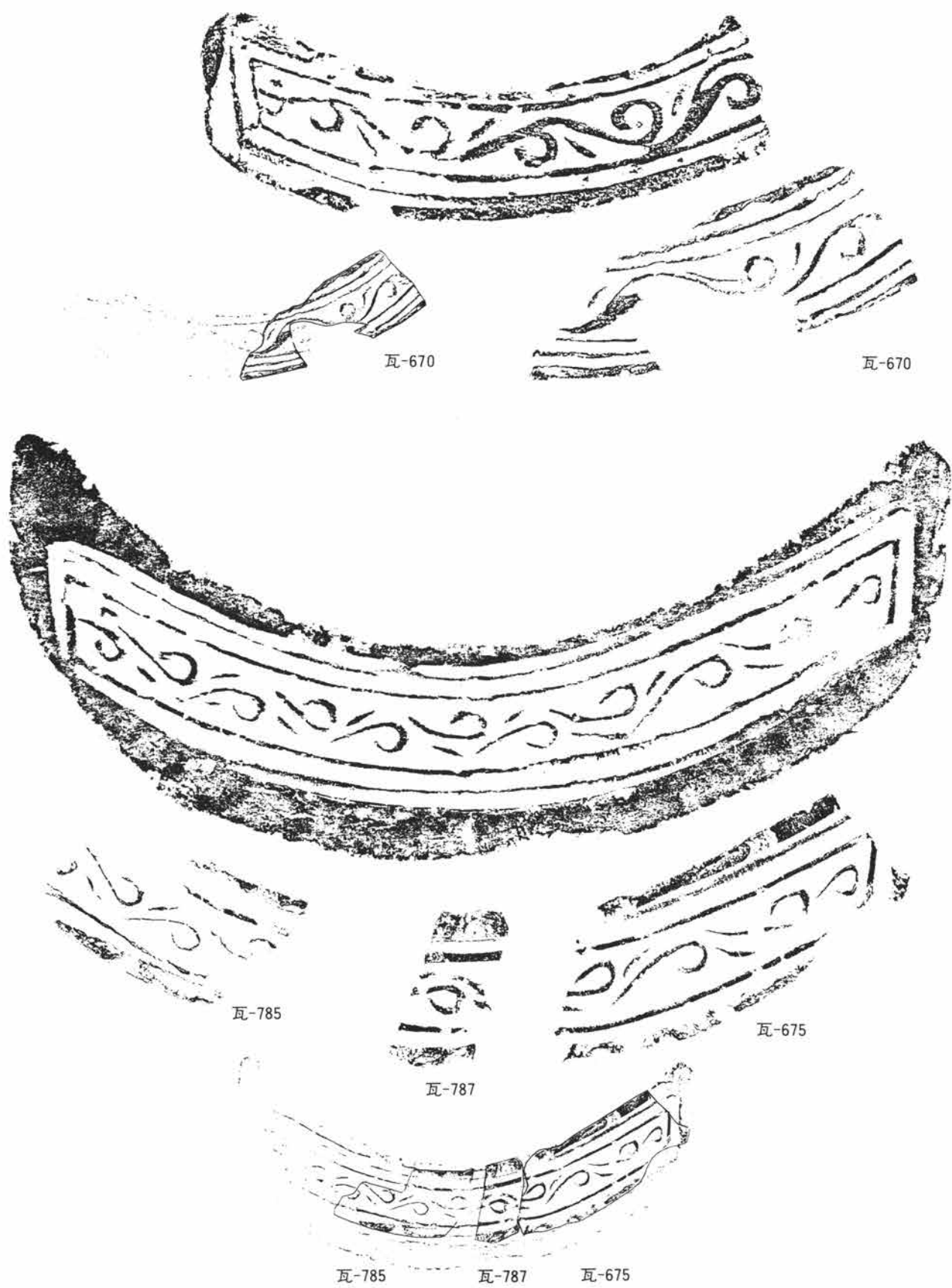
第569图 瓦当瓦類 (10) 0 10cm



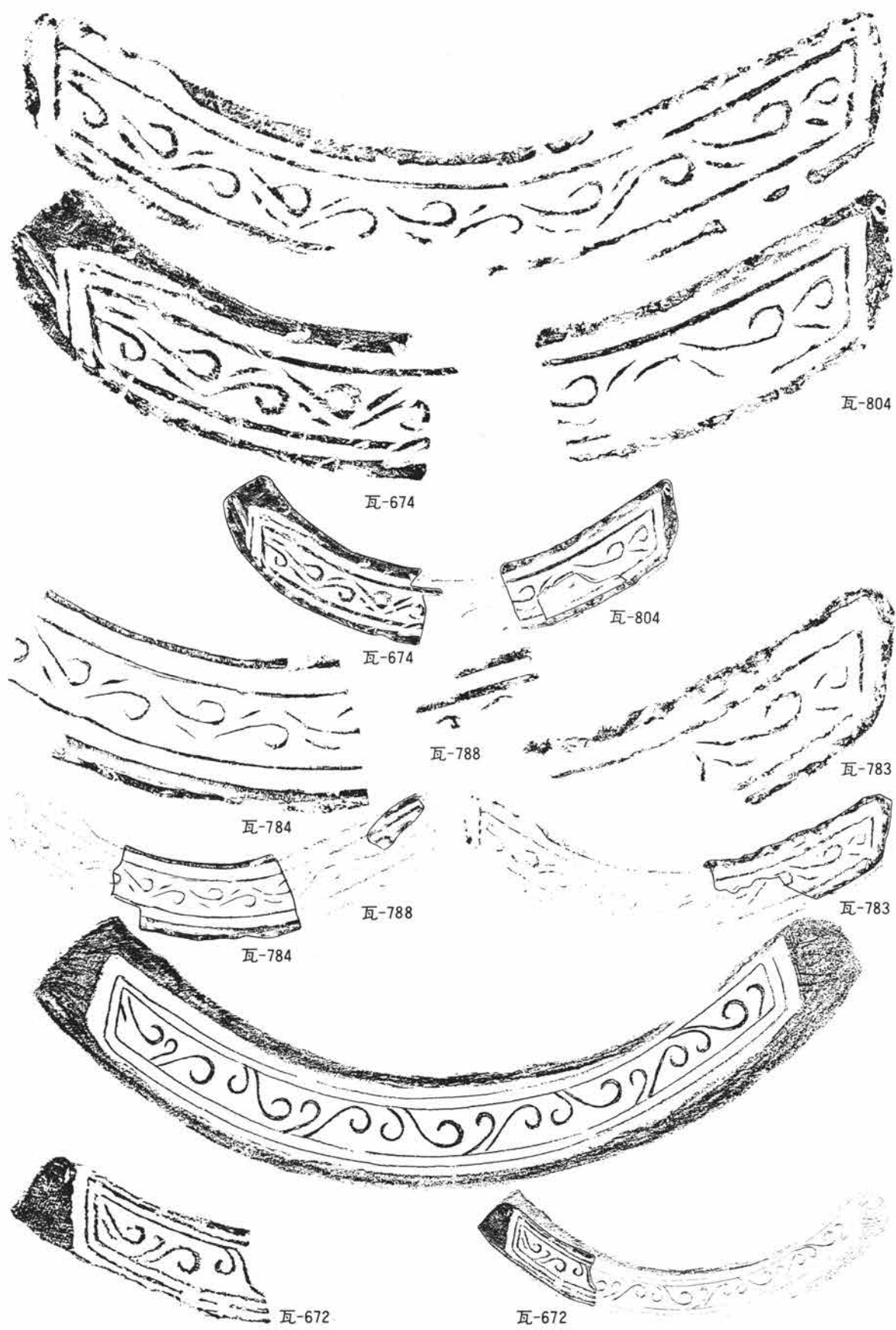
第570图 瓦当瓦類 (11)

0 10cm





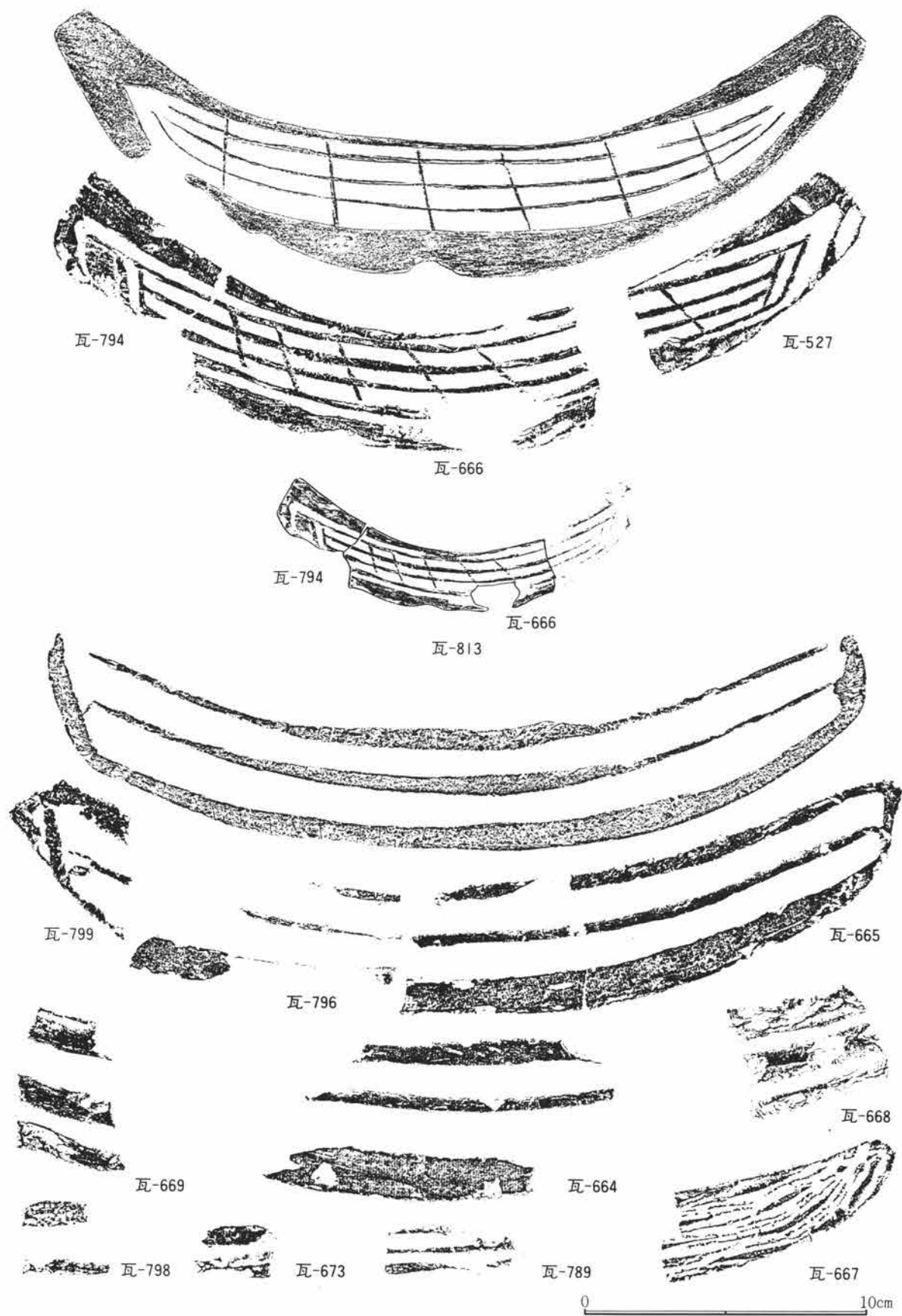
第571图 瓦当瓦類 (12)



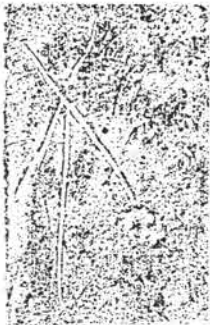
第572图 瓦当瓦類 (13)



第573图 瓦当瓦類 (14)

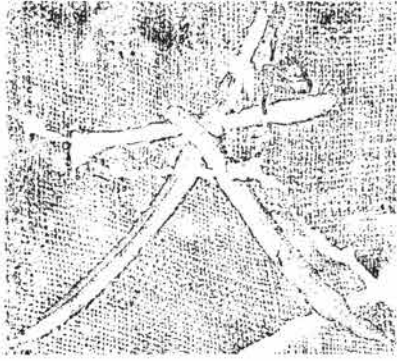



第574図 瓦当瓦類 (15)

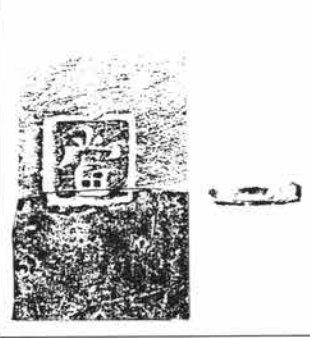
瓦-569	出土位置	B区49号住居	
挿図番号	17-1	写真図版	70
類	女	生産地	笠懸
			読 井
摘要	第4分冊掲載		
瓦-572	出土位置	B区49号住居	
挿図番号	16-11	写真図版	71
類	女	生産地	藤岡
			読 判読不能
摘要	第4分冊掲載		
瓦-573	出土位置	B区51号住居	
挿図番号	22-9	写真図版	72
類	男	生産地	吉井
			読 井
摘要	接合図539-1		
瓦-574	出土位置	B区52号住居	
挿図番号	24-2	写真図版	72
類	男	生産地	吉井
			読 記号か
摘要	接合図539-1		
瓦-575	出土位置	B区52号住居	
挿図番号	25-1	写真図版	74
類	女	生産地	笠懸
			読 不詳
摘要	笠懸系格子叩きには文字を伴う類例が多い。特に佐位郡郷が多い。瓦-636と同じ		
瓦-576	出土位置	B区53号住居	
挿図番号	30-1	写真図版	75
類	男	生産地	笠懸
			読 佐
摘要	佐位郡佐位郷をあらわす。		
瓦-577	出土位置	B区53号住居	
挿図番号	30-2	写真図版	76
類	女	生産地	吉井
			読 井
摘要			
瓦-578	出土位置	B区58号住居	
挿図番号	51-2	写真図版	82
類	男	生産地	笠懸
			読 佐
摘要	瓦-576に同じ。		
瓦-579	出土位置	B区76号住居	
挿図番号	83-1	写真図版	91
類	女	生産地	笠懸
			読 佐
摘要	瓦-576に同じ。 墨書「仇」を伴う。		

第575図 文字瓦類(1)

第5章 追 補

瓦-580		出土位置		B区77号住居	
挿図番号	88-3	写真図版	94		
類	女	生産地	秋間		
					読 大
<p>摘要 秋間系の文字瓦には「大」「木」等が多い。文字も大きく、先端が広い工具により描れる。</p>					

瓦-581		出土位置		B区78号住居	
挿図番号	100-3	写真図版	99		
類	男	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
<p>摘要</p>					

瓦-582		出土位置		B区78号住居	
挿図番号	101-2	写真図版	99		
類	★斗	生産地	藤岡		
					読 當
<p>摘要 「當」の意味は不詳。印の本体は金属と考えられている。</p>					

瓦-583		出土位置		B区78号住居	
挿図番号	103-1	写真図版	101		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
<p>摘要</p>					

瓦-584		出土位置		B区80号住居	
挿図番号	107-10	写真図版	105		
類	女	生産地	笠懸		
					読 子
<p>摘要</p>					

瓦-587		出土位置		B区89号住居	
挿図番号	130-3	写真図版	112		
類	女	生産地	吉井		
					読 辛 葛 守 か 辛 尊 守 か
<p>摘要 辛は多胡郡辛科郷をあらわす。</p>					

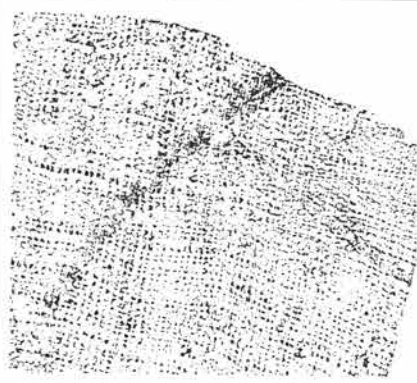
瓦-585		出土位置		B区85号住居	
挿図番号	118-13	写真図版	108		
類	男	生産地	吉井		
					読 千
<p>摘要</p>					

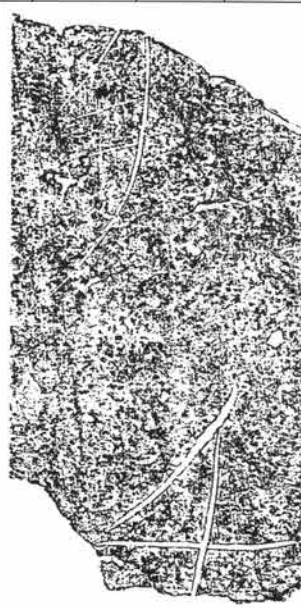
瓦-586		出土位置		B区87号住居	
挿図番号	126-6	写真図版	111		
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
<p>摘要 寛傷の可能性はある。</p>					


第576図 文字瓦類 (2)

瓦-588		出土位置		B区90号住居	
挿図番号		132-1	写真図版		112
類	男	生産地		吉井	
					読 判読不能
摘要	篋傷か。				


瓦-589		出土位置		B区96号住居	
挿図番号		153-1	写真図版		119
類	女	生産地		吉井	
					読 二か
摘要					


瓦-590		出土位置		B区96号住居	
挿図番号		153-2	写真図版		119
類	女	生産地		秋間	
					読 人か
摘要					

瓦-591		出土位置		B区127号住居	
挿図番号		167-3	写真図版		124
類	男	生産地		吉か寺	
					読 手千か
摘要					

瓦-592		出土位置		B区127号住居	
挿図番号		167-4	写真図版		124
類	男	生産地		吉・寺	
					読 判読不能
摘要	篋傷の可能性がある。				

瓦-593		出土位置		B区127号住居	
挿図番号		167-4	写真図版		124
類	男	生産地		吉・寺	
					読 管刺突
摘要					

瓦-594		出土位置		B区127号住居	
挿図番号		167-6	写真図版		124
類	女	生産地		吉井	
					読 判読不能
摘要					

瓦-595		出土位置		B区101号住居	
挿図番号		169-6	写真図版		124
類	男	生産地		吉井	
					読 壬か
摘要	壬生か。				

第577図 文字瓦類(3)

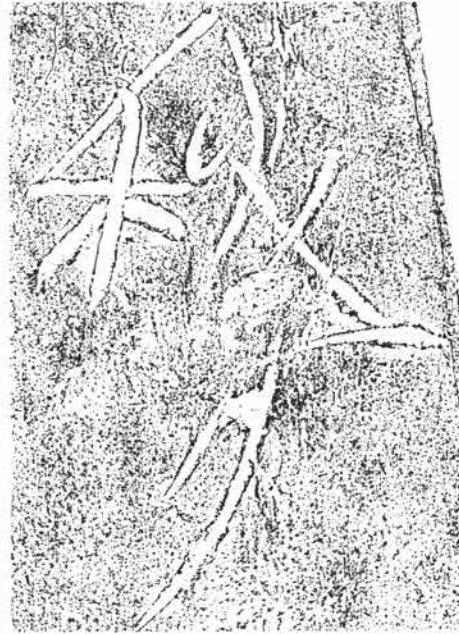
第5章 追 補

瓦-596	出土位置	B区106号住居	
挿図番号	178-1	写真図版	128
類	女	生産地	吉井
			説 判読不能
摘要			

瓦-597	出土位置	B区112号住居	
挿図番号	186-13	写真図版	131
類	女	生産地	吉井
			説 山成
摘要	山は多胡郡山字郷をあわわす。		

瓦-599	出土位置	B区117号住居	
挿図番号	197-3	写真図版	134
類	女	生産地	吉井
			説 判読不能
摘要	「見」か。		




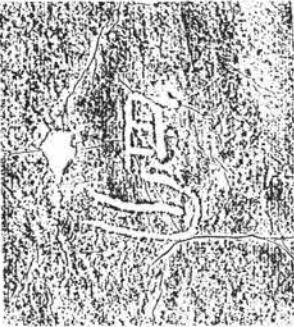
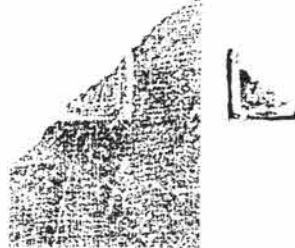



瓦-600	出土位置	B区118号住居	
挿図番号	202-1	写真図版	136
類	女	生産地	吉井
			説 武美子
摘要	武美は多胡郡武美郷をあらわす。		

瓦-598	出土位置	B区116号住居	
挿図番号	196-1	写真図版	133
類	女	生産地	
			説 秋 夕
摘要	「秋」の同一筆致には「夕」と思われる文字がある。		

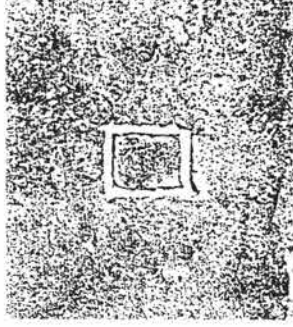
瓦-601	出土位置	B区118号住居	
挿図番号	204-1	写真図版	135
類	女	生産地	藤岡
			説 當
摘要	瓦-582に同じ。		

第578図 文字瓦類(4)




瓦-602		出土位置		B区120号住居	
挿図番号		209-13		写真図版	
				138	
類		女		生産地	
				吉井	
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-603		出土位置		B区122号住居	
挿図番号		214-1		写真図版	
				139	
類		男		生産地	
				吉井	
					読 上
摘要					
瓦-604		出土位置		B区122号住居	
挿図番号		214-2		写真図版	
				140	
類		女		生産地	
				吉井	
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-605		出土位置		B区122号住居	
挿図番号		214-3		写真図版	
				140	
類		女		生産地	
				吉井	
					読 馬
摘要					
瓦-606		出土位置		B区126号住居	
挿図番号		232-2		写真図版	
				145	
類		女		生産地	
				吉井	
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-607		出土位置		B区126号住居	
挿図番号		232-3		写真図版	
				145	
類		女		生産地	
				秋間	
					読 大 か
摘要					
瓦-608		出土位置		B区128号住居	
挿図番号		236-1		写真図版	
				147	
類		女		生産地	
				吉井	
					読 平
摘要					
瓦-609		出土位置		B区130号住居	
挿図番号		242-8		写真図版	
				149	
類		女		生産地	
				笠懸	
					読 山 田
摘要					
山田郡をあらわす。					

第579図 文字瓦類 (5)

瓦-610		出土位置		B区131号住居	
挿図番号		244-11		写真図版	
				149	
類		男		生産地	
				吉井	
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-611		出土位置		B区132号住居	
挿図番号		247-1		写真図版	
				151	
類		男		生産地	
				藤岡	
					読 入
摘要					
瓦-612		出土位置		B区135号住居	
挿図番号		254-5		写真図版	
				152	
類		男		生産地	
				乗附	
					読 口
摘要					
記号か。					
瓦-613		出土位置		B区136号住居	
挿図番号		258-4		写真図版	
				154	
類		女		生産地	
				笠懸	
					読 山 田 か
摘要					
山田郡の郡銘瓦か。					
瓦-614		出土位置		B区144号住居	
挿図番号		276-5		写真図版	
				157	
類		女		生産地	
				吉井	
					読 辛 左 文 字
摘要					
瓦-587に同じ。					
瓦-615		出土位置		B区145号住居	
挿図番号		278-18		写真図版	
				159	
類		女		生産地	
				藤岡	
					読 當 平
摘要					
「當」の印と窠描き文字の併記は多い。					
瓦-616		出土位置		B区158号住居	
挿図番号		292-3		写真図版	
				162	
類		女		生産地	
				吉井	
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-617		出土位置		B区158号住居	
挿図番号		292-4		写真図版	
				162	
類		女		生産地	
				吉井	
					読 夫 か
摘要					
瓦-618		出土位置		B区162号住居	
挿図番号		302-2		写真図版	
				165	
類		男		生産地	
				吉井	
					読 十
摘要					

第580図 文字瓦類(6)


瓦-619	出土位置	A区21号住居	
挿図番号	339-2	写真図版	175
類	男	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要			

瓦-620	出土位置	A区21号住居	
挿図番号	339-4	写真図版	175
類	女	生産地	吉井
			読 山物部乙万呂
摘要	山は多胡郡山字郷をあらわす。女は万呂の異体字。		


瓦-621	出土位置	A区155号住居	
挿図番号	355-7	写真図版	177
類	女	生産地	吉井
			読 木
摘要			


瓦-622	出土位置	A区155号住居	
挿図番号	355-8	写真図版	177
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要			

瓦-623	出土位置	A区156号住居	
挿図番号	357-6	写真図版	179
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要			

瓦-624	出土位置	A区159号住居	
挿図番号	367-1	写真図版	180
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要			

瓦-625	出土位置	A区161号住居	
挿図番号	371-13	写真図版	181
類	女	生産地	笠懸
			読 判読不能
摘要			


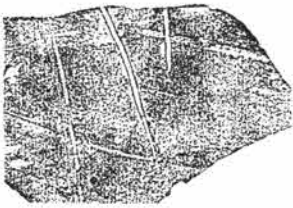
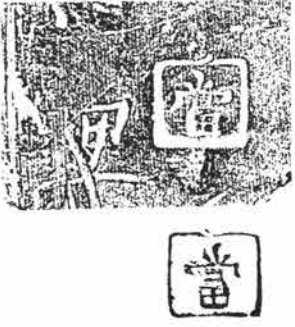






瓦-626	出土位置	A区164号住居	
挿図番号	376-6	写真図版	183
類	女	生産地	吉井
			読 判読不能
摘要			

瓦-627	出土位置	A区166号住居	
挿図番号	382-12	写真図版	185
類	女	生産地	吉・藤
			読 判読不能
摘要			

第581図 文字瓦類 (7)









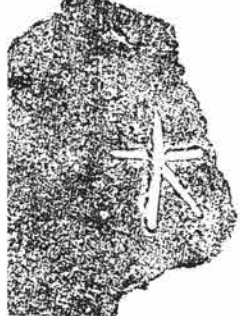
瓦-628	出土位置	A区174号住居	
挿図番号	387-1	写真図版	186
類	女	生産地	吉井
			読 山字郷
摘要	多胡郡山字郷の郷銘。		
瓦-629	出土位置	A区175号住居	
挿図番号	389-3	写真図版	187
類	男	生産地	吉・藤
			読 方
摘要	窠描き。		
瓦-630	出土位置		
挿図番号	389-3	写真図版	187
類	男	生産地	吉・藤
			読 方
摘要	押印。		
瓦-631	出土位置	A区187号住居	
挿図番号	422-1	写真図版	198
類	男	生産地	吉井
			読 千
摘要			
瓦-632	出土位置	A区187号住居	
挿図番号	423-1	写真図版	198
類	女	生産地	吉井
			読 山
摘要			
瓦-633	出土位置	A区202号住居	
挿図番号	457-9	写真図版	207
類	女	生産地	吉か乗
			読 判読不能
摘要			
瓦-634	出土位置	A区202号住居	
挿図番号	457-10	写真図版	207
類	女	生産地	乗か吉
			読 山浄万呂
摘要	山は多胡郡山字郷をあらわす。女は瓦-620と同じ。		
瓦-635	出土位置	A区202号住居	
挿図番号	458-1	写真図版	208
類	男	生産地	吉井
			読 入木
摘要			
瓦-636	出土位置	B区4号井戸	
挿図番号	476-4	写真図版	214
類	女	生産地	笠懸
			読 檜か
摘要	現在読み方は不詳。佐位郡に係わると思われる。		

第582図 文字瓦類(8)

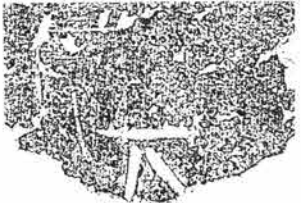

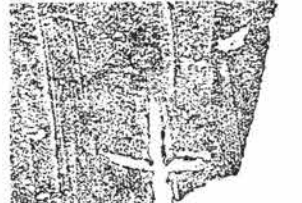






瓦-637		出土位置		B区4号井戸	
挿図番号		476-5	写真図版		214
類	女	生産地		笠懸	
					読 判読不能
摘要					
瓦-638		出土位置		B区4号井戸	
挿図番号		476-6	写真図版		214
類	男	生産地		秋間	
					読 判読不能
摘要					
瓦-639		出土位置		B区4号井戸	
挿図番号		476-7	写真図版		214
類	男	生産地		藤岡	
					読 當里
摘要					
瓦-640		出土位置		B区4号井戸	
挿図番号		476-8	写真図版		214
類	女	生産地		吉井	
					読 子枚男
摘要					
瓦-677		出土位置		B区外(46-B-40II層)	
挿図番号		531-4	写真図版		240
類	男	生産地		乗附	
					読 秋か
摘要					
瓦-678		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		531-5	写真図版		240
類	女	生産地		秋間	
					読 判読不能
摘要 夕か大の末。					
瓦-679		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		531-6	写真図版		240
類	女	生産地		秋間	
					読 判読不能
摘要					
瓦-680		出土位置		B区外(V層)	
挿図番号		531-7	写真図版		240
類	女	生産地		乗附	
					読 入
摘要					
瓦-681		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		531-9	写真図版		240
類	女	生産地		吉井	
					読 長一
摘要					

第583図 文字瓦類(9)

第5章 追 補


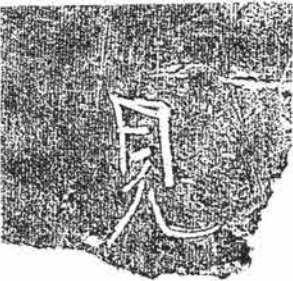



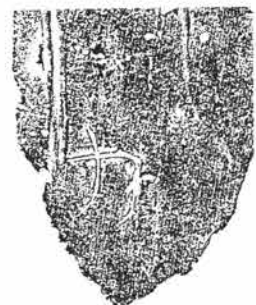



瓦-682		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号	532-1	写真図版	240		
類	女	生産地	吉か藤		
					読 子葛か
摘要					
瓦-683		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号	532-2	写真図版	240		
類	女	生産地	吉井		
					読 多か
摘要					
瓦-684		出土位置		B区外(38-B-30Ⅲ層)	
挿図番号	532-3	写真図版	240		
類	女	生産地	吉井		
					読 織
摘要 織は、多胡郡織裳郷をあらわす。					
瓦-685		出土位置		B区外(40-B-42)	
挿図番号	532-4	写真図版	240		
類	男	生産地	吉井		
					読 織
摘要 瓦-684に同じ。					
瓦-686		出土位置		B区外(5号井戸)	
挿図番号	532-5	写真図版	240		
類	女	生産地	吉井		
					読 尼か尾か
摘要 緑野郡尾張郷か。					
瓦-687		出土位置		B区外(41-B-42)	
挿図番号	532-6	写真図版	240		
類	男	生産地	吉井		
					読 當
摘要					
瓦-688		出土位置		B区外(3号井戸)	
挿図番号	532-7	写真図版	241		
類	男	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要					
瓦-689		出土位置		B区外(B-41Ⅲ層)	
挿図番号	532-8	写真図版	240		
類	女	生産地	吉井		
					読 力
摘要					
瓦-690		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号	533-1	写真図版	241		
類	女	生産地	吉井		
					読 大か下
摘要					

第584図 文字瓦類 (10)

瓦-691	出土位置	B区外	
挿図番号	533-2	写真図版	241
類	男	生産地	吉井
			読 下
摘要			
瓦-692	出土位置	B区外(45-BⅢ層)	
挿図番号	533-3	写真図版	241
類	女	生産地	吉井
			読 十
摘要			
瓦-693	出土位置	B区外(Ⅲ層)	
挿図番号	533-4	写真図版	241
類	女	生産地	吉井
			読 十 か
摘要			
瓦-694	出土位置	B区外(表土)	
挿図番号	533-5	写真図版	241
類	男	生産地	吉井
			読 児 か 真 か
摘要			
瓦-695	出土位置	B区外(Ⅲ層)	
挿図番号	533-6	写真図版	241
類	女	生産地	吉井
			読 真
摘要			
瓦-696	出土位置	B区外(表土)	
挿図番号	533-7	写真図版	241
類	女	生産地	吉か藤
			読 山 か 三 か
摘要	筧傷も考慮される。		
瓦-697	出土位置	B区外(表土)	
挿図番号	533-8	写真図版	241
類	女	生産地	吉・藤
			読 山
摘要			
瓦-698	出土位置	B区外(Ⅳ-B-4)	
挿図番号	533-9	写真図版	241
類	女	生産地	吉井
			読 山
摘要	多胡郡山字郷をあらわすか。		
瓦-699	出土位置	B区外(35-B-46Ⅲ層)	
挿図番号	533-10	写真図版	241
類	女	生産地	吉井
			読 入 か
摘要			





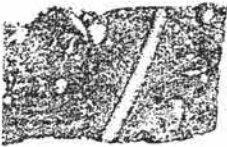

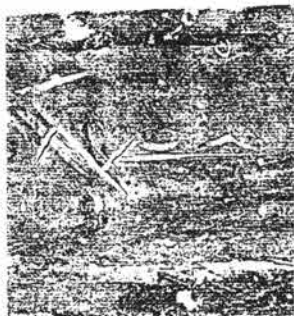


第585図 文字瓦類 (11)

第5章 追 補

瓦-700		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		534-1		写真図版	
				241	
類	女	生産地	吉井		
					読 見か児
摘要					
瓦-701		出土位置		B区外(畠状遺構)	
挿図番号		534-2		写真図版	
				241	
類	女	生産地	吉井		
					読 見
摘要					
瓦-702		出土位置		B区外(41-B-42)	
挿図番号		534-3		写真図版	
				241	
類	男	生産地	吉井		
					読 里か黒か
摘要					
瓦-703		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		534-4		写真図版	
				242	
類	女	生産地	笠懸		
					読 判読不能
摘要					
瓦-704		出土位置		B区外(II層)	
挿図番号		534-5		写真図版	
				242	
類	女	生産地	笠懸		
					読 判読不能
摘要 罅傷の可能性がある。					
瓦-705		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		534-6		写真図版	
				241	
類	女	生産地	笠懸		
					読 力
摘要					
瓦-706		出土位置		B区外	
挿図番号		534-7		写真図版	
				241	
類	女	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要					
瓦-707		出土位置		B区外(VII)	
挿図番号		534-8		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 子か
摘要					
瓦-708		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		534-9		写真図版	
				242	
類	男	生産地	吉井		
					読 判読不能
摘要					




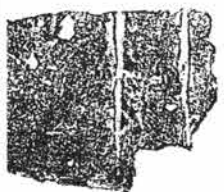



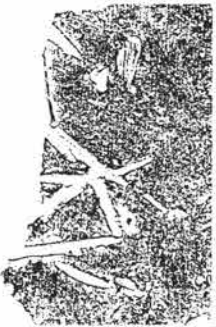
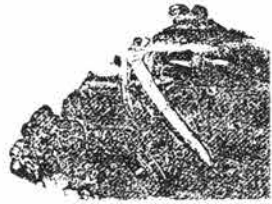
第586図 文字瓦類 (12)



瓦-709		出土位置		B区外(II層)	
挿図番号		534-10		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉か藤		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-710		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		534-11		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-711		出土位置		B区外(35-B-32北III層)	
挿図番号		534-12		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉か藤		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-712		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		534-13		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 十 か 木 か
摘要					
瓦-713		出土位置		B区外(II層)	
挿図番号		534-14		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-714		出土位置		B区外(42-B-33)	
挿図番号		535-1		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-715		出土位置		B区外(40-B-29III層)	
挿図番号		535-2		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉か藤		
					読 記 号 か
摘要					
瓦-716		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		535-3		写真図版	
				242	
類	男	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-717		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		535-4		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 武
摘要					
多胡郡武美郷をあらわす。					

第587図 文字瓦類(13)

第5章 追 補

瓦-718		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		535-5		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉か藤		
					読 判 読 不 能
摘 要	篋傷か。				
瓦-719		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		535-6		写真図版	
				242	
類	女	生産地	笠懸		
					読 判 読 不 能
摘 要					
瓦-720		出土位置		B区外(30-B-35)	
挿図番号		535-7		写真図版	
				242	
類	男	生産地	吉井		
					読 記 号 か
摘 要					
瓦-721		出土位置		B区外(VII)	
挿図番号		535-8		写真図版	
				242	
類	男	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
摘 要					
瓦-722		出土位置		B区外(46-B-35III層)	
挿図番号		535-9		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘 要	「武」の異体字か				
瓦-723		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		535-10		写真図版	
				242	
類	熨斗か	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘 要					
瓦-724		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		535-11		写真図版	
				242	
類	女	生産地	乗附		
					読 判 読 不 能
摘 要	篋傷か。				
瓦-725		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		535-12		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘 要					
瓦-726		出土位置		B区外	
挿図番号		535-13		写真図版	
				242	
類	女	生産地	笠懸		
					読 判 読 不 能
摘 要					




第588図 文字瓦類(14)

瓦-727		出土位置		B区外(40-B-42)	
挿図番号		535-14		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-728		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		535-15		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-729		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		535-16		写真図版	
				242	
類	女	生産地	吉井		
					読 判 読 不 能
摘要					
瓦-730		出土位置		B区外(43-B-37III層)	
挿図番号		536-1		写真図版	
				243	
類	女	生産地	笠懸		
					読 勢
摘要 勢多郡をあらわす。					
瓦-731		出土位置		B区外(III層)	
挿図番号		536-2		写真図版	
				242	
類	女	生産地	笠懸		
					読 記 号
摘要					
瓦-732		出土位置		B区外(43-B-37)	
挿図番号		536-3		写真図版	
				242	
類	女	生産地	笠懸		
					読 山 田
摘要 山田郡蘭田郷をあらわす。					
瓦-733		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		536-4		写真図版	
				242	
類	女	生産地	笠懸		
					読 蘭 門
摘要 瓦-732に同じ。					
瓦-734		出土位置		B区外(表土)	
挿図番号		536-5		写真図版	
				242	
類	女	生産地	笠懸		
					読 佐 位 左 文 字
摘要 佐位郡佐位郷をあらわす。雀の2回目以上の彫り直し。					
瓦-735		出土位置		B区外(V表土)	
挿図番号		536-6		写真図版	
				243	
類	女	生産地	笠懸		
					読 山 田
摘要 山田郡の郡銘瓦。瓦-609に同じ。					

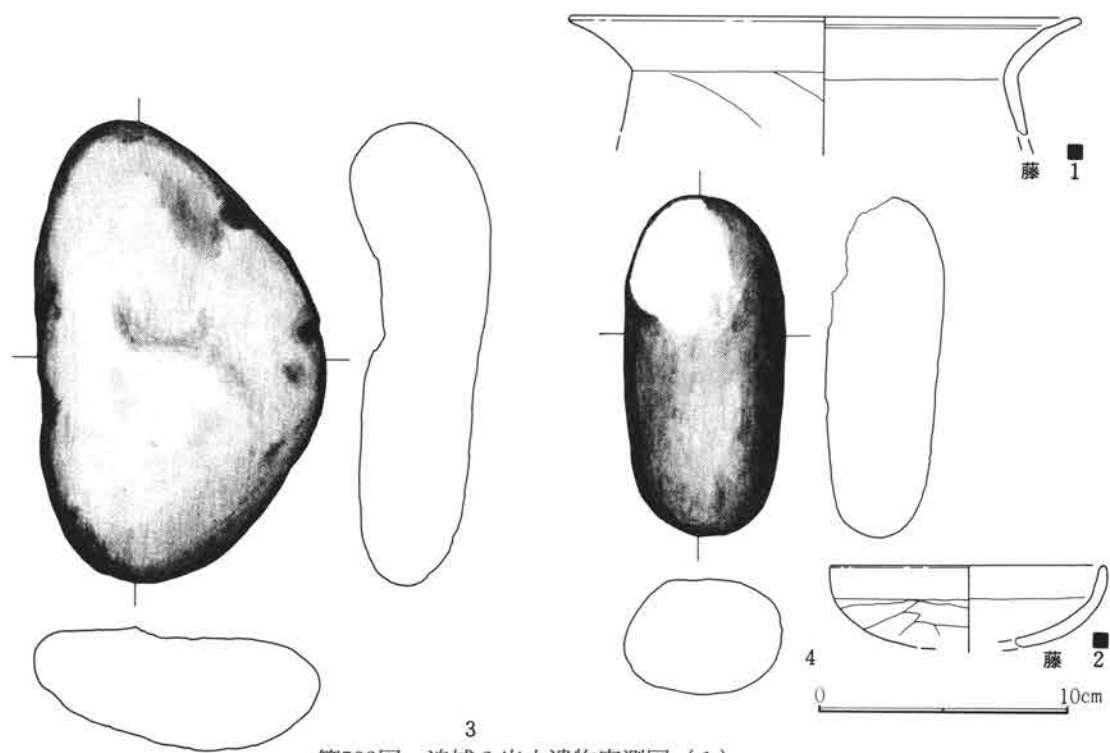
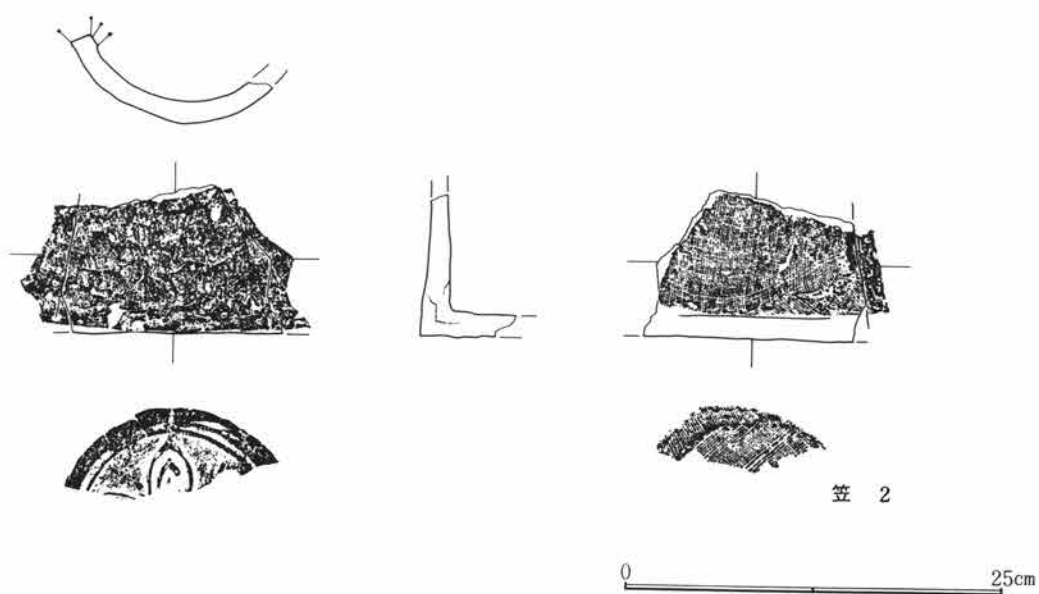
第589図 文字瓦類 (15)

瓦-736	出土位置	B区外 (V表土)	
挿図番号	536-7	写真図版	243
類	女	生産地	笠懸
			読 記号か
摘要			
瓦-737	出土位置	B区外 (表土)	
挿図番号	536-7	写真図版	243
類	女	生産地	吉井
			読 大多
摘要	大は多胡郡大家郷をあらわす。		
瓦-738	出土位置	B区外 (III層)	
挿図番号	536-8	写真図版	243
類	女	生産地	吉井
			読 方
摘要			
瓦-739	出土位置	B区外 (30-B-35)	
挿図番号	536-9	写真図版	243
類	女	生産地	吉・藤
			読 當・大
摘要			
瓦-740	出土位置	B区外 (表土)	
挿図番号	536-10	写真図版	243
類	女	生産地	吉井
			読 山
摘要			
瓦-741	出土位置	B区外 (表土)	
挿図番号	536-11	写真図版	243
類	男	生産地	吉井
			読 乙
摘要			
瓦-742	出土位置	僧寺南門附近表採	
挿図番号	528-17	写真図版	238
類	女	生産地	吉井
			読 子二
摘要	「子」に続く「二」の外に「三」「王」が知られている。この「三」・「王」は「二」の追影による。		
瓦-810	出土位置	B区56号住居	
挿図番号	41-15	写真図版	79
類	女	生産地	笠懸
			読
摘要	吉井産の場合は「武」と判読されるが、本例は不分明。		

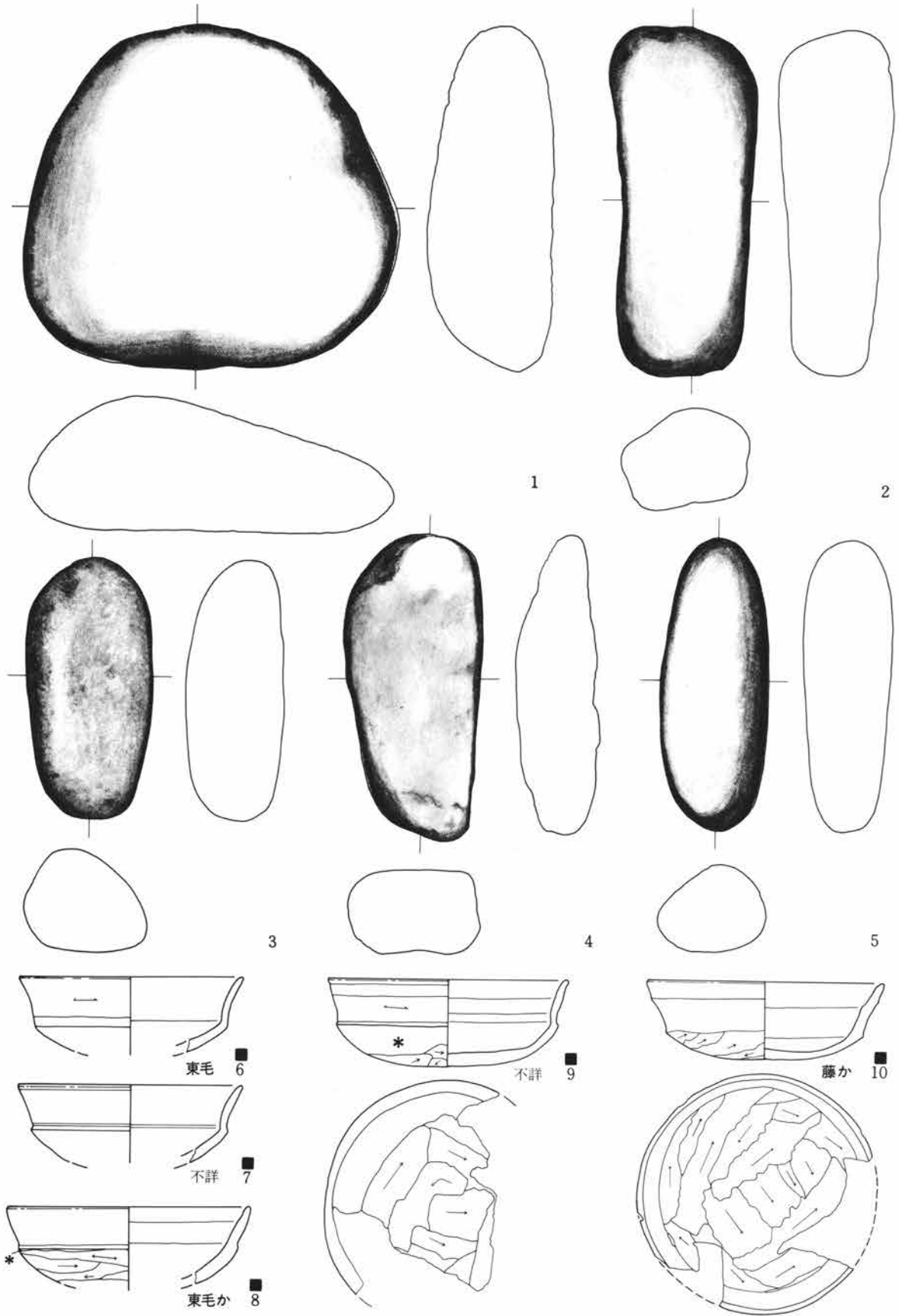
第590図 文字瓦類 (16)

瓦-811		出土位置		B区58号住居	
挿図番号		52-4		写真図版	
				82	
類		女		生産地	
				秋間	
					読 判 読 不 能
<p>摘要</p>					
瓦-814		出土位置		A区176号住居	
挿図番号		392-8		写真図版	
				188	
類		女		生産地	
				吉井	
					読
<p>摘要</p> <p>次の瓦-815と同一個体乃至生産地が同一と考えられる個体。紐作り成形で宛具に青海波文を用いる。</p>					
瓦-815		出土位置		B区外(土城)	
挿図番号		530-5		写真図版	
				239	
類		女		生産地	
				吉井	
					読
<p>摘要</p> <p>瓦-814と同。本例の類例に東馬庭遺跡(推定多胡郡衙)周辺での散布が知られている。(川原嘉久治氏表採)東馬庭遺跡からは、複弁7葉蓮華文の鏡瓦が採集されており、山王・秋間系の第3段階の瓦でもあり8世紀前半代に比定される。</p>					

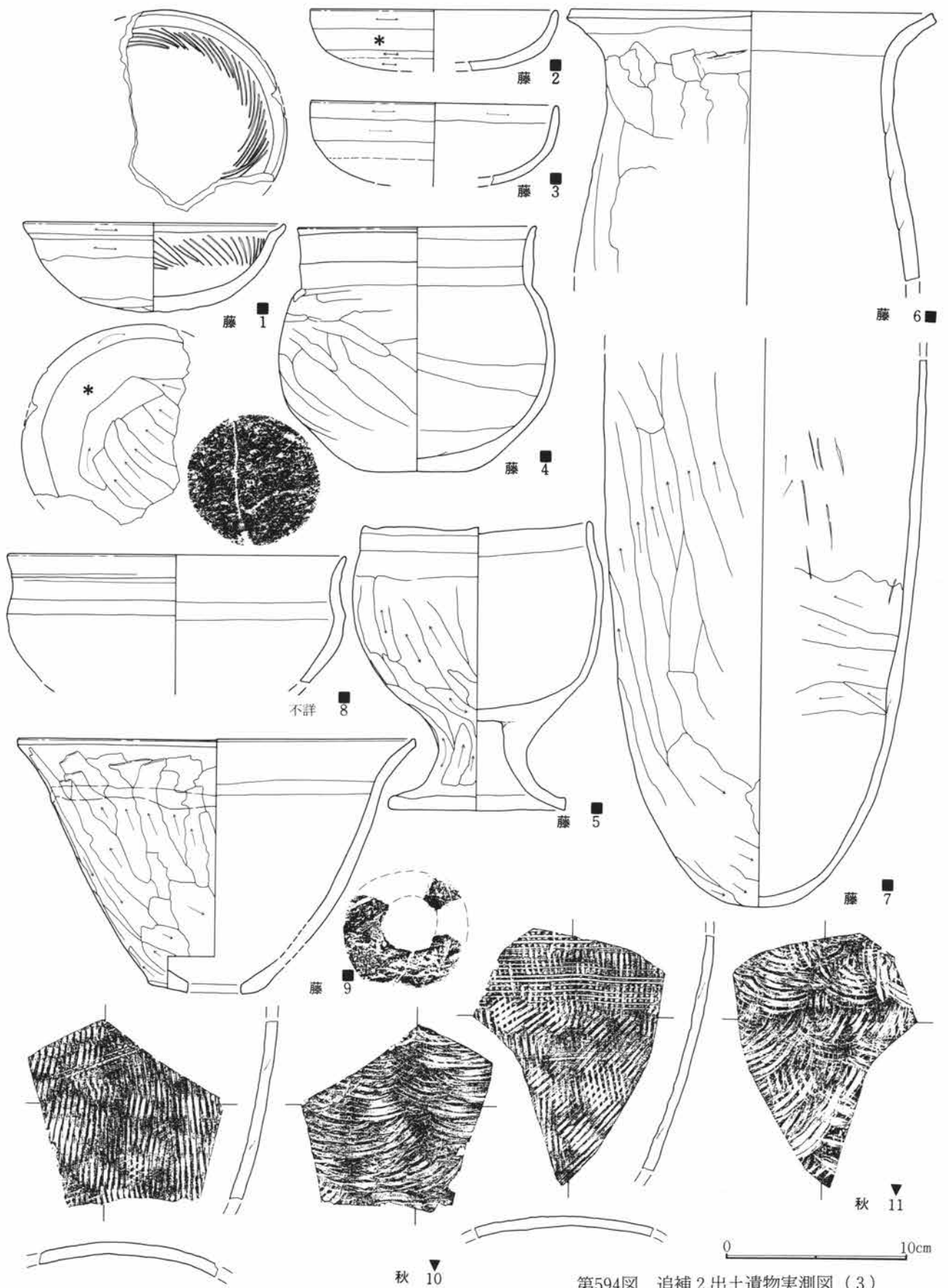
第591図 文字瓦類(17)



第592図 追補 2 出土遺物実測図 (1)

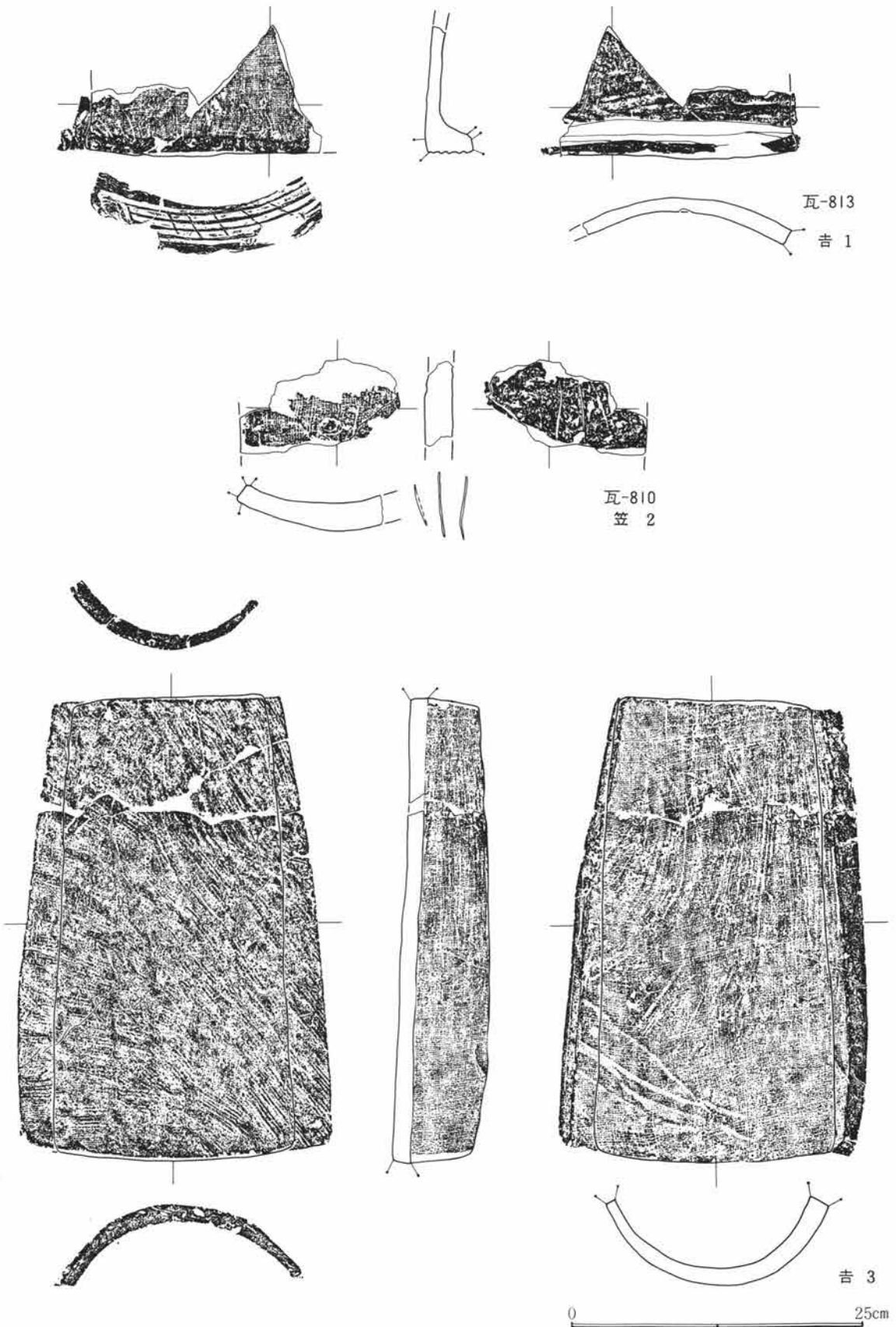


第593図 追補2 出土遺物実測図(2)

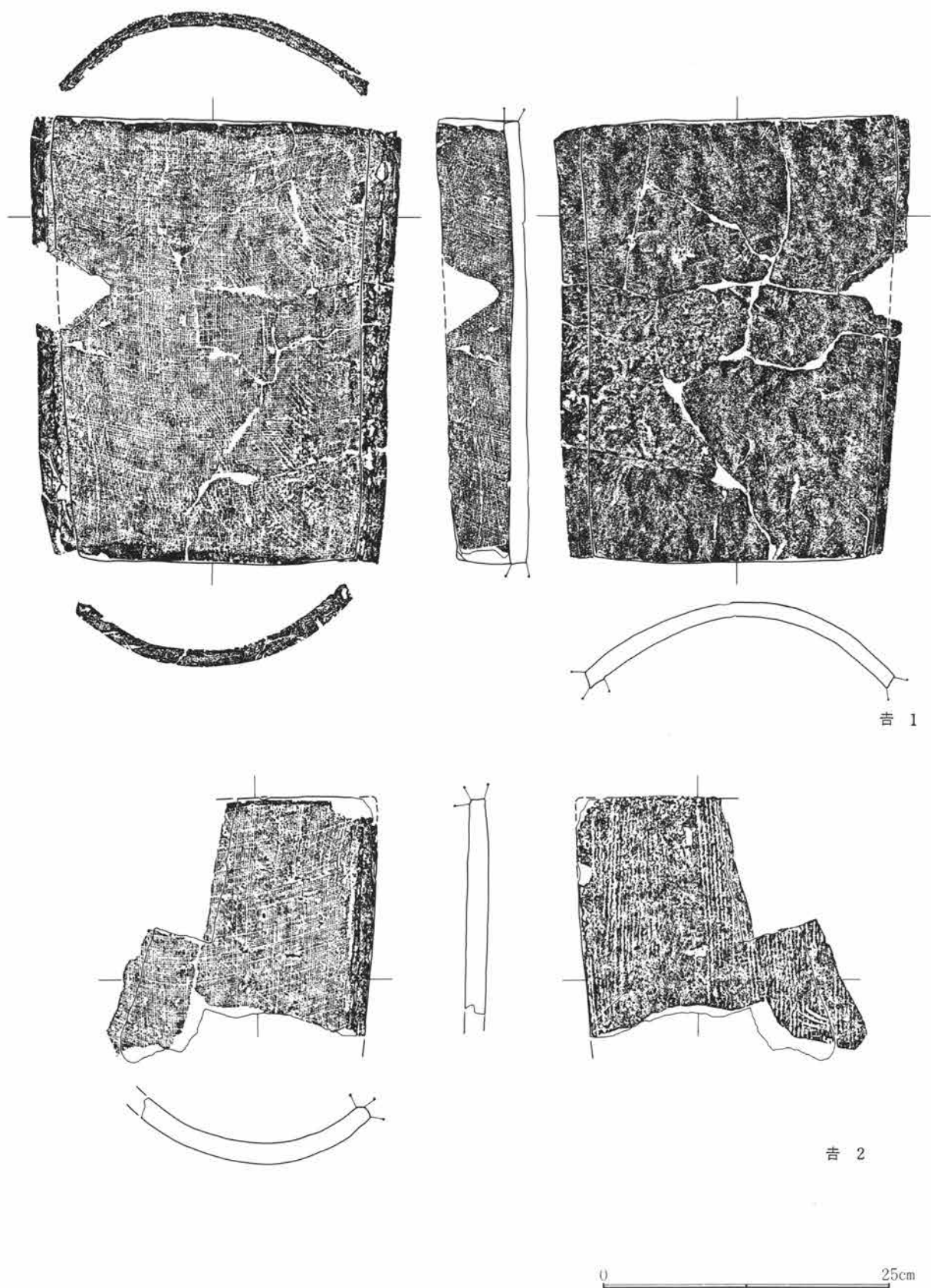


第594図 追補 2 出土遺物実測図 (3)





第595図 追補 2 出土遺物実測図 (4)



第596図 追補 2 出土遺物実測図 (5)

## 第6章 まとめ

### 第1節 住居跡

#### 第1項 A・B区検出の住居跡とその出土遺物

##### はじめに

今次の報告で掲載したA・B区の住居跡は188軒である。これらの内28軒を除いた160軒は、個別の住居跡の遺存状態は別にしても、住居の形状が把握出来るものである。これらの住居跡は、概ね6世紀後半から11世紀前半頃の約550年間に亘り構築されたものである。

ここでは、検出された住居跡を比較形式学的観点から種別・分類を行い、さらにそれらを序列し、相対年代を付加することにより編年することを目的の一部とする。この作業は、検出された住居跡群をどのように理解するか、出土遺物のみの年代観だけでは、各住居跡の存続期間の推定・新旧住居間の係わりが不明であることから、このことを解決する一方法として用い、上述の2点を可能な限り分明にしたいと考えるが、後年の多くの調査区の整理業務が継続するため結論的な事は後年に期すると考えている。

検出された住居跡の形状は四角形を基調とする様々な形状とも言い得るものであるが、各住居跡の細部を対比検討することにより種類の種分け・分類が出来た。以下A・B区で検出された住居跡について遺物を含めまとめてみたい。

住居跡は、四角形基調の正方形・長方形と両者の中間様の矩形と長方形での二者（主軸と長辺との関係）を含めた四者、則ち、4分類が基本形態を形成する。しかし、細部では上述四者の分類に於いて分類出来るものではない。このことより細部での状況を加味せねばならない。この細部の状況がカマド・傍竈坑である。このカマドは、その形状・構築位置であり、傍竈坑はその有無により加味されるものである。

第4分冊では、第3分冊での所見に基づき検出された住居跡を形状等の特徴によりI～X段階に分類序列し、更に、この各段階に該当する住居跡の出土遺物の中で、“一括性”の認められる遺物を抽出し、住居跡の各段階及び、それに伴う遺物組成を考述し、更に、各段階の遺物の中で、須恵器・土師質土器の坏類抽出しそれを型式学的に分類・序列・段階を設定しそれに相対年代を与え、各住居段階の年代観をもとめ、住居の構築から廃棄までの時間帯を“存続期間のみなし”とした。そして、本書の各住居跡の各説では、前刊第4分冊で記述した各住居段階に対比されるものと対比し得ない二者があった。この内前者は、C区の分類に対し住居形状・カマド形状・出土遺物の様相の三者乃至二者の該当し概ね妥当性があり判断されたものである。後者は、住居跡の遺存が不良で、住居形状等が対比し得ない状態のものと、C区の第IV段階より古期に位置付けられるであろう一群遺物様相だけがC区の分類に該当するものの、住居形状が全く似合わないものの三者である。

後者の住居自体が遺存不良である場合（その最大の要因に住居相互間の切り合いによる破壊である。）の時期決定は、住居間の新旧関係によりある程度は判断され、少量の遺物でもその特徴的なものからの類推は可能であった。一方、C区の第IV段階より古期に位置付けられる一群は、住居形状・カマド形状・遺物様相から判断された。

以下、A・B区の住居跡とその出土遺物に就いて記述するが、根幹を成す方法論は第3分冊で実施したD

第6章 ま と め

区の住居跡とその出土遺物を扱う時と同じである。

1 住居形状の概要

住居形状に就いては、既刊第3・4分冊中で詳述しているのので、各報告書を参照して載きたい。

今次報告では6世紀後半～11世紀前半頃迄の住居跡が主体である。第4分冊では、ほぼ同じ時間幅の中で、8世紀中頃から9世紀前半に至る約100年間に相当する住居跡の検出が無かった。これが、当該本文中の「C区の空白期、である。そして、各住居段階が約30年間程であることが想定されていたことから、第4分冊中では、この「C区の空白期、には住居形状が3段階乃至2段階が欠除することであろうことが推測された。今次の住居形状を考求する中で、この「C区の空白期、に該当する25軒の住居跡平面図等を一括し、分類を試考した結果、D区の第II～V段階を分類するのはやや異なり、明確な状態ではなかったが、一応、新たに3分類の基本的な変遷経過が辿れた。この変遷経過は主としてカマドの形状によるところが大である(詳細は後述する)。この3分類は、新たに「第IV・V・VI段階」として、C区の住居形状第I～III段階に後続する住居形状とした。又、C区の第IV段階以降は、新たに設定した第VI段階の後続とし第VII段階以降に読み更えた。そして、今後は、第I～VIII段階に至る12類形の形状が設定出来、これを第3分冊・第4分冊と同様に「B区の」を冠し、「B区の住居形状段階」と称号させる。以下、各住居段階毎に記述するが、「B区の第VII段階」以降に就いては、既刊書の相当区分同様であるので割合するが、この三者の分類は、第1表中に対照させた。

区	D区	C区	B区	時 期
住 居 形 状	空 白 期	I	I	7世紀前半
		II	II	7世紀中葉～後半
		III	III	7世紀末～8世紀前半
		空	IV	8世紀中葉
		白	V	8世紀後半
		期	VI	9世紀前半
段 階	IV	VII	9世紀中葉	
	V	VIII	9世紀後半	
	I	VI	IX	10世紀前半
階	II	VII	X	10世紀中葉
	III	VIII	XI	10世紀後半
	IV	IX	XII	11世紀前半
	V	X	XIII	11世紀中葉

第1表 各区住居形状段階対照表

A 区	24	26	99	118	161	163	179	189	195	196	198	208	B 区	64	68	79	134	146	166	171
①	○	-25°	-32°	-23°	-32°	-45°	-33°	-23°	-30°	-17°	-18°	-23°	①	-25°	-25°	-35°	-25°	-26°	-44°	-38°
②	○	○	○	○	○	?	○	○	○	○	○	○	②	○	○	○		?	○	○
③	○	○	△	×	○	×	○	○	○	○	×	○	③	○	×	×	○	×	○	○
④	○	○	○	30cm	○	?	○	○	○	○	○	○	④	○	○	30cm	○	?	○	○
⑤	?	○	△	×	○	—	○	○	—	—	—	○	⑤	○	?	×	×	○	○	○
⑥	○		○	×	○	—	○	○	—	○	—	○	⑥	○	×	×		?	○	○
壁溝	○		×	○	×	×	○	×	○	○	○	○	壁溝	○	○	○	○	×	○	×
住規	14*14	13*13	10*10	7*7	13*14	?	11*11	13*X	-	-	-	12*12	住規	12*10	8*8	-	9*11	-	10*10	10*10
柱間	?	7*7	—	—	6*7	—	5*6	5*6	—	—	—	6*6	柱間	6*5	—	—	4*5	—	5*4	—

第2表 第I段階住居跡対象表

2 B区の住居形状段階

1. B区の住居形状第I段階(以下B区の住居形状を省略する。)

A24・26・99・118・161・163・178・189・195・196・198・208住

B64・68・79・134・146・166・171住の19軒が該当する。

住居形状の基本形は、C区の第I段階と同様である。形状の特徴は以下に列記する。

- ①主軸値(第4分冊652頁を参照して載きたい)が-20度～-30度以上。
- ②平面形は正方形基調
- ③主柱穴屋内に具備するを基本とする。
- ④主柱穴の柱間長・住居規模の公約数に36cm(使用尺高麗尺)が適合する。
- ⑤カマドの基本形状は細長い舌状を呈し、袖は屋内側に長く造り出す。煙道は壁の中位(構築時の壁での想定)に屋外に長く突出する。火床面は緩やかに立ち上がる。

⑥住居内南東隅部には、柱穴状の細目の傍竈坑を具備する。

以上の①～⑥が充分条件であるが、第2表に示したとおり、何れかを欠除する住居があるが、この第I段階では、①・④が最も重要な分類点である。この条件に該当したのが上記19軒であるが、これらの住居跡の柱間長と住居規模・カマド形状での関係は、この第I段階を2分出来る要素があるが、該当住居数が少ない為、今後の課題としておきたい。

然し、これらの住居の中で主軸値と使用尺の関係等から一該に分別出来得ない状況＝“矛盾、を含んでいる。この矛盾を含む住居はA118・196・198・B79・134住であり、第II段階の様相も含まれている。

A区	22	177	180	182	192	198	199	207	B区	65	82	88	134	146	160	168	173	180	133	162
①	-13°	-12°	-20°	-10°	-16°	-18°	-10°	-26°	①	-25°	-20°	-12°	-25°	-26°	-19°	-11°	-12°?	-10°	-12°	-32°
②						○			②	?				?		○	?	○	○	○
③	—	—	—	—	—	×	○	○	③	—	—	—	○	×	—	—	?	○	—	—
④	○	○	○		○	36cm	○	○	④	30cm	○	○	36cm	?	36cm	○	?	○	○	○
⑤	○	○	○	?	○	—	○	×	⑤	—	○	?	○	×	○	○	○	?	○	—
⑥	?			?	○	—		○	⑥	—	○	○		?	×		?	○	×	×
壁溝	○	×	○		○	○	○	○	壁溝	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	×
住規	15*10	10*7	10*11	11*14	12*18	X*12	17*17	22*18	住規	X*14	10*15	9*13	—	11*X	8*11	10*11	—	X*14	7*9	—
柱間	—	—	—	—	—	—	8*9	14*10	柱間	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第3表 第II段階住居跡対象表

2. 第II段階

A22・119・177・180・182・192・198・199・207住

B65・82・88・133・134・146・160・162・173・180住の19軒が該当する。

住居形状の基本形は、C区の第II段階と同様である。形状の特徴は以下に列記する。

- ①主軸値が-10度～20度程である。
- ②平面形の正方形志向が薄らぎ、全体的に均整が崩れてくる。
- ③主柱穴を備える住居と備えない両者の存在がある。
- ④主柱穴の柱間長・住居規模の公約数に30cm（使用尺唐尺）が適合する。
- ⑤カマドの基本形状は、燃焼部を大きくとり屋外への掘り込みが大きくなる。
- ⑥南東乃至北東隅部に傍竈坑を備える場合が多いが、傍竈坑自体は柱穴状である。

以上の①～⑥が充分条件であるが、第3表に示したとおりで、第I段階と同様に何れかを欠除する住居がある。そして、第II段階として①・④・⑤が重要な分類点であり、該当住居跡は16軒であるが、第I段階との中間の様相の住居跡A198・207・B65・160住の4軒がある。この中間様相での段階設定も可能であるが現状では留保し今後の課題としておきたい。この点は、第I段階での矛盾と通ずる部分でもある。

3. 第III段階

B54・55・57・60・67・74・79・86・142・150・162B・164・165・169・170住の15軒が該当する。

住居形状の基本形は、C区の第III段階と同様である。形状の特徴は以下に列記する。

- ①主軸値が-10度～±0度前後程である。
- ②平面形が横長方形となる。
- ③主柱穴が屋内から消滅する。
- ④住居規模の公約数に30cm（使用尺唐尺）が適合する。
- ⑤カマドの基本形状は、燃焼部が広く隅丸形状になり、燃焼部の半分程を屋外側に構築する。煙道の取り付け位置は第I・II段階と同様で、屋外に細く長く延びる。

第6章 まとめ

⑥傍竈坑は備・不備の二者があるが、規模は小さく浅い。

以上の①～⑥が充分条件であるが、第4表に示したとおりであり、第Ⅰ・Ⅱ段階と同様に何れかを欠除する住居である。そして、第Ⅲ段階としては、①・④・⑤が重要な分類点である。該当住居跡は14軒あるが、B57・164・165住は、主軸値が前段階の様相がある。規模の公約数では、36・30の両者が適合し、同様にB86・169住でも両数値の適合が認められている。だが、主軸値からすれば30cmの使用尺が判断される。

B区	54	55	57	60	67	79	86	142	150	162B	164	165	169	170	74				
①	-8°	±0°	-12°	±0°	-9°?		+3°	-1°	-1°	-10°	-15°	,	-8°	-11°	-2°				
②	○	×	△	△	?	○	○	○	○	○	○	,	○	○	○				
③	○	○	○	○	?	○	○	○	○	○	○	,	○	○	○				
④	○	△	△	○	?	○	30cm	○	○	○	30cm	,	30cm	△	○				
⑤	○	—	○	○	?	○	○	○	○	○	○	,	○	—	—				
⑥	○	○	○	○	?	×	○	×	○?	×	?	,	?	×	○				
壁溝	○	○	○	○	×	○	—	—	○	○	×	,	×	×	○				
住規	13*11	X*12	12*13	11*13	?	8*11	10*13	9*14	9*14	10*13	12*14	13*X	10*11	13*X	9*11				
柱間	—	—	—	—	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				

第4表 第Ⅲ段階住居跡対象表

第Ⅳ段階

本段階は今次の報告中の住居跡からの設定であるが、明確な前段階との形状差違はない。然し、カマド形状が前述第Ⅰ～Ⅲ段階と異なってきている。又、該当住居も少ない点等現状として問題を残すが、住居跡自体の切り合い関係では、第Ⅱ段階の住居跡を切っている。

今回第Ⅳ段階に想定した住居跡はB59・62・73・181住の4軒である。特徴は、第Ⅲ段階の様相が濃いものの、カマドの形状が、第Ⅲ段階より全体的に屋外側に構築され、燃烧部も長方形基調を呈する状態になると考えるが、B73住の場合は燃烧部は屋外に突出した状態となるが、丸味の強い形状で後出の第Ⅵ段階の様相も認められるが、住居形状自体検出住居跡中特違な存在でもある。これらの点から今後、全体の中で見直したい。

第Ⅴ段階

本段階も今次の報告中の住居跡からの設定である。唯、直前の第Ⅳ段階が明確に把握されていない為、第Ⅲ段階と直接対比し得ないが、第Ⅲ段階と比較対比行なうと、住居全体が均整が崩れ、壁溝を伴わなない住居跡が大半である。カマドも燃烧部の形状が長方形で屋外に突出させ構築し、袖自体は非常に小さくなり瓦を用いて補強する住居跡が出現する。煙道はほぼ同様と考えられる。一方、住形全体が形崩れ状ではあるものの、規模は、公約数30cmが得られる場合が多い。この公約数30cmの使用尺が想定される住居はB86・91・161B住があり、確実ではないがB92・93・174(?)・158住も該然性が高い。又、この5軒の住居跡が当第Ⅴ段階に該当する。

第Ⅵ段階

本段階も第Ⅳ・Ⅴ段階同様に今次の報告住居跡からの段階設定である。本段階は、C区の空白期と考えられた中では、比較的顕な形状である。住居全体は隅丸の横長方形を呈する住居跡が多い。壁溝は伴わなないのが主体と考えられる。カマドは、第Ⅴ段階が長方形の燃烧部を備えたのに対して逆に第Ⅱ段階的に逆行するが、燃烧部自体は、屋外に突出させた状態で広く丸味を強く帯びた形状となる。又、南東隅部には土坑状の傍竈坑を備えるが、不備な住居跡B102住例も加えた。そして、袖部をはじめ燃烧部等を瓦を多用して補強する住居跡が多くなる。

上述の形状特徴に該当する住居跡B50(?)・58・61・75・102・107・108・167・175(?)住の9軒が該

当する。

#### 第Ⅶ段階

本段階は、C区の第Ⅳ段階と同一段階であるが、C区の第Ⅳ段階の設定時は、直後の第Ⅴ段階に切られる住居により設定したが、明確なる根拠は脆弱であった。今次の第Ⅶ段階もやはり明瞭な状況では認められなかったが、東壁中央部程に燃焼部広いカマドを屋外に突出させる住居が想定されるが、当段階と後続第Ⅷ段階は、元来1つの段階として扱われる可きかも知れない。一応想定した住居は、B51・77・94・124(?)・175(?)住であるが、B175住も前段階でも疑定されており、第Ⅵ～Ⅷ段階としているものの今後再検討の必要性は大である。

#### 第Ⅷ段階

この段階は、C区の第Ⅴ段階に対比されるが、第4分冊中でも明確な段階設定が出来ていない。今回も前段階同様であり、且、第4分冊中での状況と同様で判然と出来ないのが実態である。この状況下で一応の分類抽出を試行した。分類上の基準は、D区の第Ⅰ段階設定時にD44住得た所見等を参考とし、D区第Ⅰ・C区第Ⅵ段階のカマドより燃焼空間が広く丸味を帯び、今次の第Ⅵ及びⅦ段階としたカマドに類する状態のものである。然し、段階を設定出来る明瞭な根拠に乏しく、今後再考する必要がある。

該当住居は、A156・160・165・174・178・200・204・B94・106・116・122・130・131住の13軒である。

#### 第Ⅸ～Ⅻ段階

この第Ⅸ～Ⅻ段階は、C区の第Ⅵ～Ⅸ段階の住居形状に対比される。設定の根拠は、C区及びD区の段階設定と同じである。これらの各段階は第5～7表中に示した。

### 3 住居の平面形状と面積

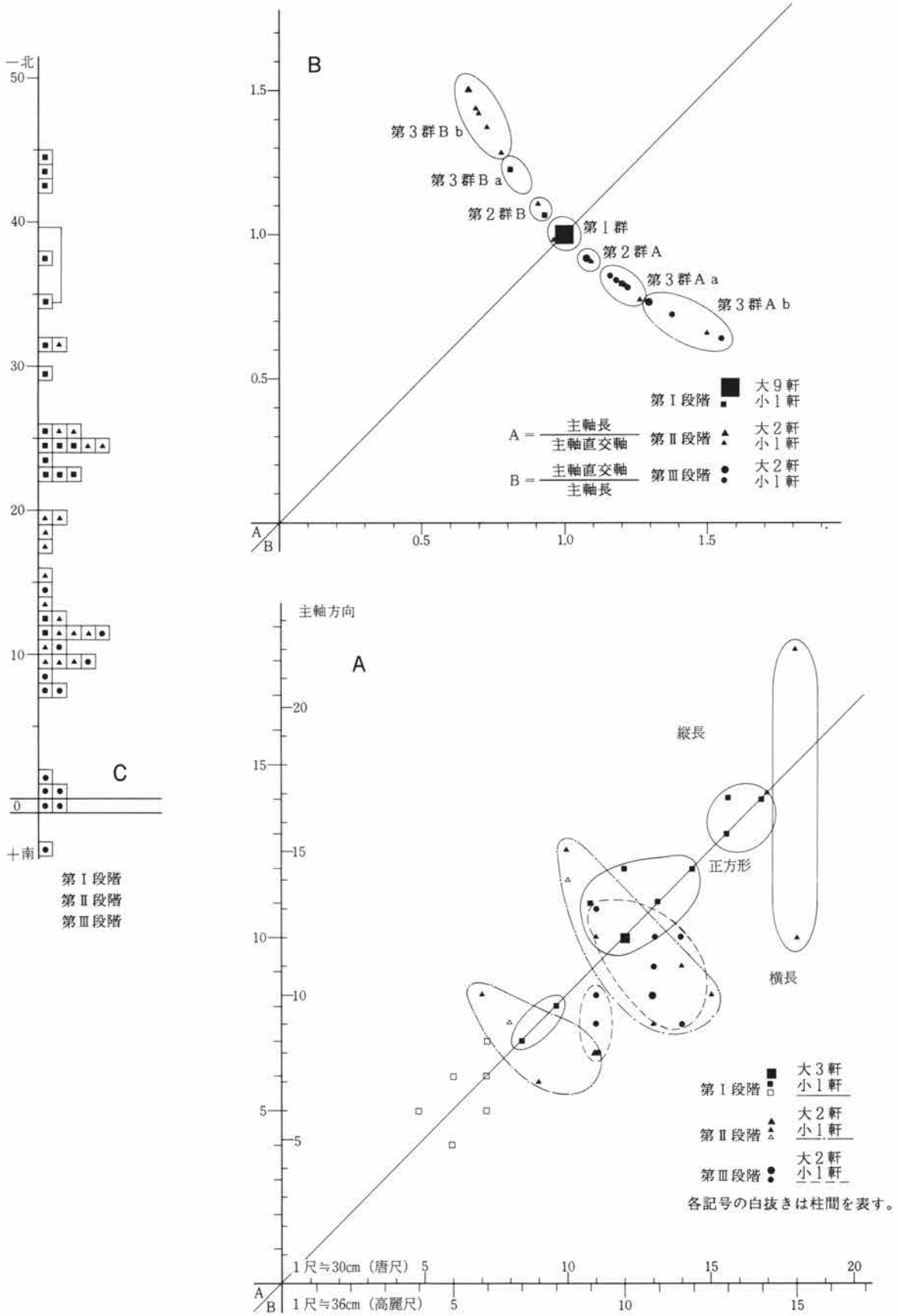
住居の各段階には縦長方形・横長方形・矩形・正方形の四者を基本とする住居跡があり、各段階には、これら四者が併存している。然し、これら四者の形状は、自ずと上屋構造・屋内生活空間の利用が異なると考えられる。

上述四者の平面形状は漠然としているが、この点がある程度明らかにする為、前刊第4分冊では、形状をグラフ化し、第1群～第3群に大別し、更に第3群を二者に分離して、正方形・矩形・縦長方形・横長方形の数値上での各々の幅を設定した。そして、今回は、第Ⅰ段階から第Ⅲ段階までの形状変化を捉える目的で同様の方法を用いて第597A図に示した。唯し、この第597A図を作製するにあたり、住居の規模は第2～4表中に示した、構築時の設計尺に換算して行なった。この結果、第Ⅰ段階の住居跡の多数は第1群に集中し、第2群B・第3群Ba・第3群Aaにそれぞれ1軒の分布があり、平面形の基本が正方形にあったことが窺知される。第Ⅱ段階の住居跡では、拡散傾向が顕著であるのに対して、第Ⅲ段階では、第2群A・第3群abに集中し、矩形・横長方形を基本形状とすることが窺知される。この三者の段階中には、住居構築に伴って使用された尺度が、高麗尺から唐尺へと変化する点がある様に、第Ⅱ段階の拡散傾向はこの使用尺に伴なう何らかの大きな外的要因に起因すると考えられる。

住居の面積(規模)では、第597A図に図化したのと同様に構築時の設計尺に換算して行ない、第597B図に図化した。この第597B図からは、各段階毎に以下の規模の大小関係が把握される。

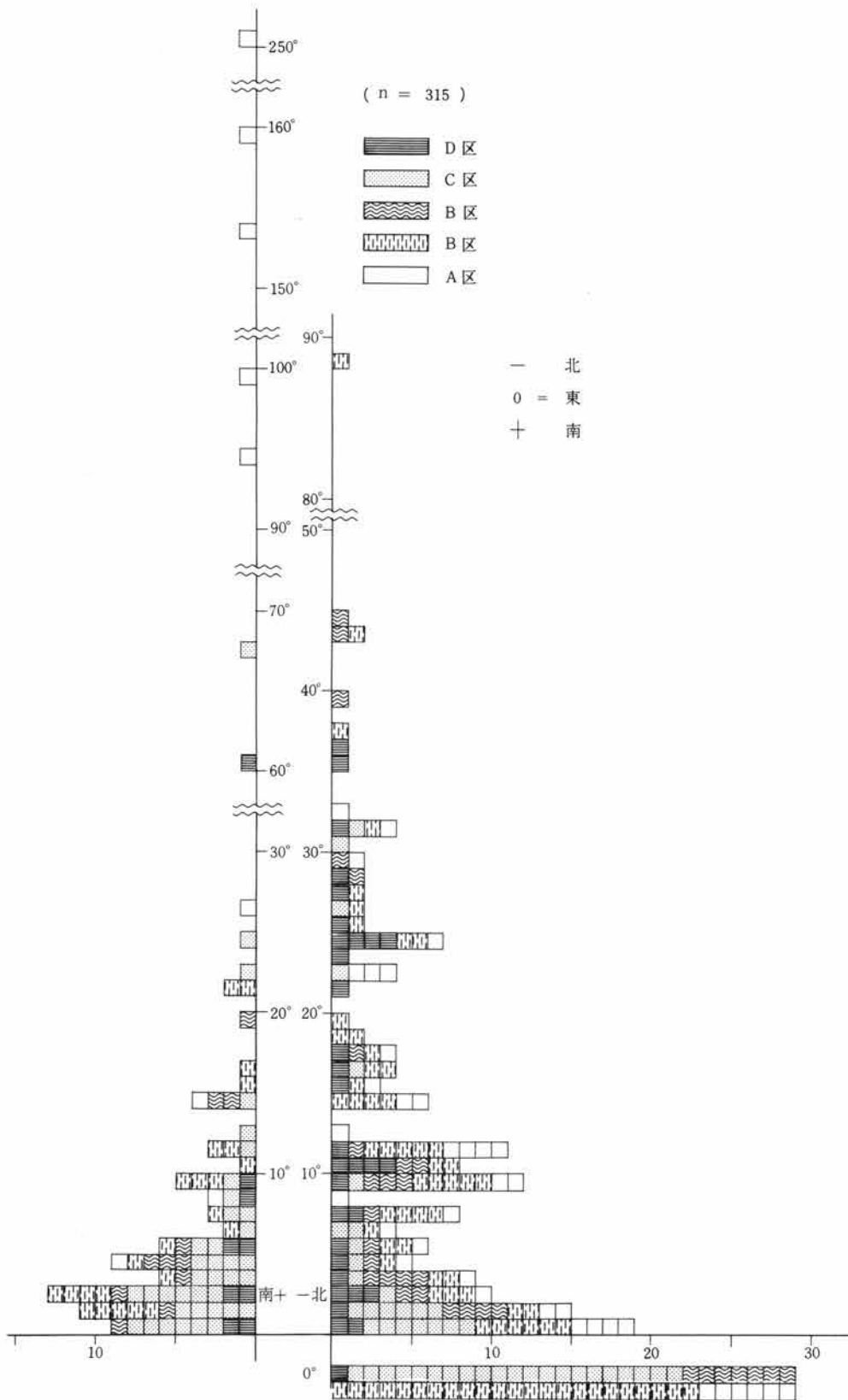
第Ⅰ段階 対象住居12軒。小は高麗尺49尺平方～64尺平方、中は高麗尺100尺平方～144尺平方、大は高麗尺169尺平方～196尺平方である。これをメートル値に換算すると小は6㎡～8㎡で、中が13㎡～19㎡、大が21㎡～25㎡である。

第Ⅱ段階 対象住居12軒、小は唐尺54尺平方～77尺平方(5㎡～70㎡)、中が唐尺117尺平方～150尺平方(8



第597図 住居跡諸元図





## 第6章 まとめ

m<sup>2</sup>~14m<sup>2</sup>)、大は唐尺216尺平方~396尺平方(20m<sup>2</sup>~30m<sup>2</sup>)である。

第Ⅲ段階 対象住居 軒、小は唐尺77尺平方~110尺平方(8m<sup>2</sup>~10m<sup>2</sup>)、中乃至大が唐尺126尺平方~143尺平方(11m<sup>2</sup>~13m<sup>2</sup>)である。

以上の様に、住居規模の大小は、小はほぼ三者が共通する。中は第Ⅰ段階の上限がやや大きい、大半は三者共に重複している。大では、第Ⅰ・Ⅱ段階しかないが、第Ⅱ段階が第Ⅰ段階を大きく上回っている。この近接する時期で大型住居の在り方が異なるのは、集団内部での変質と捉えられようが、この要因が内的であるのか、外的であるかにより、この大型住居の居住者(家父長)の性格も異なることが考えられる。この点で、住居設計時の使用尺の変化が外的要因によるとするならば、大型住居の家父長も外的要因により何らかの変質があったことが示唆される。

### 4 住居の指向方向

住居の指向方向は主軸方位によって示されるが、これではやや煩雑な為第3分冊中の651頁~654頁で記述した東を0度とし北側マイナス、南側にプラスと表示する「主軸値」に置き換え、各段階毎の主軸値を第597C図中に示した。この主軸値は、住居形状を分別する場合、特に第Ⅰ段階・第Ⅱ段階・第Ⅲ段階を分別する大きな項目であった。

第Ⅰ~Ⅲ段階には+3度から-45度迄の48度の角差がある。これらの中で、第Ⅰ段階は-12度~-45度、第Ⅱ段階が-10度~-32度、第Ⅲ段階が+3度~-15度の分布域があり、三者が重複する部分があるものの、各段階設定は、これらが集中分布する主軸値を基準値とし、概ね、第Ⅱ・Ⅲ段階は12度程の範囲の中に集中傾向がある。又、第Ⅰ段階では、拡散傾向があり、やや集中する-23度~26度よりマイナス値が大きい住居は、後続の第Ⅱ・Ⅲ段階と重複する如くに、第Ⅰ段階より古期の様相であることが考えられる。結果として、時期が降ると主軸値が0度に近づくことが判断され、後続の第Ⅳ段階以降東指の住居が急増することからも、第Ⅲ段階の住居構築段階が大きな画期となると考えられ、この画期の要因は、外的要因による土地の地割の変更があったと推測させる。

又、第598図には今回の報告対象となった住居跡で主軸値の計測が可能な住居跡全てをグラフ化した。

### 5 住居構築時の使用尺に就いて

今回の第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ段階に該当する住居跡の分類の充分条件の中に、36cm・30cmを公約数とする点があった。この公約数の存在想定は、通有、古墳・同主体部・掘立柱建物跡・寺院・条里等では、1定基準となる「ものさし」の「尺」を用い、各々の規模を換算している。特に、通有集落と呼称される遺跡に最も身近かな存在である掘立柱建物跡の場合は、柱穴の設計計画線を図上に引き図示している例が多い。他方、住居跡の柱間に就いては、殆んど言及された例は皆無に近い。この現状下で住居跡の規模・柱穴の配置に「尺度の使用」が認められると記述するにも勇気の要ることでもある。確かに計測位置・計測図の縮尺等の問題があり、従前に於いても信頼度が薄い作業という認識が多分に充満していると思われる。

今回の数値の計測には20分の1現場原図を用い行なった。計測位置は、住居の平面の場合は床面で行なったが、壁溝を備える場合は壁溝の中心で計測した。この壁溝内での計測は既刊第3分冊中で記述した、住居の掘り方に係わる点が上げられる。これは、平安期の住居跡の場合、「構築基準辺」の設定に基づき掘削を行なったという仮説を提示したが、正方形・長方形等で均整のとれている住居跡で壁溝・柱穴を具備する住居の場合は、予め4辺を確実に設定し、この四辺基準により住居の掘削が行なわれていたと考えている。又、壁溝は、全てが壁崩落のおさえ材の据え方と考えるのではなく、この四辺基準により、まっ先に、常に基準となっていた為に掘削工具が集生して窪み、結果的に溝の如くなった場合も多かったと考えている。これは、

我々が調査時にグリッドを表土層から掘削する場合のそれと近似した状況と考えている。

このことから、壁溝部分に基準の設定が出来るものと考え、壁溝の中心をもって計測した1つの理由である。

公約数の選定は、通有古代に於ける「尺度」として、「魏尺 $\approx$ 24cm」・「高麗尺 $\approx$ 36・35」・「唐尺 $\approx$ 30cm」「天平尺 $\approx$ 30cm」が考古学では用いられている為と、県下に於いては従前に於いて故尾崎喜左雄博士の多年に亘る研究成果等から「36cm・30cm」の基準となる「公約数」として用いた。唯し、36cm即高麗尺・30cm即唐尺という考えではない。古代尺度の名称使用の問題は小泉袈裟勝氏による指摘もあるが、固有名称としての高麗尺・唐尺を鵜呑にするものではない。唯、1単位を約36cm・30cmとする「ものさし」の存在を意味するものであって便宜的に用いているので御諒承して戴きたい。

結果的に、36cm尺を用いる住居は第I段階に集中し、30cm尺を使用する住居は第II段階以降の特徴として捉えることが出来、均整のとれている住居跡の場合、第X段階迄の多くの住居跡に適合している。このことは、30cm尺が長期に亘り用いられていたことが裏付けられ、現代迄「曲尺」として用いられている。

第597B図は、この36cm尺・30cm尺の各々を1単位として作図した。

#### 6 第I～III段階・第IV～VI段階に伴う遺物

前段で住居形状に就いて記述し第I段階～第VI段階に就いて記述した。この6段階の年代観に就いては、前刊第4分冊で、D区の住居形状段階を記述した結論として得られた、各住居段階は概30年程であることと、C区の、第III段階の遺物組成が通有知見から8世紀前半頃とした結論から導き出して、7世紀前半から9世紀前半頃であろう類推をした。即、この250年間で6段階に与えられる時間幅と考えられる。又、住居1段階が約30年間位であることから、慣用的に用いている「前半・中葉・後半」の三者と主に用い、各該当世紀での年代の表現としたい。この点に就いては既刊第3分冊で実施したのと同じの方法である。そして、前段で分類した第I～VI段階と第VII～XII段階の出土遺物を再整理し、各段階の遺物組成が明らかになる様に第599図～第624図に図化した。前者は遺物量が、既刊書を含め少ない為、大半の遺物を集めた。又、後者は「一括性」に鑑みて抽出掲載した。

今回は、上述した様に第I段階～第VI段階に使用されたと考えられる出土遺物を再整理し、第3分冊で実施した方法により須恵器・土師器の二者を抽出し再整理してみたい。再整理は遺残が良好な個体を抽出する。これは、確実な形の把握を行なう為である。土器の変遷観の特徴は、通有知見に基づき、土師器では器高の低下・須恵器では底部の調整痕（篋から糸へ）の変化により変遷経過を形式学的に把握したい。

土師器・須恵器類の分類は第625～629図に図示したとおりの変遷経過を考えた。

土師器では、3系列8段階・須恵器では基本5系列7段階の分類が出来た。

土師器の3列は、M1類系・M2類系・M3類系とし、更に、暗文土師器もM1・M2類系の派生種として分類し、通有の土師器との混乱を避けるためMA1類系・MA2類系とした。この冠頭の「M」は「Midono」の「M」で、緑野屯倉・緑野評？緑野郷？・緑野郡意味であり、当遺跡出土の土師器の大半が現藤岡市に生産地が推定されることからこの「M」を冠し、「MA」の「A」Anmonの「A」を付した。この3分類系の基本分類要素は成・整形の特徴と器形に求め、各特徴に就いては図中に添え書きして示したが、3分類系を通しての基本は、何れも「型作り」であること。「型作り」の場合、器形の8割以上が「型」により決定されてしまうことから、「型」の形は、各工人の小単位集団が乃至小単位工人集団の集まりにより作り・使い分けがされていたと想定している点にある。そして、各分類系の段階は、「型」の形に左右される独特の技法上の「クセ」を読み取り設定しているものであり、断面形状に主眼においた。則、各分類系は工人集団単位を仮定し

ている。

須恵器坏類は、第3分冊で行なった分類の結果同様に形状が5形態8段階が看取された。この5形態は、第3分冊のC区でもC区の第IV段階でも明瞭に認められ、今回の分類結果の最新段階と、従前のA～E類系が器形の形状上系統的に継がることが想定されるに至った。

この8段階に土師器の分類段階を考慮してハ段階からヌ段階迄を設定したがヌ段階は、D区の分類イ段階に対比される。この段階設定は次の特徴による。

ハ段階 手持篋削りによる底部調整で底部が丸味を帯び、器厚が薄い。削り出し高台の高台付坏。

ニ段階 手持篋削りの底部調整に腰部も削整形が行なわれる。

ホ段階 回転篋削りの底部切り離しで、底部径が度目値でも大きい。

ヘ段階 ホ段階の底径が縮小化。

ト段階 回転糸切りによる底部切り離しが行なわれ、底径が大きいもの。

チ段階 ト段階から底径が縮小したもの。

リ段階 チ段階から底径が縮小したもの。

ヌ段階 リ段階から底径が縮小したもの。

ル段階 ヌ段階から底径が縮小したもの。

である。この分類の中で、底部切り離し技法がヘからト段階が顕著な変化を見せるが、度目値では変化がないこと、この技法変化が、ある段階から唐突に変化したとは考えられないことから、この2つの段階は実態として併存していたと考えられることから、年代観の中では一つの段階と考えている。

又、ル段階以降はD区で示したり～ヘ迄の段階でル段階に重複するD区のロ段階以降、即、ハ段階からニホへ読み更えてヲワカとして後続させる。

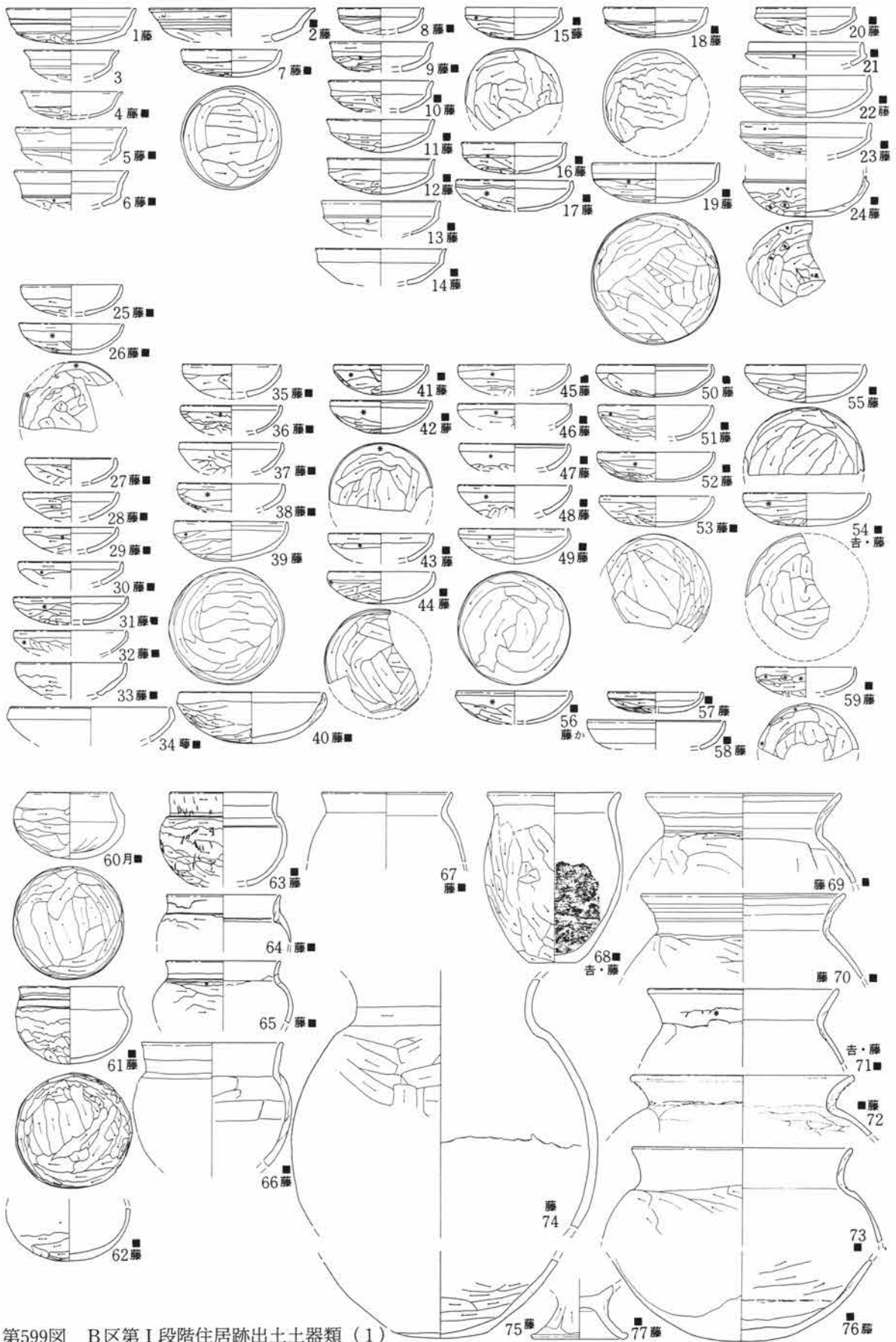
#### 年代観

これらの年代観は、群中最古のハ段階は、秋間古窯跡群の製品であることと器形及び成・整の特徴が秋間古窯跡群の開窯期の器種対比で出来ることから、秋間古窯跡群閉窯期の7世紀後半が与えられる。又、松井田町の愛宕山遺跡の年代観に相当する坏がト段階が対比されることから、チ段階に8世紀前半頃を相当させておきたい。この点でD区の分類時に与えられた1段階30年をもってハ段階迄逆算するとヘ・ト段階の夾雑期を考慮しても概ね30年単位の年代観と齟齬ない。

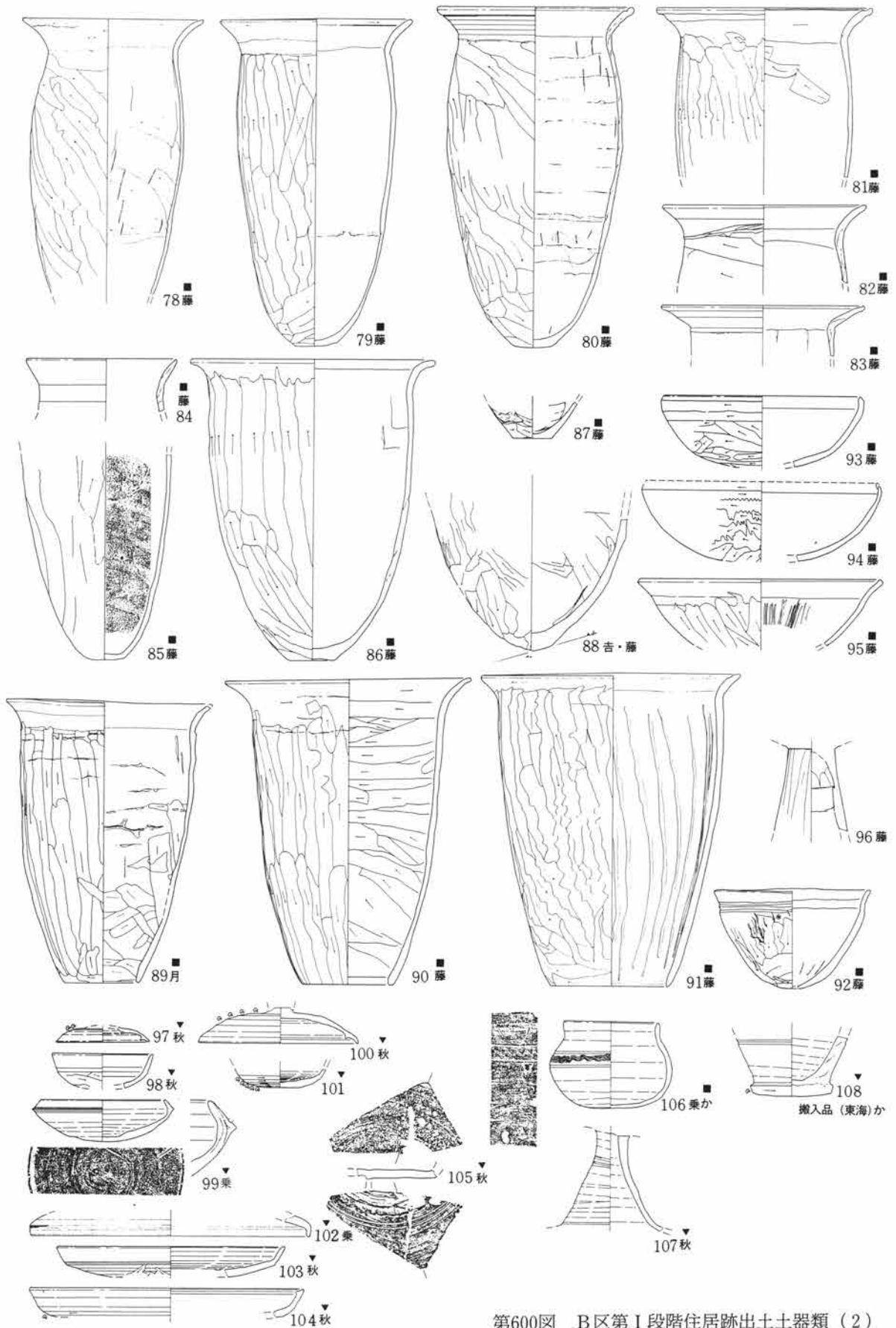
他方土師器では、各ハ段階の出現が、通有知見から7世紀後半と考えられていることから、このハ段階に7世紀後半を相当させておきたい。そして、後出の各段階はこれに各々30年単位での年代観と付与した。

そして、須恵器坏の分類図からは次のことが指摘出来る。製作地の面では、今回のリ段階で大きな変化が見られた。これは、チ段階迄では秋間古窯跡群での産品がA～E分類系で全て認められたが、ヌ段階以降、吉井古窯跡群・藤岡古窯跡群の産品が増化し、秋間古窯跡群産品が消滅の如く認められなくなっており、D区のイ～ホ段階が吉井・藤岡で占められることからこのリ段階に画期が認められる。これらのことは、秋間古窯跡群が9世紀後半に閉窯していたことが推定され、リ段階は秋間古窯跡群の閉窯期の頃として捉えられる。

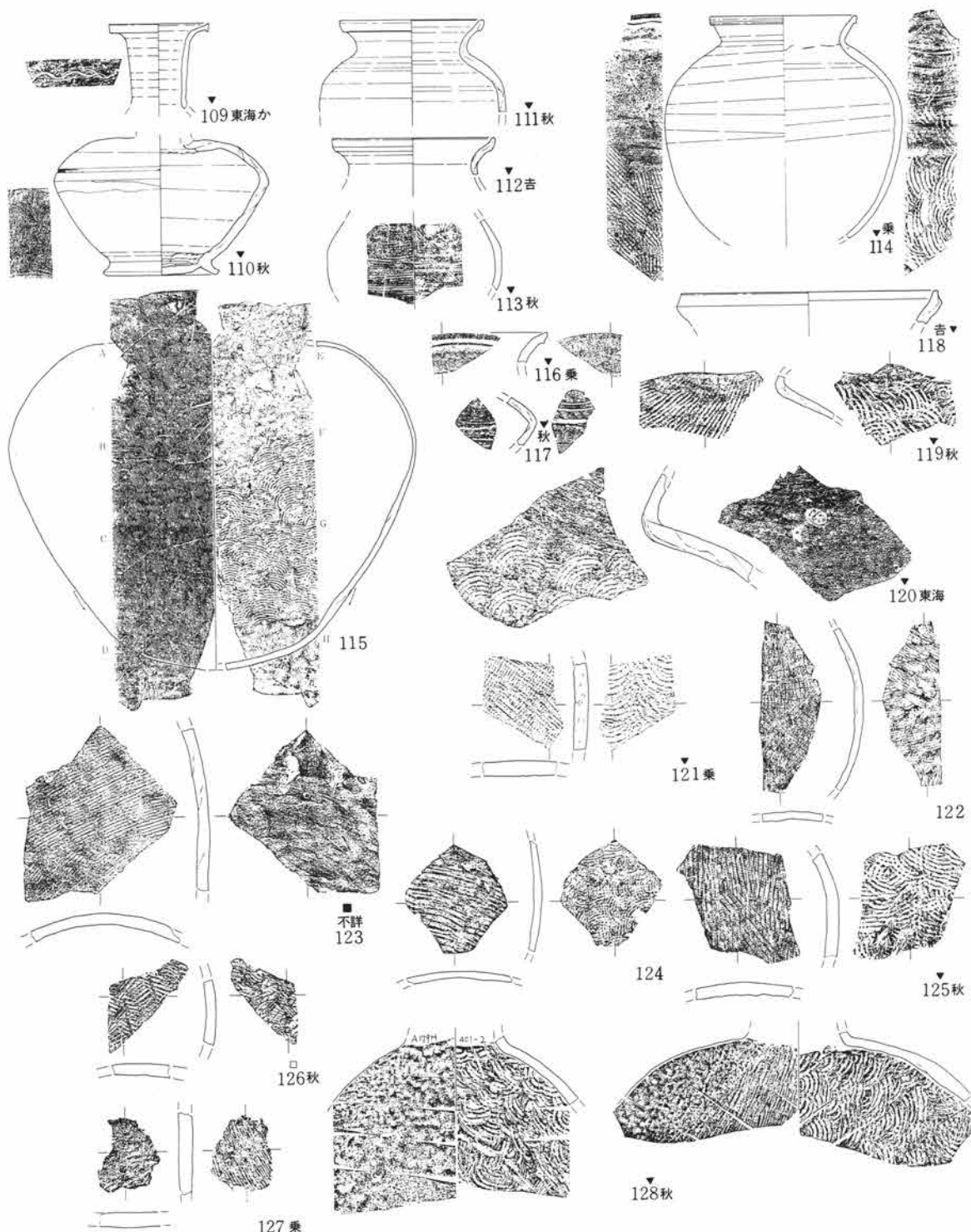
又、A～Eの器形が秋間古窯跡群で全てが製産されていた段階から各吉井古窯跡群・藤岡古窯跡群・乗附古窯跡群等で製産されることは、秋間古窯跡群の閉窯に伴ない各工人が、律令機構の中で意図的に各窯跡群に編入されたことも想像される。そして、上述してきたほか次のハ～チ段階の中で、秋間古窯跡群の製品で



第599図 B区第I段階住居跡出土土器類(1)



第600図 B区第I段階住居跡出土土器類(2)

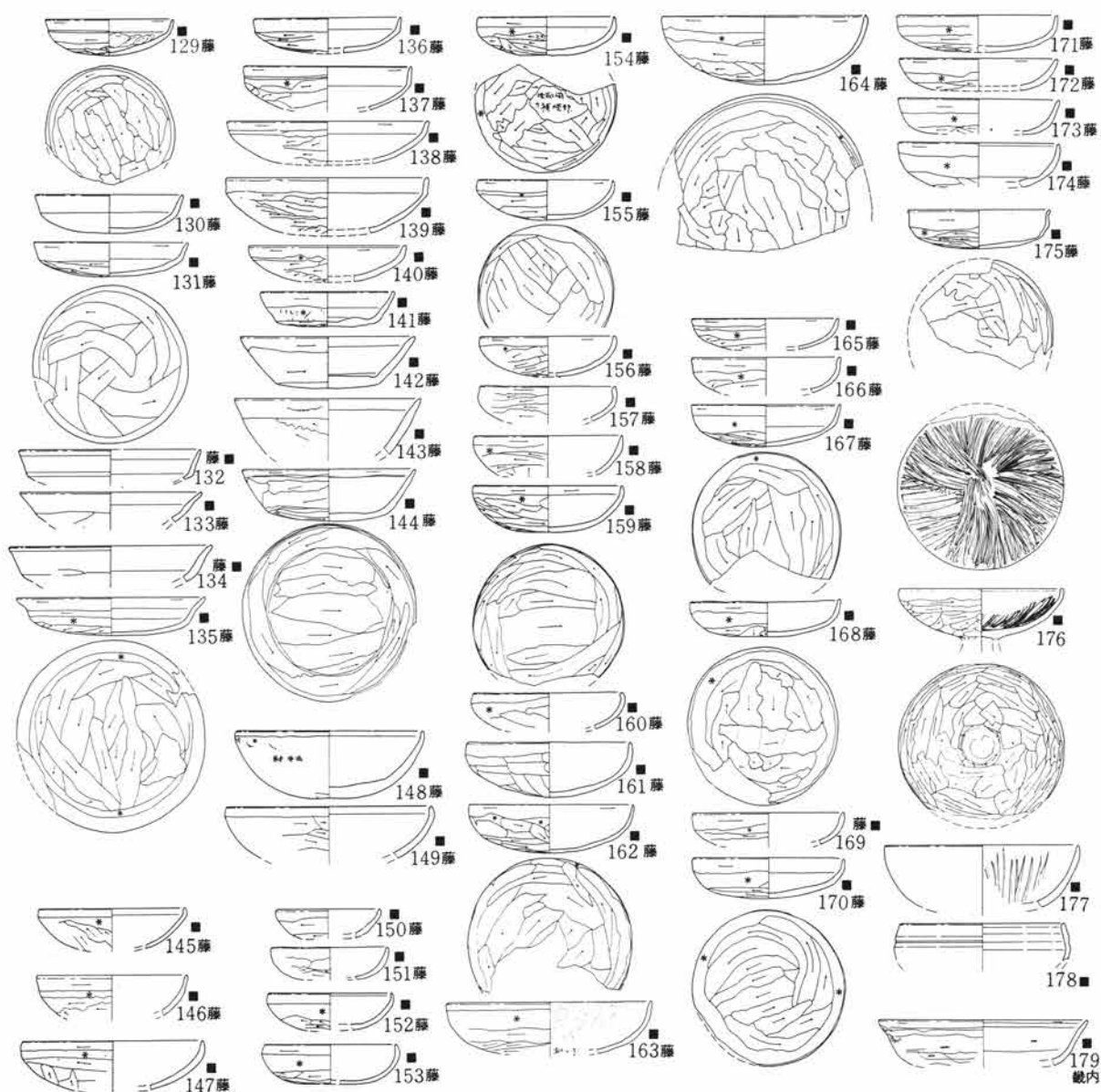


- |                   |                   |                   |                   |                   |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 1 A196住 (445-2)   | 2 A24住 (347-7)    | 3 A196住 (445-1)   | 4 B146住 (281-5)   | 5 B146住 (281-6)   |
| 6 A26住 (349-1)    | 7 A179住 (398-1)   | 8 A179住 (398-7)   | 9 A195住 (441-1)   | 10 A195住 (441-2)  |
| 11 A179住 (398-3)  | 12 A195住 (441-3)  | 13 A189住 (428-1)  | 14 A179住 (398-4)  | 15 A179住 (398-6)  |
| 16 A179住 (398-9)  | 17 A179住 (398-11) | 18 A179住 (398-2)  | 19 A208住 (465-1)  | 20 A179住 (398-8)  |
| 21 A26住 (349-2)   | 22 A189住 (428-3)  | 23 A189住 (428-2)  | 24 A179住 (398-5)  | 25 A24住 (347-3)   |
| 26 B79住 (104-2)   | 27 A24住 (347-2)   | 28 A179住 (398-15) | 29 A179住 (398-14) | 30 A179住 (398-20) |
| 31 A179住 (398-23) | 32 B146住 (281-1)  | 33 A24住 (347-5)   | 34 A118住 (351-3)  | 35 B171住 (321-1)  |
| 36 A179住 (398-17) | 37 A179住 (398-19) | 38 B79住 (105-1)   | 39 B146住 (281-4)  | 40 A118住 (351-2)  |
| 41 A179住 (398-13) | 42 A179住 (398-12) | 43 A179住 (398-18) | 44 B79住 (105-2)   | 45 B79住 (105-4)   |

第601図 B区第I段階住居跡出土土器類(3)

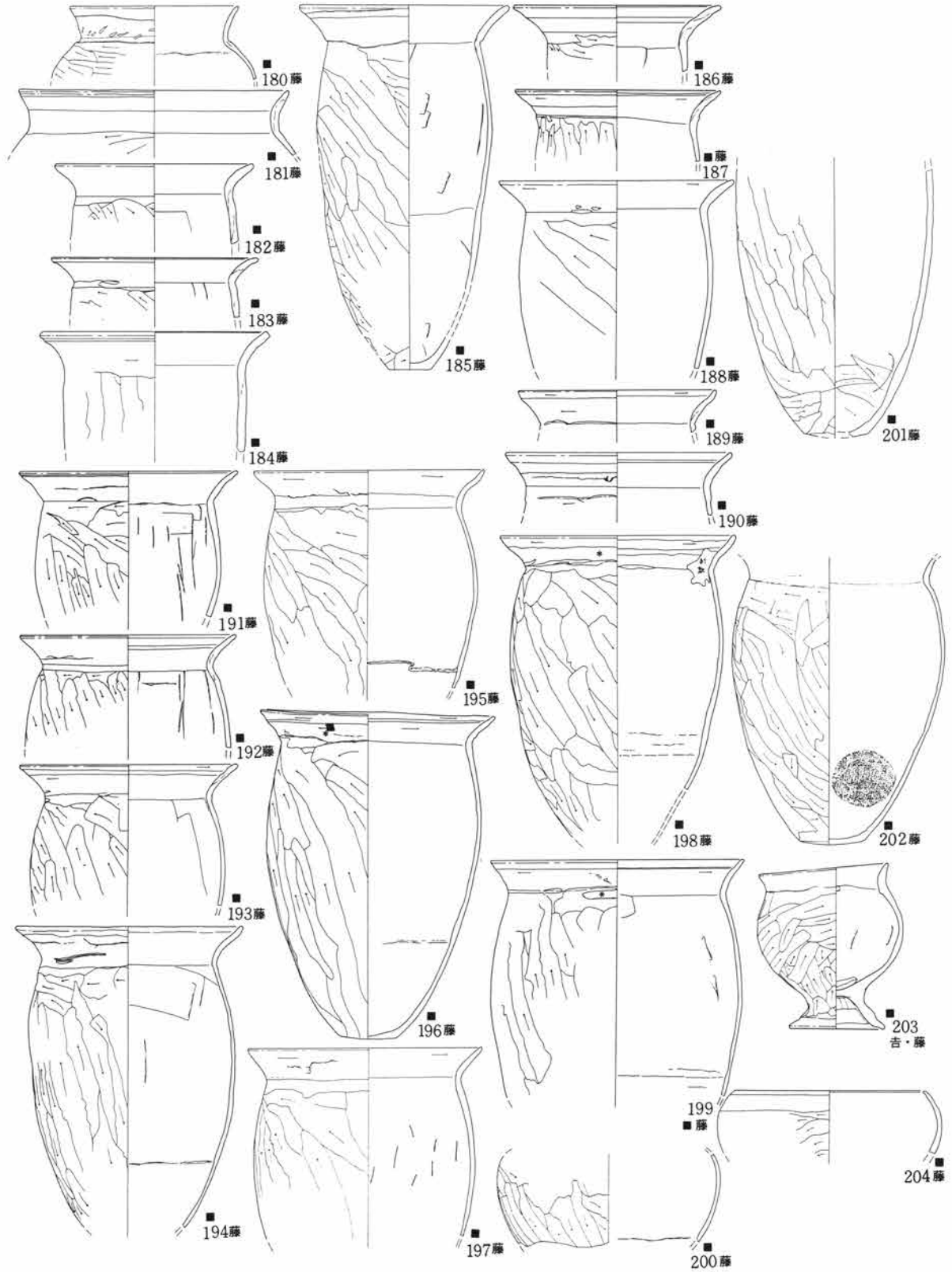
第6章 ま と め

46 B79住 (105-3)	47 A24住 (347-4)	48 A179住 (398-22)	49 B146住 (281-2)	50 A179住 (398-21)
51 B79住 (105-5)	52 B79住 (105-6)	53 B146住 (281-3)	54 B79住 (105-7)	55 A24住 (347-1)
56 A179住 (398-10)	57 A179住 (398-16)	58 A24住 (347-6)	59 B79住 (104-1)	60 B146住 (281-7)
61 A118住 (351-1)	62 A179住 (398-29)	63 A179住 (398-26)	64 A179住 (398-28)	65 A179住 (398-27)
66 A195住 (441-4)	67 A189住 (428-6)	68 A189住 (428-7)	69 A179住 (399-1)	70 A179住 (399-2)
71 B79住 (105-8)	72 B146住 (282-4)	73 B79住 (105-10)	74 B166住 (311-1)	75 A196住 (445-5)
76 A195住 (441-5)	77 B146住 (282-3)	78 B146住 (282-1)	79 B146住 (281-8)	80 B146住 (281-9)
81 A179住 (399-4)	82 B79住 (105-9)	83 A179住 (399-3)	84 B171住 (321-2)	85 B79住 (105-11)
86 A189住 (429-1)	87 A179住 (399-5)	88 A189住 (429-2)	89 A208住 (465-2)	90 A196住 (445-6)
91 B146住 (282-2)	92 A179住 (399-6)	93 A179住 (398-24)	94 A179住 (398-25)	95 A196住 (445-4)
96 A196住 (445-3)	97 A179住 (398-30)	98 A179住 (398-31)	99 A189住 (428-4)	100 B134住 (251-1)
101 A179住 (399-7)	102 B146住 (282-5)	103 A179住 (399-9)	104 A179住 (399-10)	105 A179住 (399-8)
106 A189住 (428-5)	107 A179住 (399-11)	108 A179住 (399-12)	109 B79住 (552-12)	110 B79住 (105-12)
111 B166住 (312-3)	112 B134住 (251-3)	113 A179住 (399-13)	114 B146住 (282-7)	115 A179住 (400-1)
116 B166住 (312-2)	117 B85住 (552-13)	118 B79住 (105-14)	119 A179住 (401-3)	120 B78住 (552-1)
121 B146住 (282-8)	122 A179住 (401-4)	123 B86住 (552-14)	124 A179住 (402-1)	125 A179住 (401-5)
126 B134住 (251-4)	127 A179住 (402-2)	128 A179住 (401-1・1')		

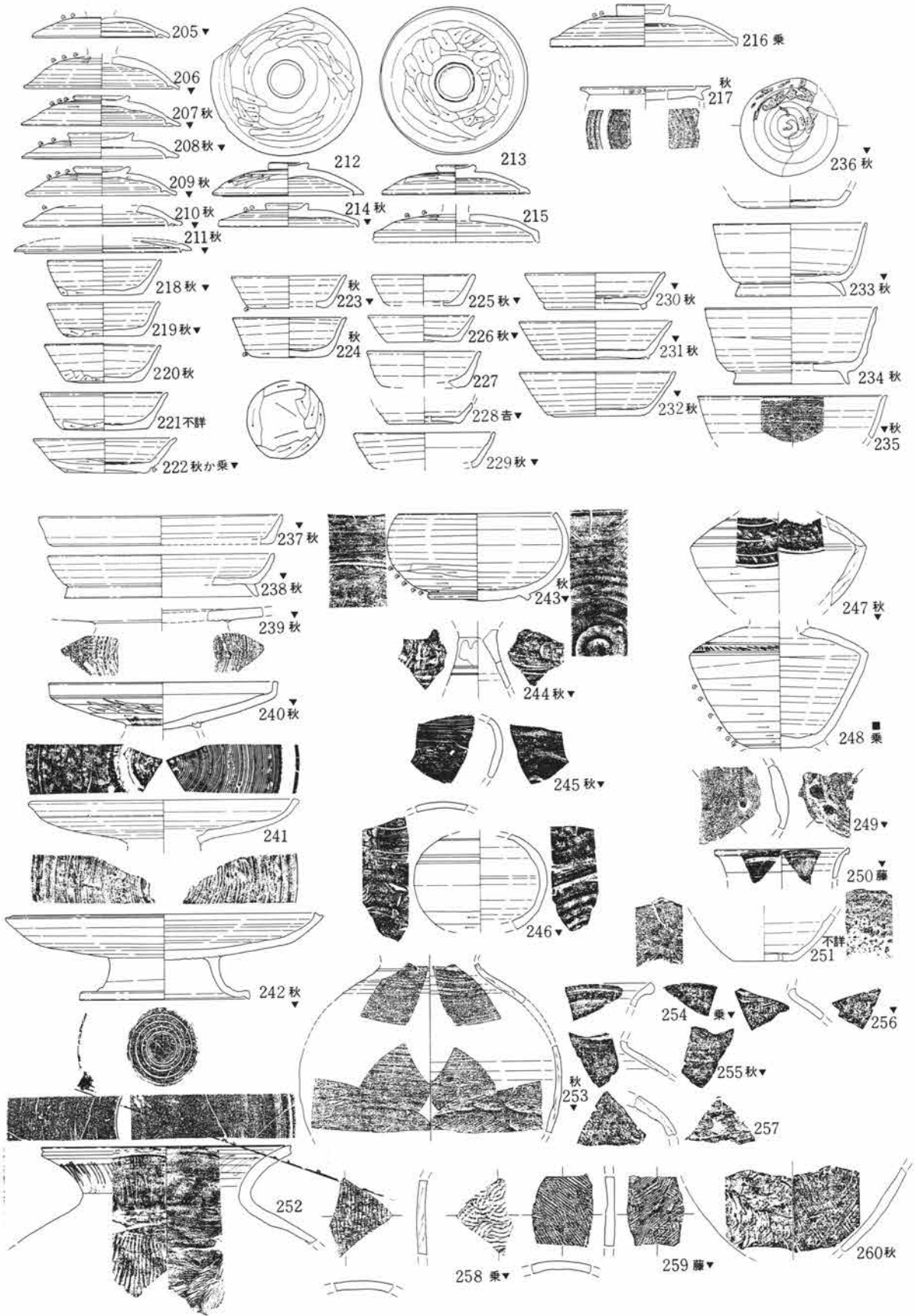


第602図 B区第II段階住居跡出土土器類(1)



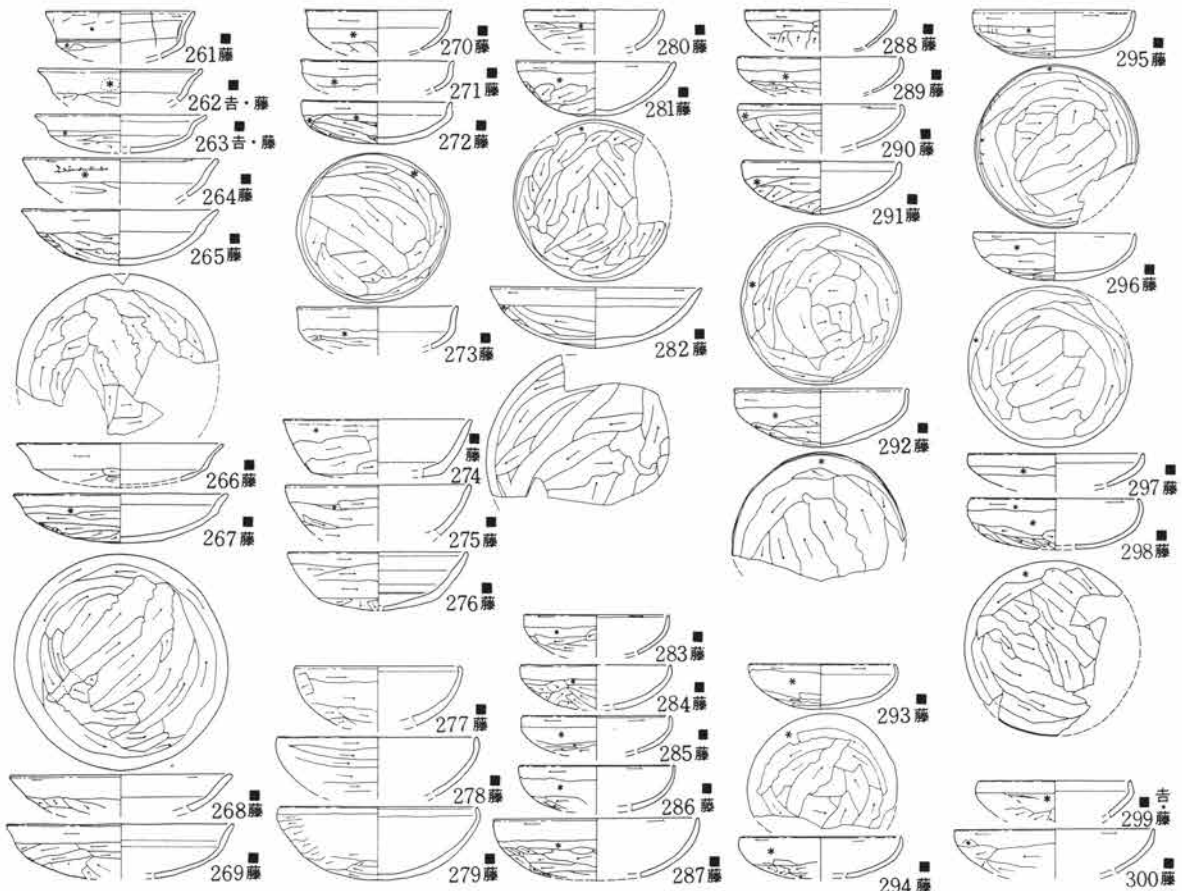


第603図 B区第II段階住居跡出土土器類(2)

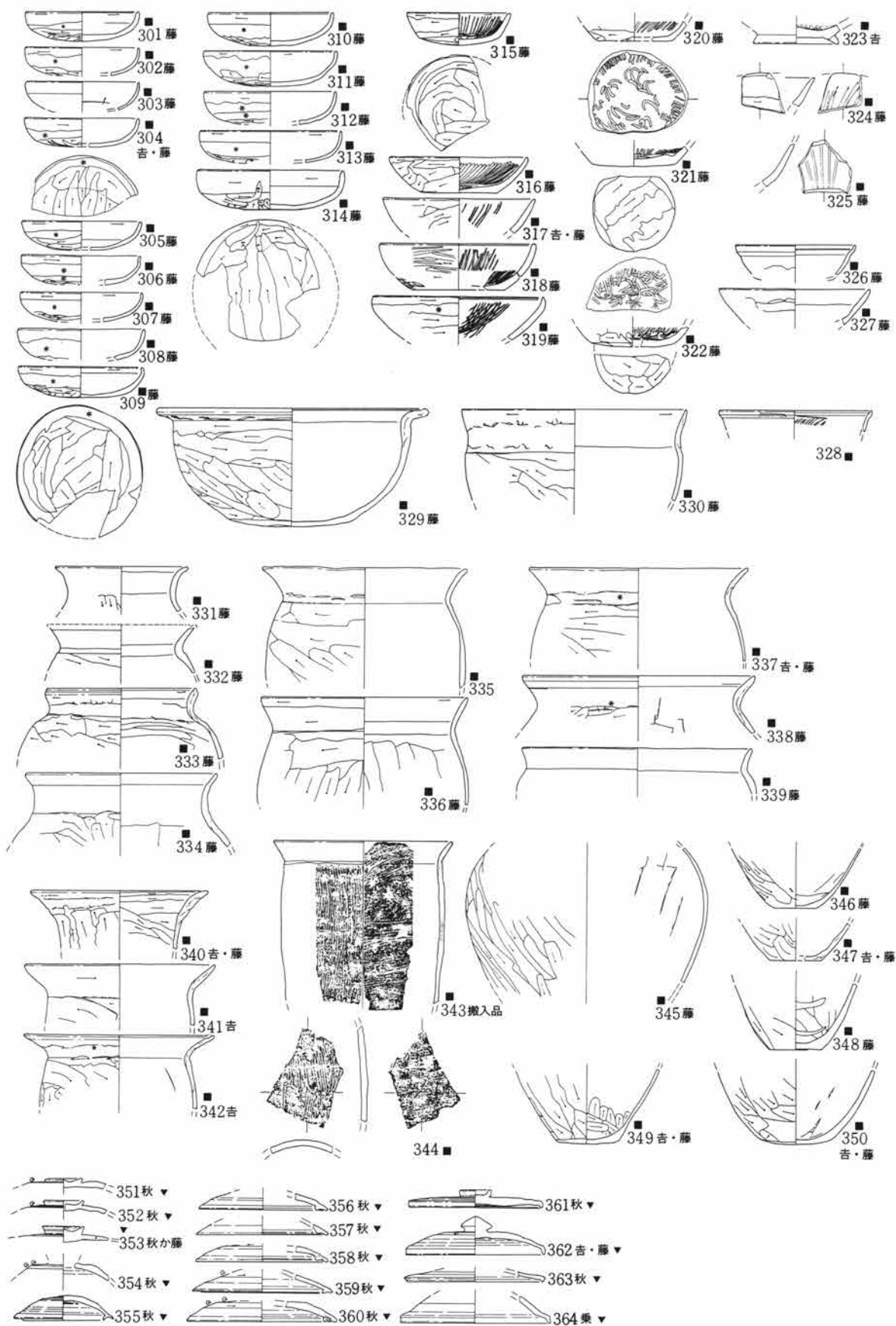


第604図 B区第II段階住居跡出土土器類(3)

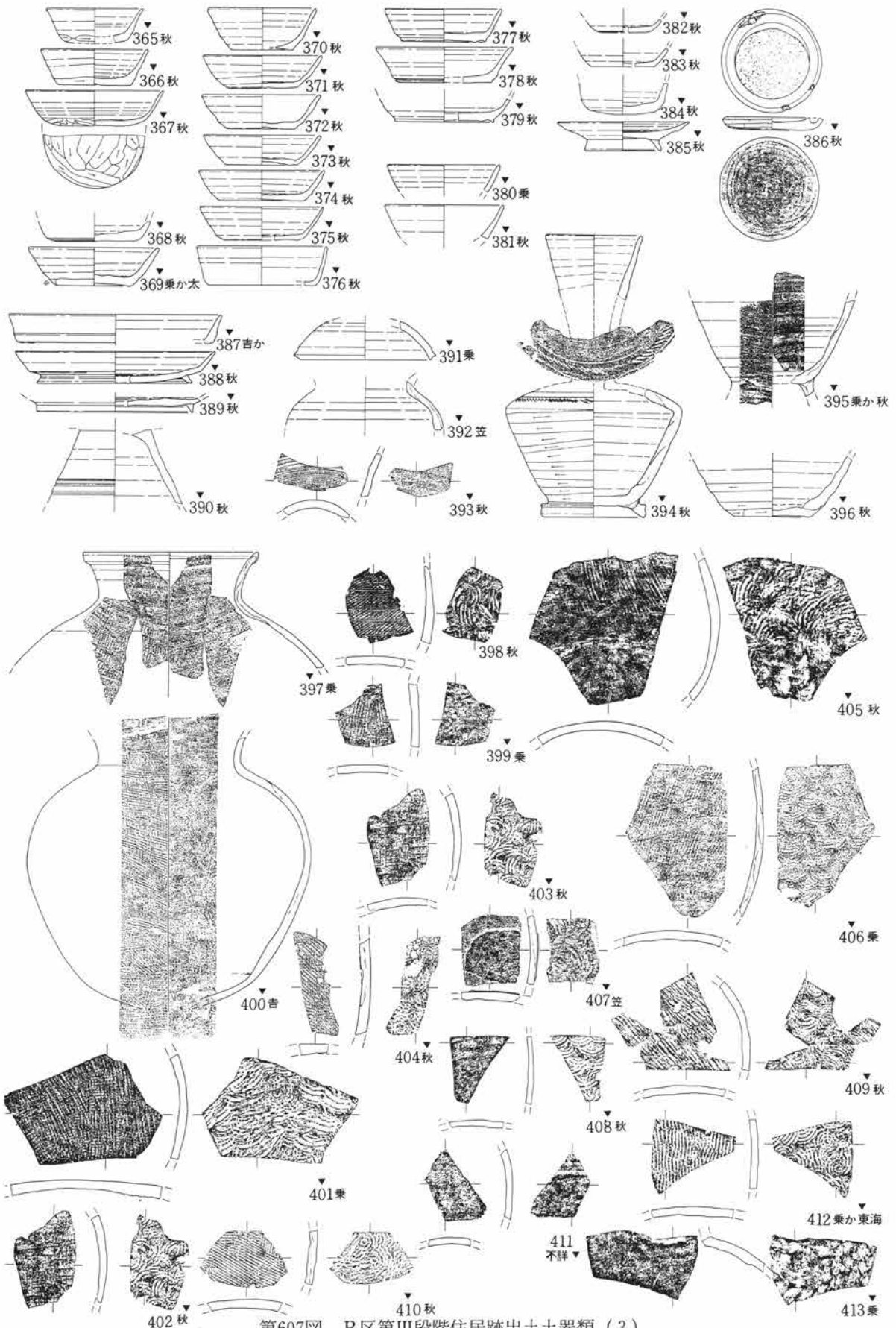
129 B173住 (324-1)	130 A180住 (404-2)	131 B160住 (295-2)	132 A22住 (341-5)	133 A22住 (341-3)
134 A22住 (341-4)	135 B168住 (315-10)	136 A180住 (404-1)	137 B168住 (315-6)	138 B168住 (315-7)
139 A180住 (404-3)	140 B168住 (315-4)	141 B160住 (294-1)	142 A182住 (408-2)	143 A182住 (408-3)
144 B168住 (315-11)	145 A192住 (434-4)	146 B82住 (111-4)	147 A22住 (341-2)	148 A192住 (434-6)
149 A192住 (434-5)	150 B173住 (324-2)	151 B65住 (68-1)	152 A192住 (434-1)	153 A192住 (434-2)
154 A22住 (341-1)	155 B160住 (294-3)	156 B168住 (315-1)	157 B65住 (68-2)	158 B82住 (111-3)
159 A192住 (434-3)	160 B65住 (68-3)	161 B65住 (68-4)	162 B168住 (315-9)	163 B82住 (112-5)
164 B160住 (295-3)	165 B168住 (315-2)	166 B82住 (111-2)	167 B160住 (295-1)	168 B82住 (112-1)
169 B82住 (112-2)	170 A182住 (408-1)	171 B82住 (112-4)	172 B168住 (315-3)	173 B82住 (112-3)
174 B168住 (315-5)	175 B82住 (111-1)	176 A192住 (435-1)	177 B160住 (294-2)	178 A199住 (450-9)
179 B168住 (315-8)	180 B82住 (113-3)	181 B65住 (68-9)	182 A192住 (435-3)	183 A192住 (435-4)
184 A207住 (462-1)	185 A177住 (394-1)	186 A192住 (435-5)	187 B173住 (324-4)	188 B168住 (316-5)
189 B168住 (316-3)	190 A22住 (342-3)	191 A22住 (342-2)	192 A22住 (342-1)	193 B168住 (316-4)
194 A199住 (450-10)	195 B160住 (296-1)	196 B160住 (295-8)	197 B160住 (296-2)	198 B160住 (295-9)
199 B168住 (316-6)	200 B82住 (113-4)	201 A177住 (394-2)	202 B82住 (113-2)	203 A192住 (435-2)
204 B65住 (68-5)	205 B82住 (112-8)	206 B168住 (315-12)	207 A182住 (408-6)	208 A182住 (408-5)
209 A182住 (408-4)	210 B65住 (68-6)	211 B160住 (295-4)	212 A199住 (450-2)	213 A199住 (450-1)
214 B82住 (112-7)	215 A182住 (408-7)	216 B82住 (112-9)	217 B82住 (112-6)	218 B160住 (295-5)
219 B160住 (295-6)	220 A199住 (450-5)	221 A199住 (450-6)	222 B82住 (112-11)	223 A182住 (408-9)
224 A199住 (450-7)	225 A182住 (408-8)	226 B82住 (112-10)	227 A199住 (450-3)	228 B173住 (324-3)
229 B65住 (68-7)	230 B160住 (295-7)	231 B168住 (316-1)	232 B168住 (316-2)	233 B82住 (112-13)
234 A182住 (408-10)	235 B65住 (68-8)	236 B82住 (113-5)	237 B82住 (112-14)	238 B82住 (113-1)
239 B65住 (68-10)	240 A192住 (435-9)	241 A177住 (394-3)	242 A177住 (394-4)	243 A199住 (451-1)
244 A207住 (462-4)	245 A182住 (408-11)	246 A192住 (435-7)	247 A192住 (435-8)	248 B65住 (68-11)
249 B168住 (316-7)	250 A22住 (342-4)	251 A207住 (462-8)	252 A192住 (436-1)	253 B65住 (69-1)
254 A207住 (462-2)	255 A207住 (462-5)	256 A207住 (462-3)	257 A207住 (462-6)	258 B173住 (324-5)
259 A22住 (342-5)	260 A207住 (462-7)			



第605図 B区第Ⅲ段階住居跡出土土器類(1)



第606図 B区第Ⅲ段階住居跡出土土器類(2)

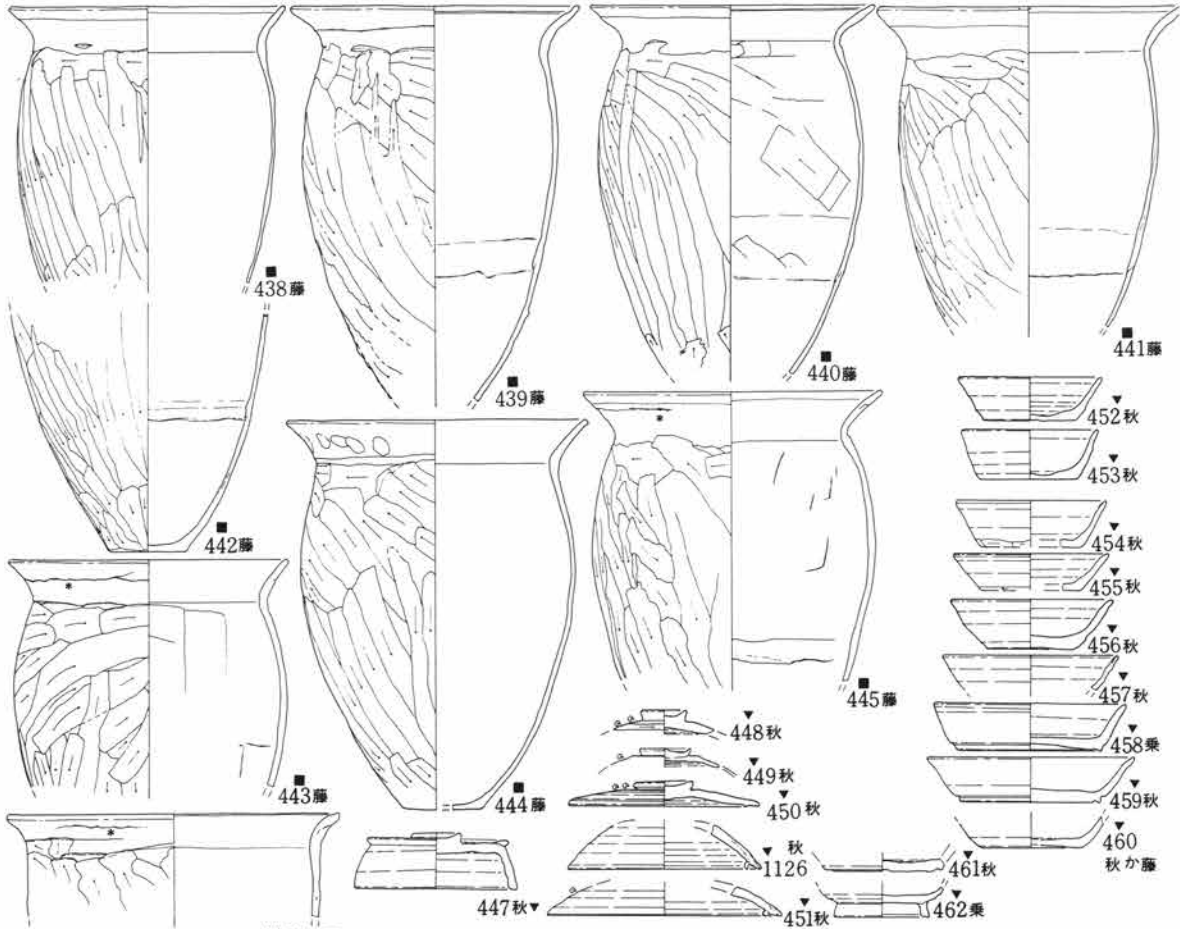
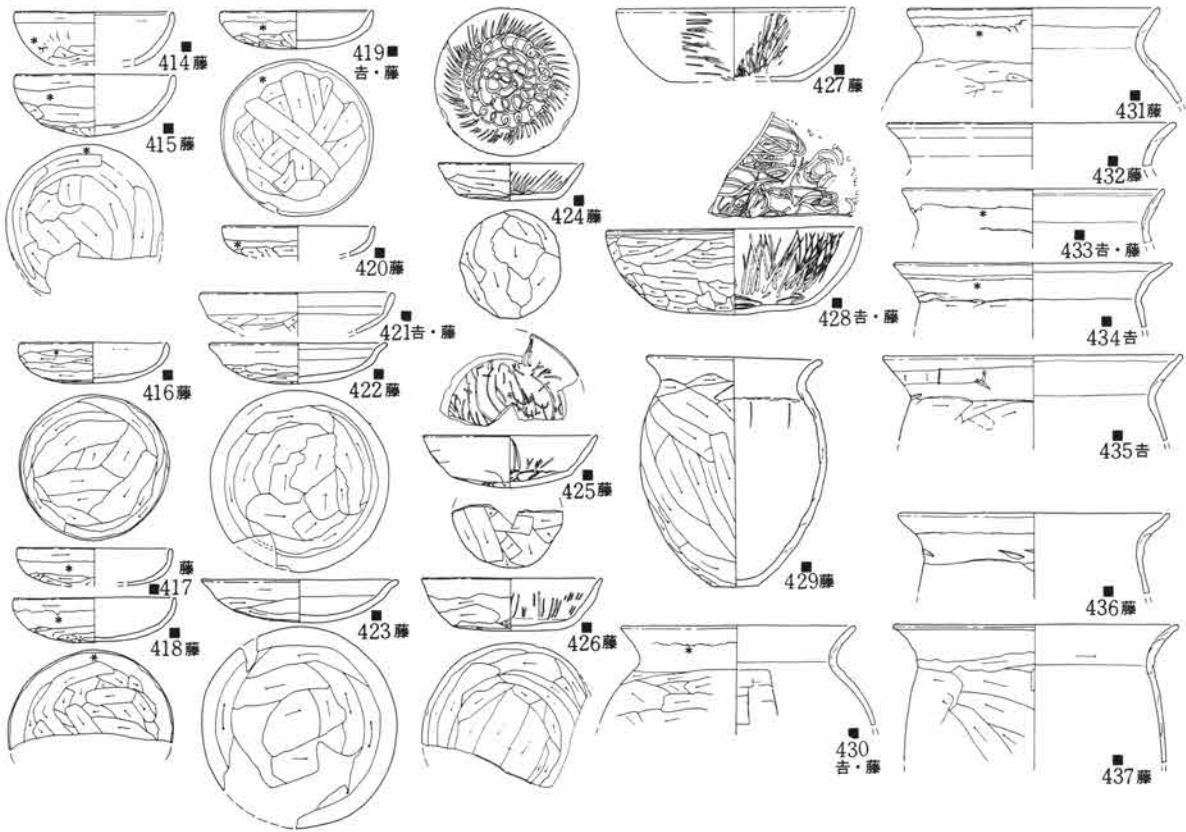


第607図 B区第Ⅲ段階住居跡出土土器類(3)

第6章 ま と め

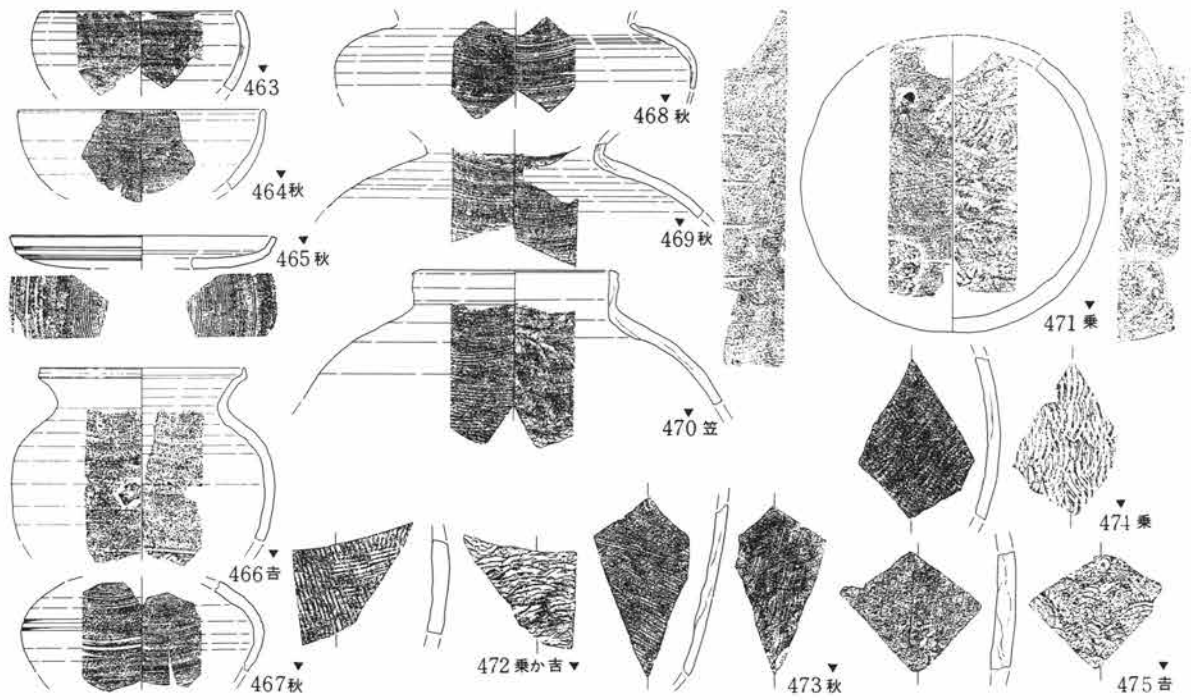
261 B164住 (309-3)	262 B54住 (33-6)	263 B54住 (33-7)	264 B162住 (303-3)	265 B60住 (61-2)
266 B54住 (33-8)	267 B60住 (61-3)	268 B162住 (304-1)	269 B60住 (61-1)	270 B55住 (37-2)
271 B60住 (60-2)	272 B60住 (60-1)	273 B54住 (33-4)	274 B86住 (120-3)	275 B86住 (120-4)
276 B86住 (120-2)	277 A162住 (373-1)	278 B54住 (33-5)	279 A162住 (373-2)	280 B54住 (33-1)
281 B164住 (309-5)	282 B162住 (304-2)	283 B164住 (308-1)	284 B54住 (33-2)	285 B164住 (308-4)
286 B164住 (308-5)	287 B150住 (286-4)	288 B170住 (320-2)	289 B57住 (45-3)	290 B162住 (303-2)
291 B60住 (60-3)	292 B164住 (309-8)	293 B164住 (309-4)	294 B162住 (303-1)	295 B164住 (309-6)
296 B164住 (309-7)	297 B170住 (320-3)	298 B150住 (286-6)	299 B54住 (33-3)	300 B164住 (309-2)
301 B164住 (308-3)	302 B164住 (308-2)	303 B150住 (286-1)	304 B57住 (45-1)	305 B150住 (286-2)
306 B57住 (45-2)	307 B164住 (308-6)	308 B57住 (45-4)	309 B150住 (286-5)	310 B164住 (308-7)
311 B164住 (309-1)	312 B86住 (120-1)	313 B150住 (286-3)	314 B60住 (60-4)	315 B164住 (309-9)
316 B57住 (46-1)	317 B54住 (33-10)	318 B54住 (33-11)	319 B54住 (33-12)	320 B55住 (37-3)
321 B57住 (45-5)	322 B54住 (33-13)	323 B55住 (38-3)	324 B54住 (33-15)	325 B54住 (33-16)
326 B55住 (37-1)	327 B54住 (33-9)	328 B55住 (37-4)	329 B86住 (121-2)	330 B150住 (288-4)
331 B170住 (320-4)	332 B170住 (320-5)	333 B150住 (288-1)	334 A162住 (373-3)	335 B86住 (120-5)
336 B150住 (288-3)	337 B57住 (46-13)	338 B54住 (34-4)	339 B54住 (34-1)	340 B150住 (288-2)
341 B54住 (34-3)	342 B54住 (34-2)	343 A162住 (373-4)	344 A162住 (373-5)	345 B54住 (34-7)
346 B164住 (309-11)	347 B54住 (34-6)	348 B162住 (304-6)	349 B54住 (34-5)	350 B170住 (320-6)
351 B54住 (33-18)	352 B54住 (33-19)	353 B55住 (37-6)	354 B54住 (33-17)	355 B170住 (320-1)
356 B54住 (33-20)	357 B57住 (46-2)	358 B67住 (70-1)	359 B57住 (46-3)	360 B57住 (46-4)
361 B60住 (61-4)	362 B162住 (304-4)	363 B57住 (46-4)	364 B55住 (37-5)	
365 B54住 (33-21)	366 B54住 (33-22)	367 B162住 (304-5)	368 B55住 (38-2)	369 B57住 (46-10)
370 B57住 (46-6)	371 B60住 (61-5)	372 B57住 (46-9)	373 B57住 (46-8)	374 B54住 (33-24)
375 B55住 (38-1)	376 B54住 (33-27)	377 B54住 (33-23)	378 B54住 (33-25)	379 B164住 (309-10)
380 B57住 (46-7)	381 B54住 (33-26)	382 B57住 (46-11)	383 B57住 (46-12)	384 B54住 (33-28)
385 B86住 (121-1)	386 B54住 (34-12)	387 B150住 (288-5)	388 B150住 (288-6)	389 B150住 (288-7)
390 B54住 (34-11)	391 B162住 (304-3)	392 B60住 (61-6)	393 B54住 (34-9)	394 B55住 (38-4)
395 B150住 (288-8)	396 B54住 (34-10)	397 B54住 (35-1)	398 B170住 (320-7)	399 B162住 (373-7)
400 B54住 (35-2)	401 B170住 (320-8)	402 A162住 (373-8)	403 A162住 (373-8)	404 B54住 (35-3)
405 A162住 (374-1)	406 B54住 (35-4)	407 B60住 (61-7)	408 A162住 (373-9)	409 A162住 (373-10)
410 B54住 (34-13)	411 A162住 (375-6)	412 A162住 (373-10)	413 B164住 (309-12)	
414 B73住 (72-3)	415 B73住 (72-4)	416 B59住 (54-1)	417 B73住 (72-2)	418 B59住 (54-3)
419 B59住 (54-2)	420 B73住 (72-1)	421 B59住 (54-4)	422 B73住 (72-5)	423 B73住 (72-6)
424 B73住 (72-7)	425 B59住 (54-5)	426 B59住 (54-6)	427 B59住 (54-8)	428 B59住 (54-7)
429 B73住 (72-15)	430 B59住 (56-3)	431 B59住 (56-6)	432 B73住 (72-16)	433 B59住 (56-4)
434 B59住 (56-5)	435 B59住 (55-15)	436 B73住 (72-17)	437 B59住 (56-7)	438 B59住 (55-13)
439 B73住 (75-1)	440 B59住 (55-12)	441 B59住 (56-1)	442 B59住 (56-8)	443 B59住 (55-14)
444 B73住 (75-2)	445 B59住 (56-2)	446 B59住 (56-9)	447 B59住 (55-4)	448 B73住 (72-8)
449 B59住 (55-1)	450 B73住 (72-9)	1126 B59住 (55-2)	451 B59住 (55-3)	452 B73住 (72-12)
453 B73住 (72-10)	454 B59住 (55-5)	455 B59住 (55-6)	456 B73住 (72-11)	457 B59住 (55-7)
458 B59住 (55-8)	459 B59住 (55-9)	460 B73住 (72-13)	461 B59住 (55-10)	462 B59住 (55-11)
463 B73住 (72-14)	464 B59住 (57-1)	465 B59住 (57-2)	466 B59住 (57-3)	467 B59住 (57-4)
468 B59住 (57-5)	469 B59住 (57-6)	470 B59住 (57-7)	471 B59住 (58-1)	472 B59住 (57-8)
473 B59住 (57-10)	474 B59住 (59-1)	475 B59住 (57-9)		

第1節 住居跡

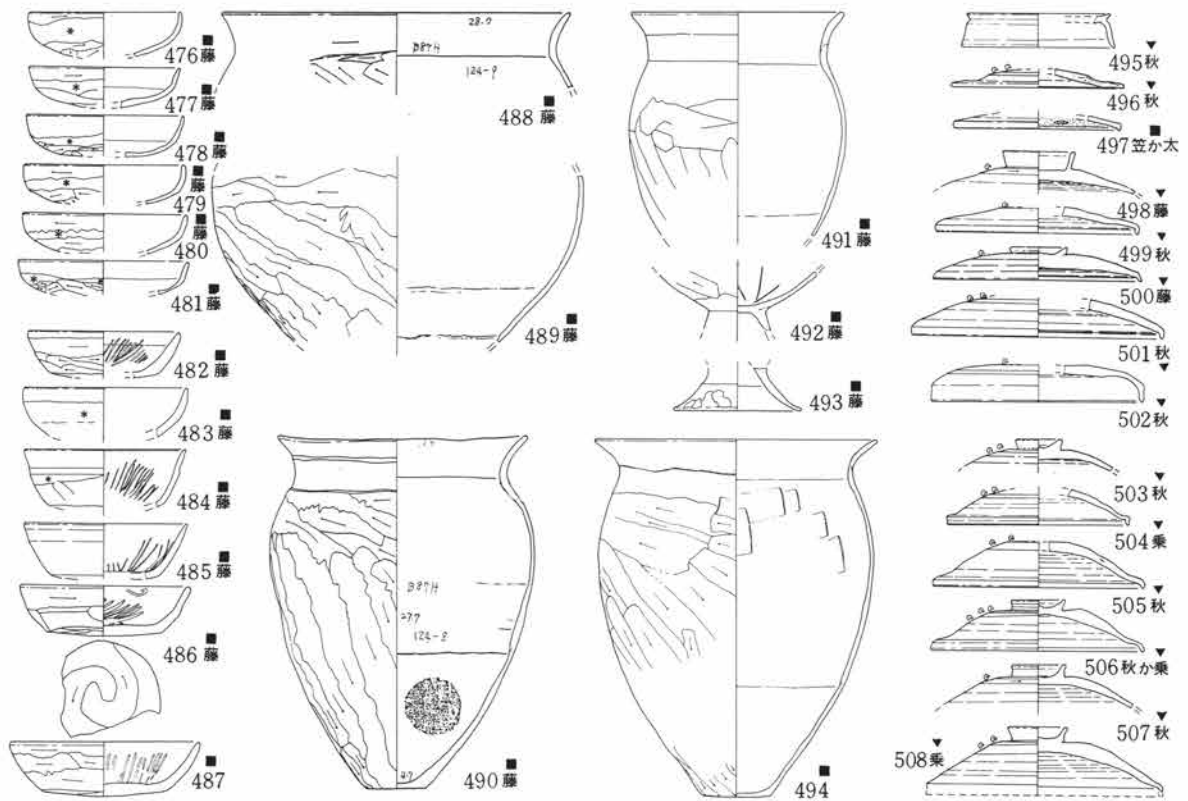


446吉・藤 ■ 第608図 B区第IV段階住居跡出土土器類(1)

第6章 まとめ



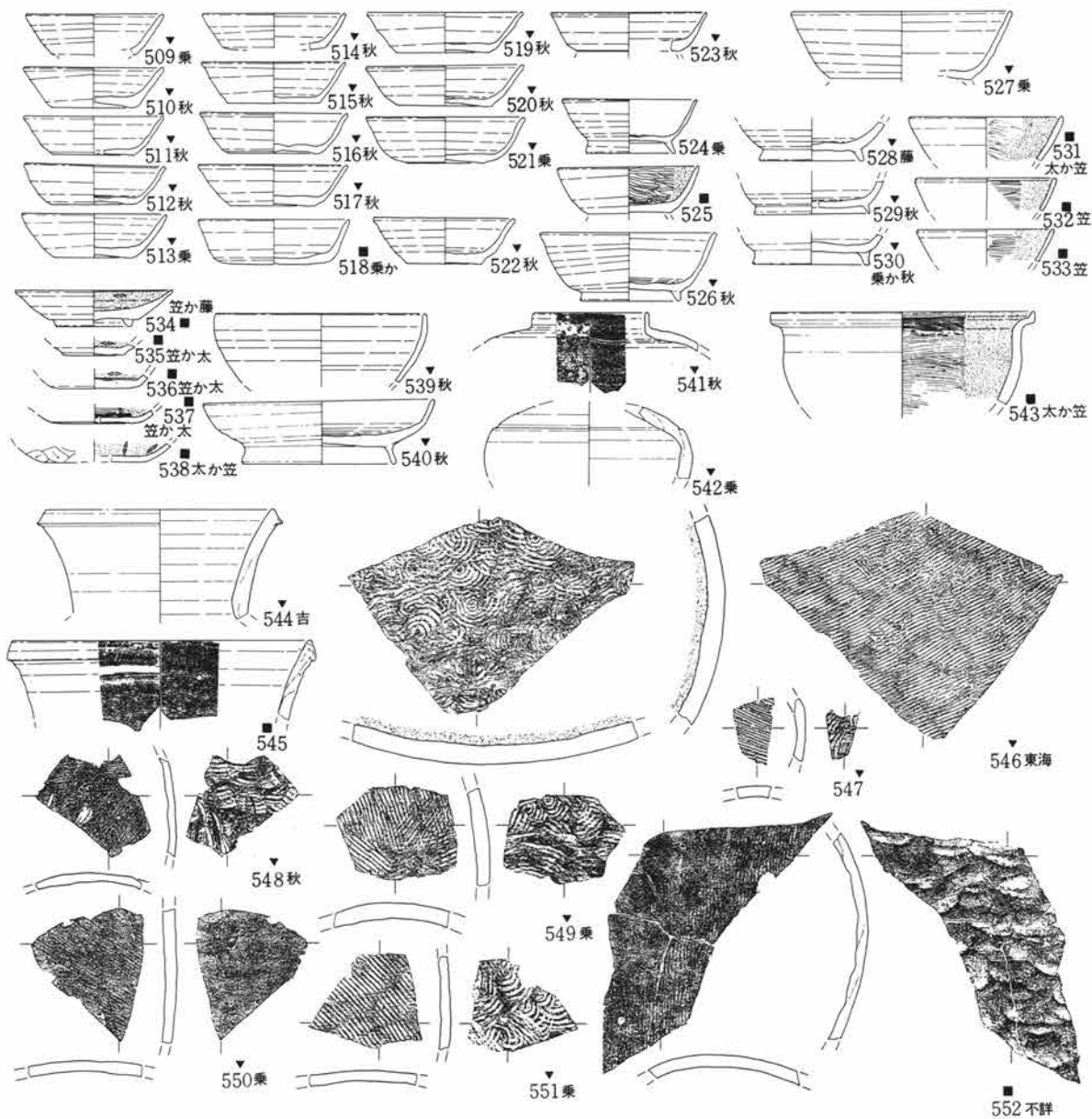
第609図 B区第IV段階住居跡出土土器類(2)



第610図 B区第V段階住居跡出土土器類(1)



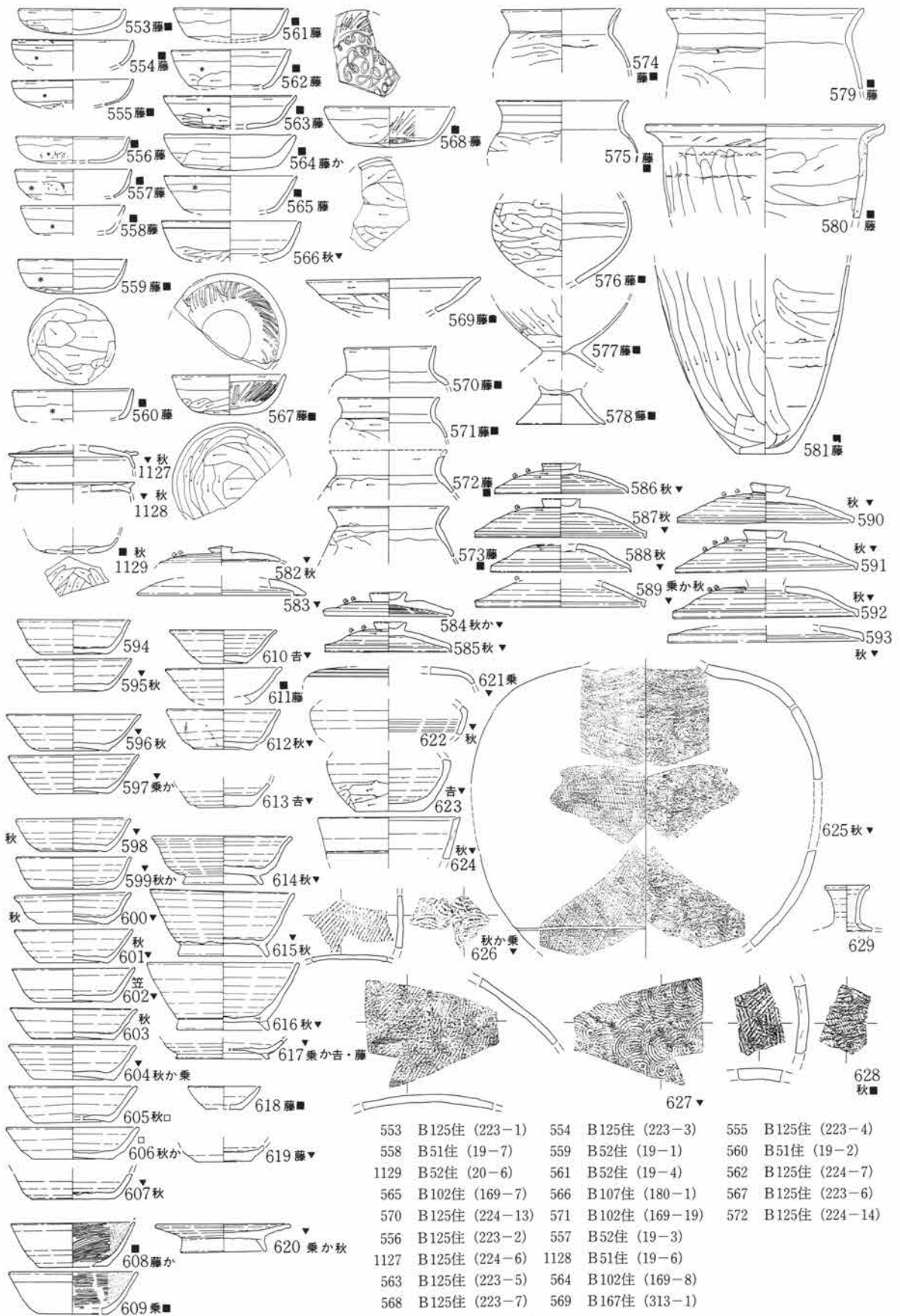
第1節 住居跡



476 B91住 (134-1)	477 B87住 (122-1)	478 B93住 (144-1)	479 B92住 (138-1)	480 B92住 (138-2)
481 B87住 (122-2)	482 B93住 (144-2)	483 B87住 (123-1)	484 B87住 (123-3)	485 B87住 (123-2)
486 B91住 (134-2)	487 B87住 (123-4)	488 B87住 (124-9)	489 B87住 (553-2)	490 B87住 (124-8)
491 B87住 (124-10)	492 B92住 (139-15)	493 B87住 (124-11)	494 B91住 (134-5)	495 B92住 (139-7)
496 B87住 (123-6)	497 B87住 (124-1)	498 B92住 (139-3)	499 B92住 (139-5)	500 B87住 (123-7)
501 B92住 (139-6)	502 B87住 (123-9)	503 B87住 (123-5)	504 B92住 (139-4)	505 B93住 (144-3)
506 B87住 (123-8)	507 B92住 (139-1)	508 B92住 (139-2)	509 B92住 (138-3)	510 B87住 (123-10)
511 B87住 (123-11)	512 B87住 (123-12)	513 B92住 (139-8)	514 B92住 (139-9)	515 B87住 (123-14)
516 B87住 (123-15)	517 B87住 (123-16)	518 B87住 (123-17)	519 B87住 (123-18)	520 B87住 (123-19)
521 B87住 (123-20)	522 B87住 (123-13)	523 B87住 (123-22)	524 B87住 (123-21)	525 B91住 (134-3)
526 B87住 (123-23)	527 B87住 (123-24)	528 B87住 (123-25)	529 B87住 (123-26)	530 B92住 (139-10)
531 B92住 (139-11)	532 B87住 (124-3)	533 B87住 (124-2)	534 B87住 (124-7)	535 B87住 (124-6)
536 B87住 (124-4)	537 B87住 (124-5)	538 B92住 (139-12)	539 B91住 (134-4)	540 B92住 (139-14)
541 B87住 (125-1)	542 B92住 (140-2)	543 B92住 (139-13)	544 B92住 (140-1)	545 B87住 (125-3)
546 B87住 (553-3)	547 B87住 (125-4)	548 B87住 (125-7)	549 B87住 (125-5)	550 B87住 (125-8)
551 B87住 (125-6)	552 B87住 (553-1)			

第611図 B区第V段階住居跡出土土器類(2)

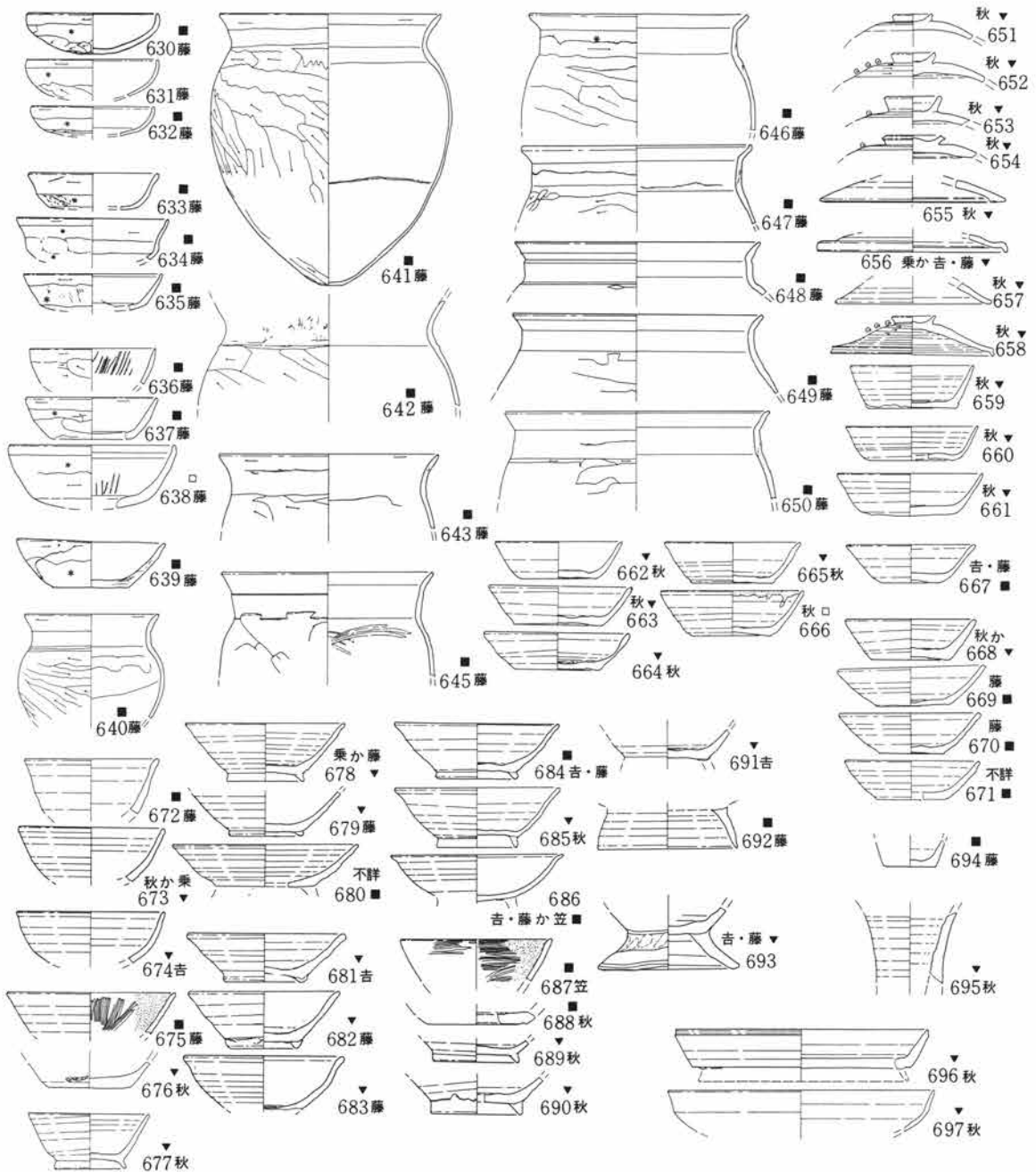
第6章 まとめ



第612図 B区第VI段階住居跡出土土器類

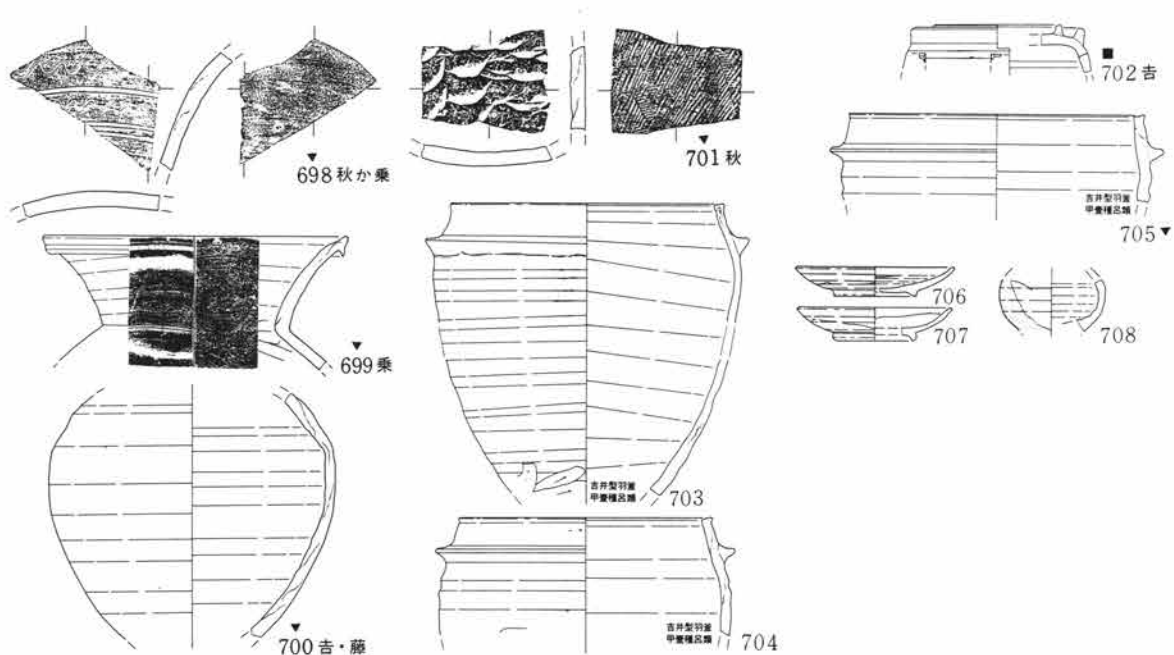
553 B125住 (223-1)	554 B125住 (223-3)	555 B125住 (223-4)
558 B51住 (19-7)	559 B52住 (19-1)	560 B51住 (19-2)
1129 B52住 (20-6)	561 B52住 (19-4)	562 B125住 (224-7)
565 B102住 (169-7)	566 B107住 (180-1)	567 B125住 (223-6)
570 B125住 (224-13)	571 B102住 (169-19)	572 B125住 (224-14)
556 B125住 (223-2)	557 B52住 (19-3)	
1127 B125住 (224-6)	1128 B51住 (19-6)	
563 B125住 (223-5)	564 B102住 (169-8)	
568 B125住 (223-7)	569 B167住 (313-1)	
573 B125住 (224-15)		

- |                    |                    |                    |                    |                    |
|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| 574 B102住 (169-20) | 575 B51住 (20-9)    | 576 B125住 (224-16) | 577 B52住 (20-10)   | 578 B125住 (224-17) |
| 579 B175住 (328-5)  | 580 B175住 (328-6)  | 581 B167住 (314-1)  | 582 B102住 (169-10) | 583 B50住 (18-2)    |
| 584 B50住 (18-1)    | 585 B125住 (224-1)  | 586 B125住 (224-2)  | 587 B125住 (224-3)  | 588 B51住 (19-5)    |
| 589 B102住 (169-11) | 590 B102住 (169-9)  | 591 B125住 (224-4)  | 592 B125住 (224-5)  | 593 B102住 (169-12) |
| 594 B102住 (169-13) | 595 B125住 (224-8)  | 596 B125住 (224-9)  | 597 B125住 (224-11) | 598 B102住 (169-14) |
| 599 B50住 (18-3)    | 600 B52住 (19-9)    | 601 B102住 (169-15) | 602 B125住 (224-10) | 603 B102住 (169-16) |
| 604 B52住 (19-11)   | 605 B51住 (20-1)    | 606 B52住 (20-2)    | 607 B125住 (224-12) | 608 B51住 (20-7)    |
| 609 B50住 (20-8)    | 610 B51住 (19-8)    | 611 B175住 (328-2)  | 612 B52住 (19-10)   | 613 B175住 (328-3)  |
| 614 B52住 (20-4)    | 615 B102住 (169-17) | 616 B102住 (169-18) | 617 B107住 (181-2)  | 618 B175住 (328-1)  |
| 619 B51住 (20-3)    | 620 B52住 (20-5)    | 621 B51住 (20-11)   | 622 B51住 (20-12)   | 623 B125住 (224-18) |
| 624 B51住 (20-13)   | 625 B51住 (20-14)   | 626 B50住 (18-4)    | 627 B125住 (224-19) | 628 B167住 (313-2)  |
| 629 B175住 (328-4)  |                    |                    |                    |                    |



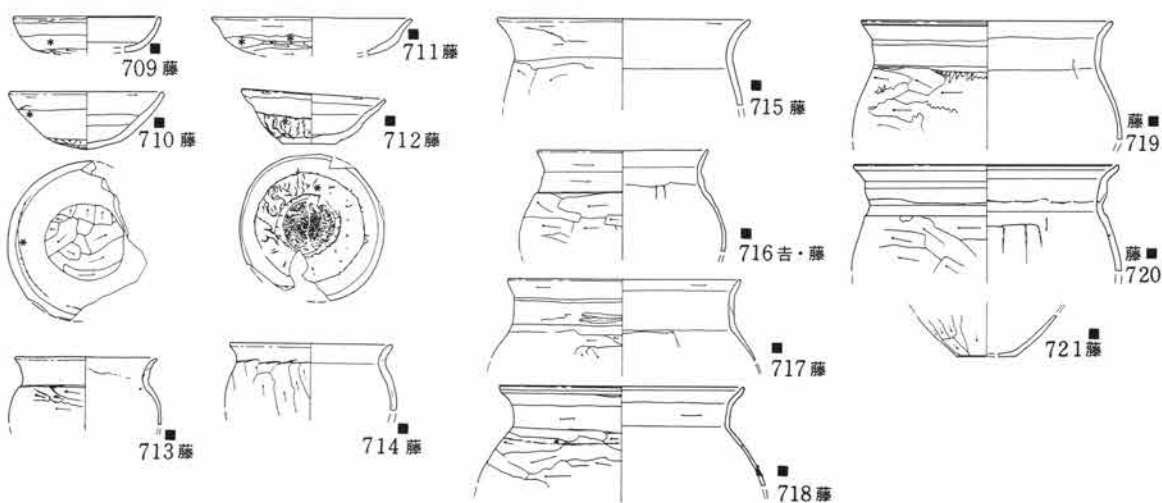
第613図 B区第VII段階住居跡出土土器類(1)

第6章 まとめ



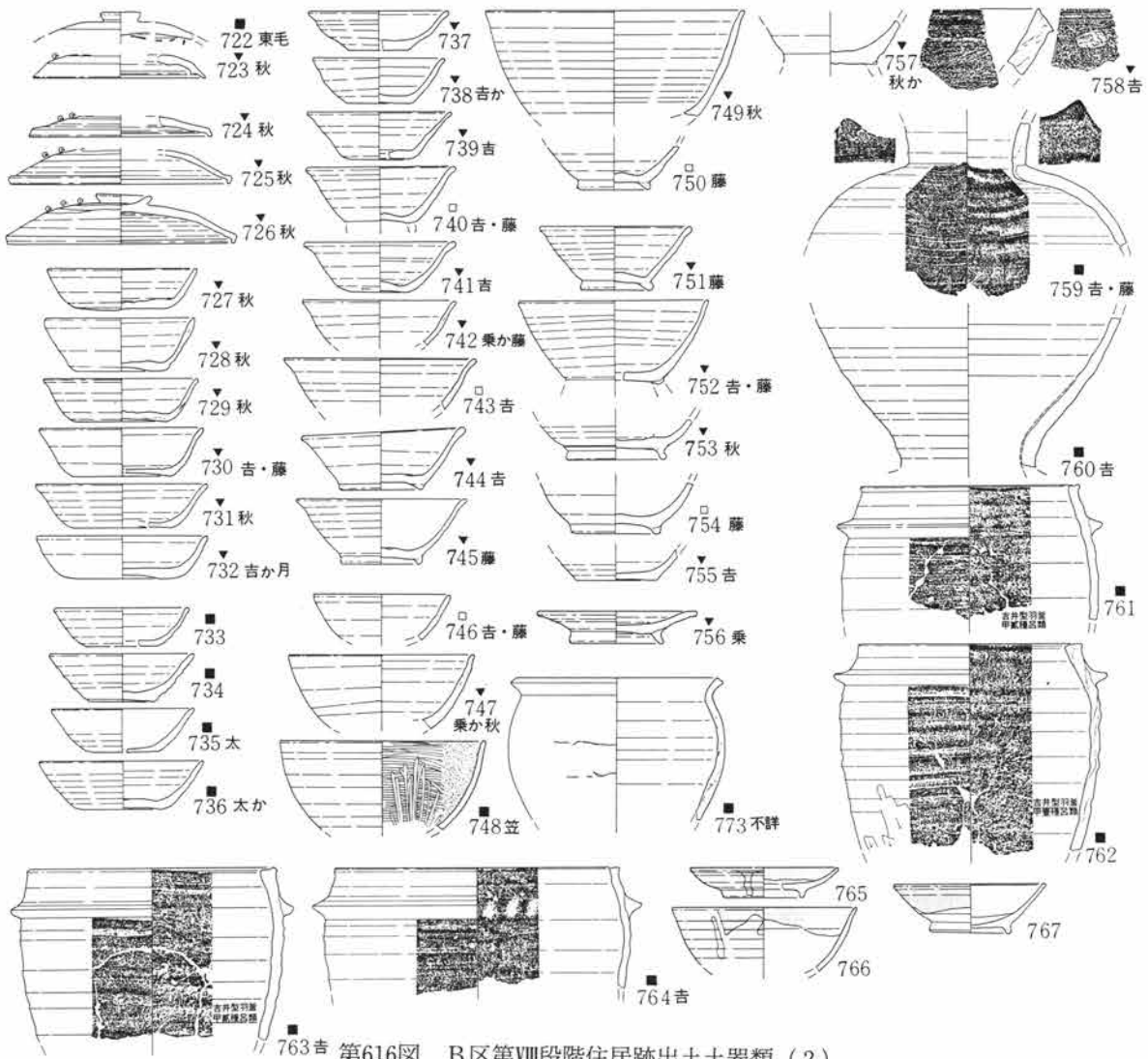
- |                    |                    |                   |                    |                    |
|--------------------|--------------------|-------------------|--------------------|--------------------|
| 630 A175住 (388-1)  | 631 B124住 (220-2)  | 632 B124住 (220-1) | 633 B85住 (117-1)   | 634 B175住 (388-2)  |
| 635 B85住 (117-2)   | 636 B124住 (220-3)  | 637 B124住 (220-4) | 638 B124住 (220-5)  | 639 B77住 (86-3)    |
| 640 B124住 (221-5)  | 641 B77住 (87-3)    | 642 B124住 (221-4) | 643 B124住 (221-3)  | 645 B85住 (118-6)   |
| 646 B77住 (87-2)    | 647 B85住 (118-7)   | 648 A175住 (388-4) | 649 A175住 (388-5)  | 650 A175住 (389-1)  |
| 651 B124住 (220-8)  | 652 B124住 (220-7)  | 653 B77住 (86-1)   | 654 B77住 (86-2)    | 655 B94住 (147-1)   |
| 656 B94住 (147-2)   | 657 A175住 (389-2)  | 658 B124住 (220-6) | 659 B124住 (220-9)  | 660 B124住 (220-11) |
| 661 A174住 (384-4)  | 662 B124住 (220-10) | 663 B85住 (117-5)  | 664 B85住 (117-6)   | 665 B124住 (220-13) |
| 666 B124住 (220-12) | 667 A174住 (384-1)  | 668 B85住 (117-3)  | 669 B124住 (220-14) | 670 B85住 (117-4)   |
| 671 A174住 (384-2)  | 672 A174住 (384-3)  | 673 B77住 (86-5)   | 674 A175住 (388-3)  | 675 B85住 (118-5)   |
| 676 B124住 (220-15) | 677 B124住 (220-16) | 678 B85住 (118-1)  | 679 B77住 (87-1)    | 680 A174住 (385-2)  |
| 681 B85住 (117-7)   | 682 A174住 (385-1)  | 683 B77住 (86-6)   | 684 B77住 (86-7)    | 685 B85住 (118-2)   |
| 686 A174住 (385-3)  | 687 B85住 (118-4)   | 688 B94住 (147-3)  | 689 B77住 (86-8)    | 690 B77住 (86-9)    |
| 691 A77住 (86-4)    | 692 A174住 (385-4)  | 693 A174住 (385-5) | 694 B85住 (118-3)   | 695 B94住 (147-4)   |
| 696 B77住 (87-4)    | 697 B124住 (221-2)  | 698 B124住 (221-6) | 699 B77住 (87-5)    | 700 A174住 (385-6)  |
| 701 A174住 (386-4)  | 702 B124住 (221-1)  | 703 A174住 (386-1) | 704 A174住 (386-2)  | 705 A174住 (386-3)  |
| 706 A174住 (386-7)  | 707 A174住 (386-6)  | 708 B94住 (147-5)  |                    |                    |
| 709 B116住 (193-1)  | 710 B118住 (198-2)  | 711 B61住 (62-1)   | 712 B118住 (198-1)  | 713 B61住 (63-3)    |

第614図 B区第VII段階住居跡出土土器類(2)

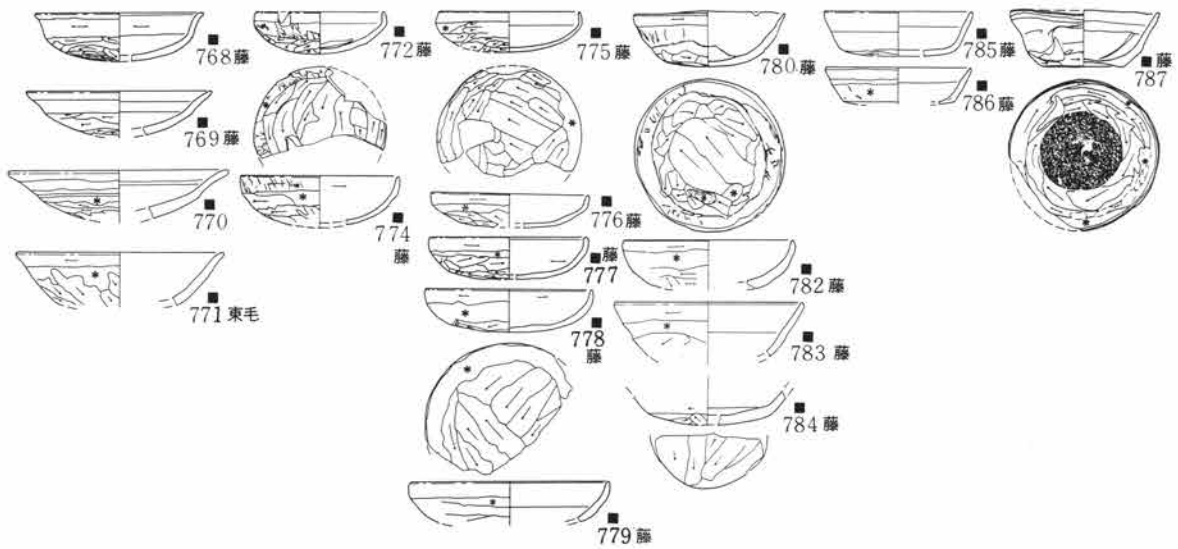


第615図 B区第VIII段階住居跡出土土器類(1)

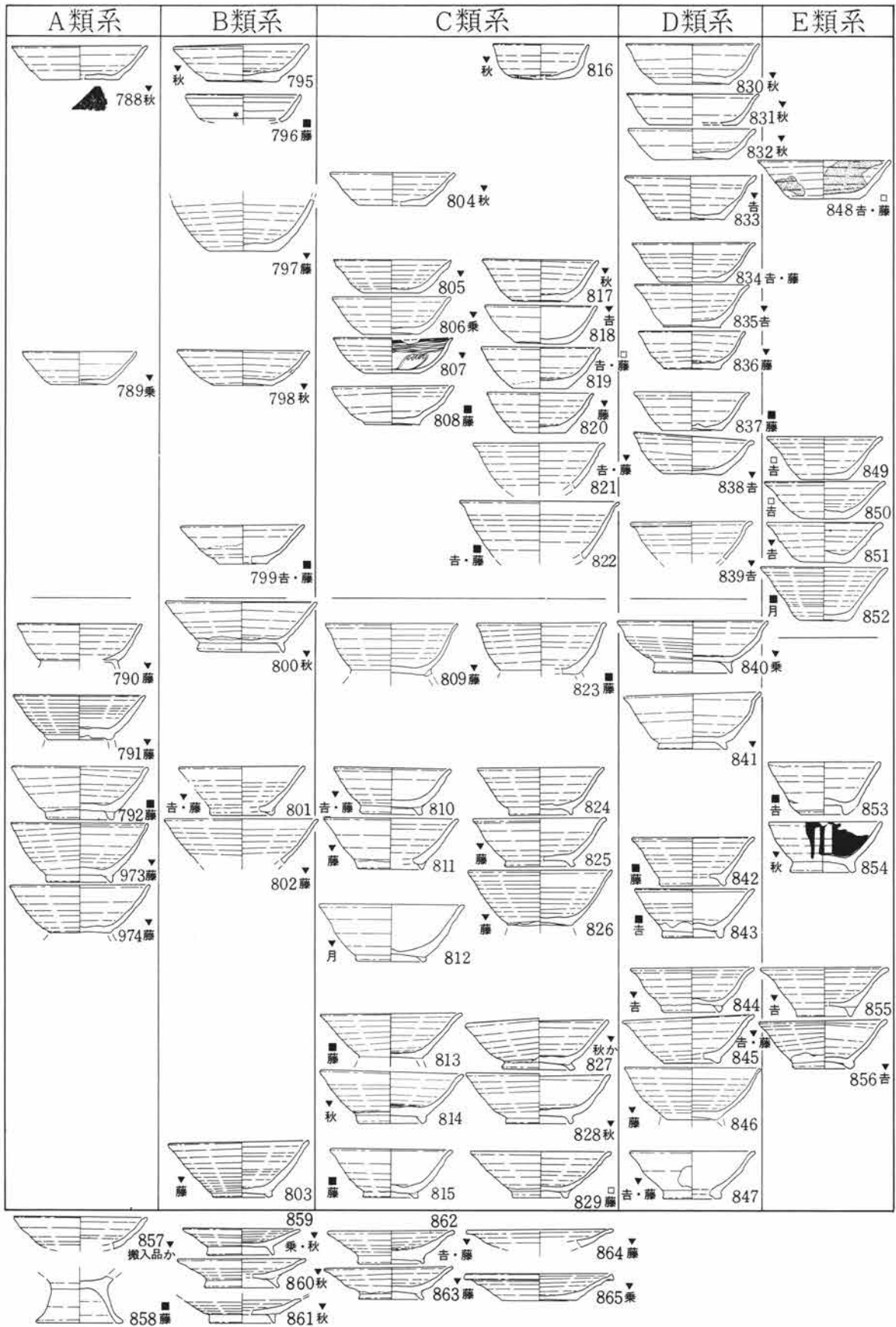
第1節 住居跡



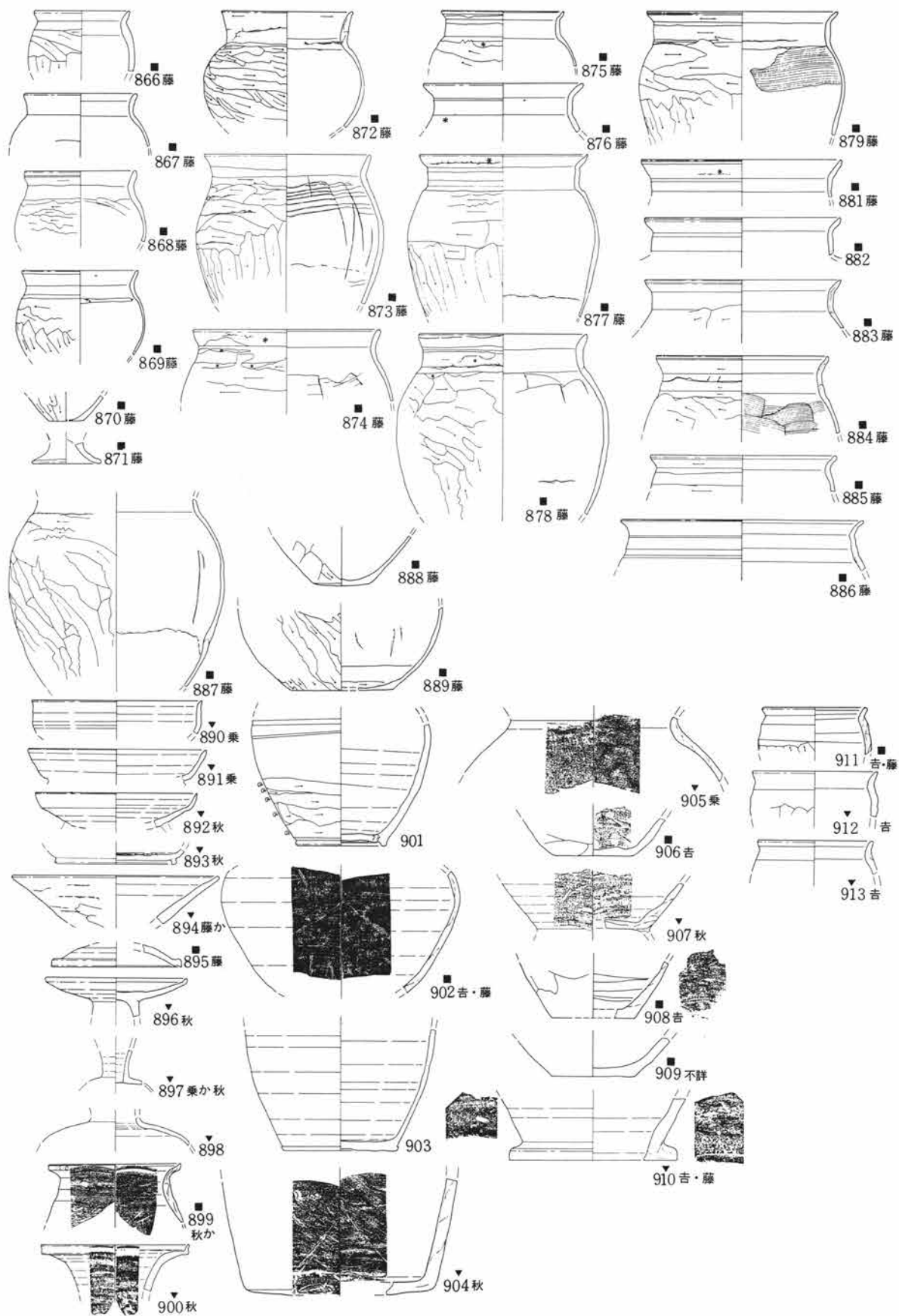
第616図 B区第VIII段階住居跡出土土器類(2)



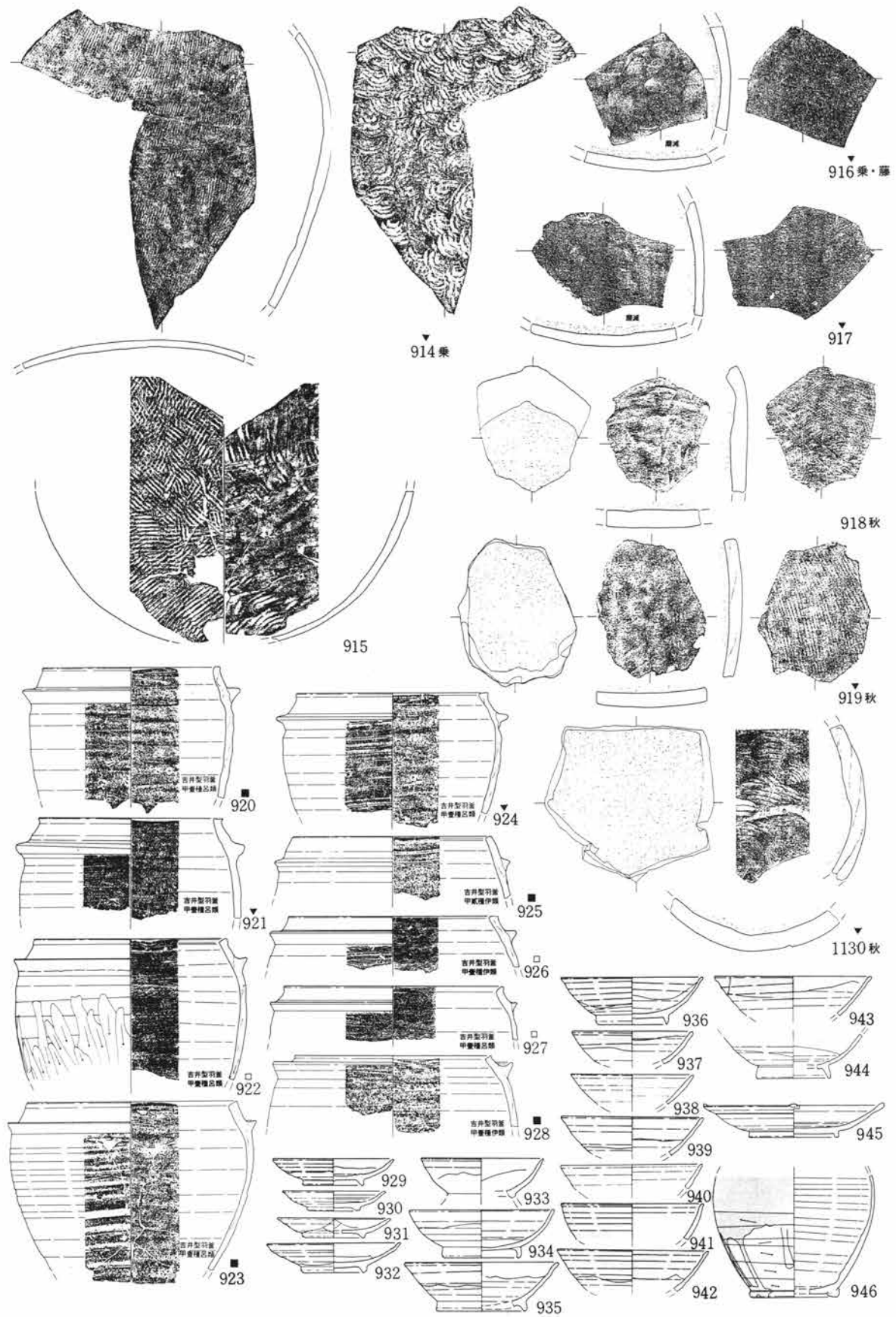
第617図 B区第IX段階住居跡出土土器類(1)



第618図 B区第IX段階住居跡出土土器類(2)



第619図 B区第IX段階住居跡出土土器類(3)



第620図 B区第IX段階住居跡出土土器類(4)

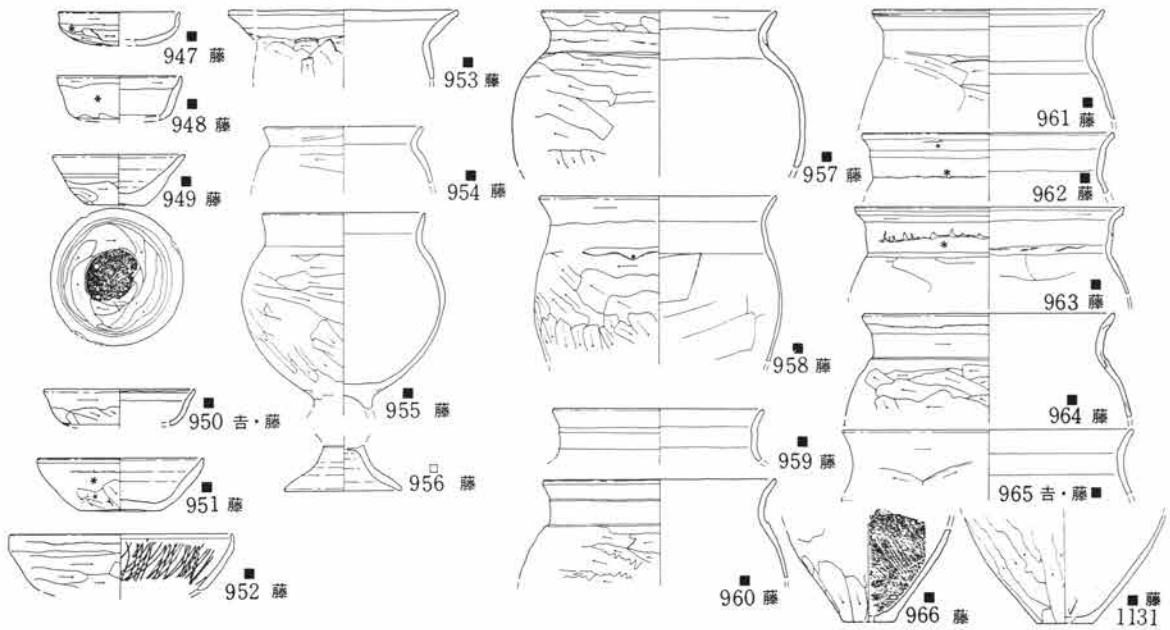


第1節 住居跡

714	B131住 (244-7)	715	B118住 (199-11)	716	B61住 (63-4)	717	B122住 (213-8)	718	A166住 (382-3)
719	A156住 (357-1)	720	A166住 (382-4)	721	B122住 (213-9)	722	B131住 (244-5)	723	B61住 (62-2)
724	B61住 (62-3)	725	B61住 (62-4)	726	B61住 (62-5)	727	B118住 (199-4)	728	B61住 (62-6)
729	B61住 (62-7)	730	B61住 (63-1)	731	B122住 (213-3)	732	B131住 (244-2)	733	B118住 (198-5)
734	B118住 (199-2)	735	B122住 (213-1)	736	B122住 (213-2)	737	B118住 (198-4)	738	B118住 (198-3)
739	B118住 (199-1)	740	B118住 (199-5)	741	B118住 (199-3)	742	B61住 (62-8)	743	B116住 (193-2)
744	B118住 (199-7)	745	B122住 (213-4)	746	B131住 (244-1)	747	B61住 (63-2)	748	B116住 (193-3)
749	B122住 (213-6)	750	B118住 (199-8)	751	B118住 (199-6)	752	B122住 (213-5)	753	B122住 (213-7)
754	B131住 (244-4)	755	B131住 (244-3)	756	B118住 (199-10)	773	B118住 (199-12)	757	B118住 (199-9)
758	B61住 (63-5)	759	B118住 (200-1)	760	B131住 (244-6)	761	B118住 (200-2)	762	B118住 (200-3)
763	B118住 (200-4)	764	B118住 (200-5)	765	B131住 (244-8)	766	B131住 (244-9)	767	B118住 (200-6)

768	A158住 (363-3)	769	A158住 (363-4)	770	A164住 (375-2)	771	A164住 (375-1)	772	A166住 (381-1)
774	A166住 (381-3)	775	A166住 (381-2)	776	B95住 (150-1)	777	A158住 (363-1)	778	B181住 (330-1)
779	A158住 (363-2)	780	A186住 (411-2)	782	B105住 (175-2)	783	A194住 (439-1)	784	B95住 (150-2)
785	B152住 (290-1)	786	B105住 (175-1)	787	A186住 (411-1)	788	A187住 (414-3)	789	B139住 (264-1)
790	A166住 (384-5)	791	A187住 (414-6)	792	A164住 (375-3)	793	B56住 (39-7)	794	A156住 (356-2)
795	A166住 (381-6)	796	A187住 (414-1)	797	B78住 (91-8)	798	B78住 (91-7)	799	B56住 (39-4)
800	B78住 (91-11)	801	A204住 (459-1)	802	B56住 (40-1)	803	A166住 (381-7)	804	B56住 (39-5)
805	B130住 (239-2)	806	B139住 (264-2)	807	A186住 (411-7)	808	A187住 (414-4)	809	B139住 (264-3)
810	B119住 (206-3)	811	A160住 (369-1)	812	A21住 (338-1)	813	A181住 (406-4)	814	A181住 (406-5)
815	A194住 (439-3)	816	A166住 (381-4)	817	B78住 (91-2)	818	B119住 (206-1)	819	B56住 (39-3)
820	B56住 (39-2)	821	B130住 (239-5)	822	A204住 (459-2)	823	B56住 (39-6)	824	A21住 (337-3)
825	A21住 (337-4)	826	A187住 (414-7)	827	A181住 (406-6)	828	A166住 (382-1)	829	A159住 (366-1)
830	B105住 (175-4)	831	A187住 (414-2)	832	B78住 (91-3)	833	A186住 (411-4)	834	A156住 (356-1)
835	A186住 (411-3)	836	B78住 (91-1)	837	A21住 (337-1)	838	A187住 (414-5)	839	A194住 (439-2)
840	B78住 (91-13)	841	B105住 (175-5)	842	A21住 (337-2)	843	A186住 (411-5)	844	B152住 (290-3)
845	B120住 (209-1)	846	B139住 (264-4)	847	A194住 (439-4)	848	A181住 (406-1)	849	B130住 (239-1)
850	B130住 (239-3)	851	B119住 (206-2)	852	B130住 (239-4)	853	A157住 (360-1)	854	A157住 (360-2)
855	B152住 (290-2)	856	A186住 (411-6)	857	A157住 (361-1)	858	A187住 (415-2)	859	A187住 (414-8)
860	B78住 (91-14)	861	A159住 (366-2)	862	B56住 (40-2)	863	B56住 (40-3)	864	A166住 (382-5)
865	B78住 (91-15)	866	A21住 (338-2)	867	A158住 (364-1)	868	A194住 (439-5)	869	A156住 (356-3)
870	B56住 (41-10)	871	A188住 (426-4)	872	B181住 (330-2)	873	A21住 (338-4)	874	A188住 (426-2)
875	A166住 (382-2)	876	A159住 (366-3)	877	B105住 (176-1)	878	A188住 (426-1)	879	A181住 (406-7)
881	A156住 (357-2)	882	B56住 (41-9)	883	B56住 (41-8)	884	B128住 (233-1)	885	B56住 (41-7)
886	A188住 (426-3)	887	B78住 (92-2)	888	A158住 (364-2)	889	A156住 (357-3)	890	A166住 (382-7)
891	B105住 (176-2)	892	A166住 (382-6)	893	B78住 (92-3)	894	B119住 (206-5)	895	B56住 (39-1)
896	B128住 (233-3)	897	B139住 (264-5)	898	B78住 (92-4)	899	B56住 (4-11)	900	A21住 (338-3)
901	A166住 (382-8)	902	A156住 (357-4)	903	B139住 (265-1)	904	B105住 (176-4)	905	B105住 (176-3)
906	B130住 (241-1)	907	B78住 (92-5)	908	B119住 (206-6)	909	A164住 (375-5)	910	A21住 (338-8)
911	A186住 (411-8)	912	B152住 (290-4)	913	B152住 (290-5)	914	A158住 (365-1)	915	A158住 (364-3)
916	B130住 (241-3)	917	B130住 (241-2)	918	B78住 (551-2)	919	B78住 (551-1)	920	A21住 (338-5)
921	A187住 (415-3)	922	A186住 (411-9)	923	A21住 (338-6)	924	A21住 (338-7)	925	B120住 (209-2)
926	A186住 (411-11)	927	A186住 (411-10)	928	A194住 (439-6)	929	A157住 (361-3)	930	B130住 (241-4)
931	B130住 (241-5)	932	A186住 (411-12)	933	B105住 (176-5)	934	B119住 (206-10)	935	A157住 (361-10)
936	A157住 (361-5)	937	A157住 (361-4)	938	B130住 (241-6)	939	A157住 (361-6)	940	B130住 (241-7)
941	A157住 (361-7)	942	A157住 (361-8)	943	A157住 (361-9)	944	A194住 (439-7)	945	A188住 (426-5)
946	A160住 (369-5)	1130	B78住 (551-3)						

第6章 ま と め



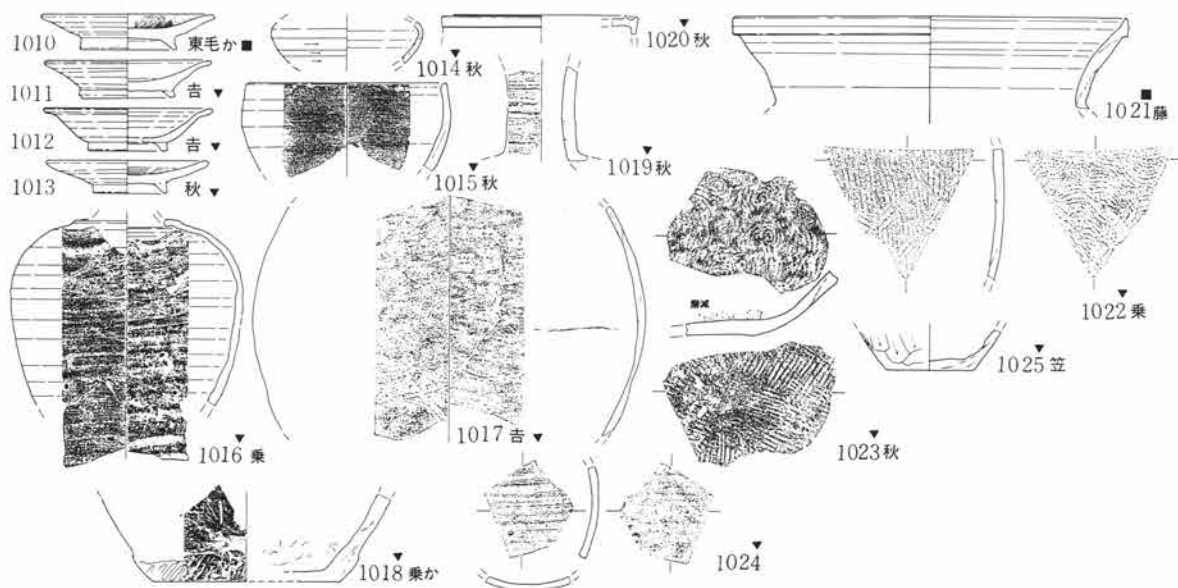
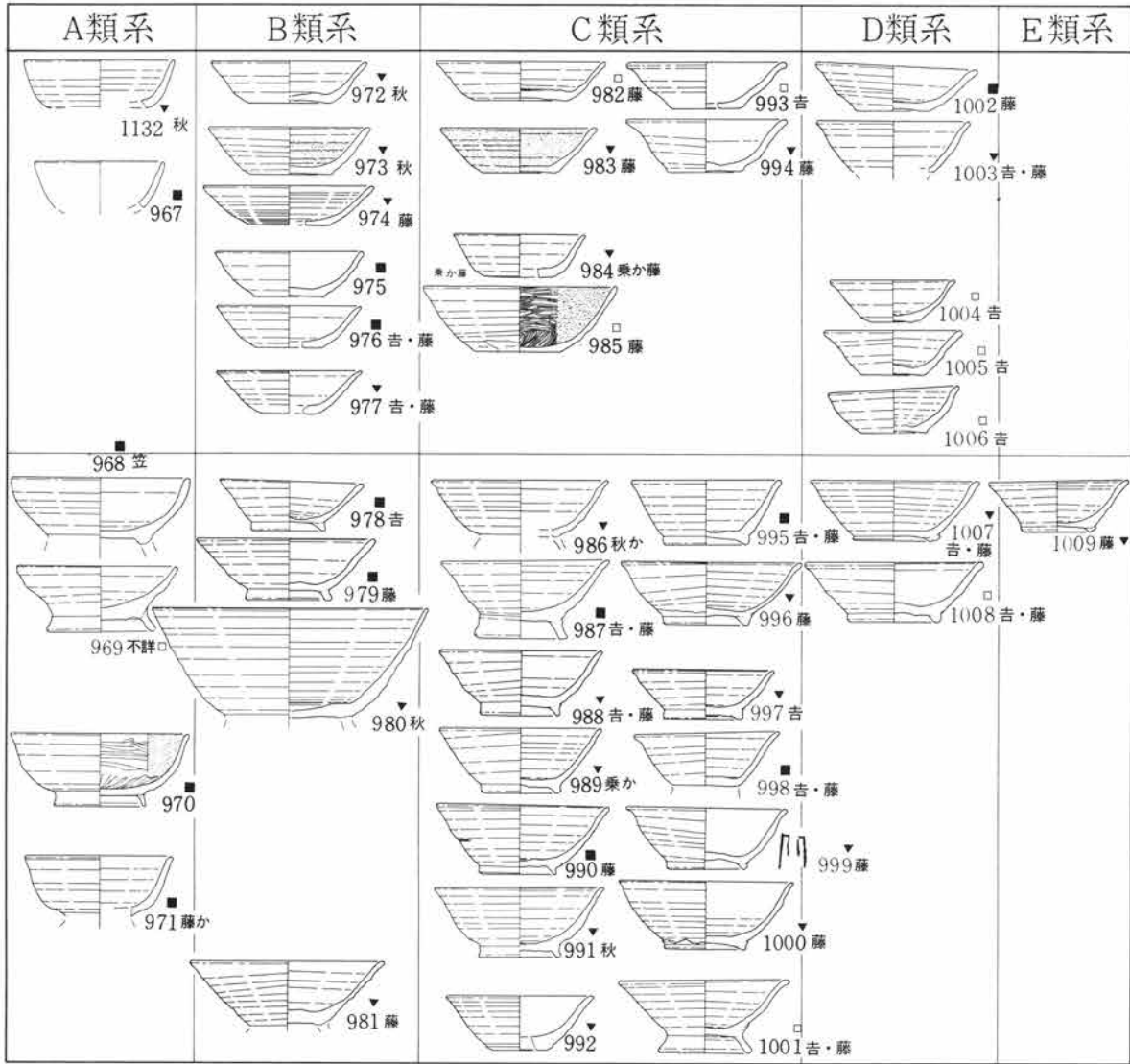
947 B89住 (128-1)	948 B115住 (191-1)	949 B127住 (165-1)	950 B53住 (28-2)	951 B115住 (191-2)
952 B53住 (28-1)	953 B111住 (185-3)	954 B123住 (216-4)	955 B89住 (128-2)	956 B127住 (165-2)
957 B115住 (192-6)	958 B89住 (128-3)	959 B104住 (174-3)	960 B53住 (29-4)	961 B104住 (174-4)
962 B104住 (175-5)	963 B135住 (254-2)	964 B53住 (29-5)	965 B89住 (128-4)	966 B115住 (192-7)
1131 B135住 (254-3)	1132 B123住 (216-2)	967 B123住 (216-1)	968 B127住 (165-8)	969 B161住 (298-1)
970 B127住 (166-4)	971 B127住 (165-9)	972 B126住 (228-1)	973 B89住 (129-1)	974 B103住 (173-1)
975 B111住 (185-1)	976 B161住 (297-1)	977 B49住 (15-1)	978 B127住 (165-6)	979 B115住 (192-3)
980 B126住 (228-5)	981 B53住 (28-3)	982 B89住 (129-3)	983 B135住 (253-2)	984 B162住 (301-1)
985 B89住 (129-8)	986 B126住 (228-4)	987 B161住 (298-2)	988 B49住 (15-5)	989 B111住 (185-2)
990 B135住 (254-1)	991 B126住 (228-3)	992 B162住 (301-2)	993 B162住 (301-5)	994 B89住 (129-2)
995 B161住 (297-3)	996 B89住 (129-6)	997 B115住 (192-1)	998 B161住 (297-2)	999 B89住 (128-5)
1000 B104住 (174-1)	1001 B127住 (165-7)	1002 B135住 (253-1)	1003 B49住 (15-4)	1004 B127住 (165-3)
1005 B49住 (15-2)	1006 B127住 (165-4)	1007 B89住 (129-5)	1008 B89住 (129-4)	1009 B127住 (165-5)
1010 B127住 (166-3)	1011 B117住 (197-1)	1012 B115住 (192-2)	1013 B89住 (129-7)	1014 B117住 (197-2)
1015 B53住 (29-3)	1016 B127住 (166-5)	1017 B89住 (129-12)	1018 B111住 (185-4)	1019 B89住 (129-9)
1020 B123住 (216-3)	1021 B49住 (16-5)	1022 B89住 (129-11)	1023 B53住 (29-6)	1024 B89住 (129-10)
1025 B49住 (16-2)	1026 B49住 (16-4)	1027 B162住 (301-7)	1028 B127住 (166-6)	1029 B127住 (166-7)
1030 B49住 (16-3)	1031 B161住 (298-3)	1032 B127住 (166-8)	1033 B127住 (166-9)	1034 B127住 (166-11)
1035 B115住 (192-8)	1036 B127住 (166-10)	1037 B161住 (298-4)	1038 B89住 (129-13)	1039 B127住 (166-12)
1040 B127住 (166-13)				

第621図 B区第X段階住居跡出土土器類(1)

形状がA・B分類系に該当するものが多かったことも一つの特徴として捉えることが出来る。又、一概に秋間古窯跡群と言っても、古代「飽間郷」に比定される地域であり、広域の中に大きい単位で4支群以上の群構成が考えられる。そして、この支群毎に執拗に保持する器形(A～E類系の器形を示す)があったことも想起されるところでもあり、B区の須恵器杯・類にA・B類系秋間古窯跡群製品が多く認められた事は、秋間古窯跡群中でも主体的位置を担わされた支群の製品であったのかもしれない。

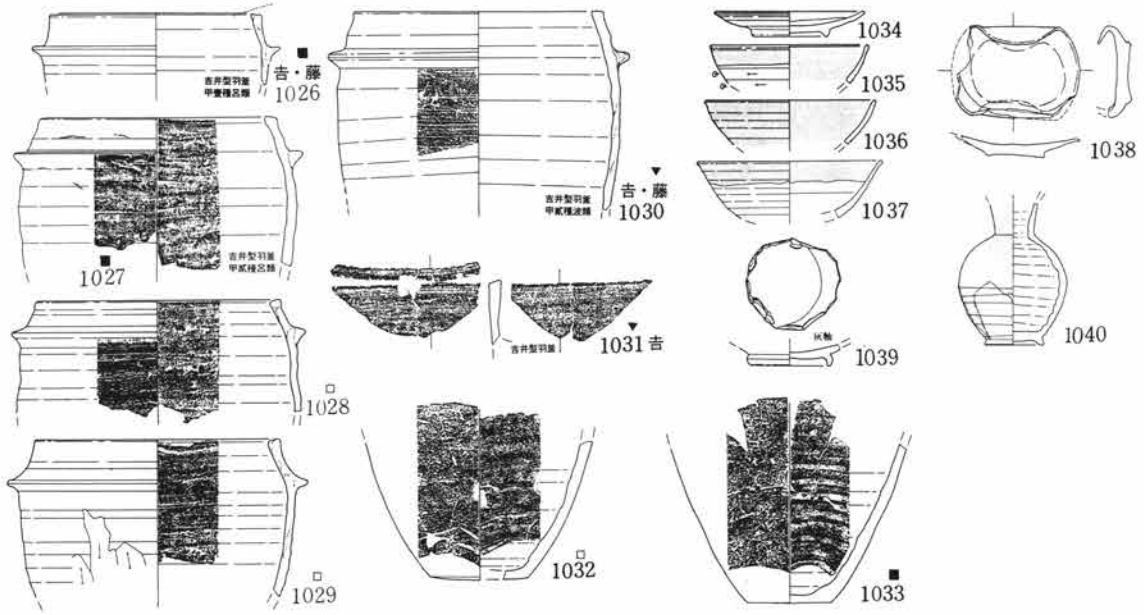
一方、第3分冊で設定した須恵器杯・類A～E類系は、第4分冊で報告したC区でも確実に認められた。このA～E類系の各類系毎に、胎土もある程度までは共通しており、更に、類に限れば、高台の接合技法も各類系中の胎土の特徴とが概ね一致する傾向が認められる。

これらの須恵器杯・類、土師器杯の各段階は、第630～632図中に住居形状の各段階と共に表わした。

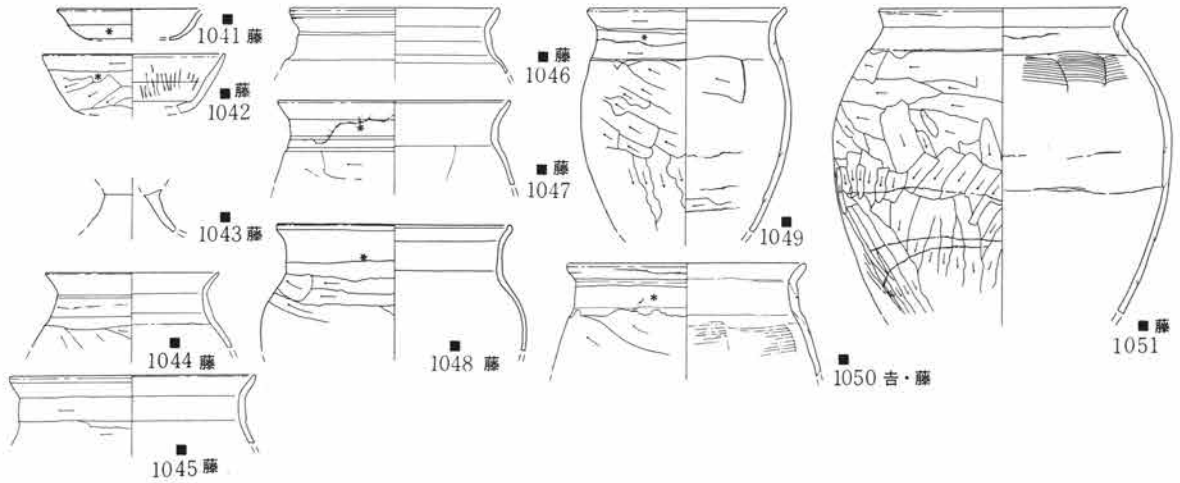


第622図 B区第X段階住居跡出土土器類(2)

第6章 まとめ

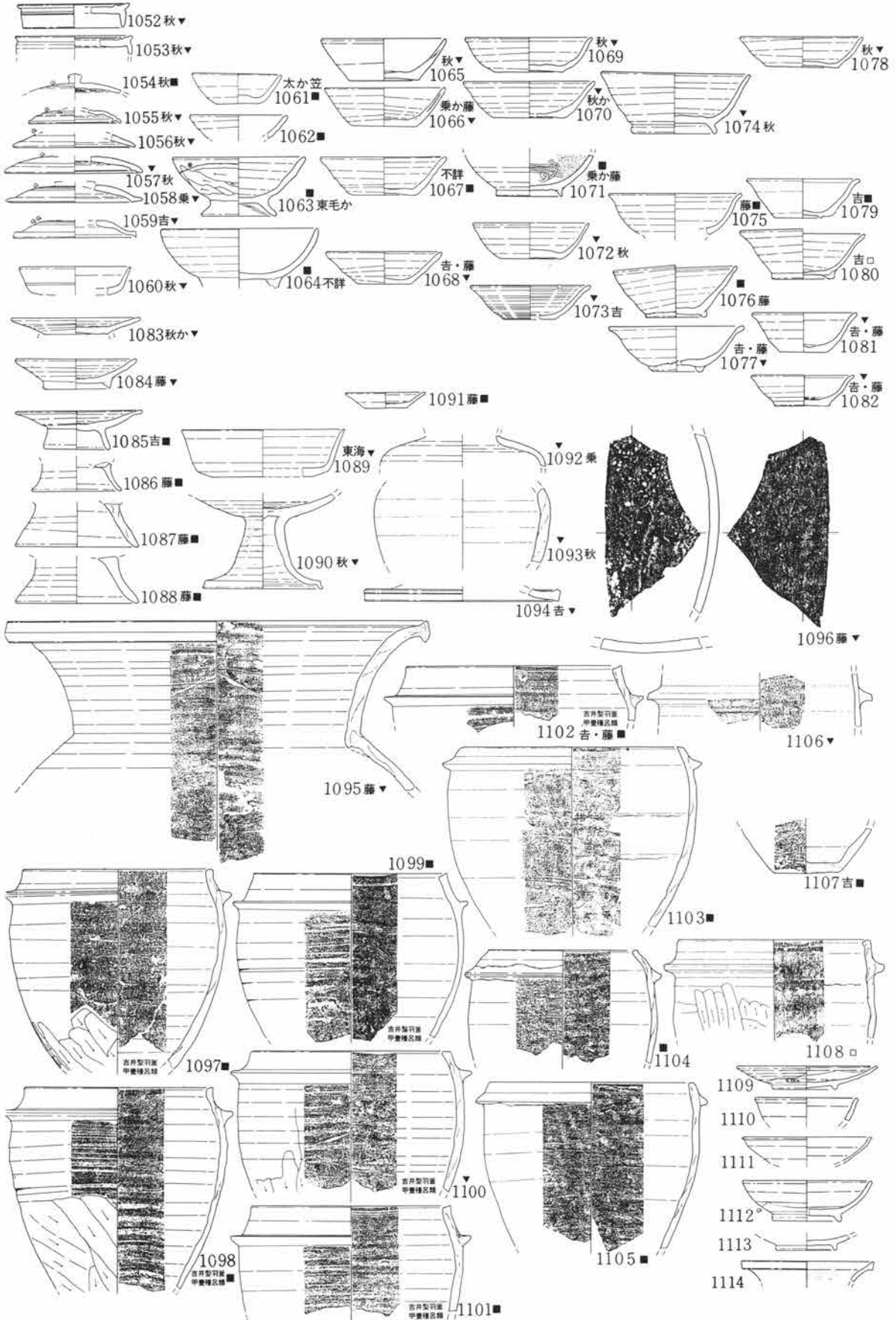


第623図 B区第X段階住居跡出土土器類(3)



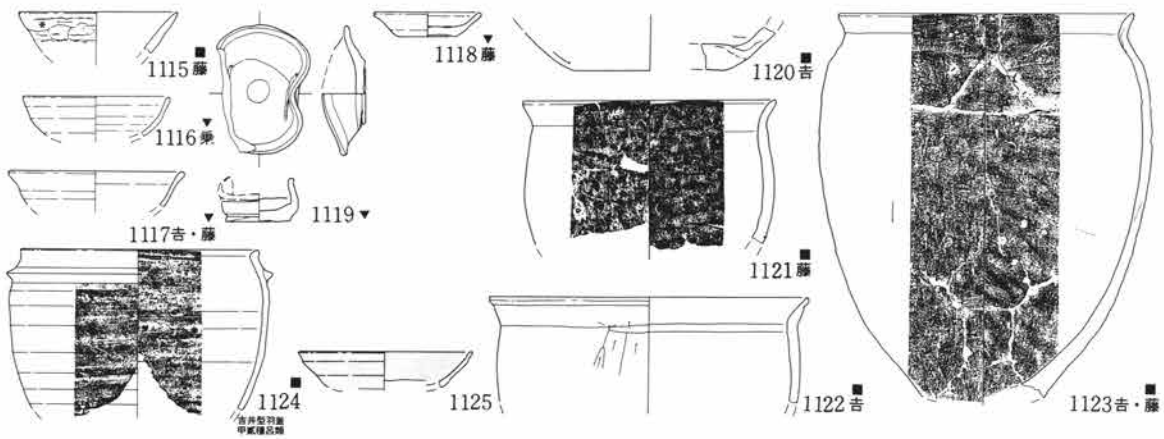
1041	B76住 (80-1)	1042	B153住 (266-1)	1043	B76住 (81-2)	1044	B132住 (246-3)	1045	B136住 (256-4)
1046	B136住 (256-3)	1047	B76住 (81-4)	1048	B76住 (81-5)	1049	A155住 (355-3)	1050	B83住 (115-10)
1051	A155住 (355-4)	1052	B98住 (155-1)	1053	B75住 (78-1)	1054	B136住 (256-1)	1055	A191住 (432-1)
1056	B76住 (80-3)	1057	B76住 (80-4)	1058	B76住 (80-5)	1059	B136住 (256-2)	1060	B83住 (115-2)
1061	B136住 (256-5)	1062	B98住 (155-7)	1063	B83住 (114-2)	1064	A193住 (438-4)	1065	B98住 (155-3)
1066	B83住 (115-4)	1067	B136住 (256-7)	1068	B83住 (115-3)	1069	B75住 (78-3)	1070	B153住 (266-2)
1071	B98住 (156-4)	1072	B132住 (246-1)	1073	B136住 (256-6)	1074	B75住 (78-4)	1075	B83住 (115-5)
1076	A193住 (438-3)	1077	B101住 (169-1)	1078	B75住 (78-2)	1079	A193住 (438-2)	1080	A191住 (431-1)
1081	B98住 (155-2)	1082	A193住 (438-1)	1083	B83住 (115-9)	1084	B83住 (115-8)	1085	B98住 (156-2)
1086	B98住 (155-6)	1087	B98住 (155-8)	1088	B98住 (156-1)	1089	B136住 (256-8)	1090	B83住 (115-12)
1091	B83住 (115-1)	1092	B83住 (115-11)	1093	B98住 (140-3)	1094	A191住 (432-3)	1095	B136住 (257-1)
1096	A191住 (433-1)	1097	B98住 (156-6)	1098	B98住 (156-7)	1099	B98住 (156-8)	1100	B136住 (257-3)
1101	B98住 (156-9)	1102	B98住 (157-1)	1103	B83住 (115-15)	1104	B101住 (169-3)	1105	B101住 (169-4)
1106	B83住 (115-13)	1107	B98住 (156-10)	1108	B83住 (115-14)	1109	B98住 (157-6)	1110	A197住 (446-6)
1111	A191住 (432-4)	1112	B98住 (157-5)	1113	B83住 (115-18)	1114	B98住 (157-7)		

第624図 B区第XI段階住居跡出土土器類(1)



第625図 B区第XI段階住居跡出土土器類(2)

第6章 まとめ



					1115 B141住 (268-1)
1116 B121住 (218-1)	1117 A201住 (453-2)	1118 B183住 (331-1)	1119 A201住 (453-1)	1120 B90住 (131-1)	
1121 B183住 (331-2)	1122 B80住 (107-8)	1123 B183住 (331-3)	1124 A201住 (453-3)	1125 A201住 (453-5)	

第626図 B区第Ⅹ段階住居跡出土土器類

6 まとめ

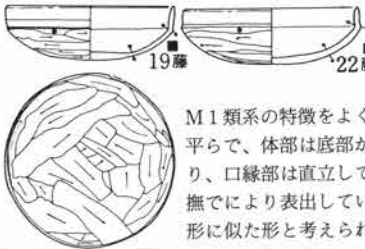
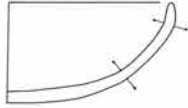
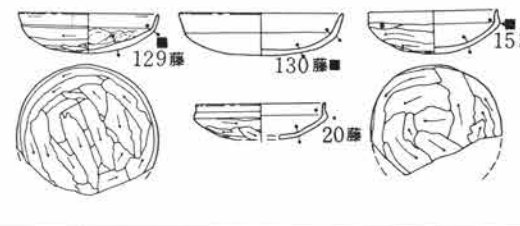
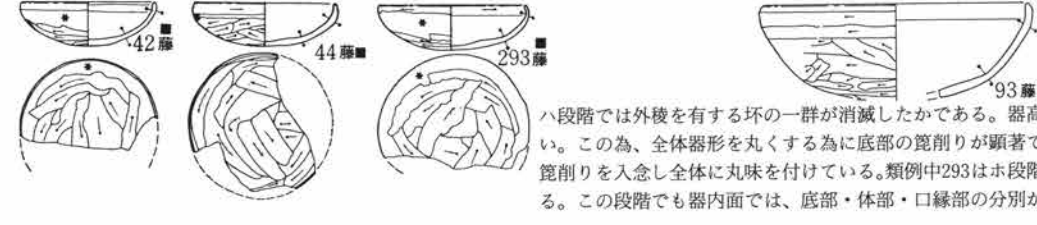
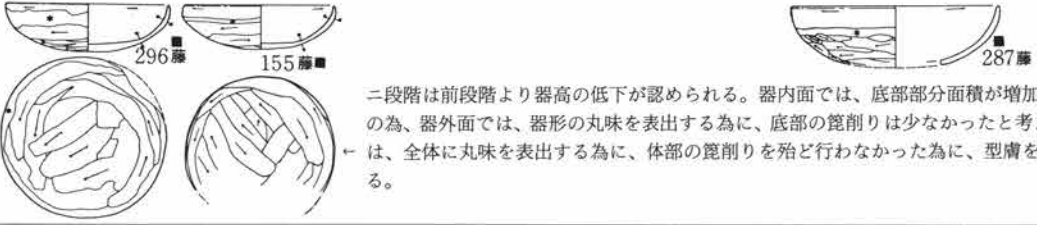

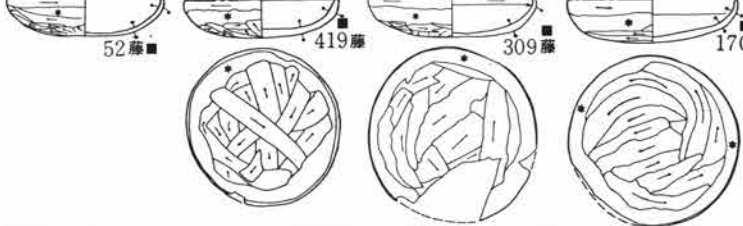
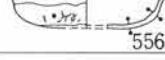

今回の報文中のC区の空白期は、第Ⅳ～Ⅵ段階として設定出来た。だが、ここで最大問題は、国分二寺の南辺築垣の東西延長部を境として、北側と南側で、Bの住居形状第Ⅳ～Ⅵ段階が空白であり、片や住居が存在することは、少なくとも、第Ⅳ段階（8世紀中葉）～第Ⅵ（9世紀前半）は、国分二寺の東西延長部（C区と仮称する）、住居が構築されななかったことになる。これは、結果論でもあろうが、逆に、この地域内での住居構築は禁止されていたことが原因として想起され、この約100年間秩序が保たれていたことが考えられる。そして、C区内に住居が構築されることは、それまでの約100年間の経緯を肯定したかの状況とみられ、ここに最大の転換期として捉えることが出来る。

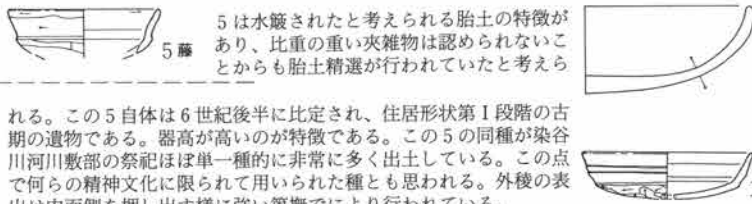
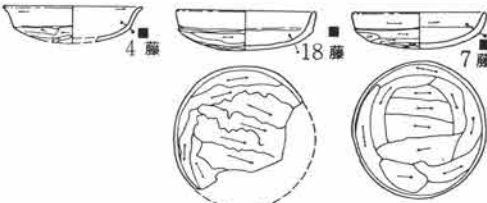
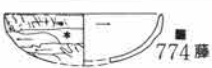
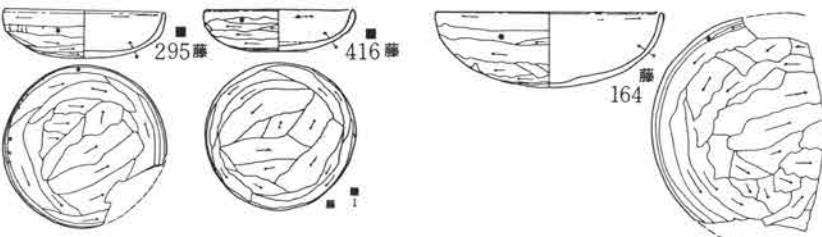
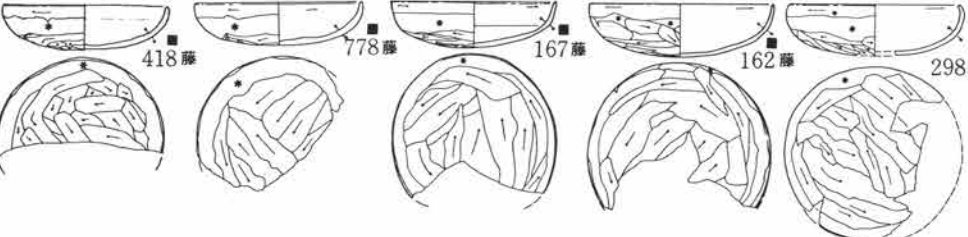
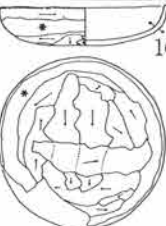


一方、国分二寺の南限の延長線上以南の今回の報告区（B区と仮称）では、6世紀後半から11世紀前半まで連綿として住居が構築していたかの如きの状況である。然し、この住居群が連綿として構築されていたすれば、B区は集落的様相が認められる。この点に就いては、既刊第3・4分冊でも最大の問題点として捉えてきた。即、多数の住居跡が検出されても、これが通有の集落として扱えるかどうかという点である。この大問題に就いて、今回の報告区では一つの大きな実態が認められ、世代継続があったとする最大の根拠としても挙げられる。

この世代継続がある、集落的様相としてB区の180住周辺に展開する大型住居跡の一群である。この大型住居跡は、単に大きいというのではなく、各住居段階をとおして、各住居段階の中では大型としている住居跡である。

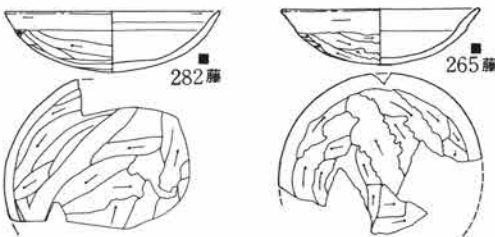
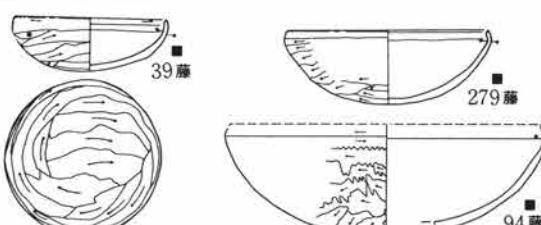
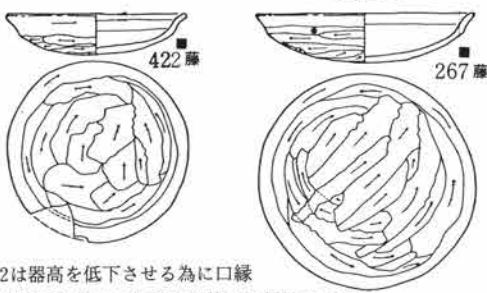
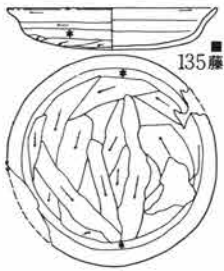
この大型住居跡は、B180住周辺にB102住・B125住・B124住・B131住がある。これらの大型住居跡の存在は、この地区での“長”としての存在が想定され、これが世代継続を続けたと考えられる点である。そして、この地区に集中するかの如く、小鍛冶施設を伴う住居跡乃至小鍛冶の竪穴の存在があり、その時期も上述大型住居の存続に伴っていることから、この両者には密接な直接的関係があったことが窺えされる。この両者が存在することによる特殊状況は、小鍛冶に伴う集団としてその中心的人物が代々居住地とした状況と推測させる。


又、後述する溝状遺構から当該地区は、国分二寺に伴う地割地内であることから、この小鍛冶を伴う集団は、特に、国分二寺に係わる一つの工房であることが類推される。唯、この地区で検出されている大型

M1類系	
イ	 <p>イ段階では須恵器 坏(身)の模倣の ものがある。19は M1類系の特徴をよく留めている。底部は 平らで、体部は底部から緩やかに立ち上 がり、口縁部は直立している。外稜は篋の横 撫でにより表出している。「型」の形も内面 形に似た形と考えられる。</p> <p>M1類系は、底部・体部・口縁部の器内面成 形が分別されていたかの様状態である。底 部は平坦気味で体部は緩やかに立ち上がる。 外面側では、体部側を篋削りを顕著に行い器 形全体に丸味を表出している。このクセは後 述のM2類系にも認められる。</p> 
ロ	 <p>ロ段階は器形が小型化する。129は内面が独特な整形で、中央を薄く作 り上げているこの為、全体の印象はM3類系的である。130・15・20は M1類系の特徴がよく認められる。</p>
ハ	 <p>ハ段階では外稜を有する坏の一群が消滅したかである。器高は群中最も高 い。この為、全体器形を丸くする為に底部の篋削りが顕著でなく、体部の 篋削りを入念し全体に丸味を付けている。類例中293はハ段階の可能性があ る。この段階でも器内面では、底部・体部・口縁部の分別が明瞭である。</p>
ニ	 <p>ニ段階は前段階より器高の低下が認められる。器内面では、底部部分面積が増加している。こ の為、器外面では、器形の丸味を表出する為に、底部の篋削りは少なかったと考えられる。296 は、全体に丸味を表出する為に、体部の篋削りを殆ど行わなかった為に、型膚を多く残してい る。</p>
ホ	 <p>ホ段階は前段階よりやや 器高が低下する。この中 で、全体形状を丸味を残 す苦勞が外面の篋削りに 見られる。一方で54・311 は平底化への変化が窺わ れ、体部に型膚 を残し、底部の 篋削りへ段階的 になっている。</p>
ヘ	 <p>ヘ段階では、器高が低下し平底化の変化が 顕著に見られる。内面側も底部部分の面積 が大きくなり、外面側では体部に型膚を多 く残す様になる。170の篋削りは、東毛地 区の篋削りの削り方に似ており、底部をか なり意識している。この為、底部のまわり を弧状に削っている。</p>
ト	 <p>ト段階は平底化した段階であるが、体部外面には丸味を強く残し、ヘ段階の名残が見られる。器内面では、やはり底部・体部・口縁部の成形が明瞭に見られる。</p>
チ	 <p>チ段階では、平底化した形状から体部に丸味を残しながらも口縁部は外反形状となる。これは、須恵器坏の模倣と考えられ、他のM2類系や暗文土器でもこの須恵器志向は窺知される。</p>

M2類系	
イ	 <p>5 は水箆されたと考えられる胎土の特徴があり、比重の重い夾雑物は認められないことから胎土精選が行われていたと考えられる。この5自体は6世紀後半に比定され、住居形状第1段階の古期の遺物である。器高が高いのが特徴である。この5の同種が染谷川河川敷部の祭祀ほぼ単一種的に非常に多く出土している。この点で何らの精神文化に限られて用いられた種とも思われる。外稜の表出は内面側を押し出す様に強い篋無でにより行われている。</p> <p>1 籾</p>
ロ	 <p>ロ段階は器形の小型化が大きな特徴である。外稜を有するも、外面の稜の表出は外稜の表出により生ず内面の稜を作る程では無く、見せかけ状の稜になる様に軽い篋無で表出している。</p>
ハ	 <p>器高は高く全体に丸味を強く帯びている。類別774は器形的にやや問題があるが、器面が体部から口唇部にかけて急激に立ち上がる点で当該の類系ハ段階として用いた。</p>
ニ	 <p>この段階では、器内面の成形が、底部と体部・口縁部に確実に二分された状態で、外面側では、器形に丸味を付ける為体部の篋削りを入念に行っている。この為同部の器厚は薄くなっている。又、ニ段階では「型」の形が前代から保持され継承されている。</p>
ホ	 <p>この段階では、器厚のムラが無くなり「型」の形も全体に丸味を帯びる様になっている。この為体部の削りは顕著ではない。内面成形は、本類系の特徴が顕著に認められる。又、体部にも型膚を顕著に残すのは、「型」の形の変化と共に器高の低下と平底への変化が現れ出したからである。</p>
ヘ	 <p>ヘ段階は前段階より器高の低下が目立っている。底部の篋削りは、前段階で顕著になった型膚の残存の如くであり、体部の篋削りが必要としない「型」の形によるところが大きい。そして、平底への直前として、器内面の成形も、底部が大きく平底気味となり、体部・口縁部は一気に短く成形されている。この為器内側では底部からの立ち上がり急激に立ち上がり、M2類系の成・整形の特徴が器形に生きている。</p>
ト	 <p>当段階は殆ど平底化している。だが、「型」の形は、ヘ段階の形が継承され、体部は丸味を強く帯びている。面の立ち上がりは、ヘ段階よりよりはっきりした形で立ち上がっている。</p>
チ	 <p>この段階では、体部が直線的に立ち上がっている。これは「型」の形が変化したことだが、これは、MA2類系チ段階同様に須恵器模倣が背景にあると考えられる。</p>



	M3類系	その他
イ	<p>M3類系は土師器環の中では最もはっきりした成・整技法がある。これは、外形上口縁部を内傾させることである。内面成形では、底部・体部・口縁部を一気に成形し、内面側底部の中心に向かい尖る様な状態である。そして、上述の口縁部は口縁部のみで整形時に内傾させている。この成・整形により、3類系中口縁以下が最も丸い器形である。</p> 	<p>この一群は全体量が少なく断定することが困難であるが、坏類の基本3類系に各々が該当する系譜と考えられるが、直接的な器種は口段階以前の外稜を強く有する一群であろう。基本的な器形変化は、器高の低下という点があげられ、3類系の坏と同じ変遷経過を辿ると考えられる。この器高の変化からすれば、二段階からの出現と考えられる。一応、土師器環の3類系に対比させる為、二段階からの段階設定をしておきたい。これはそれ以前の器種との係わりを考慮しているが、現在はこの二段階以前の類例がない。</p>
ロ	<p>この段階は模倣坏が主体と考えられる。11は、尖った様に丸い底部が特徴で、口縁は上下2回の篋撫でにより成形されており、外稜の表出は撫で強く、内面側は押し出された稜が生じている。又、口縁が強く外半するのは、外稜側の篋撫でと口唇部側の2回の撫でにより生じている。</p> 	<p>二</p>  <p>内面成形の状態からM1類系と考えられる。 内面成形の状態からM2類系と考えられる。</p> <p>両者共に器高がやや高く二段階の器高に類すると考えられる。</p>
ハ		
ニ		<p>ホ段階に前段階より器高の低下が認められる。423・267は内面成形の状態からM2類系と考えられ、422は同様にM1類系と考えられる。</p> 
ホ	<p>ホ段階では、器高の低下が顕著である。口縁部の整形はM3類系の特徴を確実に継承している。又、平底化の為に尖り気味の底部がかなり丸味を帯びた状態となる。</p> <p>ハ段階は器高が高く、器形全体が内湾する状態である。</p> <p>ホ段階は前段階より器高が低下し、底部も尖り気味から、かなり丸味を帯びた器形となっている。</p> <p>ニ段階は前段階より器高が低下する。がり気味の底部も特徴である。281は口縁を内傾させていないが本類系のF型の形状を示しており、器内面成形と型の形状から、前代からの器形の系譜を色濃く残していることが判断され、当類系は内湾形態の本流とも思われる系譜である。</p> 	<p>ホ</p>  <p>422は器高を低下させる為に口縁の横撫でを強くさせ器高の低下を促している。</p>  <p>へ段階は器高の低下と共に平底化への変化が認められる。135は、口縁部の形状の特徴422の系譜で、体部に型膚を残す状態は、「型」の形状も平底化への大きな証である。</p>

	MA1類系	MA2類系
	<p>器高が高い特徴があり、外見上は丸底状に見える。しかし、底部と体部の篔削りに415 藤を見ると、体部と底部の篔削りが独立しており、平底を意識している作りである。器形は図上M1系の古い要素もあるが、上述のとおり、平底のM1系 段階の技法に対比される。段階として最古のMA1系。</p> 	<p>器高が高い特徴はMA1類系と同様。矛め、ある程度完成された形で製作が開始されたと考えられる。</p> 
ト	<p>段階の後続形。器高の底化と外形が平底化する。体部の体りも無駄がなくなる。「型」の形も平底を強く意識している。見込み外縁側溝が顕著に成形される。</p> 	<p>底部は前段階と同様で丸底である。前段階では底径が小さかった状態が、底径値の増加が当該段階の特徴と言える。そして、丸底から平底への変化も当該段階には意識が認められ、完全ではないが568は平底化が認められる。暗文も二重暗文の見込み部が明瞭な螺旋状となる。</p> 
チ	<p>前段階の器形が更に低下し体部の篔削りも一気に篔削り様な粗雑な成形で須恵器的器形になる。この為、体部の篔削り部にはササクレ立った状態の個体が多い。一方底部は486の様に左手で持った土器と、篔を各々逆方向に回して篔削り状態となり、これも一気に篔削りとしている。この為、体部同様にササクレ立った状態になるが、これは、胎土自体が可塑性が少ない点にも原因がある。</p> 	<p>前段階での平底化が、この段階ではやや丸味帯びている。しかし、前段階では器高値が高かった状態が、当該段階より低下する。その典型的な状態が564に見られる。546は、「型」の形自体が平底化しているが、底部は厚く体部の器厚も厚い。これは、平底化・器高低下という両側面が、器内面側成形が如実に現れたものである。</p> 
1)	<p>段階には外形も須恵器杯を思わせる器形となるが、486と当該の639との器形(度目値)を須恵器に比較すれば中間段階の器形の存在も考慮される。技法面では、M1系の特徴が薄らぐが、口唇部周辺の横撫でが顕著であり、この部分に特徴的痕跡が認められる。又、体部に著しく型膚を残すのもこの段階の特徴とも言える。型も、須恵器杯自体を用いたと思われる個体も多くなる。</p> 	<p>この段階では平底が定着し、体部全体が丸味を帯び、須恵器杯の模倣状態と考えられる。須恵器杯A類系の形状となる。須恵器杯A類系は、8世紀代の秋間古窯</p> <p>跡跡の独特な器形であるが、9世紀前半以降藤岡地区でも製産が増加する器形でもあり、その影響と考えられる。</p> 
	<p>MA1類型 当該の系列は、前頁の土師器杯の分類M1類系の技法上の特徴が認められ、底部・体部・口縁部の形状は「型」の形から必然的に生ずる成・整形の特徴である。この必然の篔削り整形は、体部に於いて顕著であり、この技法・器形上の特徴からM1類系に含めて考えている。恐らく、工人自体もM1類系の工人と同じと考えられる。そして、M1類系とMA1類系の差違は、M1類系が7世紀後半以降の伝統的土師器杯を製作し、MA1類系は、暗文を施す器種としてM1類系工人の中で派生種として製作されたと考えられる。</p>	<p>当該の系列は、前頁の土師器杯の分類M2類系の技法上の特徴が認められる。この点はMA1類系と同様であり、当該系を生じせしめる背景も同様であったと考えられる。技法面では、見込み側の形状・体部・口縁部の形状とM2類系の特徴を備えている。又、器形では、M2類系は伝統的な土師器杯の発展を示し、MA2類系はMA1類系と同様に暗文を施す器種として派生するが、MA1と同様に、須恵器の器形を模倣する状態となる。恐らく9世紀以降は、この須恵器模倣状態が主体になり、器形の変化が須恵器杯と歩調をそろえる様になる。そして、MA系が主になる様に転換すると考えられる。</p>

	A類系	B類系	C類系	D類系	E類系
ハ	   	  	  		  
ニ		  			 
ホ	 		 		 
ヘ	 	  		 	 
ト	  	  	 	  	  
チ	    	   	   	 	  
リ	 		 		   
ヌ	  				  







住居は、B区の第II段階からであり、国分寺の創建段階（8世紀中頃）に租させられる住居ではB102住であり、この間は100年間ある。この100年間には、同地区に住居が多出する項でもあり、やはりこの地区内での有力者層の存在は想定せねばならず、この有力者に対し、小鍛冶の職能集団が併合されたことが想起される。

上述した様に、C区内は、国分寺創建以降9世紀前半までは、住居の構築を禁止した地であったことが推定され、逆にB区では、この逆の現象が認められ、世代継続する“集落、的様相も認められようが、そこには特殊な状況付与されたことにより、やはり、特殊な状況下での所産と考えざるを得ず、通有の集落を異なる集落であることが推定されることを指摘しておきたい。

今回も時間的制約が大きく充分に考えがまとまる前に記述をせざるを得なかった。この為、中途半端な記述となってしまったことをお詫びしておきたい。今後総体的な中で見直し、検討を加えていきたいと考えている。

## 第2項 土師器甕の成形技法について

### はじめに

今次の報文中の土器観察表中で、土師器「甕」の成形技法の項目に、“紐作り”、“型作り”の成形技法を記入した。この基本的な成形技法に就いては、前刊第4分冊中の「土師器坏の成形技法について」の中で記述したので当項では、土師器甕の成形技法に就いて若干記述しておくこと目適とする。

### 1 土師器の生産体制の概観

当遺跡から出土するほぼ全てに近い土師器は、県内の主要生産地域から搬入されている。これは、出土土器の胎土を詳細に内眼観察することと、従前より発掘調査・表面採集を通じて得られている土器の胎土との対比・内眼観察による所見である。又、当遺跡周辺地域の粘土の産出が殆ど無いことや、仮に遺跡地の地山を水簸したとしても出土した量に見合うものでは無いと判断している。

そして、中間地域出土の土師器の主体生産地は古代の緑野郡（現藤岡市）・甘楽郡（多胡郡）（現吉井町）にあったと推定している。この点に就いては、第4分冊の「土師器坏の成形技法について」の註の中で述べたとおりである。

この緑野郡・甘楽郡（多胡郡）のほかに、県下は、利根郡・勢多郡・新田郡・佐位郡にも土師器生産があったと推定される。緑野郡・甘楽郡（多胡郡）で生産されたと推定される製品には、「藤岡」・「吉井・藤岡」「吉井」の名称で推定生産地の記述を行なっている。利根郡の製品には図及び観察表中では、「月夜野」と記述した土師器が該当するし、「東毛」「太田か」等記述したものが東毛地区3郡中での製品である。しかし、この両方で生産された製品の当遺跡への搬入量は非常に少ない。

この三者の生産地の中で、緑野郡には郷名に土師郷がある。土師郷の推定位置は式内社“土師神社”が現藤岡市本郷神流川右岸に鎮座しており、この“土師神社”周辺が土師郷の中心地域と推定されている。そして、この土師神社の北側500m程には“本郷埴輪窯跡”が位置し接続する状態で塚原古墳群が位置している。この土師郷の如く、郷名に“土師”を冠すること自体から、埴輪・土師器の専業集団の存在を推測させる。

現在、藤岡市内での土師器焼成遺構・痕跡の検出例は無いが、前述した本郷埴輪窯の位置する至近の桑園には、非常におびただしい量の土師器の細片が集中散布する場所があり、この桑園部分乃至周辺部で土師器が生産されていた可能性があるが、この様な可能性のある地区は現在筆者が踏査している範囲では唯一である。

上述した土師神社・本郷埴輪窯跡周辺で産出している粘土の特徴として、非常に多くの雲母（微粒の片岩

## 第6章 ま と め

片)が混入し、緑泥岩の細片・石英細片が含有されている。又、焼き上りも独特な状態があり藤岡産と推定される中で、土師神社周辺での生産と類推させる程の胎土に特徴のある土師器がある。この胎土と考えているのが、A区第178号住居跡出土の「コ」の字状口縁の甕で第395図-3に図示した甕である。

他方、鮎川左岸の中原・西平井・緑野・白石地区や吉井町側の多比良地区でも膨大な量の粘土の鉱床がある。この粘土は、鑛川の上位段丘と下位段丘下に地溝帯状に堆積している粘土で、「吉井古窯跡群」を成立させる基盤となっている。この段丘性粘土の一次堆積乃至流出による二次堆積粘土を使用した製品の最大の特徴に、土器の割口縦断面には、薄く層状を呈する様な状態が認められる。この鮎川左岸の段丘性粘土を使用したと推定される土師器が当遺跡の第Ⅲ段階を中心とする甕に認められる。この土師器の断面には上述の特徴が認められ、特に砂質が強くやや鉄分が少ないのか発色は肌色味を帯びる。又、この胎土の土師器甕の形状の特徴にA区第177号住出土の第394図-1・A区第192号住出土の第435図-5等があげられる。

この様に、古代緑野郡での土師器の生産は、郡を挙げての生産品であった可能性が濃厚である。この背景には、所謂「緑野屯倉」の問題や、地勢上、市街地の地下に膨大な量で堆積している湖性粘土鉱床により、畑土は粘土味が強く農耕耕作にとっての一つの大きな障害であり、農作物に代わる商品的要素を備えさせたのがこの緑野郡産の土師器であったかも知れない。そして、古代、律令期に「庸」に代わる品として生産があり、この為に西毛地区を中心にして膨大な量をもって土師器の生産があったと推定され、7世紀末以降10世紀初頭迄の間の土師器生産は増大し、特に9世紀代藤岡産の「コ」字状口縁の土師器甕は、県下一円に分布する如く、律令制の中で、上野国の政策の中に土師器生産が組み込まれた可能性が想起される。この様に、県下の主体的な土師器生産を担う体制が藤岡古窯跡群＝緑野郡に課せられていたことを想定している。

### 2 土師器甕の成形技法

第4分冊では、土師器坯の成形技法が「型作り」であることを概述し、この型作りでの特性として5点を記述した。この5点の特性は次ぎのとおりである。

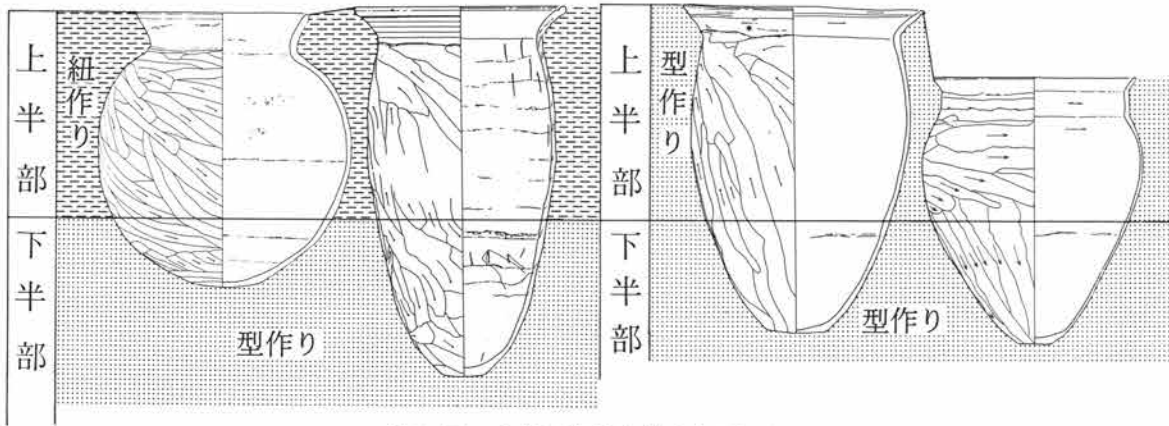
- ① 成形が容易なこと。
- ② 製作時間が短時間で済む。
- ③ 同規格の製品が作れる。
- ④ 使用粘土の量が一定量(ある程度)に出来る。
- ⑤ 可塑性の少ない粘土でも成形出来る。

この5点の特性は利点でもあり、土師器生産体制の中では、他の土師器器種を製作する場合、同様な方法を用い、5点の利点を最大に生かす製作方法が考案された筈である。

土師器坯が型作りによる成形である根拠は、土器の外面に残る「型膚」が最大の根拠であり、反面、型作りでの利点も根拠でもある。そして、第4分冊のまとめの第1表中には、土師器甕も一部型作りの可能性があることを記入し、脱稿後、具体的に型により土師器甕の製作を試みた。幾度かの試行のうちに、ほぼ古代の土師器甕と同様な甕が製作出来た。

6世紀以降の土師器甕は、球形の胴部を有する球状から、7世紀に至り、長胴化が顕著となり、8世紀初頭頃には、長胴も最高に達し、8世紀後半以降になると、やや肩が張り、底径が小さな短胴化へと変化し、9世紀代になると「コ」字状口縁となり、10世紀に至ると急激に退化し消滅、そして羽釜や土釜といった器種に変化する。この間の球状の胴部から、長胴化への変化をカマドの発達と共に考えられている。この変化の間、甕の外形は変化しても製技法上では顕著は変化を見せない部分がある。これが第635図に示した胴下部

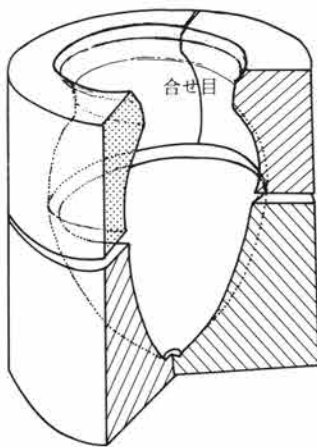




第635図 土師器甕技法技法変遷概略図

が一気に作られている点であり、この部分に「型」の使用が考えられる。この下半部より上位は、7世紀代までは紐で作られていたと考えられ、下半部と上半部の境が別に作られたかの如く、帯状に粘土を接合した痕跡が認められるのは、下半部が型の使用により、粘土が一時安定するまでやや時間をおいた後に上半部を積み上げた為、含水量の異なる粘土を接合させる為に同部を厚く帯状にして、含水量が異なることにより生ずる破損を防いだと考えられるのである。

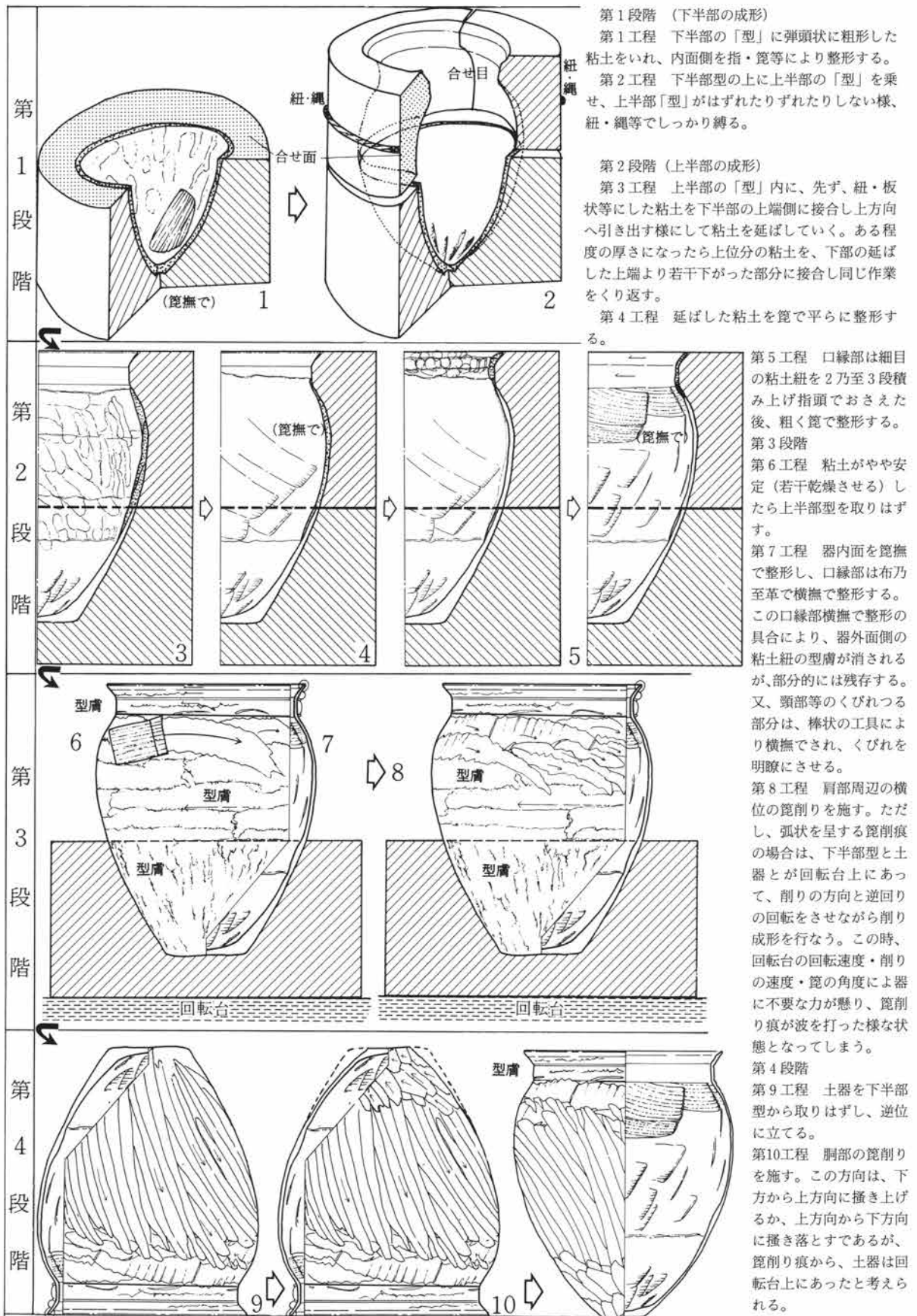
更に、8世紀以降になると、器厚を非常に薄く作り上げる様になる。この薄作りの甕の縦位の割れ口を観察すると、斜上方向に長く伸びる粘土の走行が見られる。これは、通有の粘土紐を積み上げる状態とは異なり、外側によほどしっかりした宛具がないと、これ程迄には粘土を延ばしきれる状態ではない。又、口縁部では、外面側に粘土紐状の積み上げの痕跡を残しながらも、内面側は非常に丁寧な撫で（横撫で）を施す例も認められる。更に器外面口縁部の横撫でと、胴部の篋削部の間に部分的に未整形部分が残存する場合がある。この状況は、土師器坏でも同様な状況であり、土師器坏が「型作り」とした根拠と同様な状況が看取されるのである。このことは、器厚の薄作りには、やはり「型」の存在を必要とすることが示唆され、生産量も「コ」の字状口縁の甕に至れば膨大な量で作製されていることからすれば、土師器坏と同様に「型作り」による全体の器形成形が成されたことが考えられる。



土師器甕の成形型は前述した様に、粘土製であった焼き物であったことを推定した。この型が粘土製とした理由は、①成形物の取り出しを容易にする。これは、型と粘土が密着により取り出しが出来なくなるのを防ぐのが目的である。これは、粘土製焼き物の場合、又、型と粘土の間に布等の緩衝物を入れるのも一つの方法であろうが、この痕跡が認められるのは、木葉痕、等の木葉しか現在認められるものが無い。この点で布等の使用は考えられるが留保したい。粘土側の余分な水分を吸収する作用がある為である。これらの理由と別に、粘土製という点は、土器製作工人にとって扱い易かったであろうことが考えられる。②「型」自体の成形が容易である。多量の土器を製作する中で、型の破損等があっても、自らの手で容易に作ることが出来る点と、型自体の成形も容易に出来たことであろうことから粘土製焼き物型が推定される。これは、前刊書で記述した坏も同様であったと考えられ、土師器甕の器面に残存する「未整形部分」の器膚からも妥当性がある。③自重の重いもの。土器を型作りする場合、型自体の自重がある程度重みが無いと型自体が動き作りづらい点がある。この点から、型自体の重さが必要となり、木型ではやや軽いという点がある。又、砂岩等の材質も考慮されるが、型自体の成形が容易ではない点から、砂岩等の使用は考え難い。この3点が粘土製焼き物型であったろう推定理由である。

型の外形 型の外形は何如とも言い難いが、粘土塊として、乾燥という工程を考慮すると円柱状であったと思われる。

第636図 土師器甕「型」想定図



第638図 土師器甕の「型」による製作工程図

### 3 土師器甕（8世紀以降）の「型」

土師器甕が「型作り」によることが考えられる根拠を前述した。この場合、口縁部径より肩に最大径がある甕にはどのような「型」が必要であったかという点が問題になる。ここでは、この「型」と「型作り」の製作工程呈に就いて考えてみたい。

まず、器内面の状態は、胴中位に横帯状の接合痕が認められる点と、外面側にも横帯状に窪んだ状態が内面横帯状接合痕の反対側に認められる。この点は、下位部が先行して一気に成形され、上位が後から継ぎ足された状態であったことが窺われる。上半部には、この横帯状の接合痕が認められない点から上半部が一気に作られたことが考えられる。この場合、「型」を用いれば、肩が張っている為、粗成形のものが取り出せない。この為、上半部は、粗成形のものが取り出される様な型でなければならず、上半部は縦に半分に分割されていなければならなかったと判断され、この型を図にしたのが第638図である。そして、第638図には、この「型」による成形過程を図示した。

この第636図に示した「型」を容易に作るには、材質はやはり粘土によるものであったと考えられる。唯し、粘土で作った場合、粒子の細かい粘土で作った場合、型と粘土が密付して型から取り出しづらくなる為粘土側の水分を吸収し易いものでなければならない。この為、型を使う粘土は、可塑性が少ない粘土か、粘土に砂分を多く含ませるかの工夫が必要である。又、木製によることも考えられるが、製作労力がかかり、場合によれば、粘土の水分を吸収し歪が生ずる可能性がある為、木製とは考え難く、やはり粗い粘土乃至可塑性の少ない粘土により作られたと考えられる。

上述してきた様に、土師器甕も坏と同様に、何如に手早く量産出来るかという命題が担わされていたと考えられ、律令機構の中で何如にその一部を担かが、土師器製作工人集団(組織)にとっての存在意義であったと考える。

#### 参考文献

- 1 新井司郎 「縄文土器の技術」 中央公論出版 19 (昭和 年)  
 註1 拙著 「土師器坏の成形技法について」〔上野国分僧寺・尼寺中間地域 4〕財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991 (平成 2年)

## 第2節 溝状遺構

### 第1項 溝状遺構と土地区画

#### はじめに

上野国分僧寺・尼寺中間地域は、名称のとおり、東側には僧寺・西側には尼寺と、8世紀中頃に建立され官寺が位置している。この二ヶ寺は、当時無作意に占地したのではなく計画性をもって占地されたと考えられている。

中間地域は、この二ヶ寺の狭間にあり、調査区域内から検出されている諸遺構の中でも、特に溝状遺構は、各々の遺構の走行方位値が近似している。そして、この数値自体は、国分二寺の地域中心軸の方位値にも近似している。これらのことから、当遺跡で検出されている溝状遺構は、広域に亘る地割りととの係わりが推測され、嘗て、松村一昭氏が試みた国府・国分寺周辺の条里地割りの状況も類推されるが、詳細なる検証が成されていないこと、近年の発掘調査等による国府に直接係わる遺構等の検出もあることから、本項では、これらの遺跡の主軸方位・配置関係から当遺跡の溝状遺構の在り方を対比し、国分二寺と当遺跡での溝状遺構

との係わりに就いて考えてみたい。

### 1 A・B・C・D区の溝状遺構

A・B・C・D区の4調査地区からは、古代溝10条・中世溝（寺院施設）3条が検出されている。これらの溝状遺構は第5表に示したとおりである。この表中①項目で規模分類とした中で、古代の大と中世の大で分類規格が異なり、各々の時代の溝の中では“大、”という意味である。

これらの溝状遺構中、中世溝は、仮称“小見廃寺、”とした推定長尾氏の菩提寺と考えられる寺院に伴う施設である。又、中世溝全体（他の調査区を含め）の走行方向は、古代の溝とほぼ一致する点から、中世溝の構築にあたっては、古代の地割りをういたと推定された。

C区1・4・7号溝の主軸値は、±0°+1度であり、住居跡の指向方向中最も多い主軸値であり、C12溝・8溝（方形区画を形成する）の主軸値とも同様であることから、古代の地割りと深い関係があることが窺われる。

一方、古代溝ではA2溝・A6溝が、主軸値・規模分類で一致し、両者の北端・南端での幅がほぼ15mであることから、古代尺（30唐尺・天平尺）の50尺に相当し、天平測地尺（大宝令の田積法）の大尺=12寸=36mでは、ほぼ40尺に相当している。更に『延喜式』の記載「前略 其度以六尺爲歩以外如令」からが歩に換算すれば8.3歩であるが、A2・6溝の中心軸では凡7歩・42尺となる。何れにしても、測定位置による誤差は何如とし難い面があるが、尺度の使用は確実なだけに、一応40尺（1尺≒30cm）（天平尺・唐尺）という単位で捉えておきたい。

この両者の溝状遺構の如く平行走行する溝状遺構としてA6・3溝とC12・8溝がある。この後者は配置関係から新旧関係があり、C12溝が新しい。唯、この両者共に方形区画域を構成する施設で、北面側と東面側の区画に伴う施設である。前者のA6・3溝は、前述したA2・B5溝の狭間で検出され全長も短い。幅は2.4mで8尺に相当し、中心での幅は1.8m6尺に相当している。

この他では、直接的に関連する状態は見られない。

### 2 溝状遺構の性格

上述した溝状遺構は、2条を1単位とするA2・B5溝、A3・6溝がある。この点は、遺構の各説の中でも述べたが、通有平行する2条の溝状遺構は“道、”と考えられており、A2・B5溝は、その走行方向から、地割りに伴う“道、”と考えられる。この地割りに伴うとしても、どのような地割りなのかという点があり、この点が求極の目的と考えられる。

A3・B5溝が2条1単位とする地割りとする場合の地割りは、古代の当該地域での地割りであることは容易に推定出来るものの、具体的な地割りとなる判断材量が乏しい中、ただ、この判断材量が乏しい中で、近接する国府・国分二寺の存在があり、国分僧寺に限れば、系統だった調査により非常に多くのことが明らかになっている。一方、国分尼寺は、嘗て発掘調査が実施され、東門跡・南大門跡・中門跡・金堂跡・講堂東門跡が確認され、講堂が全面調査されている。又、隣接地の調査では西門跡が検出されている。これらの諸遺跡からの方向が明らかになる。他方、南東側で至近の位置には国府跡が在るものの、一部の遺構が明らかになっているのみであるが、国府跡の指向方向が確認出来る。そして、これらの位置関係を図化したの

名 称	主軸値	規 模 分 類
A 5溝	+1°	中
A 2溝	-4°	大
A 3溝	-7°	小
A 6溝	-7°	小
B 5溝	-4°	大
C12溝	±0°	大
C10溝	-3°	大
C 8溝		
C11溝	+26°	小
C 6溝	+3°	大
中 世 溝		
C 7溝	+1°	中
C 4溝	±0°	中
C 1溝	±0°	大

第5表 溝一覧表

が、第7図である。

これらの配置関係からA3・B5溝は、国分二寺の地割りと係わる点が明らかである。これは、国分僧寺の寺域中心軸が北3度50分南であり、国分尼寺も凡北4度南である。しかし、国府では、閑泉樋南遺跡等で検出されて大規模な溝状遺構走行方向は、ほぼ東西・南北の方向であって、上述の三者とは明らかに違いが認められる。これらの点から、A3・B5溝は、国分二寺の建立以後に設定された地割りであることが判断される。

唯、国分二寺と国府との地割り（中心軸方位の違い）からは具体的に「条里」という点には言及出来ない。この点から、当時の条里による地割りを明らかにする為には、周辺の広域の地割りから、古代の残影がある所を検証して導き出さねばならないと考える。このことから、「条里」に就いては今後の課題としたい。

又、第1項のまとめの中で若干記述したが、国分二寺の南縁に挟まれた、C・D区では、8世紀中頃から9世紀中頃にかけて住居の構築が規制されていたことが判断されたが、この現象を生み出す線＝国分二寺の南縁の東西延長がなければ、規制地帯と非規制地帯との区別が困難であったことが想像され、ここにも、何らかの区画を強調するものがあつたと考えられる。だが、この二寺の東西延長部分には調査段階では重要な高い生活道路が存在してた為調査が不能であり、未調査であつたことから具体的な遺構の検出がなされていない。この為、机上では、1町方眼のマス目線が想定されるものの、未だ々今後に託される重要な事が多く存在している。



(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第117集  
上野国分僧寺・  
尼寺中間地域(5)

《本文編》

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第36集—

---

平成3年3月15日印刷

平成3年3月20日発行

編集／(助)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

群馬県教育委員会  
前橋市大手町1丁目1番1号  
電話(0272)23-1111

発行／群馬県考古資料普及会  
勢多郡北橋村下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

---